（白石製本所　製本）

昭和十年八月一日印刷
昭和十年八月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一

東京市芝區金杉新濱町十二番地
印刷者　和田助一

東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社內
發行所　古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

東京市小石川區竹早町三十二番地
發賣所　內外書籍株式會社
振替口座東京八九六〇番
電話小石川　一〇五四番　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

明治四十四年八月二十三日印刷
明治四十四年八月二十六日發行

神宮司廳

編修顧問　從三位文學博士　本居豐穎

編修顧問　從五位文學博士　木村正辭

編修顧問兼校勘　從五位文學博士　井上賴圀

編修總裁　從二位文學博士男爵　細川潤次郎
編修長　正七位文學博士　佐藤誠實
編修副長彙校訂長　從六位文學博士　松本愛重
編修　正七位　廣池千九郎
編修彙校訂　加藤才次郎
編修彙校訂　山本信哉
編修彙校訂　村尾節三
編修　從六位　佐伯有義
編修彙校訂　三浦千畝
校訂　竹島寛
校合員　齋藤松太郎
校合員　平川清水

中央ヨリ西ノ方ノフチヤウトリ巳ノ割ナレバ中央ヨリ東ノ方ノフチヤウトルナリ。

主殿九宮、四方四隅中央各別ニ圖ヲ先ノ九宮ヲ按ジテ日輪ノアル方ノ下ノフチヤウトルナリ。

（毛吹草）山城　黒谷墓入合土　雲母形土　白川真絵研土　美濃　赤

飯羽土

粘土

あたる處におき、會府へ置けば、次第に目も重く、灰も自然に倍し、はじめゆるき俵も後には張切る許とはなれり、是をフクルといふ、かくて一年づゝを越えて、かはる〲に市中へ送り出だせり、さてかくなりて後は、大に水を忌めり、もし水を沃げば忽ち燃出て、いかんともする事なく、故に舟中には是を專と守り、又牛に負ふせて出るに、若雨にあひて、火出て、牛を損ずるを恐れ、常に牛御の腰に鎌をさし、結たる繩を手ばやく切解の用意とす、

〔毛吹草三〕攝津　阿波堀川石灰〈ノ灰ナリ〉　近江　石灰

〔紀伊續風土記物產一〕石灰〈本草綱目以之爲比〉

石灰類は牟婁郡尾鷲鄕邊在田郡處々、名草郡多田鄕小野田村等に產す、今在田郡なる此石を燒き製し出す、卽本山石灰にして、上品なり、

〔雍州府志六土產〕粘土　凡山間黃土之交、黏膩者是謂志毛豆知、採斯土、加石灰少許、以水粘之、而數搗下井幷百間、以木槌堅搗之、其堅硬如石、是又他邦之所不爲也、〈新土自泉涌者井、幷鍛冶山間取來、〉

〔百品考下〕巳初剔那　和名タヤリ

農政全書三和之灰、今匠者多用之、其一則土也、○中略

三和ノ灰ハタヽキツチノコトナリ、文公家禮ニ三和土ト云、人家小溝盆池等ニ作ルモノ是ナリ、京師東山ニタヤリト云土ヲ出ス、石灰ニ和シテタヽキツチニ作ル、若此土ナキ處ニテハ、黄石黄土石灰ノ三物ヲ和シテ作ル、故ニ三和ト云、タヤリハ、近山ノ土瘠テ草短キ處ニ出、黄石ト黄土トヲ合セタル用アリ、故ニ石灰ト二物ニシテ三和土ノ功ヲナスナリ、又塊ノ大ナル者ハ槌ニテ碎キ、アラキ石ヲ去リ、石灰ニ和シテ用ユルナリ、

時刻

〔重修本草綱目啓蒙三土〕太陽土　日輪ノアル方角ノ土

時刻ニヨリテ、日ノアル處ノ位ヲ考ヘテ、其方ノツチヲトリ用ユルヲ云フ、譬ヘバ未ノ刻ナレバ、

ハ硬ニヨキモノナリ、土佐、濃州、越前、大和、作州、備後等ニモ石灰ヲ燒クナリ、其外石灰ト云テ多ケレドモ、僞物多シ、カキガラ、シヾミ、カラス貝ノカラナドヲ燒タルナリ、コレハ貝石灰ト云、コレハ藥用ニモナラズ、壁タヽキ土ナドニモ下品ナリ、藥ニハ、本山石灰ノ中ノハナコト云ヲ用、ハナコト云ハ、細ニシテ、正白ニシテ、上品ナリ、貝石灰ハ異名蚌灰トモ蜃灰トモ云ナリ、カキガラヲ石灰ニシタルハ、古井灰ト云ナリ、石灰ヲヤクコトハ、天工開物ニ委ク法ヲ載テアリ、圖モ出シテアリ、唐デハ石或ハ金ヲヤクニハ石炭ヲ用、石炭ハ火ツヨクシテヨシ、日本ニハ皆木炭ニテ燒、火餘ニシテ不便ナリ、天工開物ニ、以青色爲上、黃白次之、石必掩〈[illegible]〉土內二三尺掘取、受燒土面見風者、不用、燒灰云々、又云、最佳有曰礦〈[illegible]〉灰、最惡者曰窯滓灰、云々、集解ニ、風化水化二種云々、風化ト云ハ、水ヲカケズ、自然ト碎テ粉ニナリタルナリ、凡石灰ハ燒テ當分ニ其マヽニテハ粉ニナラズ、コノ粉ニナラヌヲアラバイト云、コレヲ俵ニ入レ三十日程置バ、自然ト粉ニナルナリ、コレヲワケバイト云、コレ風化石灰ナリ、又燒テ熱シテアル時、直ニ水ヲカケルト忽粉ニナル、又燒テアラバイニナリタ冷タ、アルヲ、少シ濕メテ水ヲカケルモ粉ニナルナリ、コレ皆水化石灰ナリ、藥用ニハ風化ヲ用ユ、風化石灰ヲ略シテ風化灰トモ方書ニカキタアリ、

〔重修本草綱目啓蒙 五金石 石部〕石灰〈中略〉○石灰ノ礦石ハ、白質ニシテ微ク青色ヲ帶ブ、俗ニチドリセキト云、硬材ト成ス佳ナリ、其久シク土上ニ露ルヽモノハ、燒ト雖ドモ石灰ト成ラズシテ、黑褐色ニシテ輕虛ナル石炭ニ似タル石トナル、此物暴雨ゴトニ山中ヨリ流レ出テ海中ニ入ル、故ニ尋常ノ浮石ニ混ジテ海濱ニ多シ、俗ニカラスミイシト云、物理小識云、桐城有浮石、土中青石、燒作石灰、其不成灰者燒之、其汁如油、油盡則石枯、可以浮水上、是又一種浮石也ト是ナリ、又本山石灰ヲ正石灰ト云ヒ、單ニ正石トモ云、此レ介類ノ灰ニ對スルノ稱ナリ、介類ノ灰ハ火力ニ堪ヘズ、倉庫ヲ塗ルニハ正石ニ非レバ用ニベカラズ、

土緑青　鐵土　玉子土　石灰

クロレヲ推ニ、久慈郡ノ西邊ニアリタ、那珂久慈兩郡ノ接シタル地ニテ、河内郷ノ西南ニ當レリ、風土記ノ云處、蓋コノ地ナリ、　採藥使記云、照任曰、丹州多田ノ山ヨリ空青(ソノヤウ)ヲ出ス、或曰、長州ヨリ紺青ヲ出ス、未知其眞、先事按ニ、和州所々金山ノ中ヨリ空青ヲ出スト雖、上品ハ稀ナリ、俗ニ花紺青ト云ハ、別條ニタ、番國ノ產物ナリ、　假名按ニ、青丹ヨシ奈良ト云ヘルハ、和州ヨリ出ルト云、空青ハ即青丹ナルベシ、和名抄ヲ考ルニ、空青ハ金青ノ下品ナルモノナリ、

(紀伊續風土記物產一)土紺青(つちこんじやう)

伊都郡上官省符、莊廣野村の奥山崖の崩れより出づ、土中に芋塞の腐りたる如きものあり、其中紺青の如し、

(紀伊續風土記物產一)土綠青(つちろくしやう)

在田郡湯淺莊の山に產す、土人淺靑土といふ、

(毛吹草三)山城　遊行鐵土(ゆぎやうかなつち)(畫ニ用之)　攝津　生玉澀土(いくたましぶつち)

(雍州府志六土產)遊行鐵土　東山清水山之麓、法國寺邊、其土赭用之塗壁、則其色淡紅而有斑點、朽者採之茶亭壁用之、然不及大坂之產、法國寺遊行一遍上人之塚也、故俗專稱遊行土、

(長防產物名寄土石)玉子土

美禰郡大田村ノ内、トビノス、　同郡赤村ノ内、ヒタガタコ、

(倭訓栞前編二)いしばひ　石を燒て灰とす、畿内に是を用ふ、沿海の地にては、蛤蠣等を灰とす、泉南續志にも、泉无石灰、燒蠣房爲之と見えたり、

(大和本草三金玉土石)石灰

礦石ヲヤキタ灰トス、藥ニハ久シキヲ用ユ、醫書ニモ千年石灰トアリ、又新シキヲ用ユ、百年十年ナルヲモ用ユ、近江ニ多シ、白カベヲヌリ、榴ヲヌリ、小池ヲ作ル、用多シ、槐木ナドノ色付ルニモ石

黄土

増、一名鼠肝土、(湯液) 増、東醫寶鑑云、赤土止二一切失血一、殺二精物一、辟二鬼魅一、塗二牛馬一辟二瘟疫一、即今好赤土也、ペンガラト云フ、染家偽リ用ユルモノ、銀山銅山ノ銀銅ノ氣ヲ帯タル赤土ヲ焼キ赤クシ賣ル、全ク鐵錆ノモノニ似タリ、

(雍州府志土産六)中山赭土　東山中山所レ有之土也、倭俗薬店謂二八百屋一、凡薬草八百萬之物無レ不レ有、故號二八百屋一、或采二貿生菓類一者、以二此土一塗二覆之一、則經レ月不レ腐、

(甲斐國志附録二十三)一類燥　所在ニアリ、北山筋高成村ノ赤土尤モ佳ナリ、飾壁ベシ、

(新編常陸國誌土産六十一)赤土(アカツチ)　茨城郡常葉村ヨリ出ヅ、コレヲ以テ鐵ニサビヲ付ルモノナリ、又久慈郡大平村高貫村ヨリ出、

(紀伊續風土記物産一)赤土(アカツチ)本草　牟婁郡諸山及名草郡名草山より出て、陶品に用ふ、又名草郡和佐莊歡喜寺山の赤土は、瓷盆を焼きて、自然に雅趣あり、

(重修本草綱目啓蒙土三)黄土　黄土ハ山ヅチノ色ノ黄ナルモノナリ、今黄土ト云フナ薬用トシ、水飛シテ繪ノ具トス、多ク江州ヨリ出ス、又染家ニテ象牙色(ゾウゲイロ)ヲ染ムルニ用ユ、

附方、鍍鍮黄土、ブリガチノイカタニ用ヒレ黄土ナリ、

鍮鐸鉏孔中、黄土スキヲイルトキ、柄ヲイル、穴ノウチニ入タル黄土ナリ、鐸鉏俱ニスキノコトナリ、

増、刀工家ノ焼ヲツクタルニ用ユル土ハ、山城紙屋川ノ上流岸側ニアル鼠色ノ土ト、稲荷山ノ赤土ヲ水ニ和シテ用ユ、

(新編常陸國誌土産六十一)黄土

ル故ニ、南京ワチノ名アリ、伊萬里ノ方言アワチト云、聖ハ堊ノ字ニヨルカ、其他諸州ヨリモ出レドモ、肥前ヲ上品トス、安房ヨリ出ルモノハ房州砂トモ當磨砂トモ云フ、信濃ニモアリ、江州磨針峠ニ多クアルハ、磨ツノ土ノ産也、方言磨キ砂ト云、又塊ヲ成スモアリ、此ヲミガキイシト云、今刀ヲ磨シタテビヲオトスモノ是ナリ、又白善土二品アリ、硬ヲ粳米土ト云、軟ヲ糯米土ト云、天工開物ニ、粳米土、其性堅硬、糯米土其性變軟、兩土和合、瓷器方成ト云、粳米土、肥州房州江州ヨリ出ル者是ナリ、糯米土、讃州ニアリ、糯米土ノミニテ器ヲ製スレバ、火ニ逢テ破裂シ易シ、故ニ粳米土ヲ合ス、蝋燭ニ譬ノ土ト呼ニ二種アリ、上品ハ鉛粉也、〈ハイ口京ニテ〉下品ハ白堊ニ下品ノ鉛粉ヲ少シ合スルモノ也、

集解、白瓷器ハ白ヂノ茶ワン、坏ハ茶ワンノシタヂ、頌曰多白墨青黄墨、青堊黄堊倶ニ和産アリ、

壞、一名白土〈揚子方言古注〉　白埴土〈綱目〉

〔日本山海名産圖會五〕堊土(しらつち)　泉山(いづみやま)に出て、國中の名産本朝他山に比類なし、中華は中國の五六處にも出せり、是土にして土にあらず、石にして石にあらず、其性甚堅硬し、水碓(すいたい)をもつて打かき、全件の踏水碓に是を舂しむ、〈杵の幅一尺許、厚さ一尺五六寸、臼も一間半許、〉最水勢つよくまかけて、碓の數多く連らね、よく末粉となりたるに、又他の土の柔軟なるを二三品和し合せて、家の内の溜池に深し、度々拌通し、よく和したるを飯篩(いひぶるひ)に漉し、又外の溜池へ移し、よく澄し、其上に浮たるものを細料とし、中を普通の上品に用ひ、底に下沈たるは取捨て不用、さて其水干(すいひ)の土を、素焼窯の脊に塗附、内の火力を借りて吹乾かす、最これによき程を候ひみて搔き落し、重て清水に調和し、かの團子のごとく粘和して、工人に與ふなり、是まで婦人の所爲なり、

〔武藏國八王子住佐藤助十郎所藏文書〕今度江戸御城御作事御用白。土。武州上成木村北小曾木村山根より取寄候、御公儀之事に候間、其方御代官所三田領、加治領、御領、私領道中筋より、助馬出之、無

泥

つちくれしてや、つくりそめけん

〔倭名類聚抄 一 土〕泥 孫愐云、土和水也、奴低反、和名比知利古、上云古比千、

〔箋注倭名類聚抄 一 水土〕比知利古、天武紀傍訓同、新井氏曰、土子之義、利助語、古與砂訓須奈古之古同、萬葉集水土手訓古比知、又見後撰集、今俗呼土呂、○今廣韻作水和土也、廣韻注周易云、土得而爲泥、即是義、按泥本水名、出北地郁郅北蠻中、見説文、以爲土泥字、所謂假借也、

〔類聚名義抄 五 水〕泥 奴低反、和泥、アナノレ、ヒ、ナ、ヒチリコ、コヒチ、疊 音 淫

〔伊呂波字類抄 古 地儀 附居處井居宅具〕泥 コヒチ 〔同 比 地儀 附居處井居宅具〕泥 ヒチリコ 水和土也

〔倭訓栞 前編 二十 五〕ひぢ 神代紀に、泥字を訓せり、水土の義なるにや、ひぢはぬま也、土字をもよめり、上形の類是也、歌に袖ひぢて、源氏になみだにひぢてと見ゆ、万葉集に、所漬をよめり、ひたしての義、たし反ち也、よて漬字をもよめり、伊勢物語に、浅みこそ袖は漬らめとあるを、万葉集に、泥田川袖斎ばかり浅きをやと見ゆ、拾遺集詞書に、松の海にひたりたる所をとて、歌に海にのみひぢたる松とよめり、たり反ち也、万葉集に、ひづちを約めてひぢといへるも多し、

〔日本釋名 中 水火土石金 五〕泥 ひぢりこ ひちは水にひたる也、古歌に袖ひぢてと云がごとし、りはうつほ字、こは粉也、細也、細土の意、粉と同意、水にひたる細土也、又どろと云、とろくる也、かたまりたる土のとろけたる也、

〔東雅 二 地理〕泥ヒヂリコ 倭名鈔にヒチリコ、またコヒヂともいふと見えたり、ヒヂといふは土地、りと云ふは語助にて、コといふは、スナゴなどいふコの詞に同じき也、俗にはドロといふ、其義不詳、古事記にトロヽといふ語見えたり、舊今も俗にトロヽといふが如きは、滑なるをいふ也、其の滑かなるをいひしと見えたり、

〔倭訓栞 前編 二十 五〕ひぢりこ 和名鈔に泥をよめり、土粉の義、りは助語也、一説にひぢはぬまなり、りはにと通ふ、

といひ、ネといひ、ノといふ、赤黄黏するの義あるなり、説文に據るに、埴は黏土也と見えたれば、我國にしても、黄土を呼びてハニといふは、其黏じぬるをいふに似たり、埴をハニといひ、膩をヤニといひ、凡物を塗るをヌルといひ、鋳るをイルといひ、糊をノリといふ、皆これ黏著の義にてあるなり、また黄櫨の字、ハニシと讀み、今の黄櫨也と注す、俗にハジ色といふもの、即此にて、黄色を染る木也、ハニシといひ、ハジといふ、異なる樹にはあらず、たとへば土師の字、ハニシといひ、ハジとも讀むが如し、ハニシといひ、ハジといふ、并にハニの轉語なり、又舊事紀、日本紀等に見えし天梔弓といふものは、古事紀に天之波士弓としるせしもの也、これはクチナシの木をいふにあらず、桑の一牢、樵なきを梔といふと見えし、山桑の木也、山桑をハジといひしも、其木の色の黄なるによりてなり、すべて是等の如きは、黄土をハニといふによりて、其色の黄なるものをば、ハニシといひ、ハジともいひし也、土の字讀てハニといふが如きは、黄土の名によりて、汎く土の事をばハニといひしと見えたり、古今の語に、かくの如くに相轉じていふ類、いくらもあるなり、よくよく心得べき事にや、

〔倭訓栞前編十六〕つち　土地の音の如くいへど、大地はいづくまでも一土塊なれば、つゞきの義、つき反ち也といへり、

〔古事記傳三〕地は都知なり、名義は是も思ひよれることあり、下に云べし、さて都知とはもと泥土の堅まりて、國土と成れるより云る名なる故に、小くも大きにも言り、小くはたゞ一撮の土をも云、又廣く海に對へて陸地をも云を、天に對へて天地と云ときは、なほ大きにして海をも包たり、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕徘徊、往箕之里爾妹乎置而、心空在、土者蹈鞆、

〔萬葉集二十〕冬日幸于靫負御井之時、内命婦石川朝臣應詔賦雪歌一首、諱曰邑婆、
麻都我延乃、都知爾都久麻泥、布流由伎乎、美受氐也伊毛我、許母里乎流良牟、

〔空穗物語國讓下〕おとゞまいり給へれば、宮いりふし給へれば、えのぼり給はで、しもにたち給へれば、きみたちは、さながらつちにたち給へり、

鐵砂

水ノアトニテ、淵水ノトキニ、里人之ヲ得ルト云フ、

〔大和本草 三 金玉土石〕鐵砂

黑色ニ光アル砂也、相摸ノ大磯、又越後出羽等諸州ニアリ、物ヲミガクニヨシ、コレヲ多クアツメテ鐵トス、眞金(マガネ)ト古歌ニヨメルハ鐵ナリ、

〔甲斐國志 百二十三 附錄〕鐵砂　岩下ノ兜岩、又荒河、笛川ニモアリ、壁ヲ飾ルベシ、

〔增訂豆州志稿 七 物產〕鐵砂

內浦仁科邊海濱ノ山ニアリ、新島三宅島等ニハ尤多シ、

〔土州淵岳志 中 產物〕鐵砂

スナハチ、クロガネ山ノ砂ナリ、土州處々ノ山邊ニ多シ、幡多郡ニ出ルモノヲヨシトス、板ニスリツケ、又ハ木ノ小口ニツケテ、小刀等刃ノルイヲミガクニ見ゴトヒカリヲ生ズ、

〔紀伊續風土記 物產 一〕砂鐵(シヤテツ) 天工開物

牟婁郡尾鷲鄕に產す、盆石にそへて觀美なり、

硼砂

〔大和本草 三 金玉土石〕硼砂

蓬砂 同 二種アリ、透硼砂(スキホウシヤ)、油硼砂(アブラホウシヤ)アリ、紅毛人持來ル、油アルニハ毒アリ、近キ比長崎ニテ油ヲヌク、油ヲ去レルハ白ク青シ、明礬ニ似タリ、油アルハ黑青黃色ナリ、和漢ノ工人硼砂ヲ以テ五金ヲ柔カニス、

〔重修本草綱目啓蒙 六 石〕蓬砂　ホウシヤ　一名旱水晶 綱目拾遺

和產ナシ、舶來二種アリ、一ツハ白色透明ニシテ、生礬ノ如シ、コレヲ透ボウシヤト云、上品ナリ、藥ニ入ルベシ、時珍ノ說ニ、西者白如明礬ト云是ナリ、本草原始ニ官硼トモ白硼トモ名ク、一ツハ青微黑色ヲ帶ク膩潤ナリ、コレヲアブラボウシヤト云、金銀銅器ヲ銲(ロウ)ニ用ユ、藥ニ入レズ、時珍ノ說

之者、或謂万左己、亦異須奈古之急呼、或異以左古之義、異稱其纖細也、

〔類聚名義抄 六石〕砂 音沙、イサコ、俗沙、

〔伊呂波字類抄 須地儀〕沙 同 所 處 井 屑 宅 具〕砂 スナコ マサコ

〔日本釋名 中水火土石金玉〕砂 いさご いさぎよくこまかなる也、まさことは白砂のみにて、土のまじらざる正眞のすなごなり、又すなごとは、すなは小也、すこしきなる也、こは粉也、細也、

〔東雅 二十地輿〕沙スナゴ　太古の語には、スとのみ云ひしと見えたり、沙土根と申す神おはしましき、洲をスといふも、又これによれる也、イサゴといふは、石によりていひしなるべし、小兒の細石を弄ぶ戯をイシナドリとも、イシナゴドリなどいふが如きなり、またマナゴとも、マサゴともいふ、古の俗、凡物を賞せし詞に、マといひ、マナといひし事多かり、眞萬葉集沙にも、マナゴ地といふはうつくしきをいふ也といへり、眞の字を讀てマともマナともいふ、ナゴ、サゴなどいふは、其纖細をいひし詞なるべし、

〔倭訓栞 前編十二〕すな　砂をよめり、洲に生の義にや、すなごともいふは、砂子の義にや、新撰字鏡に礫もよめり、鞠庭に乾きすなごを用意する事、徒然草に見ゆ、

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年九月乙未、伊豆國言、賀茂郡有造作島、本名上津島、此島坐阿波神是三島大社本后也、〇中略次南海邊有二石室、各長十許丈、廣四許丈、高三許丈、其裏五色稜石屏風立之、巖伏波、山川積聳、其形微妙難名、其前顯來細軟隙、御有美麗濱、以五色沙成餘、次南傍有一瀧、如立屏風、其色三分之二悉金色、炎晒暉之狀、不可敢記、

〔百品考 下〕彈子窩石　和名ゴシキズナ 〇中略丹後鹽井ニ五色濱ト云處アリ、巖下ノ小石海水ノ爲ニユラレテ、其形チ正圓ニシテ、芡實ノ如ク、豌豆ノ如シ、大ナルハ彈丸ノ如キモアリ、青、黄、赤、白、黒、褐、紫等ノ色ヲ具フ、又相州大磯ニモ產ス、其他ニモ產スル處アリ、雲林石譜ニ載ル處ハ、其中ノ白色ノ者ヲ指スナリ、

兵火に遇といへども、終に遺亡せず、家益繁榮せり、代々至寶として傳來する事年久しく、兩家四郎左衞門資滿の代に至て、對武運長久のため、彼玉を讚州香西万福寺江奉納せし事、其家の馬玉の記に詳なり、則其記を摸寫して奉呈す、且鎌鹿毛の事を評するに、彼馬玉は、死馬を割て得たりと云、今この馬石は、生ながら出產す、益珍重なるべし、其至寶なる事、鎌鹿毛の玉に增らん、彼馬玉の記ニ、和漢にて鮓答と云、天竺にてヘイサラバサラと云、或は旱魃に雨を祈ると應あるなど云へる事あり、猶石糞の餘論あらば、記錄せよと、固辭して命を得ず、愚が管見の淺きと、文筆の拙きを耻ず、見聞の一二をあげて左ニ述ぶ、

按ずるに、石糞と稱するもの、馬墨と云、鮓答といふ、馬石と云、鮓丹と云、達伊佐良波佐良と云、或は狗寶石矢の異名あり、今其出所を尋るに、本草綱目に、李時珍曰、鮓答生走獸及牛馬諸畜肝膽之間、有肉囊裹之と、東都馬醫の達人菊池武徳、石糞の諸說をあげて云へるの文に、馬墨鮓答一物、生于馬胃中、日本云石糞、蘆軍目錄云、一名鮓丹、紅毛云達伊佐良波佐良、其形如牛糞者、因五塊疊結成、大塊任于胃中、實如鼠糞疊合、鮓荅之名宜哉と、千野春圃道人の記に、鮓荅は諸獸の膽塊也、始て出、輒特鐵、蓋又胡獸也、馬墨馬石牡馬不得牝者、淫氣不能瀉、濁精日積月累、凝結成形ト、又武徳著すところ石糞矢辨と云へる書に、又有一物、名糞石、其形如結甎、其大小色樣、似石糞、堅硬面裏又如甎、若誤食砂石及代赭、而胃不能消化、而積日凝結、逆成其物也、糞石矢者因蟲熱、石矢者因寶熱、皆堅重之塊、火氣猛烈則生硬塊、火氣寄水氣、則生軟塊と見へたり、又此物を以て雨を祈るの說、武徳の書には、杜撰可笑と見たりといへども、出所なき妄語にもあらざるにや、

○按ズルニ、鮓荅ノ事ハ、動物部獸篇獸總載條ニ詳ナリ、

〔雲錦隨筆三〕大和國城上郡三輪明神の社頭の土砂の中に交りて、茶磨石と云へる小石あるよし、雲根志に見へたるを以て、彼地を遊歷の時節、社家に便つて此事を尋ねしが、幸ひ豫て拾ひ得た

石蟹

燒米石

リ、コレハ魚ノ石ニ化タルナリ、石ヲ破レバ内ニ魚ノ形アルナリ、石魚ハ一名魚龍石トモ云、雲林石譜ニ出、宇治ノ宇治ダワラト云處ニ、鱧。ノ。石。ニ化タルアリシコトアリ、又壹岐ノ國ノ勝本(カツモト)ノ海邊ニ、屛風岩ト云アリ、コノ處ニハ木葉ノ化石多シ、コノ石ハ柔カニシテ、ヨクヘゲル石ナリ、コノ處ニハ色々ノ石アリ、香。魚。ノ。化。石。アリ、コレハ全身カタ石ニ付テアリ、又伊與ノ襲岑ガ嶽ニモ木葉化石アリ、コノ處モ石魚アリ、豐後ノ粟野ニモ、魚紋石多シ、(和名ナリ、魚ノ形魚付テアルナリ、)川筋ニアル丸キ扁キ石アリ、コレヲワレバ中ニ魚ノ形付テアリ、又ウナギノ形ノ石アリ、コレハ長州尾州ヨリ出ルコトアリ、其外諸國ヨリモ出、

一名　乳石本草集要

〔本草綱目啓蒙石十〕石。蟹。

スッポンノ形ノ石ナリ、和産知レズ、舶來ナシ、又蟹ノ石ニ化タルコト唐ニモアリ、北戸錄ニ、年代錄云石季龍時、邢州鵲谷縣山北溪中、有石蟹數千頭、壁山中、暴田苗、敕軍殘毀、至今蟹無頭各云ナリ、

コレハ蟹ノ直ニ石ニ成ルナリ、本條トハ別ナリ、

〔大和本草金玉土石三〕燒米石

燒米ノヤケタルガ、地上ニアリテ石ニ成タル也、昔穀倉ノ燒タル地ニアリ、諸州ニアリ、伯耆國汗入郡名和莊名和伯耆守長年ガ宅ノアトノ土中ニモアリ、瘧ヲ患ル者一粒ヲ發日ノ早旦ニ水ニテ飲ム、ヨク愈ユ、酉陽雜俎十卷、燒米乾圖ニ、昔戸戰王倉庫爲火所燒、其中粳米燒者于今尚存、服一粒、永不夢寐、三才圖繪人物十三卷乾圖作乾陀國、

〔土州淵岳志中物〕燒米石

香美郡佐古村ノ山中島ガ森ニ古城アリ、昔シ此地敵ノ爲ニ城ヲヤカレタ、兵粮ノ燒タル者ナリト云、大和本草ニ、伯耆國名和伯耆守ガ宅ノ跡ノ土中ニモアリ、瘧ヲ患ル者、一粒ヲ發リ日ノ旦ニ

芝石

に、此も木の化れる山ぞと云ふに、信がてなる者も有るを、行つゝ見るに、岩の間になる石に化はてず、木質を存して石に遁なれるが有るを欠取りて、火に燃し試るに、燃の臭るを見て、其者も始めて木化石なりと知りき、其に今もいさゝか持て有り、また和歌ノ浦に物して見るに、其一浦盡く楠木の一本その隨に化せるにて、其根は海底に深く廣くとほりて見ゆ、然して玉津島明神の坐す山を見るに、此は見紛ふべくも無き、松の大木の立ながら化れる山なり、節なりし所、枝さしたる所など有のまゝに見ゆ、人々詣で見て知るべし、此ノ浦見證れる時に、若山の殿人も國人ばかり伴ひたるに、此山は松木ぞ、和歌浦なる平石こそ楠木なれと、木ノ國ちふ由緒など語るに、信る人も有りしかど、信ずる人も有けり、然れども國人も此山を、楠木山とぞ云ふなる、其はその木のまゝにも假なれば、なり、斯て此邊の圖なを見て十州記に醫鶴と木館しも云へりと、始めて知たりき、其は都盛は一國に聳え木化石なる故に、又が曉じく木國の碧色なる由けり、さて大和を廻りて、伊勢國に出て、外宮へ參りて、內宮の方へ參るに、外宮の社地より、謂ゆる天岩戸と云ふ邊へ行く處まで、一縞木の横はれる化石なり、後ノ二見道も一楠木の、根は海に在りて、陸に出たる所は、山と化れるにて、大小二つの謂ゆる立岩も、その連きの欠て奇しく並立たるなり、凡木化石を見るに、常に種々の木理を見知り居て、其の石を熟々見れば、大抵にこれ木の化れる石ぞと云ばかりの事は、國にも見留むる物なり、古學に志さむ人はかいる事までに心々書べし、大かた余が見遁れる國々の中に、木ノ國ばかり木化山の多きは無し、此は殊に深き由ある事なり、餘の國々にも木化山は無に非ざれども、木ノ國のごとくは有らず、

〔輶軒小録〕芝石之事

西國に芝石と云ふものあり、京師にては人々木葉石と云ふ、石中に自然に木葉の紋あり、栗葉の如き物宛然たり、其石の色、蒼黛色にして理麁なり、先年牛山老醫、一塊五七寸なるを贈らる、夫には蛤蜊殻石に成りたるが付けり、筑紫には處々にありと云へり、中國物產の諸書にも、此事ばかりは見當らず、頃日皇明文徵を檢するに、都穆が遊王喬洞記云、新安有王喬洞、洞在縣西廿里、石皆土所成、而樹之木葉形交錯其間、文理具在、若彫劖者、壷山石皆然、洞之上二木亦皆化石、而復產枝葉、與凡木類、予見之乃大駭、以爲寫遺圖之所未有、碑言、昔神仙大丹之成、土木皆化爲石、其說似爲得之、此に依りて見れば、中國には其珍らしきことにて、定まりたる名稱もなし、因りて神仙の所爲な

二分、中ニ淡黒色ノ瓦ノ如キモノ滿ツ、形ハ介ニ似タレドモ、其質石ナリ、本草逢原ニ、石蚕如蜆蛤之狀、色如土、重如石ト云是ナリ、一種玩石家ニ雲龍石一名カラタナ石ト呼ブ者アリ、阿州勝浦郡傍聞村ノ山中、蛇ガフトコロト云處ニ產ス、其質青黒色ニシテ、カラタナノ如キ紋アリ、長一寸半、幅一分餘、形半月ノ如クニシテ、白色甚ダ鮮明ナリ、個タチアフヒト云介ヲ石中ニ抱キ化シタルモノナリ、ソノ介側ノ襞ノ如キトコロ、濱邊ノ潮水ニ磨セラレテ、自ラカラタナノ形ヲ成スナリ、又同山中ニ介形石ト云アリ、介ノ形雲龍石ニ似タレドモ、ソノ介已ニ脫シテ、獨リ空窠ヲ多ク存スルモノナリ、縱横ニ碎クトモ亦然リ、其ニ奇品ナリ、

〔大和本草 金玉土石 三〕木葉石

其石ノスヂメ木葉ノ如シ、會津羽黒山ノ北ノ麓、筑紫宗像大宮司宅ノアト、信濃善光寺ノ近所榊ト云處ニ、何レモ木葉石アリ、其外諸州ニアリ、ワリテ中ニモ同紋アリ、硯ニスベシ、是花紋石ノ類ナルベシ、

〔甲斐國志 附錄 百二十三〕一木葉石　都留郡初雁驛ニアリ

〔新編常陸國誌 土產 六十一〕木葉石

那珂郡東野村野上村寺田村ヨリ出、爾後伽ト云隨筆ニ、那珂郡野上村ト、上寺田村トノ境ノ山中ニ、笠敷山ト云所アリ、此所ハ餘程高キ所ニテ、此近邊東北ノ山々見エ渡リ、ヨキ景ナリ、然バ往還ノ人モ笠打敷テ、爰ニ休ミ、眺望スルノ心ニテ、笠敷ト云、然ルニ此山ノ峯々ニ、岩ソビヘカカリシヲ、打タダキ見レバ、石ノヘゲタル所ニ、木葉ノ形オシタル樣ナリ、顯然トアルナリ、打割見レバ、又右ノ如シ、シカレバ笠敷山ノ外ニハ左樣ノ石ハコレナシ、此山坂ノ内バカリナリ、

〔愛媛面影 一 宇摩郡〕木葉石　我國木葉石を出す所多し、明河山より出る物尤奇品なり、此石の出る所は海上と云所にて、そこに藏王權現祠あり、祠前に一石有て、剛盤にはかならず潮の滿干あり

アナノ石
シアノキ石

櫻石

十寒、松化シテ爲石ヲ記ス、白孔六帖ニモ見エタリ、日本ニモ多シ、又諸木ノ石トナルアリ、筑前州名島ト云處ノ海濱ニ、神功皇后ノ御船ノホバシラ石ニナリタルアリ、越前敦賀及佐渡ニ、ブナノ木石アリ、椋石アリ、皆是木ノ變ジテ石トナルモ、近江ニ土ノ石トナレル川アリ、

〔重修本草綱目啓蒙 五石〕不灰木、附錄松石、　マツイシ

一名松化石雲林石譜　康干石書言

松ノ木ノ化石也、本邦諸國ニアリ、就中九州ニ多シ、武州池上長榮山本門寺ニ松樹全身石トナルモノアリ、城州嵯峨大井川ニ松ノ化石アリト云ハ非ナリ、石ニ木理アリテ、松木ニ似タルモノナリ、又松脂ノ化石アリ、形色全ク琥珀ニ異ナラズシテカタシ、是石珀ナリ、發苑詳註ニ曰、僕骨東境、其地東北千餘里、有康干河、松木入水一二年、乃化爲石、其色青人謂之康干石、仍有松文、埼、越前大鹽山ニ靈泉アリ、此水ニ材木ヲ浸シ置タトキハ、石ニ化ス、松材最化シ易シ、又筑前糟子郡長谷山ノ土人松木ヲ伐リ、山中ニ置ケバ、久シテ石トナルト云、

〔佐渡志 五物産〕化石

松ノ化石ハ、羽茂郡新保村柳澤村ノ海邊ニ多シ、皆大石ナリ、又雜太郡橘村ノ海中ニモアリ、シデノ木ノ化石ハ、羽茂郡大杉村杉野浦村ノ邊ニ多シ、貝ノ化石ハ、雜太郡戸中村平根崎トイフ海中ノ出崎ニアリ、一種小貝ノ化シテ玉質トナリタルモノ、羽茂郡深手村ノ山中ニアリ、此數品ハ堅硬ナルモノナリ、又木葉石、鮎石ナド、云モノ所々ニアレドモ、石ニハアラズ、土ノ塊リタルニ其形陰々トシテ現ル、ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 五石〕桃花石〇中略

増、丹波稀花ノ山中積善寺天滿宮ノ祠ノ邊ニ櫻石ト稱スル石アリ、其質黑褐色ニシテ、白色ノ櫻花片アリ、傳言コレヲ佩レバ雷ノ難ヲ遁ルト、土人其祠ヲ櫻天神ト云フ、又雲林石譜云、韶州桃花

化石

云、コレ浮石ノ類ナリ、

〔採藥使記 中奥州〕顯任曰、奥州鹿角郡ニ苧輪ト云フ城アリ、其山皆浮石ナリト云フ、或曰信州輕井澤ニ浮石多ク出ル、故ニカルイ澤ト云フ、

先生按ズルニ、山中ニ海產ノ物生ルコト所々ニ有リ、江都ノ道灌山ニ牡蠣殼ヲ出シ、勢州ノ山田ノ西ニ波多瀨ト云フ山アリ、其山ニ蛤ヲ出ス、

〔毛吹草 三〕紀伊　浮石(カルイシ)　備後　浮石(カルイシ)

〔新編常陸國誌 六十一 土產〕化石

常陸考云、多珂郡大津鄕五浦蛇窟有鐘鼓洞、時或聞音樂之聲、土人云、是龍神所窟宅也、是曰五浦蛇窟、出寄石、有蛤石、大黑石等、以木投洞中化爲石、下野那須郡武茂川ヨリモ化石ヲ出ス、

〔東遊記 五〕化石溪

越前國大野領分の山中打波村といふ所に、何にても石に化する谷あり、余も彼地に遊ばんとせしかども、折節極月なりしかば、通路雪に閉られて至る事あたはざりき、その邊の人にくはしく尋問ふに、大野の城下より山道九里にして細き谷川あり、其水の流れに諸器物何にても、半月或は一月程入置時は皆石と成る、塵紙下駄草履、膳椀の類にても皆石となるとぞ、余京都にて先年木の枝に雪の積れるが、其雪ともに石となりたるを見たり、又半紙壹束をわらにてつかねたるが、其わらともに化して石と成りたるをも見たり、是皆此谷にて作りたるものとぞ、其頃思ひしは、極陰の地ゆゑ、水中に寒氣の時久敷漬置て、石と化するにやと考へしが、左にはあらず、夏日にても同敷石となるとぞ、それはいかにして化することぞと委敷尋究るに、谷川の水上より沫のごとき物流れ來りて、漸々に其物に粘著して石と成るとぞ、然れば其谷の奥に玉液有りて流れ出、物に付て石となるにやと思はる、蝦夷諸國の事を書し書を見し事の有りしが、其中にも蝦國

龜甲石　蛇骨石

馬骨石

人肌石

浮石

リ、

〔佐渡志 物産 五〕浮石　方言カルイシ
雜太郡鹿伏村醫王寺近邊ノ土中ヨリ出ヅ、一種菊銘石ナルモノアリ、石ニ似テ非ナルモノナリ、

〔紀伊續風土記 物産 一〕海花石〈ウミハナイシ〉[illegible]
牟婁郡海中所々より出づ

〔本草一家言 四 石〕龜。甲。石。
紀州熊野地圖坂越有二一種石一、表裏俱有二龜背紋一、自二紀州武田氏一寄來、是赤花紋石一種也、

蛇。骨。
產二于和州吉野及相州箱根一、白碎石也、土人貨レ之爲二末藥一、金瘡傷瘡止血極效、又作州津山產レ之、按、廣輿記、楚雄府古蹟仙人骨、鎭南山有二碎石一、如二朴硝一、端面紛レ之、以敷二瘡疾一立効、世傳仙人骨化二于此一云々、卽是物也、泉州堺醫春洞亦以レ之充レ之、與二予意一暗符、

〔土州淵岳志 中 物産〕馬。骨。石。
諸々山上ニアリ、色極メテ白キハ胡粉ニ製スベシ、長岡郡笠ノ川ノ山上ニアルハ望夫石ト云ヒツタフ、色キハメテ白シ、又按ズルニ、所々山頂ニ牡蠣ノカラノ岩ニ貼スルハ、カキガラニアラズ、石鍾石燕ナド云フ、燕石ニテ、形狀ヨクカキガラニ似タル物ナリ、當國城北鴻ノ森ノ西ニモ、牡蠣ノゴトキ石オホクアリ、

〔大和本草 三 金玉土石〕人。肌。石。〈ヒトハダイシ〉
鎌倉ノ繪ノ島ニ人肌石有リ、寒天ニモ溫ナリ、杜陽雜編曰、唐大中中、日本國王子來朝、出二冷暖玉棋子一、冬溫夏冷、故謂二之冷暖玉一、不レ由二製度一、自然黑白分焉、今按、是人肌石ノ類ナル乎、

〔倭名類聚抄 一 石〕浮石　交州記云、浮石體虛而輕、〈和名加留以之〉

灰石ト云、博物志云、燒白石作白灰、既是鍾乳、地脈日夜冷、嶺前及水傍、即是初熟脂云々、今石灰ヲ献スル者必燒錬精熟而後出火ヨト有故ナリ、

白堊　西郡猿山村民家ノ後ニテ猿山觜ノ處ニアリ、屋壁ヲ塗ルニ石灰ニ相劣ラズ、

（佐渡志　物産五）赤玉石

加茂郡赤玉村ノ海濱ニ出ヅ、上品ナルハ一色朱ノ如シ、下品ナルハ丹黄色ヲ帶ブ、大ナルハ稀ニシテ小ナルモノ多シ、

（新編常陸國誌　六十一土産）黄石

久慈郡國實村ヨリ出ヅ、色赤色ノ如クニシテ、黯カラズ、國人猥ニ採ルコトヲユルサズ、コレモ青緑ノカタマリタルモノヽ如シ、

青碧石

（毛吹草　四）山城　青碧石

（佐渡志　物産五）碧玉

此國ノ産ナルモノ、近頃シタ獲トレタリ、曾テ江州ノ人柚木大梓ガ藏スルモノヲ見タリ、其ニ聞フニ、北佳敦士郎ガ贈ルト答ヘタリ、蓋ソニ加茂郡蟲崎村ニアル青碧石ナルモノ、土人小ナルヲ愛シタ大ナルモノヲ賤ム、其大ナルモノヲ彫琢セレト見ヘタリ、諺ニ云ゴトク、玉不琢無光レタ人如ルニ及ザルナルベシ、

花崗石

（新編常陸國誌　六十一土産）花崗石

鹿島郡谷田郷ノ沙山ヨリ出、小石ニシテ文アリ、俗或ハ小紋石ト云、

菊花石

（大和本草　金玉土石）菊メイ石　其形菊花ノ如シ、是亦花紋石ノ類ナルベシ、

（本草綱目啓蒙　五金石）菊錦石

南海紀州ヨリ出ヅ、本草ニ不見、故ニ主治ヲ不知、和方金屑丸ニ入ル者誤レナリ、　石ニ菊ノ紋ア

ルガ如シ、甚奇麗ナリ、

〔土州淵岳志中産物〕沙石

長岡郡本山ノ川ヲ吉野川ト名ヅク川上ハ本川ヨリ出ヅ、河原ニ釜山ノ毒砂トナル、白キ石アリ、打タダキタ大小桂ノ如クワリテ用ユ、又吾川郡浦戸ノ外ノ濱桂濱ノ石モ釜山ノ砂トナル、

〔延喜式四十一彈正〕凡紀伊石帶隱文者、及定摺石帶、參議已上、別鍍金銀帶及唐帶五位已上、並聽著用、紀伊石帶白晳者、六位已下不得用之、

〔紀伊續風土記物産一〕白石

海部郡濱中莊大崎村の中の方海濱を白神礒といふ、其所に白色の大巖あり、其質純白にして、磨すれば光澤出て、白蠟石の如く、堅硬なり、此白石、此礒のみならず石脈東の方に通じて、村中の東山にもあり、昔より此石を鑿て、石帶に製す、和名鈔に、紀伊石帶といふ是なり、五位以上の腰帶の料に用ふ、延喜式彈正臺の條に云、凡紀伊石帶隱文者、○中略とあり、又左大臣高明公の西宮記、及撰塵裝束鈔にも出たり、

〔東遊雜記三〕黑石にて見し、レトク三ツの内、一ツには曲玉を付しあり、奥路圖揭にしるす蝦夷地にも白玉は至て稀なるものにて、夷人殊に秘藏せるよし、今見る曲玉は下品に見ゆ、日本にても好事家曲玉を愛翫せる人多し、京都及江州石亭大坂の蒹葭堂にても見しに、其形一樣ならず、奥路圖揭にしるす大小あり、製せし時代にもよるか、上品は至て美敷異の玉といふべき光り、つよくすき通るなり、色も青色を帶し、白きもあり、上世は讃州よりも曲玉に製せし石出し、予○古河辰が見し石は異の石とは見へず、奥路にも予が見し石は、異の石とは見へず、すべて支國、世に曲玉の說多し、上世のたからものにて、今の金銀の如く寶翫せし物と云、

〔甲斐國志百二十三附錄〕一白堊石　宇津谷、壺嶋ノ間、釜無川鹽川ノ會注スル邊ニ多シ、採テ燒之、方言

泥炭

〔重修本草綱目啓蒙五石〕石炭、附録煤石、詳ナラズ。○中略増、近年竈ヲ焚クニ、多ク石炭ヲ用ユ、其堅黯黑色ヲ帯ブ、下品ナリ、味噌醤油ニ製シテ、味變ジ易シ、宜ク擇ビ用ユベシ、又石炭ノ上品ニシテ、器物ニ作ル者、多クハ木ダチノ石炭ナリ、木ダチノモノハ、別ニ漢名木煤雲南通志ト云、雲南通志云、石炭一種、狀如樹而有紋理者、謂木煤、卽チ奥州大隈川及ビ同國鎌倉ノ埋木、豫州ヨリ出ル所ノ扶桑木、皆同物ナリ、又阿州麻植郡森藤村ニモ產ス、地ヲ掘ルコト二三尺、或ハ五六尺、其厚サ一尺許ニシテ、横行スルコト數十間ニ及ブ、コノ物地中ニテ實ヲ結ブ、黑色ニシテ長サ六七分、徑リ四五分、大抵梨子ノ大ニシテ、豎ニ六稜アリテ、前後尖ル、其質堅硬ニシテ、櫻炭(サクラズミ)ノ如シ、奇品ナリ、

〔日知錄三十二〕石炭

今人謂石炭爲煤、按水經注、冰井臺井、深十五丈、藏冰及石墨焉、石墨可書、又然之難盡、亦謂之石炭、

是知石炭石墨一物也、有精粗爾、

〔松屋筆記八十六〕穀土(スクモ)すくも

閲香祖筆記四卷十九丁ヲ、河底古木灰ノ條に、康熙丙午、江南大旱、餘姚河港皆赤裂、百餘日、居民多赴姚城濠中、掘黑泥和麩作餅、相傳此城本沈法興殿爲港、年久化爲泥也、鄉人以爲河底皆有黑泥、亦掘之至五六尺許、輙得泥如石炭者、然不可食、以作薪火、乃終日不熄、其質非土非木、有大至數圍、須用斧劈者、有碎疊成塊纍層々可揭者、細驗之、則大者本巨木層疊者、則木葉所積年久爛成塊也、江南人惟沿村、有樹河港之在野者、宇所植固有之、亦必取作器、小則伐爲薪、其熟者砍而棄諸河、意必洪荒以來、兩岸本多樹、隨山刊木時、始伐而投之、歷千萬年、成此耳、是實數百里內、河港俱掘得、陽湖大數十里、湖底亦有之、余弟汝霖買數百斤、猶存云々、按に、越後に新土あり、富士山に神代炭あり、吉田邊の人とりて炭にかへ、大に其利を得といへり、

〔大和本草三金玉土石〕スクモ　近江國野州郡老曾村ハ、觀音寺山ノ南ノ麓ニアリ、老曾ノ森モコ、

石炭

銅坑アルトコロ、銅子百枚及ビ鳥越山ヨリ出ヅ、下品ニシテ藥用ニアタリガタシ、

〔紀伊續風土記物産一〕石膽本草膽礬の如く、深綠色なり、形小く、賤　牟婁郡銅山處々に產す

〔本草和名玉石三〕石膽　一名畢石、一名黑石、一名碁石、釋藥性　一名銅勒、一名立制石、出蘇敬注　一名立制止、出雜要訣　出備中國、

〔多識編石一〕石炭、今案伊志乃阿良須美、又云毛乃加无須美、近江國栗本郡、掘地取土、加炭燃之代薪、曰須久毛、然石、今案毛惠伊志、

〔大和本草金玉土石三〕石炭

本草石部ニノセタリ、今按日本ニモ處々ニ多クアリ、其色黑クシテ如漆、堅キコト石ノ如ニシテ光アリ、火ニ燒ケバ黑烟極メテ明ナリ、能久シクモユ、本草ニノスル所ト同ジ、山ヲホリテトル、賤民コレヲホリテウル、コレヲ以テ薪ニ代フ、烟多ク臭惡シ、浴桶ノ小爐ニ燒之ナヨシ、コレヲタキテ其臭衣ニウツレバ久シク散セズ、然レバ貝香ノ代トシ、百和香ニアハセタラバ、ヨク香ヲトマムベシト云、スクモト訓ズル說アリ、非是、スクモハ別也、スクモハ前ニ詳ニ見ハス、本邦ノ唐醫石炭ヲ以テ乾漆トス、大ナル誤也、或曰倭方乾漆ヲ用ヒバ石炭ヲ可用、老學菴筆記曰、石炭今西北所燒之爍、蜀石炭、漢ノ地理志豫章郡ヨリ出石、可燃爲薪、蘇軾集有石炭行、宋白石燭詩云、但喜明如蠟、何嫌色似黳、燭出延安、予在南鄭數見之、其堅如石、黑膩極明、亦有淚、如蠟而煙濃、直汙帷幕衣服、故西人亦不貴之、程子外書曰、石炭穴中遺火、則連年火不絕、故有數百千年、今火山蓋爲山中時有火光、必是此類火時發於山間也、今按石炭ヲホリタル穴ニ火入レバヤケテヤマズ、

〔倭訓栞前編三〕いはき　石木也、万葉集に見えたり、○中略　近江尾張などに、岩木といふ物あり、石炭也、木化石の柔らかなる物なれば、此名よろし、筑前にていはきともいへり、

〔本草綱目啓蒙石九〕石炭　カラスイシ　モエイシ　イシズミ筑前　イワキ長州　イワシバ筑前

礬石、白きは明ばんとなり、あをきはろうはとなる、山より堀出したる石をくだき、小屋の中にて水をかけ、くさらかして、これを釜にてたき、其あわをはし、ふたに入てほす也、中にも性のよきを絹手といふ、丹礬の色のごとし、其次をあさぎ手と云、色眞青なり、下品はくろみあり、絹出、淺黄出のろうはは、外科の膏藥に用ゆる也、下品のろうはは、染物に用ゆ、染汁に是を加れば、くろみを出すといへども、染鐵よはるなり、

〔紀伊續風土記物産一〕礬石〈本草綱目、本草圖經、名醫別錄、石膽、文字太佐〉

牟婁郡那智庄勝浦村に産す、至りて稀なり、

黃礬〈本草一貫事本、圖式ニオホシ〉　同郡花井庄楊枝谷に産す

綠礬〈本草〉　普通の品は、普鐵線を煆てなる物なり、牟婁郡栗栖川莊眞砂村山中に多く産す、又花井莊楊枝谷銅穴中に産する物は、自然生にして至りて上品なり、中には大塊のものあり、其色翠綠にして、透明琅玕琉璃の如く、觀美なり、濱土にも自然生の品ありて、石膽混する事、天工開物に載せたり、

〔本草綱目譯義十一金石〕黃礬〈キノウバン〉

明礬ノ黃色ナルモノナリ、和漢俱ニアリ、京ノ藥店ニハナシ、江戸ノ藥店ニアル由、豐後、伊豆、出羽、相模ヨリ出ヌヨシ、

〔大和本草三金玉土石〕白礬。

楊升菴丹鉛錄曰、温湯所在必白礬丹砂硫黃三物爲之根、乃蒸爲暖流耳、今按ニ、硫黃ノ氣ヨリ温泉出ル如ク、礬氣ヨリ温泉イヅ、續日本紀文武天皇二年六月、近江國獻白礬石、又元明天皇和銅六年、相模讃岐白礬石ヲ獻ズ、美濃ヨリ青礬石、出雲ヨリ黃礬石ヲ獻ズ、延喜式飛驒國貢白礬石、其後日本ニアル事ヲシラザリシニヤ、三四十年來日本ノ諸山ヨリ出ル、唐ハ性ヅヨク和ハ性ヨハシ、飛

綠礬
黃礬
白礬

〔續日本紀 六元明〕和銅六年五月癸酉、令大倭參河並獻雲母、伊勢水銀、相模石硫黃、白。礬。石、黃。礬。石。近江慈石、美濃青。礬。石。飛驒若狹並礬。石。信濃石硫黃、上野金青、陸奥白石英、雲母、石硫黃、出雲黃。礬。石。讚岐白。礬。石。

〔和漢三才圖會 六十一 雜石〕綠礬(ろくばん)　皁礬　青礬　俗云呂不波

按綠礬似明礬而綠色、故名、其深綠者爲紺手、帶赤者名未醬手、爲次、出於長州萩者良、攝州多田及播州者次之、或染明礬爲淺青色、僞之、入藥用者可辨、惟染匠家彫金家多用之、北國之染匠家好用未醬手、今自中華來者、多未醬手也、故以倭產黃者爲上、凡山瓦而有黑色石有之、取其石投銅鍋煮之、其湯汲取于桶徐々投炭上澄水盡、至底如塊氷、而綠黑色者乃綠礬也、用之加染紫及茶色中帶黑色、凡染帛一端、加綠礬一小匕可也、多則帛弱易敗、今多燒綠礬代朱膠砂、名二礬紅一也、

〔本草綱目譯義 三十一 石〕綠礬 ロツハ

綠礬ノ唐音ロウバノ轉ナリ　アヲメウバン 勢州

明礬ニ似テ、透徹綠色ナルユヱ青メウバント云、上品ノモノ然リ、舶來ニモ近來ハ上品ナシ、和產ハ、長州萩、攝州多田、下野、播州、能登、美濃ヨリ出ヅ、藥店ニモ二品アリ、萌黃色ニシテ濃キモノヲ紺デノロウハト云、透明ニシテ美也、和產ナリ、染物ノ黑ミヲフケルニ用ユ、然ドモ毒アリ、絹帛ヲ染テ燒弱ル也、藥ニ不用、又淡赤黃色ノモノアリ、ミソデノロウハト云、赤味噌ノ色ニ似タリ、舶來ノ綠礬ハ、風雷リ碎ケテ色變ジ、味噌ノ如ク粉トナル、綠色ニシテ塊二三寸ノモノモアリ、是ヲ藥用トス、唐ニテ綠礬ヲヤクハ石炭ヲホリ、穴ノ中ニ雞卵ノ如キモノアリ、コレヲ銅炭ト云、此ヲ以テヤク也、物理小識、煤中銅石可燒青礬ト云、煤トハ石炭也、石炭ニテ燒テ綠礬トナス、日本ニテハ製法異ナリ、山野ノ草木ナキ處ニ、黑クコゲタル石アリ、此ヲトリ、銅釜中ニ入レ、水ニテ煎ジ、及貯テ實カラシメ清メルモノヲ去リ、底ニツラヽノ如ク凝ル、コレヲトリ、紺礬ノロウハト云、凡テ舶來

錄下列陶弘景蘇敬諸注、實是新修本草之舊、故本書所引本草注、逸亡之處、取以校之、蘇注又云、白礬多入藥用、靑黑二礬療疳及諸瘡、黃礬亦療瘡生肉、兼染皮用之、其絳礬本來綠色、新出窟未見風者、正如瑠璃、燒之赤色、故名絳礬矣、按、白礬今俗呼明礬者、靑礬卽綠礬、今俗訛呼呂宇波、入染家用、李時珍曰、綠礬可以染皂色、是也、黃礬今俗呼黃明礬、亦染家用之、絳礬卽燒綠礬者、今俗呼辨賀羅、黑礬惟出西戎、亦謂之皂礬、染鬚鬢藥或用之、見本草圖經、圖經又云、礬石初生皆石也、採得碎之、煎煉乃成礬、李時珍曰、礬者燔也、燔石而成也、按、古本新修本草殘本及醫心方作礬石、本草和名作樊石、續日本紀延喜式、北靑道具圖像記並同、岡村氏遷曰、作樊爲是、樊燒也、礬石煎煉乃成、故名礬石、不須以礬釋礬也、依之作礬石、亦假借也、

〔和漢三才圖會　六十一雜石〕明礬（めうばん）（礬石　羽礬　羽澤　巴石　礬者燔也、燔礬則白者也、其）
倭明礬古者未精、近世習製法於華人、今出豐後者潔徹玲瓏、同于南京透明礬、故今和漢共用、凡染家茶色者無之則不成、

〔本草綱目啓蒙　十一金石〕礬石　メウバン
明礬ト書ク、中華ニテ明礬ト云ハ明徹ナルヲ云、上品ノ稱也、ドウス、ドウサ、明石、和方書礬石ヲ燒返シ、白キ粉トナシタルヲ、ヤキカエシト云、漢名ハ枯礬ト云、藥店ニ舶來モ和產モアリ、上品ナリ、日本ノ產モ明徹シテ上品也、南京ト云モノハ黑ミアリテ濁ル、染家ノ用ニ入ル、又唐ノスキ明礬ト云モノモ白色ニシテ透徹ス、續日本紀天武天皇二年、近江國獻白礬、元明天皇和銅六年、令相模飛驒若狹讚岐貢白礬ト云、
今江州ヨリ不出、京近國ニハ產スル地ナシ、今豐後鶴見ケ嶽、同國速水郡、肥前溫泉嶽、肥後阿蘇山、長門能登甲斐遠江奥州會津、其外諸國ヨリ出ヅ、溫泉アル土地ニハ土熱シテ焰燃出ル處アリ、コレヲ俗ニ地急地獄ト云、ソノ處ノ土ヲトリテ、礬ヲ製スルガ如クシ、土上ニマキテ、土ニ水ヲウチ

一名崑黄(酉陽雑俎)　黄硇(正字通)　流黄　留黄　石流黄(共ニ同上)　焰叟(事物異名)　黄英(石薬爾雅)　九靈黄童(同上)　山不住(同上)

凡ソ硫黄ハ、温泉アル山ニ於テ、悪物ヲ以テ、土常ニ焼ケ俗ニ地獄ト称スル處ニ蓋ヒ置バ、焔気器中ニ触テ、燦ノフキタル如ク、純黄色ナル者アリ、此ヲ生イワウト云、取出シ、略煮テ土抹ヲ去ルヲ煮イワウト云、数種アリ、大抵三品ニ別ツ、色深黄ナルヲ鷹ノ目ト云、即石硫黄ナリ、其色黄ニシテ微紅ヲ帯ルモノヲ、ウノメト云、即石硫赤ナリ、共ニ光澤透明ノモノヲ上品トス、寺島氏、白色ヲ以テタカノメトシ、微黄色ヲ以テウノメトスルモノハ、是ニアラズ、其青色ヲ帯ルモノヲヒダチト呼ブ、即石硫青ナリ、黄赤二ツノモノ薬ニ入レ、及銃薬ニ供ス、青色ノモノハ薬ニ入ル、ニ堪ヘズ、唯燈燭ノ用ニ充ルノミ、唐山ニテハ銅炭ヲ焼テ硫黄ヲトルコト、天工開物ニ詳ニス、和産ト異ナリ、續日本紀ニ、元明天皇和銅六年、相模信濃陸奥硫黄ヲ獻ズト云、今モ相州箱根、信州浅間ケ嶽、奥州鷲島、同會津ノ大鹽ノ里ヨリ出、又羽州秋田、豊後玖珠郡、同速水郡ノ硫黄山、肥後ノ阿蘇山、越後ノ妙香山、越中ノ立山、加州ノ白山、野州ノ日光、豆州ノ大島、土州ノ湯ノ山ケ嶽、日州ノ霧島、肥前ノ島原、甲州、豫州道後ノ湯ノ山、薩州硫黄ケ嶽等ヨリ出ヅ、唐山ニテ和産ノ硫黄ヲ舶硫黄ト称ス、萬病回春ニ出ヅ、又正字通ニ舶硫ト云フ、物理小識ニ日本土多硫黄不可作藥、必取別島土ト云ハ、笑ベキノ甚シキナリ、

集解、潜水石液、詳ナラズ、堀子秀ニ従テ、礬石水液ト做看ルベシ、

増、集解、礬石水液ノ説ハ、北涌堀元厚先生ノ本草綱目ノ標注ニ見ヘタリ、今本草家相傳スル所ノ標注及側注等、多クハ堀家ヨリ出ヅ、ソノ後蘭山先生僅ニコレヲ補添スルノミ、其他内經十部書仲景ノ書等、各堀家ノ標注アリ、眞ニ大家ナリ、余亦遠クソノ門ニ出ヅ、曾士考ノ説ニ、薩州ノ鬼島硫黄島俱四處アリテ、自ラ硫黄ノ液ヲ生ズ、ソノ味極テ酸ナリ、土人硫黄醋ト云、取リ貯テ米醋ニ

硫黄

〔箋注倭名類聚抄三玉石〕按文選火齊見西都賦西京賦、按南史扶南傳云、火齊状如雲母、色如紫金、有光耀、別之則薄如蟬翼、積之則如紗縠之重沓也、呉都賦注引異物志亦曰、火齊如雲母、重沓而可開、色黄赤似金、出日南、故其和名與雲母同也、今本文選訓多万、恐非、古實歟聞、按玉篇引倉頡篇云、玫瑰火齊珠也、據之蓋依之、韻會引說文亦云、玫瑰火齊珠也、今本說文玫字注作火齊玫瑰、恐非、按玫瑰諸本草不載、不知其詳、但本草圖經雲母條云、西南天竺等國出、一種石、謂之火齊、亦雲母之類也、色如紫金、離析之、如蟬翼、積之乃如紗縠重沓、又云、琉璃類也、亦有入藥、李時珍於水精條載火珠云、說文謂之火齊珠、漢書謂之玫瑰者是、

〔本草和名四玉石〕石流黄　崑崙黄、(出范子計然)一名王黄、(出雜要訣)一名九靈黄童、(出丹口訣)一名石停脂、(出太清經)一名大陽、(出太清經)一名土精、(出本草釋名)一名留黄、(出范子計然)一名生黄、(出雜要訣)和名由乃阿加、出太宰、

〔倭名類聚抄一玉石〕流黄　本草疏云、石流黄、焚石流也、(流黄和名由乃阿和、俗云由王、)

〔倭訓栞前編三十七〕ゆわう　和名抄に硫黄俗に云由王といへり、湯の沫の急語なるべし、今ノ俗いわうともいへり、職人歌合にも、ゆわうをいふによせたり、硫黄の義香とせるも、ゆといゝと通ず、和銅六年に令信濃國獻硫黄と見え、海東諸國記に、日本下野國有火井、產石硫黄と見え、庚辛玉冊に、石硫黄生南海琉球山中、倭硫黄亦佳と見えたり、琉球山中といへるは、武備志などに所謂硫黄が島を、中山傳信錄に硫黄山といへり、

〔本草綱目啓蒙十一石〕石硫黄

石硫黄　硫黄ノ上品ナル者ノ目ト稱スルモノナリ、品類多シ、總ク云トキハ硫也、分ツテ云トキハ硫黄也、日本ニテモ三色ニ分ケルナリ、深黄ニシテスキタル如キモノヲ上目ト云、即石硫黄也、黄ニシテ赤ミアルワウノメト云、コレ次ノ石硫赤也、此二品ハ上品ナリ、此ニ一說アリ、和漢三才圖會ニハ白キワタカメト云、淡黄色ナルワウノメトス、是ハ大ナル誤ナルベシ、又青ミアルモアリ、是

〔箋注倭名類聚抄 三玉石〕按、和名依輔仁、以其光映歷鑠然、有是名、千金翼方、證類本草玉石部上品、作雲母、一名雲珠、色多赤、一名雲華、五色具、一名雲英、色多青、一名雲液、色多白、一名雲砂、色青黃、一名磷石、色正白、本草和名闕、唯作一名雲沙、色多黃、與此所引合、按、抱朴子仙藥篇云、雲母有五種、五色並具而多青者名雲英、五色並具而多赤者名雲珠、五色並具而多白者名雲液、五色並具而多黑者名雲母、但有青黃二色者名雲沙、晶々純白者名磷石、是葛洪所見本草、亦作青黃、則本草和名作多黃者誤、源君據仙藥篇也、磷石之名亦非是、圖經云、雲母生土石間、作片成層可析、明滑光白者為上、江南生者多青黑色者、其片絕有大而堅潔者、

〔大和本草 三金玉土石〕雲母

本草綱曰、生土石間、作片成層可析、明滑光白者為上、　弘景曰、以沙土養之、歲月生長、抱朴子曰、雲母有五種、時珍云、昔人言雲母壅尸亡人不朽、盜發馮貴人冢、形貌如生、因共姦之、　今核匠用之、為粉面

補繪帖

〔和漢三才圖會 六十玉石〕雲母　雲華 雲珠 雲液 雲砂 雲英 磷石　和名岐良良

本綱、雲母生山石間、土人候雲所出之處于下掘取、無不大獲、有長五六尺可為屏風者、但掘時忌作聲也、據此則此石乃雲之根、故名雲母、而雲母之根則陽起石也、凡有五種、當舉以向日看之、陰地不見雜色也、五色並具而多青者名雲英、五色並具而多赤者名雲珠、五色並具而多白者名雲液、五色並具而多黑者名雲母、但有青黃二色者名雲沙、晶々純白者名磷石、皆鹽湯煮之可為粉也、凡他物埋即朽、著火即焦、而此五雲母入猛火中、經時不焦、埋之不腐、入水不濡、踐蹂不傷、故人用雲母壅尸亡人不朽、入藥光瑩如冰色者為上、

氣味甘平小毒、治中風寒熱如在車船上、除邪氣、安五臟、明目、久服輕身延年、澤潤之義、古聖有服餌法、今人服者至少也、治一切惡瘡及金瘡出血、傅之、難產經日不生者、或橫逆者、萬不失一、雲母粉半兩、溫酒調服、入口即產、

玉英

續日本紀ニ、金青出上野ト云、然ドモ今上野ヨリ出ルハ下品ナリ、上品ハ攝州多田、羽州阿仁ヨリ出形ハ色々アリ、コレモ初ハ黑ミアルガ上品ナリ、初ヨリ青色ナルハ粉ニシテ、色淺クナルナリ、コノ淺キハ和名ニダンセウト云ナリ、上品ハ青黑色ナリ、コレモ細末ニスルニ、一番ヲ頭青ト云、二番ヲ二青ト云、三番ヲ三青ト云、コノ名ハ芥子園畫傳ニ出、又紅毛ヨリ來ル、ハナコンゼウト云ハ、細末ニナラズ、初渡リタル時ハ砂ノ如シ、コレヲ細末ニスレバ色白クナル故ニ、本ノ畫ノ具ニハ用ズ、粗末ニシテ、看板ナドヲ繪スルナリ、光リアリテ見ゴトナリ、コレハ本ト何ヨリ生ジタルモノヤラ知ラズ、本條ノ類ニテハナシ、大和本草ニ大靑ナラント云、コノ說近シ、

白青

タンゼウト云モノナリ、青ハ淺ル、今ハ渡ラズ、日本ニテコンゼウノ下品ヲ細末ニシテ色白ケタルヲタンゼウト云、コレハ僞物ナリ、唐ヨリ渡リタルタンゼウト云ヘル物ハ、自然ノモノニテ、色白ケタルナリ、美ナルモノナリ、唐畫ノヱリナドヲ繪レルモノコレナリ、

一名　目青綱目

附錄　綠膚青　和產知レズ　碧石青　和產知レズ

（佐渡志五物產）扁青　方言イツコンゼウ

海府入川鉛山ニ生ズ

（本草綱目譯義五入）玉英カヽヽイ石

常ノ石ノ形ニシテ、平ラカニシテ光アリテ、物ノウツルモノナリ、何ニモアリ、京ニテハ鷹ガ峯ノ近處ニ鷲ガ峯ト云處アリ、此ニカヾミ石アリ、人ノタケホドアリテ、人ノ通ルニ、鏡ノ如クニスガタウツルナリ、前牛馬ノ往來スルニ、此石ニタマゲテ害ニナル故ニ、今ハキズヲツケテアルナリ、諸國ニアルモノナリ、唐ニモアルコト、大明一統志ニ出タリ、卽チ鏡石ト云也、

空青

沙ト水トヲ合ワシテ、ハノナキ鐵ニテ引ク時ハ、切レルナリ、此沙ハ茶色ニシテ光リアリ、讃岐ヨリ出ルハ大ニシテ、一分ホドアリ、河內ヨリ出ルハ細カシ、石ノ部ニ金剛石ト云モノアリ、磨ニテ一名ヲ金硬石ト云、夫故此ヲ中ヲルモノアリ、誤ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙五玉〕青玉　アヲダマ　略○中

合玉石　コンゴウセウ、色赤黑キ砂ナリ、又靑赤色ナルモアリ、形多ク稜角アリテ、玉石ヲ切リ、或ハ磨クニ用ル砂ナリ、河州ノ金剛山、和州ノ生駒山等ヨリ出ス、又丹後、土州、及諸州ニアリ、讃州ニハ大塊四五分ナルモノアリ、又天工開物ニ解玉砂ト云ヒ、通雅ニ琊砂ト云モ、皆此物ナリ、

增、合玉石ハ、城州鳴瀧ヨリ出ス、鳴瀧砥ナルベシ、其質淡綠色ニシテ、淺褐色ノ筋アリ、俗ニウチダモリトモ云フ、卽淮南子ニ、玉待礛諸而成器、注礛諸攻玉之石、又集韻ニ、礛諸治玉石、靑礪也ト云、是ナリ、時珍モ、此卽礛玉砂也、玉須此石礛之乃光ト云、コンゴウセウニテ磨スレバ、能クヘラズト雖ドモ、礛澀シテ光澤ナシ、故ニ玉ヲ切ニハ專ラ是ヲ用ユレドモ、光澤ヲ出スニハ、鳴瀧砥ヲ用ユ、大明一統志ニ、順德府解玉沙、大同府礛玉沙ト云時ハ、礛玉砂ト解玉沙ハ同物ニ非ズ、又天工開物ニ以解玉沙攻玉、永無耗折ト云トキハ、解玉沙ハ最トモ緻密ナル細砥ニシテ、徐々ニ磨ケバ折ザルヲ云フ、

〔紀伊續風土記物產一〕合玉石コンゴウセキ本草

國中海邊處々沙中に產す、黃赤色にして甚細なり、

〔毛吹草三〕河內　金剛山金剛砂コンガウシャ

〔大和本草金玉土石三〕空青

一名ハ曾青ト云、綠青ハ空青之最上也、昔自中華來、慶長ノ初攝州多田ノ銀山ヨリホリ出ス、綠青紺青、此二物多田山之產物也、又攝州河邊郡若宮村ノ山中ヨリ出、色ヨシ、元明帝和銅六年上野ヨ

して螢火の消なましかば、ふたゝび本の道に出ん事かたからまし、

殷孽

〔本草和名 四玉石〕殷孽、(仁諝音魚列反)一名薑石、(陶景注云、鍾乳根、如薑、故名之、)一名薑石、(出兼名苑)一名景石、(出釋藥性)出備中國、

〔本草綱目啓蒙 九石〕殷孽　ツラヽ、石ノ本トノ石ニ附テ生ズル處ナリ、

附錄　石狀　鍾乳ノ生ズル洞ノ中ノ乳水ノ多滴リ落テ下ニ溜マリ、下ヨリ上ヘ向ヒ生タルナリ、形筍ニ似タリ、故ニ石筍ノ名モアリ、コレハ豫州大洲ノ小田ノ洞穴ニ羅漢穴ト云アリ、中ニ十六羅漢形アルト云、コレハ色々ノ形ニナルモノナリ、爪ノ形ナルモアリ、菊ノ形ナルモアリ、和州大峯ノ菊加岩屋ト云テ、菊ノ花ノ形ニナリタルアリ、故ニ洞ヲ菊ノ岩屋ト云ナリ、

孔公孽

〔本草和名 四玉石〕孔公孽、(陶景注云、今鍾乳床也、)一名通石、(蘇敬注云、中孔通、故名之、)出備中長門國、

〔多識編 一石〕孔公孽、今案伊志乃知乃比古波惠、又云、伊志乃知乃宇豆於阿那、

土殷孽

〔本草綱目啓蒙 九石〕土殷孽　キツチノコマクラ　タダイシ　キツチノマクラ(筑後)　キツチノロ

タツタ(備中)

コレハ土中ニ生ズ、形細長ク、筆管ノ如シ、鍾乳石ノ小ナルニ似タリ、尤形ニハ大小長短色々アリ、大ナルハ大指ノ大サナルモアリ、一通リハ薄黄色ナリ、國ニヨリ色黒モ少シアルモアリ、栗毛モアリ、至テ黒キモアリ、皆山ニ生ズ、大雨后山行スレバ、山ノ崖ノ崩タル跡ニ出テアリ、石ノ如ク至テ堅シ、理ニ粗ト密トアリ、密理ニシテ一重ヅヽ皮ニナリ、ヘゲルガ上品ナリ、コレハ播州平ノ產ト云處ニアリ、播州ノ内ニモ處々ニアレドモ、皆粗理ニシテ堅ク碎ケズ下品ナリ、京ノ稻荷山ノ奥ニモ多シ、皆下品ナリ、コノ物形全キ時ハ、中空虚ニシテ、黄ナル粉入リテアリ、折レタルハ粉落テ孔通リテアルナリ、八幡山ニモコノ物アリ、至テ細シ、コノ物ハ色々ノ形ニナリタルアリ、先ヅ一通リハ直ニシテ、中ニ孔アルナリ、中ニ孔アリテ直ナル故ニ、タダ石ト名アリ、又形丸キモ、瓢ナリノモ、枝アルモ、枝アリテ人ノ形ナルモ、雞卵ノ如キモ、甘藷(リウキウイモ)ノ如キモアリ、皆内ニ黄粉入リテア

小屋村の山中に在る窟なり。俗に羅漢穴と名く。側に千體佛とて羅漢の類并びたる状に似たる所あるによりて名づけたるか。俗説に、狩穴と云窟名も此穴より付たるといへり。

寛文元年辛丑十月此窟に入ける時の日記、後人の書に書止るしつ。十九日天氣好けふは、かの穴見んとて、案内者雇ひて、小屋村の村長野立同道、渓川にそひて行ほど一里許にして、大窟と云所にいたる。こゝにて今一人の案内者召出て、行人家より二三町ばかり離れて、麓より下つかたの木立生茂りたる中に、大なる巌の立重りたる有て、其巌の下なひやがて窟なりける。前に格子やうの物したるが、年經れたり。案内者のいへらく、此穴に入れば、必大風吹とて、人を入じと錠へつると、何者か破りて入初たるなりと云り。此所にて燈火ふたつともして入に、十間ばかりはすこし踊りて行。それより漸く廣し。すべて山骨ともいふべき石の下ざまの水流に踊ひて、おのづからうがたれたるなめり。或人はむかし鑛鐵出しけむ跡なるべしといへり。上も下も一面の白石にて、高き所は背にも觸つべく、廣き所には家をも建つべし。所々水滴落て、鍾乳石といふもの夥しくつりたり。穴の内曲折多し。されど案内なれば、いはをにかゝりて飛び降ず、一丁ばかり行て獅子岩と云あり。俗に胎内くゞりと云とぞ。此所は下に水溜りたり。はらばひつゝ漸々こえ行に、かなたは又いと廣く高し。或は豎穴とて、井をのぞきたらんやうに下りさまになりたる穴あり。こは昔より誰も入人なしとぞ。此獅子岩より廿四五間ばかりゆけば、千體佛とて鍾乳石の付たる石、左右にいくつともなく并立てるさま、かの五百羅漢といふ物に似たれば、かくは名付たるなるべし。それより四五十間ばかり行て、鳥居岩と云あり。そは鍾乳石の大さ、柱ばかりなるが、上より下まで降りつりて、左右に立たり。そこより四十間ばかり行ば中川と云所有て、水深く溜りたり。上はかの獅子岩の如くにて、這はでは越がたし。此處をもこえゆかば、猶さまざま行べきを、何となく心細くなりて、此處より引かへしつ。此坑に入ん人は、蠟燭鐵など必たくはへ行べし。若とかく

の山中にも、天馬の窟とて苔ふかく奇異の洞穴ありて、數十丁奥までも至られ、其奥に石馬あり
といへり、先年其洞中の圖をみたりし事のありし、また近江國多賀の山中にも、鍾乳石多くある
穴ありといへり、

〔老牛餘喘 [illegible]中〕石鍾乳
十四五年まへに、備中國阿賀郡赤馬村の狩人二人、ある日猪をおふ、猪草深き所に逃入、其草をわ
け入れば大なる穴あり、村人もしらざりし穴なり、穴のうちにてりたる色の物、幾千筒といふ數
もしられず垂たる物あり、石鍾乳なり、こは妻蓄すいといひて、石鍾乳の極たる品なり、狩師、猪を
おもはず、喜びてこれをとる、京大坂などに持のぼりて大に利を得つ、あたりなる者ども聞つた
へて穴に入てとる、その品はやゝ下りたれど、是らも利を得たり、其隣村西方村草間むらなどに
も古穴ありければ、この事きゝて穴さぐりをせりとぞ、おのれにも品は次なれど、形あるを二ツ
おくりたる人ありてもてり、

〔長防産物名寄 土石〕鍾乳石
美禰郡ノ内、長登村、赤村、青景村、カマ村、秋吉村、巳上五ケ村ノ臺山岩穴ニ有之、　同郡伊佐村ノ内、
江ノ上山、

〔紀伊續風土記 物産 一〕石鍾乳ツラヽ（本草和名以之乃知）
牟婁郡色川莊大雲取、湯崎莊古座黒島、四番莊大谷村の巖竇、日高郡志賀莊山中等に產す、又海部
郡衣奈莊白崎濱、千尋の巖壁上に產するは、數百年を經てなれる者なり、乳汁巖上より溜出し、下
は海際に流連して、儼に雪山の如く、白色光耀にして海面に映ず、他邦此の如く大なるをみず、實
に奇觀なり、

〔愛媛面影 四 浮穴郡〕羅濱瑞

なれ中に鍾乳石の多くあれば名付しなり、松山城下よりは七八里をへだてたり、其穴入り口は
なはだ大にして暫く入れば行當りて石壁あり、その石壁に小きあなあり其小きあなをくゞり
入れば甚大にひろきところに至る、此所は少しの日光もなく暗黒はなはだしき所也案内の者
松明を多くともし入ることなり、其所の廣さ凡四五十間四方も有るべし、此所に上より鍾乳石
幾数下り垂る又蟹首の色魚の鰭などいふ所あり、皆自然の石にて其形をなせり、段々奥の方に
入り行くに又行當りに石壁あり、其石壁の上に横ざまに小穴あり、やう〳〵匍匐してくゞり入
る程の小あななり、又あなをやう〳〵にしてぬけ出れば又廣き所に至る、此所は二段になりて、
高き所あり又低き所あり、低に龍の背開の松明をふり立てだん〳〵に進みゆくに、断岸のごと
く絶壁あり、其がけをやう〳〵にしてつたひ下れば、鐵の流れの川ありて、水足首をひたす計な
り、其川を渡り越へて聞すゝみゆけば又ゆき當りて石壁あり、其壁上に又小穴あり、それをもく
ぐり抜ければ又廣き所あり、此所は初の二ヶ所よりは大に狭くして、纔に五六疊ばかりと見ゆ又
其向ふの石壁に小穴あり是よりぬくへ、ついに恐れて入りたるものなし、其奥はいかなる所な
りや、いまだ知る人なし、余が友喜亀先年此地に遊びて其近邊の案内知れる老人を嚮導として、
其穴に入りしに、嚮導の老人も若き頃より此穴の案内者して、數人を案内せしかども、かの二段
目の絶壁を下りし事はなく、踏りも儘ざりしに、喜亀好事の癖にて、膽勇あり、かねて文字の力も
ある人なれば、あひてすゝみて、二段目の廣き所までは入りしに、猶其奥を探らんとすゝみしに、
嚮導の老人大におそれて、松明の用意少ければ万一穴の中にて松明盡なば再び人間に歸る事
叶ふまじからや、猶この奥にはいかなるものか住居らんもはかりがたき所なれば、遂にいで給へ
とて、先に立て逃出しかば、喜亀も力なく出て歸れり、此事を記に作り、書にも圖して余に示せり、
余は遊のつもり畢數て、其地にいたり得ざりし、殘念なりき、いとめづらしき洞穴也、又美濃國郡上

アルハ、中華ヨリ來ルニマサレリ、

〔本草辨疑 一金石〕石鐘乳

日本深山所々ニ有之、今藥舖者皆和ナリ、色帶白ク中ニ小穴アリ、末尖ニシテ水精ノ如ク白ク、透明シテ重ク、長短不定、今賣家ノ者ノ末ノ尖ナル所ナク、大方折取タル跡ナリ、又一種鵞管石ト云者アリ、〈本綱ニ鐘乳ノ異名トアリ〉色白ク細ク、長一二寸、折之メ内ニ菊紋アリテ、中空ナリ、唐ヨリ來ル、

〔新編常陸國誌 六十土產一〕石鐘乳

多珂郡大久保村ノ風穴ヨリ生ズ、又同郡助川村ノ風穴ニ生ズ、俗鐘乳石ト云、採藥使記云、賢任曰、奥州岩泉ノ山坑ヨリ鐘乳石ヲ出ス、他國ヨリ出ルヨリモ形甚佳ナリ、先事按ニ、鐘乳和邦所々ニアリ、和州大峯ノ洞穴ニ產スル物佳ナリ、紀州熊野山中、又豫州佐州ヨリモ出ルナリ、赤クシテ鮎色ナルヲ好トス、白色或ハ鼠色ナルハ下品ナリ、○中略栗田維良曰、常州ニモアリト云ハ、按ニ、諏訪水穴ヨリ出スヲ云ナリ、ソノ外ニハアルコトヲ聞カズ、

〔採藥使記 中奥州〕賢任曰、奥州岩泉ノ山穴ヨリ鐘乳石ヲ出ス、他國ヨリ出ルヨリ形狀甚ダ佳ナリ、先生按ズルニ、鐘乳和邦所々アリ、和州大峯ノ洞穴ニ產スル物佳ナリ、紀州熊野山中ニモアリ、豫州ヨリモ佐州ヨリモ出ル、色赤クシテ鮎色ナルヲ好トス、白色或ハ灰白色ナルハ下品ナリ、

〔佐渡志 五物產〕石鐘乳　イシノチ

其坑ハ海府土地村ニアリ、今ハ乳ヲ穿リ盡シテ、只官禁ノミ昔ノマヽニ嚴ナリトイフ、放學ハ古世採タルモノ、タマ〳〵殘レルヲ持傳フルモノアリトゾ、

〔西遊記 五〕鐘乳穴かねちあな

備中國水田領の山中に、俗にかねち穴と稱する洞あなあり、かねちとは、鐘乳といふ事也、其洞あ

或ハ筆ノ太サヘレタ、多ク黄白ニシテ、透明ナルモ、中ニ穴通リタアリ、コレ集解ニ鵞管石ト云ナリ、又穴通ラヌモアリ、叢內穴通リタ透明ナルガ上品ナリ、コヽニ本條ニ比ベタ、孔公孼殷孼ヲ集タアリ、コノ三物皆同物ナリ、コレハ時珍ノ說ノ如ク、三分ニ割リ、末ノ一分ヲ鍾乳石トシ、中ノ一分ヲ孔公孼トシ、本トノ一分石ニツヽクル處ヲ殷孼トスルナリ、又今舶ヨリ鵞管石ト云フ渡リモノアリ、乳坑ニ多シ、コレハ二三分ノ太サヘレタ、長サ二寸或ハ一寸位ニ折レタアリ、木賊ノ如キ形ニシタ節ナク、色白キモノナリ、質口ニ黏ヲサタアリ、貝ノ如キモノナリ、コレハ海中ニ生ズルモノナリ、三本五本並ビ生ズルモ、又一本分レタ生ズルモアリ、本草原始ニ、口ノ圖ニ出タアリ、醫學入門鍾乳石條大全トモニ、詳ニ出レタアリ、コレハ本條ト異ナル物ナリ、

〔本草一家言四〕石鍾乳　鵞管石　孔公孼　殷孼　土殷孼　乳石牀　石花

倶出、本草予按鍾乳鵞管自二石獲度和產莫有之、鍾乳出大峯山燈籠岩屋、及伊豫大洲、富士人穴、美濃軍場山中、其餘諸山間有之、鵞管出伊勢丹生山中、有水銀處、二物形狀兆然、本草以爲一類、吳鍾乳有三種、又異名、皆鍾乳、色白長、鍾內有一條脈、直通于頭、形不甚大、長僅三四寸、難多得也、其次者質粗、鍾內有脊、甚長大、如牛角、長一二尺、其色潔白、似石乳牀色、是孔公孼也、其又次者附石而粗、不甚長大、是乃殷孼也、土殷孼者、又其次也、此名以精粗生處而別之、其實一物而品有高下、雖島國有鳥喙天雄側子偏側之別也、鵞管石狀如鵝翎管、又似竹管、有節色黃白、有細文、長及四五寸、本草云、潔白光潤、雖枝鳥翎管翼者、及竹乳山洞邊生小竹、以竹汁滴爲乳、如竹狀者、皆正謂此者而言也、乳石牀者、生鍾乳之牀、即粗石也、石花者、鍾乳生小、而四散如花、未盡乳狀者也、辨別如此、自無疑惑之憂耳、

〔大和本草三金玉土石〕石鍾乳

五十年前此石日本ニアル事ヲシラズ、江州ヨリ取出ス、ワヾイタ五畿內西國ニモ出ヅ、常州ニモアリト云、山ニヨリタ大小アリ、金銀銅山ノ古キ岩穴等ニモアリ、佐渡ノ石鍾乳尤良シ、今本邦ニ

（已上出神仙服餌方）石鍾乳者石精也、（出范汪方）出備中國、

〔倭名類聚抄 一金石〕鍾乳　新鈔本草云、石鍾乳出備中國英賀郡、（和名以之乃知）

〔箋注倭名類聚抄 一金石〕新抄本草、謂本草和名、原書今本玉石部上無英賀郡三字、又不載和名、醫心方並有之、蓋今本本草和名、傳寫偶脫也、當依此所引補正、按、三代實錄貞觀元年二月二日、於備中國採石鍾乳、不載所出郡名、然延喜神名式、備中國英賀郡二座、比賣坂鍾乳穴神社、井戶鍾乳穴神社、是可以證石鍾乳出於英賀郡也、又按、醫心方諸藥和名、似鈔節本草和名者、而至註藥石所出國郡、反詳於本草和名、今所傳本草和名、或是舊本耶、廣本出備中國英賀郡七字爲正文、似是、曲直瀨本鍾作鐘、伊勢廣本同、按、李時珍曰、石之津氣、鍾聚成乳、滴溜成石、故名石鍾乳、則知作鍾爲正、本草和名亦作鍾、證類本草引吳普云、鍾乳一名虛中、生山谷陰處岸下、溜汁成如乳、汁黃白色、空中相通、陶注云、通中輕薄、如鵝翎管、碎之如爪甲、中無鴈齒、光明者爲善、長挺乃有一二尺者、色黃、以苦酒洗刷則白、蘇注云、陶云、鍾乳一二尺者謬說、本草圖經云、長者六七寸、色白微紅、

〔本草綱目譯義 九石〕石鍾乳（ツラヽ、イシ、イシノツラヽ、石ノ[illegible]ド、レ、イシノチ[illegible]、石ノチヽ、土[illegible]）鍾乳石トモ云ナリ、草多ク繁タル所ニ、直ニ風穴ト云テ、洞穴アルモノナリ、コレハ必奥ヒロク、或ハ深クシテ、先分ラレズ、或ハ横ヘ廣ク通ズルモアリ、コノ洞穴ノ奥ニハ、諸國トモニ鍾乳アルモノナリ、コレハ石間ヨリ石ノ脂ノ年々滴リ、堅マリタルナリ、形ツラヽノ如ク、上エヨリ下ヘ垂レテアルアリ、又柱ノ如ク下迄トヾキテアルモアリ、形ハ色々ニナリアリ、年久キハ追々ニ上ヘヨリ乳水下リテ、甚太クナリタルモアリ、和州大峯ニハ、別シテ鍾乳生ズル穴多シ、江州ノ佐目（サメ）村ニ、風穴ト云深キ洞アリ、時々風吹出ルナリ、コノ穴ニモ生ズルナリ、コノ類諸國トモニアリ、勢州ニモアリ、又備中ノ鍾（ショウ）乳大明神ト云社ノ邊ニモ穴アリ、鍾乳石ニ色白クシテ透明ナルアリ、又透明ナラヌアリ、薄黃色ニシテ、透明ナルモ、透明ナラヌモアリ、薄赤キモアリ、藥店ニアルハ、小指ノ大サ

ズ、一名大赭石、〈同一種ナリ〉黑赭石〈異名同物〉朱石〈綱目本草〉紫朱〈綱目〉

附錄、赤石、代赭石ハ、代郡ノ產ニシテ、鐵鑛ヨリ出ルナリ、赤キ石或ハ土ハ、日本ニモ處々ニアリ、故ニ此ノ類ハ多シ、

〔紀伊續風土記　物產　一〕代赭石〈土朱〉

日高郡富安莊龜山に產す、質柔にして碎け易く下品なり、

〔佐渡志　物產　五〕赭石

金北山中ニ出ヅ、ソノ餘所々ニ產ス、

無名異

〔重修本草綱目啓蒙　石五〕無名異　通名　一名土子〈外臺秘要〉

舶來アリ、形圓ニシテ、大小䌓雜ル、大ナル者僅ニ一分許、小ナルモノハ罌子ノ細ニシテ、粟粒ノ如シ、黑褐色ニシテ、罌子ノ如ク光リアリ、中實ス、碎ケ末スレバ茶褐色、外科ニ用ユ、和產ハ遠州ニアリ、舶來ト同ジクシテ細ナリ、無名異同名多シ、南京燒ノ茶碗ノ青キ文彩ヲナス、藥ヲモ無名異ト云、又臭ヲ久シク貯タル盛ニ下ニ黑色ノ塊ヲ生ズルヲ鐵木屑ト云、此モ無名異ノ名アリ、物理小識ニ詳ナリ、石州銀山ヨリ出ス無名異ハ、和名ニシテ眞名詳ナラズ、石上ニ褐色ノ土ノ如クモノヲキタルヲ取リ、水飛シテ四方ニ貨ス、又佐州雲州豆州ヨリモ出ス、用テ血ドメトス、僞物多シ、

○無名異ノ事ハ、前ニ產業部陶工篇陶器名類條ニ在リ、

〔佐渡志　物產　五〕無名異

雜太郡中尾山羽茂郡瀧川山ニ產ス、舶來ノモノト形狀同ジカラズシテ、功能ハ却テ勝レリト云、

〔紀伊續風土記　物產　一〕無名異

海部郡加太莊友ケ島に稀に產す、陶家にゆゝ手と呼ぶ者にして下品なり、

石鍾乳

〔本草和名　上〕石鍾乳　一名公乳、一名盧石、一名夏石、一名盧中〈出雜要訣〉一名孔公孔、石鍾乳者水精也、

石筆

代赭石 赭石

通名ナリ、コレハ赤石脂ノ中ナリ、赤石脂ハ軟ニシテ嘗テ舌ニ粘スルナリ、赤石脂ニシテ堅クシ
リ舌ニ粘セヌヲ桃花石ト云ナリ、昔ヨリ別ニ渡ラズ、赤石脂ニ交リアリ、色濃ヲ赤キモ薄赤キモ
紅白交ルモアリ、和産モアルモノナリ、赤石脂ノ下品ニシテ、舌ニ粘ヌナリ、コレニ同名アリ、
〔本草一家言石四〕桃花石
按、本草似有二種、古來多以赤石脂之淡紅者充之、佐渡州金山所產石腸、其色淡紅而不甚赤、是乃桃
花石也、一種深紅者卽赤石脂也、又按仲景治痢有桃花湯、方中用赤石脂、無桃花石、也並知桃花石赤
石脂色淡者也、本草以粘舌者爲赤石脂、不粘者爲桃花石者、强分別耳、當以深紅淡紅爲辨也、
〔奇遊談二〕牛尾山石筆
山科の東牛尾山法嚴寺は、觀音の靈場にして、淸水寺の奥の院といふ、此山に黑石脂を產す、俗に
石筆といひて、懷中の筆墨にかへ用ゆ、
〔雲根志前編二石筆十二中略〕赤き石筆あり、遠江國島田より二里ばかり北千葉村にあり、江府平
賀氏考へ出して、今專らはそ〻切て、懷中の筆に用ゆ、
〔本草綱目譯義石十〕代赭石
通名ナリ、和ノ方書ニハ、多ク大。砂。石。ト書タアリ、コノ石ハ藥店ニアルハ皆舶來ナリ、コレニ二品
アリ、古渡ヘ赤黑レテ、軟ニレテ二寸計リノ大サニ堅マリアリテ、碎ケバ碎易クシテ、手ニ付ナリ、
コレ下品ナリ、新渡ハ一尺位ニ堅マリ、扁レテ至テ堅ク、タヽキワリテ用ユ、手ニ付クコトナク、外
ノ肌ニ七八分ノイボノ如キモノ付テアリ、故ニコレヲイボ出ノ代赭石ト云、マメデノ代赭石ト
モ云、コレ丁頭代赭ナリ、上品ナリ、集解浮漏丁ト云ハ、タギカタシ、又ハピヨウクギナドノ類ゝコ
トナリ、外ニ肌ノ如キモノアルコトヲ云ナリ、コノイボ出ノ方ハ、色黑赤ニシテ、破レバ堅クシテ、
薄クヘゲルナリ、切リ小口ハ鐵ノ如ク光リアルナリ、和產ハ濃州赤坂ニアリ、然ドモ未藥店ヘ出

石筆石墨是也、一種京北貴船山谷山一種、石色黒質軟、粘手稍近、眞之時可用、但勿用和石筆、多以硯石末屑僞造之也、黄石脂卽白石脂之帶黄色者是也、如青石脂未詳、俟他日講究、文雲泉

〔佐渡志物産五〕石脂　方言イシワタ

赤石脂、雑太郡相川ノ東上相川ト云トコロヨリ出ルモノ、桃花色及ビ黄白ノ石脂モ交レリ、青石脂ハ同郡姫津村水シロトイフ所ニ産ス、鶴山倉ノ佐州ヨリ出ルヲ上品トスト記セシハ、金北山中ニ産スルモノナルベシ、

〔大和本草三金玉土石〕黒石脂

別錄云、一名石墨、時珍云、此乃石脂之黒者、亦可爲墨、　篤信謂、今人用之爲筆、慣之者、文字如用墨、固作石筆ト云、　五色ノ石脂アリ、赤白ノ二種ヲ藥ニ用ユ、

〔重修本草綱目啓蒙五石〕滑石〈中略〉

集解、冷滑石ハ、今唐山ヨリ滑石中ニ雑リ來ルヲ撰ヒ出シテ、油ヲトシ或ハイシワタト云モノナリ、形狀青田石ニ似テ柔ク、淡緑色ニシテ黒キ斑點アリ、和ハ尾州勢州讃州、上州越中ノ山中ニアリ、石絨ノイシワタトハ別ナリ、

〔本草綱目譯義九石〕石髓

得タ知レズ、日本ノ内ニ空アリテ水ノアル石希ニアリ、石ヲ破リテ水流出テ、風當レバ水化シテ石トナルナリ、コノ水石髓ノ類ナリ、先年下野ノ山ニテ此石アリシナリ、其後モ又アリシナリ、コノ石ハ至テ堅シ、色茶色モ白色モアリ、又集解ニ北史ニ云々ト云ヘリ、コノコトニ似タルコト、日本ニモアリ、勢州内宮鐵鬼谷ノ谷川ノ水底ニ茶色ノ油ノ如キモノ一面ニアリ、水底ノ石ヲ取リ上レバ、油ノ如キモノ石ヲ包テアリ、コレハ流水中ニ共ニ流レテアルガ、自然ト石ニ付タルナリ、コノ物北史ノ文ニヨク似タルコトナリ、又讃州阿野郡川東村ノ奥村ト云處ニ大ナル石髓アリ、

石脂ハ五色ヲ分テモ、其中赤白ヲ賞シ用ユ、其中ハタモ赤ヲ尚更ヨク用ルナリ、赤石脂舶來ヨリモ渡ル品多シ、古渡ハ上品ナリ、今渡ルハ純色ノ物ノ如キモノナリ、白キ處モ交リアリ、コレハ僞物ナルベシ、石脂ハ金鑛石ノ中或ハ土ノ中ニ生ズ、國ニヨリ異ナリ、鹿角爪ダス、滑石ノ如ク光アルヲ上品トス、今渡ルハ光リナク、赤白交リアリ、コレハ土ト見ルナリ、コノ邊ノ土、防州ニアルナリ、赤石脂ハ和產色々アリ、佐渡ヘ出ル上品ナリ、方言ニ石。ワ。タ。ト云、コレハ石ノ間ヨリ乳ノ出ル如ク吹出リ、後堅マルナリ、色純花色ナルモ、又少シヨモモアリ、上品ナレドモ、未藥店ニ出ヌナリ、又出羽秋田ヨリ出ルアリ、コレハ蠟ノ如クナリタアリ、色ウスアカ、藥業ニレタ光リアリ、コレモ佐渡ヨリモ上品ナリ、大坂藥店出ヨナリ、藥用ニハコレヲ用タヨキナリ、又伊豆ヨリ出アリ、コレハ佐渡ノ產ハ劣リ、色少シ劣レ、又越後ヨリモコノ類ノ出ルナリ、皆上品ナレドモ、藥店ヘ出ヌナリ、又京ノ愛宕腹脇ニアルハ、腐石ノ如ク軟ナリ、コレモ爪ニタスリタ光リアルヲ上品トスルナリ、コレハ佐渡秋田ノ產ノ蠟ノ如ク堅マリタナレ、白石脂ハ別ニ渡ラズ、赤石脂ノ中ニ交リアル白キナリ、コレモ秋田ヨリ出ルハ蠟ノ如クレタ白キナリ、上品ナリ、黃石脂ハ唐ヨリ渡ラズ、紅毛ノ人持來ルアリ、藥名ボウリスアルメニヤト云、〈ボウリスハ土ノ名、アルメニヤハ國ノ名ナリ、〉コレハ肥前長崎肥後宇土郡ニ和產アリ、舶來ト同形ナリ、青石脂ハ舶來ナシ、和產アレドモ下品ナリ、黑石脂ハ京ノ山ニモアリ、谷ノ細岸ノ處ノ水ノワク處ニアリ、黑ノ土ノ如シ、コノ砂交ラヌ處ヲ用ルナリ、黑クレドモ手ヲ黑クアルモノナリ、コレヲトリ石筆ニ作リタクルナリ、大和本草ニ牛尾山ノ黑土ト云ハ、コノ物ノコトナリ、

〔本草一家言〕四五色石脂。

本草載之、白石脂赤石脂黑石脂黃石脂青石脂是也、赤石脂色淡紅、質細膩、舐之有脂、粘手者眞也、佐渡銀山中產之、土人名石蠟者眞也、其白石脂銀山往々產之、假白善土而膩粘是也、黑石脂自濱所渡

サ六七寸、性堅ク屑敏害ニシテ、試金石ノゴトシ、其色一ナラズ、或ハ深黒、或ハ淺黒、又灰色褐色青石ナルモアリ、形狀異ナルモノ亦少ナカラズ、羽茂本郷西濱邊ノ田野山中雨後ニ必拾ヒ得トイフ、

石麪

〔本草綱目譯義九石〕石麪

土中ヨリ湧出タル白キ粉ナリ、温飩粉ノ如ク、白クシテ至テ細カナルモノナリ、コレヲ取堅メテ置、白石脂ノ如シ、先年肥後ノ益城郡ニ石麪ノ出タルコトアリ、コノ年肥後饑饉ナリシ故ニ、コレヲ採リ、温飩料理ニシテ食セシトナリ、其時京ヘモ上セシナリ、至テ白クシテ、味淡ク、土氣ナシ、其後北國ニモ湧出タルコトアリ、コノ年モ饑饉ニテアリシナリ、石麪ハ、日ヲ經レバ、外ノ色紫ニナルナリ、內ハ色變ゼズ、又雲州武州ニモ出タルコトアリ、皆凶年ナリ、集解ニモコノ出タル年ハ凶年ト云、和漢トモ云同例ナリ、

〔佐渡志五物產〕石麪

羽茂郡中坂山中ニ出ヅ、幾何ナラフシテ凶饉ノコトアリ、是ヨリ土人採コトナシトイヘリ、

〔紀伊續風土記物產一〕石麪（本草ノマヽ、冷水浦にてイシヽといふ、異名多し、）

名草郡大野莊冷水浦の山の土中より出づ、上品なり、

觀音石

〔大和本草三金玉土石〕觀音石

倭俗所名也、沙中ニ有之、大ナルハ稻米ヲ三四合セタルガ如シ、色赤シ、軟ナリ、味淡シ、小兒食之、綱目石麪ヲ載ス、是觀音石ノ類乎、

玄精石

〔採藥使記上奥州〕票任曰、奥州津輕ノ領內松前へ行ク道ノ山陰ニ、土人蛇ノ苔ト云石アリ、是則玄精石ナリ、取リテ官府ニ納ム、

石脂

〔本草綱目譯義九石〕五色石脂

ル如クシテ、轉タ金色ニシテ、金箔ヲ貼タル如クシテ、石ノ如ク見エズ、薄クヘゲルアリ、コレハ和産モアリ、金ウシボトモ、ヒル石トモ云ナリ、(金ワシニ黄名ナシ、閃)コレヲ小ク切リ、火上ニ置バフクレテ大ニナルナリ、コレニ又銀色アルモアリ、コレハ青礞石ニアラズ、僞物ナリ、本草原始ニ、市多以金精石充之云ナリ、和産ノ青礞石、藥店ニアリ、舶來ノ上品少ナキ故ニ、今ハ多和産ヲウルナリ、上品ハ和州ノ下(シモ)牧(マキ)村ヨリ出、コレハ舶來ノ古渡ニ同ク、藥店ノハ何レヨリ出ルカ、下品ニシテ色淡シ、新渡ノ礞石ニ同ジ(色淡新渡)又河内ノ墨地(スミヂ)ト云處ニ牛ノタイシト云石アリ、コレハ本條ノ下品ナリ、又仙臺ヨリ上品ノ礞石出ルト云ヘリ、

一名　青金剛(醫宗粹言)

〔紀伊續風土記物産一〕青礞(ムシ)石本草　那賀郡貴志莊白石谷、名草郡神宮郷鳴神山等に產す、皆下品なり、

花乳石

〔本草綱目譯義石十〕花乳石　花蘂石ト云テ、藥店ニアリ、和名アワモチ石ト云、白石ニ濃黄ノ粟ノ大サノ斑アルガ上品ナリ、コレ古渡ナリ、今ハ絕テナシ、新渡ハ斑薄黄色ナリ、コレ中品ナリ、下品ハ正白ニシテ、白キ斑アリ、コレニ息ヲ吹カクレバ、薄黄ニナルナリ、然ドモ乾バ又白クナルナリ、本草原始ニ、白中間有黄點、如花中黄蘂、因名花蘂石云ナリ、近年古渡蠟石ノ如クスケルモノヲ渡ス、下品ナリ、

〔採藥使記中奥州〕照任曰、奥州遠野ト云フ所ヨリ花蘂石ヲ出ス、白色ナル物多シ、又五色ナルモ稀ニアリ、則チ官府ニ納ム、

先生按ズルニ、近年佐州ヨリモ花蘂石、桃花石出ルト云フ、

石芝

〔本草綱目譯義石九〕石芝　タサピライシ　龍宮ノサイハイダケ　集解ニ、抱朴志ヲ引クハ、皆怪誕ナリ、石芝ト云ハ海中ノ石ニ生ズル松茸ノ如キ石ナリ、紀州、相州

アリ、其外ニモアルベレ大ナルハ二三寸、小ナルハ五六分、形圓長色々アリ、青黄白色ニシテ、粘土
ヲ堅メタル如レタヅニ付テ碎易ク、破レバ内ニ空キ微黄ノアンノ如キモノアリ、故ニマンヂユ
ウイシト云、

石中黄子

一名餅糧石輟耕録　天師食石藥爾雅　山中盛粮同上

（本草綱目啓蒙十石）石中黄子

釋名ノ注ニ、手前作水ト云、是也、禹餘糧太一餘糧トモニ、初ハ空中ニ水アルナリ、故ニ水堅マリタ
物ニナルコノ物ニナリタルガ餘糧ナリ、コノ物後ニ堅マリタル石ニナル、コレヲ石中黄ト云ナリ、
コノ本條ハ未ダ物ニナラヌ中ノ水ヲ指タ云ナリ、故ニ水ニ作ルベキナリ、

金星石　礞石

（本草綱目啓蒙十石）金星石。

通名ナリ、和産アリ、灰色ノ石ニ金色ノ細點内外ニピツシリトアリ、薄クヘゲ易ク、鱗ナドニナ
ルヤウニ大ニモヘゲルナリ、和州ノ三山邊ニハ、砂ナドノ様ニシタアリ、又灰色ニシテ、銀色ノ細
點アルアリ、コレハ銀星ト云、兩方トモニ江州田上八幡ノ邊ニアリ、本條ノ同名ヲ集解ニ混ジ
云ヘリ、礞石ニモ金星石ト云アリ、又集解ノ説ニ金線精石ト金銀星石ト同物ナルヤ否ヤト云ク
アリ、本草原始ニハ、直ニ本條ヲ金精石ニ作リタアリ、然バ同物也、

附録　金石。　和産アリ、コレハ金星石ノ下品ニシテ、星光ラズ、但黒茶色ナルナリ、又銀星石ヲ燒
テ金星石ニナルアリ、又初ヨリ金星ナルモアリ、

青礞石。　通名ナリ、舶ヨリ渡ルニ二ツアリ、古渡ヲ上品トス、然ドモ甚稀ナリ、新渡ハ下品ナリ、且
ツ偽物多シ、上品ハ石軟ニシテ、碎易ク、緑色ニシテ、黒ミアリテ、銀星多キナリ、コレヲ燒バ銀星變
ジテ金星ニナルナリ、故ニ方書ニ金青礞石ト書タアリ、又今唐ヨリ渡ルニ、金礞石ト云アリ、コレ
ハ初ヨリ金星ナリ、コレハ偽ナリ、即チ青礞ノ金星石ナリ、又金礞石ト云テ渡ル中ニ雲母ヲ重タ

太一餘糧

如○土佐州產者無香氣爲下品、玄□泉

〔紀伊續風土記物產一〕禹餘糧本草

牟婁郡山中處々より出づ、又日高郡南部莊山田村の產上品なり、又古は海部郡加太莊加太浦の海邊に下品の者を多く產す、今は稀なり、

〔本草綱目譯義石十〕太一餘糧

禹餘糧ノ一種ナリ、舶來ナシ、和產ハ所々ニアリ、黃土ノハゲ山ニアリ、コレモ形狀ハ種々アリ、大小モ定ラズ、□（國字）□ヲノ大サノモ桃ヤ栗ノ大サノモアリ、禹餘糧ニヨク似タリ、外ノ皮ニ石付テアリ、色ハ黃黑色又ハ茶色ノ変ルモ黑ミ変ルモアリ、肌ハ至極粗ニシテ、小石ヤ砂ヤ付テアリ、禹餘糧ハ肌ノ細カナルモノナリ、太一餘糧ノ外ニ、小石付テ肌粗シ、集解ニ外多粉經碎石ト云、コノコトナリ、コノ殼ハ甚シ、多鐵色ノ如シ、コノ外ニ付テアル石ハ、久ク貯置バ自然ト落チ易キモノナリ、コノ中ハ空ナリ、空ノ處ハ肌細カニシテ栗ノ如キ色ナリ、空中ニ粉アリ、茶色ニシテ少シ黑ミアリ、又黃ヲ帶タルモアリ、コノ全キ時ニフルレバ、中ノ粉殼ニ當リ、ゴロ〳〵トナルナリ、コノ全キ一方ニ小穴ヲアケ、粉ヲ出シ、水滴ニ作、又大ナルハ置花生ナドニ用、又形ノ扁キモアリ、コメ破レタル殼ノ自然ニテ砂ニモナルナリ、又大ニシテ臼ノ大サノハ榜ニモナルナリ、故ニコレヲタル石ト云方言アリ、又イワツボ、ツニノツブテ　フタロイシ　ヨロイシ同州　ナド、コノ大ナルヲ云ナリ、凡テ禹餘糧、太一餘糧トモニ、中ノ粉ハ初ハ水ニシテ後、粉ニナルナリ、又後ニハ堅マリテ石ニナル、桃栗ノ大サニシテ、中ニ石アルアリ、コレヲフレバ鳴ル故鈴石スヾイシト云ナリ、太一餘糧ハ泉州、紀州、讃州、和州、城州ナドニアリ、其中和州生駒山ニ多シ、集解ニ、石中黃、卵石黃ノ名アリ、卵石黃ハ和名マンヂユウ石、土ダンゴ、　ダンゴ石　ダンゴイワ土州　ト云アリ、コレハ京ニハナシ奧州津輕、豐前中津、安房引上部、防州、伯州、與州、甲州、能州ナドニ

ルナリ、又鹿島ト云處ハタモノテト云モノアリ、コレモ石ニ少シ雄黄ノ付テアルナリ、又紀州長野岸庄ト云處ノ山ノ白キ石ニ、血ノ付タル如ク赤キ雄黄ツキタルアリ、タモ石ト云、又奥州仙臺三輪山ニ石ニツキタル雄黄アリ、又仙臺文字川ノ岸ニ雄黄多ク出テ堅マリタルアリテ川底ヨリホレバ雞冠雄黄多アルト云、何レモ皆藥店ヱハ未出ヌナリ、舶來ノ雄黄ニ古渡新渡アリ、古渡ハ恭ノ説ニ雞冠雄黄ト云ナリ、和名雞冠石ト云ナリ、コレハ濃紅ニシテ黑ミアリテ光リアリ、臭氣黑色ナシ、コレ眞物ナリ、大ナルハ六七寸、或ハ三寸、一寸位ノ大サナリ、コレヲ人形出ノ雄黄ト云、自然ト人形ナルモアリ、又作リテ人形ニスルモアリ、新渡ハ黄色ニシテ臭氣アリ、中ニ赤ミ交ルナリ、新渡中ニテ上品トスルナリ、コレモ臭氣アリ、コレハ總テ臭黄ト云ナリ、下品ニシテ藥ニハ無用ナリ、然ドモ新渡故ニ多キナリ、多キ中ニテコレハ一斤中ニ上品二兩モアルナリ、コレヲワリ出シト云又雞冠石トモ云ウルナリ、然ドモ赤ミ淡シテ黑ミナシ、又今渡ルニ墨アルアリ、コレハ薫黄ト云ナリ、下品ナリ、

雌黄

唐ヨリ昔渡ル、藥店ニアリ、今ハ渡ラズ、雄黄塵ノ目ノ硫黄ノ如キ形ナリ、眞黄ニシテ金色ノ如ク光リアリ、タダク易キモノナリ、大ナルハ三寸モアリ、コレニ赤ミアルナリ、コレ弘景ノ説ノ仇池黄ト云アリ、上品ナリ、赤ミナキハ多シ、崑崙黄ト云ナリ、次品ナリ、又黑ミヲ帶ルアリ、下品ナリ、數説ニ、如鐵色不可用ト云ナリ、續日本紀文武天皇二年、下野國獻雌黄ト云ヘリ、然ドモ今ハ下野ノ國ヨリ出ズ、藥店ニハ雌黄ヲ石雌黄ト云、コレハ畫具ニスル雌黄ト云モノニ分ツタメナリ、畫ノ具ニスル雌黄ト云ハ和名ナリ、漢名ハ藤黄ト云、蔓草類ニアリ、コレハ蕃國ノ藤類ノ脂ナリ、コレハ赤黄色ニシテ堅マリタルモノナリ、水ニ入レトキテ黄色ノ彩色ヲスルナリ、コレハ和産ナシ、蕃國ヨリ來ルナリ、雌黄ヲ和方書ニハ金液ト書テアリ、

蛇含石

ウトッタアッマリ生ズルモアリ、四角ノ形ナリ、ジヤカト云フ、伊豆ノ方言ナリ、山城ニテハ蛙殼ノ大井川ニアリ、石ノ中ニ空虛ナル處アリテ、其中ニ大小雜ナアルナリ、銗石ナリ、ヤケバモヘルナリ、他國ノ產ハ石ノ内ニハナシ、伊豆ト山シロ計也、

一名金山ダ土(備前)　金ダ土(異名)

〔重修本草綱目啓蒙 石六〕金牙石 略○中

凡、金牙石、自然銅、銗石ノ三物、ミナ通ジテキリコズナト呼ブ、形モ相同クシテ、混ジヤスシ、火ニテ燒テ爆シ飛ブモノハ金牙石ナリ、飛ズ燃ザルハ自然銅也、燃テ灰トナルモノハ銗石ナリ、

〔本草綱目譯義 石十〕蛇黃

本草ニテハ蛇黃ト蛇含石トヲ二ツニ分タアリ、コレハ非ナリ、本草彙言、蛇黃一名蛇含石云云、コノ說是ナリ、今蛇含石舶來アリ、形丸ク扁シ、大ナルハ一寸、小ナルハ五六分、重モキモノナリ、黃銅(カシワイモ)ノムカゴノ如シ、茶色ニシテ黑ミアリ、外ニイボ多シ、至テ堅キモノナリ、ワレバ中白ニシテ光リアリテ、銅ノ如シ、又外色ハ闇シテ内金色ニシテノギスヂアルアリ、コレハ自然銅ナリ、唐ヨリモコレヲ混ジタ皆蛇含石ト云テ渡スナリ、破リテ分別スベシ、

〔佐渡志 五物產〕蛇含石

所々ニアリ、銗石ト混ジ、又自然銅ト形相似テ辨別シガタシ、羽茂郡山田村瞎臺山ニ出ルモノ、眞ノ蛇含石ナルベシ、

金牙石
銀牙石
銅牙石

〔本草和名 玉石五〕金牙　一名白虎脫齒(出丹口訣)銅牙、(陶景注云、又有銅牙)金牙一名黃石牙(出小品方)出但馬上野國、

〔多識編 石一〕金牙石、古加禰乃米伊志、

〔本草綱目譯義 石十〕金牙石

通名ナリ、又方金牙トモ通名ナリ、方金牙ノ名ハ自然銅ノ集解ニ出、タナザコ(伊豆)ドウキン(但馬)

ノ覺書ナドハ、能ク見ユル、大ナルハ一寸四分又ハ二寸ホドモアリ、

〔倭名類聚抄一[illegible]石〕陽起石　本草云、陽起石、一名羊起石、

〔箋注倭名類聚抄一山石〕所引中品文、下總本下有雲母根也四字、與原書合、按本草云、陽起石主陰痿不起補不足、生齊山山々谷及瑯琊或雲山陽起山、陶注云、此所出即與雲母同、而甚似雲母、但厚實耳、今用乃出益州、與礬石同處、色小黄黒、即礬石、雲母根未知何者、蘇注云、此石以白色肌理似殷孽、仍挾帶雲母滋潤者爲良、李時珍曰、似能會名、按陽羊同音假借、

〔本草綱目啓蒙石〕陽起石

通名ナリ、藥店ニウルハ皆舶來ナリ、和産ハ藥店ニウラズ、コノ石ハ白クシテ光リアルモノ上品ナリ、青キト黄ナルトハ下品ナリ、凡ニ細ニ黄針文アリテ、甚柔ナルモノナリ、砕易シテ少シ强ク、ナワレバ糸ノ如ク砕ルモノナリ、本草原始ニ、雲頭毛者、眞云云ノギスヂノアルコトヲ云ナリ、コノ形ハ色々アリ、先ブサキ尖リ、牙形ニシテ一ツ分レテアルガ上品ナリ、集解ニ如狼牙者上ト云コレナリ、コレハ舶來ニモアリ、又數多ク集リ大ナルアリ、集解ニ鍾乳茸角ト云コレナリ、下品ナリ、又雲頭ト云ハ、丸シテ多集リ生ジテ尖リナキナリ、コレモ舶來ノ中ニ希ニアリ、集解ニハ、陽起石ヲ雲母ノ根ト云ヘドモ、雲母ノ生ズル山ニハ陽起石ハナシ、雲母ハ白キ石ヨリ生ズ、其雲母ノ生ジテアル石、陽起石ニ似タリ、故ニ集解ニ誤ルト見ルナリ、舶來ノ自然銅ノ中ニ陽起石ノ付テアルアリ、コレヲ見レバ銅山ニ生ズルモノト見ルナリ、近年ハ江州石部、濃州赤坂ヨリ上品陽起石出ル、舶來ニ同ジ、

一名五精金〈四[illegible]集〉五精陸華〈石藥爾雅〉五色芙蓉〈同〉

〔新編常陸國誌六十一土産〕陽起石〈和名波々久岐、俗名天狗爪、又龍爪、又龍牙、〉多珂郡笠石新田ヨリ出、同郡矢指村飛龍山ノ岩中ヨリモ出、他ノ村ヨリモ間々出ルコトナリ、俗

朴消
芒消

消石、一名芒消、又取朴消、以煖水淋汁煉之、減半投於盆中、經宿而有細芒生、乃芒消也、今醫方家所用、但以未煉成塊微青色者、爲朴消、煉成盆中、上有芒者爲芒消、亦謂之盆消、其芒消底澄凝者爲消石、被消石芒消、本草所說多溷淆、要之有水火二消、火消生古屋內地板下燥土上、狀如俗呼霜柱者、今俗呼焰消是也、水消生鹵鹽之地、如末鹽狀、今俗呼爲芒消是也、水火二消煎煉皆爲芒硝、其未煎煉者並名朴消、又名消石朴也、要方以朴消爲芒消之大者、以消石爲芒硝之根盤者、未知所本、

〔重修本草綱目啓蒙六石〕消石　焰消通名　シロエンセウ　シラエンセウ　鹽石和方書　一名河東野石藥爾雅　化金石同上

焰消ハ多年古屋內地板下燥ケル地上ニ生ズ、新宅ニハ生ゼズ、色白クシテ霜バシラノ立タルガ如シ、或ハ綿ニ結レテ方塊ヲ成スモアリ、火ヲ點ズレバ必燃ヘテ下ニ移ル、又日ノヨクアタル場地上ニモ生ズ、此白霜ヲ取リ煎煉スルコト朴消ノ如クシテ、馬牙消芒消ヲ凝結ス、コレヲシラエンセウト云、味辛甘ヲ良トス、末トナシ硫黃杉炭ニ和シテ、火藥トスルヲ、クロエンセウト云、舶來ノ消石上品ナリ、和產ハ加州、越中、飛州ヲ上品トス、筑前、豐後、作州、泉州、濃州、勢州之ニ次グ、近海ノ地ニ生ズルモノハ鹽氣アリ、下品トス、

正誤、假。消。石。ハ贋セノ消石ナリ、

〔毛吹草三〕飛驒　鹽硝　越中　鹽硝　美作　鹽硝　安藝　鹽硝　豐後　鹽硝

〔愛媛面影四浮穴郡〕硝石　野尻村多焰硝を出す、製して諸國に商ふ、俗に久万焰硝と名く、

〔本草和名三玉石〕朴。消。　一名消石朴　一名東野出雜要訣　出若狹備中國、○中略

芒。消。　石脾　石肺陶景注云、不知此二物何事　一名單青出雜要訣　出太宰、

〔倭名類聚抄一石〕朴消　要方云、朴消者芒消之大者也、

〔重修本草綱目啓蒙六石〕朴消　一名大消本草　東野石藥爾雅　海末　單丹共二同上　女靈山同

滑石

（本草和名 三 玉石）滑石　一名液石、一名脆石、一名番石、〈出仁諝〉冷石、〈出疏注〉一名汋石、一名夜共者、一名民月石、一名夜石、一名暇娵冷石、一名切簡、〈中鹿訣、凡此石一切作鐵立燥、故名之、巳上七名出雜要訣〉出紀伊國、

（倭名類聚抄 一 石）滑石　本草云、滑石、一名脆石、蘇敬云、極軟滑、故以名之、

（箋注倭名類聚抄 一 山石）千金翼方、證類本草上品、並作一名脫石、本草和名、是字牢缺、唯存肉傍、按蘇軟滑之義、則作脆似是、中山經云、章山皐水出焉、其中多脆石、或是也、按證類本草引蘇敬注云、此石所在皆有、嶺南始安出者、白如凝脂、極軟滑、此注所引即是、然蘇意謂、滑石雖所在有之、出於嶺南始安者極軟滑也、非謂滑石名義、源君引之、增故以名之四字、非是、李時珍曰、今人亦以刻圖書、不甚堅牢、則知今俗呼蠟石者是也、下總本注十字爲正文、廣本同、按千金翼方本草部各條、與新修本草證類本草正文全同、其次叙亦與新修本草、本草和名無異、則知是亦唐本草之正文、故本書引本草正文、而今逸者亦取援之、

（本草綱目譯義 九 石）滑石

逸名ナリ、舶來ニ古渡新渡二品アリ、其中石軟ニシテ光リ多ク、滑ニ見ルヲ上品トスルナリ、色モ品數アレドモ、白キヲ上品トス、青キヲ黃ヲ帶ルヲ下品トスルナリ、本草原始ニ、形大小不同、色白光潤者良、黃色者劣ト云々、本經逢原ニ、色青赤者有毒ト云々、舶來ニ僞物アリ、形ヨク似テモ土ノ味アルハ僞物ナリ、味甘ヲ眞物トスルナリ、和產アリ、備前ノ八木山ノ西南ノ角ニ白キ石アリ、印材ニモ用ユ、コレヲ誤テヤケ岩ト云、コノ石ハ舶來ノ滑石ヨリハ堅ケレドモ、ロウ石ヨリハ軟カニシテ、光リ多アリ、コレ滑石ナリ、先醒齋筆記ニ、滑石堅白者良ト云々、然トキハ堅キモ上品ナリ、又肥後或ハ越前大虫ナドヨリ出ル滑石ハ、白色ニシテ、暖カニシテ、舶來ト同ジ、又一種石ワタト云モノアリ、ヨク滑石ニ似タリ、ロウ石ノ如クシテ、ロウ石ヨリ軟ニシテ、薄青黑シテ、黑斑アルモ、黑黃斑アルモアリ、コレヲ粉ニシテハ潔白ナリ、コレヲ血止メ、或ハ油ヲトシニ用ユ、コレハ舶

様子を見又是を嘗て味を試るに更に常の石に異なる事なし、此石の有所硫黄臺と見ゆる、此山の温泉湧出る時殺生石ある場所に行逢ふ時ハ、禽獸に至迄忽死と云り、予彼殺生石を打割て持歸し、二ツ三ツ差上る、那須野の原七里四方有と云、昔ハ廻り百貳拾三里有と村老の云傳ふと云、おの十里ハ今の壹里計に當れハ、爾云たるべし、

〔採藥使記中〕下野州那須野ノ殺生石、其大サ牛ノ如ク、二種アリ、一種ハ其色深青シ、一種ハ白クシテ黑赤ノ斑アリ、其ガ窟アリ蝮蛇ノ類コレニ觸ルレバ乍チ死ス、又自蛇ノ類、年ヲ經タルモノ觸テ死セズト云フ、是レ毒石ノ類ニシテ、眞ノ毒石ニアラズ、又生按ズルニ、陸奥下野ノ間ニ那川アリ、是ヨリ南ヲ那須野ト云フ、向ニ三ツノ高山アリ、茶臼嶽、朝日嶽、毘沙門嶽ト云フ、此所多ク硫黄ヲ生ズ、其土青黄色ニシテ火多ク、アリ、タ、或ニ火煙ヲ出ス故ニ鳥石皆黄ル、少シ山ニ登レバ殺生石アリ、今モ蟲ヲ捉ヘタ石面ニ當クバ乍チ死スト云フ、

〔會津風土記 十九〕一下野國那須野にて、毒石を解散せし僧玄翁を妙幢師といふ、法を峨山の碩公に得ルと云今、石を割斷を玄翁といふ事、彼僧殺生石を破りし事よりいふ、

實按此説關東に限りて玄翁といふ、上方邊にてハ鐵入といふ、是此器を造り始し人の名をいふと見へたり、關東にて石ののみの名を知らず、僧杯に關し時、殺生石の話を思ひ出し、關東に石を割道具ゆへ、玄翁と名付しと見へたり、殺生石の事、玉藻前の靈といふ事、正史實錄に無之事也、石ハ硫黄石に相違なきよし、破れも不致草村の中に現在也、

〔松屋筆記 百 四〕殺生石靈神

玄翁和尚、那須野の殺生石を碎し事ハ、玉藻草子、鎌倉志などに見ゆ、謠曲にも殺生石あり、こハ當國の總寧寺和尚が、當山の靈寶を對治せしによれる附會にや、總寧和尚の事ハ、大光明藏一零十五下に見ゆ、

握雪礬石

和產知レズ、蘇恭ノ說デハ、石腦ノコトナリ、コレハ時珍ノ說ヨク分チアリ、時珍說デハ、石間ニ生ズル油ナリ、コレハ和產知レズ、然ドモコレハ毒ナキモノト云、故ニ時珍モ握雪礬石ノ誤ナラント疑タアリ、

〔紀伊續風土記物產一〕蜘蛛血石

那賀郡貴志莊尾寺村の白石谷は、其地南面にして、數十の大白石、溪澗を夾みて、數百歩の際に連綴す、中にも陰陽石、冠石、獅子口石等の土名あるもの至りて大なり、冬月石上に脂液熏蒸して、鐵に丹青をなすが如し、俗に蜘蛛血石といふ、〔相傳ふ、昔此山に大蜘蛛ありて、往來の人を惱ます、社明貴志ノ正平といふ者、此を退治す、蜘蛛の骨、石となるとは不實說なり、〕每に、早晨石上に赤き脂液湧出す、又鐵色及青白色も変れり、赤液は日を見れバ卽乾く、鐵色又青白色は日を經て黑褐を變る者なり、此液四時あれども、冬月殊に多し、採りて金瘡醫家に傳くれバ、極めて効あり、土人いふ、山神これを惜み、妄に採れバ災を下すとて、其液を採るものハ、神酒を備へて採る、按するに、此石液ハ、卽本草綱目に載せたる握雪礬石なり、時珍曰、謹按、丹房鑑源云、握雪礬石、出曲蟮澤、極寒時有霜生于石上、可采一分、結汞十兩、又按、衛嶠神書云、石液卽丹礬之脂液也、此石出襄陽曲蟮澤中、或在山、或在水、色白而粗燥、至冬月、有脂液出其上、且則見日而伏、當于日未出時、以銅刀刮置器內、火煅通赤、取出搗汁爲丸、其液沾處、便如鐵色、以液一錢、制水銀四兩、塗中火之立乾、但此液亦不多得、乃神理所惜、采時須用白雞清酒祭之、此石華山高山皆出、而有脂液者、惟此曲蟮又實越衆、亦言、丹山礬十兩、可乾汞十兩、此乃入格物之精、發天地之秘也、據三書所引、則握雪礬石、乃石之液、非土中石腦也、蘇恭所說、自是石腦、其說與別錄及陶弘景所註石腦相合、不當復注于此、又曰、氣味甘溫無毒、治大風瘡とあり、又古說に、此液赤色なるを以て、雄黃に充つるハ誤なり、

〔本朝奇跡談中〕下野國　同國那須野の殺生石、那須野が嶽の麓に在、此所湯本と云、彼殺生石を打割

〔本草綱目譯義石十〕礜石

通名ナリ、和産知レズ、今ハ唐ヨリモ渡ラズ、昔ハ渡リシナリ、京ニモ若水ノ時吟味セラレシガ、一塊殘リタアリ、形細砂ヲツクネタル如クシテ、肌理粗ニシテ、色白シテ、少シ鼠ヲ帶ルナリ、コレハ毒石故ニ、藥店ニ賣買ハ法度ナリ、越後ニ鼠コロシト云石アリ、コレモ毒石ト云コトハ、土人知リタアリ、今ハ埋メテ石ハ見ヘズ、故ニ礜石ヤラ何ヤラ知ズ、礜石ハ砒石ヨリハ毒薄シ、故ニ方藥ニモ用、尤モ砒石モ藥ニ用ルコトモアレドモ、コレハ希ナルコト也、日本諸國ニ毒石ト云傳ルモノ處々ニアリ、然ドモ毒物故ニ眞僞ヲ試ムルコトナラズ、故ニ何ヤラ知レズ、

一名　定風石（綱性要略大全）　異石（同）　白虎（石綱譜類）　白龍（同）　秋石（同名アリ、人ノ部ノ和名ハ、小便タリニテ作リシナリ、）

〔重修本草綱目啓蒙石六〕礜石　一名異石（綱性要略大全）　定風石（同上）　白虎（石綱譜類）　白龍（同上）　秋石（同上）

（同名アリ）立志石（山西通志）

舶渡ナシ、和産モ未ダ詳ナラズ、越後ニ鼠コロシト云石アリ、是礜石ナルヤ、未ダ詳ナラズ、和ニ砒石、或ハ礜石ト呼ブモノ、長州長登、石州銀山ヨリ出ヅ、自然生ニハアラズ、銅礦ヲフキ分ル時、ソノ石ノ毒氣流レ出テ凝結シタルモノ也、初メ石ヲヤク時、上ニ濕薦ヲ覆フ、火盛ナルニ及テ、其コモ燒ケテ黑灰トナル、コレヲスパイト云、其灰中ニ此塊アリ、色赤シテ甚臭氣アリ、冷ル時ハ變ジテ數色トナル、コレヲ鼠コロシ、又ハイコロシトモ云、外科ニ多ク此ヲ用ユ、然ドモ眞ノ砒石ニ非ズ、赤礜石ニ非ズ、是紅砒ナリ、天工開物ニ、紅砒則分金爐內、銀銅腦氣有閃成者ト云、ソノスパイヲ河水中ニ投レバ、魚蟲盡ク死ス、其毒知ベシ、礜石ハ砒石ヨリハ毒薄シト云、然ルニ此ノ如キ毒物ヲ俗ニ礜石ト稱シ、服藥トスル者、不仁ノ甚シキナリ、（中略）按ニ、寛文年間、嚴命アリテ、礜石ノ舶來ヲ禁ズ、今絕テ有ルコトナシ、故ニ外科者流、紅砒ヲ以テ礜石ニ代フ、

せず、

右に圖せるが如く、土にて築上げ内に薪を入、又四方にも薪を積み、又其内に青松葉を敷き、其異中へクサリを入れ、上に古き薦席を幾重も被せ覆ひ、其上を泥にて塗り、拗烟穴より火を入、また烟穴をも土にて塗り塞ぎ、むし燒にする也、かくの如くすれば、クサリの中なる金かたまりて、砒霜上へ登る也、拗幾日も燒盡して、後火の消るを篤と窺ひて、夫より十五六日も過てのち、上の土を鍬にて堀發し見るに、むしろの裏に貼て五六寸ばかりある石の如き物あり、則砒霜なり、至りて火の氣强し當りたる所ハ赤く、雞冠雄黄の色の濃が如し、是をシヤチといふ、（信州玉山の砒に同じ）又火のぬるき所ハ色黄也、（雌黄の如し）の處ハ白きあり、白きを白灰毒と云、毒至てつよしと云傳ふ、（所謂砒霜者千色）（是色、略雌黄に似て白色、者、鳥耳、皮黄に同じ、）又灰色の物ハ土石を夾て下品なり、（所謂細辛と是なり、土竈の下に落る物、鉄様、）拗釜を堀發すときハ、脇下鼻下手先などに米茶を摺りて堀る事なり、是ハ毒に中らざる用心なり、然れども初て堀る者ハ、少しづゝ毒に中る、毒にあたれバ腹脹て食す事能はず、手先脇の下額などへ瘡疱を發し、毎々中れバ後々ハ中らず、然れども毒人を害するほどの物故、山稼の者さへ是を懼るゝことかくの如し、況や常の人ハ猶更つゝしみ懼るべき事也、（略）○中

砒霜（和名あししのいし）　灰毒（フサリを燒製する故灰毒と云、又色の黒たる故、）

灰石（鐵上に同じ形石の如し）　蠅毒（蠅の多き所にて飯にふりかけ置く、蠅其上に來りて死す、是をとりもちにてとるに同じ、）

鼠殺（是は鼠に毒する故也、鋼目にも鼠共に有、天工開物に田中の黄鼠の害を除くと云と同じ、）

シヤチ（赤色の者を云、上品なり、）　白灰毒（白光にして文理あるもの）　ヒソウセキ（總名也）

此石金山にて百匁を一斤といふ、價百文也、又萩の城下にて小賣する者四匁を一兩と云、價十六銅也、是ハ所々にて蠅をとり、又ハ鼠をとる、又ハ魚を取るものは水に流し、鳥を取ものは食に合す、是を以市肆に鬻ぐあり、利を嗜ものハ不仁なるかな、人若是をしらずして其魚鳥を食せバ、何

入藥云云、コレハ一說ナリ、然ドモコノ紅者ト云ハ、紅砒ノコトヲ云ナルベシ、紅砒ト云ハ別物ナリ、

今藥店ニ礜。石。ト云モノモ、砒石ト云モノモアリ、コレハ皆長州、石州ナドノ、銀山、銅山ヨリ出ルモノナリ、眞ノ礜石、砒石ニハアラズ、コレハ銀礦、銅礦ヲ吹分ル時、鑛ノ毒氣集リタルナリ、凡テ銅鉄等ヲ吹分ル上ニ覆タルコモヲ重テ置クナリ、火盛ニナレバ、コモ燒テ後灰ニナル也、コノ灰ノ中ニ今礜石砒石ト云モノ、トロリト流堅マリテアリ、コノ火ノ烟ハ甚毒アリテ、臭氣アルモノナリ、コノ烟ノカヽリタル草木ハ皆枯レルナリ、又人ノ咽ニ入レバ、叙ムセンデ咽腫レルナリ、至テ悪臭アル烟ナリ、コノ灰ニ集リアルモノニ色々アリ、白キモ赤キモ黒ミアルモアリ、コレヲ皆鼠。コ。ロ。シ。トモ、鼬。コ。ロ。シ。トモ云、コレハ漢名紅。砒。ト云ナリ、天工開物紅砒則分金爐内、銀銅脳氣有閃成者云々、コレナリ、今コノ鼠コロシヲ礜石ト云テ、徽齋秘錄ノ生々乳ナドニ用ユ、毒ハ甚アルモノナリ、又コノ鼠コロシノ中ニテ、上品ニシテ肌理美ニシテ色赤黃ナルヲ、眞ノ舶來ノ砒石ト云儀ルナリ、鼠コロシモ色々アリ、肌粗ク石ノ如ク見苦キモアリ、輕キモアリ、ノギスデアルモアリ、コレ等ハ皆礜石ト云テ、外治ニ多用ルナリ、コノ鼠コロシノ中ニ黒キ灰アリ、コレハ藁ノ灰ノ交リタルナリ、コノ藁ノ灰ヲ銅山ノス。バ。イ。ト云、甚毒アリ、鼠コロシニ用ユ、コレヲ川ヘ流セバ川ノ魚虫皆死スト云、

高野山ニ玉川ト云テ水アリ、毒水ト云テ弘法ノ歌モアリ、コノ水源ニハ毒石アル故ナルベシ、然ドモ未ダ源ヲ尋ズ、又攝州有馬ノ温泉ノ邊ニ、鳥ノ地獄ト云テ、少シ凹ニナリテ白砂タマリタル處アリ、コノ處ニ鳥入レバ忽死スト云、コノ砂ヲ取リ田虫ニ付テヨク腐リテ治スルナリ、

砒石ヲ燒テ鐘乳石ノ如クシテ、白クナリタルヲ砒霜ト云、コノ燒法ハ修治ニモ出テアリ、然ドモ天工開物ニ、本草ノ修治ハ甚粗ニシテ益ナシト云テ、委ク法ヲ說テ圖モ出シテアリ、

古事類苑

金石部五

玉石下

（大和本草金玉土石）砒石

中夏ノ信州ヨリ出ル故信石トモ云、信ノ字ヲ分ツテ人言ト云、燒タルヲ砒霜ト云、大熱大毒アリ、人服スレバ一錢許ニテ死ス、鼠雀食スレバ少許ニテ死ス、昔ハ日本ヘワタラズ、近年唐船ニ持來ル、那須野ノ殺生石ハ砒石ナル歟、攝州有馬ノ温泉ニ近キ山中ニ毒水アリ、鳥此水ヲ飲メバ死スト云、土人稱之鳥之地獄、越後ノ妙香山ニ有、地獄鳥其水ヲノメバ皆死ス、恐ハ砒石ノ毒アルカ、越後ノ鵜川ノ邊ニ石アリ、鼠色黒斑又ハ黄斑ノ斑、此石ノマジレル飯ヲ食ヘバ立ドコロニ死ス、故ニ名ブクタ鼠コロシト云、又鼠コロシトモ云、高野山奥ノ院ニユク道ニ、玉川ト云小流アリ、此水毒アリト云、其水上ニ砒石アルカ、弘法ノ歌ニ、ワスレテモ汲ヤシツラン旅人ノ高野ノオクノ玉川ノ水、此水毒アルヲ知ラレシナルベシ、本草ニ又礜石ヲ載ス、是亦砒石、類有毒石ニ所記亦礜石ノ毒ナル歟、

（本草綱目啓蒙金石）砒石

今砒霜石ト云ナリ、生ハ砒石ト云、コレヲ燒タルハ砒霜ト云、砒霜ニスル石ト云コトニテ、砒霜石ト云ナリ、和產ナレ、舶來ナレ、コレハ生ノ時ハ色黄色、故ニ俗稱ニ砒黄ノ名アリ、其中赤キ多キヲ上品トス、コレハ土中ニ生ジタ石ニモ土ニモ似タルモノナリ、故ニ俗稱ニ、頭石非石、頭土非土ト云云、天工開物ニハ似土而堅似石而碎ト云、又本邦建原ニ、色白有黄暈者名金脚砒、色紅者最劣不堪

出羽由利郡、能登珠洲郡ヨリ出候ト、此度被下候ト合テ十ニ罷成候、南部ニ居候親類ドモヨリモ、南部ノ物ヲ可遣候ト申約候、此物俗間ニ申ス神軍ノ矢根ニテ候、極テ古キ物ニテ候、即書經ニ候砮、孔子家語、國語ナドニハ石砮ニテ肅愼ノ物ニ候、既ニ國史ニモ肅愼國ノ者佐渡ニ入犯シ候事モ候、蝦夷地ヨリ入犯ス事モ候、夫ニ壺碑ニ靺鞨國ヘ道程モ見エ候、マカツハ古肅愼ノ地ニテ候、天平ノ比迄モ本邦ヨリノ往來ノ通路タシカニアリタルト見エ候、太古ノ時ニ彼國ノ者共入犯シ候ハ云ニ及バズ、東奥常陸、又ハ越後等ノ地ニ候、其軍有之候時ニカチ得候テ、カノ軍役ヲホリ埋メ、又ハ塚ナドニシ候ガ、急雨ノ時ニ、ハジキ出テレ候ヲ、國史ニハ降候ト心得候テ、記シ置レ候ト見エ候、最初ニモ西南地方ニナキ物ニ候ヲ以テ、彌以テ肅愼ノ楛矢石砮孔子ノ御覽及バレ候モノト存候ヘバ、珍重ノ物ニ候、右某所藏ノ内、十ノ内、貴様ヨリ被下候ホド、シホラシキハ無之候、鹿島ヨリ來候ハ事ノ外ニ珍敷候、青石ニテ透トホリ候ホド麗シク候、所謂青砮ト存候、南部ニハカリマタわたくりも、ト申候、親類共モカハリ候形製ノ物ヲト尋テ候由申來候、能登ヨリ來候ハ、太平様ニテ黒キモノニ候、細工ワロキモノニ候、（白石與佐久間洞巖書、按ニ洞巖ハ仙臺ノ儒者ナリ、）

〔見聞漫錄〕石奴石

羽州佐州の海濱にて拾ひ得る矢根石にて、硝子および今里茶碗彫むは、阿蘭陀のちやまんの類と見ゆ、いまの人ぎやまんと云は誤なり、

〔佐渡志五物産〕石鏃　方言矢ノ根石

鏃形ノ石ナリ、其形一ナラズ、或ハ鑿股、或ハ尖、或ハ平根等ノ品々、ミナ瑪瑙ノ類ニ似タリ、五色アリ、白キ者最透明ナリ、又灰色ニシテ光澤ナキモノアリ、上品ナルモノ少ク、中品下品ノモノ多シ、俗說ニ、每年二月十（〇一本作十九、）日、空中ヨリ降下ルモノニテ、神軍ナリト云テ其日ハ山ニ入ラズ、十一（〇一本作二、）一日ノ朝ヨリコレヲ拾得ルトイフ、

所ノモノハ、金砂山ニ產スルモノナリ、封内遙見記ニ、諸澤ニ火打石山アリ、上ルコト一里半バカリ、高山ヲ峯ノ方ヨリ次第ニ切採テ、山下ニ至ル、石切ノ者鐵槌ヲ以テ碎キ、品ノ上下ヲ撰ブ、商客錢ヲ出シテコレヲトル、殊ニヨロシキ年ハ、五百兩餘ノ金ヲ出スト云、

〔佐渡志物產五〕玉火石　方言火ウチカド

三郡所々ニアリ、一種羽茂郡西三川村山中ニ出ル、センペイ火打石、小野蘭山翁ノ考ニ、瑪瑙ノ天然薄片ナルモノトイヘリ、

〔長防產物名寄土石〕火打石

大津郡津黃村後畑ノ内、山角ニ又玉アメ色靑色

〔紀伊續風土記物產一〕玉火石本草

牟婁郡赤羽鄕の山谷、及那賀郡貴志莊北山村に產す、皆白色なり、

〔重修本草綱目啓蒙玉石〕石膏、附錄、玉火石、　火ウチイシ　カドイシ

阿州勝浦郡大田井ノ田井村ノ火打石ヨク的當ス、方言オホタイカド、京師ニテ阿波ノ火打石ト云、白石微靑ナリ、纖維ニテ打バ破ヤスクシテ、稜ツヨシ、暫夕用テ鈍クナレバ、又破リ用ユ、火打イシハ國々ニテ異ナリ、城州鞍馬ノ產ハ色黑シ、上賀茂ノ產ハ色赤、愛宕ノ產ハ色白シ、雲州ヨリ來ルモノハ綠馬腦ナリ、玉造イシト云、江戸ノ火打イシハ、水戸ノ白馬腦ナリ、又國ニヨリ馬腦ニ非ズシテ白色ナルモノアリ、白キモノハ唐山ニテ礴石ト云、外臺秘要ニ出ヅ、又杏仁ノ修治ニ白火石ノ名アリ、火打イシヲ火石ト云フコト、天工開物ニ出ヅ、江州ニテハ石英ヲ用ヒ、濃州ニテハ石綮ヲ用ユ、佐州ノセンペ火打イシハ、馬腦ノ天然薄片ナルモノナリ、　龍石膏ハ詳ナラズ

增、阿波ノ火打石ハ、那賀郡太田井村ノ山中ヨリ掘出シ、諸國ニ送ル、勝浦郡ニ田井村等ノ名ナシ、

〔土州淵岳志中產物〕燧石

在土中、或生溪水、其上皮隨土及水苔色、破之方解、大者方尺、李時珍曰、方解石與硬石膏相似、皆光潔如白石英、但以敲之段々片碎者、爲硬石膏、塊々方稜者、爲方解石、蓋一類二種、按、說文、匚受物之器、讀若方、方併船也、象兩舟省總頭形、二字不同、方圜之方、當作匚、後人借方爲匚、匚字遂廢、

(本草綱目譯義石九)方解石

通名ナリ、イ。ヽ。キ。リト云ハ佐渡ノ方言ナリ、イ。キ。リ。ト書シハ、イヽキリノ誤也、藥店ニ誤リテコレヲ寒水石ト云、寒水石ハ凝水石ト一名ナリ、唐デモ方解石ヲ寒水石ト誤リ云シコトアリ、今茶碗藥ナド用ル寒水石ト云ハ、皆方解石ノコトナリ、方解石舶來二品アリ、白シテ透明ナルガ上品ナリ、茶色ニシテ透明ナラザルガ下品ナリ、方解石ハ和産モ多シ、京ニハナシ、諸國ニアリ、上品モ下品モアリ、形四角ナリ、鐵槌ニ碎キテモ四角ナリ、細末ニシテ角ナシ、濃州赤坂ノ山ニ茶色ニシテ透明ナラズアリ、舶來ノ下品ト同ジ、勢州ニモコノ通リナルアリ、其中ニモ上品ハ少ナシ、透通ルナリ、國ニヨリ隨分上品ノ透明ナルモアルナリ、又先年ハ黒色透明ナルヲ赤坂ヨリ出ス、

(大和本草金玉土石三)方解石

常州ニ多レト云、一山悉是ナル所アリ、タダケバ皆箇々方石トナル、

(新編常陸國志土産六十一)方解石

那珂郡島子村ヨリ出　大和本草云、方解石常州ニ多シト云、一山悉是ナル所アリタダケバ皆箇箇方石トナル云々、　平賀鳩溪物類品隲第二ニ、方解和名イヽキリ、漢産上品、常陸産上品、出羽庄内産中品、讃岐屋島産中品、栗田維良云、或人云、多珂郡ニアリ、

(佐渡志物産五)方解石　方言イヽキリ　處々ニアリ

(本草一家言石四)方解石

佐渡銀山多産之、土人呼伊々鐵利石、崖上重疊而生、清瑩如水晶、而不光潤、打碎之則片々方解、蓋自

理石

二尺程ノ塞水石アリ、絶頂ハ皆岩石ナリ、其上ニ社頭本社拜殿結構ナル莊嚴ナリ、岩城道中記ニ、諏訪ノ水穴ハ太平田ト云處ノ山ノ麓ナリ、太平田ハ諏訪村ノ内ナリ、入口三四間ノ處ハ漸ク入候樣ナルセマキ穴ナリ、夫ヨリ三四間ノ間ハ七八疊敷程ノ廣サニテ、上モ高ク水モ深ク腰通リ位ナリ、其上、ダン〳〵ト狹ク、上モ亦ヒクシ、カヾミテ行ニ漸ク二人立位ナリ、此邊水深ク際ナシ、位ドリ、十五間程入先ハマタ〳〵穴狹ク見ユ、併水淺ク底ニ塞水石ノ雞石ノ樣ナル見ヘ候、穴ノ内左右上下共ニイブク迄モ塞水石ナリ、尤入口三四間ノ間ハ水一向ナシ、又下穴トテ此入口ヨリ七八間北ニ口アリ、其所ヨリ穴中ノ水ハ外ヘ流レ出ルナリ、

〔大和本草金玉土石三〕塞水石

出羽ノ湯殿山ヲ越テ月山ト云谷ニ有塞水石、木ノ葉石モ多シト云、

〔本草一家言四石〕塞水石

播州明石鹿壇沙池多有之、形似水精而質軟無稜角、收貯之器、不湿潤融解、蓋鹽鹵積年凝結者也、藥家多以方解石僞之、試之浸水久乃化爲水者是眞也、如方解石打解碎々方解、其性本石、何入水可化乎、用者宜辨、據大觀見宜會支眞晉所惠予、故以爲左券、

〔倭名類聚抄一塵石〕理石　本草云、理石一名立制石、今按、寒石又有理石之名、

〔箋注倭名類聚抄一山石〕所引中品文、本草云、理石如石膏、順理而細、蘇注云、此石夾兩石間、如石脈、打用之、或在土中、重疊而生、皮黄赤肉白、作針理文、全不似石膏、李時珍曰、理石卽石膏中之長文細直、如絲而明潔、色帶微青者、唐人石膏爲寒水石、長石爲石膏、故蘇言其不似石膏也、此石與軟石膏、一類二色、亦可通用、按、本草又云、寒石一名立制石、此注所云卽是、

〔重修本草綱目啓蒙五石〕理石

一名黒石山東通志

凝水石
石膏
寒水石

和漢供呼、其上品者色淡青、質細膩、有光澤、可以彫刻印篆、奥州二本松藥師山所產者是也、此卽山東通志所載者、又有粗品者、質粗屬帶白石色、丹後普甲山邊生之、又可用也、凡試溫石法、觸肌不冷者眞也、覺冷者僞也、又近世以瓦屑鍊成者、乏時亦可用、稻若水云、漢人所稱日本國者冷暖棊子、冬則暖、夏則冷、恐指此上好者乎、觸肌而不覺冷者爲煖、然質本石、故雖夏日則不溫、故呼爲冷煖棊子、漢人以其名異爲奇物耳、說見于徐氏象棋圖譜活法等書、又有天巧棊子、卽那智黑、一名試金石、(キンツケイシ)不摩珠而自扁圓黑色成棊子形、今多用之、出于紀州那智山、故名那智黑、其大者免鑱鐫取以爲試金石、和名金附石、又有人肌石、出于相州鎌倉江島、蓋溫石類也、損軒以充煖冷棊子、亦是也、又肥前國有稱白濱黑濱處、黑白成界限而生、人戲混黑白則變化歸于本色、是又天巧棊子之一也、物之種類不一、或相倍蓰、或相什佰千萬者不可勝數、格物之學無窮、嗚呼實哉、

〇溫石ノ事ハ、方技部醫術篇治方條ニ在リ、

〔倭名類聚抄一石〕凝水石　本草云、凝水石一名寒水石、此石末置水中、夏月能爲氷、或云、縱理爲寒水石、橫理爲凝水、

〔箋注倭名類聚抄一山石〕所引此石以下、陶注文、或云以下、蘇注文、證類本草引蘇注、二水下並有石字、係後人沿補、按、本草云、色如雲母、可析者良、鹽之精也、生常山山谷又中水縣及邯鄲、陶注云、常山中水縣邯鄲、地皆鹹鹵、故云鹽精、而碎之亦似朴消也、蘇注云、色清明者爲佳、今出同州韓城、色青黃理如雲母爲良、出澄城者、斜理文、色白爲劣也、李時珍曰、凝水卽鹽精石也、生於鹵地積鹽之下、精液滲入土中、年久至泉、結而成石、大塊有齒稜、如馬牙消、淸瑩如水精、亦有帶青黑色者、皆至暑月回潤、入水浸久亦化、又曰、寒水石有二、一是軟石膏、一是凝水石、惟陶弘景所注、是凝水之寒水石、與本文相合、蘇敬所說是軟石膏之寒水石、

〔多識編一石〕石膏　一名、寒水石、志良伊之、異名、細理石、(別錄)硬石膏、加多无志良伊之、　軟石膏　理石、今

碁石

は土俗かね石とのみ唱へ来りしとなり、日本の内にまだ餘國にも磬を生する山も有べきか、珍數石も有ものなり、茶啟家の合圖の鳴物など、せば、珍重かぎりなき物なるべしと思はる、然共御所にて右の石を磬となし給ひたる工匠の直ひは、夥數懸りたるとの風聞、讃州へも追て聞へたる由、左も有べき事か、今禪密兩宗等の佛家にて用る所の磬は、皆悉く銅磬にして、石磬を用る事なきは、彫琢の直ひ尋常ならざる故か、予山〇略中年の頃までは、樂器に用ゆる磬は石なる事を志らずして、磬といふは銅にてのみ拵へたる物を、磬の字は金に從はずして、石に從がふは、金と石とを取違へたる物なるかなどおもひ居たりしは、恥敷ことにて有し、何事も志らぬ事のみにて打過、残り多く思ふまゝ、せめては聞にまかせて記し置て、童蒙へ示さんと思ふのみ、

鐵砲家細川林谷奇石を好、磬石數品を藏す、〇略石質も大同小異にして、音も又種々ながら、いづれも金鐵の音なり、

予が友内藤廣嶋〈[illegible]〇…略〉此石を一つ所持なし居たり、色は白目なる灰鼠にて、石肌荒く魚にして鮫肌なれども、缺口は如何にも貝密にて、磨けば蠟色塗の如く成るに相違なし、此石片面の端の所に少し缺疵有、此疵の方を下になし釣るして打と鳴らず、又疵の方を上になして釣るして打と、全く金の音にて、其響き丁當として先鉦などに近き音なり

或人云、唐土には種々の磬石有る事ときけり、讃州の青石磬、其長一丈、軽き事鴻毛の如しなど云事有を見れば、其昔も種々有べし、讃州の石質は至て堅密なれば、其音金玉に近し、彼揚貴妃の弄せし藍田の綠玉磬などの類なるべしと也、

〔毛吹草三〕山城　碁石　若狹　スカ濱黑碁石　石見　高津白黑碁石　長門　筋濱黑碁石　紀伊　那智碁石　豐後　碁石　肥後　志岐白碁石

〔大和本草三金玉土石〕天巧碁子

礪石ト稱ス、兩品トモ國用アマリアリ、

〔新編常陸國誌六十一土產〕砥石

多珂郡介川村大久保村ヨリ出　常陸考云、助川有出礪山、民出税採之、

〔紀伊續風土記物產一〕總砥本草家底　和名鈔　牟婁郡田邊莊近き山に產す、上品なり、

礪石本草 和名鈔、同上　在田郡湯淺莊山田村、及牟婁郡田邊莊瀬戶村、富田莊才野村、安宅莊日置浦、那智莊橋川村、色川鄉樫山村等に產す、

難肝石和名鈔　牟婁郡大邊路處々に產す

鎌砥石　伊都郡官省符莊田原村の山に產す

〔長防產物名書土石〕砥石

阿武郡椿村山田ノ內小原、　同郡同村ノ枝鄉川上村ノ內高瀬ノ大形山、　厚狹郡鴨庄村ノ內、平郡田山、

〔增訂豆州志稿七土石〕礪

大仁山箕作山字久須山大嶽伊濱山波多等ヨリ產出ス、皆下品ナリ、

ミガキ石

〔大和本草三金玉土石〕ミガキ石

近江ノスリ針嶺ヨリ出ヅ、他州ヨリモ出ヅ、形土器ノ粉ヲ堅メタルニ似タリ、金石ノ類ヲミガケバ光澤ヲ生ズ、

樂石

〔見聞漫錄〕樂石

先年あるひと、樂石と云ふはいかなる石ぞと問ひしに、樂石は樂器に用ふる石なるべしと答ふ、其後、古文苑をみれば、秦の始皇の嶧山の碑を載す、その碑文の終りの刻、此樂石以著經紀と云ふところに、樂石の注ありて、樂器に用ふる石たることあきらかなり、注文左のごとし、

青砥は平尾、柚田、南村、門前、中村、井手、黒鍋等なり、中にも南村、門前は京より七里ばかり東北にありて、周廻七里の山なり、丹波に猪倉、佐伯、蓮野山、扇谷、長谷、大淵、岩谷、宮川、其外品数多、肥前に天草、　豫州に白赤等すべてを中砥とも云、尤各美悪の品級盡く辨ずるに遑あらず、右磨石中砥ともに皆山の土石に挿る物なれば、山口に坑場を穿、深く堀入て所々に窟をひらき、栄螺の殻を携へて石齒を運び、全く金山の鏈を採るに等し、石盡ぬればかの搘架木を取捨て其山を崩せり、故に常も大中崩るべきやうに見へて恐ろしく、其職工にあらざる者は、窺がふて身の毛を立てり、　石質によりて其工用に充るものは下に別記す、中にも鋸磨、又塗物の摺磨くには、對馬の虫喰砥なり、是水に入りては破裂物なれば、刀磨には用ざれども、鐵細工の模鏤には適用とす、但し銅の鍍金などを鏤る、鏤には伊豫の白砥を用ゆ、此白砥は又一奇品にして、谷中に散集りし石屑久敷すればともに和合し、再たび一顆塊の全石となるなり、故に偶木の葉を捲て和合し、奇石の木の葉石となるもの、多くは此山に得る所なり、

鳴石　肥前の唐津紋口、紀州茅が中砂子が瀬、或は豫州に出すものは石理精緻し、是等皆撰取にはあらず、一塊を山下へ切落、それを幾千挺の数にも割て出す、

工用は　刀鍛冶に荒口、磨工に青茅、　白馬　茶砂子　天草　伊豫　又淨慶寺等次第に精を経て、諸食内曇に合て後、上引をもつて青雲の光艶を出す、（上引とは、内曇りの石屑なり、但し鳴瀧の嶺ともいひて、鳴瀧の前に用ゆるとあり、是を加土ともいふ、）　剃刀は　荒磨を唐津　白馬　青砂子　茶砂子　天草に経て鳴瀧高尾等に合せ用ちゆ、　庖丁は、たばこ包丁は荒口中砥、平尾、柚田等に磨て磨石にには及ばず、又薄刃菜刀の類は荒磨は荒口、　白馬　青砂子　茶砂子　白伊豫、上は引にて色付とす、　鎌は唐津　砂子流に磨ぎて豫州の赤にて礪けり、

大工并箱細工指物等は、門前平尾、柚田の青砥にかけて、鳴瀧高尾等に磨す、　料理庖丁は、山城

鳴瀧山地中悉石也、其色淡白、面間有紅條理、石性柔也、故鑿之、則必為一片、大小長短從所欲、取來疊假山、安庭池、

〔本草綱目啓蒙石十〕越砥

越砥ト云ハ　カミソリド　アワセドト云テ、細キ上品ノ磨石ナリ、越國ノ產上品ナリ、故ニ越砥ト名、釋名ノ磨刀石ト云ハトイシノ總名ナリ、礪石ト云ハ、アラト、云テ粗キトイシナリ、カミソリドハ、山城デハ鳴瀧ノ產上品ナリ、又高尾ヨリモ出、又鷹峯ノ金地院ノ領分ヨリモ出、又濃州ヨリモ出、コレヲ戸澤ドト云、コレモ上品ナリ、丹波ヨリ出ルヲ大内ドト云、コレ其次品ナリ、江州ヨリモ出、コレモ次品ナリ、以上ハ皆カミソリドナリ、又刀劍ヲ磨ク磨石ハカミソリド、同ク、越砥ナレドモ潤ナリ、コレハ和州ノ春日山ノ產ヲ上品トス、春日ドト云ナリ、コレハ色白ク少シウルミアリ、今ハ出サズ、又三河ニ名倉ドヽ云アリ、コレモ上品ナリ、山城デハ鳴瀧ヨリ出ルウチグモリト云ヲ上トス、名倉ドノ次品ナリ、又越前ノ常慶寺ドト云アリ、コレヲ俗ニジヨウケンジドト云、コレ又次品ナリ、コノ外又リドラウヒキドナド云アリ、皆漢名ハ越砥ナリ、又漆塗リノフシヲシダキヲトス磨石アリ、コレハ對州ヨリ出、ムシクイド、フシマド、トギイシト云、薄青黒ニシテ肌細ナリ、コレニハ小キ穴多シ、故ニムシクイドト云、コレ釋名ノ羊肝石ト云ナリ、一名羹肝石ト云、[illegible]ニ出、又嵯峨ノ臨川寺ノ邊ノ河原ニアル磨石ヲ臨川寺ドト云、コレハ薄黒シテ少シ黄ミアリ、一分位ブヽニ細カニヘゲルモノナリ、羹肝石ノ一種ト見ルナリ、又アワドト云テ青黒色ナルアリ、コレハ庖丁ヲ磨ニ用ユ、故ニホウチヨウドトモ云、コレハ山城デハ木屋川ドヽ三ツイシドヽ云ヲ上品トス、又丹波ノ[illegible]ノ山ノ產ヲ[illegible]ノ山ドヽ云、防州岩國ノ產ヲ岩國ドヽ云、京ノ清閑寺ノ產ヲ清閑寺ドヽ云、紀州神子ガ濱ノ產ヲミコドヽ云、以上皆庖丁ドナドナリ、漢名ハ玄礪ト云、山海經ニ出、砥礪トモ云、正字通ニ出、又釋名ノ礪石ト云ハ、アラトナリ、コレハ肥前ノ島原、

〔江談抄 三〕致忠買石事
又被命云、備後守致忠元方買閑院為家、欲施泉石之風流、未能得立石、則以金一両買石一。件事風聞洛中、件事為業之者、傳聞此事、爭運搬奇巖怪石、以至其家、欲買之、致忠答云、今者不買云々、賣石之人則埋門前云々、然後傳其有風流者立之云々、

〔見聞漫錄〕買石
江談抄に云く、備後守致忠元方の男、買閑院為家、欲施泉石之風流、未能得立石、則以金一両買石一〇中略云々と、これ過分の價を以て求めし故に、爭ひて持來るとみゆ、此時の一両は十匁なるべければ、慶長金の二両餘に當り、さして過分の價にあらず、昔は諸物の賤しきこと考へみるべし、かくの如くなれば古へ官の富めるも宜なり、

碁石

〔毛吹草 三〕相模　大磯碁山敷石五色ノ石有之　上野　碁山石　伊豫　碁山石同敷石五色有

〔土州淵岳志 中〕碁石
幡多郡四万十川ノ河原ニ碁石多シ、寸法能ク叶ヘル石ナリ、黒石ニテ極メテミゴトナリ、近年ハ好事ノ者取リ盡シテ、今ゴロニ求メザレバ得ガタシト云フ、
○碁石ノ事ハ、遊戯部碁石篇ニ詳ナリ、

麥飯石

〔重修本草綱目啓蒙 六石〕麥飯石飯、蓋生入飯ニ作ル、闕字也　ムギメシイシ
ツノ石灰色ト白色ト交雑ニシテ、麥飯團ノ状色ノ如シ、柔軟ナルヲ良トス、城州鴨河ニ在リ、白河石ニ充ル、古説ハ穏ナラズ、
集解麁石　麁アル石ヲ云
増、集解、若無此石、但以舊磚磨、近曾麁石代之ト云ハ誤ナリ、本條ハ麥飯ニ似タル石ナリ、磚ヲ磨スル石臼ノ麥性アルヲ以テ代用スベキ者ニ非ズ、

石中にもうたふ、音節曲調恰も連たるが如く、中々響には思はれず、昔日、鼓三絃笙笛簫等の響悉く移らすといふ事なし、故に鸚鵡石と號す、或人語りけるは、勢州桑名より尾州宮へ渡る時、風あしくして、伊勢路のとある島に舟を寄、おの〳〵陸に上り、そこゝ遊歩しけるに、舟人此邊の事能知りていふ樣、此山影にあふむ石あり、宮川の上にあるとは、甲乙何れにくらべ難き程なり、いざ見せばやとて、半里計り具して行ぬ、則鳴物は所持もせざれば、只唄ひ淨瑠璃などにて止ぬ、聞しに勝りて能移れりと語りにき、

〔東遊記 一〕言葉石

予が越前國敦賀にありし頃は、十月の初なりしが、例よりは暖かにして、北國ながらも、小春のしるしとて、打續き天氣うらゝかなれば、彼地の人々にいざなはれ、其地にて人の言葉石といふを見にまかりぬ、敦賀の町を離れ、西の方に出ればきれいなる松原あり、是を一夜松原といふ、むかし神功皇后の御時、唐土より賊船多く襲ひ來りしに、此海濱に、此松原一夜の間に生ひ出て、楯に量の多くむれ集りしを、敵の目には、夥敷軍兵の旗差物と見えて、驚き恐れ逃去れりといひ傳ふ、誠に松の木立より眞砂の白きさま、北國には珍敷土地なり、夫より五十丁計にて、常宮といふあり、入海を隔てゝ、敦賀の町と向ひ合せたれば南おもての地にて、風景殊に勝れ、此あたりの人の遊興の所なり、宮は仲哀天皇を祭れる大社なり、遊行上人など、此國を經歷の時も、必此社へ詣でらるゝ事なりとて、遊行上人代々奉納の和歌など有り、此宮のうしろに高き山あり、凡京の比叡ばかりにも見ゆ、さゝいが嶽と名付く、此山に登ること二十八丁にして、言葉石の下に至る、三十年計前までは知れる人も無かりしが、ふと木をきるものゝ、己言葉のひゞくを怪しめるより、ここかしこいひ傳へて、敦賀よりも人々登り見る事に成り、今にては若狹侯も遊觀の所となりたり、石の高さ十三間、横二十間といふ、山の七八合目とも思ふ所に、南をもてに有り、甚大なるもの

リ、火中ニ投ズレバ、如活動ニシテ伸ブ、其狀蛭ニ似タリ、因テ以テ名トス、燒末シテ昇降ヲ植フベシ、

〔紀伊續風土記物產一〕石卵天工開物 牟婁郡大田莊鉛白村の土器產、名品なり、鉛白村の條に詳なり 又在田郡廣莊名島村に下品を產す、

〔新編常陸國誌六十一土產〕卵石又玉子石ノ字ヲ用フ 多珂郡水付村今曾禰ト謂フヨリ出、殺ヲ出ザレバ採コトヲ得ズ、

〔甲斐國志附錄百二十三〕鳳卵石 市川入、尾別所鄕ノ南金山ニ在リ、形如卵ニシテ帶金斑、大小アリ、

〔紀伊續風土記物產一〕柏石本草 牟婁郡海中所々より出づ

〔本草綱目譯義石十〕薑石。セタカイシ　ウシセウガ　コレハ讃州屛風浦ノ名產ナリ、又越後、相州鼻州、松前等ヨリモ出、又能登ノ山中ノ喜園石ノアル處ニモ混ジタアリ、其外諸國ニモアリ、皆形扁フシテ枝アリテ生姜ノ形ノ如シ、又佛掌薯ノ如キモアリ、コノ中ニテ白色ナルヲ和名ニ乾姜石ト云、漢名ニ白薑石ト云ナリ、

〔紀伊續風土記物產一〕石梅物類品隲金石部石梅圖遠鍋下にて、鹿皮を磨きまりて、蠣斑といふはあやまりなり、 牟婁郡海中所々より出づ

〔筆のすさび一〕石分娩、　豫州三津濱何某が家に盆石あり、それを裏座敷の違棚の上に置しに、文政庚辰の大三十日に一小石を產む、翌日見るに、傍にありて、其形母石に少しもかはらず、白き筋などもあり〳〵と見へて、小なるのみ、正月中見る人市をなししと、同國松山人岸惠造が辛巳二月廿五日に語る、

も件の園中に任りしに、長谷の住持靈夢によりて、爰に移すといふ、其三は山崎家の邸内の陰陽石、これを結の神に比して、その願をきくとぞ、其四は五島家の門前大路の中央に、徑尺餘の頭石凸起してあり、道普請の礙りなりとて掘りけるに、其根金輪際までも入りたりとて、元の如く捨て置きぬ、往來の人香を手向て、足の願をかくる事、半藏御門内の石に同じ、其五は、森川家の別墅に、二尺餘なる烏帽子形の石に、日月の像顯れ出でたる有り、件の園丁茂左衞門といふ者、靈夢によりて、その郷里越後國頸城郡吉城村の畠より得たりといふ、目出たき石と申すべきか、以上の五石は、麻布の地に現存して、人皆これを禮拜すること、米家の昔に異ならず、余天下を遍遊して、異石を歴觀せしこと多し、遠き諸州の灼然を略して、近き麻布の靈徴を表するのみ江都の廣き、本所の駒留石、牛天神の牛石、其餘地藏觀音に至りては、僕を更ふとも其説盡しがたかるべし、

(野翁物語二)豐前國團子石の事

一豐前國中津と云ふ所に、團子石とて、山を掘れば土にて丸めたる石の大さ、楷子のごとく、或は饅頭子のごとく、土とも石ともわかたぬもの、土中より幾つとなく出る、皆鼠色なり、とりて見れば、團子に餡を入たるがごとく、紫色の土を包み入ながら、わざと丸めたるやうなる小石なり、此一山、皆土中團子石なり、此石は本草に説く處の太一餘糧の類ならんかといへり、又豐後國栗野と云ふ處の鐵山に、紫石と云ふ物あり、金を掘岩穴より、この石を出すなり、鼠色にして、一片一片うすく、へぎ平にへげ目あり、石中に木の葉の形ち、枝ともにあり〱と其紋備る也、猶あやしきは、鮒の全體備へたる紋あり、いづれも石は鼠色にして、其紋は薄墨の色也、多くは其紋栗の葉、椎柴のかたち也、此石筑前の國宗像郡にも有といへり、

(佐渡采藥中二)いしだんご　石團子の義、石中黃なりといへり、禹餘糧を產する地にありて、黃土を含む、饅頭石といふにも此品あり、甲斐國巨摩郡より產する物もまた同種也、

奇石

先生按ズルニ、此類諸州ニ間々アリ、西國ニテ團子石饅石ナドノ類ナルベシ、

(南紀名勝略志日高郡)屈石。四十一

三尾庄三尾村ノ西南三十餘丁海邊ニ有、高十八九間、周廻二十七八間計有、伏タル人ノ腰ヲ屈ルガ如シ、故ヲ名トセリ、

(鈴毛の硯上)琵琶湖のほとりに小繁といへる隱士ありて、性來癖ありて、奇石をたくはふること數千品にあまれり、小繁年少き時は、里正のつかさして家富り、その比貪吏罪あるに連及せられて、禁錮の身となる、三年の星月をふるに、その間餘儕皆々やまふにかゝりて死す、小繁その妻とつとに娛、夜はいぬるまで石玩し、起居動止まめやかにして、三年の星月ふる事を忘れて、石を手ずさみ樂しみければ、身にいさゝかのなやみなく、夫妻ともにすこやか也、其後に罪をゆるされて石を好事もとの如し、常に人に語りて曰、吾石を玩する癖なくば、必病にかゝりて身なくならましを、石の我を冥助する事いとあつしとものがたりぬ、此隱士近頃佐野山陰にはかりて、石山寺に石亭の書畫をきづかんとて、石をあまた集えらびしと、佐野氏の物語り也、未暮また世に出といふべし、

(日光山志四)牛石。　冠木門に至る路傍〈北〇日〉にあり、牛の臥たる貌に似たり、七尺五六寸に六尺許、脊の高き所三尺餘、是も巫女石の如く、牛馬を禁ずる山上へ、牽來れるが忽に四足すくみて石となれる山、鼻と覺しき穴ある所へ、鳶もて繋ぎたる趣になせり、

(雲根志前編一)雨。候。石。〈中二略〇〉

雨ふらんとする時忽然と汗を生ず、みづから雨候石と號す、野客叢書に出る鱗紋花石の類ならんか、

(技鐵錄)怪石　周北一村里曰、仁保、有小阜、出石、大如棋藻子、形圓色淡白、中背有圓、其色黑、土人呼曰、

可趣所も可有之と申遣候へども、決斷して未來申候、備後よりは數十里隔り候へ共、臨其地、この窟を見たる人も可有歟、先生へ御相談申上候、奧州南部蝦夷を望候地に、村木村といふあり、其村邊、山野海島に至る迄皆材木のごとし、方四五寸ばかり、村民これを取りて、屋下の床に用ひ、或は橋に架し候、石質堅く、鐵に類し、又奧州出羽の界に、小坂峠といふ所有之候、此山中材木石あり、山岨崩れ落ちかゝるを見れば、半倒れ掛りて、扇の骨を立つるごとし、長數丈なり、亦四五寸角なり、奧州會津邊にも材木石あり、土人橋に作り、欄干に作り、皆此石を用ふ、對馬にも木板石あり、長四尺許、廣四尺許、厚三四寸、土人橋となし、疊になす、天然の板石なり、此石重疊して、對馬一島をなすと申事に候、木の端の石窟も、また此等の類か、件の石達竹の節のごとき者見え申候、圖を以て考ふるに、此節間の處より欠落候者歟と被存候云々、此書によりておもふに、筑前にも一島、皆石にて束ねたる物を積みたるがごときあり、內は洞穴にして船出入す、兩國より西にて遠からず、備後の山野村といふに、面背平かにて、厚二寸餘にして、かんなにて削れるが如くなる石あり、庭の飛石などに宜しけれど、取り用ふる人少し、

（新編常陸國誌土產六十一）礫﨑石

那珂郡平磯村ノ礫﨑ヨリ出、以テ名トス、國人敢テ出ザレバ採コトヲ得ズ、

（紀伊續風土記物產一）曾根石

牟婁郡曾根莊曾根浦に產す、石質御影石に似たり、先年山城御幸宮の鳥居を此石にて造るといふ、

（長防產物名寄土石）筋ケ濱石　其品細石、豐浦郡大坪村ノ內、筋ケ濱、

（新編常陸國誌土產六十一）雌石

多珂郡笠石新田ヨリ出、堅クシテ下品ナリ、世ニ所謂ル水戸雌石コレナリ、

石理は　蠣殻のあつまり凝たるがごとく、浮石に似て石理麁なり、故水盤などに製しては水溜りて保ことなし、されども火に燒ては損壞せず、下野宇都宮に出せるもの、此石に似て少しは美なり、浮石。浮石は海中の沫の化したる物にて、伊豫、薩摩、紀州、相模に産す、されば此山も海中の島山なれば、開闢以後汐の凝たる物ともうたがはれ侍る、鹽飽の名も若は鹽泡の轉じたるにか、〇鹽〇飽石は御幣山となりて、今夫と譲くる物は多く、貝附を賞す、是其邊の礒石にて、石理粹末のごとくにて質は硬し、飛石、水鉢、捨石等に用て、早く苔の生ふるを詮とす、礒石。礒石は波に穿たれて偏砢異形を珍賞す、

〔日本山海名産圖會二〕〇御〇影〇石

攝州武庫菟原の二郡の山谷より出せり、山下の海濱御影村に石工ありて、是を器物にも製して積出す、故に御影石とはいへり、御影山の名は城州加茂あふひを採る山にして、此國に山名あるにあらず、たゞ村中は御影の松有て、續古今集に基俊卿の古詠あり、元此山は海濱にて、往昔は牛車などに負ふすることはなかりしに、今は海濱次第に侵埋て、山に遠ざかり、石も山口の物は取盡ぬれば、今は奥深く採りて、二十町も上の住よし村より牛車を以て載て御影村へ出せり、有馬街道生瀬川原などの石も、此奥山とはなれり、此上品の石といふは至て色白く黒文なし、是は昔に出て今は鮮なし、されども其費用をだに厭はずして、高嶽深谷に入ては得ざるべきにあらずといへども、運送車力の便なき所のみ多し、

石質　文理は京白川石に似て至て硬し、故に器物に製するに、微細の稜尖も手錬に應ず、白川は洒落して工に任せず、石工大なる物に至ては、難波天王寺の鳥井などをはじめ、城廓、石塀、佛像墓牌、簷頭に造り、琢磨しては皮膚のごとし、是萬代不易の器材、天下の至寶なり、

品數　直塊は大鉢、中鉢、小鉢、（鉢とは手水鉢に用るにより本器とはすれども、燈籠石などをはじめその用多し、）頭築しは大さ大抵一

長政判

卯月〔慶長十一年〕二十六日

麻生三右衛門どのへ
長濱新太郎どのへ

角脇割符之事

一角石三　長さ八尺より七尺ノ間、はゞあつさ三尺、　毛利但馬殿くみ　大島又右衛門殿
一角脇三　長さ五尺六尺内外、はゞあつさ三尺、はゞは二尺五寸にても不苦、　同組　同　人
一角石三　長さ八尺七尺ノ間、はゞあつさ三尺、　桐山丹波殿くみ　黒田安大夫殿
一角脇三　長さ五尺六尺ノ内外、はゞあつさ三尺、はゞは弐尺五寸にても不苦、　同組　同　人
一角石三　長さ八尺より七尺ノ間、はゞあつさ三尺、　黒田美作殿くみ　池田九兵衛殿
一角脇三　長さ五尺六尺ノ内外、はゞあつさ三尺、はゞは二尺五寸にても不苦、　同組　同　人
一角石三　長さ八尺より七尺内外、あつさはゞ三尺、　井上周防殿くみ　岡波宇右衛門殿
吉井武左衛門殿
一角脇三　長さ五尺六尺内外、はゞあつさ三尺、はゞは二尺五寸にても不苦、　同組　同　人

右之分無御油断、明日二十八日より可被仰付候、則穴太参候間、石之様子御たづね候て可被仰付候、已上、

卯月〔慶長十一年〕二十七日

麻生三右衛門花押
長濱新太郎花押

〔毛吹草三〕山城　切石　近江　木戸石切石ニ用之　越前　北荘切石

〔貞丈随筆八〕鴨川石は唐土にて沙汰せる名産なり、硯とし盆山とす、千鳥石といふて至て真黒なり、今は拾ひ尽してなく、此石を以て始て茶碗を焼し、則是黒の楽焼なり、今其石なければ自ら其

〔雍州府志六土產〕石　凡山城國處々出者有雜品、上粟田北白川山土中悉白石也、村民農業之暇、事石工、故隨其用而斫取之、大盤採者至長二三丈、凡朝廷宮殿之柱礎、市鄽溝渠之界石、井石壁、石橋、井欄礎石、碑碣、石塔等物無不用之、其鑿穿時所碎散之砂石、至白是謂白砂、禁廷及行路敷之而清道、是稱撒砂、高貴來臨處門前左右、各一堆高盛砂、是號立砂、又北白川山北、淨土寺山、并鹿谷有一種石、其狀多平真而淺紫色也、宜置庭園、洛北高野川石其色青、其狀堅硬而沈重也、然無砂礫之累、故酒店搾酒糟時以此石點酒囊之上、置桶於其下、而承其汁、又山科鄉小山邊多大石、其色紫黑、方廣寺大佛殿之樓門左右石礎多採於斯處云、西山嵯峨大井川石其狀有大者、其色純青而圓有白條、宜置假山、又其小者有宜硯者、有安盆者、洛東清閑寺山石高低磊落、自有峯巒之體勢、且孤潤而含水氣、自然凹處嵌種樹木、貯水於平盆、安其內、是稱盆山、爲座上之觀、又小者自有存峯巒之體勢者、敷白砂於盆裏、安其上、是謂盆石、多有其名、故或謂名石、撒白砂於盆中、俗謂打、言打成之謂乎、打之有式、凡石之大小有峯巒之體者、置假山其經營之人稱庭作、又大小石面平者比置露地、賓主取次、蹈之而趨行、是稱飛石、倭俗家園謂露地、凡飛石之安排布置、多倩好事之茶人而使置之、是謂作露地、又謂直石、倭俗萬事布置適宜謂直、使爲正直之謂乎、又所敷露地之青小石是稱青石、荒神河原并二條河原人、擇拾之而鬻其求、近世取河邊砂石、以竹簀篩過取大小青者、撒庭園、是謂豆砂、以其形狀相似而稱之、又洛西紙屋川赤小石敷園面可也、是稱紙屋川石、此外近江國木戸石、紀伊國海青石、攝津州御影山石、備前國小豆島石之類、悉於二條河原町賣之、

〔毛利氏四代實錄考證論斷〕慶長十五年九月二十三日

考證

　　福原家證文

幸便候條致啓上候、御手前御普請相濟、福原越後守殿被罷下候、大石大小千御進上、其內角石三拾、

〔倭訓栞前編三〕いは　磐又磐石をよめり、岩も同じ、大石なり、石齒の義といへり、古事記、万葉集に石をもよめり、今伊勢の俗いふ所の物は、石と土との間なる物をいへり、伊賀にては是をすねといへり、小網にいはといふら重石なり、大網にては直に網石といへば、いはも石の義成べし、今鐵を用うるも名を同うす、歌にいはおろすなどよめり、いやといふ所もあり、念力岩を通すといふ諺は漢書に、李廣出獵見草中石以爲虎也、射之中沒鏃、視之石也といふが如し、

〔古事記上〕最後其妹伊邪那美命、身自追來焉、爾千引石引塞其黃泉比良坂、其石置中、各對立而度事戸之時、略〇下

〔古事記傳六〕千引石は知婆毘伎伊波と訓べし、(知婆毘伎とよまぬぞ古言の格なる)此を書紀に、千人所引磐石と書れたるは、精の意を顯せるなり、略〇下

〔日本書紀神代上〕一書曰、略〇中遂拔所帶十握劍、斬軻遇突智、爲三段、此各化成神也、復劍刃垂血、是爲天安河邊所在五百箇磐石也、即此經津主神之祖矣、略〇中泉津日狹女、將渡其水之間、伊弉諾尊已至泉津平坂、故便以千人所引磐石、塞其坂路、與伊弉冉尊相向而立、遂建絕妻之誓、

〔日本書紀神武〕戊午年十月癸巳朔、天皇嘗其嚴瓮之粮、勒兵而出、先擊八十梟帥於國見丘、破斬之、是役也、天皇志存必克、乃爲御謠之曰、伽牟加筮能、伊齊能于瀰能、於費異之珥夜、異波臂茂等倍屢、之多儾瀰能、之多儾瀰能、阿誤豫、阿誤豫、之多太儾瀰能、異波比茂等倍離、于智氐之夜莽、于智氐之夜莽、謠意以大石喩其國見丘也、

〔本朝奇跡談中〕紀伊國牟婁郡相湘村に、日本に一ツの大石也と云あり、(高サ七拾五間、横二百六拾間餘)此石古座川と云川の傍に在、

〔紀伊續風土記牟婁一〕海內一大石

牟婁郡三前郷相瀬村山中溪側にあり、土人一枚岩といふ、高さ七十間餘、横二百四十間餘、壁立す、

〔倭訓栞前編十佐〕さゞれいし　日本紀倭名鈔に砂礫を訓せり、新撰字鏡に確をさゝら石とよめり、萬葉集に小石と書てさゞれとのみもよみ、又さゞれしとも見えたり、細石の義れは助語也といへり、筑紫人はされといふも是也とぞ、俗に水にされたる石をもいへり、礫石破碛などをよめる是也、

〔年々随筆三〕俗間に小石をざりといふ、歌にさゞれとよむと同言なるべし、さゞれもざりも、さらさやり〳〵といふ音を形容したる也、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

佐射禮伊思爾古馬乎波佐世氐己許呂伊多美安我毛布伊毛我伊敝乃安多里可聞、

〔古今和歌集七賀〕題しらず　讀人しらず

我君は千世にやちよにさゞれ石のいはほと成て苔のむすまで

〔日本靈異記上〕序

礫礫

〔日本靈異記中〕觀音銅像反化鷺形示奇表緣第十七

礫

〔倭訓栞前編十四多〕たびし　日本靈異記に、礫をたびいしとよめり、たびはとゞと通す、飛礫の義也、貫之が白川大相亭春子日會序に、草枕たびしがはらまで松の千歳は君にのみ祈り、花のさかえをば人の爲にとおもふとみえ、枕草紙に、そさめみかはやうど、たびしがはらといふまで、源氏に、たびしがはらまで悦び思ふなるといひ、類聚に、山がつたびしがはらまでもと見ゆ、瓦礫の謂也、元輔家集に、筑紫にて大貳の御門に菩提子奉り上らるゝに、

みがくらん玉の光をたのむかな數にもあらぬたびしがはらも、百姓をいふとある説は、右の

苦也、凡在土中水中石皆能長、

水中細石(和名佐々禮以之)鑿彫爲岩(伊波保)俗以岩爲巖之訓(○中略)

凡磐石欲切鑿者、煉芋塞於石上、乘熱切則易、又用金剛石琢磨則石肌美好、如有墨書於石難脫、用薬龍根可揩之、

凡石藥火煅紅入醋能爲末

凡煮石法、用胡葱搗爛、以砂鍋煮之、水減則加水、煮三伏時以石柔爲度、用其石泥作器、再以甘草水煮一伏時則堅硬如故、(見事林廣記○下略)

〔日本山海名產圖會二〕石品

石は山骨なり、物理論云、土精石となる石は氣の核なり、氣の石を生ずるは人の筋絡爪牙のごとし云々、されども其石質におゐては、萬國萬山の物悉く等からず、是風土の變更なれば、即氣を、つて生ずることまかり、又草木魚介皆よく化して石となれり、本草に松化石、宋書に柏化石、稗史に竹化石あり、代醉編に、陽泉夫餘山の北にある青泥數十歩草木を漬て皆化して石となる、又イタリヤの内の一國に一異泉あり、何の物といふことなく、其中に墮れば半月にして便ち石皮を生じ、其物を裹、又歐邏巴の西國に一湖有り、木を内に插さんで土に入る、一段化して鐵となる、水中は一段化して石となるといへり、本朝又かゝる所多し、凡寒國の海濱湖涯いづれもまかり、すべて器物等の化石を其所になると知るべし、又石に鞭うちて雨を降し、雨をやむる陰陽石ありて、日本にても寶龜七年、仁和元年、及東鑑等にも其例見えたり、江州石山は、本草にいへる陽起石にて、天下の奇巖たり、又日本紀雄略の皇女伊勢齋宮にたゝせ給ひしに、邪陰の御うたがひによりて、皇女の腹中を開かせ給ひしに、物ありて水のごとし、水中に石ありといふことみゆ、是醫書に云石瘕なるべし、然ば物の變なること、理においては一なり、品類におゐては鐘乳石、蘇石、寒石、

石

光にきらめきて目眩する計也、其うるはしきに心留りて過行べくも覺えず、程よきはひろひ取りて袖に入る程に、雨の袂やぶるゝ計也、されど長き旅路携へ歸りがたく、毎夜三ツ四ツづゝ人に與へ、京まで携へ歸れるは纔ばかり也、かくのごとき濱京近くにあらましかば、守る人も嚴敷門戸牀もありて、みだりに見る事だにも許さまじきを、かゝる人なき邊地なれば、道行人の取に任せ、誰壹人禁ずる者なし、めづらしき地なり、

〔本草一家言 四石〕貓睛石。。

和名蜻蛉玉、曹昭格古要論曰、猫睛出南番、性堅責如酒色、睛活者、中間有一道白横搭轉側分明、與猫兒眼睛一般者爲佳、故云若眼睛散、及死而不活者、或青黑色者、皆不爲奇、大如指面者尤好、小者價輕、

〔紀伊續風土記 物產一〕貓睛石〈シガダマと問なり、格古論豐後のト〉　牟婁郡那智並二色濱に稀にあり

〔本草一家言 四石〕石榴子。。。

倭赤呼、榴石、以充服口用、曹昭格古要論曰、石榴子出南蕃、類瑪瑙、色紅而明瑩如石榴肉相似、故名石榴子、

〔倭名類聚抄 一土石〕石　陸詞云、石山土也、常尺反、〈和名以之〉

〔箋注倭名類聚抄 一山石〕藝文類聚引、楊泉物理論云、土精爲石、說文石山石也、在厂之下、口象形、釋名、

　山體曰石、石格也、堅捍格也、

〔類聚名義抄 六石〕石〈常隻反、イシ、アサ、アフイシ、〉

〔伊呂波字類抄 伊地儀 礎碣磯巖岩研宅岳〕石〈イシ 山土也、類抄、〉

〔日本釋名 中水火土石金玉〕石　仙覺が曰、いは發語の詞、しはまつむ也、篤信謂、いやしと云意なるべし、石は金玉よりいやしきゆへ也、中を略せり、

〔東雅 二地理〕石イシ　義不詳、舊說に石をイシといふは、イは發語之詞、シといふは石はちひさけれ

金剛石
猫睛石
石榴石

加茂郡山谷ノ中ニテ稀ニ得ルモノヲ見タリ、多クハ瑪瑙ノ吹出タルナリ、又羽茂西三川椿尾村山中ノ砂石ノ中ニ生ズルモノ、土人石硯トイフハ今ハ甚稀ナリ、

〔紀伊續風土記〕物産一瑪瑙
國中海邊處々にあり、白瑪瑙、黄瑪瑙は多く、竹葉瑪瑙、紅絲瑪瑙は稀なり、

〔重修本草綱目啓蒙〕五寶石
津輕舍利ノ種類

瑠、一名亞姑　藍寶石　同々石　猫睛石、一名猫兒眼　走水石

瑚負　石榴子、一名紅馬肯的石

津輕舍利ハ、奥州津輕今別母衣月ノ海中ニ舍利ヲヤト云石アリ、瑪瑙ノ類ナリ、舍利コレヨリ生出シタ、遍體ニフクタ、ソノ形圓小ニシテ透明ナリ、ソノ色白、或黄白色、或紅色、或斑駁、數種アリ、波ニユラレテ海底ニ墮ルモノ、又波ニテ礒邊ヘウチ揚グルヲ拾ヒ得テ書藏スレバ、年ヲ經テ子ヲ生ズ、即馬腦ノ花ナリ、佛家舍利塔中ニ收ムルモノ多ハコレ也、又寶石ノコト、天工開物ニ詳ナリ、ソノ玫瑰ト云ハ、津輕舍利ノコト也、他書ニ玫瑰ト云ハ赤キ玉ノコトナリ、ハマナスヲ玫瑰花ト云モ、實ノ色赤玉ノ如キヲ以テ名ク、其ノ寶石ハ坑井中ヨリトリ出スト云、種類多ク、五色共ニ數名アリ、奥羽便覽及觀跡錄ニ詳ナリ、舶來ニ葡萄石ト云モノアリ、是物理小識ノ蜻蜓頭ナリ、津輕舍利ノ類ニシテ、大サ葡萄顆ノ如シ、故ニ名ク、今別ノ海邊ノワダル石モ葡萄石ノルイニシテ即馬腦ナリ、又寶石ノ一種ニザクロ石ト云アリ、又ジャクロ砂トモ云、コレハ紅毛ヨリ來ル、其形安石榴ノ子ノ如ク、色赤シ、又黑ヲ帶ルモアリ、盆玩ニ用ヒテ最美麗ナリ、此即集解ノ石榴子ナリ、然レドモ硝子ニテ偽ルモノ多ク、眞物ハ稀ナリ、奥州舍利濱、讃州鐵子口、及蝦夷等ニ、土産ニ假テ下品ナルモノアリ、又舶來ニトンボウ玉ト云アリ、コレハ黄白色ニシテ、正中ニ猫睛ノ如キ點アリ、是

馬瑙

〔箋注倭名類聚抄三玉石〕玉篇硨磲石次玉、陸氏蓋依之、所引釋地文今本作硨磲、俗字、藝文類聚、太平御覽引並不從石、與此合、證類本草引海藥云、車渠、集韻云、生西國、是玉石之類、形似蚌蛤、有文理、沈存中筆談、海物有車渠、蛤屬也、大者如箕、背有渠壟、如蚶殼、故以爲器、緻如白玉、生南海、尙書大傳曰、文王囚於羑里、散宜生得大貝、如車渠、以獻紂、鄭康成乃解之曰、渠車罔也、蓋康成不識車渠、謬解耳、尙書顧命、胤之舞衣大貝鼖鼓在西房、孔傳、大貝如車渠、正義云、伏生書傳云、散宜生之江淮取大貝、如大車之渠、是言大小如車渠也、考工記、謂車罔爲渠、大小如車罔、其貝形曲如車罔、故比之也、

〔和爾雅三玉石〕牟婆洛揭拉婆(梵語牟婆洛揭拉婆、此云青白色寶、今名硨磲、尙書大傳云、大貝如車之渠、車渠謂車罔、又狀類之、故名車渠、俗人字加玉石)

〔謠曲〕邯鄲

上歌

庭の砂に金銀の〳〵、玉をつらねて敷妙の、いはへの錦や瑠璃の扉、硨。磲。の行桁瑪瑙の橋、池の汀の鶴龜は、蓬萊山もよそならず、君の惠みぞ有難き〳〵、

〔倭名類聚抄十一玉〕馬腦　廣雅云、馬腦(俗音女、本字)石之次玉也

〔箋注倭名類聚抄三玉石〕今本作碼碯、玉篇碼碯石次玉也、然藝文類聚、太平御覽引並不從石、與此合、從石俗字、按證類本草引新補云、馬腦紅色似馬腦、赤美石之類、重寶也、生西國玉石間、來中國者皆以爲器、

〔本草綱目譯義八玉〕馬腦(和名ナリ)

馬腦ハ唐ヨリモ渡ル、上品ナリ、日本ニモタクサンアリ、加賀越中北國ヨリ上品ノモノ出ヅ、又奧州津輕ヨリモ出ヅ、雲州ノ玉造ト云處ヨリモ出ヅ、水戶ヨリモイヅ、江戶ニテ多ク火打石ニ用ユルモノナリ、加賀ノ物上品トス、越中ノ奧ニ馬腦山アリト云、今ハ此山ニ入ルコトナラズト云、品類多シ、玉ニヨク似タルモノナリ、水精ノ如クニムカウヘハスキトウラズ、玉ノ如シ、堅クシテ切ルコトアタワズ、コンガウシヤニテスルナリ、唐ニテハヤワラカニスル法アルニヤ、色々ノ細工

魄〔外蕃通要〕　虎珀珠〔同上〕　頓牟〔本草類物〕

舶來アリ、和產アリ、其品一ナラズ、時珍ノ說ニ、色紅而且黃者名明珀ト、本草原始ニハ、紅透者名明珀、俗呼血珀ト云、本草彙言ニ、血珀深紅如血色ト云、此ヲ血ズキト云、金珀ト云、上品トス、正字通ニハ、淡者名金珀ト云、通雅ニハ、從雲南來、而淡者曰金珀ト云リ、是ハ和ニ銀珀ト呼ビ、次品トス、即ココニ色黃而明瑩者名蠟珀ト云者ナリ、又コレニ次テ淡黃ナルヲ、和ニ蠟珀ト云、行厨集ニ、色蜜黃者曰黃珀、即俗所謂蜜蠟也ト云、本草彙言ニ、一種蜜蠟珀、臭之有蜜蠟香、色黃白ト云リ、凡ソ舶來ノ琥珀ハ皆透明ナリ、和產ハ濁テ透明ナラザル者多シ、是ミナ奥州鹿角郡南部久慈村山中ノ產ナリ、金蠟黑色淺深アリ、燒時ハ臭氣アリ、然レドモ高麗倭國者尤好ト、時珍云ヘリ、舶來ノ者ハ燒バ香氣アリ、是謂ユル香珀ナリ、琥珀ノ中、蜂蟻蠅蚊等ノ入リタルアリ、形色生ノ如シ、即殼ノ說ノ物象珀ナリ、本草彙言ニハ、象物珀ニ作ル、和ノ琥珀ノ中、黑色ヲ帶ル者ヲ、藥舗ニテ當陸ト名ケ賣ル、唐山ヨリモ當陸トナシ渡ス故ナリ、然レドモ是ナラズ、黑色ヲ帶ル者ハ琥珀ノ下品ナリ、其深黑色ナル者ハ次ノ條ノ翳ナリ、唐山ニテ古ヨリ、松脂入地千年而成ト云ヒ、或ハ茯苓千年而化ト云、或ハ海松木中津液ト云ヒ、或ハ楓木脂膏所化ト云ヒ、或ハ桃膠化ト云フ、本草彙言ニハ、楓脂珀桃珀ヲ載セ、惟東南海外、諸木脂化珀者有之、西北方無有也ト云、然レドモ久慈村ノ山ハ樹木ナク、燒山ノ如シ、其山ヲ掘リ、兩石ノ間ニ介レテ、長ク脈理ノ如ク續キテアルヲ穿テ出スト云、又松化石ノ中心ノ脂ノ化シタル者、紅黃白數品アリ、皆琥珀ノ如ニシテ、至テ堅ク、瑪瑙ニ同ジ、是石珀ナリ、慈石鐵ヲ吸ヒ、琥珀芥ヲ拾フハ、古ヨリ云ヒ傳ルコトナレドモ、拾芥ハ琥珀ニ限ラザルコトナリ、今肆中ニ下等ノ硫黃ヲ他物ノ末ト合セ、塊トナスモノアリ、金蠟石ト名ク、布上ニテ磨リ溫テ、塵埃ノミナラズ、檳榔扇烟管ノ類ヲモ吸ヒ寄ス、

翳　クロコハク

自然ニ成リタルモノアリ、最モ佳ナリ、又時珍曰有黑色者ト、是物理小識ノ黑珊瑚ニシテ、諸州ヨリ出ルウミマツト云モノ也、色黑クシテ硬ク光アリ、又琉球珊瑚、一名島珊瑚、一名又熊野珊瑚トモ云、形珊瑚ト同シテ、膚ニ細カナル穴アリ、漢名海松ト云、物理小識曰、海松全相似、惟有鍼眼、

〔白石遺考八〕玉考

珊瑚　此物經傳の中には見へず、漢の代より此名聞えたる歟、山に在て琅玕と云ひ、海に在て珊瑚と云由見えたり、さらば此物もと一物にて、其生ずる所に而其名異なるにや、禹貢爾雅等に琅玕の事見へたり、其代に南海の物いまだ中國に至らざるなるべし、琅玕と一物ならんには、是も右の玉にするもの也、一說に又海中の樹也、これを火樹とも云由見ゆ、

〔紀伊續風土記物產一〕珊瑚〈本草綱目〉〈和名鈔〉　牟婁郡田邊莊、海中に大なる者を產すといひ傳ふれども詳ならず、小なる者は牟婁郡海中處々に產す、今珊瑚砂といひて、盆石にそふる者、多くは石帆の碎けたる者にして眞物は少し、

熊野珊瑚〈阮石家にて、琉球珊瑚、牟婁郡にてサヒ、形、珊瑚と同形にして、黑緻密しからず、膚に鍼眼あり、物理小識に海松といふ、〉　牟婁郡海中に多く　黑珊瑚〈物理小識色黑く硬くして光あり〉　本國海中處々に多し

〔佐渡志物產五〕珊瑚

土人佐渡珊瑚樹ト名ヅケタ、海底ノ石ニ生ズルモノ、漁網ニカヽリテ上ルコトアレドモ、桃紅色ニテ美トスルニタラズ、所謂似テ非ナル物ナルベシ、

黑珊瑚トモ云ベキモノ、漁網ニ掛リテ上ルヲ、方言海松トイフ、土人琢磨キテ愛翫スルナリ、前ノ佐渡珊瑚樹ニ比スレバ、尤深麗ハシキモノ也、

〔西遊記三〕珊瑚〈さんご〉

又珊瑚珠も熊野の海中より出づ、是も甚小にして、緒ジメなどの玉には造りがたし、これを以て

琉璃

白中貫、或平圓面微凹、向日如凹鏡者有之、蓋火珠則水精也、

〔令義解一職員〕典鑄司

正一人、〈掌下造二鑄金銀銅鐵一、塗二飾瑠璃一、〈謂、大青珠也、〉玉作、及工戸戸口名籍上事、〉

〔本草綱目譯義八玉〕琉璃

ルリト云ナリ、和產ナシ、天竺ニハアリ、七寶ノ中ニ入テアリ、七寶ニモ說アリ、金銀、琉璃、玻璃、馬瑙、

珍珠瑪瑙、〈硨磲ノ說〉

〔大和本草三金玉土石〕硝子

琉璃ハ大秦國ニ出ヅ、五色アリ、是石質ニテ自然ノモノナリ、非二人巧一、今俗所レ用硝子ヲモ琉璃ト云、是ハ藥物ヲ以作ル、琉璃ノニセ物ナリ、近來此製法中華ニ傳リ、琉璃器、火齊珠、南豐珠、大秦珠等ノ名アリ、皆ビイドロ也、巖瑛ニモ琉璃ノ製法アリ、通鑑綱目ノ註ニ曰、琉璃ハ近世亦有二火成者一、尤澤蓋不レ減也、又遵生八牋ニ、硝子ト云物即是也、本草水精ノ集解ニ、藥燒成者有二氣眼一、謂二之硝子一、一名海水精、又琉璃ノ集解云、今ノ俗所レ用皆銷二冶石汁一、以二衆藥一灌而爲レ之、虛脆不レ貞ト、今按皆是ビイドロナリ、

〔白石遺考八〕玉考

琉璃　此物玻璃と一物に而西國の寶也、玉石の類にて土中に生ずると云、亞亞の地より出る由、後漢書に見へ、大秦國より出る由、魏略に見ゆ、今世にある物は、藥玉とて藥にて製れる物と見へたり、〈唐器にビイドロと云しもの事也、〉

○玻璃ノ事ハ、倚ホ產業部玉工篇硝子ノ條ニ在リ、

珊瑚

〔倭名類聚抄十一〕珊瑚　說文云、珊瑚〈刪胡二音〉色赤玉、出二於海底山中一也、

〔箋注倭名類聚抄三玉石〕原書玉部、作色赤生二於海一或生二於山一、太平御覽引同、而海下有二中字一、希麟音義

琉璃

増、テ。ラ。ナ。イ。シ。ハ美濃赤坂ヨリ出ス、石質蠟石ノ如ニシテ、温潤ニシテ光澤アリ、白色ニシテ黃色ヲ交ヘ、紅點アリテ、朱砂ノ如ク、靑紫色ヲ帶テ紋理ノ如シ、五色相雜ルコト、恰モ印華布ニ似タリ、故ニテラナイシト云フ、近年盛寵ニ造ル者、北野菅公ノ廟ニ在リ、甚觀美ナリ、是レ昌化縣志ノ圖書石ナリ、曰、圖書石紅點若硃砂、亦有靑紫、如紋理、良可愛玩、近則罕得矣、

〔新編常陸國誌土産十六〕石英　久慈郡瑞龍村、多珂郡諏訪村ヨリ出、

〔本草綱目譯義石十〕水。中。白。石。　メクライシ　メツブシ　水イシ　メ。ク。ラ。水。精。、コレハ流水中ニ多シ、水底ニアリ、見キメ白キ石ナリ、形大小アリ、取テ日ニ映ジテスカシテ見レバ、瑪瑙ノ如クスク也、水精ホドニハ透明ナラズ、故ニメクラ水精ト名アリ、コレヲ紫燒ノ藥ニモ用、又礬子ニモ用、故ニビイドロ石トモ云、唐ニテハコノ石ヲ仙術家ニ服スト云ナリ、

一名　水中石子證類　水中圓石同

〔紀伊續風土記物産一〕水中白石本草　牟婁郡田邊莊鮎山村揚埼サキの濱に產す、

〔採藥使記下信州〕黑任曰、信州和田峠ト云フ所ニ星石ト云フ物アリ、其色黑クシテ水晶ノ如ク透キ、其中ニ白キ星ノ形アリ、　充生按ズルニ、是レ西國ニテ黑。水。晶。ト云フ石アリ、此ノ類ナルベシ、

〔倭名類聚抄玉十一〕瑠璃　野王按、瑠璃、流離二音、俗云留利、靑色而如玉者也、

〔箋注倭名類聚抄玉石三〕見職員令典鑄司掌、空物器吹上上零、所引文今本玉篇不載、按漢書西域傳、罽賓國出珠璣珊瑚虎魄璧流離、注、孟康曰、流離靑色如玉、顏氏糾本之、顏師古曰、魏略云、大秦國出赤白黑黃靑綠縹紺紅紫十種流離、孟言靑色、不博通也、此蓋自然之物、采澤光潤、踰於衆玉、其色不恆、今俗所用、皆銷冶石汁、加以衆藥、灌而爲之、尤虛脆不貞實、非眞物、又按、瑠璃胡語、言璧流離、又漢書地理志西域傳、漢碑武梁祠堂畫象、吳國山碑皆同、或省言璧琉、見說文、或省言流離、見楊雄羽獵

素飛龍石藥爾雅、　素玉女　銀華　水精上共同

本邦ニテ皆水精ト呼ブ、諸國ニ生ズ、舶來上品和產モ上品アリ、皆六稜アリテ削リ成スガ如シ、明徹ナルヲ良トス、ウルミタルモノ、或ハ內ニヘダテアルハ下品ナリ、五色アリ、紅ト靑トハ稀ナリ、黃ト紫トハ少シ、黑ト白トハ多シ、佐州、石州上品、江州田上山、鏡山、三上山等ニ多ク有レドモ、上品ハ少シ、一床ニ五色雜リ生ズル者甚少シ、山城ノ愛宕山、及樫原ノ山ニ生ズル者ハ、鮫。水。晶。ト云、短小ナル水精多ク床上ニ集リ生ジテ、鮫魚皮ノ形ノ如シ、凡四方諸州ミナ石英アリ、和州ノ大峯、信州ノ妙義山○信上國[illegible]ニハ、黃色ニシテ大ナルヲ產ス、又ヘリ水晶アリ、黃色モアリ、長サ一寸許、甚細タシテ多ク床上ニ亂レ生ズ、江州大篠村相谷ノ奧ニ水精ガ嶽アリ、千本水精ヲ生ズ、長サ二三寸許、潤サ二三分許ナル者多ク亂レ生ズ、又出羽ノ東嶺ニ水晶ノ井ト呼ブアリ、自然ノ洞穴ニシテ、其中四面ニ水晶生ジ盈テ、牡丹ノ花ノ如シ、錢ヲ以テソノ中ニ投ズレバ、落ルコト遲ク、鳴ルコト久シ、コレ井深ク花ノ如キ水晶多クシテ、錢コレニ觸テ聲ヲナス也、出羽人語ル又石英ノ中、空ニシテ水アルアリ、是ヲ側轉スレバ、必水上ニ升ル、是レ水下ニアリテ沫升ルナリ、一滴ノ水ナレドモ、數十年乾カズ、玩石家コレヲ貴ブ、俗ニ水入リノ水晶ト呼ブ、因樹屋書影ニ之ヲ含水水精ト云、又水精ズナハ、羽州米澤觀音山、筑前御笠郡、丹後乙濱、及讃州ニ產、色白徹ナリ、和州南都ニハ砂中ニ雜リアリ、城州稻荷山モ亦然リ、

〔本草和名三玉石〕白。石。英。　一名、白素飛龍、出丹口訣黃石英、黃端赤石英、赤端靑石英、靑端黑石英、黑端一名、白埘、雷府、出說名苑出太宰偏中國、

〔佐渡志五物產〕白石英　方言吹ワレ

金銀坑中ニ生ズ、大小長短均シカラズ、上品ハ至テ稀ナリ、中品以下ハ時ニ出ルコトアリ、皆六稜アリ、土人水アリテ水晶ト稱スルモ、石貫水ヲ含テコレヲ轉側スレバ、其水升降スルニ似タリ、世

石英

〔箋注倭名類聚抄 五 玉石〕昌平本下總本有和名二字、百錄抄云、以火取玉寫陽燧、火取玉又見寶物集、按、舊唐書南蠻傳、林邑國、漢日南象林之地、在交州南千餘里、貞觀四年、其王范頭黎遣使獻火珠、大如鷄卵、圓白皎潔、光明數尺、狀如水精、隋唐嘉話、貞觀初、林邑獻火珠、狀如水精、云得於羅刹國、正午向日、以艾蒸之、卽火燃、墮和羅國、去廣州五月日行、貞觀二十三年、遣使獻象牙火珠、波斯國在京師西一萬五千三百里、出火珠、時珍曰、今占城國有火珠、名朝霞大火珠、又按、湯瑳卽陽燧俗字、燧通作遂、見周禮司烜氏注、正義云、取火於日、故名陽遂、又禮記內則篇有金燧、鄭注、金遂可取火於日、周禮考工記、金錫半謂之鑑燧之齊、說文作陽𨪐、其字从金、是陽燧金器、非玉石類、然論衡亂龍篇云、陽燧取火於天、五月丙午日中之時、消鍊五石、鑄以爲器、乃能得火、則鍊石以取火、亦名陽燧、故俗从玉、遂與說文瑒圭字、及毛詩稱々佩璲字混無別、火精之名未見所出、新唐書西域傳、天竺貞觀十五年、獻火珠、舊失名出師子、天寶初獻火珠、

〔重修本草綱目啓蒙 六 玉石〕水精附錄、火珠、ヒトリダマ

水精ヲ圓形ニスリタル玉ヲ、俗ニ水晶輪ト云、人物コレニ向テ照セバ、ソノ形必倒ニウツルモノナリ、此ニテ日輪ノ陽火ヲ取ルベク、月中ノ陰水ヲ取ベシ、故ニ火トリダマ、水トリダマト呼ブ、然中陽火トレヤスキ故ニ、火珠ト云、然ドモ水精ニカギラズ、凡透明ナルモノ、硝子或ハ氷ニテモ、凸ニ製タルモノニテ皆火ヲトルベシ、物理小識曰、紅者曰火晶、可取火、白者曰水晶、可取水、亦可取火、

〔寶物集 一〕傍ヨリ人々、玉ハ寶ナリト云ドモ、末代ノ凡夫ノ爲ニハ寶ト云ベカラズ、我朝ニハ火取玉、水取玉ノ外ニ德ヲアラハス玉ナシ、下略

〔本草綱目譯義 八 玉石〕白石英　水精ノ白キモノナリ、水精石英二物ニハアラズ、シロズイシヤウ、ケンジヤリ　クンサキノジヤリ 播州　カブトズイシヤウ　カザブクロ 佐渡　フキワレイシ 同　山ノカミノタガチ 奥州　ホシクソ 土佐

書、以此掩目、精神不散、筆晝倍明、中用綾絹聯之縛于腦後、出于西域滿剌國、靉靆ハ眼鏡ナリ、紅夷ヨリ來ルハ硝子ヲ用ユ、日本ニテ製スルハ水晶ヲ用ユ、硝子ハクダケヤスク、水晶ハワレガタシ、水晶尤ヨシ、水晶ヲヌグフニハ絹及ラシャヲ用ユ、硝子ヲヌグフニハ燈心ヲ用ユ、老人ノ昏眊ヲ助クル日用ノ重器也、好品ヲ可擇用、

〔屠龍工隨筆〕水晶は金山にあるものにて、安藝の彌仙、奥州の金花山にあり、各六角にして高サ五尺計といへり、

〔毛吹草三〕陸奥　南部水精(外ヨリ宜ト云)　安藝　水晶　豐前　水精　豐後　水精

〔甲斐國志百二十三附錄〕一水精(黑水奥夏上晶大万)　和名抄云、水玉一名月珠、水精也、水精ト石英トハ一物二種ナリ、時珍云、水精有黑白二色、倭國多水精、第一南水精白、北水精黑、東璧ノ曰、石英大如指、長二三寸、六面如削、白徹有光、長五六寸者彌佳也、平賀國倫云、石英ニ五色アリ、大小皆六面、如削上鋭レリ、水精ハ顆塊定ル形ナレト、金峯ノ水晶、還布水晶嶺ヨリ產スル者大小皆六面ナリ、東山ノ玉小星ト云處ノ產ハ長大美好ナリト云、

栗原筋石森丘熊野權現ノ社地ヨリ石英ヲ產ス、水晶溪ト云處アリ、竹森村玉宮社地ヨリモ多產ス、貢紫赤白黑アリ、當村舊作玉森、玉井郷ト號セシ處ナリ、玉山等ノ事ハ古跡部ニ委シ、玉宮神殿中ニ藏置者ハ周リ五尺許、高七尺餘、地中ヨリ生ジタリト云、秘封シテ今觀者ナシ、又雲母ヲ產ス、田野山入リ天目ノ邊ヨリ產スル水精上品ニシテ、稀ニハ苔入、松葉入リモアリ、牛奥通明神ノ社地、河浦村ノ雷平、各石英アリ、北山筋石水寺山及塚原ノ金子峠ニ水晶金礦アリ、

逸見筋淺川村ニ水晶山アリ、石英モ產ス、此處ハ多麻ノ莊トテ、津金山ノ續キナリ、須玉川ト云モアリ、以金玉爲名ユヱハ、卽チ是レナルベシ、甘利ノ莊苗敷山、又流レ川ノ上流ヨリモ產ス、皆ナ石英ナリ、

りくろしげ也、松坂の故先生○本居宣長はあたら〳〵まのいふ事也とて、長々しき說あれど迂遠なり、○中略正明おもふに、あら玉は璞いまだみがゝざる玉也、そは砥をもてみがく故とかゝる、あらがねは鐵いまだ鍛はざる金也、そは鎚もてきたふ故つちとかゝる、あら玉はふるき說にありしにや、あらがねは今やはじめならん、此二ツいひかゝりたるさま、もはらおなじければ、相てらして心得べし、

〔新編常陸國誌 六十一土產〕水晶 那珂郡油河內村多珂郡大久保村ヨリ出、○常陸考云、大久保ノ山中往々拾得水晶、寬政元年八月多珂郡秋山村ノ民、板本山ニ入テ薪ヲ採ル璞ヲ得タリ、攜テ人ニ示ス、人曰、玉ナリ、後再ビ行テ其地ヲ掘ル、水晶ヲ得タリ、傳說ス、寶永天明ノ間、コノ村ノ土人、玉ヲ得ル者二人アリト云、

〔倭名類聚抄 十一玉石〕水精 兼名苑云、水玉、一名月珠、和名美豆止流太萬水精也、

〔箋注倭名類聚抄 三玉石〕昌平本、下總本、有和名二字、水取玉見平康頼寶物集、按南山經云、堂庭之山多水玉、注、水玉今水精也、兼名苑蓋本於此、月珠之名未見所出、水精也三字、蓋兼名苑注文、下條火精也同、神祇式、鎭新宮地祭、水玉五十枚、時珍曰、水精亦頗黎之屬、有黑白二色、倭國多水精、第一南水精白、北水精黑、時珍又釋水精名云、瑩徹晶光、如水之精英、

〔倭訓栞 中編二十五〕みづとるたま 和名抄に、水精をよめり、神祇式、鎭新宮地祭に、金銀各五兩、銅鐵各五十斤、水玉五十枚と見えたるは、水精の一名なり、月の水をとるに用う、よて月珠ともいへり、

〔延喜式 三臨時祭〕鎭新宮地祭
金銀各五兩、銅鐵各五十斤、水玉五十枚、○下略

〔本草綱目譯義 八玉〕水精 スイシヤウ

則作琨瑤似誤倒、然吳都賦有琨瑤則瑤琨戒可謂琨瑤也、又按淮南子墜形訓注云、球琳琅玕皆美玉也、禹貢孔傳云、瑤琨皆美玉、淮南子說山訓注云、琬琰美玉也、故云皆美玉名也、又是五字、蓋彙名𥳑注文、說文、球玉磬也、琳美玉也、琅玕似珠者、瑤玉之美者、琨石之美者、琬圭有琬者、琰璧上起美色也、

〔本草綱目譯義八金〕玉和訓タマ

玉ト云ハ別ニ一種タチアリ、水精ノ如クニスキ通ルモノニアラズ、孟子ニ溫純含蓄ト云ヘリ、日ニスカス時ハ光リアリテ馬腦ニ似ルモノナリ、玉ハ唐ヨリ器ニシテ渡ルナリ、玉ト馬腦トノ分チハ、馬腦ハタヽイテモ音ナシ、玉ハフトノスルモノナリ、白キアリ、ウス靑キアリ、モヘギ色アリ、唐ヨリ器物ニシテ渡ルニ、水入レ或ハ石ノフピナドニシテ、スカシノホリタルモノアリ、玉ナリ、本條ニ玉ト云時ハ、白玉ヲ指テ云ナリ、日本コトバニ、ナニヽテモ丸クナシタルヲタマト云、唐ニモ此例アリ、此ニ玉ト云ハ夫ニアラズ、白玉ヲ云、

〔重修本草綱目啓蒙五五玉石〕玉タマ

本條ハ白玉ヲナス、和產加州豐後等ニ出ルモノハ、多クハ瑪瑙ニシテ、玉ニ非ズ、舶來器物ニ作リタル玉ニ白色アリ、アサギ色アリ、綠色アリ、凡玉ハタヽケバ聲アリテ金ノ如シ、同ジ狀ナレドモ、聲無キモノハ瑪瑙ナリ、水晶ハヨクスキトヲリ、玉ハスキトヲラズシテ、溫潤含蓄ノ氣象アリ、玉ノコトハ、天工開物ニ詳ナリ、又奥儕便覽ニ靑玉倭國ヨリ出ト云、

〔延喜式四十彈正〕凡白玉腰帶、聽三位以上及四位參議著用、

〔蝦夷國風俗記四蝦夷拾遺〕產物

靑玉　世俗一名虫ノ巢玉トモ唱海底ニ生ズト云、荒井君美ノ蝦夷志ニモ、是ヲ以靑琅玕ヲ生ズト云誤ナリ、全クエゾノ產ニ非ズ、マンデウヨリ山丹ヲ經テ、カラフト島ヘ渡シテ、カラフトノ

〔倭名類聚抄十一玉〕珠　白虎通云、海出明珠、日本紀私記云、眞珠之耳太麻、

〔箋注倭名類聚抄三玉石〕所引白虎通封禪篇文、說文、珠、蚌中陰精也、本草圖經所載生於珠牡、珠牡、蚌類也者、珠牡俗謂珠母、六帖詠海士歌、僧西行歌所詠阿古也是也、故字治拾遺物語謂之阿古也乃太麻、今俗眞珠音讀、謂鰒魚中得者爲鮑之眞珠、眞珠見允恭十四年紀、按允恭紀所載眞珠鰒魚中所得、見書紀武烈天皇御歌云、阿波寐之羅陀麿、萬葉集所詠鰒珠皆是、陶弘景云、石決明、是鰒魚甲、內亦含珠者是也、下總本眞珠下有訓字、按眞珠見雜式、又大神宮儀式帳、內藏寮式、民部省式、萬葉集、又大安寺資財帳所云白玉卽是、非下條所載白玉、

○眞珠ノ事ハ、動物部介篇ニ在リ、參看スベシ、

〔古事記上〕此時伊邪那岐命大歡喜詔、吾者生生子而於生終得三貴子、卽其御頸珠之玉緖母由良邇此四字以音、下效此、取由良迦志而、賜天照大御神而詔之、汝命者所知高天原矣事依而賜也、故其御頸珠名謂御倉板擧之神、訓板擧云多那、○下略

○頸珠ノ事ハ、服飾部服飾雜載篇ニ在リ、

〔令義解職員〕內藏寮

頭一人、掌金銀珠玉、寶器、錦綾、雜綵、氈褥、諸蕃貢獻奇瑋之物、年料供進御服、及別勅用物事、○下略

〔東雅七器用〕珠タマ　玉タマ　並に義不詳、我國太古の俗、珠玉をもて寶とす、されば凡物を美する詞に、玉をもて加稱せし少からず、又ヌといひ、ニと云ひしが如きも玉也、舊事紀には瓊の字を借用ひられしかど、古事記にはこれに因らずして、沼の字を借用ひたり、日本紀私記には、師說を引て瓊赤玉也と云ひしかど、越後國風土記には、八坂丹、玉名、謂玉色青、故云青八坂丹玉也と見えたり、ヌといひ、ニといふが如きは、其轉語と見えたれど、或は赤玉とし、或に青玉とす、其詳なる事を知らず、言靈には、玉とは、タは高也、マは圓也、其價高く、其形圓なるをいふ也と云ひけり、またヌといひ、ニといふが如きも、舊事紀には古語に赤色をニといふ事のあるに因りて、瓊は玉の

古事類苑

金石部四

玉石上

玉石ハ玉ト石トナリ、アレド玉ト石トノ區別ハ甚ダ詳ナラズ、蓋シ支那ニ在リテハ、玉ヲ珠、玉璞ニ分チ、海ヨリ得ルモノヲ珠ト云ヒ、陸ヨリ得ルモノヲ玉ト云ヒ、其未ダ磨カザルモノヲ璞ト云フ、或ハ自生ヲ珠ト云ヒ、磨ケルヲ玉ト云フト云フ說モアリ、我邦ニテハ、珠、玉璞ヲシンクユ、シラタマ、シラタマ、アラタマト云フ、倭名類聚抄ニハ、水晶、瑪瑙、瑠璃、琥珀、硨磲、馬腦ヲ玉ト爲セドモ、本草綱目ハ皆之ヲ石ト爲セリ、而シテ珊瑚ハ之ヲ海底ノ山中ニ產スト云ヘルニ據レバ、コハ正ニ珠ニ當ルナリ、

石ハ其種類甚ダ多クシテ、其名稱一ニアラズ、或ハ其形ニ依リテ名ヅクルモノアリ、或ハ其効用ニ依リテ名ヅクルモノアリ、或ハ其產地ニ依リテ名ヅクルモノアリ、

我邦ノ山中ニハ石材ヲ出ス所甚ダ多シ、石材ニハ御影石、白河石、伊豆石等、海內ニ聞エ、寶石ニ、金剛石ノ名アルモノ一二ノ地ニ出ヅト雖モ、其質稱スルニ足ラズ、蓋シ溫泉地ニハ多ク硫黃礬石ノ類ヲ產シ、中國九州各地ニハ多ク石炭ヲ產ス、

化石ハ動植物ノ土中ニ埋リテ石ト爲レルモノニシテ、往々其原形ヲ存ス、即チ貝石、松石、蟹石、木葉石、樹木石等ノ名アル所以ナリ、此他海內各地奇石ニ乏シカラズ、鸚鵡石ハ音響ヲ反射スル石ニシテ、本邦各地ニ多シ、

○按ズルニ、水銀粉ノ事ハ、尙ホ器用部容飾具篇白粉種類條ニ在リ、

キラ光リアリ、コレヲ上品トス、コレヲ粉ニスレバ、米ノ如ク赤キナリ、下品ニハ黑ミアリ、故ニ外エ朱ヲヌリテ僞ルナリ、コレハ藥ニ用ルニヨリ、朱ヲ洗ヒ去ベシ、本ト辰砂ニハ無毒ナリ、コレヲ水銀ニスレバ甚毒アリ、朱ハ水銀ニテヤキタルモノ故ニ、甚毒アルナリ、今ハ大ナル辰砂ハ渡ラズ、皆細末ニナリタルナリ、其中ニ雄黃鐵砂交ルナリ、故ニ日本ニテ水干シテコレヲナテルナリ、水干スレバ、雄黃ハ上エ浮ビ分チ易シ、鐵砂ハ同ク沈ミ分チ難シ、且鐵砂ハ形色モ辰砂ニ似タリ、然レドモ鐵砂ハ黑ク光リアリ、辰砂ハ赤黑シテ光リアルナリ、故ニ分チ易キナリ、今藥店ニ水干辰砂ト云、水干シタ雄黃鐵砂去リタルト云コトナリ、日本ニモ辰砂ハ發ナリ、然ドモ藥店ニ未出ナリ、昔若水先生ノ吟味セラレシ時ハ、豐前ノ下毛郡草本村ヨリ出シナリ、コレハ朱砂ナリ、其ノチ大和ノ芳野ノ川上ト云處ヨリモ出、コレモ朱砂ナリ、然モ豐前ノヨリハ赤ミ多、上品ナリ、又近年ハ奥州仙臺ノ方ニ、古渡ノ如ク塊ヲナシタルガ出ルト云、コレハ上品ナルベシ、然ドモ未京エハ出ズ、本ト丹ト計リ云ハ、辰砂ノ本名ナリ、故ニ南方ノ中ニモ、眞丹ノ名アリ、今寺社ナドノ彩色ヲスル、赤黃色ナルヲ丹ト云ハ和名ナリ、コレハ鉛ヲヤキテ製ス、故鉛丹ト云ナリ、又辰砂ニ比レバ、黃ナル故ニ黃丹トモ云、

〔重修本草綱目啓蒙 五石〕靈砂　一名二氣丹（本草蒙筌）　氣砂（古今醫統）

靈砂ノ煉法ハ、醫宗粹言ニ詳ナリ、舶來ノハリ辰砂是ナリ、形辰砂ノ如クニシテ、京針紋アリテ東針ノ如シ、色赤黑ニシテ銀光アリ、和ニ朱砂ト呼モノアリ、今ハ水銀燒ト呼ブ、コレハ銀硃ヲ燒タ罐中ニアルモノナリ、靈砂ト銀朱ト、煉法藥味相同ジ、只硫黃ノ量異ナルノミ、故ニ水銀燒ヲ以テ靈砂ニ代用ルモ可ナリ、

〔續日本紀 一文武〕二年九月乙酉、令近江國獻金靑、伊勢國朱砂、雄黃、常陸國、備前、伊豫、日向四國朱砂、安藝長門二國金靑、綠靑、豐後國眞朱、

須之說無稽、狂妄耳、又方書云、馬齒莧取草錫者妄言也云々、皆出來ヌコト、見ルナリ、水銀ハ長崎大坂ナドニテ辰砂ヲヤキトルナリ、舶來多ク上品ナリ、又本ト伊勢ヨリ上品出シナリ、今ハ出ズ、コレハ自然ト土中ヨリ出シト云ナリ、

〔蒹葭堂雜錄 三〕一說に、草より汞を取法あり、又拂林國の水銀は、海中に有といへり、本邦往昔は山中より掘出せし物と見へて、和銅六年、伊勢國より水銀を獻すること、續日本紀に見たり、又延喜式に、伊勢國の貢の數中に水銀あり、又百練抄に、承曆元年五月、宋國へ賜水銀五十兩と有、然ば當時水銀を採得ること最大なることの證なり、又草根集題名所杣、

根を絕てきらぬ草木もあれぬべしみづかねをほる丹生のそま山

〔延喜式 内藏 十五〕諸國年料供進

水銀小四百斤伊勢國

〔續日本紀 元明 六〕和銅六年五月癸酉、令大倭參河並獻雲母、伊勢水銀、○下略

〔大安寺伽藍緣起流記資財帳〕合水銀貳佰三拾壹斤伍兩 ○中略

天平廿年六月十七日 ○下略

〔七十一番歌合 下〕五十六番　右　汞ほり

みづかねの草の葉かとみゆる露にやどれる月の光を

〔大和本草 金玉土石 三〕水銀 ○中略

今鍛匠、以此磨鏡、

〔毛吹草 三〕伊勢　丹生山水銀 諸國ノ外當所ニ有

〔採藥使記 勢州 下〕重康曰、勢州山田伊澤ノ砂中ヨリ水銀ヲ出ス、砂石ヲユリテ採ル、和邦ムカシヨリ水銀出ス事、他所ニナシト云ヘリ、

用之、醋調塗足心、(治金瘡) 鼻皶赤皰(密陀僧二兩細研、人乳調、夜塗、旦洗、) 痘瘡瘢黶(上同方) 野雞斑點(上同方) 陰汗濕痒(密陀僧末傅之、或加蛇床子末、)

按、密陀僧、灰吹之渣也、有金密陀僧、銀密陀僧二種、以黃白色別之、用於膏藥中者也、阿蘭陀流阿房須膏藥中入用、或桐油漆方中入之、近世本朝亦多出之、長州萩、及豐後出之、

(本草綱目啓蒙 入金) 密陀僧

通名ナリ、外科ニ多ク、丹工金密陀、銀密陀ノ分チアリ色ヲ以テ分ツナリ、銀密陀ハ日本ニモタタテンアリ、長州ノ萩、豐後出羽ノ秋田、其外銀山ヨリ出ヅ、銀ト鉛ト一ツニアルモノヲバ、イツキニ入テ吹ケバ、ナマリハ早クトケル故、下ニアリ、銀ハ上ニノコル、密陀僧ハ銀ト鉛ノカスナリ、シツボノ底ニアツマリアルナリ、ソコロカスト云モノナリ、鉛ノ如クニシテ黑ミアリテ白ク光リアリ、ノギスジアリテ重キモノナリ、金密陀ト云ハ舶來ナリ、今渡ラズ、藥店ニモ少ナシ、赤ガネノ如クノギスジアリ、條解ニ形似黃龍齒面堅重ト云モノ此ナリ、外家ニ貴ブナリ、金密陀ヲ古今醫統ニ金爐ト云、

本條一名　陀僧(本草必讀)　爐陀僧(醫學統旨)　灰坏(本草蒙筌)　甜面淳子(醫[illegible]錄)

(佐渡志 五 物產) 金密陀僧　方言ロカス

小判所トテ、通用金ヲ製スル所ヨリ出ヅ、官禁嚴ニシテ得ガタシ、

銀密陀僧

吹分所トテ、金銀ヲ分ル所ヨリ出ヅ、官禁ノ嚴ナルコト前ノゴトシ、

(和漢三才圖會 五十九 金) 亞鉛　止多牟、番語也、

按此未知何物、蓋類鉛、故稱亞鉛、長尺許、幅五六寸、厚不及寸、鎔冶作成者也、或有藥研形、或如花莚者、出於廣東者爲上、東京暹羅之產次之、今造唐金具鍮諸器者、並不加亞鉛、則不成實此重寶也、恐是爐

かしたる鉛をながす也、

〔和漢三才圖會 金五十九〕鉛(なまり) 音沿 青金 黑錫 金公 水中金 和名奈萬利

本綱鉛生山穴石間、人挾油燈、入至數里、隨礦脈上下曲折、斫取之、其氣毒人、若連月不出、則皮膚痿黄、腹脹不能食、多致疾而死矣、山草靑莖赤、其下多鉛、鉛錫之精爲老婦、鉛有數種、波斯鉛堅白爲天下第一、倭鉛可勾金、

鉛乃五金之祖、故雌黄乃金之苗、而中有鉛氣、是黄金之祖矣、銀坑有鉛、是白金之祖矣、信州鉛雜銅、是赤金之祖矣、與錫同氣、是靑金之祖矣、硃砂伏于鉛而死于硫、硫黄戀于鉛而伏于硇、鐵戀于磁而死于鉛、雄黄戀于鉛而死于五知、故其變化最多、一變而成胡粉、再變而成黄丹、三變而成密陀僧、四變而爲白霜、鉛性又能入肉、故女子以鉛珠紝耳、卽自穿孔、實女無竅者以鉛作鋌、逐日紝之、久久自開、又鑄爲梳、梳鬚髮、令光黑、

按、鉛音延 說文云靑金也、鈆音緣 美鐵也、然俗誤以爲同字、且本草綱目亦用鈆、或析其字爲金公者、時珍之誤矣、本朝出鉛山不少、對州、羽州、賀州、紀州、豐州皆有之、

〔鼓銅圖錄〕沈鉛取銀(［illegible］)

取銀先作灰爐、(天工開物是曰灰池、其製篩灰爐上、令凹可徑尺許、深中央稍凹、)安鉛入炭火、又將濕灰環築如隄防、前鑿一竇、設戶扇、(［illegible］)而其上蓋乾土板、濕灰塗其隙、然後緩々鼓鞴、火熱功到、鉛汁漸滲入于灰中、爲底子、須(［illegible］)銀、則世實凝然成小圓片、在中央、此銀名灰吹銀、

右取銀法盡于此、

〔和漢三才圖會 金五十九〕鉛○中略

錫薄　近年製之、未過一月變色、故今不用、鉛薄亦然也、共此爲銀薄之質、

鉛霜(なまりのしも)　一名鉛白霜　白粉(おしろい)　見于容飾具下、

白鑞

トナリテ、此ノ香合ヲ用ル人多ク有之、シカノミナラズ藥ヲ修治スルニハ、銅鐵ヲ忌テ、煎熬スルニハ蒙昧ノ病家、カラカチ鍋ヲ以テスレドモ、銀鍋瓦鐺ニ代ヲト敎ル醫人ナシ、誠ニ可嘆哉、

〔和漢三才圖會〕〈五十九金〉白鑞　俗云之呂女　鑞上品者名白鑞、與此同名異品也、

按白鑞造法、鉛一斤、唐錫十兩、相和鍊成每用之、雖銅鐵之耳鐶、銅鍋釜之脫漏、或注藥鑵裏、否則其湯銅臭不可吃、錫工必用之物也、如用倭錫者不佳、僞者止用鉛一味、故遇火則沸失、〈但鉛多錫少者雖遇火不沸、其鑞不敗耳〉

〔鼓銅圖錄〕附錄銅白目陶汰〈中略〉

○○白目者無別用、止可參於鑄錢火爐之剩銅、銅得此不滯脫模、刻畫分明、

〔延喜式〕〈四十一彈正〉凡純素金銀及白鑞錺、爲五位已上服用之飾、

〔延喜式〕〈十七內匠〉御鏡一面〈方七寸〉料、熟銅大四斤、白鑞大一斤四兩、錫大十二兩、〈中略〉

內印一面料、熟銅大一斤八兩、白鑞大三斤、〈中略〉

小行障四具料、〈中略〉白鑞薄六枚、〈方八寸中略〉

大醫署二合料、〈中略〉白鑞薄十枚、〈方八寸下略〉

〔續日本紀〕〈一文武〉二年七月乙亥、下野備前二國獻赤烏、伊豫國獻白鑞、　乙酉、伊豫國獻鑞鑛、

〔愛媛面影〕〈一新居郡〉白鑞　大生院村大野山一川と云所より出す、上品也、俗に伊豫白鑞と名く、

○按ズルニ、伊豫白鑞ハ、今謂フ所ノアンチモニーナリ、

〔續日本紀〕〈一文武〉二年十一月辛酉、伊勢國獻白鑞、

〔大安寺伽藍緣起流記資財帳〕合白鑞壹阡玖佰貳拾壹斤拾五兩〈小〉

肆拾斤陸兩〈大〉〈中略〉

天平廿年六月十七日〈署名略〉

〔東大寺大佛記〕金銅盧舍那佛像一軀結跏坐高五丈三尺五寸、〈中略〉用熟銅七十三万九千五百六十

コトロハシ、能ク針ナドヲ吸フユヘニ、八閩通志建寧府ノ下ニモ、磁石ノ異名ヲ𢴀針石ト名ヅク、

(本草一家言四石)磁石

近世採藥使到奥州南部閉伊郡久志村、有山自古相傳云、產磁石、其山童而不生草木、但產種々石藥理石佳石明礬等、其品不一、最後山名久志、此山專產磁石、予親目擊之、則其色墨赤褐而有星點、能吸鐵不異漢渡者、其餘膽礬石英水精產此山云、

玄石

(倭名類聚抄一石)玄石　本草云、玄石一名玄水石、今按、慈石、又有玄石之名、

(箋注倭名類聚抄一山石)所引中品文、陶注云、本經慈石、一名玄石、別錄各種、蘇注云、此物鐵液也、但不能拾針、慈石中有細孔、孔中黃赤色、其無孔光澤純黑、玄石也、不能懸針也、李時珍曰、慈石生山之陰有鐵處、玄石生山之陽有銅處、雖形相似、性則不同、故玄石不能吸鐵、小野氏曰、生慈石之山、皆有玄石、李說未必然、按本草又云、慈石、一名玄石、此注所云卽是、

(本草綱目譯義十石)玄石　慈石ノ下品ニシテ針ヲ吸ヌナリ、形色慈石ニ同ジ、慈石鐵ノ生ズル山ニアリ、コノ石モ慈石ノ生ズル處ニアリ、

錫

(倭名類聚抄十一金)錫　唐韻云、錫先擊反鉛錫、爾雅云、錫謂之鈏、羊晉反兼名苑云、一名白鑞、盧盍反、和名、之路奈麻利、

(箋注倭名類聚抄三金)按郭璞注、爾雅錫謂之鈏、云白鑞、兼名苑蓋本之、周禮職方氏注、錫鑞也、急就篇注、錫在鐵鉛之間、卽今白鑞也、皆與郭璞同、本草和名、錫銅鏡鼻條云、鉛一名白鑞、已上二名出蘇敬注、一名鈏、出兼名苑、而不載兼名苑錫有白鑞之名、然以源君載白鑞之名見之、蓋兼名苑錫有白鑞之名、輔仁以蘇敬注已云鉛一名白鑞、不及舉之也、然蘇敬以白鑞爲鉛一名、其說與鄭玄郭璞顏師古不同、故源君引兼名苑、不引本草注也、按蘇敬曰、臨賀出者名鉛、一名白鑞、唯此一處、資天下用、其錫出銀處皆有之、圖經乃云、鉛今有銀坑處皆有之、而臨賀出錫尤盛、亦謂之白鑞、與蘇相反、李時珍曰、蘇敬不識鉛錫、以錫爲鉛、以鉛爲錫、其謂黃丹胡粉爲炒錫、皆由其不識故也、故源君不從蘇說、

キ穴ノ内ハ黄赤色ニシテ鐵ノサビノ如シ、慈石ハ皆鐵ヤ針ヲ吸ヨセルモノナリ、其中ニ品等アリ、鐵ヲ吸ヨセル力ツヨクシテ、針ヲ十本モ二十本モ連子テ吸ヨセ、又ハ鐵ノ千斤剪刀ナドノ如キ類ヲ吸上ゲ、上ヘアゲテモ落ヌヤウナルヲ上品トス、一通リノ品モ小キ針位ノモノハ吸上ゲテ、ブラ〱シテ落ヌモノナリ、然ドモ大ナル鐵器ヲ吸ヒ、上ヘ上グレバ落ルナリ、コノ落ルハ皆下品ナリ、上品ノ石ハ小ニシテモ力ツヨキモノナリ、石ノ大ナル時ハ力ヲヨクシテ、小ク碎ケバ力弱クナルアリ、コレ下品ナリ、又石ノ中ニ吸處ト吸ヌ處トアリ、コレ石ノ中ノ首尾ナリ、吸處ハ石ノ首ナリ、吸ヌ處ハ石ノ尾ナリ、コノ石ヲ針ニスリ付テ水ニ入ルレバ、自然ト針ノ頭南ニ向ナリ、故ニ一名指南石ト云、今コノ石ヲ以テ方角ヲ見ル器ニ作ル、コノ器ヲ、漢名、定時羅ト云、江南通志ニ出、極上品ノ慈石ニテモ燒ケレバ石死シテ益ナキモノナリ、又コノ石ハ至テ烟草ヲ嫌ム、烟草ノヤニ、或ハ烟リ石ニ付バ、上品モ下品ニナルナリ、又常ニコノ石ヲ貯置ニハ、鐵砂ヲ入レテ養フナリ、コノ石ノ傍ニ鐵砂ヲ置バ、鐵砂集リ付テ毛ノ生タルカ如クナルナリ、落シテモ去ヌナリ、又鐵砂ヲ紙或ハ板ノ上ニ置キ、下ニコノ石ヲ付レバ上ノ鐵砂針ノ如ク立テ、下ノ石ヲ動セバ上ノ砂モ付テ動ナリ、續日本紀ニ元明天皇和銅六年、近江國獻慈石云々、今ハ江州ニハ慈石ナシ、今ハ仙臺、南部、備前產ヲ上品トス、甲州ノ產ヲ次トス、奧州ノ產ハ下品ナリ、舶來ニハ至テ上品アリ、

一名指南石(朝鮮名ナリ)　引鍼石(本性奇方)　吸鐵石(本草通)　攝針石(入門通志)　陵石(通雅)　承石(同)　磁石(異名)　綠伏石(國語鍊名)　磁毛石(外臺)

〔續日本紀六元明〕和銅六年五月癸酉、令大倭、參河並獻雲母、○中略　近江慈名、

〔輶軒小錄〕磁石之事

享保丁未の年(十二年)十月壹日、西三伯醫人の子德元、磁石を持ち來り示す、近年丹羽正伯を召し出だされ、諸國藥物御吟味に付き、處々巡行食養の處、奧州南部の管内に、閉伊郡大槌と云ふ處あり、

磁石

奧州金礦脈ハタナアツリ石州方言フヨレ鑛貴ハ鑛ニ生ズルテルノコレタク、金汁ハコガネノ黄汁又人黄汁ヲモ金汁ト云コヽトリヲ金汁行ト云、鍍金ハカタマリタル金、伴金石ハ即紛子石ナリ、

〔倭名類聚抄 一 石〕慈石 本草云、慈石吸針、兼名苑云、之 慈正從石作磁、見唐韻、

〔箋注倭名類聚抄 四 石〕原書序例中、有慈石吸針文、按陶注云、今南方亦有、其好者能懸吸針、虛連三四五爲佳、山田本總目正文作磁石、與下金貫方書類本草合、伊勢本云、磁石或作慈、然新修本草作慈石、本草和名同、續日本紀和銅六年紀亦作慈石、則知作磁者、後人所改、非唐本草之舊、又非源君之舊、本草拾遺云、磁石毛鐵之母也、取鐵如母之招子焉、曲直瀨本此間云作慈云、按廣韻、磁磁石、可引針也、與云作磁見唐韻合、然說文不載磁字、古只用慈字、管子地數篇、上有慈石者下有銅金、呂氏春秋精通篇、慈石召鐵、淮南子說山訓、慈石能引鐵、皆不從石、本草亦單作慈石、從石者俗字耳、源君以磁爲正字誤、

〔燈既 四十一〕一磁毛石は磁石の事也、瑯琊名義集六に見ゆ、一念受生の蟄磁毛石の鐵を吸が如しといへり、

〔大和本草 三金玉土石〕磁石

釋義云、指南針用磁石、磨針鋒則能指南、 日本ニ異邦ヨリ磁石多ク來ル好否アリ、好ハアツキ鐵、ヤキモノナドヲヘダツトイヘドモ鐵ヲ吸フ、小刀ノ鋒ヲ磁石ニテスリタナブレイ、其小刀久シク鐵ヲ吸フ、針ノテキモ同

〔本草綱目啓蒙 七〕慈石

通名ナリ、ジシヤクト訓ズ、又ハリスイイシトモ云、慈石ハ色黑クシテ鐵ノ如ク、少シ光リアリ、又中ニ小キ鐵砂ヲ挾タアルアリ、外ノ方ハ處々ニ小キ穴アリテミツチヤノ如キ觀ナリ、其外ノ小

鐵粉
鐵落
鍼砂

道云、鐵鏽、此鐵上衣也、是可レ訓二加禰乃佐比一、

〔和漢三才圖會 五十九金〕鏽(佐比 俗云) 鐵上赤衣也、刮下和レ油塗二惡瘡疥癬一乃治、又蜘蛛蜈蚣所レ咬、塗レ之可、

〔延喜式 十七內匠〕御鏡一面(方七寸)料、(中略)鐵精二分、(下略)

〔和漢三才圖會 五十九金〕鐵粉(てつふん) 鐵落(てつらくてつくわ) (鐵液、鐵屑、鐵華、鐵蛾同、) 鍼砂(はりや、しんしや) (鋼砂(こうしや)同、一名鐵衣、)

鐵粉、(鹹 平) 鋼鐵飛錬而成者也、人多取二雜鐵一作レ屑飛レ之、其體重、眞鋼者不レ爾而良、

鐵落、(辛 平) 是鍛家燒レ鐵赤沸砧上鍛レ之、皮甲落者能平レ肝去レ怯、凡醫藥用二鐵蛾及鍼砂一入二丸子一者、一生須レ斷レ鹽、蓋鹽性滑潤、服者再作不レ可レ爲矣、又云、鐵落浸レ醋、書二字於紙背一、後塗レ墨、如二碑字一也、

鍼砂、(辛 平)(針屋乃久曾) 作二鍼家磨鑢細末一也、須二眞鋼砂一乃堪レ用、人多以二柔鐵砂一雜和之、飛爲レ粉、人莫二能辨一也、

染二白鬚髮一藥　鍼砂、(一兩、炒七次) 訶子白芨、(各四錢) 百藥煎、(六錢) 綠礬、(二錢) 爲レ末用二熱醋一調、刷二鬚髮一、荼葉包住、次早醋漿洗去、此不レ壞レ鬚、亦不レ作レ紅、(又有レ方)

〔倭名類聚抄 十一金〕鐵落　本草云、鐵落、一名鐵液、(和名久路加禰乃波太、一云加奈久曾、) 蘇敬曰、是鍛家燒レ鐵、赤沸砧上鍛レ之、皮甲落也、

〔箋注倭名類聚抄 三金〕所レ引玉石部中品文、昌平本、下總本、有二和名二字一、訓作レ云、波太皮也、加奈久曾鐵糞也、按本草和名云、鐵落、和名久呂加禰乃波太、又云鐵精、和名加奈久曾、一名加禰乃佐比、源君以二加奈久曾一爲二鐵落一名一、恐誤、今俗呼二鐵落一爲二加奈久受一、原書也上有二者字一、按蘇敬又曰、鐵皮滋液、黑於二餘鐵一、是所三以一名二鐵液一也、

〔本草綱目譯義 八金〕鐵落　カナクズ　ナベカネノ飛クズ

生鐵ヲヤイタタヽクトキ飛タルクズナリ、時珍ノ說ニ、今煙火家用レ之ト云ハ、煙火ハハナビナリ、(下略)

〔重修本草綱目啓蒙 四金〕金(中略)

沙鐵

其悉熟鐵多鐵滓、入火則化如豆腐、不流走、冶工以竹夾夾出、以木捶捶使成塊、或以竹刀就鑪中畫而開之、今人用以造刀銃器皿之類是也、其名有三、曰方鐵、曰把鐵、曰條鐵、

按、熟鐵出於雲州播州者爲上、備後備中及奥州仙臺藝州廣島者次之、伯州作州石州及日向鐵亦次之、但馬鐵爲最下、皆鎔拍出之、有千割、小千割、山形割、平割、長割、十六割、万割、小割之數品、〈所謂方鐵把鐵條鐵類是乎〉

〔本草綱目譯義 八〕鋼鐵

ハガチナリ、鋼鐵ハ前ノ沙鐵ヲ集テ、ルツボニ入テワカス時ハ、イヨイヨ熟シテ、ハガチトナルナリ、ヤイナハタ、キ、ヤイナハタ、キスル時ハ堅クナルナリ、集解ニ云、純鋼ト云モノ此ナリ、ヤスキモノハ、皆柔鐵ノ中ニ生鐵ヲサシコンデコシラヘトギスルモノナリ、集解ニ團鋼ト云モノ此ナリ、小刀ニハ表ニ柔鐵ヲツク、ウラニ生鐵ヲ付テウチタルモノ、ニセハガチナリ、唐ノハモノヲ打ツ法ハ、日本ノ法トハチガウナリ、天工開物ニ出タリ、夫故日本ノヨリハキレアヂヲトルナリ、ハガチハ播州ヲ上品トス、雲州、伯州、作州ヲ次トス、石州ハ其次ナリ、　一名　鉅鐵〈綱目〉

〔類聚三代格 八〕太政官符

應停止備前國進鍫鐵事

右被大納言正三位紀朝臣古佐美宣偁、奉勅、納貢之本、任於土宜、物非所出、民是爲患、今聞、件國元無鍫鐵、毎至貢調、常買比國、自今以後、宜停收鐵、非絹則絲、隨便輸之、

延暦十五年十一月十三日

〔常陸風土記 香島郡〕郡東二三里高松濱、大海邊流着砂貝積成高丘、松林自生、椎柴交雜、既如山野、東西松下出泉、可八九歩、清渟太好、慶雲元年、國司采女朝臣、卜率鍛冶佐備大麻呂等、採若松濱之鐵、以造劒之、自此以南至輕野里若松濱之間、可三十餘里、〈中略〉其若松濱卽常陸下總二國之堺、安是湖

在鐵條也、則知此訓禰利、依禰仁也、然禰利不爲語、當依新撰字鏡及日本紀訓云禰利加禰也、今俗生鐵呼豆久、或呼奈倍賀禰、柔鐵呼介良、或呼奈萬賀禰、鋼鐵呼波賀禰、證類本草引生鐵鋼鐵三種、圖經云、初鍊去鑛、用以鑄瀉器物者爲生鐵、再三銷拍可以作鍱者爲鍱鐵、亦謂之熟鐵、以生柔相雜、和用以作刀劍鋒刃者爲鋼鐵、時珍曰、鐵截也剛可截物也、〇中略那波本鐵上有鑌字、與廣韻合、按本草綱目引寶藏論云、鐵有五種云々、賓鐵出波斯、堅利可切金玉、則知鑌鐵當用賓字、从金俗字、廣本標目鐵下有鐵字、

〔八雲御抄三下〕金　あら　まかね　鐵事也、くろかね、とくし

〔和漢三才圖會五十九金類〕鐵　鐵俗字　烏金　黑金　銕古文　鐵鉄俗字　和名久呂加禰

本綱、鐵於五金屬水、故名黑金、凡上有銹、下有鐵、秦晉淮楚湖南閩廣諸山中、皆產鐵、以廣鐵爲良、又西番波斯國賓鐵尤勝、堅利可切金玉、甘肅州錠鐵色黑、性堅、宜作刀劍、嘗陽利鐵色紫而堅利、上饒鐵次之、

鐵辛平有毒　畏慈石皂莢猪犬脂乳香朴硝硇砂鹽鹵荔枝古今醫統云、用二醋末和二猪油、角兔枝同研、鐵成粉、諸食鐵而蛟龍畏鐵、

〔本草綱目譯義八金〕鐵クロカネ古歌ニマカネト云、マカネ、和名抄ニテリト云　鐵ハ土中ニ生ズルモノナリ、金銀銅ナドニハチガウテ、土中ニ深クアルモノニアラズ、上ニ浮テアルモノナリ、集解ニ、是鐵與金銀同一根源ト云ハ誤リナリ、金山銀山ニハナキモノナリ、

〔令義解九喪葬〕凡職事官薨卒賻物謂、京官及國司並同也、遭死物曰賻也、正從一位絁三十疋、布一百二十端、鐵十連、

〔日本書紀二十九天武〕十四年今按、刊本作十一年、今據書紀集解改、十一月甲辰、是日筑紫太宰請儲用物絁一百疋、絲一百斤、布三百端、庸布四百常、鐵一万斤、箭竹二千連、送下於筑紫、

〔多識編一金〕鐵、久呂加禰、異名、黑金、鐵文烏金、　鑄鐵、今案、阿和世久呂加禰、　熟鐵、禰里久呂加禰、　鋼鐵、今案、波加禰、　精鐵、今案、美多伊加禰、　生鐵、今案、那末加禰、又云、阿良加禰、　團鋼、豆豆美波加禰、

（佐渡志 物産五）緑青　方言イワロクセウ
西牧ト名ヅクル銀坑ニ産ス、相川鳥越ノ坑中ニモ稀ニ出ルナリ、
（長防産物名寄 土石下）緑青
美禰郡長登村ノ内、瀧ノ下山、　同郡同村ノ内、烏帽子岩山、　同郡同村ノ内、尻ナシ山、
同郡同村ノ内、花ビラ山、　同郡太田村、水瀧山、　同郡同村、瀧ノ宮山、
（大日本府縣志 續物産）黒澤山峯九十九 緑青は自然の石也、其内は空青まとひ附て圖の如し、○圖略
下同 是を小刀にて鑿り出す也、故に緑青は多し、空青は少し、
此圖の如く、岩緑青の中より空青を鑿り出して、後に緑青を粉にして、是を幾度も水飛する也、水飛に上中下の三品の別あり、略す、
製造の緑青と云ものは、銅屑を醋に浸して腐せ造る、又浪花にて製するものは、赤がねの板に醋を塗り、青を生ずるを、小刀にて刮下し造る、是銅の精華にして銅青といふもの是也、又南良緑青といふものは、福来粉にて造る、
空青の僞造は、烏賊甲の中へ靛花を合せ造る、舶來の物には空緑あり、（空緑は銅青の偏に出る　目顯）又ピードロの細末の僞造あり、
長州にては似せを造らず、長登村に製法屋四軒有りて、いづれも岩緑青屋といふ、津森姓の者也、漸々四軒ばかりなれば僞造の暇あらず、暇あれば野に出て農業す、扨此眞僞を分つには、火中にて試み知るべし、二青とも元より銅の自然の精苗なれば、是を鎔すときは銅となるなり、又灰毒(ハイドク)も火に入れ試むべし、眞は烟となる、雜物あれば、火をはじく也、烟臭は酸し、
（紀伊續風土記 物産一）緑青（本草啓蒙に[illegible]）　牟婁郡銅山處々に産す
（毛吹草 三）攝津　多田紺青

銅礦　世謂之眞綠礦者非也、眞綠難作、蓋其銅礦早變色也、忌鹽及膠、鹿角菜止用飯糊、

(本草和名三 玉石)綠青　一名碧青(陶景注云、畫工呼之、)一名石綠(蘇敬注云、畫工名之、)　出長門國

(和漢三才圖會五十九 金)銅青　一名銅綠、俗云銅乃綠青、

本綱、銅青則銅器生綠色者也、近時人以醋製銅生綠、取收晒乾貨之、(時珍云、銅青木入水不腐、)

氣味(酸平微毒)　能入肝膽、明目殺疳、又眼上生翳者、用銅青明礬末撈之、又治臁瘡頑癬、用銅綠七分黃蠟一兩化(蠟)以厚紙拖過表裏、別以紙隔貼之、出水妙、亦治楊梅瘡、

(本草綱目譯義十石)綠青

ロクセウト通名ナリ、ロクセウト云ニ二ツアリ、ナラロクセウト云ハ、銅ノカビヲ取リタルナリ、ナラロクセウニ分ツ爲ニ、本條ヲイワロクセウト云ナリ、コレハ銅山ノ產ニテ、攝州多田、羽州阿ニ、石見、長門、上野、下野、奧州、會津、其外銅山ニハアリ、銅ノ精氣ヨリ生ズルナリ、コレニモ色々アリ、初ヨリ大ニ堅マリ、表ニ疵アリテ、破レバノギスヂアリテ、石蓋ノワリタルヲ見ル如クシテ、色モエギニレタ黑ミアリ、コレ上品ナリ、コレヲ芥子園畫傳ニ蝦蟆背ト云ナリ、雲林石譜ニ如刷糸ト云コレナリ、ノギスヂノアルコトヲ云ナリ、コノ上品ナルハ希ナリ、宗奭ノ說ニ、其色黑綠色者佳ト云如ク、初ハ黑ミアルヲ上品トス、初ヨリ綠色ナルハ中品ナリ、畫ノ具ニ用レバ粉ニスルナリ、コレヲ粉ニスルニ、初メ粗末ニシテ取リタル粉ヲ一番ロクセウト云、コレヲ漢名頭綠ト云、其次ノ粉ヲ二番ロクセウト云、漢名二綠ト云、其次ヲ三番ロクセウト云、漢名三綠ト云、芥子園畫傳ニ出、コレハ細カニスル程色淺クナルモノナリ、故ニ初メ黑ミアルハ、三番迄モトリテモ色綠ナリ、故ニ上品ナリ、初ヨリ綠色ナルハ三番粉ニモナレバ、白ケテ綠色ナラズ、故ニ下品ナリ、コノ白ケタルヲピヤクロクト云ナリ、今紅夷ヨリ孔雀石(和名)ト云モノ渡ル、コレ蝦蟆背ノ中ノ下品ニシテ、初ヨリ綠色ナルナリ、下品ナレドモ舶來ニテアレバ、世人壓口ナドニシテ重寶スルナリ、又初

注ニ銅十斤、爐甘石六斤、用和鉛四、則紅銅六トアリ、日本ニテスルハ少々チガウナリ、

〔重修本草綱目啓蒙四金〕赤銅　アカヾネ　中略

銅ヲ以テ造作者多シ、時珍ノ說ニ、白銅出雲南、青銅出南番ト、此レハ自然ノモノナリ、舶來ナシ、人以爐甘石煉爲黃銅、黃銅ハ假鍮ニシテ、和名ノシンチウナリ、其法、物理小識曰、赤銅以爐甘或倭鉛(トタン)參和爲黃銅、(銅十斤、爐甘石六斤、用倭鉛四、則紅銅六、)和ノシンチウハ銅七百錢、倭鉛二百錢、鉛三百錢ナリ、カクノ如ク鉛ヲ入レテ倭鉛ヲ少クスルユヘ、唐シンチウヨリ色淺シ、砒石煉爲白銅ト云ハ、造作シロミ銅ヲ云フ、和製無シ、物理小識ニハ、以砒霜等藥制煉爲白銅ト云フ、雜錫煉爲響銅ト云ハサハリ也、物理小識、廣錫參和爲響銅(銅八、錫二、)唐ト云、和ノサハリハ銅一斤、鉛五分ノ一、錫十分之一ヲ以テ製ス、銅ト錫ト等分ニスレバ鏡トナリタ、サハリニナラズ、別ニ靑銅ト云フモノアリ、物理小識ニ、礬硝等藥制煉爲靑銅、此レカラカネナリ、本邦ニテハ銅一斤ニ鉛五分之一ヲ入レテ製スト云フ、銅靑ハナラロクセウ、石綠ハイハロクセウ、即綠靑ナリ、石靑ハイハコン、ゼウ、即扁靑ナリ、白靑ハグンゼウ、コンゼウノ色淺キモノナリ、鐵銅ハシヤクドウノ如キモノナリ、シヤクドウハ紫金也、格古要論ニ出ヅ、又黃金モ紫金ト云同名ナリ、

增、クロメ一名ニグロメノ法ハ、銅百錢ニ鉛三十錢ヲ鎔化ス、シヤクドウハクロメ百錢、金四錢ヲ加テ煉化シ、膽十六錢、綠靑四錢、水一斤ヲ合煎シタル汁ニ浸シ置ケバ、紫黑色ト成ル、又僞物ハ銅ヲ以テ其汁ニ漬シ、硫黃ニテ熏ズルナリ、

〔倭名類聚抄十一玉〕鍮石　考聲切韻云、鍮(他侯反、字亦作鋀、鍮石二音、俗云中尺、)鍮石似金、西域以金鐵雜藥合爲之、

〔箋注倭名類聚抄三玉石〕慧琳音義引同、廣本石上有鍮字、按玉篇、鍮、鍮石、似金也、有鍮字似是、下總本、金上有者字、格古要論、鍮石自然銅之精也、今爐甘石煉成者假鍮也、崔昉曰、銅一斤、爐甘石一斤、煉之成鍮石、眞鍮生波斯國者、如黃金、燒之赤色不黑、今俗謂假鍮爲眞鍮、

位一階、其正六位上以上不在進限、免武藏國今年庸、當郡調、詔、天皇命ヲ衆聞宜、

(本草綱目譯義〈入金〉)銅礦石

赤金ノアカガネナリ、此ヲハク石ト云、ハクトモ云ナリ、銅山ヲ深ク堀バ此石アリ、石ニ金箔ヲヌリタル如ク光リアルアリ、一面ニ光ラズシテ赤金色星アルモアリ、黃色ニ光モノアリ、青キ光ノイブルモアリ、是ヲトカケバクト云、紫ニ光リアルヲペンニハクト云、此等ノ箔石ハ上品ニシテ、ワカメ銅ヲ取タルハ銀此中ヨリ多ク出ルナリ、黃色ノモノハ銀ノ出ルコト少シト云フ、

(重修本草綱目啓蒙〈四金〉)赤銅〈○中略〉

銅ニ品類アリ、アカヾネノミ、カタマリ生ズルモアリ、又アラガネヲ鍛煉シテ出スモアリ、今通用ノモノ皆コレナリ、又金ト混ジタルモアリ、銀ト混ジタルモアリ、天工開物ニ、凡銅質有數種、有全體皆銅不夾鉛銀者、洪爐單煉而成、有與鉛同體者、其煎煉爐法、傍通高低二孔、鉛質先化、從上孔流出、銅質後化、從下孔流出、東夷銅又有托體銀礦內者、入爐煉時、銀結於面、銅沈于下、商舶漂入中國、名曰日本銅、其形爲方長板條、漳郡人得之、有以煉再煉取出零銀、然後寫成薄餅、如川銅一樣貨賣者、本邦ニテハ、文武天皇二年因幡、周防ヨリ銅鑛ヲ貢ス、ソノ後元明天皇和銅元年、武藏國ヨリ初テ和銅ヲ奉ル、故ニ慶雲五年ヲ改テ和銅元年トス、今産銅ノ出處、攝州多田、奧州南部、仙臺、羽州秋田、最上、越前、肥前、豫州、日州、備中、濃州、其外諸州ヨリ出、大抵四十ケ國ホドナリ、越前ヲ上品トス、〈○中略〉

銅鑛石　アカヾネノアラガネ　ハクイシ

石ニ金星アツテ、紫色ニ光リアルヲ、ベニハクト云、青キ光リアルヲ、トカケバクト云、皆上品ナリ、黃色ニシテ光リアルヲ黃ハクト云ヒ、又ナタネバクトモ云フ、コレ下品ナリ、色ノアサキヲサウデンハクト云、上品ノ銅礦ヲ鎔化シタトリシ銅ヨリハ銀多ク出ヅ、下品ノ銅鑛ヨリトリタル銅ニハ銀少シ、銅ノ長サ一尺半許、幅五六寸ニヒラタクシタルヲ、平銅ト云、天工開物ニ謂ユル方長

リ、大ナルハ一寸許、小ナルモノハ五分許、大小齊シカラズ、質堅ク重シ、赤黒色、周圍ニ一分許ノイボ多シ、此レヲ破レバ內金色ニシテ、束針紋アリ、此レ禹餘糧樣ノ自然銅ナリ、然レドモ唐山ヨリハ皆蛇含石ト名ク來ル、破テ內ノ色ヲ見テ別ツベシ、內ノ色白クシテ、錫ノ色ノ如キモノハ、蛇含石ナリ、コノ自然銅、和產モアリ、遠州ニナカテイシト云フ、集解頌ノ說ニ、品類ヲ多クアグ、其信州火山軍銅坑中云々ト云フハ、舶來無シ、和產アリ、銅絲ハハリガネ也、羽州秋田阿仁銅山ニ、細キハリガネヲ束ネタル如クシテ綠色ナルモノアリ、方言ナワデ、是亂銅絲樣ノ自然銅ナリ、又火山軍出者顆塊云々、謂之銗石、銗石ニ品類多シ、皆自然銅ニ混ジ易キモノナリ、下ニ詳ニス、一體大如麻黍ト云ハ、細カナル自然銅ナリ、播州ノマスイシノ類ヲ指ス、累々相綴至、如斗大云々、此レハ四角ニシテ骰子ノ形ノ如キモノ多ク聚リ、大塊トナルヲ云フ、金色ナルト、同色ニシテ青光アルトアリテ、玩物ニシテ見事ナルモノナリ、此レヲ生薑樣ノ自然銅ト云フ、一體如薑鐵屎之類ト云フハ、枝多クアリテ、薑樣ノ形ノ如キモノヲ云フ、卽チ上文ト同ジクシテ、唯大小ト、光リノ有無ヲ以テ別チタルナリ、今市人多以銗石爲自然銅、燒之成青焰、如硫黃者是也ト云ハ、銗石ノコトナリ、和產アリテ、舶來ナシ、形チ自然銅ト同クシテ、方ナルモ圓ナルモ細ナルモアリ、自然銅ト銗石トノ別チハ、燒テ試ムベシ、自然銅ハ火ニテ燒クニ飛バズ、燃ズシテ火トナリ、此レヲ冷セバ、モトノ形トナル、銗石ハ火上ニ置ケバ、青キ火モエテ、硫黃ノ臭アリテ、灰トナリテ、モトノ形チノコラズ、一種有殼如禹餘糧、擊破其中光明如鑑、色黃類鍮石也ト云フハ、禹餘糧樣ノ銗石ナリ、圖ニシテ自然銅ノ形ト同ジ、紀州熊野ニアリ、方言ギンカド、濃州ニナキンブクロト云フ、又豆州ニモアリ、一種青黃面有墻壁成文如束針ト云フハ、方ニシテヤスリメノ有ルヲ云フ、此レ方解石樣ノ銗石ナリ、此レヲナイロツボウト云フ、一種碎理如團云々ト云フハ、形チ細小ニシテ、方ナルモノ、多ク塊ヲナスモノヲ云フ、又粒々離レタルモアリ、金色、或鐵色、或青黃ニシテ、赤ミアルモ有リ、皆火ニイル

辛丑ニ神君ノ公領トナリ、石見守撿檢シテ、壬寅一ケ年ニ出ル所萬貫目也、且石州銀山モ庚子迄、毛利輝元領分也、其時ハ銀僅ニ出ケルガ、辛丑以來公領ト成ル、長安撿斷シテ、壬寅年中、砂銀出ルコト四千貫目ニ及ベリ、是ニ天既ニ神君ノ德ニ感ズルユヘ也、

〔甕尻三十二〕一此春〇三月十九日ニ府下富士塚町淺岡氏の濱井を掘修めしに、取面ひかりきらめき、紫色彩をなすと、いよゝかしく掘程に、物ありてあたるを出せば、銅のつるべなりし、猶底をうがつ程に、砂銀夥しく泥水に交り、日々に出侍る、蝦夷より出る砂金と一般の物也、水銀伏道ありて流れずに留ことあるにや、

〔書言字考節用集七財貨〕鐐金銀、銀。鐐美也、見本草、並倭寘、

〔和漢三才圖會五十九金〕鉛〇中略

銀鉛　白色以亞於金、可飾諸器、經數十年變黑、

〔倭名類聚抄十一金〕銅　說文云、銅〈音同、和名阿加々禰〉赤金也、

〔箋注倭名類聚抄三金〕所引金部文、時珍曰、銅與金同、故字從金同、

〔本草綱目譯義八金〕赤銅アカヾネ

五金ノ中五色ニ配當シテ赤キ故ニ、赤金ト云、所名銅末、銅花銅粉、銅砂トアルハ、アカ金ノヤスリ粉ナリ、赤金ハ日本ニテハ文武天皇二年、周防國、因幡國ヨリ銅鑛ヲ獻ズルコトアリ、其後元明天皇和銅二年ニ武藏ノ國ヨリ獻ズ、日本赤金ノ初ナリ、其後ハ所々ヨリ皆出ヅ、近國ニテハ攝州ヨリ出ヅ、遠國ニテハ、南部、仙臺、羽州ノ最上、外諸國ヨリ出ヅ、アラ金ヲ取テフキワケルナリ、アラ金ヨリ赤金自然ニフキ出タルモアリ、集解ニモ不經陶冶而生者也トアリ、〇中略

自然銅

イク通リモ品類アリ、集解ニタワシ、廣ヨリ渡ルニ二有、ソノ形チ四角ニシテ、雙六ノサイノ如ク

銀貢獻

五色ノ中ニテ銀ハ白ニ配ス、故ニシロガネト云、又白金トモ云ナリ、釋名ニイブ、銀ハ日本ニテハ、四十代天武天皇白鳳三年、自對馬國初出銀、以所貢銀悉奉神祇トアリ、此ヨリ以前カラアリタルコト、見テ、二十四代顯宗天皇ノ時ニ銀錢ノコト出タリ、其後ハ諸國ヨリ出ヅ、攝州、但馬、長門、石見、其外ニモイブ、赤ガネノ中ヨリモ取ルナリ、但馬ヨリ赤ガネノ中ヨリ取タル銀ヲ出ス、石見ニ產スルハ生銀ナリ、銀ヲ堀ハ金ヲホルト同ジ、銀ノ出ル處ニスジアリ、ツルトモ云、又シロガネノスジトモ云ナリ、唐デハツハヲ銀苗ト云、天工開物銀口トモ云、廣東新語

(重修本草綱目啓蒙四金)銀　シロガネ○中略

附錄黃銀　瑞物トモ云ヒ、又瑞物ニ非ズトモ云、通雅ニ、按、高似孫引、丹砂伏火化爲黃金、日華子載、雄黃銀、雌黃銀、丹砂雄黃殺精魅、太宗賜、如晦、曰、鬼畏者若非、丹砂銀、其雌雄黃銀乎、此レヲ以テ見レバ、辰砂ヲ以テ作ル黃銀カ、此黃銀、雄黃銀カ、分明ナラズト見タリ、辰砂ヲ燒テ黃銀ニスルコトハ、丹砂ノ發明ニ出ヅ、又自然ノ黃銀ノ說、與蕃便覽、華夷珍玩考ニ見ヘタリ、時珍ノ說ニ、世人以鍮石爲黃金非也、鍮石卽爐甘石煉成黃銅也、此鍮石ハ和名ノシンチウナリ、唐山ノ眞鍮トハ別ナリ、コヽニ和名ノシンチウヲ黃銀トスルハ誤ナルコトヲ云フ、シンチウヲチウシヤクト云ハ、コノ鍮石ノ音ナリ、色黃ナル故ニ、黃銅ト云、又假鍮トモ云フ、古今秘苑ニ出ヅ、造法ハ赤銅ノ下ニ見タリ、

(日本書紀三十持統)五年七月庚午、是日、伊豫國司田中朝臣法麻呂等獻宇和郡御馬山白。銀。三斤八兩、鑛(アラガネ)○鑛原作鉚、據書紀集解改一籠、

(日本書紀二十九天武)三年三月丙辰、對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、卽貢上、由是大國授小錦下位、凡銀有倭國、初出于此時、故悉奉諸神祇、亦周賜小錦以上大夫等、

(續日本紀三文武)大寶三年五月己亥、令紀伊國奈我名草二郡停布調獻絲、但阿提、飯高、牟漏、三郡獻銀也、

[illegible]

いてみれば、まことの金の樣にてありけり、うれしく思て、件の金を取て、そでにつゝみて、家にかへりぬ、おろしてみければ、きら〳〵として、まことの金なりければ、ふしぎの事也、此金とれば、碎なりちしん雨ふりなどして、えとらざんなるに、これはさる事もなし、この後も、此金をとりて、世中をすぐべしと、うれしくて、はかりにかけてみれば、十八兩ぞ有ける、これをはくにうつに七八千枚にうちつ、これをまろげて、みなかはんひともがなと思て、しばらくもちたるほどに、撿非違使なる人の、東寺の佛つくらんとて、はくをおほくかはんといふとつぐるものありけり、よろこびて、ふところにさし入て行ぬ、はくやめすといひければ、いくらばかりもちたるぞととひければ、七八千枚ばかり候といひければ、もちてまゐりたるかといへば、候とて、ふところよりかみにつゝみたるをとり出したり、みれば、やれずひろく色いみじかりければ、ひろげてかぞへんとてみれば、ちいさき文字にて、金御嶽云々と、ことごとくかゝれたり、心もえで、このかきつけは何のれうのかきつけぞととへば、はくうち、かきつけも候はず、何のれうの書つけかは候はんといへば、げんにあり、これをみよとて、みするに、薄うちみれば、まことに有あさましき事かなとおもひて、口もえあかず、撿非違使、これはたゞごとにあらず、樣あるべきとて、友をよびぐして、金をば、かどのおさにもたせて、薄打ぐして、内裏のもとへまゐりぬ、件の事共をかたり奉れば、別當おどろきて、はやく河原に出ゆいて、とへといはれければ、撿非違使ども、かはらにゆいて、よせばしらほりたて、身をはたらかさぬやうにはりつけて、七十度のかうじをへければ、せなかは紅のねりひとへを水にぬらしてきせたるやうに、みさ〳〵となりてありけるを、かさねて獄に入たりければ、わづかに十日ばかりありてしにけり、薄をば金峯山にかへして、もとの所におきけると、かたりつたへたり、それよりして、人おぢて、いよ〳〵件の金とらんとおもふ人なし、あなおそろし、

〔令義解 職員〕典鑄司

〔台記〕仁平三年九月十四日庚子、去々年廐舍人長勝近貞爲使下向奧州、先年可增奧州高鞍庄年貢之由、禪閤（藤原賴長父忠實）被仰基衡（金五十兩、布千段、馬三疋）、基衡不肯增之、久安四年禪閤以五ヶ庄讓余、同五年以雜色源國元爲使、仰基衡曰、可增高鞍金五十兩、布千段、馬三疋、（本數金十兩、布二百段、細布十段、馬二疋）、大曾禰布七百段、馬二疋、（本數布二百段、馬二疋）本良金五十兩、布二百段、馬四疋、（本數金十兩、馬二疋、所分金五兩、馬一疋）屋代布二百段、漆二斗、馬三疋、（本數布百段、漆一斗、馬二疋）遊佐金十兩、鷲羽十尻、馬二疋、（本數金五兩、鷲羽三尻、馬一疋）基衡不聽、國元其性弱、不能責之、空以上洛、重遣延貞責之、去年基衡申曰、不得增、所仰之數可增進高鞍金十兩、細布十段、布三百段、御馬三疋、大曾禰布二百段、水豹皮五枚、御馬二疋、遊佐金十兩、鷲羽五尻、御馬一疋、屋代布百五十段、漆一斗五升、御馬三疋、本良金二十兩、布五十段、御馬三疋者、仰曰、三ヶ所（本數、遊佐、屋代）所申非無其理、依請、至于高鞍大曾禰兩庄者、田多地廣、所增不幾、猶減本數、可進高鞍馬三疋、金廿五兩、布五百段、大曾禰馬二疋、布三百段、者、今日任此數延貞持來三ヶ年貢（久安六、仁平元年、二）、年來貢本數、然而返却不受、今年相合三ヶ年貢、受之、增年貢事、成隆朝臣（高階）使通（本貢）所勸進也、

〔源平盛衰記十一〕育王山送金事

我朝ノ三寶ニ財寶ヲ拋チ給ノミニ非、異國ノ佛陀ニモ志ヲゾ運給ケル、奧州知行ノ時、氣。仙。郡。ヨ。リ。金。千。三。百。兩。金。ヲ。進。タ。リ。ケ。ル。ヲ。、妙典ト云唐人ノ筑紫ニ有ケルヲ召テ、百兩ノ金ヲ賜テ仰ケルハ、千二百兩ノ金ヲ大唐ヘ渡ベシ、其内二百兩ヲバ育王山ノ衆徒ニ與ヘ、千兩ヲバ帝ニ獻テ、當山ニ小堂ヲ建立シテ、供米所ヲ寄進セラレ、重盛ガ菩提ヲ弔テ給ルベシト可申トテ、檜木材木一艘濟渡ベキ由ヲ下知シ給ケレバ、妙典承テ材木砂。金。取具シテ、事故ナク渡唐シテ、二百兩ヲ僧衆ニ施シ、千兩ヲ帝ニ獻ジテ、事ノ子細ヲ奏ケレバ、御門其深キ志ヲ隨喜シテ、一塵ノ送物猶以テ默止ガタシ、況千金ノ重寶ヲヤトテ、御檜木ノ材木ヲ以テ、寶形作ノ御堂ヲ立テ、五百町ノ供米田ヲ被育王山ヘゾ寄ラレケル、

漉シ、鉱鉄二等トス、ト云、生金ハ即チ砂金ナリ、是ヲ鎔鍛スレバ熟金トナル、生金ハ試金石ニ著カズ、本草彙言ニ、石金トアルハ、鉱鉄斟酌ノ後ノ山金ナリ、今佐州ニテ山ヲ深ク掘リ入リ、黄青黒ナル石ニ、金沙麗リアルヲ採リ、細ニ砕キ、水ニ淘シ石末ヲ去リ、ソノ金沙ヲ鎔化スレバ、金ト石ト分レテ、金ハ一塊ニアツマル、是レ熟金ナリ、又自然ト金ノミ塊ヲナシ、氷柱ノ形如キハ、黄牙ト云、俗名インヌ、鉱山ニテ印子金ト云トハ別ナリ、コレハ鉱山ノ通用金ニシテ、形紙門ノ[illegible]ノ如クス、重五十銭ナルアリ、百銭ナルアリ、色ハ美ナレドモ品ハ下ナリト云、鎔ニハ熟金ヲ用ユ、沙金黄牙等ノ生金ニハ雑アリ、鉱ニ鎔ニ入レズ、熟金ヲ用ルニハ、金箔ヲ用ユベシ、箔ニ品類多シ、大焼ヲ上品トス、中焼ヲ次トス、焼飾箔青箔ハ皆マゼモノアリ、鎔ニ入ル、ニ堪ズ、焼飾箔ハ十分一銭ヲ鎔ユル故、色淡シ、青箔ハ三分ノ一銭ヲ知ユル故ニ、青色ヲ帯ブ、讃岐ノ箔ハ、小サキ(一寸四方)ニシテ厚シ、本邦ノ箔ハ、大(サ四寸二寸)ナレバ、レタ鎔シ故焼箔十枚ニハ和箔二十枚用ベシ、(中略)鉱類(二中)砂金ハ佐州西見川及奥州三角亀鼎陵ノ右野川ノ水底ニアリ、ムシロニテタスクヒトル、大ニ人力ヲ費シテ利少シト云、試石ハツクイシ、ナチグロ、物理小識ニ試金石ト云フ、

〔続日本後紀(四仁明)〕承和二年二月戊戌、下野国武茂神奉授従五位下、此神坐採沙金之山、

〔下野国誌(十二産物)〕砂金

内蔵寮式に、砂金百五十両下野国所進とあり、民部式にも、砂金百五十両、練金八十四両とみえたり、八雲御抄にも、金の部に那須の御社金みゆ、続日本後紀に、承和二年下野国武茂神奉授従五位下、此神坐採沙金之山とありて、那須郡に今も武茂の神社あり、其辺に金洗沢と云所などもあり、歌枕名寄にも那須のゆりかねの歌二首あり、名所部に挙たり、

〔続日本後紀(五仁明)〕承和三年正月乙丑、詔奉充陸奥国白河郡従五位下勲十等八溝黄金神封戸二烟、以応国司之祷、令採得砂金、其数倍常、能助遣唐之資也、

うもなければ、にくむ〳〵かくておき侍るなりといひければ、われこのいしとりてん、後に目くせあるものもぞみつくるとおもひて、女にいふやう、この石我とりてんよといひければ、よき事に侍りといひければ、そのへんにまりたる下人をむな車をかりにやりて、つみていでんとするほどに、綿絹をぬぎて、たゞにとらんがつみえがましければ、この女にとらせつ、心もえでさはぎまどふ、この石は女どもこそよしなし物と思ひたれども、我家にもていきてつかふべきやうのあるなり、されば たゞにとらんがつみえがましければ、かく衣をとらするなりといへば、おもひがけぬことなり、ふようの石のかはりにいみじきたからのをんぞの、わたのいみじき給らん物とはあなおそろしといひて、るはのあるにかけておがむ、さて車にかきのせて家にかへりて、うちかきうちかきうりて物どもをかふに、米錢絹綾などあまたにうりえて、おびたゞしき德人になりぬれば、略○下

金屑

〔本草和名 玉石 四〕金屑　生金〈陶景注云、作屑謂之生金、〉金沙〈陶景注云、建平晉安有金沙、〉一名太眞〈出神仙方〉一名黃金〈陶景注云、古者名金爲黃金、〉屑者日之精也〈出丹口訣〉和名古加禰〈出陸奧國〉

〔倭名類聚抄 十一 金〕金屑　陶隱居曰、金屑一名生金、〈和名古加禰、乃須利久賀禰、〉

〔箋注倭名類聚抄 三 金〕隋書云、梁有陶隱居本草十卷、亡、新唐書云、陶弘景集注神農本草七卷、今無傳本、新修本草玉石部中品、陶注云、出水沙中、作屑、謂之生金、此云一名、蓋源君所隱括、昌平本、下總本、有和名二字、按、陶氏所說謂水沙中自然作屑者、非經磨研、故謂之生金、不與銀屑之研爲粉同、輔仁單訓古加禰、是也、源君引陶注、爲須利久豆、依屑字誤訓也、又按、本草衍義云、不曰金而更加屑字者、是已經磨屑可用之義、如玉屑之義同、二經不解屑、爲未盡、其說與源君所訓偶合、然陶說不爾也、

沙金

〔重修本草綱目啓蒙 四 金〕金　キガネ　コガネ〈キガネナ鴨ヲアコガネト云フ〉○中略

佐州及ビ奧州ノ松前、豫州ノ古野川等ヨリ出ル沙金ニ、瓜子金、麸金、糠金ノ品アリ、凡ソ沙金ハ色

ノモアリ、天工開物ニ、山石中所出、大者名馬蹄金、中者名橄欖金帯胯金、小者名瓜子金ト云モノハ、和名ニイシンコト云モノナリ、水沙中所出、大者名狗頭金、小者名麩麥金糠金ト云モノハ、沙金ノコトヲ云ナリ、日本ニモ奥州佐渡ヨリ出ヅ、又伊豆ニモアリ、麩子ノ如キモアリ、又タリザキナスビザナノ如キアリ、其中大ナルハマレナリ、コマカキ麩金ト云方ノモノ多シ、沙金ハ生金ナリ、麩金ハ一名麩片、

金本草綱目 麩麸金天工開物 ソクタイフキワタスズニ、自然生ノモノヲ生金ト云事アリ、佐渡ヨリ出ル、フキワケタル金ヲ熟金ト云、常ナレ、通用スル金子、或ハ鉛ニシタルモノ、或ハ金箔ヲ薄用トナスベシ、寶鑑ニハ金ヲ直ヂタ用ユ、本綱一名 黄物本草綱目 撲彈同 女古 實
文選ノ方言ヲリ 阿堵 陳宇石義 天具同 東南陽日同 男

石上火同

〔宇治拾遺物語十七〕本はむかし、兵衛佐なる人ありけり、冠のあげをのながゝりければ、世の人あげをのぬしとなんつけたりける、西の八條と京極との畠の中に、あやしの小家あり、そのまへを行ほどに、夕だちのしければ、この家に馬よりおりていりぬ、みれば女ひとりあり、馬を引入て夕立をすごすとて、ひらなる小辛櫃のやうなる石のあるに尻をうちかけてゐたり、小石をもちてこの石を手まさぐりにたゝきゐたれば、うたれてくぼみたるところをみれば、金色になりぬ、希有のことかなとおもひて、はげたるところに土をぬりかくして女にとふやう、この石はなぞの石ぞ、女のいふやう、何の石にか侍らん、むかしよりかくて侍るなり、昔長者の家なむ侍りける、この家は倉どものあとにて候なりと、誠にみれば大なる石ずへの石どもあり、さてその尻かけさせ給へる石は、その倉のあとをはたけにつくるとて、うねほる間に土の中よりほり出されて侍なり、それがかくやのうちに侍れば、かきのけんと思侍れど、女はちからよわし、かきのくべきや

汁、古加禰乃志留、

〔大和本草　金玉土石三〕金

五金ノ長トス、久ク土ニ埋テ不朽、百度火ニ煉テモ不減、昔日本ニ黄金アル事ヲシラズ、異國ヨリ來ル、續日本紀、聖武天皇天平二十二年、陸奥國ヨリ初貢黄金、此後日本諸州ヨリ多ク出ヅ、礦(マブ)ハ時珍云、麁惡也、五金皆有麁石、銜之、金銀ナド皆石中ニマジリ有之ヲ、其石ヲクダキユリテ金銀ヲトル、其石ヲ礦ト云、印子金、精金ナリ、古ヘ中華ヨリ來ル、其形餅子ノ如シ、又他ノ器ニ製セルモアリ、沈存中ガ筆談ト云書ニ此事ヲノセタリ、上ニ篆文劉主ノ字アリト云、或曰、印子金ハ精錬鎔レリ、非精金、山金ヲ精煉シタル是眞金ナリ、器ニ製スベシ、范成大ガ桂海虞衡志ニ云、生金生山谷田野沙土中、不由礦出也、大者如麥粒、小者如麩片、便鍛則是熟金、日本ニモ有之、沙土ヲユリテ取之、甚煩勞ナリト是精金ナリ、

〔本草綱目譯義　金八〕金　コガネ　キガネ

五金ノ分チアリ、金銀銅鐵錫是ナリ、五色ノ中尤モ貴キモノナリ、黄色ナル故ニキガネト云、○中略奥州佐渡其外諸國ニ出レドモ、奥州佐渡ヨリ盛ニ出ヅ、金ニモイクトヲリモアリ、集解ニモ時珍ノ說ニ、金有山金沙金二種ト云、本草彙言ニハ山金、土金、沙金、石金、水金ノ五金アリト云、此五ツモツヾメテ云トキハ山金沙金ニ過ズ、其外ニ土金ト云モノアリ、山金ハ山ヲ深堀テ取タルナリ、金モアラ金ハ光ラズ、一通ノ石ノ如クネズミ色ニシテ、細キ金砂入レマジリテヲルナリ、夫ヲフキワケテ取ルナリ、沙金ハ流水中ニ交リアルナリ、沙ノ如シ、此ハフキワケルニ及バズ、大河ノ流ルソコニアルモノナリ、之ヲ生金ト云、又山中ニ自然ニ形ヲ爲テ塊アルアリ、土金ナリ、和名ニインスト云モノナリ、唐ニテハ熟金ヲインスト云、日本トハチガウナリ、印子金ト云ハ通用金ニテ熟金ナリ、印子金ノ形ハ、ブスマノヒキテノ如ク、少シ長ク中ニ凹ミアリ、百目ノモノアリ、五十目位

金貢獻

經云、金、銀、琉璃、頗梨、瑪瑙、硨磲、恆水經云、金、銀、珊瑚、眞珠、硨磲、明月珠、摩尼珠、大論云、有二七種寶一、金、銀、毘瑠璃、頗梨、硨磲、瑪瑙、赤眞珠、二七種王寶者、普曜等嚴經云、王得レ道時、於二其正殿一婇女圍繞、七寶自至、一金輪寶、名二勝自在一、二象寶名、曰二青山一、三紺馬寶、名曰二勇疾風一、四神珠寶、名二光藏雲一、五主藏臣寶、名曰二大財一、六玉女寶、名二淨妙德一、七主兵臣寶、名二離垢眼一、得二是七寶於二閻浮提一作二轉輪王一、

（倭訓栞前編九）こがね　金をよめるも黃金の義也、俗に黃金を音によぶは大判也、本草に波斯、紫磨金、東夷青金と見ゆ、青金は日本の產を指にや、紫磨黃金といふは、孔融が聖人優劣論に金之精者名曰二紫磨一、猶二人之有一レ聖と見ゆ、埃囊抄に須彌山の頂の閻浮樹の葉落て金となるの說より閻浮檀金といふといへり、○下略

（令義解三賦役）凡諸國貢獻物者、謂、案二調令一云、朝集使貢獻物、今此令爲二朝集使一也、不三必附二朝集使一、亦當二寄附使一也、皆盡二當土所出一、其金、銀、珠玉、皮、革、○下略

（延喜式二十四主計）諸國年料供進

砂金百五十兩下野國

（延喜式二十三民部）交易雜物

下野國（中略）砂金百五十兩、練金八十四兩、○中略　陸奥國（中略）砂金三百五十兩、○下略

（日本書紀二十九天武）十年十月乙酉、新羅遣二沙㖨一吉飡金忠平、大奈末金壹世一、貢レ調、金、銀、銅、鐵、錦、絹、鹿皮、細布之類、各有レ數、別獻二天皇皇后太子一、金、銀、霞錦、幡、皮之類、各有レ數、

（續日本紀一文武）二年十二月辛卯、令二對馬島冶一レ金鑛、

（續日本紀二文武）大寶元年三月甲午、對馬島貢レ金、建レ元爲二大寶元年一、　八月丁未、先レ是遣二大倭國忍海郡人三田首五瀨於對馬島一、冶二成黃金一、至レ是詔授二五瀨正六位上一、賜二封五十戶、田十町、幷絁綿布鍬一、仍免二雜戶之名一、對馬島司及郡司主典已上、進レ位一階、其出レ金郡司者二階、獲レ金人家部宮道授二正八位上一、幷賜二

水銀ハミヅカネト云フ、是ニ人工ヲ加ヘタル物ト、自然物トアリ、

金屬ハ、之ヲ鑛山、玉石ト沙土ノ諸篇ト參照スベシ、

〔類聚名義抄 金入〕金 今、正、カネ、俗今、

〔伊呂波字類抄 加 雜物〕金 カネ

〔日本釋名 中 水火土石金玉〕金 かね かたくねる也、石中にあるかねのまゝをくだきて、かたくねる也、

〔倭訓栞 前編 加 六〕かね ○中略 金をいふは堅練の義なるべし、金は五金の總名也、口語にいふも然り、されど東國にて、もはらいふものは黃金也、京師にてもはらいふは銀なり、

〔東雅 十七 器用〕金カネ 義不詳、我國太古の世には、珠玉をもて寶とし、金銀を寶となせし事は見えず、陰陽二神天降ませし始に矛劒の類ありと見えたれば、銅鐵の如き、すでに其用ありしこと疑ふべからず、正しく其物の名見えし始は、日神天磐屋戸にこもり給ひし時、天香山の銅を採りて矛を造り、天香山の銅を採りて鐸造りしといふ事、舊事紀に見えしを、古事記には、天金山の鐵を取て鍛造りしと記せしが如き即是也、鐵よりさき天鐵事といふも、舊事記に見えたり。金銀の如き、神功皇后新羅を征し給ひし初に、彼國王進貢の物に始て見えて、これよりして後、彼國をば寶の國と稱したりける也、(中略)古語にカタといふ事を、カといひしなり、詳なる事は鐵の註に見えたり、ネといふは、ネリといふ語の義なる也、凡五金の屬、燒鍊りて成るもてあるネとは云ひしと見えたり、鐵をネリといふも鍊也、其の堅きをいふ、鍊百鍊鐵といふが如し、鉛をナマリといふは生也、堅からざるをいふなり、今も物のなまくして堅からざるをば、ナマルなどいふなり、鐵錆をサビといふ義不詳、但しサビといふものゝ鐵にのみあるにはあらず。

〔傍廂 後篇〕金の五色

和名抄、金 古加禰 黃金也、銀 之路加禰 白金也、銅 阿加加禰 赤金也、鐵 久路加禰 黑金也、鉛 阿乎加禰 青金也とあり、皇朝には、神代上古より鐵のみありて、あだし金はなかりしなり、さる故に錢(今は交金なれど、いにしへは錢鐵なり、)劍、刀、甲、冑、其外農工商の器にても、鐵を以て質とし、あだし金は裝とす、金銀はもとなかりしを、素盞嗚の尊、天

古事類苑

金石部三

金屬

金銀銅鐵錫ヲ五金ト云ヒ、而シテ金ヲ以テ五金ノ長ト爲ス、蓋シ其光澤不變ニシテ、且ツ其産出ノ少量ナルニ因ルモノナラン、

金ハ其色ニ由リテ黄金ト云ヒ、邦語之ヲコガネト云フ、文武天皇大寶元年、對馬國ヨリ貢セシヲ以テ、我邦ニ金ノ産セシ古キ例ト爲ス、而シテ沙中ニ含有スル所ノ金ヲ沙金ト云フ、

銀ハ其色ニ由リテ白金ト云ヒ、邦語之ヲシロガネト云フ、天武天皇三年、對馬國ヨリ始テ之ヲ貢ス、

銅ハ其色ニ由リテ赤金ト云ヒ、邦語之ヲアカガネト云フ、神代ノ時、既ニ銅ヲ山中ニ得タル事見ユ、元明天皇和銅元年、武藏國ヨリ銅ヲ獻ズ、因テ改元シテ和銅ト云ヒ、又銅錢ヲ鑄ル、

鐵ハ其色ニ由リテ黒金ト云ヒ、邦語之ヲクロガネト云フ、神代ノ時既ニ其名見ユレド、我邦ニハ古來鐵ヲ産スルコト多カラズ、

錫ハ邦語之ヲシロナマリト云フ、鉛ト合金シテ白鑞ヲ生ズ、但シ伊勢白鑞ト稱スルモノハ今ノ謂ユル眞鍮ナルベシ、

鉛ハ青金ト云ヒ、邦語之ヲナマリト云フ、金屬ノ賤キモノナリ、而シテ密陀僧ハ又ロタストト云フ、鉛ト錫トノ合金ニシテ、多ク銀山ヨリ出ヅ、或ハ金銀ヲ吹キ分タル際ニ之ヲ得ト云フ、

田中藤兵衛

調役所

池田新兵衛様

〔草木六部耕種法序〕至曾祖父不昧軒翁、遍游歴四方數十年、益開拓我學、苦心焦思、著土性辨及鎔鑛要録、水陸經營秘録、開物新書、通移開闢法、釜紘法話等、元祿年中、開出羽國杉岡山金鑛、及阿尼銅山、寶永中、開下野國足尾、仁田本村錫山、享保中、開豊後國竹田錫山、晩年推究山嶽含藏金玉者、必日中吐精氣、夜半發火華、且生苗兒之明證、著山相秘録、實維先賢未曾知之實徴、而坑爐家之鴻寶也、至今奥羽兩州有鑛山相學者、大抵以我曾祖翁爲開山手云、

〔ドンロドリゴデビベーロ報告〕ドン、ロドリゴが皇帝に要求したる條項、

皇帝が求むる所の五十人の礦夫の事に關しては、予は之を陛下幷に新西班牙總督に申立つべきも、其實行を容易ならしめんが爲めに、皇帝は左の議件を承諾せざるべからず、

諸礦山より採掘する所の半は礦夫に與へ、殘餘はドン、フェリペ王と日本皇帝との間に等分し、陛下は右所得を管理する爲め、事務員を日本に派遣し、何派の宣教師たりとも之に伴ひ、公開の教堂に於て祭事を執行し得べき事、右事項は本條の末段に置きたれども、予の考にては、實は主眼にして、他は皆之に附隨したるものなりき、次に予が請求せしは、左の如くなりしと思惟す、曰く日本皇帝はドンフェリペ王と親交を有し、帝王は互に其約したる所を確守すべきものとす、而して兩敵は並び立つこと能はざるものなれば、今西班牙と交を結ぶについては、皇帝は蘭人に退去を命ぜざるべからず、蓋し蘭人依然として國內に在らば西班牙王及び其船は日本に於て安んずること能はざればなり、

獻す、

(但馬州金銀銅山幷寺社舊記)但州養父郡中瀬金山之事〔中略〕

一中瀬金山盛り之頃上り、中野吉兵衞支配之時分六拾年以前、寛永拾四年ゟ同拾七辰迄八年之内也、〔中略〕凡壹ケ年之運上金子千兩餘外ニ諸荷諸役錢三十六貫目餘、入木口入役錢三拾貫目餘有之由、〔中略〕

但州養父郡明延銅山之事〔中略〕

天和二戌年分入札有之外下直ニ仕候故請負人を相止メ、戌年ゟ辰年迄七ケ年は役人を遣置、口屋ニ而入運上取、山にて何ものにても用次第吹立出銅拾分一ブヽ運上取申候、然る所山師の者少く、運上も少く候ニ付元祿二巳年ゟ又請所ニ申付ル、

(享保貳拾年卯九月池田新兵衞様御勘定所銅山事御申上候書付)覺

一足尾銅山御運上之儀御尋被遊候、先年ゟ御運上ト申差上申候儀者無御座候得共、御代官様御代々町直段御吟味被遊御用御加へ、山元御直段被仰付候、於當御支配、町直段御吟味被遊候處、金壹兩ニ付七貫目買御座候、壹駄五歩之御運上且差上、又直段壹兩ニ付、八貫五拾匁ニ被仰付候、御定買錢之儀、當時町直段銅拾貫目ニ付三貫錢六拾貳匁ニ御座候、山師共御請合仕候ハヽ、銅拾貫目ニ付三拾九匁九分ニ御座候、去寅年御買御用銅ニ六拾貫目餘被仰付候處、右御請町直段引合金高三百三拾兩餘、御物用相見江申候、右新兵衞様野田三郎左衞門様御支配之節迄ハ、壹ケ年銅出高貳拾万貫目、或ハ拾五六万貫目程宛ハ仕出シ、御用相勤申候、近年御用も職山師共困窮仕、銅山稼方手せまニ罷成、年々銅減少仕、右百貳拾年餘御用相務申候御蔭乍恐不少御儀ト奉存候、以上、

享保貳拾年卯九月　星野忠左衞門

〔梅津主馬政景日記〕元和三年二月十四日、慶長十九年山々金銀御運上、大御所様〇徳川家康より御拜領、元和二年山々金銀御運上、將軍樣〇秀忠より御拜領被成置候分、御國替之時分、御供仕、其年爰元まで罷下候ものどもに、銀子被下置て、其外慶長十九、大坂御陣にて打死仕候者ども之親子などは、知行ニ被逐被下置候、右銀都合五千四百枚あまりにて御座候夜ニ入候而各々へ知行被下候、其内梅津長三郎ニ知行貳百石被下候、御算用今日は不仕候、　八年正月廿一日、銀山御運上六箇所之分、灰吹銀百三拾九貫百六拾目貳分ハ院內山分、外ニ三貫六百八拾九匁八分之足目有、灰吹六貫三百六拾壹匁八分ハ荒川山分、外ニ三拾八匁貳分之足目有、灰吹貳百三十目ハ畑山分、灰吹百目ハ水澤山分、都合百五拾貫目也、右仁ッ、一紙山々之壹紙受狀候共ニ御前江差上申候、昨日從秋田御運上金銀罷登ニ付、壹紙極候へと被仰付候間、帳共揃書付申候、金山御運上四ヶ所之分、判金十三枚ハ大葛山分、吹金四拾四兩貳歩ハ杉澤山分、外ニ仁歩之足目有、吹金壹枚七兩三匁八分ハ阿仁山分、外ニ六兩仁歩之足目有、砂金貳枚壹兩ハ檜木內山分、都合貳十貳枚、寛永二年六月十三日、今朝も銀山へ登見申候得共、當月之內などは、御山に可罷成體に無之候間、當月中は穿取に致候へと、總山中之者に申付候、從出候はゞ、十荷壹を山先兩人に出候へと申付候、來月朔日よりは、直御運上山に可申付由、山先山師に申付、其より只今之地形は、山こやまでに候間、山師町人之屋敷に可罷成所、奉行屋敷御藏屋敷龍所まで見申候、忠左衞門、助右衞門には、町屋敷之檢を折、只今まで家作立候山師町人之家數帳に付、其より山道黑川虹川江之籌道留候はん間、見被申候而、明日成共、明後日成共、被罷歸候へと申渡候、此中付置候高根久左衞門、駒木根五郎右衞門をば同心致罷歸候、半右衞門へ、おまた銀山之樣子具に爲申聞候、

〔貨幣秘錄〕金銀山の事

羽州秋田銀山は、佐竹右京大夫領內にあり、古來より運上として每年灰吹銀一貫四百目づゝ、貫

之高ニ罷成、貳百壹貫七百餘兩寛延三午年巳來、年々御用代相減候ニ付、大造成儀高ニ罷成候

得共、其後御直段增等之儀不申上、尤出精仕、右御定直段ヲ以事實上候御儀ニ御座候、

右者寛永年中巳來當時迄、先祖ゟ年久敷兩銅山御用無滯相勤候處、事入御物ニ度、乍恐由緒之儀

奉申上候、以上、

辰二月　泉屋吉次郎

(慶長見聞集 七)諸國ニ金山有事

當君(家康)の御時代には諸國に金山出來、金銀の御運上を牛車に引ならべ、馬に付ならべ、まい日をこたらずなかんづく佐渡島はたゞ金ぎんをもつてつき立たる寶の山なり、此金銀を一箇に十二貫目入、合百箱を五十駄つみの舟につみ、毎年五艘十艘づゝ、佐渡島より越後のみなとへ着岸す、是を江城へ持はこぶ、おびたゞしき事、昔をたとへてもなし、民百姓までも金銀をとりあつかふ事、有がたき御時代なり、

(金銀銅山等留所書)金銀山之部

一佐渡之内レツウナと申所ニ金山有之、慶長元和之比ハ專相稼候事數出候ニ付、公儀(江戶)運上差出、當金百枚宛上仕候處、金山運上御免被成下、其以來佐渡志摩守手前賴りニ申付候處、家中學論有之相止、當時も掘り候ハヾ出可申候事、

(駿府記 慶長)鹿角金山[illegible]附駿河へ言上之事

奧州鹿角、白根、西道等之金山をば、北十左衛門不思議の緣ニ因て見立(一名中)、斯て利直公より數面金山出來之事、并伊兵衛殿迄内々に被仰置けれども、明日以之外美々數成、伏見大坂之者迄下りければ、言上せねば不可然とて、慶長九年の秋の頃にや、駿河へ參勤せられし折節、此事を言上せられ、當山之爲運上黃金千枚砂金五十斤被獻けり

江銅賣渡候儀、御赦免被成下、其後相續銅賣渡來候事、

一同十八辛巳年より、異國人所々江著船之儀者、御差止メニ被爲成、長崎江初而著船被仰付、從是御目附樣方、一年代りニ御勤、其後長崎御奉行樣御極り被爲成候事、

一寛文八戊申年三月、異國人江諸商賣物御停止被仰付、其節直銅商賣之儀者、數代家業之儀ニ御座候故、先祖吉左衞門出府仕、四月廿二日御評定所江奉願上候處、五月六日被召出被仰渡候者、限りケ間敷商賣直可仕敷旨、被爲思召上、御停止被爲仰付候得共、銅之儀者數代無怠商賣勤來候御趣を以、奉蒙御赦免候、其節新規企を以、壹人ニ而直銅商賣取立候儀、堅ク仕間敷旨、大坂町御奉行石丸石見守樣、長崎御奉行松平甚三郎樣江直被爲仰進候事、

一寛文十二壬子年、長崎江罷下り候諸商人共、銅屋共儀、御詮儀之上、天々ニ貨物之割賦被仰付候事、

一元祿十四辛巳年、銀座爲加役銅座被仰付、則從銅座異國人江直賣ニ相成候ニ付、古來より私共より異國人直賣相止ミ、銅座へ銅賣上ゲ申候、其後正德元辛卯年、同二壬辰年、享保元丙申年、同七壬寅年、以上四度、右銅渡方之儀御改替、元文三戊午年より又々銀座爲加役銅座被仰付、異國人江直賣ニ成候ニ付、私御請負之山々出銅之分直悉銅座江賣上ゲ申候事、○中略

一寛延三午年、長崎御奉行松浦河內守樣之節迄者銅百斤ニ付代銀百八拾目平均ニ奉賣上候處、格外之御直下ゲ被仰出、百斤ニ付、百三拾九兩四分八厘之御買上ニ被成、色々奉歎候得共、無御聞濟、一兩年直御意之通承伏相勤候はゝ、其內ニは御直增可被爲仰付之由、不得止事奉畏、其後御代り度每ニ奉願上候得共、曾以御聞屆不被下、其後明和六丑年、石谷備後守樣之節、段々奉歎訴候處、種々御吟味之上、爲御手當年々御銀九拾貫目宛被下置、難有仕合奉存候、然レども元御直段百八拾目と差引仕候得者、百斤ニ付、貳拾八匁餘宛相違仕候ニ付、年分御定高七拾貳万斤

一同百六拾〆文より三百〆文迄ハ、四分六ニ御堀分け、四分ハ御公儀、六分ハ山師、

一同三百貫文以上者、御撤山御法也、但撤山と云は御運上せり上て切刃を取也、

一普請所金に當り、御訴申上度節は堀取十日御免也、

一普請所、金に當り、隱密に堀候はゞ、切刃被召上、御追山之御法也、

一千貫文貢ハ、御公山御格合也、御公山と云は、公方樣御山也、

貢山割合七分三の時は、御運上引殘、跡七分を割、十分の四山師、但し金主割合山師の内なり十分の二大工、

十分の一堀子鍛冶、

一堀荷より、神荷壹荷除、跡貢山、

一役人、敷内より手山色掛砂は荷持留取押候義不相成、御免許也、

一出荷より、山師荷壹荷相除、貢山立るなり、

一砂手物掛、砂篩打、香箱、帳付飯焚、小使岡廻り、風呂番割合也、

一草末御證文ハ、壹箇年に可限事、

右慶長巳來被定置候御法に候へ共、時之國主に隨ひ不同有之候事、

〔銀山舊記〕銀鉸銅

一灰吹銀の儀は、前年十月より、翌年九月中迄の出鏈、十月中迄に吹立候を、壹ヶ年分に相極、月に出來灰吹銀高は、御屆申上、御銀藏へ入置候分、悉清懸致し壹包に五百五匁宛に包立、十月下旬、大森差立申候、尤仕來にて、雲州赤穴より、備後三次迄、松平佐渡守より繼送り、同所より備後尾道迄繼送り、并同所より船積いたし、播州室津迄、松平安藝守より相廻し、同所より大坂安治川迄、酒井雅樂改手船にて相廻し、安治川より高麗橋迄、大坂上荷船にて相廻し申候、右灰吹銀丁銀并銀鉸銅共、大森陣屋より、大坂迄無賃にて附送申候、尤年々十月中旬、右銀銅駄數取極、前條三ヶ所領主

の鏈を申聞せ候ニ付、買石共請取之、洗ひ桶と申に水を入れ、其中か江笊ともに鏈を入れ能洗ひ、鏈石の善惡を目利仕、其上おつつかみと申候而、大概鏈五拾目程つかみ取、鐵皿扣之もの江渡し、鐵皿と申候者、差渡六七寸丸く中くぼに鐵にて仕立候物に入、甕にて組候輪懸蓋にいたし、萱鏈と申候而、廻り三寸、長六七寸許り之鐵鎚にて打碎き申候、細かに成候節杓子ニ入れ、水にて汰り流し候得ば、砂は先きへ流落、水筋汰物は板子ニ相殘り申候、此杓子と申は、差渡五六寸、丸くおのれとくぼく柄三寸許り附候柄ニ御座候、右杓子面ニ殘り候水筋汰物目形、大概何程と勘定いたし候、鏈石おつつかみ五拾目は、鏈五貫目入壹荷之割合壹厘之宛りを以、壹荷には水筋汰物何程、左候得ば筋金何程、山吹銀何程吹立可ㇾ申と相考へ、山吹銀筋金御買上代、御藏請取宛りを以、五貫目入鏈壹荷ニ付、錢何拾何貫文相懸り可ㇾ肉と相積り、御金藏請取御入用を踏へ、元印銀相場銀壹匁四拾八文之宛りを以、元印銀ニ直し、鏈五貫目入壹荷ニ付、鏈代何拾何匁何分、吹歩三割九分之積りを以目利仕候、出來銀と唱へ候義は、筋金と山吹銀と打合候を申候、縱令鏈壹荷ニ付筋金拾匁、山吹銀百四匁吹立可ㇾ申と目利仕候得者、筋金拾匁者、山吹銀三拾五匁ニ成代り候と申定法を以、出來銀百三拾九匁ト目利仕候儀ニ付、出來銀と唱へ申候、且山代と申候は、右之鏈代之事ニ候、右之通、數々上中下の鏈目利仕、五貫入鏈壹荷ニ付、何數何鏈ハ何程と申儀を書付仕候而、御番所江差出し候ニ付、御給人山方役、御目付役、金銀改役、其間歩之御番所役立會之上、帳付之もの讀之候ニ付、鏈壹荷代何程と申儀を帳面ニ記し申候、右本歩鏈叺ニ入、金銀改役荷數相改、上鏈之分は御番所箱建江入れ、其外御番所庭ニ堺を立、繩を以締置り仕、箱建并締〆り江符印附置引拂申候、

鏈荷分之事

一毎月二三四ノ日、荷分と唱へ、一十ヲ日分之鏈相改メ、鏈代相極メ候ニ付、荷賣鏈目利之節之通

石州灰吹銀出高

天保元寅年　一灰吹銀八拾貫八百目　同二卯年　一同九拾貫九拾貳匁　同三辰年　一同九拾六貫目　同四巳年　一同七拾貫七百目　同五午年　一同七拾五貫目　同六未年　一同七拾貫目　同七申年　一同六拾五貫目　同八酉年　一同六拾七貫目　同九戌年　一同五拾五貫目　同十亥年　一同五拾貳貫目　同十一子年　一同五拾貫目　同十二丑年　一同五拾貳貫目　同十三寅年　一同五拾貫目　同十四卯年　一同四拾五貫目　一灰吹銀壹貫目ニ付、御買上直段貳貫百八拾貳匁、

石州銅出高

天保元寅年　一荒銅壹萬八千斤　同二卯年　一同貳萬千斤　同三辰年　一同貳萬五千六百八拾斤餘　同四巳年　一同貳萬千八百五拾斤　同五午年　一同壹萬九千五百斤　同六未年　一同貳萬貳百五拾斤　同七申年　一同壹萬六千五百斤　同八酉年　一同壹萬五千七百五拾斤　同九戌年　一同壹萬貳千斤　同十亥年　一同七千五百斤　同十一子年　一同七千五百斤　同十二丑年　一同六千斤　同十三寅年　一同五千貳百五拾斤　同十四卯年　一同六千斤　一銅百斤代銀百五拾七匁外手當銀貳拾匁、都合百七拾匁、

〔金銀山出鑛銘吹方取扱一件〕本途買石共銀山ニ而鑛目利仕候之事

一毎月七八九ノ日鑛目利日ニ御座候ニ付、本途買石ども不殘銀山江罷登り、御番所庭ニ莚ひ敷と中を數有之候ニ付、買石共右之所江相詰罷在候得ば、間歩之建場小屋よりかなこ共上中下の鏈を御番所江持出、一口宛莚の上江打明ケ申候、是を本歩鏈と申候、右本歩鏈を買石共召連候、鏈見和人足壹人と申所人之もの共銘々蕨ニ入れ、買石共罷在候所江持參仕候而、何數上中下

而買渡高相分兼申候、

一正德五未年より延享二丑年迄、一ヶ年金壹万六七千兩より貳三千兩宛、年々買渡金高不同有之、延享三寅年より寶曆十二午年迄、文金千兩宛年々買渡申候、

一寶曆十三未年より、金千兩代銅七万斤宛買渡被仰付候、

〔天保集成絲綸錄〕九十　寛政九巳年五月

大目付江

近年諸山出銅不進之上、一體銅方不取締ニ付、此度大坂表ニ有之長崎銅會所を改銅座ニ申付、諸國之出銅一手ニ引受させ候間、大坂表ニ而銅取來候問屋吹屋中買、總而正銅取扱之儀者、銅座より可致差配候、依之國々銅山稼來分ハ不及申、此上致出精相稼、新山等開堀致し、銅出方掛出銅少く候共外買不致、不殘銅座江相廻し、古地銅ニ至迄銅座江可相廻候趣、以來銅座江買入候銅代者無口錢ニ而、御銀拂之筈ニ候事、

〔御勘定所より御尋に付書上扣〕文化五辰正月書上、銅山〇足尾　御尋ニ付、乍恐以書付奉申上候、〇中略

一荒銅拾六万七千貫目餘

是者享保三戌年より延享四卯迄六ヶ年之間、於足尾鑄錢座被仰付候節、御買上之外同所江相渡申候、

一荒銅五万五千貫目餘

是者天明四亥年より安永四巳迄七ヶ年之間、龜井戸鑄錢座江御買上之外相渡申候、

一眞吹銅三万五千貫目餘

是者安永貳巳より同戌迄六年間之間、十万坪鑄錢座江御買上之外相渡申候、

〔吹塵錄〕二十四 鑛山　天保元寅年より同十四卯年迄　石州灰吹銀并銅出高

れども、銅座の者共運送すべきと申せし所の数にもたらざる所百五十萬斤なれば、同三月十七日、銅座のものに與ねしめられし銅座の事を停められ、同十九日に、大坂吹屋のもの共に此事を仰下されぬ、されど去年己卯、諸國銅山より產する所の銅六百四十萬斤に過ず、たとひ我國の用百六十萬斤を除くの外、長崎に運送すべき所、百四十萬斤には過べからず、是その價の賤り賣ければ、銅を出す者共たやすくは賣渡すべからざるが故なりと申す、

(吹塵錄二十二[illegible])慶長已降、定額を定め、長崎に於て、支那和蘭江渡すものは如左

和蘭買渡銅定高

阿蘭陀方買渡銅左之通、

一元祿十一寅年より買渡銅定高貳百五拾万斤、

一正德五未年より享保五子年迄、買渡銅御免高百五拾万斤、御定銀高三千四百貫目、船數貳艘、

一享保六丑年より寬保二戌年迄　右同斷百万斤 御定銀千七百貫目

一寬保三亥年より延享二丑年迄　右同斷六拾万斤 同十九寅年より御定銀千百貫目

一延享三寅年より明和元申年迄　右同斷百拾万斤 同年より御定銀高五百五拾貫目

一明和二酉年より同四亥年迄　右同斷八拾万斤

一明和五子年より寬政二戌年迄　右同斷九拾万斤

一寬政二戌年より銅六拾万斤宛買渡被仰付、當時迄右高買渡候儀ニ御座候得共、次第買渡銅之內追々買渡被仰付候、

一阿蘭陀方買渡物之儀、寬永十七辰年、阿蘭陀船平戶江入津、同所ニ而商賣相始、大判三百兩、金壹万兩、銀四千貫目買渡候由御座候、尤同年、向後長崎湊江可致入船旨被仰渡、同十八丑年より長崎湊江年々入船有之、商賣相始、金銀錢銅樟腦白米麥等買渡候由ニ有之候得共、年久敷儀ニ

銅山三拾四ヶ所目錄

一日本銅山三拾四ヶ所より每年銅出方

九百萬斤程ヅヽ、　但棹にて

内（百萬斤日本向、八百萬斤異國向）

此代金拾五萬兩程

右之銅、銅吹屋ニ而ほり申候者、白銀七百貫目程、金ニ而貳萬八千三百兩程、

一三拾四ヶ所之銅山の人數貳拾萬人幷銅山之近國在々より炭燒出申候、大坂吹屋に而遣申候炭、近國より燒出申候俵數百四十四萬俵程、炭燒人數拾萬人程、大坂吹屋之職人壹萬人、總合三拾壹萬人程、

每年異國江渡候銅、凡五百萬斤程、　此代金九萬千六百兩

銅よりしぼり候白銀、金に而　貳萬八千三百兩程、

合拾壹萬九千九百兩程ヅヽ、銅ニ而異國へ商賣之銀高之內、日本へ止り申候、

〔折たく柴の記　下〕此年〇正徳三年の冬、前代の御遺志をつがれ、長崎の事御沙汰有べき由議定有けり、此御沙汰の事起りしは、前代御世を繼れし初より、海舶互市の料とすべき銅の數足らずして、事ゆかず、地下人等產業をうしなひて、飢饉に及べき由、長崎奉行所より注進す、〇中略其事の御沙汰ありて銅運送すべき事承りし銀座のもの共に催促しぬれど、諸國の銅山より產する所、年々に減じて、其價騰り貴く、其價を增し加へらるべしなど申事にて事ゆかず、正德元年辛卯に至りて、銀座の者共、銅四百五拾萬斤をば運送すべきよしを申す、其數足らざらむ所をば承るべしと、望申すものありしかば、〇中川六左衛門といふ商人也望む所をゆるされしに、銅の價なほ騰り貴くなりて、是も其利をうしないて事ゆかず、我國にて用ふべき所の銅も用ひたらず、明れば二年壬辰の二月に至

ノ如シト云者ノ類歟、山民皆言フ、神功皇后將三韓ヲ伐トシテ、先ヅ此山ニ材ヲ採テ以テ戰艦ヲ造ル、是レ此山ニ船木ノ名アル所以ナリ、其材化シテ土石トナル、卽是ナリト、或人ノ曰、此石乾漆ニ似タリ、故ニ近世藥肆詐テ乾漆ニ充テ、以テ醫人ヲ欺ク、醫人豈知ラザル可ケンヤ、

〔採藥使記下長州〕重康曰、長州舟木村ト云フ所ヨリ石炭ト云フ物ヲ出ス、又アラス石トモ云フ、土人山ヲ掘テ是ヲ取リ、薪ニ代ヘ用ユ、其甚ダ臭シ、

允生按ズルニ、是本草ニ載ル所ノ石炭ナルベシ、又筑前黒崎村ヨリモ出ル、又伊賀藏持ト云フ所ニモ有リ、俗ニ是ヲ乾漆ニ僞リ用ユ、毒アリ、猥ミ用ユベカラズ、其色黑クシテ、漆ノ乾キタルニ似タリ、老學庵筆記ニ曰、豫章郡ヨリ石ヲ出ス、燃テ薪トスベシト云ヘルモ是ナリ、

〔西遊雜記二〕舟木の驛に至り、此所に石膽の數多出る所にして、近郷の百姓此石を燒木とせる事也、馬一駄にて價僅に七十錢位の物にて、至て便利の燒物也、併し臭氣甚敷、中以下の百姓ならでは燒木にはせぬ事と云、此地に大樹數多有しを、神功皇后三韓御征伐の時、軍船になし給ひしより、地名を舟木と號して、其木の殘りしが化して石と成しと也、解しがたし、石膽は諸國に出る所多し、

〔長防產物名寄土石〕石炭

厚狹郡末益村ノ內、小松尾山、　同郡舟木村ノ內、小野ノ谷、　同郡同村ノ內、羽山ノ谷、　同郡同村ノ內カリマタ山、　同郡有帆村ノ內、メクリ田山、　同郡同村ノ內、マワチ山、同ヒキヨミ山、　同高畑ノ內、前カテコ山、同權左畑、同ロウガナコ、

右此外厚狹郡四邊ニ有之、分下品、

〔紀伊續風土記物產一〕石炭本草

牟婁郡西山鄉平谷村に產す、多くはなし、　此石中國九州邊に多く產す、燒けば能燃ゆるを以て

紀伊國石炭山

硫黄山

ニ錫鑞ニ作ル、章錫同、唐ノ俗名ナリ　崑崙眂石黄雷黄　禿鷲都孛事物異名

〔新編常陸國誌土産六十一〕山錫

那珂郡上檜澤村ヨリ出

〔大和本草金玉土石三〕硫黄

凡温泉アル處皆硫黄アリ、信州淺間ガ嶽、越中立山、越後妙香山、肥後阿蘇山、日向霧島、肥前島原、スベテ山ノヤケ熱湯ノ出ルハ皆硫黄ナリ、伊豆大島ノヤケタルモ硫黄ナリト云、信濃草津ニ温泉アリ、知死期ニ溜溢ルト云、湯ノ沫ヲトリ煮レバ、即硫黄トナル、其地ニ藥師堂アリ、錢ヲ十年ニ一度錢カユル、硫黄氣ニテタテル故ナリ、旅人ノ刀、古身ハサビズ、新身ハ黑サビ出ヅ、湯ノ穴ニ錢ヲ懸ベバ湯トナル、是硫黄ノ氣銅錢ヲ腐ラカスナリ、倭硫黄ヲ中華ニモ好品トセリ、

〔増訂豆州志稿土石七〕硫黄

那賀郡檜原山、宇久須村八公山、東浦白田川ノ上流等ヨリ產ス、硝、硫酸、火藥等製造ニ用ウ、

石炭山

〔本草綱目啓蒙石九〕石炭略○中

石炭ハ和產多シ、京ニハナシ、筑前ノ黑崎村ト云ガ、日本デ初テ石炭ヲ堀出シタル處ナリ、今ハ長州ノ舟木村、江州藏王村、岩根村、加州白山、濃州養老村、伊賀古山村、奥州南部、信州、備後、大和春日山、上總釣子浦、相州由井ケ濱、紀州濱宮、山城ノ木津川ナドニ皆アリ、皆山ヲ深ク堀リ入リテ取ルナリ、

伊賀國石炭山

〔本朝奇跡談上〕伊賀國阿拜郡處籠手村、津個、此邊の村々にてウニと云もの地より出る、墨の樣なる土を堀出て、常の薪となす、上下の品有て、上のうには拾貫目に付價百錢、下のうには綿うにと云て、錢七八拾銅を過ず、又同國土中より赤く光る石の樣なる土を出す、是を島と云、田畑の養ひとす、○下略

鉛山

スモ、七日ホドトカストキハ、熟シテヤワラカニナルナリ、方言ニケラト云、鉧ノ字ヲ和訓ニケラト云、鹿ニテハ熟鐵柔鐵ナド、云ナリ、ナマガネトモ云、ケラヲ取出シテ火ニカケテハタ、キ、火ニカケテハタ、キスルトキハ、堅クナルナリ、此ヲ器物トナスナリ、

(日本靈異紀上序)於是諾樂藥師寺沙門景戒、熟瞰世人、有才好鄙行、殉利養貪財物、過磁石於拏鐵、山以嗜鐵、〇下略

(續日本紀文武三)大寶三年九月辛卯、賜四品志紀親王近江國鐵穴、

(續日本紀聖武十四)天平十四年十二月戊子、令近江國司禁、有勢之家專貪鐵穴、貧賤之民不得採用、

(三代實錄十一清和)貞觀六年八月十七日、備後國神石、奴可、甲努、惠蘇、世良、三谿、三次、三上八郡居山岡、土宜採鐵、連年旱疾、黎庶彫亡、四年之間、毎年四郡更復課役、

(今昔物語二十六)能登國堀鐵者行佐渡國堀金語第十五

今昔、能登ノ國ニハ鐵ノ錬ト云ナル物ヲ取テ、國ノ司ニ辨ズル事ヲナンスナル、其□□ト云ケル守ノ任ニ、其錬取ル者六人有ケルガ、長也ケル者ノ己等ガドチ物語シケル次ニ、〇下略

(紀伊續風土記物產一)鐵本草、本草和名ニ久呂加禰、和名鈔ニ黒鐵、　牟婁郡那智妙法山に產す

(本草綱目譯義八金)鉛ナマリ

ナマリハ日本ニテモ處々ヨリ出ヅ、先ヅ出羽、對馬、加賀、紀州、豐後、越前、其外處々ヨリ出ヅ、銅山ヨリモ出ヅ、鉛ニ三種アリ、

(雍州府志六土產)鉛　多出自銀山之邊者爲好、豐後州之所出爲勝、其色似銀、〇中略凡錫銀山邊所出爲良、銅金山側所堀爲佳、

(佐渡志五物產)鉛

加茂郡入川村ノ深山ニ產ス、下品ニシテ亦出ルコトモ少シ、

以背負上ゲ申候ニ付、運送賃銀過分相懸リ、殊之外米高直ニ相當リ、候儀ニ付、大勢之人數相集メ候而者、飯米ニ手支申候、其上兩銅山普請方存分ニ仕立申候ニ者、夥敷物入相懸リ候儀ニ付、當前ニ而は自力相應之仕入ニ而稼方仕候、此上兩銅山普請丈夫ニ仕立、飯米無手支用意仕相稼候はゞ、出銅拔群出增可申段存寄申上候處、御吟味之上、右兩銅山爲水拔普請料、午年ゟ十ヶ年之間、御金壹万兩拜借被仰付、此內五千兩者、備中銅山普請仕入御引當ヲ殘五千兩者、豫州銅山普請料御引當ヲ、猶又豫州銅山江は、格外ニ御物成米之內、六千石宛買受被仰付、尤御直段之儀は、所相場之內、御廻米御運賃幷銅山江背負上ゲ候掛リ物分、御用捨被爲成下、定御直段壹石ニ付、五拾目替ニ而、尤代銀十ヶ月延納之積を以、御銅山相稼候內買請被仰付候、此御陰を以、飯米無手支人數夥敷相增、水拔普請夫レ〳〵存分ニ仕立、猶數千働人江前銀丈夫ニ相渡、稼方晝夜無間斷出精仕、翌未年ゟ銅高拔群出增、御用銅差出、年々大分之御運上奉上納候、

但備中銅山之儀、段々大普請取立稼方種々雖弁仕候得共、何分水夥敷相滞、存入之稼方難仕ニ付、享保元申年御山差上候ニ付、右拜借之內五千兩者、同年返上納仕候、且別子銅山江拜借金五千兩者、銅山繁昌仕候ニ付、御定十ヶ年返上納之積ニ候得共、五ヶ年目ニ皆上納仕候事、

○中略

一享保十五戌年、別子元鋪取失候儀有之、御願奉申上候而、元鋪拔數內普請爲御助成、例外ニ御米九千石拜借被仰付、其後九ヶ年ニ奉返納候、○中略

右者寛永年中巳來當時迄、先祖ゟ年久敷兩銅山御用無滯相勤候儀、奉入御聽ニ度、乍恐由緒之儀奉書上候、以上、

未
二月　　泉屋吉次郎

〔三代實錄三十三〕元慶二年三月五日辛丑、詔令大宰府採豐前國規矩郡銅、充彼郡徭夫百人、爲採銅

長門國銅山

紀伊國銅山

伊豫國別子銅山

郡由緒書ニ見エタリ、

〔三代實錄 三清和〕貞觀元年二月廿五日辛亥、以長門國醫師從八位下海部男種麻呂、爲採銅使、詔三箇年內所進銅鉛年別各足三千斤者、須借授五位、其後三年內不被此數者隨爲眞、

〔三代實錄 十六清和〕貞觀十一年二月廿日戊申、太政官處分、停遣採長門國銅使、付國宰採進焉、

〔紀伊續風土記 物產一〕自然銅 本草

那智及楊枝村銅山、また日高郡川上莊江川村山中より出づ、舶來より形小なり、

〔愛媛面影 一宇摩郡〕銅山

別子山、足谷といふ所に在り、元祿四年より開發せり、又新居郡立川山長谷と云所にあり、舊は一柳家の領地なりしを、後西條領となりて、金子村人專開發せし由、其後又公料となりて、浪花住友某の支配となりたり、

銅を含たる石を鉑と名く、鉑を堀出す礦穴を鋪と云、又間符とも云、間符の內に材木を建幷て、穴の潰れざる構を爲たり、水拔間符あり、是は鋪內に水の溜るを流出す爲に設る所也、又風廻間符あり、こは風の通はん爲に設る所なり、鋪內は晝も闇夜の如し、依て榮螺売に鯨油をもり、綿にしませ、火を點して入に、此風廻穴なければ、燈消てともらずと云、間符口に小屋を構て、鋪內より堀出したる鉑をあらため、あしきを去り、よきを撰て、細に碎き、それを燒竈といふ物に入て燒なり、鉑石千貫目に薪三百貫より四五百貫目ばかり燒て、日數三十日ばかり過て、火氣の失たるを窺ひ、床屋といふに運て吹立るなり、略〇圖

此床屋にて始て吹を鉑吹と云、吹上たるを鈹と云、此鈹を銅に吹上るを眞吹と云、兩度の吹立には、銅千貫目に炭七千貫目餘を費す、

燒竈二百八拾枚　床屋廿五軒 鉑吹十五軒 眞吹拾軒

明和元申年九月　　　　願人　彌助

御奉行所樣

(但播州金銀銅山幷寺社舊記)但州養父郡明延銅山之事

一大同元戌年ゟ初而、當申迄八百七拾六年中、右銅山中絶仕候由、此所別所豐後守領分ニ而候處、九拾四年以前、慶長四亥年、豐後守丹後由良へ被遣、同年ゟ生野奉行間宮新左衛門支配成、其頃ゟ奥山中所ニ銀山出來大盛之由、役人どもを遣候處、生野同前之取計ニ而運上取ル、其ゟ貳拾枚間歩、谷床間歩、合木谷白岩所々ニ銀山出來ス、藤川喜左衛門支配之時、六拾四年以前寬永六巳年ゟ請座成、前々ゟ五年ヵ三年ヵニ入札爲仕候、先奉行支配之時、天和二戌年分入札存之外下直ニ仕候而請座を相止メ、戌年ゟ辰年迄七ヶ年は役人を遣置、口屋ニ而入運上取、山は何ものニ而も掘次第爲稼、吹立出銅拾分一ブヽ運上取申候、然る所山稼の者少く、運上亥少く候ニ付、元祿二巳年ゟ又請所ニ申付ル、

但州入庫村請主　喜右衛門

同請人　六右衛門

元祿二巳ゟ未迄三ヶ年

上銀拾三貫貳百五拾三匁壹分　山目

内　拾貳貫貳百三匁壹分　明延分
　　壹〆五十目　神子畑銀山分

但シ神子畑銀山へ、前々ゟ明延と壹所ニ爲請申候、

右銀高ニ銀六拾枚增以後三年請負度者、右同人願之、吟味之上申付ル、〇下略

(三代實錄陽成三十九)元慶三年三月七日乙卯、散位從五位上勝侯忌寸永岑言、石見國美濃郡都茂鄕丸

無御座候、佐兵衞捨置候場所事、願上候、

一同國同郡田野銅山義、五六拾年以前より休山仕罷在候、三四拾年此方、銀鉛稼事、願上、銀鉛山御請所仕罷有候、近年銀鉛貧中候ても仕當不申候故、相休中に付、其儘捨置候義殘念に奉存候、故寶暦十二年より銅山取建、銀鉛師五兵衞山先にて、私銅山相稼、只今掘中候、然共五兵衞山先仕、私銅山稼仕候ても、私存寄の通に難仕御座候間、御吟味の上、銀鉛山の儀は、又兵衞相稼、銅山稼の儀は、私江分け山に被爲仰付被下候はゞ、隨分出精仕候て、銅山取立仕候、

一同國同郡中瀬金山の内、中野か谷銅山、是迄書面通りに御座候故、相稼申度奉存候に付、中瀬金山百姓役人迄、相對仕候所、中瀬金山師は不及申上、諸百姓迄も承知仕候得共、本村吉井村百姓分の内二三人不得心に付、相對相濟不申候、右相對相濟不申候ては御願申上候ても、御取上無御座候由、右御山相稼候ても、田畑用水等の障に少も相成不申候儀に御座候間、何卒御山相稼候はゞ、是又責奉存候得共、右の通百姓異印無之候ては御取上無御座候に付、何分御吟味の上被爲仰付被下度奉願上候、此外銀山銅山御取立可被遊被爲思召上候はゞ、百姓相對不仕候て、御山被爲仰付被下置候儀相成候はゞ、生野御支配の内にても、近年の内數ヶ所取立銀銅出精仕、取出可申候、

一生野銅山中の儀は、下財買吹は不及申、諸商人に至迄、日々人別に貳合六勺宛の御扶持米被下置、其上山師江は買請米被下置候、右私願上候銅山江も下財掘引手子の者共江、日々壹升づゝ、御扶持米被下置、下財掘引手子共江、五合宛被下置、御扶持米御直段を以、最寄りの村方より扶持米人別被爲下候はゞ、爭出銅直段格別引下げ、御用銅御請負上納可仕候、右願之通、以御慈悲御吟味の上被爲仰付被下置候はゞ、難有仕合に奉存候、以上、

　北八丁堀長嶋町兵庫屋喜兵衞方に罷在候

鶴子山ヨリ產スル銅ヲ以テ錢鑄タルコトハ、食貨ノ部ニ云ル如シ、寬政ノ頃、相川鳥越山ヨリ銅出ルコト多シ、幾程ナクシテ銀山トモニ衰ヘタリ、

但馬國銅山

〔但馬金銀山舊記〕乍恐口上書ヲ以奉御願申上候

但州生野御代官所平岡彥兵衞樣御預リ所

瀨谷銅山師
彌助印

瀨谷銅山師彌助申上候、私儀、但州川筋、武州葛飾郡鑑有村清右衞門御請所、高瀨舟通船方山口村會所支配仕、年來但州ニ住居仕候ニ付、去ル寶曆九卯年、生野御役所ヘ奉願上、同國養父郡和田村二ツ尾銅山稼相建、巳ノ年迄相稼候內、少々宛出銅仕候得共、仕當ニ難成奉存候故、又候同十年辰年、同國同郡明ケ延銅山之內小名瀨谷と申所奉願上、唯今相稼罷在候得共、何分瀨谷ノ內計ニテハ、手狹ニ御座候ニ付、存寄ノ通、盛山出來仕間敷と奉存候間、左ニ御願申上候、乍恐近年諸國共銅山鮮ク御座候故、銅山御吟味被爲遊候由奉承知候、

一明ケ延銅山の儀は、大同元年より相始り、唯今迄相續、銅山稼相建候、古來は殊外繁昌仕候處に御座候へども、三四拾ケ年以前より、次第衰微仕候而、銅山町下財共見取百姓に相成、少々宛畑作、其間葛蕨根堀渡世に仕候て、漸其日相立罷在候內、乍恐私儀近年山近に入込、乍少々稼相建申に付、御吟味有之候間、明ケ延銅山も、近年は出銅も相增申候得共、元來只今明延銀山御請負山師生野銀山和泉屋佐兵衞、同所掛屋元次郎、同掛屋長四郎三人、御請所仕居候へ共、元次郎、長四郎義は、佐兵衞に預け置、佐兵衞壹人稼に御座候、右佐兵衞と申者、山方出精仕候而、稼申者に無之候、結構成銅山、此節稼捨、同前に仕差置候儀に御座候間、佐兵衞御請所の內、私江入込稼、乍恐被爲仰付被下候はゞ、決て盛山取立可申候、勿論明延銅山山役銀の儀は、御役所より被仰付候通無相違御運上御上納可仕候、右佐兵衞相稼申候節、其外見立に至迄、私稼申度と申御儀には

〔盛岡南部領内買試記〕延寶八年ヨリ天和二年十二月迄

一白根銅山　床一丁金二拾兩、銅ハ十分一、

一和賀澤銅山　床一丁金三兩貳歩、銅十分一、

天和二年戌ヨリ三年亥迄

一鶴館銅山床　壹丁三兩貳歩、増金拾七兩貳分宛、銅ハ十分一、

但一兩ニ拾六貫匁之積金子上ル筈

白根銅山
和賀澤銅山
鶴館銅山

〔東遊記後編五〕銅山

出羽國阿仁銅山

出羽國秋田領城下より東南の方遙道を行く十八里の所に阿仁といふ所あり、此阿仁に銅山あり、當時此山より都數銅を掘出す事也、掘入ル穴の中をレキナイといふ、甚奥深く掘入ること也、入る者皆アヽイ燈に燈をともし持入るなり、掘數十町奥深く掘入り、世界の風氣通はざる所に至りぬれば、其燈火たちまちにきゆる也、燈火きゆれば人も亦呼吸の氣息たちまちに絶て死する也、此ゆゑに燈火きゆる所に至れば、急に逃歸る事とぞ、此事我醫事に大に益に成る事にして、人の死生物の生滅の始を知べし、余も此穴の中に入り試んと欲せしかども、甚嶮難の山路十八里、其上往來の人家といふも稀く、殊更穴の中は金石の毒氣ありて、他邦の人容に其氣に馴ざる者は、毒氣にあたり死する者多しといひ、又其國の禁制にて旅人などは、みだりに銅山のあたり徘徊するを許さゞれば無據もだしぬ、右のごとく奥深く入れば死すれども、又奥深く銅多くして入らで叶ざる時は、穴の小口より下に樋を伏せ、風氣通るやうにして幾十丁にても入る也、是を風廻しと云、かくのごとくして入れば何程入りても燈火きゆる事なく、人も死する事なしと也、是亦其妙用を知るべし、

〔佐渡志物産五〕銅

佐渡國銅山

掛之大工定メ之小割壹ッ殘り少ナニ相成候砌、堀子を以代り合を告しむ、堀子急ぎ刊番前ニ來り高聲ニ火繩之代り合ひと號ふゆへ、次之大工既ニ鐙竹鏃道具用意相待ゆへ、早速香番前之割刊板を取箱入仕、先大工小割堀濟、次之大工へ渡、先大工割刊板を受取走り出、香番前ニ而割刊と呼び板を納む、香番之者火繩箱之蓋を取り燈り消ゆ、火繩寸を見て、僅〆貳寸五分とも直ニ香番之者帳ニ上ゲ掛二寸五分議を記し、大工心得刊番ニ入、次之大工先方之如く比合を以代りを告げ、三番方之大工ニ代り合、離出香番前にて割刊と呼び、譬ば燈り寸貳寸三分トハ有體ニ答ふ、掛りと相尋候得ば則貳寸五分也、受貳寸三分議と記し、貳分之勝ニ相成、蓄火繩とて褒美錢は拾文爲取申候、跡方之者共前之如く代り〳〵掛受を次第し、燈り寸を爭ひ褒美を取、晝夜寸暇なく切羽之鎚休み不申、勢ひ叢て堀延しゆへ行延際立相進み、晝夜方數三拾方位も相運候得ば、拾五方は定目、殘り拾五方は蓄火繩褒美と相成、役方之者代り〳〵附添、日々堀延相改、尙五日一ト日毎ニは總延請取勘定ニ入改を受申候、

一追廻堀働の仕樣、壹鋪立人數七人、内大工四人、堀子三人を壹組と定メ、切延割合定目之義は、火繩堀ニ相記し候如く、突込何寸何割と右樣儀を相定メ、大工之者晝夜代り〳〵鎚入、無透間追廻し、小割數堀延し申候、大工四人日限之定目四方宛之外は、方數轉役褒美と相成、壹方ニ付五拾文宛、五日一ト日毎ニ相延し、受取書研之分は、日々堀子共脊負出し申候、切羽元堅横之定夫持を引、無滯を以切延受取勘定ニ入れ申候、

一間堀働之義は、追廻ヶ所引起不足ニ付、差急ぎ候御手合之ため、大工番明きを以堀延し候事ニ御座候、尤石之堅和ニ隨ひ、壹間ニ付、拾七貫文ゟ三拾四貫文位迄、尙大堅石ニても是非爲切延可申、御場所は御直數定りも無之、鐵鋼竹筵繩而入用之品、役屋通を以御貸渡被成候事ニ付、延方と相成候分は、追廻堀ゟは格別御益ニ相成申候、大工ニも勝手ニ相成候事ニ御座候、

も夫々見圖を受け、鋪中堅相り中にも山ゆるミ危き場所留方に急卒之事ニ付、日々堀研之分、間ニは普請出させ候樣之時歟、其無用捨、不之時歟候而は累年之出鉑堀續き遠鋪引出候鋪、不容易事ニ御座候、

一御普請所堀方之儀、本番御役所ニ而堀大工番割を定め堀子人數を極、ケ所／＼江相廻し、五日目／＼に堀延間取調定ニ入候事、箇所堅横定夫ハ通例如斯か勢を定め候也、

但大鋪之か勢定メは、竪壹丈ニ横八尺夫より竪六尺ニ横四尺、又は竪五尺、横三尺迄之振合ニ御座候、

何れも右之堅き和らかに寄堀方割合を付候事、追廻堀と申有之、又人數増堀火繩堀等之働方有之、晝夜無違大工を廻し、直立萬間延候事ニ御座候、

一御普請之ヶ所、鉑勢宜相成候へば、金工働之者江割渡申候、左候得ば金工共晝夜番格之定メニ罷、鉑之員數一二之順を以、何數堀出し、金場御役所ニて改メを得、無怠慢相働候こと二御座候、

一火繩堀働之儀壹班立人數九人内、大工五人、堀子三人、香番壹人、先以普請ヶ所見廻、間數何程と金入相考、山向振り場所江取鋪申候、但し所ニ寄へんたい鎚石大か勢等にても、分外ニ和らかに候得ば、追廻堀にても延方早候、取火繩堀に不及ニ御座候、山之堅和に隨ひ割突込を定メ當に堅石ニ候得ば、壹寸五分拾割杯として押山引立を如斯拾ニ割、其割し壹ツを突込壹寸五分堀貫候を壹方と相唱申候、稍堅石ニ候得ば、其以上之割も有之候、和らかき石に候へば貳寸拾割より三寸四寸之拾割杯、夫々割合定メ有之候、但香番之者横箱之中江灰を敷、其上江火繩長く置、傍ニ尺子を据置候、定外之柱江割符板を掛置、火繩大工之者鋪入之時ニ火繩江火を移し、箱江蓋を仕香番之者相扣居候、最初鋪入之大工を掛と云、次ニ入大工を受と云、

陸奥國尾去澤銅山

ハ、右有餘金ヲ以、御銅山古來ヨリ申傳之古敷ハ數ケ所有之候得ハ、賃吹共稼ニテハ、取明普請難及大等之場所、年々手當仕、取明彌見込稼所手廣ニ相成、御銅山稼方仕候ハヽ、出銅相進、足尾拾四ケ村之者、其渡世ヲ不失、妻子離散不仕、御年貢諸役共無滯相納、永續可仕義ト奉存候間、格別之御仁惠ヲ以、右三ケ條願之通、御聞屆被成下置候樣、偏ニ奉願上候、然ル上ハ淺草御藏納銅御渡シ方御用相勤候義ハ、先規之通リ、御手當頂戴不仕候テモ相勤リ候樣罷成、右三ケ條願之通被仰付候上ハ、江戸表吹所并山元取締方等之義ハ、御差圖次第、如何樣ニモ嚴重取極候樣可仕候、且御仕法替之節、吹所世話役被仰付候武州本庄宿森田助左衞門外五人之者共ハ、是迄之通爲御取締吹所世話役被仰付被下置候樣仕度、何分ニモ前書願之三ケ條御取上ニ不相成候上ハ、奉恐入候儀ニ御座候得共、所詮私式ノ身分ヲ以、先規之通、御銅山一手御引請、御用向相勤候儀曾以無御座、殊重ニモ貳百年來連綿仕候御由緒厚御用山斷絶不仕、一郷大勢之者共不致離散、只々御慈悲御沙汰而已偏奉願上候、依之別紙御手當仕出候壹冊相添、此段奉願上候、以上、

文政四巳年十二月

野州足尾

田中意松

吉川榮左衞門樣御役所

〔陸中國鹿角郡尾去澤銅山三澤御敷内働方仕法書上帳〕覺

一御銅山御境内東西壹里貳拾町程、南北三拾五町程、右之内ニ金銅鈚之通數十枚有之、嶺之通リゆたかに長樣引續き、前後澤數有之候也、尤當時之鋪口并古間府諸方ニ有之候、其中ニ大薄鋪と申當時之御普請所、壹澤ニ壹ケ所宛有之候、第一山向ニ隨ひ堀れ所々之鋪圖を考ひ、鋪間繩續等之仕法を以、高低遠近之見込を定めて、其上鋪中古き堀所之圖合江引合せ、御普請所切延し候儀は、御山先役ニ付、專ら日頃之鍛錬ニ而看定仕るゆへ、總而御山方役御鋪手代寸甫共迄

候へ共、多分ハ農業重ニテ、間々炭薪山稼等仕、又ハ下財ト唱、銅山稼之モノ幷銅山諸職人手傳等仕來候所、當時新梨子赤澤兩所之儀ハ、往古大盛之頃ヨリ引續兩町地内吹所數ケ立置、銅鉛搗碎揀立、山丁銅迄吹立候ニ付、右仕所之類、大雨之節、速々畑地エ流込、又ハ肥等ニ交入候義、年來ヲ重候上、銅氣强場所ハ、作物壽付、一旦生立候トモ、實法不至候由、立枯ニ相成、用立不申地面而已多、農業一式之稼ニテ、渡世難出來、先年ヨリ鋪吹幷下財稼床屋向諸職人等相稼、當面銅山方ニ片寄、是迄渡世仕候ヨリ外、稼方無之土地ニ御座候間、毎度農事ニ付、日光御奉行様ヨリ厚御利害嚴重ニ被仰渡御座候得共、右申上候廉故、中々以農業一通リニテ、御年貢諸向等相勤不申候間、此上御銅山彌衰微仕候上ハ、拾四ケ村退轉仕候儀ハ、眼前之義、既足尾千軒ト申傳候土地ニ御座候得共、御銅銅山追々不盛ニ付、當時軒別漸七拾軒程ナラデハ無之、悉離散退轉仕、銅山師四拾餘人モ御座候所、當時僅壹人ト罷成候段、誠以歎ヶ敷次第ニ御座候、尙此上休山相成候テハ、都テ銅山方而已ニ片寄、渡世仕來候新梨子赤澤兩町之者共、取續ハ勿論、郷中村々之者共、炭薪賣場無御座、餘業ニ相離、彌困窮ニ落入、退轉可仕義ト、是又歎ヶ敷次第ニ奉存候間、被仰付候得共、當時鋪吹其外極困窮ニ及ビ、銅山稼衰微仕候故、他所稼日雇等ニ罷出、取續罷在候仕合ニ付、格別之御憐愍無御座候テハ、鋪吹共稼ニ難取付、尤取懸リ候迄、銘々早速鉛所ニ堀當リ候ト申ニモ無御座候得共、太率之御銅山堀盡候故、出銅無之ト申歸ハ曾以無御座、全時運ニ不宜、取上ノ場所ニ堀當不申故之義ト奉存候間、何分此上之儀ハ、格別御憐愍之御沙汰無御座候テハ、中々先規之振合ヲ以、稼方ニ難取付御座候間、往古ヨリ衰微之節ハ、御救方被仰付候御例モ度々御座候御義故、何卒當鋪吹稼之者四拾餘人御座候間、右之者共江、以來年々御扶持米被下置候樣仕度、右ニ付候テハ、通堀日數相改メ、都テ取締等致シ、御扶持米渡シ方迄取計候義ニ付、銅山方兼名主役之者共江モ、別紙仕出候之通、年々御手當被下置候樣仕度奉願上候、且又先年淺草橋場町ニ於テ、左右五百坪拜借地被仰付、御

たるは、慶長十五年の事にて、備前の國の者此地へ來り、銅山なる事を見定め、其頃座禪院の領所なるゆゑ、其下知を得て掘初けるに、澤山に銅を掘得て、間吹銅を公儀へ奉りし頃、御三代將軍家初て御肴召させ給ふ、御恐悅の折柄ゆゑ、吉事なる銅山との事にて、夫より御用山となり、貢賦の事は、日光の支配なれど、銅山は御代官の指揮となり、替々支配し、享保年中拜借御下金等莫大のこと度々なり、又元文の初に、御用銅の外に鑄錢座被仰付、皆鑄錢吹立ける由、錢の裏に足の字をすゑしは、鉄にて鑄造せしものなり、其以來は御下金相止買吹に成、夫より銅山衰微し、鑄錢座も御免を願ひ、殆困窮に及ぶといふ、されども今も銅買吹御代官掛りにて、陣屋有て手代在住することはもとの如し、當所銅山を見立し備前のもの、大に貨殖し、國へ歸らんとせし時、此所の新梁子村の淨土宗にて、大園寺といへる坑内へ石碑造立し、開國の來由を銘じ置けるが、今は無住ゆゑ、寺も荒廢し、石碑も又倒落し、文字知れざるよし、當時も陣屋の側に銅吹分小屋四五戸相雙べり、

〔銅山書上〕文政四巳年十二月

乍恐以書付奉願上候、野州足尾御銅山之儀、近來不盛打續、追々出銅相減ジ、次第ニ衰微仕、銅山師共幷買吹、其外及困窮候段、爲及御聽、格別之御仕法ヲ以、去ル子年ヨリ、御手山被仰付、御銅山內、古來申傳有之場所之內、悉御探之上、山面敷內鏈筋等、分間水盛ヲ以、巨細御糺夫々御取揃、御普請被成下、稼方被仰付、少々出銅出方ハ有之候へ共、大直リニモ相當不申、最早御入用金御遣拂ニ相成候ニ付、此上ノ儀ハ、先規之通、銅山師ニ取扱被仰付、買吹之者共ヨリ、荒銅買上ゲ山丁銅ニ吹立、御上納仕、御廻納、其他山方一式取計、先規之通、私引受相勤可申旨、御利害之趣、難有遂一承知仕候、然所、御手山中、山元其外御取締方等、嚴重ニ被仰付、稼方御取計被遊候テモ、出方無甲斐、未盛山之時不至儀ニモ可有御座候得共、右體御丹精被成下候ニモ出銅無御座處、未熟之私、先規之振ヲ以、總

山城国銅山

常陸国銅山

美濃国銅山

下野国足尾銅山

諸国銅山之儀、近々出銅も有之、追々出来候事ニ付、御国用は勿論唐紅毛江も相渡、商々より差支之儀は無之候得共、当時諸山ニ候共、銅ニは衰山に可相成事ニ付、若後年ニ至り国中之諸山衰出銅無之様相成候数とは難申候間、外国江相渡候斤高は追々相減、右代り俵物相渡候様、又は更ニ銅は貿易之外国物品渡候節は如何可有之儀、勘弁可被申聞候事、

(三代実録十一)貞観七年九月廿六日甲辰、勅、木工寮採銅於山城国相楽郡岡田郷、鋳銭停止、

(新編常陸国誌土産六十一)銅　久慈郡ノ内ヨリ出ツ、然レドモ今皆ニ採ルコトナシ、松岡国記、久慈郡宮田村ノ後ニ、銅山元禄十一寅年、上河合村右衛門方へ江戸両替屋新次郎、○以下略

(大日本府県志飛騨四)事蹟録　明暦三年丁酉十二月廿二日
一濃州武儀郡板取村之内、白谷山ニ銅有之由ニ而、大坂之者願申候処、銅無之、同郡金山村ニ銅有之由ニ付、又々掘試候處、

(日光山志四)足尾郷　日光山内より裏に当り行程六里細尾峠と唱ふ、同国阿蘇郡に属す、足尾拾四ヶ村を上下に分つ、古は新梨子赤沢の二村を足尾千軒の戸数と唱へ、銅山盛山の間盛あるに依て、諸国より群集して繁昌せしが、延享寛延の末より漸々衰て、今は家数も三百戸許、村居は皆山谷の地ゆゑ山麓に村民家居せり、二筋の路は南北へ通ずる道なり、凡東西三里、南北一里許、其拾四ヶ村といふは、間藤、赤倉、久蔵、松木、仁田元、原木、餅子内、以上の村々を上分の村と唱ふ、掛水、赤沢、新梨子、中才、遠下、原、唐風呂、以上の村々を下分の村と唱ふ、此所より銅を出せる驛次あり、上州へ二里、

銅山稼場　古坑数百窟あり、此銅山の地形は、足尾郷中の其中にある山にて、足尾の四境凡五六里も有べし、其銅山周廻凡三里拾八町に亘り、銅山は皆岩石にて、山頂に樹木生せず、銅山稼始め

西黨帆一日、到壹岐島、自斯又到對馬島一日、自非大風、不得渡矣、○中略島中珍貨充溢、白銀、鉛、錫、眞珠、金漆之類、長爲輸貢、○中略其來於太宰府、敢不遲留、殊撰行李、遣藏人所、自島到府用海路、著五十丈綱、以備入海、自府致京用陸路、運送之間、人不敢近之、號呼都陽之口、見於漢家、賢王聖主殊不爲用、憤本旅宋以誠遊手、護漿之外、絶無登民、殆不異抄石之故也、然而千載之事、一旦難改而已、

〔延喜式 主計二十四〕對馬島○中略　調銀

〔延喜式 雜五十〕凡對馬島銀者、任聽百姓私採、但馬國司不在此例、

〔三代實錄 清和十一〕貞觀七年八月十五日癸亥、太宰府言、對馬島銀穴在下縣郡、自高山底穿鑿堀入四十許丈、白晝秉炬而得入、頃年以來處々崩塞、膠費人功、而去夏霖雨、穴底水滿、計其功力、非可築、司乞採穿開、望請准延暦十五年例、以彼島例、擧大豆遺百斛幷租地子穀百斛、且充其料、令國司許之、

〔殿寮雜抄 宇文鑛業〕花遊漫抄

對州銀礦　慶安三年庚寅五月、於對州佐須開銀山、始穿鑿、寬文七年丁未秋、於對州佐護村奥山開銀山、又於峯村開銀山、佐護山兩年而止、於峯村永鑿之處、至延寶二年、佐須銀山再盛、於是止峯村銀山、

〔鼓銅圖錄〕鼓銅篇

本邦銅山、其大者數之則予、奥之南部、羽之秋田、其次則羽之村山、但之生野、其下則石之銀山、備谷、備之吉岡、紀之貝殿、佐之金山、越之大野、津之多田等處、時多時少、或閉或開、其餘少出者甚多、難以枚擧、蓋生氣有限、苗脈中絶、或所得僅々不償工費、或惜而未盡、或係累不盡者、亦多有之、銅礦有夾銀鉛者、有純銅不雜者、有夾白目者、(白目未詳、蓋銀鐵歟)

〔吹塵錄 外國通商 二十二〕天保十五辰年正月十二日

付札　御勘定奉行江

對馬國銀山

安永六酉年川崎市の盛取計伺、左に記す、

私支配石州銀山の儀は、年來不盛打續、山師相衰へ、仔寄の鋪所有之候ても、取明相稼候儀、自力に不相叶、無是非打捨置候故、掘子下財ら追々離散仕、灰吹銀出高相減候に付、亡父平右衞門支配の節、明和三戌年、銀山役人幷山師共相糺、右稼方爲御手當、戌より子迄十五年の間、灰吹銀出高の內壹割通、山師へ被下置候ハヽ、右引替銀を以、仔寄の所普請仕、相稼候積り奉伺候處、翌亥年、平右衞門儀は退役仕、其跡私支配被仰付、銀山稼方手當の儀も、平右衞門伺置候年季の通、灰吹銀出高の內壹割通、山師へ被下候寄を、私方へは下知被仰渡候に付、兼て心懸、貳所寸法切延、八ヶ所間歩取明、八田山修復八ヶ所、都合十六ヶ所普請仕立候處、年々灰吹銀出高相進ミ、去丑年は灰吹銀百八十貫餘、大坂御金藏へ上納仕候、然處私儀、同年奧州へ場所替、石州の儀は銀山計、私支配ニ被仰付置候ニ付、手代附置、銀山稼方幷に鐵山滿方諸運上共、取立方相進み候樣取計申候、就夫當時は銀山相稼候間歩六ヶ所有之、年久相稼候根戶故、鋪所通路遠く、殊に土中の儀に付、溫氣強、八田木庭早く、六ヶ所間歩互ひ違ひ不絕修復不仕候ては水引差支、火氣たへの障り出來、稼差支候に付、銀山役人幷手代數ニ入、見分爲仕候處、右普請仕立候には、大造の入用可相懸趣、其上前條八ヶ所取明候間歩の儀も、追々修復不仕候ては、稼難相成、尤何れも前々盛候根戶續にて、見込厚場所、若壽潰候ては、是迄御手當を以普請仕候詮無之は、不益に被成候、右の外、柑子谷泉山大水拔より、佐藤本鋪迄、新規大切水道尺八切延、稼候積り、彼是取合候ては、夥敷等數に付、此上不絕普請可仕手當無候ては、稼方相續難仕候、就夫何卒御入用等不奉伺、銀山相續取計方も可有之哉と段々相考、此度私存寄の趣左に奉伺候、○下略

〔朝野群載 三〕對島貢銀記

對馬島者在本朝之西極、屬於太宰府、孤立海中、四面絕壁、其名兪見於隋唐史籍、自筑前國博多津、西

儀も相止、一ㇵ銀四分宛、番給被下候處、寛延年中、天野助次郎支配の節より、右番給も相止、間歩口は錠仕舞封印附置、折々相改罷在、延享四卯より明和元申迄、十八ヶ年の間、獻上中絶仕候處、右同年川崎平右衛門支配の節、以前の始末申上、翌酉より前々仕來の通上納、幷に釜屋間歩と申外間歩より出候下品の無名異有之、此分は世上御救のため、賣弘被仰付候、尤製法の儀は、前條の通、九十月の頃、無名異荒鏈六七拾貫目堀出し、寒中に至り、役人兩人宛相掛、身分清淨に相愼み、清水を以晒上ゲ、前條の趣を以上納仕候、

〔見聞雜記 三十四〕銀山壹ヶ年分御入用大概

一錢三万四千貳貫六百貳拾五文

是は大工穿子賃、鍛冶給錢、炭代揚駄賃、水替賃、筋見繪圖師、振矩師、敷岡御雇之者給錢、銀山六ヶ所番所に入用、後藤掛賃、御祈禱料、御手當役金、小者給、銀山付諸役所小入用小遣給錢等之分、

○按ズルニ、右ハ石見ノ銀山ナリ、

〔銀山舊記〕銀山御園村の事

一銀山稼方吹方差支無之爲、銀山御園村と稱へ、往古より邇摩郡、邑智郡、安濃郡、右郡にて三十二ヶ村より、留木、燒木、渡木、入用次第差出、尤切張の儀は、長五尺五寸、末口三本持は三尺廻り、六本持は壹尺五寸廻り、九本持は壹尺廻り、十貳本持は七寸五分廻り、右の通壹駄に付三本より十貳本迄、木數の多少は有之候へども、代銀は何れも貳匁貳分五厘の定直段に相渡申候、尤山師共切張入用の節は、村方と相對にて買入候分は直段も相對次第、其外燒木渡木は大森町薪直段を以、銀吹方へ買入申候、吹炭の儀は、前條三十二ヶ村の内、銀山最寄村にて、炭方六ヶ村と相極、吹炭觸次第差出、定直段壹駄に付拾匁宛にて銀吹買入申候、

〔銀山舊記〕銀山稼入用御下ゲ金幷ニ拜借〇中略

于時慶長十年乙巳三月十七日　安原備中因雲花押

御事納書物

乍恐謹而言上

石州邇摩郡本谷安原十郎兵衛と申者に而御座候、私祖父安原備中と申者、石州於銀山、參観音霊夢之告、御山之儀、大久保石見守様へ申上、願候處石見守様にも、右之趣度々御霊夢之由に而被仰付、其時より御山長、御運上金壹ヶ年三千六百貫目宛三年差上、其以後も千貫目、貳千貫宛数年差上候、因之石見守様、右之趣被達御上聞、慶長八年八月朔日於伏見御所、乍恐大御所様江被為召出、御目見被為仰付、則備中に被成下、為御褒美者も御羽織、御扇子、御直拝領仕候儀、偏佛神三寶之御加護と難有頂戴仕候、備中并倅主税助、私迄三代年数八十餘年所持仕候。○中略

貞享元年甲子卯月十四日　安原十郎兵衛印

倅　權三郎印

同　清右衛門印

御奉行所様

（銀山舊記）無名異取扱

無名異の儀は、慶長の頃山師木原吉左衛門と申者、初て無名異鉱に堀當り、功能は、打撲、切疵、婦人產前後、腫瘍、其外逆上の諸症、又牛馬鳥類の病に効ある趣、其節銀山奉行大久保石見守より申立、御厩御馬の御用にも相立候趣、申傳へ候、竹村丹後守、杉田又兵衛奉行の節より、米貳拾俵宛、年々山師へ被下、無名異荒鐵六七拾貫目程、九月比堀出し、寒中に製法仕、目方三百目宛、鈴壺に入、段々に三通箱に入、其外琉球表包にして、荷造り仕、翌正月十一日定日にて、宿繼御證文を以、江戸表へ繼送り、支配役所より、御納戸へ相納申候、然る處延享四卯年より、右上納相止み、山主へ米被下候

所ニ私常信觀音當國清水寺致建立所ニ、或夜不思議ノ靈夢、汝心直而發心起人、本谷釜屋間步水道ノ御訴訟御守護所江申上ル者ナラバ天下可得其名候成任御告御奉行江參ジ、御靈夢ノ趣具ニ言上ス、就中石見守殿聞召御勤行被爲成、我モ從清水有御告、於此山繁榮无疑、則御入目被下頓而御山繁昌夥シ、依之自分ニ召使者及千餘人、國々人群集貳十萬餘、谷々ニ銀鏈充滿而六分窕(ツワロマ)超過、日比屋作家風尋常ニ非、佛閣甍ヲ雙ベ六時之鐘ヲ鳴シ、或ハ太鼓ヲ打テ晝夜賑事不異京堺、或時石見守殿、公方樣於御前石州安原傳兵衞ト申者、觀世音ノ依御夢想、御山盛成由被仰上者、公方樣御尊意、古ヘ景淸盛久社觀音ノ蒙利生、至末世浩ル瑞夢奇特也ト御感ノ餘ニ、急其安原呼上セ可被成御覽、依テ御上意下ルニ、慶長八年七月上旬ニ罷上ル、此節繁榮ノ山壁有數多、取分釜屋間步ノ鏈靈驗之故勝自餘、銀性之美麗成事相似瑞珞、則是ヲ致持參、八月朔日於伏見ノ御所、大久保石見守殿以御披露御目見仕ル時、竪横一間之折洲濱作リ、其中ニ彼銀性如蓬萊積畢御尊前江奉捧、其時御上意ニ、元來雖金銀珠玉、直成銀性之花麗初テ御覽被爲成、御感不斜、御前ニ被成御詰諸大名衆、古今無雙之珍物哉ト各驚目給事無比類、同三日小堀新助尉殿爲御上使、大久保石見守殿江御入來被成、公方樣御上意ニ、傳兵衞受領被爲仰付、則備中ニ被成下、雖有仕合、生涯之面目何事カ如之、同五日御禮ニ登城仕ル、忝モ上樣被爲成御召、御羽織御扇子御直ニ下シ給フ、雖有御事更々叵演言語、同二十一日亦爲御上使小堀新助殿、石見守殿江御入來被成、御上意明日四座御能被仰付之間、備中召行登城可仕由依御上意下ルニ、石見守殿御供申登城仕、備中爲凡卑身、諸御高位之御座ニ非被召出而已、剩從公方樣御羽織致拜領事、雖有仕合不過之、日本諸大名衆驚目、天晴冥加至極、安原預御褒美事、是偏觀世音ノ御佛力之故也、御羽織御扇子、安原子々孫々家傳之靜重寶ト、一ニハ爲名利恐相構テ々々不可疎ニ、予雖短才愚智、爲備後胤之龜鏡所草愚意此記錄留置者也、

〔佐渡相川砂子二 相川町〕山師由緒　慶長十二未年、伊豆、石見、兩國銀山方ノ町人三拾六人召サレ、壹人ニ間歩口壹ケ所宛配分ノ外、御米貳百俵、毎年其上稼方入用ノ品下サレ、○下略

〔銀山舊記〕慶長一統ノ後、彥坂小刑部、大久保十兵衛ヲ奉行トシ給フ、○以上二十四字、據石州銀山記聞所ノ本補、右銀山仙の山と申は、繞廻り二里餘、高さ三百間の大山に、數多の挂筋東西に行渡り候を心懸、所所より間歩を開き、相稼候數得候、家數貳萬六千軒餘、寺百ケ寺程も有之由申傳ふ、尤當時にても名跡殘り存す、勿論往古は出灰吹銀御引上にも不相成、上納物計灰吹銀にて相納、餘は當時通用銀の樣に壹匁貳匁、或ハ拾匁二十匁と申樣に、悉く切銀にいたし融通に遣ひ候故、一ケ年灰吹銀何程と申出高相知れ不申候得共、寛永元子年に千貳百貫目餘之諸運上灰吹銀を以上納仕候趣ヘ、其節の銀山奉行竹村丹後守、幷に役人之内連名之御勘定樣に有之候、右樣大盛之砌ハ山内取締として銀山繞廻り、山之峯續き垣を結ひ、出口入口にハ番所八ケ所有之候處、右垣年々修復入用相掛り候に付、寛永十八巳年杉田九郎兵衛銀山奉行の節、右垣を相止め、其跡へ並木に松を植付、當時垣松と相唱へ、大木に相成居申候、○中略銀山支配之儀、慶長五子年以前は聢と相しれ不申候得共、慶長六丑年より大久保石見守銀山奉行被仰付、延寶三卯年永田作大夫迄七十五ケ年の間、奉行所にて同年柘植傳兵衛より御代官に相成、當時迄は御代官所に御座候、

〔石州銀山紀聞〕

御羽織奉納書

夫ニ人王一百八代太上天皇ノ御宇、武將相國源ノ家康公ト奉申、武勇蓋世、草如風加悉偃、握六合掌、依政道正直、萬民歸正路、天下治一統、寔諫鼓苔深而鳥不驚御代成者、四海波靜、野之末山奧迄草圍繞渴仰之頭、首事不淺、唐賢王御代ニハ麒麟鳳凰出現ス、日域靈朝幸ニシテ諸國金銀涌出ノ山多シ、就夫當石州銀山爲御奉行大久保石見守殿、三枝源藏尉殿、彥坂小刑部少輔殿、御成御下著、然

上ス、此石見守殿ト申ハ、東照宮ヨリ六十餘州金銀山ノ奉行タルベキノ旨、仰ヲ蒙リ居給シ故、諸國金銀山興衰ノ訴有ル時ニハ、公儀ヨリ當國ニ扶持シ置給フ諸士ノ内、銀山ノ事ニ預ル者ヲ以テ諸國ニ馳行シメ、其行時ハ必ズ御朱印ヲ頂戴、(今吉岡氏ノ子孫是ヲ以テ寶トス)サテ石見守殿、彼安原ガ夢ヲ聞、大ニ驚言ヒケルハ、我モ亦瑞夢ヲ得タリ、疑フ所ニアラズトテ、多クノ金銀財寶ヲ賜リ、安原間歩ヲ掘ケルガ、靈夢ニタガハズ、夥敷鏈ヲ掘出シ、無双ノ福人ト成ル、是併ナガラ觀音ノ御惠ナリト悅ビ、鏈ヲ出ス間歩ハ、觀音ノ夢ノ御告ニ形取、釜屋間歩ト、ゾ名付ケル、此間歩ヨリ納ル所ノ運上銀一年三千六百貫也、御奉行石見守殿、此旨ヲ御上へ奏達有ケレバ、甚ダ御感マシ〳〵、ヤガテ安原ヲ召レケリ、安原召ニ應ジ伏見ノ御所へ罷登、頃ハ慶長八年七月ナリ、八朔ノ節句ニハ、大御所樣ノ御目見ヲ許シ給ヒ、壹間四面ノ盤ノ上ニ銀ノ粹精ヲ積立、車ヲ以テ引、是ヲ獻上シ奉ル、去バ今ニ至ルマデ、石見國銀山ノ運上銀ヲ大坂御城納ニ、車ニ載テ引事ハ、此吉例ト承ル、大御所樣(現龍樣テ言フナリ)イヨ〳〵感ジ給ヒ、受領ヲ御免有テ、備中ト申ベキ由仰有、其上自ラ著給フ所ノ上服并御扇子(今清水寺ニアリ)賜ヒケリ、亦彼大坂陣ノ時、水道ヲ塞ギ堀水ヲ拔トテ、當國ノ掘子ヲ召給フ此時ノ御奉行竹村丹後守殿、銀山諸士ノ内山中市兵衛國村、田中久右衛門重時、厚東多左衛門村尚ヲ撰出シ、安原備中、渡邊備後、此兩人ノ手下ノ掘子三百人ノ大將トシテ、備中備後ハ宰領人トシテ大坂へ送リ遣シ、水道ヲ切斷、堀水ヲ拔シカバ、落城ニ及ビシ事比類ナキ功ナリト、大御所樣ノ御感有、其時ノ書物、山中氏ガ子孫今ニ是ヲ傳ヘタリ、凡銀山開起ヨリ多クノ年月ヲ經ル、其間或ハ衰、或ハ盛ル事幾度ゾヤ、就中慶長ノ頃ヨリ、寛永年中ノ大盛、士稼ノ人數二十萬人、一日米穀ヲ費ス事千五石餘、車馬ノ往來晝夜ヲイハズ、家ハ家ノ上ニ建、軒ハ軒ノ下ニ連ナリ、去レバ銀山ノ近キ津々浦々へ、四方ノ大船競ヒ繋、五穀ノ類ハ言ニ不及、和漢ノ珍器重寶ニ至ルマデ、多ク集リ來ル事、恐ク今日本ノ内、此銀山ニ勝ルマジト申傳へ侍リ、

トナシ、大森之丞、坂治郎、采女之丞等、見布山谷ニテ銀ヲ吹、毎年ノ運上銀五百枚ナリ、亦天文九年九月十八日、小笠原鉾起シテ大久保肥前守、大谷遠江守ニ仰、銀山ヲ騒動ス、數度攻戰フトイヘドモ不叶シテ終ニ奉行内田正重自害シテ、銀山亦小笠原ニ屬ヒケリ、同十一年、小笠原長隆死去、同年下旬、小笠原兵部大輔長雄、山吹城ニ入ル、同年八月四日、大風雨有テ人多ク死ス、同十六年八月廿一日、長隆死ス、其子長雄、明年三月城ニ入、享祿四年ヨリ永祿三年ニ至リ二十年餘ノ間、小笠原銀山ヲ領ス、其以後毛利元就銀山ヲ取、平賀山城守、高畑源四郎ヲ山吹ノ城ニ置ク、時ハ永祿四年五月ナリ尼子本城越中守、其子五人ニ五千餘騎ヲ副ヘ、須佐ノ高屋倉ニ差置テ、雲州石州ノ通路ヲ塞シカバ、銀山是ヨリ糧ヲ絶ツ、是ニ依テ毛利二万八千人ヲ以テ、別府忍原ニ於テ尼子ト合戰ス、毛利ガ軍利ナクシテ、大將大森左衛門尉討死シテ、尼子討勝、山吹ヲ攻落シ、平賀高畑ヲ自害セシム、頃ハ永祿四年ノ秋ナリ、是ヨリ尼子伊賀守義久銀山ヲ領シ、本城越中守ヲ以テ山吹ノ城ヲ守ラシム、此時銀ヲ出ス事大ナリ、毛利銀山ヲ取返サン爲、三年ノ間忍ビ者ヲ忍原村側山鬼茶臼ノ谷々ニ置、隙ヲ窺フトイヘドモ、尼子大軍ノ故、スベキ樣ナカリケリ、元就力ヲ以テ取リガタキヲ知リ、謀ヲ以テ本城ヲ降人トナサシメ、戰ハズシテ終ニ銀山ヲ取リ、吉川元春家臣森脇市郎左衛門ヲ以テ銀山ヲ守ラシム、元龜二年六月十四日、元就死ス、其嫡輝元相續テ銀山ヲ領ス、其後天正中、秀吉公ヨリノ上使近實若狹守、毛利家ヨリノ使三井善兵衛銀山ヲ奉行ス、慶長一統ノ後、彦坂小刑部、大久保十兵衛ヲ奉行トシ給フ、慶長十四年、永田大隅守、同十五年、三坂枝源藏、同十六年、増島佐内、銀山ノ御目付トシテ下リ給フヨシ傳ヘ承ル、天正年中ニ、安原田兵衛草壁貫人知種ト云者有、備中早島ノ人也、來リテ本谷ニ住居セリ、久敷銀山ニ心ヲ盡シケレ共、金銀費ノミマシテ、外ニ方術モナカリシカバ、常ニ歩ヲハコブ清水ノ觀音ヘ祈率ルベシトテ、七日精神潔齋シ、誠ヲ盡シ祈シガ、第七日ト申晩ガタニ、銀ノ釜ヲ賜ルト靈夢ヲ得、時ノ御奉行大久保石見守殿ニ言

ケレバ、船郎答テ申ケルハ、是ハ石見ノ銀峯山ナリト語リ傳フ、彼峯昔シ銀ヲ出セシガ今ハ絶タリ、唯觀音ノ靈像ノミ有テ此山ヲ鎭ス、寺ヲ清水寺ト申ス、時々此應現アリ、此山二度銀ヲ出ス奇瑞ナルカ、今夕ノ靈光常ノ時ヨリ十倍ス、量知ル貴公ノ信心、觀音大士ニ通ジケルナラント、懇ニコソ語リケレ、壽亭大ニ悦ビ帆ヲ卷キ纜ヲ繋ギ溫泉ノ湊ニ入テ、夫ヨリ銀峯山ニ登リ、觀音ヲ拜ミ奉リ、亦船ニ乘テ雲州ノ鷺浦ニ入ケリ、彼浦ニ銅山有ケレバ、壽亭赤金ヲ商賣センガ爲、銅山主三島清右衞門ニ逢テ、(清右衞門ハ雲州國田儀ノ住人ナリ)石州銀峯山ノ靈光ノ事ヲ物語リシケリ、三島是ヲ聞テ申ケルハ、定而白銀ナランカ、二百年前、周防ノ大主大內弘幸北辰ノ託宣ヲ感ジテ、大ニ銀ヲ得タル事有、今ニ至ル迄人每ニ言傳フ如何樣ニモ疑フベカラズ、願クハ彼峯ニ登テ銀ナルヤ否ヲ試、亦靈佛ヲモ拜奉ラントテ、神谷三島相共ニ大永六(丙)戌三月二十三日ニ、三人ノ穿通子吉田三右衞門、同藤左衞門、於紅孫右衞門ヲ引連テ、銀峯山ノ谷々ニテ、石ヲ穿チ地ヲ掘テ、大ニ銀ヲ取、壽亭皆收取リ、九州ニ歸リケリ、是ヨリシテコソ石見國馬路村ノ灘古柳稱ガ岩ノ浦ヘ、賣船多ク來リテ、銀ノ鏈ヲ買取テ、壽亭ガ家富從類廣ク榮ヘケリ、銀山モ亦諸國ヨリ人多ク集リテ花ノ都ノ如クナリ、享祿元年、大內義興矢瀧ノ城主ヲ以テ銀山ノ押トス、(矢瀧城、銀山ヨリ一里計南)此時小笠原長隆、志谷修理大夫、平田加賀守ヲ以テ矢瀧ノ城ヲ攻落ス、頃ハ享祿四年卯二月下旬也、長隆銀山ヲ領スル事三年ノ中、銀ヲ出ス事夥シ、天文二年、大內復銀山ヲ取返シテ、吉田若狹守、飯田石見守兩人ニ仰テ、銀山ヲ守護シケリ、此年壽亭博多ヨリ宗丹桂壽ト言者ヲ伴ヒ來リ、八月五日相談シテ、鏈(銀ト石ト相マロハル物テ鏈ト云ナリ)ヲ吹蕗、銀ヲ成ス事仕出セリ、是ヲ銀吹始成、大工ハ采女之丞、大藏之丞ナリ、吉田若狹守、飯田石見守是ヲ奉行シ、每年銀子百枚ヲ大內ニ貢納ス、其後天文六年八月十六日、雲州ノ尼子、銀山ヲ攻、吉田飯田ヲ誅戮ス、吹大工采女、尼子ニ從ヒテ銀ヲ吹ク、小笠原、福屋、三隅、益田等ノ諸士、皆尼子晴久ノ旗下ニ成ケリ、天文八年五月下旬、大內介復銀山ヲ責テ取返シ、正重ヲ以テ奉行

メ役人共を遣置、岡六巳迄六ヶ年之内生野同前之仕形も、不盛ニ成、同七午年ゟ請座ニ成、但請座極候而も、請主方ゟ不稼處を其分ニ捨置候儀は不可然候間、所々分届ヶ無之もの有之候ハヽ白札可遣置、先奉行申渡、拾ヶ年以来龍長兵衞山、八拾枚山大分稼水抜候得共、両所共ニ不宜候、此外木戸岩と申古間歩水抜仕掛、可然處有之、入用大積り貳拾〆目程之積り、

一右岡瀬銀山屋舗ニ高九石壹斗、前々ゟ羽尻村との内ニ而引来、

一岡瀬ニ徳兵衞と申もの久敷罷在、年寄役仕候、銀子之様子能存候、用事有之時は此ものを召寄候、

〔石州銀山紀聞〕銀山舊記

抑石見國銀山開起ノ由來ヲ尋ルニ、人王九十代後宇陀院建治二年ニ、蒙古ノ使日本へ來リシニ、如何成故有シカ鎌倉ニテ彼使ヲ誅シケリ、〇中略爰ニ防州氷上山ニ祭ル北辰星ハ、代々大内家ノ守護神タリ、大内介ニ託宣シテ曰ク、石州ノ仙ノ山多ク銀ヲ出ス、彼銀ヲ取テ百濟ノ軍兵ニ與宥歸シメヨ、彼ノ仙ノ山赤銀峯山共言、我ガ應現ノ地ナリ、故ニ生銀ヲ隠シ、本朝ノ危時ヲ救ト新ニ託宣アリケリ、弘幸神ノ告ニ任セ、石州銀峯山ニ登リ見レバ、山下山上皆燦々然トシテ、冬ノ日向山ノ雪ヲ認ムガ如ク、大ニ粹銀ヲ得、百濟ノ軍兵ニ與へ遣シケレバ、蒙古儐ヲ宥、悦ビ國へ歸リケリ、是ヨリ銀峯山相續テ銀ヲ出シ、大キニ盛ケレバ、隣國ノ大小名各是ヲ取ントテ、其間ヲ窺ヒケリ、是ヲ以テ山吹山ニ城郭ヲ構而、銀山ヲ護リ、其後建武延元ノ大亂ニ、足利右兵衞佐直冬、當國ヲ攻テ四十八城ヲ陷シイレ、銀山ヲ押領ス、此時悉ク銀ヲ取盡シケリ、此時迄ハ地ヲ掘リ間歩ヲ開事ヲ不知シ故、上鋪ノ銀取ツクシ、如此山衰ヘタリ、大永年中ニ、大内介義興當國ヲ領スル時、筑前ノ博多ニ神谷壽亭ト云者有、雲州へ行ントテ一ツノ船ニ乘リ、石見ノ國ノ海ヲ渡ル、ハルカニ南山ヲ望ムニ、赫然タル光リアリ、壽亭船子ニ、彼南山ノ赤クアキラカ成光リアルハ、何故ニヤト問

〔吹塵錄二十四鑛山〕但州生野銀山之記

但州生野銀山

一灰吹銀御買上二十双替

一大山師拾人、小山師貳拾壹人、

一諸山より堀出候石類、總而鏈と唱申候、

一皆石、鏈銀氣多分有之石を唱申候、

一珀石、鏈銅氣多分有之石を唱申候、

一石銀、鏈鉛氣多分有之石を唱申候、

一素切雜石銀銅鉛共不含品ニ付、最寄谷間、又は川等江捨申候、

〔但播州金銀銅山幷寺社舊記〕但州朝來郡生野鎭神子畑銀山之事

一此銀山生野奉行間宮新左衞門支配之時、元和元卯年こまもち間歩ゟ出來ス、元祿五申迄七拾八年ニ成、役人共ヲ遣置、生野岡前之取計ニ而、十ヶ年盛ル、其後請座ニ成、右下財屋鋪高貳拾九石八升五合前々ゟ引申候、銀山不盛以後下財屋敷跡ゟ壹ヶ年ニ大豆拾六石ヅヽ請主方へ渡ス、此所前々ゟ明延銅山ニ一所ニ請ル、能案内存候もの無之、

但州氣多郡羽尻村之内

阿瀬河畑銀山

同　奧　金山

一此貳ヶ所　信長公家來垣屋播磨守知行也、阿瀬銀山ハ永祿五戌年桑ざこと申所ニ初而銀山出來、元祿五申年迄百三拾壹年ニ成、貳ヶ所共天正五丑年ゟ別所石見守支配、元祿五年申迄百拾壹年ニ成、段々大盛ニ成ル、其頃は貳年三年切ニ請座極る、運上取候ハ寛永元子年ゟ請座を相止

右ハ佐州金銀山自分稼所、去未年分御仕入金、書面之通御座候間、就而御下知濟之通、私共断次第、運上金渡より相濟候樣、御勘定奉行江御断被成可被下候、以上、

申七月　　中川飛驒守
　　　　　中島平四郎

但馬國生野銀山

〔延喜式 雜五十〕凡對馬島銀者任、聽百姓私採、但馬國司不在此例、

〔但馬考 三〕生野銀山

此山ヨリ銀ノ出ルコト其始メ定カナラズ、世ニハ大同ノ頃トイヒ傳フレド、タシカニ記セルモノナシ、延喜雜式曰、凡對馬島ノ銀ハ百姓ノ私ニ採ニマカセ、但馬ノ國司ハ此例ニアラズト、此文ヲ以テ考レバ、延喜ノ時スデニ貢上セシ歟、中華ヘ傳ハリシモ久シキコトニヤ、明人ノ兩朝平壤錄ニ、但馬銀ヲ出ストアリ、又圖書編ニ、日本ノ國ヲ載シニモ、但馬ニハ此所銀ヲ出スト記セリ、今此山ニ傳フル記錄ニハ、山名右衞門佐祐豐守護ノ時、天文十一年壬寅二月、始テ掘イデシカド、銀トナスコトヲシラズ、祐豐沒落シテ、信長公ヨリ生熊左兵衞ヲ代官トシテ置カル、時ニ石見ノ商人來テ銀ヲカヒ、國ニ歸テ銀ニ吹シヨリ盛ニナリシト、太閤ノ時ハ伊藤石見守奉行ス、中澤金山モコレ以前ニ出テ、別ニ代官アリシヲ此時兼領ス、慶長三年、始テ江戶ヨリ代官ヲ置タマフ、間宮新左衞門ト云、同十九年、大坂冬陣ヲコリ、總堀ノ水拔ベキトテ銀堀ヲメサル、間宮其人數ヲ率テ參リ、陣中ニテ病死ス、難波戰記ニモ此事ヲ載テ築地ヲ堀シトアリ、是ヨリ代々ノ奉行ハ略之、河合曉章ガ道ノ記曰、但馬播磨ノ境ハ生野嶺ニアリ、湯島川ノ源コヽニ止マリ、此嶺ヨリ分レテ南ヘ落ルハ、姬路ノ東ノ町口一ノ鄕ト云川ヘナガレ出ルナリ、生野ノ村ハ道ヨリ東ニアリテ道筋ニハアラズ、其奧ハ銀山也、此山ハ往古ヨリ銀ノ出ルコト絕ルコトナシ、今ニ至テ年々銀ヲ堀出シテ獻上ス、故ニ東武ノ役人常ニ居住ノ陣屋アリ、

申
七月　中川飛驒守
中島平四郎

佐州金銀山自分稼所未年分金銀出來形幷御入用遣方書付　中川飛驒守
中島平四郎

覺

一焼金壹貫一四拾六匁七分　此小判積三百七拾九兩壹分、永貳百文六分、

一灰吹銀貳拾八貫九百目　此金直貳千八百八拾三兩貳分、永百五文三分、

〆金三千貳百六拾三兩、永五拾五文九分、　出方

內

金貳千貳百五拾九兩貳分、永百九拾七文八分、　拂方

是ハ山方稼入用粉成吹入用、幷金銀吹分所小判所入用、其外敷內不時入用等之分、

差引

金千三兩壹分、永百八文壹分、　御益

內七百五拾三兩、永貳百三拾貳文五分、御仕入金三千兩ニ付千兩之割合御益、
貳百五拾兩、永百貳拾五文六分、割合外御益

右之通御座候、以上、

申
七月　中川飛驒守
中島平四郎

佐州金銀山自分稼所去未年分御仕入金御下戾方御藏斷

一金貳千貳百五拾九兩貳分、永百九拾七文八分、

中島平四郎

佐州金銀山之儀、近年打續不盛ニ而、年分上納金銀高相劣リ、此委ニ而ハ終ニ文化之不盛ニも可相至哉、山方衰微致し候而ハ、上納金銀自然相減候樣成行、其上銘々渡世を失ひ、一國之安危にも拘り候儀ニ付、私共深心配仕、何れニも一體之御益相進ミ候主法も可有之哉と、其筋之者共見込をも相尋、銘々存意爲申立候處、當時稼捨ニ相成居候、古間歩之內、山所見立穿方入用、幷鏈石粉成吹入用目當を極、夫々規則相立相稼、三千兩之仕入金致し候ハゞ、四千兩丈之金銀穿出、千兩之御益相立可申、勿論右千兩之御益而已ならず、穿出候四千兩分之金銀ハ、全土中ニ埋レ候分、新に世上之寳貨と相成、其上右數に相稼候內には、追々出方取直、格別之御益相立候樣罷成可申、左候得ハ御直山にも可相成、金銀山稼之末を繼候一端にも可有之旨申立候ニ付、御差引勘定合之儀、再再應爲取調候處、不相當之譯にも無御座、千兩之御益相立候儀ハ無相違、見居も附候儀ニ而、別段御拂切之御入用等不申上、且金銀山稼永續之仕法を兼候兩全之主法と奉存候ニ付、去冬中委細に取調相伺候處、伺之通御下知相濟、尤昨年中より右之趣を以稼方爲取計、出鏈之分ハ先般不殘金銀ニ吹立相濟候處、兼而申立候目當より御益も相進ミ、別紙差引書之通、仕入金ハ貳千貳百五拾九兩貳分、永百九拾七文八分ニ而、出方ハ三千貳百六拾三兩、永五拾五文九分と罷成、差引千三兩壹分、永百八文壹分御益相立、兼而申上候御益金割合外、別段之御益相立候ニ付、伺濟之通、自分稼所ニ而穿出候金銀ハ、今般運送御金藏江別上納ニ仕候、右ハ掛役人共ニも新規之儀ニ付、萬一見込引違候而は不容易儀と深存込、格別入はまり、都而誠實に取扱候故、右之手順ニも相至候ニ付、猶此上之主法相續仕候儀、兩方精々申渡置候、且前書仕入金貳千貳百五拾九兩餘之分ハ、先般御下知濟之通、御下ケ戾之儀、御勘定奉行江御斷御座候樣仕度、依之別紙金銀出來形御入用遣方差引書付、幷御廉斷相添此段申上候、以上、

一筋見買石價金拾壹兩三分（小判所ニ而吹不足之分）
〆貳萬三千拾九兩貳分、永百九拾七文餘、　納方
一金壹萬六千七百三拾兩三分、永百九拾壹文餘、　拂方
差引
金六千貳百八拾八兩三分、永六文、　御益
但右同斷之處、卯九月、石谷備後守御伺之上、同年之義ハ、十二月分迄之金銀翌年上納致し
候得〆、辰年上納高ハ相減候得共、巳年より全前年一ヶ年分上納ニ相成候ニ付、右之通取
計候積御下知相濟辰年上納高金六千九百四拾三兩、灰吹銀貳百三拾三貫八百七拾七匁
七分ニ有之、本文金銀高ニ引合不申候、○中略
嘉永元申七月二十三日差立同八月二日阿伊勢守殿江志賀金八郎を以進達致し候旨、同十六日
出、同九月六日晩到來之御用狀ニ申來ル、○以上朱書
同九月晦日御書取御添、前同人を以御下ゲ有之候ニ付、承諾付取調、翌十月朔日、前同人を以返上
致し候旨、同二日附、同二十三日晩到來之御用狀ニ申來ル、○以上朱書
書面伺之通、仕入金貳千貳百五拾九兩貳分餘江戶御金藏ニ而御下ゲ戾之積可相心得
旨被仰渡、奉承知候、
申十月朔日　中川飛驒守
伊勢守殿
佐州金銀山自分稼所、去未年分金銀出來形幷御入用遣方、其外御入用金御下ゲ戾之
儀申上候書付、　中川飛驒守

石谷備後守存寄之通、一ヶ年之出方と御入用差引同樣程ニも相成候ハヾ、多穿出候儀可ㇾ爲ㇾ伺之

通候、

右段十月十日、相模守殿御直ニ石谷備州、勘九郎天野助次江御渡被ㇾ成候由。○以上來書

延川勘九郎在府(以上來書)石谷備後守在勤　寶暦八寅年　灰吹銀金直、百目ニ付、三兩壹分、永貳百四拾五文、但元文三午年印銀江戸表ニ於而、御樣之上、正銀文銀ニ相直候勘定ナリ、

一小判六千九百六拾貳兩、永四文、　一灰吹銀三百貳拾六貫五百八拾四匁貳分、此金直壹萬百九

拾三兩、永拾四文、

一上納鍍代千三百八拾八兩、永百四拾五文、　一銀山諸御拂物代拾貳兩三分、永三拾五文、

〆金壹萬八千五百五拾五兩三分、永百九拾八文餘、　納方

一金壹萬三千七百拾六兩三分、永六拾四文餘、　拂方

差引

四千八百三拾九兩、永百三拾四文餘、　御益

但享保十巳年迄ハ、一ヶ年限之出來金銀翌年上納致し候處、同十一午年より同年分出方之

内を加へ候ニ付、出方御入用差引ハ、年分を積引分勘定致し候儀ニ而、寅年分とも卯年六月

上納高ハ、金八千六拾六兩、半田筋金出來金三百拾五兩壹分、合八千三百八拾壹兩、灰吹銀三

百五拾四貫七百六拾三匁六分、半田筋金より出候、灰吹銀四貫八百三拾壹匁三分、合三百

五拾九貫五百九拾四匁九分ニ有之、本文金銀高ニ引合不ㇾ申候、

石谷備後守在府(以上來書)延川勘九郎在勤　同九卯年　八月迄備後守在勤

一金九千百七拾貳兩三分、永百五拾八文餘、　一灰吹銀三百七拾貫八百四拾貳匁壹分

此金直壹萬千五百七拾四兩壹分、永九拾九文餘、

一上納鍍代貳千貳百四拾七兩、永百四拾文餘、　一銀山諸運上物御拂代拾三兩貳分、永五拾文餘、

舊臘二十六日御渡被遊候、石谷備後守差上候、佐州銀山稼方之儀ニ付、書付一覽仕候處、右銀山之儀、當時ハ出方と御入用と差引、御益之多く相見候儀を專ニ仕候ニ付、出方宜場所計採穿ニ仕、出方薄場所江は大工仕掛も少く、當時出方相應之場所壹ヶ所ならでハ無御座候ニ付、右場所萬一山崩落石等之變ニ而も出來仕候ハヽ、銀山壹度ニ斷絶同樣之儀ニも可罷成ニ付、以來ハ一ヶ年出方と御入用差引同樣程ニも相成、御損失さへ無御座候ハヽ、差引ニ無貪著、多く穿出候樣取計候ハヽ、一體之出方相增、夫ニ隨ひ銀粉成吹立等ニ掛候大勢之者迄、甘きに可相成と之書面ニ御座候、

右之儀評議仕候處、去未年以來、出方と御入用差引、御益之進み候樣取計來候處、是迄差而差支ニ相成候趣にも無御座候、前書備後守申上候趣ハ、若銀山違變之儀も出來仕候節ハ、斷絶同樣ニも可及と、右之儀を氣遣ひ、出方と御入用當分ニも候ハヽ、御益ニ不拘、御入用掛ケ、稼手廣仕度趣意第一ニ相聞申候、備後守申上候通、石中ニ有之候金銀堀出候儀故、出方さへ御座候ハヽ、御入用相增候而も可然候、併當時間歩五ヶ所に而、出方と御入用差引、四千八百兩餘御益有之儀ニ御座候、一體出方相增候樣仕候ハヽ、當時不盛之場所も大工多仕掛候ニ付而は、又々直りにも切當可申儀も可有之哉、銀山之儀ハ日々ニも盛衰有之候者故、其場所ニ而敷內等之樣子巨細ニ吟味之上大工仕掛候儀故、書面計ニ而は御入用指引ニ不拘、穿出候樣取計可然共難申極奉存候、然共備後守儀ハ場所見分仕、若斷絶同樣ニも可相成哉と申上候趣も見越候樣ニ御座候得共、先爲試、一兩年も出方と御入用差引同樣程ニも大工仕掛候樣ニも可被仰付候哉、則御渡被遊候書付返上仕候、以上、

辰二月

右辰二月二十五日、相模守殿江藝州與七立會被上候由、○中略

十月十日　一色安藝守、石谷備後守、小野左大夫、古坂與七郎、天野助次郎、

佐州相川銀山出方と、御入用差引仕候儀、前々之御相糺候處、古來より金銀山之儀は、石中を穿取候事故、十日之内にも盛衰有之、宜敷鏈に當候得ば、出方少く御座候而も、格別之御德用も有之、鏈薄く相成候得ば、多く穿出候而も、御損直段下り候ニ付、御損失も有之事故、年々盛衰に任せ置、御入用と出方差引仕候儀、前々より無御座候ニ付、九年以前未年之頃迄は、御入用と出方之差引ニ而は、何れにも御損分而已に而、御益之筋無御座候處、當時は出方と御入用差引ニ而、御益も多く相見候儀を專ニ仕候取計ニ而御座候、尤御益之進み候樣取計候儀ハ、專一之儀ニ御座候得共、御益多仕候ニハ、出方宜敷場所計撰穿ニ仕、出方薄き御入用ニ不掛合場所江ハ、大工仕掛も少く、當時ハ御入用を掛稼候御直山五ヶ所之内、出方相應之場所壹ヶ所御座候ニ付、此所重ニ相稼候故、萬一右宜敷所、山崩落石等之變ニ而も出來仕候得バ、銀山稼一度之斷絶同意ニ可罷成哉ニ奉存候、石中ニ餘り有之金銀を穿出候得バ、誠國土之寶新ニ相增、御入用相立候金銀ハ、其儘世上之通用ニ罷成候ニ付、銀山稼之儀ハ、一ヶ年銀山方之諸御入用と、則其年一ヶ年出方之金銀之差引同樣程ニも罷成、御損さへ無御座候ハヾ、左而已御益之差引無御座候共、多く穿出候樣ニ取計候ハヾ、變事ハ格別、是迄之景氣ニ而は、一體之出方、金銀共相增可申哉ニ奉存候、右之通ニ罷成候得バ、御損失も無御座、餘り有之金銀ハ出方相增、夫ニ隨ひ鉑成吹立等ニ掛候大勢之者渡世ニ罷成、自然と下之甘きに可罷成哉ニ奉存候、依之存寄之趣申上候、以上、

寶暦九年　卯十二月

石谷備後守差上候

佐州銀山稼方之儀ニ付申上候書付寫

一色安藝守、古坂與七郎、御勘定方、

リ、

〔佐渡年代記十三〕慶長十二丁未年、佐州銀山、其出る事を減る故、大久保石見守是を糺斷すべきため、五月二日駿府を發す、今年は路次の國々、貢賦の事を沙汰して佐州へ到らず、

慶長十三戊申年、今年二月、大久保石見守佐州へ渡海し、金山を撿斷する處、掘返し地形と、海の深さ均しきゆへ、水涌出て、金穿等も詮方なく、其術計を失ふ趣、書を呈して言上すと云、長安は猶佐州に留りて、來夏越後田畑廣狹を改、信州を歷て、美濃國中經界を按撿すと聞ゆ、

　但掘返せしと云は、西三川金山の事ならんか、或鶴子銀山をさして言しも知るべからず、

〔當代記〕慶長十二年五月二日、午ノ終ヨリ大雨水、此頃大久保石見守佐渡ニ下、銀山仕置可仕之由、依仰、駿州ヲ立、伊豆ノ金山銀、シカ〴〵コノ比不出ト也、　十三年四月十日、大久保石見守去月佐渡國ヘ下、銀子當年ハ曾テ不出、依之爲水流シノ溝ヲ深ク掘、色々被了簡ケル、間歩ノ穴、海ノ地形ト對揚歟、水間歩ニ多シテ難掘ト云々、

〔吹塵錄二十四鑛山〕卯〇寶曆九年十二月二十四日、相模守殿江御直ニ備後守上ル、同廿六日、安藝守與七郎江御渡、

辰年〇十二月二十五日添書いたし上ル、同十月十日、相模守殿御直、備後守助九郎江、別紙御書付御渡し、承付致し、同十三日、上村政四郎を以上ル、〇以上未書

　書面石谷備後守伺之通可仕旨被仰渡奉畏候、

　　十月十日　　　　荒川助九郎

佐州山出金銀と、稼方御入用差引之儀ニ付、存寄申上候書付、

　　　　　　石谷備後守

書面伺之通、佐渡奉行江被仰渡候段奉畏候、

增田銀山
院內銀山

次銀請とり換、御算用沼井勝右衛門、根岸總內分濟、但間歩請役ノ未進四拾三貫百七匁有、慶長十七年阿仁銀山入役御算用片岡九兵衛、太野金右衛門分濟、慶長十六年增田銀山未御番屋御算用登聞處人、豐田左馬允濟、慶長十五年杉澤御運上金銀請取御算用青柳播磨助分濟、但無帳一紙計にて、帳は火事に在所にてやき候由、右之御人太野金右衛門藤吉、　廿六日、慶長十六年より同十七十八十九まで院內銀山奉行森田次右衛門、片倉久右衛門、御算用帳をば、內膳殿被極候由、慶子畑正助手ニ而一紙有、其一紙之面ばかり御見申候、但森田次右衛門請取之內、慶長十六十七船御運上貳千百貳拾五貫八百五十目は、山子に未進之由、小一紙之內ゟ、太一紙にはつれ候を御出し候、未進帳書付申候外に、六千八百八拾貫八百八拾目は、太一紙之內、淺藤夢に有候の由、兩人之手前分之又未進帳に有、此御人山口清左衛門、太和田彥左衛門、金戸正吉、古谷長七、右之小帳、內膳殿御之時分、正助一紙かき候由申ニ付而、此度も次右衛門、久右衛門、兩前に御寫見申候、一紙之面に御買銀之儀、御未の銀割付不見へ候間、正助に書付させ申候、但小帳は一冊も請取不申候、

佐渡國銀山

〔佐渡志五物產〕銀

天文十一年ノ夏、越後ノ國ノ商船澤根ノ湊ニ纜ヲ繫テ、終夜天色ヲ望ムニ、金銀ノ氣空中ヲ衝クヲ怪ミ、逆旅ノ主人ニ相議リテ、地頭本間氏ニ告ゲ、礦脈ヲ尋チテ鶴子山ヲ開キケレドモ、功イマダ成ザルヲ嘆キ、後越後ノ國ノ領主上杉謙信ニ訴ヘケレバ、入道ガ下知トシテ、同國魚沼郡上田村ノ金穿リ人夫數百人ヲ渡ラシメテ、天文ノ末弘治ノ頃マデニ銀銅ヲ得タルナカニ、金モ少シク交リタレドモ、費用ヲ補フニ至ラズ、年經テ慶長六年、關東ノ御料ニ併セラレシヨリ、天壹德ニ賦リケルニヤ、金銀ヲ出スコト年ニ多ク、中ニモ相川ノ中山通リトイフ礦脈連綿トシテ出ル處ノ銀ニハ、多クハ金ヲ帶ビタリ、此中ヨリ出ル金ハ、異邦ニ稱スル處ノ煉金ニシテ、銀トジトイフハ、生レノマヽノ銀ニテ上品ナリ、其餘ハ雜碎百煉シテ銀トナルナリ、委クハ金銀山志ニ見ヘタ

荒川銀山
阿仁銀山

金ハ、大形三拾五枚之御運上も可有之候と申候へば、又申分は、御米かい其外入用に指引候へば、思はしからざる儀候由申候、我等申分は、入用莵角御米をかい候と申候儀不届也、六拾荷之石かね不渡候はゞ、只今迄に御米をはなにゝてかい候はんや、御米をば右之心得ニ而借銀を致候而もかひ、御運上をたてざる儀、不届之由申候へば、尤之由挨拶罷歸候、水無山師先共、佗言申分は、新山ニ而、皆々手づまりにて御座候處に、御米たかくにて迷惑致候、やすく罷成候様に、於窪田御披露頼入候と申候、我等挨拶申分は、御奉行衆へ申上儀成間敷候、其故ハ、院内銀山之儀は、仙北三郡之御藏米つどい候へども、愛元之ね、同前也、當山之儀者、阿仁檜内に御米無し、近所は窪田分、大かたは仙北之御米、湊へ御下被成、野城へ御廻、野城より小舟ニ而日數を取と候所に候間、院内銀山より一はいにうらせられ候ても、院内銀山同前に可當候處に、院内なみに安御うり候儀、いかゞに候間、せう〳〵は愛元之山の御米之ね御あげ候か、院内山之御米之ね安あられ可然と申上度候へ共、當山之儀は、新山又は來春之山之委に候間、延引する事候、もし以來も當山之御米様子よりねを御あげ候へと申上儀は不知候、只今より安被仰付候様には、主馬におゐては申上間敷と挨拶致候へば、いか様にも山々つゞき申様に頼入由申候て、一日にあきし罷歸候、　九月廿四日、院内銀山御運上銀負之内、去年秋、役持申候者共連判を致、尾張次右衛門を以、我等方へ申越分は、荷分間歩ニ付而、總山明申候故、御役も調不申候、秋役之内御免し被下候様に申上候様にと申越候、若我等於不申上は、目安を以屋形様へ可申上と申ニ付而、内膳殿、右近殿へ、右之様子眞長右同道致申上候へば、夜に入候て御城へ罷出候へと被仰候間、罷出候へば、御兩所御披露被成候、未進負之銀目御尋候へば、川加兵衛請取分候間、銀目ハ不存由申上候へば、院内ニ而加兵衛ニ御尋被成、少は御免可被下由被仰出候間、其段返答致返申候、加兵衛所より添状候間、其段返答申候、

(梅津主馬政景日記)元和三年三月十日、慶長十八年荒川銀山間歩諸役御運上銀、同銀代銀過銀間

(秋藩紀年)慶長十二年丁未、今年ヨリ院内銀山運上銀初ル、駿府ヱ御運上致指上、御使者信太兵部少輔同十七年迄御運上銀高不相知、

(澁江文書)駿府之御徙移、今月末か来月始にて候はん由候、然ば院内御運上之事、可持参候間、銀子今まで請取候分、無残可相上候、九右衛門か勝右衛門兩人間、一人請取にて可差添候、さ候へば、御運上か、り跡より上候事は、見角六ヶ敷候間、去年分之儀は、今まで済候銀子とり集、霜月極月分成共、さん用仕入候て、候跡可差上候、此書状参着明時より申付、算用以下相極、早々可差上候、いかやうに候ても、覚元逗留中参着候やうに可申付候、恐々謹言、

義宣花押

正月五日〇慶長十三年歟

澁江内膳殿

又申遣候、覚元大方二月中には相立可下候、さ候へば下前北城之元へ御越なきやうに才覚尤候、總別在々鳥之法度堅可申付候、

(梅津主馬政景日記)慶長十九年四月九日、眞崎長右衛門山より、嘉兵衛我等之處へ之名付ニ而書中有、其様子は、院内銀山、近日悪敷罷成、水取候事も不成候間、御米借シ被下候様、内膳殿へ申上候へと被申越候、嘉兵衛方へ我等申分は、右如申候、當年之儀山役之義御侘言可申と存候間、何事もかまひ申間敷候間、貴所計内膳殿へ御出候而御申可然由、山掃振舞之所ニ而申理候へバ、尤之由被申候、　八月廿七日、窪田へ我等罷帰ニ付、板木澤山師共侘言有、其様子ハ、降七拾枚間分御運上三拾五枚か、り候分、掃部きつく催促之儀迷惑致候、石かね無之候間、石かね罷出候まで運候様ニと申候、我等申分ハ、其身共不届也、其様子ハ、右百貳拾六荷半之石かね之内六拾荷、其身共へ相渡候儀ハ、三拾五枚之御運上可為済用所也、石かね壹荷貳拾貳はいあるよし、其身共申候壹はい壹吹ニくべ候由及聞候、壹吹ニ金壹匁宛ニ候へば、壹荷には拾貳匁有、六拾荷の石かねニ而吹候

津主馬來り代る、北平は矢島領笹根子に出る道あり、依て番所あり、湯澤の給士守之、（南左衞門組下）今銀山衰て止む、然れども道猶あり、是を北平越と云、此道北平鉛澤と云に出て、大澤道に出て矢島領に至る、又近年同領直違に銀山あり、間道の小道を開く、依之御境方其道を堀切止むと云、

〔秋田沿革史大成上〕慶長十二年、院内銀山運上銀、駿府將軍家康ニ獻ズ、家士信太兵部少輔其使節タリ、以降年々之レヲ納ム、而シテ此銀山開掘ノ原因タル、伊勢國人林治郎左衞門、會津ノ住人渡邊勝左衞門、仙北ノ住人石山傳助、越前敦賀大谷吉次ノ家臣村山宗兵衞等、慶長五年關ケ原ノ戰ヒ負ケテ本藩ニ遁レ來リ、雄勝郡小野村ノ知人佐々木某方ヘ潜伏セシ折柄、村人ノ語ルヲ聞キテ、此村ノ山ニ砂銀ヲ掘リ出ス所アリト、因テ其山ヲ普請シ、同八年頃ヨリ十年ノ冬季マデ、密ニ砂銀ヲ採リ居リシニ、村山宗兵衞ナルモノ或夜靈夢ヲ得、獨リ小野村ノ山ヲ出テ、是ヨリ西ニ方ル寶龍館ノ奧山ニ入リ、長倉ト云フ里ヲ過ギテ、又入ルコト二里餘、而シテ靈夢ノ如キ銀鉉ノ萌ヲ發見シ、小野村ニ歸リ、渡邊、林、石山等ノ三氏ニ其奇異ナルヲ語リ、同十一年ニ至リ、數十人ノ坑夫ヲシテ掘ラシムルニ、同秋ニ至リ銀鉉ニ當リ、之レヲ問ヒ吹キセシニ、全ク銀鑛ナルヲ以テ、當時執政澁江内膳政光ニ告グ、直チニ義宣ニ上言シ、則チ政光ニ命ジテ、彼ノ村山宗兵衞外三名ニ、其山先キタルベキ證文ヲ下附シテ、追々開山セシヲ以テ、將軍家ヘ具申シ開掘ノ免許ヲ得タリ、

〔奈良文書（羽後）〕新城之銀山よく成候由其聞候、少宛も山に似合候て、役以下可申付候、はやく役以下申付候得者、ほりこども出候などヽ申候て、遲申付間敷候、金が出候得者何と役を申付候得而も、ほりこは出間敷候、役を不申付候共、金が不出候得ば、ほりこは可出候間、大略に候者早役等可申付候、重而之便に山之樣子具ニ可申登候、儲之奉行申付、念を入可申候、新敷山に候間高をつ可有之候間、無油斷可申付候、謹言、

六月（慶長十二年）二十九日　義宣花押

可以支數年、底及今時、數匯他年之有成、審者決意從事丸ヶ瀬、故有今日之盛、苟不決意勇往、何以望向來之隆、方今人意動靜、寄致開水實前及寄未融、丞戦餘然、至若費用、要須二千五百兩、今所儲蓄僅償千五百兩、加以後來所得鉛價、殆不仰府庫度支、可以成實矣、蓋府允之、天保元年藏事于再允、督開千二百歩、經十七年、弘化三年、得達鋪脈、數價豊盛、六月間所得以償十七年工費之大半、當是之時、牢田燈歐、前代無比、再允之藏兩、春盛者二十餘年不衰、銀所得山吹銀之數、

弘化元年　五十三萬九千百六十錢

二年　二十二萬五千零九十四錢

三年　三十二萬九千九百零九錢

四年　一十九萬八千零十五錢

出羽國院內銀山

〔秋田風土記雄勝郡上〕銀山は慶長年中より始ると云ふ、其已前より有りと雖も詳と知るものなし、山は上新町の川向にあり、滝あり不動堂あり、絶景也、觀音の社地岩穴にあり、山中二町程林中法度山日張澤橋元一歩一番所有とぞ、西は天狗嶽と云、又すみ川と云にも番處ありとぞ、今はなし、昔は御直山に非ず、他國の者入込、山師せしと云、是も又昔の跡のみ、僅なる事をしらず、〇中略

雄勝郡　銀山町(上院内より一里八町、長倉より六町ほど行て、水抜の大切鋪あり、中鋪トいへり、又白岩あり、銀山は今の郡の山なりとぞ、依て此所を水抜とす、)拾歩一番所矢島領銀山通路を當て足輕二人(大山長門支配)守之、一人一日六合扶持、三十日交代、西は矢島領大澤越爾は銀山道なり、三町ほど行て立石あり、右の山上にあり、奇石なり、又主鈴坂と云石垣の坂あり、昔銀山奉行靈各主鈴此道をひらく、故に名とす、臺所御米藏あり、入口に番所あり、家居三十戸、人三百餘口、(昔は千戸、人五千餘と云、)床屋あり、銀山は慶長年中、村上宗兵衛(越前敦賀の城主、大谷刑部大輔吉次が家士なりと云、)大谷沒落して後當國に下り居す、靈夢によりて此山を見出すと云、澁江内膳命じて山先きとす、今子孫なし、慶長十三年、院内の守僅矢田野安房守支配す、組下飯土井壹岐守を(院内給士)銀山に附置く、梅

二年　四千九百四十七錢
三年　三千三百三十二錢
文化元年　九百四十三錢
二年　三萬七千九百六十七錢〇中略

再光坑開鑿

文政四年代官寺西重次郎上言、臣所管半田銀山、見今所掘採、栗林、澤、本𨫼、大剪、新疏水、諸坑、漸東漸下、量其坑極底下、於我口、略十二三丈、水益深、業益艱、處亦無良鑛、與柄、錢神阜、古稱銀穴、爲半田最上等、而未發其蘊也、臣願與柄、錢神阜、矢筈、岩下三坑、因其故道、進鑿各二百步、必將有良鑛矣、幕府允許、開鑿久之無功、至文政九年罷之、十年寺西藏太爲代官、十二年正月上言、昨十一年、半田產銀頗多、自正月至五月、筋金一萬千七百九十四錢五分、折金六百七十六兩五分、永樂錢六十五文五分、灰吹銀十二萬九千六百六十二錢五分、折金七千百九十三兩五分、永樂十五文六分自六月至十二月、所得筋金七萬六千九百八十八錢五分、折金四千四百十六兩二分五厘、永樂二十五文九分、灰吹銀三十萬零七千九百五十五錢、折金一萬七千三百二十二兩二分五厘、永樂二百十八文八分、鏈價金六千零三十一兩二分五厘、永樂四十二文、稅金十六兩五分、永樂九十四文、都三萬五千七百五十兩七分五厘、永樂六十四文四分、此其所入也、所出金一萬八千二百五十七兩五分、永樂四十八文四分、比較得羸金一萬七千四百九十九兩二分五厘、永樂十六文、旺盛如此、請陳其由、自今歲己丑、前六年甲申、測量坑道、知新疏水坑傾斜向上、底高於口六丈、於是入坑口六十步、從九ヶ瀨轉進三百八十步、得一良鑛、此致旺盛之因也、其後鑛道漸下、湧水急於泉、且掘且錐、自此以往、雖有至寶、不可得採也、臣謹按地形、參酌老吏言、距新疏水坑口、東四百步、有地可辟疏水竇、字曰再光、卑二十餘丈、此竇一成、則坑中之水可涸、底下之羸可竭也、然延長不下千步、非經四五年之久、則不能成功矣、所採取羸鑛、未至之絕、

永可得去也、幕府從其議、六年二月、初有事于輪奈手、仙臺侯使臣屬董其工事、寛正元年、歸仙臺管轄、復代官、以岸本彌三郎爲之、岸本乃上言、臣以七月十九日、承牟田工事、見時開鑿坑道四百七十九步、鑿坑四百七十八步強、聞仙臺吏人言、所須費用過定額金五百二十兩、米五百七十石、究其原由、出於石崎豫算不精、臣承事以來、自七月二十日、至今年五月晦日、所開鑿三十一步六寸、準定額金六十四兩強、米三十八石、而其實所費金三百五十四兩、米九十四石、會計如此、坑道決不可成、且地有剛柔、日夜所程柔則六尺、至於剛則止七寸、用力不齊、費亦倍蓰、始農桑之時、人夫事劇、非募以厚利、勢必不行、坑道未成、計二百四十步、非須金二千六百有餘兩、不能竟也、請命主司、發府庫金給焉、從之、此年請增本番大剪工役夫、言天明四年、幕府遣石崎淸之丞、檢牟田鑛山、定用役夫員、本番工夫六人、大剪三十八人、經理三十六人、人少事繁、動至荒廢、且牟田鑛廠、不相連續、各成一房、曰之銅鑛、及前房未盡、豫採後房、曰之青鑛、人少事繁、則不暇給、於青鑛廢房已盡、無鑛可掘、買石之徒、束手失業、往々離散、留者僅九人、凋弊如此、何以謀公家之利、伏望增益役夫定員、令無荒廢之患、經理雜役三十二人、用坑夫一歲三萬五千四百人、以爲定制、令如所請、然採鑛不盛、岸本乃歎曰、舊鑛已盡矣、享和元年、竹內平右衛門爲代官、奮欲興鑛事、徑請貸金、開鑿舊坑、文化四年正月、新疏水坑、得達鑛脈、（牟田傳之助履歷書作二月六日）自天明六年起業、至此二十二年、大發銀鑛、幕府貢鑛造貨幣云、

享和年間、製銀不過一萬錢、岸本之所長大息也、文化之初、得達新鑛、數五千萬、夥矣哉、世傳德川氏之盛、極於此時、此其一端也、自寬政十年、至文化元年、得銀之數如左、

寬政十年　一萬六千八百六十九錢
十一年　九千七百九十六錢
十二年　七千二百五十錢
享和元年　一萬一千七百七十七錢

〔半田銀山志〕銀鑛發見

半田山發銀之端、莫知其詳、蓋在於大同年間云、俗傳有一覡行拜神祠、到此地投宿民家、見銀塊於爐灰中、異之、卽知所蒸樹根爲挾、往采薪所見之、則得露頭銀神阜是也、

鑛業來由

自慶長至萬治五十年間、盛發銀鑛於銀神阜及八丁立、八丁立者、銀神阜迤東也、寬文年間、上杉播磨守綱勝朝臣、使其臣伊達半十郎司鑛山事、無幾削封爲松平宮內少輔所食、又修其業、正德二年、北半田邑野村彌右衛門營開本䂨坑、享保八年、逢鑛脈大得贏利、家世其業、其後佐久間六郎右衛門代之坑深水出、開大剪坑以疏積水、寬保元年十一月起業、至延享三年而成、發銀豐盛、四年九月、征夷府直轄半田鑛事、置代官衙于桑折驛管理焉、辟解鑛務者、徙自佐渡、以爲吏員、寶曆四年、代官小林彌四郞言、半田人佐久間量永請營開岸坑、北半田人齋藤六之助營開澤坑、許之、此時大剪本䂨澤三坑鑛脈衰殺、營業不能支辨、有乞解業者、營業者曰之鑛山師、負擔坑事、使役職工、有司治之而耳、小林彌四郞建議、自去歲以來、鑛脈衰殺、物價騰貴、得不償失、鑛山師逡巡引去、布令募索、未有應者、願使有司管理以待有應募者、府從其議、給費經理焉、又上疏言、大剪坑十三番䂨有良鑛、爲積水所沒、不能採掘、望請去坑口下一百五十步開疏水坑長四百二十步（坑道以高尺、五尺爲步）以涸大剪積水、良鑛可得也、桑折人平左衛門、將擔當工事幷本坑與鳳坑四百二十五步、費金八百二十八兩、米六百八十石、期三年可開鑿也、幕府可之、元疏水是也、所鑿鳳坑會有良鑛、名曰新䂨坑、

新疏水坑開鑿

安永四年、幕府附伊達郡于松平陸奧守重村朝臣、預管轄之、天明四年、幕府使支配勘定格石崎濟之丞、點撿半田鑛山、石崎上便宜事曰、諸坑深長、爲水所沒、非開一疏水坑則不可爲也、請自南半田邑輪條手、進鑿七百五十步、用金一千五百六十兩、米九百二十六石、用材五千三百九十枚、則土功可成、剩

銀山

攝津國多田銀山

下野國足尾銀山

陸奥國仙臺銀山

(穆軒小錄)銀坑之事

日本には東奥州生金、西對州生銀と云ふこと、列代の史傳に多く載す、續日本紀、天武天皇三年三月、對馬國司守忍海造大國と云ふもの、當國より初めて銀を出だす由言上して、銀を貢上す、依之小錦下の位を授けて褒美し給ふ、其銀を諸神に奉じ、宮人小錦以上大夫等に頒ち給ひきとなり、日本銀有ることを知るは、天武帝の時を初とし、始めて對馬より出づ、近世對州より銀の出づるを聞かず、近代は佐州より銀を掘り出だす事、其名尤あらはる、前年其國の學生稲山怡白來り學ぶ、依りて何の比より掘り出だすと尋ぬれば、中古越後長尾氏に屬す、其後公領と成り、天正の比より銀掘り出だすと云へり、然れば銀の出づること甚近世なり、其國の地理遠近大方知れたることなれば、記すに及ばず、其國牛馬犬猫の屬は有りて、妖怪猛獸毒物なく、盜賊の患もなし、海中の一島なれば左もあるべし、按ずるに、本國金有ることを知るは、聖武帝の時に初まる、何れも唐の世全盛の時に中る、

(吹塵錄二十四銀山)攝州多田銀山豫州別子立川銅山起立

攝州多田銀山起立

寛文二寅年、永井日向守領分銀山并銀山附四拾ケ村高八千貳百拾石餘上知被仰付之、

(日光山志四)銀山、足尾町より西に當り、二里餘、地形四五町程なる場所なり、銀山は日光御門主御持山となれり、運上を奉り村民等稼の山なりしかど、今は銀出ざるゆゑ、吹方を休て、此所に司るものを命じ置り、

(東遊雜記一)此地○石卷より七八丁隔て、辨慶の硯石とて方三尺余の圓なる岩あり、是を硯にして著到を記せしと云、手水鉢などにせば、至てよき石なり、水の貳斗も入べき雅石也、是より一里餘西南に牛田村と云に、公義の銀山あり、今仙臺の御預り山也、慶長七年より元文年中まで繁昌せし山にて、今は大に衰へしと云、御鉱見使、銀みふかせ御吟味ある事なり、

夫々於テ今請座之内也、此村庄屋四郎左衛門、年寄三右衛門、與左衛門、此金山立木有、猥リニ仕間鋪旨、右庄屋年寄ニ、先役酒井七郎左衛門申付置候、

〔大日本府縣志鑛物篇〕墨海山錄九十九　大切山（萩より二里中あり）并千人間夫壓死之事

抑此長州赤銅山といふは、日本に名高き金山にして、古來より金を掘こと、世に人の知る所也、其山の總名を大切山といふ、中にいろ〳〵の小名あり、或は三本松、或は白金山、或は千人まぶ、中にも此千人まぶは、古より次第繁昌にして、人家軒を連ぬ賑は數處なりしに、享保十乙巳のとし五月十六日に、山崩れ人うたれて、九百九拾九人死す、扨此由來をたづぬるに、此山の習にて、年の中は三日の忌日有、是をトキといふ、又空時ともいふ、其トキといふは、正月十六日、五月十六日、九月十六日の三日なり、此日むかしより山は鳴響有て、山へ入ことを忌む、人若山にいれば、山靈祟りをなすと言傳へしなり、然にこのとし五月十六日いかゞしたりけん、稼方の者一統にいひけるには、今日山に入て平日の如く稼ぐべしとて、いつもの如く支度致しけるに、中に一人のゲゲョウの（金堀）云、けふは必入るべからずとて、此者色々に諫めければども、多勢のことなれば更に聞いれず、彼ゲゲョウが云、今日一日稼ずして何ぞ餓死せんや、我祟をおそれて餓死をおそれずといふて、此者は殘りぬ、其餘の人々はいつもの如く山入せしに、果して鳴動甚くなりて、山崩れ打れ死したり、其後其者共の妻子のみ殘りて數多尼となれり、今は金吹屋も少くなりて、漸々三十六軒となりたり、

此山は草木生せず、入口の高さ、上見霞ほどに高し、是より奥に入る事二百町許也、爭螺殼に火をともして通行す、此器珍ら敷ものなれば、孫市が贈るべしと約せり、

礦を取の儀は、網目鉛の條下の說に大かた同事なれば略す、又礦脈をたづぬるに、日の陰陽を見て種々の金に鑑識あれども、ゲゲョウの口授なれば略す、

鋪内を參候間、金筋ニ切當リ候ハヽ入用も被可申候、

(但播州金銀銅山幷寺社書記)阿瀬奥金山〇但馬國氣多郡之事

一此金山、伊藤石見守支配之時、文祿四未年ゟ出來ス、元祿五申年迄九拾八年ニ相成、此金山初リハ、文祿四未年關白秀次公御逆心之由、同年七月於高野山御切腹、是ニ組仕候もの御咎メニ而、堀久太郎家來欠落仕、阿瀬奥山江忍籠候、其頃は源大夫屋りゟ奥は甚深山ニ而、人倫通路無之處、此落人上下貳百人餘、此所を切明籠候落度之者故、金山之通り谷川ゟ砂金を差出し是をつなぎ、金山を仕出ス、追付御救免にて、右之者どもハ、古郷江歸候、段々大盛ニ成、其頃は貳年三年御請座ニ極運上取、寛永元子ゟ請座を止メ、役人を遣し直同巳年迄六ケ年之間、生野同前之仕形也、不盛ニなり、同七午年請座成、源大夫屋りゟ貳拾丁奥ニ家七軒有、男女三拾四人有之、平右衛門と申もの久敷罷在、所々案内能存候、此邊之儀相尋候時ハ此ものを召寄候、〇中略

但州氣多郡根之内段金山之事

一古は小出大隅守知行所也、慶長十九寅年金山出來、其年ゟ公儀江被召上、生野奉行間宮新左衛門支配成、元祿五申年迄七拾九年成、役人共御運上取、〇中略

但州養父郡日畑金山之事

一間宮新左衛門支配之時、八拾九年以前慶長八卯年金山出來、役人遣し直運上取ル、五六年之内盛止、此時七拾九ケ年以前妙見社領ニ渡リ、於于今請座之由也、此金山稼可然處有之哉と、前々ゟ吟味仕候へ共、案内存候もの無之候、

但州氣多郡小出大隅守知行所万場金山之事

一元小出大隅守知行所也、八拾三年以前慶長十五戌年金山出來候ニ付、翌亥年ゟ生野奉行間宮新左衛門支配ニ成、口屋四ケ所建、役人共を遣置、右戌年ゟ拾五年盛り、其後とぎれニ付、口屋を引、

木之城主八木但馬守、中瀬邊支配之時、大日寺邊ニ百姓八人罷在耕作ス、此節因州之もの來テ前前之樣子を相考、川戸邊ニ而砂金を見出し、是をつなぎ金鉒を切出ス、是ゟ下財集リ候哉、戊年右間歩出來ス、同三亥年七兩間歩出來ス、但一日ニ運上七兩ブヽ上ル、依之七兩間歩と云、是ゟ段々出來ス、

一百拾六年巳前天正五丑年、羽柴筑前守但州發向ス、八木但馬守城ヲ明、因州江立退牢人ス、此跡同所別所豐後守丹後國由良江被遣、其跡生野奉行伊藤石見守支配被成、同年秋、吉井村高之内百六拾八石九升壹合、中瀬金山屋敷間歩小屋屋敷ニ引ケ中瀬金山と號、同年田路助右衞門と申者中瀬を請ル、同十二申年ゟ中瀬之山師共請取を破リ運上上ゲ、山師共心次第之稼と成、此時分ハ賣山ニ而運上取ル、○中略

右金山之内、稼可然場所三ケ所有、第一ニ中ノかや間歩樋七拾貳挺取込候ハヾ中程かたきもの有之候、數通ニハ金切出候得共、けたへの時分故捨つ、其時之樣子存候もの于今貳三人も中瀬罷在候、取込入用金子五百兩程之積候得共、中程かたきものに取付候ハヾ、入用減可申由、第二ニ白岩間歩、此水抜近年百姓共行事ニ而、取申候銀を以、川戸ゟ水抜を仕掛申、貳百四拾尋餘切申候得共、白岩四ツ留之地形ゟ三拾長ケ程下江參候積り、内九拾六尋やわらきニ而、壹ケ年之内ニ切ル、今三尋餘も切候ハヾ、金筋を切出スべくと積候處、右かたかりニ而一ケ年之内漸く貳尋餘切、稼料つきて捨置候、殘百四拾四尋程之處、此以後切抜ニ而入用金千五百兩餘之積、五六ケ年寅掛可申候、然共鉒内ヲ參候間、此道筋上々にて金筋相見、是ニ切當候ハヾ、入用も減、亦道ニ而大盛ニも可成候、第三ニ行事間歩、是ハ近年百姓稼捨候所、拾七挺樋を引迄今三四尋盛出可申候、其わけハ上ニ而もときれを、貳拾挺餘切候ハヾ盛、此入用金貳百兩餘之積、是又水抜を切候ハヾ百九拾尋餘西ノ方ニ可然處有、是ゟ切候へば貳拾挺下迄、此入用金五百兩餘之積、三ケ年程掛可申候、是寅

屋と云、其後人家定り家居と成事は去年依台命、大久保石見守當國奉行職を蒙れり、夫迄は陣屋鶴子に有つる所、同年先達而宗岡彌右衛門を渡し、陣屋を相川江移す事になれり、石州ハ今年銀繁有、山林を伐、田畑を埋、平地とし、陣屋を始、それ〳〵に構を立たり、銀山猶々盛たれば、銀山の掟を定め、由緒有者人を他國より招き抱之、其々の役人となしぬ、是當國役人之根元なり、又石州家來之内、地方銀山と分け兼役を被申付ける、

地方　大久保山城　銀山　宗岡佐渡

〔但馬考 四〕中瀬金山

天正元年、八木但馬守豊信領知ノ時、中瀬大日寺ノ後ニ沙金アリ、因州ノモノ來リ、コレヲ見テ、其山ニ金アル事ヲシレリ、其筋ヲ尋テコレヲホル、翌年掘出ス、金穴ヲ石間風ト云、コレ金ヲ得タル始ナリ、モト金石ヲマブト云事ナルヲ、コノ國ニテハ金穴ヲマブトイフ故ニコノ名アリ、

同三年、別ニ又一穴ヲホル、金ノ出ル事甚多シ、一日ニ七荷ヲ運上ス、故ニ七荷金穴ト云、

同五年、太閤コノ郡ヲ征伐シ玉フ、八木但馬守防ギエズ、城ヲ棄テ出奔ス、太閤ヨリ別所某ヲ八木城ニ移置テ、コノ奉行トス、

同十年、別所ヲ丹後へ移サル、コレヨリ生野ニ屬ス、同年ノ秋、宮井村ノ内百六十八石九升一合ノ地ヲ分テ吏民ノ宅地トス、以後金山町ト云、

奉行伊藤石見守、同十二年百合山ヲ掘ル、慶長五年、東都ヨリ間宮新左衛門ヲ生野ニ置テコレヲ司ラシム、コノ時須田鶴山兩庄ヲ減ス、以來、コノ地ハタヾ小吏ノミアリテ諸務ヲ司ル、故ニ奉行等生野ノ下ニ記ス、

〔但播州金銀銅山并寺社舊記〕但州養父郡中瀬金山之事

一中瀬金山は川戸邊ニ而仕出由候得共年數不分明、但百貳拾年以前天正元酉年、但州大田庄八

左衛門といふもの、間歩を切開き、青盤間歩と云しが、十間計り切延たる儘にて手を引しゆへ、後に至りて味方但馬が弟與次右衛門(佐渡志略ニハ、味方大左衛門トアリ、)切繼、大ニ盛を得しといふ、

〔佐渡記〕慶長九年辰年仕置

大久保石見守長安
家老　本多又十郎
小川又左衛門

御直山三拾六ヶ所三拾六人ノ山師共、壹人ニ付米百俵宛、毎年仕置之内御合力ニ被下、鏇炭、留木、蠟燭被下、山仕もの共にハ集之地子町役御赦免、(○下略)

〔佐渡風土記中〕大久保石見守殿由緒之事

大久保石見守長安、初號大和國大藏大夫、甲州信玄猿樂金春方之能師に而、信玄逝去之後、勝頼に含恨逐電甲州を、參川に居住、其頃大久保相模守忠隣舞曲を好、政事暇僅遊興、長安縁を求、忠隣に取入、出頭合力を得、忠隣之伯父大久保次右衛門忠佐より名字ヲ給リ、大藏大夫大久保重兵衛(與改、甲州之案内を致、或時權現樣於駿州岩淵に、金銀山御稼方之次第、御領之役人青山藤蔵を以達上聞、仍而御台前江被召御上意を蒙り、其後御家人に成、段々出頭し、武州八王子邊ニ而三萬石を被下、同國瀧山に居住、從五位之下大久保石見守に昇進し、其頃御郡代伊奈備前守(初號熊藏)ニ口此兩人御領地御藏を預る、諸國金銀山支配、別而佐渡銀山ハ日本第一之用山成故、一年に兩度宛來著可致由被仰付、慶長八(卯)年より支配、翌年辰五月總勢百三拾人に而佐渡江渡海、支配十一年、(○中略)相川府中と成、府中開發之事、銀山次第に盛出るより、間歩口數拾個所に及べり、依之他國より大勢來り、所緣を求て爰に住ん事を願ふ、夫迄はしか〳〵家居も不定、銀山をかせぐ者は、其所に於てはへ木を伐、其を以て堀立に住居を拵、稼所變あれば崩し、又稼所に立て住居せり、則是を山小

山崎町は今の會津町の事なれども、古老の物語には、慶長の頃山崎町といひしは、今の上相川茶屋坂の邊を山崎町といふて繁華なりしを、寛永の頃にもありけん、今の會津町へ移して山崎町と言しとなり、○中略

金銀山の内、山仕共を雇ひ、御入用を以穿出す處を御直山と云、山仕之入用を以稼間歩を、自分山と云、此時御直山三十六ヶ處ありて、右之山仕三十六人へ俸米百俵宛を與へ、炭、留木、鐵、松蠟燭等十分に渡せしと也、（松蠟燭に、松やにを竹の皮にて包み燈内へ灯す、）この山仕ども、多くは伊豆石見より來りしと云、割間歩をはじめ、數十ヶ所の間歩々々殊繁昌せしにより、石見守言上せしにや、味方但馬、原淡路、西山丹波など云山仕共御目見をも被仰付しといふ、味方但馬は生國江州三方郷より出しものにて、京師江戸の內、數ヶ所屋敷を構へ、佐渡鄉中にも田園數多有りしなり、

一說、御直山の山仕三十六人に極しは、慶長十二年の事也共云、山仕の手に附、家內の掛ヶ引をなすものを關山衆と云、（後に誤りて、かなことあらたむ、）又鏈石買取て金銀を吹立るものを買石といふ、山買石、こき買石抔とて、市中に數百人有り、せり入にて鏈を買取る上、此もの共が業をなす所をせり場と云、

山仕共自分山をば、運上金銀を出して稼ぎし也、山の出方により運上も同じからず、此頃ハ世上通用の金銀錢乏敷、金銀山稼方の諸拂につかへし所、山出の銀を薄く打延べ置、入用の程を見はからひ、鋏み切て權衡にかけ通用せし也、是を灰吹銀といふ、

金銀山出鏈の內、寄分と云事、此頃より始りしと見へたり、是は出方の多少、亦は山仕の貧富により、出鏈の內、或は半分に引分け、又は三分の一、四分の一など、割合を計ひて、たとへば半分をば公納とし、殘りを山仕かなこへ宛行ふ事なり、水間歩などにて諸拂多く、山仕難儀の所は、三分の一、又は四分の一を公納と定め、殘りを山仕へ渡す、其時々之計を以定めたる由聞ゆ、今年青盤十

穿出可申旨申上ニ付、則御當家江被召出、大久保十兵衛ト改、伊豆銀山、石見銀山等取立、其後佐渡銀山取立、於佐州ハ莫大之大盛穿致候ニ付、追々御加增被下、高三萬石トモ、六萬石トモ、拾三萬石共說々多シ、武州於瀧山城主ニ被成下、石見守と受領有之、其後諸國總御代官頭被仰付、百二十萬石支配之由申傳石見守死後陰謀露顯、一族不殘御仕置ニ成斷絕ト云、

（佐渡年代記 一）慶長九甲辰年、大久保石見守長安、今年四月十日佐渡國松ケ崎へ着岸、夫より相川江移り、所々巡見し、銀山地方の事を沙汰し畢而、八月十日伏見に至り、佐渡國山岳、金銀を出す事叅夥き旨言上すといふ、

高木筑後、今年石見守と來り、又具せられて歸ると聞ゆ、

横地所左衛門、原土佐、吉岡出雲等、石見守に從ひ來る、所左衛門ハ赤泊に住し、水津迄の鄕村を預り、土佐ハ小木の古城に住し、西三川迄を預り、出雲ハ銀山の事沙汰す、

石見守言上して、浪人の筋目を糺し、佐州へ遣し、夫々の役に當つ、今年具し來りし者の內、保科喜右衛門ハ鶴子銀山を預り、堀口彌左衛門ハ河原田城付地方を預り、鳥井嘉左衛門ハ夷組大野組代官となり、何れも俸米百俵已上三百俵迄を給ると云、又野田監物、川村覺助と云者を相川の町奉行とすと云、

金銀山間歩々々役人を四ッ留番人といふ、（間歩の入口を四ッ留と云し故也）御切米貳拾俵三人扶持づゝを被下し也、是を四ッ留扶持と云、持高多きものも時代移り替り、幼若等のものは高を減じて四ッ留扶持となせし、又以前は四ッ留扶持之もの追々加增せし事もあり、　但四ッ留番人を、今は番所役と云、

今年同心九拾五人御抱入となる、是を島同心といふ也、此もの共住し所を、山崎町と言し故、後には山崎同心といひし由聞ゆ、

長遣テバ糧ナント云、守何物カ可入ト問ヘバ、長人ヲバ給ハリ候ハジ、唯小船一ツ糧少トヲ給ハリテ罷渡テ、若ヤト試候ハント云ヘバ、只彼ガ云ニ隨テ、人ニモ不知セシテ、船一ト可食物少シトヲ取セツ、長其ヲ得テ佐渡ノ國ニ渡ニケリ、其後二十日餘リ一月許リ有テ、守打忘レタル程ニ、彼長急ト出來タ、守ノ見ハニ居タル所ニ見エタリケレバ、守心得テ人傳ニハ不聞シテ、離タル所ニ自ラ出會タリケレバ、長黑バミタル□ニ裹タル物ヲ守ノ袖ノ上ニ打置タレバ、守重氣ニ提テ入ニケリ、其後此長何チトモ无テ失ニケリ、守人ヲ分テ東西ニ尋ネセケレドモ、遂ニ行方ヲ不知テ止ニケリ、何カニ思テ失タリト云事ヲ不知、彼金ノ有所尋ネ問ヤ爲ルト思ケルニヤトゾ疑ヒケル、其金千兩有ケリトゾ語リ傳ヘタル、然レバ佐渡ノ國ニ金ハ掘ベシト、能登國ノ人云ケル也、其長ノ後ニモ必ズ掘ケンカシ、遂ニ不聞エダ止ニケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔佐渡事略 五物産〕金

昔能登ノ國司、此國ヘ人ヲ遣シテ砂金ヲ採リシトイフコト、宇治大納言物語ニ出タレバ、年久シキコトニアルベケレドモ、年暦記サヾレバ何時ノ頃トイフコト知ルベカラズ、越後ノ記傳、佐渡ノ金ヲ採テ軍國ノ用ヲ辨ゼシトイフモ、多クハ西三川村ノ砂金ナリ、慶長六年ヨリ後、相川ノ中山立合トイフ山ヨリ穿リ得ル處ノ金、都レク上納セシト見ヘタリ、是熟金ニシテ上品ナリ、中ニモ最上ノ物ヲ紫金ト名付ク、其厚薄ヲ分ツニ、紀州奈智ノ黑石ニスリ附テ試ル秘事、

〔佐渡年代記拔書 三〕慶長九甲辰年、大久保石見守、此石見守、元猿樂ニ而、中略〇或時駿府岩淵にて、神君於御前御夜噺之節、天下をも被知召候へども、御心儘に不成は金銀之事之由、御物語を被遊候を承り、御夜噺引後、御年寄土井大炊頭江大倉大夫申けるハ、先刻金銀の事御心ニ不被任旨上意ニ候處、其儀ニ付、聊存寄有之旨申之ニ付、則大炊頭言上ニ被及候處、存寄之趣相尋候樣上意ニ付、被尋候處、土中ニ有之金銀可取出工夫有之ニ付、其奉行被仰付候ハヾ、才覺を以諸國より金銀を

出羽國阿仁金山

(梅津主馬政景日記)元和三年三月廿八日、阿仁金山兩替の儀に付而、山仕山先去月より罷有、御佗申に付て、一割御なをし被仰付候樣にと、右近殿御同心申、夕部御しん之時分申上候得ば、御合點被成候間、今朝森田次右衛門に申渡し候同前に、天秤屋我等所へよび申候て申付候、　四年二月十五日、阿仁金山より山先太兵衛・備前總右衛門、爲佗言參候、樣子は、只今之けと場、間歩へ遠御座候而、荷歩申候駄賃過分にかゝり候て、迷惑に候間、本三枚三兩之山之方に、廣き地所御座候間、けと移度由、佗言致候、又金兩替之事、高く御めし候樣にと申候、又御米之ねやすく被仰付被下候樣にと申候、其書物今日禮日にて、右近殿へ我等も參候間、山織部に持被參候へと申理、右近殿へ罷出、右三ヶ條之御挨拶御談合申候、けと場之儀は御檢使被遣、地形御覽候而可被仰付由、兩替之事は相場次第之儀に候間、江戸之兩替直候はゞ直し可被遣由、御米之事、只今迄は四十五石之ねに御座候を、五十石に直し可被下由、則御廣衆へ右近殿御狀被遣候、

杉澤金山

(梅津主馬政景日記)元和四年二月十三日、杉澤金山ゟ平澤伊右衛門、堀尾加右衛門書、中山先二郎兵衛持參候、樣子ハ、御米之ね、院内並ニ被仰付候樣ニと、山師共佗言申候由、其段右近殿へ申上候へバ、御心得之由ニ候て、院内なみに六十石ニ拂候樣ニと、右兩人衆へ右近殿御狀有、我等も其段書中指越候、

佐渡國金山

(今昔物語二十六)能登國堀鐵者行佐渡國堀金語第十五

今昔、能登ノ國ニハ鐵ノ礦ト云ナル物ヲ取テ、國ノ司ニ弁ズル事ヲナンスナル、其□ト云ケル守ノ任ニ、其鐵取ル者六人有ケルガ、長也ケル者ノ己等ガドチ物語シケル次ニ、佐渡ノ國ニコソ金ノ花榮タル所ハ有シカト云ケルヲ、守自ラ傳ヘ聞テ彼長ヲ呼寄テ、物ナド取セテ問ケレバ、長ノ云ク、佐渡ノ國ニハ金ノ候フニヤ、金ノ候ナメリト見テ給ヘシ所ノ候シヲ、事ノ次デニ己ガドチ申シ候シヲ、聞食タルニコソ候ナレト、守然ラバ其然見エケム可行ニ取テ來ナンヤト云ヘバ、

應出來、四月、右之趣達上聞、且運上金差上候之處、信濃守利直領内仕置宜候之段被聞召、神妙之旨依上意、運上金被遊下、候旨有之、

但白根金山奉行北重左衞門別記に有之と古書見得申候、定而慶長元和年中之内たるべし、國元より出候金山金被獻候處、又拜領被仰付候御儀は、御證跡相見得申候御事は、松平安藝守様御先祖淺野彈正少弼長吉君之〈後長政君之御事也〉御嫡子、淺野紀伊守幸長君より之御返翰之御書事、見得候之通、〈○下略〉

(南部家記錄六)一御國本にて出候御金山之金御上ゲ候處、其内當年始候而出候金山之金百三十枚餘御拜領之由、無難様なる御仕合無比類候、併先年御手柄御奉公故に候、此方にて拙者家來之者共迄目出度と悦申候、〈○中略〉

十一月〈○慶長十四年〉廿七日　幸長〈○淺野〉

南部信濃守様　〈御報〉

(遠野古事記三)往昔遠野小友村に小松と云者有、天性金掘候儀を好み、家業の作働をせず、毎日しやくしを持て村中を廻り、目利之場所を掘候へ共、一向不當候處に、極月晦日不圖夥敷掘出し、〈○中略〉予、小友村之里人に、小松者何十年程以前之人にて、金を掘候場所は何方と聞傳候哉と尋候へば、金掘候場所は惜ケ澤と申所之由、今猶小松子孫之家、小友村には無之候故、何程早き時代之人に候哉不相知と語候、本朝寶貨通用事略と云書に、慶長十三年之比、奥州の南部より黄金多く出候處に、間もなく不出と書て、金の出たる場所は何方と云事なし、若し惜ケ澤繁昌之時之事を書出し候歟、遠野十二郷、南部様御領に成候は、慶長六七年之比、利直様御代と云古說有、右兩說を以て考候得ば、小松は慶長年中之人にて、於高野山南部御領、諸人之石塔場を調置候而〈○中略〉も此時代ならん歟と致察候、

遊びければ、無程上方より小謡、三味線、今様之上手共が歌舞妓女を伴て、數十人下りしかば、當山日を追ふて繁昌し、晝夜亂舞遊曲しけり、斯しかば不來方之仰を以、組之同心二拾人召れ、警固のために來りけり、斯て利直公より兼而金山出來之事、井伊兵部殿迄內々に被訴置けれども、頃日以之外美々敷成、伏見大坂之者迄下りければ、言上せねば不可然とて、慶長九年の秋の頃にや、駿河へ參勤せられし折節、此事を言上せられ、當山之爲運上黃金千枚、砂金五十斤被獻けり、江戶へも獻上可有所に、井伊兵部殿御異見有て被停ける、駿府之御所大に御感ありて、此度於領內金山出來候由、早速之注進神妙候、殊に運上金指上候得共、此度之爲褒美被下候、彌々遲滯無之候樣、下知可申付よし被仰下ければ、利直公尊命の趣奉謝、無言只項を垂れ平伏して罷立、其後北十左衞門は彼上方者と內談し、大津、堺、伏見、大坂、所々に問屋を定め、鹿角郡米代川より川舟に而、秋田領能代之湊へ下げ、爰にも問屋を定めて、或は北國廻し、東國廻し迄、上方へ爲登、金銀を引替ける、末世に至りて目出たかりし事共なり、

〔南部家紀錄 五〕慶長九年甲辰、鹿角郡白根金山は、慶長初年より始也、(慶長九年より始候由覺ニ有)古書に見得申事に候、其節の金山奉行相勤候は、北重左衞門なるべし、

但尾去澤銅山も白根金出來候以來成べし、慶長初年より金山は出來申事、可成は公義江被獻候儀見得候々、(○下略)

〔鹿角古實集 北鹿角古所載〕慶長九年、白根金山初而黃金堀、慶長拾七年十二月二十日、將軍秀忠公江戶櫻田之屋敷御入之節、領內白根吹金五拾枚、御馬貳疋獻上、(○中略)寬文九年より銅山と成る、

同十年、西道金山堀始、寬文六年より銅山に成、(○下略)

〔南部盛岡家譜 一〕利直　慶長十三年二月、始テ黃金ヲ鹿角郡ニ得タリ、

〔南部家記錄 六〕是年(○慶長十四年)御領內於鹿角郡金山出來、從先年連々掘來候之處ニ、一兩年以來者相

にするとて、此邊之土を取行けると世上申候、是より外何之覺も無之候與語りければ、十左衛門さてこそと思ひ、日を過てせんなしとて、彼老婦が宅へ行、浮世之物語して、夫より姥先達て、いも掘處を見んとて、後ろの山へ參被見ければ、皆砂金にて候得ば、十左衛門大喜、老婦に向被申候は、其方か手山のいも、其味尋常ならす思ふなり、土地之模樣格別なり、從今後は此山をば某に與候へ、代をば望次第遣可申と、數拾貫の代物をあたへければ、老婦大に喜、從是彼山を姥がふところと名付、日々夜々に芋を堀、其土を俵にして奉行所へ納置、仍土民共は何之辨へもなく、扨も芋數寄な殿にこそ達、從是後は我も芋を奉らん、實き音物とて、日々夜々に持來りぬれば、芋の山を積置たり、其事數日之間に隱知ともなく、世上沙汰しければ、隱密難叶迚、屋形へ被露しければ、屋形大に喜、堀目見分事終て、各は早速立歸り、其旨可申上、十左衛門は殘居て其地の事を存分にまかせ、知行可致由被申候、其違所永々の勤不便とて、子息十歲計り、流水屋敷に（今の御新丸御田屋清水の上にあり、十左衛門が屋宅也、）殘し置れ、妻を始、鹿角へ引越、居ながら金山奉行せられけり、

鹿角金山繁昌附駿河へ言上之事

奥州鹿角白根西道等之金山をば、北十左衛門不思議の緣に而被見立、慶長七年之春之頃より被堀ければ、七百目に金四五拾目より、七八拾目を限り出る、其金色厚く清し、仍而不來方の下知を以、領内之山子共を集、日々夜々に堀ければ、此事諸國へ風聞し、近國は不申及、上は京、大坂、堺を始、商買しければ、行衛も知れぬ流浪者、或は濟々の船頭共、當座の渡世有ざれば、彼金山へ來り、山子と成堀程に、慶長九年之夏之頃には、みよしと云、小麥或は火石大豆程の金入交り、秤へもかけず直に俵へ入ける、如斯之繁昌開闢以來日本無雙にて有べしと、諸人申合り、依而伏見、大坂、大津、堺、其外所々より商人も馳下り、金銀、絹布、或錢杯酒樽し、近邊に家を建、色々之賣物、誠に美々敷見得にける、町中に、風呂湯屋迄貳三ヶ所に建並、遊山町とて、諸方之戲氣女を呼集、田舍吟之小謳歌はせ

御座に百姓共に尋られければ、老婦申處に少しも不違ざりければ、今日は諸人の見廻にて、取込ぬれば、追て裁許し與ん、心底不便に候迚、彼老婦をば被歸けり、其後彼の兄弟が伯父を招、委細糺明せられければ、件の犯人陳ずるに無據、有樣に白狀す、仍て押領の田畑をば、悉く兄弟へ返し、其上科金三兩を出し、如元己が住居に蟄塞せしめける、扨其後十左衛門彼老母が差せける包物不審に思ひ、儀式に被開ければ、斯是こそ迚持來るを見るに、長さ四尺許の薯蕷なり、其美事與の芋にも猶増りて見得ければ、目録の内よりゑり出し、是をば屋形樣江送申さんとて能々見られければ、芋に離たる赤土之内に、鉛の樣成ル光り砂有り、不思議に思ひ鉢に入れてあらわれけるに、鉛かと見得しは皆砂金にて、十左衛門大に心驚き、扨は彼の女めが、訴訟はやく裁許を得んために、某に賂して、芋の土に金を入れしよな、兎角彼を呼て此芋を返んと被思けるが、否々此邊に金有山より掘たる芋か、あれ程の貧女にて、是程の行跡は思ひも不寄、兎角呼んで尋んとて彼招、色色馳走して尋ければ、老婦か曰、昔より此處に砂金と申もの有之由聞傳候得共、可掘すべも存ねば、只音のみにて目には今に見不申候、傳聞上代の事に候はん、此處江都より人來り給ひ、其有山を知て、其時國主と內談し、砂金數千斤を求てけり、其年の國役に、禁裏江上ければ、幸其年奈良大佛造營の比にて、彼金泥を以、大佛を彩色奉り候由、其後段々掘傳候しが、當國の主阿陪殿とやらの亡し時より、一切に盡失けり、絶て久しき事なれば、唯物語のみにて候、又某等が祖父抔の云傳に、あの山の奥にて其邊に童子朝草刈に行たりしが、草の葉一字金色の露上て、其光目を遮り、不覺倒伏しけるが、少時有て息吹出見れば、最早光りものも消失、漸々人心地付て、直に家に歸りけるが、親ども不思議に思ひ、彼上なる物の露をおとせば、皆金色の砂粉あり、是こそ金といふものにて有べく、上方へ遣、數拾貫之代物に替て、多くの田畑を買求、大福人と成、其子孫今にあり、其後彼等を始め、近鄉うらやみて尋見れども、重而左樣の不思議なし、近年迄羽州より折々旅人來、葉

タケナリ、大子村ノ金澤入澤湯坂縄田共ニ、當世黄金ヲ出スコトナシ、今那珂郡玉川ノ水中ヨリ砂金ヲ出ス、然レドモ多カラザレバ國用トナスニタラズ、コレハ水中砂金澤ノ中ヨリ得ルモノニテ、掘テ得ル砂金ノコトニハアラズ、

陸奥國仙臺金山

〔仙臺封内名蹟志一刈田郡〕丹崎金窟址
往昔出金之古窟也、近于湯刈田、其石堅剛如銅如鐵、石色朱紫黑碧青黄相雜、慶長中出黄金、有水脈而不克穿故息、是地乃其時鑿師之所穿、縦横屈曲、上下相貫、左右相通、奇巧妙術、彷彿蜂房相聯、而恰其跡如蝕、

南部金山

〔錦消息記乾〕鹿角金山はじまる事
今度不來方古名○盛岡之仰に依て、秋田境目爲檢分、北十左衞門鹿角郡へ打越、白根邊に旅宿して居たりしが、其邊の百姓共奉行へ目見得せんとて、手々に進物をさゝげ、奉行の宿所へ群をなす、其中に年の頃七十餘りの老婦、幼き男子二人具して、十左衞門が前に來り、涙を流し云けるは、此兄弟は太郎子、二郎子と申て、某が孫にて候、彼等が兩親、數年以前に相果候、孤子となりしを、某が懐にて漸く成長し仕候、先祖相傳の田地は、兄弟の成長の頭迄は、母方の伯父にて候ものゝ身帶仕候、約束の年役をも一毫だに年濟不仕候得ば、老之力を以只今迄漸く彼等を育候、某が命は明日にも知れ申さねば、死て後伯父の心も無覺束、彼等路道に迷ひ申さんも口惜敷候得ば、某の命の内に、何とぞ田地を取かへし、兄弟に分度候、偏に此事奉願候、委敷此人々も知玉べしと、前後に並居たる郷民共に向て云終て、側成棗式を招て、此度見參に何ぞ奉度なれども、貧の某に而候得ば、乍恥敷、是は孫共を供ひ身が心盡して作候とて、いもを獻ず、一包の書物を取出し奉行へ進せけり、十左衞門不審に思ひ、上包をほどき見れば、田地家督の證文なり、此等先祖と見得、將監と云しものゝ時代にや、長久手取合之比高名ありしと見得、國主より感狀之趣に持地何石之内何程、永代無役手作可令よし、永祿年中の證文有、其外色々之書付有之、近郷之長の子孫と憶に相見得候間、

久慈郡金澤山八溝山洞坂ノ〈大子小川兩村間ニアリ〉等古黄金ヲ堀シ所ナリ、各山中ニ金穴アリ、〈八溝洞坂ノ間ニモ金澤ト云村アリ、前ノ金澤山トハ同ジカラズ、共ニ黄金ヲ出セルニヨリタル名ト見エタリ、湯ノ出ル所ヲ湯澤ト云ニ同ジ、〉殊ニ八溝ハ黄金神社ノアル所ニテ、古代ヨリノ金山ナリ、續日本後紀ニ、承和三年正月乙丑、詔奉充陸奧國白河郡從五位下勳十等八溝黄金神封戸二烟、以應國司之請、令採得砂金、其數倍常、能助遣唐之資、トアリ、是山及洞坂ハ、古陸奧白河郡ノ内ニテ依上保ニ屬セリ、故ニ國史ニハ陸奧國八溝ト記セシナリ、〈永正以後本國ニ屬ス〉白河結城文書延元四年狀ニ、依上保ハ吉野殿御領ニテ、貢金ヲ召サレシコト見ユ、此比モ黄金ヲ採タルコト是狀ニテ知ラレタリ、〈吉野殿トハ南朝ヲ云〉父老ノ傳説ニ、洞坂ハ近キ世マデモ金ヲ堀タリトテ、其時ノ役所ノ趾、番所ノ趾ナド今ニ存ス、又金ヲ挽タル石臼ナリトテ、山中所々ニ現存セリ、〈大子村ノ郷士益子氏ハ、當時其事ヲ管セシ者ノ後ト云フ、〉慶長年中、茨城郡上礒田村ノ山ヨリ黄金ヲ出シテ、工商集會セシコトアリ、松平重貞領主ノ時ナリ、笠間城記ニ見ユ、上礒ハ古新治郡ノ内ナリ、蜷川親俊記ニ、天文二十四年、多珂郡龍子山ノ大塚信濃守上洛ノ時、黄金十兩其他帶色々進上セシコトアリ、吉田藥王院文書、永祿三年藥師堂棟上日記に、こがねみつ、みトアリ、又同時ノ別日記ニハ、小金三りやうトアリ、同文書、天正中、青蓮院家人林垣玄通ヨリ藥王院へ贈レル狀ニ、備正口宣之爲御禮禁裏樣へ黄金、〈三兩、金目、〉田御門跡樣同貳分、院家へ同貳分御進上候云々トアリ、〈小金ハ黄金ノ假字ナリ、コナリハ共ニ砂金ナリ、〉古ハスベテ砂金ヲ以テ世用トス、豐臣氏ヨリ以後判金ヲ鑄テ世ニ行フ、愛ニ至テ砂金廢シテ行ハレズ、〈砂金ヲ加禰左古トスルヘ、鹿島ノ風俗踊歌ニ、ヒトヨビハマイリマウシテカ子ノサコテルマカウヨ、カ子サコハオヨビゴザラズ、ヨイ子ノサコテマカウヨ、ナニゴトモカナヘタマヘ、ヒヨテカレマノカミガミト、云ニヨレリ、左古ハ作左古ノ約マレルナリ、或ハ三合ノ義トスルハヨロシカラズ、石川久徴云、サコハ散貝ナリト、亦一說ナリ、〉世ニ土浦小判ト云ヘル判金アリ、本國土浦ニテ鑄タル所ナレド、何レノ世ナルコト詳ナラズ、思フニ慶長年間ノ物ト見エタリ、〈慶長ノ初年、結城秀康、嘗テ土浦ヲ領セラル、恐ラクハ其比ノコトナルベシ、〉洞坂ノ金ハ今ノ水戸侯ノ時ニモ多ク堀ラレタリシガ、正保萬治ノ頃ヨリ出ルコトナクナリシナリ、〈其地ハ今ノ幾津新田ト云テ、〉

(駿府餘錄三編下二)こがねの湯

伊豆國加茂郡西土肥村安樂寺の山にいで湯有、そも〳〵この湯のわきいでしは、慶長十あまり五のとしかのえいぬ、この山にこがねあるべきよしにて、公より御つかひしてほらせられしに、そこより湯わき出て、事なりがたかりければ、こがねほることはとゞめさせ給ひつ、しかありしより、とことはにわき出つゝ、絶ることなければ、田かへし、すなどり、糸ひき、ぬのおるをとこをみな、おのがじゝよるとなく、晝となくゆあみし、はたもろ〳〵の病にしるしあること、これそこのそはたからのために、天地のさきはひたまふなるべし、こがねはほり得ても、つくる時ありなめど、いで湯は、この山のいはついはむらとともに、ときはにかきはにわき出ざらめや、かくしつゝ、千とせの後、この湯のわき初し年の號、そのゆゑよししる人なくなりなんことを思ふからに、をみなわらはべまでも、しりやすからんため、かく石ぶみにしるせるものなり、

(增訂豆州志稿七物產)黃金白銀

天正丁丑年〇五ノ頃ヨリ土肥村ニテ始メテ、金坑ヲ開掘ス、相繼デ湯ケ島、繩地、瓜生野、修善寺等ヨリ出ヅ、(繩地ヨリ出ルモノ最多シ)大抵五十餘年ニシテ止ム、貞享ヨリ寶永ニ至ル間、毛倉野、青野、土肥廿金山等ヨリ出ヅ、寶貨事略ニ云、伊豆國ヨリ黃金白銀ヲ出ス、古ハ此國ヨリ出スコトモ聞エズ、慶長十年ノ頃ヨリ盛ニ出タ、其數大數佐渡ヨリ出ルガ如シ、然ルニ程ナク出ル事多カラズ、采ルコトヲ止メタルト。

(地藏菩薩三國靈驗記十)常州ヨリ北ノ方ニ金山アリ、其山ノ金ヲ掘男アリ、家ハヲノヅカラ豐ニシテ一子モナカリケリ、女房ハ慳貪邪見ニシテ後生ト云コトヲシラズ、夫ハ是ヲスヽメケレバ、腹立シケルホドニハ思ケレドモ、言ニイハザリケレバ、ウトキ人ニ向ニ似タリ、

(新編常陸國誌六十一土產)黃金(砂石附出 和名古加禰)黃金

金山　駿河國金山

金山爲ニ見分、同月〇明和三年五月十四日、松前出立、差添候役人、

御用濟年寄役
鈴木庄兵衛
上下　八人
手代
森佐右衛門〇中略

右之ものども差添罷下り、其日ハ福島村泊、翌十五日シリウチ金山網はい野を見分受掘セ候處、砂。金少々出申候、夫より箱館ニ手段を以廿五六日餘留置、爽地之内小屋掛ケ等手配出來いたし候ニ付、右之衆中を八月十六日ニクンヌイ江同道いたし、所々掘セ爲ニ見、少々砂金を出し相渡シ、松前をれ歸り、金山其外無段申達候得ば、江戸表江被ニ相歸ニ候、〇中略右之通、所々ニ金山等も有之、稼候はゞ、出來方も可ニ有候哉、心掛ケ候ものは承受候得共、一體稼方不ニ存故、其儘ニ成行申候、以上、

五月

〔毛吹草三〕山城　金銀　攝津　銀銅　伊勢　丹生山水銀異國ノ外當所ニ有　飛驒　銀銅　下野　銅　陸奥　沙金　出羽　錫鉛銀　越前　鉛　加賀　白山硫黃　越中　鉛
越後　鉛　佐渡　金銀　松前　沙金　但馬　銀　伯耆　鐵　出雲　鐵
石見　銀　チカサノ錫鉛　播磨　完粟鐵　刃金　長門　銀　銅　舟木石炭千津ニ掘、當所壽灯ニ用之、　豐後　錫鉛

〔駿國雜志六〕金堀場　金堀場は安倍郡猪河村笹金山にあり、慶長年中、神祖御在城の時、此山に於て金を掘て試み給ふ、果して金あり、海野彌兵衛尉信典是を奉行す、

古事類苑

金石部二

鑛山下

〔一話一言三十八〕諸國銀銅山名

一野州足尾銅山　吉川永左衛門

一奥州半田銀山　寺西重次郎

一石州銀山　阿久澤修理

一但州生野銀山　恩田新八郎

一攝州多田銅山　石原庄三郎

一出羽國幸生銅山　池田仙九郎

一備中國吉岡銅山　松平越後守御預所

一陸奥國叶津村出銅　松平肥後守御預所

〔金銀銅山等箇所書〕金銀山之部

一松前之内シリウチと申所ニ金山有之、慶長元和之比ハ専相稼夥數出候ニ付、公儀江運上差出、黄金百枚獻上仕候處、金山運上御免被成下、其以來松前志摩守手前掘リニ申付候處、家中爭論有之相止、當時も掘リ候ハヾ出可申候事、○中略

一東蝦夷地之内ユウラップニ銀山有之、西蝦夷地より掘候得ば近ク御座候由、拾五六年以前、江差湊岸田三右衛門と申町人相願、餘程出候得ども、自分之ためハ少ク、山師共計之雜用ニ相成候ニ付相止候事、○中略

一箱館在上エノ川ニ銅山、

一東西蝦夷地之内、所々ニ鐵砂御座候、○中略

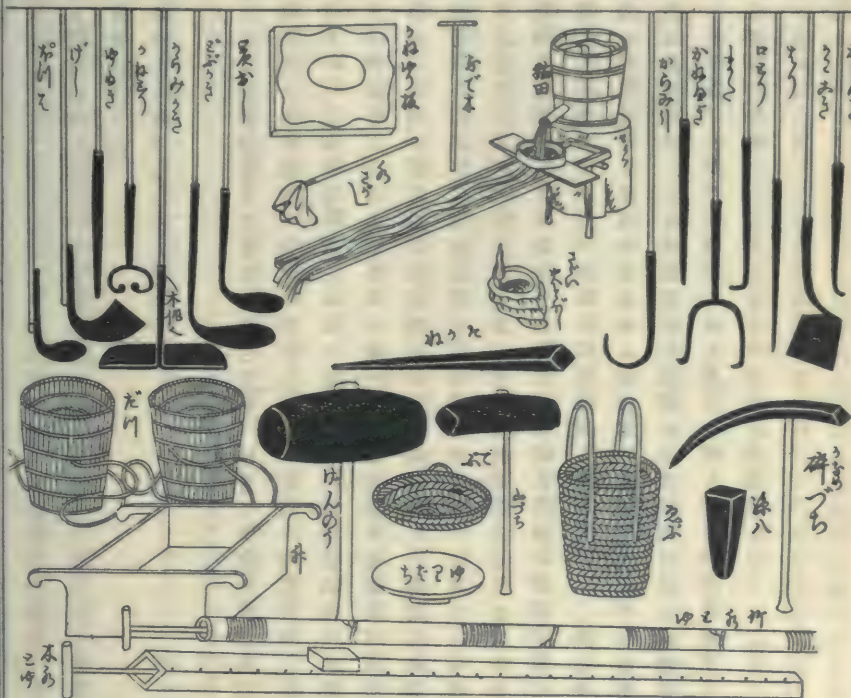
したる鉑をくだきて、焼釜にてやき、湯にわかして丸がねに仕上る也、此所を床家と云、それ〴〵に用ゆる道具は繪圖のごとし、此道具を通じて床屋道具といふ也、上の繪にあらはす銅山鍛冶のきたひこしらゆる所なり、

〔見聞雜記三十四〕一水上輪樋

是は古來敷内の水を引揚候樋にて、數々淺深廣狹により、百本も貳百本も順々に達べ、壹本に人壹人掛にて水引揚ゲ候、是に依て其節迄は、當時の水替樋引と云、其後右の趣にては、入用過分相かゝり候に付、中ごろよりつるべにて汲あげ候事を仕出し、水汲あげの勝手甚益を得たり、

鋪の中にて用ゆる道具あまたあり、皆山にてこしらゆるなり、故に鍛冶屋をたてゝ、その職人をかゝへ、あらたに道具をこしらゆるのみにあらず、そこねやぶれたるをなおしつくらふなり、其道具の品々は、次に繪圖あり、見合すべし、○中略

金山諸道具

金銀銅鐵通してかな山と云、いはゆる金はきがね、銀はしろかね、銅はあかゞね鐵はくろがね、鉛は青がね也、いづれもすこしづゝかわりめあれども、大やうは同じこと也、金をほり入るあなを鋪といひ、鋪よりほり出

鍰當時九拾五文に候へば、百文貳百文又者五拾錢七拾錢取候者も有之候、此壹枚屑多く取らせ候を增疵矣と云、尤敷内ゟ鑛脊の内へ大工の名を記し候木札を、頭大工の者入遣し候、是を以穿石の貫目を札、大工の賃錢相極メ候、

（陸中國鹿角郡尾去澤銅山三澤御敷内働方仕法書上候覺）略○中

一鉑堀所働方取扱之事

田郡金工四拾三軒、元山金工五拾軒、赤澤金工四拾五軒、合百三拾八軒、營は田郡ニ而四拾三軒は、人數壹夜大三格と申て、朝未明ゟ八ッ時迄一格、八ッ時より暮五ッ時迄一格、五ッ時より翌朝迄一格、都合三格、是を小分ケニ仕り、初手方踏方と申て一格を貳分ニ仕、都合六拾ニ相成申候、總人數を六拾二ヶ時代りニ割候へば、七人組、五拾八人組一格、都合六拾ニ而、四拾三人相廻り、右一格之内、鉑堀所之善惡有之候間、ケ所之内宜敷鉑堀所は鬮之順相廻り、五番鬮迄次第有之候得共、三番鬮之外は大抵鉑性左迄之甲乙も無之候、今日朝番之者ハ明日夜番ニ入、今日八ッ番之者は明日八ッ番ニ入之定メニ而、右次第を以追廻し鋪入仕候、朝番之者明日之夜番前打返し、圖法堀と申て、明き切羽之鉑堀處式は手傳堀、又は手替鑄働等仕候事ニ御座候、又は八ッ番之者番前朝之內圖法堀江入候歟、又は夜番江折返し働仕候義も御座候、折返し働と申は、番前働之外再度鋪入仕候義ニ御座候、日々番前の働無剰ニ而無怠候、敷入仕候義、不容易事ニ御座候所、折返し働等日々追立責打候義にては、自然煙毒之疲勞ニ相成候譯は、身ニ冷濕を受、鑿氣石粉竹煙共ニ呼吸ニつれ、肺臓江引候ゆへ痰咳を發し、短命仕候ものニ御座候、前文之堀出し鉑之背數金場役所にて相改メ、番格之出入嚴敷吟味仕候事ニ御座候、

右之通御座候、以上、

（日本山海名物圖繪　一）銅山敍冶

工夫作業時限

仕懸相成候ニ付、掛り山方役定役並役連名手形差出□御藏々ゟ請取上納鏈代之義は、年分御仕掛大工高并ニ銀銅出來高相極候上、御金藏江上納仕候、且前文銅鏈撰分候節、銀鏈有之候得ば、別廉ニいたし、本途山出鏈同樣荷賣之節、御番所江差出、買石共江目利爲致、出來銀積り之上、荷分ニ至り石買目ニ應じ代銀相極、金銀改役江相渡、定御間吹所ニおゐて粉成吹仕、出來銀は銅床屋江受取、年分出來高江組込、粉成吹御入用は定御間所へ相渡候義之處、纔之御銀高ニ而は却而御失墜ニ付、文化十酉年ゟ別段粉成吹之義差止相成申候、

〔見聞雜記 三十四〕一鋪々に而鏈石穿候者を大工と云、右鏈數ゟ負出候者を荷揚穿子(ほりこ)と云、是は鏈石を叺(かます)に入、荷作り負候ゆへ荷揚と云、總じて銀山敷岡にて御稼方、并普請等の節相働候者を穿子と云、是は人數入立方請負人有之、每日入立候者品、猶末に記す、

一鋪々稼方と云は、(晝の稼を晝番、夜の稼を夜番と云、)三ノ日ゟ二ノ日迄を一十日と定め、一ヶ月を三十を日に切、三日ゟ十二日迄を初十日、十三日ゟ廿二日迄を中十日、廿三日ゟ翌月二日迄を末十日と定め相稼候、三の日を入山と云、(八の日左澤、九の日右澤、)荷賣る二の日を荷分日と云、此荷分日は御稼無之に付、正一十日之稼を九日稼と云、小の月ノ末十日は八日稼なり、荷賣并荷分の義末に記す、扨入山三の日明六ッ時に大工敷へ遣候を、朝一番と名附ケ、大工六ッ時ゟ四ッ時迄二時穿、二番の大工入代り、四ッ時ゟ八ッ時迄穿、三番の大工、八ッ時ゟ暮六ッ時迄穿、是を大工三人にて六時穿候故、六ッの稼と云、大工貳人にて朝五ッ時ゟ二時ヅヽにて代り合、七時迄四時穿候を四ッの稼と云、併右之通三時ヅヽにて面代りには成兼候間、三人にて一時代りに致候を六ッの鏈と云也、夜の稼も右に准じ、大工壹人にて穿候數をばすつほうト云、

但大工壹人二時の仕事を一枚肩と云、此穿石貫目大概壹貫五六百目位ゟ三貫目位迄、是は頭大工之者、上中下之大工わけ候て、其程々を計ひ、地山堅さ和さにて貫目極候に付、一枚に付賃

あらじ、けらのらもじは郎字か、助字か、これ又下才なるべし、東海道名所記に、八瀬の人の詞をいふに、我らも出てニャア今から京へ來たらニャアとあり、東牖子に、矢脊大原の土民おのれゲラをと云は下郎なるべしと云り、今もまかいふにこそ、然らざれば鄙才聞え難し、

（銅山稼并鉑成吹取扱一件）一掛役人之義、寛政〔二〕戌年迄は、山方役壹人、定役壹人、御目付役壹人、並役壹人、年々掛り被仰付置、取扱來候處、御伺之上、同年八月より、右掛り相止、主役ニ而銅稼掛り定役壹人、同並役四人、同定助壹人被仰付、其外山方役壹人、御目付役壹人、一ヶ年限り掛リ被仰付、勤方之儀、山方役は日々登山、重ニ敷内稼方掛引吟味仕、山許諸御用向等取扱、御用達之節は銅床屋江も折々出席、鍰銅吹方等承合、出來形ニ寄、主役打合評議之上取計ひ申候、定役は銅床屋江法會鉑成吹方重ニ掛引仕、鋪場床屋之御用向取扱、諸御入用向取扱、諸帳面相改、夫々調印仕、引取之節は御鋪場所江符印附置申候、且床屋之方御用達之節は折々登山、敷下り仕、山方役江評議之上、稼方懸引仕、並役と申合、壹人は帳面方引請、諸御入用物請拂仕、貳人は床屋鋪場江附張鉑成吹方見屆諸向出役等仕、貳人は山許江詰合、時々敷下り仕、御稼方之儀、山役江評議之上取計ひ、都而廉立候御用向は一同江相合候義ニ御座候、且銅鋪撰立方之義、島越間歩御番所御関内江建場補理、日々石撰人足入立前晝夜數内より穿出候鋪、翌日者場穿子負揚候ニ付、上下石並下石花淳より段階を附爲撰分、大工共歩穿之節、鋪所敷庭ニ相成候を臥ニ詰、是又負揚、大豐ニ水ヲ入、笊を以汰通し、庭江居附候分をこまと唱へ、壹者拾貫目入ニ作立、一十日分者數出來揃候上、山方役符印いたし、山下ゲ之上、銅床屋者藏へ（[illegible]之事）入置、御目付役、定役並役立會、者數并貫目等相改候上、追々鉑成吹仕候、且銅鋪之義、鍰鋪と違ひ買石之者共手廻不申候ニ付、鍰銅多少之目利難仕趣ニ付、折々様吹仕、可成丈ケ御損失不相成樣掛引仕候得共、石中之儀、僅變革難計、自然出方と御差引不都合仕候節は、御稼方夫々評議仕、御差圖を受取計申候、御稼御入用之義、元御試一ヶ年大工高三万人之内御

一水替穿子

是は敷内稼所に水有之候へば、切場水替と云て、其所に付居り、稼方に水障らざる樣汲捨候者をいふ、右水替の持候水汲桶を鐵桶と云、鐵に輪掛候桶也、切場の脇に請船とて、四角なる箱を居置、是へ鐵桶にて水汲込候跡は、又外の水替請船より汲揚、外の船へ汲かへ、如此順々に水流し捨候所迄、幾つも請船を居へ置、水汲送り候、是を手繰と云、水流し捨候も滯らず、平地の處を水廊下と云、此水廊下迄汲送り候に手繰に不相成、下ゟ上へ揚ゲ候處は、井車を仕掛、段々と汲上ゲ候、右水廊下迄揚納候所を引捨と云、場所により請船居置難き處は、木を横に渡し、壁の如くねば土にて除ケ、或は板にて張り、水の洩ざる樣に致し、水を汲溜候をにがいと云、請船居置候處を船屋敷と云、水替病氣差合等にて不參の時、急に雇入候代りの人をあんこと云、水替の内に頭を定置、水替の住所等能存居りて、何町誰々と人を差雇入、世話致候者を人さしと云、稼所に有之所六尺穿下り候へば、水替穿子貳人ヅヽ相增候定法にて、是を出人と云、

〔日本山海名物圖繪〕一銅山鍛冶○中略

山の役あまたあり

舖役人　床家　手子　山留役人　燒出　鉑持　鍛冶　釜大工　素吹大工　間吹大工○中略

南蠻絞○中略

金山の下財辛苦して寶をほり出しての世はたり、唯おのれが口を養ふのみ、多分の利は皆金山司の德用となれり、唐の羅隱が詩に、採得百花成蜜後、不知辛苦爲誰甘、といへる蜂の身の上と同じかるべし、

〔嬉遊笑覽十二附錄〕古く金ほるものをゲサイといへり、庭訓に鑿才とかけるは假字なるべし、思ふに埃嚢抄に、螻蛄才といふことを載て、虫の得たるさえの事に注せり、是も假名書にて、虫の事には

一穿子頭。
是は功者成者總穿子の頭に極置、穿子不參等無之樣毎日相働、山元へ召れ罷登り、夫々差組等いたし候者にて、穿子頭の下代なり、

一手傳穿子。
是は山留の手傳いたし相勤候者、普請之樣子見習、功者に成候得者、山留に相成候、並之穿子と違御雇者同前に而、働方も山留に準候也、

一丁場穿子。
是は敷內普請の節、山留手傳に差添罷越、普請場所土石等取除相働候者也、總じて敷內普請有之處を丁場と云、依之右場所へ罷越相働候者故、丁場穿子と云、又敷內の土石を間へ持出させ候處を跡向とは、段々向え穿行候跡を云、

一鑛通穿子。
是は敷內穿場へ鑛持運び候者にて、一晝夜ヅヽに代り合、度々往返致候、尤鑛數多運び候敷所へは貳人三人ヅヽ差組、鑛數少き敷處へは、壹人に而二敷三敷もかけ持相勤候、

一鞴指穿子。
是は鍛冶小屋にて、鑛燒候竈土一ヶに壹人ヅヽ罷在、鞴指候者なり、

一背揚穿子。
是は前段に有之、敷內より穿歩負揚候者也、手傳ゟ此背揚迄の總名代五段穿子と云、以前は此名なく、大穿子小穿子と賃錢をわけ、品々に違ひ候處、近來五段に別れ候、且深敷にて鏈負揚、勝手惡敷所は、場所の上に車を仕掛、鏈を釣あげ候、是を歩つり穿子と云、深敷に限り有之候、當時は右車仕掛の場所無之、

一小遣　壹人　壹ヶ月　御給錢壹貫五百八拾四文

是は御番所詰之者、食事夜具等持運び、其外小用相達候、

一荷之者　壹人　壹ヶ月　御給錢貳百六拾七文

是は巳前は別段に記候通り、上納前の鏈山口丸く候得者、四ノ日迄預り相守候者に候處、近來は御番所の内に鏈差置候に付、御番所へ相詰、是を取扱世話并御番相勤候、

一鍛冶　壹人　一ヶ月　御扶持三斗 御給錢四百四十八文

是は鏞々御稼鏨を燒、并鐵道具等拵候、一晝夜宛入代り相勤候、功者成者壹人頭に定置、鐵炭一體の世話爲致候間、歩々に付居候鍛冶を地鍛冶と云、鍛冶の外不足にて雇入候をば、當分雇と云、是は給米給錢日割にて渡之、

一名主　無給

是は銀山内諸役物取扱ひ致候者にて、御稼方には不拘候、近來相始り候名目なり、

一小屋頭　無給

是は銀山間歩限りに一個分と名付候境有之、其所々に有之候小屋を取扱ひ候、町方の名主同前に觸流し等の儀申斷、總じて小屋中ふしまり等の義心付者にて、御稼方には拘り不申、古來ゟ有之名目也、

一かなこ

是は前段の通り、一間歩の内領地を極め、稼所を持相稼候者にて、山師の手に付、相勤一數の主也、

一穿子請

是は諸穿子人數人立請負罷在、日々御番所へ爲相詰候者なり、

一○帳○付壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給錢五百四拾壹文、

是は帳番所へ相詰罷在、諸御用書物いたし、荷賣荷分ヶ之節、尤其場所江罷出、勘定書付等致し候、

一○油○番壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給錢百三拾六文、

是は御入用油蠟燈心等預り、敷々かなこ共へ、右入用品、御番所役帳面に記し相渡申候、度々差圖の通り油計り渡し候、尤荷賣の本封鍵も、油番銘ヶ改、箱立へ入、買石共へ封印為致、預り荷分ヶ之節封切、かなこ共へ相渡候、以前之御番所内入口に詰罷在、出入の者改候古法に候、

一○鋪○役○人○頭○　穿子遣頭壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給錢五百四拾壹文

　山留頭壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給錢七百三十八文

是は穿子遣山留之内功者成者を撰み、頭に致置候、御稼方其外諸事數間を語いたし、穿子遣山留の働方、并穿子之遣方等差圖致し候、

一○穿○子○遣○壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給錢百三拾六文

是は敷内へ罷越、穿子の働方差圖致候者也、且敷廻りとて此穿子遣、并山留之内貳三人ヅヽ、壹夜敷々相廻り、大工穿子の働方相改、并敷々の容子御番所へ相斷候、荷分之節も、右之者共の内鍵作り候場所へ出世話致し候、是を鍵番と云、壹人宛當番を極相勤候、

一○山○留○壹人一ヶ月 御扶持方三斗、御給錢五百四拾八文

是は敷々御普請、其外鬪山、或は川通り御普請に罷越手傳、穿子の者差圖致し相勤候者也、

一○樋○番○匠○壹人壹ヶ月 御扶持方貳斗、御給錢五百文

是は御入用の樋を拵、敷内にて樋痛申候時は、晝夜に限らず敷内へ罷越繕立候、當時は樋是なく候得共、右鐇川通り其外諸破損物繕ひ等致し候、

一三人扶持　和田十郎右衛門　　一四人扶持　下田清次郎　大坂仁市郎　島川

惣兵衛　　一三人扶持　喜多政四郎

一三人扶持　寺崎太郎右衛門

右山師之儀、古來他國ゟ銀山功者成者罷越、山所を見立、自分入用を以て間切をきり、間歩口を開、數ヶ所大盛を得、銀山長久致し候、尤困窮致し候者へは、御公儀ゟ御手當も有之候へ共、全體自分にて切出候山の義故、其節は山主と唱へ、當時敷岡御雇の者等も手前にて抱へ、かなこと云も下代同前に抱置、敷所稼を預ヶ世話爲致候事にて、御公儀へは山所により鏈代御分ヶの譯有之、上納鏈代差上相稼申候處、後に山主自分に而者、稼方相續がたき趣に而、山所不殘御公儀へ差上、是ゟ御直山に相成、山師の義者、由緒ある者共も有之、其上先祖の者ゟ大功有之義を以て、銀山一體御預ヶ敷岡の差配いたし候樣被仰付、數代相續いたし相勤申候、席順之儀等、山師仲ヶ間家柄に而年功の差別なく、右之通、定席に相成居り申候間、歩々へ分ヶ候ては、又其間分にて勤功に寄り、古來ゟ山師へは、領前とて出鏈の內十分一被下置候處、銀山不盛打續、被下候領前も少分に相成、困窮いたし、勤續がたき體に付、十三年以前、寶暦元未年御手當として、右銘々御扶持方被下候中に、御手當無之山師之義は、當時も領前鏈代宜申請候との事にて不被下候、

一繪圖師壹人　壹ヶ月貳人扶持、御給錢壹貫三百七拾貳文、　山尾御守

是は銀山一體繪圖御用相勤候者に而、見分等有之節者、山方役差圖を以、敷岡共其場所へ罷越相勤申候、

一振矩師壹人　壹ヶ月貳人扶持、御給錢壹貫三百四拾貳文、　山下數右衛門

是は銀山間切切山煙貫等、總じて振矩下ゲ墨にて、中石高下等之丈尺相極候勤方に而、依之敷內領分等引分ケ、御間切延改等之節、山方役差圖を請、場所へ罷越、御用相勤申候、

〔鑛山聞書〕一山先と云は、其山初て見立て注進致たる者、貴賤を不撰被仰付、其山盛に及ぶ時、御扶持被下、右山御見分御用公儀御役人御出之節、山先案内申也、是を金山古人と云、諸方宜敷時ハ、山かたな迚、帶刀御免被下置候、然共御祝儀被下候節、御代嶺ヱ相詰候にも、山師山方より下座之役なり、

一御下代當番役、横目山師より上座なり、

一鑛山三役と申は、山方、鉑方、床屋、是を云、山内之重役也、本番役と申は諸御用一切御山内中取次吟味致也、御大切之御用、此役筋之者不立寄、内は萬事不片付、三役、本番役取扱内事に相濟候上は、他筋より批判不相成候、總而内役者皆三役より下座なり、

一慶長年中、東照宮、日本國中下財(山師ヲ云金掘)御免之御燒印六拾四枚被下候内、奥羽兩國ニ貳拾四枚被下、仙臺外記と申者、其頭定番頭被仰付、此時山法大略定る、

但、磐州日影澤、山師六拾四人に被下候也、

一下財、諸國往來關所番所は、手山色を以通行可致御免許也、

一諸國神社佛閣、堂舍、居下并留山、田畑たりとも、金之敷筋於有之者、鋪口候義、御料私領共ニ異儀不可有之御免許也、

一鋪内斧之外、刃物無用制之事、

〔見聞集記三十四〕山師、繪圖師、振矩師、數岡御雇之者、其外銀山一體に拘り候者銘目、并御宛行之譯、

一山師拾貳人

一五人扶持	味方孫大夫	一三人扶持	味方與次右衞門
一三人扶持	松木久右衞門	一三人扶持	秋田權右衞門
一三人扶持	小川吉郎右衞門	一三人扶持	村上善十郎

リ御屋鋪被下置候事、

定法吹方

一山色前　（山師宮本納　鐵納御造酒料）

一掛砂先　鍛冶注文

一送荷　飯焚注文

留大工給金格合

一留大工一ヶ月壹人前、給金壹兩貳歩、

一一日ニ壹貫文之處、賣商仕候得者、御領主者、格別、

御國主ヨリ金山之場所、御替地被下置候事、

一御國主ヨリ金銀山御取立有之候得者、山中働之者共江為御褒美、御草判紙并御判物被下置候事、

座席之次第

一御掛改御役人

疊一重下り

左座

山先　山師　買石撿斷　撿斷　床屋頭　買石師

右座

當番頭　當番　鍛頭　留大工　次ノ間　大工　足輕　堀師頭

役堀子　并堀子　四ツ番目附　小使之者　風呂番　飯焚

一鉛鐵山者、不有格合、

一拝にあまるこがねのおもはかり數目ともなく人ぞみらる、

あおきなやにふのみ山にはるかねのみづから人に思ひいりぬる

左歌、たくみ長右、水とかねとを二にいひきりて、思のこゝろおもひ入たるににたり、仍書詩、

(上杉編年文書三十二)從○中略

一他國へ金堀ニ出候者、毎年譲御法度ニ候、猶以其村中にて可致改遣候、若壹人成共他國へ相越においては其一在所悉可被仰付事、○中略

以上

右條々觸下肝煎百姓等に堅爲申聞、一在所へ一ッ宛書寫シ可相渡者也、

慶長九年閏八月二日　山城守直江 兼續

(銅山請負書記)藤方彦一郎殿御代官所備中川上郡小泉銅山受負中之書記

山法書

諸國金銀山定法山例ケ條之事

定

一山例五十三ケ條之儀者、駿州日臨澤ニ而、從東照宮家康公被仰出候、御法之儀者、小野金堀師之儀者、野武士ト被仰出候、諸國御關所ニ而も見石許御改無通被成候事、

一山師、金堀師之儀者何國ニ而見立山仕候共、領主者不及申、村役人、山先相添、不限晝夜可致注進事、

山例金銀賣高格合

一一日ニ壹貫文ヨリ拾貫文迄者運上差上不申事、

拾貫文ヨリ百貫文以上迄、賣高之錢十歩一差上、百貫文ヨリ千貫文賣上仕候得者、御公儀様ニ

鑛山職員工夫

貳軒　運上役貳人〇中略　一三軒　勘定役三人　一三軒　山使役三人　一壹軒　鉛藏役壹人　一壹軒　雜藏役壹人　一貳軒　間吹屋役貳人　一壹軒　口藏役壹人〇中略　一三軒　奥藏役三人　一三軒　敷廻役三人　一三軒　播磨口役三人　一三軒　但馬口役三人　一貳軒　口白口役貳人　一壹軒　小野口番所　一貳軒　同所役貳人

右預家普請之儀、人足町日役を遣、萱万材木は竹縄等雜藏ゟ出し遣、其外作料板釘等御入用、但臨時は銀を以拂來ル、新規建出候時も同斷、〇下略

〔傳宣草〕下一下、辨官宣旨（常事左辨官宣、凶事右辨官宣）

年中事〇中略

採銅使事

〔三代實錄〕二清和貞觀元年二月廿五日辛亥、以長門國醫師從八位下海部男種麻呂爲採銅使、詔三箇年內所進銅鉛、年別各足三千斤者、須借授五位、其後三年內不減此數者、隨爲眞、

〔三代實錄〕十六清和貞觀十一年二月、太政官處分、停遣採長門國銅使、付國宰採進焉、

〔三代實錄〕七清和貞觀五年十月二日辛酉、制長門國採銅所雜色四人預勘籍、

〔三代實錄〕四十七光孝仁和元年三月十日乙丑、太政官處分、下知長門國、送銅手一人、堀穴手一人、於豐前國採銅使許、以豐前國民未習其術也、

〔七十一番歌合〕下五十六番　左　金ほり

ながむとて金もほらぬつんさひのさびてぞみゆる秋夜の月

みつかねの草に僅かとみゆる哉露にやどれる月の光を

左歌月みるとて金ほらねば、つんさひのさびたるらんことはり叶て聞ゆ、つんさひとは、金ほる具足にや、右もにせ物によみかなへたれど、强て申さば左可勝也、

庇様　壹尺五六寸位〈略〇中〉

南蠻屋灰吹屋

一立家　〈間口貳間 奥行貳間〉〈中〉

内

壹間半梁壹軒之内　〈南蠻屋 灰吹屋〉

〔見聞雜記 三十四〕銀山内に有之候家居をば總じて小屋と云、此小屋に住居致候者共、切支丹宗之儀は言說に有之候小屋頭之者人別相改書出候へば、青盤頭分は青盤間歩山師、甚五頭分は甚五間歩山師と、此外も準之、頭分限り山師之者吟味いたし、相違無之旨名前銘面に奥印いたし、山方役所へ差出候を、猶又山方役相糺候上、小屋數〈并〉男女人數書付、御役所〈江〉差上候、

一銀山内に有之候諸商物御役銀は、名主の者是を取立、毎月地方役所へ相納候、當時山内に有之候商人、左之通、

一請酒商人三人　一餅商人壹人

一相川町ゟ銀山内へ入候諸商人、賣藥を初、魚類、八百屋、豆腐、地製菓餅、團子、酒、其外諸品小間物類は、何商人何町誰と記し、御役所之燒印有之鑑札ヲ山方役所ゟ相渡置、南口留御番所に而改通行致させ候、此御役銀は相川町小役銀之内に而、銀山へは不拘候、

〔但播州金銀銅山并寺社舊記〕役屋舗并所々役人預家普請之事

一役屋敷并手代長屋共

是ハ小破時ハ人足町日役貸遣、壹万村木竹繩等、雜藏ゟ出シ遣候、〈略〇中〉其外作料板代等御入用ニ立、但臨時銀を以拂來ル、大破之時は修復料之儀、御勘定所へ申上、人足も御入用ニ立、

一口御米藏　三ケ所〈略〇中〉　一奥御米藏　壹ケ所〈略〇中〉　一播磨口但馬口番所〈略〇中〉　一

鑛山家屋

美作國英多郡郡内有官取鐵之山、帝姬阿陪天皇御代、其國司召發役夫十人、令人鐵山入穴掘取鐵、時山穴口忽然崩塞、驚役夫驚恐、從穴競出、九人僅出、一人有後出、彼穴口塞合留、國司上下思之所壓而死、故偶慢之、妻子哭愁、圖繪觀音像寫經、追贈福力而逕七日已訖、于時獨居穴裏念、吾先日願奉寫法花大乘、而未寫斷、我命全給我必奉、果居于關穴、而偶慢之自生長時、至于今日無過此哀、彼穴戶隙指刺許開、日光被至、故有一沙彌、自隙入來、鉢飯饌食以與之語、汝之妻子供我飲食、展吾勸救、汝復哭愁、故我來之、自隙出去、去後不久、當于居頂而穴開通日光照被及也、穴開通廣方二尺餘、高五丈許、于時卅餘人、取葛入山、自穴邊往、穴底人見人影、叫言、取我手、云、山人側聞如蚊音、即聞佐之、取葛繫石下底而試、底人取引明知人也、結葛爲繩、編葛爲籠、以四葛繩繫籠四角、據立穴門、漸下穴底、底人乘籠、以擧牽上、持送親家、親屬見之哀喜無比、○下略

〔日本山海名物圖繪 一〕銅山床家(とこや)

釜屋にて燒たるあらがねを湯にわかして、丸銅に仕あぐる所を床家といふ也、

〔銀山方覺書〕吹床壹挺分

一立家　奥口三間　横間貳間半

此譯

梁間貳間半

內

吹子座五尺

煙卷四尺　烏内かふ也　但風道之事

吹床　但湯溜り

口廣　横壹尺四五寸位　竪同斷

りに致し、往還いたし候岩石を右之通穿通りたるは、其儘地山に打がいに張候へ共、土山の中を右の通り穿下り候へば、四方ゟ土石押出候に寄り、四方に股木を立、須かせを引、矢木を差、留山に致シ、段々下り候、是を四ッ枠と云、平地を右の通り留山にて間切の如く延候をば四ッ留と云、此普請致候事を棚を継と云、棚一枚と云は向へ四人継出し候事を云、三尺棚、貳尺棚と云も、場所によりて有之、

棚　是は前段地山弱く落石抔有之處を、留木を以て下ゟ丈夫に留候を留棚と云、敷内土留山落込候處有之、段々向へ留にて、取明或は繕候を継棚共、継返し共云、土石落かゝり候處前に留木を立、矢木を渡し、落込ざる様圍ひ候事を後棚と云、敷内往還の階子段々下へ掛継候處には、階子の掛り無之に付、階子一連に棚壹ケ所ヅヽ附候て、棚ゟ棚へ階子を掛継候、是を歩行棚と云、又鋪内往還の内、古来穿捨候て、深穴の様成、通り難き所は、橋の如く棚を付候、是をも歩行棚と云、右鋪打がいにて通路致し候處は、通り打がいと云、

土佐木　是は何れの間歩にても段々穿候て、他山へぬけ合候節は、其境目又は一間歩の内にても、境目異論有之場所には、木戸を結候て、双方御番所役山師立會封印付候を土佐木と云、何と申儀か如斯申來候、

龍頭　是は敷内にて双方の境、又は地山弱く穿取候へ者崩れ落、大痛に成候ゆへ、鏈有之所も地山の凝みに穿り殘し置候をいふ、依之留龍頭と名付、手を付不申候、敷内廣き所は數年相立候、内には、自然と地山に割目出來、水通り候へば落込候物ゆへ、ケ様の所へは留木にて圍ひを付、わざと穿捨候石を詰置候、是を柄山龍頭と云、地山弱きと云は一片ヅヽの石間有之、水通り候得者、自然とへげ落候、是をへだ落と云、土山の事をも弱き山所といふ、

〔日本靈異記〕下 寫法花經建願人斷内暗穴憑願力得全命緣第十三

日本山海名物圖繪二

金山鋪中圖

〔日本山海名物圖繪〕〔一〕金山鋪の中の繪
鋪口より段々ほり入、上と兩方とには皆鋪口の繪のごとく矢をいれて、土石のくづれぬやうにする也、下跗は皆あたまをつゝみ腰に圓座をつけさゞいがらに油を入、ひやうそくに火をともして持行也、此火にてあかりを取てはたらく也、風通し口なければ、此火ともりがたし、又水わく時は戸樋にて水を引上ゲ、大切口へおとす也、金はり鉑石を取ば、ゑよ引はこび出す也、石目とて大金有所はげんのうにて打はづすなり、

〔見聞集記〕〔三十四〕一留木段々の名〔○佐渡相川銀山〕
壹丈五尺〔長壹丈五尺、廻り壹丈七寸、〕　大壹丈〔長壹丈、廻り一尺七寸、〕　九尺〔長九尺、廻り一尺、〕　大貳間〔長貳間、廻り一尺六寸、〕
矢木〔長六尺、廻壹尺四寸、〕
是は數間共普請に相用候材木に而、多く栗檜の木を用ひ、留山場所により柱を立候を殿木と云、桁を渡候を押へ木と云、貫の如く横に渡候を須かせと云、柱との間不動樣に入候を間切張と云、土砂おさへの爲矢來を細く割、須かせの外へ差並べ候をさし矢と云、天井をさしふさぎ候を鎧日矢と云、

一鋪内普請場の名
打かへ　是は數々へ登候通路の內、井の如く立穴にて、階子も及びかね候所は、穴の口差渡程に留木を横に打込、段々下り安き樣に足がゝりに打候事を打込を張と云、穴の廣狹に寄り、留木の大小ヲ相用ひ候、
栖樓　落穴　立穴
栖樓〔ニウ〕は天井へ眞直に繰上ゲ、登り候處を云、落穴は敷通へ深く下り候を云、立穴は眞直に井の如く穿り下り候處を云、ケ樣の處は階子を筋違に張り、或打かへ、又者留木を四方に張り、足掛

（日本山海名物圖繪二）

金山鋪口圖

鶴子地所之義深根村之内に而御代官支配に付、去ル寅年、石谷備後守殿當國御支配之節、御代官所ゟ銀山一體引渡之節、鶴子銀山向後取扱之儀御掛合有之、池田喜八郎殿ゟ御勘所所江同之上申來候由に而、翌卯年、喜八郎殿ゟ申來候趣に付、備後守殿ゟ返翰被遣掛合濟、

鶴子銀山向後取扱之義ニ付、先達而御對談に及候趣、御勘定所江御申達之處、地所家數人別者、彌御代官所深根村へ附候筈に申來候由、依之以來鋪者共支配町人百姓に而も、右鶴子之内、新切山井右間歩稼場柄山出柄山等之類人有之節者、地所吟味之義者其許江申達、村方障有無之儀、御礼御申越可被成由、右地處ゟ取揚候金銀稼方鉑舟吹立等之儀者、鋪者共支配町人百姓者不申及、其支配所之者に而も、都而金銀稼に付職分一體之吟味者此方支配に而取扱、尤其支配之者に而も右職に付ての咎メ御仕置等者、鋪者共方にて可申付儀と御心得被成由致承知候、

〔日本山海名物圖繪　一〕金山鋪口の圖

金山の鋪口を鋪口とも又間府ともいふ、吉日をえらび、神まつりをして普請にとりかゝる也、かな山のはたらき人を下財といふ、凡金銀銅鐵通じて金山といふ、我朝に金の出ることは、人王四十六代孝謙天皇天平勝寶年中にはじめて陸奥の國よりほり出す、白銀は人皇四十代天武天皇の御時はじめて對馬の國よりほり出す、銅鐵は神代より有と云傳へたり、

〔日本山海名物圖繪　一〕金山鋪口

金銀銅鐵皆ほりかたは同じ、仕上はすこしづゝのちがひあり、金山ほり入ル口を鋪口といふ、四本柱をたてゝ、上と右左の三方に鼠株を入るゝ也、此鼠株を矢といふ、三方ともに矢の數は十六本づゝなり、上の矢の上にわたす木をけしやう木といふ、此鋪口を四つどめといふ、此わきの方に風廻し口をあくるなり、これはいき出しなり、是にて鋪の中のあかりを取ル也、大切口は水ぬき也、役所小家場子の小屋は鋪の外にあり、

味方孫大夫　和田十郎左衛門　味方與次右衛門　山留頭壹人　山留貳人

當山之儀者、一體地低成處ゆへ、古來より諸間歩水吐の爲メ、上水廊下、中水廊下、下水廊下と三段に諸山の水請宜鋪樣水道を切置、諸間歩の水を請、當山にて水上輪樋を以て引捨候、然れば諸間歩共段々敷通りへ稼下り候に付、是迄の水道勾配、却て地高に成り吐方無之、諸間歩共敷內に水湛し、此分に而者、後世諸間歩之稼相止み可申義歷然に付、元祿四未年、荻原近江守殿當國御支配の內、諸間歩之總水貫として、右割間歩下水廊下ゟ南澤瀧の下と云處迄、間數四百九拾七間餘間切御切被下候、是にても未水吐方不宜候に付、猶又右瀧の下ゟ門前町と云處へ、間數百九間餘御切被下候、此地形海面ニ押並び候故、切貫相濟候へば、諸山に湛候水一同に割間歩へ落合ひ、此水貫へ出申候、尤割間歩に有之候水上輪樋も、此節三拾餘艘不用ニ相成候由申傳候、誠に以此水貫御切貫被下候に付、諸間歩共水の障無之、御稼長久致候、萬一此水貫痛處等有之水差滯候へば、諸間歩の咽喉を留候同意にて、御稼一時に退轉致候、大事の大水貫なり、門前町へ水出候口を水戸口と云、此水戸口より水道甚五境と云所迄間數千四百三拾七間有之、

一青磐間歩　一甚五間歩　一鳥越間歩　一中尾間歩　一雲子間歩　一清次間歩　一新間歩

右者慶長年中ゟ追々開發有之、今以相稼候澤、幷總數地坪御番所建坪、其外掛り之者名面等略之、

一相川銀山と云は、東向左澤右澤の中に山を隔、兩澤有、此兩澤の左右に釜の口を結ひ、古來ゟ相稼候、左澤入口間山口左澤入口を六拾枚口と云、兩所共口留御番所有、是ゟ內へはみだりに無用之者入候儀不相成、勿論、牛馬入候義御停止に候、

一銀山地所之義は、左澤の川筋を境北に付は下直川村、南に付は羽田村の內と申傳へ候共、何れを銀山と村との境目と定候儀、古來ゟ申傳も無之候、畢竟釜の口を結ひ穿入候事故、以前は岡山の地所等貪著なく、銀山立候義に有之候、

ぎと云。

一けたへとて、敷內稼所風廻り惡敷、或は石煙又は人大勢入込、油煙深く相成、稼候者咽候て鏈穿不相成事有之、是をけたへと云、依之鏈穿候者氣絶る心にて氣絶共書、又稼を怠る心にて懈怠共書候由申傳へ候、然共風廻り惡敷候へば、自然と敷內の地氣順環致さぬゆへ、燈一切ともり不申候、然者敷內の氣絶へと云事可也、しらけたへとて煙も無之燈ともり不申事有之、思はず此けたへに行掛り候へば必ず死すなり、右煙深く相成けたへ候て、稼の障に成候へば、外ゟ切山致し風道を付、煙を拔申候、是を煙拔間切と云、水の障を外へ切貫を水貫間切といふ、

一敷內にて廟藥の如く雫の落候を、しづりと云、

一鋪內にて穿捨候金銀無之石、總て圓廻りに捨有之土石を柄山と云、鏈少々ヅヽは有之ニ付掛柄山と名付、圓の上敷內より取揚、自分にて粉成吹立金銀貢上候、是を外吹と云、出柄山と云は、圓山に古來ゟ穿捨有之柄山を、前段之通自分入用にて粉成吹立候事也、(中略)

當時御稼間歩 并 銀山內一體之事

一割間歩　總敷地坪數七百貳拾五坪、御番所建坪四坪、

御稼は無之候得共、當時御直山六ヶ所の內、此間歩之義者、相川銀山最初の間歩にて、慶長六丑年開發以後、度々大盛致候處、延寶八申年、銀山川通大水の節、間歩口ゟ水馳り込、此節第一にいたし候七枚掛と申敷の稼所、水下に相成捨り申候、然共上通りにて相稼候處、年々不景氣に相成、中絶も有之候得共、寶暦元未年迄は、少々御稼有之處、是又至て不景氣に付、御稼相止候、併此間歩の義は、諸間歩敷內の水流出候大水貫に付、水道のため御立被置候諸間歩水道の記、大概左に記之、

山師三人

鑛坑

の掘出せしものならん乎、鹽濱の薪に代てこれを用ゆ、其石炭を取ことゝ金銀を掘出すに同く、山を鑿、穴を爲て、左右上等に丸木を以て圍とし、漸に鑿入ことゝ數十丈、取得て外に出るに、穴の口上低きゆへ、石炭を入たる籃を引て、四還になりて出る、其形勢圖するが如し、尤此掘出す者は、其土地の產の農民などには非ず、五平太鑿とて、別にありて、諸國を廻て、石炭ある山を鑑定て、價を極め買切て鑿ち取事のよし聞ゆ、尤此石燒とき、臭氣ありて、家事の日用には用ひがたし、異名煤炭、石墨、鐵炭、焦石、烏金石と號、本草綱目に所謂、南北諸山出處多、古則書字故名之、今以代薪炊爨、煅鍊鐵石、大爲民利、土人皆鑿山、爲穴橫入十餘丈取之、有大塊如石、光者有疎散如炭末者、俱作硫黃氣といふもの則これなり、

〔見聞雜記 三十四〕一釜の口と云は、間歩口、竈の口に似候儀を以名付候て、此釜の口の補理左右に柱を立、桁を渡し、さて左右共、細き木を並べて、土石の落ざる樣に圍ひ、家根の所を細き木を木口を揃ひならべて、上に石垣を小高く並、能築上ゲ候、是を釜の口化粧棚と云、又此間歩口を柱四本建候て山を留候ゆへ、巳前は四ツ留共云、間歩口ゟ外御番所廻りの義を總じて四廻りと云、

一廊下と云は、釜の口ゟ内へ段々穿入、立テ合に切當候へば、（立テ合に切當り候事を竝に付と云、鏈に切當り候事も竝に付といふ、）共立合をまるべに、東西共南北とも間切を取直し切候故、自然と三方或は四方へ別れ候、是を三ツ辻の心にて、三ツ合と云、此三ツ合迄の通り筋平地の間を廊下と云、さて間切にて鏈に切當り稼候所を敷と云、委細前件に有之通り、かなこの者一領分ヅヽ分ケ候て相稼候、是を一株共云、鏈穿出候處を切場共穿場共云、右稼所にて天井の事を冠共操上ゲ共云、向ふ所を引立と云、右の方を鏈手、左の方を鑿手と云、下に蹈候處を臺と云、左右の地山をほてと云、敷內にて下へ下り詰候處を敷通りと云、中通を中敷と云、上通りを上敷と云、

一鋪內土氣無之岩計りを穿拔候處を、かなぐりと云、地山堅き事をかたかり、和らか成事を和ら

ルガ故ナリ、且又銀苗ヲ始テ發掘タル上ニ、此ヲ間ヒ吹スルニハ、知ラデハ叶ハザルノ一大事アリ、其一大事ト云フハ、外ノコトニアラズ、其間吹ニ用ル銀礁ハ鑿採ルモ、末ニスルモ、此ヲ風宮ニ掛ケ吹キ立ルモ、毀害ノ手人ヲ用テ坑夫等ニ總テ任カスルコト勿レ、此間吹ノ一大事ナリ、○中略

凡ソ銀山ノ坑ヲ鑿ルニハ、門首ヨリ能ク念ヲ入テ金山ノ坑ヨリハ、格別ニ丈夫ニ普請スベシ、銀ハ金ヨリモ數十倍多ク出ル者ナルヲ以、礦砂ヲ鑿リ出スコト甚ダ大ニシテ、金鑛ニ比スベキ類ニアラズ、故ニ縦丸太諸材木モ、三四尺圍ノ以上ナルヲ用テ、積木棟梁等ヲ手厚クシ、以テ崩壓ノ患ヲ防ギ、其坑内ヲ廣ク堀リ、泉ノ湧出ル處ニハ樋ヲ架シテ、左右ニ落トシ、坑路ノ左右ニ溝ヲ通シテ、其水ヲ坑ノ外ニ滴出シテ坑夫ト運夫ト諸職人等ノ奔走ニ便ズベシ、

銀鑛ノ脈多ク出ル山ハ、其山ノ一二分通ヲ悉ク鑿トル者アリ、故ニ坑ノ普請ハ堅固ニスルニアラザレバ、或ハ崩壞ノ患アル者ナリ、且又泉ノ湧キ出ル浮モ、山ノ模樣ニ因テ、銀坑ノ外ニ水溜ギ穴ヲ堀ラザレバ、叶ハザル事モアル者ナリ、故ニ銀山ノ開發ハ、頗ル廣大ナル業ナリ、

〔鼓銅圖錄〕鑛石を採る圖

銅。銅を出す山には必鑛と云もの有、鑛は銅の精氣にして、其筋の山上に理はれ出るなり、鑛に種々あり、色赤黑く輕く軟にして、條路東西に延たるを好とす、山金司此鑛を見分ちて実板樋柱など云ものを用て、四ツ留を作らしむ、四ツ留は坑口なり、さて鏨鎚を用て切こみ、石を切すて鑛石を採る、漸々深く入りて、𨫤中を鋪と云、螺燈を燃し、切たる石を簣に入背負出す、堀たる跡へは、実板樋柱を用て留め、崩壓を防ぐなり、鑛石に善惡種々あり、𨫤深くありては風通はず、氣こもりて燈燈らぬゆゑ、𨫤石の上の方に又四ツ留を作り、切込み、本𨫤と今あけたる𨫤と、所々切透すを、尺八と云、風氣を通はす爲なり、これを風廻しといふ、

〔蒹葭堂雜錄五〕石炭は中國九州等より多出せり、俗に五平太といふ、按に、其初五平太といへる者

人氣和セズシテ、爭論一揆等起テ騷動ニ及、或ハ鑛夫、鼓稿、諸職人等、其山ニ居ルコトヲ樂ズシテ悉ク離散シ、或ハ財用甚多ク費テ、其損毛補フコト能ハズシテ、遂ニ廢山ト爲ル者ナリ、殊ニ山開ノ最初大祭禮ヲ行フコト、金山第一ノ大事ナリ、

我ガ翁ノ山ニ祭ノ法ニハ、皆世人ノ意外ニ出タル奇妙ナルコトアリ、故ニ神人共ニ歡喜娛樂シテ金ノ出ルコトモ多ク、其山大ニ繁昌セリ、

凡ソ金坑ヲ開クニハ、出石ノ在ル處ヲ逐ニ漸々深ク穿入コトナルヲ以テ、土石崩壓ノ患ナキコト能ハズ、故ニ地ノ門首ヨリ左右ニ周圍三尺許ノ栗丸太ヲ撞木立テ、上ニモ丈夫ナル木ヲ棟ニ架シ、其形ヲ華表ノ如クニ組上テ、以テ土石ノ崩壞ヲ防ギ、次第ニ進テ金鑛ヲ鑿採ルコトナリ、若シ泉ノ湧キ出ル處アレバ、即チ樋ヲ用テ其水ヲ左右ニ流ス、故ニ坑中ノ路ノ左右ハ、皆必ズ小溝ナルモノナリ、門首ヨリ五六間モ深ク入ルトキハ、坑ノ中ハ眞ノ暗闇ナルモノ、坑鑛夫等ハ細キ篠竹ノ一方端ヲ燃シテ篝火トナシ、其竹ノ方端ヲ各々ニ齒ニ加テ、往來奔走シテ其業ヲ勵ム、故ニ坑内ハ頗ル煙氣ノ苦シキ者ナリ、

○○銀山第三○中略

既ニ銀礦ヲ探索得タラバ、先ヅ其礦ヲ末ト爲シテ、風箱ニ掛テ此ヲ吹キ、銀ヲ含有スルノ多少ヲ試ムベシ、此ヲ間吹ト名ク、間吹ノ法ハ、礦砂一升ヲ吹キ、銀六分得ルヲ上等トシ、四分得ルヲ中等トシ、三分得ルヲ下等トシ、若シ又銀九分得ルヲ小滿ト名ク、一匁二分ヲ中滿トシ、一匁五分以上得ルヲ大滿ト名ク、古來間吹ニ大滿ヲ得タル銀山アリシ例ヲ聞カズ、大抵中等下等ナル者ナリ、抑モ間ヒ吹ハ、山外ニ現レタル如キ膚近キ石ノコトナレバ、銀ノ多ク出ルハ實ニ稀ナルコトナリ、故ヲ以テ下等以上ノ山ナラバ、其銀少キ礦ヲ鑿リ採テ、漸々深ク堀リ入ルトキハ、大ニ山ノ直ルコト多シ、故ニ此山外ニ現レ出タル銀ノ少キ鉎石ヲ銀苗ト名ク、銀礦ノ地上ニ出タル端首ナ

行はゝ、流義は、岩戸開き、外記流、扱柚流とて、三派有り、中にも岩戸開きは宗元にして、専神道を學び遷す、以て數を世に殘す、然るに予既に五十歳に及び、餘命久しからざる事を思ひ、依之胸中に貯たる所の九牛が一毛、愚子の愛情におぼれ、後人の譏をも不顧、一冊として微言を筆にとゞめ殘して、金堀の一助とす、汝是を常に修練して、闕たるを補ひ誤れるを正し、他見する事不可有之、是則人の薄智微言を笑はん事を恐れ可避而已、

于時天明五年乙巳正月吉日　　赤穗氏滿矩

〔山相秘錄上〕金山第二〇中略

凡ソ金山ヲ開發スルニ、含有ノ金ノ多少ト、其藏有スル處ノ高下ト、土石ヲ穿ルノ淺深トヲ豫メ知ル前算三要ノ秘訣ハ既ニ上ノ總論篇ニ記載セリ、前算既ニ定テ開坑ニ事アラント欲セバ、先ヅ其山ヨリ湧キ出ル處ノ水泉ノ脈絡ヲ審ニシ、瀉水ノ水平ヲ測量シテ、溝作リ樋ヲ架ス等ノ難易ヲ計リ、且ツ又近傍ニ炭ヲ燒キ出スベキ山ノ有無遠近迄ヲ熟察シ、精々利害損益ヲ辨辨シテ、而シテ後ニ開坑ノ業ニ從事スベキナリ、

蓋金含有ノ山ハ、水ヲ含有スルコトモ極テ多キ者也、故ニ先ヅ其水ヲ瀉スルノ策ナケレバ、其水悉ク坑内ニ聚リ來テ、金鑛ヲ掘ルコトハ扨ヲキ、鑛夫等ノ出入スルコトモ能ハザル者ナリ、故ニ別ニ瀉水ノ法アリ、又金鑛ヲ掘出シテ此ヲ鼓鑄ニ及テハ、夥シク炭火ヲ用ルコトナリ、故ニ先ヅ此ニ事ヲ豫メ計リ置ニアラザレバ、必ズ手當スルコトナリ、

凡ソ金山ヲ開發スルニハ、數多ノ鑛夫及ビ匠人、柚、炭燒、土鍛冶等ヲ會シ、先ヅ役所ヲ建テ、小屋ニ作リ、周圍ニ悉ク欄楯ヲ丈夫ニ結、圍シ門ヲ立テ番所ヲ居、嚴ク出スモノ考覆スベシ、入ル者ヲバ尤メズシテ、出ル者ヲ禁ズルハ、古來金山ノ定法ナリ、且又人數ヲ扱フコトハ、其ノ秘事多シ、故ニ別ニ鑛場法律ト名クル一子相傳ノ秘書アリ、凡ソ鑛場ハ其法律ヲ善ク盡スニアラザレバ、或ハ

云、流に留り候大振成は水場とて、三四尺の四角なる箱を扒置、此中へ打明ヶ候時、又流に細かなる鏈殘り候、是をばら鏈と云、別に致し置候、ヶ樣に手配り致候事を鏈を仕込と云、鏈石仕込候より、總じて建揚廻りにて相働候者を、どべの者と云、どべは泥土の事を云ならはしたるか、かなこの者、無給にて小遣に致候者なり、猶末に志るす、

〔見聞雜記三十四〕一吹破　風穴　石間　建立ヶ合の内穿通り候内五寸、壹尺、或は三四尺程の穴出候、是を吹破と云、其所は必地山堅く候、金氣強く地山を吹割候也、此吹破出候跡にて盛を得候事、古來より度々有之候、吹破の内には水晶石有之、風穴と云は吹破の小きを云、至て小きをば鼠風穴と云、石間と云は、立ヶ合の内にても、磐の内にも一片づゝ隔有之、是をへだてと云、ヶ樣の所は水を溜候へば自然と吸取候、亦地山を扣き候へば、鎚音抔ちかく聞候、是を石間と云、

〔梅津主馬政景日記〕元和三年三月二十八日略○中院内銀山大切山水貫四ッ五ッ久敷普請致、今少に候得共、山仕共、すり切ぎりやう不叶候間、鉒に付候事不罷成候間、捨に被成置、御米に借被置候て可然かと申上候へば御合點に候間、山仕共にふしんを仕、今一度相尋罷歸候上申上候へと、伊外記に申理り候間可參由申候、

〔鑛山聞書序〕予幼年之頃、父母に隨て銅山に養れ、父祖より相傳處の下財の業を聞覺、猶壯年に至て、名有金場に每事尋問て、其道を學び、是を我胸中に秘して、唯一身の日用たりなんの望みを思ひて、書溜たる事一ッもなし、然れ共愚息に傳ふべきの爲に、今既に方寸の胸を開集め書す、下財を營み世を渡る者、農工商の道には、曾て不知、十國十山を家として一生を送る、然れ共其利筋に暗き時は、必諸人の先達に立がたからんか、慶長年中に東照權現御定之法式、往昔明曆二年、出羽國秋田郡向銀山に定足場、伊豫國別洲立川、佐渡國金山、紀州熊野銅山、丹波國雙野銅山等に定流義、夫より諸國諸山に法式を定、中ニモ日本の始は、金花山より黃金を內裏に奉りし式を集、今世に

是は丸鋺の中をへな土にて、右土器の縁廻りゟ段々に並べ上ゲ、其中に穴を明け候て、穴の中ゟ火登り出候様に致候事也、其形鳥の巣の如く成と云事にて巣と云、右き横ゟ是迄にけたへ候場所に設候事にて、不断は是なし、

一矩定場

是は敷内に木を渡し、板を張り、鏈を敷、鋪大工の者罷在、大工の穿候鏈石貫目等相改候處也、大工共休居候處をも、右に准ジ矩定場と云、

一右敷々にて穿候鏈石を荷揚穿子負揚候得者、御番所庭にて貫目相改候、是は右荷揚穿子の賃錢相極候ため、掛改め御番所役候前に記し置、一十日相濟候得ば、穿子名別銘々貫目仕譯賃錢相極、穿子入立請方の者賃錢相拂申候、

但賃錢極方の儀、穿子請負人方へは、縦令大工拾人にて相稼候敷へは、荷揚穿子何人入立候と云定にて、壹人分の賃錢何程と極め、御入用請取置、且本文鏈貫目にて賃錢相極候と云は、前段に有之、上敷中敷數通りと敷内遠近を分け、右場所により貫目何程負候得者、壹人分賃錢相渡候と云定にて、一十日分負揚候鏈貫目を、右三段の貫目に割付、譬は上敷何百貫目負候故、何人分取候と極、急度請負人受取置候、御入用錢を以請負人方ゟ相渡候、

右御番所にて掛改候鏈建場へ運候此建場と云は、御番所内裏に有之、かなこの者自分入用ヲ以建置、平日此所へ相詰罷在、請御用相勤一體稼方諸道具等差置、鏈石撰立等致候所を建場小屋と云、且右鏈建場に而、又々かなこの者壹荷々に貫目を改め、敷内より書付入遣し候、大工名前を分ケ記し置候、〔是は前段大工貫目掛置候爲也〕御番所にて貫目改候得共、是は荷揚穿子敷内ゟ五荷七荷拾荷程ヅツ一度に負出、總貫目計りを知候故、建場にて、又々一荷ヅヽ銘々掛改候、掛改濟候得者、さく笊とて大きなる笊に打明ケ、水桶の中にて沽り洗ひ候得者、細か成笊の下にぬけ候、是をこま鏈と

とも、切場に限り候事にも無之候得共、間切切山等に者多く無之稼に候、

一一十日中其數々へ可入極めにいたし候大工を差組大工と云、此約束を違ひ、不參の大工を逃大工と云、一十日の内一日にても、無謂不參の大工を番欠大工と云、番欠大工の代りに外ゟ雇入候をかけ穿大工と云、外ゟかけ持にいたし候と云意也、壹番は差組の山に勤め、夜番は他山へ參候をまたぎ大工と云、是もかけ持の意也、打かへ大工と云は、一の日迄は御入用大工を入レ、荷分々の日、かなこ自分入用の大工を入爲穿候事を云、前夜迄は差組の大工穿候に、かなこ大工入代り候を打守と云意にて名付候事也、頭大工（數頭問頭）と云は、大工の内にて重成者差働も有之勿論、大工の業も勝れ、穿場大工の掛引も功者に致し候者にて、一敷に壹人貳人ブヽかなこの者目利にて申付、大工の頭取に極置候、是を數頭と云、問頭と云も右同樣ながら、是は立場向差働入用物等取締鏈積方、其外一體建場の諸用かなこに替り相足候程に致候、依之賃銭も並の大工ゟは増候て、かなこ共より取せ候、

一き横

是は土器に燈心を多く入、火口をふとくいたし燈し候を云、

一もみ横

是はしもみ燈心とて、燈心を繩の如く大きに致し、釣の中に燈し候事を云、

一すひ口

是は板の上に土器を二ッ三ッも寄置、火口を一所に致し燈候、

一重手

是は土器を重ね候て、上にも下にも火を燈し候事を云、

一集

一廊下と云は、釜ノ口より内江段々穿入、立合ニ切り當候得ば（立合ニ切留候事なし鏈ニ付と云、鏈ニ切當候事なし鏈ニ付と云、）其立合を立るべに、東西とも南北とも間切を立直し切候故、自然と三方、或は四方江別れ候、是を三ッ辻の心ニ而三ッ合と云、此三ッ合迄之通り筋平地之間を廊下と云、扨間切ニ而鏈ニ切留稼所を敷と云、是は先ニ有之通り、かなこのも一個分ブ、分ケ候て相稼候、是を一株とも云、鏈穿出し候所を切場とも云、穿場所とも云、右稼所ニ而天井の事を冠とも操上ゲとも云、向ふ所を引立タと云、右之方を鎚手、左之方を鏨手と云、下タニ踏候所を臺と云、左右の地山を方手と云、敷内にて下た江下り踏候所を臺通りと云、中通りを中敷と云、上通りを上敷と云、 敷内土氣無之、岩計りを穿抜候をかなぐりと云、地山堅き所をかたかり、和か成をやわらぎと云、

（見聞集記三十四）一稼所鏈引細く成候は、又者鏈の有様にて稼方により穿場手狭く成、大工の働難成候へば鏈穿候外に大工をかけ、左右前後切廣ゲ候、是を切廣ゲと云、是又本文之通、六ッの鏈四ッの鏈共致し候へ共、六人分賃銀を入用高にて請請に致し、銀鋪并歩はち合の鏈にも致し候、

一普請と云は、切廣ゲの鏈には候得共、切廣ゲは切場一體を廣く致候義、普請穿は鏈をか穿濟、左右の地山を穿候て、鏈の穿勝手の能様に致候を云、依之入山ゟ五六の日迄普請致し、七の日鏈穿候て、八の日の荷賣出し、又其跡普請穿致し、荷分前日ゟ鏈を穿申候、毎十日如此相成候、前方は堅十日の仕込として、二の日かなこ共自分大工にて數々普請致候得共、敷内不景氣にて鏈出來劣候節は、かなこ自分大工にて、其十日の鏈を穿せ申候、

一貫目穿と云は、歩はち合に似候得共、是は大工穿歩、縦令貫目壹貫目に付、賃銀何程と究爲穿候得者、強き大工も弱き情次第穿申候、尤地山堅さ和さにより、賃銀の高下は有之候、

一さつさ穿と云は、急に穿らせ不申候では不叶と云時に、褒美銀を多くかけ、大工を大勢いれ、頭大工の者、後に付居候て疲不申様、一情ブヽ入替爲穿申候、是をにぎり替り共云、貫目穿、さつさ穿

より、定之賃銭不殘相渡し、負候者は三晝夜分計り取申候、是を聞こはち合と云、

一歩鉢合と云は、穿石貫目之多少を論じ候事を云、火繩鉢合は數々ニ火繩を立テ、長何寸立チ候内穿石貫目何程と、大工ども銘々の精粗を記し置、貫目多之者江褒美銀を掛ケ爲切候、是等は三晝夜ニ不限、晝計リニ而も夜計リニ而も致し候事故、小き鉢合ニ而候、

一間切場所之向ふを引立、天井を冠と云、同左右の角を隅々と云、急度角どを立候義也、

一間切延候内出候、右ニ交リ有之候薄鏈をのみへず鏈といふ、切山と云も間切の小き事ニ候、是も切方方尺、并賃銭相極メ一十を日ニ延、何尺切可申、爲糴候事なり、且當時は大工何人分と定め延尺爲糴申候、總而間切之山とも、請負の日限仕舞候得ば、山方役、御目付役、穿鑿掛、御番所役并山師、振矩師、右場所江罷越延尺相改メ、鑿角(ノミカド)にて切結之所ニ小き穴を穿、穴之外升形とて、四角ニ印を穿付候、是は古鑿角不紛ため之目印ニ致し候事なり、

但、間切にても切山にても、切形竪横之方尺改め候定矩を板かせと云、又鉢合穿に而晝夜左右江穿分ケ候節は、晝番先江穿候所を半分之定矩ニ而改メ候、是を割かけと云、本文之通り、右切形改メ相濟ノミ角打候義切結、其所ニ而は難打候ニ付、貸間とて切結より少し手前にのみ角升形附置候を、此のみ角より切結迄之寸尺を請人江貸し置、重ネて請前延穿仕舞、改メ之節のみ角ゟ切延まで總延之内、右貸間を引、殘正延相極メ申候、扨本間切には傍示とて木を角ニ削リ、間切之始メ切終リ之月日、并延尺書付鑿角之所に立て置候古法に候、

一釜之口と云は、間歩口釜之口に假候義を以名付候歟、此釜之口之補理左右に柱を立、桁を渡し、扨左右とも畑木をならべ、土石の不落樣に圍ひ、屋根之所を細木を木口を揃へ並べ、上に石垣を小高く並べよく築、是を釜ノ口化粧棚と云、此間歩口を柱四本建候而山を留候故、以前は四ツ留とも云、間歩口より外と、御番所廻り之義を總而岡廻りと云、

慶長之銀に吹立申候、略○下

（朝野群載三）對馬貢銀記

對馬島者在本朝之西極、略（中）其採銀之地極爲險難、多年穿堀、堀中漸深、自口入底二三許里、日月之光不得照之、三人連手以爲一番、一人秉燭以萩爲把、里許也、不能久焉、一人採器、一人持鎚鑿取之、斂置舗入常法三人、其後量於斗斛、置之於高山四面受風之處、以松樹薪燒之數十日、以水洗之、斛別定、其率法、其灰爲鉛錫、滿千二百兩、以爲年輸、推其軍功、不可勝計、若不逢之時、雨水口壞、三四百人連歷於壞中、涉水出壞、猶如行者三里之水漸々傳出、費民力盡人功、可長大息、其人夫所須年穀米二千二百餘斛、支分於管內諸國、皮盡、向絶減消之最重也、

（金銀山取扱一件）間切と云は、前段立チ合引方を考へ、新タニ草際より穿候を草見立と云、又何間歩にても、其山ニ引來り候立筋を考へ、鋪所の外新規の所江穿候事を間切と云、畢竟鋪內の大道を開くの儀故、大道間切と云、段々切延候跡にて、左右ニ入候事を横貫と云、是は延尺ニ隨ひ鏈に逢候故歩稜と云、歩とは鏈の替名なり、扨切始め候時、山師立筋相考、或は立合追とも横貫とも極メ候而、切形方尺或は丸形間切は差渡し何尺、舗甚類は中か也何尺ニ左右高何尺抔と相定メ、此積りを以切延の丈尺一ケ月ニ何程と積請負ニ而爲切候、尤山の堅サ和らかさにて、一ケ月之入用高多少有之候、右間切場所中上候得ば、御入用を以御切被下候、依之來月分延請負入札之前、頭數役人并穿鑿下掛り數役人より切手紙差出申候、都而穿鑿懸り取扱請負延尺少したりとも切不足致し候得ば割合を以御入用引上、延尺壹割以上切不足相立候得ば、割合通り引上ゲ候は勿論、其外過怠引として御入用高之內壹割引上ゲ爲相納申候、

鉢合穿と云は、間切之延を穿候もの勝負を論じ、出精致し穿候事をいふ、是は定メ之賃錢之外ニ褒美銀として増をかけ、一はち合と云を三晝夜ニ定め、延尺穿勝候方へは、穿劣り候もの方

灰ニまみ、幾度もいたし候へば鉛氣灰ニ染切、山吹銀眞中ニ殘り候、是をかふると唱へ申候、其時鞴を强くさし吹すわり候節火を除、水を打、能冷し取揚候上、裏ニ付居候爐滓を落し、掛り役人江差出候ニ付、目形掛役帳面ニ記し申候、鉛氣之灰ニ染込候を爐滓と唱へ、是又帳面ニ記し汰物吹立候節、鉛之代りニ遣ひ申候、

〔上杉編年文書〕銀中入候、仍諸國銀子灰吹、幷筋金吹分之事、堅御法度御座候、其意趣は、灰吹或筋金吹分候とて、つくり銀を致候により、右之通被仰出候條、御領分急度可被仰付候、若背御法度吹候もの於有之は、可被成御成敗旨御諚候、恐々謹言、

慶長十四(朱書)
五月三日

大　石見守
村　茂助
成　隼人
安　帶刀
本　上野介

直江山城守殿

〔銀座由緒書(東京帝大史料編纂所收)〕往古者、白銀位不相定、諸國銀山ゟ堀出候灰吹銀之儘を以通用仕、國々銀之位不同ニ付、諸國一途ニ可被爲成旨、權現樣思召を以、慶長六丑年五月、銀座御取建被爲成、先祖之者共座人ニ被爲仰付、手本銀として、銀位上中下、有一文字、夷一文字、大黑極印等之奉備御上覽候處、大黑極印之銀可然旨被爲仰出、則堺町人大黑屋常是と申もの、吹人ニ相定、追々吹立、天下一統大黑極印慶長度之銀通用と罷成申候、右之通にて、世上に通用仕罷在候灰吹銀、幷山方ゟ堀出し候銀等、追々銀座御役所へ引替取候而、

りと中鐵道具を以押かため、鞴之尾ニ而差を直し、右南蠻屋鉛壹れ盛落候、銀鉛交候荒鉛を爐之内江入、其上へ炭火を置、吹子壹挺ニ而吹解し、吹解候ニ随ひ、寄火箸と申平ラナル鐵道具を以、右湯之中江灰を少々宛すくい込、爐之ふちへ次第進付候得者、鉛は不殘灰へ吸込、銀は其上ニ丸く相成候ニ付、暫ク吹子差當候得者、銀之湯色顯れ、かぶり候とて、赤々湯色一面引渡ㇾ候ニ付、直ニ吹子相止メ火を取除、吹子ニ而吹さまし、又は水を掛ケ、火箸を以網起し申候、右之銀を荒灰吹と唱、六才鉢ニ上灰吹ニ吹立申候、灰内江吸込候鉛を留鉑と唱、留鉑流しと申候而正鉛ニ吹立申候、

上灰吹之事

一荒灰吹を上銀ニ吹立候儀は、三四升入之鍋ニ灰を入、真中ニ爐作りと申灰吹多少ニ應じ爐形を入置之、灰ニ水を打能く押かため、右爐形を抜取、其内江灰吹を入、廻りニ長四五寸ゟ七八寸位之宜堅石を四方ニ積置、中江も小まかナル炭火を入、小吹子壹挺ニ而暫ク差當候得ば、灰吹銀吹解候ニ付、鉛を少々差加、此鉛ニ而銀湯をさやし、猶又さやし木と申候而、凡長貳尺位之はうその木を、銀鍋之上ニ而燃し候得ば湯色さへ、玉湯と申霧の様成湯色顯れ、又々雲之様成湯色顯れ候ニ付、吹子ヲ相止メ炭火を取除、上銀さめ候節、火箸ニ而廻りを寛ゲ、鉄を以取上ゲ申候、右荒灰吹ゟ上銀ニ吹立候吹欠、凡壹割位ニ御座候

（銅山稼幷鉛成吹取扱一件）灰吹之事

一下り地壹貫貳三百目より四五百目程迄壹枚

右南蠻床幷領床ニ而鉸取候下り地、銘々目形掛改候面ニ記し、灰吹床江廻し申候、灰吹床之補理方ハ本途同樣真中ニ鍋を置、其中へ灰ニ而爐を丸く造り、其中へ右之卸地を入、上ニ火を置、能吹解候節、火を除、鞴羽口之所ゟ向江短なる渡し鐵を置、其上へ大ぶり之炭を渡し掛て、火をも乗せて、靜ニ鞴を差し吹解、火箸之先ニ而少しづゝ、灰をすくい入、火箸ニ而掻廻し候得者、鉛氣ハ段々

灰吹

ク其透隙ヨリ飛ビ去テ、水中ニハ集リ溜ラザル者ナリ、能々意ヲ用テ封固スベシ、

凡ソ灰吹ノ法ヲ行テ純金ヲ取ルコトハ、近來銀ノミニ用フ、金ニハ行フ者少シ、故ニ此ノ法ハ銀山ノ條下ニ此ヲ講明スベシ、凡ソ金ノ山中岩石ヨリ採タル者ヲ山金ト名ク、其色深黄ニシテ甚ダ美ナリ、又土中、井中、海砂中、流水中ヨリ出タル者ヲ水金ト名ク、其色淡黄ナリ、故ニ山金ヲ第一等トシ、水金ヲ第二等トス、

〔山相秘錄上〕金山第二

凡ソ黄金ノ出タル儘ニテ、未ダ燒煉セザル者ヲ生金ト云フ、生金ハ試石ニ著ザル者ナリ、既ニ煉煉ヲ歷タル者ヲ熟金ト云フ、熟金モ初煉ハ色尙淡シ、其煉數ノ累ルニ從ヒ其色益深シ、故ニ七靑、八黄、九紫、十赤等ノ品級アリテ、試石ノ上ニ登ルトキハ、皆ダ分明ニシテ、立ニ其級ノ現ル者ナリ、

〔銀山舊記〕銀灰吹方取扱○中略

一灰吹銀仕樣は、灰吹床と申土間に、差渡し三尺程の丸の内に、くぼみを付、其内に厚さ七寸程灰を入、其上厚壹寸、中灰と申灰を入、其上厚三寸程上灰と中灰を入れ、但上灰は海邊にて鹽燒候松葉灰也、此上に水を打、わらを敷、床尻鉛を置、其廻り廻りぬれ筵を以詰め、鉛の上吉き炭を置、火を入、吹立候へば、鉛解候時、樸椿樫類の三尺廻り程の木を貳本渡し、其上にぬれ筵石叺等を置、火氣もれざる樣に致し候へば、右木炭の火勢にて、鉛と灰は引、正銀は留り申候を引上げこまぐ\に切り、大概目方貳百六十目兌程を裏目銀壹枚に心當、右濟吹に持參致候、凡上銀貳百五拾目位に相成申候、

〔銀山方覺書〕灰吹之事

一床凡四尺四方

右者重モ灰、輕灰を等分ニ合、すいのふニ而能振ひ、右床之内へ入置、炭火を入、隨分灰を燒キ、爐作

鑛山の繪

鑛は堀出したる土ながらに水にながして鑛を取るなり、わさき流川にむしろをしき、その上へほりだしたる山土をながしかくれば、鑛はむしろの上にとまり、土は皆ながれ行なり、石見、備中、備後の三ヶ國おほく鑛あり、備中に眞金ふくとといへる歌あり、古今集にのせたり、延喜天皇の御時、すでに備中におほくかねを堀たると見へたり、かねは金銀銅鐵の總名にて、鐵は黑金也、

鐵冶繪

鐵をふくには、ふいごにては湯になりにくし、故にたゝらにかけて湯にわかすなり、

歌 ひとすぢにはげむ心の力なわまがねもつゐに湯とぞなりける

まがねふくしづのいとなみいとまなや身のいたづきも思ひしらずて

〔山相秘錄下〕水銀篇八〇中略

凡ソ水銀ヲ升煉スルコトハ、先礦石ヲ搗テ細末ト爲シ、此ヲ竈内ニ納テ升煉ス、其竈ヲ造ル法ハ、壇土ニ砂ヲ和シテ通開秘櫃ニ其泥ヲ塡シ、外圍ヲ板石ト瓦埠ヲ用テ墻トシ、其内ヲバ壇土ヲ以テ塗リ、高五尺許リ、徑リ三尺五寸許リノ圓竈ニ造リ、竈ノ中ニ深サ一尺四五寸、徑リ二尺許ノ鐵釜ヲ塗リ込ミ、竈ノ下方ニ火ヲ燒ク穴ヲ開キ、其　ノ内ニ、水銀礦ノ細末ト極上石灰トヲ等分ノ合和シタルヲ釜ノ七分許ニ納レ、上ヨリ鐵釜ノ底方一寸ヨリ孔アルヲ以覆テ蓋ト爲シ、其縫合ヲ三和土ヲ用テ固密ニ塗リ塞ギ、其上釜ノ底ノ孔ニ圖ノ如ク弓形ニ作リタル土管ヲ動カザル様能ク縛リ著テ、壇泥ヲ三和土ニテ塗固メテ氣ノ漏レザル様ニシ、略○圖 其弓形管ノ端ヲ半分許リモ水ニ入レ置キ、而後ニ下ノ穴ヨリ强ク火ヲ燒クコト四五時ニ至ルトキハ、含有ノ水銀悉ク上釜ノ小孔ヨリ飛ビ升テ、弓形ノ管ヲ通リ、別器ノ水中ニ溜ル者ナリ、此ヲヨク冷シテ二釜ヲ取除ベシ、上釜ト下釜ノ合縫ト上釜ト弓形管ノ合縫シ、少シニテモ氣ノ漏ル所アルトキハ、水銀ハ悉

鐵砂ニ十駄ヲ煎煉シテ生鐵ト爲スニ、常ニ六七十駄ノ炭ヲ費ス、且鐵砂ノ性ニ因テ熔化易キモ有リ、又極テ烊解シガタキモ有テ、夥シク炭ヲ費スコトアリ、殊ニ少シデモ温氣ノ有ル土ハ何程炭ヲ費シ、精ヲ出シテ長ク吹ト雖モ、鐵砂ハ絶テ熔化ニ流ルコトノナキ者ナリ、故ニ温地ヲ嚴シク忌ムコトナリ、温地ニモ非ズシテ性ノ堅キ鐵砂ハ、立明灰ヲ上ヨリ投ズルトキハ、即チ鎔解ルコト妙ナリ、　凡ソ炭吹ヲ強クシテ鐵砂ヲ鼓鞴ルトキハ、其滓上ニ湧揚ル、俗ニ此ヲ津與志ト云フ、即チ鐵屎ナリ、鐵ハ其質ノ重キガ故ニ漸々鐵屎ト分レテ下ニ沈ム、朝六ツ半時ヨリ吹キ始テ、日ノ暮レ方ニ下ノ穴ヲ決テ、其鎔化タル鐵湯ヲ流シ出ス、此レヲ生鐵ト名ク、即チ俗ニ云フ鍋金是ナリ、　又下ノ穴ヲ決ズシテ、翌日モ三日目モ其ヨモ火ヲ消サズシテ取ニ、緩々ト此ヲ鼓鞴テ能ク煉ラシ、六日目七日目頃迄ニ少シヅヽ流レ出シテ、其色ノ赤キトキニ鐵砧ノ上ニ載セ、大鐵鎚ニテ鍵鍛ヲ長條ト爲シタル者ヲ、俗ニ氣羅ト名ク、即熟鐵ニテ奈眞鐵トモ菊伊鐵トモ云フ者是ナリ、又爐内ニ炭火ヲ強クシテ、鐵砂ヲ入テ屢爐ヲ鼓鞴コト一日一夜、曾モ其火ヲ消サズシテ、時々コレヲ鼓鞴ツヽ、十日餘リモ煎煉シ、穴ヨリ流シ出ス時ハ、即チ鋼鐵ト爲ル、故ニ鋼鐵ヲ製スルニハ、炭ノ費ルコト最多ク、鐵モ亦鐵屎ト爲テ、減少スルコト半ニ過ル者ナリ、且又鋼鐵ヲ製スルニハ、種々ノ法ノ有コトナレドモ、皆製煉術ノ業ニシテ、山相ノ事ニ明カナラザルヲ以、此ニハ其ノ論ヲ擧ゲザルナリ、

〔日本山海名物圖繪　一〕鉑石くだく繪

山よりほり出したる鉑石をもち出して、うちくだく、これをかなめといふ、故にその槌をかなめつちと云也、鉑をくだくはおほくは女の所作なり、鉑を入て背負うつは物をゑぶといふ、ゑぶの正字はいまだ詳ならず、又はくも鉑の字正字にあらず、鉑は金鉑銀鉑のはくなり、字彙にいはく、鉟古猛切、音礦、金銀鐵璞也とあり、本字は鉟なるべし、

火處ヲ築ベキ場所ヲバ、地下ヲ掘テ炭ヲ埋ムルニ宜シ、此ヲ鼓鞴ルニモ、風箱ノ風勢ニテハ、迚モ鐵砂ヲ鎔化スルニ及バズ、宜ク大宗蹈鞴ヲ用テ此ヲ鼓鞴ベシ、炭モ夥ク費ル者ナリ、總テ其事ヲ兼ノ業シテ、此業ニ便利ナル土地ニ築クベシ、

鐵山ノ業ヲ始ルニハ、迚モ小キコトニテハ利益ノ興ラザル者ナリ、故ニ何レノ鐵山ニテモ人夫三四百人ヨリ少キハナシ、大ナルハ八九百人ヨリ二千人ニ及ブ處モ有ルコトナリ、鐵砂ハ何レノ國モ在者ナレドモ、鑪場ヲ建ルニハ、精ク土地ヲ撰バズンバアルベカラズ、先ブ火處ヲフタベキ處ハ、高爐ハ勿論ノコト、其火處ハ地ヲ掘ルコト一丈許リ、其土ヲ取除テ、悉ク硬炭ヲ埋メタ築固シテ、其上ニ壇土ヲ五尺許リニ疊テ築固メ、其上ニ爐ヲ築クベシ、凡ソ人夫三四百人モアラバ、爐ヲ七個モ築ク、爐ノ大サハ極リ三尺五寸位ヨリ四尺餘ニモシ圍クシテ、高サ六尺五寸位迄ニ築キ、爐ト爐トノ間ハ近クスル程利益多シ、○圖

長爐ハ長サ七八間、幅七尺ヨリニシテ、多々羅七挺ニテ吹ベシ、火爐ト多々羅ノ間ニハ、高サ二間厚サ一間、長サ二十間許リノ土塀ヲ築クベシ、然ラザレバ火熱極メテ甚シク、動モスレバ病人多キ者ナリ、又圓口爐ヲ並築テ吹モ、此ト大抵同キ者ナリ、凡ソ長爐ハ炭ノ費ヘ少ク、彼レ是レ利益アレドモ、下ノ穴ヨリ熱鐵ノ湧キ出ル勢ガ極テ強クシテ、不便利ナルコト多シ、土地ノ樣子ニ因テ勘辨アルベキコトナリ、故ニ七百尺以上ニ非ザレバ圓爐ヲ用ルコト古法也、

凡ソ鐵砂ヲ煎煉スルニハ、炭ヲ用ルコト甚ダ多キ者ニテ、常ニ鐵砂ノ駄數ヨリ三倍モ四倍モ費ルコト、心得ベシ、炭ヲ費スコト三四倍ニシテ煉リ成タルハ、即チ生鐵ナリ、所謂ル生鐵ヲ熟鐵ニ製スルニハ、六七倍ノ炭ヲ費ス者ナリ、又生鐵ヲ鋼鐵ニ煉成テ、炭ヲ費スコト、或ハ其駄數ノ十餘倍ニ至ル、故ニ鐵ノ爐場ヲ建ルニハ、山深ク樹木ノ極テ茂リタル土地ニ非レバ、絶テ爲スベカラザル者也、

尤上之分ハ扣粉馬之尾ふるひに而ふるわせ申候、

一水筋取揚方之儀、馬之尾篩ニ而ふるい候扣粉之元汰幷さくの粉こま共、霄突銀元銀溜置候分、一日限り板取汰直し候得者、板之手前江寄候物者則金氣故、能々ゆり詰鐵氣ヲ去り候ため、磁石を以掻廻し取揚、器物に移（此手順筋砂採むと申候）ヲ是ヲ元筋と唱へ、總而先砂之類磨ニ掛ケ候、度々中突銀取揚候節、是又汰返し筋砂取揚候儀、右同様ニ御座候、是ヲ磨筋ト唱へ元筋と打込申候、且汰物之内、元汰中突銀共荒き方を手挽之石磨を以（則銀磨之類ひ）挽返し細かになし、筋砂取揚候節茂有之候、

一ねこ場之儀、先ヅ横ぶと之木綿を敷、象而上船と申江汲込置候濁水を流し候得者、銀銅氣無之砂は輕く候而、ねこ場之前へ流れ落、銀銅氣有之分は重き故、則木綿之織目へ止り候ニ付、程歴て木綿とも取揚、水を入候桶ニ而濯込候を打込と唱へ、右之打込ニ溜り候砂を澄し板ニ掛ケ、摺物幷右板先きヲ茂流返し、こまかなる汰物取揚申候、此外砂先之流し方ハ鏈石之善悪ニ應じ、程々見計ひ、宜分ハ引込と申船江落し、濁水居付せ候得者、亦々取揚流返し汰物取揚、宜からざる分ハ流捨ニ茂仕候、但ねこ場、補理方幷諸道具とも、本途勝場同様ニ而御座候、

一生汰物燒入方之儀者、日々取揚溜置候先き〴〵迄之分打合せ、能々切交燒立申候、此燒方之儀、先土ニ而高サ三尺四方餘ニ塗立候竈江炭火を入、右之汰物貫目掛改帳面江記し候上ニ而握り堅め、右竈之内江積込、其上江濡れ筵を掛候得者、竈之下口ゟ風吹込、自然と蒸燒ニ相成申候、燒濟候得者、煙も立止候ニ付、得斗火氣ヲ醒し、竈ゟ取揚、猶又貫目掛改候得者、凡貳割程欠ニ相成、是ヲ燒汰物と唱へ、追而吹入申候、

〔山相秘錄下〕鐵山第五

凡ソ鐵砂ヲ煎煉スルノ爐場ハ、諸金中ニ於テ最モ大ナル者也、鐵砂ハ諸金中ノ最モ烊化シ難キ者ナルガ故ナリ、且又極テ濕氣ヲ惡ム者ナルヲ以テ、火處ヲ築クニ精ク、高燥ノ土地ヲ撰ブベシ、

一石扣之者さく笊ニ而篩ひ通し、溜置候粉を貫目掛改、帳面に記し、七拾五貫目宛相渡候ヲ、元汰渡しと唱へ、其分立桶と申ものへ入、杓子を以掻廻し、桶之側を杓子にて幾度も叩き候得ば、荒砂は桶底ニ居付、細か成砂は上通りエ居付、至而之こまか砂は濁水に浮ミ候間、其程見計ひ濁水をば上船と申へ汲込置、鑑々居付せ、段々ニ栓ヲ抜、悉く上は水ヲ吐キ、右之居付候こまか砂を取揚、ねこまニ而流させ板ニ掛ケ汰物取揚候をこみと唱へ申候、又以前之立桶底ニ居付候砂を板ニ而ゆり汰物取揚候を元銀と唱へ申候、其上通りへ居付候こまか砂をつらと唱へ、是又汰物取揚、是ヲ元面と唱へ申候、

一右元面之節、板先エ汰り落し候砂を先砂と唱へ、磨挽之者へ相渡、當時溜鏈歩ニ付一日ニ付八拾四貫宛挽流させ申候、右之先砂を立桶へ入、元汰り同様に立杓子ニ而掻廻し砂ヲ居付せ、荒物と面とを取分ケ、此つらを磨面と唱へ、是又汰物取揚申候、濁水ハ前同様上船へ汲込置、此分ヲ溜者と唱へ、元汰之こみ同様居付せ候を取揚、ねこ場ニ而流し、板ニ掛ケ汰物取揚申候、扨又右之立桶ニ居付候荒砂を取揚、板ニ掛ケ汰物取揚、是ヲ中荒銀面分砂子と汰分ケ、小板鉢と申桶エ溜置、小板揚と名付、其汰物を又汰返し候へば、汰物之内ニ少し残り候、砂は先へ落し汰物は板之中程ニ溜り候ニ付、器物ニ入置申候、右之通り毎日取揚候汰物膵場仕舞ニ目形掛改、帳面記し箱詰エ入掛役人符印附置申候、

一板取之者汰物取揚候節、板先へ汰落し候砂を一ト通り磨エ掛、前文之通り中実汰物取揚候先砂は溜置、追而川ニ而流返し汰物取揚申候、流し方之義は筵或はねこだを敷、流し留候而溜置、是又板ニ掛、汰物取揚申候、且銅鏈粉成方之儀は、本途膵場銀鏈と違ひ、一體銅氣重ニ而銀氣ハ薄候ニ付、先き〳〵砂之分細害ニ挽返候而者御入用ニ引合不申候間、右之通取計ひ申候、然れ共鏈石善悪ニ寄、其時々見計ひ銀粉成同様ニも取扱申候、磨場補理方之儀ハ、本途粉成方同様ニ御座候、

致撒迸（因此篩隔、鎔者亦時有之可長、）既而灑水冷結、用小鑑鐵（へら）篩取之、一傾（底ニ十數枚、長七八寸許、枚重殆十兩、）約十數傾而盡、日鎔十數斛

而止、是爲條銅、供長崎和市之用者也、

右純銅不雜者、煉法至此而盡、又有再煉銅鉻煉、傾于方圓各模者、（詳見後條）而其法大同、作條銅之方、

○中略

附鍰銅白目淘汰○中略

淘汰者、零銅粘著土滓垪鍋之類者、舂篩水漬汰而取銅也、

〔銅山稼并粉成吹取扱一件〕一三番彈鏈取揚方之義、天明三卯年迄は、鳥越間歩本途稼ゟ穿出候銀鏈之内懐き合ニ相成、銅氣有之分、銀鏈ニ不取交、建場外川通江取捨候ニ付、銅稼掛ゟ石撰雇入、銅氣有之分拾ひ取、粉成吹仕候得共、銅登少ニ付、中絶いたし候處、寛政元酉年猶又伺之上取揚仕、本途銅鏈同樣粉成吹仕、御入用之義、本途御買上代ニ而は引足不申候ニ付、別段被仰上、金直一歪を目當ニ御金藏ゟ請取、出來銀銅は本途同樣取計申候、

但三番彈鏈と申候は、敷内ゟ穿上候鏈石を一番に鏈ゟむだ石を撰分、其次むだ石中も薄鏈有之候ニ付、猶又撰取、其次ニ至、銀銅至而少く、本途稼之御差引ニ叶ひ難く候ニ付、御番所外川通江彈捨、是を手入之上撰立候を三番彈鏈と唱へ、銀銅ニ吹立申候、且金直之儀、以前は灰吹銀壹貫目ニ付、金三拾四兩三分餘ヲ目當ニ仕候處、兩餘吹立之積りを以、金直追々改候、當時金五拾五兩餘ヲ目當ニ粉吹仕候、

銅鏈粉成方之事

一毎十日致山下ケ候銅鏈荷藏江入置候分、又貫目改帳面ニ記し、石扣之ものへ相渡、金場ニ而細ニ扣きさく旅と名付候丸旅ニ而揮ひ通し、右扣粉溜置、追而板取之者へ相渡申候、金場補理方之儀は、本途勝場粉成方同樣ニ御座候、

鼻不可近火純炭向面、爐冷定取出、隨礦質小異、此其大略耳、

取鍰（鍰之浚久不雜者、鍰即錑字也、錑見于此、）

凡取鍰、爐下設爐數（前之多、真如此、）造洪爐（用此字、俗古、）爐前通一槽道、豪置二座安置增背、將爐礦放之、爐炭之上、二人執高鼓鞴、一人立于爐頭、手把長鐵杖、分攪安排、及風火力到鎔化盈科、其土滓（俗名之土鍰、）輕浮、浮々然流注槽道、隨出冷結、或灑水取而棄之、礦盡更釀、炭耗復加、候其良者滿爐、乃攪除土滓炭火、故灑水於爐面、令鎔汁暫冷結作皮起狀、（俗謂之鈹、）用鐵條剔而取之、且灑且剔、鍰已盡焉、爐底自有銅一塊、（俗謂之）

（豐古利鍰、）礦之鍰者或無有耳、

取銅（銅鈹者鍰之底耳如此、）

鎔鍰取銅、略同鼓礦取鍰之法、但及鎔汁滿爐、土塗叢洪爐穿留一小孔、入炭鞴之、有滓輒去之、候觀其熱鬨、爐悉除其紅炭土滓、待熱勢退灑水取之、亦似取鍰之狀耳、

右自坑採至始成銅者、悉屬之銅山焉、官制銅不許私賣、皆令輸之浪華銅局、令爐戸鼓鑄、而後定其甲乙、配其價值、銅有供長崎和市之貨者、如別子秋田南部是也、有充市井鑄造之用者、三處之外皆是、爐戸亦有定額、不得叨增損、蓋防其姦也、銅之夾鐵夾白目者、與純銅不雜者、爐法有二途、具列于後、

再鍊（銅之純不雜者、）

各郡所出銅、再鍊之於洪爐、既熔化、去土滓、出紅炭、更鼓鞴、鼎溶汁、待熱勢稍退、灑水冷結、用鐵杖取之、是爲再鍊銅、徑尺餘、厚五分許、爐底漸小、略如取鍰法、大約一爐受貳佰伍拾斤許、日鎔三爐而止、

三火（銅之夾鉛、俗不雜、）

將再鍊銅、放之於爐中坩鍋上、鎔之、側貯一桶湯、設方板池、池中置模、模上布厚（俗）布、銅既化矣、去滓熄火、注湯於池、則極熱湯盈于模、鑄工執大鐵鉗、鉗定坩鍋、傾于模上、先灑湯者、恐其激迸也、（模木之模、坩鍋之）

入レ炭ヲ加テ、火ニ熾ンニ吹キ起シ、上ヨリ銅鑛一二斗ヲ投ジテ、炭ヲ加ヘ頻ニ鼓鞴テ、又鑛ヲ投ジ炭ヲ加ヘ、此ヲ廠スルコト四五時、銅ヲヨク鎔化シテ湯ノ如クナルニ至リテ、乃チ杉木ノ竿ヲ以テ爐ノ下ノ穴ヲ衝開リテ、其鎔タル銅ヲ流ストキハ、鎔銅ハ泉ノ湧出ガ如ク流ル者ナリ、爰テ其流下ニ垣生ト砂トヲ煉リ混レル上ニテ、數多ノ型ヲ造リ置テ、其型ニ流シ入レテ、方長キ板ト爲コト、古來諸銅山皆ナ常例ノ如シ、

〔鼓銅圖錄〕鼓銅錄

本邦銅山〇中略鼓鑄之法亦以異、銅有受錘鍛者、有可冶鑄者、大率夾銀鉛者性柔、錘作瓦片、抽成條綫、如夾白目者質剛、錘即拆裂、不堪爲綫瓦用、若剛柔合鍊、則亦不妨、鉛錫之類參和者爲響銅、中鐘鏡之用、亦各有剤云、若夫坑採鼓鞴之方、概列於左、

鑛氣鑛氣俗用鑛字、言也計

凡銅山有石夾土者、有純石者、礦中有銅璞、其上必現鑛氣、其色赤黑、土石皆然、總連成一條路、或長或短、或廣或狹、有濃淡、有淺深、隨銅璞多少、蓋銅精所纂成云、採工審察焉、以辨銅之多少美惡、

採璞璞俗假鉑字、言波久

山上鑛佳者、其下數丈鑿穴、逶迤而入、隨入樹楷柱、橫板架其頂、石屑塡其間空、以防崩壓、坑門俗用四字、言興津豐女、採工提爍燈、逐鑛施鑽、入十丈或二十丈、工程不可日月計、然或過或不過、有過而斷者、有斷而復續者、有總連不斷者、有深入漸牢者、有忽小忽大者、有枝分者、有一幹無枝者、包裹銅璞之石、形狀不一、爲棄置無用物、其璞有黃黑紫赤光暗種々之別、得銅之多寡亦各異、然土性之不均、不得執一以概其美惡、撥璞細碎、揀去其非者、曰碎女、訓如奈眞大凡璞之美者、十而得銅一、賤者不過二十得一矣、

煅璞璞煅過者、俗訓之也貴流久

凡煅璞、屋下作竈、竈俗訓之也貴加末竈底布薪、而布璞、一薪一璞、重疊到上、其下鑿竇、透風於火、烟有硫黃氣、撲

ノ火ノ赤キヲ積ミ累ネ、其上ニ大抵圓ク大キサノ釜ニ口ヲ開タルヲ取テ覆ヒテ蓋ト爲シ、小キ風箱ヲ用タ、此ヲ鼓鞴アホグトキハ、銀モ鉛モ鎔化シテ圓月ノ如シ、トキニ炭火ヲ加テ暫ク此ヲ吹クトキハ、鉛ハ漸々灰ノ中ニ沈ミ、後ニハ銀ノミ多クナリテ、二物ノ金色分明能ク見ユル者ナリ、其鉛ノ色ノ變ルヲ度トシテ、即チ火ヲ消シテ此ヲ採ル、此レ純銀ナリ、此ヲ灰吹ト名ク、凡ソ灰吹スルノ法ハ、金モ銀ニ皆同ジ、又其銀ノ灰中ニ沈ミタルハ、灰ト共ニ凝結シ、一團ノ塊ヲナス者ナリ、此ヲ密陀僧ト名ク、所謂ル金密陀、銀密陀ハ、其混ジタル金ニ因ルノ名ニテ、皆鉛ノ灰ニ混ジテ凝聚ミタルナリ、故ニ爐ニ入レテ煉ルトキハ再ビ復鉛トナル、然レドモ密陀僧モ術家ノ諸惡ヲ治シ、膏藥ヲ煉ニモ必用アリ、其他罌子桐ノ油ニ混ズレバ凝厚ニ爲リテ漆ノゴトシ、五色ノ丹青ヲ和スルニ甚ダ美ナリ、故ニ紙帳草蓆及ビ紙合羽等ヲ製スル家ノ要用ノ物ナリ、

〔日本山海名物圖繪 一〕銅山床家

釜家にて燒たるあらがねを湯にわかして、丸銅に仕あぐる所を床家といふ也、銅を湯にわかす時、銅うへに吹いでたるをかわをりといひ、又そこにこりかたまりたるをとこじりと云て、二品あり、又石土の湯となりたるをからみといふ、又どよともいふ、わかしたるあらがねをひやす所をどよがといふなり、○中略

南蠻吹

なんばんふきは、たゝらかべにつけ、はぐちをして、二てうふいごにてふく也、銅よりなまりをしぼり取に用ゆる也、又銅より銀をしぼり取にもこれを用ゆる也、

〔山相秘錄 下〕銅山鎔鑪

凡ソ銅鑛ヲ煎煉スルノ爐ハ、高サ六七尺、徑リ四五尺ニシテ、鑄造爐ノ如ク下ニ孔ヲ穿ツベシ、土塀及ビ風箱ヲ安置ルナリ、大抵金山銀山ニ同、最初ヨリ火爐ニ鉛ヲ納置ルニモ及バズ、唯炭火ヲ

凡風箱ヲ並ベテ洪爐ヲ鼓鞴ニハ、甚ダ警ムベキノ大事アリ、何トナレバ、炭火ノ既ニ熾ンナルニ當テ、其三箇ノ風箱ノ内ニ、其若シ鞴棒ヲ進退スルコト万一齊シカラザル者ナレバ、其風箱忽チ破裂シテ、事ノ成ラザルニ至ル者ナリ、故ニ風筥ヲ並ベテ吹トキハ、鞴夫等、分身一體ニ爲、チカラヲ合セ、心ヲ同クシ、掛聲ヲ均クシテ、皆謹テ其鞴棒ヲ一齊ニ進退スベシ、遲遲ニシテ事ヲ誤ルコト勿レ、凡ソ礦砂ヲ荒破スルニハ、先ヅ鉛十斤餘ヲ、火處ニ安置シ、其上ニ炭、ノ木ヲ輿シ、且硬炭五六團ヲ加テ、此ヲ鼓鞴シ、其赤クナラントスルトキ、淘洗ヒタル礦砂二斗許リヲ上ニ投ジ、又其上ニ炭ヲ加ヘ、其炭ノ赤色ヲ發スルトキニ、又礦砂ニ投ジテ炭ヲ加ヘ、斯クノ如クスルコト四五度、大約礦砂一石ニ炭二十團餘モ用テ、鼓鞴ルコト四時餘ニモ至ルトキハ、礦砂皆悉ク鎔化シテ、飴ノ如キ質トナル、俗ニ此ヲ飴ト名ク礦砂アリ、鎔化ルトキハ、石中ニ含有スル所ノ銀ハ、石ヨリ分離シテ下ニ脫出テ、流レテ鉛ノ中ニ混ズル者ナリ、若シ其礦砂ノ鎔化スルコト十分ナラザルハ、益々炭ヲ加テ此ヲ吹キ、其適宜ノ時ニ至リテ、水ヲ灌ギ火ヲ消シ、銀ヲ鉛ニ混ジタルヲトル、此ヲ荒吹ト名ヅク、

礦砂モ天性自然ニ、初ヨリ鉛ヲ多ク混ジタル者アリ、銅ヲ混ジタルアリ、鉛ノ多ク混ジタル火處ニ鉛ヲ置ニモ及バズ、然レドモ皇國ノ銀礦ニハ鉛ノ多ク混ジタルハ稀ナリ、凡ソ銀礦ノ未ダ荒吹セザル者ヲ新味ト名ク、既ニ荒味ノ經テ飴ニナリタルヲ枯味ト名ク、枯味ニモ尙銀ヲ頗ル含メル有リ、幾度モ打チ碎キテ末トナシ、新味ニ和シテ荒吹スベシ、枯味ノ質ハ硝子ト同性ナル者ナリ、銀氣ノ煎採タル後ハ墁ヲ製スルモ宜シ、

凡ソ鉛ニ銀ヲ混ジタルヲ分ツニハ、蝦蟇爐ヲ用テ此ヲ分ツ、蝦蟇爐又分金爐トモ名ク、此ノ爐ヲ造ルノ法ハ、大小ハ意ニ任セ、一箇ノ古釜ヲ地上ニ居ヘ、其中ニハ松木ノ灰ヲ充實シ、固ク押シテ上ヲ平カニシ、其中央ヲ少シ凹ニナラシメ、其凹ノ外ニ彼ノ銀ノ混ジタル鉛ヲ安置シ、四方ニ炭

て、その上を板ゆりにかくる也、此はたらき人は賃をとらず、衣裳にしみ付たる金の粉を取て、その日のいとなみとなる也、昔はとぢ金といふて、黄金一かたまりにかたまりたるが出けれども、今はそれは甚だまれにて、唯はくいしばかりなり、いにしへみちのく山にこがね花さくといへるはとぢ金なるべし、

〔日本山海名物圖繪一〕銀山淘汰の繪

銀山の鉑石、上の繪にあらはすごとく、打くだきて粉となして、水にてゆる也、金山の板ゆりのごとく、但銀は水ゆりにすることなく、直に焼釜にてやく也、淘汰の仕やうは、半切桶に水を汲入、かなめ鉑を鉢にいれ、水にてゆれば、土石は皆半切桶の水におちて、銀は鉢の中にのこるなり、たいていは金山の板ゆりと同じことなり、

〔山相秘錄上〕銀山第三

凡ソ坑夫等ニ賃銀ヲ與ヘ、且其堅固タル銀礦ヲ打碎テ、此ヲ淘汰スル等ノコトハ、大抵金山ノ條下ニ設タルニ異ナルコトナレ、只其烘爐ノ築キ様ハ、金山ヨリ大ニスベシ、土竈ハ高サ九尺、横二間餘厚サ二三尺ナレバ、宜キ者ナリ、風筒ハ四尺五六寸ヨリ五尺許ナルヲ三箇スヱベシ、風ゼ透シノ管ヲバ土器ヲ以テ造リ、其組様ハ土竈ニ近キ風宮ノ管ヲ上ニシテ、其次々ヲ漸々下ニシ、此ヲ三段ニ組累テ、土竈ノ下ニテ合シテ一管トナシ、以テ其風穴ヲ火處ニ達ス、火處ト爲スベキ處ヲバ、燥ク温氣ナキ土地ヲ擇ビ、深サ二間許リニ坑ヲ掘リ、下二間程ニ炭ヲ粉ヲ實シ、其上一間ニハ壇土ト砂トヲ谷牢漉ニシテ、能ク煉テ擣キ固メ、其上ニ高サ五尺、徑リ五尺許ニ、煙爐ヲ築クベシ、是レ一度ニ多クノ銀礦ヲ鼓鞴ニ用ル者ナリ、若又一石許リブヽノ銀礦ヲ吹ニハ、土竈ノ前五尺四五寸ノ處ヲ正中トシテ、四方二尺四五寸、深サ一二寸ノ圓キ稻坎ヲ爲シ、土墩ナシニ吹モ又宜シ、此土墩ナシノ火處ハ、炭ハ費多ケレドモ、甚ダ手際ノ宜キ者ナリ、○中略

淘汰圖錄

合せ物加減有之候、
一吹屋建様　鏈を吹候上は、屋根に四尺四方程の空を明け、屋根のうへ迄、煙窓と申、四五尺四方を石壁にして、屋根より下一方は土壁、三方は壁なしに調る、
一吹床は、右煙窓の下深さ三尺に、廻り七尺程穴に堀り、炭を砕き、土を煉り、右穴の目を厚さ貮尺程にぬり上げ、其後ロ土壁にして、穴を二ッ明け、其前には口と申物を置、右爐の内へ、吉き炭を入、其上に矢炭を横に渡し吹立、其上に合せ鏈を置、土壁の後より吹子貮挺にて吹込申候へば、合鏈湯となる、強く吹候へば、追々上へ浮候て、流れ捨り候、是をからみと申、幾度も浮候からみを去り候へば、床尻と申、鉛と銀と一緒に堅まり、底に殘り候を、水を打候て上げ、床尻鉛と申候、
一銅鉸の儀は、先き上りに拵へ、壹床に吹込、銅八貫目程宛入、其上へ炭を入、頭より吹子を仕かけ、吹立、右銅、火色に相成候節、鉛をさし候へば、鉛熔け流出候をゑぶりと申物にておし返し候へば、銅和らぎ候内より露の如く鉛湧流れ申候、尤鉛銅の内、銀氣連れ卸し候を、たり鉛と稱ふ右たり鉛、幷に前條に有之候床尻と一緒にして、四五十貫目又は百貫目計宛灰吹仕候、○中略
一裏目仕様は、裏目床と申爐礎の様に拵、灰を入、其上に又うわ灰を置、九寸廻り程丸にくぼめ、其内へふり灰と申爐滓を砕候て入置、右灰吹銀入置、其上に吉き炭を入、松の木炭を置、小吹子を以吹解し、其湯色を見合せ、吹子を止め、撫棒と申横木の細きを以、灰吹の上をならし、水を打冷し、引上げ申候、是を裏目吹とも清吹とも申候、當時御定法七步三六入の灰吹は、花降上銀と申、裏目吹湯色花の様なる物出候を、目當消吹致し候、尤其節は掛り役人兩人宛相詰、吹方見屆、位相改、包立封印を付、銀吹へ相渡候へば、翌日役所へ持參秤定致し、引替銀相渡申候、
〔日本山海名物圖繪　一〕金山淘汰(ゆり)繪
金山はほり出したるはく石をくだきて、石うすにてひき、からうすにてつき、猫田ながしにかけ

是は白鏈の内白石の所迄、鉛の如くなる物入込居候をとぢと云、右とぢを當にあて候得者、ひらたく相成候、しやりとおは、齒ざわりさら〳〵と致し候、いづれも吹立候へば、白銀に相成候、

水筋　鐵筋　茄子實　羽色筋（此すじ多く、しや筋にあり、）

是は筋鏈をはたき候てゆり候へば、金粉の如く見へ候、則金也、是を水筋といふ、

拔物

角ぎん　すがめきん　粟の粟ぎん　靑　まぎん　白ぎん　すぎん赤目ぎん　惡

是は鏈石をはたきゆり候へば、鏈色の處見へ候、是をはいろと云、白銀に成候也、又白は色と云は灰色也、きうはいろと云は鉛に相成候、

〔銀山舊記〕鏈吹方取扱

一鏈捨と申は、鋪より上り候荒鏈を、半切と申、深一尺一二寸、差渡二尺四五寸の桶に水を入、ゑよと申笊の狹り候目荒のざるに入、右桶の内にて洗候へば、鏈に付候土石、水底に溜り申候、右ざるの内に留り候鏈に混ひ候石を、鎚の嘴と申物にて砕き、石と鏈とを分け、石を捨て申候、右水底に留り候土砂交りの鏈は、ゆり鉢と申て、差渡二尺計り、深さ三寸計の木地鉢に、右鏈を入れ、水につけ、ゆりて土石を去り、正味鏈に相成候を、ざるの内に殘り候石を去り候鏈と、一緒に打込み、荒鏈十貫目に付、正味何百何十目と相成申候、

一鏈吹方の儀、前々大盛の節は、正味鏈五百貫目に、こわりあへ百五十貫目宛、三百貫目、合せ都合八百貫目を、大吹一間入ッ吹流しに吹候へば、當時は小吹にて、大概正味鏈六十貫目に鏈四十三貫目、但こわりと申は、鐵氣無之白面と申石也、あへ七貫目、但鉛鏈の事也、からみ拾貫目、但からみは吹からみ也、都合百二十貫目を一日吹入ッ吹と申候、但あへからみは、鏈吹床にて、かわき解兼候をとかし候爲に、合せ申候、こわりは吹床ねばり候を、さやかに致し候に用ひ候、尤鏈帳により、

べの者へ遣し候故、無給にて小遣に致し候、どべの者鑛撰立候所を、どべ小屋と云、御番所外に有之、どべの者自分にて建置候下鑛撰取候跡を川へ捨候を、又川にて女子共撰拾ひ候是を拾ひ石と云、銀山外濱川にも古來より自然と流れ出候哉、鑛石有之、是をも拾ひ取買石へ賣申候、此鑛を買商賣に致候を拾ひ石賣と云、

鑛石の名大概

金有之鑛を筋鑛共、又銀通り鑛共云、銀有之鑛を白銀鑛と云、銅有之鑛を銅鑛と云、鉛有之鑛を

キロン鑛又ぎら鑛共云、

筋鑛之分

やしや（筋の性は能候得共、風く鍛ざる物也、）　銀通り（吹味能鑛なり）　かすけ（筋鑛の最上也）　娃子の頭　金皮ねば　すれ目

くるみ石黑　硯直り　紫地　血腸物

右之外

川砂　唐島　燒刃　びろうど　鳥の目　孤　蛇體（此類の鑛古來は出候由、近年出ず、）

銀鑛の分

黑物　すばい黑物　路色地　銀陰目　白征　かはらけ　ふすま黑物　堅地ふすま　ぎうん

淺黄地　ぬめ地　かる石　赤はら　髮色　とたん　鑞のふん　さかみ　くさ　そは皮

牛の皮ねば　はゝかすけ　のた付（是はごふんの如く、鑛石にればの實り候なのた付といふ、）　ほう（鑛石よろしく相見へ候得共、吹上候儀無之候、し）

かし直り（候へば盛に廣申候、）

右の外

松の皮　青さ　はゞ　ほうはゞ　虎の子　ちゞみねば　かすけ黑物　路つほう（トザの堅りたるなど云）

とち（白トケ）　鉛（トザ）　きら陰目　ちやりとち　のりめとち

かますと云、或は三ッに疊み四ッに疊て、袋の如く底側を繩にて縫ひ、鉑を入候て、口をも右之通縫ひ納め候、此繩を鉑繩と云、
一敷内より揚ゲ候て、いまだ不撰分鉑を穿込鉑といふ、敷内にて穿込の内、大概上鉑にも可成。と致候には、かます印をつけ揚候故、印揚といふ、
一鉑石撰方と云は、前段水揚へ仕込たる鉑石を撰床へ坐候て、上鉑中鉑中より少し鉑目に見へ候を本中といふ中鉑をば仲中と云、仲中より少し劣候をば、又中と云、此下有之ヶ下中と云、かやうに鉑の段を分候一段を鉑壹本と云、扨ばら鉑にも上に成候ばらも中に見へ候ばらも有之、細鉑も右に同じ、依之素石とて石計りに致候鉑も有之、石ばらこまぜ三色交候鉑も有之、ばら計りこま計り出候鉑も有之、是は其時々かなこの者目利にて、石計りにて買候得者、直段能候得共、石目少くばうを交候へ者、直段は安く候得共、鉑買目多く相成、代銀割方に徳分有之と申積にて、右之通交合候、此儀はかなこの者第一に功者の入候事也、尤臨気臨変に致し候事故、十日ニ鉑取方違ひ候事有之候、取方とは右之通鉑の段を究候事を云、上中下共分難き鉑をば取究、一本に致し買候ゆへ、取込鉑といふ、鉑念を入、悉く撰候事を詰るといふ、
一鉑石撰候内白石勝なるを除置、外鉑撰仕廻跡にて白石を鎚にて打落し、上中を撰分候をかうひと云、右白石を打落し候鉑をからみ鉑と云、
一ばうの中に有之候白石を撰捨候事をばうをはくと云、細鉑は箕にて通し、土気等取候て製法致し候、是をこまを通すと云、ばうこま共に用立ず捨り候物をかすと云、
一鉑段々撰候て用立ず捨り候石をはじきと云、尤此中に稀き鉑有之も交候得共、かなこ手前ゟ撰分候ては、諸掛も過分に相掛り、其上右撰立候鉑の位に劣り候へば、稀き物ゆへはじき捨候、此はじき石をどべの者、かなこより買ひ候て、精々手を詰、下鉑と名付、買石へ賣申候、此はじきをど

一ヤニ地銀寄生　草木の脂に似寄候故、ヤニ地と申、銀寄生は宜候へども、地合不宜に付銀氣中、中品の鏈に御座候、

〔居龍工隨筆〕銅を堀たる者の物語に、山の土少くして、僅に人夫の粮に當たるのみにして、骨折たる所の益なかりければ、金をしぼり見んとて、其法のごとくにしてしぼりたるに、流石に金は出ながら殊外に微にして、炭薪の價、人夫の費をつくのひて、彼是共に餘に德分なかりければ、勞して功なしとて、金をしぼる事を止たりしといゝしに、實にやルスン、カボチヤの東國の大木古木いやが上に生ひ茂りて、炭薪の値賤しく、金のあたひ高所にて、銅をしぼり金を出さんには、其利分幾倍あらんも知らず、されば長崎へ年々來る蠻船紅毛船の、多く銅を得たく思へども、官より御定ありて、銀何貫目、銅何貫目、代る物何貫目の數量ありて、其外に出る事あらざれば、大なる藥鑵を夥數買て歸るは能智惠なりとぞ

分析

〔見聞雜記三十四〕一鏈石撰候者を石撰と云、女の業なり、かなこの者雇ひ入申候て、鏈撰せ候者也、貫目鏈石多少に不拘、一日に三時計り三拾貳錢ゟ貳拾六錢位迄なり、明六ツより暮六ツ迄撰詰候へば、貳枚屑とて、右の一倍違し候、

採鑛

一鏈入置候物を鏈箱立といふ、竪六尺、横四尺、深サ五尺、厚板にて箱を拵、土中へ貳尺堀込、上の蓋に鎖前を付候物也、此中へ總じて鏈を入、かなこ荷印附置候、此外諸品入置候箱立も有之、是は油を第一に致し候故、總名を油箱立と云、此箱立と云譯は、古來銀山大盛いたし候節者、鏈數多ヶ樣の締も屆かね候に付、筵を立圍ひ、其内へ入置候、其後箱に入候ゆへ箱立と云由、建物と云も、右箱立差置候所故、名付候由申傳候、

一總じて鏈石入取扱候物をかますと云、是はかます筵とて、筵を荒く織候ものにて、大小有之、大は大概幅壹尺六寸位、竪四尺五寸位、是を拾四貫目と云、小は大概幅壹尺五寸位、竪四尺位、是を並

一炭地　此鏈は炭に似寄候故、如斯相唱へ申候、地と申は、炭の地合に似寄候と申事に御座候、銀氣多く上品の鏈に御座候、

一レヨニ地ビタ　レヨニ地と申儀は、薄黑き所に、レヨニと申鳥羽色に似寄候故、如此唱へ申候、地と申は拾三番に註し候通に御座候、レヨニの地色成る鏈と申事に御座候、ビタの儀も前に註し候へば略之候、

一石地銀寄生　銀寄生の譯は、前に記し申候、此鏈石地にて鏈に銀氣生付候故、如此相唱へ申候、銀氣多き鏈に御座候、石地と申儀は拾三番に相斷申候地とは少し違ひ、石に巫ひ申候鏈に御座候、つて地と申事、此段相記し申候分も、右兩樣の内に御座候、

一燒味噌地　燒ケ焦ゲ候味噌の如き鏈にて、如此相唱へ申候、銀氣多き鏈に御座候、

一ビヤクヌメ　青白き所は、白鑞色に似寄候故、ビヤクと唱へ申候、光り候所鉄のツヤに似寄候故ヌメと唱へ、銀氣多き鏈に御座候、

一性銅地青氣（シヤウドウ）　薄黑く白き所を性銅地と申、青き所を青きと申候て、鏈氣多き鏈に御座候、

一鱗地　鏈の肌、魚鱗に似寄候故、如此唱へ申候、銀氣多き鏈に御座候、

一區紙地燒付銀寄生　地色區紙に似寄、銀寄生を燒付候樣に相見へ候て、銀氣多分有之鏈に御座候、

一青氣吹アラレ　壹番に相斷候通り、石中少し窩空に成候所に有之鏈を吹あらしと申、青き所は銀氣多く御座候を青氣と申、銀氣多き鏈に御座候、

一ガゼ地青氣鏈　ガゼと申貝に似寄候石肌故、名付候也、青氣鏈は前に相斷候通りに、銀氣は多く有之候へども、右石に交り候に付、銀氣劣り、中品の鏈に御座候、

一朱色　色合赤き故如此唱へ候、銀氣中品の鏈に御座候、

一牙銀寄生、右同斷、牙に似寄候故、如此名付申候、上品の鏈に御座候、

一二黄目地花銀寄生蛾子　黄色なる所も鏈にて、二黄目と唱へ、白タ、ヒラ〳〵立候もの、花の如き銀氣生にて花寄生と申、黑く付候處は形蛾子に似寄候故、アリノコと申、何れも銀氣多く上品の分に御座候、

一六方　銀氣生類にて、銀氣至て強、六角に生候も有之、其種類に御座候へば六方と唱へ申、銀氣多く、上品の鏈に御座候、

一青氣六方　右同樣に御座候へども、色青く御座候ゆへ、如此唱へ申候、銀氣多く上品の鏈に御座候、

一ピク　此鏈は吹熔し銀に成候潟、ピク〳〵致し候に付、如此相唱へ申候、銀寄生に續候て、銀氣多く上品の鏈に御座候、

一青氣ピク　右同樣に御座候へども、色青く御座候ゆへ、如斯相唱へ申候、銀氣多く上品の鏈に御座候、

一二黄目絹張　二黄目の譯は四番に相記し候如く、少し白き所、絹を張候樣成處を、絹張と唱へ申候、銀氣多き上品の鏈に御座候、

一黑　色黑く、格別に光候處相見へず候へども、銀氣多く、上品の鏈に御座候、

一茶色鉛　鉛と申候は、金銀の鉛に似寄候色を鉛と唱へ來り申候、茶色に相見へ候銅氣象多く、上品の鏈に御座候、

一卵石　たまごの如き石大小不同有之候へども、何れも內に鏈を包み候て、外へは鏈氣不相見候を目利致し、撰取打割候へば、內鏈有之候、其謙子卵の內外に替り候に似寄候故、如此相唱へ申候、銀氣多、上品の鏈に御座候、

鑛品

〔萱杜鑑〕差上申起請文之事

一今度諸國金銀銅鐵鉛山爲御見分御順山、私共被召れ候に付、諸向聊外ケ間敷儀無之樣急度相慎、御法度之趣堅相守、聊以御後闇儀不仕、諸事大切入念御事公可相勤候、尤異心を以申合、一味同心仕間敷候、若左樣之儀申懸候ものも御座候はゞ、早速可申上事、

附、傍輩と中惡敷不仕、意趣遺恨等不相含、隨分正路實體可相勤事、

一御尋之儀は、不依何事有體可申上候、御隱密之義承候はゞ、縱親子兄弟に而も、一切他言仕間敷事、

但御尋筋と事存候義は、輕き儀に而も御用人中江可申上事、

一山師鑛子下財百姓町人、何れよりも、金銀米錢衣類諸道具其外輕き品に而も、一切受用不仕、押買押借貸仕間敷候、勿論酒肴何に而も馳走ケ間敷義請申間敷事、

但此度順山之役人中、御侍衆に至迄、御行跡不宜義見及候はゞ、密々可申上事、

一三笠博奕惣而勝之諸勝負、一切仕間敷候、御一行御見分中、御威光を以相掠候樣成儀無之樣急度相慎、各ケ間敷義不仕、好色不作法仕間敷事、

〔銀山舊記〕鑛品附

一銀寄生ガイ　鑛筋の内、銀氣付候處ガマ抔の内に有之、又は石に生れ候も有之候、至而宜敷鑛にて、不吹其儘の銀にて御座候、但鉒と申は、土石の内に鑛有之筋を鉒と申、たとへば海中へ大河の水筋立候樣に、土石の内に土石の筋相分り申候、ガマと申候は、石中少し窕空に成候處御座候儀、ガマと申候、銀銅杯に成候石を鑛と申候、

一白髮銀寄生ハクハツギンキセイ　銀寄生種類品々御座候内、シヲガに假寄候故、白髮銀寄生と申、上品の鑛に御座候、

ルニ足レリ、

〔山相秘錄〕下 硫黄第九

硫黄山相

自然火ノ常ニ燃ル山ヨリ硫黄ヲ出スコトハ、皆人ノ知ル所ナリ、燒山ニ硫黄ヲ多ク吹キ出シテ、圖ノ如クナルヲ、土俗ニ麹屋地獄ト云フ、俗ニ山ノ常ニ火ノ燃ル所ヲ地獄ト云ヒ、硫黄ノ多ク吹出タル形狀ハ、麹ニ似タル者ナルガ故ナリ、其麹ノ如クナルヲ採テ少ワト煮テ土滓ヲ去タルヲ煮硫黄ト名ク、又山ノ燃ル處ニ、桶カ、笠類ヲ覆置トキハ、五七日ノ中ニ、其内ニ硫黄溜ル者ナリ、此ヲ生硫黄ト名ク、總テ硫黄ノ白色ナルヲ鷹ノ目ト稱ス、上品也、黄色ナルヲ鶉目ト呼ブ、中品ナリ、青色ナルハ下品ナリ、鷹ノ目鶉ノ目ハ、藥用ト鐵炮ノ火藥ニ用ユ、下品ハ引火品ノ用トスル、

鑛山發見

〔譜牒餘錄〕後編三十八 處士之下 渡邊七右衞門　同善左衞門 〇中略

一傳馬貳疋無相違可相立候、是者金銀鉛山見立ニ違者也、仍如件、

慶長拾壹年六月十八日

大宿中

是ハ國々へ、御使ニ被遣候證據ニ被下候御朱印之寫ニ而御座候、〇中略

乍恐、備後先祖之儀者、百年以前天正之時分迄ハ、周防國久我郡高森之城主、石州鹿足郡諏訪野村三本松之城二ケ所之城主ニ而、證據ニ古き城跡于今御座候、〇中略 其以後此城はなれ、普代之者共、致近所ニ百姓ニ罷成居申候、備後儀は、權現樣江、御陣之砌は、罷出相勤申候、〇中略 慶長十一年六月十八日、御朱印壹通、御傳馬貳疋被爲下候、〇中略 其時分者、御陣多く、銀なまり竹たばたけ無油斷才覺仕、御用に走廻り申候、次には國々所々江罷越、鉛山を見立申候とて城之要害見置、御尋之砌は、樣子言上候、歲若き時分より御用に走廻り申候而、其以後御傳馬貳疋之御朱印頂戴仕候、是は大坂御陣九年以前に被爲下候、

一蓮白子　一す炭白子　一鼠白子　一枈の葉白子　似たり色にすみ、道明地、とふ白、かねにならぬもの也

〔山相秘錄〕水銀第八

水銀ハ朱砂ト同様ノ物ナリ、故ニ土地ノ赤色ナル處ニハ必水銀ヲ含有スル者ナリ、且又水銀ヲ多ク含畜スル地ハ、其處ノ砂石自然ニ折裂シテ碎崩スル者ナリ、凡ソ山ニ水銀ヲ含有スルヲ相シ得バ、先ズ其土ヲ掘テ水銀ノ苗ヲ求ムベシ、苗トハ即チ水銀ヲ含タル鑛石ヲ云フ、水銀ノ鑛ハ白色ナル者、淡青色ナル有リ、或ハ黄色ニ丹色モアリ、赤土ヲ坑ヲ鑿テ折裂シタル石ヲ得バ此ヲ採ニ升煉ノ法ヲ行ヒ、實ニ水銀ノ有無ヲ試ムベシ、若シ升煉ヲ法ニ行テ少シデモ水銀ヲ得ルコトアリ、金銀山ニ說タル如ク、栗丸太ヲ以榰木ヲ立テ、棟梁ヲ架シテ、上ヲ崩壞ザル備ヲ爲シ、次第ニ其苗ヲ逐テ前進シ、地ヲ穿ルコト數十丈ニ至ルモ可ナリ、若シ夫レ鑛石ノ丹色鮮明ナル者ヲ得ルコト有ラバ、硏朱水飛シテ朱砂ヲ製スベシ、朱砂ノ價ハ大ニ水銀ヨリ貴キ者ナリ、又純赤色、淡白色、黄色鑛青色等ノ鑛ハ悉ク升煉シテ水銀ヲ採ルベシ、又水銀ニ硫黄ヲ混ジ煅煉シテ朱ト爲ス法アリ、然レドモ此ハ製煉術ノ事ニシテ山相ノ事ニ關ラザルヲ以テ茲ニハ論ゼズ、

按ズルニ、水銀ハ礬石ノ精液ナリ、故ニ其性ヨク硫黄ニ合體ス、水銀ト硫黄ト合和スルトキハ、即チ黑色ノ塊ヲ爲ス、所謂ル黑色ノ塊ニ鉛ヲ混ズレバ、青色ヲ發ス、或ハ礬石ノ氣ヲ混ズルトキハ沈°白色ニシ、或ハ硫黄ノ氣多ケレバ微黄色ヲ帶タル塊ト爲シ、此等ノ理ヲ推テ水銀鑛ニ種々ノ異色アルコトヲ察スベシ、又水銀ト硫黄ノ混合シタル黑色ノ塊ヲ、火氣ヲ以テ假テ此ヲ熏蒸スル乎、或ハ自然ニ土地ヨリ催ス熱氣ヲ含ムトキハ、必赤色ノ發スルコト、即チ是産靈神天地鎔造ノ妙機ナリ、水銀ト硫黄ヲ煅煉シテ朱ヲ製スルノ法ハ、即チ妙機ハ擬タル者也、此等ノ神理ヲ合セ按フルトキハ、水銀ヲ含畜スル土地自然ニ赤色ニ發スルコトモ、然シテ察ス

テ前進スルコトハ、銀山ヲ掘リ銀礦ヲ振ル法ニ異ナルコト有ルコトナシ、然レドモ銀山ヲ掘ル如ク、深ク遠ク掘ルニモ及バズ、鉛鑛ハ繁多ナ、ル者也、其大ナルハ板石ノ如クニ鈍鉛ヲ出スコト有リ、或ハ大豆ノ如キ有リ、裙帯豆ノ如ク長キモノ有リ、或ハ零石ノ如キ有リ、竹ノ根ノ如キ有、且其鑛ニ硬ト軟ト二種アリ、色ニモ、深黒、淡黒、灰白、黄赤、深緑等ノ異アリ、其深黒色ノ鑛ヨリ取タル鉛ハ、光澤美麗ニシテ極上品ナリ、然レドモ黒色ノ鑛ハ、其性甚ダ硬クシテ、鎔化スルコト容易スカラズ、旺ル炭火トチカラヲ費スコト也、宜ク諸金ヲ速ニ鎔スノ法ヲ行ベシ、

凡ソ鉛鑛ヲ煅煉シテ、石ト鉛トヲ分離スル法ハ、銅ニ異ナルコトナシ、且鉛ハ其質甚ダ柔軟ニシテ、火ニ爆タトキハ速ニ鎔化シ、鼓鞴力ヲ勞スルニモ及ズ、故ニ爐ノ下穴ヲ塞ズシテ炭火ヲ强クシテ、上ヨリ鉛鑛ヲ投ズルトキハ、鎔化ルニ從テ穴ヨリ流レ出ル者ナリ、宜ク穴ノ下ニ型ヲ造リ置テ、意ノ欲スル如ク其形ヲ鑄造スベシ、抑モ此鉛ト云フ者ハ、諸金ヲ自在ニ變化スルノ功能アルノミナラズ、水休屋根瓦杵鑑鐵炮丸ヲ造リ、且白粉ト爲リ、黄丹ト爲リ、蜜陀ト爲リ、白蠟ト爲リ、其他種々ノ藥物ト爲テ、醫師、畫師、染師、陶工、塗工等ニハ極テ要用ナルヤフナレドモ、餘リ多ク掘リ出テハ、此ヲ賣ニ甚ダ困窮スルコト有、太平ノ世ニハ殊ニ入用ノ少キ者ナリ、故ニ鉛山ヲ開クニハ、此ノ勘辨ヲ爲スベキコト、此レ亦開物家ノ一技ナリ、

近來佐竹家ニテ鉛ヲ多ク掘出シ、其中ヲ三百五十萬斤程ヲ大坂ニ運送セシニ、大坂ニハ一向ニ望ム者ナク、年々少シ許リハ賣捌シカドモ、仲二百萬斤モ買者ナキガ故ニ、今ニ布屋丁ノ藏屋舗ニ山ノ如ニ積テアリ、

(鑛山聞書)鉛山之山色

一大寒石金　一小寒石金　一綠青白子　一羽から白子　一牙白子　一燻粕白子　一砥の粉白子　一鳥返し白子　一きわた白子　一ふけ白子　一石金白子　一石膏白子　一透り白子

色ノ鑛モ亦多シ、又豐後日向ノ錫鑛ハ、其形柘榴ノ如クニシテ、黒色ニ淡青ヲ帶ブ、伊豫ノ西條鑛ハ、黒色ニシテ大塊ヲ爲ス、鳥海山、月山、及ビ阿蘇山、白山等ノ鑛ノ溪川ニ、往々錫ヲ含ミタル小石アリテ、小ナルハ綠豆ノ如ク、大ナルハ番瓜ノ如ク、其色淡藍ニシテ白條アリ、總テ大山ノ澗中ニハ、極上ナル錫鑛アル處多シ、能ク探索スル者アラバ、必ズ錫ノ極テ多キ處ナラン、

錫山ヲ開發スルニハ、山相家ニ於テ一箇ノ秘事有リ、茲ニ其大略ヲ論ズレバ、凡ソ錫ヲ產スル山有リト雖モ、其鑛ニ磐石ヲ含マザル鑛ナラバ、其山ヲ開ク共大ナル利益ハ決シテナキ者ナリ、磐石ノアル鑛ヲ試ルニハ、先增堝ニ炭火ヲ盛ニ熾シ、其上ニ鑛石ヲ投ジ炭ヲ加ヘ、又其上ニヨク覆タル蓋盞ヲ被セテ、火ノ消次第ニシテ捨置ベシ、翌日火ノ消タル時ニ、其蓋盞ノ燒タル灰ヲ熟視シ、灰中ニ栓點ノ如キ凝固シタル者アルハ、即チ紅砒ナル者也、此紅砒ナル鑛ナレバ、磐石ヲ含有スルノ證ナリ、此ナキハ磐石モナキコト必セリ、

凡ソ錫ノ山高キ處ヨリ出ルヲ山錫ト云ヒ、溪川ノ中ヨリ出ルヲ水錫ト云フ、山錫ハ其光リ清ク、水錫ハ其光リ混濁シ易キヲ以、山錫ヲ上品トス、且又此ヲ爐ニ吹タル滓アルヲ沙利ト名ク、純粹ノ錫ナリ、聲ナキ者ハ鉛ノ混ジタルナリ、凡ソ錫鑛ノ火塊ナルヲ錫爪ト云ヒ、粉碎ナルヲ錫砂ト云フ、此ヲ煎スルノ法ハ、大抵鉛ニ異ナルコトナシ、唯タ其炭火ニ生水精ヲ鎔ヘ加テ鼓鞴ヲ異トスルノミ、或ハ錫鑛モ其性ニ因テ極テ熔化シ難キ者アリ、其時ハ鉛少シ許リヲ上ヨリ投ズレバ、卽チヨク溶解スル者ナリ、開物ニ志アル者、務テ此物ヲ多ク出セヨ、

〔山相秘錄下〕鉛山第六

鉛ヲ含有スル山ハ氣シテ立コトハ、既ニ總論ニ述タリ、且塲樣石ノ形色モ圖ニ詳ニセリ、且又礪石ノ色モ其先リノ淺キ者ナリ、金銀及ビ銅ノ出ル山ニハ、其傍ラ必ズ鉛ヲ生ズル者ナリ、凡ソ鉛鑛銀礦ノ苗ヲ山上ニ出現スルガ如ク、現レテ見スルコト多シ、其苗ノ現レ出タル處ヨリ、漸々堀

タルハ、太抵結色ナル者ナリ、其結色土ノ下ニ鐵アルニ非ズシテ、結色土ハ即チ皆鐵ナリ、

凡ソ鐵ヲ採ルノ法ハ、土砂ヲ急流ノ水ニテ洗フニ、先ヅ一升ノ土ヲ陶法ノ鐵砂一勺ヲ得レバ土ノ場トスルコト也、故ニ土山ニ鐵砂多キ者有ハ、其山ヲ土ヲ洗テ鐵砂ヲ採ルニモ宜シ、山ヨリ鐵砂ヲ採ハ、洗フニ便利ニシテ、其鐵モ又上品ナリ、海濱ハ土砂ヲ洗フニ不便ナルヲ以テ、極テ鐵ノ多キニ非バ利益ニハ成ザル者也、且海濱ヨリ出ル鐵ハ、銹ヲ生ジ易クシテ其性モ亦下品也、

山ヨリ鐵砂ヲ採ルヲ便利ナルコトハ、凡ソ鐵砂ノ多キ山ノ麓ニ、溝ヲ堀出シテ急流ノ溪川ト爲シ、山ヨリ其溪川ヘ土ヲ崩シテ此ヲ洗フトキハ、土ハ皆急流ニ流出テ、鐵砂ハ水底ニ殘ル者ナリ、此ヲ採テ二三遍モ淘汰シ、筵嚢ニ入テ駄荷ニ造リ、此ヲ精錬ニ聚メ以テ鼓鞴ノ用ニ供フ、又海濱ノ土砂ヨリ鐵ヲ採ルニハ、鐵砂ノ多キニ砂ノ流レ川ノアル處マデ持運テ、此ヲ洗フ事ナルヲ以テ、極テ鐵砂ノ多キ處ニ非レバ、雜費カヽリテ損多シ、又海濱ノ鐵ノ銹易キコトハ、鹽氣ヲ含ルコト多キ故也、

〔山相秘錄〕錫山第七

錫山ノ相ハ上ニ論ジタル如ク、蠟樸石ニモ其形ヲ現ス者アレドモ、皇國ノ中ニ亦タ此物ヲ盛ニ出ス處ナシ、開物家ノ探索スベキノ布ナリ、然レドモ此錫ト云者ハ、諸金ノ出ル山中ニハ多少ハアレドモ何レノ處ニモ有ル者ナリ、且綠色、白色、黑色ノ石ニハ、皆必ズ錫ヲ含有ガ故ニ、右二色ノ沙ニテモ石ニテモ、少シノ透明ナルヲ採テ、烘爐ニ炭火ト生木柵ヲ和シテ鼓鞴ルトキハ、錫ヲ得ル者也、然レドモ此業ヲ興スト雖ドモ、國家ノ利益ト爲スベキ程ニ、多分ノ錫ハ出ルコト稀ナリ、故ニ錫ヲ多分ニ含ミタル鑛石ノ有ル處ヲ探索シテ、新ニ山ヲ開發スベシ、錫鑛ニモ種々ノ異色マジハリテ、石瘤ノ有ルモ有リ、或ハ頗ル透明ナルガ如クニシテ、手ニ觸レバ油氣ノアルニ似タルハ殊ニ上品ナリ、此ノ上品ナル錫鑛ハ、野州仁田本村ニ在リ、此ノ仁田本村ニハ紫黑色ト綠黑

國阿仁山ヨリ出ル銅ヲ、彼ノ山ニ於テ南蠻鑪ニ煉テ銀ヲ絞リトリ、而シテ後ニ銅ヲ大坂ニ輸ス、大坂ノ銅局ニ於テ再ビ其銅ヲ重煉シ、又其銀ヲ搾リ取リ、而シテ此ヲ異國ニ出ス、異國人其銅ヲ得テ人此ヲ煉テ搾ル、銀ヲ採リ利ヲ得ルコト頗ル大也、日本銅ノ銀ヲ多ク含ムコト、此ヲ以テ察スベキ也、

〔鑛山聞書〕銅山之山色

一のし目鉑　一鐵鉑　一皮鉑　一炎灰鉑　一緑青鉑　一茶鉑　一豆の粉鉑　一あみた鉑

一割羽鉑　一鑵柄鉑　一桑の葉鉑　一川ちか鉑　一光鉑　一狐の尻鉑　一芋の子鉑　一紫鉑　一とかけ鉑　一厚のしめ　一赤のし目　一鋼至　一葉から鉑　一田土鉑　一留粕銅至

一結目鉑　一かね付鉑

〔山相秘錄〕鐵山說五

鐵ハ諸金ノ中ニ於テ別ニ一種ノ異物ナリ、其子細ト云ハ、諸金ハ皆必ズ岩石ノ質中ニ含ンデ生ズ、皆必ズ其有所ノ岩石ニ精氣ヲ貫發シテ、各々其種ノ鉑ヲ現ス者ナリ、然ルニ此鐵ハ土砂ノ中ニ混ジテ生ジテ、岩石中ニ生ゼザルヲ以テ、絶テ鉑ヲ現スコトモ無シ、夜中ニ其精ヲ發出シテ人ニ其有ル所ヲ示ス等ノ事ナク、凡ソ鹽鐵黒鐵青鐵赤鐵泥ヲ除クノ外ハ、何ノ土地ニモ必鐵砂ノ混リ有ル者也、即チ黒色、赤色、或ハ鼠色ニテモ磨テ、日ニ映ズレバ光ノ有モノ是ナリ、又其鐵砂ノ自然ニ石ノ如ク大塊ヲナシタル者アリ、此ヲ土錠鐵ト名ク、此ノ土錠鐵ハ頗ル大ナルモアル者ナリ、

土錠鐵ハ武州鐵入ニアリ、土錠鐵ハ其性頗ル玄石ニ近キ者ニテ、玄石ヨリハ少シク碎ケ難シ、玄石トハ慈石鐵ヲ吸ハザル者ヲ云フ、山海經及ビ管子等ニ、山上ニ赭アレバ其下必ズ鐵アリト云フ、必ズシモ然ラザル也、赭ノナキ處ニモ、鐵ノ生ズルコト甚ダ多シ、然レ共鐵多ク凝結シ

凡ソ銅山ハ石山モ有ドモ、大抵ハ土ト石ト錯雜リタル山多キ者也、故ニ此ヲ鑿リ採ノニハ、銀山坑ノ如ク、檣木ヲ立テ梁棟ヲ載テ、鳥居ノ樣ニ坑中ニ組立テ、普請ヲ丈夫ニセザレバ必崩ル者也、吝嗇ナル故事ヲ行テ禍ヲ受ルコト勿レ、銅山ヲ發撿スルハ、金山銀山ノ如ク、前撿ノ難キ者ニアラズ、凡ソ土石ニ諸青ヲ現ス處有ハ、皆銅ヲ含藏スル山也、譬バ諸青ヲ蒸發セルヲ見付ズトモ、岩石ノ間カ、或ハ深川ノ中等ニ、爐樣石ノ銗石ノ箱ヲ現スコト有ヲ、其小ヲ探索シテ所謂ル自然銅ヲ見出スニ及テハ、無造作ニ銅鑛ヲ採得ラルヽ者ニテ、金銀ノ如ク深ク堀入ラズニ、山ヲ開ノ損登ハ知ラルヽ者アリ、深山幽谷ノ奥ニハ、石墨ノ如ニ銅鑛ノ有ル處多シ、唯是レ人ノ深索セザルヲ患ルノミ、

奥州南部ト、出羽ノ秋田郡トノ間ノ山奥、飛驒ト加賀トノ間ノ谷底、及ビ伊豫ノ立川ノ深谷、肥後ノ米良ト日向ノ縣領ノ界ナル山中ノ谷川等ニハ、往々ニ銅鑛ノ生姜根ノ形ナルモノ、石原ノ如クニ多ク現ジテ在ル處アリ、

凡ソ銅鑛ニハ七種ノ異形有リト雖モ、何レノ銅ノ山ニモ生姜根ノミ多キ者也、色ハ生姜根ニモ六色トモ皆有リ、此ヲ採テ鼓鞴テ銅ト爲レバ、必シモ金銀ノ鑛ノ如ク搗ヲ米ニシテ淘汰スルニモ及ズ、唯其土ヲ撰ビ去テ、爐ニ入テ鼓鞴トキハ、大抵皆銅ト爲テ、金銀ノ如クニ糟粕ノ多キ者ハ絶テナキコトナリ、且銅鑛ニ鉛ノ混ズル有リ、銀ノ混ズル有リ、或ハ黄金ノ混ズル者アリ、故ニ爐ノ種々ニ築テ其諸種ト金ヲ分離ス、卽チ是レ人力ヲ以テ天工ノ足ラザル所ヲ補フナリ、精究セズンバアル可カラズ、

銅鑛ニハ多少ハアレドモ、何レ鉛氣及ビ金銀ノ氣ヲ含有スル者ナリ、然レドモ皇國諸州ノ銅ニ鉛ヲ多ク混ズルハ稀ナリ、銀ヲ含畜スルノ銅ハ甚タ多シ、故ニ外國ニテ日本銅ヲ貴ブコト世界ノ第一トス、日本銅ヲ得トキハ、則チ又此ノ爐ニ入テ煎煉シ、乃チ其零ル銀ヲトル、近來出羽

一白鑛　一赤鑛　一あい白鑛　一紋面

〔山相秘錄〕銅山第四

銅山ヲ相スルノ法ハ、大抵上ノ總論篇ノ中ニ設タルガ如シ、且銅ヲ含有スル山ニハ、諸青ヲ蒸發スルノミナラズ、種々異形異色ナル自然銅、及ビ鉐石、金牙石、蛇含石等ヲ生ジ、此數種ノ諸石ハ、何モ皆能ク銅礦ニ似テ見分ガタキ者也、然レドモ此ノ數種ノ諸石アル山ハ、必ズ銅有ルコトハ疑ナシ、

自然銅ハ銅アル山ニハ必ズ生ズル者ニテ、此ヲ銅苗ト云ンモ可也、此物ニ異形凡ソ七種アリ、其一ハ四角六面ニシテ雙六ノ賽子ノ如ク、大ナル者ハ一二尺ニ至ル、此ヲ破ハ悉ク四角六面ノ小塊ニ崩レ、何程細カニ砕ケテモ皆方形トナル、此ヲ方解石樣ノ自然銅ト云フ、其二ハ圓クレテ蒟蒻根ノ如ク頗ル大ナル者アリ、此ヲ破バ其外殼剝ゲ、其中ハ亦圓形ニシテ幾重剝テモ其中實ハ圓レ、此ヲ蒟蒻樣ノ自然銅ト云フ、其三ハ方形ナレ共、先尖リ筍先キノ如ク、亦將棊ノ駒ニ似タリ、大小齊シカラズ、此ヲ棊子樣ノ自然銅ト云フ、其四ハ細長クシテ針金ノ如シ、此ヲ亂銅絲樣ノ自然銅ト云フ、其五ハ長キ條ノ如クナレドモ、頗ル太クシテ繩ヲ結ヒタルニ似タリ、此ヲ結繩樣ノ自然銅ト云フ、其六ハ其形圓キモ有リ、楕圓ナルモ有テ、大ナルハ豌豆ノ如ク、小ナルハ麻ノ子ノ如ク、破レバ砕ケテ細砂ト爲テ、其中ニ實ハ圓キモアラズ、此ヲ零餘子樣ノ自然銅ト云フ、其七ハ圓キコト紫芋ノ如ニシテ、圓キ板根多シ、全ク生姜ノ根ニ似タリ、故ニ此ヲ生姜樣ノ自然銅ト云、其色モ異ナルモノ六種アリ、銀色、鍮色、赤色、黑色、鐵色、紫色是也、鉐石ニモ銅礦ニモ、皆此ノ七形六色有リ、又棊子樣ニハ或ハ金牙石アリ、零餘子樣ニハ蛇含石モ有ル者、然レドモ銅礦ハ風爐ニ掛トキハ銅ト爲リ、他物ハ銅アルコトナシ、此一形六色ノコトハ圖卷ニ詳ナリ、

ジ、且其山ノ禿地モ順ニ碧苔ノ根モ宜キヲ得バ、信ニ大鑛ノ山ナリト知ベシ、乃チ探索シテ銀礦ヲ堀採ベシ、○中略

銀礦モ、他物ノ氣ヲ混淆シテ種々異色多シ、然レドモ銀ヲ含有スル山ノ軟岩硬岩ヲ採テ、地ヲ破テ見ルニ、中ニ黒色ノ細砂ヲ混淆スルコト胡麻鹽ノ如クニシテ、日ニ映ズレバ、其細砂ノ點悉ク白キ光リ有ル者、卽チ是レ銀礦ナリ、

銀礦、所謂ル銻石ニ、他物ノ氣混合シテ、種々ノ異色アリトハ、礦ニ礬石ノ氣ヲ混ズレバ、淡黒色ニ微シク赤ヲ帶ビ、或ハ淡紫黒モアリ、又硫黄ノ氣ヲ混ズレバ、淡灰色ニ微シ青ヲ帶ビ、錫ヲ混ジタルハ、灰白色ニ微シ黄ヲ帶ビ、鉛ヲ混ズレバ、黯灰色ニ微シ青キヲ帶ブ、然レドモ其淡黒細砂ノ斑點多ク、其斑點日ニ映ズレバ白キ光リヲ發スルコトハ、何レモ皆同樣ナリ、扨其諸種ノ中ニ於テ、淡灰色ニ微青ヲ帶タルヲ冬瓜苗ト云ヒ、灰白色ニ微黄ヲ帶タル、瞎苗ト云ヒ、黯灰色ニ黒斑色帶タルヲ胡麻ノ鹽苗ト云ヒ、淡紫黒ノ色ナルヲ桔梗苗ト云フ、胡麻鹽苗ト瞎苗ハ出羽、奥州、越後等ニ多ク、桔梗苗多瓜苗ハ石見、安藝、周防、長門等ニアリ、

〔鑛山聞書〕鑛山之山色　凡二百餘品有と云

一粘目　一鵜ノ目やに　一黄爐粕　一巻どふし　一堅氣　一羽売砒石　一留粕　一錄青透
一漬レやに　一小白目　一にすみ　一鳥の返し　一ふけ透　一黄土光　一茶の葉　一茶
なのは　一べにがら　一似タリのり目　一六方　一朱石　一山銹　一進明地　一雲母　一
錄青菜の葉　一のし目　一紺青羽色　一牙砒石　一しかみ雲母　一鐵のりめ　一錆子銀
一錆はた　一とりけ菜ノ葉　一針金どふし　一鳥の子　一さい白目　一小さいの目　一鼠
白子　一末粉銀　一丹から　一黒柿　一赤柿　一玉子ねば　一返り銀　一返り菜の葉　一
血綿　一黒物　一桔梗　一透りやに　一黒羽色　一血石　一眞鍮銀　一丸銅至　一白鉛

難區ナルコト有ルヲ以テ、諸金山皆共ニ下渕ノ相ヲ第一トスルコトナリ、

黃金ノ自然ニ塊ヲ爲シタルニ、種々異形アリ、其形ノ竹筍ノ如クナルヲ天生牙ト名ク、或ハ氷柱ノ如ク、或ハ碁子ノ如クナルヲ黃牙ト名ク、或ハ圓クシテ佛掌薯ノ如ク、或ハ土芝ノ如クナルニ、狗頭金、馬蹄金、橄欖金等ノ名アリ、又其零碎子ノ如ク、或ハ豌豆ノ如クナルモ、蠶豆金、豆粒金等ノ名アリ、總テ此ヲ印子ト呼ブ、上品ナリ、又此ヨリ以下細粒ナル者ニ、麩子金、瓜子金等ノ名アリ、其極細ナル者ニ、麩金、鵝沙金、糠金等ノ名アリ、總テ此ヲ砂金ト呼ブ、次品ナリ、

黃金ノ自然ニ凝塊シタル黃牙アルモノ、先年和州吉野ノ金峯山ヨリ出タリ、又狗頭、馬蹄、豆粒等諸金ハ、出羽國雄勝ノ松岡山ヨリ出タリ、凡ソ溪川ノ水底ニ砂金アル處アラバ、精ク其水源ヲ探索スベシ、務テ天工ヲ瑣屑スルコト勿レ、又皇國ノ俗ニ印子ト云フハ、極上品ナル黃金ノコトニテ、漢土通用ノ印子金トハ同名ニテ異物ナリ、漢土ノ印子金ト云フモノハ、長サ二寸餘幅一寸餘ニテ、其形圓ニシテ積ノ饅頭ノ如キ者ナリ、重サハ五十錢目ト百錢目ノ二品アリ、此印子ニハ頗ル他物ノ雜リタル金ニテ、色ハ美ナレドモ純金ニ非ルナリ、

〔鑛山問書〕金山之山色之事

一光り付　一桔梗　一更付　一ざら砒石　一青地付　一羽柄　一硯鐵　一烏の子　一宗

一鬱紫　一鐵羽色　一石喰　一石金付　一新土砒石　一腐砒石

きおうとて、金に似たる掛砂あり、吹て見れば金なし、掛かるにつばきを入れて掛れば、浮て流る、なりといふてんと云もあり、同じ心也、

〔山相秘錄上〕鑛山第三

凡ソ鑛山ヲ開發スルモ、上ノ總論、及ビ金山ノ條下ニ說ルガ如ク、先ブ山相ノ法ヲ以テ、審ニ鑛ヲ含藏スルヤ否ノ徵ヲ鑒定シ、而シテ後ニ、尙其內實前知ノ秘訣ニ因ルニ、砥石ノ灰ノ秤量巳ニ應

切山釜の口を付べし、立入百間にて入る所、堅かりを除き百五十間にて釜の口付ても、百間切より早砒に入所有、入用も減るもの也、砒押百間にて落に入所五十間の立入、早速館入切るハ、大に誤り也、百間の砒押ハ、石の欄にて、其上砒押の内には大小落し有物也、昔百年以前迄ハ、館入たる山はなし、寛文二年、大坂より館入始る唯砒追のみ切たる也、其後水抜畑抜合などの爲に立入を切たる也、

一横鋪の切山と云こと有、是は釣たる砒の内根合に落し有とき、厚身に釣ときは、上鋪に大端に入、砒に添て卸也、五丈にても十丈にても、卸とめにて、砒に入ように釣を考て、切入る也、水有時は、樋の心持、蛇腹の心を以可切ものなり、

附鋪山は休み落しなし、張目に落し有、大体有故、決して落有と云、皆誤りなり、張目折目を心付べし、

〔山相秘錄上〕金山第二

凡ソ黃金ヲ多ク含有スルノ山ハ、大牢下瀉レノ相ニシテ、處々ニ黎色カ暗灰色ノ爐樣石アリテ、此ヲ破レバ中ニ紫褐色ノ細カナル斑點ヲ爲シ、且ヲ金色、紫色、紅色、蛇蝎色等ノ飾石アル者、キリ、又其山下ノ溪川ニ、必ズ金精銀精ノ石有テ、其水極テ清潔ニシテ、其味少シク辛キガ如キ者ナリ、若シ此諸徵ヲ備ルコト有ラバ、其溪川ノ瀨ノ最急流ノ處ノ水底ノ土泥ヲ採テ陶汰シテ視ニ、必ズ金砂ナルベシ、若シ溪川ノ底ニ金砂アラバ、假令諸徵備ハラズト雖モ、能ク其水浮ノ深山幽谷ヲ探索スベシ、或ハ純金ノ塊ヲ爲シタル者ヲ得ルコトナリ、

金精石、銀精石ノ形狀ハ、圖ノ卷ニ詳カナリ、砂金ヲ採ルニハ、席筵ノ類トモ抄ニ取ベシ、凡ソ黃金ノ有ル山ハ、太抵下瀉レバ相ニ多シト言傳ルコトナレドモ、上ハ瀉シ、中瀉ノ山ニモ頗ル金ノ多キ處アリ、然レドモ下瀉ノ相ノ山ニアラザレバ、水泉エ湧ルコト多クシテ、鑛ヲ鑿採ルニ、

云こと知るもの也、金有ても、石に寄て慥かぬ山有物也、又川筋を掛検にて掛て見るべし、銅山ハ、石色赤、ふけ、青石、田土かびらけ、砥石、是等ハ大敵にて寄も有物也、硯、ごまはろふかけ、死石、粕石、磯、髑髏石、是等之石、山色有ても渡世に合ぬ物也、鉛山ハ、硯粕石も有、大略右に准じ知るべき也、青地は歩合のなきもの也、赤ふけは寄も大きく、歩合吉、

一古鋪見分する様ハ第一昔働たる跡を能く心を付見るべし、何石にては途切に當り、何石にてハ、直りに當り掘たるか、又寄身に寄有歟、厚身に寄有歟、鋪の折目にて掘たる歟、鋪目に金を持たる歟、巨細に心を付て、以前掘たる跡を念入て見るときハ、其山の善悪所、根合、草木歟、切所取明け、此に早く心付物也、然るときハ無用の切山費なき物也、是ハ其山の鋪鑑とも云物也、是を不知ときは、不少損失あるもの也、

一鋪居る山にても平生敵の見、何れの澤より何れの峯え通り、何れの澤の敵、何の長根を越て何所の澤に落たる、何所の峯に登りたると、覚て敵の通りを細かに知りて、是を心付、平生四山の度毎に見るべし、春ハ其敵通り雪早く消て草生早し、何金にても、直りの有所ハ、必草早く青む、是金生、水の成す所歟、水生、木の理有歟、夏ハ朝霧其所より早且に立物也、秋ハ草木の葉早く黄ばむ、枯るゝも早し、雨晴には此所より霧立始る物也、冬ハ雪に穴明きて、其所が透消て雪薄し、入梅頃ハ、至て靄深消難し、草木の色も他の所と異なり、必金を貯ふる所と心を付て引割見るべし、予（〇本[illegible]）若年の頃トッコ三右衛門と云金掘の名人の云し事を聞て、度々利を得たり、此三右衛門と云ハ、山の高みに登、四五日も其所に居て、春夏秋冬の造花を篤と様して、其所に引鋪を付て金掘たるなり、

一山師山方第一心掛べき事、敵押鋪入共に朝暮其山の踏出し山薑峯寄し等の堅かり能々心を付て、何ことより切時ハ何取の鋪目に掛り、堅かり有、何より切ときハ、構に入の境を工夫して、

時ナル者ナリ、月ノナキ能ク晴タル夜ヲ撰ブベシ、月ノ明カナル夜ハ、出現シテモ甚ダ見得ガタキ者ナリ、且ツ又北風ノ吹ク夜カ、或ハ山岳ノ上中ニ故障アリテ、蒸發セザル夜モ有ル者ナリ、故ニ幾度モ此ヲ伺フコト有リ、

此法ノ五月ヨリ八月迄ノ間ヲ宜シトスルコトハ、二月頃迄ハ山ハ寒キガ故ニ、金精ノ蒸發スルコト稀ナリ、且又霜根引クコト有リ、又九月頃ヨリ霜雪降ルノ山寒キガ故ニ、未精氣ヲ發出スルコトナキヲ以ナリ、又月ノナキ夜トハ、毎月朔日ヨリ六日ノ夜迄ト、二十五日ヨリ晦日迄ノ夜ハ、夜半子ノ時ニハ月ノ必ズナキ夜ナリ、蓋シ夜半子ノ時ニハ日輪ハ大地ノ正下ニ在リテ、大地ノ下面ヨリ熬炙スルヲ以テ、土中自然ニ熱沸ス、故ニ山中含藏ノ諸金、其熱沸ノ醸化ニ因テ、各々其色ノ精氣ヲ蒸發シテ、此ヲ地上ニ出現シ、以テ人世ニ其徴シヲ示ス、此等ノ事ヲ推究シテモ、天地ノ洪恩ヲ欣戴スベシ、

凡山中含藏ノ諸金、其精氣ヲ蒸發スルニ、各々定レル形色アリテ、甚ダ著明ノモノナリ、金精ハ華ノ如ク、銀精ハ龍ノ如ク、銅精ハ虹ノ如ク、鉛精ハ煙ノ如ク、錫精ハ霧ノ如シ、金銀銅ノ精ハ高ク升ルモノハ二十丈上ヘ出デ、鉛精ハ風ニ順ヒ、錫ノ精ハ風ニ逆フ、卽チ是レ諸金蒸發ノ精氣、各自ノ形色ニシテ、古來山相家一子相傳ノ秘法ナリ、

〔鑛山聞書〕一諸山見分するとき心得べき事

先其山に行て、山の居様を見るに、朝日に當り、かた日當り歟、澤の切れ、山の厚身、峯の續き、能見るべし、扨木炭の寄方、竹の寄方を考見るべし、朝日當りは金山銅山に吉、夕日當りは銀山鉛山に吉、扨亦澤平ゟ雨平より、峯續出たる山、左前右前迚、合有もの也、右前合ハ吉、左前合たる山ハ末遂ることとなし、

一其山の澤口に休み、川石を心付て見るべし、決て其山中の砒の通り、何石にても、何の山色有と

坑ニ入ルコトヲ得ンヤ、故ニ山相ノ學ハ古來其名ノミ有テ、其法ノ傳ラザルコト久シ、不昧軒翁少年ノ時ヨリ、此學ニ志スコト極テ篤ク、諸國ノ坑場ヲ遊歴シテ、刻苦數十年、神魂ヲ山線ニ発シテ、寢食ヲ忘ルヽニ至ル、古語ニモ云ヘルガ如ク、此ヲ思ヒ此ヲ思テ止ザレバ、神明コレニ通ズルノ妙ニテ、遂ニ異人ニ逢テ秘訣ヲ受ルコト有テ、始テ山相ノ學ヲ開基シ、玄明窩翁ニ授ク、玄明窩翁モマタ其志ヲ繼テ、益々此ヲ精究セリ、於是乎開坑ノ業、以テ國土ノ利益ヲ興スニ至レリ、出羽國阿仁銅山、及ビ院内銀山ノ繁昌スルモ、佐渡金山ノ起リシモ、予ガ祖父ノ功多カラズトセズ、今是ヨリ後ニ高ク書シタルハ、卽チ祖父不昧軒翁ノ語ニシテ、一字低ニ書シタルハ、卽チ先考玄明窩翁ノ語ナリ、能熟讀互考シテ山相ノ自然ヲ理會スベシ、此ヨリ以下ハ信淵ガ論ナリ

凡ソ山相ヲ觀ルニハ、必ズ其山ノ太祖ヲ正南ニ當テ、正北ノ方ヨリ相スルコト、古ヨリノ定法ナリ、月ハ五六七ヲ上トシ、日ハ南ノ新ニ晴タルヲ上トシ、時ハ巳ヨリ未ノ間ヲ上トス、暑中雨ノ新ニ晴タルトキニ南山ヲ遠望スレバ、雲消シ霧滅シテ、諸峯ノ顏色宿酒ノ頓ニ醒タルガ如キ者ナリ、是ノトキニ當テ、太祖大宗ヨリ見來マデノ層巒ヲ熟觀スルニ、青翠ノ中ニ別ニ靈光瑞靄ヲ發シテ、鮮明他ニ異ナル所ナルハ、卽チ諸金含有ノ山相ナリ、此ヲ最初遠見ノ法ト名ク、

○中略

最初遠見法ヲ行テ、靈光瑞靄ノ發スルヲ認定得ルコト有ラバ、ヨク其層巒ノ重複ヲ熟觀シテ、審ニ此峯嶺複タルノ表的ヲ誌記スベシ、而後ニ夜中ニ復幾度モ其表的ヲ審タル所ヲ窺ニ、其山ニ含有スル諸金ヨリ蒸發スル精氣ヲ望見ヲ、金ナルカ銀ナルカ、或ハ銅鉛錫等ナルカヲ規定ムベシ、此ヲ中夜望氣ノ法ト名ク、

此中夜望氣法ヲ行フモ、外山ノ足ヲ距離スルコト二十町ニ過ベカラズ、

凡中夜望氣ノ法ヲ行フニハ、五月ヨリ八月迄ノ間ニ宜シ、諸金精氣ノ出現スルハ、大抵夜半子ノ

勢ありて錘の通り候事多し、土底に入勢害ひ、鏃矢の行向なき事多く有て、見立山には奈晶見る事第一口傳とす、

一金銀銅鉛山は、東を受て北を指て居る、山は金銀銅鉛山何れも生の足き金とす、西北に請て有金銀銅鉛山は何れも不足と可知事、

一山は陰にして陽を請たるは吉とす、陽にして陰を受たるが凶とす、

一春は館頭、秋は金の有所見様第一口傳

一金の有所落の體圖を能く見定候事

一金の裏ひ有體圖を見定る事

一山の堅品有體圖見定る事

一石前合せたるを見定る事

一水の有所見を定る事

銀ゟ金を絞る事

一銀を松葉灰の上にトカシ、ヨク湯ニ成候節、女檜木を以て湯をかき廻し、ホドヨキ節水を打行にしてへぎ候得ば、跡へ金は残るも、

右金ハ古銅御入候得者、上金と成候、右加減口傳有、

〔山相秘錄上〕總論第一

第三ノ寶貨ナル金類ト稱スル者ハ、即チ金、銀、銅、鉛、鐵、錫、水銀ノ七種ニテ、此書ノ主トシテ論ズル所ナリ、○中略今此書ニ精究スル處ハ、七金ヲ含有スル山ノ山相ヲ鑒定シテ、金カ、銀カ、或ハ銅カ、鉛カヲ知リ、且ツ其諸金ノ中ニ於テ、何レノ金ニテモ、其山ニ藏有スル多少ヨリ、藏處ノ、上下深淺マデヲ、山外ヨリ觀察シテ、悉ク前知スルノ術アル、神傳ノ秘訣アル者ニアラザレバ、焉ンゾ能ク此

一世に柔晶と云事、金銀銅鉛山見る時、平晶と云事は、山の大庭を云也、金無山と云事不成、日の本に、金銀銅鉛山多く有に、賞無山と云事俗言也、依而柔晶と云事、柔晶と云て金の鉒撫通しても、金無山故に、柔晶と名付たりといふ、南を関切山に限り、横走り長くして、関切る也、総而南には磁石多有外に金少し、依而磁石を南に向を北に向るといふ事にして、日本にて超過ス、南に多き金故に陽山に鍼北の方に指向る也、多くは磁石尻の方に指付たる磁石故に南に向き生る也、右陽之方ゟ陰の方へ来り、日本にて重宝ス、是を皆世に傳て鋼様にて雨に當りては皆崩れ和らかなる石也、

元山にては夏山牛頭天王社根後道ゟ横拜、観音堂の後下澤新切鋪口迄、瀧山の大柔晶なり、鉄谷数新切鋪には川下向の鉒通り有之とも宝数場處無之、昔ゟ切所は今に無之といふ、

一元山は青捨三人組、古數平より、野澤鋪口丹波澤落合迄、前平延山の館處りと云山也、胡麻母衣実切無也、

一元山澤上り、館處前通ゟ化物石嶋山古鋪澤流に限り、一體延山と見得たり、奥深き所に無之山也、

一元山石疊ゟ厚山、昔角力取場迄、大本數米藏前通り迄、死山と見得たり、依之鉒通皆金藏鉒ヱ落入候事に見得たり、

一西道番刀屋敷より笹小屋庵の落合迄延山にて死山と見得たり、

一赤澤水晶木林前通大澤古鋪口の上嶺走より、道縄澤水抜大切敷ヱ落合迄の山大柔晶と云山也、延山胡麻母衣石也、鉒の通らず山と云、

一小赤澤獅子堂上りは鳥居、當時の大平の本番役所の上道ゟ、床屋向道長根春木澤嶺笹小屋稲荷堂落合迄、皆柔晶にて鉒通りなき山と見得たり、右柔晶と云山には、金鉒撫通りても前平計

程水敷に成候而、水切貫候所無之、能所とは難申候、

一立合と云は、何れの岩山の中にも白き筋の引渡りたる事を云、東西江引渡りたるを、當國銀山の根元の立合と云、凡二十壹筋あり、立合の名末に記す、右の外南北江引渡り、或は馳割れて白き筋引渡り有之、是は鏈有之候而も、長く不續ものに定メ置候、土山の中にも金銀のねば土ヘナ土ノ事立合出候事有之、此ねばに金銀有之候を、ねば鏈と云、古來より大盛致し候事幾度も有之候、右立合の備りを相考へ、東西より穿候を立合追と云、南北より穿候を横貫と云、涌上りと云は、草際より立合引渡り、鏈石見へ候を云、總じて立合無之山所には、金銀銅ともに鏈石は無之候、畢竟立合白石は鏈之道しるべに候、併白石巾貳寸三寸有之をば立合とは申がたく候、

一常の岩山を總じて盤と唱へ、其内青盤とて、山色品之名の替り有之、此青盤の内へ立合引渡候、銀山功者と云は、右青盤の目利肝要之よし古來より申傳候、

青盤の名大概如左

中石青盤　猿つら青盤　餅草青盤　ろ色青盤　肌青盤　黒ぼろ　燒盤　とや青盤　須灰盤　皮籠盤　星青盤そば皮と云　くさ青盤　貝空盤

一吹破風穴石間とて、立合の内穿通り候、内五寸壹尺、或は四尺五尺程の空出候、是を吹破と云、其所は必地堅く、金銀氣強く、地山を吹破候哉、此吹破出候跡にて、盛を得候事古來ゟ度々有之候、吹破之内には水晶石有之、風穴と云は吹破の小きを云、到而小きには鼠風穴と云、石間とは、立合の内にも盤の内にも、一ト片宛肌有之、是をへたと云、ケ様の所は水を溜メ候得ば自然と吸取候、又地山を扣き候得ば鏈音な近く聞へ候、是を石間と云、○下略

〔鑛山口傳書〕南來秘傳

一東ゟ西江嶺走り、山南を間切れば、山一體、平品と云、金無來、是秘傳也、

右肉厚山、肉薄山、皆碎片碎山、岩山の碎山に寄、金勢盛なる所、見分候事口傳也と云、前分之傳不知して、金銀銅鉛山見立る力なく、依面口傳第一に心得知る時は、其遲速なく見立る也、一子相傳にして秘費理と云、

金銀銅鉛山東西南北に鉒遍過善悪見様の事、

一西脊負東を抱き、北高ヶ南跡に見る山、登体に入て鉒鑛盛也、西を抱き東を脊負、北高く南に澤の深き有は、登と鉒鑛盛也、行向深き澤切有は屏風舘となりて、山川上にて下盤ニ鉒鑛それて盛也、

一北を抱き南を脊負て西高く東澤へ走り来〳〵、平休み落雁金舘とも云なり、岩碎山にて鉒盛定り盛成山なり、見様第一口傳有、

一東高く北高く南切定りたる平山は、鉒鑛南を脊負、北を抱き平澤僅に通たるは、澤突落舘にて盛也、總而平山落突落畳枚舘は末續好しからすと云、東を抱き西を脊負、北高く南澤深く切たる山、鉒鑛釣落落し多く有、金盛成は、山堅に鉒鑛定ると云、

一東高く北高く西澤深く走りたる山、鉒鑛西を脊負、東を抱きて能山也、平落にて盛たると云、

一西高く南高く北低く片走にして脱たる山、東深く澤切多して休み鉒鑛盛也、嶺に入て細るなり裏有、休走り吉と云、

一肉厚山、肉薄山、皆脱山碎山にても鉒鑛山を異直に通ては、例山に而も不宜、皆大割の鉒鑛にて續好しからすといふ、見様口傳、

〔金銀山取扱一件〕總じて金銀山有之所の様子は、山高く嶮岨にして、立合東西に引渡り用水有之所を能山所と云、谷川流れの末などに鏈石有之候鏈をば金銀銅も有之、右を云、斯のごとき水上には必金銀山有之候、平山に立合有之所は、谷淺く候故淺きものにて、深く穿下り候得ば、無

肉厚山

鉒摧山の大休み走ニテ勢盛也、平休みて盛なるも有、山の嶺に入、鉒摧亂テ柴鉒摧トナル事有嶺に入、澤切に落テ鉒摧不足ト云、

肉厚片峽山

山大イニシテ、前年肉無ニ脱タル山ハ突落、其前平峽たる事有、山如斯なる山は後肉有て大成と雖モ、前平計ニテ川上川下埏山ヵ館鈹リニ而、鉒摧前平突卸計勢盛也、後山大成とも頼母しからずといふ、

前後皆峽山

山登りも鉒摧勢盛にして顯有山は、鉒摧行向に澤有、切れ深きは屏風となりて、鉒摧山川上下磐石ニ消る也、川上山厚身ニ入鉒摧盛也、

山澤形ニ片峽山

山大成とも前平にし、片峽山は鉒摧ともに澤形に通たるは、大割は鉒摧にて前平にて勢見能、川に入ては鉒摧細く成、或は柴鉒摧下成事多く有、是を澤渡り大割と云、都而如斯山不宜、

山大にして前平中山に計鉒摧有、跡先澤切て通したる鉒摧は、裏表貫通館と云、

一前平中山峽て見能き山にて、鉒摧も中山にて勢盛也、山川上に入切柴鉒摧にては、川下の澤埏山と成頼母しからず、

皆峽山埏山轉館、或は岩山中山に顯れて鉒摧有山、

一山皆はげにて埏山多き山に岩山中山にあり、鉒摧通有を鞍掛館と云秘傳第一也、

鉒摧勢盛にして大に吉鉒摧通は岩山分り、埏山の所は館頭計にて鉒摧通不分、都而如斯山は柴鉒摧たて多く盛山也、岩山とては鉒摧定て盛也、見様口傳、

右之立ヶ合東西へ引渡り、古來ヶ諸山にて大盛穿候、此備りを考へ、立ヶ合迫、或は横貫に、間切立始め候、此所を間歩口共、釜の口共云、夫節に穿入候て、鋪に切當相稼候處を敷と云、依之金銀山の總名を間歩と唱、或は青盤間歩、甚五間歩杯と云、其間歩の敷所も場所をわけ、是又清吉敷、或は園平敷杯と名目をかへ、鋪穿出し候、山師と云は右間歩一體を預り差配いたし候者ゆへ、巳前は山主と云、かなこと云は、間歩の内前段の通り字をわけ、何敷東西何丈何尺は誰稼所と定め、是を敷領分と唱ふ、一鋪分と云は、大概壹丈八尺、二丈三尺、致稼候者故一敷の主也、

〔鑛山口傳書〕口傳書○中略

尾去澤銅山之内

田郡澤　　元山澤

一片肉薄山の片破山といふ、一肉薄山の皆破山と云、　赤澤　　小赤澤　　鹿澤

一肉厚山と云、一片破山と云、一皆破山と云、　永坂　　西道并寄山

一肉厚山と云、一肉厚山と云、右ニ準じ見様心得可有事、

〔鑛山口傳書〕口傳書

肉厚山

一肉厚山は体に而、金鋌𨫼勢盛也、則面大体み入鋌𨫼大に盛也、

肉薄山

一肉薄山は、前後突替シテ、鋌𨫼盛也、

皆破山

一鋌𨫼顯ヲ、盤石餘定り顯たる山に有、圖にて鋌𨫼勢盛なるか、裏は有所は見ゆる、前後左右鋌𨫼、山の大小に寄て見様口傳、

傳ノ秘訣ナリ、

鉑石ハ此ヲ燒ケバ消ヘ失ル者アリ、故ニ此ヲ燒ニモ深秘アリ、四贏三持二闕一亡ト云フハ皆隱語ナリ、又兀地トハ草木ノ生ゼザル土地ヲ云フ、凡ソ石山ノ上ニ草木ヲ生ズルコト能ハザルヲ上渴ト名ク、卽チ上禿ナリ、又頂上ニ草木茂リテ下ノ禿地ナル石山ヲ下渴ト名ク、又上下共ニ樹木茂リ、中ノ禿地ナルヲ中渴ト云フ、此ニモ一面渴、二面渴、三面渴、四面渴等ノ十二相アリ、然レドモ畢竟ハ樹木繁榮スル山ハ水氣多ク、禿山ニハ水ノ少キコト論ナキナリ、今ニ禿地ヲ量テ、諸金藏處ノ高下ヲ知ルニ、上十下一、下十上一ト云フモ又隱語ナリ、岩石ニハヨク碧色ノ苔ノ著モノナリ、此ヲ採テ諸金ノ在ル處ニ堀リ著ル迄ノ淺ナ深ナヲ量ルニ、卽チ內分德外ト云フモ、亦皆隱語ナリ、凡ソ隱語ハ必ズ口授スベキ秘訣ナルヲ以テ、其解ハ茲ニ記セザルナリ、又諸金各色ノ鉑石、及ビ山ノ上渴下渴等ノ趣キ、其形其色ハ圖ニ詳ナルヲ以テ互考シテ略記スベシ、

凡ソ金坑鑛場ニ事アラントスル者ハ、先ヅ上ニ記シタル諸評ヲ審カニシテ、而シテ後ニ山鑛各爐ヲ鑿テ以テ國家ヲ富實スベシ、山相ノ奧儀ヲモ講究セズシテ、疎放ニ事ニ從テ破產ノ患ヲ招クコトナカレ、

〔見聞雜記三十四〕佐州相川金銀山立テ合の名　薄身南方の事　立テ合五枚但壹箇の事を壹枚と云

大薄身　本立テ合　唐島　七枚棚　白かね立テ合

中山通リ立テ合七枚

黑物　本立テ合　寺澤　猿松　ねは立テ合　なみ介　厚身黑物

厚身北の事の方立テ合九枚

松木　桶屋　與市　嘉左衛門　勸兵衛　與四郎　淺右衛門　逢合　虎の皮

出ス、銅ニハ銀ヲ含ムコトモ多ケレバ也、又黄色ニシテ白光アルヲ、黄鏈トモ孫子鏈トモ云、鬼雲鏈ハ黄鏈ノ質ニ、自然ニ鬼雲ノ如キ紋理アリテ、破リテモ其紋アル者ナリ、暗鬪鏈ハソノ色黎暗シテ光アリ、此三種ハ銅山ニ多シ、然レドモ銅山ハ銅鏈ニ種々ノ異形異色アルガ如ク、鏈石モ種々ノ異色ヲ混淆スルコトアリ、又白色鏈、蒼鷹鏈、早天鏈、淡青鏈等ハ鉛山ニ多シ、鉛ニモ又銀ヲ含ムガ為ナリ、又黒鏈ハ暗鬪鏈ノ色濃者ナリ、錫山ニ生ズ、錫山ニハ淡青色、早天色等ノ鏈ヲモ生ズルコトアリ、圖ヲ校合シテ能ク其色ヲ見習フベシ、

凡山相家ニ於テ、一子相傳ノ大事トスル所ノ三ケノ秘訣アリ、此秘訣ヲ知ル者ハ、一タビ金山ノ相ヲ鑒定スレバ則チ其金ヲ藏有スルノ多少ト、在ル處ノ高低ト、土石ノ深淺トノ三要ヲ暗算シテ、豫メ皆前知スルヲ以テ、其金山ニ從事スルノ利害損益ヲ明ニスルガ故ニ、開坑ノ業得テ興スベシ、若シ夫レ三要ヲ前知スルノ秘訣ヲ得ザル者ハ、山ニ金アルコト迄ハ能ク察シ得タリト雖モ、三要ノ前算ニ暗キヲ以テ、茫乎トシテ手ヲ出スコトモナラザル者ナリ、故ニ無妄ニ金山ヲ開テ、大ニ財用ヲ損失スルモノ往々ニコレ有リ、

三箇ノ秘訣トハ、一ハ金山ノ相ヲ觀テ、即チ其山ニ藏有スル諸金ノ多少ヲ前知ス、二ハ其山ノ相ヲ審ニシテ、諸金有ル所ノ高下ヲ前知ス、三ハ其金ニ掘リ著ル迄ノ土石ノ淺深ヲ前知ス、此三事ハ皆山外ヨリ相シテ、山ノ土石中ニ在ル諸金多少ト、高下ト淺深トヲ豫メ皆暗算シテ、前知スルノ法ナルヲ以テ、金山ノ業ニ於テハ極テ大切ナル事也、故ニ此ヲ山相ノ三要ト名ク、

諸金含有ノ多少ヲ前知スルニハ、各其山ノ鏈石ヲ撿テ、此ヲ量レバ即チ知ル、其秘訣ヲ、四贏三持、二闕一亡ト云、又其在處ノ高低ヲ前知スルニハ、各其山ノ兀地ヲ撿シ、此ヲ量レバ即チ知ル、其秘訣ヲバ上十下一、下十上一ト云フ、又其金ノ在ル處ニ掘リ著ル迄ノ淺深ヲ前知スルニハ、各其山ノ岩石ニ附タル碧苔ヲ採テ、此ヲ量レバ即チ知ル、其秘訣ヲ寸ナ内分徳外ト云フ、是レ皆一子相

ニ精砂ノ斑ハ銅ヲ含ムノ徴、淡青微黄ニ箔ヲ帯タルハ鉛ノ徴、淡紅ニ白斑ハ錫ノ徴ナリ、山ニ其金アレバ、其上必ズ其徴ノ燐樸石ヲ發出ル、人世ヲシテ各其需ル所ヲ得ルニ易カラシム、造物ノ妙工至ル哉、

燐樸石漢土ニ餅石ニ作ル、其形チ焼タルガ如ク、碎ケ易クシテ質ノ脆キ石ナリ、此物ハ諸山ノ岩石ノ外邊ニ苔ノ如ク被リテ吹キ出シ、其厚キ一二寸許ニ過リタル者ナリ、五種共ニ少シク箔ノ氣アリテ、或ハ光ルモアリ、凡金山ニ在ル者ハ、或ハ暗灰黎色ニシテ、此ヲ破レバ中ニ紫紺色ノ細砂ヲ混ジ微小ナル斑ヲナス、銀山ニ在ルハ茶褐色、或灰色ニ黒砂ヲ混ズ、又銅山ニ在ルハ灰白色ニ紫砂ヲ混ズ、鉛山ノ燐樸石ハ微青、或ハ微黄色ニシテ、暗淡タル箔ヲ帯ビ、此ヲ破リテモ砂ヲ混ズルコトナク、全ク鉛石ト同質ナリ、又錫山ノ徴ハ淡紅色ノ軟岩ニテ、破レバ白キ斑點アリ、若シ又藍青色ノ石ニ白キ間道ノ如キ條理ヲ爲ス者ノアルナラバ、極テ錫ノ多キ山ナリ、然レドモマレナル者ナリ、圖ニ其趣ヲ書セリ、校合シテ理會スベシ、

鉛石モ山中含蔵ノ諸金ヨリ頭氣蒸發シテ、岩石ヲ重鑄シタルモノナリ、十餘色アリ、能ク見覺ベシ、諸金山皆此物アリト雖モ、然レドモ銀山ト銅山ニハ、殊ニ色ノ異ナル者多シ、

鉛石ニ、金光箔、銀光箔、紅箔、紫箔、蜥蜴箔、暗闇箔、早天箔、蒼空箔、白箔、青箔、黒箔、荏種箔、鬼雲箔等十三種アリテ、詳ニ上巻ニ圖スルガ如シ、其他モ何冥色ナル者アルベシ、銅鑛モマタ苔ダヨク此ノ鉛石ニ似タル者ニテ、共ニ此ヲ箔石シ、及ビ金岩山色等ノ俗稱アリ、然レドモ銅鑛ハ煎煉スレバ銅ト爲リ、又此鉛石ヲ炭火ニ投ズルトキハ、硫黄ノ臭ヲ發シ燃テ青キ火焔起リ、悉ク灰ト爲リ、終ニハ漸々消ヘ失セテ、跡ニハ何モ殘ルコトナク、大ニ銅鑛ト異ナリ、金老箔、紅鉛、紫鉐、蜥蜴鉐ノ四種ハ、金山ニ多シ、銅山ニモ有リ、銅ニハ必ズ黄金ヲ含蓄スルガ故ナリ、然レドモ銅山ノ鉐ハ下品ナル者ナリ、又銀光鉐、早天鉐、蒼空鉐、青鉐ノ四種ハ、銀山ニ多シ、銅ニモ又是ヲ吹キ

銅會所

中野藤原朝臣在判

〔御勘定所より御尋に付書上扣〕文化五辰正月書上、銅山御尋ニ付、乍恐以書付奉申上候、○中略

一足尾銅山銅會所之儀、江戸淺草橋場町ニオキテ、御用地五百坪餘被下置、銅御用相勤候義ニ御座候得共、年歷之儀者、寛文享保之頃、兩度足尾大火ニテ、書物等燒失仕、委敷儀相分リ不申候、其後銅會所小網町ニ有之候處、淺草御藏に手狹合宜敷無御座ニ付、諏訪町江會所替仕候段、天明貳寅年川崎平右衞門樣御支配之節モ奉申上候、其後寛政三亥年右場所引拂、本所表町江借宅仕、御用相勤候處、銅山師共困窮ニ罷成、諸入用ニ差支難儀仕候ニ付、享和元酉年、右場所引拂申候、當此五辰迄凡百六拾年餘以前より會所有之候ニハ相違無御座候、

山相法

〔山相秘錄上〕總論第一

凡ソ諸金含有ノ山ハ、皆必ズ岩石ヲ負フ者ナリ、而シテ其岩石ヲ負フ正面、背後、左擁、右擁、及西南二面、西北二面、東南二面、東北二面、前後二面、左右二面、前左右三面、後左右三面、左前後三面、右前後ノ三面、四方四面ノ十五相アリ、此ノ諸相ノ中ニ於テ、左擁ノ山ヲ以テ第一ノ嘉相トシ、正面此ニ次ギ、東北ノ二面ヲ第三トシ、東南二面ヲ第四トシ、左前後三面ヲ第五トス、以上五箇ノ相ノ山ハ、大抵皆繁昌スル者ナリ、其他ノ十相ノ山ハ、假令諸金ヲ含有スルトモ、永クハ繁昌セザル者多シ、

山相ハ必ズ北方ヨリ觀ル者ナルガ故ニ、正面ハ北向ニテ、背後ハ南向ナリ、左擁トハ東ノ方ニ岩ヲ負ヒタルニテ、右擁トハ西ノ方ニ岩ヲ負タルナリ、凡ソ諸金ハ山ヲ東北ニ負ル者多シ、此モ又山相家ノ古來精究シタル說ナリ、

凡諸金含藏ノ山ニハ、必ズ五種ノ爐樣石ト、諸種ノ鉛石トヲ吹キ出シテ、各其有ル所ノ諸金ノ徵ヲ現シ、以テ彼ノ夜中ニ蒸發シタル精氣ト、暗ニ相ヒ應ズルガ如キ者ナリ、所謂ル含有諸金ノ徵ヲ現ストハ、爐樣石ニ其形色ヲ發出ス、卽チ寨石ニ紫斑ハ黃金アルノ徵、褐石黑斑ハ銀ノ徵、暗灰

採鑛所

一山先衆江不居之儀無之樣、兼而可相心得事、
一火之元用心第一大切ニ可仕事
一喧嘩口論仕間舖事
右之通、山內之者共、堅相守可申事、
四ツ留格合
一四本柱ハ四ツ留ニ可依
一化粧木四ツ留次第
四ツ留柱格并四ツ留格式七五三ニ可結〇中略
格式之事
一山先、其身一代、苗字帶刀ハ不申及、乘馬挾箱御免、
一山師、苗字帶刀御免、
一山廻子、右同斷、
一御公儀樣ヨリ、山先之者江歷舖料被下置候筈、其外諸役人給金、山師相對可致事、
〇按ズルニ、右ノ小泉銅山ノ記錄ハ、末文ニ慶長十六年閏五月十二日、德川家康ノ定メシ事ヲ記スレド、其文甚ダ疑ハシキヲ以テ之ヲ略ス、
〔壬生家文書一〕左辨官下採鑛所
應早進上銅參佰斤事
右權大納言藤原朝臣道家宣、奉勅、件物爲宛伊勢豐受太神宮遷宮神寶用途料、宜仰彼所早令進上者、所宜承知、依宜行之、
建曆元年七月九日　　右大史中原朝臣花押

札

一喧嘩口論仕間敷事

一諸勝負堅停止之事

一山師町人入籠に小屋不可懸事

一山師商人、諸細工、大工、はりこ石はたき、板取等之外宿致間敷事、

一盗賊人於有之は、注進可仕、たとへ同類たりといふとも、其罪をゆるし、ほうび可出事、

右之旨於相背輩は、可為曲事者也、仍如件、

元和三年七月十九日

金戸勘解由

温尾嘉右衛門

藤津主馬

(銅山受負書記)山法〇[illegible]

一金格子破之事

一柱根掘之事

一鑿先窺之事

右三ヶ條之儀於相背者、急度山例ニ可取行者也、

一鋪内ニ出家無用之事

一鋪ノ物決断無用

侍タリトモ堅無用

右之通相守可申候、若於相背者、山例法式之通可申附者也、

一御公儀様ヨリ被仰出候御法度之儀者不申及、御役人中ニ慮外仕間敷事、

但金工買師ハ、爲過料其鋪取明ケ、留方可申付定ニ御座候、

一買金銀　似掛砂　似山色　隱荷

右者片鬢剃、追山之法ニ御座候、

一金工買師欠落ハ、永代山塞ぎ張紙之法ニ御座候、

一金工買師無調法有之、追山之節、未進貸有之時ハ、梁下押取上之法ニ御座候、

一鋪内不働役人下知を背候者、金工買師召放、腰縄下ニシテ追山之法ニ御座候、

一他所他山にて科いたし、又は人を痛メ、盗等致候者たりとも、其山内に不拘義は無構、召拘爲働申候、但追人参り候も、召捕遣メ間敷法令也、

一鋪之者無調法有之、縄下に及候共、鍛冶屋江駈込候はゞ、追込取押申間敷事、

一喧嘩有之共、大工部屋江無断役人駈込、怪我致候ても、役人之越度に御座候、

一間夫密通之御法は、兩追放に御座候、

一諸勝負博奕之喧嘩は、宿致候者可爲越度、縄下にして追山之法に御座候、

一刃物を以喧嘩致候者、鉤縄を懸片鬢剃、追山之法に御座候、

一山内出入之義は、帶刀令停止候事、總而無用之者不可入事等は、山例に有之通、相犯候者は取押追山之法に御座候、

一背持留課門番所十分一番所之義は、札表に隨ひ門制箇條有之事に御座候、

○按ズルニ、赤穗滿矩ノ礦山聞書ニ、右ノ御山法ト云フモノヲ引キテ、其終ニ五十三箇條ト云トモ、是ヨリ外不用、右山法大略有來候法式也、ト記セルヲ見レバ、此山法ト云フモノハ、嘗ニ尾去澤銅山ノミノ規定ニテハナカリシ事ヲ知ルニ足ル、

(梅津主馬政景日記)元和三年七月十九日(略○中)町中(内○民)法度書五ヶ條書札を立申候、

一人殺ハ　死罪ニ相行候

一金道具類、盗賊之科也、是ハ引筋切、片鬢剃、追山之法ニ御座候、

一喧嘩口論仕、為怪我候者、相手薄手ニ候ヘハ、両追放、相手深手ニ候ヘハ、薬用申付、快気見届之上
為怪我致候者、片鬢剃、朱を差追山之法ニ御座候、但及死命候時ハ、人殺之科ニ準、

一棚流し研通　片鬢剃、追山之法ニ御座候、

一人釣出し候者　片鬢剃耳鼻取、追山之法ニ御座候、

一座外、欠落、逃し者、　縄下ニシテ追山、尤科之軽重有之、山内相構申候、

一他役所掛之者ヘ無調法、諸役者之遠慮、山方ヘ不申出、相募、番所諸役所相騒し候者、理非ニ不拘
片鬢剃、追山之法ニ御座候、

一留切羽掘様入尻掘候者　片鬢剃、追山之法ニ御座候、

一諸国之徒党又ハ越訴
右者片鬢剃耳鼻取、追山、永代張紙之法ニ御座候、

一他山ゟ買石、他山ヘ売石、
右者片鬢剃耳鼻取、追山永代張紙、金工買師ハ家財闕下取上之法ニ御座候、

一金工買師自分拘之者、無調法有之節ハ、一澤組合相断床屋并検断町頭迄申出候ハヽ、山方役所
迄訴、其上科之軽重ニ随ひ、縄下ニいたし可致仕置事、
我儘ニ仕置いたし、怪我又ハ命に相拘時ハ、金工買師之者可為越度事、組合加談を得、一澤之取
扱ニ相及、縄下にいたし候はヽ、家並より番を付可取扱、
科之軽重は山方ヘ訴之上可取計定に御座候、

一廊下研通し棚切流之者　縄下ニシテ追山之法ニ御座候

右之通、天正年中、從公儀被仰出候間、往來旅行之砌、大切ニ可致所持者也、

天正十六戊子歲閏五月　　本多中務少輔

〔足尾銅山舊記〕銅山御奉行

一慶長十五庚戌同十九寅迄五ヶ年、藤川庄次郎樣御支配、是レハ丑年ヨリ銅御買上被仰付候、御奉行品川庄次郎樣、寅年冬大坂陣ニ御出立被遊候ニ付、其節御金三百兩、銅山師ニ拜借被仰付、大坂ニテ萬一之儀有之候共、右三百兩御貸付ノ儀、急度御指定相立候樣、銅山師江被仰渡、御銅山引渡之儀、小林重郎左衞門樣ヘ御引渡被遊候由申傳候、

銅山御代官

一元和元卯より寬永元子迄十ヶ年、小林重郎左衞門樣御支配、辰三月より酉年迄、銅御用無御座、御留山ニ被仰付、六ヶ年過戌年ニ至、御銅御開後、戌寅子迄銅御買上被仰付候由申傳候、

銅山御代官

一寬永二丑より同三寅迄二ヶ年、小林査五郎樣御支配、丑より卯迄銅御用無御座、御留メ山ニ被仰付候處、諸稼ノ者家業無御座難儀仕候ニ付、奉願辰巳兩年、日光大僧正銅御買上ゲ被遊候由申傳候、

〔陸中國鹿角郡尾去澤銅山三澤御敷内働方仕方書上帳〕鑛場憲法廿七箇條

一鑿角送候者　　謀判之科ニ準

一金格子破候者　　關所破之科ニ準

一番欠切羽明ヶ候者　　出仕候先欠候科ニ準

右三ヶ條之科ハ、至テ重き故、是を三法と申候面、山内引廻之上、耳鼻取、片鬢剃、追山永代張紙之法ニ御座候、

年號月日　　奉行

御目安札

一山內取扱非道之儀有之歟、又ハ訴申出候義、上ニ難聞儀有之候ハヽ、此箱ニ訴狀ヲ入可申出事、

一金銀之鉱ニ當リ、山師者勿論、買石隱密ニ掘取、御買山不相立有之者、早速訴可申出候、譬同類たりとも其科ゆるし、褒美可被下候事、

以上

年號月日　　奉行

右御札江高サ貳尺、長サ三尺、幅壹尺之箱、上ニ長キ穴ヲ明、錠ヲ卸シ、御札場ニ有之、但御目安ハ入候もの、名判無之時者、御取立無之事、

壹重封ハ御奉行、二重封者御老中迄上ル、三重封者御直訴也、鍵ハ御上ニ納ル也、

右御制札、御目安箱共、今ニ秋田銅山之內、小澤銅山、眞木澤銅山、銀山町ハ御代官三ヶ所ニ有之候、

(足尾銅山舊記)御定法

一山例五拾三ヶ條之儀者、於駿州日陰澤堤、當時將軍家康公被仰付候上意ハ、金銀銅鉛之四寶山者、何方ニ出來候共、右其山師金堀職分之者、野武士之格式與被仰付候、依之諸國通行之節、不限御領私領、所々御關所之儀者、右四品之山迄見石を以可致通行、皆是亦被仰渡候御事、

一山師金堀師、何國ニ而見立山仕候共、御領所ハ御勘定所、私領者其國主領主方ニ、其山師江其所之邑役人相副、不限晝夜早速可為注進事、

一右趣之御定例被下置候得共、於公儀御預り置被為成候、右ニ付、本書御證札之寫を以、諸國通行可致事、

制度

年々ニ減ジ、幕府ノ理財家大ニ苦心焦慮ヲ重ネタル事アリキ、尙ホ鑛山ノ事ハ、金属篇及ビ
玉石篇ヲ參照スベシ、

〔令義解十雜〕凡國内有出銅鐵處、官未採者、聽百姓私採、(謂、文云官未採、即採之後、百姓不可私採、)若納銅鐵折充庸調者聽、自
餘非禁處者、山川藪澤之利、公私共之、
凡知山澤有異寶異木(謂異寶者、馬腦虎魄之類也、異木者、沈香白檀蘇芳之類也、)及金玉銀彩色雜物(謂、異寶異木之外、諸處充國用者皆是、)處、堪供
國用者皆申太政官奏聞、

〔續日本紀六元明〕和銅六年五月甲子、畿内七道諸國郡鄕名著好字、其郡内所生銀銅彩色草木禽獸魚
虫等物、具錄色目、及土地沃塉、山川原野名號所由、又古老相傳舊聞異事、載于史籍言上、

〔鑛山閉書〕諸國御山例之事
一喧嘩口論令停止事
一諸勝負博奕堅令停止事
一公儀御定御法式可相守事
一他山より買石令停止事
一他山江賣石令停止事
一山師山先之外、山内刀脇差入間敷事、
　但公用たりとも、諸士山用之外、山内入間敷事、
一諸勧進乞食入間敷事
一御山例堅可相守事
一惡黨者抱置間敷事
右條々堅可相守、若相背候者於有之者、可爲曲事者也、

古事類苑

金石部一

鑛山上

鑛山ノ我邦ニ開ケシハ、其時代詳ナラズ、史ニ神代既ニ銅鐵ヲ山中ニ採ルノ事ヲ載セタリト雖モ、未ダ鑛山ノ開掘ト稱スルニ足ラズ、其後對馬ヨリ金銀ヲ出シ、尋デ陸奥ヨリ金ヲ出ス、是ヨリ漸ク鑛山ノ事盛ニシテ、大寶令ニハ其制度アリ、

鑛山開掘ノ法ハ、徳川幕府時代ニ至リテ始テ精シク、殊ニ佐藤信淵ノ家ニテハ、箕裘相襲ギテ、鑛山學ヲ興シ、鑛物含有ノ山脈ハ、一定ノ山相ヲ具シ、而シテ金、銀、銅、鐵等、皆各、其固有ノ山相アルヲ論シ、大ニ鑛山開掘術ニ貢獻スル所アリキ、當時鑛山ハ幕府ノ所管ニ係ルモノト、諸侯ノ所有ニ係ルモノト、人民ノ所有ニ係ルモノトノ別アリテ、其鑛内ノ經營設備、亦多少ノ差違アリシト雖モ、其開掘ノ方法、採鑛、淘汰ノ方法、及ビ職員工夫ノ執務、生活ノ狀態等ハ、各坑概シテ相似タリシモノヽ如シ、

諸國ノ鑛山ハ、金山ニテハ、佐渡及ビ陸奥ノ南部、仙臺尤モ著ハレ、銀山ニテハ、石見及ビ佐渡ノ相川、出羽ノ院内、但馬ノ生野尤モ著ハレ、銅山ニテハ、下野ノ足尾、伊豫ノ別子、陸奥ノ尾去澤等尤モ著ハレ、硫黄山ニテハ信濃ノ淺間ケ嶽、越中ノ立山、薩摩ノ硫黄ケ嶽等最モ著ハレ炭坑ニテハ長門、筑前等最モ著ハル、而シテ我邦ハ銅鑛ノ出量尤モ多クシテ、徳川幕府時代ニ於ケル輸出品中、鑛物ニテハ獨リ銅ノ輸出アルノミナリキ、ナレド其中葉以後、銅ノ産出

沙土

金石部五

玉石下

金石部三

金屬

金石部四

玉石上

金石部二

鑛山下

古事類苑

金石部一

鑛山上

古事類苑

金石部目錄

編修顧問　從三位文學博士　本居豐穎

編修顧問　從五位文學博士　木村正辭

編修顧問兼校勘　從五位文學博士　井上頼圀

編修總裁　從二位文學博士男爵　細川潤次郎

編修長　正七位文學博士　佐藤誠實

編修副長兼校訂長　從六位文學博士　松本愛重

編修　正七位　廣池千九郎

編修兼校訂　加藤才次郎

編修兼校訂　山本信哉

編修兼校訂　村尾節三

編修　從六位　佐伯有義

編修兼校訂　三浦千畝

校訂　竹島寛

校合員　齋藤松太郎

校合員　平川清水

門の文とてふみをもてきたり、みなねたるに火ちかくとりよせて見れば、あすみどきやうのけちぐはんにて、宰相中將の御物いみにこもり給へるに、いもうとのあり所申せとせめらるゝに、すぢなし、さらにえかくし申まじき、そこときかせ奉るべき、いかに仰せにえたがはんとぞいひたる、返事もかゝで、めを一寸ばかりかみにつゝみてやりつ、さて後にきて、一夜せめてとはれて、すゞろなる所にゐてありき奉りて、まめやかにさいなむにいとからし、さてとかくも御かへりのなくて、そゞろなるめのはしをつゝみて給へりしかば、とりたがへたるにやといふに、あやしのたがへ物や、人のもとにさる物つゝみてをくる人やはある、いさゝかもこゝろえざりけると、みるがにくければ、物もいはで、すゞりのあるかみのはしに、

かづきするあまのすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけん、とかきていだしたれば、歌よませ給ひつるが、さらに見侍らじとて、あふぎかへしてにげていぬ、

〔清良記七上〕藻草之事

一海藻類〇中略

一是等は草木の内にても多して、勝れたる養也、此外不可勝計、

〔萬葉集 十三 相聞〕紀伊國之、室之江邊爾、千年爾、障事無、万世爾、如是将有登、大舟乃、思恃而、出立之、清瀲爾、朝名寸二、来依深海松、夕菜寸二、来依縄法、深海松之、深目思子等、遠縄法之、引者絶登夜、〇下略

〔萬葉集 十五〕海邊望月作歌九首 〇八首略
和多都美能、於伎都奈波能里、久流等伎登、伊毛我麻都良牟、月者倍爾都追、

〔文禄四年御成記〕一初獻 御盃参候〇中略 御肴 堅海藻、

〔大和本草 八 草〕鳥ノ足 一根ニ枝多シ短シ、葉形如海松、只蒼黒褐色、鋒ニ兩叉アリ、煮テ可食、

〔毛吹草 三〕紀伊 鳥足 鳥ノ足ニ似ル藻ヲ云 鼠藻、

〔大和本草 八 草〕ナゴヤ 海藻ニ似テマルシ、枝多ク細長シ、色青シ或褐色也、煮食ス、又沸湯ニユビキテ、味噌ニ和シテ食ス、性アシ、往々害脾胃、不可食、

〔令義解 三 賦役〕凡調〇中略 正丁一人、絹絁八尺五寸、〇中略 若輸雜物者、〇中略 雜海藻一百六十斤、

〔常陸國風土記 多珂郡〕郡南卅里藻島驛家、〇中略 昔倭武天皇乗船浮海、御覽島礒、種種海藻多生茂繁、因名、今亦然、

〔豐後國風土記 海部郡〕穗門郷 在郡南 昔者纏向日代宮御宇天皇、〇景行 御船泊於此門、海底多生海藻而長美、天皇即勅曰、取最勝海藻、謂保都米 便令以進御、因曰最勝海藻門、今謂穗門者訛也、

〔肥前國風土記 三根郡〕米多郷 在郡南 此郷之中有井、名曰米多井、水味鹹、曩者海藻生於此井之底、纏向日代宮御宇天皇、〇景行 巡狩之時、御覽井底海藻、即勅賜名曰海藻生井、今訛米多井、以爲郷名、

〔延喜式 四十二 東西市〕海藻廛〇中略 右五十一廛東市

〔枕草子 四〕さとにまかでたるに、殿上人などのくるも、やすからずぞ人々いひなすなる、〇中略 左衛

乎乃利也、

〔倭訓栞前編六〕かはな　倭名抄に水苔をよめり、川菜の義なるべし、祝詞式にもまか書り、芹の名とす、古今集のかはなぐさも、是をいふなるべし、殿にも此藻をかき、或は彫は、火を防ぐ也、

〔大和本草八水草〕河苔カハノリ　處々小流ニアリ、海苔ノリニ似テ其色青ク、糸ヲツカネタルガ如クニシテウルハシ、美トシ、或ハ酢ニテ食ス味ヨシ、但小蟲ヲ發シ身ヲ痒カラシム、病人及有瘡人食スベカラズ、北ニ向テ流ル、小河ニアリ、他方ニ向テ流ル、川ニハナシト云、漢名未詳、凡水苔ノ類ノ中ニ蛭蟲ナド毒虫ノ子アリ、食之則吐血而死ス、ヨク擇ブベシ、妄ニ食フベカラズ、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕水藻　カ○ハ○モ○　イ○ブ○モ○ノ○ハ○ナ○古歌　カ○ハ○ナ○グ○サ○同上　一名蕰藻典籍便覽

蕓藻同上　烏藻同上　聚藻一名蕰藻埤雅　馬藻一名柳葉菹救荒本草　菹草同上

水藻ハ水中ニ生ズル藻類ノ總名ナリ、集解兩種ニ分ツ、其一ハ聚藻フサモ江州キンギヨモ、エビノス紀州ノギリ、信州クジヤクモ、勢州スゞモ、土州流水底ニ生ジ、水ニ隨テ靡キ流ル、コト長ク、數尺ニ至ル、葉ハ至テ細ク絲ノ如シ、節ゴトニ多聚リテ、蓬子菜カハラマツバノ如シ、二月白花ヲ開ク、五瓣黄蘂、大サ三四分、水上ニ出テ開ク、其一ハ馬藻、ヤナギモ、ナ、モ、溝瀆流水中ニ多シ、此モ水底ヨリ生ジテ、水ニ隨ヒ靡キ流ル、コト數尺、葉ハ長サ二三寸、濶サ一二分、兩對シテ生ズ、又一種互生スル者アリ、

〔延喜式八祝詞〕鎭火祭

神伊佐奈伎、伊佐奈美乃命妹背二柱、中略○吾名妹能命波、上津國乎所知食倍志、吾波下津國乎所知止申氐、石隱給氐、與美津枚坂爾至坐氐、所思食久、吾名妹命能所知食上津國爾、心惡子乎生置氐來奴止宣氐、返坐氐、更生子水神、匏、川菜、埴山姫四種物乎生給氐、此能心惡子乃心荒比留波、水神、匏、埴山姫、川菜乎持氐、鎭奉禮止事教悟給支、

石帆

〔大和本草八海草〕索麪苔　サウメンニ似テ長キ莖也色黑シ味甘シテ美ナリ、鹽ニツケ或灰ニ和シテホシ用ユ、煮テ食ス、或薑醋ニ浸シ食フ、其漢名ト性ト未詳、冷滑ノ物不益于人、

〔和漢三才圖會九十七藻類〕海索麪　俗稱

按近世西海四國及因幡丹後多有之、細長狀似索麪、而青褐色、故名海索麪、乾送于四方、用時盛漆器、少時沒水復、亦用磁器則縮不散、用熱湯或醋食之、味淡甘脆、若盛磁器則潰爛而失味、東海亦間有之、

〔毛吹草三〕因幡　海索麪白鳥

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕石帆　ウミヒバ　一名海松中山傳信錄　礁松同上　鐵樹廣東新語、同名多シ、　落樹同上

海底ノ石上ニ生ズ、大ナル者ハ高サ四五尺、小ナル者ハ數寸、枝又甚ダ多クシテ網羅ノ如シ、皆左右ニ枝出テ扁ク、帆ノ形ノ如ク、又佛ノ後光ノ如シ、紅黃紫白青黑褐ノ數色アリ、小ナル者ハ海邊ニ於テ拾ヒ得、或ハ漁人ノ網ニ挂ル、用テ盆供トス、ソノ紅ナルモノハ、外ハ柔ニシテ赤土ヲ塗ガ如シ、外ノ柔ナルヲ削リ去ル時ハ、骨甚硬ク石ノ如シ、赤色ニシテ縱道アリテ、珊瑚ニ異ナラズ、然レドモ枝ゴトニ自ラ斷々節ヲナサズ、長サ三四分許、コレヲ珊瑚砂ト云、又海濱ニテ拾ヒ得ル者アリ、其黃色ナル者モ又然リ、他色ノ者ハ骨軟ニシテ珊瑚ノ狀ヲナサズ、

一種ウミマツアリ、又海中石上ニ生ズ、枝少ク扁ナラズ、黑澤ニシテ甚硬シ、枝ノ梢稀ニ葉アリ、杉葉ノ如ニシテ極テ細ク長シ、播州ニテヤガチト云、鎌倉ニテヤガト云フ、漢名鐵樹、通雅　一名黑珊瑚、物理小識　海苔樹、廣東新語　一種ウミスギハ枝多ク叢生シ、杉葉ニ似テ細小淺黑褐色ナリ、此外海產樹形ナル者甚ダ多シ、

水苔

〔倭名類聚抄十七水草〕水苔　辨色立成云、水苔一名河苔、和名加波奈

〔箋注倭名類聚抄九藻〕按水苔疑今俗呼加波毛豆久、即是、常以陟釐充之、今南部呼加波奈者、海產同

龍鬚菜

〔本朝食鑑　水菜三〕海藻略○中白藻状如髮、如馬鬣、而有枝、長一二尺許、附石而生、生時淡紫色、連日晒乾則變白、若陰雨時、漬鹽水取出、暴風日則變白、其味甜好、精潔生食可愛耳、備前海濱多有、豐後及海西諸州亦有之、

〔大和本草　海草八〕龍鬚菜シラモ　王氏彙苑曰、生海中石上、叢如絹、長僅尺許、色始青、居人取之沃於水乃白、又名絹菜、人頗珍之、今按備前ニ白藻アリ、絹絲ノ如ニシテ、青白水ニ浸セバ白クナル、煮食シ、或水ニヒタシスミソニテ食ス、潔白ナリ、若水曰、又北土及他州ニモ有之、ソウナト云、

〔毛吹草　三〕備前　堅甫白藻　伊豫　來島白藻

〔寛政四年武鑑〕松平伯耆守資承宮津○丹後　時獻上十月白藻

海人草

〔和爾雅　菜藻七〕鷓鴣菜マクリ出于閩書

〔倭訓栞　中編二十四〕まくり　海苔の類にいへり、鷓鴣菜也といへり、海葉也ともいへり、世に海仁草ともいひ、或は藻をよめり、小兒の腹痛などに用ひて虫を下す、まくり甘草合せ用う、古方なり、

〔大和本草　海草八〕鷓鴣菜マクリ　閩書曰、生海石上、散碎色微黑、小兒腹中有蟲病、少食能愈、甘草ト同煎シ用ユレバ、小兒腹中ノ蟲ヲ殺ス、初生ニモ用ユ、

〔和漢三才圖會　海草九十七〕海人草カイニンソウ　俗云末久利

按海人草生琉球海邊藻花也、多出於薩州、販于四方、黄色微帶黯、長一二寸有岐無根髭、而有微毛茸、輕虚、味甘微鹹能瀉胎毒、一夜浸水去土砂、小兒初生三日中先用海人草甘草二味、試加蕗根包帛浸湯令吮之、呼曰甜物マクリ、此方不知始於何時、本朝通俗必用之藥也、呑之兒吐涎沫、謂之吐穢汁、可以去膈上胎毒、既及吃乳則不吐、用加味五香湯可下、

海索麪

〔本朝食鑑　水菜三〕海藻略○中海索麪古未聞此名、近世通俗以相似而誤名、状似紫菜之亂、青色柔脆、嚼之如有聲、其味甜好、京師近國最多、江東諸有、伊豆、參河、安房、下總等海濱時有之、而氣味主治未詳、然世人食之、藏中者少矣、

〔倭名類聚抄 藻類 十七〕石蒓　唐韻云、蒓〈常倫反、漢語抄云、石蒓、古毛、一云、水葵菜〉水葵也、辨色立成云、海蓴、〈和名上同〉

〔箋注倭名類聚抄 藻類 九〕按本草和名云、石蒓一名海蓴、出崔禹、和名古毛、與漢語抄辨色立成合、但水葵是蒓一名、詳見下文、漢語抄以爲石蒓一名、誤、本草拾遺云、石蓴生南海石上、南越志云、似紫菜、色青、臨海異物志曰、附石生也、小野氏曰、是可以充今俗呼阿乎左者、然則以石蒓充古毛非是、〈中略〉○毛詩釋文引、鄭小同曰、莕或名水葵、江南人名之蓴菜、正義引陸璣疏云、江東人謂之蓴菜、或謂之水葵、蓴即蒓字、本草和名云、蘋立言音義、蓴蒓同、按本草和名云、蓴和名奴奈波、又云、石蒓和名古毛、明是蓴石蒓非一物也、漢語抄誤云、石蒓一名水葵菜、源君以蒓石蒓爲一物、引唐韻蒓字注、非是、

〔倭訓栞 前編 九 古〕こも〈中略〉○倭名抄に海蓴を訓せり、古事記にも見ゆ、ほだわらに似て丸きもの多くつけり、著藻也といへり、小藻の義成べし、著聞集にこものこをさかなにまけると見えたるは、此を粉にまたるにや、庭訓に蒟子と書るはいかゞ、

〔庖厨備用倭名本草 四 水菜〕石蓴〈サクレン〉〈コモ〉　倭名抄ニコモ海蓴ノ二字ヲ用フ、〈蓴與蒓同〉多識篇集ニシテ、考、本草南海石ニ附テ生ズ、莖ノ長サ二三寸イロアヲシ、涎滑アリテ脂ノ如シ、又光瑩ニシテ水晶ノ如シ、葉ノ間ニ莖アリ、莖中ニ花アリ、形圓ニシテ豆ノ如シ、其葉莖ヨリ大ニシテ卷タリ、慈姑ノ葉ノ如シ、莖瑣ニテ变テ甚ダ美ナリ、昔張翰ガ思シ蓴鱸ノ蓴ハ即是也、元升〈弁〉○〈中略〉曰、西國ニコモト云海草アリ、其ノ様本草ノ説ノゴトシ、コマカニキザミタヽキテ、シヤウユウ、サカシホニテ調レバ、子バリナメラカニシテ脂ノ如シ、シヤウガタルミナドキザミ入テ甚美ナリ、山葵ノトロヽ汁ニマサレリ、サレバ石蓴ハコモナルコトウタガヒナシ、多識篇アヤマレリ、又コモノ長ジテ老タルハ、色變ジテ紫ニナル、正月ノカザリニ用フルホダハラハ、此コモノ老タルナルベシ、

〔大和本草 八 海草〕コモ　細莖長クシテ、穗ノ如クナル小ニシテ丸キ物多クツケリ、タヽキテ藥トス、ホダハラニ似タリ、又蓴ハ水草ナリ、別ナリ、

用一十七貫五百六十文〇中略 三百卅文。布。乃。利七斗五升直(四斗五升別五文、三斗升別四文)〇中略
以前起去閏三月一日、盡今月廿九日、所用雜物并價等、顯注如件、以解、
寶龜二年五月廿九日 散位正六位上上村主馬養(署名以下略〇)
〔東大寺要錄三〕供養東大寺盧舍那大佛記文
貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〇中略
一僧供 導師一人供料、〇中略 布。苔。三升、〇中略 法用千僧供 一人料、〇中略 布。苔。六合、
〔諸色直段引下(貞)〕諸色引下ゲ直段書
生布海苔
一朝鮮生布海苔 (去子年六月書上直段合壹貫ニ付上中下平均六貫目替) 今般〇略 更再應利解之上直段ニ居置
一(備後州)(肥前五島)生布海苔 但當時品無之候
一(駿河州)(紀州)(土州)生布海苔 (右同斷上中下平均合壹貫ニ付六貫六百六拾匁替) 右同斷(引下直段) 六貫百六拾六匁替
但當時直段六貫六拾六匁、百目直下ゲ、
(右同斷八貫目替) 一(伊豆)(相模)(房州)生布海苔 右同斷 七貫八百三拾三匁替
但同斷七貫五百六拾六匁、二百六拾七匁直下ゲ、
(右同斷七貫目替) 一仙臺生布海苔 右同斷 七貫目替
但同斷六貫六百六拾四匁、三百三十四匁直下ゲ、
(右同斷七貫五百目替) 一(南部)(松前)生布海苔 右同斷 八貫五百目替
但同斷八貫六拾六匁、四百三拾四匁直下ゲ、
〔毛吹草三〕伊勢 海蘿(フノリ) 紀伊 布苔(フノリ) 土佐 海蘿 豐後 海蘿 肥前 海毛
〔本草和名十八〕石髮(楊玄操音髮、仁諝音蔑、出蘇敬注) 一名海苔(出崔禹) 和名古。毛。

〔東雅十三穀蔬〕海蘿フノリ　倭名抄に崔禹錫食經を引て、海蘿其性滑也、フノリといふ、俗用布苔字と註せり、猶麪糊といふが如し、其滑にして物を粘著すべき麪糊の如くなるをいふ也、○中略註　凡海苔の類、又呼びてノリといふは、皆その滑なるをいふ也、

〔本朝食鑑三水菜〕鷄冠菜○中略

海蘿　和名鈔布乃里（中略）多大平野）按、本草亦謂、甘大寒滑無毒、然近時無食之者、鹹醋粘不堪食之、予此物生海中石上、團長三四寸、大如鐵線一分了、如鹿角狀、紫黃色、土人采曝乾、于四方、大抵用紙作巧者、以海蘿爲糊用、織布幕者亦用之、○本朝式、鹿角菜、訓布乃里、參河、尾張、伊勢、紀伊、阿波等州、貢獻于民部省、此供食物歟、用工巧之事歟、未詳、

〔本朝食鑑三華和異同〕海蘿

卽鹿角菜也、古人食之、近世唯爲紙匠之用、而無食之者、李時珍所謂女人用以梳髮、粘而不亂、亦然焉、今婦人產難用之、爲滑胎之利、亦可也、

〔和漢三才圖會九十七藻〕鹿角菜　猴葵本綱　海蘿食經　和名不乃利○中略

按倭名抄載食經云、海蘿鹹大冷　其性滑滑然主九竅、則海蘿與鹿角菜一物也、倭名抄以爲二物者非也、凡海蘿生者和醋未嘗食之、稱生海蘿、訓古不乃利　處處多出之、似石花菜而黃紫色、肥州五島之產爲最上、朝鮮次之、志摩、伊豆、對馬、阿波、肥州平戶、紀州熊野之產爲中、奧州松前、仙臺、南部、及防州、土州之產爲下品、但奧州之產甚多也、曝乾用時煮之爲糊、紙工家用治紙、或和石灰爲堊塗城樓壁、產前催生、及胞衣不下者、用布苔煮汁服之、又傳痔脫肛卽平安、皆取性滑利也、婦人用洗髮則舊油不脫而垢能去、又織絺布者塗之則簇易行、

造法、洗水去砂攤于筵上、以稗帚洒水、晒乾則成、裁爲方形販之、其功用最多大致民之利、

燒海蘿法　用乾海蘿、漬水去塵握丸、裹紙煨之擂爛、和柹漆爲糊最佳、

〔續修東大寺正倉院文書別集十九〕奉寫一切經所解　申請用雜物事

合請新錢廿三貫九百九十三文○中略

海蘿

〔本朝食鑑　三水菜〕鷄冠菜(略)○中

角股菜(ツノマタ)(此亦本朝式所載角俣、今或呼鹿角、狀灰色、乾則黑色、細如鹿尾菜、呼赤鷄冠、不似鷄、但今水邊有、其味主治未詳、)

〔大和本草　八草〕鹿角菜　本草水菜ニ載ス、大寒無毒ト云、然ドモ性不良、其形鹿角ニ似テ小ナリ、海中岩間ニ生ズ、乾シ收メ用ル時、水ニ浸シ醋ニ和シテ食フ、

〔延喜式　二十三民部〕交易雜物

伊勢國(中略)鹿角菜二石、(中略)尾張國(中略)鹿角菜三石、(中略)參河國(中略)鹿角菜二石、(中略)播磨國(中略)鹿角菜二石、(中略)紀伊國(中略)鹿角菜二石、(中略)阿波國(中略)鹿角菜二石、(中略)　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式　二十主計〕凡諸國輸調(中略)一丁(中略)大凝菜、小凝菜、角俣菜(ツノマタ)各卅斤、(中略)鹿角菜(フノリ)卅三斤五兩、

凡中男一人輸作物(中略)鹿角菜、大凝菜、海藻各六斤、(…十一…一)

〔延喜式　三十大膳〕同月(正月)○中　修太元帥法料(中略)鹿角菜一斛九斗、(中略)海松、角俣菜各廿四斤、

志摩國(中略)調(中略)角俣菜、

〔延喜式　三十內膳〕供御月料

仁王經齋會供養料

僧一口料、(中略)鹿角菜、(好物料)(中略)角俣菜一兩二分、(好物料二分、一兩、)(中略)　右一日供料依前件

鹿角菜十二斤、(中略)　右月料、小月減卅分之一、

○按ズルニ、延喜式ニ角俣菜、鹿角菜ヲ並ベ載セタリ二物トス、然ルニ本草和名、倭名類聚抄等ニハ、鹿角菜ヲツノマタト訓ジタレバ、鹿角菜ト角俣菜トヲ同物ト爲シタルガ如シ、但シ本朝食鑑ハ延喜式ノ訓ニ據リテ、鹿角菜ヲ海蘿(フノリ)トス、

〔倭名類聚抄　十七海菜〕海蘿　崔禹錫食經云、味澀鹹大冷無毒、其性滑滑然、主九竅、(和名不乃利、俗用布海苔二字、)

〔異制庭訓往來〕酒肴等餘無沙汰無極候、何樣尾籠之至可候乎、荒々所尋出者、(中略)海蘿、

ウケウト

角俣菜

味淡甘美最爲上品、俗傳曰、煮之者勿語、如吐戲言則不成也、漢語抄爲之小凝菜、以石花爲大凝菜者最當矣、

〔延喜式主計二十四〕凡諸國輸調、〇中略 一丁、〇中略 大凝菜、小凝菜、角俣菜各卅斤、

凡中男一人輸作物、〇中略 小凝菜、雜海菜各八斤、

志摩國〇中略 調、〇中略 小凝菜、

〔延喜式內膳三十九〕供御月料

伊祇須九斤〇中略 右月料、小月減卅分之一、

〔大和本草附錄一〕ウケウト 海草也、煮テトコロテンノ如クカタマル、コンニヤクノ色ナルモアリ、非佳品、不可食、

〔本草和名十八菜〕鹿角菜、狀如鹿角、赤紫色、一名猴葵、出七卷食經 和名都乃末多、

〔倭名類聚抄十七海菜〕鹿角菜 崔禹錫食經云、鹿茸狀似水松、和名豆乃萬太 文選江賦注云、鹿角菜、漢語抄云、和名同上、

〔箋注倭名類聚抄九藻〕江賦、紫菜熒曄以叢被、李善注、紫菜色紫、狀似鹿角菜而細、此所引卽是、按嘉祐本草云、鹿角菜出海州、登萊沂密州並有、生海中、李時珍曰、鹿角菜生東南海中石厓間、長三四寸、大如鐵線、分丫如鹿角狀、紫黃色、土人采曝、貨爲海錯、以水洗醋拌、則脹起如新、味極美、若久浸則化如膠狀、女人用以梳髮、粘而不亂、

〔庖廚備用倭名本草四水菜〕鹿角菜ツノマタ〇中略 元升〇向井曰、西國ニロクカクサイト云アリ、モトハ大明商客ノ持來ル、近キ比ヨリ天草邊ノ海中ニ出ルトイヘリ、其ナリアヒ鹿ノ角ノ如シ、其色或ハ白キアリ、或紫黃ナルアリ、本草註ノ說ノ如シ、是卽鹿角菜ナルコト明ラケシ、今俗音ニ隨テロクカクサイトイヒナ、ツノマタト云、和名ヲシラズ、日本モ古ヨリ此菜ヲ食シタルナルベシ、多識篇ニヒジキト云ハ誤レリ、

〔東大寺要錄 三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歳次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、○中略

一僧供　講師一人供料、○中略心太三升、○中略　法用千僧供　一人料、○中略心太三合、

〔延喜式 四十二 東西市司〕心太廛○中略　右五十一廛東市　心太廛○中略　右卅三廛西市

〔毛吹草 三〕紀伊　[illegible]凝草トコロテンニ用之

〔伊豆七島調書〕八丈島

一此島稼には、男は○中略海藻之内海苔はいきす、ところてん草の類を取、○中略渡世仕候、

〔守貞漫稿 六 生業〕夏月專ラ賣買ル者ハ、○中略心太賣、

心太トコロテント訓ズ、三都トモニ夏月賣之、京坂心太ヲ晒シタルヲ水飩ト號ク、心太一箇一文、水飩二文、買ク後ニ砂糖ヲカケ食之、江戸心太價二文、又晒之ヲ寒天ト云、價四文、或ハ白糖ヲカケ、或ハ醤油ヲカケ食之、京坂ハ醤油ヲ用ヒズ、又晒之乾キタルヲ寒天ト云、煮之ヲ水飩ト云、江戸ハ乾物煮物トモニ寒天ト云、

〔倭名類聚抄 十七 海菜〕海髮　崔禹錫食經云、海髮味鹹小冷、其色黑狀如亂髮、和名以木須、本朝式云小凝菜、

〔箋注倭名類聚抄 九 海菜〕本草和名海藻條引云、一名海髮、狀如亂髮也、按本草和名附錄海藻條者、以類聚校耳、一名字恐衍、按其云狀如亂髮、則是赤菜於期菜之類、恐非伊岐須、或曰、又按本草陶注云、海藻生海島上、黑色如亂髮而大小許、葉大都似藻葉、合二書見之、海髮即海藻之一名、源君分之爲伊岐須、非是、

〔和漢三才圖會 九十七 海藻〕海髮　小凝菜順和名抄　馬尾藻　和名以木須○中略

按海髮本草所謂馬尾藻乎、阿州、淡州、備州、泉州有之、淡州者爲勝、長尺餘青色而蓄絹纖也、乾則紫黑色如亂髮、注水曬則潔白、煮之則凝凍如石花菜寒天餠之類、盛淺器冷定而纖截之、和醋未醬食之、

〔延喜式二十四主計〕凡諸國輸調、〇中略一丁、〇中略大凝菜、小凝菜、角俣菜各卌斤、

凡中男一人輸作物、〇中略鹿角菜、大凝菜、海藻各六斤、相模國一斤十一兩

上總國〇中略中男作物、〇中略凝海藻、若狹國〇中略調、〇中略凝菜、阿波國〇中略中男作物、〇中略

凝海菜、

〔延喜式三十三大膳〕同月〇正月修太元帥法料、心太一斗九升、

仁王經齋會供養料

僧一口別、〇中略大凝菜六兩一分四銖、〇汁物料中略　右一日供料依前件、

〔延喜式三十九内膳〕供御月料

大凝菜四斤八兩〇中略　右月料、小月減卅分之一、

〔出雲風土記島根郡〕凡北海所捕雜物、〇中略凝海藻、

〔續修東大寺正倉院文書後集四十〕寫經司解　申錢用事

合所請錢貳仟文

買物合十六種〇中略　心太一村　直錢、十文〇中略

以前錢壹狀并買物、顯注如前、以解、

天平十一年八月十一日　史生高屋連赤麻呂〇以下署名略

〔續修東大寺正倉院文書別集十九〕奉寫一切經所解　申請用雜物事

合請新錢廿三貫九百九十三文〇中略

用一十七貫五百六十文〇中略　一百文大凝菜二斗直斗別五十文〇中略

以前、起去潤三月一日、盡今月廿九日、請用雜物并殘等、顯注如件、以解、

寶龜二年五月廿九日　散位正六位上上村主馬養〇以下署名略

釋名小凝菜、凝草、〈式〉大凝菜、〈本綱〉〔源順曰、楊氏漢語抄云、大凝菜和名古古呂布止、俗用心太二字、今大〈平聲〉按本朝式謂古〇留〇毛〇波〇、又曰比〇不〇毛〇波〇、〕

集解、此生于處處海濱沙石間、高二三寸、狀如珊瑚、有紅白二色、枝上有細齒、其根埋于沙中則可再生、一種有似鷄爪者、二物相同、浸水去砂屑及枯黑者、而曝煮者久取出、入水則凝成膠凍、如菎蒻之凝、而透明清白、作膾可愛、和醬汁最嘉薑芥香橘砂糖豆粉而食之、或漬梅醋汁而越年、則作珊瑚琥珀色可愛、或用此菜煎汁塗紙上而晒乾、如雲母紙久而不損傷也、世俗夏月通俗食之、謂能消暑、僧家亦用之、古者尾張、志摩、紀伊、阿波等州、貢獻于民部省、今亦勢尾參河等州最多矣、

氣味、甘寒滑無毒、主治、去上焦胸膈之煩熱及胃熱、止渴消暑解酒毒、凡下焦虛寒之人不宜用、

〔本朝食鑑　華和異同三〕凝海藻

李時珍所謂石花菜、鷄脚菜、俱今有之、即謂登古呂天者也、

〔和漢三才圖會　藻九十七〕石花菜（ところてん）　瑛枝〈本綱〉　大凝菜〈本式〉　凝海藻〈同〉〔和名古留毛波、俗云心太、古々呂布止、〇中略〕

按石花菜今云止古呂天、或云小凝草、豫州宇和島之產爲最勝、相州鎌倉、豐州佐賀關之產次之、豆州海濱、紀州熊野浦亦多出之、

造法、夏月能洗晒乾、復又注水晒乾、凡十日許成白色、水煮冷定則凝凍、如葛粉而不粘、用薑醋沙糖等食之、能避暑也、冬月最寒夜煮之、露宿則凝凍甚輕虛、俗謂之寒天、或用蘇方木煎汁染之、赤色最鮮可愛、謂之色寒天、城州伏見里製之、僧家爲調菜必用也、又用其濃汁塗于紙晒乾、則如雲母紙、而久不損、

僞以他國用

〔令義解　三賦役〕凡調〇中略正丁一人、絹絁八尺五寸、〇中略若輸雜物者、〇中略凝海菜一百廿斤、

〔延喜式　二十三民部〕交易雜物

伊勢國〔中略〕凝海菜〔斤〕〇中略　志摩國〔大凝菜四百斤、白玉千顆、〕　尾張國〔中略〕凝海菜〔斤〕〇中略　參河國〔中略〕凝海菜〔斤〕〇中略　遠江國〔中略〕凝海菜〔斤〕〇中略　紀伊國〔中略〕大凝菜〔一百斤〕〇中略

右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

石花菜

於期五斤四兩〈○中略〉右月料、小月減卅分之一、

若狹國〈○中略〉於巳〈○中略〉右諸國所貢、並依前件、仍收贄殿擬供御、

年料

〔倭名類聚抄十七海菜〕大凝菜 本朝式云、凝海藻、〈古留毛波、俗用心太二字、云古々呂布止、〉楊氏漢語抄云、大凝菜、

〔箋注倭名類聚抄九〕本居氏曰、凝訓古留、或云古呂、猶能恭呂島、自凝之義、心訓古々呂者、古呂古呂之省、凝凝也、故以肝向爲心之枕詞、肝向言腸腑相集對也、〈○中略〉閩書云、石花菜生海礁上、性寒、夏月煮之成凍、本草綱目、石花菜生南海砂石間、高二三寸、狀如珊瑚、有紅白二色、枝上有細齒、以沸湯泡去砂屑、沃以薑醋、食之甚脆、久浸化成膠凍也、

〔庭訓往來〕被仰下之旨、畏拜見仕候畢、〈○中略〉東山蕪、西山心太、

〔庭訓往來諸抄大成扶翼〕貞〈○貞丈〉伊勢云、西山は山にて海なし、心太は海草なり、山に生ずべき理なし、然れども心太を他所より求て、それを煎じて、こゝろぶとに作て出す、佳品なる故名物とするなり、

〔七十一番歌合〕七十一番 右 心太うり

うらぼんのなかばの秋のよもすがら月にすますや我心てい

右はうらぼんのよもすがら、心ぶとうることまかり心ていきく心地す、

〔南留別志一〕一職人歌合に、太凝菜(ところてん)を賣る人の、こゝろていとよぶといふ事あり、それより又ところてんとなれるなり、

〔東雅十三菜蔬〕海髮イギス〈○中略〉イギスの義不詳、コルモは即凝海藻也、コゝロブトとは、コゝロは凝也、フトは太也、即大凝菜也、今も俗に凝をいひてコゞルなどいふ也、

〔本朝食鑑三水菜〕凝海藻〈古訓古古呂布止、今訓古呂天、〉

鷄冠菜

テ滋麥隨ハ賞養ニ勝レリ、他所未見ナリト云、川苔ハ駿州ノ芝川ニ同ジケレドモ、採ル者多カラズ、一ノ宮ノ御手洗川ヨリ生ズルハ尤少シ、

〔備國郡志 上安藝土產〕河苔　倭俗海苔總曰苔、凡海中生苔處々出之、河水生苔者稀矣、高田郡吉田川冬月生苔、形狀風味似海苔、柔脆堪食、又生河鮭、倭俗謂爾奈、其形小如螺、其味淡似蜆、吉田村多治井生芹、其根白如絡、風味勝他產、民間傳言、右緖三物、吉田之名產、而毛利元就知州之日、以此三物獻朝廷云爾、

〔倭名類聚抄 十七海菜〕鷄冠菜　楊氏漢語抄云、鷄冠菜〈土里佐加乃里、式文用鳥坂苔、〉

〔尺素往來〕點心菜者不要多矣、生蘿蔔、鷄冠苔、冬瓜、蕪根、蘘荷、酸漿等之內、三種許可設之、

〔本朝食鑑 三水菜〕鷄冠菜〈訓土里佐加乃里、今之登左加也、〉集解、狀如鷄冠、有小齒、有深剡、深紅色味不美、以淡味而愛、此亦海濱石上生、古者參河、伊勢、志摩、紀伊、石見等州、貢獻于民部省、今亦處處多有之、氣味主治未詳、

〔和漢三才圖會 九十七海藻〕鷄冠菜〈とさかのり〉〈和名止里佐加乃里、正字未詳、名鷄冠苔、〉○中略○中略 按鷄冠菜處處海濱石上生之、○中略 如今肥州天草多出之、伊豆次之、志摩亦少出之、用薑醋食之、又色相似而圖者名楊梅苔、〈やまものり〉

〔重修本草綱目啓蒙 二十水菜〕石花菜○中略 鷄脚菜　トサカノリ〈和名抄〉　鷄冠菜〈同上〉　海中ニ生ズ、赤白黃綠紫黑ノ數色アリ、高サ一二寸、鷄脚ノ義ノ如ニシテ極テ小シ、其剡缺鷄冠ニ類ス、採テ食用トス、

〔延喜式 二十三民部〕交易雜物

伊勢國〈中略〉五斤〈○中略〉鳥坂苔　參河國〈中略〉十斤〈○中略〉鳥坂苔五　出雲國〈中略〉五斤〈○中略〉鳥坂苔　石見國〈中略〉五斤〈○中略〉鳥坂苔　紀伊國〈中略〉五斤〈○中略〉鳥坂苔

右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

（紀伊國名所圖會二海部郡）妹背海苔　又和歌海苔ともいふ、此邊の磯にあり、此海苔をとるには、初冬より春の彼岸に終る、霜月臘月などの寒氣凛冽なるときとるを最上とす、

（大和本草八水草）川苔　川苔モ海苔ニ似タリ、處々ニアリ、富士山ノ麓柴川ニ柴川苔アリ、富士ノリトモ云、日光苔ハ野州日光ノ川ニ生ズ、菊池苔ハ肥後ノ菊池川ヨリイヅ、ホシテ遠ニヲクル、アマノリニ似タリ、肥後水前寺苔ハ水前寺村ノ川ニ生ズ、乾シテ厚キ紙ノ如ナルヲ、切テ水ニ浸シ用ユ、此類諸州ニアリ、○中略

鱗苔　山川ノ石ニ生ズ、短ノレタ褐色粘滑ニ浸セバ青クナル、軟脆ニシテ食フベシ、清潔ナリ稀ナリ、

（和漢三才圖會九十七水草）紫菜○中略

富士苔　富士山之麓、精進川村出之、形狀似紫菜、青綠色、味極美、

水前寺苔　出於肥後、色似富士苔、而方形、煮之不爛、味甘美、近頃不多出、但一一如紫菜相結作方形耳、

（雍州府志六土產）青苔　古出宇治川、載在萬葉集、今不聞有之、凡海苔海藻之所產、其種類甚多、總謂海苔、今鴨川產、又喚謂鴨苔、川海苔之所出、大和布留川、安藝吉田川、肥後水前寺、斯外亦在處々、

（奇遊談三下）貴船の川苔

洛北鞍馬の西、貴船明神は水神にして、加茂の攝社にして、世に名高き靈地なり、此御前の川瀨の石に、六月いと暑き頃、川苔の少とあるを取集て、日に干かはかして、江戸の淺草海苔のごとく用ゆるに、風味かくべつにして、富士川苔よりもよし、ある年東山にて物產會せしに、此川淺草におとらじとて、もてはやしけることなり、去かし多くは得がたし、

（甲斐國志百二十三產物及製造）一川苔　都留郡桂川ヨリ產スル者、富士山ノ餘液ナリ、此水靈アリ、里人引

〔江戸名物詩初編〕永楽屋干海苔浅草雷神門前
帖帖乾来積如紙、年年売出早春風、白魚豉物豆腐汁、纔有一枚味不同、

〔守貞漫稿五編生業〕紫海苔ノ看板略○図
今世モ猶浅草海苔ヲ諸国通名トシ、江戸ニテモ称之、而テ其産大森ヲ専トシ、此辺ヲ本場ト云、其招牌図ノ如ク、然モ粗製ニテ面白、紙張墨書、或ハ白紙ニ藍紙ノ縁ヲ付ケ、或ハ字白藍石摺仕立モアリ、皆必ラズ唐紙風ニテ紙張也、又専ラ官家ニ因テ菊御紋ヲ描キ、店ニ畳ク種類モ白紙張菊紋、又包紙必ラズ摺入紙ニ菊紋ヲ描キ、新干海苔ト書シ、左右ニ地名家號ヲ記ス、近年其包ヲ精ニシ、四方包トシ、因ツ手ト唱フ物多シ、江戸ニテ売ルモ、看板包紙其他皆然リ、

〔守貞漫稿六編生業〕江戸ニ在テ京坂ニ無キ陌上ノ売人略○中乾海苔売
大略中多以後春ニ至リ売之、乾海苔ハ今世大森村ヲ昌トス、然ドモ尚浅草海苔ヲ通名トス、又売之者江人稀ニシテ、多クハ信人也、彼国雪深クシテ、冬季産ニ煩シキヲ以テ、出府シテ売之、図ノ如キ略○図筥ヲ枴ヲ以テ擔売アリ、或ハ張籠ニ納テ、風呂シキ裹ミニシテ負モアリ、又冬春ノ間、店売モ多シ、蓋他買ノ兼売多シ干物店鰹節店ヲ専トシ、其他ノ店ニモ売之、店売ノ者ハ筥ニ十六葩ノ菊ノ記號ヲ描ク、是官家ニ献進ヲ帰ル也、

〔常陸国風土記信太郡〕古老曰、倭武天皇巡幸海辺、行至乗濱、于時濱浦之上、多乾海苔、俗曰乃理由是名能理波麻之村、

〔出雲風土記島根郡〕凡北海所捕採物、略○中紫菜、

〔親元日記〕文明十五年五月廿三日乙卯、三御方へ雲州海苔一折進上之、近年は畢無進上之、為先例之間上進云々、

〔藝備国郡志安芸郡上土産〕海苔　出安南郡仁保島之海濱、潮乾則採之、或生用之、又陰乾送遠方也、

井田ヲ冒稱ス、鎌倉ノ時供御甘苔ト稱シ、天朝ニ獻ゼリ、○略 註 一種糊〔しほ〕海苔、鹹味アリ、煮テ食フ可シ、葉ト絲〔ニツ〕海苔〔鹽見〕

〔村ニヨリ異アリ、種ノ大サノ如シ、〕等アリ、

鬼頭苔　下田ノ大浦及白濱村邊ニ產ス、生ハ青ク乾ケバ白ク、鹽湯ニ投ズレバ則青ニ復ス、尤佳品ナリ、

〔伊豆七島調書〕大島

一女は多より專此海苔を取、又漁事手傳いたし渡世仕候、

神津島

一此島嶼には、男は○中略多は海苔を取、江戶へ出し渡世仕、○下略

〔續江戶砂子〕一江府名產并近在近郊

淺草海苔　雷神門の邊にて製之、二三月の比さかん也、

品川生海苔　品川大森の海邊にて取ル、淺草にてせいする所ののりは、則此所ののり也、

葛西海苔　葛飾郡桑川舟堀二の江今井これらの所にて取り、其所にて製す名產也、淺草のりに似て又異也、

〔江戶總鹿子新增大全〕七江府名物并近國近在土產

淺草海苔　淺草雷神門前　四郎左衛門〔へうや〕

此淺くさ海苔と云は、元來品川大森の海邊にて取たる海苔を、淺草にて製し、尊貴の御膳にも奉る故、猶更其根元の家を吟味して調べき事也、當時此所に海苔屋餘多有といえども、此四郎左衛門を根元とす、○下略

〔續百一錄〕延享五年五月八日卯、叢室樣ヨリ日光御土產、○中略寶蓮院樣へ紗綾壹卷、淺草海苔十五枚一折來ル、

寶龜二年五月廿九日　　　散位正六位上上村主馬養〈○以下署名略〉

〔東大寺要錄　三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〈○中略〉

一僧供　導師一人供料、〈○中略〉紫苔一升、

〔吾妻鏡　八〕文治四年四月二日戊辰、藍摺供御甘苔等、被進仙洞云云、

〔毛吹草　三〕伊勢　甘苔　駿河　富士苔〈山中谷川ニ有之〉　安房　小湊苔　ハゞ苔　生家ノ紐苔

下總　葛西苔〈是ヲ淺草苔ト云〉　下野　日光苔〈川ニ有之〉　若狹　青井堅苔　能登　紐紐苔

丹後　内堅苔　出雲　十六島苔　備前　藤戸苔　長門　向津奧苔〈向津ノ奧ノ入江ノサヽ波ニ苔ノカヽタヲ〉

マノ袖ヤヌレケン、人丸ノ詠歌ト云、　肥前　松苔　肥後　菊池苔〈川ニ有之〉　百足苔〈海ニ有〉　對馬　コブ苔

〔食物知新　首〕日域諸國名產

苔類　青苔〈勢州〉甘苔〈同上〉香多苔〈紀州〉堅苔〈丹後〉黑苔〈駿州〉藤戸苔〈備前〉菊池苔〈肥後〉蜈蚣苔〈同上〉富

士苔〈駿河〉水泉苔〈肥後〉品川苔〈武州〉葛西苔〈同上〉鷄冠苔〈志摩〉牡丹苔〈肥前〉櫻苔〈同上〉波擧苔〈遠州〉

〔寬政四年武鑑〕松平出羽守治鄕〈○出雲松江〉　時獻上　二月　十六島海苔　加賀中將治脩〈○加賀金澤〉

時獻上　三月　紐海苔　五月　紅葉海苔〈御歸國御禮〉　紅葉海苔　九月　島海苔　細川越中守齊茲〈○肥後熊本〉

時獻上　八月　清水苔　十一月　菊池海苔

〔吾妻鏡　六〕文治二年二月十九日丁卯、供御甘苔自伊豆國到來于鎌倉、彼國土產也、仍任例差專使被

京進之云云、

〔吾妻鏡　九〕文治五年十一月一日丁巳、供御甘苔十合、令進上京都給、是伊豆國乃貢也、

〔吾妻鏡　十四〕建久五年正月卅日壬辰、伊豆國海苔被進京都、雜色吉野三郞爲御使云云、

〔增訂豆州志稿　七土產〕海苔　海邊ヨリ多ク產出ス、色皆黑シ、井田村ノ產特ニ佳品ナルヲ以テ、槪ネ

心得にて、まつと打明れに、水は下にもれて、海苔は簀へとゞまる也、干揚るには、簀の儘干釜に圖(圖略)の通り並べてほす也、乾あがりたるは取入片(今)て重ねて、上に板を置重しを置、まつとりと成たるを、一枚づゝよく見てかきのべし、或は塵はこり小貝の殻杯付あるは、小刀の先にてはね除き、十枚を一帖とし、二ッに折て多く重く重ね、兩方より板にて狹べし、然して雨風に當ざるやう、箱に入貯ふべし、又久しく貯ふには、大きなる壺を澁紙にて外よりはりたる中に入、口を滅封じ置べし、如此して貯ふれば夏を越ても少しも色かはる事なし、

〔令義解 賦役三〕凡調(中略)正丁一人、絹絁八尺五寸、(中略)若輸雜物者、(中略)紫菜卅八斤、

〔延喜式 齋宮五〕月料(小月減卅分之一)紫菜海松各二斤十三兩

〔延喜式 民部二十三〕交易雜物 土佐國(中略)紫菜一百五十斤、(中略) 右以正稅交易、進其運功食並用正稅、

〔延喜式 主計二十四〕凡諸國輸調(中略)一丁(中略)紫菜、海藻根各十六斤、

凡中男一人輸作物(中略)蒜、紫菜各二斤、

〔延喜式 大膳三十三〕仁王經齋會供養料

僧一口別(中略)紫菜一兩二分四銖、(齋會料一兩、汁物料二分四銖、)(中略) 右一日供料依前件、

〔延喜式 內膳三十九〕供御月料

紫菜十二兩(中略) 右月料、小月減卅分之一、

〔續修東大寺正倉院文書 別集十九〕奉寫一切經所解 申請用雜物事

合請新錢廿三貫九百九十三文(中略) 用一十七貫五百六十文(中略) 卅文紫菜二升直(升別廿文)(中略)

以前、起去潤三月一日、盡今月廿九日、請用雜物幷殘等、顯注如件、以解、

先海苔を付るは、内海の清らかなる砂地にて、大風雨の時、隣より砂をよせ、又海水深きは忌べし、遠淺の引潮には深、貳尺位、滿潮にはさしたる篊朶の末、ひた〳〵になり、又なかばの引潮には未壹尺五寸位、水際よりあらはるゝ、土地を見立べし、　拵篊朶といへるは、楢木をよしとす、此木の元にてひと攫位にて、枝のよくつきて、たけの五六尺に伐たるを、剛葉を不殘むしりて、四五本づつ元を揃へ、下より壹尺程上を堅くくゝりて、元二尺程の所を先ほそりにけづりて、多く拵へ置、十月比迄に、下に圖する〇圖略通の木と、篊朶とを船に積、のり取小ふね汐の干たるを考へ漕行、船の入位に間置、畑の畦を立たる如く篊朶を置さすべし、さすには先穴明を圖〇圖略のごとくして足にて踏、またの所迄ふみ込、引ぬきて其穴へ篊朶の元をさしこみ〳〵して植べし、拵如此して其浦の家々にて持場ありて、其所へは凡三反の持場罷方の分量よりさきまで凡五反歩程と、海中の地面を割て持場とする事也、汐の滿たる時は、篊朶の末ひた〳〵に成か、壹尺位汐の上にのりたる位になるやうに篊朶の長短をすべし、然して置ば十月より海苔付初る也、寒中に取たるのりを極上とし、春三月までは付ども、暖氣になる程海苔も色さえず味おとれり、淺草海苔と稱すれ共、品川より壹里程西、大森の海に篊朶をさして取、淺草にてひさぐゆゑ、淺草のりと稱するなるべし、淺草海苔同性のもの、諸國にて生ずれども、是を篊朶に付てとり製する事をしらすと見えたり、依て爰にその製法の事を記すといへども、予〇大藏永常先年試たる一通りを記せば、おち〳〵なる事ぞ多かるべし、右の如くさしたる篊朶に、追々海苔付也、能十分に付たると思ふ時、小船に兩人のり、一人は棹さし、一人は此ごとき笊〇圖略を左りの手に持、右の手にて篊朶の枝々に付たる海苔をとりては、笊に入〳〵して持かへり、俎の上にて塵を箸もてより除き、鉋丁の刃にて少したたき、四斗樽やうの桶に清水を入、竹の棒もてかき交、拵夫より左に圖〇圖略する如く棚に簀を置、其上に臺をおき、升にて桶の中なる海苔を、棒にてかき交てすくひ、臺の中に一面行渡るやうの

リアリ、石州ノカモヂノリハ、雲州ノカモヂノリト同ジ、又ハチノスノリアリ、塊ニ竅穴多クシテ蜂窩ノ形ノ如シ、藝州ノ嚴島ノリ、同廣島ノリ、一名仁保ノリ、泉州ノムシロノリ、若州ノナマノリ、但州ノ瀬戸ノリ、一名但馬ノリ、城崎ノリ、同ハカリノリ、長州ノムカフジノリ、對馬ノアマノリ、同佐渡ノリ、同鴨崎ノリ、越後ノ笠島ノリ、丹後ノ釉石ノリ、備前ノフヂトノリ、一名ウキスノリ、防州ノ三島ノリ、肥後ノ滿願寺ノリ、豐前ノ小倉ノリ、豆州ノ三島ノリ、奥州ノ仙臺ノリ、此外諸州ニ紫菜アリ、朝鮮ニハ紫衣ト云、又嚴寒ノ時雪中ニ採ヲユキノリト云、丹後、越前、越後等ニアリ、其紫黑色ナルヲ黑ノリト云、紀州、石州、丹後、若州、越前、能州等ニアリ、

〔廣益國產考六〕海苔

海苔は何處の海河にも生するものなれども、其品いろ〳〵のわかちあり、先九州にては水前寺海苔と稱し、肥後の國より出る、是は水に生するよしにて佳品也、又同じのりにて筑前國秋月より出る也、又但馬國木の崎邊の海より、淺草海苔に似たるもの產せり、紀州加多邊よりも出、三州渥見郡より和治海苔と號し、淺草同種のもの出れども製あらし、爰に近年遠州舞坂の海に、大森同樣に遠淺の所へ、ならの枝朶をさし、海苔を付る事を覺え、取て製し諸國にも賣、京大坂へ送るよし、一ケ年に三千兩餘の金子を收納するよしにて、舞坂の產物となれり、大森にて製する淺草海苔に付方製法方同流にて、其味ひも又替る事なし、世間に上品の海苔多しといへども、所の產物となり、調へる程の事なし、淺草海苔は大金を收納するよし也、續て舞坂も收納多くなるよし也、此海苔は味ひ美にして世間に多く出來たりとも、淺草舞坂などを押へて害となることあるまじとおもへるまゝ、海苔をとりて利を得るは、漁をなし或は罪を網、又山より種々の金銀銅鐵鉛錫を堀出す道理にて、新田を開くもあたるべしと思ひこめしまゝ、海苔の付方等を聞置るまゝを記すになん、

櫻苔(さくらのり) 俗稱

按櫻紀州海濱出之、色黃白或淡紫、而似櫻花凋落乾狀、故名、又有松苔、黃白色、大於櫻苔、形微似松花、

紫菜(むらさきのり)　紫薁 音軟　神仙菜 和名阿末乃里、俗用甘苔字、○中略

按甘苔者總名、而隨所出之地異名、色味亦稍異也、總州之葛西苔、武陽之淺草苔、並紫蒼色而味甘美也、紀州之妹背苔次之、武陽之品川苔不紫色、味亦適劣、伊豆相模之海濱亦多出之、只稱甘苔、紫赤色而不細密、味亦不佳、

〔重修本草綱目啓蒙 二十 水菜〕紫菜　○スムノリ 和名鈔　○ムラサキノリ 同上　○アマノリ 新校正　○アマモ 佐州

一名索菜 漳州府志

凡ソ紫菜ハ冬月海中ノ石ニ著テ生ズ、緑色ナリ、又海面ニ浮テ浮萍ノ如シ、海畔ニ小竹ヲ多ク立テ置テ、トリ得テ乾ス時ハ、色紫ニシテ味甘シ、焙ル時ハ褐色トナル、紫菜ハ紫色ノ海苔ヲ云、總名ナリ、品類甚ダ多シ、國ゴトニ形色異ナリ、大抵武州淺草ノリヲ第一トス、精粗アリ、精ナル者ハ形小ク厚ク、色深シテ黑ミアリ、品川ニテ紫菜ヲ採リ、淺草川ニテ製ス、故ニ淺草ノリト云、粗ナル者ハ形大ニシテ色淺シ、ソノ赤色ヲ帶ル者ハ、上總ノ小灘ノリナリト云、諸州ノ紫菜數多ク枚擧スベカラズ、下總ニ葛西ノリアリ、東葛西ノ桑川、舟堀、長島、二ノ江、今井等ノ村ニテ採製スルヲ云フ、紀州ニ妹背ノリアリ、阿アマノリアリ、勢州ニマドノリアリ、一名格子ノリ、ジヤウジノリ、是ハ細長キノリヲ、一筋ヅヽ、縱橫ニ格子ノ如ク並ベタルヲ云、雲州ノ十六島(ウップルヒ)ノリハ、質細ク絲ノ如クニシテ麤ナリ、○中略ソノ大ナル大抵二三尺、至テ大ナルハ丈餘ナルモアリ、大ナル者ヲ上トス、又潤サ一寸許ニシテ、長ク劈キテ乾タルヲカモヂノリト云、又至テ下品ナルヲ、カキノリト云、又ミサキノリハ、勢州ノマドノリノ如クニ製シ、色深紫ニシテ光リアリ、コレヲ洗ノリトモ云、又九十九(ツクモ)ノ

〔本朝食鑑三華和異同〕紫菜

孟詵曰、正青色、取而乾之則紫色、李時珍曰、其色正紫、亦石衣之屬也、此則本邦之甘苔淺草苔也、

〔大和本草八雜草〕紫菜(アマノリ)　本草水菜類ニ載タリ、海中石ニ付テ生ズ、青色ナリ、取テ乾セバ色紫ナリ、又ホシテ色青キモアリ味甘シ、處々ニ多シ、武州ノ淺草ノリ、品川苔、下總ノ葛西ノリ、雲州ノ十六島(ウップルヒ)モ皆紫菜ノ類ナリ、ウップルヒトハ海中ノ苔ヲトリ、籃ヲ打フルヒテホス故ニ名ヅクト云、コノ苔ノ名ニヨリテ、其島ノ名ヲモウップルヒト云、凡此ノリ諸州有之、地ニヨリテ形色少カハル、紫菜ヲ食シテ腹痛スルニ、鹹醋ヲ少ノメバヨロシト本草ニ見エタリ、○中略

黒ノリ　若狹ノ海ニアリ、岩ニ生ズ、臘月ニトル、黒クウルハシ、味ヨシ、

髪ノヒモ　昆布ニ似テ小也、廣二三寸、長五六寸バカリ、食スレバ脆ク味ヨシ、醋ミソニテ食ス、

鮫皮苔(サメガハノリ)　ヨコ五分許、長二三寸、青色ナリ、鮫皮ノ如ナル星多クシテ、其處少高シ、味ハ髪ノ紐ヨリヨシ、稀有ナリ、○中略

奥津海苔　廣六七分、或七八分、長五六七寸許、頗厚可食、紫色、水ニ洗ヒ曝日則變爲黄白色、駿州奥津ニアリ、

〔大和本草附錄一〕牡丹苔　長崎ノ海ニアリ、牡丹ノ葩ノ如シ、色潔白可食、

櫻苔　壹岐ノ島海岸ニ産ス、其色紅白似櫻花、片々相屬、浸醋鼓而食之、脆美而潔清味亦佳、

〔和漢三才圖會九十七〕十六島苔　宇豆布留伊俗雲苔

按此苔出於雲州十六島、故名、○中略國守使海人取之、入海底、採爲腰帶而上、其所得賜三分一於海人、最爲苔中之珍品、

髪苔(カミノリ)　按髪苔雲州加加浦有之、略似十六島苔而短紫色、多降石面乍發爲苔、剏取之、至夏則難貯、丹後亦有之、○中略

〔本朝食鑑 三水菜〕淺草苔、

釋名、紫菜、(本朝式)神仙菜、(源順)甘苔、(淡路抄)甘海苔、(東鑑)葛西苔、(俗稱、(中略)東鑑伊豆國以甘海苔獻于鎌倉、賴朝奉進于京、必大(平野)按、此今之淺草苔、淺草者武之江都東邊之地名、隅田川上之村也、此苔本總州葛西海中多生、土人采之傳送于淺草村市、葛西土人亦多販之、武之品川亦有之、其土俗同以地名而冠其苔上、故諸州呼其名、)

集解、苔如拆紙製帛而投于水中、泛浪漂流、漁人立于岸上、投竹竿而繫采之、以入籠來、兒女掛著以攤于葦箔而曬乾之、生時蒼色、乾後紫蒼色者爲上、淺草葛西之苔是也、故世以賞美之、品川之苔者、生時乾後淡青黑、略黴而不密、故味亦不美、甘苔者相豆海濱多有、此亦一物、稍似品川苔紫赤色、亦粗而不密、源賴朝公每獻于京城者是也、古者志摩、出雲、石見、隱岐等州貢之、載于本朝式、近代雖僅有之而不佳、故京師及海西海北悉以武之產爲珍、予往年使于二荒山中獲乾苔、土人曰、此采于大谷川中、其狀略似海苔而青黑色、性粗而不粘、味亦淡而微甘、與海中之紫苔通相隔焉、有松苔者、狀似紫苔之碎松葉之細尚、青灰色、味亦稍佳、久煮則凝滑如昆布之煮熟而不佳、奥之南部津輕等之海濱有之、有雪苔者、狀如石耳之細剉而輕薄似紙、生青乾紫、味淡可愛、佐渡越後海濱石上生者也、

氣味、甘冷無毒、(多食發腹痛、或令吐白沫、飲熱醋少許卽消、)主治、咽喉痛癭瘤脚氣消積聚、

發明、通俗妄食紫苔、則發蟲積嘔吐不止、遂到死、予昔見一士人娘子年十五傷食嘔吐、一晝夜不知幾回、遂旦吐黑物鮮血而覺殞、侍女曰、此食生紫苔一碗以發病、予意疑紫苔鹹能軟堅、故可追積塊、而無發蟲積之理、後有一仕宦食生紫苔、食畢忽吐鮮血而卒倒、侍童與藥卽甦、急招予乞治、先見其所吐物、則血中有小蟲、細擇之則水蛭之子也、故新製一劑令煎服、經日而痊、於是初識、昔日娘子亦悞食苔中之毒蟲而殞命焉、嗚呼悼哉、凡水中之藻苔有水蛭河豚之毒物、而必留子、人未曉之、若不洗淨而遇毒、最可戒愼哉、

鷄冠菜○(中略)

品川苔、(此亦武之品川海濱石上生、狀似鷄冠而柔滑、似海蘿鹿角而清粗、末紅本白、味亦淡甘、久煮則凝粘、今曬乾亦貨于四方、氣味主治未詳、必大按、海[illegible][illegible]鹹不可食、自古所食者此苔也乎、)

紺色ヲ云ニシテ、紫菜ノ色也、正字通淳字注曰、生海中者曰紫蕒、本草綱目紫菜釋名紫蕒ト襲ユレバ、加支豆毛ハ爲紫菜可證也、

〔本草和名 十八〕紫菜〈生水中石上〉乾苔〈崔〉柔苔〈冷、出崔禹〉和名須牟乃利、

〔倭名類聚抄 十七 海菜〕紫苔　養生秘要云、補益食餅菜紫苔、〈和名無良佐木乃里、見飲食部海藻類、〉

〔倭名類聚抄 十七 海菜〕神仙菜　崔禹錫食經云、紫菜狀如紫帛、雜生石上、是物有三四種、以紫色爲勝、俗呼曰神仙菜、〈楊氏抄云、阿末乃里、俗用甘苔、〉

〔箋注倭名類聚抄 九 藻〕按江賦、紫菜熒曄以叢被、郭璞注、紫菜色紫、狀似鹿角菜而細、生海中、本草圖經云、青苔紫菜皆似綸、並非是物、吳都賦、綸組紫絳、劉注云、紫紫菜也、生海水中、正青附石生、取乾則紫色、臨海常獻之、本草圖經又云、紫菜附石生海上、正青、取乾之則紫色、南海有之、當是崔氏所云三四種之一、

〔倭名類聚抄 十七 海菜〕紫菜　兼名苑云、紫菜一名石衣、〈和名無良佐木乃里、俗用紫苔、〉

〔箋注倭名類聚抄 九 藻〕按崔氏食經所載紫菜、兼名苑所載紫菜同異未詳、

〔下學集 下 草木〕海羅　紫菜

〔書言字考節用集 六 生植〕襍　石髮〈同、石衣、本朝〉　海菜〈同、本草〉

〔庭訓往來〕御札之旨、大概之趣、心事難中盡候、〈中略〉醉菜者〈中略〉甘苔、鹽苔、

〔尺素往來〕茶子者、猶杖、龍眼、〈中略〉海苔、

〔倭訓栞 前編二十三 乃〕のり〈中略〉海苔をのりといふは、眞告藻より出たる辭なるべし、皆滑かなる類をいへり、よて堅のりの名もあり、延喜式に海菜とも見ゆ、

〔宜禁本草 乾 五〕紫菜　甘寒、多食令人腹痛、發氣吐白沫、飮少熱醋消之、食療曰、多食脹人、下熱煩氣療癭瘤結氣、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

伊勢國(中略)青苔五十斤〇中略 參河國(中略)青苔五十斤〇中略 出雲國(中略)青苔卅斤〇中略 石見國(中略)青苔卅斤〇中略 播磨國(中略)青苔卅斤〇中略 紀伊國(中略)青苔十斤〇中略 阿波國(中略)青苔廿斤〇中略 右以正税交易進、其運功食並用正税、

〔東大寺要錄三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〇中略

一僧供 導師一人供料、〇中略 青苔六帖、〇中略 法用千僧供 一人料、〇中略 青苔五把、

〔海道記〕十三日〇貞應二年四月、中略、江尻の浦をすぐれば、青苔石におひ、昆布礒にはる、

〔殿中申次記〕正月八日

同〇永正十三 一土筆 一折 青海苔 一折 山芋一折 若王子例年進上之

〔毛吹草三〕伊勢 馬瀨青苔アヲノリ 土佐 本川青苔

〔攝陽群談十六名物土產〕同島〇網 青苔 同所〇西成郡大坂町ノ東網島町ヨリ川口木津勝間住吉ノ浦邊マデ、船ヲ通ヒ苅之、於手是製シテ以テ青苔トナシ、市店ニ出ス、

陟釐

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕陟釐 カ〇ハ〇モ〇ブ〇ク〇 カ〇ハ〇ア〇ヲ〇ノ〇リ〇 ヤ〇ヲ〇ヤ〇ダ〇ヲ〇シ〇 ア〇ヲ〇ツ〇 ア〇ヲ〇ナ〇

同名アリ 一名水中細苔東醫寶鑑 增、一名石馬正字通 石花同上

流水中石上ニ生ズ、極テ細ク絲ノ如シ、綠色、流ニ隨テ靡ク、肆人採リ乾シテ青苔ト僞ル、

一種止水中或ハ川ノ淀ニ生ジ、水面ニアリテ綿ノ如ク綠色ナルヲ、時珍ノ說ニ水綿ト云フ、俗名アヲミドロ、一名アヲミドリ、アミドロ、備前二品共ニ久旱ニシテ水涸ク時ハ、乾テ紙ノ如シ、コレヲ苔紙ト云、又唐山ニハ陟釐ヲ用テ紙ヲ抄クト云フ、

〔新撰字鏡草〕澡 徒舍反、水衣、加〇支〇豆〇毛〇、

紫菜

〔古名錄二十七海藻〕按ニ常陸國風土記ニ、上色如青紺加支川爾ト云、加木豆波太、加木豆波奈等皆紫

シ、

〔本朝食鑑 水三〕青苔

釋名、陟釐、(源順曰、和名阿乎乃利、俗用青苔、必大(平野)按、本朝式亦用青苔字、)

集解、青苔有水中石上生者、有水汚無石面自生者、蘊聚如絲綿之狀、海人采乾如綿、其色深綠、以貢于四方、三河、伊勢、志摩、紀伊海濱多有焉、中勢志之產最爲勝、本朝式亦伊勢、紀伊、播磨、阿波、出雲、石見等州貢獻于民部省、近世華人鍋造爲紙、俗人造畫藍紙、亦此類乎、

氣味、甘鹹冷無毒、主治、止渇解酒毒、煮食療寄生蟲毒、或爲傅金傷、能留血、

〔大和本草 附錄一〕肥後八代川苔 色綠美長一尺餘、味佳、長崎ノ海ニ青苔アリ、八代苔ヨリ短シ、味尤ヨシ、(○中略)青苔ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十六〕乾苔。 アヲノリ イトアヲサ(佐渡) カハナ(南部) 一名苔脯(食療)柔苔(同上)、青苔(綱目拾遺) 綠苔(文選註) 海苔菜(本草彙言)

海中ニ生ズ、纖細綠色陟釐ノ如シ、收メ乾シテ方物トス、勢州多ク出ス、諸州出ス所各小異アリ、尾州ノ長アヲノリハ長サ一尺餘、土州四萬十川ノ產ハ長サ五六尺、尾州ノサヽハノリハ形篠ノ葉ノ如ク乾シナス、播州網干ノナヽノリモ同形ナリ、コレヲ一名アボシノリ、サヽノハノリトモ云、濱州ヨリモ出、アヲノリニ極テ細キト粗トアリ、サヽノリハ粗シ、其粗ナル者ヲガニノス(備前)ト云、一名アヲサ、(紀州)阿州ノアヲノリハ微黑色ヲ帶ビ、小豆島ノ產ハ短クシテ濃シ、防州土州ノ產ハ濃シテ長ク綠色深シ、

集解、江蘺。。ハ尾州ノヲゴ。。ノリ。ナリ、一名ヲンゴ、(紀州)ウゴ、(讃州原村)ウゴヽブ、(同上淡路)形圓ク細クシテウミ索麪ノ如シ、黑色微青ナリ、灰ヲ加ヘ煮ル時ハ綠色トナル、晒シ乾セバ白色トナリ、甚細ク麻ノ如シ、或ハ五色ニ染賣ル、江蘺一名頭髮菜、(閑情偶寄)

作𥝊皆非是、𥝊俗攡字、𨤲俗釐字、見干祿字書、鬈俗釐字、見類聚名義抄、龍龕手鑑作釐、少異耳、○中略

按本草云、陟釐生江南池澤、蘇注云、此物乃水中苔、小品方云、水中麤苔也、范東陽方云、水中石上生、如毛綠色者、藥對云、河中側梨、李時珍曰、陟釐者、有水中石上生者、蒙茸如髮、有水汚無石而自生者、纏牽如絲綿之狀、俗名水綿、依以上諸說、陟釐是生淡水中、今俗呼加波毛豆久、或呼阿乎美土呂者、蓋是、江賦云、綠苔鬖髿乎研上、郭璞注、風土記曰、石髮水苔也、青綠色、皆生於石、又本草圖經、青苔可以作脯食之、閩書南產志有海苔、綠色如亂絲、生海泥中、其細嫩者名滑苔、是等可以充阿乎乃利、小野氏以乾苔充之、乾苔見本草拾遺、

〔下學集 草木 下〕青海苔(アヲノリ)

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難盡、申遣候、○中略 酢菜者、○中略 青苔、

〔異製庭訓往來〕酒肴等餘無沙汰無極候、何樣尾籠之至可候乎、荒々所尋出者、○中略 陟釐丸苔、

〔宜禁本草 乾玉兎〕陟釐　甘温、温中消穀、强胃氣、止泄痢、衍義曰、陟釐令人事治爲苦腸塲、唅、治渴疾、禁重 今按此卽石髮也、陟釐甘温、生淺澤中石上、水苔淨水中、性冷、　在屋謂之屋遊瓦苔、在墻垣謂之垣衣土馬騣、在地謂之地衣、在井則謂之井苔、在水中石上謂之陟釐、大抵苔類也、以其所附不同、故立名異、主療亦異、

〔庖廚備用倭名本草 四 水菜〕乾苔(カンタイ)(アヲノリ)　倭名抄ニ乾苔ナシ、多識篇ニアヲノリ、考本草此レ海苔也、彼ノ人トリカハカシテ脯トナス、海水ハシハヽユシ、故ニ陟釐ト同ジカラズ、張華博物志云、石髮海中ニ生ズルハ、長サ尺餘、大小韮葉ノ如シ、肉ヲ以テアツメ、ムシテ食シテ極テヨシ、元升弁○中略 曰、此註ヲミレバ勢州ヨリ出ルアヲノリハ、其味シハヽユシ、乾苔ナル事ウタガヒナシ、其形狀ハ陟釐ト同ジキニヤ、陟釐ハ水中ニ生ジ、乾苔ハ海水ニ生ズ、又乾苔ハ味シハヽユシ、性寒ナリ、陟釐ハ味甘ク大温ナリ、性味各別ナリ、サレバ陟釐ハアマノリト云ベキモノナリ、又西國海中ニアヲサト云苔アリ、色味乾苔ト同ジ、但長サハ三四寸ニハ過ズ、魚肉ト羹ニシテ甚ダヨシ、乾苔ノタグヒナルベ

（住吉物語）住吉にゆきたれば、〇中略南は一むらの里ほのかに見えて、とまやどもにみるめかりはし、〇下略

（源平盛衰記十一）有王俊寛問答事

僧都〇俊寛宣ケルハ、〇中略浪タヽヌ日ハ磯ニ出テ、岩ノ苔ヲムシリテ、潮ニ洗テ食物トシ、汀ニ寄タル海松和布ヲ取、和カナル所ヲカミテ明シ暮ス、

（海道記）十三日〇貞應二年四月、中略此浦〇江尻浦潮を遙に見渡して行ば、海松はなみの岩ねに、根をはなれたる草、海月は潮のうへに水にうつるかげ、ともにこれうき世を論じて、人をいましめたり、

（御湯殿の上の日記）慶長十四年五月七日、いたくらみる一おりまん上申、

（常陸國風土記行方郡）郡西津濟所謂行方之海、生海松及燒鹽之藻、

（出雲國風土記島根郡）凡南入海所在雜物、〇中略海松、

凡北海所捕雜物、〇中略海松、

（毛吹草三）伊勢 海松　丹後 久美海松

（後奈良院御撰何曾）ぬれよみ　ほしみる

（本草和名九）陟釐（陶景注云、又音釐）一名水中苔、一名河中側梨、一名水中魚衣、已上二名出蘇敬注、一名藫毛、一名衣、已上出雜要訣、一名水衣、出兼名苑、一名水藻、出兼名苑、和名阿乎乃利、

（倭名類聚抄十七）陟釐　本草云、陟釐（陟釐二音、和名阿乎乃利、一本作側理、俗用青苔）

（箋注倭名類聚抄九）按本草和名引楊玄操云、音陟又音釐、蓋本草本作厘、與此所引同、厘釐通字、見干祿字書、又釐字俗省作厘、見集韻、故音陟又音釐、若作釐不得音陟、作釐不得音釐、千金翼方、證類本草作釐者、蓋宋人所改、本草和名作釐、亦係傳寫者校改、伊呂波字類抄引本草和名作厘、醫心方亦作厘、可以見作釐非輔仁之舊、〇中略與類聚名義抄作陟厘、音繩、撮壤集引此亦作陟厘、合、則作釐

〔延喜式大膳三十三〕仁王經齋會供養料
僧一口別、〇中略海松一兩、〇中略海藻料　右一日供料依前件、
〔延喜式内膳三十九〕供御月料
海松二斤四兩〇中略　右月料、小月減卅分之一、
年料
志摩國〇中略深海松　右諸國所貢、並依前件、仍收貯殿、擬供御、
〔執政所抄正月上〕二日
臨時客
御料次第〇中略　三獻鳩羹　追物生蚫、浮海松、鳩足、酢坏、元三海松一時用白根
〔萬葉集相聞十三〕神風之、伊勢乃海之、朝奈伎爾、來依深海松、暮奈藝爾、來因俣海松、深海松乃、深目師吾乎、俣海松乃、復去反、都麻等不言登可聞、思保世流君、
〔東大寺要錄三〕供養東大寺盧舍那大佛記文
貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〇中略
一僧供　導師一人供料、〇中略　海松五帖、〇中略　法用千僧供　一人料、〇中略　海松六把、
〔伊勢物語下〕昔男〇中略うせにし宮内卿もちよしが、家の前くるに日くれぬ、〇中略みなみの風吹て、波いとたかし、つとめてその家のめのこども出て、うき海松の波によせられたるひろひて、家のうちにもてきぬ、女がたより、そのみるをたかつきにもりて、かしはをおほひて出したるかしはにかけり、
わたつ海のかざしにさすといはふも、君が爲にはおしまざりけり、ゐなか人の歌にては、あまれりやたらずや、

松藻

海松

〔大和本草八草〕松藻　松杉ノ葉ニ似テ青シ、石上ニ生ズ、生ニテモ乾テモ可食、

〔本朝食鑑三水菜〕海藻略○中

松藻參州遠州海濱有之、狀似松杉葉、圓而長、青色、生于海中石上、生乾俱可食、久亦可用、淡煮食得、

〔倭名類聚抄十七藻類〕海松　崔禹錫食經云、水松狀如松而無葉、和名美留、楊氏漢語抄云、海松、和名上同、俗用之、

〔倭訓栞前編三十一美〕みる略○中　倭名抄に海松をよめり、ふかみる、うきみる、みるぶきなどもよめり、胡總菜ともいへり、岩に生てかつ色かへぬ物なれば、伊勢物語につれなくはとよめり、深海松万葉集によめり、延喜式諸國の貢にも長海松深海松あり、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕水松　ミル

ウミマツト訓ズルハ非ナリ、物理小識ニ、本草水松ハ水中香草トノ文ニ據リテ、ミルト訓ズベシ、ミルハ海中石上ニ生ズ、藻類ナリ、徑リ二分許、形圓クシテ枝多シテ棒蘭ノ如ニシテ緑色ナリ、長サ六七寸食用トス、一種ナガミルハ長サ四五尺アリ、薩州ノ產ナリ、増、一種ヒラミルト呼ブモノアリ、一名ラシヤノリト云フ、闊サ五六分ニシテ長サ一尺許、深緑色ニシテ纐纈ノ紋ノ如シ、春月採テ灰ヲ雜ヘ、日ニ乾シテ遠ニ寄ス、コレヲハイボシミルト云、阿州鳴門ノ名產ナリ、

〔令義解三賦役〕凡調略○中正丁一人、緋纈八尺五寸、略○中若輸雜物者、略○中海松一百卅斤、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

伊勢國(中略)海松五十斤○中略　參河國(中略)海松五十斤○中略　出雲國(中略)海松一百斤○中略　石見國(中略)海松一百斤○中略　紀伊國(中略)海松卅斤○中略

右以正稅交易、其運功食並用正稅、

〔延喜式二十四主計〕凡諸國輸調、略○中一丁、略○中海藻、海松各卅三斤、伯耆隱岐國三斤五兩、

凡中男一人輸作物、略○中海松五斤、

〔箋注倭名類聚抄九藻類〕按本草拾遺云、海蘊生大海中、細葉如馬尾、似海藻而短也、李時珍曰、縕亂絲也、其葉似之、故名、

〔異制庭訓往來〕酒肴等餘無沙汰候、極候、何樣尾籠之至可候乎、荒々所尋出者、(中略)海雲等海藻折櫃百合、

〔本朝食鑑三水菜〕海蘊(中略)

海雲(今訓毛豆久、(中略)多大(平野)按、或作海蘊、俱未詳、然以形之相似謂之、其狀如亂絲有莖、青黑色而滑、長數尺、浮于水上、如摘、味柔脆、生食煮亦佳、一種極細如亂髮、而青黑色、阿波鳴戶最多、故俗稱鳴戶海雲、攝西處處有、安房二總之海濱多有、一種肥大如水松之大、而長有莖、蒼黑色、泉州海上多有、故俗稱和泉太海雲、此亦肥長可愛、然不及鳴戶之細、或曰鳴戶海雲者、俗多和鹽之花也、不佳、海國、故未知其偽矣、)

〔本朝食鑑三華和異同〕海藻海蘊

海蘊、蘊亂絲也、其葉似之、今爲水雲、然水雲無葉則難名、本邦稱海雲與水雲同、

〔和漢三才圖會九十六藻〕海蘊　水雲(俗名)　(和名毛豆久、俗用海雲二字、)

本綱、縕亂絲也、其葉似之、故名海蘊、(鹹寒)治癭瘤結氣在喉間、能下水、

按海蘊狀如亂絲、青黑色柔滑、長數尺、生石上浮水上、蜑採之而滑利難得、仍用鮑空貝刮取之、阿州鳴戶、泉州岸和田、及對州之產、肥大如索麪而有杈、安房、上總、下總、備前亦多有之、皆和薑醋食之、微有海鼠腸氣而能醒酒醉、或未醬汁煮之、粘滑似薯蕷汁而佳、値溫氣則易敗也、藏之用海蘊一升(去水)鹽三合、密封則耐久、用時暫漬水出鹽食、

〔延喜式三十九內膳〕年料

若狹國(中略)毛都久(中略)　右諸國所貢、並依前件、仍收貢殿擬供御、

〔毛吹草三〕紀伊　若浦海雲(モヅク)

〔寬政四年武鑑〕松平主計頭忠馮(肥前島原)○　時獻上三月　海蘊

水雲

不詳、ひじきもといふは、其語の轉せしなり、鹿尾とは鹿角に對し云ふなるべし、大味は鹿尾の音か誤れるにや、

〔庖厨備用倭名本草 四水菜〕海藻 ヒジキ○中略 元升曰○中略 西國海邊ニ此ヒジキモヲ取テヨク煮テ、日ニ晒乾シテヨクカレタルヲツキクダキ、米粒ノゴトクナシテ、米ト同ジク飯ニカシギテ飢荒ヲスクフ、貧家ハ常ノ食ニモ用フ、米飯ハ白ク、海藻ハ黑シ、ムラ〳〵白飯ミエタルヲ、タハフレテ燒野ノ雪ノムラキエト云、米飯ヲ下ニモリ、海藻飯ヲ上ニモリタルヲバ、ヌリガサキタルト云、

〔本朝食鑑 三水菜〕鹿尾菜 訓比知木、今訓比之木毛、

釋名、六味菜 [illegible]

集解、海濱石上生、苗長二三寸、如鼠尾之狀、枝頭末細尖、色蒼黑、曬乾後作純黑色、味甘脆、修治能收、宜未試之、今用乾者、貴于四方、伊勢、志摩、尾張、參河等州多有、此是古在業平之所詠也、

〔大和本草 八海草〕鹿尾菜○中略 海中石ニ附テ生ズ、國ニヨリテ末尖ル、乾セバ黑色ナリ、煮テ食ス、貧民米ニマジヘテ飯トシ糧ヲ助ク、

〔伊勢物語 上〕昔男ありけり、けさうしける女の許に、ひ。じ。き。も。と云物をやるとて、

思ひあらばむぐらの宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも、二條の后の、まだみかどにもつかうまつり給はで、たゞ人にておはしけるときのことなり、

〔毛吹草 三〕伊勢　鹿尾藻　紀伊　鹿尾藻　阿波　鹿尾藻

〔寬政四年武鑑〕本多伊豫守忠京○伊勢神戸　時獻上 四月 鹿尾菜

宗對馬守義功○對馬府中　時獻上 暑中 長鹿尾藻

松平備前守正升○上總大多喜　時獻上 八月 鹿尾菜

松平主計頭忠侯○肥前島原　時獻上 九月 鹿尾菜

松浦壹岐守清○肥前平戸　時獻上 長鹿尾藻

〔倭名類聚抄 十七海菜〕水雲 漢語抄云、水雲、毛豆久○今按、所出未詳、

鹿尾菜

〔萬葉集 三雜歌〕山部宿禰赤人歌六首〇五首略
美沙居、石轉爾生、名乘藻乃、名者告志五餘、親者知友、
〔萬葉集 七譬喩歌〕梓弓、引津邊在、莫謂花、及採、不相有目八方、勿謂花
海底、奧玉藻之、名乘曾花、妹與吾、此荷有跡、莫語之花、
右二十三首、〇二十首略 柿本朝臣人麿之歌集出、
〔催馬樂〕律　伊勢海 一段、拍子十、無空拍子、
いせのうみの、いせのうみの、きよきなぎさの、しほがひに、なのりそやつまん、かひやひろはん、玉やひろはん、
〔毛吹草 三〕和泉　石津神馬藻
〔攝陽群談 十六名物土產〕住吉神馬艸　同郡〇東成 住吉浦ニアリ、年始ノ飾、世云穗俵ハ、是神馬艸ヲ設ケ所造之也、
〔日次紀事 正月〕蓬萊臺 俗新年三寶盤置海老數斗昆布橙穗俵等、先供賓客、謂新年、是謂蓬萊臺、
〔食物和歌本草 一〕海藻
神馬草は結氣を散す女子癥瘕上下に鳴かたく痛に　神馬草は疝氣やむには常にくへ又大きんのくすり也けり　神馬草は石淋に吉又水腫皮の間のかたまりを治す　神馬草は胃氣胃積藥也宿食を去腸をよく去
〔倭名類聚抄 十七海菜〕鹿尾菜　辨色立成云、六味菜、比〇須〇木〇毛〇 楊氏漢語抄云、鹿尾菜、
〔箋注倭名類聚抄 九海菜〕比須岐毛、或云比之岐毛、見伊勢物語、今俗省呼比自岐、按閩書云、羊。栖。菜。生海石上、長四五寸、微黑色、出漳浦、是可以充之、
〔東雅 十三穀蔬〕藻モ〇中略　倭名抄に、〇中略 辨色立成の六味菜、漢語抄の鹿尾菜、幷にヒスキモといふ、義

〔和漢三才圖會藻類九十七〕海藻、　綿〔illegible〕　落首　海蘿　大葉藻

本綱、海藻乃生海島之藻也、黑色如亂髮而太少許、葉大都似藻葉也、有二種、生淺水中如短馬尾細黑色者馬尾藻也、生深海中、葉如水藻而大者大葉藻也、海人以繩繫腰沒水取之、

海藻苦鹹寒　氣味厚純陰而沈也、反甘草、治癭瘤馬刀諸瘡堅而不潰者、利小便下水腫、治五膈痰壅、

[illegible]

〔重修本草綱目啓蒙水草十六〕海藻

海中藻類ノ總名ナリ、馬尾藻大葉藻ノ兩種アリ、藥ニ入ルヽニハ、馬尾藻ヲ上トス、故ニ方書ニ海藻ト云フハ、馬尾藻ヲ用ユベシ、

馬尾藻ナノリソ和名鈔ナヽリソ備前ジンメサウ、ジンバサウ、雲州タワラ、同上ギンバサウ、備後ギバサ、同上キバサ、紀州ホンダワラ、同上ホダワラ、京ホンダワラ、同上タワラモ、勢州一名馬尾藻、外臺秘要海中ニ生ズ、長サ三四尺、莖細ク枝多クシテ細小葉互生ス、一分餘ノ圓實ヲツケリ、中空シ、コレヲツブセバ聲アリ、故ニ小兒コレヲシタミツブシト云フ、莖葉生ナル時ハ黑色ナリ、湯ニ入ルレバ綠色トナル、正月春盤ニコレヲ用ユ、

〔延喜式主計上二十三〕交易雜物

伊勢國〔中略〕那乃利曾五十斤〇中略　參河國〔中略〕那乃利曾五十斤〇中略　播磨國〔中略〕那乃利曾卅斤〇中略　紀伊國〔中略〕那乃利曾五十斤〇中略

伊豫國〔中略〕那乃利曾五十斤〇中略　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式大膳下三十三〕正月〇中略修太元帥法料〇中略　於期名乘曾、烏坂苔、若海藻根各廿四斤、

〔日本書紀允恭十三〕十一年三月丙午、幸於茅渟宮、衣通郎姫歌之曰、等虛辭陪邇、枳彌母阿閉儺毛、異舍儺等利、宇彌能波摩毛能、余留等枳等枳弘、時天皇謂衣通郎姫曰、是歌不可聆他人、皇后聞必大恨、故時人號濱藻、謂奈能利曾毛也、

ナリソヲ今ハナノリソト云ヒナシタルモ也、順ガ和名ニハ神馬莫騎之義也ト云ヘリ、恐アレバ神馬ヲバ人用ニアツルコトナケレバ、ナノリソト云フ心ニテ、神馬草トハカキナセリ、

〔倭訓栞前編二十八〕ほだわら　海藻なり、穂俵の義、魚の脬の如き物の多くつくをもて名く、古へのなのりそもなりといへり、春盤に用るは穂俵を祝するなり、下品のものをかじもといふとぞ、

〔宜禁本草乾五菜〕海藻　苦寒鹹、主癭瘤氣頸下核、破散結氣癰腫癥瘕堅氣腹中上下鳴、下十二水腫、療皮間積聚暴㿗留氣結熱、利小便、反甘草、治石淋、呆如亂髮、大小都似藻葉、生淺水、浸去鹹、主宿食不消、五膈痰壅、脚氣賁豚氣、治頷下瘰癧如梅李、宜速消之、海藻酒漬數日稍々飲之、

〔本朝食鑑三水菜〕海藻今訓保多和羅

集解、海中之藻生于石上、狀似蓴、莖色青微長、一二尺有節有莖、莖上有細尖小葉而卷縮不伸、葉間有小泡子似花而不開、似實而圓空、味甘鹹而粘滑、或稱保多和良、或作穂俵、又作本俵、俵字韻書有俵散之義、無賽囊之義而未詳所據、本邦自古搗稻草斂米粒呼號俵子、一俵有三斗五升四斗五升之分者也、今海藻用俵字者、祝米俵多積之義、以供年始之賀膳、爲蓬萊盤之具也、本朝式有海藻根、謂麻奈加志、參河、伊勢、紀伊、志摩、阿波、伊豫、長門、出雲等州貢獻之、疑是今之保多和良乎、或曰、保多和良者、那乃利曾也、本朝式亦有那乃利曾、而伊勢、紀伊、播磨、伊豫等州、貢獻于民部省、又曰、莫鳴菜、源順曰、奈奈利曾、漢語抄曰、神馬藻三字云奈乃利曾、今按但神馬莫騎之義也、此說未詳、保多和良之名古亦有之、近時略供菜膳稍佳、處處海濱多有、十二月海國多運轉于都市而販之、爲年初之用、此時多除之以書用、或醫家與昆布同入散癭消痰之劑耳、

氣味甘鹹滑寒無毒、主治、利水泄熱、消癭瘤結核陰㿗之堅、

〔本朝食鑑三華和異同〕海藻海蘊

海藻者海中之藻、紺黑色略似水藻、故爲本邦之本俵、予〇平野必大往年聞之華僧、亦指本俵爲海藻也、

加レバ干バル、賤民ノ食也、又此物竿頭ニ多クワクタ、火災ワクスニ用ユ、火ニモエズシテヨロシ、アラメニ同ジ、

〔令義解三賦役〕凡調、〈略〉○中正丁一人、絹絁八尺五寸、〈略〉○中若輸雑物者、〈略〉○中末滑海藻一石、

〔続修東大寺正倉院文書後集四十〕写経司解　申請用事

合所請銭弐仟文〈略〉

買物合十六種〈略〉○中　末滑海藻四升　直銭七文〈略〉○中

以前銭并買物、顕注如件、以解、

天平十一年八月十一日　史生高屋連赤麻呂〈以下署名略〉

〔毛吹草三〕遠江　同〈川〉○中　鳩和布

〔寛政四年武鑑〕太田備中守資愛〈遠江掛川〉○中　時献上〈三月〉相良和布

〔倭名類聚抄十七海菜〕莫鳴菜　本朝式云、莫鳴菜、〈奈○乃○里○曾○、漢語抄云、神○馬○藻○三字云、奈○乃○里○曾○、今案本文未詳、但神馬莫騎之義也、〉

〔箋注倭名類聚抄九〕按民部省式作那乃利曾、大膳式作名乗曾、並有作莫鳴菜者、此所引疑是弘仁貞観式文、〈略〉○中萬葉集作莫告藻、並本義也、用神馬藻字、神馬莫騎之義訓耳、源重之歌云、毛迷振、出石乃宮乃、神乃駒、努莫騎曾也、岑毛曾須留、是其義、用莫鳴者、以一聲之轉假借也、按陶注海藻云、生海島上、黒色如亂髪而大小許葉、大都似藻葉、詳其形状、是可以充奈能利曾、

〔下學集下草木〕神馬草〈ジンバサウ、神功皇后攻異國時、船中無馬秣、取海中之藻飼馬、故云神馬草也、〉

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之儀、心事難申盡候、〈略〉○中酢菜者、〈略〉○中神馬藻曳干、

〔塵袋三〕一神馬草ト云フモノヲナノリソト云フ心如何

万葉集等ニハ名ノリスルニ、ヨソヘタ歌ニモヨメリ、但本朝式ニハ莫鳴菜ト書テ、ナヽリソトヨメリ、食スル時ハラ〳〵トナルガ六借ケレバ、ナヽリソト制スル心也、ナトノトハ通音ナレバ、ナ

凡中男一人輸作物、〈〇中略〉滑海藻十二斤、

伊勢國〈〇中略〉中男作物、〈〇中略〉滑海藻、志摩國〈〇中略〉調〈〇中略〉滑海藻、

〔延喜式〈三十三大膳〉〕試海印三昧寺年分度者料、〈〇中略〉荒布一束、〈使料〉

安祥寺試年分度者、〈〇中略〉使料、〈〇中略〉荒布一束、

仁王經齋會供養料 僧一口別、〈〇中略〉滑海藻二兩、〈〇中略〉〈好物料〉 右一日供料依前件

〔延喜式〈三十九内膳〉〕供御月料

滑海藻十三斤八兩〈〇中略〉 右月料、小月減卅分之一、

〔土左日記〕元日〈〇承平五年正月〉なほおなじとまりなり、〈〇中略〉芋もあ。ら。め。もはがためもなし、かうやうの物なきくになり、もとめもおかず、

〔平家物語〈三〉〕有王しまくだりの事

礒のかたより、かげろうなんどのごとくに、やせおとろへたるもの、よろぼひ出來たり、〈〇中略〉かた手にはあ。ら。め。をもち、かた手にうほをもろうてもち、あゆむやうにはしけれども、はかも行ずよろよろとしてぞ出來る、

〔毛吹草〈三〉〕伊勢 荒和布 紀伊 三穗荒和布

〔倭名類聚抄〈十七海菜〉〕滑海藻〈附末〉 本朝令云、〈〇中略〉末。滑。海。藻。、〈加。知。女。、俗用搗布、搗者擣末之義也、〉

〔本朝食鑑〈三水菜〉〕荒布〈〇中略〉

搗布 搗布似荒布而細狹、有細皺文、粗硬味不佳、不足爲上饌耳、

相良布 和布〈〇中略〉

佐。加。良。布。、〈傳稱本出於遠州相良之海濱、故以其地名而冠之、狀似和布而粗硬、煮乾則葉卷不伸、味亦劣、世俗所賞、此亦能解酒毒、〉

〔大和本草〈八海草〉〕カチメ 又サガラメト云、海帶ニ似テ細ク狹シ、皺アリ、ホシタルヲキザミテ羹ニ

荒布

めて、食料に調味して出すを名物とするなるべし、西山にて心太を製し出すと同義なるべし、

〔倭名類聚抄 十七 海菜〕滑海藻 本朝令云、滑海藻、阿良米 俗用荒布、

〔箋注倭名類聚抄 九 海藻〕按本草圖經云、東海又有一種海帶、似海藻而麁且長、登州人取乾之、柔韌可以繫束物、醫家用下水、速於海藻昆布之類、是可以充阿良米、

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之儀、心事難中盡候、○中 菜者、○中 荒布、

〔本朝食鑑 三 水菜〕荒布 訓阿良女、

集解、荒布處處海濱多采之、附石而生、狀似昆布、細狹而厚、色深黑如墨凝滑、有縱皺文、粗柔韌而長、長者不過四五尺許、有枝條、而或圓、或圓長或蜂扁、亦有其皮上黑有細皺、中黃黑色、俗稱荒布木、而剛堅、然不可食之、好事之人造器耳、荒布雖不宜生食、采之曝乾煑熟可食、古者伊勢志摩紀伊等州貢獻于大膳寮、今時海南海西諸州及海東亦所在有之、○中

氣味、甘鹹寒滑無毒、主治、婦人諸病、及血證諸病、利水、消痰瘤痰癖、

〔本朝食鑑 三 華和異同〕荒布

荒布海帶也、嘉祐本草曰、出東海水中石上、似海藻而粗柔韌而長、今登州人乾之以束器物、然則荒布之類乎、

〔大和本草 八 草〕海帶 アラメ ○中 今按海帶ハ海中ノ石ニ附テ生ズ、黑クシナタナ皺アリ、性冷利ナリ、虛人食スレバ泄利ス、祛鉄血、消癰毒、治痔痰、壯實人食之無害、虛冷人勿食、煑ルニ醋ヲ加フレバヨクニユル、アラメヲ煑テ雨水ヲソヽゲバ大蛙トナル、○中 俗ニ是ヲ竿頭ニ多ツケテ、火ヲケス者トス、

〔令義解 三 賦役〕凡調 ○中 正丁一人、絹絁八尺五寸、○中 若輸雜物者、○中 滑海藻二百六十斤、

〔延喜式 二十四 主計〕凡諸國輸調、○中 一丁 ○中 滑海藻八十六斤十兩、

布と號す、幾許の年を重ぬ共濕ることなく、用ゆる時は熱湯をかくれば、忽ち和かになり、色よく味かはらず美也、騙良の漁人多く製して名物とす、

〔狗猧集春一〕若和布

汁の子もうみ出てよきわかめかな　貞德

かづきするあまの妻も若めかな　重勝

海藻根

〔令義解三賦役〕凡調〈○中略〉正丁一人、絹絁八尺五寸、〈○中略〉若輸雜物者、〈○中略〉海藻根八斗、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

伊勢國〈中略〉海藻根十斤〈○中略〉　參河國〈中略〉海藻根十斤〈○中略〉　遠江國〈中略〉海藻根十斤〈○中略〉　出雲國〈中略〉海藻根十斤〈○中略〉　石見國〈中略〉海藻根十斤〈○中略〉　紀伊國〈中略〉海藻根十斤〈○中略〉　阿波國〈中略〉海藻根□□〈○中略〉　伊豫國〈中略〉海藻根十斤〈○中略〉　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式二十四主計〕凡諸國輸調、〈○中略〉一丁、〈○中略〉紫菜、海藻根各十六斤、

凡中男一人輸作物、〈○中略〉海藻根四斤、

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別、〈○中略〉海藻根一兩三分、〈○中略〉　右一日供料依前件、

〔延喜式三十九內膳〕年料

伯耆國〈中略〉海藻根一十籠、〈○中略〉右諸國所貢、並依前件、仍收贄殿擬供御、

鳥頭布

〔庭訓往來〕被仰下之旨、畏拜見仕候畢、〈○中略〉醍醐鳥頭布、

〔庭訓往來諸抄大成〕鳥頭布　黑和布なり

〔庭訓往來諸抄大成扶翼〕貞〈○伊勢貞丈〉云、十月の狀にも、昆布、鳥頭布、荒布と見えたり、然れば鳥頭布は海草なり、醍醐は山にて海なければ、海草の生ずべき理なし、然れども鳥頭布を他所より求

大治二年正月日　　　家主肥後掾中原盛貞

〔古今著聞集 八好色〕藏人主のびやかに、此女房參り侍よし奏し申ければ、うれしく思しめされて、やがてめされにけり、○中略 彼少將は藏人なりけるを、あらぬかたにつけてめし出されて、よろづに御情をかけられて、近習の人數にくはへられなどして、程なく中將になされにけり、つゝむとすれど、をのづから世にもれ聞へて、人の口のさがなさは、其比のことわざには、なるとの中將とぞ申ける、なるとのわかめとて、よきめののぼる所なれば、かゝる異名を付たりけるとかや、

〔八幡宮本紀 三〕長門國豐浦郡住吉に坐荒御魂神社、○中略 十二月晦日の夜は、和布刈とて、神秘の神事あり、これは晦日の夜半ばかりに、此御社の下神人、豐前國波夜止毛の沖に出る、はやともよりも又神人出向ふ、此時潮はるかに退て、雙方の神人遙々海底にいたるゆゑ互に松明の光も見え、聲も聞ゆる程にて、ともに和布をかり取、○註略 これを元日の朝御供にそなふ、波夜止毛にても同事となり、此藻今にたえず、いにしへは和布刈取たる藻海藻を、今は臨時にも獻ぜしとかや、

〔延喜式 四十二東西市〕海藻廛○中略 右五十一廛東市　海藻廛○中略 右卅三廛西市

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、○中略 宅常贍、集諸國土產、貯甚豐也、所謂○中略 丹後和布、

〔毛吹草 三〕伊勢　國崎若和布　同和布耳　志摩　和布　三河　稚海藻　若狹　若和布
出雲　加々浦若和布　紀伊　賀太浦賀太和布　阿波　鳴門和布　肥前　若和布

〔寛政四年武鑑〕松平下總守忠功桑名○伊勢　時獻上三月洗水和布
松平主計頭忠馮島原○肥前　時獻上三月若和布　稻垣攝津守長以鳥羽○志摩　時獻上四月洗わかめ

〔雲錦隨筆 二〕阿波鳴戸といふは、阿波國板東郡の端と、淡路國三原郡土崎鳴戸崎と、雙相迫りて海を夾む、○中略 因云、和布は當地の名產にして鳴門和布といふ、是を採て灰に積し干乾を、灰干の和

定;准;犯科祓例;事

一大祓料物廿八種○中略　海藻六斤　滑海藻六斤　一上祓料物廿六種○中略　海藻三斤　滑海藻三斤　一中祓料物廿二種○中略　海藻一斤　滑海藻一斤　一下祓料物廿二種○中略　海藻六兩　滑海藻六兩

延暦廿年五月十四日

〔三代實錄清和四〕貞觀二年五月十一日庚申、天皇及皇太夫人、以;米六百斛○中略　海藻三萬三千三百三十斤、新錢一十二萬五十文;施;僧尼優婆塞優婆夷及隱居飢窮之輩二萬九千六百七十四人;以助;修;淳和太后齋會;也、

〔東大寺要錄三〕供;養東大寺盧舍那大佛;記文

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行;大會;事、○中略

一僧供　導師一人供料、○中略　海藻六帖、○中略　法用千僧供一人料、○中略　海藻一連、

〔三代實錄清和十八〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、○中略　諸國工匠役夫、米鹽之外加;給醴魚和布等;

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年六月七日乙卯、勅;唐僧湛睿供料、日白米三升二合、○中略　海藻二兩、滑海藻二兩、節料白米十斛、毎年五月十二日、以;近江國正稅;充之、

〔和泉式部集續集下〕春の初比、和布と云ふ物を、梅花につけて、人のおこせたるに、

花みればこのめも春になりにけり耳のまもなし鶯のこゑ

〔朝野群載七攝家〕御齋會加供解文

左大臣家　奉送　八省御齋會加供事

合○中略　精進物、靑苔曳干　和布曳干　海松　昆布○中略

右奉;送如;件

布ヲ食セリ、海中石間ニ生ズ、其ヒロサ二三寸或三四寸、長サハ五六寸或ハ尺ニアマリ、二尺ニ及ブモアリ、其色初メテ取タルトキ青シ、是ヲ煮レバ、イヨ〳〵青鮮也、サラシテ其ノ色黄黒也、生ニテモ煮テモ食スベシ、柔滑ニシテ味美也、勢州ヨリ出ル和布ハ柔滑ナラズ、味モ亦西國ノモノスグレタリ、壹州ノ和布最ヨシ、

〔本朝食鑑 三水菜〕和布(訓和加女)

釋名、海藻、(源順和名集未、俗用和布、必大(平野)按、本朝式有和布海藻、而難分、皆據于通俗、或曰和布者蕪也、未詳)

集解、狀似昆布之葉端、而細薄柔軟、長不過一二尺、色青、其根如荒布根、而蒼黒剛堅、可造剪刀靶及器、附石而生、其葉浮于水上、味美而甘鹹不減昆布、以爲上饌、本朝式大膳寮載之、一種有極細如紐者、產于伊勢海濱、此和布初者尋常和布、海人細割成絲樣、故稱伊勢和布、最美味、皆以賞之、兩種倶生乾同可食之、南海諸州晒乾貨于四方、西海北海諸州亦所在有之、又海上有青佐、青昆布等物、皆不足食、若嘗之則身腫痒痛也、

氣味、甘鹹平無毒、主治、利水解酒毒、

〔大和本草 八水草〕裙帶菜　食物本草載之、和名抄曰、ニギメ、處々海中ニ多シ、二月ニトル、伊勢ノ海ニ產スルヲ好トス、又紀州ノ賀多ニ產スルハ、脆クシテ味ヨシ珍賞ス、爲茹而食ス、煮爲羹亦可也、生ナルヲモ食ス、又莖ヲモ食フ、莖ハコトニ甘滑ナリ、莖ノ傍ニツキテ厚ク、耳ノ如ナルヲメミヽト云、莖モメミヽモ美トシ、又醬醋ニツケテ食ス、性寒味甘シ、有虫積患腹痛人不可食、或曰、本草二十八卷ニ、所載ノ石蓴是ナルベシト云、生薑ト醋ニ和シテ食ヘバ無腹痛之患、ワカメヲ食テ腹痛スル者モ亦可食之、

〔令義解 三賦役〕凡調(中略)正丁一人、絹絁八尺五寸、(中略)若輸雜物者、(中略)海藻一百卅斤、

〔延喜式 二十三民部〕交易雜物

奥州ニ產ス、濶サ六七分、或ハ一寸許、厚シテ昆布ノ如ク、味モ似タリ、賤民ノ食ナリ、貯畜ケバ白キ粉ヲ生ズ、水ニ入ルレバ青黄色、燈火ノ燼ヲ得タニ用タ甚ワヨシト云、此條ヲアラメト訓ズルハ非ナリ、アラメハ黒菜ナリ、

〔本草和名 九草〕海藻、一名落首、一名藫 仁諝音督反、石帆 楊玄操音凡、水松 状如松、一名海藻、一名海羅、出雜要決、已上三名海藻、一名藫 出雜要決、一名青苔 出兼名苑、一名海髮 状如亂髮、色作碧字、一名麻葉 出兼名苑、水紫菜 状如水苔、出兼名苑、一名神仙菜、蕪菜 已上五名出兼名苑、大出崔禹錫、石帆、一名石逢理 出兼名苑、和名之。末。毛。、一名爾。岐。女。、一名於。古。

〔倭名類聚抄 十七 海菜〕海藻 本草云、海藻味苦鹹寒無毒、和名爾木。米。、俗用和布字、

〔古名錄 二十七 海藻部〕今案、古書ワカメニ海藻ノ字ヲ誤リ用ヒ來レリ、海藻ハホタハラニシテ裙帶菜ニ非ズ、

〔東雅 十三 穀蔬〕藻モ 略○中 倭名抄に 略○中 海藻をニギメといふ、俗用和布字、本朝令に滑海藻をアラメといひ、俗用荒布字 令義解 略○中 ニギといひアラといふは、古語にニギメなどいひて、分ち呼びしなり、ニギメといふは、古語に延喜式などにも和海藻と云ひし如くに、其義文の万葉集には、和海藻の字を用ひたり、

〔古事記傳 十四〕和名抄には爾木米と阿良米とを出して、別に和加米と云をば出さず、又名も和加米に爾岐米とは、一の如く思はるれども、延喜式に、海藻、稚海藻、滑海藻、又和布、海藻、荒布と、三を並べて擧たる所々あれば別なり、かくて式の和布は 海藻と分てれば 和加米なるに、和名抄には、海藻を俗に和布と書よしあるを以思へば、總ては爾岐米と云を、其中にて殊に柔なるを分て、別に和加米とも云へるにや、略○中 海藻は米の總名なるに、此字を又爾岐米に用たるを思へば、種々の米の中に爾岐米を主とするにや、略○下

〔宜禁本草 乾五菜〕海帶 催生下水、療婦人風、比海藻更麁、柔靭而長、乾之以束器物、

〔庖廚備用倭名本草 木四菜〕裙帶菜 略○中 元升 升○向井 曰、略○中 余西國海邊ニ住スルコト年久シ、毎春和

海帶

貞觀三年歲次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〇中略
一僧供　導師一人料、〇中略昆布二帖、

〔權中納言定賴卿集〕あまうへの御もとより、ひろめといふ物たてまつり給けり、つゝみにかきつけて、をきたまひける、〇歌略

〔庭訓往來〕被仰下之旨、畏拜見仕候畢、〇中略宇賀昆布、

〔毛吹草〕三出羽　昆布

〔雍州府志〕六土產昆布　出羽國松前宇賀出者、其狀細薄、其色黃赤、其味甘而帶微酸、又若狹召昆布爲宜、倭俗高貴之所食、是謂召上、其味美而堪高貴之所食、故謂召昆布、今悉在京極西竹屋町、

〔寬政四年武鑑〕松平豐後守齊宣〇鹿兒島　時獻上二月昆布　宗對馬守義功〇對馬府中　時獻上二月昆布

松前志摩守道廣〇蝦夷松前　時獻上昆布

〔採藥使記〕上奧州照任曰、奧州田奈富松津川ニ昆布ヲ產ス、大キナルモノ三五丈、幅ハ三四尺アリ、土人屋ヲ葺テ暑雨ヲ除ク、

〔見た京物語〕昆布をみづからと呼びて、ことの外に用ゆ、芝居にても饅頭や水辛と賣る、

〔庖厨備用倭名本草〕四水菜昆布〇中略　元升〇向井曰、洛下ニ一人昆布ヲ生ニテ過食シタル者アリ、夜ニ入テ此ノ昆布ウルホヒフクレテ、胸腹脹痛ス、甚シキ時ハ、胸中ニセメ上リ悶絕セントス、半時ガホド身ヲ休ルコトアタハズ、薑湯ニテ錦袋子ヲ多ク用テ嘔吐ス、吐タルモノハ皆昆布ニテ、痰ト倶ニ出タリ、吐ツクシテ則安眠セリ、昆布生ニテ多食スベカラズ、

〔重修本草綱目啓蒙〕十六水草海帶　ホソメ南部　ミヅメ仙臺　ミヅワカメ生　ボンメ乾、共同上、　一名多士麻村家方

〔延喜式 大膳三十三〕正月最勝王經齋會供養料 略〇中 僧別日菜料 略〇中 細昆布、以二一兩一充二廿口一、索昆布二條、昆布 以二一結一充二廿口一

仁王經齋會供養料

僧一口料 略〇中 細昆布 供養料、以二一把一充二六口一 廣昆布 布施料、以二一結一充二廿口一 略〇中 右一日供料依二前件一、

〔延喜式 內膳三十九〕年料

陸奥國 索昆布廿斤、細昆布百廿斤、廣昆布卅斤 略〇中 右諸國所レ貢、並依二前件一、仍收二貢殿一、擬二供御一、

〔執政所抄 上正月〕十五日

粥御節供事

御菜二前 略〇中 一折敷 瓜、昆布、蓮根、蕪、

〔年中定例記〕殿中從正月十二月迄、御對面御祝已下之事、

一今朝 九月九日〇 より御粥まいる、又燒栗九、昆布たきれ、四方一寸いも、如百日參候、

〔[illegible]雜隨記〕昆布の事、中より折たる所を向江して一把宛竪に雄羽に重かけ積べし、雄羽とは右より左へ積事也、如此重候へば、上座へ披露の時に、貴人の右の方、上へ成によりて雄羽と云なり、

歸傳に、上は五十把、中は卅把、下に十把也、十把以下は、紙に一把宛包、積たる事も有、

〔南留別志 二〕一いはひの時、昆布の切様に、ひきまたといふ事あり、かへるのまたに象るといふは心得がたし、匹またなるべし、二端の布をひとつにつらねて、兩のはしよりまきて、おきたる形なり、夫婦をいはふなるべし、

〔續日本紀 七元正〕靈龜元年十月丁丑、蝦夷須賀君古麻比留等言、先祖以來貢獻昆布、常採此地、年時不闕、今國府郭下、相去道遠、往還累旬、甚多辛苦、請於閇村便建郡家、同百姓共率親族、永不闕貢、並許之、

〔東大寺要錄 三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

〔和漢三才圖會 藻類九十七〕昆布 綸布 音關 綸音關、誤也、誤爲昆耳、和名比呂米、一名衣比須女、○中略

按昆布生東海、蝦夷松前及奧州海底、附生於石、蝦夷島有鱶鮨田之地、凡三十餘里海中、寸地亦無不有之、其大者一株而成林、葉長二三丈、謂之長昆布、大抵幅四五寸長二三尺、海人用鎌刈取之、挾腰乃濡于身、則使繩挽浮却、凡蝦夷松前之產、黃赤色而味甚美焉、最上、津輕之產厚而味不美、但焙食或爲油煠即佳也、南部產稍黑而味亦劣矣、並傳送之若狹、同州小濱市人能調製之、以送四方、其製法以爲家秘、今京師亦能之、故京若狹共得名、

〔日本山海名產圖會 五〕昆布 和名ヒロメ、一名蝦夷布、

是は六月土用中にして、常に採ることとなし、同じく蝦夷、松前、江刺、箱館などにも採れり、小舟に乘り鎌を持ち、水中に暫くありて昆布を抱、是につられて浮む、皆海底の石に生ひて、長さ三四尺より十間計のものあり、たま〳〵には石とともにあぐるもあれども、十日計にして根自ら離る、長きはよき程に切りて、蝦夷松前の海濱の砂上家の上、往來の道に至るまで、一日乾すこと、實に錐を立るの隙もなし、暮に納めて小家に積み、其上に筵を覆ふこと一夜にして、汐浮きたるを荒昆布と云、世俗に蝦夷の家は、昆布をもつて葺くと云は、此乾したるを見たるなるべし、家はすべて板葺し板圍ひなり、色赤きを上品として、僅かに其階級をわかてり、又八九月の比自然打あぐるを寄せ昆布と云、

〔蝦夷行記〕五月よりはまた昆布にかゝり、其場所々々へ船出せり、昆布は西海路にはなく、東海路箱館の外海より蝦夷地へかけて、四五十里の間昆布の場所あり、是を取事いと心安き業にて、海底より薙取、濱邊へしきならべて、干あぐるまでの事なり、此業六月中迄に仕廻て、七月よりは一同に休み、○下略

〔延喜式 民部二十三〕交易雜物

陸奧國(中略)昆布六百斤、索昆布六百斤、細昆布一千斤、○中略

右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔東雅十三穀蔬〕藻〈略〉〇中　倭名抄に、〈略〉〇中　昆布をヒロメとも、エビスメともいふ、〈中略〉ヒロメといふは、其闊きをいふなり、エビスメとは、蝦夷地方より出るをいふなり、俗に昆布を祝ひの物なりなどいふは、ヒロメの名に取りしなり、ヒロコンブの義なりなどいふは、近俗に出し所なり、

〔倭訓栞前編九古〕こぶ　昆布の音也、古名はひろめといへり、倭名抄に見えたり、古へ陸奥蝦夷貢献して民部省に納む、索こぶ細こぶ廣こぶの名あり、延式に宇賀昆布見えたり、宇賀は箱館の外海の名也、今石附といふ、赤きを上品とす、島こぶと稱するものあり、海へちまの類にて、食ふべき物にあらず、

〔宜禁本草乾五菜〕昆布　鹹寒無毒、主十二水腫癭瘤結氣瘻瘡、生東海、凡海中菜皆療癭瘤結氣、青苔紫菜皆然、昆布主陰𤵜、含之嚥汁、〈海島人食病不生、北人食之病皆生、〉水土不宜爾、

〔本朝食鑑三水菜〕昆布〈今俗訓如字、又訓古布、古名比呂米、一名衣比須女、〉

集解、昆布生於奥之松前及蝦夷海中、形類海帶、廣四五寸、長數丈餘、或二三尺亦有、倚石生而浮于水上、如浣布隨波漂搖、其色黃黑、兩端薄帶蒼色、中厚黃色、海人采之晒乾、以貢于四方、其表出白鹽、而如霜如粉、此亦兩片蒼黑色而薄、中黃赤色而厚、煮熟亦同色、但厚者倍生乾爾、古者陸奥蝦夷貢獻之、以納民部省大膳寮、有索昆布細昆布廣昆布之名、近代奥之仙臺南部津輕松前之守吏俱貢獻之、或自松前傳送于敦賀、自敦賀傳送于若州、若州小濱市人製之、號若狹昆布、自若狹傳送于京師、京師市上製之、號京昆布、其味最爲勝、松前若州不相及、故作上品乾果、凡昆布作大饗嘉儀之贈、祝冠昏壽生之賀、俗稱古布、以假歡賀之和調、毎作庖厨茶會之菜果、或齋日取煎汁代鰹魚汁、僧家亦以煎汁調羹而逐濕味、又作菓及油具、大抵煮昆布不用銅鐺、則色黑不美、用銅鐺則兩端純青中赤而佳、海藻及鹿角菜之類亦若許矣、

氣味、甘鹹微溫、滑寒無毒、主治、破積堅、利水腫、消瘰癧癭瘤瘡癤、

附方、口舌生瘡、〈用好昆布燒黑、爲末傅舌上、〉痰結小癭、〈皮圓如果者、用昆布、細切洗淨待乾、日日嚼鹽上、則小者消大者軟而愈、〉

昆布

など倭名抄に見え、建武年中行事にめの御汁ものといひ、又後拾遺集にめをつゝみてつかはしたりとみえたり、

〔藻鹽草〔八〕草〕藻

いつもの花〈河上のいつもの花といへり、たゝのもなし云也、〉をきつ藻、河藻、玉藻、〈玉もかりしくとよめり、是につき異議あり、或はもなかりくうと云説あり、それも玉も刈食とかけるによりて、かりはむと云り、又はしくといへば、もなかりしくなどむ得たり、しかれども、これいづれもわろし、玉もなかりしとたゝ云也、く文字はたすけことば也と云ゝ、〉なびき藻、すが藻、しき藻、かる藻、〈あまの也〉たく藻、〈生と云り、又はあまのたくもとも云、〉つくも、〈老たる年のかみによす、〉すく藻、〈是はもにあらず、むまうしの食物也、すくもたくなどもよめり、〉かる藻〈これゐのしゝのかぐ物也、まことのもにあらず歟、〉なつげ藻、〈真苔藻とかけり、しかれ共、これなゝのりそ共よめり、〉藻くづ、みだれ藻、ながれ藻、玉藻かづく、ひじき藻、〈伊勢物語ひじきものには衾をしつゝもとよめり、藻鹽の中にひすきもと云物をば鹿尾菜、ひすきも、六味菜聞、世俗にはひじきもと云これら也、しかればひじきもといふ物をやるとて、ひじきものには袖なしつゝもとそへたる也、しきものは、中にひじきものと云べき様なしと云々、〉河菜草〈異名也〉　玉藻の花、をきの藻くづ、うち河に生る菅、〈万〉

〔本草和名〔九草〕〕昆布、乾苔〈性熱〉柔苔、〈性冷〉昆布一名綸布、〈出兼名苑〉和名比〇呂〇女〇、一名衣〇比〇須〇女〇、

〔倭名類聚抄〔十七海菜〕〕昆布　本草云、昆布味鹹寒無毒、生東海、〈和名比呂米、一名衣比須女、〉陶隱居注云、黄黑色柔韌可食、

〔箋注倭名類聚抄〔九海菜〕〕按是物於諸海藻中最闊大、故云比呂米、產蝦夷地、故云衣比須女也、○中略證類本草引作柔韌、證類本草又引陳藏器云、生南海、葉如手、乾紫赤色、大似薄葦、陶云出新羅、黃黑色葉柔細、陶解昆布乃是馬尾藻也、按陳氏所見陶注作柔細、故云乃是馬尾藻、若作柔韌、何以陶所言爲馬尾藻乎、源君所據、或與陳氏同、今不從改、然其爲柔韌之譌無容疑、宜從證類本改正、

〔下學集〔下〕草木〕昆布（コンブ）

〔尺素往來〕當日早晨之粥汁者、干蕨、大豆、同菜者炙和布、炙昆布、醬鹹、烏梅、幷唐納豆之內兩三種、○中略茶子者、○中略結昆布、

古事類苑

植物部二十八

藻

名稱

藻類ニハ、採テ以テ食用ニ供シ、肥料ニ充ツルモノ少ナカラズ、就中昆布、和布、荒布、海松、石花菜、海髪、海蘿、鹿尾菜等ハ、其主要ナルモノナリ、

〔運歩色葉集〕海藻

〔重修本草綱目啓蒙〕十六水草 水藻○中略 水藻ハ水中ニ生ズル藻類ノ總名ナリ
海藻○中略 海中藻類ノ總名ナリ

〔和漢三才圖會〕九十七 海藻○中略 按生海島水上者曰藻、生海中石上者曰苔、今藻苔共通曰苔、而海苔類以充食品者、凡三四十種、隨形色及所出地立名、不能悉記、

〔延喜式〕八祝詞 祈年祭 奧津藻菜、邊津藻菜爾至麻弖、○中略 稱辭竟奉牟、

〔萬葉集〕三雜歌 石川少郎歌一首
然之海人者、軍布苅鹽燒、無暇、髪梳乃少櫛、取毛不見久爾、

〔倭訓栞〕前編三十二め○中略 海布をいふは、もの轉語なるべし、又草木の芽の柔なるより出たるにや、萬葉集に軍布をよめり、軍布は昆布と意同じ、混渾通じ書るが如きにや、和布、荒布、搗布

〔草木六部耕種法 十七〕松葉蘭ハ琉球國ヨリ多ク舶來ス、又薩摩、大隅、伊豆、安房等ノ海岸ニモ稀ニハ有リ、八丈島等ニハ殊ニ多シ、凡ソ此種類ハ甚ダ寒氣ニ傷ム者ナレドモ、日光ヲ忌ミ北風ヲ好ム、故ニ夏ハ陰地ノ北風能ク通ル處ニ置テ、稀キ醬養水或ハ米泔水ヲ時々澆ギテ霖雨ヲ避ケ、九月下旬ヨリ三月マデノ間ハ、閉藏シテ霜ト寒風トヲ嚴ク防グヲ良トス、

〔倭名類聚抄 二十 草〕卷柏 本草云、卷柏、(和名伊波久美、一云伊波古介、)

〔東雅 十五 草卉〕卷柏イハグミ 倭名抄に、卷柏イハグミ、一にイハゴケといひ、石韋イハノカハ、一にイハグミといふと見えたり、これ二物にして、亦同じくイハグミの名あるなり、イハグミの義不詳、イハゴケとは石苔也、今俗にイハヒバといふ是也、イハノカハとは卽石韋の字の義をもて呼ぶ也、今俗にイハガシハとも、ヒトツバともいふ、是也、(ヒバといひ、カシハといふ義下に註す、)

〔重修本草綱目啓蒙 十六 苔〕卷柏 イハクミ(和名抄) イハゴケ(同上) イハヒバ(京) イハマツ(雲州) コケマツ(駿州) ツンダノモトマリ(仙臺) タチヒバ 一名長生草(花鏡) 萬年松(同下) 麻臣

通名 不死草(正字通) 陰苔(同上) 苔松(救荒本草) 石卷柏(本事方) 生卷柏(天台山方外志)

深山ニ生ズ、採テ假山ニ栽ユ、年久シキ者ハ幹フトク、高サ一二尺、葉繁密、形扁柏ニ似テ薄ク軟シ、冬ヲ經テ枯レズ、乾ク時ハ葉卷縮シテ鷄ノ足ノ如シ、潤ヘバ開テモトノ如シ、其葉短クシテツマリタルハ、トクゲヒバト云フ、葉ノ長キハスソノヒバト云フ、一種淺山ニ生ジ、只一葉ノミナルヲヒメヒバト云フ、一名ノヒバ(勢州) カタヒバ(同上) 是紹興本草ノ兗州卷柏ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十六 苔〕卷柏

附錄、地柏 アタゴノケヤウラタゴケ 深山陰地ニ自生アリ、移シテ家庭ニ栽レバ、甚ニ蔓延シテ地ヲ掩フ、莖ハ細クシテ絲ノ如ク、葉ハ扁柏ニ似テ薄シ、冬ハ色黄赤ニ變ジテ枯レズ、

玉柏

松葉蘭

山中地ニハヒテ生ズ、其蔓長サ五七尺、枝多ク分ル、葉ハ土馬騣ニ似テ黄緑色ナリ、四月枝ノ梢ゴトニ穗ヲ生ズ玉柏ニ異ナラズ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十六苔〕玉柏 マンネングサ 正新校 日光ノマンネングサ マンネンスギ 花戸ピロウドスギ 同上

即次ノ條ノ石松ノ草本ナル者ナリ、深山幽谷ニ生ズ、一莖直上ス、高サ五七寸、上ニ枝ヲ多ク分チ、土馬騣ノ如キ細葉多ク著テ石松ニ異ナラズ、夏巳後枝頂ニ穗ヲ生ズ、長サ一寸許、濶サ三分許、周圍細鱗アリテ、葉ノ形ニ異ナラズ、黄白色ソノ苗多ヲ經テ枯レズ、故ニ千年柏萬年松ノ名アリ、又別ニ一種高野ノマンネングサト呼ブ者アリ、苔ノ類ナリ、根ハ蔓ニシテ長ク地上ニ延ク、處處ニ莖立テ、地衣ノ如キ細葉簇生ス、深緑色ナリ、採リ貯ヘ久シクシテ乾キタル者水ニ浸セバ、便チ緑ニ反リ生ノ如シ、是物理小識ノ千年松ナリ、

增、衡嶽志曰、萬年松出祝融峯懸崖上、本草類也、高者三四寸許、凌冬不凋、連根拔之收巾笥中、歷數年、取而植之、蒼翠如故、又拔收之再經歲月、復植亦復如是、海內名勝志云、紫自山中有仙草、葉圓枝細、採其葉乾之一二年、無以泉井或呵之、復鮮如故、此亦大和山萬年松之屬也、

一種カサゴケト呼ブモノアリ、莖細クシテ高サ僅ニ二寸許、一莖直上シテ枝ナク、頂ニ葉ヲ生ジ傘ノ狀ヲナス、徑リ一寸餘、ソノ色蒼緑色ニシテ、潟ヲ澆タルガ如シ、深山幽谷石苔中ニ混ジ生ズ、

〔草木育種 巻下 或實鋼べきもの〕松葉蘭 中山傳信錄の松蘭竹蘭の類なるべし、九州伊豆安房等の高山岩石の間に生ず、石を割て是を採也、植る盆の水拔の穴を大くあけ、陶器の闕を伏へごを剝て入、或ハ棕櫚の毛を入、其上へ山の黄土の塊を入て、山の樹の根などを掘たる赤土へ、へごを粗く剝てまぜ植てよし、常に北陰に置、北風をよく通し折々米泔水を澆べし、霖雨の節ハ內へ取入べし、多ハ土藏へ入るなり、

蘿出綱要訣、則知女蘿之名、本草所載、莬蘿以下三名出綱要訣者、此女蘿上恐脱莬字、或源君引本草二名、誤爲出綱要訣也、則雜、松蘿生熊耳山川谷松樹上、陶注、松蘿多生雜樹上、而以松上者爲眞、小雅頍弁正義引陸氏義疏云、松蘿自蔓松上、生枝正青、萬豆乃古介、依輔仁、又見元輔歌、按萬豆乃古介、謂松苔也、又六帖歌謂眞都乃岐乃古介、新撰歌謂之萬都爾加々禮留古介、本草和名無佐留乎加世之名、按乎加世麻拌也、以拌所績之麻綜爲麻拌、今俗亦有加世綜之名、是物在深山、其狀似麻拌、故云猿麻拌也、拌謂加世比、古今集物名有左賀利古計、即此物、故日本紀纂疏云、蘿謂之苔也、或名無都毛乃乎賀世、今周防俗呼佐留乃乎賀世、南部俗呼佐留加世、

〔[illegible]球庵雜記〕こけをひかげといへど、なべてみないふにはあらず、ひかげをまたかげともいへり、萬葉にみえたり、

(頭書)眞淵云、ひかげは深き山などのきにかゝれる蘿をかせてふものなり、萬葉に松のこけとよみしもこの事なるべし、さるを契沖は雜木の下の地などに長くはふ苔のあるを、それなりと思へるよし、あるものに書きたり、そは誤なり、和名抄、祭祀具、蘿蔓(和名云、比加介加都良、)同苔類、蘿(日本紀私記云、蘿比加介、)女蘿也、松蘿一名女蘿(和名萬豆乃古介、一云、佐留乎加世、)宣長云、萬葉十四に、夜麻可都良加氣麻之波奈流、衣可多伎可氣乎、これに加氣とよめるもひかげなり、二に山縵影爾所見乍とあるも、山かづらを枕詞として、影はひかげの意につゞけたるを、この十四の歌にて知るべし、

〔重修本草綱目啓蒙〕(十六苔)石松○フ○ジ○ノ○ヲ○ガ○セ○(新校正)ヒ○カ○ゲ○ノ○カ○ヅ○ラ○カ○ミ○ダ○ス○キ○サ○ガ○リ○ゴ○ケ○(新古今、夫木抄)ヒ○カ○ゲ○グ○サ○(同上)ヤ○マ○カ○ヅ○ラ○(共二、同上)キ○ツ○ネ○ノ○タ○ス○キ○(但州)ヤ○マ○ウ○バ○ノ○タ○ス○キ○(雲州)シ○ヽ○ノ○ヲ○バ○(土州)キ○ツ○ネ○ノ○ケ○サ○(雲州)ハ○イ○タ○ロ○(熊野)サ○ル○ヲ○ガ○セ○タ○ン○ダ○ノ○タ○ス○キ○(江戸)

石松

水邊沙地ニ多ク叢生ス、春舊根ヨリ先ヅ花ヲ生ズ、莖高數寸梢ニ花アリ、筆頭ノ形ノ如シ、故ニ筆頭菜ト名ク、慶陽府志ニ見タリ、花ノ名ヲフデツグサ古歌フデツバナ同上ト云、今ハツクヅクシト云、ツクシ京ホウシコ備前ホウシ讃州ツク〱ボウシ和州ホシコ豫州嫩時二三寸ナルヲ早春食用ニス、今ハ多ノ中ヨリ出ス、花終テ葉出ヅ、是スギナ也、形イヌドクサニ似テ細ク短クシテ八九寸、節ゴトニ細枝叢生ス、是モ嫩ナルトキ食ベシ、此根黑色土ニ入ルコト甚深クシテ、本根ハ堀リ得ガタシ、

〔源氏物語四十八早蕨〕あざりのもとより、年あらたまりては、なにごとかおはしますらん、御いのりはたゆみなくつかうまつり侍り、今はひと所の御ことをなん、やすからずねんじきこえさするなど聞えて、わらびつく〲し、おかしきこにいれて、これはわらはべのくやうじて侍る、はつほ成とて奉れり、

〔夫木和歌抄二十八土筆〕貞應三年百首草　民部卿爲家

さほひめのふでかとぞみるつく〲し雪かきわくる春のけしきは

〔宣胤卿記〕文明十二年二月十三日甲子、橋本羽林相伴、行河原、取土筆、○中略今日於河東令切剃、指東北堀上、橋本羽林來、夕喰土筆食飯之、

〔殿中申次記〕正月八日

一土筆　同○永正十三　一折　○中略　若王子例年進上之

〔藝備國郡志上安藝土産〕大芝土筆　中華書未見其名、其形似筆故名之、春末生矣、孺婦之合皆食、又作羹可也、大芝屬佐東郡、

〔倭名類聚抄二十苔〕蘿　唐韻云、蘿、魯何反、日本紀私記云、蘿、比加介、　女蘿也、

〔箋注倭名類聚抄十苔〕蘿見神代紀上、訓注云、蘿此云比舸礙、古語拾遺、蘿葛、比可氣、齋宮式作日蔭、按、是草可作蘿鬘、日影故云日蔭、○中略本草和名云、松蘿、一名女蘿、本條、一名蔦蘿、一名蔓蘿、一名蔓女

〔倭訓栞 前編十二〕つく〳〵し　筆頭菜をいへり、東國につくしともいふ、作州にははふしといへり、突出の意也、

片山のしづがこもりに生にけり杉菜交りのつく〳〵しかも

すぎなは杉菜也、接續草をいふ、こもりはこもりたる所をいふなるべし、杉菜の花也、土筆は和名也、西土に土筆と云は燒筆也、見蒙求、

さは姫の筆かとぞ見るつく〳〵し雪かき分る春の景色を

〔海人藻芥〕内裏仙洞ニハ、一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被召事也、一向不存知者、當座ニ迷惑スベキ者歟、○中略

ツク〳〵シハツクツク、○中略　如此異名ヲ被付、近比ハ將軍家ニモ、女房達皆異名ヲ申スト云々、

〔多識編 二〕問荊　今案左宇知久、

〔本朝食鑑 三〕土筆 都久〻志

集解、土筆者、如筆故、土面生杉菜多處之地、又有與杉菜並生者、有土筆凋盡、杉菜生、其根相續者、故或謂此與杉菜同根一種也、處處原野圃塍多有、二三月穿土面出、高四五寸、或六七寸、其筆頭初黃綠有細紋、老而紋作紫黑點子、寬鬆未有節、節上著青皮、此亦老而作白皮、嫩時採枝去節上褐皮、而煮食、味甘淡可愛、既老則頭先寬硬不可食之、然菜之處、時有筆頭者、希此野人所謂、野筆摘嫁、土筆頭之故也、南方諸州早生暖陽地、或十一二月及正月擡菜之、或多日穿土得之、俱野民競求鬻之、以貪價之故也、

〔重修本草綱目啓蒙 十草〕木賊 ○中略

問荊　スギナ　マツナ 筑前　トウナ 豫州　ツクノツハ 勢州　ツギマツ 土州　マツプキ 播州

フギノナ 仙臺　一名 藚 詩經　牛膝 同上　水蓋 詩經　續斷 通志　相思草 通雅　斷腸草　慈

蕮草　舄草　澤莎 同上　寶菜 毛詩　水舃 說文

土筆

〔新勅撰和歌集雜十九〕題しらず　　寂蓮法師

とくさかるきそのあさ衣袖ぬれてみがかぬ露も玉と置けり

〔新續古今和歌集十九雜歌〕とくさに露のおきたるを見て　　三條院女藏人左近

しなののや木賊にをけるしら露はみがける玉とみゆるなりけり

〔雨窻閑話〕觀世一代能の事并木賊刈の事

百性共申すは、我等事は信州のその原と申す所の士民に候、今日木賊刈の能興行有るよし承り及び、我等も木賊かる者共なれば、なぐさみながら見物して、○中略心なき賤の我々ども、感心して、面白く侍る、去りながら只今遊ばされたる内、いで〳〵とくさからうよと申す所、鎌の御手、我等がしなれたるとは、聊替はりある故、申す事にて候といへば、觀世の曰く、それはいと面白き見咎めやうなり、いかにして汝等はかるかと尋ねければ、さればとくさはむかふへ一刀切りにかり申し候に、今遊ばされたるを拜見いたし候へば、同じ所を前の方へ二刀にて、御かりなされ候を見申して候、あれにてはとくさはかられ申すまじく候と云ひければ、○下略

〔毛吹草三〕信濃　曾原木賊

〔伊呂波字類抄都植物附植物具〕土筆ツク〳〵シ

〔運歩色葉集津〕土筆（ツクヽシ）

〔易林本節用集津草木〕天花菜（ツクヽシ）　土筆（同）

〔書言字考節用集六生植〕天花菜（ツクヽシ）　土筆（同）　天花菜（フツフバナ）又云土筆

〔藻鹽草入草〕土筆

筆つ花、異名也、春のやけ野にと云と云々つく〳〵ともよめり、かた山のしづがこもりに生にけりすぎなまじりのつく〳〵しかな、さほひめのふりでかとぞみる

つく〳〵し霜かき分る春のけしきは、

月富梢ニ花ヲ發ス、筆頭尖ニ類シ、コノ草莖ニ枝ナシ、若シ梢ヲ摘去ル時ハ、節ニ對シテ細枝ヲ生ズ、今錺人用ル所ノ者ハ、錫器ヲ以磨光滑シテ、乾シタルモノ故、藥用ニ入ル、ニ堪ズ、生ナルヲ乾シテ用ユベシ、一種木ドクサハ形長大ニシテ節ゴトニ枝ヲ生ズ、又シノマモ木ドクサト云、同名ナリ、

〔農業全書十藥種之類〕木賊

木賊(とくさ)は藥にも用ゆ、細工につかふ時はとくさと云、庭にうへてもめづらし、正月に舊莖を悉く切取べし、新莖生じて美なり、本草曰、四月に取べし、又曰、取に時なし、うゆる地は、細かなる肥地の、やはらかなるにうへ、又ばしばし水をそゝげば、くきふとくのびやかにして用ゆるにたへたり、

〔草木六部耕種法八〕木賊ハ砂眞土ノ少シク濕氣アル地ニ宜シ、地ノ堅ク實シタルニ宜カラズ、根ヲ分植ルニハ、秋分頃ヲ時トス、既ニ活付タル後ハ、魚洗水米泔水等時々澆ルトキハ、甚能ク肥太繁生スル者ナリ、毎年ノ早春舊莖ヲ悉ク刈採ベシ、新莖新ニ生ロク其色甚ダ美ナリ、

〔令義解三賦役〕凡(略)〇中 其調副物(略)〇注 正丁一人(略)〇中 木賊六兩、

〔延喜式十三大舍人〕木綿六斤、木賊十五兩、十二月五日申省、

〔延喜式十五内藏寮〕年中所造御梳三百六十六枚(略)〇注 所須(略)〇中 木賊大三兩、椋實四合、三月中旬具數申省、

〔延喜式十七内匠寮〕御斗帳一具(略)〇中 洗刷料鍮四合、木賊四兩、

〔延喜式二十三民部〕年料別貢雜物 信濃國(中略)〇中略 木賊二 右別貢雜物依前件、

〔延喜式三十四木工〕年料 伊賀國五斛、木賊大二斤、

〔延喜式四十九兵庫〕凡御梓弓一張(略)〇中 木賊小一兩三分、

〔枕草子三〕草は

とくさといふ物は、風にふかれたらん音こそ、いかならんとおもひやられておかしけれ、

イノテ

〔大和本草 五菜蔬〕薇（イノテ）　召南草蟲詩云、陟彼南山、言采其薇、朱傳曰、薇似蕨而差大、有芒而味苦、山間人食之、爾雅謂之迷蕨、胡氏曰、疑卽莊子所謂迷陽者、本草蒙筌曰、薇莖葉皆似蕨差大、味略苦、有芒亦潤大腸、調中、尤消浮腫利水、イノテハ深山幽谷ノ内ニアリ、ワラビニ似テ大也、毛アリ、生ナルハ味苦シ、ホシテ食スベシ、其初生野猪ノ手ニ似タリ、故ニイノテト云、紫萁（ゼンマイ）ハ一根ヨリ多ク生ズ、薇ハ然ラズ、似蕨而大ニ、有芒而味苦キコト、朱子詩傳ニ云ヘルガ如シ、ゼンマヒニ不同、三才圖繪ニイヘルモ同、只本草綱目ニ薇トイヘルハ別ノ物ナリ、イノテニハ非ズ、本草ニ紫萁ノ一名ヲ迷蕨ト云、朱子ノ詩傳ニ別名ヲ又迷蕨ト云ヘリ、然レバゼンマヒモイノテモ同迷蕨ト云ナルベシ、カヤウノ同名異物多シ、

木賊

〔倭名類聚抄 十五漆工具〕木賊　辨色立成云、木賊（度久散）

〔箋注倭名類聚抄 五漆工具〕木賊出嘉祐本草、云、木賊苗長尺許、叢生、每根一幹、無花葉、寸々有節、色靑、凌冬不凋、圖經云、獨莖苗如箭笴、李時珍曰、此草有節面糙澀、治木骨者、用之磋擦則光淨、猶云木之賊也、按度久佐爾草也、

〔下學集 下草木〕砥艸（トクサ）（異名木賊）

〔新猿樂記〕四郎君者、受領郎等刺史執鞭之圖也、○中略　得万民追從、宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂○中略　信濃梨子、○又木賊、

〔和漢三才圖會 九十四本濕草〕木賊　和名度久散○中略

按木賊磋物如砥、故稱砥草矣、多出於丹波、

〔重修本草綱目啓蒙 十隰草〕木賊　トクサ　一名銼草（盛京通志）

山谷水邊ニ生ズ、人家庭際ニモ多ク栽ユ、苗ノ形麻黃ニ似テ大ナリ、徑二分餘箸ノ如シ、直立スルコト二三尺叢生ス、色深綠ニシテ東鍼（ノギスア）道アリ、糙澀ニシテ木骨ヲ磋スベシ、寸餘ゴトニ節アリ、夏

〔和爾雅 七器〕紫蕨（ゼンマイ）〔[illegible]〕

〔倭訓栞 前編 十〕せんまひ　薇をいふ、銭餅の轉歟、芽の銭の形して廻轉せるをいふなるべし、古書にせんまひの名なし、倭名抄にも爾雅を引て、薇蕨をあはせてわらびと訓せり、○中略　いぬせんまひは毛蕨なりといへり、又ひのきせんまひあり、

〔本朝食鑑 三柔滑菜〕狗脊（俗訓世牟末伊）

集解、古来嘗作蔬用之者、近世多用之、出自西國諸州者、肥長大而軟脆、味亦美、其中河内泉陽但播備讃州所産最佳、處處山野多生、春三四月生芽、如蕨而緑色、食之無滑涎、柔脆甘美、或醃或曬乾、以貢獻之、野人亦采貨于四方、京市最販之者多矣、既長細蕨莖、細葉似蘇而小圓、不尖有齒、而背有光、兩兩相對、其花至小圓、隨葉相對、其根黒色如狗之脊骨、又有黄毛、如狗形者最少矣、

〔大和本草 五草〕紫萁（ゼンマイ）　本草蕨集解、一種紫萁、似蕨有花而味苦、謂之迷蕨、初生亦可食、又曰、拳曲紫萁、今俗ゼイマヒニ花アリ、又其ナキマガレリ、多ク繁生ス、ワラビニ似テ味苦ク、初生ノ時可食、是紫萁ナル事分明ナリ、其苗ワカキ時採テ乾シテ食フ、ヤハラカニシテ蕨ニマサレリ、ゼンマイノ根ノ水飛ノ粉モチニ製シテ味ヨシ、蕨粉ニマサレリ、國俗狗脊ヲゼンマイト訓ズアヤマレリ、狗脊ハ別物也、中夏ヨリ來ル、誠ニ狗ノ脊ニ似タリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十九菜〕薇　ゼ○ン○マ○イ○　ゼ○ン○ゴ○上總○中略

山足水旁ニ多ク生ズ、深山ニ生ズル者最大ナリ、春嫩芽ヲ採リ乾菜トス、コレヲ拳紫蕨朝鮮ト云、奥州三春ノ者肥柔ニシテ上品トス、形拳曲シテ綿アリテコレヲ包ム、開ク時ハ紫藤（フヂ）葉ノ如ニシテ厚ク尖ラズ、枝多シ、莖長サ三尺許、數莖一根ニ叢ル、別ニ花穗ヲ出ス、高サ葉ト均シ、多ク枝ヲ分チ、黄褐色ノ穗ヲ布ク長サ一寸許リ、秋後苗枯ル、根ハ則枯レズ、李時珍薇ヲ以テ野豌豆、大巣菜ト爲ルハ是ナラズ、此二名ハ翹搖ニ移シ入ルベシ、

海金沙

〔出雲風土記意宇郡〕砥神島(中略)有椎、松、茅、薺頭、蒿、都○波○、師○太○等草木也、

〔多識編二草〕海金沙、今案須那○久○左○、異名竹園荽、

〔重修本綱草目啓蒙十二草〕海金沙　ス○ナ○グ○サ○　カ○ニ○グ○サ○(大和本草ニ京師ノ俗名トス、然レドモ今ハコノ名ヲ呼バズ、)　カ○ン○ブ○ル○　同上　カ○ニ○ブ○ル○　カ○ナ○ブ○ル○　イ○ト○カ○ヅ○ラ○江州　タ○ヽ○キ○グ○サ○同上　ハ○ナ○カ○ヅ○ラ○四国　サ○ミ○セ○ン○カ○ヅ○ラ○同上　フ○ル○シ○ノ○ブ○江戸　サ○ミ○セ○ン○ヅ○ル○和州　リ○ン○キ○ヤ○ウ○グ○サ○(用薬須知後編)　カ○ニ○コ○グ○サ○勢州

原野ニ極テ多シ蔓草ナリ、三月宿根ヨリ苗ヲ生ズ、一二尺マデハ直立シテ草本ノ如シ、故ニ禹錫説初生作小株高一二尺ト云、今ノ本ニ初ノ字ヲ脱ス、宜ク補ベシ、苗長クテ藤蔓細ク堅シ、長ク草木上ニ纏フ、其蔓ヲ採リ外皮ヲ剝サレバ中ニ堅キ心アリ、黄色ニシテ光アリ、三弦ノ線ノ如シ、小児戯ニ両端ヲ引テ弾ズレバ聲アリ、故ニサミセンヅルト云、葉ハ井口邊草(トリノアシグサ)ノ葉ニ似テ深緑色、夏已後蔓ノ末ニ生ズル葉ハ甚細ニシテ、海州骨碎補(シノブ)ノ葉ニ似テ脚葉ノ形ト異ナリ、秋ニ至テ葉背ゴトニ皆邊ニソヒテ高ク皺ミ、巻カヘシタル状ノ如ク見ユ、其中ニ金沙ヲ含ム、脚葉ニハ沙ナシ、其梢葉ヲ採リ紙ヲ襯キ、日乾スレバ細沙自ラ落テ紙上ニアリ、収メ貯ヘ薬用ニ入ル、

〔和漢三才圖會九十八石草〕蟹草(かにくさ)　俗稱

按蟹草山谷石縫間有之、人家盆盂際栽之、高一尺許、莖細硬、葉細長屈如韮葉様、面有叉、表裏蒼、四時不凋、無花實、

狗脊

〔新撰字鏡草〕薇(先非反、紫萁水也、白薇、万可古ヨ)　狗脊(犬○和○良○比○、又云山○和○良○比○、)

〔本草和名草八〕狗脊(蘇敬注云、狀如狗脊、)一名百枝、一名強膂、一名扶蓋、一名扶筋、(已上本條)一名狗青、一名草薢、一名赤節、(已上三名出釋藥性)和名於○爾○和○良○比○、一名以奴和良比、

〔饅頭屋本節用集草世木〕前麻伊(ゼンマイ)

形ロク蝋蛤ニ似タレドモ、味苦カラズ、故ニ的當ニ非ズ、

〔下學集 草木 下〕歯朶シダ 正月之用

〔重修本草綱目啓蒙 草部 十三〕格注草 詳ナラズ

シダニ充ルハ穏ナラズ、シダハ大小二種アリ、單ニシダト云時ハ、オ°ホ°シ°ダ°ニシテ、ホ°ナ°ガ°一名ウ°ラ°ジ°ロ°ト云、歳首ニ蓬ニ飾ル者コレナリ、又名ヤマクサ 筑前 スダ 讃州 モロムキ 筑前 ムロムキ 勢州 モロモキ 江州 ヤマノクサ 雲州 ヘゴ 紀州、今ハ紀州ニテヘゴトイヘルアル、別ニ一種小°シ°ダ°ト云草ハ形小シ、松耳ノ下シキニシ、又立花ニ用ユルモノコレナリ、コレヲ長崎ニテハ、小ヘゴト云、京ニテコシダト云、

增、一種タ°モ°ノ°ス°シ°ダ°ト云モノアリ、深山幽谷巖石間ニ生ズ、ソノ葉多ヲ經テ枯レズ、春ヨリ夏ニ至テ、漸漸嫩葉ヲ生ズ、葉ノ形金星草ニ似テ細嫩ナリ、葉背ニ金星ヲ生ズ、コレ其花ナリ、葉ノ末細長クシテ絲ノ如シ、夏月葉ノ末ニ小塊ヲ結ビ壟レテ、地ニ著テ根ヲ下シテ苗ヲ生ズ、江州八日市ヨリ勢州桑名ヘ通行スル、八風越ト云處ニ多シ、草木性譜ニ圖スルトコロコレナリ、一種タ°マ°シ°ダ°ト云フモノアリ、葉ノ形アフヰカヅラ一名ナルノシロウダノ葉ニ能ク似タリ、ソノ根ニ正圓ノ塊アリ、形半夏ノ如シ、夏月別ニ叢莖ノ本ヨリ細絲ヲ生ジテ嫩芽ヲ別チ生ズ、多ヲ經テ枯レズ、然レドモ甚ダ寒氣ヲ忍ル、又フ°デ°シ°ダ°ト云フモノアリ、鐵脚鳳尾草ノ類ナリ、形チ相似テ甚長ク小葉叢密ス、又葉ノ疎ナルモノモアリ、形狀一ナラズ、コレモ夏月葉ノ末ニ小塊ヲ結ビ、地ニ著テ苗ヲ生ズ、多ヲ經テ枯レズ、

〔草木育種 下 歳實類べきもの〕を°に°し°だ° 情俗に海蝦青と云と、未是非を詳にせず、二種あり、雄しだは葉厚して短し、雌しだは葉長し、黒ぼく土の陰地に栽、折々米泔水を灌てよし、總てしだの類は葉の背褐色になり、或星を生ず、此しだの實なり、此葉を採採て、陰地のこけむしたる所へ振て蒔ば、生るものなり、

貫衆

〔兼好法師集〕ほりかはのおほいまうちきみ〇源具守をいはくらの山莊におさめたてまつりにし又の春、そのわたりのわらびをとりて、雨ふる日申つかはし侍し、
さわらびのもゆる山邊を來てみればきえしけぶりの跡ぞかなしき

〔本草和名十草〕貫衆、仁諝音古亂反 一名貫節、一名貫渠、一名百頭、一名虎卷、一名扁苻、仁諝音補典反 一名伯萍、楊玄操音薄邪反 一名藥藻、仁諝音斬 一名草鴟頭、陶景注云、形似二老鴟頭一、故以名レ之、 一名貫來、一名貫中、一名渠母、一名貫鍾、一名樂、一名黃鍾、已上六名出二釋藥性一 一名頭實、出二神農本草一 一名貫草、出二雜要訣一 和名於。爾。和。良。比。

〔倭名類聚抄二十草〕貫衆　本草云、貫衆、和名於爾和良比

〔康頼本草草藥下品〕貫衆　味苦微寒有レ毒、和名於爾和良比、又云於仁和良比、二月八月採レ根曝乾、

〔倭訓栞前編於十八〕おにわらび　枕草紙に見ゆ、倭名抄に貫衆を訓せり、今鬼。わ。ら。び。ともいへり、新撰字鏡に、般擊をおにわらび、土般擊をほしわらびによめるは、似たるをもて呼るなるべし、般擊は鐵乳の根、土般擊は土中に藏たる者也、

〔藥經太素下〕貫衆　微寒味苦
白水ニ浸シテ剉焙、能散レ熱、主レ除二寸白一、殺二三蟲一破レ癥、仍治二金瘡痛一、細末湯調、止二鼻洪一、

〔枕草子八〕名おそろしき物
をにわらび

ムカデグサ

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕地蜈蚣草
名ニヨリテムカデグサニ充ツル說ハ穩ナラズ、ム。カ。デ。グ。サ。ハ貫衆ノ一種ナリ、地蜈蚣草ハ紀州熊野山中ニ生ジ、土人ムカデラント呼ブモノコレニ近シ、ソノ草ハ樹皮ニ叢簇シテ螺厴マメゴケ草ノ樹石ニ附著スルガ如シ、藤ハ螺厴草ヨリ粗シ、葉ハ佛甲草葉ノ如クニシテ狹小、質厚クシテ微シ彎リ互生ス、葉ハ深綠色、一葉ゴトニ一根ヲ生ジテ樹皮ニ粘ス、花實ハ蘭ニ類シテ極メテ小シ、此草

乾致遠方、水練作餅名曰蕨餅、

(寛政四年武鑑)松平肥後守容頌(○會津) 時獻上(八月)漬蕨

青山大膳亮幸完(○美濃八幡) 時獻上(八月)干蕨一箱 九鬼定五郎隆鄉(○丹波綾部) 時獻上(四月)蕨粉

(延喜式三十九内膳)漬年料雜菜

蕨二石(○中略)料鹽一斗 右漬春菜料

(續修東大寺正倉院文書三十二)造佛所作物帳斷簡(○原註云、年記不詳、按續修文書四十五卷所收天平六年造佛所作物帳中卷斷簡、恐與此同物)

略

買蕨菜直錢廿一貫七百十六文(○中略)

蕨五千二百九十六把、直一貫三百廿四文、(文別四把)

(出雲風土記意宇郡)凡諸山野所在草木(○中略)蕨、

(萬葉集八春雜歌)志貴皇子懽御歌一首

石激(イハバシル)垂見之上乃(タルミノウヘノ)、左和良妣乃(サワラビノ)、毛要出春爾(モエイヅルハルニ)、成來鴨(ナリニケルカモ)、

(古今和歌六帖六)わらび

みよし野の山の霞をけさみればわらびのもゆる煙なりけり

(古今著聞集十二偸盗)花山院の粟田口殿の山のわらびを、あまりに人のぬすみければ、こもり僧浄法師よみ侍ける、

山守のひましなければかきわらびぬす人にこそいまはまかすれ

(古今著聞集十八飲食)別當入道北しら川にすみ侍ける比、山のわらびをおりて、相國の許へつかはせり、返事に、

思ひやる二木の杜の下わらびおりてきつらんみねぞしらる、

溜りたる粉を、庖丁にて起しとり、灰を土邊に厚さ貳寸程にひろげ、その上に木綿の二布半ぐらゐなる風呂敷様のものを敷、その上に置ば、半時ほどにして水氣はこと〴〵く灰に吸とり、粉乾くなり、是を紙ぶたやうのものに入、日にほし乾かし、紙の袋に入、俵として問屋に出し商ふ也、借右叩きひしぎて桶に入、もみたる粕の筋は、又水をかけよくあらひ、日にほし置、雨の日など取出し、水にひたし置、和らかに成たる時、水氣の乾きしを縄になひ、束とし賣べし、此縄を則ち世間にてわらび縄と呼びて、垣などを結に用ふるに、雨に濡ても腐ることなし、又風流の垣を結には棕櫚を水にて煮、その中に此縄を入て引上れば、眞黒に染る也、

借蕨粉は、反もの丶糊と成り、傘をはる糊とし、油紙桐油等の糊、又は求肥わらび餅等になるなり、飢饉の時には、いろ〳〵の物をまぜ餅となし糧とするに、葛と同様の功あり、多く生ずる所の山里にては、常に掘り糧ともし、粉ともして利を得べし、

〔宜禁本草(乾玉菜)〕蕨菜　甘寒滑、壅經絡筋骨間毒氣、令人脚弱不能行、消陽事、令眼暗、鼻塞、髮落、冷氣人食之、多腹脹、令人驟、小兒食之、脚弱不行、山人作茹食之、(不可生食)日用本草云、蕨根搗洗、澄淸成粉、可以充飢、性冷、不可久食、

〔毛吹草(三)〕信濃　干蕨　出羽　干蕨　但馬　干蕨　同繩　紀伊　干蕨

〔奥羽觀蹟聞老志(三膽貫土產)〕薇蕨　所生于玉造郡大口村田切邑尤佳、其長三尺、其莖如矢、

蕨粉　所出于伊澤郡鬼首村尤好、

〔藝備國郡志(上安藝土產)〕蕨索　山縣郡山中農民、到秋掘蕨根、以槌擣之、取其心、水飛以爲蕨粉、以其皮綯索、名曰蕨索、其形堅剛而堪水濕、其色淡黑而不鄙野、用之或縛墻、或纏桁、又合作帆綱、又摺代籐箔、其所爲用、幾許不及枚擧矣、

蕨粉　出山縣郡、蕨根洗淨、以槌碎之、水浸一夜、漉其渣脚、以其汁器盛水飛、則其白汁凝滯如葛粉、陰

キノナリト云、一名カギノコ作州、讃州、チハナノコ羽州コレヲ饑トナシ食フ、ワラビモチト云、南部ニ
テモチト云、物理小識ニ謂ユル蕨粉ナシ、巳ニ粉ヲ採リタル渣筋ヲ乾シテ縄トナス、ワラビ
ナハト云、色黑クシテ能ク水ニ耐ユ、

〔農業全書 五 山野菜〕蕨

蕨紫蕨薇是皆山中に生じ、田圃に作る物にあらず、此ゆへに委しく記さず、蕨は生にては性あし
く味もよからず、醬づけよし、ほしたるは出羽の秋田より出る物、柔にして味よし、ぜんまいも食
様は右に同じ、加賀より出る味尤よし、

〔廣益國產考 四〕蕨を根粉に製する事

わらびを掘には、先蕨の肥て生ずる所を見すまし、尖鍬にて掘、其根を縄にてくゝり、家に持かへ
り、水にて土を洗らひ落し、偖臺打石のごとく、面よき石の大きなるを居置、其根を石の上にのせ、
かたき木にて拵へたる、柄の長き槌をもて、兩人向ひ合せに居てたゝきひしぎ、四斗樽ぐらゐの
桶の口に、簀をのせ、その中にたゝきひしぎたる根を入、壹人は杓にて水をかけ、一人は兩手にて
もめば、粕の筋は簀に殘り、桶の中は鼠色の水と成るなり、偖木綿の豆腐袋のごとく縫たるを、別の
桶の中に入、其袋の中に、右鼠色の濁りたる水を入濾せば、袋の中に細なる粕たまるなり、其粕は日
にほし置、あらき水嚢にてふるひ、飯を焚に其飯の上に木引頭入置、かきまぜ食すれば、糧のたし
となるものなり、偖桶の中にたまりたる水は、其まゝ半日ほど置ば、薄にごりの水となるなり、桶をか
たむけ、是をもすたみ捨れば、粉は底にかたまり付居るなり、又少し水を入、棒をもてかきまぜ、堅
まりなくなるとき、水を桶九分目ぐらゐに入、棒もて水をくるくるまぜ、又半日ほど置ば、元のご
とく粉底に付、水はすみて上にうくを、又すたみとり、又元のごとくすると、三返もすれば、粉の色
白くなるなり、白くなるとても、葛天花粉などのごとく白くはならざるものなり、偖桶そこにおり

り花わらび又秋わらびと稱するは、陰地蕨也、紫塵嫩蕨人拳手といふ嫩は、わかきとよむべし、芽出しをいふ也、撰集抄にものよきとよめるは、草書をもて誤りたる也、郭璞も紫蕨拳曲繁盛すといへり、

〔本朝食鑑三菜〕蕨和良比

釋名薇蕨二字、古併訓和良比、(中略)今大(平野)按、薇蕨別一種也、案者蕨初生無葉、薇葉類蕨、故書曰薇、今見蕨之初生、皆青紫色、無其紫青、直無白者、食經所言白者未詳、語原不分、薇蕨從依氏食經、而不與、則以爲薇蕨者乎、

集解、處處山中岡野有之、二三月生芽拳曲、狀如小兒拳、山野之人、多日燒山野、其火連日不消、其跡至春生蕨最多、春初先生者號早蕨(サワラビ)、自古歌人賞詠之、若欲食生蕨者、先用灰湯煮去滑涎、取出投水洗淨、軟又作葅、不然則必被中毒、今世采其嫩芽、醃藏而貢獻之、野人多采收之、作淹作乾以貨于四方、信州野州三越之諸山、常之秋田、羽之莊內、奧之仙臺、南部等處最佳、津輕之產頭肥、味殊美、駿遠參尾濃勢、及畿內西州處處多有、或曬乾作葅煮食稍佳、其芽既長、則展開如鳳尾蕉、高三四尺、其根去紫色、皮內有白粉、搗爛數次、洗澄取粉、水飛曬乾、煉湯作餅、狀如葛餅、而色紫黑、味不減葛餅、世以爲珍、此亦貢獻餽贈之品也、采其粉後采根之筋條、搗碎作繩、呼稱蕨繩、勁強不減鐵鏁、而千年不朽、世以爲土木之具、此亦民間之最貨物也、

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕蕨　ヤマテグサ古歌　ホドロ同上　ワラビ　シドケ土州　ヨメノナ
イ勢州中嶋　○

春宿根ヨリ葉ヲ生ズ、初ハ卷曲シテ拳ノ如シ、コレヲサワラビト云ヒ、カキワラビト云フ、採リ煮テ食用トス、或ハ醃シ或ハ乾ス、乾ス者ハ奧州三越信濃東北國ノ產ヲ良トス、形肥大ニシテ柔軟ナリ、葉長ズレバ莖ノ長サ三四尺、老莖ヲ用テ箸トス、凡一根數莖ヲ生ズ、冬ニ至テ苗枯ル、山人根ヲ掘リ製シテ粉トス、コレ蕨粉救荒本草ナリ、一名山粉福州府志、烏萁通雅、俗名ワラビノコ、古歌ニムラサ

黑者曰蕨、紫者曰綦、別錄 鼈鐵灼中、令熟、然後可啖之、

〔箋注倭名類聚抄九〕按史記伯夷傳、登彼西山兮、采其薇矣、是亦同毛詩爾雅之薇、而陳藏器又云、夷齊食蕨而夭、與史記三奏記異、蓋以毛詩四月篇云、山有蕨薇、蕨薇並稱、謂薇是蕨類、故唐俗有蕨類名薇者、陳氏亦誤以夷齊所食之薇為蕨、源君亦同其誤、故連引薇蕨二字、訓和良比、其實爾雅薇蕨二字不連屬也、

〔易林本節用集草木〕薇蕨ワラビ 同

〔和爾雅七草〕蕨ワラビ 一名 蕨萁

〔海人藻芥〕内裏仙洞ニハ、一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被召事也、一向不存知者當座ニ迷惑スベキ者哉、○中略 フク〳〵レハフクタ、蕨ハワラ、蘇ハウツホ、如此異名ヲ被付、近比ハ將軍家ニモ、女房達皆異名ヲ申スト云々、

〔東雅十三穀蔬〕薇蕨ワラビ　倭名鈔に爾雅註を引て、薇蕨二字引合せ讀てワラビといひ、貫衆讀てワニワラビといふと註せり、爾雅及び陳藏器李東璧等の本草に據るに、薇と蕨とは相類して同じからざる事、猶貫衆と薇蕨との如し、倭名鈔に載せし所によれば、古の時には薇蕨の類、總稱してワラビと云ひしと見えたり、今俗にワラビといふ物は即蕨也、ゼンマイといふものは即薇也、ワラビといふ義不詳、ゼンマイといふが如きも亦不詳、オニワラビと云ひしは、そのワラビにして大きなるを云ひし也、ゼンマイは、薇音なるに似たり、

〔倭訓栞前編三十八〕わらび　新撰字鏡に蕨をよめり、歌に蕨火にもよせてよめり、蕨火の字通鑑に見えたり、蕨も萌出る事の速なれば、蕨火もて呼しにや、歌にさわらび、したわらび、かぎわらびなどよめり、根もて餅とし、又其からを縄とす、新撰字鏡に、狗脊を大わらびとも、山わらびとも訓せ

蛇眼草

蕨

〔和漢三才圖會 九十六蔓草〕鵝抱(まめづる) 俗云末女古介

本綱、鵝抱生山林中、附石而生、作蔓似大豆、其根形似萊菔(タイコン)、大者如三升器、小者如拳、二八月采根切片陰乾、

氣味 苦寒 治風熱上壅咽喉腫痛、

按鵝抱葉圓扁徑三分許、栽之盆鉢石傍、則延蔓、一面蔽石、如撒敷青豆、其根最細小、所謂如萊菔者未見、

〔重修本草綱目啓蒙 十六石草〕螺厴草 マメゴケ アラマメゴケ マメヅタ 筑前、讃州 イシマメ 長州 サヲカブラ 雲州 イハマメ 讃州、播州 カヾミゴケ 山城、加茂

山中古木及石上ニ延ク、葉圓、厚ク大サ三四分、緑色ニシテ光リアリ、相思子(トウアヅキ)ノ形ノ如ク、緑大豆ノ瓣ノ如シ、互生ス、蔓ハ細クシテ黒色、春間梢ニ長葉ヲ生ズ、背ニ微黒毛アリ、是其花ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十六雜草〕蛇眼草 カナピキサウ イハガネサウ オホシダ 江州 山足ニ多ク生ズ、薇葉ニ似テ大ニシテ厚ク枝少シ、又枝ナキモアリ、深緑色、冬ヲ經テ枯レズ、花實ナシ、

〔重修本草綱目啓蒙 十六石草〕仙人掌草 略〇中

增、蘭山翁コノ條ノ仙人掌草ト、花鏡ノ仙人掌ヲ同物トスルハ誤ナリ、本條ハイワガネサウ、一名カナビキサウ、江州ニテオホシダト云、葉細長クシテ井口邊草(トリノアシ)葉ニ似テ厚ク、大ニシテ枝少ナク、掌指ヲ張タルガ如シ、其色深緑ニシテ光澤アリ、四時枯レズ、廣東新語ニ、仙人掌多依石壁而生、其葉勁而長ト云、集解ニモ葉細而長ト云、卽雜草部ノ蛇眼草是ナリ、

〔新撰字鏡 草〕蕨 古月反、和良比、 竃丸 和良比乃根、著如大豆、又如芋核、

〔本草和名 十八菜〕蕨菜 黑者一名蘩、白者一名蓁、紫者也、出崔禹、和名和良比、

〔倭名類聚抄 十七野菜〕薇蕨 爾雅注云、薇蕨 微厥二音、和名和良比、 初生無葉而可食之、崔禹錫食經云、白者曰紫 音紫

白龍鬚

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕白龍鬚〔鬚ハ鬚ノ本字〕 ホ。ヤ。 シ。ラ。コ。ケ。 ヒ。ラ。ガ。ゴ。ケ。
深山古木枝上ニ生ズ、白色ニシテ細絲ノ如シ、長サ二三寸、多ク叢生シテ枝ヲ掩フ、甚松蘿ニ似テ柔ニ、心ナクシテ斷ヤスシ、

虎尾

〔大和本草九雜草〕虎尾　小草ナリ、箱根草ヨリ細ニシテ柔ナリ最美、箱根草ニ相似テ不同、俗語ニカワラフイラトモ、ペンサレストモ云、狀如此、〇圖略 產後ニ紅夷人コレヲ用ユ、日本人ハ四物湯ト等分ニ合セ、產前後ニ用テ驗アリ、カゲボレニスル、又癎症ニ此草トアメンダウス氷沙糖三種等分ニ合セ服ス、若驗アリ、シノブ、ハコネ草、虎ノ尾三物相似テ不同、三才圖繪草木五曰、地柏根黃狀如絲莖細、上有黃點子、無花、葉三月生長四五寸許、四月採暴乾用、主臟毒下血、神速、今按此亦石長生之類歟、

〔和漢三才圖會九十八石草〕虎尾草　俗稱〔正字未考、止。良。乃。於、藻草有同名、〕
按虎尾草生石縫間及竹籔中、草似大葉鳳尾草、而甚厚硬、微反無枝梗、其背有茶褐色粉點、無花實、被粉點若是爲子乎、其散布處自然隔二三尺、亦自然出生、一莖僅寸許、頂有一葉、似春麥葉、而微皮、三秋尋萎二葉、此時無鬚、虎尾草之苗者、綠莖葉全備亦一異也、人家亦栽之、

雁足

〔大和本草九雜草〕雁足　深山ノ內ニアリ、初度ニシダノゴトクナル葉イヅ、兩々相對ス、ワラビノ葉ニ似タリ、後ニ心ヨリシダワニ似タル葉生ズ、初度ノ葉トハ各別ノモノ也、立花ニ用ユル物也、鞍馬山ニモアリ、又鬼。シ。ダ。ト云物アリ、雁足ニ似タリ、其ニ漢名未詳、

螺厴草

〔多識編二石草〕螺厴草、今案加。加。美。久。左。、俗稱岐。岐。佐。宇。、
〔和爾雅七草木〕螺厴草〔鏡面草〕
〔大和本草八蔓草〕螺厴草　ツルニハイノフタノヤウナル葉連リツケリ、又大豆ヲ二ツワリタル形ニ似タリ、陰處石ニ附テ生ズ、本艸石草類ニ載ス、功能多シ、

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕石長生　ハコネグサ　オランダサウ武州　クロハギ加州　ヨメノハハキ江州　ヨメガハヽキ正新校　ヨメガハシ甲州　イシヽダ駿州　ホウヲウハギ同上　イチヤウシノブ同州　イチヤウグサ伯州　一名丹陽草本草原始　増、一名小蕨萁幼幼集成　鳳尾草同上

幽谷石上ニ生ズ、春新葉ヲ生ズル時紅色ニシテ美シ、一科ニ叢生ス、莖ノ高サ一二尺、黑色ニシテ光リアリ、漆ノ如シ、上ニ枝叉多ク分レ、叉ゴトニ一葉アリ、形三角ニシテ鴨脚葉ノ如シ、大サ三四分、深緑色、秋ニ至レバ葉背ノ末ニ、一ツノ小褐片ヲ生ズ、即其花ナリ、葉冬ヲ經テ枯レズ、已ニ落葉スル者ハ、枝ヲ連ネ束ネ帚トス、タマハヽキト名ク、然レドモ甚脆クシテ折レ易シ、此草元祿中、紅毛人相州箱根ニ於テトリ得テ、產前後ニ殊効アリト云ルニ因テ、ハコネグサト名ク、然ドモ箱根ニ限ラズ、諸州山中ニ多シ、一種ヌリパシト呼ブ者アリ、一名カラスノアシ越後アシナガ江州クジヤクサウ花戸ヨメノハシ、能州キツネノカンザシ、備州ヨメノカンザシ、ヨメノヌリパシ、共同上、山ノ幽谷ニ多シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、高サ一二尺、叢生ス、莖ノ色黑漆ノ如ク微ク紅ヲ帶ブ、莖上ニ長枝十餘並ビ分チ、枝ニ小葉兩邊ニ連生シテ、孔雀ノ尾ノ如シ、花ハ開カズ、秋後苗枯ル、春ノ嫩葉紅色ニシテ美ハシ、是又石長生ノ一種ナリ、

〔採藥使記中相州〕重康曰、相州箱根アシガラノ關ノアタリニ、箱根草ト云フヲ出ス、土人ノ曰、元祿ノ頃、紅毛人江都參府ノ時、此草ヲ見テ曰、是レカツヘレヘンヲレストト云フテ、難產ノ藥ニ妙アリトテ採ラセケル、故ニ一名ヲオランダ草トモ云フ、コレ本艸ニ載スル處ノ石長生ナルヨシ、

光生按ズルニ、箱根草此比參府ノ紅毛人ヤンヘツキト云ヘル醫ニ問ヒシニ、此艸本國ニテフランチリイリヨト云フ、此國トムマヘヤト云フ二ケ國ヨリ外ニナシ、故ニ兩國ニ來ル時、採リ持行ト云フ、此艸專ラ產後產前ノ諸病ニ黑燒トシテ白湯ニテ用ユ、又湯火傷、アルヒハ髮ノ兀タルニハ、末トシ、ホルトガルノ油ニテトキ、付ルト云フ、

山陰ニ生ズ、多ハ崖壁ニアリテ葉下垂ス、一根數葉、莖甚細クシテ堅シ、葉ハ濶サ五六分、長サ三寸許、亦硬シ、面深緑色、背ハ色淺クシテ小金星多シ、又瓦韋ノ如ク、星大ナル者モアリ、葉冬ヲ經テ枯レズ、一種葉三ツニ分レ、鷄脚ノ如キ者アリ、ミツデウラボシト呼ブ、藥性要大全ニ謂ユル金鷄脚是ナリ、又一種大葉ノ金星草アリ、和州紀州山中ニ生ズ、根ハ蔓ニシテ石韋根ノ如ク土中ニ延ブ、處處ニ一葉生ジ、莖長サ一尺ニ近シ、葉長キ者ハ二尺、濶サ三寸、薄ク硬クシテ尋常ノ金星草ノ如シ、背ニ小金星多キコト、又尋常ノ者ニ同ジ、圖集解ニ說クトコロノ者是ナリ、

〔佐渡志 物産 四〕金星草 方言ウラボシ 山中崖壁ニ生ズ、一種方言タニワタシアリ、

〔新撰字鏡 草〕石長生 佛〇 麼〇

〔本草和名 草 十一〕石長生、一名丹草、一名粉勒草、富人用之、仁謂骨 力丁反、出二雜注一、

〔大和本草 九 雜草〕石長生 莖黑ク或紫色、細莖ナリ、葉似蕨又似檜、四時不凋、多生石岩下、又生山陰、苗高尺許、今按本草弘景時珍所說ノ石長生ノ形狀、ヨクシノブニ合ヘリ、

和草〇中略 篤信云、和草是併ニ云ハコネ草ナルベシ、箱根草ハシノブニ似テ小ナリ、葉細シ、莖紫色、光アリ莖堅シ、又黑色ナルモアリ、相州箱根山ニ多シ、他州ニモ岩上古墻石壁ナドニ生ズ、

〔和漢三才圖會 九十二 山草 末〕箱根草 本名未詳

按箱根草相州箱根山有之、小草苗高六七寸、細莖褐色、葉形似銀杏葉而小、其根細如絲而短、未知其本名、相傳云、能治產前產後諸血症及痰飲、

往年阿蘭陀人見之稱有良草、請採得之、甚以爲珍、

〔和漢三才圖會 九十八 石草〕石長生 丹草 丹沙草 俗云知〇豆〇閉〇夏〇帥〇、又云闌〇須〇蓮〇宇〇帥〇、〇中略

按石長生生溪澗井石間、狀似蕨而面背青、夏背著子茶褐色、如虎尾草子、莖紫黑、爲折傷及痰咳隔噎藥、

金星草

レグサ、加州ワスレグサ、同上ヒトツバ、能州ヤツメグサ、舊樹皮或ハ枝間ニ生ジテ下垂ス、土石間ニモアリ、一根ニ叢生ス、葉ハ濶サ二三分、長サ三五寸、甚厚シテ深綠色、背ニ金星兩對ス、大サ一分許、冬ヲ經テ枯レズ、年久キ者ハ葉長サ七八寸ニモ至ル、

增、一種葉ノ長サ一尺許ニシテ厚ク、幅五六分、一科ニ數葉叢生スル者アリ、深山幽谷ニ產ス、花戸ニテアツイタト呼ブ、一種長サ六七寸、幅六七分ニシテ厚キ者アリ、初生ノ形匙頭ノ如シ、ナジラント名ク、一種葉ノ長サ一尺許、濶サ二三分許ニシテ、麥門冬葉ノ如キモノアリ、深山陰濕ノ地ニ生ズ、又一種ミルラントト云アリ、深山ノ石面ニ生ズ、葉ノ形瓦韋ニ似テ厚ク、長サ二三寸、濶サ一分餘、面背共ニ毛茸アリ、水松ノ形ノ如ク、其色茶褐色、根ハ細クシテ石韋根ノ如ク蔓延ス、一種深山ニシシラントト云アリ、葉厚クシテ濶サ四五分、長サ一尺許、

〔延喜式(三十七典藥)〕諸國進年料雜藥
近江國七十三種、〇中略　石韋五斤、

〔採藥使記(中駿州)〕重康曰、駿州富士山ノ中宮ニ石韋ヲ出ス、
光生按ズルニ、石韋和名ヒトツ葉ト云フ、丹波伊豫ナドヨリモ出ル、葉白芨ノ葉ニ似テ厚ク、一枚ヅヽ、岩石ノ間ニ生ズ、葉ノ面ニ微黃ノ紛アリテ毛ノ如シ、背ハ淺白色ニシテ、白毛アルガ如シ、

〔多識編(二石草)〕金星草、今案加良比登豆波、異名鳳尾草(綱目)

〔大和本草(九雜草)〕金星草　石韋ト一類ニテ相似タリ、ウラニ黃星多シ、是與石韋異、カラヒトツバト訓ズルハアヤマレリ、本邦ニモトヨリアリ、山城西山處々ニアリ、

〔重修本草綱目啓蒙(十六石草)〕金星草　ヒトツバ　ウラボン(ン恐シ誤)筑前　一名金星石韋(本草彙言)　希聖草(醫學集要)　金星鳳尾草(同上)　出髮草(典籍便覽)

〔倭名類聚抄 二十草〕石韋　陶隱居本草注云、石韋(和名以波乃加波、一云以波久美、)其葉如皮、故以名之、生瓦屋上、謂之瓦韋、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕按本草和名又云、卷柏和名伊波久美、一云以波古介、本書卷柏、和名與輔仁同、此伊波久美、恐伊波久佐之誤、○中略 證類本草中品引作蔓延石上、生葉如皮、故名石韋、本草和名同、蘇云、此物叢生石傍陰處、不蔓延生、圖經云、葉如柳、背有毛而斑點、時珍曰、其葉長者近尺、濶寸餘、柔韌如皮、背有黃毛、亦有金星者、名金星草、凌冬不凋、又一種如杏葉者、亦生石上、○中略 所引生瓦屋上、謂之瓦韋之文、陶注證類本草不載、引唐本注云、生古瓦屋上、源君併引爲陶注、非是、本草和名引瓦屋上脫古字、源君從之、方亦是、

〔類聚名義抄 八草〕石韋(イハノカハ、一云イハノカハ、)

〔大和本草 九雜草〕石韋　石ノ側及陰濕ノ地ニ生ズ、好事ノ者庭ニウヘテ石ニ伴ハシム、

〔和漢三才圖會 九十八石草〕石韋　石韉　石皮　石蘭(和名以波乃加波、俗云比豆豆波、一名以波久美、○中略)
按石韋、丹波、伊豫處處有之、其葉厚柔韌、深綠色、面有微黃粉如毛、背淺白而如有白毛也、不黃毛、

〔重修本草綱目啓蒙 十六石草〕石韋　イハグミ(和名鈔)　イハノカハ(同上)　イワガシワ(古名)　ヒトツバ　カラヒトツバ　一名石花(月令廣義)
山陰土石上ニ生ズ、根ハ長ク藤蔓ニシテ繁茂ス、處處ニ葉ヲ生ズ、濶サ一寸餘、長サ六七寸、勁厚ニシテ深綠色、背ニ褐毛斜紋アリ、肥タル者ハ葉長サ一尺ニ過グ、冬ヲ經テ枯レズ、夏月新葉ヲ生ズ、初ハ色白シ、長ズレバ漸ク綠ニ變ズ、根ヲ採リ卷束シテツリモノトス、厭水ヲ灌グバ年ヲ經テ彌繁茂ス、一種葉短ク二寸許ナル者ヲキンナジト呼ブ、本草彙言ニ用ユル杏葉石韋ナリ、一種葉長シテ本ニ兩岐アリテ、慈姑葉ノ形ナルヲイハオモダカト呼ブ、一科ニ叢生ス、根ハ蔓ヲナサズ、一名トキハノオモダカ(丹州)、集解瓦韋ハノキシノブト呼ブ、一名マツフウラン、(讃州)カラスノワス

骨碎補

〔和漢三才圖會九十八石草〕骨碎補　石毛薑　胡孫薑　石菴蕳　猴薑略○中

按、骨碎補、出二於紀州熊野一者良、

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕骨碎補　詳ナラズ略○中　證類本草ニ載スル所ノ海州骨碎補ハシノブグサナリ、山谷土石上ニ蔓延ス、根ハ箸ノ大サノ如クシテ褐毛アリ、卽蔓ナリ、春宿根ヨリ葉ヲ生ズ、形甚細碎ニシテ海金沙ノ梢葉ノ如シ、花實ナシ、增、唐種ノ骨碎補ト云モノアリ、木石上ニ蔓延ス、高サ一尺餘、葉ハ蛇眼草ニ似テ直葉アリ、面背共ニ深綠色ニシテ、光澤アリ、葉心ノ縱脈黑色ヲ帶ブ、大小變葉多シ、根ハ圓扁ニシテ青色褐毛アリ、阿州海部郡處處ニ多シ、牟岐浦ノ海中出羽島殊ニ多シ、若水翁釋名ノ胡孫薑石毛薑ノ二名ヲサルノセウガニ充ツ、一名ハヒセウガ、アヲチカヅラトモ云、深山石上ニ生ズ、根ノ形小雉尾草ニ似テ横行盤屈シテ繁茂ス、青綠色ニシテ毛ナシ、根ハ悉ク外ニ出ヅ、冬モ葉枯レズ、梅雨ノ時舊葉落ツ、五六月新葉ヲ生ズ、形ムカデグサノ如ニシテ薄ク毛茸アリ、一葉ヅヽ垂下ル、背ニ細キ金星ヲ生ズ、此レ花ナリ、一種大樹枝上ニ生ズルアリ、形少ク異ナリ、根ノ色微褐色ニシテ青綠ナラズシテ、ツリモノニ作ルニ、根苔中ヲクヾリテ外ヘ出デズ、葉狹クシテ毛ナシ、背ニハ金星アリ、下品ナリ、

烏韭

〔重修本草綱目啓蒙十六苔〕烏韭

石上ニ生ズルコケノ總名ナリ、蘇恭ノ說ハ、ホ○ヲ○シ○ノ○ブ○ナリ、洞窟中或ハ石間陰處ニ生ジ、形チ海州骨碎補ニ似テ淡黑褐色、又微青ヲ帶ル者アリ、俱ニ長サ二三寸、

石韋

〔新撰字鏡草〕石韋(鹿耳草、又云鹿舌、一云公○羅○乃○加○志○波○、)

〔本草和名草八〕石韋(陶景注云、葉如皮、故名二石韋一、)一名石䩾(楊玄操音之夜反)一名石皮、一名瓦韋(生二瓦屋上一)一名石產(出二釋藥性一)又有二木草(生二木上一、出二雜要訣一、)和名以○波○乃○加○波○、一名以○波○之○、一名以○波○久○佐○、

臣の歌を出して、といふ歌のこゝろばへなりといへり、これしのぶのみだれとよめるは、しのぶすりの亂れといふ意也としらせたる也、かの紫の色こきときはといふ歌の次に、むさし野のこころなるべしといへるをもおもひ合すべし、もししのぶ草のかたをすりたるをよめるならば、古今の歌を引出たるは用なきいたづらごと也、又摺衣草のかたならんには、かの古今の歌、軒に生るなどこそよむべけれ、みちのくのとよめるは何のよしぞや、かの國に信夫郡といふがあればとて、さる遠き國の名をとり出て、よしもなき摺衣草の枕詞にはおくべき物かは、又みだるゝよしをいはむに、しのぶ草はいとも似つかはしからず、かの草のさまは、さいふばかりみだれたる物にはあらず、それも摺たる形は亂れてもあるべけれど、ずりたるにつけてみだれたらんは、いづれの物のかたにても同じことなるべし、いたく物よりことに亂れたる形ならではかなはず、又摺衣は、とり分て摺染などにすべき物にもあらざるをや、さて又かの信夫郡より出といふことを疑りて、布など染たるを、諸國より貢ることは古見えずといはれたるもたがへり、延喜の大藏内藏などの式にも、諸國所貢染布の色々など見えたるをや、すり衣は、おのが家々にてこそ摺たれといはるれども、さりとて外より摺ていだすこともなどかなからん、國々より出て名ある物を、めで用ふることは、今も昔も同じこと也、さて信夫郡に石の有しにてすれりといふはいかゞ有けむ、されどまことに然なりけんもしりがたきを、ひたぶるに僞言也とはいふべくもあらず、その石の事はとまれかくまれ、信夫郡より出せりしことは論なきをや、

〔新著聞集四奇蹟〕奥州信夫文字摺石
奥州信夫郡に信夫文字摺の石あり、福島より貳里ばかり行て、瀬の上といふ所の山の下の畠にあり、此石の面を摺てみれば、死せる親族の形あらはるゝとて、人々あつまりて、田畠の損亡多かりければ、今はその畠の中に埋みをきし、

をいふ時は忍び種なれど、猶忍ぶ草とよみて、さる心とも聞ゆべければ、いかゞあらん、古きよき本にしのびと書きてあるにや、後の本はたのみがたし、

〔圓珠庵雜記〕しのぶ草をこ。と。な。し。草といふ、異名なり、後撰集つまに生ふることなし草をみるからにたのむ心ぞかつまさりける、新勅撰集、君みずてはどぞふるやのひさしにはあふことなしの草ぞおひける、

〔伊勢物語下〕むかし男、後凉殿のはざまをわたりければ、あるやんごとなき人の御つぼねより、忘草をしのぶ草とやいふとて、いださせ給へりければ、給りて、

　忘草おふる野邊とは見るらめどこはしのぶなりのちもたのまん

〔大和物語下〕在中將うちにさぶらふに、みやすん所の御かたより、わすれ草をなん、これは何とかいふとて給へりければ、中將、

　わすれ草生ふるのべとは見るらめど、こはしのぶなりのちもたのまんとなんありける、おなじ草を、しのぶ草わすれ草といへば、それによりてなんよみたりける、

〔玉勝間五〕し。の。ぶ。も。ぢ。ず。り。

しのぶもぢずりといひし物は、古今集の河原左大臣の歌の顯昭の注に、陸奥國の信夫郡にもちずりとて、髮をみだしたるやうにすりたるをしのぶずりといふといひ、契沖が勢語臆斷にも、信夫郡よりむかし摺て出したる名物なりといへるがごとし、然るを師〇賀茂眞淵の伊勢物語古意に、垣衣草の形を、紫の色もて摺たるをいふと見えたり、陸奥國に石二つある、其石にてすりたるよしいふは僞言なり、むかしのすり衣は家々にてこそすりたれとて、己が家々にてすりたりし證を出し、さて垣衣草の形の亂れたるをもて、おのが戀のみだれにたぐへたりといはれたるはいかにぞや、いせ物がたりの歌にては、さ聞ゆることも有べかめれど、そは次に古今集なる河原大

則帝以瓦韋兜之、瓦韋其狀見石韋條、

〔饅頭屋本節用集 草之部〕垣衣(シノブ)

〔玉珠庵雑記〕まのぶ草に三つあり、ひとつには、垣衣つねの如し、ふたつには忘草を又はしのぶ草といふよし、大和物がたりに見えたり、これに付きて先達多くあやまりて、垣衣をわすれ草とこころ得られたるもあり、又垣衣の外にわすれ草といふ物の、軒におふるよしによめるもあり、わすれぐさおふる野べとは見るらめど、業平のよめる物を、いかで軒の草とはいふべき、又伊勢物語の心は、一草二名とは聞えず、業平のしのぶとはいひつ、忘れたるを、女うらみてこれをわすれ草とのもやいふとて、しのぶ草を出だして、思ふ心をふたつの草の名にそへたり、下の心はしのぶをばわすれ草とは申さぬものをといへるなり、三つには、萬葉に萱をもしのぶ草とよめり、しのび草とよめるは、かたらひ草のたぐひなり、重之集に、ことのはにいひ置く露もなかりけりしのび草にはねをのみぞなく、元輔集に、行く先のしのび草にもなるやとて露のかたみにおかんとぞ思ふ、

〔[illegible]〕眞淵云、伊勢物語にいへるは、わざと名をかへいひて、男のいはんにつけて、うらみんとまうけたる事、此人のいふがごとし、大和物語の頃にしも、誤る人ありつらん、まのぶ草は、枕の草子に、くちたる物のはしなどに生ふるがをかしきよしいへれば、軒に生ふる苔の類にて、さる物のあるなり、わすれ草は、萬葉にも萱草と書き、かの忘憂草の意によみたり、且枕冊子に、六月わすれ草の花の咲きたるよしありて、萱草にうたがひなし、又萬葉に萱をしのぶ草とよめるといふは、しのぶ草ははへてましをとよめるをいふなり、然れども、それ物語種の意をかたらひ草といふがごとく、したはる・思ひ草をはらへ捨てましをといふにて、萱をいふにはあらず、續古今戀五、わする丶もしのぶも同じ古郷ののきばの草の名にこそありけれ、眞淵云、こは理

石衣

〔倭名類聚抄 二十苔〕石衣　本草云、石衣、一名石髮、和名知比佐木古介、

〔箋注倭名類聚抄 十苔〕所引文、千金翼方、證類本草並不載、證類本草下品烏韭條、引唐本注云、此物即石衣也、亦曰石苔、又名石髮、本草和名亦云、烏韭、一名石衣、一名石苔、一名石髮、巳上三名出蘇敬注、是石衣石髮並出蘇注也、○中略 爾雅薚、石衣、郭璞注云、水苔也、一名石髮、江東食之、本草云、烏韭、生山谷石上、蘇注云、生巖石陰不見日處、與卷栢相類也、陳藏器云、烏韭生大石及木間陰處、青翠茸々者、似苔而非苔也、日華子云、石衣、此即是陰濕處、山石上苔、長者可四五寸、又名烏韭、陶云、垣衣亦名烏韭、而爲療異、非是此種類也、

桑花 艾納

〔重修本草綱目啓蒙 十六苔〕桑花　クハノコケ　一名桑樹上白蘚花附方

クハノキノ皮ニ附テ生ズルゼニゴケナリ、

附錄、艾納　マツノゼニゴケ、マツノコケ、一名松蘚通雅 松納衣小品類編 松綠衣東醫寶鑑 松雪天祿識餘

松樹皮ニ著テ生ズ、薄シテ堅ク皮ノ如シ、白綠色、

土馬騣

〔重修本草綱目啓蒙 十六苔〕土馬騣　スギゴケ

山中陰處ニ多ク生ジテ地ニ滿ツ、採テ茶室ノ庭ニウユ、高サ三寸許、枝ナク綠ノ如キ細葉多ク附テ杉ノ如シ、長サ三四分深綠色ナリ、一種白色ヲ帶テ莖直ナラズシテ獸尾ノ如クナル者ヲトラゴケト云フ、又スギゴケノ一種短クシテ石上ニ生ズルヲ、イハゴケト云フ、是石馬騣ナリ、

垣衣

〔倭名類聚抄 二十苔〕垣衣　本草云、垣衣、一名烏韭、和名之乃布久佐、

〔箋注倭名類聚抄 十苔〕千金翼方、證類本草中品韭作韮、本草和名與本書同、○中略 本草和名云、一云古介、西山經云、小華之山、其草有萆荔、狀如烏韭、廣雅、昔邪、烏韭也、在屋曰昔邪、在牆曰垣衣、本草、垣衣、生古垣牆陰或屋上、陶注、俗中少有見者、蘇云、此即古牆北陰青苔衣也、其生石上者名昔邪、一名烏韭、江南少牆、陶故云少見、屋上者名屋遊、形並相似、是猶古介爲允、按八雲抄謂、忍草其葉狹長有星、

垣衣

屋遊

シ、末ニ枝多ク分レ、下垂シテフサノ如シ、白色ニシテ微緑ヲ帶ブ、フトキ處ヲ採ヌレシゴケハ、皮細カニ碎ケ竭レズ、内ニ強キ心アル故、數珠ノ形ノ如シ、故ニ俗ニ弘法ノ數珠ノ變化ト云、和州芳野高野山野州日光山殊ニ多シ、長サ三五尺ニシテ至テフトシ、雨中ニハ自ラ切レテ落ツ、

〔和漢三才圖會 九十七〕垣衣〈ヤウイ〉 鼠韭 昔邪 垣嬴 天韭 和名之。乃。布。久。佐。 土馬騣 乃。木。万。之。能。布。

本綱垣衣即碑墻城垣上青苔衣也、〈中略〉

按垣衣乃非草類、只垣墻苔以字義可解也、土馬騣乃〈俗云乃木之乃不〉生古屋上及樹梢、其葉二三寸、濶二三分、似鼠麴葉而色淺、亦有節、不窠、面有細點、春色精淺、冬月亦不凋、無花實、

〔按ズルニ、倭名類聚抄ニハ垣衣ヲ之乃布久佐ト註セリ、但シ惡草ハ、漢名海州骨碎補トスルヲ允トス、宜シク惡草及ビ骨碎補ノ條ヲ參看スベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 十六〕垣衣 カ。キ。ノ。コ。ケ。 フ。イ。デ。ノ。コ。ケ。 一名蘭香〈[illegible]〉 墻衣〈外臺秘要〉 墻上青衣〈千金方〉

地衣草ノ垣墻ニ生ズル者ナリ、垣ハタカベイ、墻ハツイヂ、

〔倭名類聚抄 二十〕屋遊 蘇敬本草注云、屋遊〈和名夜乃古介〉屋瓦上青苔衣也、

〔箋注倭名類聚抄 十〕按此屋瓦上青苔、則輔仁所謂爲正、字倍者云倍、猶尾上謂之乎能宇倍、見萬葉集、者云乎倍、倍謂昔多爾、故源君云夜乃倍耳、又或急呼夜倍、古今六帖貫之雨歌、今俗稱同、但俗書作屋根者假借耳、〈中略〉證類本草中品云、屋遊生屋上陰處、無蘇注、引陶隱居、與此同、唯屋瓦側上有此字爲異耳、本草和名同、源君引爲蘇注誤、醫心方亦引陶注、而無此字、與此同、

〔重修本草綱目啓蒙 十六〕屋遊 ヤ。ノ。ヘ。ノ。コ。ケ。〈和名抄〉 ヤ。ネ。ノ。コ。ケ。

古瓦屋上ニ生ズ、又板屋ニモ日ノアタラザル處ニ生ズ、

紫衣

〔重修本草綱目啓蒙 二十六苔〕昨葉何草〇中略
附錄、紫衣 ムラサキゴケ アカゴケ、濕地上及ビ古木ニ生ズ、ソノ狀泥土ノ如クシテ紫色ナリ、又雨ノ後陰地上ニ多シ、

松蘿

〔本草和名 十三木〕松蘿、一名女蘿、本條 一名蔦蘿、一名蕑蘽、一名玉女、已上出兼名苑 一名蔦蘿、一名蔓蘿、一名蔓女蘿、出雜要訣 一名菟絲、出爾雅 和名末都乃古介、

〔倭名類聚抄 二十苔〕松蘿 辨要決云、松蘿一名女蘿、和名萬豆乃古介、一云佐流乎加世、

〔箋注倭名類聚抄 十苔〕本草和名云、松蘿一名女蘿、本條、一名蔦蘿、一名蔓蘿、一名蔓女蘿、出雜要訣、則知女蘿之名本草所載、蔦蘿以下三名出雜要訣也、此女蘿上恐脫蔓字、或源君引本草二名、誤爲出雜要訣也、別錄、松蘿、生熊耳山川谷松樹上、陶注、松蘿多生雜樹上、而以松上者爲眞、小雅頍弁正義引陸氏義疏云、松蘿自蔓松上、生枝正青、萬豆乃古介依輔仁、又見元輔歌、按萬豆乃古介謂松苔也、又六帖歌謂萬都乃岐乃古介、躬恒歌謂之萬都爾加々禮留古介、本草和名無佐留乎加世之名、按、乎加世、麻桛也、以桛所絡之麻縷爲麻桛、今俗亦有加世絲之名、是物在深山、其狀似麻桛、故云猿麻桛也、桛訓加世比、古今集物名有左賀利古計、即此物、故日本紀纂疏云、蘿謂垂苔也、或名幾都禰乃乎賀世、今周防俗呼佐留乃乎賀世、南部俗呼佐留賀世、

〔重修本草綱目啓蒙 二十六寓木〕松蘿 マツノコケ和名抄 サルヲガセ同上 サルノヲガセ同州 ヤマウバノフクズ同上 ヤマウバノヲガセ伯州 サルガセ南部 キリサルカセ駿州富士 クモノハナ日光 キヒゲ紀州 ハナゴケ泉州 キツネノモトユヒ 一名松上藤藥性奇方 蒨蒙正字 蘿 象主名物法言 樝蘿事物紺珠 藤蘿秘傳花鏡
松皮ニ附テ生ズ、然レドモ松ニ限ラズ、深山ニテハ諸木共ニアリ、又梫(アセボ)木躑躅等ノ小木ニモアリ、京師ノ者ハ短小ニシテ僅ニ二三寸、形細圓ニシテ絲ノ如シ、木皮ニ生ズル處ハ、一筋ニシテフト

石蕊　地衣

見えし所も亦同じく、並に讀てコケといふ、(凡鱗魚に鱗讀じ事亦同じ、倭名抄にも松蘿讀てマツノコケといふ事同に注す、)今も俗に蛇また魚の鱗をコケといふ也、此語その苔の如くなるによりて云ひしにや、また苔をコケといふ事は、鱗に似たるに因りてかく云ひしにや其詳なる事は知るべからず、

(倭訓栞前編九)こけ　古事記に鱗をよみ、倭名抄に苔をよめり、木毛の義なるべし、或は苺をよめり、靈會に苔也と見ゆ、苔は水衣也と注せり、されど地衣草もいへり、又石衣をちいさきこけとよめり、石髮も同じ、東坡が詩に空餘石髮挂魚衣といへれば、水衣も通じいふべし、又松蘿をまつのこけ、屋壁をやのへのこけとよめり、こけ衣、こけ席など讀みたてたる詞也、苔の袖、苔の袂など、桑門によめり、苔の戸、苔の庵などは、閑居の體をいふ也、

(和漢三才圖會九十七苔)地衣　仰天皮　掬天皮

本綱、地衣、乃陰濕地被日曬起苔蘚、如草狀者也、

氣味(苦冷微毒)　取停水濕處乾卷皮爲末傳於陸上粟瘡、治之神效、

(重修本草綱目啓蒙十六苔)地衣草　ヒ。カ。リ。グ。サ。古歌　ザ。ゴ。ケ。　ア。ヲ。ゴ。ケ。　ビ。ロ。ウ。ド。ゴ。ケ。　一名青膚(本草原始)

陰地上ニ一面ニ生ズル綠苔ナリ、形鹿毛絨ノ如シ、數品アリ、土部仰天皮ハ、陰方ノ停水濕處ノ乾寒皮ト云フト同ジ、水ノツキタルアト日照ルトキハ、ソノ土皮トナリ、起テ乾キ反卷スル者ナリ、此ヲ聖濟總錄ニ日炙沙ト云ヒ、外臺秘要ニ乾卷地皮ト云フ、地衣草トハ別ナリ、

(重修本草綱目啓蒙十六苔)石蕊　ハ。ナ。ゴ。ケ。　シ。ラ。ゴ。ケ。　一名石蕊花(本草彙言)　石雲茶(同上)　雲茶(廣東)

山中土石上ニ生ズ、高サ二三寸叢生シ、白色形花蕊ノ如シ、圓細ニシテ枝叉ヲ分ツ、內空シ、採リ研テ茶トナシ飲ベシ、

きて來にければ、幸伯ふたゝびゆきて、彼五人の中、亭主と外一人の即死したれば、療治屆かず、殘る三人は、その腹いづれも大鼓のごとくにはれたれども、命運や竭きざりけん、からくして順快しけり、そのゝち幸伯は、江戸へ出府せし折、かゝる事にや、不思議に命を助かりしとて、朋友某に物がたりしなり、○中略

文政八年乙酉六月朔　乾齋主人識

〔甲子夜話五十九〕伊澤辭安(福山侯ノ醫學ノ人)ガ話ニ、抹茶ハヨク諸毒ヲ解ス、明礬モ亦同ジ、或トキ某ノ寺内ニ竹林アル處蛇多ク栖ム、其地ニ蕈生ジタルヲ三人シテ採食ヒケレバ、即時ニ大腹痛シテ悶亂ス、ソノ中一人ハ恒ニ豪氣ナルモノユエ、彼ノ邸マデハ還リ吐血シナガラ、辭安ガ所ニ到リ治ヲ乞フ、安コレヲ聞テ、抹茶ニ明礬ヲ合テ服セシメシカバ、吐血ハ止デ瀉血セシガ、遂ニ腹痛歇テ、尋デ平愈セリトゾ、奇効ノ物ナリ、

苔蕨

苔ハ、コケト云フ、樹木、岩石、若シクハ屋瓦等ノ陰濕ナル處ニ叢生スル微細ナル植物ノ總稱ナリ、

蕨ハ、ワラビト云ヒ、薇ハゼンマイト云フ、並ニ到ル處ノ山野ニ生ジ、其嫩芽ハ採リテ以テ食料ニ供ス、尙ホ此類ノ植物ニハ、忍草、石葦、石松、卷柏等甚ダ多シ、

名稱

〔倭名類聚抄二十苔〕苔　陸詞切韻云、苔(音臺、和名古介)水衣也、

〔東雅十五草卉〕苔コケ　倭名抄に、陸詞切韻を引て、苔はコケ水衣也と註せり、此にコケといふもの、水衣をのみいふにもあらず、舊事紀に、八岐大蛇の事をしるされしに、其身生蘿と見えて、古事記に

ナ著居タリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔見聞小說六〕なら茸　乞兒の寶　羅城門の札

上州眞壁郡野瓜村にての事なりし、寛延四年辛未（是年改元寶暦）四月中、百姓ども寄り合ひて、なら茸といふきのこ、大き三四寸ばかりなる、いと美事なるを取り來て、四五人より合ひ、吸物にこしらへ、酒を飲まんとせし折、同村なる不二澤幸伯といふ醫師來にければ、五人のもの申しけるは、さてさてよき處へ御出候ものかな、今日ならたけといふきのこを採り候故、吸物にして酒をたべ候なり、幸ひの折なれば、御酒ひとつきこしめされよといふに、此醫師もそはよき處へ參りあはしなどいふ程に、吸物膳をもて出でければ、蓋をとりて見るに、特に美なるなら茸を、四つ割にして出だしたり、幸伯これを吸はんと思ひしに、はじめ膳につく時、腰にさげたる印籠巾着を、膝の脇にや居しきけん、鼠はつしと音しにけり、幸伯ひそかに驚きて、こは印籠をひしぎしならんと思ひつゝ、とりて見るにさせることもなし、こはいかにと疑ひまどひて、やがてその巾着の紐をときつゝ、内を見るにいぬる年兄道伯がくれたりし、三ッ角の銀杏くだけたり、そのとき幸伯思ふやう、曩にわが兄の、この銀杏をくれしときにいへらく、その理あるにあらねども、三つ角なる銀杏は寄けしなりとて、むかしより人のいひ傳へたり、よしや醫師なればとて、かゝる事は俗にしたがひて、文盲見義に用ふるぞよき、其方にも一つ懐中せよとくれたるを、この巾着に入れおきしに、今碎けしは不審の事なり、且この吸物は、わが好物といふにもあらず、いかにせましと思ふ心の、とかく心にかゝりしかば、吸はぬにますことあらじものをと、やうやくに思ひとりて、もろ人にうちむかひ、われらけふは大切なる精進日に候へば、御酒ばかりたまはらんとて、盃をうけて少し飲みしが、遂に療用にかこつけて、酒宴なかばに辭し去りぬ、しばらくして彼吸物をくらひし百姓の家より、幸伯がり人を走らして、只今見まひ給はれかしとて、急病用の使、推しつゞ

許ニ人ヲ遣テ急ト御座セト云ハセタレバ、別當袴モ无ク杖ヲ突テ出來タリ、房主指向ヒ居テ云ク、昨日人ノ微妙キ平茸ヲ給ヒタリシヲ、煎物ニシテ食セムトテ申シ候ヒツル也、年老テハ此樣ノ美物ノ欲ク侍ル也ナド語ラヘバ、別當喜テ打ウナヅキテ居タルニ、饗ヲシテ此ノ和太利ノ煎物ヲ溫メテ、汁物ニテ食セタレバ、別當糸吉ク食ツ、房主ハ例ノ平茸ヲ別ニ構ヘテゾ食ケル、既ニ食畢テ湯ナド飮ツレバ、房主今ハシ得ツト思テ、今ヤ物突迷ヒ頭ヲ痛カリ狂フト、心モト无ク見居タルニ、總テ其ノ氣色モ无ケレバ、極ク怪シト思フ程ニ、別當齒モ无キ口ヲ少シ頰咲テ云ク、年來此ノ老法師ハ、未ダ此ク微妙ク被調美タル和太利ヲコソ不食候ナリヌレバト、打云テ居タレバ、房主然ハ知タリケル也ケリト思フニ、奇異ト云ヘバ愚也ヤ、耻クテ更ニ物モ否不云ズシテ、房主入ヌレバ、別當モ房ヘ返リニケリ、早ウ此ノ別當ハ、年來和太利ヲ役ト食ケレドモ、不醉ザリケル僧ニテ有ケルヲ、不知デ構タリケル事ノ、支度違テ止ニケリ、然レバ毒茸ヲ食ヘドモ、露不醉ヌ人ノ有ケル也ケリ、此ノ事ハ其ノ山ニ有ケル僧ノ語リケルヲ、聞傳ヘテ此ク語リ傳ヘタルトヤ、

比叡山横河僧醉茸誦經語第十九

今昔比叡ノ山ノ横川ニ住ケル僧有ケリ、秋比房ノ法師山ニ行テ木伐ケルニ、平茸ノ有ケルヲ取テ持來タリケリ、僧共此レヲ見テ、此ハ平茸ニハ非ズナド云フ人モ有ケレドモ、亦人有テ此レハ正シキ平茸也ト云ケレバ、汁物ニシテ栢ノ油ノ有ケルヲ入レテ、房主吉ク食テケリ、其ノ後暫許有テ頭ヲ立テ病ム、物ヲ突迷フ事无限シ、術无クテ法服ヲ取出テ、横川ノ中堂ニ誦經ニ行ヌ、而ニ□□ト云フ僧ヲ以テ、導師トシテ申シ上サス、導師祈リ持行テ畢ニ、敎化ニ云ク、一乘ノ峯ニハ住給ヘドモ六根五內ノ□□ノ位ヲ習ヒ不給ザリケレバ、古ノ所ニ耳ヲ用ル間、身ノ病ト成リ給フ也ケリ、鷲ノ山ニ坐シマシアハンヲリヲ、尋テツヽモ登リ給ヒナマシ、不知ヌ茸ト思スベラニ、獨リ迷ヒ給フ也ケリ、廻向大菩提ト云ケレバ、次第取ル僧共、腹筋ヲ切テゾ咲ヒ喤ケル、僧ハ死許迷

讀經ノ時間トテ參ス、殿何ニ思テ此ル平茸ヲバ食ケルゾト問ハセ給ヘバ、□□ガ申タ、□□ガ葬料ヲ給ハリタ昼ヲ不見給ハズ、痛ヌルガウラヤマレク候也、□□モ死候ヒナムニ大路ニコソハ被棄候ハメ、然レバ□□モ茸ヲ食テ死ニ候ナバ、□□ガ樣ニ葬料給ハリ候ヌベカメリト思給ヘテ、食ヒ候ヒツル也、其レニ不死ズ成リ候ヒヌレバ、ト申シケレバ、殿物ニ狂フ僧カナト仰セ給ヒテナム咲ハセ給ヒケル、然レバ、早ウ極キ毒茸ヲ食ヘドモ不醉ヌ事ニテ有ケルヲバ、人ヲ誑カサムトテ此ク云居ル也ケリ、其ノ比ハ此ノ事ヲナム世ニ語テ咲ヒケル、然レバ茸ヲ食テ醉テ死ニ死タル人モ有リ、亦此ク不死ヌ人モ有レバ、定メテ食フ樣ノ有ルニコソハ有ラメトナム語リ傳ヘタルトヤ、

金峯山別當食毒茸不醉語第十八

今昔、金峯山ノ別當ニテ有ケル老僧有ケリ、古ハ金峯山ノ別當ハ、彼ノ山ノ一﨟ヲナム用ケル、近ウ成テ然ハ无キ也ケリ、其レニ年來一﨟ナル老僧別當ニテ有ケルニ、次ノ﨟ナル僧有テ、此ノ別當早ウ死ネカシ、我レ別當ニ成ラムト懃ニ思ケレドモ、強ヨ強コトシテ死ニ氣モ无カリケレバ、此ノ二﨟ノ僧思ヒ侘テ思ヒ得ル樣、此ノ別當ガ年ハ八十ニ餘ヌレドモ、身スコヤカニ、七十ニ无タ強々トシテ有ニ、我レモ既ニ七十ニ成ヌ、若シ我レ別當ニモ不成デ、前ニ死ヌル事モゾ有ル、然レバ此ノ別當ヲ打殺テセムモ聞エ現ハナリヌベケレバ、只毒ヲ食セテ殺シテムト思フ心付ヌ、三寶ノ思食サム事モ恥シケレドモ、然リトテハ何カハセムト思テ、其ノ毒ヲ思ヒ廻スニ、人ノ必ズ死スル事ハ、茸ノ中ニ和。太。利。ト云フ茸コソ、人其レヲ食ヒツレバ醉テ必ズ死スル、此レヲ取テ艶ス調美シテ平茸ゾト云テ、此ノ別當ニ食セテハ必ズ死ナムトス、然テ我レ別當ニ成ラムト謀テ、秋比也ケレバ、自ラ人モ不具ズシテ、山ニ行テ多ク和太利ヲ取リ持來ニケリ、生夕暮方ニ房ニ返テ、人ニモ不見セズシテ、皆鍋ニ切入ツ、煎物ニ艶ス調美シテケリ、然テ夜明テ未ダ朝ニ別當ノ

今集にも、北山に僧正遍昭とたけがりに、素性法師のまかられける事見えたり、(後西院天和三年八月、秋の山といへる事をよませ給ひける、またしこんけふはしみざる懐がれにたけがりくらす秋の山ぶみ、)

〔俳諧炭俵集 秋〕女中の茸狩を見て

茸狩や鼻の先なる歌かるた　其角

〔宜禁本草 五菜〕菌檽　甘寒、(地生名菌、木生名檽、)山東為蕈、生楓樹柷椇木、(紫名香蕈、白名肉蕈、)皆因湿気薫蒸而成、生山僻處者多毒、殺人、夜中光者有毒、煮不熟者有毒、煮訖照人無影者有毒、欲爛無虫者有毒、(春夏無毒、秋冬有毒、為蛇過也、)有湿気腎気人尤忌、食楓蕈笑不休、中蛇蕈毒者以地漿解之、日用本草曰、主五臓風壅経脈動痔疾、令入昏々多睡臥微痛、

〔俳諧歳時記 十月〕たけ(略)○中　凡そ毒なき木に生ずる耳は皆食ふべし、

〔庖厨備用倭名本草 五菜〕木耳(略)○中　元升(升○)曰、山人ノトリ来ルハ、其木シリガタシ、病人ニ尤イムベシ、凡ソ木耳毒ニ犯サレタルニハ、多瓜ノシルヲツキシボリテ、其汁ヲ用テ毒ヲ解ス、

〔大和本草 附録一 菌〕椎耳　ブナノ木ニ生ズル者、形状ハ開ケレドモ有毒、或殺人不可食、今世或生椎耳ヲ食シテ死者アリ、蓋不知其故者、蓋ブナノ木ニ生ズルヲ食スル歟、可擇、木耳ナド木ニヨリテ其性良毒アルガ如シ、

〔本朝食鑑 菜三〕初蕈(略)○中

伊久知(状似初蕈、而内無細鋼、黄白色不同、或赤、生於年遠陰湿處、性有毒、面翻顱腫、人食人最可懼之、又五月梅雨中、濕地生白蕈、或紫蕈、亦不足食之、)

〔和漢三才圖會 百一〕初蕈(略)○中

蛇蕈　似初蕈而裏無襞者名蛇蕈、有毒不可食、凡茸類裏無文者、皆有大毒、

〔重修本草綱目啓蒙 二十〕葛花菜(略)○中

ベニタケニ二品アリ、春生ズル者ハ毒ナシ、(略)○中 秋生ズル者ハ毒アリ、食ヘバ吐血シテ死スルモ

茸狩

り、是を切て肥地に埋みをけば、菌多く生ず、泔水などかけをくべし、久しき楮畠に多きものなり、

〔日本山海名産圖會 二〕香蕈（しいたけ）一名香蕈（かうこ）香菌（かうきん）椎蕈（しいじん）日向の産を上品とす、多くは熊野邊にも出せり、○中略今和州吉野又伊勢山などに作出せるもの、日向には勝れり、其法は扶移（しで）の樹を多伐て、一所にあつめ、少し土に埋め、垣を結まはして風を厭、其まゝ晴雨に暴すこと凡一年計、程よく腐爛したるを候がひて、かの斧をもち撃て目を入置くのみにて、米泔を沃ぐこともなし、されども其始て生ふるはすくなく、大抵三年の後を十分の盛りとし、それより毎年に生ふるのすくなければ、又斧を入れつゝ、年を重ぬなり、春夏秋と出て多はなし、其内春の物を上品として、春香（はるこ）と稱す、夏は傘薄く味も劣れり、又別に雪香（ゆきこ）と云て、絶品の物は、縁も厚く形勢も全備へり、是は春香の内より撰出せるものにて、裏なども潔白なるを稱せり、

〔倭訓栞 前編十四〕たけ○中略たけがりは、菌獵の義、

〔古今和歌集 五秋〕きた山に僧正遍昭とたけがりにまかれりけるによめる、　そせい法し
紅葉は袖にこき入れてもていでなん秋はかぎりと見ん人のため

〔親俊日記〕天文二十一年十月五日、龍安寺へ御成、松茸狩、

〔百一録〕寛文十三年○延寶元年九月廿五日、女院御幸于岩倉茸狩御遊云々、

〔閑窻自語〕詠茸狩於和歌事
寛延二年九月月次和歌御會に、故殿○柳原光綱秋山といふ事をよみ給ひける、
あかず猶茸狩りくらしかへるさにこのみをひろふ秋の山ぶみ、櫻町院上皇于時仰せられけるは、内々の和歌には、この後よみ入れてもくるしかるまじくとぞ、それよりこのかたたけがりのことをおほやけわたくしのうたにも、人々よみ侍るなり、又この事をあんずるに、ふるき事にて、古

タ實ナシ、一根數花、仙臺ヨリ出ル者花多シ、舶來ノ者ニハナシ、

(和漢三才圖會 八十五寓木)雷丸 〇中略

按猪苓(楓木之餘俗所結)雷丸(竹之餘俗所結)、二物共未知、必其然乎、而猪苓自廣東南京福州舶、毎年將來、凡至一二千斤、雷丸自處處賣藥及唆囉吧舶所將來、凡至五六百斤、價亦賤、然則中華外國共有之、不珍物也、明焉、然日本朝鮮共竹不少、而雷丸無出、是亦與琥珀之辨同矣、

(採藥使記 上奥州)縣任曰、奥州南部大音生ノ土中ヨリ猪苓ヲ產ス、方言ニハギホドト云フ、土ノ上ニハ見ル事マレナリ、山中堀ノ所ヲ堀タ取ル、

先生按ズルニ、和邦ニ猪苓ト稱スル物ハ、ホコリ茸ノ類ナリ、其形尖リ長クシテ華產ノ圓ナルニ似ズ、

(農業全書 五山野菜)菌栖

くさびら、きのこの類、是おほし、山林幽谷に立ながら枯、又はたをれたる朽木などに、自ら生ずる物なり、椎かしなどに生ずる物人に害せず、此外の木に生るは、みだりに食ふべからず、又圃に作るは椿の木、岡叢の肥たるを、濕地の風の吹すかさぬ所にうづみをき、常に米泔をそゝぎ、うるほひを絶すべからず、五七日過れば必菌生る物なり、又畠のうねの中に糞を多くふり、楮木を五七寸に切、うちくだき、粟をうゆるごとくにならべ置て、土をおほひ水をそゝぎ、ながくうるほひを絶さゞれば、先初は小き菌生じ、漸々に大きなるが生ずる物なり、もと楮木なれば毒にならず、又椎の木の中まではいまだくちず、皮はありて、大かたくちたるを、日かげの風の吹すかさぬ所に、横にねさせ置、むしろこもをおほひ、上より泔水を頻りにかけ、しめり氣を絶さずし置ば、椎茸多く生ずる物なり、他の朽木にも茸は生る物なれど、木の性によりて毒なり、五木と椎櫧は毒なし、桑槐楡柳楮五木是なり、此外榎木に生ずるは、常に用ゆべし、又楮の古かぶに成て、わか立出ぬあ

猪苓

根ノ下ニ伏シテ茯苓ヲ生ズ、苓ハ靈也、木根ノ貫キタルヲ茯神ト云、又色赤キ者ヲ赤茯苓ト云、各名ヲ分ツト雖ドモ、實ハ相同ジ、房州ノ邊ニテハ大松ヲ伐リ、三五年ヲ經テ其伐口少シ朽タルヲ見テ有無ヲ知ル、近年奥羽ニモ取出ス、風烈キ處或折枯、枝葉ノ大ニ衰ヘタルヲ見テ、其四方二三尺、或ハ一二間ヲ中ヲ鐵杖ニテ頻ニ刺シ試ミ、若シ茯苓アレバ鐵杖ニ附キ、又手ニ覺エアリ掘トリ、其大ナルハ斗ノ如シ、小ナルハ彈丸ノ如シ、能ク洗淨シ、粗皮ヲ去リ水ニ浸シ、一分四方ニ剉ミ、日乾スベシ、之ヲ角製ト云、又七八片トナシ清水ニ浸シ、一宿ヲ經テ土氣ヲ出シ日乾スベシ、之ヲ片キト云、世俗云、風雨ナキ夜煤竹ニテ松下ヲ尋子、茯苓アレバ火滅ス、其處ヲ記シテ明日掘得ルト云ハ誤也、又蕨ノ根ヲ掘テ茯苓ヲ得ルト云、是レ往昔其處ニ松樹有テ、根榾殘テ生ズル者ナラン乎、松岡氏ノ考也、

〔常陸風土記 香島郡〕郡東二三里、高松濱、大海濱邊流著砂貝、積成高丘、松林自生、(中略)自此以南、至輕野里若松濱之間、可卅餘里、此皆松山、產伏。苓伏。神。每年掘之、其若松浦即常陸下總二國之堺、安是湖之所有、沙鐵造劍、大利、然爲香島之神山、不得輙入伐松穿鐵也、

〔本草和名 十三 木〕猪苓(陶景注云、作塊、似猪矢、故以名之、)一名猳猪矢、(出仁諝音加)一名楓樹苓、(出陶景注)一名豕橐、(疏文云、出莊子)和名加。之。波。岐。、一名久。岐。、一名也。末。加。之。波。

〔重修本草綱目啓蒙 二十六 寓木〕猪苓 通名 ナ。ツ。マ。イ。タ。ケ。(南部) ハ。ギ。ホ。ド。(同上) 一名道河撩(本物異名)

朱苓(同萬春病) 豨苓(古文後集) 猪鈴(正字通) 豨零。(同上) 苿苓(證類本草)

舶來多シ、異物ナリ、莖葉ナク惟根ノミ土中ニ生ジ、形猪屎ニ似タリ、故ニ名ク、體輕ク外皮黑色、又赤色ヲ帶ル者アリ、內ハ白色今和產多シ、丹州及諸州ヨリ出ス、皆山中或ハ河堤ノ地ヲ掘テ採リ出スト云、土上ニ出ル者ハ稀ナリ、故ニ何レノ木ヨリシテ生ズル事詳ナラズ、本邦ニ楓樹ナケレバ、楓樹苓ノ說ハ尤モ誤ナリ、根塊濶サ一二寸、長サ二三寸、凹凸多クシテ四瓣ノ花ヲ開ク、瓣尖リ

讃山松下ニ多生ズ、今ハ松山ニアラザレドモ、草山ニモ多ク生ジテ、葛蕨ナドヲ堀時、自然ト堀出セリ、往昔松山ニシテ松氣相殘テ今ニ生ズル者カ、俗ニ蕨茯苓ト云、茯苓ノ裏ニ蕨ノ根孕テアルナリ、

西國ヨリ圓ナガラ大坂ヘ出ヲ、藥家ニ求之テ輪ニ切テ乾ス、

内赤ク外白ト、内外共ニ白ト赤ト、堅實ト輕虚ト、大小ト種々アリ、堅實ニシテ大ナル、内外共ニ潔白ナリト云ヘドモ、輕虚ナルハ不可用、眞ノ赤茯苓甚ダ希ナリ、元ト白ヲ乾シ損ジテ赤クナスナリ、

外白内赤ホ多シ、是ハ大坂ニテ乾ス時、能キ日ニ乾セバ片ツレテ所見惡キ故ニ、不熟ニシテ極ニ入、内ニテ自ラ乾ス、故ニ茯苓ノ内タミ腐リテ赤ク、外ハ一タビ日ニ曝ス、故ニ白シ、藥力甚惡シ、不可不擇、亦是ノミニ非ズ、採藥ノ者或許商外見ヲカザリテ、藥力ヲ損亡スル者甚多シ、唯外見ヲ不擇專ラ性力ヲ擇テ可用也、

〔本草一家言 三〕茯苓　一名茯神、蓋松苓以其狀而名、猶豬苓馬苓之例也、神以其功而名、道家者流自以松根穿過者爲伏神、分而爲二條、後世醫家幷用其說、不審講究之誤耳、若以茯神爲一物、則茯苓豈爲無神功者、無神功而配參苓朮陳以有稱四君六君之稱哉、況觀醫家之所用、撥去其穿過黃根而不用其根節、又別名茯苓、貴節、此何支離破碎乎、殊無意義、予直斷以茯神合于茯苓、而後爲足以明茯苓之神功也、又按、本草有分赤白以配氣血之說、曰、白治氣赤治血、赤白宜通用、不必拘泥、又有蕨根化茯苓之說、世爲下品、而不用、其辨詳于稲若水著炮炙全書中、可併考、

〔採藥使記 五〕茯苓　マツホド

薩州ノ邊多ク出ス、琉球人之ヲ中國ニ入ル、彼人甚ダ之ヲ貴賞セリ、其他處在最多シ、凡風烈キ處松樹ノ下ニ生ズ、然ドモ海邊南風烈キ處極テ多シ、風ソ爲ニ精氣ヲ上ニ發スルコト不能、精氣巳

ルナリ、用ルニ堪ヘズ、凡茯苓ハ皆必松根ニ生ズル者ナレドモ、蕨ノ根ヲ掘ル時出ル事アリ、ワ。ラ。ビ。茯苓ト云、蕨根ヲ包ムモノモアリ、又葛根ヲ掘ル時出ルコトモアリ、皆ソノ地原樹松アリシ處ナルユヘ、地中ニノコリタルモノナレバ劣品ニ非ズ、又樹木ナキ河邊大水ニテ崩レテ、茯苓出ル事アリ、又他木根ヨリ出ル事アリ、皆ソノ地古ヘ松木アリシ處ナレバナリ、

増、廣雅曰、茯神茯苓也、太平御覽引本草經、茯苓一名茯神、足以的證、

〔大和本草 十一 菌木〕茯苓　茯苓茯神皆老松ノ根下ニ生ズ、茯苓ハ松根ヲハナレテツヾカズ、茯神ハ松根ニ附結シテツヾケリ、故茯神ハ其内ニ根ツラヌケリ、松根ノ蔓ノ如ク長キニ、左右ニ連ナリ附テ多ク生ズ、譬ヘバホドノ蔓ノ長キニ、芋ノ子ノ如ナル丸根多ク連リ附クガ如シ、故ニ和訓ニ松ホドヽ云ナルベシ、本草ノ雷斅ガ説ヲ見レバ、其マヽキザミ用ユベカラズ、皮ヲ去キザミ、ウキクダキ細ニシ、水ニ入カキマゼ、ウカブヲフルヒニテコシテ、其フルヒノ内ニトマルハ、茯苓ノ赤筋ナリ、スツベシ、コレヲ其マヽ用レバ目ヲ損ズトイヘリ、今案ニ性ヨキハ赤筋ナシ、其マヽ用ベシ、今西州ヨリ出ルハ性ヨクシテ赤筋ナシ、其マヽキザミ用ベシ、赤筋アルハ最下品ナリ、白キヲナマビノトキニヲサメヲケバ、其色十分ニ白カラザレドモ、白茯苓トスベシ、生ナルヲ即時ニ土氣ヲ洗去、皮トモニ横ニ切テ薄片トシ乾スベシ、遲クワレバ赤色生ズ、白苓ノツンジテ色赤クナリタルヲ、藥肆ニ赤茯苓トス、用ユベカラズ、赤茯苓ハ初ヨリ赤シ、藥肆ニウル白茯苓ハ、皮ヲ去テカキ餅ノ如ニス、潔白ニシテ堅シ、但多クハ茯神ナリ、擇ブベシ、皮ナガラ切ヘギタルヲ用ユベシ、近年ハ茯苓ノアル松ヲ目キヽシテホルニ、必其下ニアリ、本草ニモ此事アリ、時珍ガ説可考、見淮南子、千年之松下有茯苓ト云、典術言、松脂入地千歳爲茯苓、今案ワカ木ニモ茯苓アリ、サレドモ老樹ノ根ニアルニハ性不及、

〔本草辨疑 四 木〕茯苓

カラズ、十年以外ハ甚大ニシテ皆良ナラズ、茯苓ノ有無ヲ試ル器ヲ鐵頭錐ト云コト蘇頌ノ說ニ出、西國邊ニテ火筋ヨリ粗大ナル鐵長二尺餘ナルニ、丁形ノ柄アルモノヲ、長州ニテ茯苓ツグト呼ビ、肥前ニテ茯苓ツキト云フ、又長サ四尺許、濶サ一寸許ニ薄ク製スルモアリト云、コレヲ地ニ刺シ拔テ試ム、ソノ鐵器ヌケ難ク、或ハ拔テ茯苓ノ臭アリ、或ハ芋魁ヲ刺シタル如ク、粘汁アルヲ驗トシテ掘リ取ル、長州ハ茯苓ノ多キ地ナル故、茯苓攤ニ限ラズ、凡ソ海邊沙地ノ活松下ニ多シ、然ドモ大木ニハ無ク、小木ニハ多シ、又唐山ニテハ人力ニテ栽ヘ成スモノアリ、本經逢原ニ、一種栽蒔而成者曰、蒔苓、出浙中、但白不堅、入藥少力ト云、本草從新ニモ浙江溫州處州等處山農ツクリ出ス法ヲ載タリ、凡ソ茯苓數品アリ、皆外ニ皺メル黑皮アリ、切タツノ色內外白キ者アリ、白茯苓ナリ、內外赤キ者アリ、赤茯苓ナリ、外白內赤キ者アリ、原白色ナル者腐テ赤キ者アリ、輕虛ナル者アリ、堅實ナル者アリ、根ノ大小ヲ問ハズ、堅實ナル者ヲ採ベシ、色白シト雖、輕虛ナレバ佳ナラズ、京師ノ藥舖ニハ、江戶、大和、廣島、長門、出雲、筑前、薩摩ヨリ來ル、薩摩ヲ上トス、內色白シ、長門ヲ次トス、大和ハ外白內赤シ、江戶ト云ハ常州笠間ヨリ出スヲ云、赤白皆堅實ニシテ、切リ口ニ光リアリ、堅實ナラザル者ハ下品ナリ、又全ク乾タルモノ、或ハ一二寸ノ大サ、寸餘ノ厚サニ切タル等ハ、必中ニ腐リアリテ良ナラズ、故ニ片苓ヲ用ユベシ、江戶ハ堅實ナラザルモノモアレドモ光リアリ、廣島ハ堅實ナリ、片苓ヲ燈火ニ映シテ、內ニクモリナキヲ擇ブベシ、少シ黑ククモリアルモノハ、コレヲ破レバ必中ニ腐リアリ、又片苓外ニ飴ヲ塗リタルアリ、又全ク淺黑色ナルアリ、破レバ內白シ、是苓ヲ粉ニシテ餅トナスモノニシテ佳ナラズ、防州ノ片苓ニ五分許ノ厚サニ切タルアリ、一夜水ニ浸シ製スルモノナリ、又薄クシテ蒟蒻乾ノ如クシタルアリ、三四日水ニ浸シ製スルモノナリ、小角製ノモノハ六七日モ水ニ浸シ製スト云、茯苓內外俱ニ赤キモノハ、眞ノ赤茯苓ナリ、稀ニアリ、今藥舖ノ片苓ニ、外白ク內赤キモノアリ、コレハ原白キモノ乾損ジテ腐リ赤クナリタ

茯苓

〔重修本草綱目啓蒙 二十六〕馬勃 オ。ニ。フ。ス。ベ。古名 ヤ。ブ。ダ。マ。 ヤ。ブ。タ。マ。ゴ。 イ。シ。ワ。タ。 イ。シ。ノ。ワ。タ。豐州 ム。マ。ノ。ク。ソ。ダ。ケ。 ム。マ。ノ。ホ。コ。リ。ダ。ケ。 ホ。コ。リ。ダ。チ。大和本草 ホ。コ。リ。ダ。ケ。 ヂ。ホ。コ。リ。佐渡 ミ。ヽ。ツ。プ。レ。 ミ。ヽ。ツ。プ。シ。讃州 ツ。ン。ポ。ダ。ケ。 キ。ツ。ネ。ノ。ハ。イ。プ。ク。ロ。若州 メ。ツ。プ。シ。 キ。ツ。ネ。ノ。チ。ヤ。プ。ク。ロ。和州 チ。ト。メ。 キ。ツ。ネ。ノ。ヒ。キ。チ。ヤ。勢州 キ。ツ。ネ。ビ。南部 キ。ツ。ネ。ノ。ハ。イ。ダ。ハ。ラ。能州 カ。ザ。プ。ク。ロ。奥州 ホ。ウ。ホ。ウ。ダ。ケ。備前 カ。ハ。ソ。ノ。ヘ。江州 カ。ゼ。ノ。コ。同上

一名馬屁勃附方 馬疕菌醫學蒙筌 馬包醫府峡方 灰包同上 馬脆本草還 馬天乙茸採取月令村家方ニ、天ナ夫ニ作ル、

五六月路旁ノ陰地、或ハ林中忽然トシテ土上ニ生ズ、根ナク紫褐色、初ハ小圓ニシテ馬矢(ムマノクソ)ノ如シ、不日ニ大塊トナリ、毬ノ如ク西瓜ノ如シ、コレヲ擧レバ甚輕虚ナリ、コレヲ破レバ綿ノ如キ者多ク重レリ、コレヲ彈ズレバ粉多ク出ヅ、一種キ。ツ。ネ。ノ。チ。ヤ。プ。ク。ロ。ト呼者アリ、一名ツチガキ、クチグリ、ヤマガキ阿州、ヂガキ土州、ツチフグリ、ノヲバ大和、メツブシ江州、山ノ土上ニ生ズ、初ハ圓ニシテ硬ク、淡黑褐色、日ヲ經テ皮開キ、七八瓣ニ分レテ地ニ就キ、上ニ小圓袋アリテ柹ノ形ノ如シ、コレヲ破レバ内ニ細粉多シ、又馬勃ノ一種ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十六 寓木〕茯苓 マ。ツ。ホ。ド。和名鈔 マ。ツ。ポ。ヤ。阿州 ホ。ヤ。同上 一名金翁本草綱

雲苓同上 絳晨伏胎酉陽雜俎 萬苓精種杏仙方 更生外臺祕要 雪腴事物異名 茯菟通志略

凡ソ茯苓ハ黑松ニ生ジ、松耳ハ赤松ニ生ズルモノナリ、赤松ニモ茯苓ヲ生ズレドモ少シ、即赤茯苓ナリ、京師ノ地ハ赤松多シ、故ニ松耳多シ、中國九州ニハ黑松多シ、故ニ茯苓多シ、凡ソ大松樹ヲ斫リタルカブヲ茯苓撥ト云コト蘇頌ノ說ニ出、コノ根ノ周邊ノ土中ニ根ヲ離レテ自ラ生ズ、又松根ヲ包テ生ズルモノアリ、茯。神。ト云、和產ニ茯神多シ、中ニ包ミタル根ヲ神木ト云フ、茯苓生ジテ六七年以後、十年ニ至ルマデニ掘リ取ルモノヲ上品トス、ソノ六年以内ハ嫩小ニシテ未ダ堅

下砂中ニ生ズ、故ニハマシヤウロト云、形圓ニシテ馬勃ノ如ニシテ蒂アリ、春末ヨリ夏ニ至リ盛ニ生ズ、白色ニシテ柔軟ナルヲ上トス、米シヤウロト云、又チヽパリトモ云、即モチシヤウロナリ、久ク經テ黒クナラズ、粉トナリテ飛ブ、乾ス者ハ其肌甚密ナリ、一種外黒ク内黄ナル者ヲ麥シヤウロト云フ、一名麥シヤウロ(駿州遠州)、久ヲ經レバ色黒ク堅クナル、黒色ニ變ジタル者ハ食フベカラズ、

〔毛吹草三〕攝津　松露　駿河　三穗松露　筑前　松露

〔雍陽群談十六名物土産〕同所(住吉)松露　同社(住吉)ノ松原ニアリ、土人拾之市店ニ送ル、味他ニ勝タリ、

〔採藥使記(駿州中)〕重康曰、駿州三穗ヨリ松露ヲ多ク出ス、他國ニ生ルヨリハ、味殊ノ外好ク、香モ佳ナリ、故ニ此所ノ名物ナリト云フ、

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕麥蕈　俗ニ松露ト云、砂地ノ松林ヨリ產ス、白須村ノ松原ニ生ズル者佳ナリ、

〔武江産物志(菌)〕麥蕈(シヤウロ)　スナ村

〔奧羽觀蹟聞老志三土産〕松露　城外以東海濱松根必多、此物又所出于宮城郡松森地、尤爲佳、

土栗

〔大和本草九菌〕土栗　形狀檳榔ニ似タリ、大サモ同ジ、又松露ノ如シテ少扁シ、形又栗ニ似タル故、俗ニ土栗ト云、山中赤黄土ノ濕地ニ二月ヨリ四月ニ至テ生ズ、多クハ岸ニ生ズ、夏月ハ生ゼズ、煮テ食ス、味淡ク無毒、皮少コハシ、如木耳、內ノ肉ハ如馬勃、ヤハラカナリ、肉新ク白キハ可食、久シテ黒ニ變ズ不可食、頗松露ニ似タリ、後ニ皮サケ開キテ粉アリ、片片ニワカル、能金瘡ノ血ヲ止ム、內ニ袋ノ如クナル丸キモノ殘ル、於本草及他書未見之、其性未詳、

馬勃

〔和漢三才圖會九十七菌〕馬勃(ウマノフスベ)　馬疕　馬𤿙　灰菰　牛屎菰　俗云保宇佁以之(略○中)
按馬勃、園中竹林荒野有之、大如鳥卵、圓有薄皮、灰白色、肉白、頗似麥蕈、煮食味淡甘、既老則甚大、形如死首而腐、其皮易裂中煤黒色、虛軟如綿而粉出、傅金瘡止血有神効、

〔日本山海名産圖會　二〕石茸

葭菌は蘆荻の中にせうずる玉蕈なり、九月頃にあり、

〔武江產物志　草〕葭菌

竹蓐

〔多識編　三〕竹蓐、和名多。計。多。計、今俗云奴。乃。比。豈、

〔重修本草綱目啓蒙　二十芝栭〕竹蓐　スヾメノタマゴ。スヾメノマヽ。〈筑前〉スヾメノイヽ。〈同上〉ツ。パメノマヽ。〈筑後〉スヾメノモチ。〈豐前〉タケノクサビラ。〈和漢三才圖會〉

皮竹毫明竹等ノ根上二三尺ノ間ニ附キ生ズ、木耳ノ形ノ如ニシテ、小ク多ク重リ生ズ、黃色ナリ、乾ケバ黃白色トナル、又淡竹苦竹等切テ、土上ニアル者、或ハ籬ニ作ル者ニ、雨後銀杏(イチヤウ)葉ノ形ノ如キ白菌ヲ生ズ、甚ダ薄シテ小ク、五六分許アリ、コレヲタケナバト云、竹林中土上ニ生ズル者ハ、二三寸ノ大サナルモアリ、

松露

〔多識編　三〕麥。蕈。、和名今按松露歟、日本三保、住吉、泉涌寺、往往有焉、

〔本朝食鑑　三菜〕松露

集解、松露其皮黑帶微赤、肉白脆、處々在山中松樹陰處之土砂上、是松之津氣凝結而成者、故俗號松露、其味淡甘、生時有微香、多食無害、日乾以傳四方、用時浸過則略似生、然味淡香少、今時供上饌不爲毒者宜矣、諸州多有之、就中前筑生(イマ)松原所生者爲珍、或曰猪苓也、生難內實乾則輕虛、全似猪苓、凡猪苓者他木之餘氣所結楓木爲多、古人未言松氣之生、又曰、茯苓之未經年而幼稚者也、此爲過是、按茯苓者多年樵斫之松根之氣味抑鬱未絕、精英未淪、其精氣盛者發泄于外、結爲茯苓、然則松露亦號小茯苓而可乎、肉有赤白二種、白者味佳、　氣味、甘平無毒、主治未詳、

〔重修本草綱目啓蒙　二十芝栭〕香蕈

麥蕈、シヤウロ、中山ニテモ松露〈豫信越〉ト云フ、一名麥丹蕈、〈南部〉地胥、〈廣東新語〉松乳〈淸俗〉、松菰、〈同上〉海邊松

南部ニクホシタケト云、又黄色白色ナルモノアリ、皆毒物ナリ、

〔武江産物志 菌〕鬼傘

〔多識編 三〕葛花菜、和名久。須。多。計。、異名葛。乳。

〔庖厨備用倭名本草 五之〕葛花菜　倭名抄ニ葛花菜ナシ、多識篇ニクズタケ、考本草、一名葛花乳、名山ニ皆アリ、葛ノ精華也ト云フ、秋霜空ニウカビテ芝蕈ノ如ク地上ニ生ズ、其色赤クシテモロシ、蕈ノ類ナリ、元升曰、此説ヲミレバ、北國ニイヘル霜。コ。シ。ナルベシ、寛文七年十月初旬、余タマタマ北國金澤ニ寄タリシ時、此レモコレヲ食ス、目ナレヌタケナレバ、其名ヲ問ニ答テ云、此タケハ霜コシト云、山野ニ霜ノ後ニ生ズル故ニ、カク名付ラレテ候ト、色味本草ノ説ト稍同ジ、其毒ナシトイヘルモシルシヲ得タリ、風味ナメス、キノ如シ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十之〕葛花菜　クズダケ　一名葛蕈

葛ニヨリテ生ズル菌ナリ、色赤シ、

〔日本山海名産圖會 二〕石蕈

葛花菜、葛の精花にして、紅菌も此種類なり、是に一種寄生するものぞ、霜。菌。又さ。い。た。け。といひ、丹波にて赤。蕈。、南部にて仕。丁。た。け。等の名あり、

〔庖厨備用倭名本草 五之〕雚菌　倭名抄ニ雚菌ナシ、多識篇成云シノジ、考本草、雚ハ蘆葦ノタグヒ、此菌其ノ下ニ生ズ故ニ名ブク、色白クシテ輕虚ニ表裏相似テ衆菌ト同ジカラズ、元升曰、雚菌ハ蘆葦雚ノ下ニ生ズトイヘバ、澤中ニ生ズルナリ、シメジハ山ニ生ズ、松ダケノ生ズルガ如シ、然レバ雚菌ハシメジトイヒガタシ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十之〕雚菌　オ。ギ。タ。ケ。信州　コ。シ。ダ。ケ。越後　一名白雚蘆

季秋好テ蘆荻叢中ニ生ズ、形小クシテ玉蕈ノ如ク、灰白色食フベシ、

タ、筆頭ニ似タリ、

地蕈

〔大和本草 九菌〕地皮　河間府志曰、狀如木耳、比木耳嫩而薄、出老樹下不耕之地云云、篤信按、陰溼ノ地或雨後地ヨリ生ズ、救急本草地踏菜一名地耳、狀如木耳、春夏生雨中、雨後采熟食、見日卽枯沒、是亦地皮ト同物ナルベシ、今按陰溼ヨリ生ズ、恐クハ毒アラン、不可食、

〔重修本草綱目啓蒙 二十芝栭〕地耳　クロコ　クロハチ　ジヤクビ江州　ジヤグイ伊州　ウシノカハダケ同上　一名地皮河間府志　紗羅蒒野菜博録　地踏菜救荒野譜　皮滑蹋滇南本草　地屈聯說叢

丘陵小樹下ニ多ク生ズ、蓋至テ大ニ色黑シテ褐毛アリ、背ハ白色ニシテ蜂窠眼アリ、莖粗クシテ短ク地中ニ隱ル、味苦シ、水ニ浸シ、苦味ヲ去テ食フベシ、

土菌

〔多識編 三菜〕土菌和名豆知多介、異名杜蕈、菌譜地蕈、拾遺

〔重修本草綱目啓蒙 二十芝栭〕土菌　ゴモクダケ　一名土蕈本經逢原　獐頭蕈通雅　馗廚同上　絲生芝正字通　朝菌莊子

梅雨中糞壤上陰處ニ生ズル、キツネノカラカサ類ノ總名ナリ、附錄ニ品類ヲ分ツ、

釋名仙人帽ハキヌガサダケ、一名ヘビキノコ、江戶クチナハノタマゴ、筑後ツユボウ、城州嵯峨コレハ路旁林側或ハ堤陰ニ生ズ、莖高サ四五寸、蓋ノ周邊ヨリ白網ヲ下シ、莖ヲ包ミ根ニ至ル、其根ヲ堀レバ甚ダ粘滑惡ムベシ、

附錄、鬼蓋キツネノカラカサ、クチナハノカサ、阿州糞土上ニ生ジ、形香蕈ノ如ニシテ小ク、蓋薄クシテ黑褐色背ニ切レアリ、莖ハ細クシテ內空シ、日照ストキハ枯レ腐ル、

地芩キツネノカラカサノ黃色ニシテ、莖微白色ナル者ナリ、アサダケト呼ブ、

鬼筆キツネノエカキフデ、形狹長ニシテ筆頭ノ如ク、長サ三五寸、赤色頂ニ小黑蓋アリ、夏月霖雨ノ時、墻側及ビ糞壤ニ生ズ、甚ダ臭氣アリ、ソノ根至テ粘滑ナリ、仙臺ニテキツネノラウチント云、

金茸

(甲斐國志百二十三產物及製造)一鉢茸(ハチタケ)　深山幽谷ニ生ジタ、甚大ナル物ハ一株ニテ五六背ニ過グト云、此茸ハ始メ生ジタ不¸識、歴¸日ニ隨テ増加ス、故ニ能爲¸其大¸ナリ、味平ニシテ毒ナシ、上品トスベシ

(庖廚備用倭名本草五茸之類)鉢堀(ハチホリ)〈○中略〉元升〈○向井〉曰、筑前ニ金茸(コガネタケ)ト云アリ、雨後ニ沙地ニ生ズ、脚高ク黄ホソシ、其ノ色黄ナリ、故ニキンタケト名ブク、根ニ沙ヲフクム、根ヲキリテ用フ、其ノ味輕美也、又鉢堀ノ類トモ云フベシ、

(大和本草九菌)金茸(コガネタケ)　松山松林赤土砂地、多ク春ノ間ニ生ズ、其形松蕈ニ似テ小也、色黄ナリ故名ブク、松氣ヲ帶タリ、脆嫩ニシテ味ヨシ、毒ナシ、佳品トス、中華ノ書ニテ未¸見、京畿ニテモ亦未¸見¸之、

針茸

(大和本草九菌)針タケ　チズミタケヨリ小ニシテハリノ如シ、其先トガリ紫色ナリ、秋地ニ生ズ、

(和漢三才圖會百一芝栭類)膨蕈〈○中略〉　針蕈〈○按刺太分中略〉

針蕈　似¸鼠蕈¸面無¸皺、長二寸許、灰白色叢生、

(重修本草綱目啓蒙二十芝栭類)蘑菌

猴栭　ハリタケ〈同名〉シカダケ、ウシノシタ〈河州〉ゴマタケ〈同上〉　傘ヲ張リ生ズ、白色ニシテ毛刺アリ、

アコフ

(大和本草附録一)薩摩ニアコフト云蕈アリ、松ダケノ未¸開ノ形ノ如シ、臭ナシ、味カロクシテ好シ、シメヂニ似タリ、夏月アリ、長四五寸、土俗ノ曰、性ヨシ毒ナシト云、

鼠茸

(和漢三才圖會百一芝栭類)麞蕈　肉蕈〈○俗云鼠蕈○中略〉

按麞蕈今云鼠茸平、朽木及老樹根上生之、九十月盛出、一根爲¸簇、數十叢生、繖圓形似¸泡頭釘(ビヤウクギ)、長一二寸、莖細小柔軟、繖内外灰白色也、凡呼¸灰白色者¸爲¸鼠色¸、此物淺鼠色、故稱¸鼠蕈¸、

(重修本草綱目啓蒙二十芝栭類)麞蕈　フデタケ　一名麞菇〈事物紺珠〉　猛子〈食物本草〉　増、一名地蕈〈正字通〉

ツタリダケナリ、桑楮等ノ無毒ノ木ヲ土中ニ栽ヘ、米泔水ヲ澆テ生ゼシム、其形玉簪(ギボウシ)花ノ蕾ノ如

短シテ甚ダフトク白色、莖ハ銀杏葉ノ形ノ如クシテ多ク重疊シ、濶サ一尺餘、色微黑ヲ帶ブ、生ニテ煮食ヘバ微臭アリ、鹽藏シテ煮食ヘバ味佳ナリ、

〔今昔物語二十八〕尼共入山食茸舞語第二十八

今昔、京ニ有ケル木伐人共、數北山ニ行タリケルニ、道ヲ踏違テ、何方ヘ可行シトモ不思エザリケレバ、四五人許山ノ中ニ居テ歎ケル程ニ、山奥ノ方ヨリ人數來ケレバ、怪ク何者ノ來ルニカ有ラムト思ケル程ニ、尼君共ノ四五人許、極ク舞ヒ乙デ出來タリケレバ、木伐人共此レヲ見テ、恐ヂ怖レテ、此ノ尼共ノ此ク舞ヒ乙デ來ルハ、定メテヨモ人ニハ非ジ、天狗ニヤ有ラム、亦鬼神ニヤ有ラムトナム思テ見居タルニ、此ノ舞フ尼共、此ノ木伐人共ヲ見付テ、只寄ニ寄來レバ、木伐人共極ク怖シトハ思ヒ乍ラ、尼共ノ寄來タルニ、此ハ何ナル尼君達ノ、此クハ舞ヒ乙デ、深キ山ノ奧ヨリハ出給タルゾト問ヒケレバ、尼共ノ云ク、己等ガ此ク舞ヒ乙デ來テハ、其達定メテ恐レ思ラム、但シ我等ハ其々ニ有ル尼共也、花ヲ摘テ佛ニ奉ラムト思テ、朋ナヒテ入タリツルガ、道ヲ踏ミ違ヘテ、可出キ様モ不思デ有ツル程ニ、茸ノ有ツルヲ見付テ、物ノ欲キマヽニ此レヲ取テ食タラム、醉ヤセムズラムトハ思ヒ乍ラ、餓テ死ナムヨリハ、去來此レ取テ食ムト思テ、其ヲ取テ燒テ食ツルニ、極ク甘カリツレバ、賢キ事也ト思テ食ツルヨリ、只此ク不心ズ被舞ル也、心ニモ糸怪シキ事カナトハ思ヘドモ、糸怪クナムト云ニ、木伐人共此レヲ聞テ奇異ク思フ事无限シ、然テ木口人共モ極ク物ノ欲カリケレバ、尼共食殘シテ、取テ多ク持ケル其ノ茸ヲ、死ナムヨリハ、去來此ノ茸乞テ食ムト思テ、乞テ食ケル後ヨリ亦木伐人共モ不心ズ被舞ケリ、然レバ尼共モ木伐人共ニ互ニ舞ツブケテ咲ケル、然テ暫ク有ケレバ、醉ノ悟タルガ如クシテ、道モ不思デ各返ニケリ、其レヨリ後此ノ茸ヲバ、舞茸ト云フ也ケリ、此レヲ思フニ極テ怪キ事也、近來モ其ノ舞茸有レドモ、此レヲ食フ人、必ズ不舞ズ、此レ極テ不審キ事也トナム、語リ傳ヘタルトヤ、

俗解、鹿角生于原野濕土、如松茸初茸之生、戴木葉而生、上有小纖、而高莖肥大、叢列相依、如椶茸平茸之並生、其色赤黃、外有毛、自鱗、晒乾變黑、如盆圓蓋紗之細裁、江東海西所在有之、近俗晒乾茸狀似肉從蓉、性亦類之、此未詳所以然、凡狀相似而性相似者有之、狀相似而性不似者有之、性相似而狀不似者亦尚有之、即是事物之常理、何爲泥於一樣乎、陳嘉謨曰、上有毛下無紋者、仰卷赤色者並有毒、此茸有毛而赤色、則似有毒者也、但本邦每食之、而不中毒、復未聞治病者、然則曰氣味甘平無毒、而可乎否乎、

〔和漢三才圖會　百一　芝栭〕革茸　革茸加波太介　猪茸井乃之太介

按革茸山叢林落葉生、狀似松茸、而纖外黑有紋皺、晒乾正黑而如染革、裏黃赤有如毛絲者、柄有鱗甲、山城北山、攝津有馬山中多出之、味微苦、用灰汁煠和鹽食、味甘脆美、然易敗、故晒乾售之、最爲上品、

猪茸　似革茸而黑、纖脆弱、其裏有穴如蜂巢、紀之南山有之、猪好食之、故名之、有毒、人不可食、

〔徒然草　下〕鹿茸を鼻にあてゝかぐべからず、ちひさき虫ありて鼻より入て、腦をはむといへり、

〔毛吹草　三〕伯耆　大山黑皮茸

〔近江國輿地志　九十七　上坂〕黑河茸　園城寺山の所產殊に佳なり、

〔藝備國郡志　上　安藝國土產〕黑皮茸　高田郡山中、或佐西郡飯山、秋末出之、生用之、陰乾食之亦可也、

〔本朝食鑑　三　菜〕平茸　中略

一種有麁比茸、狀略似平茸而小、上有小蓋、相依、其色黃白、或灰白、味亦淡甘而佳、最無毒哉、

〔大和本草　九　菌類〕鼠タケ　秋地上ニ生ズ、一莖ニ多クカサナリ生ズ、鼠茸ノ類ニシテ大ナリ、樹上ニハ生ゼズ、ヒラタケニ似タリ無毒、

〔重修本草綱目啓蒙　二十一　芝栭〕雞㙡　一名雞壇　滇略　雞蓯　雲南通志　○中略

雞㙡ハマイタケト訓ズベシ、一名クモタケ、秋初深山中ニアリ、雜木ノ朽株ニ生ズ、大菌ナリ、莖ハ

鹿茸

州ニモ往々有之、一種似テ非ナル物アリ、煮テチバル者ハ有毒、エラブベシ、食之吐瀉ス、其毒ニ中リテ山中若藥ナクンバ、多ク冷水ヲ飲ベシ、能諸毒及菌毒ヲ解ス、本草所載蕈菌ヲシメヂト訓ズル說アリ、色白輕虛ト云ヘルハ似タリ、然ドモ蘆草澤中鹹鹵地自然有此菌ト云ニ不合、然レバ蕈菌ニハ非ズ、シメヂハ山ニ生ズ、

〔大和本草附錄一蕈〕黃卜地 西州ニテハ金蕈ト云、京畿ニテハ黃卜地ト云、京畿ニ稀也、シメヂノ黃ナル也、松蕈ノ未開ニ似テ小也、味好スコシ松氣アリ、松樹ノ下ニ生ズ、

〔和漢三才圖會百一芝栭〕鹵地蕈〇中略

鹵地蕈 形相似而纖外潤滑、有斷光、有毒不可食、

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕香蕈〇中略

玉蕈、シラシメジ、シメジノ白色ナル者ナリ、蓋ノ鼠色ナルヲチズミシメジト云、美ニシテ上品ナリ、黃蕈キシメジ、一名キダケ、播州キンタケ、筑前シモダケ、雲州蓋小ニシテ莖フトシ、尤遲ク霜降テ生ズ、先莖ヲ出シ、フトクナリテ後蓋ヲ生ズ、常菌ニ異ナリ、蓋ハ黃色深ク莖ハ淺シ、紫蕈、ムラサキシメジ、一名紫富蕈國譜備前山形ノ宮山ニ生ズ、シメジノ色深紫ナル者ナリ、ハツタケニ充ツルハ穩ナラズ、

〔類聚雜要抄一〕一字治平等院御幸御膳元永元年九月廿四日、大殿御下御日記定、〇中略

御汁物二度(中略)鯰汁志女治

〔國花萬葉記八遠江〕遠州國內出る名物數品 卜治横すか山より出る

〔武江產物志菌蕈〕玉蕈ぶなしめじ四ッ谷 チヅミシメジ 紫蕈いろあるめじ 黃蕈きあめじ〇中略 千本シメジ

〔本朝食鑑三菌耳〕鹿茸訓之志多計。

釋名、革茸、俗稱加波多計、似皮革之染成也、生時赤黑色、如鹿之至春末、背毛脚毛赤黑者、故名鹿茸、此非鹿角之茸、茸者菌也、

〔本朝食鑑菜三〕紅茸

紅茸略似松茸、而肉外純紅色、裏内腸黄、有毒、不似松茸和窒、之類、其味亦不佳、故亦俗賤之、生于濕地、而有毒耳、

〔大和本草九菌〕紅蕈 色如臙脂、常熟縣志ニ出、又別ニ赤色ナル菌アリ、是本草芝栖類ノ葛花菜ナルカ、霧後山野ニ生ズ、

〔重修本草綱目啓蒙二十菌〕葛花菜

ベニタケアリ、蓋ノ色赤ク背ト莖トハ白色ナリ、漢名紅蕈常熟縣志朱蕈入門臙脂蕈同上紅菌同上ベニタケニ二品アリ、春生ズル者ハ毒ナシ、ウグイスダケト云、一名チシヤダケ、ジタウダケ、和州ヒガレダケ、同上サヽナバ備前サヽダケ、アカダケ、丹州秋生ズル者ハ毒アリ、食ヘバ吐血シテ死スルモノ多シト云、一種九月ニ生ジ、背淡黄色ナルモノアリ、シモコシト云、北國ニ多シ味脆美ニシテ毒ナシ、

〔武江産物志菌〕臙脂蕈

〔異制庭訓往來〕酒肴等餘無沙汰無極候、何様尾籠之至可候乎、定々所尋出者、略○中松茸平茸志女治、

〔本朝食鑑菜三〕標茅蕈讀如志女計、

釋名標茅者茅之多生地名、野之下州黒髪山下有標茅原、此同其義也、此蕈生于草茅卑濕之地故名、或係占地之蕈、此標茅、訓標字耳、

集解、山中茅野卑濕地多生、狀似松茸而微小、有覆蓋者、有不覆蓋者、莖恒小而圓肥、蓋上黄灰色或紫黒、蓋内有細刻、面白、莖亦白、性柔弱易敗、味亦淡美、生乾及淹俱佳、洛之山中多有、就中賀茂之神山片岡及北山之生最好、其狀肥美味亦美、海西諸山亦所在有之、江東山中亦僅有、野之下州多生、送于江都市上以販之、

氣味、甘平無毒、主治未詳、

〔大和本草九菌〕シメヂ 松蕈ニ似テ小也、莖短シ、八九月山野ニ生ズ、味美好ナリ、畿內諸山ニ多シ、諸

〔重修本草綱目啓蒙 二十芝栭〕香蕈○中略ハツタケハ雲南通志ノ青頭菌與蕈譜ノ青紫ナリ、一名アキダケ、備中、備前、アキツル、勢州アキブリ、江州アヤブリ、同上マツナバ、防州マツミ、北國松樹下草中ニ生ズ、黃赤色ニシテ微紫ヲ帶ブ、手ニ觸ルレバ藍色ニ變ズ、尾州ノ產ハ蓋ニ青斑アリ、方言アヲハチ、

〔續江戶砂子 一〕江府名產 并近在近國
小金初茸　下總國葛飾郡小金の邊所々より出ル、江戶より六里程、
相州藤澤戶塚邊より出る初茸は、下總よりはやし、然ども相州は微砂をふくみ、菌にさはりてよろしからず、下總は砂なし、風味尤佳也、

〔武江產物志 菌蕈〕青頭菌はつたけ 飯ヘシ

〔守貞漫稿 六生業〕初茸賣
是亦山樵及ビ菜蔬賈共ニ賣之、京坂ハツタケ無之、江戶ノミ賣之、京坂ノ松茸盛ニシテ、江戶初茸ハ小行也、

〔續猿蓑〕木實 附菌
はつ茸や鹽にも漬ず一盛　沾圃

黃蕈

〔書言字考節用集 六生植〕黃蕈 本草、叢ニ生山中、黃色者、　黃𦫿蕈 同上

〔和漢三才圖會 百一芝栭〕羊肚菜　俗云爲久知○中略
按羊肚菜今云兎口蕈乎、八月中濕地多生、其織表褐色縮曲捲、裏黃白色無細刻、滑面有孔如蜂巢、有毒不可食、

紅蕈

〔和爾雅 七菜蔬〕紅菰 ベニタケ 出于泉州府志

〔物類稱呼 三生植〕菌 茸たけ○きのこ 中略　紅茸を九州にてじ。こ。う。ば。うと云

初茸

紫蕈小家數、雞䙡驚蹤迹、况此群叢蕈、一隊各披敷、晉家有制度、百法從擢落、嫩蕈帶土香、紫玉不須擘、鐵鐺活火熾、玉筯泣瓊液、滷豉助其滋、橘柚發精魄、爽氣流齒間、顧盼西山碧、此訣秘不傳、昔受採芝客、

〔享保集成絲綸錄 三十六〕貞享三寅年五月

覺

一松だけ　八月節ゟ〇中略

右之品々致商賣候儀、先年月切ニ御定被成候得共、自今以後は此書付之通に、節ニ入候日より可致商賣之、〇中略若右之趣相背者於有之は、急度曲事可申付者也、

五月

〔書言字考節用集 六 生植〕初茸(ハツタケ)

〔物類稱呼 三 生植〕菌 たけ〇中略きのこ 初茸を美濃三河尾張にてあをはちと云、北國にて松みゝと云、奥の南部及近江邊にてあいすりと云、因幡にてあいたけと云、中國九州ともに松なばといふ、

〔本朝食鑑 三 菜〕初茸(四ニ波豆多計)

集解、生於松樹陰處、凡庭園而松多處、用初茸石実、細剉漬米泔汁而蒔之、則經年必生、狀似松茸而小、自初生長大、蓋内有細剉、内外及蓋赤黃色、亦微黑、木葉而生、最難見之、四五月雨後生、比秋時則不多、八九月雨後生者最多、味甘而香、其甘勝似松茸、其香不及松茸、但恐生于蛇虺蟄處者、其狀相似、而蓋内無細剉、其色亦不鮮、誤食之則忽死、俗號蛇茸、凡土菌之類、蓋下無剉者必有毒、可慎焉、

氣味、甘平無毒、多食動氣、〇中略主治未詳、

〔和漢三才圖會 百一 芝栭〕初茸(ハツタケ)

按初茸生淺山松樹陰處、狀似松茸而小、自初生長傘、内有細剉、内外赤黃色、亦微黑、木葉生、立秋初出之、柔而味甘、其出也先於諸茸、故稱初茸、性易敗、經日者傘内微生綠青色、

水戸松茸　常州　江戸より三十里、江府は松茸のよろしからぬ所也、甲州筋相州筋より出る、皆遠路にして、日を經れて肉乾けり、

〔守貞漫稿　六生業〕松茸賣

山樵直ニ賣之、或ハ八百屋商人モ賣之、江戸ハ松茸甲州ヨリ出ルノミ、稀ナル故ニ此商人無之

〔本朝文鑑　七頌〕松茸頌　　川豊美

世には花實のふたつありて、麥米はその實を稱し、梅櫻はその花を愛す、されど實をほめ花をほむるは、和漢に詩歌のふたつなれど、ふたつをひとつの風雅ならんには、人のつくりえぬもむべなるべし、爰に松茸といふ物は、草にあらねば木にもあらず、その花もなくその實もなきに、小萩がもとの露にはごくまれ、歯朶の葉陰に雨をいとひて、深山のはてにおひ出れど、その名は和漢の草紙にのせられ、中宮のおまへにも出ぬるよし、すくせいかなる種をまきてや、秋風ふかばとちぎり來しけむ、しかは浮世の嵯峨を出つゝ、柳さくらの錦にも賣るなれ、その香は風のほのめきて、兵部卿宮の膚にそひ、その色は雪の白ければ、久米仙人の脛を思ふ、是より人のあこがれて、物いはざるに車をとゞめ、笑はざるに鬚をかたむくよし、さは天の生質なるべし、さるから下臈の口にかなはず、すましの汁のすめる世に出て、みそ汁のにごれる世には居らず、予曰く、はじかみも、蕪松茸をもてなして、魯の哀公の饗應にも、しらげの飯に餚はありとも、是を捨すしてとはいふなるべし、ある日は鳳闕の千疊敷にかしこまり、ある時は魚町の八百屋に寢ころべば、今は西島の遊君ともあそび、東國の岐童にもまじはりて、吸物の花柚に色めける、いはゞ實もあり花もありて、其名は風雅のひとつなるべし、

〔山陽詩鈔　五〕烹蕈

竹笋與、松蕈、菜中誰爭席、分霸春與秋、各自標風格、其味足孤行、不用借外物、如何隨俗庖、腥臊動相尾、

時獻上九月鹽松茸
牧野備中守貞喜〇常陸笠間 時獻上八九月中松茸 松平又七郎信賢〇丹波龜山 時獻上三月濱松茸
内藤豐次郎頼以〇信濃高遠 時獻上八九月ノ内 信州松茸 石川日向守總博〇伊勢龜山 時獻上三月
鹽松茸
〔毛吹草三〕山城 龍安寺山松茸 大和 松茸 伊賀 松茸 丹波 松茸 紀伊 日高松茸
〔雍州府志六土產〕松蕈 所々山多採之、然洛西龍安寺山之所產特爲優、風味馨香非他產之所及也、凡松蕈洛陽四邊山之產、馨香有餘、是中土地氣之所使然者乎、他邦之產不然、於洛下是謂田舍松蕈、凡洛人山城之外稱田舍、又或謂伊奈加、五月霖雨節、因温蒸偶生松蕈、是謂早松、秋初黄撒蕈爲始、
〔國花萬葉記一上山城〕攝泉之品 松蕈 嵯峨 龍安寺山 醍醐 山科 北山
〔採藥使記下城州〕重康曰、京師ニ登ル時稻荷山ヨリ採來レルトテ、人ノ松茸ヲ調ジテ饗ナレケルガ、關東ニテ食ヒクルヨリ、格別氣味勝レタリ、兼テ當國ハ松茸ノ名物ト聞シカドモ、カホド迄ヨロシカルベキトハ思ハザリキ、殊ニ北山ノ蕈ハ、年毎ニ貢ニモ供スルヨシ申侍レバ、一入ノ雅興ナリシ、
〔攝陽群談十六名物土產〕止々呂美松蕈 同郡〇豐島 止々呂美村ノ山内ニアリ、甚香美ノ味他ニ勝タリ、市店ニ立テ求之、皆此名ヲ借ト云ヘドモ、香氣各別也、
〔甲斐國志百二十三產物及製造〕一松蕈 逸見筋、武河筋、山梨郡、都留郡ノ諸山暖クシテ雌松多キ處ニ生ズ、南方ノ山ニハ生ゼズ、甲府殿ノ頃ハ津金、小尾、柳澤諸村ノ山ニ運上金ヲ課シ、今モ白須村ノ松原ヨリハ之ヲ納ム、金峯、鹽山、惠林寺山ノ產ハ佳ナリ、
〔續江戸砂子一〕江府名產并近在出產

〔看聞日記〕應永廿三年九月廿日、月見岡松茸新御所椎野以下取之、予〇後崇光依違例不參、

〔親俊日記〕天文七年五月十九日辛卯、細與殿より五松茸一折御進上、

〔老人雜話上〕山城の内山里と云所を、梅松と云坊主に預けらる、新に松を植、程も無に松蕈生じたりとて獻上す、太閤〇豐臣秀吉笑て曰、吾威光誠にさもあらんと云、其より數度獻す、實は他所より求て獻す、太閤左右の者に云、もはや松蕈獻ずることやめさせよ、生ひ過るとのたまふとぞ、

〔昨日は今日の物語上〕一物ごとに心をつくる人の申されしは、當代御はつとなきとて、竹のこをねびきにして、たくさんにもてあつかふこと、をしき事じや、三年めには、見事の竹になるにと申されければ、みな〳〵聞て、これはおほせのごとくをしき事ぢやといはれける、又そばなる人の申されしは、總じて松だけなども、むざとたぶるはいらざる事ぢや、二三十年おいたらば、大木にならふものをと申された、

一吉田殿の山に松だけがはへ候へども、松だけの有よしよそへ聞え候へば、むつかしきとて、ふかくおんみつなさるゝ、さりながら長をかゆうさいへは、すこしつかはさるゝとて、これはわれらが山におえ候へども、世上へはおんみついたし候へども、其方へハまんじ候、よそへ御かくし候へとて、つかはされければ、ゆうさいきやうかをあそばされ、

松だけのおゆるをかくすよし田殿わたくし物と人やいふらん

〔駿府政事録〕慶長十六年九月廿五日、松茸一籠、紅柿二籠、自京板倉伊賀守勝重獻之、

〔日次紀事九月〕仁和寺門主、大覺寺門主、三寶院門主所領之山中松蕈多生、故被獻禁裏院中、凡松蕈洛外處々有之、其中龍安寺山、嵯峨山所產爲美、凡有松蕈山之人採來贈親戚朋友、

〔寛政四年武鑑〕保科越前守正率〇上總飯野　時獻上四月　漬松茸　本多隱岐守康完〇近江膳所　時獻上十一月　鹽松茸　酒井雅樂頭忠道〇播磨姫路　時獻上十一月　鹽松茸　戸田采女正氏教〇美濃大垣

蛙蝕ノ產ハ蓋稀シ、此地ニ四品アリ、上品ヲ鳳釋蕈ト云、莖極テ粗大、地中ニ蟠屈シテ横斜ニ突出ス、色潔白香氣多ク、味殊ニ美ナリ、次ヲウブリダケト云、松皮ノ鱗甲ノ如ク、蓋上處處突起シテ周邊白ク決裂アリ、皮ニ斑アリテ鵝羽ニ似タリ、次ヲトラフト云、白褐赤ノ横枚相雜ル、次ハ尋常ノ品ナリ、西賀茂ノ產ハ蛙蝕ト同クシテ柔ナリ、松尾ノ產ハ色赤ヲ帶テ厚ク堅シ、

〔拾遺和歌集七物名〕まつたけ　　すけみ

あし曳の山した水にぬれにけりその火まつたけ衣あぶらん

いとへどもつらきかたみを見る時はまつたけからぬねこそなかるれ

〔類聚雜要抄一〕一宇治平等院御幸御膳元永元年九月廿四日、大殿御下向日記、○中略

御汁物二度寄竹松茸

〔散木奇歌集九雜〕田上にて物いひけるついでに、松だけの有けるを、をそくやくなどいひけるを聞てよめる、

ほどもなく取いだせとや思ふべき松と竹とは久しき物を

〔勘仲記〕建治二年九月六日丁酉、參大宮殿、依召也、興福寺三綱參仕、其中次也、但予○兼仲遲參不及、中次、予師顧等拜領松茸、懷中退出、

〔殿中申次記〕八月

一松茸　一折　例年進上之　　大光明寺○中略

何も式日は不定

〔後深心院關白記〕貞治六年九月十日甲申、松茸進内裏、納小長櫃二合、自故殿御時、年々進之、又二合進武家、自去年進之、　七年○應安元年九月六日甲辰、進松茸於内裏、如例年、又進武家、此兩三年進之也、

七日乙巳、松茸二合小品櫃進武衞守護之許、以媒介之仁傳進之也、相副書狀也、

爲相似焉、合蕈者生于台山、寒極雪收、春氣欲動、土鬆芽活、此菌候也、於斯時而生者春蕈也、本邦之松茸者、秋中雨露浸釀山膏木腹、發爲菌花者也、或五月淫霖之時生者亦有、而未見於春時而生者、然則非合蕈者明矣、松蕈生松陰、采無時、此亦必不可爲初茸乎、松茸亦生松陰、加旃初茸松茸俱非四時之有、而秋夏生者不可言采無時、然則松蕈何可限于初茸哉、靡菰蕈者埋桑楮諸木於土中、澆以米泔待菰生采之、或謂其中空虛、今本邦之平茸者、山林樹竹根邊自生者也、此亦難決耳、

〔大和本草 九〕松蕈 略〇中 今按松蕈九十月ニ生ズ、味最ヨシ、木茸ノ中第一也トイヘル事マコトニ然リ、山州ノ產尤ヨシ、甚多シ、牝松ニアラザレバ生ゼズト云、西國ニハ牡松多キ故、松蕈少ク茯苓多シ、京畿ニハ牝松多クシテ、松蕈多ク茯苓少シト云、松蕈採テ久シキハ毒アリ、新ヲエラビ食フベシ、味苦ハ毒アリ不可食、五六月ニ生ズルヲサマツタケト云、味劣ル、松ダケノ臺ノ根、土ヲ帶タルヲキリテ乾シ貯ヘヲクベシ、產後兒枕痛(アトバラ)ニ一匁煎服ス甚驗アリ、又ヨク久痢ヲ止ム、或曰松蕈ヲ食シテ醉フ人アリ、先豆腐ヲ食シテ後松蕈ヲ食ヘバヨハズ、瀉痢久不止、痘瘡不出、產後血氣虛脫スルモノ、乾松蕈ヲ煮テ食シ、煎ジテノム甚有効、滋補ノ性アリ、

〔和漢三才圖會 百一 芝栭〕松蕈(まつたけ)

有松茸與米同藏於櫃、翌日煮食之、舉家皆死者、此乃相感之毒歟、然乎、後亦聞如之者不可不愼、然松茸漬米泔水特爲佳、米與泔不遠、蓋以吃沙糖即飲酒甚苦、而先酒後糖則不苦、凡一切合食禁、及製藥可驗之、

〔重修本草綱目啓蒙 二十 芝栭〕香蕈 略〇中

松蕈マツダケ、一名松耳、(東醫寶鑑)松花菌、(本經逢原)鶴蕈、(食譜 草)八九月ニ生ズ、略〇中 京師ハ丹波ヨリ出ス者、最早ケレドモ味劣レリ、下品ナリ、蓋ノ色黑ヲ帶ブ、深草稻荷山ノ產ハ甚大ニシテ味優レリ、蓋厚ク白色ニシテ堅シ、上品ナリ、粟田ノ產モ亦同ジ、山科及上賀茂ノ產ハ、蓋厚ク堅クシテ黑色ヲ帶ブ、

〔海人藻芥〕内裏仙洞ニハ、一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被召事也、一向不存知者、當坐ニ迷惑スベキ者哉、中略松茸ハマツ、中略如此異名ヲ被付、近比ハ將軍家ニモ、女房達皆異名ヲ申スト云々、

〔大上臈御名之事〕女房ことば
一まつだけ　まつ

〔本朝食鑑三菜〕松蕈訓末豆多計、

釋名蕈者菌也、菌生于地上者也、耳者俗稱也、蕈者謂也、謂菌蕈生于木上者也、蕈俗謂久佐比良、

集解、松蕈者本邦菌蕈之第一者也、亦松之陰處、園田樹多之山最多有之、八九月出地時戴木葉而生、故不易識、五月生者俗號早松蕈、其味不似秋生者、爾蕈狀類紫芝而柔滑、香美甘脆勝於諸蕈、大者傘尺、小者一二寸、其小者頭小圓如彈丸而不引、蓋莖亦從而不肥大、其大者頭如張蓋、蓋外紫内白、柔脆易碎、有細深皺、莖圓肥、皮紫肉白、徒脆易折、俗爲謂如人著笠者、能形容之焉、洛之諸山最多、肥大香美、就中北山之產爲勝、五畿及丹陰、江州、勢州、紀州、播州之產亦次之、海西諸州亦多有、江東諸州亦雖多有、而香美不及洛畿之產、根下有細或爲寅、俗稱松露蕈、採之栽培、則不生之地亦生之、八九月采、鮮者淹藏、陰乾以貨于四方、其法用白鹽炒過、合於松蕈生處之沙土以漬之、覆以松葉、此俗謂松葉鹽、或生鹽漬及寒水漬、或豆醬滓和白鹽而漬亦佳矣、

氣味、甘溫無毒、或謂有毒、多食中毒、經日朽敗者必毒、主治久痢虛痢、痘瘡不出者、或產後脫血者亦佳、必大（平野）按、凡中二菌蕈之毒一者、以二苦茗白[illegible]句ニ[illegible]本一[illegible]欲之有驗、

附方、久痢虛脫乾松蕈燒存性、研二細末一、毎二三錢、與二白湯一服、隨症服一錢、以米飲或薄粥汁服、則立驗、

〔本朝食鑑三華和異同〕松蕈菌耳

或曰、本邦松蕈者、李時珍所謂合蕈也、本邦初蕈者松蕈也、本邦平蕈者膠拔蕈也、必大按、此三蕈必不

松蕈

叡山中吉祥院が、江戸か水戸(江)下りたりし時分の、賄料請取品直段書付幷入用をゑるしたるものを見せたるが、其直段の下直なる事おどろく計也、(中略)

一岩たけ　三升　代貳拾文ヅヽ、(壹升ニ付)

〔寛政四年武鑑〕松平隱岐守定國(伊豫松山)　時獻上(十二月)岩茸一箱　小笠原總次郎長禎(播磨安志)

時獻上(暑中)岩茸　阿部豐後守正識(武藏忍)　時獻上(暑中)岩茸　戸田因幡守忠寛(下野宇都宮)

時獻上(二月)岩茸

內藤銀次郎頼以(信濃高遠)　時獻上(寒中)岩茸

〔毛吹草　三〕大和　岩茸　紀伊　高野岩茸

〔甲斐國志　百二十三産物及製造〕一石茸(イハタケ)　金峯、白峯、逸見筋ノ山中峭岩絶壁ニ産生ス、梯ヲ繫ケ繩ニ縋リテ採之、不相及處ニテハ、以藤蔓造籠以身容之、繩ヲ岩頭ニ繫ケ、縋シテ下壁面採之、自古本州産物トス、官ニシテ賣リキ、松平甲斐守ノ時ハ四月ノ獻上ナリ、

〔武江産物志　草〕石耳(いはたけ)　秩父

〔藝備國郡志　上安藝土産〕石耳　産于山縣郡山中所々也、倭俗好食菌蕈、其生於岩石之間名曰石耳、尤賞之、生用之、或采贈饋遠、

〔饅頭屋本節用集　草木〕松茸(マツダケ)

〔和爾雅　七菜蔬〕松蕈(マツダケ)　陳仁玉菌譜曰、松蕈生松陰、凡物松出無不可愛者、治溲濁不禁、食之有效、　松耳(マツダケ)　東醫寶鑑云、性平味甘無毒、味甚香美、有松氣、生山中古松樹下、假松氣而生、木耳中第一也、

〔新猿樂記〕七御許者食飲愛酒女也、所好何物、(中略)面穢松茸、

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難申盡候、(中略)酢菜者(中略)松茸、

〔尺素往來〕茶子者、(中略)搗栗、干松茸、

〔和爾雅七菜蔬〕石耳一名石蕈

〔本朝食鑑三菜〕石茸訓伊波多計

集解、即石耳也、柔靭如紙、外滑面青白色、內澀而黑色、其黑色處附石有微香、而味淡微甘、常生于峯頭巖石之上、山人采之、先造竹籃方二三尺者、著數十丈之麻繩藤蔓、而後登峻巖峯、凑其到巖石處、以繩繫籃、縋于巖邊、采其、充于籃中、自繰其籃索繩下千仞之間、若傍觀之則眼眩魂銷不可熟視、然采之山人俗稱不屑亦覺無失命者、可謂奇哉、嗚呼危哉、甲信駿常奥及紀勢濃西諸山最多、曬乾以貨于四方、其生者亦味佳也、

氣味、甘平無毒、冷日主治、明目益精救飢、

〔和漢三才圖會百一芝栮〕石耳　靈芝　伊波太介略○中

按石耳狀如木耳、無蒂柄、外滑面灰白色、裏澀面黑色、其黑處附石生、日乾者帶縐於外、宛似八幡黑革、用時以灰宜洗外滑、和醬食甘美、此物在峯頭巖石上難甚得、山人俗稱不屑而取之、處處高山皆有、

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栮〕石耳　イハタケ　一名石芝通雅

山中巖石上ニ生ズ、形圓ニシテ薄ク皮ノ如シ、大サ二三寸、背ノ正中ニ短蔕アリテ石ニ附ク、層層相連リ生ジ石花ノ如シ、採リ乾シテ貨ル、水ニ浸シ煮食バ味淡脆、面ハ黑色背ハ青白色ナリ、唐土ノ石耳、清商齎來スル者アリ、和產ニ異ナラズ、

〔岐蘇雜志二〕木曾の山中など、深山幽谷にて岩茸を取るには、籠といふものを造りて、綱をつけて、夫はそれに入りて、その裏樹々の枝より下げて、つりおろし、引き上げなどして、谷間の岩茸を取りぬるとぞ、下は幾丈とも限り知れざるところなるよし、見し人ものがたれり、もしあやまちて綱のきれて落ちたらんには命なかるべし、

〔三省錄四〕水藩の檜山氏が、慶安五辰年四月十五日より同廿二日まで、略○中水府の御宮別當なる東

桑耳

〔武江産物志 蕈〕天花蕈ヒラタケ

〔本草和名 十三木〕桑菌、一名木䨜、楊玄操音徒敢反 五木耳名檽、蘇敬注曰、桃桑檽槐楮柳、此爲五木耳、一名木檽、一名桑上寄生木精也、出大清經 和名久波乃多介、

〔大和本草 九菌〕桑耳　桑ノ木ニ生ズル菌ナリ、本草二十八卷木耳ノ下ニ載ス、一名桑上寄生ト云、桑ノヤドリ木ヲモ桑寄生トス、同名異物ナリ、桑耳ニ二種アリ、ヤハラナル菌アリ、食フベシ、一種ハ堅シ、是ハ俗ニ猿ノ腰掛ト云、堅クシテ不可食、其功性ハ柔ナルモ硬キモ一也、本草時珍ガ說可考、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

美作國卌一種略○中 桑茸二斤、

猢猻眼

〔倭訓栞 中編佐九〕さるのこしかけ　瘣花をいふ、酉陽雜爼に胡孫眼と見えたり、胡孫はさる也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十菌芝〕木耳略○中

桑耳　此條二品アリ、軟ニシテ食フベキモノハ桑耳ナリ、硬クシテ食フベカラザルモノハ桑黃ナリ、釋名ノ桑檽、桑蛾、桑鷄ノ三名ハ桑耳ノ名ナリ、一名五鼎芝、譜群芳 桑菌、本草類編 俗名クハタケ、桑樹ニ生ズル菌ナリ、茶色ニシテ多月多シ、釋名ノ桑臣、桑上寄生ノ二名ハ桑黃ノ名ナリ、一名木䨜、類編 本草 桑黃菰、綱目 俗名メシマコブ、桑樹ニ生ズル猢猻眼サルノコシカケナリ、故ニ硬菰ト云、肥前平戶ノ海中雌島ニアリ、故ニメシマコブト云、桑樹諸木及ビ土石ニ生ズ、木ニ生ジ形圓ニシテ內黃色、光アルモノヲ平戶ニテ實コブト云、或ハ實コンブト云、桑上ノモノヲ上トス、土石上ニ生ジ、形扁クシテ內黃色ナルヲ、平戶ニテ花コブト云、或ハ花コンブト云、微赤黑ヲ帶ルモノヲ平戶ニテ、古コンブト云、今藥舖ニ貨ルモノハ丹後ノ產多シ、略○中

石耳

〔下學集 下草木〕石耳イハタケ

定に見えたりとて、あまた同樣にかたれば、心もえでとしもくれぬ、さて次のとしの九十月にもなりぬるに、さき〳〵いでくるほどなれば、山に入て茸をもとむるに、すべて茸おほかたみえず、いかなる事にかと、里國の者思ひてすぐるほどに、故仲胤僧都とて、說法ならびなき人いましけり、この事をきゝて、こはいかに、不淨說法する法師、平茸にむまるといふことのある物をとの給ひてけり、されはいかにも〳〵平茸は、くはざらんにことかくまじき物とぞ、

〔古今著聞集十八飲食〕觀知僧都、九條の太政大臣〇藤原信長のもとへ、ひら茸をおくるとて、そえ侍りける、

たいらかに平のきやうにすむ人はひらたけをこそくふべかりけれ、かへし相闕、

平茸はよきむしやにこそにたりけれおそろしながらさすがみまほし

〔源平盛衰記三十三〕光隆卿向木曾許附木曾院參頑事

猫間中納言光隆卿宣フベキ事有テ、木曾ガ許ヘ座シタ、先雜色レタ角ト云入ラレタリ、〇中略木曾モ其時意得テ笑、人見參シケリ、猶物語シ給ヒタ、木曾根井ヲ招テ、ヤ給ヘナンテマレ、饗申セト云、中納言、淺猿ト思ヒタ、只今不可有宜クレ共、イカヾ食時ニ座シタルニ、物メサデハ有ベキ、食ベキ折ニ不食バ、願ナキ者ト成也、トク急ゲ急ゲト云、何モ生シキ物ヲバ無塩ト云ワト心得テ、無塩ノ平茸モアリツナ、疾給ハヌナキニ早メヨ〳〵ト云ケレバ、中納言ハ斯由ナキ所ヘ來テ、恥ガマシヤ、今更歸ランモ流石也ト思テ、宣フベキ事モハカ〳〵シク不被仰、興醒テ堅唾ヲ呑テ御座ケルニ、何鹿田舍合子ノ大ニ尻高ク、底深ニ生塗ナルガ、所々剝タルニ、毛立シタル飯ノ黑タ籾交ナリケルヲ堆盛上テ、御菜三種ニ平茸ノ汁一ツ折敷ニ居テ、根井持來テ、中納言ノ前ニサシ居タリ、大方トカク云計ナシ、木曾ガ前ニモ同ク備タリ、木曾ハ箸取食ケレ共、中納言ハ青興醒テメサズ、木曾是ヲ見テ、如何ニ猫殿ハ不饗ゾ、合子ヲ嫌給歟、アレハ義仲ガ隨分ノ精進合子、アダニモ人ニタバズ、無塩ノ平茸ハ京都ニハキト無物也、猫殿只搔給ヘ〳〵ト勸メタリ、

ルニ、極ク輕クテ上レバ此ノ旅籠コソ輕ケレ、守ノ殿ノ乘リ給ヘラバ、重クコソ可有ケレバト云ヘバ、亦或ル者ハ木ノ枝ナドヲ取リスガリ給ヒタレバ、輕キニコソ有メレナド云テ、引ク程ニ、旅籠ヲ引上タルヲ見レバ、平茸ノ限リ一旅籠入タリ、然レバ心モ不得デ、互ニ顏共ヲ護テ、此ハ何ニト云フ程ニ、亦聞ケバ底ニ音有テ、然テ亦下セト叫ブナリ、此レヲ聞テ、然ハ亦下セト云テ、旅籠ヲ下シツ、亦引ケト云フ音有レバ、音ニ隨テ引クニ、此ノ度ハ極ク重シ、數ノ人懸リテ絡上タルヲ見レバ、守旅籠ニ乘テ絡上タリ、守片手ニハ繩ヲ捕ヘ給ヘリ、今片手ニハ平茸ヲ三總許持テ上給ヘリ、引上ツレバ、懸橋ノ上ニ居エテ、郞等共喜合テ、抑モ此ハ何ゾノ平茸ニカ候ゾト問ヘバ、守答フル樣、落入ツル時ニ、馬ハ疾ク底ニ落入ツルニ、我レハ送レテツメキ落行ツル程ニ、木ノ枝ノ滋ク指合タル上ニ、不意ニ落懸リツレバ、其ノ木ノ枝ヲ捕ヘテ下ツルニ、下ニ大キナル木ノ枝ノ障ツレバ、其レヲ踏ヘテ大キナル胯ノ枝ニ取付テ、其レヲ抱カヘテ留リタリツルニ、其ノ木ニ平茸ノ多ク生タリツレバ、難見棄クテ、先ヅ手ノ及ビツル限リ取テ、旅籠ニ入レテ上ツル也、未ダ殘リヤ有ツラム、云ハム方无ク多カリツル物カナ、極キ損ヲ取ツル物カナ、極キ損ヲ取ツル心地コソスレト云ヘバ、郞等共現ニ御損ニ候ナド云テ、其ノ時ニゾ集テ散ド咲ヒニケリ、〇下略

〔宇治拾遺物語一〕これも今はむかし、丹波國篠村といふところに、年比平茸やるかたもなくおほかりけり、里村のものこれをとりて、人にもこゝろざし、またわれもくひなどして、としごろすぐるほどに、その里にとりてむねとあるものゝゆめに、かしらおつかみなる法師どもの、二三十人ばかりいできて、申べきことゝいひければ、いかなるひとぞととふに、この法師ばらはこのとし比も宮づかへよくして候つるが、このさとの緣つきて、いまはよそへまかり候なんづることの、かつはあはれに、もしまたことのよしを申さではとおもひて、このよし申なりといふと見て、うちおどろきて、こはなにごとぞと、妻や子やなどにかたるほどに、またこの里の人の夢にも、この

聞其名、冨深山有大者、或數十圍、在甲州山中、云木曾山中多有之、昔木曾義仲入西京、献屢携之事、官客、驚我邦之珍味、○中略　氣味、甘平無毒、主治未詳、

〔和漢三才圖會百一之〕平蕈　區宜俗　比良太介

按平蕈生山林濕地、苦櫧樹多出之、九十月盛、其形似松蕈而薄、傘薄區故名、大三四寸、亦有至大者、灰白色裏白有細刻、性柔脆、其柄多不正中、略偏生、大小叢生可愛、多有蟲中空虛者、味淡甘不美、有小毒、間有被毒者、經日者最不可食、

〔重修本草綱目啓蒙二十一之〕天花蕈　ヒラタケ

多ハ深山中朽樹ニ生ズ、紀州ノ高野山殊ニ多シ、乾シテ遠ニ寄ス、初生小塊多ク聚リテ、鮫皮ノ如ク色白シ、漸ク長ズレバ微ク傘狀アリ、盡長ズレバ蓋ナク、銀杏葉ノ形ノ如ク、雞冠ノ花ニ類ス、多ク重疊シテ白色微黑、背ハ切レアリテ裏ト共ニ白色、生乾共ニ煮食フニ堪タリ、然レドモ其木ヲ選ブベシ、ブナノ木ニ生ズル者ハ毒アリ、人家ニテモ加條朴樹ノ類ヲ用テ作ルベシ、

〔今昔物語二十八〕信濃守藤原陳忠落入御坂語第卅八

今昔、信濃ノ守藤原ノ陳忠ト云フ人有ケリ、任國ニ下テ國ヲ治テ、任畢ニケレバ上ケルニ、御坂ヲ越ル間ニ、多ノ馬共ニ荷ヲ懸ケ、人ノ乘タル馬員不知ズ次キテ行ケル程ニ、多ノ人ノ乘タル中ニ、守ノ乘タリケル馬シモ懸橋ノ鉉ノ木ヲ、後足ヲ以テ踏折テ、守逆樣ニ馬ニ乘乍ラ落入ヌ、○中略　谷ノ底ニ叫ブ音髴ニ聞ユ、守ノ殿ハ御マシケリナド云テ、待叫ビ爲ルニ、守叫テ物云フ音遙ニ遠ク聞ユレバ、其ノ物ハ宣フナルハ、穴鎌何事ヲ宣フゾ聞ケト云ヘバ、旅籠ニ繩ヲ長ク付テ下セト宣フナド、然レバ守ハ生テ物ニ留リテ御スル也ケリト知テ、旅籠ニ多ノ人ノ差繩共ヲ取リ集メテ結テ結繼デ、ソレ〳〵ト下シツ、繩ノ尻モ无ク下シタル程ニ、繩留リテ不引ネバ、今ハ下著ニタルナメリト思テ有ルニ、底ニ今ハ引上ゲヨト云フ音聞ユレバ、其ハ引ケト有ナルハト云テ絡上

柳耳

ナシ、擦帶菰ニ類シテ至テ大ナリ、一科ニ多ク叢生ス、高サ六七寸ヨリ尺ニ近シ、枝ヲ分テ叢生シ、末ノ處少シ扁シテ傘ノ狀ヲ成ス、大ナル科ハ二科ニテ一荷ヲナスモノアリト云、色白シテ黃ミヲ帶ブ、味甘美ナリ、香氣ナシ、越中加賀ナドニテ甚賞玩スルモノナリ、

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕木耳略○中

柳耳　ヤナギタケ　一名柳樹蕈(簡便方)　柳蘑菰(集驗方)

〔大和本草九菌〕柳耳　柳榎栗等皆生菌、無毒可食、好事ノ家ニ老樹ヲ切テ陰地ニフキ、シバ〳〵米泔ヲソヽギ、上ニ薦ヲオホフ、日ヲヘテ蕈ヲ生ズ、

〔食物和歌本草六〕柳耳(ヤナギタケ)

柳耳氣をおぎなひて胃をおさむ痰をはくをも能治しにける

楡耳

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕木耳

槐耳　ヱンジユダケ　一名槐檽(千金方)　槐耳赤雞(同上)

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕木耳

楡耳　ニレダケ　一名楡肉(授時通考)　楡蕈(同上)

コレハ楡木ニ生ズル菌ナリ、唐山ノ人尤賞ス、長崎ニ來ル、清商モ持來ル、此品蝦夷ニ多シ、

平茸

〔饅頭屋本節用集草木〕平茸(ヒラタケ)

〔和爾雅七菜蔬〕蘑菰(ヒラタケ)蕈(一名肉蕈)

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難盡、申壹候、略○中酢菜者略○中平茸、

〔本朝食鑑三菌耳〕平茸(訓比良多計)

集解、處處山林多有、然生處無定、八九月雨濕後生于竹根及老樹根、狀如開人之十指、或如相依類而併、或如斷又續、易摧易折、其色外黃、或有淡紫皮、或黃白、其肉潔白柔脆、味淡甘最佳、可爲上饌、中華未

椋蕈

栗茸

一種有鼠茸者、江東稱糸米須須岐、大抵與榎茸同、狀似榎茸而稍大、色灰白、味亦相似、此亦可愛、生于朽木老樹根上濕陰處也、柳樹栗樹俱生茸、似榎茸無毒、可食之、

〔大和本草 九菌〕ナメスヽキ　笠ハ方一寸許アリ、莖ハ小ニシテ長シ、柔滑ニシテ味美シ無毒、一本ヨリ叢多ク生ズ、褐色也、ウタハキレタリ、西土ニテ水タヽキト云、寒月生ズ、

〔和漢三才圖會 百一 芝栭〕榎蕈

滑蕈　是亦多生於榎樹、大者傘寸許、小者三四分、大小叢生、帶淺褐色、內有刻甚滑、其莖煤黑色、能洗淨滑氣、去莖煮食、爲上品、[illegible]

〔殿中申次記〕九月九日

一滑蕈　一折　例年進上之　　無量壽院

〔狗猧集 五 秋〕茸

ちゝとくへあなめづらしの鼠茸　　貞德

猪足の膳にてくふや鼠茸　　重賴

〔和漢三才圖會 百一 芝栭〕榎蕈

椋蕈　生椋木上、形狀無異於榎蕈、〇下略

〔和漢三才圖會 百一 芝栭〕羊肚菜

栗茸　生山原、高不過寸、徑四五分、圓帶正白色、如剝栗肉、故名、其柄太、莖非出於栗之茸、人不食之、

〔百品考 下〕粗蕈　和名クリタケ

李時珍食物本草、粗蕈、粗骨但、產自北虜、馬市貿入中原、大如錢、色白、皺頂有柄、味極肥鮮、和雞魚諸肉烹煮、無不相宜、蓋微帶膻氣、而他種終不能及、

本國ニ產ス、多クハ栗ノ木ニ生ズ、故ニクリタケト云、松蕈ヨリ早ク八月頃出ヅ、京畿ニハ絕テ

〔享保集成絲綸錄 三十六〕貞享三寅年五月

覺

一生椎茸　正月節ゟ四月迄〇中略

右之品々致商買候儀、先年月切に御定被成候得共、自今以後は此書付之通に、節に入候日より可致商買之、〇中略若右之趣相背者於有之は、急度曲事可申付者也、

杉蕈

〔重修本草綱目啓蒙 二十一芝栭〕杉菌　スギタケ　增、一名杉蕈、通雅

深山杉樹ノ朽樹ニ多ク叢生スル小菌ナリ、形鬼蓋ノ如ク裏ニ切レアリ、黃色或ハ白色ナリ、

檜蕈

〔物類稱呼 三生植〕菌茸たけ〇きのこ中略　檜茸を、相州塔の澤にて定源坊と云、

榎蕈

〔本朝食鑑 三菜〕榎茸訓衣乃木多計

集解、此茸生于榎樹及老根枯株、當世嗜好之家伐于老榎大樹、作五六尺之大、置于土窖中、覆之用溫稻草腐、而灑於米泔冷汁、日一兩次、至二三日而蒸、經旬多生茸、采食之則味鮮美、商家亦造之者若斯、故其多不劣初茸、而大小同根相結而生矣、狀似占地茸而柔弱、繖上淡紫黑而滑、莖亦淡紫黑而細、繖下及肉潔白味亦淡甘而佳、〇中略氣味、甘平無毒、主治未詳、必大（平野）按、榎茸味淡、每食之、未聞中毒者、則平而無毒者相當矣、

〔和漢三才圖會 百一芝栭〕榎蕈　榎茸俗、　惠乃木太介〇中略

按榎蕈乃蕈菰之類也、叢生榎根上、繖一二寸、灰黑色、裏白有細刻、有微香、味美也、榎見于木部香有白黑二種、所之木帶黑色者名黑榎、不蕈生、

〔武江產物志 菌〕エノキタケ

鼠蕈

〔物類稱呼 三生植〕菌茸たけ〇きのこ中略　鼠茸を、江東にてなめすゝきと云、筑紫にて水たゝきといふ、

〔本朝食鑑 三菜〕榎茸〇中略

氣味、甘微溫無毒、(多食令人之)主治未詳、

〔大和本草 九〕椎蕈　山中ノ樹ニ生ズ、松蕈椎蕈ノ二物蕈類ノ上品トスベシ、○中略俗說椎蕈ト酒ト同食スベカラズ、酒ト相忌ム、レバ〳〵其證アリト云、

〔和漢三才圖會 百一 芝栭〕椎蕈　之井太介

按椎蕈生於椎木、大者二寸許、大小數生、外褐色裏白有刻、未張傘者曰粒(ツブ)椎茸、晒乾者黑色裏黃、味甘香氣最美、經久亦不敗、僧家最貴之、今多造成之、春秋二時如圖造茸法、椎茸能祛葱蒜之臭氣、日向之產爲上、

〔重修本草綱目啓蒙 二十 芝栭〕香蕈。　シヒタケ　一名香菰(泉州府志)　香蕈菰(八閩通志)　香菌(行閩集)　處蕈(同上)

雪蕈(遼東新志、冬取者良)、　雪菌(同上)　增、一名乾香蕈(農政全書、乾ルノ名)、　乾栭蕈(農政全書、同上)、

栭樹ニ生ズル蕈ナリ、紀州ノ熊野名產ナリ、他國ニモ各名產アリ、熊野ニテ取ル者栭樹(シヒ)ニ拘ハラズ、樫(カシ)櫧(シヒ)ハビロガシ、ソクノキガシ、シデノ木等ニ生ズルヲ採ル、又右件ノ木ヲ伐リ置キ、ホドヨク朽タルヲ、秋雨ノ後濕ニテ腐ツ時ハ多ク生ズ、採ル事ニナシ遠火ニテ炙リ乾ス、是作リシヒタケナリ、漢名家蕈(廣東新語)餘木ニモ生ズレドモ毒アル木ニ生ズルハ採ラズ、

〔朝倉亭御成記〕永祿十一年五月十七日、於越前谷、朝倉左衞門茂景亭へ御成事、

一於會所參ル進物幷獻立の次第、○中略　御菓子十一種、○中略まめ竹、

〔三省錄 四〕水藩ノ檜山氏が慶安五辰年四月十五日ゟ同廿二日まで、○註略水府の御宮別當なる東叡山中吉祥院が、江戸ゟ水戸に下りたりし時分の、賄料請取品直段書付幷入用をまるしたるものを見せたるが、其直段の下直なる事おどろく計也、○中略

一椎茸　貳升　壹升ニ付代八拾文ヅヽ、

〔毛吹草 三〕伊勢　椎茸　伊豆　椎茸　薩摩　椎茸　對馬　椎茸

椎茸

〔採藥使記上奥州〕昭任曰、蝦夷松前ノ内ヨリ一種ノ木耳ヲ出ス、其形チ桑木耳ノ如クニシテ甚ダ大ナリ、ソノ色白ク油ギリツヤヨシ、味ヒ甚ダ苦ク少シ甘シ、土人諸病ヲ治スト云フ、專ラ腹痛疝氣痛ニ用ヒテ妙ナリト云フ、此モノ山中谷中ニ大樹アリテ、其樹年ヲ經テ倒レ朽チ、其枯株ヨリ此木耳ヲ生ズ、其大樹ノ名ヲ拳バリト云フ、

先生按ズルニ、此木耳ヲエ。プ。リ。コ。ト云フ、又アカストウトモ云フ、多ク韃靼ノ地ニ生ズ、其所ヲカラフト、名ヅク、又北高麗トモ云、蝦夷ガ島ノ北界ナリ、此物多クハ沙濱ノ中ニ生ルト云フ、其形チ鎖陽ノ類ノ如シ、又茯苓ニ似テ濃ナラズ、蝦夷人ノ傳ニ曰フ、積聚疝氣一切ノ腹痛ニ用ユ、然レドモ虚弱ノ人ニハ斟酌スベシト云フ、或曰漢名朱雀芝ナルベシ、

〔和漢三才圖會九十二本山草〕惠布里古阿加須止宇、天禮面佐古、

按惠布里古生韃靼地、其名加良不止、一名北高麗蝦夷島之北界也、生沙濱中、如鎖陽之類、爲大塊、外灰白內白色、似茯苓而不濃、如枯菌理、其味苦、蝦夷松前人傳曰、積聚疝氣一切腹痛等不用諸藥、止用此皆奮也、然虚弱人宜斟酌、

〔饅頭屋本節用集草木〕椎茸シイタケ

〔書言字考節用集六生植〕椎茸シイタケ

〔本朝食鑑三菜茸〕椎茸訓志伊多計

集解、椎茸生于椎子樹上及老木根上、或諸枯木之生氣不盡者、得雨露濕蒸而生、狀似標茅茸シメヂタケ而頭圓莖短而肥、三四月生而甘脆、香美勝于標茅茸、能祛葱蒜之臭氣也、葱蒜中入三箇、則臭氣不薰、或食蒜後食三茸、則口臭消、而旁人不覺其氣、此古來所未言之者也、今曝乾以貨于四方、海西山北諸州多有、紀勢參遠駿甲等山中亦多有、其曝乾者經歲不敗、每收蓄以爲菜肴、若不時欲擬生者、漬沙糖水中一日取出、而煮則如生鮮、然其色香不美、味亦不佳、但甜味不盡而代鰹汁、故僧家最賞之、

〔宜禁本草乾集五〕木耳　甘寒、有五耳、槐耳療痔、楮楡桑柳軟者堪食、餘木生者發痼疾、發風、不可多食、服丹石人發熱、和葱豉羹食卽止、利腸胃熱壅氣、

〔本朝食鑑三菜〕木蕈月耳　訓木久良介

集解、卽木耳也、其色黑而食之、則嚼上有聲、蕈月亦然、故名、狀一面黑一面靑白或黃灰、有點紋而厚、素蕈生于諸木、今所用者接骨木上所生也、生乾俱無氣味、但枯朽之木無滋饒之味、而人嘗愛其淡味、此類稍多、然用者木蕈月耳、

氣味、淡平無毒、主治未詳、（李時珍曰、[illegible]、又曰、赤色及仰生者不可食、或謂生斑蝥汁、解之其毒、）

〔大和本草九菜〕木耳　別錄曰、六月多雨ノ時采テ卽暴乾ス、時珍云、木耳各木皆生ズ、其良毒亦必隨木性、頴權曰、古槐桑樹上者良、柘曰、煮漿粥安諸木上、以草覆之卽生蕈、雷羹トシテ食ス治痔、木耳雜木ニ生ズルハ木ニヨリテ性アシヽ、市ニウルハ[illegible]其木、

〔重修本草綱目啓蒙二十菌芝〕木耳　キノミヽ（和名鈔）　キクラゲ　一名木耳菰（[illegible]）　菌耳（名物法言）　檽耳（[illegible]）　蕓（農書）　蕈（正字通）　木樅　木檽（共ニ同上）　黑木耳（外臺秘要）

木ニ生ズルクナビラ及キクラゲノ總名ナリ、キクラゲハ山中諸朽樹上ニ生ズ、形人耳ノ如クシテ薄ク多ク重リ生ズ、淡紅褐色、採テ乾セバ黑色ニ變ズ、羹食ハ味淡脆ナリ、然レドモ木ニ因テ良毒アリ、宜シク其木ヲ撰ブベシ、桑槐楮楡柳ヲ五木耳トスルコト、綱目ノ說ニ見ヘタリ、楮、接骨木、榕等ノ木耳最佳ナリ、楮ニ生ズル者ヲカウゾダケト云、九州ニテカウゾナバト云、榕ニ生ズルヲアカウナバト云フ、廣東新語ニ、木耳以桑槐楡柳榕樹上生者良、柘木次之ト云、

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕一木茸　諸木ノ朽タルモノヨリ生ズ、桑樫等ヲ佳トス、有毒樹ニ生ジタルハ食ベカラズ、[illegible]茸ノ類皆乾シテ貨物トス、雜諸品乾シタルハ雜菌ト云下品ナリ、

〔武江產物志菌〕木耳

木耳

〔本草一家言二〕芝　即靈芝也、世以芝與靈芝爲二物者非矣、今人稱芝者門出蕈、又名幸蕈是也、其色五等、黄赤者以爲瑞祥、賤白者以爲凶兆、詳見于本草綱目本條、雖然以余(松岡玄達)○觀之、其說殊粗而已、詳考瑞應圖所說靈芝者非指一物而言也、蓋芝爲瑞中之總稱、故奇中異木莓苔玉石非常珍怪者、通呼靈芝、如水芝(芙蓉一名水芝)戊巳芝、土芝(黄精一名戊巳芝)之屬是也、譬猶丹藥之丹本辰砂之稱、而大小還二丹、道家煅煉服食以求長生、久視依此說而不拘其色、總爲藥物美號也、余曾有聞、山城醍醐山房有僧、年百有餘顏貌不衰、行步輕快、因問頤生之術、曰我不知食、相傳此山東領會天氣清和朝暾初升時、日光所射之地、歘然而幾望之如紫霜、會遇此異者採而觀之、非霜非苔、一片入口、滿口清冷、頓覺爽快、猶勝防風、七日香、我昔少時嘗一食之、再來絕無疾病、非有他服食保養之術也、如彼紫霜非常有之、經十年或二十年而一遇此異云、再余按此亦靈芝也、又有聞、近世洛陽東山禪院有老杉樹、一朝樹梢滴滴降露、其地常濕潤、僧異之以器安于其樹下、承其滴露、試采嘗之、味甘如餳、後不絕一年而杉樹枯槁、是古人所謂樹將枯精液降、而爲甘露、此名雀餳、此亦瑞物也、雖非芝類、爲延齡之靈藥、其功相似、而附錄于玆、山谷詩集十三、有甘露降大守居桃葉上詩、此不知其爲何物、然由此桃樹上亦生之、不獨杉木也、(主錄)

〔武江產物志草〕靈芝(さいわいだけ)

〔新撰字鏡木〕栭(人之反、平、茸也)

〔倭名類聚抄十七野菜〕菌(附)○中略　○四聲字苑云、蕈(音軟、和名木○乃○美○々○)、木耳即木菌也、狀似人耳而黑色、

〔箋注倭名類聚抄九野菜〕今○俗○呼○岐○久○良○下、以其味似海月在木上、得是名也、○中略　本草云、五木耳名檽陶注云、老桑樹生燥耳、有黄者赤白者、又多雨時亦生軟濕者、人採以作葅、按所謂多雨時所生軟濕者、即今俗岐久良計是也、

〔下學集草木下〕木耳(キクラゲ)

〔和爾雅七菜蔬〕木耳(キクラゲ)檽、木樅、木蕈、木菌、木蛾、樹雞並同、

靄雲沛然之勢、因名曰瑞雲芝、〇下略

〔鳩巢文集前十九〕靈芝説

靈芝者艸中之瑞也、何以謂之瑞、蓋太平之世政治、人和則天地相感、土氣亦和、土氣和則芝艸生、古曰、王者仁慈則芝艸生是也、食之則壽、是以神仙多服之、以擬不死之藥、以其非常、故稱靈芝、又稱神芝、若其修德不足則靈在山之仙不能見焉、凡中華本朝偶逢芝艸生、則無不賀之、寛文四年甲辰之冬、江城郭外三田妙巖寺內靈芝生焉、人皆以爲奇珍、寺僧台宗之徒也、贈呈之於東叡山、而後奉獻幕府、有命使畫工狩野探幽圖之、嘗聞靈芝之生、或深山之中、或老松之下、而其堅久至千萬歲也、在尋常之地則稀見之、然今城外近處見此靈艸、抑天地之感乎、土氣之和乎、果是太平之瑞乎、庶幾仁慈遍施、德政彌行、而國家長久、與靈芝之壽相共無窮也、乙巳之夏

〔北海遺草七〕靈芝頌并引

江戶之高田、有宍戶侯別業焉、其地爽塏可以近覽而遠覽也、一日鳳君某偶伴友、忽睹靈芝三本生於園、其大者徑尺、衆以爲嘉瑞、叙賀、於是遂使余同之、余嘗於公也、辱一日之遇、誼不可辭、然不獨爲公賀、而亦爲鳳君賀也、而遂及國人者、乃作頌曰、

瑤草之神、惟德作配、聖王攸擇、畸人所采、爰宅清敞、瑞氣云會、世子遊焉、赦厥兩睨、既挺靈柯、用張紫蓋、謝氏階庭、爰足匹對、邦家之休、徹內被外、煌煌三秀、奕奕勿替、我作徒頌、祝靈遠大、

〔橘隱文集一〕靈芝記

余男〇聞、國家能和、則靈芝必爲之生、蓋爲瑞也、延享乙丑年〇二五月晦日、淺草邸第生三木於庭樹之下、透管磔頭、含秀飛香、瑤篤玉葉、煒煒焉、煌煌焉、庶乎與琪花瑤草相並、可謂奇矣、夫道自邇難以窺測、其致感之果有由耶否耶、余竊未之知、嗣桂谷子杉村佐內方掌邸事、必有以自點矣、適徵余記、遂書此以贈云、

菌耶、

〔日本書紀天武二十九〕八年、是年紀伊國伊刀郡貢芝草、其狀似菌、莖長一尺、其蓋二圍、

〔續日本紀聖武九〕神龜三年九月庚寅、內裏生玉來、勅令朝野道俗等作玉來詩賦、

〔續日本紀考證四〕伊藤(長胤)氏曰、事文類聚載宋宣和間、王黼明賜第、梁生芝草、車駕臨幸已久、梅雨潤之壁地、京師無名子有為十七字詩曰、相公新賜第、梁上生芝草、為甚脫玉來、膠少則知玉來靈芝一名、必出古典、前人所通知、故政史亦稱之耳、谷川氏曰、按萊音來、和名之波、芝亦訓之波、見萬葉集、蓋古通用則玉來玉芝也、伊藤氏引事文類聚宋宣和間十七字詩、以證玉來為靈芝一名、予(村尾元融)檢類聚、玉作下、異本或作玉亦誤寫爾、伴氏曰、玉來疑玉英、見治部式、來英因字體近似而譌也、諸說非是、

〔續日本後紀四仁明〕承和二年二月丙申、天皇御紫宸殿、右大臣從二位淸原眞人夏野獻芝草一莖有兩枝者、(一枝長一尺六寸、一枝長一尺、)其色紫緋相雜、每莖之末有菌、而盡于大臣山莊雙岳之下、是日賜酒侍臣、以賀祥芝、賜祿有差、

〔文德實錄三〕仁壽元年八月癸亥、駿河國獻瑞草、紫莖朱葉、或謂之芝、

〔鵞峯文集記九〕瑞雲芝記

草中之瑞、以芝為最、故其生也、倭漢俱無不慶賀之、尙舍奉御源君忠房領丹州福地山城、時城下巨木根生靈芝、葉葉重累、或橫或斜、殆三十莖、其高可一尺、其圍可五尺、實是珍奇之物也、既而君增封移尼之前州島原城、乃知靈芝之生、豫呈吉兆乎、所謂家將興必有禎祥者也、今玆之秋、君宿衞東武之間、盛於金盤、置于牀席、以供賓客之觀、人人皆愛玩焉、余亦每應佳招、為之屬目、君請其名之、於是細看之、則可形容者多端、或有如山者、或有如谷者、或有如洞者、或有如橋者、或有似團扇者、或有似松蓋者、或有似張鳥翼者、或有似支如意者、取彼則舍此、孰取孰舍、不可以一偏名之、於是隔席望而總視之、則髣髴

〔重修本草綱目啓蒙二十芝栭〕芝　玉栞日本紀　一名科名草譜芳　菌蕈同上　不死草事物異名　三秀同上

瑞草事物紺珠　金堂同上　玉堂同上　瑞草同上　靈芝草字彙　靈芝本草原始

五色芝ハ仙藥ニシテ尋常ノ品ニ非ズ、其說ク所尤怪シク信ズベカラズ、紫芝ハカ。ド。イ。テ。ダ。ケ。丹波

カ。ド。デ。ダ。ケ。勢州レ。イ。シ。京サ。イ。ワ。ヒ。ダ。ケ。吉野ダ。ケ。、マ。ン。ネ。ン。ダ。ケ。勢州ヤ。マ。ノ。カ。ミ。ノ。シ。ヤ。ク。シ。紀州

ネ。コ。ジ。ヤ。ク。シ。江戸マ。ゴ。ジ。ヤ。ク。シ。奥州一名靈芝、綱目紫靈芝、本草原始紫達、典籍紫脫、同上幽處ニコレアリ、或ハ樹下ニ生ジ、或ハ石間ニ生ズ、一定ナラズ、形檜耳ニ似テ莖紫赤色ニシテ光リアリ、蓋ハ面黑褐色、背ハキレナクシテ淺褐微白、大小長短一ナラズ、蓋多ク並ビ重リテ雲ノ如ナルモアリ、莖ニ枝アルモアリ、質堅硬ニシテ食フベカラズ、其初生スル時ハ、蓋ナク尖リテ筆頭ノ如シ、漸ク長ジテ蓋ノ形ヲナス、赤褐色黄邊、久シクシテ黑褐色ニ變ズ、採貯テ蛀ミ易シ、蒸過スル時ハ、久ヲ經テ蛀セズ、

〔日本山海名產圖會二〕芝俗に靈芝といふ、一名科名草、不死草、三秀、瑞草、又カトデタケ、サキクサ、○中略

形一本離れて生るあり、又叢り生するもあり、又一莖に重り生じて、マヒタケのごとき物あり、又莖枝を生じて傘あるもあり、又かさなく莖のみ生じて、長三尺ばかりに枝を生じ、鹿の角のごときもあり、是鹿角芝といふ、奇品にして、先年伊勢の山中に出す、凡て芝の品類六百種計、尙奇品の物、本草綱目に委し、丹波にては首途を祝ひて是を餝る、伊勢にて萬年たけといひて、正月の幸盤に餝り、江戸にてはネコジヤクシといひ、仙臺にてはマゴジヤクシといひて、疱瘡を掻くなり、

〔延喜式二十一治部〕祥瑞　芝草形似珊瑚、枝葉連結、或丹、或紫、或黑、或金色、或隨四時變色、一云一年三華、食之令眉壽、○中略　右下瑞

〔日本書紀二十四皇極〕三年三月、倭國言、頃者菟田郡人押坂直闕名將一童子、欣遊雪上、登菟田山、便見紫菌挺雪而生、高六寸餘、滿四町許、乃使童子採取、還示隣家、總言不知、且疑毒物、於是押坂直與童子煮而食之、大有氣味、明日往見、都不在焉、押坂直與童子、因喫菌羹、無病而壽、或人云、蓋俗不知芝草、而妄言

靈芝は虫はみやすし、虫をさくるには飯の湯氣によく蒸しよく乾かせば、損せずといへり、又諸書はやく採ば、むしはますといへり、

釋名

カドイテダケ丹波中略○マゴシヤクシ奥州、以上紫芝、本草啓蒙、　茵爾雅、說文ニ茵字ナシ、恐ハ菌ノ誤歟、　芝同上　芝栭日本書紀、本草綱目引瑞應圖、　科名草格致鏡原引清異錄　菌蠢群芳譜　不死草事物異名　三秀同上　赬莖事物紺珠　金堂　玉堂　龜精共同上　靈芝草字彙　靈芝本草原始　青芝神農本經　龍芝弘景別錄、青芝一名、　赤芝本經　丹芝同上、赤芝一名、　黃芝本經　金芝同上、黃芝一名、　白芝本經　玉芝同上　素芝共ニ白芝一名　黑芝本經　玄芝同上、黑芝一名、　紫芝本經　木芝同上　紫達雅翼　紫脫同上　紫靈芝本草原始　靈芝秘傳花鏡、共ニ紫芝一名、　石芝　木芝抱朴子、恐ハ紫芝ト同物、　肉芝　菌芝　木威喜芝　粟節芝　木渠芝　黃蘗芝　建木芝　參成芝　樊桃芝　千歲芝　獨搖芝　牛角芝　龍仙芝　紫珠芝　白符芝恐ハ白芝ト同物　朱草芝恐ハ赤芝ト同物　九曲赤芝一名、本草和名引纂名苑、　五德芝　玉脂芝　七孔九光芝一名螢火芝　石蜜芝　桂芝　石腦芝　鳳凰芝引採芝圖　燕胎芝　黑雲芝同上　五色龍芝　五方芝　天芝　地芝　人芝　山芝　土芝　金芝　地節金芝一名、本草和名引太清經、恐ハ靈芝ト同物、　火芝　雷芝　甘露芝　青雲芝　雲氣芝　白虎芝　車馬芝　太一芝以上本草綱目引葛洪抱朴子

〔本朝食鑑三菜耳〕松蕈

芝俗稱靈芝、有青赤黃白黑紫、狀似枯物、味才苦不堪食、僧家貴之、但本邦之芝與中華之芝殊歟、近世自華來者曾相似矣、本邦處處山中儘采之爲弄器、大抵似松蕈之乾枯朽腐者、而紫赤黑色有之、其餘未見之也

〔和漢三才圖會百一芝栭〕靈芝○中略

按靈芝有數品、而石芝肉芝之類者、甚希有奇品也、大抵多有之者、形似松茸而大堅實、其裏白滑有柄或無柄、處處大木根株間有之、俗呼曰猿腰掛、所謂木渠芝之類是乎、凡椋榎柳皆生菌、而其木如生芝則以後再不生菌也、本朝亦古者以爲祥瑞矣、

靈芝

〔新撰姓氏錄左京神別〕湯母竹田連
火明命五世之孫、建刀米命之男、武田折命、景行天皇御世、遊獵到菟田、夜宿之間、菌生其田、天皇聞食而、賜姓菌田連、後改爲湯母竹田連、

〔本草和名十六草〕青芝、一名龍芝、　赤芝、一名丹芝、一名朱草芝、一名九曲、（已上二名出雜要決）　黃芝、一名金芝、一名地節、（出太清經）　白芝、一名玉芝、一名白符、（出兼名苑）　黑芝、一名玄芝　紫芝、一名木芝、（陶景注云、俗所用紫芝、是朽樹木株所生、狀如木檽）

〔多識編三芝部〕芝和名今按比志利多計、

〔和爾雅七菌類〕芝（一名茵、又曰靈芝、有青黃赤白黑紫六色）

〔古今要覽稿草木〕芝　れいし
靈芝は王者の德草木に至れば生ず、（孝經援神契）王者の德山に至れば生ず、（白虎通）などいひて、種類數多あり、五色芝は仙藥にて、これを服すれば不老延年なりといふ、（本草綱目）されば こそ瑞草なりといへり、日本紀にはこれを食して、命長きことを記され、延喜式には祥瑞の部に收られたり、弘賢曰、服せざれば瑞草もいたづらに翫物のみ、今世間多く生ずるは、いづれも紫芝なり、或は樹根に生じ、或は石間に生ず、其樹は西土にては李樹に生じ、（[illegible]）又楡樹に生ず、（[illegible]）今みる所おほくは松梅樅榿等に生ず、然いづれの樹にも生ずべきにや、方士は木を積て藥を傳れば、五色芝を生ずといひ、（本草綱目）道家にて糯米飯をつきたゝらし、雄黃鹿頭血をつゝみかはかし、冬至日土中に埋をけば、そのづから靈芝を生ずといへり、今も樹のきり株に、米泔水を度々そゝげば靈芝を生ず、櫟の木椿木と（[illegible]）いへり、かく人作にて生ずるほどならば、瑞物ともいひがたきか、明の李時珍は、此類は腐朽の餘氣にて生ずれば、人の瘤のごとし、瑞草となして服すれば、仙となるなどいふは、誠にあやまりなりといひて、酉陽雜俎の家の柱に芝を生ずるは凶事なりといふことさへ引り、さて

〔箋注倭名類聚抄 四菓蓏〕按菌茸之茸、卽俗耳字、木菌或曰木耳、木耳見說文蕈字注、狀似人耳、故名之、後俗從艸作茸、以別耳目字、其字形與䒤茸字無別、而其音不同、源君以面容音之誤、又按渠扈群母、牙音單行、無輕重、此云重未詳、○中略 按爾雅釋草、中馗菌、郭注云、今江東名爲土菌、是土菌出郭注、木菌石菌無載、則木菌石菌或出爾雅舊注、又菜蔬部引爾雅注云、菌形似蓋者也、源君夾注云、今案有數種、木菌土菌石菌、並見象名苑、則疑此偶誤象名苑爲爾雅注也、○中略 按多介與丈竹嶽同訓、爾直立也、今俗或呼鮍乃古、

〔倭名類聚抄 十七菓蓏部〕菌 爾雅注云、菌(音窘、具見菜蔬類、和名太介、今按菌有數種、木菌土菌石菌見象名苑、○注文天文本倭名類聚抄曰、奇䔍)形似蓋者也、

〔類聚名義抄 八艸〕菌(音窘、蕈草、タケ、クサヒラ、) 木菌(キノタケ) 梆菌(ヒトヨタケ) 木茸(タケ)

〔饅頭屋本節用集 草久木〕菌(クサビラ) 〔同 草貴木〕菌(キノコ)

〔倭訓栞 前編十四多〕たけ 日本紀倭名抄に菌をよむは、氣味の猛き義なるべし、新撰字鏡に蕈をみみたけとよめり、みゝは耳の義也、今佐渡に菌をみゝといへり、○中略 西土にはいはたけを石耳、まつたけを松耳と書たるを、此方にては茸字を用來れり、徒然草にも見ゆ、鹿茸などの義によれば茸とも書べきかといへり、

〔倭訓栞 中編五幾〕きのこ 菌類をいふ、木の子成べし、

〔物類稱呼 三生植〕菌茸たけ きのこ 中國及九州にてなばといふ、北國又は美濃尾張にてこけと云、上野下野にてもたせと云、佐渡にてみゝといふ、

〔庖厨備用倭名本草 五芝類〕香蕈 倭名抄ニ香蕈ナシ、多識篇今案ニタケ、又云クサビラ、元升井○曰、西國俗ニ云、ナバ、又云キノコ、又云タケ、考本草、蕈ハ桐柳枳椇木ノ上ニ生ズ、紫色ナルヲ香蕈ト名ヅク、白色ナルヲ玉蕈ト名ヅク、皆濕氣熏蒸シテ生ズ、山僻ノ處ニ生ズルハ毒アリ、人ヲ殺ス、

モ、顧草トモ、トミクサトモ云ヘバ、ヨキ名アル草ヲイハヒタヨメリ、三枝草ナレバ、ミツバヨツバト云ヘリ、四葉ハアマリ事也、コトバノカザリニヤ、言ノタヨリニ、繁榮ノ心ヲイハントナリ、サイクサノマツリヲモ三枝トカ、姓ノ中ニモサイクサベト云フ姓アリ、三枝部ナリ、万葉ノ歌ニハ、サイタサノナカニハ、ムチトウツクシタトヨメルモ三枝トゾカケル、一モ檜木トカキテ、サイクサトヨム事ナレ、大輔歌ニ云、

オモヘドモ人ノ心ノアラタニハウラミニノミゾサキクサノハナ、トヨメリ、此ノ歌ハ、アラタニオフル、トミクサヲ、サハ〳〵トヨミキリタリ、是又マタク檜木ニアラズ、フル木歌仙ノ釈ハヤウコソハアラメ、タヤスク是ヲ改ムベキニアラネドモ、所存バカリヲバ、カタハシ是ヲ注ス、人ノ非可信用、

〔倭名類聚抄二十草〕白鼓草 辨色立成云、白鼓草、(鳥○太○布○黒○久○佐○)

〔大倭神社註進狀〕養老令曰、孟夏三枝祭、（中略）和名佐井草、占事記山由理草之本名、云佐韋草也、或曰烏羽、

〔冠辭考四佐〕さきくさの　なかみつ

三枝の事は神祇令に、三枝祭、（義解云、謂率川社祭也、以三枝華飾酒罇祭、故曰三枝也、）また姓氏錄に、顯宗天皇御世云々、三莖之草、生於宮庭、採以奉獻、仍負姓三枝部造云々、治部式に福草、（瑞草也、朱草別名也、生宗廟中、）和名鈔に葛、（音褐、和名佐木久佐、日本紀、私記云福草、）草、枝々相值、葉々相當也と、日本紀の人の名にも福草と書て、さきくさと訓たり、これらを以て思ふに、福草なることは明らけし、されど右の式と和名鈔にいふは、他の國の意にて、かしこにもこゝにも常ある草にあらず、然れば年ごとの率(イサ)川祭に用る三枝花(サキクサノハナ)は、さゆり花なるべしといへり、さゆりは一本の末に三つの枝ひとしくわかれて、莖の末に、葉の相當れるてふにも近ければ、かの福草に擬て用るならんと覺ゆ、○中略其祭も四月にて由利の咲比なれば、かた〴〵かなふべし、これに依ばかの御庭に生けんも由利なりけんか、

〔萬葉集抄七〕さきくさと云事は、假名はおなじけれ共、ことにまたがひていひかへたる事あり、あるひは檜の木をさきくさといふは、諸の材木の中に、ことによき木なれば、宮木などにもえらびもちゐられて、さいはふ木なれば、檜木をさきくさと云、あるひは葛のなかに、とみかづらと云草をさきくさと云ともいへり、又草のおひ出て、みつ葉よつ葉なるを、さきくさと云、

〔塵袋三〕一サキクサヲバ清輔ガ奥義鈔ニ檜木ト釋セルハ實事歟、木ヲクサト云フ心如何、檜木ト云フ事ハ本說イマダミズ、マサシクハ草ノ名ナリ、葛(チヤウ)(諸字反)トカク、又ハ福草トモ、幸草トモ、三枝トモカケリ、エダモハモ、相ムカヒテ、イク枝ニワカルレドモ、三ヅヽ三マタニ枝サス物也、サヒハカク云フニヤ、又是ヲトピクサト云フ、アラタニオフルトピクサノハナト云フ是也、サキクサヲバ、トピクサト云フユヘニ、コノトノハムベモトミケリトモヨメル歟、奥義鈔ニハ、ヒノ木ニテ家ヲ作ル物ナレバ、ミツバ、ヨツバニトノヅクリセリトハ云ヘルヨシ釋セルハ、推量ノ分也、幸草ト

之名、宜在百合若薺苨條、蓋宜與商陸合、也、或曰、文字集略以下別是一條、傳寫脫標目萬字也、今本併在蕙條下、非源君之舊也、然按似不當以其物不詳之佐岐久佐次于蘭菊之上、是說恐非是、

〔類聚名義抄八僧〕薺音齊 サキクサ

〔倭訓栞前編十佐〕さいぐさ　日本紀に福草と書る本義成べし、さきくさともいへり、諸書に三枝をよめるは、義訓せしなり、延喜式に、朱草の別名とし、瑞草也といへり、略○中 倭名鈔に薺苨さきくさ、一に云みのはと見えたり、みのは、はつはに同じ、呂氏春秋にも、三葉薺と見ゆ、略○中 萬葉集抄に檜は宮木などにも、積み用ゐられて、さいはふ木なれば、さきくさといふよし見えたり、古今集の序に、殿づくりより語り傳へたる說なるべし、顯昭說に、三枝はからすむふぎ也、彼草末葉廣ければ、祝ひによすといへるも、いかゞと覺侍る、

〔新撰姓氏錄左京神別〕三枝部連

額田部湯坐連同祖、顯宗天皇御世、喚集諸氏人等、賜饗醼、于時三莖之草生於宮庭、採以奉獻、仍負姓三枝部造、

〔日本書紀顯宗十五〕三年四月戊辰、置福草部、

〔延喜式治部二十一〕祥瑞

福草福草朱草別名也、生宗廟中、　右上瑞

〔萬葉集雜歌五〕戀男子名古日歌三首長一首短二首

夕星乃、由布弊爾奈禮婆、伊射禰余登、手乎多豆佐波里、父母毛、表者奈佐我利、三枝之、中爾乎禰牟登、愛久、志我可多良倍婆、略○下

〔古今和歌集序〕歌のさまむつなり、略○中 むつにはいはひ、

このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつ葉にとのづくりせり、といへるなるべし、

〔令義解神祇令二〕凡、略○中 孟夏、略○中 三枝祭謂率川社祭也、以三枝花、飾酒罇祭、故曰三枝也、

蒚草

二尺許、天名精(ヤブタバコ)葉ノ如ク柔ニシテ皺バミ短毛アリ、淡綠色、冬ハ葉枯レ、春舊根ヨリ叢生ス、夏中心ヨリ莖ヲ抽ルコト七尺許、葉互生ス、秋ニ至テ莖頭ニ花ヲ開ク、旋覆花ニ似テ大キク、莖ニ連リ生ジテ、タカヲカウノ穗ノゴトシ、一花ノ大サ一寸餘、黃瓣黃心ニシテ單葉菊花ノ如シ、此ノ根ヲ和ノ木香ト云、是集解ニ載ルトコロノ土木香也、根ノ形長クシテ牛蒡根ノ如シ、味辛シ、生ノ時香氣アレドモ、乾タトキハアヲタサシ、

〔草木育種後編下藥品〕木香木艸　俗におほぐるまといふ、和蘭にてアラントウヲルトといふ、赤土の肥地に畦を作りて植べし、干鰯糞水を澆ぎてよし、花を插花にすべし、

〔延喜式十五内藏〕諸國年料供進

青木香二百七十斤尾張國一百六十斤、相模國八十斤、美濃國卅斤、

〔倭名類聚抄二十草〕蒚字附　○中略　文字集略云、蒚○音展、和名佐○木○久○佐、日本紀私記云、蒚草、草枝枝相値、葉葉相當也、

〔箋注倭名類聚抄十草〕按說文云、蒚艸枝枝相値、葉葉相當、文字集略蓋本於此、爾雅云、遂薚、馬尾、郭璞引廣雅云、馬尾、蔏陸、郭璞又引本草云、別名薚、今關西亦呼爲薚、江東爲當陸、又玉篇云、蒚、遂蒚、馬尾、蔏陸也、薚上同、則知說文蒚卽爾雅遂薚、下文所載商陸卽是、又佐岐久佐見夫木集曾禰好忠若菜歌永範卿大嘗會屛風歌同部氏曰、古事記云、山由理草之本名云佐韋也、山由理草百合也、佐韋佐岐一聲之轉、則佐岐久佐是百合之古名、萬葉集所謂三枝卽是也、是草莖梢分三歧、著花、故云三枝、○中略　或曰、下條薺苨訓佐岐久佐奈、一云美乃波、其佐岐久佐之名與此合、美乃波之名、又與古今集序所載歌云、佐岐久佐乃美都波與都波合、及訓三枝字、則佐岐久佐之爲薺苨可證、佐岐久佐雖未詳、其究爲薺苨爲百合、然爲一草之名明矣、疑源君不辨蒚佐岐久佐倶爲何物、以日本紀私記蒚草訓佐岐久佐、又孫氏瑞應圖云、王者有德則蒚草生、謂佐岐久佐是瑞草、故引在此也、然日本紀蒚草部、卽姓氏錄三枝部、其作蒚草者、撰紀者以訓同假借佳字耳、與瑞應圖蒚草無相涉、其實佐岐久佐

木香トモ南木香トモ云、馬兜鈴ヲモ青木香ト云、本草ニ見エタリ、木香ノ狀如枯骨、白クシテ嚙之、口粘齒者佳シ、

〔和漢三才圖會 九十三 芳草〕木香 略 ○中略

本綱、木香南番諸國皆有、其根形如枯骨、嚙牙者爲良、或馬兜鈴根爲青木香、又呼薔薇根爲木香、愈亂眞矣、○中略

按木香、本草圖經、三才圖會、草本畫譜等所載、葉狀異說多、或云葉似羊蹄而長大、或云葉長八九寸、皺軟而有毛、或云葉如牛蒡但狹長、或云葉似絲瓜、未審、故隨本草必讀唯圖其根耳、南番諸國有之、又有出於中華雲南貴州者、多阿蘭陀市舶將來、今有舶木香、株木香二種、以舶爲良、又有倭木香、出於富士、不分明、故不用、

青木香

本綱、青木香乃木香也、然後人呼馬兜鈴根、爲青木香、而(木香呼南木香)略似木香、故用亂木香、宜辨正之、

按倭出青木香、(又謂木香)然倭無馬兜鈴、故採似蘆擘而有香氣者、爲青木香、蓋此贋之贋者矣、

其草蔓生、皆似蘆擘而闊葉有香氣、結子如常餘子、其根似自然生山藥而味苦、出於畿內、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕木香　通名　一名大通綠(綱目、大ノ字誤テ天ニ作ル)　東華童子(酉陽雜俎)　增、一名五香(典籍便覽)　五木(同上)

舶來ニテ漢渡ト云モノ、實ハ阿蘭陀ノ產ニシテ上品ナリ、唐山ヨリ直ニ渡スモノモ、固ヨリ蠻產ヲ唐山ヘ渡シタルヲ、本邦ヘ持來ルナリ、唐山ノ產ヲ先年渡セシコトアリ、和產ト同ジクシテ土。木。香ナリ、和ノ木香ハオホグルマト呼ブ、旋覆花ヲヲグルマト云ニ對シテカクイヘリ、(小車ニ似テ大ナリ)故ニ名ク、種樹家ニテコレヲ大木香又日連客ト云フ、世上ニ多ク栽ユ、城州富野邊及ビ丹後網野ニ多ク栽ヘテ出ス、和產中ニテハ丹後ノ者ヲ上品トス、城州ノ者ヲ下品トス、ソノ葉濶サ五寸許、長サ

馬蘭

〔多識編 二芳草〕馬蘭、今案於保阿羅良岐、異名紫菊、

〔大和本草 八芳草〕馬蘭　本草芳草、又救荒本草ニ載タリ、如澤蘭而氣臭、一名紫菊、其花ヒトヘノ菊花ニ似テ紫ナリト、陳藏器イヘリ、其葉蘭ニ似テ大ナル故、馬蘭ト名ヅク、或是ヨメガハギナルベシト云ヘドモ不可然、ヨメガハギハ蘭葉ヨリ小也、馬蘭ハ水溼ノ地ニ生ズト云ヘリ、ヨメガハギハ高下ノ地共ニ生ズ、馬蘭ハ不香、本草ニイヘリ、ヨメガハギハ頗香シ、

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕馬蘭　紫菊

按倭有馬蘭者、形狀稍異、高二三尺、莖一尺以上生一葉、似篠葉而大、長一二尺、有光澤叢生、根下有花小出於地上、如菊黃赤色、花葉皆不香、近年自琉球國多來、是疊黃也、(見于前)蓋本草所謂馬蘭未見之、稱紫菊、則當菊之類、此云越前菊、(亦名紫衣菊、詳見下篇)葉稍似而其越前菊(三七草)三椏三葉略似三七草葉而不澤、背有細紋微帶紫色、而與後見蘭等之葉大異者也、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕馬蘭　コンキク　一名惡草(通志)　藍菊(花鏡)　竹節草(附方)　地白根(同上)
馬蘭柴(同上)　馬蘭菊(島原附方)　鳥韭(名物法言)

種樹家ニ多クアリ、雞兒腸ノ種類ナリ、春舊根ヨリ叢生ス、莖色紫黑葉雞兒腸ノ葉ニ似テ鋸齒深シ、苗高サ二三尺、秋ニ至テ花ヲ開ク、色深紫ニシテ靑ヲ帶ブ、故ニコンキクト云、又白花モアリ、救荒本草ニ馬蘭頭ト云ハ、春ノワカメヲ云フナリ、

〔本草和名 六草〕木香、一名蜜香、一名靑木香、(出陶景注)一名東桑童子、(出丹口訣)一名千秋、一名千年、一名長生、(已上出雜)名苑出播磨國、

木香

〔多識編 二芳草〕木香、左宇毛久左、又和禮毛加字、異名蜜香、(別錄)靑木香、(弘景)五木香、(圖經)南木香、(綱目)

〔大和本草 六藥〕木香　葉ハ皺アリテ、鶴虱及牛蒡ニ似テセバク長シ、其形紫菀葉ノ如シ、莖ノ高サ數尺、黃花ヲ開ク、花ハ菊ニ似タリ、本草ニイヘル形狀ニ同、然レドモ日本ノ產ハ性不好不可用、又靑

雲州ヒトモトグサ、加賀潮邊及ビ水旁ニ生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、方莖葉兩對ス、節紫黑色、葉細長ク、闊サ八分許、長サ三寸許ニシテ末尖レリ、周邊ニ粗キ鋸齒アリ、毛茸ナシ、切レバ香氣アリ、蘭草ノ香ト同カラズ、秋ニ至リ莖三四尺、葉ノ間ゴトニ五瓣ノ小白花ヲ攅簇ス、薄荷花ニ似タリ、根ハ白色方ニシテ長ク旁引ス、故ニシロネト名ケ、雲州ニテアゼコシト呼ブ、其行根ノ止ル所ニ苗ヲ生ズ、根臘既ニ下レバ行根腐チテ別ノ苗トナル、ソノ巨ナル根ヲ取リ、糖蜜ニ煎テ香ノ物トス、又煮テ食ヒ或ハ蒸トナシ食フベシ、地筍ノ名ニ合ニ似タレドモ、此草根ノ色白シ、故ニシロネト名ク、蘇頌ノ說ニ、澤蘭ノ根紫黑色ト云ニ合ズ、且此草ハ莖葉ニ毛ナシ、葉尖微有毛不光潤ト云ニ合ザレバ、シロネノ澤蘭ニ非ザルコト知ベシ、シロネハ救荒本草ニ載スル所ノ地瓜兒ニ充ツベシ、又蘭草ニ大澤蘭ノ名アル時ハ、澤蘭モ蘭草ノ狀ノ草ナルコト知ベシ、唐山ニテモシロネヲ澤蘭ニ代用スル故、ソレニ傚テ和ニモシロネヲ用ヒ來ルナリ、又一種シロネノ小者アリ俗ニナルダヒコト稱ス、山中ニ多ク生ジ、花葉形狀並ニシロネニ同ジ、唯小キヲ異トスル耳、

〔鵞峯文集 四十九〕澤蘭解

六義堂庭畔草之中有一種、花紫其形似紫菊、其葉稍濶而長、長三尺餘無枝、吾未知爲何花、友人來曰、澤蘭也、世俗所謂富知波加麻是也、余聞之、閱本草考、其註解則衆說叢、不一、而大抵相似、若以朱文公之說觀之、則豈夫屈原之所愛者乎、然唐本草曰、澤蘭紫色、葉似蘭草而不香、陶隱居曰、其葉微香、今驗其花則無香、而觸風則似有遠香、所謂其葉微香乎、古來稱佳香者以蘭爲最、則若斯之微香、果夫屈原之所愛乎、未可知也、然原之所愛、則與常人可異、其香之微也、常人不知而原獨知之乎、文公之言豈誣乎哉、且圖經徐州梧州澤蘭、其花葉稍異、則況於異域乎、昔考先〇林羅山覊冠初謁東照大神君、神君問曰、蘭草多品、屈原所愛爲何、侍坐者不知之、先考膺聲答曰、澤蘭也、神君顧左右曰、年少能記臆焉、是顯其名於公門之始也、今幸植其花不亦幸乎、甲寅早秋

蘭草に似て、狹長にして、岐なく香なし、秋後花を開く、また蘭草に似て淡紫色、及び白色のもの有、○中略されど皇朝の產は其葉對生にて、西土のものは互生なるを異なりとす、

釋名

ひよどりばな（蘭品、本草啓蒙、此花鵯の來る頃に咲をもて、俗に此名を命ぜしなり、）　やまどりさう（本草綱目）　山蘭（圖經本草、此草山中に生じて、其葉蘭草と同じ、故に山蘭と名づく、）

〔本草和名九草〕澤蘭（陶景注曰、生澤旁、故以名之、）一名虎蘭、一名龍棗、一名虎蒲、一名蘭澤香、（出蘇敬注）一名水香、（出兼名苑）一名龍求、一名蘭香、（二名出雜要訣）和名佐。波。阿。良。々。岐。、一名阿。加。末。久。佐。、

〔倭名類聚抄二十草〕澤蘭　陶隱居本草注云、澤蘭（和名佐波阿良々木、一云阿加末久佐、）生澤傍、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十草〕按蘭有二訓、一則布知波加麻、蘭草是也、一則阿良良岐、蘭蕳草是也、澤蘭生澤旁、葉似蘭草、則當訓佐波布知波加麻、訓佐波阿良良岐者誤、○中略吳普曰、澤蘭生下地水傍、葉如蘭、二月生、香赤節、四葉相值枝節間、蘇敬曰、澤蘭莖方、節紫色、葉似蘭草而不香、圖經云、根紫黑色、如粟根、二月生、苗高二三尺、莖幹青紫色、作四稜、葉生相對、如薄荷微香、七月開花、帶紫白色、萼通紫色、亦似薄荷花、此與蘭草大抵相類、但蘭草生水傍、葉光潤、根小紫、五六月盛、而澤蘭生水澤中及下溼地、葉尖微有毛、不光潤、方莖紫節、七月八月初採、微辛、此爲異耳、

〔多識編二芳草〕澤蘭、左和阿羅羅岐、今案俗稱志。呂。麗。

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕澤蘭　サ。ハ。ア。ラ。ヽ。ギ。（延喜式）　ア。カ。マ。グ。サ。（和名鈔）　サ。ハ。ヒ。ヨ。ド。リ。　一名醒頭草（提要本草）　煎澤草（輿備便覽）　九畹菜（類聚錄）　小澤蘭（集解時珍說）　千里吉（福州府志）　孀醋（月令廣義）

山中溪澗或ハ池澤ノ傍ニ生ズ、蘭草及山蘭ニ似テ小ナリ、葉モ亦相似テ狹ク小シ、莖微ク方ニシテ毛アリ、苗高サ一二尺、秋ニ至テ花ヲ開ク、形亦相似テ小ク、淡紫色白色ノ二品アリ、古來澤蘭ヲシロ子ト訓ズルハ穩ナラズ、シロ子ハ、一名フシグロノコギリサウ、（能州）ムラタチ、（播州）アゼコシ、

〔源氏物語藤袴三十〕例よりもしめりたる御氣色、いとらうたげにをかしか、るついでにとや思ひよりけん、らにの花のいと面白きをも給へりけるを、みすのつまよりさし入て、是も御らんずべきゆへは有けりとて、とみにもゆるさでもたまへれば、うつたへに思ひもよらでとり給ふ御袖をひきうごかしたり、

おなじ野の露にやつるゝふぢばかまあはれはかけよかごとばかりも

〔拾遺和歌集物名七〕らに

秋の野に花てふ花を折つればわびしらにこそ虫もなきけれ

よみ人しらず

〔續拾遺和歌集雜十八〕論議の年の秋、鳥羽殿に美福門院おはしましける比、前栽に蘭のしをそれて見えけるを折て、人につかはしける、

皇太后宮大夫俊成

なべて世の色とは見れど蘭わきて露けき宿にも有かな

〔重修本草綱目啓蒙芳草九〕蘭草〇中略

山蘭アリ、山野ニ生ズ、葉ハ長クシテ岐ナク、桃葉ニ似テ鋸齒深シ、又三尖ニナリテ蘭草葉ノ如キモアリ、ミナ兩對シテ生ジ、莖ニ斑アリ、葉ト倶ニ毛茸アリテ香氣少シ、此ヲヒヨドリバナト呼ブ、花ニ白色淡紫色ノ二品アリ、藥ニ蘭葉ヲ用ユルハ、此蘭草ノ葉ニシテ、蘭花ノ葉ニ非ザルコト、正誤ニ詳ニ辨ズ、然ルニ綱目以後ノ書、本草必讀、本草原始、ソノ餘諸書ニ謬誤リテ蘭花ノ葉トスル說多シ〇中略

增、山蘭ニ一種葉ニ黄白色ノ斑點多キモノアリ、コノ莖葉ヲ煎ジテ、蝮蛇ノ咬タルヲ洗テ奇効アリ、野人ノ經驗ナリ、阿州山城谷ニテハミグサト云フ、

〔古今要覽稿草木〕ひよどりばな　山蘭

ひよどりはな一名やまどりぐさは、漢名を山蘭といふ、近邊山野處々これあり、その莖葉すべて

漬年料雜菜

蘭葅三斗〈料蘭二斗四升、鹽一升二合、〇中略〉　右漬秋菜料

〔日本書紀〈十三允恭〉〕二年二月己酉、立忍坂大中姫、爲皇后、〈〇中略〉初皇后隨母在家、獨遊苑中、時鬪雞國造從傍徑行之、乘馬而莅籬、謂皇后、嘲之曰、能作園乎、汝者也、〈汝此云那鼻苔也〉且曰、壓乞戸母其蘭一莖焉、〈壓乞此云異提、戸母此云覩自、〉皇后則採一根蘭、與於乘馬者、因以問曰、何用求蘭耶、乘馬者對曰、行山撥蠛也、〈蠛此云摩愚那岐、〉時皇后結之意裏乘馬者辭无禮、卽謂曰、首也、余不忘矣、是後皇后登祚之年、覓乘馬乞蘭者、而數昔日之罪、以欲殺、爰乞蘭者顙搶地叩頭曰、臣之罪實當萬死、然當其日、不知貴者、於是皇后赦死刑、貶其姓謂稻置、

〔續修東大寺正倉院文書〈後集四十〉〕寫經司解　申錢用事

合所請錢貳仟文〈壹〉

買物合十六種〈〇中略〉

蘭十把　直錢八文〈〇中略〉

以前、錢並狀幷買物、顯注如前、以解、

天平十一年八月十一日　史生高屋連赤麻呂〈〇以下署名略〉

〔續々修東大寺正倉院文書〈四十六帙六〉〈萬葉書〉〕蘭貳　青大角豆拾把

天平勝寶二年七月四日　倉垣三倉

〔古今和歌集〈四秋〉〕これさだのみこの家の歌合によめる　としゆきの朝臣

なに人かきてぬぎかけしふぢばかまくる秋ごとにのべをにほはす

ふぢばかまをよみて人につかはしける　つらゆき

やどりせし人の形見か藤ばかま忘られがたきかにほひつゝ

香檀香龍腦ナド、諸香求索中華、故ニ蘭ヲ甚賞ス、今ノ蘭ト云モノハ、葉ハ大葉ノ麥門ノ如ク、花ノ香ヨキ物也、上代ノ眞蘭ニハアラズ、郝齋閑覽曰、今人所種如麥門冬者名幽蘭、非眞蘭也、方虛谷曰、國花雖郁、故得蘭名也、古人モアヤマツテ、今ノ世俗ニ蘭ト云者ヲ眞蘭トイヘリ、本草綱目詳ニ辨之、眞蘭ノ葉ヲカベニカクレバ、邪氣ヲハラフト云、楚辭ニ所謂幽蘭モ卽眞蘭ナレバ、幽蘭モ眞蘭ト一物也、郝齋閑覽ニ如麥門冬者名幽蘭ト云ハ、世俗ノ誤ヲイヘルナルベシ、澤蘭モ同類異物ナリ、葉ハ蘭ニ似タ鮭ナシ、鹹ノ葉ノ如シ、水澤ニ多シ、葉ノマハリニ鋸齒アリ、延喜式三十二卷、園韓神祭春日祭雜給料蘭十把トアリ、本朝古モ此眞蘭ヲ用ヒシナルベシ、禪僧圓月東海一漚集、筑州神山移蘭記ニモ、神山ニ蘭多キ事ヲ記セリ、是亦眞蘭ヲ蘭トイヘルナルベシ、蘭草方藥ニ用ズレドモ性好シ、上品ノ芳草ナリ、園圃ニ必ウフベシ、繁茂シ易シ、澤蘭ハ方藥ニ多ク用ユ、香味蘭ニツトレリ、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕蘭草 フヂバカマ古歌 一名不老草(本草會編) 醒頭草(本草洞詮) 醒頭香(物理小識) 燕尾兒 秋蘭 省頭香 辟汗香 佩蘭葉

野生多シ、春宿根ヨリ苗ヲ叢生ス、圓莖ニシテ斑點ナシ、葉節ニ對シテ生ズ、形長クシテ左右ニ枝アリ、故ニ燕尾香ノ名アリ、周圍鋸齒深クシテ香氣多シ、乾セバ愈烈シ、夏月帶ニ掛レバ、二旬餘モ香氣アリテ暑臭ヲ避ベシ、六七月ニ至リ莖高サ三四尺、或ハ六七尺、枝ノ末ゴトニ傘ノ如ク、細小花多ク簇リ開ク、淡紫色ナリ、故ニフヂバカマノ名アリ、和歌ニモ詠ズ、

〔延喜式大膳三十二〕園韓神祭雜給料(春冬同) 蘭十把

春日祭雜給料(春秋同) 蘭十把

〔延喜式內膳三十九〕供奉雜菜

日別一斗、○中略 蘭二把、(十一月一日至正月、十二月、○中略) 中宮准此、○中略

の一根蘭を採て、闘鶏國造に與へられしを始とし、日本紀これを歌によみて秋の七種の數に入しハ、山上憶良を始とし、萬葉集それを字音にてらにと唱へしハ紫式部を始とす、源氏物語凡西土にてハ宋以降ハ蘭花を尊みて、右の蘭とせしより、此蘭世に隱れて絕て志るものなかりしを、明に至り時珍の本草綱目を撰びし時、離騷辨證訂蘭說等によりて、さらに蘭花を以て別種とし、此蘭を以て古の蘭とせしハ信ずべし、されど我朝にてハさせる混同もなく、允恭天皇の比より今に至りて、蘭のふぢばかまなるハ、實に人心の正直仰ぐべく尊むべし、○中略

釋名

ふぢばかま（日本紀、萬葉集、本草和名、）東雅云、ふぢばかまといふ義詳ならず、其花淡紫色、此に藤といふ色に似て、其蘂の筩をなせしが、袴に似たる所あれバなるを、（俗に藤の字をなすがごとし、）藤袴とはいひしなるべし、らに（源氏物語、らには蘭の字音なり、）蘭（蘭品、萬葉集同、國史紀、家語、左傳、說文、開寶本草云、葉似二馬蘭一、故名二蘭草一、また離騷の註文上文にみへたり、）蕑（詩經、溱洧註云、鄭俗三月男女秉二蕑於水際一、以自祓除、蕑以蘭之、其義一也、）蘭草（神農本經、名醫別錄に同じ、）香蘭（平註、此蘭芳香、故に名づく、）王者香（同上）國香（左傳、蘭品云、具王者香、國香覽以爲二蘭之一名一、）秋蘭（離騷、文選云、蘭以秋芳、）蘭澤（唐本草引二本草拾遺一云、蘭草五六月採、陰乾、婦人和レ油澤レ頭、故云二蘭澤一、）大澤蘭（本草綱目引二衍義一、此蘭澤蘭に假て、其葉大なり、故に大澤蘭と名づく、）幽蘭（離騷、墨客揮犀云、蘭以二幽香一、若二君子一、若二芳草一、若二杜若一、若二國香一、若二雲蘭一也、）燕尾香（同上、馬志云、其葉有レ岐、俗呼爲二燕尾香一、）紫菊（蘭譜、正に馬蘭と同名、）孩兒菊（同上、澤蘭また孩兒菊と名づく、時珍云、小兒喜佩之、故有二孩兒之名一也、又引訂蘭說古之蘭草、卽今之俗名二孩兒菊一、）侍女花（楼致美南原引採蘭雜志云、隋代宮中引國語、男子佩蘭、女子佩之、故名二侍女花一、）

〔大和本草入芳草〕眞蘭　和名フヂバカマ、又アラヽギトモ云、古歌ニラニトモヨメリ、八雲抄ニモ蘭ヲフヂバカマラニト云ト書玉フ、葉ハ麻ニ似テ兩岐アリ香ヨシ、ホシテ彌カウバシ、是眞蘭也、野ニアリ、秋紫白花ヲ開ク、古歌ニフヂバカマヲ多クヨメリ、國信ノ歌ニ、秋ノ野ニムラ〳〵立ル蘭ムラサキ深ク誰カ染ケン、若葉ハユビキテ食スベシ、其芳香美味、凡菜ニスグレタリ、試ニ食シテ其香味ヲ知ベシ、嫩葉ヲ採テ佩レ之ト云ヘリ、其性亦好、詩經楚詞ナドニ詠ゼシ蘭是ナリ、上代ハ沈

寫佩服也、〈中略〉鄭風溱洧篇、方秉蕑兮、毛傳蕑蘭也、正義引義疏云、蕑即蘭香草也、莖葉似澤蘭、廣而長節、藏衣著書中辟白魚、陳藏器云、蘭草生澤畔、葉光潤、陰小紫、別本注云、葉似馬蘭、故名蘭草、蜀本本草云、蘭草葉似澤蘭、尖長有岐、花紅白色而香、生下濕地、輔仁調布知波加麻、尤當、

〔類聚名義抄 八〕蘭 音闌 フヂバカマ アララギ

〔和爾雅 七 草木〕蘭 フヂバカマ 澤蘭（蘭、水香、都梁、燕尾草、孩兒菊、香草、金草、雞明、）

〔東雅 十五 草卉〕蘭 フヂバカマ 〇中略 漢にして古時蘭といひしものは、即此にしてフヂバカマといふものなり、今俗に蘭の字の音をもて呼び、ランといふ者は、漢にして蘭花と云ひて、蘭草とは異なる物也、其說の如きは、李東璧本草に詳に見えたり、フヂバカマといふ義不詳、其花淡紫色、此に藤といふ色に似て、其瓣の筒をなせしが、袴に似たる所あれば、藤袴とはいひしなるべし、（藤袴に、藤の袴などあるが如し）

〔古今要覽稿 草木〕ふぢばかま らに 蘭

ふぢばかま一名らにハ、漢名を蘭、一名蕑、一名蘭草、一名香蘭、一名王者香、一名國香、一名秋蘭、一名蘭澤、一名大澤蘭、一名女蘭、一名香水蘭、一名燕尾香、一名紫菊、一名孩兒菊、一名待女花といふ、此草古より諸國に野生多し、春舊根より苗を生じ叢をなし、夏を經て莖高さ三五尺に至り、秋をむかへて每枝傘狀をなし、細小なる淡紫花を攢簇す、此卽劉寮がいはゆる孩兒菊花如紫茸、葉苗細碎（蘭譜）といへるものなり、又一種蘇敬注に、蘭澤八月花白（證類本草引）といへるものも、稀に野生ありといへども、保昇のいはゆる花紅白色（證類本草引蜀本圖經）のものハ、いまだこれある事をきかず、其葉は山蘭に似て、綠色にして末尖り細鋸齒あり、又岐ありて燕尾の如きものも、一莖の内にハ多く相交りて、さらに山蘭樣の物のみにあらず、此葉生なる時ハ香氣薄けれど、莖葉を連ねとりて、室中に掛をき、日をへて乾枯すれバ、その香氣殊によし、さて皇朝にて蘭の物にみへたるハ、忍坂大中姫

蘭草

如シ、色白シ或黄ナリ、心ハハマグリノ肉ノ如クニシテ黄也、花ウルハシ、見ツベシ、深山ニアリ、或曰敦盛熊谷一物ナリ、花ノ紫ナルヲ爲敦盛、花淡白ヲ爲熊谷、共ニ枯ヤスシ、

〔大和本草諸品圖上〕敦盛、倭名也、或曰、是鬼督郵ナリト、未知是否、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕鬼督郵〈○中略〉

増、クマガヘサウ、又ホテイサウトモ云、好テ樹陰或ハ竹林中ニ生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、一茎直上スルコト六七寸ニシテ、二葉ヲ雙生ス、形欵冬ノ葉ニ似テ竪ニ皺多シ、二葉ノ正中ヨリ別ニ茎ヲ生ジテ花ヲ開ク、大サ雞卵ノ如ク正中ニ蕊アリ、形母衣ニ似テ淡紫色、中ニ深紫色ノ點アリ、甚ダ異形ニシテ、比シ象ルベカラズ、根ノ形ハハグマニ同ジ、一種カウモリサウ、一名カニカワホリト云アリ、深山陰地ニ生ズ高サ二三尺、葉茎頂別ニ茎ヲ分チ、一二寸ノ間ニ六七葉互生シテ車輪ノ如シ、葉ノ形横ニ濶ク、竪ニ短ク蝙蝠ノ羽ヲ張タルガ如シ、又蟹ノ甲ニモ似タリ、秋ニ至リ葉中ヨリ別ニ茎ヲ生ズルコト、一尺許ニシテ花ヲ開ク、形色共ニハグマニ同クシテ大ナリ、又一種サジクサト云アリ、至テ小草ナリ、山中陰地ニ生ズ、地ニ貼テ生ズ、葉ノ大サ五六分、匙ノ形ニ似タリ、秋ニ至リ葉中ヨリ茎ヲ抽テ、花ヲ開クコト、ハグマニ似テ小ナリ、

〔本草和名七草〕蘭草、一名水香、一名煎澤草、一名蘭香、一名都梁香草、已上三名出陶景注一名蘭澤香草、出蘇敬注一名葸薫、和名布知波加末、

〔段注説文解字一下艸〕蘭香艸也、〈易曰、其臭如蘭、左傳曰、蘭有國香、説者謂似澤蘭也、〉从艸闌聲、〈落干切、十四部、〉

〔倭名類聚抄二十草〕蘭　兼名苑云、蘭一名葸、〈蘭葸二音、和名本草云、布知波賀萬、新撰萬葉集別用藤袴二字、〉

〔箋注倭名類聚抄十草〕按蘭即都梁香、證類本草白字上品載之、葸即零陵香、證類本草中品引今附載之、非一草可見、然通志略云、蘭即葸、引諸書證蘭葸一物、與所引兼名苑合、李時珍曰、鄭樵説亦是臆見、殊欠分明、但蘭草葸草乃一類二種耳、又按本草和名云、蘭草一名葸薫、不載出典、疑引兼名苑、傳

種類多シ、眞ノ鬼督郵ニ充ルモノハ車。葉。ノ。ハ。グ。マ。、種樹家ニテ圓葉ノハグマト呼モノ是ナリ、深山ノ幽谷ニアリ、一根一莖直上ス、長サ一尺許、葉ハ枇杷葉ノ形ニ似テ小ク、鋸齒ナク、背ニ毛ナシ、八九葉莖頂ニ對生シテ車輪ノ如シ、ソノ中心ヨリ又一莖ヲ出ス、長サ一尺許、秋ニ至テ穗ヲ成シ、白花ヲ開ク、形蒼朮ノ花ノ稍小ナルガ如シ、長サ七八分、濶サ一二分、末ハ開キテ細瓣ヲ布クコト三四分、花後絮ヲナス、飯帚ノ形ノ如シ、根細長ク一科ニ數多ク生ジ、色黒ク味苦シ、蝦夷ノ威靈仙ノ如シ、一種叡。山。ハ。グ。マ。アリ、亦深山ニ生ズ、是モカサナト云、一根一莖長三四寸、葉ハ草綿ノ葉ノ如ク、アラキ切込アリ、六七葉對生シ、中ヨリ莖ヲ出シ、花ヲ開クコト車葉ノ者ト同ジ、只微ク小ナリ、根モ亦同ジ、一種カ。シ。ハ。葉。ノ。ハ。グ。マ。アリ、一根一莖長サ一尺許、葉互生ス、形チ槲葉ニ似テ短シ、一種モ。ミ。ヂ。葉。ノ。ハ。グ。マ。アリ、形チ叡山ハグマニ似テ、葉ハ草綿葉ヨリ岐フカクシテ、モミヂニ似リ、此一種ニモミヂサウト云アリ、葉ノ形同シテ互生ス、一種紫。背。ノ。ハ。グ。マ。アリ、紀州熊野ニ多シ、又和州深山ニモアリ、葉ハ叡山ハグマノ葉ニ似テ長クシテ厚シ、其肌虎耳草ノ葉ノ如シ、面ハ綠色ニシテ白斑アリ、又紫斑ノモノアリ、背ハ紫色ナリ、共ニ花ハ上ニ同ジ、此等ミナ鬼督郵ノ類ナリ、

又大和本草ノ圖ニタマガヘサウヲ鬼督郵ニ當ル說ヲ載ス、集解保昇ノ說ニ如傘ト云、根橫生無鬚ト云ノ文ニ據ルナリ、此說モ亦近シ、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　鬼督郵一種アスカ山、大塚谷ニモアリ、

〔大和本草花七草〕敗醬　葉ハエビヂニ似テ廣シ、宿根ヨリ生ズ、花紫ニシテホロカケタルガ如シ、陰地ヲ好ミ日ヲ畏ル、枯ヤスシ、

鹿谷　葉ハフキノ葉ノ形ニシテ小也、エビヂノ葉ノ如クシハアリ、葉ニ少光アリ、葉ノ高八九寸、梢ニ花一アリ、花ノ大鴨卵ヲ二ニワリタルヨリ猶大ニシテ、形ハハマグリヲ二ニヒラキタルガ

細シ、藥舖ニ廣東ノ蘆頭ト云即古渡三七ノ細キ者ト形狀異ナラズ、又古渡三七ノ中形粗ナルモノアリ、是即竹節三七ナリ、唐山ニハ直根ニ附タル蘆頭ニ非ズシテ、別ニ一種竹節ナルモノモアリ、本經逢原ニ廣產形如人參者、是有節者非ト云、時珍ハ有節トノミ言テ直根ノコトヲ言ハズ、是竹節三七ナリ、

集解ノ末ニ、近傳一種草ト云以下ハ、今世上ニ傳ヘ栽ヘ、俗ニモ三七ト呼ブ草ナリ、雲州ニテハチドメト呼ビ、肥前ニテハヲランダグサト呼ブ、此草慶長年中ニ始メテ種ヲ移シ來ルト云、今ハ民家ニ甚多シ、形狀小薊ニ似テ刺ナシ、春初出ノ葉ハ深紫色ナリ、長ズレバ面綠色背紫色、秋ニ至リ莖高サ五六尺、梢間ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、形小薊花ニ似テ黃色亦刺ナシ、ソノ根年ヲ經テ枯レズ、最繁衍シヤスシ、血ヲ治スルノ効廣三七ニ同ジ、故ニ條ヲ同ジクスルナリ、

水前草

﹝物類品隲三草﹞見腫消　和名スイゼンサウ、蘇頌曰、生筠州、春生苗、葉莖紫、高一二尺、葉似桑而光、面青紫赤色ト云モノ是ナリ、形顔三七ニ似タリ、葉背深紫色、冬ニ至テ小白花ヲ開ク、然ドモ寒ヲ畏ル故、花開得ズシテ凋ム、實ヲ結バズ、春夏ノ間莖ヲ折テ插バ能生ズ、豐種己卯歲始テ東都ニ種ヲ傳フ、

﹝重修本草綱目啓蒙十二隰草﹞見腫消　詳ナラズ

水前草ニ充ル說ハ穩ナラズ、水前草ハ一名ハルタマ、紀州本豐圖ヨリ來ル、葉ハ細長クシテ鋸齒アリ、南五味子葉ニ似テ背紫色、此葉ヲ採リ熱湯中ニ入レバ、柔滑ニシテ水前寺苔ノ如シ、故ニ水前草ト名ク、

鬼督郵

﹝本草和名七草﹞鬼督郵、一名獨搖草、一名餘寿草、出范注方一名問狗、出釋藥性、又釋藥作闘字、和名平止平止之、

﹝重修本草綱目啓蒙八山草﹞鬼督郵　ハグマ　カサナ俗名　トチナ加州　ユウダチガサ尾州　ヲニノカラカサ

是は○(頭書長歌)萬葉にうけらが花とよめる歌どもを、ひらけぬと意得られけるなめり、此卷○(萬葉集)
(四)にうけらが花とよめる歌、みな色に出るをかりて、其如く色に出などよめり、本草の諸說も
ゐきながらひらけぬ意見えず、

〔うけらが花(序一)〕此集の名は、さきつとしみやこのやむごとなきわたりより、うし○(千蔭)のよみおか
れたるうたをまゐらせよと有しに、えりてまゐらせられつる時、花數ならぬうけらさへ、つまる
る中にあひぬるよしを、よみ出られしより、みづからうけらがはなと、名をおほせられたる也け
り○下略

〔武江產物志(藥草)〕遊藥山ノ產 蒼朮(原舍ニモアリ)

〔多識編(二山草)〕三七、今案於豆與豆波久佐、又云耶麻宇波志、異名山漆(綱目)金不換、

〔書言字考節用集(六生植)〕三七(サンシチ)(俗云、人言其葉左三右四、故名、本名山漆、又名金不換、金瘡要藥、血病神物、下)

〔和漢三才圖會(九十二山草)〕三七(さんしち) 山漆 金不換

按三七血分之藥、人皆所識也、又養金魚如病死時、採山漆葉入汁於魚口即活、故魚池傍必植之、無名
瘡痛採葉敷之、

〔重修本草綱目啓蒙(七山草)〕三七 一名血見愁(醫學指南)(同名ノ)
二種アリ、集解初ニ說トコロノモノハ廣州ノ產ニシテ、他ノ寒地ニハ無シ、故ニ其苗狀ヲ詳ニ著
サズ、即物理小識ニ言フトコロ、廣西田州(本綱、三七、出)(集解)山谷中、山草也、妙藥ノ一也、和產未ダ詳ナラズ、此根昔年
舶來アリ、今藥舖ニ持傳フルモノ稀ニアリ、皆陳久ニシテ蛀損多シ、ソノ形甚ダ節參(フシニンジン)ニ似タリ、長
サ一二寸、粗アリ細アリ、皆味甘苦、時珍說トコロ如老乾地黃有節、味微甘而苦、頗似人參之味ト云
フ文ニ符ス、ソノ中稀ニ直條ナルモノアリ、圓根ナルモノアリ、ソノ直根ナルモノハ、今渡ルトコ
ロノ廣東人參ニ少シ異ナレドモ、止血ノ効同ジ、ソノ廣東人參ノ蘆頭ニ節アリテ、甚節參ニ似テ

〔草木育種後編下蔓草〕白朮本草　和名うけら、(眞叢)漢種延享四卯年四月、唐山より種子四合を獻せし、官より翁に賜はり是栽させ、後官圃に栽、今いふ種白朮これなり、春芽を生じ夏紅花あり、秋月根を堀り大なるを藥となし、小なるは種となし、又圃に栽べし、早春根を分け畦へ栽るもよし、養を用ひず、年久しくして堀るもの上品なり、一種天目白朮といふものあり、上品なり、家翁(○阿部友之進將翁)武州川越ヶ官圃に獻せしものなり、これも藥用によし、

蒼朮本草　享保年中漢種來りて、今官圃に栽ゆ、培養の法白朮とおなじ、

〔日本書紀天武二十九〕十四年十月庚辰、遣百濟僧法藏優婆塞益田金鐘於美濃、令煎白朮、因以賜絁綿布、

十一月丙寅、法藏法師金鐘獻白朮煎、

〔出雲風土記意宇郡〕凡諸山野所在草木、(○中略)白朮、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

古非思家波、素氐毛布良武乎、牟射志野乃、宇家良我波奈乃、伊呂爾豆奈由米、

和我世故乎、安杼可母伊波武、牟射志野乃、宇家良我波奈乃、登伎奈伎母能乎、

右九首、(○七首略)武藏國歌、

相聞(○未勘國)

安齊可我多、志保悲乃由多爾於毛敝良婆、宇家良我波奈乃、伊呂爾氐米也母、

〔散木弃謌集十長歌〕百首歌中述懷をよめる

さすがにみよの、はじめより、雲の上には、かよへども、なにはの事も、久かたの、月のかつらし、をられねば、うけらがはなの、咲ながら、ひらけぬことの、いぶせさに、よもの山べに、あくがれて、このかのもに、たちまじり、うつぶしそめの、あさ衣、(○下略)

〔年山紀聞四〕うけらが花

リ、多ハ花白色又紅花ノモノアリ、皆下品ナリ、漢產上品、享保中種子ヲ傳フ、葉五椏ニシテ毛アリ、形蒼肥大、花紅色ニシテ大薊花ノゴトク、根佛掌薯ニ似タリ、此物實ヲ植テ能ク生ズ、又根ヲ切テ植レバ盡ク芽ヲ生ズ、一兩年ニシテ採取ベシ、數年ヲ經タルモノ重サ數斤ニ至ル、

蒼朮　一名赤朮、是亦處處ニ產ス、葉ニ椏ナク、花白色又紅花ノモノアリ、皆下品ナリ、漢種上品、享保中種子ヲ傳フ、大抵和產ノモノニ似タリ、嫩葉ニハ綿ノゴトキモノアリ、花ハ白色ニシテ根ノ味香烈ナリ、此物實ヲ植テ生ジガタシ、根ヲ分ツコト、白朮ノゴトクニシテ長ジ易シ、

〔重修本草綱目啓蒙 山草七〕朮　白。朮。　ヲケラ 延喜式　ウケラ 古歌　ウケラガハナ 古歌　一名白大壽 輟耕 仙　沙色條根 方村 家 薊、一名天蘇、山草譜

蒼。朮。　ヲケラ　アキクサ　エヤミグサ　アカヲケラ　ヲレモカツ 開中 名多シ　一名茅君實 續譜 天精 醫學入門 ○中略

和產ノ蒼朮、春初出ノ苗ニ白毛多クシテ綿ヲ被ルガ如シ、稍長ズレバ毛ヲ見ズ、苗高サ二三尺、一根數莖、葉ノ形稍ニシテ厚硬深綠色、邊ニ細刺アリ、三葉ニシテ胡枝子葉ノ如クナルモノアリ、五葉ニシテ月季花葉ノ如クナルモノアリ、皆互生ス、ソノ三葉ノ者ハ、梢ニテハ變ジテ一葉トナリ、ソノ五葉ノ者ハ、梢ニテハ變ジテ三葉或ハ一葉トナル、秋月枝頂ニ花ヲ開ク、形薊花ニ似タリ、白色ノモノ多ク紅色ノモノ少シ、

和產ノ白朮ハ、蒼朮ヨリ苗長大ナリ、葉モ大ニシテ薄ク軟ニ、色モ淺シ、三葉或ハ一葉ナリ、花ハ白色、ソノ根肥大ニシテ拳ノ如シ、世ニ天目白朮又茶椀白朮ト云、此品舶來ニ出デズ、市中ニ貨ルトコロノ和蒼朮和白朮ハ、皆微シテ蒼朮ト爲シ用ベシ、舶來二朮倶ニアリ、白朮ノ中ニ如意手ト呼モノ、漢名雲頭朮、又狗頭朮鷄腿朮アリ、皆上品ナリ、此三名ミナ形ヲ以テ名ク、片白朮アリ、肥根ヲ割開テ曝乾シタルモノナリ、

國より貢せしに、(延喜典藥寮式)武藏國よりは奉らず、されど萬葉集にむさしの、うけらがはなとよみ、今も此國に至て多く、かつ色にづなゆめといへる歌の意を按るに、即今の白花のものとしらる、また稀に赤花のものもあり、アカヲケラといふ、(多識編○中略)たゞし日本書紀以下延喜式等、白朮をあげて、蒼朮をのせず、是によりて考ふれば、當時いまだ蒼朮の名を立られざりしにや、

〔大和本草藥類六〕白朮蒼朮(中略)○　蒼朮ヲキザンデ燒ケバ、邪氣ト惡臭ヲ去リ、疫氣ヲ除ク、常ニタクベシ、爲細末、糊ニ和シ引ノベテ大線香トシ、陰乾シ貯ベシ、

〔和漢三才圖會山草九十二本〕蒼朮　赤朮　仙朮　山薊　山精

本綱昔人止稱朮不分蒼白、自宋以來始分之、(中略)○

按中華之二朮一類二種自明也、倭之二朮一物而宿根如老薑蒼色者爲蒼朮、嫩根白色者爲白朮、然藥肆皆誤以舊根稱白朮、以嫩根稱蒼朮、或蒼白相混不可不擇、其苗高一二尺、一朶三葉、葉末鋸齒而有毛、四五月開花靑色、秋結子大如小豆、蓋生山中者葉硬有微刺、栽人家者葉軟無刺、其葉及根形香氣、和漢相似而花色異、且白朮根形不似鼓槌、然唯似謂雲頭朮者耳、出備後三原者良、伊豫今治次之、武州江戶、藝州廣島、奧州仙臺者又次之、

白朮　楊抱(音孚)　山薊　馬薊　山薑　山連　抱薊　吃力伽(西域)　和名乎介良(中略)○

按唐白朮多如鼓槌者爲佳、近年有川白朮者、卽是削朮而所切片者不佳、蓋古倭亦不分二朮、一稱乎介良、(中略)○　京師五條天神每除夜群集、祈除疫、社前有賣白朮者、皆求之去焉、本草言、歲旦服蒼朮之事與此合、

〔物類品隲草三〕白朮　和名ヲケラ、上古蒼白朮ヲ分タズ、後世分之、弘景曰、白朮葉大有毛而作椏、根甜而少膏、赤朮葉細無毛根小苦而多膏ト、此說二朮ノ形狀ヲ說コト甚明ナリ、然ルニ東璧三五叉ノ物ヲ、蒼朮トスルハ大ナル誤ナリ、白朮處處山中ニ產スルモノ、葉五叉ノモノアリ、三叉ノモノアリ

朮

ヲルザク一名カラザクヅルト云、琉球產物志ニ見ヘタリ、琉球產物志ハ明和庚寅ノ歳、薩州重豪公ヨリ、琉球大島ノ產物千餘品ヲ、東武ノ侍醫坂上氏ニ賜リシヲ圖スルノ書ナリ、

〔新撰字鏡 草〕白朮〈乎介良〉

〔本草和名 六草〕朮、一名山荊、〈仁諝音計〉一名山薑、一名山連、白朮、赤朮、〈陶景注云、凡一物有二種、〉一名山精、〈出抱朴子〉一名山薊、一名薊、〈已上二名出釋藥性、〉一名地脇〈共出兼名苑〉成練紫芝、〈練伏之朮名也、出神仙服餌方、〉和名乎介良、

〔倭名類聚抄 二草〕朮 爾雅注云、朮〈儲律反、和名乎介良、〉似薊生山中、故亦名山薊也、

〔箋注倭名類聚抄 草〕爾雅、朮山薊、郭注、今朮似薊而生山中、此所引蓋舊注、郭依之也、本草陶注云、朮乃有兩種、白朮葉大有毛而作椏、根甜而少膏、赤朮葉細無椏、根小苦而多膏、圖經云、春生苗青色無椏、莖作蒿幹狀青赤色、長三二尺以來、夏開花紫碧色、亦似刺薊花、或有黃白花者、入伏後結子、至秋而苗枯、根似薑而傍有細根、皮黑心黃白色、中有膏液紫色、又云、今白朮生高山崗上、葉葉相對、上有毛、方莖、莖端生花、淡紫碧紅數色、根作椏生、

〔八雲御抄 三上〕朮 うけらが花〈むさし〉 さきてひらけぬ物也、是おけらといふ類也

〔藻鹽草 八草〕白朮

うけらが花〈むさしのにあるさきてひらけぬ物也、歌にもひらけぬよしをよめり、又色にいでめやとしよめり、又いことと讀、又あさか國にしよめり、〉うき草、〈ひの木な云と云説〉〈あれど今けらも、古今に三首四首とよめるし、朮三首四首めるも、〈下略〉〉

〔古今要覽稿 草木〕をけら 白朮

ヲケラの物に見へしは、出雲風土記を始とし又ウケラともいふ〈萬葉集〉〇中略 赤白二種共に、山中におのれと生出しものよろしきよし、大同類聚方に見へたれど、今の本は後世者僞撰なるべければ、いまだたしかに證となしがたし、されども此もの美濃國に產せしは、さらにもいはず、出雲國意宇郡、島根郡、秋鹿郡、楯縫郡、飯石郡等に產し、〈出雲風土記〉また山城、大和、尾張、三河、駿河、安房等、凡三十箇

越後オ°ニ°バ°リ°　キ°ツ°ネ°ノ°ヤ°　キ°ツ°ネ°ノ°ヤ°リ°　ハ°サ°ミ°グ°サ°　ヌ°ス°ビ°ト°播州、衣服ニ實ノ著クモノナ、總テヌスビ°ト°ヽ云、イ°ト°キ°ツ°ネ°ノ°ハ°リ°同上　モ°ノ°ツ°キ°長州　ヲ°ニ°ノ°ヤ°藝州　モ°ノ°グ°ル°ヒ°豐前　シ°ロ°ベ°ト°ロ云フ、　ヤ°ブ°ヌ°ス°ビ°ト°　ヌ°ス°ビ°ト°ノ°ハ°リ°上共同　プ°ツ°カ°ミ°藝州

原野ニ甚多シ、宿子地ニ在リテ春自ラ生ズ、方莖葉ハ楝(センダン)葉ニ似テ毛アリ、枝葉トモニ對生ス、九月ニ至リ、枝梢ゴトニ花ヲ開ク、五瓣淡黄色、大サ四五分、ソノ蔕綠色、形常十八(カウゾリナ)ノ花蔕ノ如シ、花終レバ蔕折キ、五分許ノ細刺多ク毬ヲナシテ、栗ノ毬ノ如シ、是其實ノ熟スルナリ、刺ノ末ゴトニ倒叉アリ、若シ衣服ニ觸レバ、粘著シテ拔去ガタシ、實熟シテ苗根倶ニ枯ル、又一種大葉ナルモノアリ、ハ°タ°ウ°コ°ギ°ト云、又一種小葉ナルモノアリ、

增、天保年間、蠻種ノ鬼鍼草舶來ス、蠻名ド°ル°レ°ケ°ン°プ°ル°ト云、春月種ヲ下シテ、苗ヲ生ズ、方莖ニシテ高サ二三尺、ソノ節紫色ヲ帶ブ、葉莖ニ對生ス、形尋常ノ鬼鍼草ニ似テ、悉ク三葉ニシテ毛茸ナシ、夏月葉間ニ枝ヲ分チ、苞ヲ結ビ花ヲ開ク、五瓣ニシテ白色、大サ四分許、中ニ黄蘂アリ、花後實ヲ結ブ、長サ四分許、末ニ岐アリ、コレモ衣服ニ著ク、又秋種ヲ下スモノハ、冬ヲ經テ春ニ至テ茂盛ス、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　鬼針(カヾリ)草

〔和漢三才圖會九十六蔓草〕項王(カウワウ)草　俗稱、本名未詳

按項王草葉似₂賛波丁子葉₁開₂單黄花₁結₂小莢₁宿根不ㇾ生、當年下ㇾ種卽開ㇾ花、自₂四月₁至₂十月₁有ㇾ花、賛波丁子出₂於蘭草₁

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕千里及　詳ナラズ　一名千里急〇泉州中嶋南紀雜志

增、ハ°マ°ギ°ク°ト呼モノアリ、暖國ノ海濱ニ生ズ、蔓長サ三四尺、節ゴトニ根ヲ生ジテ沙上ニ延布ス、葉互生ス、長サ一寸幅五六分ニシテ、菊葉ニ似テ厚ク、毛茸アリテ糙澀ス、邊ニ鋸齒アリテ菊葉ノ缺刻アルニ異ナリ、秋ニ至テ葉間ゴトニ小黄花ヲ開ク、實ハ結バズ、コレ卽千里及ナリ、琉球ニテ、

同上　香薷三稜草(和カ三物同キ、貢、水青實ル、)サプロタ 江戸 タウワゲ 阿州 タゴマ 肥州 イタチノヒトモトグサ 佐州 ウナギダレ イタチグサ 一名鱧腸(本草綱目) 墨斗草(證類本草) 玄英(本草)

墨漆子(綱目) 住血草(大全) 斷血草(入門) 草血竭(一) 旦方草(綱目) 耐驚菜(本草)

禿子地ニアリテ春末夏初自生ス、舊解ニ二月ニ採ト云ハ誤ナリ、此草路傍溝瀆ノ側ニ多シ、水草ニ非ズ、苗高サ二三尺、葉旋覆花葉ニ似テ、小ニシテ厚ク澁毛アリ、枝葉共ニ對生ス、夏月枝頂ゴトニ花ヲ生ズ、鮮黄白色、中心大ニシテ白色、花後實熟シテ苗根共ニ枯ル、生ノ時莖ヲ摘メバ便チ黒色ニ變ズ、故ニ墨ヲキリ、ツノマヽ字ヲ書ケバ、其色淺黒也、故ニ唐山ニテ墨斗草ト云、墨斗ハヤタテナリ、然レドモ一摘僅ニ一二點ニスギズ、衣服ニ烟草ノヤニノ著タルニ、鱧腸ノ生葉ヲモミナ楷ツクレバ能脱ス、又一種大葉ノモノアリ、ヌマダイコント呼ブ、水草ナリ、渓溝流水中ニ生ズ、苗高サ四五尺、葉ノ形チ潤大ニシテ鋸齒アリ、豨薟葉ニ似テ毛ナシ、兩兩相對ス、花實ノ形チタカサブロウニ異ナラズ、タヾ莖ニ墨汁ナシ、

〔採藥使記(中 武州)〕重康曰、江都王子邊ニ早蓮草ヲ多ク出ス、土人是ヲトリテ黒燒トシ、髮ノ兀ゲタルニ胡麻ノ油ニテ解キ付ル、ロク髮生ズト云フ、

先生檢ズルニ、此草江東所々ニアリ、俗名タタラビ共タカサブラウトモ、香薷三稜草トモ、漢名又鱧腸草トモ云フ、

〔武江產物志(草)〕隨地有之類 鱧腸

〔多識編(二 草)〕鬼針草今案於仁波利、

〔大和本草(九 草)〕鬼鍼草　其實似針似鉄、能著人衣、其葉似棟葉、其花黄、莖方也、初生ズル時蔘ノ如シ、本草濕草ニ載タリ、虎耳草ニハアラズ、

〔重修本草綱目啓蒙(十二 濕草)〕鬼鍼草　センダングサ　キツネバリ 備後　カラスバリ 奥州　石クサ

狼把草

〔重修本草綱目啓蒙 十二隰草〕狼把草　田ウコギ 備州　ヤハズ 江州　ギシギシ 勢州、羊蹄ニモギシギシノ名アリ　カラスヤ 仙臺ニテ食用トス　カハデナ 尾州、同名アリ、　タウコン 豫州　一名權 爾雅　烏階 同上　烏杷 爾雅注

狼把 爾雅疏　秧把草 爾雅郭注

水旁下濕ノ地ニ多シ、三月子生ズ、初生ハ蓼秧ノ如シ、長ズレバ方莖ニシテ細長、葉五箇 本ニ三ツ 排生シテ一葉ヲナス、邊ニアラキ鋸齒アリ、節ニ對シテ生ズ、莖葉共ニ綠色淺シ、秋ニ至リ苗高サ二三尺、枝ノ梢ゴトニ黃花ヲ開ク、鬼鍼草(センダングサ)ノ花ニ似テ、心大ニシテ瓣更ニ小シ、花謝シテ數十刺毬ヲ成ス、鬼針草刺ヨリ短ク、濶クシテ端ニ丫ヲ分チ、聚リテ栗毬ノ如シ、若シ人衣ニ觸レバ粘著シテ脫シガタシ、實熟シテ根枯ル、

タカラカウ

〔大和本草 九雜草〕タカラカウ　フキノ葉ニ似タリ、山濶溼地ニ生ズ、野人其葉ヲホシテ、タバコノ如ク烟ヲスフ、咳嗽ヲ治スト云、一種山フキト云草山ニアリ、タカラカウニ似タリ、秋花サク棣棠花ニハアラズ、又ツハニモアラズ、棣棠モツハモ山フキト云、同名異物ナリ、

鱧腸

〔本草和名 九草〕鱧腸 仁諝音禮　一名蓮子草 出蘇敬注　和名宇末岐多之、

〔倭名類聚抄 二十草〕鱧腸草　本草云、鱧腸草、鱧音禮、和名宇末木太之、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇注、鱧腸云、苗似旋復、一名蓮子草、所在坑渠間有之、圖經云、此有二種、一種葉似柳而光澤、莖似馬齒莧、高一二尺許、花細而白、其實若小蓮房、蘇恭云、苗似旋復者是也、一種苗梗枯瘦、頗似蓮花而黃色、實亦作房而圓、南人謂之蓮翹者、二種摘其苗、皆有汁出、須臾而黑、時珍云、旱蓮有二種、一種苗似旋覆而花白細者、是鱧腸、一種花黃紫而結房如蓮房者、乃是小蓮翹也、又曰、鱧烏魚也、其腹亦烏、此草柔莖、斷之有墨汁出、故俗呼墨菜、

〔多識編 二隰草〕鱧腸、宇末岐多之、今案多多良比、

〔重修本草綱目啓蒙 十二隰草〕鱧腸　タコラビ　タカサブラフ　ウナギツカミ 若州　クナギコロシ

淡小便五六度洩ぐべし、五六月に萌ば、冬より春にかけて咲也、又七月に萌ば、いづれ秋の彼岸前と同時に咲也、故に時しらずの名あり、

〔本草和名 十一草〕狗舌草、唐、

〔和爾雅 二草木〕狗舌草

〔大和本草 九雜草〕鸕鷀草 倭名ナリ、魚骨ノシンドニ立タルヲ治ス、スリクダキテ汁ヲノムベシ、莖高キコト二尺許、葉モ花モ似金鷄草、葉ニ白毛アリ、三月開黃花、近道澤中處々多シ、或曰、是本草二十七卷所載東風菜ナラント云、本草ニ似杏葉ト云ハ與此異リ、然ドモ似杏葉而長トアレバ是ナランカ、或曰、是本草濕草下ニ載タル狗舌草也ト、然ドモ葉ノ狀花ノ色與此不同、又一種與此相似テ枝多キ物アリ、ウクタナニハ枝ナシ、別ツベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十一濕草〕狗舌草 フヂサハギク 江戸 ウグサ 筑前 ウバナ サハヲグルマ 大和 本草 ナハジナ 正誤 ウシノシタ サハモタカウ サハギク サハグルマ 江戸花戸 野シヲン カナブク チャウト 筑後

骨硬ニコノ自然汁ヲ飲メバ効アリト云、故ニ鸕鷀グサ、或ハウバイナノ名アリ、池澤溝渠邊ニ生ズ、水草ナリ、葉ハ萵苣葉ニ似テ厚ク、深綠色ニシテ長キ白毛多シ、初ハ地ニ就テ叢生ス、春末圓莖ヲ抽ヅ、高サ二三尺、中空シテ外ニ白毛多シ、小葉互生シ、莖頭ニ多ク枝ヲ分チ花ヲ開ク、黃蘂黃心、形チ旋覆ノ花ノ如ク、大サ錢ノ如シ、後白絮ヲ爲シテ飛ブ、其根形紫菀根ニ似テ白色、藥肆ニテ紫菀ニ僞ル、一種千葉ノ者ヲ九輪草 花戸 スイバチ、シノビダルマ 江戸種樹家 ト云、又一種山中ニ生ズルアリ、莖小ニシテ白毛ナシ、花ハ單瓣ナリ、又一種木曾和田峠淺間山、及加州ニハ單瓣紅花ナルモノアリ、加州方言ヤマダイトウト云、

〔武江產物志 野菜草〕井ノ頭邊ノ產 狗舌草 德川村

金盞草

莖頭ニアツマリテ簪花ノ如ニシテ小ナリ、白色黄蘂花罷テ苗枯ル、旁ニ根蔓ヒロガリテ、苗多ク生ルコト旋覆花ノ如シ、

〔廣益地錦抄六〕白苑　宿根より春生、葉はしをんよりみじかく、よこへ少ひろし、初生地に敷、莖出て五六尺迄にのび立、花はしをんのごとくにて白し、しをんと同時にひらくる草也、植てながめ有、又一種小しをんと云草あり、花至て小りん白し、草立葉共にしをんのごとくにて小草なり、二尺ばかりのび立ッ花壇にうへてしほらし、宿根より春生、

〔多識編二草〕金盞草、今案比。米。加。左。加。豆。岐。俗稱金盞花、

〔大和本草七花草〕金盞花　キンセン花ナリ、花金紅色、八月ニ子ヲマキテ臘月ヨリ花ヒラキ、春尤盛ナリ、四時相ツグ、故又常春花ト云、本草及諸書ニ出タリ、春花最ヨシ、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕金盞草　キ。ン。セ。ン。ク。ハ。　ト。コ。ナ。ツ。バ。ナ。　フ。ダ。ン。バ。ナ。　ト。キ。シ。ラ。ズ。　ケ。イ。セ。イ。ク。ハ。ン。加州　ア。リ。ヤ。ケ。筑州　コ。ガ。子。グ。サ。　一名常春花汝南圃史　長春菊花疏　回回菊三才圖繪　金盞兒野菜譜　髙苣花潼生八牋、菜部髙苣ニモ金盞花ノ名アルコト、秘傳花鏡ニ見エタリ、

家ニ栽テ瓶花ニ供ス、葉細長ニシテ尖ラズ、鼠麴草ノ葉ニ似テ、大ニシテ白色ヲ帶ブ、初メ地ニ就テ叢生ス、取テ食料ニ供ス、春月莖ヲ抽ブ、高サ六七寸、枝頭ゴトニ花ヲ開キ、久シク相續グ、形單瓣ノ菊花ニ似テ小ク正開セズ、常ニ盞子樣ヲナス、紅黄色赤淡黄色ノ者アリ、花後實ヲ結ブ、其形屈曲シテ蟲ノ狀ニ似タリ、蘇頌變生一小蟲ト云ハ非ナルコト時珍辨ゼリ、本邦ニテ和名金錢花ト云ハ誤リナリ、唐山ニテ錢ト云ハ滿開シタル者ヲ云、金盞草ノ花ハ半開キニシテ盞ノ如シ、故ニ金盞花ノ名アリ、牛時花旋覆花ハ正ク開ク、故ニ金錢花ノ名アリ、

〔剪花翁傳二三月開花〕金仙花　又金盞花、色赤黄也、常の如くに秋の彼岸に下種すれば、開花三月中旬より四月中旬まであり、方日向、地一分濕、土えらばず、肥淡小便、下種布肥して蒔べし、花までに

紫色ニシテ微青ヲ帶ビ黄心アリ、此根ヲ採テ藥用トス、一窠ニ叢心ノ大サノ細根數多ク集リ、紫赤色ナリ、濱渡モアリ、藥店ニ賣ルモノニ根色白キアリ、僞ナリ、必ズ折レヤスシ、コレ狗舌草ノ根ナリ、軟ニシテ折レガタク、色紫ナルモノ眞物也、一種メ。ジ。ワ。ン。ト云アリ、苗葉花俱ニオホジワント同クシテ小ナリ、葉ノ長サ五寸、莖高サ三四尺、一種黄花ノ者アリ苗低小葉亦小ナリ、コレヲ黄。ジ。ワ。ン。ト云、ワウヲントモ云フ、

〔剪花翁傳 三 六月開花〕早紫菀(はやしをん)。　花紅藤色也、形小車に似たり、開花六月中旬、方三分、陰地擇ばず、土圃塵肥濃小便、立秋より澆ぐべし、又寒中より春にかけて澆ぐべし、株は多より春芽出し前よし、種登らず、よて根に玉あり、丸く大きなるを撰み、植て悉く花出るなり、小玉長玉などは花上りがたし、

〔剪花翁傳 七 七月開花〕和唐紫菀。。。　花紅藤色、開花七月上旬也、房の形は毛毬のごとくなれど、英しまらず、中品とす、育方いづれも同じ、

和。紫。菀。　花一重、色紅藤、開花七月中旬也、花枝ともにしまらず、中品とす、育方いづれもおなじ、

〔剪花翁傳 八 八月開花〕紺紫菀。。。　花の色濃青し、開花八月中旬より九月迄咲也、花枝ともにしまらず中品とす、育方同じ、

〔延喜式 三十七 典藥寮〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、(中略)紫菀三斤、　大和國卅八種、○中略紫菀六斤、○下略

〔本草和名 九 草〕女菀、一名白菀、一名織女、一名茆、(仁諝音)一名白葛、(出范汪方)一名如茆、(出雜要訣)和名惠。美。乃。岐。

〔重修本草綱目啓蒙 十一 草四〕女菀　コ。ジ。ワ。ン。　ト。ウ。シ。ワ。ン。　ヒ。メ。シ。ワ。ン。

京師ニハ野生ナシ、種ヲ傳テ栽ユ、東武ニハ自生アリ、葉ハ旋覆花(ヲグルマ)ノ葉ニ似テ小シテ尖ラズ、長サ三寸許リ、闊サ六七分、初ハ地ニ就テ叢生ス、夏ニ至テ莖ヲ抽ルコト高サ二三尺、其葉互生ス、花ハ

一名紫蒨、(出雜要訣)和名乃。之。

〔倭名類聚抄 草二十〕紫菀 本草云、紫菀一名紫蒨、(七見反、和名能之、俗云之乎邇、)

〔箋注倭名類聚抄 草十〕按說文云、菀茈菀、出漢中房陵、又云、苑所以養禽獸也、二字不同、千祿字書亦云、菀苑、上藥名、下園苑、蓋晉唐人多園苑字作菀、故顏氏正之也、而未見紫菀字作苑者、千金翼方、證類本草亦作紫菀、則此作菀爲是、然本草和名、新撰字鏡皆作苑、蓋皇國古俗通用也、陶弘景云、生布地、花亦紫、本有白色毛、根甚柔細、日華子曰、形似重臺、根作節、紫色潤軟者佳、圖經云、三月內布地生苗葉、其葉三四相連、五月六月內開黃紫白花、結黑子、李時珍曰、其根色紫而柔宛故名、〇中略 按羊蹄訓之、見下文、紫菀葉似羊蹄、在曠野中、故名能之、

〔今古和歌集 物名十〕しをに

ふりはへていざふるさとの花みんとこしをにほひぞうつろひにける　よみ人しらず

〔倭字例 附錄〕しをに

しをには紫菀なり、菀は遠と同音にて、漢音エン、呉音ヲン、合口音舌內聲なる故にヲニとなれり、倭名抄に、紫菀和名之乎邇、また若狹國郷名、遠敷を乎爾不とあり、

〔重修本草綱目啓蒙 十一隰草〕紫菀 ヲニノシコグサ(萬葉集) ヒツジグサ(古歌) ノシ(和名鈔) シヲニ(同上、古今集、) シヲン(枕草子) 一名萬金茸(綱目拾遺) 還魂草(群芳譜) 紫蒨(同上) 頭刺草(江都新志) 迫伊遇(村家方)

今別ニコジヲンアル故ニ、此ヲ大ジヲント云、菀ノ字一說ニ鬱ノ音トス、本草備要ニ菀音鬱、藥性纂要ニ菀古鬱字、本草彙言ニ菀ハ鬱也ト云リ、

紫菀ハ人家ニ栽テ花ヲ賞ス、一タビ栽レバ根旁引シテ甚繁殖ス、又野生モ稀レニアリ、葉ハ春舊根ヨリ叢生ス、木香葉ニ似テ小クシテ糙澀ナリ、邊ニ鋸齒アリ、深綠色、一根數莖、秋ニ至テ高サ七八尺、葉互生ス、莖ノ末ニ多ク枝ヲ分チ、單瓣ノ花ヲ開キ、數百傘狀ヲナス、形雞兒腸ノ花ノ如ク淡

〔藥種抄 草八〕和名少々　天名精 はろし

〔多識編 二草〕天名精、波底太賀那、又稱伊奴乃志利、今案伊乃志利久左、異名天蔓菁、地菘

〔和爾雅 七草木〕天名精（天蔓菁、地菘、豕首、蟾蜍蘭、覲、天門精、玉門精、彘顱、蝦蟆藍、麥句薑、活鹿草、劉𢷋草、牛蝨、）

〔重修本草綱目啓蒙 十草〕天名精　イヌノシリ古名　イノシリグサ同上　ハマフクラ和名鈔　ハ
マタカナ同上　ヤブタバコ古今　ヤブチノタバコ　イノジリ勢州　ウラジロ佐渡　ハイ
グサ播州　一名天蔓（地菘）　羅而地菘花（書明）　雪裏青（…）　劫枝草同上　長青草同上　過
冬青（…）　蝦蟆藍（正字外科）　狐尖尿（本草…）　皺皮草（外…）　覲（本草…）　鹿活草（…）　鶴蝨一
名鶴蝨（本草原始）
多ク野生アリ、人家ニモ生ズ、初ハ地ニ鋪テ叢生ス、煙草葉ニ似テ小ク、纖齒皺毛臭氣アリ、長サ尺
餘夏秋ノ間ニハ莖高サ二三尺ニ至ル葉互生ス、葉間ニ花ヲ開ク、野菊花ノ心ノ如ニシテ黄色ナ
リ、野ハ綠色、葉間ニ一花ノミ生ズルモアリ、又多ク攅簇スルモアリ、此實ヲ鶴蝨トシ、根ヲ土牛膝
トスト云、然レドモ元ト本草ニハ天名精ト鶴蝨ト別條ナリシヲ、時珍綱目ヲ著ス時、沈存中ノ說
ニヨリ、唐本草ノ鶴蝨ヲ併入テ一物トス、故ニ古鶴蝨ト云ハ、天名精ノ實ニ非ザルコトヲ、藥性纂
要ニ辨ジ、ソノ形狀モ詳ニ說ケリ、ソノ鶴蝨ハ即俗ニヤブジラミト呼ブ者ニシテ、此實ヲ今藥舖
ニ蛇床子ト名ケテ貨ス、然レドモ殺蟲ノ功ナシ、葉ハ胡蘿蔔葉ニ似タリ、故ニノニンジント呼ブ、
實ハ熟シテ人衣ニ著ク、故ニヤブジラミト云、寬政巳年舶來ノ鶴蝨モ、此ト同ジキ時ハ、藥性纂要
ノ說ヲ是トスベシ、天名精ノ實ヲ鶴蝨トスルハ非ナリ、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　天名精(ヤブタバコ)

〔新撰字鏡 草〕紫菀（加乃志太）

〔本草和名 草八〕紫菀、一名紫倩（此見反）　一名青苑　一名青苑、一名白菀（出陶景注）　一名女菀（出蘇敬注）　一名織女菀（出雜要訣）

天名精

滑ニシテ手ニ著易シ、莖ヲ連テ花ヲ取リテ、地上ニ落シテ提レバ砂土粘著ス、故ニイシモチノ名アリ、此萼上ニ小梂アリ、梂上ニ花ヲ開ク、獨最小ニシテ黃色、天名精花ニ似テ小ナリ、花衰テ梂内ニ實ヲ結ブ、岡蒿子ヨリ細ク、天名精子ヨリアラシ、黏シテ苗根共ニ枯ル、

〔徒然草上〕めなもみといふ草あり、くちはみにさゝれたる人、かの草をもみてつければ、則いゆとなん、見しりてをくべし

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　豨薟(めなもみ)

〔本草和名草七〕天名精、一名麥句姜、(蘇注云、味甘辛、故有姜名、)一名蝦蟆藍、(蘇敬注云、狀似藍、故以名之、)一名豕首、一名天門精、一名玉門精、一名彘顱、一名蟾蜍蘭、(蘇敬注云、香氣似蘭、故以名之、)一名覲、一名豨薟、一名豨首、(仁諝音虛豈反、已上二名出陶景注、)一名鹿活草、一名天蔓菁、一名地菘、(已上三名出蘇敬注、)一名天精、一名天蕪菁、一名葵蘆、(已上三名出釋藥注、)一名蘱、一名蟾諸蘭、(已上二名出雜要訣、)和名波末多加奈、一名波末布久良、

〔倭名類聚抄草二十〕天名精　本草云、天名精一名麥句薑、(和名波末太加奈、一云波萬不久良、)蘇敬注云、味甘辛、故有薑稱矣、

〔箋注倭名類聚抄草十〕爾雅云、茢薽、豕首、本草又云、一名豕首、一名天門精、陶注云、此即今人呼爲豨薟、亦名豨首、蘇注又云、鹿活草是也、別錄一名天蔓菁、南人名爲地菘、其豨薟苦而臭、名精乃辛而香、全不相類也、蜀本圖經云、地菘也、小品方名天蕪菁、一名天蔓菁、夏秋抽條、頗似薄荷、花紫白色、其葉似山南菘菜、陳藏器曰、天蔓菁地菘與蔓菁相似、故有此名、爾雅云、大菊、蘧麥、郭注云、麥句薑、蘧麥、即今之瞿麥、然終非麥句薑、爾雅注錯如此、據陳說作天蔓菁爲正、作名精、作門精、皆聲之訛也、開寶本草云、地菘生人家及路傍陰處、所在有之、高二三寸、葉似菘葉而小、李時珍曰、嫩苗綠色、似皺葉菘芥、微有狐氣、長則起苗、莖間小黃花、如小野菊花、結實如茼蒿子、亦相似、最粘人衣、狐氣尤甚、其根白色、如短牛膝、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕葈耳　ヲナモミ　ムマノヽミ鍋島　ナモミ鍋島名鍋　一名野落蘇醫學集要

胡葈子大倉州志　瑞草瑞應圖　羊帶歸醫學入門　豬刺千金　升古休伊月令釋取　吐叱古个里村家方　胡葈

草襄陵府志　增一名耳中璫綱目　蒼耳綱目　野茄江陵府志　虛葈母大倉州志　野縑絲附方

此草ヲ圖ニヨリテメナモミト云、其實大ナル故ナリ、然レドモ非ナリ、野生多アリ、春生ジ秋後根枯ル、葉ハ茄葉ニ似テ刻ナク紫色ナラズ、互生ス、莖高サ三五尺、瘠地ノモノハ短シ、夏月莖頭ニ白花ヲ開キ實ヲ結ブ、形桃葉珊瑚實ニ似テ小ク、兩頭尖リテ硬キ刺多シ、熟スレバ衣服ニ粘著ス、故ニ羊負來ノ名アリ、此實毛氈ニツキ來リタルヲ藥ニ用ルヲ、附方ニ氈中蒼耳ト云、秋末ニ至テ苗根共ニ枯ル、ソノ實地ニ落ルモノ、春ニ至テ自ラ生ズ、

〔多識編二草〕豨薟、今案米那毛美、異名火杴草、本草

〔大和本草六〕豨薟　和名ヲナモミ、功能甚良シ、殊風痺ニ用コトヲ、本草綱目唐愼微ガ說ヲノセタリ、成訥及張詠豨薟丸ヲ天子ニ進ムル表アリ、其表ノ內ニ、誰知至賤之中、乃有殊常之效ノ文アリ其藥至賤ニシテ、非常ノ效アル物甚多シ、黃精萎蕤鼠多、薏苡、胡麻、蒼耳ノ類ナリ、李中梓ハ愼微ガ擧之太過ナル事ヲソシレリ、今俗ニ豨薟ト稱スル草一種アリ、與本草時珍之說不合宜詳之、蘇頌說似タリ、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕豨薟　メナモミ　モチナモミ古方書　秋ポコリ石州　一名稀實草醫學集要

火杴唐本　豨仙品字箋　白花菜八閩通志　豨尖拧本草原始

圖ニヨリテ此草ヲオナモミト云、武藏筑前モ然リ、故ニ大和本草ニモオナモミト訓ズ、並ニ方言ナレドモ混ジ易キ故、蒼耳ヲオナモミト訓ズベシ、豨薟ハ原野ニ極テ多シ、宿子地ニアリテ春苗ヲ生ズ、方莖ニシテ枝葉兩對ス、葉形團尖ニシテ鋸齒アリ、苧麻(カラムシ)葉向日葵(ヒマハリ)葉ニ似テ、薄軟ニシテ毛茸アリ、莖ノ高サ三四尺、秋枝端ゴトニ花ヲ開ク、ソノ萼五ツニ分レ、細長ク厚クシテ毛アリ、毛粘

葈耳

アザミ(奥州)

山野共ニアリ、好テ溪澗地澤ノ旁ニ生ズ、繁茂シヤスシ、葉宿根ヨリ叢生ス、ソノ形一ナラズ、小薊葉ニ似タルモアリ、又羊蹄(ギシ〳〵)葉ニ似テ短ク、淺鋸齒アルモアリ、皆葉邊及莖ニ刺アリ、葉ノ長サ三五寸、大ナル者ハ尺餘ニ至ル、八九月莖ノ高サ三五尺、枝ヲ分チ花ヲ開ク、淺紫色、大薊(ヤマアザミ)花ノ形チニ似テ、旁ニ向テ開ク、其苗嫩ナル時食フベシ、故ニトチナノ方言アリ、

〔新撰字鏡(草)〕葈耳實(奈毛彌)

〔本草和名(入草)〕葈耳(仁諝上音思以反)一名胡葈、一名地葵、一名葹(楊玄操音私)一名常思菜、一名羊負來(陶景注云、昔中國无此、言從外國逐羊毛中來、)一名蒼耳(出蘇敬注)一名金盞(出兼名苑)一名菤耳(居轉反)一名苓耳(已上出爾雅)和名奈毛美、

〔倭名類聚抄(二十草)〕葈耳　陶隱居本草注云、葈耳一名羊負來(葈音子、和名奈毛美、)昔中國無此草、從外國逐羊毛中而來、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄(十草)〕今俗呼乎奈毛美、呼蒼耳為米奈毛美、(中略)○按御覽引博物志云、洛中人有驅羊入蜀者、胡葈子著羊毛、蜀人取種之、因名羊負來、陶說本之、王念孫云、負來疊韻字、無煩曲說、草名取於牛馬羊豕雞狗者、不必皆有實事、況采采卷耳、周南所詠、又不得言中國無此草也、爾雅菤耳、苓耳、郭璞注云、廣雅云枲耳也、亦云胡枲、江東呼為常枲、或曰、苓耳形似鼠耳、叢生如盤、詩卷耳正義引陸機疏云、卷耳葉青白色似胡荽、白華細莖蔓生、可煮為茹、滑而少味、四月中生子、如婦人耳中璫、今或謂之璫草、幽州謂之爵耳、圖經云、詩人謂之菤耳、爾雅謂之蒼耳、廣雅謂之葈耳、皆以實得名也、時珍曰、其葉形如葈麻、故有葈耳名、禹錫引爾雅作菤耳蒼耳、陶注又云、此是常思菜、傖人皆食之、以葉覆麥作黃衣者、蘇敬孟詵謂之蒼耳、時珍曰、救急本草云、蒼耳葉青白、類粘糊菜葉、秋間結實、比桑椹短小而多刺、

〔多識編(二隰草)〕葈耳、和名那毛美、今按於那毛美、異名常思、(弘景)

〔和漢三才圖會 九十四本濕草〕飛廉 木禾 飛雉 飛輕 伏兎 伏豬 天薺 和名曾曾木、一云布保保天、久佐、○中略

按漏盧飛廉、越州田野間有之、而識者共希也、唐漏盧頗似遠志、而不似細牛蒡、近年不來、

〔重修本草綱目啓蒙 十濕草〕飛廉 ツヽキ和名鈔 フヽクタナ同上 オニノマユハキ オニアザミ ミヤハズアザミ ヒレアザミ 一名飛廉蒿同方

夏ノ末子生ズ、葉ハ小薊葉ニ似テ黄緑色刺多シ、秋冬ハ地ニ就テ叢生ス、春ニ至リ漸ク薹ヲ抽テ三五尺ニ至ル、枝葉共ニ互生ス、莖ニ薄キ羽數條起リテ、鬼箭羽ノ如ク更ニ刺多シ、陶氏ノ說ニ、葉下附莖輕有皮、起似箭羽ト云是ナリ、夏ニ至テ枝ノ末ゴトニ花ヲ開ク、小薊花ニ似テ小ナリ、見ニ足ラズ、花後白絮トナリ、風ニ隨テ飛ブ、絮ゴトニ一子アリ、落ル處卽生ジ、苗根共ニ枯ル、白花ノ者ハ多アリ、紫花ノ者ハ少シ、

〔本草和名 十一草〕苦芺 楊玄操音烏老反 一名鉤芺 出崔禹 和名加未奈、一名加美於古之奈、

〔倭名類聚抄 二十草〕苦芺 本草云、苦芺 烏老反、和名加美奈、一云加美於古之奈、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蜀本圖經云、子若猫薊、莖圓無刺、李時珍曰、芺大如拇指、中空、莖頭有薹似薊、初生可食、引造化權輿云、苦芺大者名苦蘵、葉如地黃、味苦、初生有白毛、入夏抽莖有毛、開白花甚繁、結細實、其無花實者、名地膽草、汁苦如膽也、又曰、凡物穉曰芺、此物嫩時可食、故以名之、

〔和爾雅 七草木〕苦芺 カマナ 鉤芺、苦蘵同、

〔和漢三才圖會 九十四本濕草〕苦芺 ○中略

按苦芺原野濕地多有之、花淺紫似薊而瘦、葉亦色淡不繁、莖無刺、稱女阿左美、以薊名鬼阿左美、

一種有菊薊者、莖葉似苦芺、而莖有白汁、至秋高三四尺、開黃花、似八重小菊而美、葉似苦蕒及苦芺、花似薊、故名菊薊、

〔重修本草綱目啓蒙 十濕草〕苦芺 カマナ カミツコシナ 以上古名 ヒメアザミ トチナ 加州 ヘラ

飛廉

盧、海州漏盧ハ根ノ黑キヲ以テ名ク、漏盧古ヨリ漢渡ナシ、　本邦市人舶來遠志ノ中ヨリ根形粗大ナル者ヲ擇出シ、漏盧ト名ケ售リ來レリ、直根ニシテ淡黃色、此者決シテ遠志ニ非ズ、明和六年己丑ノ頃ヨリ、舶來ノ漏盧ヲ京師ニ賣ル、卽遠志中ヨリ擇出者ニ異ナラズ、根ノ長サ五寸許、皆蘆頭ニ鬚アリ、偶枯葉ノツキタルアリテ、瞞視スルニヒゴタイニ異ナラズ、故ニ單州漏盧ヲタマホウキトスル說ヲ改テヒゴタイトス、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥
山城國卅二種、〈中略〉漏盧、菜本各九斤、　攝津國卌四種、獨活、漏盧各五斤、〈下略〉

〔武江產物志藥草〕鼠山ノ產　漏盧〈ヒゴタイ〉

〔本草和名草七〕飛廉、一名飛輕、一名漏蘆、〈陶景注云、俗有漏盧、非此別名、〉一名天薺、一名伏猪、一名伏兎、一名飛雉、一名木禾、〈出本經〉一名天買、〈出大淸經〉一名苦矢、〈矢疑笑誤、出神仙服餌方〉已上和名曾々木、一名布保々天久佐、

〔倭名類聚抄草二十〕飛廉草　本草云、飛廉草、〈和名曾々木、一云布保々天久佐、〉

〔箋注倭名類聚抄草十〕陶注云、極似苦芺、惟葉下附莖、輕有皮起似箭羽、葉又多刻缺、花紫色、蘇云、此有兩種、一是陶說生平澤中者、其生山岡上者、葉頗相似而無疎缺、且多毛、莖亦無羽、根直下、更無傍枝、生則肉白皮黑、中有黑脈、日乾則黑如玄參、王念孫曰、本草飛廉一名飛輕、陶注亦云、飛廉莖輕、則飛廉之名、殆取義于輕、與陶注本草蜚蠊云、形似䗪蟲而輕少能飛、亦其義也、

〔多識編臨草二〕飛廉曾曾岐、又稱之於天、異名木禾、〈別錄〉

〔和爾雅草七木〕飛廉〈ヤユノマユハキ〉〈漏盧、木天、天薺、飛雉並同、〉

〔大和本草雜草九〕飛廉　鬼ノマユハキト云、鬼アザミニ似テ、莖ノ四方ニ鬼箭ノ如クニ、矢ノ羽ノ如ナルヒレアリ、針モアリ、花モ鬼アザミニ似タリ、或說ニシホデト訓ズ、シホデハ蔓草ナリ、是ニアラズ、飛廉ノ和名ヲモシホデト云歟イブカシ、

タマボウキヲ以テ單州漏盧ニ充ツ、穩ナラズ、タマバウキハ山野ニ多シ、葉ハ敗醬葉ニ似テ長大ナリ、又紫藤葉ニ似テ花皷アリ、一根ニ叢生ス、莖ヲ抽ブルコト高サ三五尺、葉互生ス、秋ニ至テ枝頭ゴトニ花ヲ開ク、小薊花ニ似テ紫色刺ハナシ、漢名詳ナラズ、沂州者花葉頗似牡丹云云、沂州漏盧ハ御牡丹葉漏盧ナリ、秘傳花鏡ニハ秋牡丹一名秋芍藥ト云、和名キブチギク、京カウライギク、濃州八朔牡丹、長州アキ牡丹、相州カハギク、紀州カバギク、泉州トウギク、大和本草紫衣ギク、三才圖繪ハマギク、雲州レマギク、筑後ムメウサウ、南部ナツマギク、江州カブラギク、加賀小松カブロギク、野州山田シウメイギク、同上久井タハンノンギク、播州林田ランギク、同上立野カラギク、能登タサボタン、江州

山中濕側ニ生ズ、人家ニモ栽ユ、蓋蒙茂ス、城州ニハ貴船山中ニ自生多シ、故キブチギクト云、春宿根ヨリ葉ヲ叢生ス、形三枝九葉ニシテ、大抵牡丹葉ニ類シ尖リテ毛茸アリ、夏月莖ヲ抽コト三四尺、八九月ニ至リ枝頭ゴトニ一花アリ、形菊花ノ如ク二三重ナリ、大サ一寸餘、初ハ紫紅色後ハ色淡シ、背ニ白毛アリ、花中ニ黄小心アリ、花後實ヲ結バズ、冬ニ至テ苗枯ル、春ニ至レバ根額ノ末、皆苗ヲ發スルコト、金鍼草ノ如シ、

秦州ノ者花似單葉寒菊紫色云云、秦州漏盧ハ御釋名ノ野蘭ニシテ、即救荒本草ノ六月菊ナリ、和名ノシユンキク略シテシユンキクト云、岡嵩ト同名ナリ、雞兒腸ノ種類ニシテ深山ニ生ズ、人家ニモ多ク栽ユ、枝ヲ扦レテヨク活ス、葉ハ雞兒腸葉ヨリ濶クシテ深緑色、莖紫黒色、三月ニ花サク、單辨ニシテ淡紫碧色、雞兒腸ノ花ニ異ナラズ、又白花モアリ、

海州ノ者花紫碧如單葉蓮花云云、海州漏盧ハ絲頭漏盧ニシテ即山草類ノ白頭翁ナリ、和名ゼガイサウ、

時珍ノ說ニ、莢蒾一名漏盧云云、莢蒾漏盧ハ卽次ノ條ノ莢蒾ナリ、以上七種ノ漏盧ノ内、眞ノ漏盧

單州漏盧ハ苗ノ枯レテ黒キヲ以テ名ク、秦州漏盧ハ莖幹ノ紫黒色ナルヲ以名ク、木、藜蘆、沂州漏

載、有單州者、有沂州者、有秦州者、有海州者、單州者、大倭本草所謂平江帶、沂州者今俗呼黃船菊、或呼秋牡丹、或呼秋明菊、秦州者卽救荒本草六月菊、今俗呼野春菊、或單呼春菊、海州者、卽白頭翁、又飛廉亦名漏盧、見別錄、皆非此所載也、李時珍曰、屋之西北黑處謂之漏、凡物黑色謂之盧、此草秋後卽黑、異於秋草、故有漏盧之稱、小野氏曰、一名野蘭、蕫蕳、六月菊、然則秦州漏盧也、

〔藻鹽草八草〕和名少々　漏盧ありくさ

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕漏盧　クログサ　アリグサ古名　一名北漏（衛生寶鑑）　伐曲大（鄕藥本草）　莢蒿　大（村家方）　漏盧蒿（外臺秘要）

集解ニ說トコロ品類多シ、先師七種ノ辨アリ、饒谷氏遂テ漏盧考證ヲ著ス、ソノ七種ハ恭ノ說ニ俗名莢蒿ト云ハ、卽釋名ニ鬼油麻ト云、時珍ノ說ニ眞ノ漏盧ト云モノ也、和名ヒキヨモギ、一名ヨモギモドキ、淺山向陽ノ地ニ生ズ、苗高サ二三尺、葉ハ艾葉ニ似テ小ク薄ク、花岐多クシテ毛茸アリ、黃綠色ニシテ微紫ヲ帶ブ、背ニ白色ナシ、皆兩對シテ密ナリ、六七月梢ノ葉間ゴトニ花ヲ生ズ、鳳蝶ニ似タリ、大サ二三分、黃色花下ニ細房アリ、長サ五六分、形圓ニシテ堅ニ數稜アリテ、胡麻房ノ如ニシテ小シ、故ニ鬼油麻ノ說アリ、馬志ノ說ニ似油麻房ト云モノ之ヲ指ナリ、房內ニ小子多シ、罌粟ノ子ヨリ小ナリ、八月ニ至リ苗枯レ黑クナルコト、余草ニ異ナリ、

弘景藏器ノ說ハ、其ニ木藜蘆ナリ、毒草類ニ本條アリ、俗名ハナヒリノキ、北國ニテアタシヨギト云、小木ナリ、頌ノ說ニ單州者ト云云、單州漏盧ハ和名ヒゴタイ、大和本草ニハ平江帶ト書リ、唐山ヨリ此種渡リシ時、此名ヲ書來リシト云リ、然レドモ唐山ノ書ニテ、未此名ヲ見ズ、花戶ニテハ肥後薹ト云、苗ハ春宿根ヨリ叢生ス、小薊葉ニ似テ大ニシテ厚ク刺ナシ、長サ二尺許、背ニ白毛アリ、夏已後莖ヲ抽コト高サ四五尺餘、小葉互生ス、初秋莖頂ニ花アリ、藍紫色ノ小花數多簇リテ毬ヲナス、形正圓ニシテ山芹菜花毬ノ如ク、下ニ萼ナシ、大サ寸餘、世人多ク七夕ノ瓶花ニ用ユ、古ヨリ

を專らにすべし、下種秋彼岸にまくべし、

〔令義解 三 賦役〕凡〇中略正丁一人、紫三兩、紅三兩、

〔延喜式 二十四 主計〕凡中男一人輸作物〇中略紅花二兩、

伊賀國〇中略 中男作物紅花七斤八兩、

〔播磨風土記 揖保郡〕阿爲山、品太天皇御〇中略之世、紅草生於此山、故號阿爲山、

〔萬葉集 十 夏相聞〕寄花

外耳見筒戀牟、紅乃末採花乃、色不出友、

〔古今和歌集 十一 戀〕題しらず

人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花の色に出なむ　よみ人しらず

〔新撰字鏡 草〕漏盧 奴。々。美。久。佐。

〔本草和名 七 草〕漏盧 楊玄操音力魚反 一名野蘭、一名鹿驪根、出陶景注、仁諝音知力反、蘇敬注云、是木藜蘆也、非漏盧、一名莢蒿、出蘇敬注、和名久。呂。久。佐。一名阿。利。久。佐。

〔倭名類聚抄 二十 草〕漏盧 本草云、漏盧一名野蘭、和名久呂久佐、一云宇里久佐、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕陶注云、俗中取根、名鹿驪根、蘇注云、此藥俗名莢蒿、莖葉似白蒿、花黃、生莢長似細麻、如筯許、有四五瓣、七月八月後皆黑、異於衆草、蒿之類也、其鹿驪、山南謂之木藜蘆、有毒、非漏盧也、陳藏器曰、樹生如茱萸、樹高二三尺、別本注云、漏盧莖筋大、高四五尺、子房似油麻房而小、蜀本圖經云、葉似角蒿、下濕地最多、六月七月採莖、日乾之、黑於衆草、〇中略 陶弘景所說鹿驪、一名木藜蘆、陳藏器所說者亦是耳、今俗呼波奈比利乃岐、蘇敬所說俗名莢蒿、開寶本草、蜀本圖經所云皆同、沈氏筆談云、今閩中所謂漏盧、莖如油麻、高六七尺、秋深根黑如漆、乃眞漏盧也、亦謂此也、今俗呼與毛伎毛土岐、按陶所說漏盧、即木藜蘆、不得謂之爲久佐、則所謂久呂久佐、蓋謂蘇所說漏盧也、又圖經所

摘ベシ、紅花ヲ摘採ベキノ候ト云フハ、其花滿開シテ翻反リ、其中三片紅色ニナリタルヲ、時トシテ摘ミ採ルベシ、何トナレバ其花既ニ翻反ト雖ドモ、唯黃色ナルノミニテ、一片モ紅ナラザルヲ摘タルハ臙脂少シ、又過半紅色ニナル迄モ、摘ミ採ザルトキハ、亦臙脂ノ出ルコト大ニ減ズル者ナリ、所謂其花眞黃色ナルガ、翻反テ其中三片紅ニナリタル時ハ、臙脂ノ十分ニ、其花ニ充滿タル候ナリ、此候ヲ待ズシテ摘採モ、此候ヲ緩ニシテ摘採ザルモ、共ニ大ナル損失ナリ、廼ニ臙脂ノ減少スルノミナラズ、其色モ亦美艶ヲ失フコト多シ、故ニ三片紅ノ候ヲ待ヲ、紅花ヲ摘ミ採ル極意ノ秘訣トス、紅花ヲ多ク作ルトキハ、三片紅ノ花ヲ摘モ、一朝ヤ二朝ニ盡スベキニ非ルヲ以テ、其候ノ來次第ニ、幾朝モ掛リテ、花ノ有ン限リハ皆悉ク摘採ベシ、凡紅花ヲ作ルニハ、植地ノ善惡ヲ論ゼンヨリハ、唯其培養ヲ精粹ニスベシ、我家ノ法ヲ以テ作レバ、莖長六尺餘ニ及ビ、花モ極大ナリ、故ニ同ク一段ノ地ニ作ルト雖ドモ、花ヲ得ルコト多キガ故ニ、燕脂ノ出ルコト他ニ倍シ、其色モ亦極テ美艶ニシテ最上品ナリ、又我家法ニテ作リタル紅花ハ、餅ト作タルモ、攤乾ト爲シタルモ、或ハ馬糞ノ如クニシテ、其色醜キコト有リ、然レドモ燕脂ノ出ルコト多キニ至テハ、他ノ美ナル紅花ノ絕テ及ブベキニ非ルナリ、〇中略凡ソ紅花ヲ多ク作ルハ、出羽國最上郡ヲ第一トス、最上紅花ハ餅ト成サズシテ、亂花ニ乾タルモノ多シ、此ハ濵士ノ農書ニ、攤而曝乾勝㆑作㆑餅、作㆑餅者不㆑得㆑乾、令花浥鬱也ト云フ說ニ惑タルナリ、餅ニ作ルモ、必シモ浥鬱モノニ非ズ、其麻布ニ包テ餅ト作スノ間ニ、却テ黃汁ヲ除キ去ルノ功アリ、故ニ我家ニテ皆餅ニ製セシムルヲ法トス、又最初蹈採セシ時ヨリ、晝ス時ニ洗流タル黃汁ニハ、燕脂ノ氣ヲ含ムコト頗多シ、桃色木綿等ヲ染ルハ、皆此黃汁ニテ染ル、者ナリ、誤テ此汁ヲ棄ルコト勿レ、

〔剪花翁傳 三五月開花〕紅花　末摘花　潢艸花　花の色濃黃にして光あり、開花五月、方日向、地二分濕り、土えらばず、肥淡大便、度々灌がざれば、金錆とて葉に星の如くなる黃みし點入也、風すかし

ふとりさかへては、人糞は云に及ばず、新しくけがらはしき糞を用ゆれば、さきまがりて花房とならぬ物なり鶏の糞又は精鰯にても、苗のちいさき時に多く用ひて、中うちさい〳〵して芸り培ひ、うすからず厚からず、よき程に間引立て、四五月朝いまだ日の出ざるに、花よくひらきて、わきにたるゝを見てつむべし、ひらきてもいまだ色黄にして、わきにたれざるはつむべからず、摘取てはざつときざみ臼にてつき、清水に漬てやがて取上しぼり、何にてもきれいなる物にひろげ、草の葉をおほひ、日風も當らざる所に二三日もをき、少色付、白かびの出るを見て、餅に造り日に干べし、又出羽の最上にて花を作る法あり、異なる事なし、是はつみ取て清水に漬、やがて取上てしぼり、筵に攤げ物をおほひをきて、少ねたる時、餅には造らず、其まゝ亂れ花にして、干上げ箱に入をくなり、苗の時間引て、ゆがき菜にし、食するに其性よく、味もよし、市町近き所にては、園菜とし、少厚く作りて、段々間引取て賣ても、利なき物にあらず、又實を多く收め置て、燈油に用ひ、勝れて尤もよく、油多き物なり、又紅花は苗より念を入、いか程心を盡しても、卒爾に糞を用ゆれば、忽ち先曲りくせ付物なれば、下地をなる程よくこしらへ、糞を多くうち、さらし置、蒔時鶏糞など、其外よく枯たる糞を灰に合せ、下にしきて蒔べし、後は草かじめ中うち培ひ間引立て置べし、土地に相應し、肥地に多く作りては、勝れて厚利を見る物なり、地心を能ゑらぶべし、又子を牛に飼たるもよし、

(草木六部耕種法 二十花)草花ノ染料ト爲スベキ者ハ、紅花ノ用ヨリ大ナルハ無シ、○中略凡ソ一段ノ畠ニ種子六七升ヅヽ蒔テ、上ニ土ヲ覆フニ及バズ、但シ芽ノ出ザル間ハ、小鳥ヲモ逐ベク、時々盛巻水ヲ灑ニ宜シ、既ニ芽ヲ生ジテ後ハ、糞尿等不浄ナル肥養ヲ用ルコト勿レ、唯其他草ヲ除キ、干鰯ノ粉、或ハ火酒ヲ醸タル糟糠交粕等ヲ、根傍五六寸隔テ置キ、土ト耙鋤ベシ、其苗頗ル長ジテハ適宜ニ間引テ、蔬菜ト爲スベシ、美味ナル者ナリ、四五月ニ至リ、黄色ナル花開テ朝露ヲ帶タルヲ

ナリ、今朝摘ヲツミ采レバ明朝復出、此ノ如クスルコト數日ニシテ盡ク、故ニ源氏物語ニ末摘花ト名ク、瓣ヲ摘ニハ必早晨ヲ以テス、故ニ集解ニ乘露采之ト云リ、花後實ヲ梂中ニ結ブ、熟シテ大サ赤小豆ノ如シ、一方尖リ色白クシテ光アリ、唐山ニテハコノ實ヲ搾リ、油ヲ取リ燈ニ點ズ、又杭州ニテ金ノ扇面ヲ僞ルニ、銀紙ニ此油ヲ刷キ、火ニテ炙リナスト、天工開物ニ見タリ、藥ニ入ルヽニハ花瓣ヲ用ユ、卽紅花ナリ、數種アリ、ゼニバナト云ハ、扁クツクネテ錢ノ形ニナシタルヲ云、集解ニ捏成薄餠ト云是ナリ、是ハ多ク染家ニ用ユ、奥州仙臺ヨリ出ルヲ上品トス、出羽ノ山形コレニ次グ、同州谷知、奥州ノ三春之ニ次グ、奥州ノ者ハソノ形小ニシテ薄シ、コレハ瓣ヲトリテ少ヅツ集メ、席ノ上ニナラベ、其上ニ席ヲ蓋ヒ、オモシヲカケ、錢形ニ造ルモノナリト云、肥後ヨリ出ルハ大サ二寸許、厚サ五分許、圓形ニシテ硬シ、コレハ竹筒中ニ入レ擣カタメ、出シテ切タル者ナリト云、又筑後ヨリ出ルハ薄シテ大サ三寸許、是ハ奥州ヨリ出ルモノト、其製同ジト云、又錢バナニ成サズシテ、瓣ヲ摘采タルマヽニテ出スモノアリ、コレヲツミナリト云、又ジバナトモ云、唐山ニテコレヲ散花ト云、伊勢美濃ヨリ出ルハ皆ツミナリ也、藥ニハ多ク此ツミナリヲ用ユ、藥肆ニテ陳舊ニシテ色ノ變ジタルヲ、藥紅花ト名ケ售ル、是甚惡シ、新ナルヲ撰ビ用ユベシ、若シ無トキハ錢バナヲ碎キテ、ホドキ花ト云ヲ用ユベシ、

〔農業全書六三草〕紅花

うゆる地の事、土性極めてよく光色ありてうるはしきは、作れる花の色もよく染付よし、黄赤黒の土の尤肥良なるをゑらびて作るべし、高き田の性よきは猶宜し、夏より數遍耕しさらし、糞をうち熟しからし置たるに、霜月の初申の日蒔べし、又八月地をよくこなし畦作りし、筋を切、たねを酒に浸す事一宿、灰糞やき土にて、たねを合せ蒔べし、さのみ厚く蒔べからず、苗二三寸の時、中うち芸り、人糞ならば、いかにも久しく枯たるを以て、葉にかゝらざる樣にわきよりかくべし、苗

〔多識編二草〕紅藍花、久禮乃波奈、又云久禮乃阿比、今案久禮奈井、又云倍仁乃波奈、又云呉藍久禮阿伊、是卽所謂紅字和訓也、

〔八雲御抄三上〕紅　すゑつむはなと云り　すゑつむじゆへ

〔藏玉集夏入〕紅

末つむ花、すゑをつむゆへ也、まふりて、ふりはへといふもまふり也、ふり出てとも云也、紅をそめつけたる物也、昔にはたゞふりてと云也、紅はふり出て物なる物也、はす紅うす紅ゆふ紅、紅のちり、昔聞なる紅の塵にたとへたり紅のすゑさく花、たかまきし紅、花から紅、ちしほの紅、からくのとませのみなすにつくと　くとよすめがみのまきしくれなゐ　すゑつみはやす紅、

〔東雅十五草木〕紅藍クレノアヰ　倭名鈔に釋色立成を引て、紅藍呉藍並にクレノアヰといふ、本朝式には紅花の字を用ゆ、俗亦用之と註せり、クレとは卽呉也、アヰは卽藍也、萬葉集に呉藍讀てクレナヰといふは、其語の轉せしなり、但し漢に呉藍と云ひしものは、藍の類にして、紅藍をいふにはあらず、此に呉藍といふは、其始呉國より來りしが故也、卽今俗にはベニノハナといふなり、

〔和漢三才圖會九十四本草〕紅花　紅藍花　黄藍　俗云久禮奈伊、呉藍之略言、(中略)按紅花俗傳云、中日下、種能茂盛、羽州最上及山形之產爲良、伊賀筑後次之、豫州今治及攝播二州之產又次之、最上紅餅大如錢、兩國紅餅圓徑三四寸許、(下略)

〔重修本草綱目啓蒙十草〕紅藍花　クレノアヰ和名鈔　クレナヰ　スヱツムハナ源氏物語　丹華和方書　ベニノハナ　クレナヰノハナ雲州　ハナ備前　紅花　一名紅蘭事物紺珠　紅花菜救荒本草、又山丹花[illegible]　開カザル者ヲ乾シ、食用ニスルヲモ紅花ト云、

秋分ニ子ヲ下レ便チ生ズ、葉ハ細長クシテ黄緑色、長サ二寸或四五寸、葉邊及中心ニ硬刺アリ、春ニ至テ薹ヲ抽デ、高サ三五尺ニ至ル、其莖ニモ刺アリ、葉ハ互生ス、梢葉ハ枸骨(ヒヽラギ)葉ノ如シ、夏月枝ノ末ゴトニ花ヲ生ズ、毬ヲナシテ蒼朮薊毬ノ如ク刺多シ、細瓣毬上ニ出テ薊(アザミ)花ノ形ニ似リ、紅黄色

瓣甚細シ、又筒瓣ナルモノアリ、又千瓣ナル者アリ、又千葉ニシテ小ナルアリ、シナノギクト云、コレハ葉モ狭細ナリ、時珍ハ自生ノ者ハ單葉人家ニ種レバ千葉トナルト云非ナリ、單葉千葉別種ナリ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

安房國十八種、○中略 蔦花、旋覆花各一斤、　上總國廿種、○中略 蔦花、旋覆花各二斤、

〔武江産物志 草藥〕志村邊ノ産　旋覆(おぐるま)

向日葵

〔大和本草 七花草〕向日葵(ヒウガアフヒ)　一名西番葵、花史ニハ文菊ト云、向日葵モ漢名也、葉大ニ莖高シ、六月ニ花サク、頂上ニ只一花ノミ、日ニツキメグル、花ヨカラズ、最下品ナリ、只日ニツキテマハルヲ賞スルノミ、農圃六書花鏡ニモ見エタリ、國俗日向葵トモ、日マハリトモ云、

紅藍花

〔倭名類聚抄 十四染色具〕紅藍　辨色立成云、紅藍久禮乃阿井　呉藍同上　本朝式云、紅花、俗用之

〔箋注倭名類聚抄 六染色具〕按古今注云、燕支中國人謂之紅藍、紅藍又出習鑿齒與燕王書、見史記索隱、開寶本草云、紅藍花生梁漢及西域、一名黄藍、博物志云、黄藍張騫所得、圖經云、紅藍花冬而布子於熟地、至春生苗、夏乃有花、下作梂彙、多刺、花蘂出梂上、圃人承露採之、採已復出、至盡而罷、梂中結實、白顆如小豆大、其花暴乾、以染眞紅、及作燕脂、葉頗似藍、故有藍名、愚按紅藍葉不似藍葉、謂之紅藍者、藍之染草、人所普知、而紅藍染物與藍同、故謂之紅藍、猶謂茈草為茈莫也、時珍曰、其葉如小薊葉、至五月開花、如大薊花而紅色、按久禮乃阿井、呉藍之義、是物可染似藍、其種自呉國來、故名、猶薑訓呉椒也、急呼為久禮奈爲、見萬葉、後依之今俗呼倍爾乃波奈、謂以堤花為紅粉也、○中略 按證類本草藍實條引日華子載呉藍、又載圖經江寧有一種呉藍、並非紅藍、辨色立成所載呉藍、蓋以漢字書和名者、如牽牛花作朝貌、蓋草作苅安之類、非本草呉藍也、○中略 按證類本草引圖經云、紅藍花即紅花也、爾雅翼云、燕支今中國謂之紅藍、或只謂之紅花、

リ、形狀ハ異ナラズ、大和本草ニハ大ナルヲ樊噲草トシ、小ナルヲ張良草トス、兩說ナリ、何レニテモ大小通ジテ大吳風草ナリ、小。吳。風。草。ハ救荒本草ニ載トコロノ兔兒傘ナリ、和名ヤ。ブ。レ。ガ。サ。救荒ノ圖ニ能合ヘリ、深山幽谷ニ多生ズ、嫩ナル者ハ一根一葉ニシテ、破レタル傘ヲ張レル形ノ如シ、年ヲ經ルコト久シキモノハ、別ニ莖ヲ抽ルコト二三尺、二三葉互生シ、秋ノ初莖端ニ長穗ヲナシ、マバラニ花ヲ綴ル、花形鬼督郵(ヘグマ)ノ花ニ似タリ、黃白色ニシテ微シク淡紫色ヲ帶ブ、熊谷道詮ノ薇銜考證ハ、圖モアリテ詳ニ辨ズ、草木辨疑ニ、大吳風草ヲ張良草トシ、小吳風草ヲ樊噲草トスルハ穩ナラズ、

〔武江產物志藥草〕駒込邊ノ產　薇銜(はくわいさう)染井

〔多識編二隰草〕劉寄奴草、加。豆。於。久。佐。今案加。良。乃。美。加。登。久。左。異名金寄奴、大明鳥藤菜、綱目

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕劉寄奴草　ハ。ン。ゴ。ン。サ。ウ。マ。子。ア。サ。奧州　タ。ツ。ミ。ア。ガ。リ。花戶　一名、六月雪藥性奇方　六月霙古今醫統　鴨脚南寧府志　大葉蒿子揚州府志　九里光蓮生八牋

自然生ハ東國ニアリ、人家ニモ多ク栽ユ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、莖ノ高サ四五尺、葉ハ五枚アリテ、艾ノ梢葉ニ似テ厚大糙澀ニシテ、邊ニ細鋸齒アリ互生ス、七八月莖頭ニ多ク小枝ヲ分テ、單瓣ノ花ヲ開ク、紫菀花ノ形ニ似タリ、大サ五六分、黃色黃心、後白キ絮ヲ成ス、コレ時珍ノ說クトコロノ劉寄奴草ナリ、蘇頌ノ說ク所ノ劉寄奴草ハ、俗名キ。ン。ク。ハ、一名ア。キ。ノ。キ。リ。ン。サ。ウ。ナリ、山野ニ極テ多シ、苗ノ高サ一二尺、劉ハ雞兒腸(ノギク)葉ニ似テ、色深シ莖紫黑色、秋ノ末小黃花枝ニ滿テ長穗ヲナス、觀ニ堪タリ、又救荒本草ニ載トコロノ野生薑ハ、此金花ノ菊葉ナルモノヲ指ス、葉ニ岐多シテトキハギクノ葉ノ如シ、和產モアリ、皆時珍ノ說トコロト同カラズ、又漢種ノ劉寄奴アリ、葉ノ形金花葉ニ似タリ、花モ相似テ小ク色白シ、集解ニモ花色白シト云、金花ニ白花モアレドモ、漢種トハ少シ異ナリ、然レドモ金花モ金瘡ニ効アル故、亦一種ノ劉寄奴草ナリ、又ヲトギリ草金瘡ヲ療

笑嗜草　是亦俗ノ名ヅクシ處ナリ、葉ハツキノハニ似タマタアリ、黃花サク、

〔和漢三才圖會 九十四本 濕草〕薇銜　鹿銜　麋銜　承膏　承膺　吳風草　無顚　無心草〇中略

按薇銜葉莖能似益母草、其黃花既散則白而如絮、其子小長而黑色有刺、其中子細小、

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕兔兒傘　俗云敗背笠

救荒本草云、兔兒傘生荒野中、苗高二三尺許、每科初生一莖、莖端生葉、一層有七八葉、每葉分作四叉、排出如傘蓋狀、故以爲名、後於葉間攛生莖叉、上開淡紅白花、根似牛膝而疎短、採嫩葉煠熟換水、浸淘去苦味、油鹽調食、

按兔兒傘五月開黃花似菊而如敗笠狀、

笑嗜草　俗稱本名未詳

按笑嗜草高一二尺、一莖一葉有七切叉似兔兒傘葉而小、莖端開小白花、略似蓬姑花、敗笠、兔兒傘之名、

笑嗜草亦有

〔重修本草綱目啓蒙 濕草 十〕薇銜　一名麋銜 蘇恭　鹿銜 同上、同名者數種、[illegible]有リ、一鹿活、一鹿白、一鬼齒、一天麻、一薇銜、一白蒿、一修鶴、　增、一名沒心草 附方　鹿胞草 本經逢原

又[illegible]之ト云フ[illegible]之ハ天麻ノコトナリ、

薇銜ハ總名ナリ、大吳風草小吳風草ノ二種ニ分ツ、大吳風草ハ俗ニ張良草ト稱スル者ナリ、此草本名嘲弄草ナルヲ誤テ張良草ト云、京師相國寺鳳瑞軒ノ僧秀周、入唐ノ時、此種ヲ取歸リ、毫後ニ種ナ嘲弄ス、草ト鐵鎚ノ葉ニ生ズルニ因テ、鐵鎚草ト云ト、結毦錄見タリ、今ハ山中ニ自生多シ、葉形兔兒傘葉ニ似テ大ナリ、故ニ和州方言ニ此草ヲモヤブレガサト云、濃州ニテタイミンガサト云、春舊根ヨリ數葉ヲ叢生ス、漸ク圓莖ヲ抽テ高四五尺、二三葉ヲ互生ス、夏月莖ノ梢ニ多ク枝ヲ分チ花ヲ開ク、臺苔花ノ形ニ似テ大サ二寸餘、瓣心共ニ黃色也、葉モ亦臺苔ニ似テ大ナリ、一種苗小ナル者アリ、笑嗜草ト云、此ハ葉ニ斑ナシ、張良草ニハ黑斑アリ、又一種笑嗜草ノ紫莖ナル者ア

蘩街
張良草
樊噲草
兎兒傘

〔長生療養方 一藥功能〕菁蒿菜　食之明目

〔延喜式 三十九内膳〕漬年料雜菜

菁蒿一石五斗 料鹽六升 ○中略　右漬春菜料

〔萬葉集 二挽歌〕讃岐狹岑島視石中死人、柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌、○中略

反歌二首 ○一首略

妻毛有者、採而多宜麻之、佐美乃山、野上乃宇波疑、過去許良受也、

〔萬葉集 十春雜歌〕詠煙

春日野爾、煙立所見、娘嬬等四、春野之菟芽子、採而煮良思文、

〔新撰六帖 六〕をはぎ

家良
里人やをはぎつむらん三笠山春日の原のはるのうらゝに

知家
いまはまた野べのをはぎの春ふかみ時すぎぬれやつむ人のなき

〔出雲風土記 意宇郡〕砥神島 ○中略 高六十丈、有椎松、薺頭蒿、都波、師太等草木也

〔出雲風土記 島根郡〕附島、周二里一十八歩、高一丈、有椿松、薺頭蒿、茅、都波、其薺頭蒿者、正月元日生長六寸、

〔本草和名 七草〕蘩街、一名藥街、一名承膏、一名承肥、一名无心、一名無顚、一名鹿街草、蘇敬注云、鹿有病、街此草即差、一名大巣風草、一名小巣風草、已上三名出蘇敬注 唐、

〔大和本草 九雜草〕張良草　和俗ノ名ナリ、葉大如掌、葉ノ内ニ有三椏、岐分似烏頭葉、山中所々有之、其花黃ニシテツハノ花ニ似タリ、ツボミノ大如小梅子、樊噲草ハ大ニシテ高ク、張良草ハ小ニシテヒキシ、一類ナリ、相似タリ、又スゲガサト云草アリ、張良草ヨリ細也、又タカラカウト云草モ此類ナルベシ、既ニ前ニシルス、

梢葉間開細瓣淡紛紫花黄心、葉味微辣、是可以充與女祭、

(醫心方 一)草蒿 和名於波岐

(類聚名義抄 八草)蒿 宋オハキ 菣蒿 同 莪蒿オハキ 蒿 呼毛反、オハキ、 齊蒿

(倭訓栞 前編 三)うはぎ 萬葉集に見牙子と見えたり、仙覺鈔に、見萩也といへり、内膳式には蒿をもよめり、今いふよめがはぎなりといへり、一説におはぎに同じ、よめがはぎは此大はぎに對する名にして菫蒿也、おはぎは齊蒿也といへり、

(倭訓栞 前編 四十八)おはぎ 和名抄に莪蒿をよめり、歌に若菜と同じく摘事をよめり、さればうはぎと同物なるべし、今も畿内によめなをおはぎといふ、近江にははげといふ、同書に菊を、かはらおはぎと訓せり、

(倭訓栞 前編 十七)よめな 嫁菜の義鷄腸菜をいふ、よめがはぎともいへり、本草に野菊と見ゆ、のぎくともいへり、

よめがはぎ 住吉の遠里小野のよめがはぎあらくは吹そむこ山の風

(大和本草 五 民生)鷄蒿(中略) ヨメガハギハ野圃家圃ニ不用人力而叢生ス、有香氣、秋花ヲ開似野菊、蔞蒿ハ白蒿、

(重修本草綱目啓蒙 十一 隰草)鷄蒿 キツネアザミ センボンヤリ ヒメアザミ(中略)

夏後子落テ、秋ニ至テ自ラ生ズ、初ハ地ニ就テ叢生シ、蒲公英ノ生ズルガ如シ、葉ノ形ハ千薊葉ニ似テ、面深緑色、背ニ白毛多シ、質軟ニシテ潤ナレ、春ニ至リテ漸ク薹ヲ抽デ、高サ三五尺、瘠地ノ者ハ苗小ナリ、潮湿ノ地ニテハ肥大ナリ、枝葉共ニ互生ス、四月枝末ゴトニ淡紫色ノ花ヲ生ズ、形大薊花ノ如ニシテ小ナリ、又白花ノモノ稀ニアリ、俱ニ花後絮トナリ、飛ビ落ル處ニ生ジ、苗根共ニ枯ル、貝原翁ノ説ニヨメナヲ以テ鷄蒿ニ充ツルハ非ナリ、ヨメナハ救荒本草ノ鷄兒腸ナリ

薺蒿

〔農業全書五山野菜〕苦菜

にがな一名は茶と云て、古より名ある菜なり、凡味も蒲公英に類せる物なり、惡瘡血痳、又は目を明らかにす、此外さま〴〵功能多し、菜園の端々に少々作るべし、作り樣たんぽゝにかはる事なし、

〔宜禁本草乾五菜〕苦菜　苦寒、多食令人氣喘、弱人忌之、令人不眠、折之白汁出、常點瘊子自落、春夏秋開花、去中熱、安心神、主五臟邪氣、腸澼渴、熱中惡瘡、本經說、久服安心、益氣、聰察少臥、輕身耐老、耐飢寒、高氣、背瘡熱腫、取汁蓋之、開孔以歇熱毒、冷即易之、

〔續修東大寺正倉院文書三十二〕造佛所作物帳斷簡（年紀不詳、按成卷文書四十五卷所收天平六年造佛所作物帳中卷斷簡、恐與此同物也、）

買雜菜直錢廿一貫七百十六文〇中略

茶三千三百卅六把、直一貫一百十二文、（文別三把）

〔本草和名十草〕草蒿、一名青蒿、一名方潰（楊玄操音胡對反）一名䕡蒿（出本草拾遺）和名於波岐、

〔本草和名十八菜〕薺蒿菜、一名莪蒿、一名𦶇蒿、（已上出七卷食經）一名𦶇蒿、一名薺頭茸、（已上出崔禹）和名於波岐、

〔倭名類聚抄十七野菜〕薺蒿　七卷食經云、薺菜一名莪蒿、（莪香鵝、和名於八木、）崔禹錫食經云、狀似艾草而香、作羹食之、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕爾雅莪蘿注、今莪蒿也、亦曰藘蒿也、說文、莪蘿蒿屬、廣雅、莪蒿藘蒿也、毛詩菁々者莪、正義引陸璣曰、莪蒿也、一名蘿蒿、生澤田漸洳之處、葉似邪蒿而細、科生、三月中莖可生食、又可蒸香美、味頗似蔞蒿是也、證類本草角蒿條引陳藏器云、藘蒿辛溫無毒、煮食之、似小薊、生高岡、宿根先於百草、小野氏曰、是可以充岐都禰阿佐美、薺蒿菜之名未聞、〇中略　按本草和名、薺蒿菜訓於波岐、草部下草蒿亦訓於波岐、於波岐萬葉集謂之宇波疑、一聲之轉、今俗呼與米賀波伎、又與米奈、按救荒本草云、鷄兒腸生中牟田野中、苗高一二尺、莖黑紫色、葉似薄荷葉微小、邊有稀鋸齒、又似六月菊、

〔酒食論〕飯室律師好飯申樣
もちゐ色々に、やよひもはじめのわか草は、ち。、こ。は、、このくさもちゐ、手づくりからにいたゐけや、かはらぬ色の松もちゐ、千代とぞ君をいのりける、

按に酒飯論云、其後もちゐ色々に、やよひもはじめのわか草は、ち、、こは、、このくさもちゐ、手つくりからにいたゐけやトミユ、然レバチ、ロ草ヲモモチトナセシ也、チ、コ草ハハ、コ草ニ同シテ鼠麴草ノ類也、

〔古名録 四十野草〕ち、こぐさ 穀精草 漢名天青地白 本草圖實

〔本草和名 十八〕苦菜、一名荼草、楊玄操音徒胡反、又直加反、一名選、一名游冬、一名荼、一名苦蘵菰蘆、似茗、已上出陶景注、茶音近荼、一名苦菜、蘇敬注曰、苦菜兼名苑、苦蘵大苦、一名苦蘵、蘇敬注曰、此猶苦也、今茶也、已上三名出蘇敬注、一名南植草、出雜要訣、茗菜一名鮪搖草、出七卷食經、和名爾加奈、一名都波比良久々佐、

〔倭名類聚抄 十七野菜〕荼 爾雅注云、荼、音途、和名尓加奈、苦菜之可食也、

〔伊呂波字類抄 尓植物〕荼 ニカナ、苦菜之可食也、

〔和爾雅 七蔬菜〕苦菜 ニガナ、茶、苦苣、天香菜、同、又云、苦蕒菜、千金方云苦蕒也、

〔重修本草綱目啓蒙 二十九菜〕苦菜 ウ。レ。ア。ザ。ミ。ノ。ゲ。シ。 キ。ツ。ネ。ノ。タ。バ。コ。和州 タ。ン。ポ。ポ。筑前 ム。マ。ゴ。ヤ。シ。讃州 コ。マ。シ。タ。グ。江州 コ。マ。ピ。ヤ。シ。信州 ゴ。ア。ジ。豊州 ケ。シ。ナ。グ。サ。和漢三才圖會 ○中略

秋月子生ズ、葉ノ形蒲葉ニ似テ刺ナク、白色ヲ帶テ罌粟葉ノ如シ、青莖アリ紫莖アリ、俱ニ中空クシテ五稜アリ、莖葉ヲ切レバ白汁ヲ出ス、春ニ至テ苗ノ高サ二三尺、葉互生ス、葉間ニ枝叉ヲ分チ、上ニ多ク花ヲ開ク、萵苣花ニ似テ黄色、謝時ハ小長子多ク萼中ニ聚リ、上ニ白絮アリテ蒲公英タンポヽ絮ノ如シ、子熟スレバ風ニ隨テ飛ブ、其苗根共ニ枯ル、

如訛言、此間田野有草、俗名母子草、二月始生、莖葉白脆、毎歳三月三日、婦女採之、蒸擣以爲餻、傳爲歳事、今年此草非不繁、生民之訛言、天假其口、

〔園珠庵雜記〕はゝこ草は、文徳實錄に母子草とかけり、和名には庵蘆をぞよめれど、本草を見れば、それにはあらで、鼠麴草にてぞ有ける、もろこしにも、やよひの三日には、これをもちひにくはふるよし、そのふみにみえたり、葉の色のねずみに似て、花のかむたちのごとく黃なれば、たとへて名付たり、

〔曾根好忠集〕春の春三月はじめ

はゝこつむ彌生の月になりぬればひらけぬらしな我宿の桃

〔後拾遺和歌集二十雜六〕三條太政大臣〇藤原賴忠のもとに侍ける人のむすめを、忍びてかたらひ侍けり、女のおやはらたちて、むすめをいとあさましくつみけるなどいひ侍けるに、三月三日かのきたのかたに、三夜のもちいくへとて、いだしけるによめる、　藤原實方朝臣

みかの夜のもちいはくはじわづらはしきけばよどのにはゝこつむ也

〔和泉式部集三〕石藏より野老をこせたるてばこに、くさもちゐいれて奉るとて、

はなのさと心もしらず春の野にいろ〳〵つめるはゝこもちゐぞ

〔散木弃謌集一春〕三月三日人のがりいひつかはしける

君がためやよひになればよづまさへあへのいちゃにはゝこつむ也

父子草

〔倭訓栞後編十三〕ちゝこぐさ　白蒿也、又河原はゝこともいふ、はゝこぐさに對して、父子草と呼なるべし、

〔躬恒集〕ちゝこぐる

花の色はちゝこぐさにてみゆれどもひとつも枝に有べきはなし

名抄に鼠麴子を訓すれど別物なるべし、三月三日の雛遊には、ふこを祭り、此日鼠麴汁にて糕を造る事も、文德實錄に見え、龍舌粋といふも、荊楚歲時記に出たれば、此草をもはゝこ草とよべる成べし、よて又もちよもぎともいふとぞ、今はもはら艾蒿を用う、遠江にちゝぐさ、信濃にかはちちこ、尾張にとうこ、上總にかうじばな、宇都宮にねばりもちといふ、俗に河原はゝこと呼ものは白蒿なり、和名抄に白蒿一名蘩皤蒿と見えたれば、此昔をもてはゝこと呼にや、

〔重修本草綱目啓蒙 十一 草〕鼠麴草

ハ〇ヽ〇コ〇草〇 母子草ト書ク、文德實錄ニ見ユ、古ハ和名ナリ、今ハホウコト云、 モ〇チ〇ヨ〇モ〇ギ〇 大和

本草 ジ〇ヤ〇ウ〇ラ〇ク〇ヨ〇モ〇ギ〇 同上 オ〇ギ〇ヤ〇ウ〇 御形ト書ス、後世誤リテゴギヤウト云、古書ニハ皆オギヤウトイヘリ、 ト〇ウ〇コ〇 尾州

ト〇ウ〇ゴ〇 同上 モ〇チ〇バ〇ナ〇 雲州 モ〇チ〇ブ〇ツ〇 尾州 ク〇カ〇ジ〇ブ〇ツ〇 同上 ゴ〇ギ〇ヤ〇ウ〇ブ〇ツ〇 筑前 ゴ〇ギ〇

コ〇ブ〇ツ〇 九州 ゴ〇ギ〇ヤ〇ウ〇ヨ〇モ〇ギ〇 同上 ト〇ノ〇サ〇マ〇ヨ〇モ〇ギ〇 紀州 ト〇ノ〇サ〇マ〇タ〇バ〇コ〇 同上、花サ云、 カ〇ハ〇

チ〇ヽ〇コ〇 信州 コ〇ウ〇ジ〇バ〇ナ〇 雲州 フ〇ギ〇ミ〇グ〇サ〇 信州 チ〇バ〇ヨ〇モ〇チ〇 野州 ヨ〇チ〇グ〇サ〇 中國 時州 〇

此草原野ニ多アリ、秋月苗ヲ生ズ、葉ハ馬齒莧葉ニ似テ薄ク、長クシテ白毛アリ、三四月苗高サ六七寸、或ハ一尺ニ至ル、葉互生シ、梢ニ簇リテ黃花ヲ開ク、此花ヲ取リ烟草ニ代吸フ、又此花ヲ以テ梵花ニ備リ、又蜜蒙花ニモ備ル、古ハ上巳ニ此葉ヲ用テ糕トス、即龍舌粋ナリ、後其色ノ濃カランコトヲ欲シテ、艾葉ヲ以テ代ユ、朝鮮賦ニ謂ユル艾糕ナリ、今ハ鍼葉芥葉ヲ加テ其色ヲタスク、蓋其眞ヲ失ス、

〔宜禁本草 乾五 集〕鼠麴草 甘平無毒、和米粉作糗食之甜美、白毛黃花、調中益氣、止泄除痰、壓時氣、去熱嗽、

〔延喜式 三十九 內膳〕供奉雜菜

日別一斗、〇中略 波々古五升、二月 三月

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后崩、 壬午、先是民間訛言云、今玆三月〇三月二字原脫、今據一本補、三日不可造餅、以無母子也、識者聞而惡之、至于三月宮車晏駕、是月亦有太后山陵之事、其無母子、遂

比岐與毛岐亦非也、按嘉祐本草云、鼠麴草、雜米粉作糗、食之甜美、生平岡熟地、高尺餘、葉有白毛、黃花、荊楚歲時記云、三月三日取鼠麴汁、蜜和爲粉、謂之龍舌䉽、以壓時氣、江西人呼爲鼠耳草、李時珍曰、原野甚多、二月生苗、莖葉柔軟、葉長寸許、白茸如鼠耳之毛、開小黃花成穗、結細子、楚人呼爲米麴、北人呼爲茸母、故邵桂子甕天語云、北方寒食菜、茸母草和粉食、是可以充波々古、今俗謂呼保宇古久佐、猶作糗和名波々會、俗謂呼保宇會也、周防謂之毛知久佐、是草和粉爲餌、故有是名、讃岐謂之加宇知波奈、與楚人呼米麴合、是草折葉則有白絲、曳之如杜仲、故又有比岐與毛岐之名、

〔古名錄十四野草〕波波古

按ニ、倭名抄ニ、菴蘆子和名波々古、馬先蒿和名比岐與毛木ト分ツレド、本草和名本草類編ニモ、菴閭子和比支與毛支、又波波己ト云ヲ以テ、比木與毛支、波々古、一物タルコト明也、

〔康頼本草草上〕菴閭子　味苦、微寒温、无毒、和ヒキヨモキ亦ハワコ、又波々己、十月採實陰乾、

〔醫心方一〕菴蘆子和名比岐與毛岐、一名波々古、

〔類聚名義抄七〕菴蘆子ヒキヨモキ　〔同八艸〕蘆子ハヽコ

〔易林本節用集波草木〕道孤ハツコ　菴蘆子同

〔和爾雅七菜蔬〕七種菜〇中略　鼠麴草ゴギヤウサウ本艸佛耳草一名黃蒿、和名母子艸、

〔和爾雅七草木〕鼠麴草ハヽコクサ佛耳草、無心草、鼠耳草、黃蒿並同、和名母子草、

〔東雅十五草卉〕菴蘆子ハヽコ　倭名鈔に本草を引て、菴蘆子はハヽコと註せり、文德實錄に見えし母子草といふものは、一名にして二物也、母子草は鼠麴草、また鼠耳子などともいひ、古の時には三月三日に餅となせしものなり、略〇註また白蒿をも、今俗にカハラハヽコグサと云ふなり、ハヽコといふ義不詳、

〔倭訓栞中編二十波〕はゝこ　文德實錄に母子草と見えたり、鼠麴草なり、今はふこといふ是なり、和

者アリ、千葉ニシテ實ヲ結バズ、又一種白花ナル者野生稀ナリ、葉長大、花モ亦大ナリ、莖ノ高サ一二尺ニ至ル、一種綠花ノ者ハ極メテ稀ナリ、花萼葉ニシテ綠色實ヲ結バズ、苗ノ形ハ尋常ノ者ニ同ジ、一種ムラサキタンポヽト呼ブアリ、一名ヤリグサ、駿州センボンヤリ、加州山中陰地ニ生ズ、葉ハ濶ク厚シテ尖リナク、背ニ白毛アリ、花小クシテ淺紫色、又內淺紫、外紫赤色、又白花ノモノアリ、花後絮ナシ、番形ノ如シ、莖ニ白毛アリ、是集解ニ謂ユル大丁草、一名燒金草ナリ、

〔食療全書　四〕蒲公英　たんほゝ

たんほゝは秋苗を生じ、四月に花さく、黃白の二種あり、花は菊に似て、あひらしき物なり、夏たねを取をき、正月苗て苗にして、移しうゆるもよし、山野にをのづから生るを苗にするもよし、味少苦甘く、料理に用ゆる時、葉をとりて蔬きひたし物、あへ物、汁などに料理してよし、是を食すれば、大用の秘結をよく治するなり、國の邊り來國の婦々、多少によらず、かならずうゆべし、食毒を解し、氣を散し、婦人の乳癰を治す、

〔宜禁本草　乾五〕蒲公草　甘平無毒、主婦人乳癰、煮汁飯及封之立消、墳生食、產後不自乳見、汁積結癰、痛傅腫上、日三四度易之、一名地丁、解食毒、散滯氣、治疔腫、有奇功、

〔新撰字鏡　草〕菴盧子　菴盧子　〈䕡蕳子、比文與毛支、又大〉

〔本草和名　六草〕菴盧子　〈楊玄操音、上音淹、下音閭、〉和名比岐與毛岐、一名波々古、

〔倭名類聚抄　二十草〕菴盧子　本草云、菴盧子〈上音淹、和名波々古、〉

〔箋注倭名類聚抄　十草〕本草和名云、菴盧子和名比岐與毛岐、一名波々古、馬先蒿和名波々古久佐、茵蔯蒿和名比岐與毛岐、蓋輔仁不能詳定、三草皆同訓、源君菴盧子訓波々古、馬先蒿茵蔯蒿並訓比岐與毛岐、蓋以釋藥性云茵蔯蒿一名馬先也、然波々古即比岐與毛岐之一名、則源君分訓波々古比岐與毛岐非是、又本草菴盧子、馬先蒿、茵蔯蒿各自爲條、則三草其實不同、以馬先蒿、茵蔯蒿同爲

〔東雅十三穀蔬〕蒲公草フヂナ　倭名鈔に本草を引て蒲公草一名耩耨草、フヂナ、一にタナといふと註せり、並に義不詳、今俗にタンホヽといふもの、蒲公草即是也、（此菜田圃隴畝ノ間に生じぬるものなれば、タナと云ひしにや、ツチナの義詳ならず、或人の説に、此菜一名を白鼓丁ともいへば、タンホヽの名あり、タンホヽとは、鼓聲をまなびいふなりといふ、如何にやあるべき、タンホヽは、此と彼とにして、呼ぶ所を合せ云ふに似たり、タンホとはタナの轉訛也、ホヽとは此物一名また字々丁といふなり、）

〔倭訓栞中編二十二不〕ふぢな　和名抄に蒲公英を訓せり、藤菜の義なるべし、花の時をいふにや、たんほゝ也、

〔倭訓栞後編十一多〕たんほゝ　蒲公英をいへり、たなほゝの義にや、たなは本名、ほゝは實のほゝけるをいふなるべし、一名白鼓丁ともいふ、よてつゞみ艸と呼り、又藤菜とも稱す、黄白二種あるなり、くださきたんほゝといふ、出羽にてくしなどいへり、

〔本朝食鑑三柔滑〕多年保保草

釋名（俗稱藤菜、亦稱鼓草、俱名義不詳、）

集解、野徑庭園多有、春初生苗、布地四散、葉略似羅蔔而小、葉端三尖如鉾頭、而次第深刻、二三月之際、一葉簝上三四寸、斷之有白汁、上開黄花、如野菊、後黄落成絮、莖葉花絮大抵似千葉苣、絮中有子、落處即生、或有淡紫色者稍希、無花者亦有之、其嫩苗作蔬、患疔毒之人嗜食之爾、

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕蒲公英

○フヂナ（和名鈔）　○タナ（同上、古名、）　○タンポポ　○クチナ（信州）　○ムヂナ（勢州）　○グチナ（奥州）　○グチグチナ（佐渡）　○ゴヤジ（同上）　○ツヾミグサ（越中中略）○

原野路旁ニ甚多シ、然レドモ、紀州熊野ニハ自生ナシ、廣東新語ニモ、嶺南ニハ生ゼザルコトヲ云リ、葉ハ冬ヨリ盛ニ生ジ、地ニ就テ叢生ス、形苦葉（ノゲシ）ノ葉ニ似テ小ク、薺葉ニ似テ大ナリ、切レバ白汁ヲ出ス、春時煮食フ、二三月圓莖ヲ出ス、肥タル者ハ數十莖、瘠タル者ハ數莖、高サ五寸許、内空シ、頂ニ一花ヲ開ク、單葉菊花ノ如ク、黄色後白絮ヲナシ、風ニ隨テ飛ブ、根ハ冬ヲ經テ枯ズ、一種筒瓣（ツヽシベ）ノ

薊利用

べし、

〔食物和歌本草〈六〉〕大薊小薊

あざみには大小あれどおもの総は古血をやぶり生ず新血 薊菜寒にがからくして血の道や長血血崩下血にも吉 あざみ痰万のかさの瘀血筋骨をつぎ腰いたむ治す あざみこそ労瘵に吉気を散す虫にも酒過し食すな あざみよく常に精汁のもれやすく尿血ありて多く痩に

〔延喜式〈内膳三十九〉〕供奉雑菜

日別一斗〈○中略〉薊六把、〈准二六升一、自二四月一迄二九月一、〉二

漬年料雑菜

薊二石四斗〈料鹽七升二合〉〈○中略〉 右漬春菜料

〔年中行事秘抄〕上子日内藏司供若菜事

内膳司同供之

十二種若菜〈○中略〉

薊

〔春日正預祐範記〕慶長十年乙巳正月以来御神事次第

五月

一五日、御節供如例、〈○中略〉

一前神主時盛、アザミヲ備進、不審、由及沙汰、

蒲公英

〔本草和名〈十一〉〕蒲公草、一名耩耨草、〈上江項反、下奴豆反、〉和名布知奈、一名多奈、

〔倭名類聚抄〈二十〉〕蒲公草 本草云、蒲公草、〈和名布知奈、一云太奈、〉一名耩耨草、〈上江項反、下奴豆反、〉

〔和爾雅〈七〉〕蒲公英〈タンポヽ、耩耨草、金簪草、白鼓丁、蒲公丁、孛々丁、黄花郎、〉

薊栽培

凡ソ大薊小薊ハ、形ノ大小ヲ以テ分ツニ非ズ、山野ヲ以テ別ツベシ、小薊モ肥地ニテ培養スルモノハ、長大四五尺ニ至、大薊モ瘠壤ニ生ズル者ハ、短小尺ニ盈ズ、故ニ山生ノ者ヲ大薊トシ、野生ノ者ヲ小薊トスルノ說ヲ優トス、ソノ種各別ナリ、大和本草ニ、大薊ヲオニアザミ、ヲニノマユハキト訓ズルハ、飛廉ニ混ジテアシヽ、山アザミト訓ズベシ、大薊ハ山中ニ生ジ、殊ニ幽谷ニ多シ、葉形大抵小薊ニ同クシテ、刺多ク白斑紋アリ、故ニ虎薊ノ名アリ、苗高サ三四尺許、八九月花ヲ開ク、形小薊花ヨリ小ク、唯淡紫色ノミ、莖ニ多ク連リテ、小薊ノ一枝一花ニシテ大ナルニ異ナリ、小薊ハ原野ニ多ク生ズ、ノアザミト呼ブ、莖葉ニ刺多シ、淡紫花ノモノ多シ、深紫花ノモノハ少シ、今庭ニ栽テ花ヲ賞スル者ヲハナアザミト云、又マユハキト云、是モ小薊ナリ、種樹家ニハ數十品アリ、尋常ノ外ニ白花アリ、花白シテ形大ナルアリ、富士ノ雪ト云、櫻花ノ色ニ似タルアリ、サクラアザミト云、白色ニシテ邊紅ナルアリ、ツマクレナヰト云、又ツマムラサキモアリ、黃褐色ナルアリ、カキ色ト云、其色淺キアリ、アケボノト云、紅色ノモノアリ、ベニフデト云、淡紫色ノモノアリ、ウスヾミト云、紫色ナルアリ、春日野ト云、深紫紅色ノモノアリ、クロベニト云、其餘異品多シ、

〔出雲風土記 飯石郡〕凡諸山野所在草木、〇中略大薊、

〔延喜式 三十九 内膳〕耕種園圃

營薊一段、種子三石五斗、總單功卌四人、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、蓑百廿擔、運功廿人、殖功二人、芸二遍、第一遍三人、二月第二遍三人、七月苅功四人、擇功八人、三年一度遷殖、

〔農業全書 五 山野菜〕小薊

あざみ色々あり、菜にし食するには、萵苣の葉に似て廣く刺なくやはらかにして、菜園に作る物あり、苗の時又はわかき時、葉をかぎ茹きて、あつ物あへ物ひたし物などに用ゆべし、精をやしなひ、久しき血をやぶり、新しき血をまし、其性よき物なり、作様ちさに同じ、茶園の端々などに作る

天平勝寶二年五月廿六日　　　　　　　　倉垣三倉

〔毛吹草〕三山城　竹田鞆

〔重修本草綱目啓蒙〕十一隰草　款冬花（中略）奥州南部津輕羽州秋田ニハ、至テ大ナルモノアリ、莖ノワタリ七寸、孔中ニ乾青魚二ツヲ入ルベシ、葉ハ馬上ノ傘ニ代用ユベシト云傳フ、コレヲ南部ニテ十輪田ブキト云、

〔新撰字鏡〕草　薊　鷄秋反、阿佐美、

〔本草和名〕九　大小薊根、一名虎薊大薊　一名猫薊小薊　馬薊大葉者　一名續斷（？）　馬薊已上二名出陶景注　一名生續斷出釋藥性　和名阿佐美、

〔倭名類聚抄〕十七菜類　薊　本草云、薊音計、和名阿佐美、味甘温、令人肥健、陶隱居曰、大小薊葉並多刺、

〔倭名類聚抄〕十七野菜類　大薊　蘇敬本草注云、大薊和名夜末阿佐美、生山谷間者也、

〔類聚名義抄〕八　薊　音計アザミ　芥　筋　蔚　蓟五俗　薊正

〔伊呂波字類抄〕安植物　同（？）唯物具　薊アザミ　薊菜

〔下學集〕下草木　薊菜薊字或作土二　アザミ

〔易林本節用集〕阿草木　薊菜　薊　一　筋同

〔干祿字書〕去聲　薊薊上俗下正、

〔東雅〕十三穀蔬　薊アザミ　義不詳、倭名鈔に本草を引て、薊アザミ、陶隱居曰、大小薊葉並多刺と見えて、大薊はヤマアザミといふと註せり、今俗にオニアザミといふは大薊也、又本草を引て、苦芙は、カマナ、一にカミオコシナと註せり、カマナとは、鉤芙といふ名あるに依れり、カミオコシナは不詳、今俗にナハアザミといふ是也、その薊に似て下濕の地に生ずるをいふなり、

〔重修本草綱目啓蒙〕十隰草　大薊小薊　ヤマアザミ大薊　野アザミ小薊（中略）

蕗利用

とくなる物なり、尤水こゑかれこれ多く用るにしかず、九月に打返し土を和らげ、改めうゆべし、又は熟地をかまへ畦作りし、冬春早く分てうへ、糞水をまきりにそゝぎ、泔精の汁をかくれば、肥たる陰地なれば、甚ふとく長くなりて、市町近き所は是を賣て、利潤多き物なり、總のせばき畠にても、他の菜のをよぶ事にあらず、又是に二色あり、莖のもと少赤く、筋おほく皮厚く、少かどたちて、味あらく、ゑはみて見ゆるは、料理によからず、今一種、あかみく皮うすく、葉うすく、丸く、莖もかとかどしからぬあり、是内にすぢもすくなく、和らかにして味よし、ゑらびて作るべし、おほく作りては、春蟹ぶきの時、料理にめづらし、花は藥とし、みそとし、漬物とす、

〔宜禁本草 乾五菜〕款冬花 辛甘溫、十一月採、十二月正月旦取之、未舒者佳、主肺氣、心促急、熱乏、勞咳、涕唾、稠粘、肺痿、肺癰、吐膿、止痰嗽驚悸、洗肝明目、雖在氷雪之下、至時亦生芽、春時人採代蔬、入藥微見花者良、已芬芳則都無力、有人病嗽多日、款冬花三兩枚、於無風處、以筆管吸煙、滿口則嚥之、數日効、

〔食物和歌本草 五〕款冬花

ふきのたう五臟をもまし煩を除き痰を消して目をも能する 略○中 ふきのたう心肺の熱涼し久服すればいのちながくす

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

相模國卅二種、略○中 款冬花九斤、 武藏國卅八種、略○中 款冬花十兩、

〔延喜式 三十九內膳〕漬年料雜菜

蕗二石五斗、料鹽一斗、米六升、略○中 右漬春菜料

〔庭訓往來〕菜者、繊蘿蔔、略○中 黒煮蕗、

〔續修東大寺正倉院文書 四十三〕藍蘭 紙背 進上

蕗拾圍 略○中

正二月ニ發也、款冬花ハ臘春ニ發也、物既異、時亦異、此朗詠集ノ誤ヨリ出テ、後世ノ哲人未改之、故ナリ、林氏ガ譜ニ能辨ジタリ、古人ノヨミシ山ブキハ款冬也、款冬花ヲヨメルニ非ズ、款冬ハ山谷岸組澗間ニモ生ズ、故ニ古歌ニ岸ノ山ブキトモヨメリ、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕款冬花　フキノトウ　フキノデイ阿州　フキノシウトメ和州　バッカイ南部　バッカイ南部中略○

款冬ハ和名鈔ニフヽキト訓ズ、今ハフキト呼ブ、藥ニハ花ヲ用ユ、故ニ款冬花ト云、即今冬春食用ノフキノトウヲ用ベシ中略○中古ヨリ款冬ヲ名花ノヤマブキトスルハ、其誤リ朗詠集ヨリ出ヅ、ヤマブキハ棣棠綱目ナリ、款冬ハ元來フキノコトニシテ、山生ノモノヲ山ブキト云、ヤマブキト假名同キ故ニ混ズルナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕款冬花○中略

尋常ノフキノ一種ニ紅ブキアリ、花ノ蕾紫赤色、開バ色淺シ、種樹家ニテコレヲ琉球ブキト云フ、此種モト駿河ノ身延山ヨリ出ヅ、本經逢原ニ、花紫色有白絲者良ト云時ハ、紅ブキヲ藥用ニ良トスベシ、又一種紫ブキアリ、葉面淡紫ヲ帶ブ、蜜ト背ト深紫色ナリ、又朝鮮ブキ、一名ヤツガシラト云アリ、葉大ニシテ苦味少シ、花蘂生スルコト數多キ故ニ八ツ頭ト名ク、

〔延喜式三十九内膳〕耕種園圃

營蕗一段、種子二石、總單功卅四人、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、糞百廿擔、運功廿人、殖功二人、九月藝二遍、第一遍二人、三月第二遍二人、六月刈功四人、三年一殖、

〔農業全書四菜〕款冬

款冬は旱をおそる、物にて、終日よく日の當る所に植べからず、樹のかげの肥地、其他陰地の深く肥和らかなるにうへ、さい／＼泔をそゝぎ、或酒の精の汁をかくれば、よくさかへ和らかにふ

〔本朝食鑑 三菜〕蕗（香路訓ニ布木、）

釋名（和名布布木、本朝式内膳部訓ニ布木、今俗訓ニ布木、花訓ニ布木乃登宇、）

集解、源順曰、崔禹錫食經謂、蕗葉似葵而圓廣、莖煮可噉之、今時花莖葉倶可作蔬茹、冬十二月宿根開花、正二月最盛、初出地時如小蓮、其苔漸開青黄、外有紫蕚、去土一二寸、亦如小蓮花開而重重作臺、俗號蕗臺、言相重貌耶、經六七日而碎死、候其花盛、采之入藥、作蔬者未開亦佳、三四月生葉莖、倶似小荷、或如葵葉、其莖亦似小蓮莖有竅有絲、形圓通直而肥實、無子、高者二三尺、一莖一葉、至根邊紫白色、處處林野田圃家園倶叢生、少則可愛翫、

〔本朝食鑑 華和異同三〕蕗

蕗者款冬也、李時珍曰、後人訛爲款冬、卽款凍、至冬而花也、寇宗奭曰、百草中惟此不顧冰雪、最先春也、故世謂之鑽凍、必大〇平野按、二說倶言冬月開花、諸說皆同、今本邦至春而花者多、華亦然耶、唐張籍詩、僧房逢着款冬花、出寺吟行日已斜、十二街中春雪遍、馬蹄今去入誰家、本邦古來用蕗字者、據崔禹錫食經蕗字書香路、香草也、楚辭七諫葍蕗雜於蘪蒸也、

〔庖厨備用倭名本草 首巻〕款冬　倭名鈔ニヤマフヾキ、又云ヤマブキ、萬葉集ニ山吹花ト書タルヲ引タリ、多識篇ニフキ、元升〇向井曰、款冬ヲフキト云ハ穩當ナラズ、本草綱目集解ハ、ブキヲ云ニ似テ、又ヤマブキヲ云ニ似タリ、故ニ和名ヲ或ハ山ブキト云、或ハフキト云、人ノ惑モ在此、余今案ズルニ、山ブキハ正名ナルベシ、今俗ニ云ツワ是也、フキトツワト莖葉根相似テ、二種トモニ冬月霜雪中ニ花蕚ヲ生ズ、故ニ園圃ニ種ルヲフキト云、倭名鈔園菜部ニ載テ、本名ヲフヽキト云、款冬ハフキニ似テ山谷ニ自生ス、故ニ倭名鈔野菜部ニ載テ山フキト云、本名ハ山フヾキト云、是倭名鈔ノ誤ナキ故也、余ガ款冬ヲツワト云ハ、其理在此故也、後世酴醾花ノ詠歌ヲ山ブキトヨメルハ、款冬ト酴醾ト同名異物也、然ニ酴醾ノ詠題ヲ款冬ト書ルハ誤レリ、款冬花ハ冬月霜雪中ヨリ出テ、

（易林本節用集草木）棺蕗菜　蕗

（東雅十三萬草）蕗フヽキ　倭名鈔に、崔禹錫食經に、蕗葉似葵而圓廣、其莖煮可噉之といふを引て、讀てフヽキといふ、卽今俗呼てフキといふは、語の急なるなり、又本草を引て、款冬一名虎鬚、ヤマブキと註したるは、卽今俗にヤマブキといふ者にして、たとへば大小薊の如き、小薊をアザミといひ、大薊をヤマアザミといふが如し、爾雅註を引て、芺一名は鉤頭草、ミブフヽキと註せしは、卽今俗にワニバスといふ物にして、今俗にミブブキといふ物にはあらず、又本草を引て惡實一名牛蒡、キタキス、一ニクマフヽキといふ、今俗に蒡を房に作るものは非也と註せしもの、キタキスといふ義詳ならず、ウマフヽキといふは、其葉フヽキに似て大なるをいふ、馬莧をムマビユといふが如し、卽今俗にゴバウといふは、牛蒡の字の音をもていふなり（蒡に牛の字をよぶに、牛の字の音芺のごとくするは誤也、俗惡なり）惡實の如きは、其葉フヽキに似たるに因りて、フヽキの名ありといへども、實にはフヽキの類にあらず、今俗にミツブキ、ヤマブキ、イハブキなど名づけいふ、其フキといふは總名也、水と云ひ、山といひ、科といふが如きは、一物にして其所の別れしなり、凡其フキといふもの、皆莖の中に孔ありて、是を折るに絲あるもの、陶弘景が、其腹裏有絲といひし事の如し、フヽキと云ひし義不詳、また倭名鈔款冬の註に、一云ヤマブキ、萬葉集に山吹花としるせしは、漢にして棣棠花といふもの、別にこれ一物なり、（蕗の字、雖鈔に見えて、蕗陣して香草とす、別錄には蕗草な甘草の一名とす、異崔食經に見えし所は、上にしるせし所の如く、款冬は款冬に菟葵は蘿蕷と見えしみ源順が註に、款冬を云ひけり、鐵には本草を引て、款冬一名虎鬚、虎鬚蓋に款冬の一名とす、蕗本草註に、蓮款穀冬た蕗生花蕗觸、下是也と註したり、穀見な合せ見るに、蕨本草に蕨假葵而大といひ、本草啓蒙に、春時人以代蔬と云ひしが如き、食經に見えし所に相合へり、蕗といひ款せといふ、奇なる物とは見えず、弘景が說に據るに、款冬の高麗百濟に出づと見えたり、蕗圖の名の如きは、其物百濟の俗土なるして皆別れし所と見えたれば、古俗この物をフヽキと云ひ、其山谷よりは生ずるものなればヤマフヽキといひし事の、知る受け傳ふ所ありしにぞあるべき、倭名鈔に見えし所は、前にもしるせし事の如くに、其名同じけれど異なる物とも合せ誤せしは同じさ物なし、こゝかしこに分ち用ひて其註する所も詳ならざりしかば、款冬をこゝにヤマブキといふしのゝ下に、萬葉集に、山吹花とし、山吹花ともしるして讀てヤマブキといふもの倭、せ戴しはどに蕗に蕗人なして棣棠款冬一物也とするは誤なも致しけるとも見えたり、）

蕗名稱

〔農業全書四菜〕蕳蒿

倭俗からうい菊と云、又春菊とも云、本草には八九月に種子をまき、冬春取食ふ、莖肥て味辛く甘し、四月に㐮生じ黄花あり、花はひとへなり、菊に似たり、其性平にして毒なし、心氣を安くし、脾胃を養ひ、疾を消し、腸胃を利すとあり、農業通決には、二月にうふるとあり、是は春の食とせんためならん、苗の時ひたし物あへ物となして味よし、冬春たび〳〵につくり用ゆべし、花も又見るにたへたり、

〔新撰字鏡草〕蕗（不〇々〇支〇、蘗同、）

〔本草和名九草〕欵冬（楊玄操音作東字）一名橐吾、一名顆東、一名虎鬚、一名菟奚、一名氐冬（楊玄操音丁禮反）一名於屈（出釋藥性）一名耐冬（出蘇敬注）一名苦萃、一名欵凍（已上出廣雅）和名也末〇布〇々〇岐〇、一名於〇保〇波〇、

〔本草和名十八菜〕棺莖菜、一名蕗伏、又有金實草（出崔禹）和名布々岐、

〔倭名類聚抄十七菜〕蕗　崔禹錫食經云、蕗（音路、和名布々木、）葉似葵而圓廣、其莖煮可噉之、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕按蕗卽爾雅顆涷是也、郭注欵冬也、紫赤華、生水中、藝文類聚引吳普本草云、欵冬十二月花黄色、董謂其花未舒者紫赤、卽開則黄白也、本草欵冬蘇注、葉似葵而大、叢生、花出根下、是可以充布々岐、

〔類聚名義抄五艸〕欵冬（ヤマフキ、一云ヤマフキ、）一（同九欠）欵冬（ヤマフキ、一云ヤマフキ、一名虎鬚、山吹花、）欵東（訓同）（同三彡）虎鬚（欵冬一名）

〔伊呂波字類抄不植物附植物具〕蕗（フヽキ）棺莖菜　蕗伏　金實草（已上三名同、見本草、）

〔下學集下草木〕欵冬（クワントウフキ）（枳莖菜也、本草云、欵冬十二月有花、其色黄或紫、其味苦也、三體詩云、僧房逢著欵冬華、出寺吟行日已斜、十二街中春雪遍、馬蹄今去入誰家、按此詩十二月之事、至暮春雪時分也、然我朝詠集清愼公詩云、欵冬誤綻暮春風、何故所詮日本之俗皆以山吹謂欵冬、山吹卽暗牖也、其色黄而如綠酒也、清愼公之作術亦誤歟、隱曰欵冬也、其詩意云、此事名也、若是欵冬何綻暮春風乎、皆欵冬字而云爾耳、詩意雖工用上故事誤矣、可辨之、）

一種オランダヂナ、一名ハナヂナ、キクヂナ、葉ニ花岐多シ、生食孤食並ニ佳ナリ、一根ニ叢生ス、冬末春初最繁クレタ、千葉牡丹花ノ形ノ如シ、漸ク薹ヲ起スコト二三尺、葉互生ス、葉間ニ枝ヲ抽コト甚シ、夏ニ入テ葉間ゴトニ花ヲ開ク、形蒲公英花ニ似テ深藍色朝ニ開キ午前ニ色變ジテ萎ム、當ハ葉ゴトニ多クレドモ日ニ一花ノミ開ク、後實ヲ結ブ、形同蒿子ノ如シ、絮ヲナサズ、是モ亦蒿苣ノ一種ナリ、

(和爾雅七菜蔬)茼蒿(シユンギク)又名蓬蒿、

(書言字考節用集六生植)茼蒿(シユンギク)

(和漢三才圖會九十九葷草)茼蒿　蓬蒿　形氣同乎蓬蒿、故名、俗云高麗菊、又云春菊、開花似菊、故名之、○中略

按茼蒿莖葉食脆美、然夏菊未開時有之、故賞花不爲蔬、一蒔後自生秩、六七月開花亦美也、

(物類稱呼三生植)茼蒿しゆんぎく　近江彥根にてろうまといふ、京大坂にてかうらいぎく、又きくなともいふ、關東にてしゆんぎくといふ、

(重修本草綱目啓蒙十八菜)茼蒿　シユンギク　カウライギク京　ムジンサウ雲州　フダンギク勢州　キクナ　デレコ　ヘスン共同上　フダンサウ肥後　ロウマ奥州　ロウマギク防州　ツマジロ加州　サツマギク濃州　リウキウギク讃州　ヲランダギク同州　ノビスマ伊州　シユンギク東國　シンギク總國○中略

秋月種ヲ下ス、葉ハ初生茵蔯葉ノ如ニシテ毛ナク、冬春ノ間コレヲ食フ、春ニ至リ薹ヲ起ス、高サ一二尺、葉互生、三月枝頂ニ花アリ、單瓣菊花ニ似テ大サ一寸餘、瓣ゴトニ本黃末白ク、內ニ黃心アリ、又全ク黃色ナル者アリ、又本白クシテ末紫ナル者アリ、ツマクレナヰト呼ブ、一種細葉ニシテ茵蔯蒿ノ梢葉ノ如ク、白花ヲ開ク者アリ、ギンカウライト云フ、一名シカギク、チヤウセンギク、カラギク松前ギク、

ハナザサ

同〇十二月十七日ノ朝ヨリ、朝鮮人江御扶持野菜幷ニ酒肴等下サル、六河内金兵衛奉ル、

目錄是一日ノ下行也〇中略

一苣　二百籠

〔延喜式〕三十九内膳　耕種園圃

營萵苣一段、種子三升、苗一千五百把、總單功卌九人半、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、畦上作二人、糞百卌二擔、運功廿二人、下子半人、八月採苗功二人、殖功六人、九月芸一遍三人、

〔農業全書〕四菜　萵苣

ちさ種々あり、葉の丸きあり、長きあり、長くとがりたるあり、緑色なるあり、うす黒きあり、紫もあり、中にて葉丸くひろく、たうをそく立、久しくさかへ、和らかにして味甘く、五六月まで、葉のさかんなるあり、是を求めてうゆべし、是は六月にたねを取をきて、八月早く蒔べし、肥地をこしらへ置、苗さかへたる時、畦作りし、よきほどにがんぎを切、六七寸に一本づゝうゆべし、糞水を根のわきよりそゝぎ、泔水小便を二三日に一度づゝ少あて、朝そゝぎたるは、よくさかへやはらかにしていか程かぎとりても盡る事なし、苗ふとり次第、十月霜月正二月にかけうゆべし、されども年内うへて、細根よく出、あり付たるは、春になりてよくさかへはる物なり、春になりてうへたるは、葉しげからず、其さかへをとるものなり、是も四季ともにたねを蒔て苗を貪し、いつもやはらかにして、腹中をなめらかにし、色々料理に用ゆる物なり、又四月たうの立たるを折て、皮をさり水に漬、苦みをぬかし、醋に浸し、膾のつまにし、紫蘇漬などにし珍敷物なり、種子を取には、花咲實らむとする時、末を折かけて置べし、其まゝ置たるは粃多し、蚊花を吸故に實り少し、梅雨の時分、外に有て、花房雨を受て黒く朽るが故也、何れにても枯ぬ程に折懸置べし、

〔重修本草綱目啓蒙〕十九柔滑　萵苣

按、白苣葉色淺似萵苣而背微白、其花黃與萵苣同、紫苣、葉紫色、千葉苣、莖高秀葉層々簇、色深綠光澤、雉尾苣、葉狹長末垂下、高野苣、㭊枝梗著小紫花、

萵苣　萵菜　千金菜　和名知佐略○中

按、萵苣八九月下種、臘月分種初葉布地四散、長則起莖、葉似芥葉而厚軟有皺、摘葉生和醋未醬食、脆美熟食亦柔佳、春月爲日用菜、亞于熟者也、略○中四月開花淡黃色、形似山漆花、將綻時、白色如毛散、其子如馬芹子而稍扁也、新產婦乳常成塊服之有神効、其葉濶短者難久、狹長者葉出不久、凡紫苣雉尾苣千葉苣、雖有微毒、補者希、而多用萵苣、

〔宜禁本草乾五穀〕苦苣　苦平寒、折取莖中白汁、傅丁腫出根、滴癰上立潰、根主赤白痢煮服、不可同血食、作痔、除面目及舌黃、強力、不睡、調十二經脈、利五臟、

白苣　苦寒平、可常食之、患冷氣人食腹冷、不至苦損、產後不可食、葉有白毛、如萵苣、補筋骨、利五臟、開胸膈壅氣、通經脈、止脾氣、令人齒白聰明、少睡、

〔延喜式三十二大膳〕園韓神祭雜給料春冬同

萵苣五斗

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、略○中萵苣半把六葉、餘物料六把、生菜料中把、

〔延喜式三十九內膳〕供奉雜菜

日別一斗、略○中萵苣四把、准二升、三四五月、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年八月甲戌、遣參議正躬王、送廢太子於淳和院、略○中先是童謠曰、略○中辛苣乃小苣之華、

〔玉滴隱見十一〕寬永十三年朝鮮人來朝記

〔倭名類聚抄 十七 菜蔬〕苣　孟詵食經云、白苣（其呂反、上聲之軟、和名知散、漢語抄用萵苣二字、上烏禾反、今案萵字未詳、）寒補筋力者也、

〔類聚名義抄 八 艸〕苣（俗）チシヤ　萵（俗苣字、チサ、）

〔下學集 下 草木〕萵（チシヤ）

〔和爾雅 七 菜蔬〕萵苣（チサ、萵菜同、又名千金菜、）

〔東雅 十三 穀蔬〕萵苣チサ　倭名鈔に、孟詵が食經を引て、白苣チサ、漢語鈔に、萵苣の字を用ゆ、今按ずるに、萵字未詳と注せり、墨客揮犀に、萵菜は咼國より來る、故に名づくと見えたり、萵苣數種あり、色白きものを白苣といひ、紫なるを紫苣といひ、味苦きを苦苣といふ、又別に水萵苣あり、苣即今チサといひ、水萵苣をばカハヂサといふ是也、又賣子木をも讀てカハヂサの木といふ、詳ならず、萬葉集の歌に、ヤマチサといふものは、此木をいふにや、仙覺抄には、山萵とは木也、田舍人はツサの木といふ也と見えたり、チサの義詳ならず、

〔本朝食鑑 三 柔滑〕苣（訓知佐）

集解、田圃家圃多栽之、二月彼岸下種、三四月生苗采葉、似蕪菁蘿蔔葉、而色綠帶白、然比千葉雉尾之類、則色尙白有皺文、莖肥中空而脆、折之有白汁、葉莖倶有白毛、莖頭細葉似花、毎葉抱莖相重分、又下葉濶大柔滑、倶足爲蔬食、四五月開黃花、如初綻野菊、一花結子、一蕚如鶴蝨子、花罷則收斂、子上有白毛、茸茸隨風飄揚、落處卽生、七八月復採葉亦可、八九十月再種亦生、然味不及春夏也、一種有稱千葉者、春初生苗有赤莖白莖二種、倶與苣同、倶莖高秀、葉葉相重繁茂、色綠帶碧、其味苦、折之有白汁、開花結子亦與苣同、卽是禮月令所謂苦菜也、關東稀有、京師海西最多、可作蔬茹、一種有雉尾者、正二月下種、葉似苣而尖、如雉尾色稍靑、折之有白汁粘手、三四月抽薹似千葉而高三四尺、花子幷與苣同、東西倶有之、雖可作蔬有毒、妄不可食之、有紫色者、此亦有毒、不可不辨耳、

〔和漢三才圖會 百二 柔滑菜〕白苣　石苣、　生菜　（一種高野苣、近頃間有之、〇中略）

宜、而佳者多矣、

〔雍州府志　六土產〕牛蒡　八幡山東園村之產爲名產、專稱八幡牛蒡、園村去八幡半里許、元社家大臣氏之所住也、今京師北野并小山堀河所々產者亦爲宜、（一說、八幡園牛蒡非園村、而社人家園之所種者也、）

〔浪花の風〕牛房も太きものはあれども、江戶の如く長きものは絕てなし、土中へ生るもの、江戶の如く長きものはなし、土性堅牢なる故なり、

〔甲斐國志　百二十三產物及製造〕牛蒡　府八幡ノ切差村宜シ、近時東条胡村ニ植ルハ三年牛蒡ト云、直タツコトナク、長四五尺ニシテ軟美ナリ、

〔續江戶砂子　一〕江府名產（并近在近國）岩槻牛蒡　武藏の內、江戶より九里、長三尺を過て、周五六寸をふとしとす、歯ぎれよく味ひ美也、此所の名產也、

大浦牛蒡　下總、江戶より廿里、越後弘智法印出生の地也、住侶の庵于今存ス、長三尺を過ず、周り一尺或は尺一二寸にして、大根よりも肥たり、切口八方へ罅れ、破入のごとし、すぐれてやはらかに甚好味也、輪に切て平皿に盛るに、器を過たり、無類の佳品なり、

〔經濟要錄　四〕諸菜

下總ノ國土浦ノ牛蒡ハ、周圍一尺八九寸ニ至ル者アリ、

〔國花萬葉記　十一下野〕當國州郡諸品名物之出所

稻葉　牛房

〔奧羽觀蹟聞老志　三實土產〕牛房　所出于宮城郡袋原、尤長大、

〔豐後國志　四大分郡〕土產　牛房、高田鄉堂園村出、大者長四尺許、味最美、

〔新撰字鏡　草〕蒚（又呂反、上、胡盧、又知佐、）萵（知左）

牛蒡産地

粥御節供事　御菜二前　一折敷　海松、青苔、牛房、河骨、

〔類聚雜要抄〕一宇治平等院御幸御膳(元永元年九月廿四日、大殿(藤原忠實)被下御日記定、)

三寸五分様器

干物五坏(海松、青苔、牛房、川骨、蓮根)

〔年中恒例記〕正月十日

扣牛房一折　若王子進上之

〔梵舜日記〕文祿五年正月朔日、當院之被官各來、同在所衆萩原民部少輔、十疋鈴鹿久左衛門、昆布一把、大工平次郎瓶二ツ、并錫双牛房二把、○中略持參也、

〔鹿苑日錄〕慶長八年二月十六、辰刻、柳芳同途シテ赴勝願院、相伴兵衛大夫、木工頭、會席、トロヽ、煎昆布、アライデ、鹽山升、引テ牛房、フッ煎、

〔官中秘策二十年中行事〕年中諸大名獻上物之事

十月(寒中獻上此月ニ入ル)

一牛蒡　干鯛(寒中)　大久保伊豆守　一牛蒡(寒中)　阿部豐後守

一牛房　本城山城守　一牛房　水野日向守

一胡桃　牛房(寒中)　土井大炊頭　一牛房　鳥井伊賀守

〔毛吹草三〕山城　牛蒡

〔食物知新一〕山城諸國名產

菜蔬　岩附牛蒡(武州)　因幡牛蒡(下野)　上州牛蒡(上野)

〔本朝食鑑三柔滑〕牛房

洛之鞍馬八幡村里、有肥大者、而爲勝、武之忍郷岩槻、亦爲江東之勝、而不減洛產、然諸州亦擇土地之

牛蒡利用

成てかりとり、もみくだき粃を簸去て、箱か袋に入をきて、二月早く蒔べし、是先つねに定りたる蒔時分なれども、冬より地ごしらへし置て、正月早くまきたるに、夏早根に入ゆへ、菜の絶間に出來てめづらし、されども早過たるは、閒に木牛蒡に成て、味も思はしからぬ事もあれば、二三月蒔て、虫のいまだ地に生せぬさきに、生長するを得するも、一つの手立なり、寒氣の和らかなる所は、冬より蒔もよし、總じて牛蒡はいつ蒔ても、少々根の入ぬ事はなきものなり、○中略又牛蒡大根瓜などは、いや地を嫌はず、却て舊地をよしとす、毎年同じ所にうゆべし、同じく種子を取をく事、八幡牛蒡のたね、其外よきたねを求て作るべし、よきたねは、内に筋もなく、牙もろくにはひあり、味甘く和らかなり、又去年の古たねよし、當年の實は蒔ても生せず、たとひ生じても、こはくして料理にならぬ、たねにする物、多擬取て、大根のごとくうへをきたるもよし、其まゝうへ付置たるもくるしからず、

〔北方未來考〕牛房には尺廻りの物、山にあるよしなれば、○中略是は土地合て大く成のみならず、寒國故、實を結ぶ事不相成、年々にもちこし候故、自ら根は太く相成事と思はるゝ也、

〔藥經太素下〕惡實　平味甘　鼠粘子トモ云

補中、明目、療風癬瘡疥、解毒、除消渇、手足筋攣可求根、

〔宜禁本草乾集五菜〕牛蒡根　辛甘平無毒、蒸暴食、嫩葉爲茹、主牙疼勞瘧、脚弱風毒、癰疽、咳嗽、傷痿、疝瘕、積血、治面目煩悶、四肢不健、通十二經脈、洗五藏惡氣、常作菜食之、莖葉煮汁、夏月浴去皮間習々如虫行風、洗了愼風少時、逐水久服、輕身耐老、　惡實一名大力子、未去萼謂之鼠粘、辛平、明目補中、除風傷、治瘡瘍時出已出、

〔庭訓往來〕菜者繊蘿蔔、煮染牛房、

〔執政所抄正月上〕十五日

牛蒡は細軟沙の地に宜しとあり、山どみの雑りたる細沙、いか程も深く底まで一色にして、土性よく重くしてつまりたるをよしとす、八幡などの土こゝろ是なり、畠を掘うちにする事、深さ四五尺、糞をかくる事多きをよしとす、幾度もうち返し、底まで塊少もなくすべし、埋糞はわかき草木の枝葉、又青松葉を小枝ながら埋みたるは、牛蒡のにほひよく、風味ある物なり、さて上を数遍かきならしうね作りし、横筋にても又ちらし蒔にても、薄くむらなく蒔て、こゑをうち、土を覆ふ事、五分ばかり、凡たねを一段に一升の積りにて蒔を、中分とする也、但きりむし多き畠ならば、少は多く蒔べし、又種子おほひを灰にてし、其上に土をおほひ、上を鍬のひらにてたゝき付をくべし、さて二葉より心葉出るとひとしく、間引てむらなくし、若一つ穴より二本生たるをば早くぬき去り、一本宛にすべし、芸り細々中をかきあざり、草少もなくすべし、牛蒡は取分草に痛む物なり、さて糞は鰯のくさらかし、桶こゑもよし、其外水糞にても、始終たえ間なく用ゆべし、冬掘取までも、糞を用ゆれば、味よく和かにしてふとし、少き時は糞に痛むゆへ、葉に少もかゝらぬ様にわきよりかくべし、又云、牛蒡はうるほひを見て蒔べし、若雨なき時ならば、水をそゝぎてうゆべし、さてほり取事は、十二月までも置たるが、根よくふとるものなれど、寒氣つよき所か、又は踏の地、麥をまくか、急用あらば、霜月早く掘べし、又牛蒡を作る上田にて、利の多き所は、いふに及ばす、よく根入てをそく掘取べし、同じくいけ置事、莖葉を其まゝ置ながら、大小長短をゑり分、一尺廻り程にたばね、濕氣なき所に穴を深くほり、頭の方を上にして、穴の中に竪にならべ、葉は外に見ゆる様に入、土をおほひをくべし、穴に水入ば損する物なり、自分の料理に用ゆるは、たばねすして埋をき、用にまかせて、端よりぬき取べし、いけたる上よりも、肥たる土をおほひ置ば、穴の中にても、やしなひとなりて、肥て牙脆く味もよし、又種子にするをば、うへ付にし置て、春に成て糞をも少々かけ、虫付ば取去べし、朝露に灰をふるひかけたるも、虫のく物なり、七月かれて子の色黒く

古事類苑

植物部二十六

草十五

牛蒡名稱

〔新撰字鏡　本〕惡實（支太支須乃彌）

〔本草和名　九〕惡實、一名牛蒡、（仁諝音傍）一名鼠粘草、（已上二名出蘇敬注）和名岐多伊須、一名宇末布々岐、

〔倭名類聚抄　十七〕牛蒡　本草云、惡實一名牛蒡、（傍郞反、和名岐太岐須、一云宇末不々岐、今案作房者非也、）

〔類聚名義抄　八〕牛蒡（キタキス、一云ウマフヽキ）

〔伊呂波字類抄　宇植物附喩物具〕牛房（ウマフヽキ、本草云、惡實、一名見二古本一、）鼠粘草、（已上二名出二蘇敬注一、已上三名ウマフヽキ、）

〔伊呂波字類抄　古植物附喩物具〕牛蒡（コハウ、俗人蒡作房者非也）

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一ごばう　ごん

牛蒡栽培

〔本朝食鑑　三柔滑〕牛房（訓二古保宇一）

集解、牛房諸州俱有、春初下種、二三月生苗、野人剪苗作蔬、然要采根不多、其葉似芋而長大深青、厚勁有皺、莖高起三四尺、有稜至根上紫色、四月開花成叢、淡紫色、結實作梂而小、萼上有細刺百千攢簇、一梂有子數十顆、其根大者如臂、如大蘿蔔而益堅、長者如鞭如竹筒而二三尺、其根皮灰黑而厚側、皮則碧白香脆、其不好者、中有筋絲而不脆美、近時多賞美之、

〔農業全書　四菜〕惡實

〔佐渡志五物産〕蒼　方言メトキ　雑太郡新保村ニアリ、同郡小倉村ニ生ズルモノ殊ニヨシ、

〔多識編二草〕蓍、米土久左、今案米登岐。

〔古名錄山草十六〕米止新撰字鏡　漢名蓍本草　今名ハ○ゴ○ロ○モ○

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕蓍　ア○シ○ク○サ○古名　メ○ド○ク○サ○同上　メ○ド○ギ○　ノ○コ○ギ○リ○サ○ウ○　ハ○ゴ○ロ○モ○　ガ○ン○ギ○サ○ウ○　モ○シ○ホ○グ○サ○　カ○ラ○ヨ○モ○ギ○勢州　ヤ○マ○ク○サ○江州　サ○シ○ロ○モ○ギ○備前　コ○サ○ン○シ○チ○　チ○ド○メ○グ○サ○共ニ同上　ノ○コ○ギ○リ○バ○備前　一名染蓍閩書南產志代　鋸蓍名物言注　靈草類書纂要

種樹家ニ多ク栽ユ、宿根ヨリ數十莖叢生ス、高サ四五尺、葉ハ濶サ四五分許、長サ三四寸、細ク深クキレ、鋸齒多シテ繁密ニ互生ス、夏月莖端ニ小枝ヲ多ク分チ、數十百花攢簇シテ蓋ノ如シ、一花ノ大サ三四分、五六瓣ニシテ中ニ黃心アリ、瓣ハ淺紫色ナリ、又紅アリ、白アリ、白花ノ者ハ野生アリ、紅ナル者ハ北土ニ自生アリ、是眞ノ蓍ナリ、コノ草莖正直ニシテ枝ナク、年ヲ經レバ一根五十莖ニ過グ、凡筮占ヲナスモノハ此莖ヲ用ベシ、今ハメドハギヲ代用ス、メドハギハ救荒本草ノ鐵掃帚、拾遺記ノ合歡草一名神草ナリ、此草モ一科ニ叢生シテ莖直ナリ、葉ハ雞眼草ヤハズサウ葉ニ似テ細長ク互生ス、秋月葉間ゴトニ一花ヲ開ク、形胡枝子花ノ如ニシテ色白シ、

〔草木育種後編下品〕蓍神草　春月根の傍より生ずるを分け植てよし、花に紅と白とあり、插花に用ひ、蘭家にて蓍葉を用ふ、糞水を澆てよし、

〔新編常陸國誌六十二土產〕蓍草

筑波村民家ノ東ニ原アリ、夫女原ト云、夫女石アルユヘニ名トセルナリ、詳ニ筑波山ノ下ニ出ス、其東ニ岳アリ、龜之岳ト云、山ノ形龜甲ニ似タルヲ以テ名トセリ、コノ岳蓍ノ名產ナリ、一株百莖ノ下ニハ、必龜アリテ負ト云リ、龜岳ノ名亦合ヘリ、然レドモ一株百莖ハ甚マレニシテ得難シ、丹波ノ龜山トコノ山トハ、日本蓍ノ名產ニシテ、易家者流ノ信用スル所ナリ、土人每年七月七日ノ夜、是ヲ採テ夫女石ノ上ニ晒シ用ユ、蓋陰陽和合ノ理アルヲ以テナリ、

蓍

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕九牛草　詳ナラズ

伊吹ヨモギニ充ル古說ハ穩ナラズ、伊吹ヨモギハヌマヨモギトモ呼ブ、即蔞蒿ナリ、既ニ艾ノ條ニ詳ニス、

增、本草新編曰、艾葉世人俱以蘄艾爲佳、殊不知野艾佳於蘄艾、蓋蘄艾乃九牛草也、似艾而非艾、雖香過於艾、而功用殊不若野艾、入脾胃肺三經、世人舍近而求遠、舍賤而求貴、爲可嘆耳、今按ニ九牛草ハハマヨモギナリ、海濱ノ砂地ニ產ス、苗高サ二三尺、葉ノ形常ノ艾ヨリ微シク小ニシテ、缺刻甚ダ深ク、面背共ニ白色ヲ帶テ毛茸アリ、夏ニ至レバソノ葉最モ細クナリテ三岐トナル、枝及ビ梢ノ葉ハ漸ク細クシテ岐ナシ、花實ノ形チ普通ノモノニ同ジ、集解蘇頌ノ說ニ能ク合ヘリ、

〔新撰字鏡草〕蓍 式脂反、信也、蒿也、女止、

〔本草和名六草〕蓍實 仁諝音尸、蘇敬注云、以其莖爲筮者、陶謬以楮實爲之、一名柠實、一名菽實、一名褚實、一名著冥、一名著實、一名私實 已上三名出釋藥性 和名女止久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕蓍　蘇敬本草注云、蓍 音尸、和名女止、以其莖爲筮者也、

〔箋注倭名類聚抄十草〕曲禮正義引劉向云、蓍之言耆、龜之言久、龜千歲而靈、蓍百年而神、以其長久、故能辨吉凶也、御覽引洪範五行傳云、龜之言久也、千歲而靈、此禽獸而知吉凶者也、蓍之爲言耆、百年一本生百莖、此草木之壽、知吉凶者也、聖人以問鬼神焉、白虎通義云、乾艸枯骨、衆多非一、獨以蓍龜何、此天地之間、壽考之物、故問之也、龜之言久也、蓍之爲言耆也、久長意也、論衡卜筮篇云、子路問孔子曰、豬肩羊膊可以得兆、雚葦藁芼可以得數、何必以蓍龜、孔子曰、不然、蓋取其名也、夫蓍之爲言耆也、龜之爲言舊也、明狐疑之事、當問耆舊也、圖經曰、其生如蒿、作叢高五六尺、一本一二十莖、至多者三五十莖、生便條直、所以異於衆蒿也、秋後有花、出於枝端、紅紫色、形如菊、按蓍今俗呼鋸草、或呼羽衣草、或呼鋸骨者、可以充之、訓女止非是、女止今俗呼女止波伎、按救荒本草云、鐵掃帚、

黄花蒿　牡蒿　九牛草

多く鼓て、莖葉花實ともに刈り採り用ふべし、

〔多識編二草〕黄花蒿、今案俗稱、五。行。久。左。、異名臭蒿、

〔和爾雅七草木〕黄花蒿、一名臭蒿

〔重修本草綱目啓蒙十草〕黄花蒿　タ。ソ。ニ。ン。ジ。ン。　カ。ハ。ラ。ヨ。モ。ギ。　バ。カ。ニ。ン。ジ。ン。津軽　ゴ。ギ。ヤ。ウ。常州　カ。ラ。ヨ。モ。ギ。同上　山。ニ。ン。ジ。ン。仙臺　ゴ。ム。ケ。濃州　一名黄蒿（序例又鼠麴草[illegible]ニ黄蒿ノ名アリ、又本草氏蒿）（林ニ青蒿ノ秋ニ至リ、枯レテ黄色ニナルヲ黄蒿ト云、是俗間名ナリ、）

河邊沙地ニ多シ、又人家ニモ自生ス、青蒿ヨリハ葉細ニシテ、花又多クシテ細カク、色黄ヲ帯テ青蒿葉ノ深緑色ナルニ異ナリ、葉ノ色黄ヲ帯ビテ、花穂多キ故ニ黄花蒿ト云、花ノ色黄ナル故名ルニ非ズ、葉ノ形色始終變ゼズ、臭氣强シ、苗ノ高サ三五尺、花實ハ青蒿ヨリ後レ、細小ニシテ茵蔯蒿ニ似タリ、青蒿ノ花實ニ異ナリ、

〔多識編二草〕牡蒿、波。波。計。久。左。、異名齊頭蒿、

〔重修本草綱目啓蒙十草〕牡蒿　オ。ト。コ。ヨ。モ。ギ。　カ。ラ。ヨ。モ。ギ。江州　ト。ロ。ギ。雲州（錦後ニテヘ、七月ノ盆ニ此莖ヲ用テ箸トス、）ノ。ギ。ク。奥州

山野ニ多シ、葉ノ形チ細長ニシテ、末ノ方微シヒラキテ、深キ鋸歯多シ、然レドモ葉頭尖リナクシテ、切リソロヘタルガ如シ、故ニ齊頭蒿ノ名アリ、春以後漸ク莖ヲ抽デ、高サ二三尺、葉密ニ互生ス、深緑色、嫩葉ニハ白毛アリ、稍葉ニハナシ、夏月枝ノ末ゴトニハ小黄白花ヲ開キ、末ハ穂ノ如シ、形茵蔯蒿ノ花ニ似タリ、子モ亦相似タリ、秋ニ至リ熟シテ莖枯ル、直ニ根上ヨリ新葉ヲ叢生ス、此草莖直立ス、故ニ蓍ニ代用ユル人アリ、

〔武江産物志草〕道灌山ノ産　牡蒿

〔多識編二草〕九牛草、於。加。奥。毛。岐、

青蒿

苦蒿

說ニ佐渡ノシロヨモギヲ以テ白蒿ニアツ、是ニアラズ、

〔多識編二隰草〕青蒿、加良與毛岐、異名草蒿、本經方潰、同

〔和漢三才圖會九十四本隰草〕青蒿　草蒿　方潰　香蒿　犼蒿　菣音牽　俗云臭艾、又云臭胡蘿蔔、啼○中

按青蒿處處河原多有之、六月六日採之爲神麯、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕青蒿　カハラニンジン　ノニンジン　カラヨモギ　ノラニンジン丹波　ヤブニンジン　タサニンジン大和　タサヨモギ

山中ニ生ゼズ、江河及ビ海邊ニ多シ、秋月子落テ自ラ苗ヲ發ス、初ハ地ニ就テ叢生ス、葉ハ胡蘿蔔ノ葉ニ似テ毛茸ナク、深綠色微臭アリ、冬枯レズ、春ニ至テ薹ヲ抽ズルコト、高サ三五尺ニ至ル、枝葉共ニ互生ス、葉ノ形漸ク細クナリ、梢ニ及デハ絲ノ如クシテ茵蔯ノ梢葉ニ似タリ、脚葉ノ形ト大ニ異ナリ、色ハ始終深綠ナリ、夏月枝末葉間ゴトニ花ヲ綴ル、繁密ニシテ穗ノ如シ、花ノ形ハ天名精(ヤブタバコ)ノ花ニ似テ小ク、黃蘂多クアツマリ、大サ一分餘、後蒂中ニ細子ヲ結ビ、苗根共ニ枯ル、青葉ハ此類ノ中最早ク枯ル、神麯ニ用ユル青蒿ハ此草ヲ用ユベシ、然レドモ世上ニ青蒿ト云ハ、多ハ次ノ條ノ黃花蒿ニシテ眞ニアラズ、青蒿ノ花ハクソニンジンヨリ大ニシテ黃蘂多ク出、黃花蒿トモ云ベキニ似タリ、故ニ誤テ青蒿ヲ黃花蒿トシ、黃花蒿ヲ青蒿トス、今藥舖モ誤ヲ同フス、宜ク辨別スベシ、花小ナル者ハ黃花蒿花大ナルモノハ青蒿ナリ、宗奭ノ說ニ夢溪筆談ヲ引キ、一種黃色一種青色ト云時ハ、黃花蒿モ青蒿ノ中ナル故、通ジ用ルモ妨ナシト雖ドモ、青蒿ニハ必カハラ人參ヲ用ルヲ眞トス、

〔草木育種後編下藥品〕苦蒿(にがよもぎ)　青蒿(のにんじん)の一種也、越州富山より來り、今予○阿部喜任が園中に多く培養す、秋月種を布き冬を凌ぎ、夏月に至り高さ三四尺花實あり、一度栽る時は、實自然と落て再び種るに及ばず、喜任按に、莖葉ともに苦き事、和蘭舶載來るアルセムに同じ、代用して効あり、山野ともに

蒿也、故詩七月云、采蘩祁々、毛傳云、蘩白蒿也、正義引、孫炎亦云、白蒿也、郭注依之、蘇敬注云、卽白蒿也者引之也、然則本草和名、蘩蒿上當有一名字、補仁誤以蘩蒿三字連文爲一名、故譏君謙之非是、又按說文云、蘩白蒿也、王念孫曰、蘩之言皤也、說文皤老人白也、夏小正傳、蘩游胡、游胡旁勃也、廣雅云、蘩母、旁勃也、卽是物、王念孫曰、蘩母疊韻也、旁勃雙聲也、旁聲亦相近、略○中時珍又云、爾雅、蘩皤蒿、又云、蘩由胡、皤蒿今陸生艾蒿、由胡今水生蔞蒿、詩云、呦々鹿鳴、食野之苹、苹卽陸生艾蒿、鹿食九種解毒之草、白蒿其一也、詩云、于以采蘩、于沼于沚、左傳云、蘋蘩蘊藻之菜、可以薦于鬼神、羞于王公、並指水生白蒿而言、按以云野之苹、歸之陸生、以云于沼于沚、又蘋蘩蘊藻皆水面並擧、歸之水生、不爲無理、但以爾雅皤蒿由胡分水陸、恐屬臆斷、

〔藻鹽草八〕和名少々　白蒿 かはらよもぎ、又しらよもぎ、

〔和爾雅七草木〕白蒿(しろよもぎ) 蘩、由胡、皤蒿、同、爾雅、爾雅之蘩、

〔重修本草綱目啓蒙十草〕白蒿 シロヨモギ　シラヨモギ　ハマヨモギ　一名白蓬大倉州志　白艾蒿附方　旁勃増補　遊胡同上　茵蔯蒿通雅略　山茵蔯同上　遊湖通雅

佐渡河原田ノ海濱ニ產ス、奧州ニモアリ、他州ニ移シ栽ヘテ繁茂シヤスシ、苗及花實ハ常艾ノ形狀ニ同ジ、葉ハ碊蔄葉ニ似ク厚ク、面背共ニ白毛多シ、艾葉ノ面青背白ニ異ナリ、其香氣モ亦同カラズ

〔百品考上〕白蒿　和名アサギリ○中略

本草彙言周氏曰、白蒿香美可食、今人以白蒿誤指爲茵蔯、但苗葉相似、實非也、蝦夷產ト云、今花戶ニモアリ、葉ハ茵蔯ノ脚葉ニ似テ、面背共ニ白毛多ク、四時共ニ潔白ニシテ始終變ゼズ、莖ノ高サ一二尺、七八月穗ヲナシテ花アリ、茵蔯ヨリ大ニシテ青蒿ノ花ノ如シ、蘂黃ニシテ帶白シ、秋フケ莖半バ枯レ半ハ殘リ、舊莖ヨリ發芽スルコト茵蔯ニ同ジ、臭氣ナシ、古

白蒿

〔和漢三才圖會 九十四本 濕草〕菴䕡 覆閭 菴䕡蒿 俗云比○木○奥○毛○木○

本綱、菴䕡葉似菊葉而薄、多細丫、面背皆青、高者四五尺、其莖白色如艾莖而粗、八九月開細花淡黃色、結細實如艾實、中有細子、其老莖可以蓋覆菴閭故名、極易繁衍、

子 氣味 苦微寒 入足厥陰經血分、治瘀血及產後血氣痛、

按菴䕡原野有之、用莖爲箒耐久、

〔重修本草綱目啓蒙 十一 隰草〕菴䕡 イ○ヌ○ヨ○モ○ギ○ キ○ク○ヨ○モ○ギ○江戸 フ○ナ○ヨ○モ○ギ○ 一名異珠蓮 郡蔡本草 閭蒿 藥性奇方 菴閭子 遵生八牋

播州江州山中ニ自生多シ、移シ栽テ繁茂シ易シ、宿根ヨリ叢生ス、苗高サ二三尺葉互生ス、形菊葉ノ如シ、艾葉ニ似ズ、背ニ白毛ナシ、斷レバ艾葉ノ氣アリ、秋ニ至リ穗ヲナシ、黃花ヲ開ク、花實共ニ艾ニ同ジ、卽艾ノ屬ナリ、〇中略

增、一種近年漢種ノ菴䕡ト稱スル者アリ、其葉深綠色ニシテ厚ク、牡蒿（オトコヨモギ）葉ノ如ク末ニ至テ漸ク濶ク、葉頭圓クシテ鋸齒アリ、牡蒿ノ葉頭ヲ切リソロヘタルガ如キニ異ナリ、尋常ノ者ヨリ整正ニシテ上品ナリ、盆ニ栽テ愛スベシ、花實ハ牡蒿ニ同ジ、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

飛驒國九種、〇中略 菴䕡子四斤八兩、

〔新撰字鏡 草〕蘩蘩 一同 韓圖反、白蒿也、加○波○良○與○毛○支○、

〔本草和名 六 草〕白皤、一名蘩蒿、仁諝中字音波、出蘇敬注、一名彭勃、出神仙服餌方、和名之○呂○與○毛○岐○、一名加○波○良○與○毛○岐○、

〔倭名類聚抄 二十 草〕白蒿 本草云、白蒿一名蘩蒿、蘩蘩二音、繁波、和名之路與毛木、一云加波耳與毛岐、今按、蘩又有此和名、見上文、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕證類本草引唐本注云、爾雅蘩皤蒿、卽白蒿也、本草和名云、一名蘩蒿、出蘇敬注、按爾雅所謂蘩皤蒿者、以皤蒿二字釋蘩也、詩采蘩云、于以采蘩、毛傳云、蘩皤蒿也、是也、皤蒿猶白

り、經冬莖葉不凋、宿根不枯、與青蒿異、

〔重修本草綱目啓蒙十草隰〕茵蔯蒿　カハラヨモギ　青蒿ニモ同名アリ、混ズベカラズ、　ネズミヨモギ　コギ濃州　フナボウキ勢州　ハマヨモギ加州　イヌヨモギ和州、同名アリ、　一名聖蒿正字通　菁蒿同上　加外

左只本草經集注　加外作只村家方　加火老只月令採取　增、一名絲茵蔯本經逢原

山野共ニ自生多シ、山ニアレバ山茵蔯ト云、野ニアルヲ野茵蔯ト云、家ニ種テ藥用ニ供シ、食料ニ入ル、ヲ家茵蔯ト云、別種ニ非ズ、生ズル所ニ因テ名異ナリ、本邦ハ山野ノ二ツノミニシテ家茵蔯ハ稀ナリ、初ニ生ズル葉ト莖上ノ葉ト形色異ナリ、秋ヨリ春マデノ間ハ、地ニ鋪テ叢生ス、青蒿葉ニ似テ白毛多シ、故ニ此嫩ナル時ヲ白蒿ト名ク、頌ノ説ニ、階州一種白蒿一似青蒿而背白ト云是ナリ、救荒本草ニ白蒿ト云モ、茵蔯蒿ノ嫩葉ヲ指ス、本條ノ白蒿ト同名異物ナリ、春以後漸ク莖ヲ抽デ、高サ二三尺ニ至ル、葉互生ス、形漸ク細クナリ、梢ニ至リテ愈甚クシテ絲ノ如シ、狀茴香葉ニ似タリ、深綠色ニシテ白毛ナシ、梢葉ノ岐八方ニ分ル、故ニ八角茵蔯ト云、夏秋ノ間、枝梢葉間ゴトニ花ヲ生ズ、甚密ニシテ後ニハ穗ノ如クナル、花ハ艾ノ花ニ似テ至テ小ク色白シ、秋深テ苗枯ル、實熟シ落テ自生ス、其莖ノ本ハ枯レズシテ更ニ嫩葉ヲ生ズ、又根ヨリモ新葉ヲ生ズ、皆白毛アリテ細ナラズ、茵蔯ハ莖根共ニ枯レズ、陳莖ニ因テ再ビ葉ヲ生ズ、故ニ茵蔯ノ名アリ、青蒿ノ莖根共ニ枯ル、ト異ナリ、藥舖ニ賣ルハ多ク青蒿ヲ混ズ、又紳縉ニ用ル青蒿ニモ茵蔯雜ル、二草ノ梢葉似タル故ナリ、宜ク分別スベシ、〇中略

增、一種ハマインチン、海濱ノ砂地ニ生ズ、高サ六七尺、莖葉花實共ニ相似テ、大ニ長ズト雖ドモ、白毛生ラズ、下品ノモノナリ、藥用ニ入レズ、

〔武江產物志藥草〕多摩川邊ノ產　茵蔯處村ニ、

〔新撰字鏡草〕蔄呂居反、平、蒿也、蔄也、伊波與牟支、又加良與毛支、

茵陳蒿

〔近江國輿地志九十九土産〕膽吹蓬艾
膽吹山の產する所の蓬なり、山の八分にあり、高さ三四尺及六七尺、甚大きにしてうるはし、土人每年五月五日これを採て干曬す、數遍臼にてこれを舂、乃蓬艾を製す、柏原驛にてこれを賣、自云此蓬艾一灸するときは、他の百灸よりも勝たり、栗太郡梅木村にもこれをうる、志賀郡大津の土人西川久誠といふ者多これを賣、

〔新撰字鏡草〕荷陳蒿加。耳。字。波。文。

〔本草和名七草〕茵陳蒿、一名馬先、出釋藥性和名比。岐。與。毛。岐。

〔倭名類聚抄二十草〕茵陳蒿　釋藥性云、茵陳蒿、和名比岐與毛木

〔箋注倭名類聚抄十草〕本草和名云、茵陳蒿一名馬先、出釋藥性、千金翼方證類本草中品有茵陳蒿、是輔仁依本草載茵陳蒿、依釋藥性載馬先之名也、此蓋源君誤引、陶注本草云、似蓬蒿而葉緊細、莖冬不死、春又生、陳藏器云、茵蔯雖蒿類苗細、經冬不死、更因舊苗而生、故名茵蔯、後加蒿字也、蜀本圖經云、葉似青蒿而背白、圖經曰、春初生、苗高三五尺、無花實、今謂之山茵蔯、山茵蔯乃有數種、京下及北地用者、如艾蒿葉細而背白、其氣亦如艾、味苦、乾則色黑、以本草論之、但有茵蔯蒿而無山茵蔯、本草注云、茵蔯蒿葉似蓬蔯而緊細、今京下北地用爲山茵蔯者是也、時珍云、茵蔯昔人多蒔爲蔬、故入藥用山茵蔯所以別家茵蔯也、今山茵蔯、二月生苗、其莖如艾、其葉如淡色青蒿而背白、岐緊細而扁整、九月開細花黃色、結實大如艾子、花實並與菴䕡花實相似、亦有無花實者、

〔多識編二草〕茵蔯蒿、加。和。良。與。毛。岐。

〔大和本草六藥〕茵陳　川原ニアリ、故カハラヨモギト云、冬春ノ嫩葉ハ表裏白シテ、艾ノウラノ色ノゴトシ葉大也、香アリ、老葉ハ表裏青ク如青蒿シテ色不白、香ウスシ、秋間葉細ニシテ如杉、老葉ト嫩葉トノカタチカハル、又時節ニヨリ地ノ肥瘠ニヨリテ葉ノ形カハル、青蒿ヨリ細葉ナルモア

〔枕草子 三〕草は
よもぎいとをかし

〔後拾遺和歌集 雜十一〕女にはじめてつかはしける　　藤原實方朝臣
かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思ひを

〔新古今和歌集 釋教二十〕猶たのめしめぢがはらのさしも草我世中にあらむかぎりは
この歌は、淸水觀音御歌となむいひつたへたる、

〔平家物語 五〕月見の事
德大寺の左大將しつていの卿は、ふるきみやこの月をこひつゝ、八月〇治承四年十日あまりに、福原よりぞ上り給ふ、なに事もみなかはりはてゝ、まれにのこる家は、門前草ふかくして庭上露しげし、よもぎがそまあさぢが原、鳥のふし戶とあれはてゝ、むしのこゑ〳〵うらみつゝ、くわう菊しらんの野邊とぞなりにける、

〔源平盛衰記 二十六〕蓬壺燒失事
六日〇治承五年閏二月八條殿モ燒ヌ、此所ヲバ八條殿ノ蓬壺トゾ申ケル、蓬壺トハヨモギガツボト書ケリ、入道〇平淸盛蓬ヲ愛シタ、坪ノ內ヲ一シツラヒテ蓬ヲ植、朝夕是ヲ見給ヘ共、猶不ㇾ飽足ゾオボシケル、サレバ不ㇾ斜造リ瑩レタ、殊ニ執シ思ヒ給ケレバ、常ハ此蓬壺ニゾ御座ケル、

〔新勅撰和歌集 雜十七〕題不ㇾ知　　平泰時
世中にあさは跡なく成にけり心のまゝのよもぎのみして

〔武江產物志 野菜草〕多摩川邊ノ產　艾向ケ岡

〔採藥使記 下攝州〕照任曰、淡路島ニ一種ノ艾ヲ生ズ、此艾ヲ以テ陶器ニ灸スルニ、乍チ其穴ヲ穿ツ、其火氣ノ强コケレバナリ、是レ眞ノ蘄艾ナルベシ、

上トス、蘄艾ト名ク、本邦ノ淡路モグサニ擬スベシ、蘄艾ハ今漢種アリ、江州伊吹山ノ艾、短小ニシテ香氣甚シ、故ニ其熟艾最上品トス、因テ今モ世人伊吹モグサヲ上品トスレドモ然ラズ、今ノ伊吹艾ハ一名ヌマヨモギ、卽陸璣ガ毛詩疏ニ說トコロノ、蔞艾ニシテ艾ニアラズ、苗ノ高サ一丈餘ニシテ、葉モ長大ニシテ尺ニ過ギ、葉背ノ白毛殊ニ多シ、故ニ又ウラジロト呼ブ、香氣少クシテ艾ト異ナリ、用ユベカラズ、

〔令義解 五軍防〕凡兵士每ㇾ火、○中略火鑽一具、熟艾一斤、

凡放ㇾ烟貯備者、須ㇾ收ㇾ艾葉生柴等、〈謂艾者蓬也、藁草總名也、〉相和放ㇾ烟、○下略

〔延喜式 十五内藏〕凡典藥寮所ㇾ獻昌蒲并艾、奏進之後、寮允已下參入撤ㇾ之、

〔枕草子 三〕曾禰好忠三百六十首歌云

なけやなけよもぎがそまのきり〳〵す過行あきはげにぞかなしき、長能云、狂惑ノヤツ也、蓬ガ杣ト云事ヤハアルト云々、

〔琴後集 十記〕蓬が杣の記

あるじ〈○春海〉のいへらく、○中略われ此やどりを蓬が杣となん名づくといふ、○中略かの長能の朝臣のそしりをば、いかにことわるべきぞといふとぞ、おのれ〈○村田春海〉こたへけらく、そはものになづみたるぬしかな、かの朝臣のうけひかざるは、耳なれぬ詞をいとふにこそ有けらし、されどかならずさることゝのみも、さだめがたきよしあり、そも〳〵歌の詞にいひふりて跡あることゝ、あらたにつくり出ていひそむることゝの二つあり、蓬が杣とはあらたにいひそめたる詞にて、古き跡によりたるにはあらず、そは蓬のむげう立るが、杣山の木のむれたるに似たれば、たとへていふなり、かの天つ星の數多きをあふぎて、星の林となづけ、みねの岩ほの並たてるをみて、岩垣といふらん、みなおなじたぐひなるべし、○下略

釋名〈爾雅曰、艾冰臺、毛本草、一名醫草、蕭艾二背、又五叢反、本草綱目、艾一名醫草、炙大平野、晩蕭蒿別一種、非艾之名、〉

集解、艾處處山野多有、二月宿根生苗成叢、其莖直生白色、高四五尺、其葉四布狀如蒿、分爲五尖、椏上復有小尖、面靑背白有茸柔厚、七八月間出穗如車前穗、細花結實累累盈枝、中有小子、霜後始枯、其苗作餻、合蓬糯搗作餅、三月三日用艾餅而貫戴、或合粳米粉搗作團子、作燒餅、其苗長至五月采之、晒乾作艾灸、近世朱墨印食者用其晒乾、以手揉搓如舊絮、去黑粉而水煮去黑汁、取出再晒乾用、蓖麻子油而抹調之、朱墨隨意而合用之、凡灸以陳艾爲宜、三年之艾最好、今以江州伊吹山之艾爲上、野州中禪山中標茅原之艾次之、此俗稱自古歌人之所詠也、故世人采此二處之艾而收蓄、以爲灸治之用也、

氣味、生則微苦大辛溫、熟則微辛大苦溫無毒、

主治、溫中逐冷、去一切風濕、止一切血、灸之透諸經而治百種病邪、起沈痾、其餘詳于綱目、

附方、金傷流血、〈及諸血不止、用陳艾、手中揉搓而軟、傅金瘡口、則能止血、不痛立止、〉心腹冷痛、〈用陳艾、手中揉搓合白礬少許、水煮熱取出包子手中及細絹裹、水煮熟、熨患處、即好、〉

〔物類品隲三草〕艾　和名ヨモギ、處處皆アリ、漢種上品享保中種ヲ傳フ、今官園ニ多シ、是即蘄艾ナリ、淡路產上品、

〔重修本草綱目啓蒙十草〕艾　サ○シ○モ○グ○サ○　ツ○ク○ロ○イ○グ○サ○　ヨ○モ○ギ○　ヨ○ゴ○ミ○　モ○チ○グ○サ○加州　フ○ツ○豫州　ブ○ツ○肥前

一名杜薑〈輟耕錄〉　病草〈事物異名〉　牛實〈名物法言〉　女艾〈物理小識、又蒿ノ部ニ女蒿ノ本條アリ、〉又異物草ニモ女艾ノ名アリ、皆同名ナリ、

增、一名醫德綿〈清異錄〉　草師婆〈同上〉

山野ニ自生多シ、葉ノ面深綠色ニシテ、背ニ白毛アリ、コレヲ乾シ採ル時ハ、葉ハ皆碎ケ粉トナリ落チ、背ノ白毛ノミ殘リテ綿ノ如シ、コレヲ熟艾ト云、和名モグサ、和方書ニ白葉ト名ク、一名艾綿、〈醫學正傳〉艾絨、〈天工開物〉白艾、〈常方〉白熟艾、〈同上〉モグサニ製スルハ原野自生、短小ナルモノ佳ナリ、蒙筌モ以苗短者爲良ト云リ、ソノ海邊ニ生ズルモノ殊ニ痔ナ香多シ、故ニ唐山ニテハ蘄州ニ生ズルモノヲ

佳、云此極灸百病尤勝、充與毛伎爲允、○中略 按廣韻、蓽同篳、說文云、篳藩落也、禮記儒行篇、篳門圭窬、注、篳門、荊竹織門也、兼名苑以蓽爲蓬一名、不知何據、疑以有蓬戶蓽門之稱、兼名苑誤混蓬蓽爲一也、○中略 按毛詩騶虞篇、彼茁者蓬、傳云、蓬草名也、說文云、蓬蒿也、並不言其形狀、本草諸書亦無載、埤雅載蓬引詩首如飛蓬、及彼茁者蓬、云其葉散生、末大於本、故遇風輒拔而旋、說苑曰、秋蓬惡於根本、而美於枝葉、秋風一起、根且拔矣、莊子曰、蓬善轉旋、非直達者也、商子曰、飛蓬遇飄風而行、蓋蓬有利轉之象、故古者觀轉蓬而知爲車、又載艾引詩彼采艾兮云、草之可乂病者、一名灸草、則蓬艾二草不同、以蓬爲艾、亦不知何據、

〔下學集 下草木〕熟艾（灸草）　艾蓬（二字義同）

〔八雲御抄 三上草〕蓬　よもぎがそまと云は、よもぎのそまのやうに生たるなり、さしも草と云、或非蓬似蓬草とも云り、

〔東雅 十五草卉〕蓬ヨモギ　倭名抄に兼名苑本草等を引て、蓬一名蓽ヨモギ、艾一名醫草と註せり、これも其名の相同じきに因りて併註したるなり、蓬と艾と一物にはあらず、蓬は詩の集傳に、其華柳絮の如くにして、聚而飛如亂髮といふもの即此也、其苗葉は瞿麥の如くにして、花形菊花のいまだ開かざるが如し、既に展き盡しぬれば、柳絮の如く飛ぶなり、艾は即今俗にモグサといふもの是也、ヨモギといふ義不詳、モグサとは燃草（モエクサ）也、萬葉集抄にはモとはモユルといふ詞なり、ヨモギをモグサといふが如しと即此也、

〔宜禁本草 乾集中草〕艾葉（生寒汁殺蛕、熟熱灸百病、）作煎止下血吐血衂血膿血痢水、丸散任用、主婦人漏血、利陰氣、使人有子、三月三日採、初生取作乾菜食之、實溫無毒、壯陽助水藏腰膝暖子宮、丹溪曰、（灸艾下行、服艾上行、多服致毒、）

〔本朝食鑑 三柔滑〕艾（訓與毛木、或曰毛久佐、）

野菊
佛頭菊
濱菊
常磐菊

蓬

セル儘ヲ記ス、

〔和漢三才圖會 九十四本 濕草〕菊（中略）

野菊 ノギク 苦薏（中略）

按野菊與鷄兒腸草二物相似、而葉略稍小多尖、味甚苦、其花有單葉有千葉、色黃者野菊也、鷄兒腸草葉不尖、無切似、而味不苦、其花白微帶紫色、採藥人用金剛山野菊花、充眞菊花者非也、當擇家種單葉黃菊花可藥入用、凡誤此事、用者宜擇取眞者、

佛頭菊 ブツトウギク 俗云佛菊草

按佛頭菊直莖無枝梗、葉團有段刻、淺綠色厚柔而不潤、文理如皺畏、常數十葉簇抱、莖生、狀似濱菊、九十月開白花、單葉頗似菊、

濱菊 ハマギク 俗稱 本名未詳

按濱菊莖葉共似佛頭菊、而葉狹長有刻齒、深綠色甚潤滑、九十月開白花、似菊而大厚、（中略）

常磐菊 トキハギク 不斷菊 淵明草 俗共稱

按常磐菊始於夏菊種、近年出於江戶、其莖葉似菊而甚瘦細、稍葉無切叉、略似茼蒿葉、五月開花、似野菊花而小、外單白內八重帶微靑黃色、運純白、逐日生枝梗、至秋開花、故名常磐菊、

〔本草和名 九草〕艾葉、一名氷臺、一名醫草、已上本條、白艾、一名蒿艾、正且蒿者也、已上二名出蘇敬注、一名蓬、音吐計反、出雜要訣、和名與毛岐、

〔倭名類聚抄 草二十〕蓬 兼名苑云、蓬一名蒿、艾也、蓬蒿二音、盧谷切、漢語抄云、和名與毛木、見玉篇、本草云、艾一名醫草、

〔箋注倭名類聚抄 草十〕圖經曰、艾初春布地生苗、莖類蒿而葉背白、時珍曰、此草多生山原、二月宿根生苗成叢、其莖直生白色、高四五尺、其葉四布、狀如蒿、分爲五尖、椏上復有小尖、面靑背白、有茸而柔厚、七八月葉間出穗、如車前穗、細花、結實累々盈枝、中有細子、霜後始枯、圖經又云、以復道及四明者爲

かのみゆる池べにたてるそがきくの志げみさえだの色のてこらさ

〔奥義抄三〕そがきくは黄菊なり、承和のみかどは、よろづの物きなる色をめでたまひて、菊もきなるを愛したまひける也、されば承和菊と黄なるをいふ也、或物には、一本菊をいふ也、さればこそ志げみさえだとは、よみたれとはいへれど、一本きくならずとも、えだなかるべきやうなし、又黄菊の一本ぎくにてありけるを、みてもよめりけん、みぎのことばにつきて、一本菊といふべきにあらず、色のてこらさとは、いろのてりこきさまをよめり、志げみさえだとは、しやしたえと云也、

〔白石紳書八〕一己亥〇享保四年春三月に開く、長崎伊豫守元仲の從者に高田勘四郎と云もの、京師彼やしきの庭際にうへ置し色々の菊ども、其苗をうつし栽る事をわすれて、初に植しまゝにて、三年の後に花の開きしを見しに、種々の花皆々黄色なる花と成たり、是をおもふに、是はもと黄なるものなるを、人の力にて種々のかわりも出來しにやといふ也、此者元來無學のものにて、菊は黄色を正色とするなど云事を知れるにもあらず、たゞ〳〵その見る所に據りて、いひし所也、尤以て奇妙と云べし、人力の天に勝つ所ありと見へしがと、その天なるものは得て加ふべからざる所有なり、人の心術爰につきて、心得有べき事なれば、其人の名をも詳にこゝにしるし置る也、さらば當時さま〴〵の奇花あるも、たとへば人に酒をすゝめて、其醉狂を見て戯とするが如し、返す返す不可然事也、

〔桂林漫錄下〕菊變艾

連歌師阪昌周、東都山伏井戸ニ僑居ノトキ、隣家ノ老父、菊ヲ好テ作リケルガ、長ヲ延サズシテ、花ヲ開カシメン事ヲ欲シ、年々切ツメ苅コミケル程ニ、二三年ノ後、變ジテ艾ト爲リヌ、唐艾ノ名宜ナリト、昌周ガ云ケル由、予〇桂川中良ガ幼ナルトキ、杉田老醫、先考國訓法眼ヘ語リケルヲ、思ヒ出ダ

蘂ハ常菊トチガヒ、細筒子ニシテ末五出、蘂多ク重ナリ心ナシ、蘂ヒラケ滿蘂トナレバ、黄色淡クナリテ、中ニ小心アリ、此菊花葉共ニ苦味ナクシテ、食料ニ充ベシ、故ニリヤウリギクト云、此花藥用ニ良トス、今藥舗ノ菊花ハ、奥州仙臺ヨリ出ス、常ノ黄菊ニシテ味苦シ、又夏菊ヲ用ル人モアレドモ宜シカラズ、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

甲斐國十二種、黄菊花十兩、　近江國七十三種、〇中略 黄菊花一斤二兩、　下野國十四種、〇中略 黄菊花五兩、　若狹國廿四種、〇中略 黄菊花二兩、　阿波國卅三種、栝胡、黄菊花、澤寫、橘皮各一斤、　讃岐國卅七種、〇中略 黄菊花三兩、

〔類聚國史 七十五 曲宴〕延暦十六年十月癸亥、曲宴、酒酣、皇帝〇桓武 歌曰、己乃己呂乃、志具禮乃阿米爾、菊乃波奈、知利曾之奴倍岐、阿多羅蘇乃香乎、賜五位已上衣被、

〔類聚國史 三十一 帝王十一〕大同二年九月乙巳、幸神泉苑、琴歌間奏、四位已上共插菊花、于時皇太弟〇嵯峨 頌歌云、美耶比度乃、曾能可邇米豆留、布智波賀麻、岐美能於保母能、多乎利太流祁布、上〇平城 和之曰、袁理比度能、己己呂乃麻丹眞、布智波賀麻、宇倍伊呂布賀久、爾保比多理介利、

〔年山打聞 上〕菊の歌

萬葉集には、一首も見えず、それより後桓武天皇の御製を類聚國史七十五卷に載られて云、〇歌略

今按するに、今も菊の花は、九月中頃もしくは末つかたより十月迄盛也、萬葉に淡路廢帝天平寶字年中迄の歌を載られたるに、一首も見えざるは、稱德光仁の御代、或は桓武のころなど、もろこしより菊のわたりたるにや、

〔拾遺和歌集 十七 雜秋〕題しらず　よみ人しらず

〔文恭院殿御實紀附錄五〕或日松平樂翁定信の邸を、林大學頭衡とひし時、めづらかなる菊花三十種あまりを、いと淸らかなる宮に入たるを出してしめされ、こは本城の內苑へ培養し玉へる實生の花とて、御側申次土岐豐前守朝旨もて、うち〳〵賜はりしなり、それのみならず、もし其うちに得まほしく思ふ花もあらば申出よ、苗をわかちて下したまはるべしとの御旨なり、いと有難き御惠ならずや、花はかぎり有て萎むべければ、聖慮の厚きことを、永く感戴し奉らんと思ふなりと、物語ありしとぞ、

いづれの秋のことなりしや、菊苗を閣老に分ちたまはりしに、翌年花の頃になりて、去年たまはりし菊の花さかば、吾一覽に献ぜよと仰事ありければ、諸老みな退きて花片をきり、名器にのせてたてまつりぬ、其花いづれも絢爛富麗にして、いふばかりなく美事なりしに、一人水野越前守忠邦がたてまつりし菊の、花容萎薾のさまにて、餘の花に比すれば、更に見所もなくぞ有ける、公(○德川家齊)つら〳〵見給ふて、各たてまつりし富麗のものは、必ず園丁に任せ培養を盡して、この美をなせしことならん、越前の花のうるはしからざるは、極めて親培せしなるべしと宣ひて、これより忠邦を寵遇し玉ふ事、他に異なりしとぞ、

〔續近世叢語五規箴〕熊本侯愛菊、多植庭中、以架蔽風霜、一日謂竹原玄路曰、菊花殊美、可作和歌賞之、玄路卽吟曰、霜耳蔽、菊之著綿、脫葉而、蒼生草耳、著勢座登差思、侯乃蹴然有感、由是不復栽菊、(竹原玄路、稱勘十郎、熊本藩人、靈感公擢爲用人職、有能名、)

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕菊(○中略)

菊花種類多シ、大抵二品ニ分ツ、藥食ニ用ル菊ト、花ヲ愛スル菊トナリ、藥用ノ菊ハ甘菊ナリ、本草ニ說トコロハ此モノヲ指ス、甘菊ハ元來色ノ黃白ニ拘ラズ、味甘キ者ヲ用ユ、然レドモ今本邦ニ傳ヘ栽ル者ハ皆黃色ナリ、和名アマギク、又料理ギクトモ云、九月ニ花ヲ開ク、大サ寸許、或ハ寸餘、

も作りて、文化十年の頃は、處々に是を學びて作れり、遊觀の人群集したりしが、其後漸く衰へて止たり、（今はしとの花壇作りのみなり、種々の作り物は、實かゝる眼利分なしとなり。）

〔一話一言十六〕巣鴨菊

丁卯（文化四年）の九月、節遲くして菊の花いまだひらかず、十月六日、白山本念寺なる母の墓にまうでしかへるさ、巣鴨五軒町の菊見にゆく、去年みし垣根の山茶花いかゞならんと問ふに、花すでに咲てかつちるもあり、先樹家植左衛門が園にいりて、大菊をみる、（花壇四間許也）中菊もあり、花いまだ十分ならず、その隣に文次郎といへるあり、門に風流菊細作といへる標をたつ、入てみれば、細の形につくりなせり、（花色紫小輪也）それより市左衛門が園に入てみれば、花又咲り、こゝには孔雀の羽をひろげたらんやうにつくれる二本あり、花いまだ遲し、小路を出て巣鴨の大路に出、左の方なる彌三郎が園に入りてみる、去年みし西施白の花壇にして、蟻石もてきざみたる如し、花の中は黄色にうるみたるやうにみゆ、これは大村家より出し種にて、もとは濃種也とぞ、紫の中輪に一トひら〳〵づゝ、白き生の入たるを、霞のやどりと名づく、實生にして今年の新花なりと、彌三郎かたる、小菊のあざみ菊といへる二もとをふさ〳〵と大きくつくりなせり、一は白、一は紫也、（紫の方未）三間の花壇の中に、たゞ一もとにて左右に二間半あまりひろごりて、山のかたちにつくりなせる黄赤色の菊を、天貝冠と名づく、これは去年の十月に苗を分てつくりたれば、十二月の培養の力によりて、かくはなれりといふ、なべての菊は、四月に苗をわかちて、九月まで六ケ月の培養也、ことしは十一月より根をわかつべきなどかたれり、存養の力のあつき事、これにてもみつべし、夫より東ざまに歩みて、佐太郎が園にいる、これは今までみし花にくらぶべくもあらず、園の中よりはじめの市左衛門が庭に出て、もとのみちをかへれば、六日の月の影雲間にもれて、さやかなるを見つゝ、金曾木の里のやどりにかへりぬ、

りは曲尺にて寸より二三寸迄なり、寛永の頃より、名を賞して翫ぶ者ありし、正德の末つかた、高根、小倉山杯といふ菊あり、享保に至る迄、花形に丁子咲、毛咲、管咲の類ひあれども、餘に賞せず、近世菊花盛んなる趣意は、享保十乙巳年五月、紀州和歌山より、紀藩の臣落合氏菊苗を都下へ持來り、此種色々變じて珍花たり、此菊の生は、菊の中の別種なり、莖細く花葉杯も麗、近來の珍華也、此菊上月吉岡の兩氏へ贈り、夫より日向畠山奧津の三氏へ移り、僕(○松籟軒南甫)この花を奇翫する事四年の間なり、同十四己酉春、此菊を奧津氏より得て、年々種を蒔、今三十四年に至る、其頃は秘華珍品と賞して、實生を仕立おくに、散らすべからずと盟をなし、各相應の花檀を搆へ愛翫す、世人是を知らず、時に澀谷山榮傳僧、此花手に入培養專にして、益色々の實生出たり、此菊を世人賞すといへども、金王菊と名付、其頃は他仁へ苗送らず、因て尊秘計にて此菊を求んと欲て、紀州和歌山を初として、諸國を尋るといへども、此菊花得がたし、かくの如くの珍花なり、然るといへども正菊にあらず、異形の花也、況やヨレクルイ卷込咲をむかし愛翫する事を聞かず、故に斯なるは造化の變にて、變じたる珍華なるべし、先づ吉野山、飛鳥山金王櫻筆捨松、大異殿、各秘花にて、其頃は世人の得難き菊なり、此外珍花數多出たり、此時より括り咲よれ咲を、世人珍花と稱して、菊花大氣に盛んなり、

(菊花俗談)寛延二己巳年九月、市ケ谷八幡社内にて、或人會主として、一塚予(○松籟軒南甫)府内の實生、凡二百餘種を取集む、都下にをゐて實生會の始め也、此中に紀州菊の實生は二三ケ所より出る、此花を賞して、聊の文を綴りたり、是に同士の輩有て、寛延四辛未秋九月、實生會を催し、花の位を定む、紀州菊花形付と題號して、菊譜を綴れり、是より菊譜數品出たり、

(嬉遊笑覽十二草木)江戸巣鴨の花戸、年毎に菊を作る、花壇七八間ばかりにして家ごとに作る、中菊にてありしが、文化の初大作りとて、一本の菊にて鳥獸山水種々の物を作り、後には百姓商人まで

去年秋承殿樣所允菊種、今已及時可觀、監管理苑囿事行、求數莖、今將其名色開具、分栽之日、幸惟亮照査覽爲感、

一金菊 老黄　花大開闊　綠葉枝瘦者爲金菊一　一粉紅鶴翎 淡紅而花大者　一鵝黄剪絨 淡黄花不甚大、顏色鮮者　一白剪絨 花小如錢、花瓣細如線縷者、

二月二十四日　朱之瑜　白

〔嬉遊笑覽 十二 草木〕白石が洞巖に答る書、大菊はやり候由、當所亦同事に候、去々年歟、加賀の小瀨復庵の二十韻古風を兩度和し候詩有べく候、北地も同風と見え候、水戸安積よりも此程菊は作り覺え候など、自讚めされ候て、御申越候などあり、かゝれば當時國中ゆすりて、此菊を翫びしなり、○中略享保のころ、菊合の會はやりたり、雅筵醉狂集に、近世この花はやりて、新花を作り出し菊合の會をしける、其會おほくは丸山にて催すなり、我やどの東の籬菊とりてはるかにみやる鷲の丸山、艶道通鑑に、八重九重のきく合、もよりにまかせ好類(すきずき)につれ、東山北野につどひて、輪をきそひ葩をあらそふ、鼻冗きて席に尻のつかぬは、今日の花軍の魁け人と見え、顏をかたぶけて線にたばこのむは、評席の一の筆と推せらる、かの評判が管咲に針咲つけて、家まで忍び通ひ路、あけぼのや(これら菊の名なり)云々、さくら牡丹つばき菊、色々の手入して、枝をため根をゆがめて、狂ひ咲をたのしむは、古人のかたわものをとのそしりに落入べし、わけて菊そろへの席をみるに、一本々々枝たをやかにもせず、能一ッ切生にしたるは、美女の獄門みる心地し侍るとあれば、近時の朝顏會などのごとし、東京夢華錄、九月重陽都下賞菊有數種云々、酒家皆以菊花縛成洞戸云々とあり、これは大菊にて作るなるべし、

〔菊花俗談〕元祿の初つかた、都下に菊作る人あり、其頃は花の名を賞して翫ぶ者なかりき、花の種

〔鹽尻二十三〕一尾州海西郡田尻庄に茂井村といふ所に、八十餘りの老民あり、菊を愛して數千本植ゆ、今年寶永六己丑九月、一根に菊蓮兩種連理す、更に五味氏に告て、十月朔日公に獻ず、

〔鹽尻五十四〕菊重陽の節物、紅葉は季秋の觀にす、詩歌にも詠じ侍る、然るに近年九日に菊さかんなること希にして、紅葉も神無月ならでは色なし、氣候も古今同じからざるにや、○中略さてもはかなくなりしもの、去年實種せし菊の生ひ立て、花も大きやかに、淺紫の色したるを、嬉しき事にして、是は名付てよといひし程に、淺紫の賞すべきは、天龍寺にこそと戲れしを、頓て自筆して名とせし、又單にして白く靑をかくるをば、如何といふべきやと見せける程に、單に藍すれるは小忌衣にこそあれといひし、是等の花など、こゝろなく今年も開きて、いみじき姿見るこそ、こしかたも思はれ、露けき袖も今一入にしほれて、あだなる記念なりける、

〔先哲叢談五〕安積覺、字小先、小字覺兵衞、號老圃、又號澹泊齋、○中略澹泊甚愛菊、園中多栽之、嘗上百種于守山侯、侯亦賜佳品十餘種、寄田子愛書曰、亡師朱文恭、有乞菊於義公帖、載在遺文外集、覺百事不能、學文恭而唯此一事、稍存餘風、不亦可羞之甚哉、又賀鳩巢七十序曰、吾百事不能、而粗知養菊、培植三十年、頗能得其要領、乃以菊譬鳩巢以成一篇、鳩巢亦其黃花塢詩自註曰、主人有菊癖、凡諸家奇品莫不旁搜並收而栽培之、種藝尤精、品第極嚴、每至秋時、五色爛熳、以聳人目、而安積氏之菊聞於國中云、

〔甲子夜話四十二〕林子曰、コノ十月ノ事ナリシ水戶參議ドノヨリ園菊ノ花ヲ庭製ノ花斗ニ插シテ、後樂園中ニテ各種ノ樂燒ヲ作ラル昔朱舜水ノ菊苗ヲ乞シ書付ヲ新刻セラレ、石摺ノ四石ヲ貼金シ、上包ノ表墨流シ、裏靑無地ノ鳥子紙二枚ニシテ、紫ノ打緒ヲ以テ結タルヲ副テ貼リケル、參議ドノヽ雅懷ニハ感率リヌ、中々普通ノ詩ヤ歌ヨリモ遙ニ意表ニ出タルコトナリシ、但ソノ菊花四品トモ皆朱氏ノ書付ニ見ユル、各種バカリヲ插レタリ、眞ニ面白キコトニゾアリキ、カノ新刻ノ文、

先帝、秋籬空冴梁園雪、晩岸忽疑潁水霜、遲咲盧花千片白、更嘲松樹一株青、鳳凰紫艶爭仙佳、月照濃粧混瑞雪、鷓谷酌流爵却老、陶家差酒未知醒、蓋緣移座倫爲祝、萬歳榮華契此亭、

〔千載和歌集五秋〕法性寺入道前太政大臣、内大臣に侍るとき、家の歌合に殘菊をよめる、

藤原家俊

けさ見ればさながら霜をいたゞきておきなさび行しら菊のはな

〔草露集〕五月菊并序

昔人題五月菊詩、有爲緣陶令醉來偉、屈原醒之句、余愛其雅而當矣、而此花開多在六七月、豈土氣候而爾邪、將非居移氣者與、余常恨其名實不副、而見花之晩也耳、今茲五月盛開、因賦申二句作八句詩、以遣舊恨云、

陶輿南山不改青、叙看星月違英靈、黄花豐國貢梅源、重午新開直九齡、豈醉陪如陶令醉、縱醒何似屈醒、爲陶右相爲屈左、二老風流在一庭、

〔簑坡隨筆八〕叢說八十ヶ條

中世今出川家の西京別莊に、數品の菊あり、故に菊亭と叡聞に達し、御車を此に枉給ひぬ、實季卿有難く感悦の餘り、悉く堀て禁園に奉らる、依て是より以來當家に菊を植ず、

〔年々隨筆二〕から國にては菊は黄なるをめづめり、詩どもにも黄菊黄花などぞきこゆる、皇國には畳まどにせると霜によそへしよりはじめて、志ろきをむねといひならはしたり、まことに手をつくしたるくさ〴〵の色よりも、白菊黄菊のいたく大ならず、又小くもあらぬを、わざとつくろひなどもせでさかせたる、此園の中など、そこらの松影に、匂ひみちたるこそをかしけれ、そがきくとは、黄菊のことなりといふ、さる事にや、何がしとかやきこえし連歌師の句に、黄菊白ぎくその外の名はなくもがな、さる事也、

立荒村悵望將穿眼、追尋且送魂、意驚由過雁、腸斷豈開猨、有處堆沙插、何人折柳樊、自開還自落、誰見也誰言、暮景愁雖散、涼風恨易呑、寄詩花盛否、珍重可知恩、

〔春記〕長曆二年十月十六日己卯、今日於中宮可有進菊之興、從先日被企事、其事師房卿、公成卿、經輔等發起云々、可入菊之器皆可用金銀風流云々、　十七日庚辰、左衞門佐經季自內退出來談云、昨夜依召參中宮、關白、東宮大夫、中宮大夫、東宮權大夫、權中納言、(信家)四條中納言、(依召參、但直衣云云、太無便事也、)二位中將、左兵衞督、新宰相中將、新宰相等也、皆著直衣祗候、(不論節親之公卿、直衣候內之事、近代之作法也、)殿上人經輔、資通、經長、經季、師良、資綱、經成、經季等也、人々進一本菊等、其高或一丈餘云々、其入物各盡金銀風流、此中公成卿經輔菊、其入物太以美麗也、自餘人々不惱覺者、先有盃饌、(東片庇云々)事畢被參御前座、即有管絃事、次和歌事云々、曉更被講和歌、畢各々分散者、人々云、撿非違使別當盡金銀風流之事、先例無此事、可彈指事也云々、資通、經長不進菊、凡不盡進云々、後聞菊二本被奉內御方、其一本被奉女院云々、

〔後二條關白記〕寬治七年十一月三日、菊花植庭、爲養服所翫也、藥草也、本草可引見、

〔續世繼(入ふし柴)〕鳥羽院くらゐの御ときに、大將殿(○源有仁)きくをほりにやりて、たてまつり給けるに、うすやうにかきたるふみのむすびつけてみえければ、みかど御らんじつけて、かれはなにぞ、とりてまいれと、くら人におほせられけるに、おほい殿は、ふと心えていろもかはりて、うつぶしめになりたまへりけるほどに、みかどひろげて御らんじければ、

こゝのへにうつろひぬとも菊の花もとのまがきを忘ざらなんとぞありける、きさい(○待賢門院)の御あねにおはすれば、とき／＼まいりかよひ給につけつゝ、しのびてきこえ給ことなども、おはしけるなるべし、

〔本朝無題詩(二植物)〕賦菊花(物)　　藤原敦光

重九佳辰何物好、共携新菊思丁寧、爲隨時令初薰砌、漸吐日精半徧庭、玉蘂吹來唇自冷、金葩掬去手

久かたの雲の上にてみる菊はあまつほしとぞあやまたれける

〔伊勢物語上〕むかしなまむある女有けり、男ちかう有けり、女歌よむ人なりければ心みんとて菊の花のうつろへるを折て、をとこのもとへやる、

くれなゐに匂ふはいづら白菊の枝もとををにふるかとも見ゆ、おとこしらずよみによみける、

紅に匂ふがうへのしら菊はをりける人のそでかとも見ゆ

〔大和物語上〕おなじみかど、〇宇多 齋院のみこの御もとに、菊につけて、

行てみぬ人の爲にと思はずば誰かおらまし我宿の菊、さい院御かへし、

我宿に色折とむる君なくばよそにも菊のはなをみましや

〔貞信公記〕延喜九年十月四日、内裏有菊花宴、　八日庚午、參宇治並極樂寺、有供菊事、

〔菅家文草四〕寄白菊四十韻

遠隔滄波路、遙思白菊圃、東京錦舍宅、西向雀羅門、小壇斜當戶、疎籬正通軒、無池蓮本欠、有畝竹途繁、擬種孤叢美、先尋庶草蕃、苗從白嶺得、種在侍郎存、(予舊宅、吏部侍郎之日、天台明公寄此花種、)下手分移遍、中心愛護敦、早春新賦莫、初夏細牙根、時撫占依井、承湯免就盆、葵期掲酷烈、蓮約引嬋娟、爽籟吹灰到、流年轉穀奔、乍看珠顆坼、爭賞素叢翻、蟬翅迷施粉、蜂鬚鬪著痕、地疑星殞宋、庭似雪封袁、紫艶衣裳飾、香浮酒滿樽、仙家緣藥圃、隱士厭桃源、笑殺陶元亮、冷貴楚屈原、和光宜月露、同類是蘭蓀、色惜衰虛室、名後要盛昆、斷芋曾獻主、愴卿只貽孫、住老休妖桂、忘憂倍帶萱、芬芳應佩服、貞潔欲攀援、四序環無匹、千秋矢不諼、生涯雖量測、藤命未平反、面目慚操少、風塵悶亂煩、業抛羊杜筆、官建隼旗幡、失道人皆議、安身我獨論、雙魚收北闕、五馬屬南轅、(文選云、副于雙魚、李氏註、魚二官也、余按取道謂及郡刺史、解却印故云也、)鬱鬱江雲晩、漾漾潤雨溫、行程過綠浦、逆旅臥青蘋、水國觀賓絕、漁津商賈喧、一來披沸洄、三度變寒暄、想像霜華發、悲傷晩節昏、含情排客館、抱影

我社中の花を論ずる事、甚至れり、花もまた奇巧を極て甚妙なり、目も至り花も妙々なるに隨て、花を論ずるの品位足らず、因て此秋は位を增し、菊重の陽數にとりて九段に極め、天眞神奇には異褒を加へ、絕倫亦褒の字を加ふ千百年の下にも、如斯花はあらじといへるに當りて、其妙品をおゝべしと、誠にかりの位を設け、花は天眞に極るといへるも、此事ならずや、

寶曆十一辛巳年九月　菊翁述

菊の位。。。

一位　諸々の花にくらぶるに、自然に立上りすぐれたるもの、一體の揃たる是を位と云ふ、牡丹は花の富貴と云、喜久は隱君子と云ふのたぐひに似る樣にして、花の一體の上を云ふなり、

二品　玄妙は玄妙の品、天眞は天眞の品ある類ひ、おのづからけ高ﾞ見るを云、形手强し、透艶これ全く花の姿の上を云ふなり、

三輪　大輪なるかた最上なれども、中輪にても釣合能く、大輪に立ならびてもおとらぬを取るたぐひ也、あながちに輪の大輪にも限らぬを云、

四色　紅黃紫樺に限らず、くつきりとして勝れて能きを上とす、たとへば白もうつり白より雪白と云ふは格別なり、

五艶　色能くとも光りつやなければ、おのづから位品共に落るもの也、

六透　葩の間疊枚疊枚にわかれて見ゆるを云、かさね多く重ねてかためなるは、賤しきものなり、

七受　一輪の花形の釣合を持、うけ込かゝへるこゝろ也、花形の正しきを云、志まりの能きといへるも、大かたは請によるなり、

〔古今和歌集五秋〕寬平御時きくの花をよませ給ふける　としゆきの朝臣

ヲ三荷ト糞土一荷ノ割ニ調合シテ代ヲ補理ヒ、種ニスル花ヲ小、便灰ト能ク採合テ蒔キ、其上ニ厩肥ノ蒸朽タ、細キ粉ト爲タルヲ、一二分篩掛テ、苫カ藁筵ノ類ヲ雨覆ト成シ、芽ノ生ジタル後ニ覆ヲ取除ベシ、菊ノ植地ハ、花ヲ食料カ薬料ニスル菊ヲ作ルニハ、甚ク培養ヲ心配スルニモ及バザル事ナレドモ、花ノ美麗ヲ賞覧スベキ大菊中菊ヲ植ルニハ、別段ニ精細ヲ盡シテ作ルニ非レバ、絶世ノ名花ヲ得ルコト能ズ、故ニ絶倫ノ珍花ヲ作リ出スニハ、高燥ナル土地ヲ撰ビ、先ヅ其地ノ深三尺許モ堀上テ、前年十月頃ニ理肥スベシ、乃チ古疊カ或ハ腐タル藁筵ヲ用テ宜シ、其上ニ野土カ黒鬆土ヲ置テ細ニ砕キ、寒中ニ人糞ヲ澆テ耕交ヘ、雨ノ濕ザルヤウニ能ク覆ヲナシ、都テ三度糞ヲ澆タ、寒ニ斷花サセ置キ、翌年春分後ニ至テ、又耙シテ大陽ニ晒シ、花壇ヲ造テ、三月上旬ヨリ植ベシ、又根ヲ分ンコトヲ欲セバ、九月十月ノ頃ニ、根傍ヨリ出タル芽ヲ分ケ採テ別畠ニ植エ、能ク霜覆ヲ爲シ置テ、三月此ヲ移シ植ルコト、實生ノ苗モ異ナルコト無シ、凡ソ菊ヲ植ルニハ、理肥セザル花壇ニテモ、深一尺二三寸、廣八九寸ナル穴ヲ穿リ、糞土八斗、鷄屎二斗、烟草莖粉二斗、馬糞二斗、混合タルヲ置テ、其中ニ一本ヅヽ植テ、既ニ四五寸ニ長タル頃ヨリ、時々盛養水ヲ薄クシテ、根本ニ澆グトキハ、莖葉共ニ茂リ、花モ甚盛ナル者ナリ、凡ソ菊ハ花ヲ養フハ易ク、葉ヲ養フハ難シト云ヒテ、花葉共ニ盛ナルヲ古來珍重ス、養水ノ葉ヲ汚スコトモ、泥土ノ葉ヲ穢コト甚禁忌ナリ、時々清水ヲ以テ能ク洗フヲ法トス、〇中略春分頃ニ菊花ヲ開シムルニハ、秋分ニ根ヲ分テ盆ニ栽エ、冬ヨリ早春マデノ間ハ、地窖ノ中ニ養ヒ置トキハ、春分前ニ花ヲ開ク、夏菊モ秋分ニ分ケ植ベク、寒菊ハ九月初ニ分ツベシ、常盤菊ハ四時花アリ、此亦秋分ニ分ケ植ベシ、凡ソ菊ヲ移シ植ルニ、舊根ヲバ悉ク除キ棄ベシ、宿根ヲ交植ルトキハ、舊根ヨリ蟲ヲ生ジテ、繁榮スルコト能ハザルニ至ル、菊ヲ作ルニハ、蟲ヲ殺スモ亦一箇ノ勞ナリ、

〔菊譜〕菊譜序

置、又人糞を入、右の如すること三度にして雨を除置、二月比埋て日にさらし植る也、根分は九十月比、根もとより出たる芽を分とりて別に植て、蘆簾を低かけ霜を除置、春にいたり清明の頃に植、尤花壇へ瓶の大さに壟を掘、其中へ右の肥土へ鳥の屎と、烟草の莖を切まぜて、壟一ッに菊一本植べし、又六七月の間に一度蚕汁を根廻へ入たるもよし、肥を多く澆ば葉枯るもの也、菊譜云、養花易、養葉難、又曰、糞水葉に着べからず、泥あれば洗べし、又曰、以韮汁澆根妙、又清明の頃分植るもよし、何も舊根をよく去べし、宿根より虫を生るゆへなり、菊經曰、死蟹醃水澆灌不生莠虫、花鏡云、魚腥水去蛀、蚯蚓地蚕傷根、以石灰水灌之自死、遠將河水連澆、以解灰毒、若黑蛐蟮齊其皮、以麻裹筋頭、將之則出、若象幹蟲（似蠶青蟲與葉一色）食葉、須早起以針尋其穴刺殺之、菊藥ニ入ものは、甘菊、野菊等なり、花を賞するは、中菊大菊なり、其中菊の作様は、扇造、帯造、色々あり、根を曲ざるは、早く梢を切て枝をふかせ、五六月迄は切てよし、夫より一枝に花一ッ着、其外の枝苔は皆摘去べし、初より竹或は葦をそへ、琉球席のほつしにて結付てよし、是は帯作なり、又根を曲て作るには、莖を土へ伏て、竹の枝を以て挟、土へさし込て止るなり、是は扇作なり、又大菊などは四五月頃雨天のせつ、勢よき梢又幹を管に切て、肥土へ插、根を生じて人糞汁を澆ば、甚よく肥て花大に咲ものなり、夏菊は八月根を分植てよし、寒菊の類皆秋分るなり、又ふだん菊は夏より冬まで花咲ものなり、總て菊の手入は大概をしるすゆへ、必是た止ず、漢土の菊の類は菊譜に見へたり、又植様は種樹書に見ゆ、

〔草木六部耕種法二十菊花〕菊ハ品類極テ多ク、其名目勝テ記載スベカラズ、何トナレバ菊ハ其種子ヲ蒔テ生ジタルハ、其花形色種々ニ變ズル者ナルガ故ナリ、凡ソ菊ハ培養ヲサヘ懇到ニスレバ、實ヲ蒔モ、幹ヤ枝ヲ插モ、葉ヲ插モ、皆能ク活者ナリ、故ニ珍花ヲ世ニ弘ズシテ秘藏スルニハ、其菊ヲ栽タル處ニ、人ノ近寄ヲ禁ズベシ、若夫葉ヲ盗採スルトキハ、直ニ插テ活モノナルヲ以テナリ、凡菊ヲ作ルニハ、高燥ノ地ヲ良トシ、濕地ニ宜カラズ、菊ノ實ヲ蒔ニハ、春分頃ニ山野土カ、黒鬆土カ

菊栽培

及ぶとぞ、これはかぶろぎくといへる菊ありて、そのたねよりまきいだせしとなん、又小ぎくといひて、同じ頃至てちいさき花あるをも、とり合て賞翫せしなり、其のち明和中に、中山菊といへるものいできて、めづらかなる花びらなど有て、今に世にもてはやすにより、大菊小菊などはすたれたり、

〔一話一言　八〕菊の名

蒐加草に云、大源庵菊、其白者名大牡丹、花様如牡丹也、其黄者名眞盛、種自越前出也、〈黄盛譬之鑑〉また支考が菊合序に、寛永のはじめより、京洛に此花を玩びてとあれば、久しき事にはあらじ、序中に見へし菊の名は、

初霜　薄雪　金より　銀より　小金めぬき　濡鷺　香爐峯　釜山寺　金鷲　銀鳳　御法

村雨　小手巻　李將軍　飛鳥川　きなこ鳥　白臥龍　月下門　宇治　ふしみ　山崎

有明　花麒麟　金翅鳥　紫金龍　朱雀門　羅門　阿蘭寺　衣通　三人錢　大和笠

かばかりの事も、時々に違ひて、今の花は昔の名にはあらじ、

金目貫といふ菊を、今省きてきんめといふ、續山井、こがねきくは霜の劒の目貫かな、〈曾加〉後撰夷曲集、浄華院にて〈入宮御方〉葉までよく咲みだれたる作りやう、金目貫の菊一文字とあれば、前の發句も、金目貫の字をわけて作れる句とみゆ、こがねとばかりは、黄菊をすべていふやうなり、

〔草木育種　下〕菊〈木草〉　菊の類は實ばへにて、年々花形變故その數を知ず、花鏡云、如劉蒙泉菊譜、逐有一百六十三品、范至能、史正志、馬伯州、王藎臣、皆有譜、其名目至三百餘種云々、菊の實を蒔には、山の野土の肥たるか、又黒ぼくにもよし、濕地を嫌也、高き所にて相應の土に肥土を合、代を拵、其内へ二月初に蒔、其上へ藁の至て細き麩を少し振かけ、雨覆をして置、生て後覆を取べし、植る地は多中、野土或黒ぼくの内にて、菊を植ざる肥地を掘、その上へ人糞を澆、よく切ませ寒にいてさせ

許、八寸或ハ尺

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕菊○中略花ヲ賞スル菊ニハ、春夏秋冬ノ分チアリ、皆花開ク時ヲ以テ名ク、其冬菊ハ即寒菊ナリ、滁廬ノ條ニ、單葉寒菊ノ名アリ、秋後花サク、蘂ニ酒ヲ澆ゲバ、霜ヲ凌テ紅紫色ニ染テ美ナリ、唐山ニテ賞スル秋菊ハ、今ノ中菊ニシテ、本邦ニテ賞スル大菊ニハアラズ、范成大劉蒙史正志等ノ菊譜、及ビ花史左編群芳譜、秘傳花鏡ニ詳ニ載ス、和書ニテハ菊經ニ詳ナリ、又人家盆玩ニマンギクト云アリ、一莖多枝ニシテ花甚繁密、傘ヲ開クガ如シ、是數次心ヲ摘去テ、多枝ナラシメテ花多キナリ、土州ニテ、アメガシタト云、讃州ニテカサギクト云、漢名滿天星群芳譜ト云、又千瓣黄色ニシテ、大サ三四分ナルヲ、コガネヌキト云、是集解頌ノ説ノ珠子菊ナリ、コレニモ紅白紫間色數種アリ、

野菊　アブラギク　センボンギク　イハヤギク　一名薏花綱目拾遺

山足路旁ニ多シ、原野ニハ稀ナリ、一科叢生ス、苗高サ三五尺、枝ヲ分ツコト最繁シ、故ニ千本ギクト呼ブ、葉ハ花岐多クシテ鋸齒密ナリ、莖葉淺緑色、斷レバ、ソノ氣艾ノ如シ、秋晩花ヲ開クコト甚多シ、單瓣ニシテ大サ四五分、心大ニシテ瓣短ク、微シク香氣アリテ黄色ナリ、ソノ味苦シ、故ニ一名苦薏ト云、世ニ此草ヲカモメイリトスルハ穩ナラズ、救荒本草ノ圖ニ異ナリ、和名ニノギクト呼ブモノハ、救急本草ノ雞兒腸ナリ、混淆スベカラズ、旋覆ニモ野菊ノ名アリ、

〔塵尻三十九〕菊花四時ながら見る、三月菊とてもてあそぶ黄色なるは、春の季より夏に至り開く、夏菊數品あり、冬は寒ぎくありて、寒中にも見るべし、されど秋菊のめで度には似侍らず、詩歌に詠せしも、秋の花いとなつかし、

〔閑窻自語四〕大小菊語

正德のはじめ、大ぎくといへるものを作り出て、家ごとにうへもてあそぶ、花の大きさ一尺にも

〔閑田次筆 三〕此種類○中略奈良の御代までは、いまだ渡らざりしが、万葉集中には見えず、されば字音のまゝにてよびならへり、新撰字鏡にからよもぎといひ、又世に翁艸などいふも異名なり、日本後紀に、桓武帝の御作歌、此ごろのしぐれの雨に菊の花ちりぞしぬべきあたら其香を、と遊ばせしが見ゆれば、此御代のころはじめて來りしにて、こなたにては初より色香をめづることとおぼしき也、

〔大和本草七花草〕菊　順和名ニカハラヨモギト訓ズ、但ソレハ野菊ナルベシ、古歌ニハキクトヨメリ、蘇我菊ト云ハ、八雲抄ニ黄菊ナリトイヘリ、上代ニハ未中夏ヨリワタラズ、故ニ萬葉集ノ歌ニハ菊ヲ詠ゼズ、其後ワタリシユヘ、古今集ニハスデニ詠ズ、○中略今案ニヒトエナル黄花ニ、スグレテ甘キ菊アリ、是藥ニ用ル眞菊ナルベシ、又冬菊ハ寒菊ト云、單ニシテ味甘シ、又重葉ノ小菊、黄色ニシテ味甘ク、秋冬久シクアリ、モロコシニハ菊ノ花一本ニ多キヲコノメルニヤ、范成大菊譜序曰、至秋則一幹所出數十百朶トイヘリ、唐繪ニカケル菊モ花多シ、日本ノ好事ノ者ハ、一莖只一花ヲツク、故ニ花大ナリ、菊ニ細子アルモノアリ、種之生ズ、白菊ハ大ナレドモ味甘カラズ、凡菊ノ葉春夏及秋ノ初マデ、ワカキ葉ハ久シクユビキテ食フベシ、脾胃虚瀉ノ人ニハ宜カラズ、菊ノ葉ヲ乾シテ茶トシ服ス、色モ香モ好ト、中華ノ行厨集ト云書ニアリ、花モ甘キハ生ニテモ乾テモ食フベシ、苦キハ不可食、胃氣ヲ損ズ、野菊ハ山野ニ多シ、性アシ、不可食、

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕菊　節華　女華　女節　日精　女莖　更生　金蕊　治蘠　周盈

陰成　傳延年　略○中

按仁德天皇七十三年、始渡異朝青黄赤白黑菊種也、異朝者百濟國也、其黑色者未審、今亦有紺菊、此乃近年所出之一種也、今有稱五菊者、鵝毛、玉牡丹、黄白御愛黄色醉楊妃、京大白、共白色帶微赤是等唐種始於筑前博多栽之、今處處移種而甚繁育、不茂盛、凡菊子極細或不見、故古者分根插枝、近年覺仲春蒔花實而生、出數多珍花、今得名者徑尺

東籬下、悠然見南山、と訓せられしと、藤林の詩僧はほめらるれども、菊の一字をあきしべばなと和訓つけしは、もつてまはりたる、こむづかしき訓ならずや、梅をむめと訓じ、櫻をさくらと譯せしには、はるかにおとりたる事ならずや、

〔松の落葉　三〕菊

からくにの菊は、こゝのふぢばかまなり、そのよしあきらめいひてん、○中略秋の野におのづからあまた生出てさく菊のはなは、ならのみやこのころにもあるべく、そは万葉集八の卷の歌に、ななくさとかぞへしなかのふぢばかまなりけり、そのなゝくさは、山上憶良詠秋野花歌に、秋野爾、咲有花乎、指折、可伎數者、七種花、其一　芽之花、乎花、葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、朝貌之花、其二　とよめるにぞありける、かきかぞふればといへば、大かた秋の野に咲たる花の、あるかぎりをいへるこゝろなるに、あまた咲てうつくしききくの花をもらすべしやは、朝貌は桔梗、藤袴は菊なれば、げに秋の野のはなのこりなし、ものしり人は、ふぢばかまを蘭なりともいへど、らには生いづる野まれにして、七くさのかずにいるべき花のさまならず、類聚國史卷三十一、帝王部にも、平城天皇大同二年九月のくだりに、乙巳、幸神泉苑、琴歌間奏、四位已上共插菊花、于時皇太弟頌歌云、美耶比度乃、曾能可邇米豆留、布智波賀麻、岐美能於保母能、多乎利太流祁布、上和之曰、遠流比度能、己己呂乃麻丹麻、布智波賀麻、宇倍伊呂布賀久、爾保比多理介利、と見えたり、插菊花とありて、御歌にふぢばかまとよみたまへば、菊はこゝのふぢばかまなることさだかなり、さきに延暦の帝はきくとよみたまひしかども、花はすぐれてめでたけれど、こゝのふぢばかまと同じものなれば、かくもよみたまへるなり、さて插菊花とある此菊は、蘭の字の誤を寫傳へしなるべしと、上田秋成はいひつれど、さにはあらじ、日本後紀に、同じ御代の此事をかゝれたるにも、插菊花とあり、二書ともに蘭の字を草の手にかきて、菊にあやまるべしやは、○下略

くに呼ぶと註せり、即今キクといふもの此也、其註せし所の如きは、古にはカハラヨモギとも、カハラオハギとも云ひしを、後の俗、字の音によりて、キクといひし也、されど歌の言葉などには皆キクとのみ讀みたれば、古言の俗なる、後の代の雅言とはなれるなり、かゝる例少からず、(中略)古の時には、菊の字を讀でクヽといひけり、舊事記にクヽリヒメといふ神の名を、菊理媛としるされ、和名鈔にクヽチといふ地の名の、菊池と見えし如き是也、されば和名鈔には、當時の音によりて、キクといふなして、本音とは云ひしなり、カハラとは川上をいふなり、ヨモギといひ、オハギといふが如きは、文書の類なるをいふなり、白雲一にカヘラヨモギといひぬれど、此物には異なり、

〔倭訓栞前編七〕きく○中略 菊はもとくゝとよめり、菊理媛菊池郡など是也、新撰字鏡和名抄に、和名をも載たれど、歌には音をもてよめり、○中略 菊花の弟と稱するは、梅を花の兄と稱するに對へていふ也、菊は万花に後るゝものゆゑに、わけて殘花をも賞するなり、殘菊の名は、東坡詩に本けり、重陽を過ての名なるよし、菅家文草に見えたり、殘菊宴は十月五日に行はる、村上帝の時に始まる、西宮記に見ゆ、○中略 ひともとぎくは、新勅撰集物名に見えたり、續後撰に、一本菊奉るとも見えたれば別種にや、蝦夷には、春白花の菊ありといへり、菊花種類多しといへど、單瓣、重瓣、有心、無心、簇心、佛頭、蜂窠の七品をもて總る也といへり、近年一株にて、五色を備るあるに至る、○中略 歌に山路の菊などいへるは、本草にいへる苦薏なるべし、群芳譜にも、菊與薏有兩種と見えたり、苦薏一名野菊にして、倭にのぎくと稱するは、馬蘭一名紫菊なり、嫩葉をよめるなといへり、源氏に老をわする、菊といひ、齡を延ぶる事を歌によめるは、風俗通に見えたる南陽の甘谷の事によれり、仙書に延壽客といふよし、月令廣義に見えたり、菊の下水などもよめり、本草に據ば、南陽の菊黄白兩種あり、蒙筌に、月令稗子、菊曰黃花、取其得時之正、況當其候、田野山側盛開、滿眼皆黃花也と見ゆ、我邦山野自生の者は、皆白花なるを異とす、

〔假名世說〕平維章姓は平、名は維章、字は子文、金吾と稱す、云、菊に和訓なきは、遥く此國へ渡りし故、和歌の詮議もなき事、實にさも有るべし、○中略 足利將軍開國の比、東福寺の塞一國師、陶元亮が詩をよまれしに、採菊

川　醉楊妃　等持寺（已上菊名）

〔八雲御抄（三上草）〕菊　白　やへ　むら　そか　ひともと

凡菊は万葉に不詠歟、寛平菊合以後、殊名物とはなれり、寛平菊合右歌に、すへらぎの万代までにまさりぐさたまひしたねをうゑし菊也、まさりぐさといふ、　似星とよむは黄菊なり　いはねのきく（俊頼、基俊、難之）、凡無何之（○之一本皆）一任心、名所にはよむべからず、　菊名所　みなせ　おほさはの池　むらさきの　大ゐのどなせ　たみの、しま　さほ河　ふけ井　ふきあげ　あふさかの關　伊勢のあじろの濱　已上菊合名所被定所々也、抑そか菊は、一說承和菊、黃菊也、俊成はそかひなど云やう也、更非承和菊云々、兩說也、末（○末原作未、今按一本欲、）生難定之、仙菊なれば、酌下流ちとせをふる物也、うちはらふにもちよはへぬべしとよめるも、願身は得上壽心なり、ちる事なし、旁祝物なり、業平は花こそちらめといへり、花こそかれめといへる心也、經霜うつろひしほめる物也、

〔重修本草綱目啓蒙（十隰草）〕菊　カラヨモギ　ヲトメグサ　アキシベノハナ　アキシクノハナ　クサノアルジ　チヨミグサ　ヨハヒグサ　アキナグサ　ノコリグサ　チギリグサ　モヽヨグサ　タテリグサ　タキモノグサ　ヲキナグサ　チヨグサ　マサリグサ　コガネグサ　ホシミグサ　カタミグサ　ナガツキグサ　アキノハナ　アキクサノハナ　アツカイグサ　イナテグサ　ヤマシグサ（以上古歌ノ名）　カワラヲハギ（和名鈔）　今通名　甘菊一名金英（本草圖經）　家菊（劉蒙菊譜）　重英（種樹仙方）　涼蒿菜（救荒本草）　石決（群芳譜）　冷香　朱贏　傳公（二共同上）　九華（瑯琊代醉編）　陸成生（宛委餘編）　長生草（物理小識）　笑靨金（輟耕錄）　倉華（典籍便覽）　延年　貞芳（二共同上）　花一名隱逸花（衛州府志）　拒霜（通雅、木芙蓉ト同名、）　霜傑（尺牘雙魚）　東籬客（花鳥爭奇）　佳友（事物異名）　壽客　黃花　帝女花（共同上）　延壽客（典籍便覽）　金翹（同上）　黃鈿（蘇氏韻輯）　黃華先生（事物紺珠）　金剛不壞主　配妃（共同上）　女郎花（○[illegible]下略）

〔東雅（十五草卉）〕菊キク　倭名鈔に本草を引て、菊はカハラヨモギ、一にカハラオハギ、俗には本音の如

二也一名扶公、（菊華也、已上出神仙服餌方、）菊花者天精也、（出抱朴注方、）一名朱嬴、一名傅公、（出雜要訣、）和名加波良於波岐、

〔倭名類聚抄 二十 草〕菊　四聲字苑云、菊（居竹反、本草注云、菊有白菊、紫菊、黄菊、和名加波良與毛木、一云可波良於波岐、俗云本音之重、）日精草也、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕按千金翼方、證類本草草部上品、有菊花、無白菊紫菊黄菊之名、證類本草引陶注云、又有白菊、莖葉都相似、唯花白而紫菊黄菊無載、唯初學記引本草經云、有筋菊、有白菊黄菊、與此所引略似、未知源君所見何等本也、○中略 按本草和名謂加波良於波岐、不載加波良與毛岐之名、加波良與毛岐河上蓬艾之義、新撰字鏡菊花謂辛與卑支者急呼耳、於波岐今俗呼與女加波岐或與女奈、救荒本草雞兒腸是也、菊似雞兒腸在河上、故名可波良於波岐、與陳氏云苦菊莖似馬蘭生澤畔、似菊正合、馬蘭雞兒腸一類耳、依所謂當是苦薏、今俗呼野菊、或呼千本菊者、其所實花者蓋丞漢種、故倭歌詠之皆音讀、以非皇國自生之物也、白蒿亦謂加波良與毛岐、見下文、與此同名異物、○中略 按說文云、菊大菊蘧麥、爾雅同、郭璞注云、即瞿麥、說文又云、蘜日精也、以秋華、則知菊蘜不同、而秋華作菊者、蓋假借也、陶注本草云、菊有兩種、一種莖紫氣香而味甘、葉可作羹食者爲眞、一種青莖而大作蒿艾氣、味苦不堪食者名苦薏、非眞、其葉正相似、唯以甘苦別之爾、陳藏器曰、苦薏味苦、花如菊、莖似馬蘭、生澤畔、似菊、菊甘而薏苦、日華子云、菊有兩種、花大氣香莖紫者爲甘菊、花小氣烈莖青小者名野菊、味苦、然雖如此、園蔬內種肥沃、後同一體、圖經云、初春布地生細苗、夏茂秋花冬實、然菊之種類頗多、

〔醫心方 一〕菊花（和名加波良於波岐、又岐久、）

〔類聚名義抄 八 僧〕菊（音鞠、カハラヨモキ、俗云本音之重、）　蘜（二或）

〔伊呂波字類抄 加 植物附植物具〕菊（カハラヨモキ）　白蒿（同）　〔同 幾 植物附植物具〕菊（キク、カウヨモキ、白菊、黄菊、居六反、此平、）

日精草　延年　女莖　嬴（已上キク、音並、菊花也、一名帝女花、）

〔運歩色葉集 天〕酈縣山（菊）　〔同 草花名〕日精草（菊名）　菊花　太白　朽葉　少將　濡鷺　霜覆　細

牛邊蓮

く生する也、花形は木蘭に似て葉は細長し、

〔倭訓栞前編六〕からくさ草の名にいふは半邊蓮也、駿州にてかたいかりといふ、鐵猫兒に似て花の偏なるをもて也、賀州にて根せりともいふ、此草地に就て生じ、芹の氣味あるをもて也、

〔重修本草綱目啓蒙隰草十二〕半邊蓮 カ。ラ。ク。サ。 ハ。タ。ケ。ム。シ。ロ。 サ、ン。セ。ウ。グ。サ。藝州 キ。ク。ガ。ラ。ク。 サ。レ。ン。ゲ。プ。ル。 ア。ゼ。ム。シ。ロ。 ミ。ゾ。カ。ク。シ。 カ。タ。イ。カ。ら。播州 デ。シ。バ。リ。加州同名アリ 一名半枝蓮農圃六書

小草ナリ、圃側溝邊ニ地ニ就キ蔓延シ、土モ見ヘザルニ至ル、故ニハタケムシロ、及ビミゾカクシノ名アリ、葉ハ雀舌草ノ葉ニ似テ、厚ク大ニシテ鋸齒アリ互生ス、淡緑色、夏月枝頂ゴトニ一花ヲ開ク、大サ三四分許、五瓣一方ニ偏生シテ菊花ノ半邊ノ如シ、故ニ半邊蓮ノ名アリ、其色淡紫或ハ純白ニシテ微香アリ、今插花ノ邊花ハ此草ノ象ヲウツセリト云フ、一種江州ノ産葉長寸許ナルアリ、花モ亦大ナリ、

〔廣益地錦抄七〕半邊蓮 宿根より春生る、尺ばかりの小草にて、地にはびこる、葉五枚ヅヽ出て、切まはし見事に、車の半輪のごとく、花は五六月さく、うすむらさき、花形も又車の半輪のかたちなれば、車輪草といふ、段々枝多く出、花葉しげく付く、小草なり、鉢植にしてながめたへず、愛賞すべし、

〔武江産物志藥草〕上野邊ノ産 半邊蓮谷中

菊名稱

〔新撰字鏡草〕蘜菊二上字左。支。奈。 菊花辛。典。毛。支。

〔本草和名草六〕菊花、一名節華、一名日精、一名女節、一名女華、一名女莖、一名更生、一名周盈、一名傳延年、一名陰成、一名苦意、味苦、出釋藥性、玄白菊、花白、巳上二種出陶景注、一名周成、蓋也、一名神精、子也、一名神華、子也、一名神英、子也、一名長生、根名也、巳上五名出大清經、一名女騏、一名庶、巳上出兼名苑、菊花者月精也、出大清經、一名日華、一名延年、華也、一名生嬰、

澤桔梗

〔大和本草〈六〉〕薺苨　與桔梗葉相似、而比桔梗則大、似杏葉、且與沙參相似、根長味甘、今人沙參ヲアヤマリテ薺苨トス、或薺苨ヲ以沙參トス、紛ヤスシ分別スベシ、

〔重修本草綱目啓蒙〈七山草〉〕薺苨　ツリガネサウ　一名賊參〈簡譜〉　土桔梗〈本草原始〉　季奴只〈鄕藥本草〉　一名莪苨〈群芳譜〉

二種アリ、集解說トコロノ者ハソバナナリ、東武ニ自生多シ、葉ハ攔尖ニシテ鋸齒アリ、杏葉ニ似テ長ク互生ス、苗高サ三四尺、六月莖梢ニ長ク連テ花ヲ開ク、形沙參花ニ似テ大ナリ、淡紫碧色下垂ス、秋深苗枯ル、春ニ至リ舊根ヨリ葉ヲ生ズ、形圓カニシテ沙參ノ脚葉ノ如シ、根ノ形ハ人參ニ似テ輕虛ナリ、

救荒本草ニ載スル杏葉沙參一名地參山蔓菁ハ、マルバノニンジンナリ、一名キヽヤウニンジン、タニギヽヤウ、加州花戶ニテ唐沙參ト呼ブ、春宿根ヨリ苗ヲ叢生ス、葉ハソバナニ似テ短ク厚ク毛茸アリ、莖高サ七八尺、上ニ數枝ヲ分ツ、勁直ニシテ軟弱ナラズ、六七月枝上ニ花ヲ開ク、下垂セズ、形亦沙參花ニ似テ大ナリ、深藍紫色又白花ナル者アリ、根形人參ニ似テ重實ナリ、此トソバナト皆苗ヲ斷バ白汁出ヅ、

〔延喜式〈三十七典藥〉〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、〈○中略〉薺苨、茵蕷、小蘗各六斤、　大和國卅八種、〈○中略〉薺苨、桑根、白皮各五斤、〈○下略〉

〔和漢三才圖會〈九十四末濕草〉〕澤桔梗〈サハギキヤウ〉　俗稱〈未詳本名〉

按澤桔梗高近二尺、葉似山丹草〈ヒメユリ〉葉而短、三四月葉間開花、形似桔梗而小、紫色、頗似水葵花、而淺水中亦生、多生濕地、

〔剪花翁傳〈三六月開花〉〕澤桔梗　こなぎともいふ、花の色靑に紫を帶たり、開花六月中旬より九月末迄咲出る也、方半陰、地二分濕土回廡、肥淡小便春ひがんにそゝぐべし、移春彼岸よし、是山谷に多

薺苨

山野向陽ノ地ニ多ク生ズ、春宿根ヨリ初出ノ葉、形圓カニシテ鋸齒アリ、深綠色、款冬葉ノ如クニシテ小ナリ、故ニ江州ニテシヤクシナト名ケ、俚民蔬ト爲シ食フ、春後漸ク薹ヲ起ス、ソノ葉桔梗葉ニ似テ大ニシテ周邊ニ鋸齒アリ、甚ダ脚葉ノ形ニ異ナリ、互生或ハ兩兩相對シ、或ハ三四五六葉對生ス、ソノ形圓アリ長アリ、又二三分ノ濶サ三四寸ノ長サナル者アリ、並ニ毛アルモノアリ、毛ナキ者アリ、皆コレヲ掐メバ白汁アリテ出ヅ、秋ニ至レバ莖高サ二三尺、ソノ梢ニ枝椏ヲ分チテ筩子花ヲ開ク、形風鈴ノ如ニシテ小ク、長サ五分許、末ハ五瓣ニシテ內ニ白蘂アリ、皆枝上ニ連リテ下垂ス、ソノ色藍紫色、或ハ淺ク、或ハ白色、或ハ闇色、ソノ蕚桔梗花蕚ニ似タリ、花謝シテ蕚殘ル、內ニ細子アリ、霜後苗枯ル、根ハ年ヲ經テ漸ク長大ナリ、形皆直クシテ人參根ニ似タリ、淡黃白外ニ橫文アリ、曝乾スレバ甚輕虛ナリ、

〔本草和名 九草〕薺苨、(楊玄操音上音在禮反、下乃禮反、)一名鹿腺忍、(根名也、出小品方、)和名佐岐久佐奈、一名美乃波、

〔倭名類聚抄 二十草〕薺苨　本草云、薺苨、(齊泥二音、和名佐木久佐奈、一云美乃波、)

〔箋注倭名類聚抄 十草〕陶注薺苨云、根莖都似人參、而葉小異、根味甜、又桔梗條陶注云、薺苨葉甚相似、但薺苨葉下光明滑澤無毛爲異、葉生又不如人參相對耳、唐本桔梗注云、陶引薺苨亂人參謬矣、且薺苨桔梗又有葉差互者、亦有葉三四對者、皆一莖直上、葉既相亂、惟以根有心爲別耳、衍義、陶所言其意止以根言之、唐本注却以苗難之、誤矣、時珍曰薺苨苗似桔梗、根似沙參、本草圖經所謂杏參、救荒本草所謂杏葉沙參、皆此薺苨也、救荒云、杏葉沙參、一名白麪根、苗高一二尺、莖色青白、葉似杏葉而小、微尖而背白、邊有叉牙、杪間開五瓣白盌子花、根形如野胡蘿蔔、頗肥、皮色灰黲、中間白色、味甜微寒、亦有開碧花者、時珍又云、薺苨多汁、有濟苨之狀、故以名之、濟苨濃露也、今按別本注云、根似桔梗以無心爲異、爾雅、苨菧苨、郭云、薺苨也、

〔宜禁本草 乾 中草〕薺苨　甘寒、解百藥毒、人家收爲果菜、蒸切作羹粥、利肺氣、和中明目止痛、又韲葅得、

ききやう

〔續後拾遺和歌集〈七物名〉〕ききちかうをよめる　　前中納言匡房

月草の色なる色ぞ珍らしききちかうてみればころもうつりぬ

〔散木奇歌集〈十雜上〉〕ききやう

あやまたぬ花の都をそのれからうき京なりと思ひけるかな

〔毛吹草〈三〉〕丹波　桔梗

〔佐渡志〈五物産〉〕桔梗　數種アリ、花或ハ紫ニ或ハ白ク、單ナルアリ、複ナルアリ、北山ノ下ニ生ズルモノ紫ノヒトエニシテ、藥トナスニ佳ナリト云、

〔本草和名〈草七〉〕沙參、一名知母、一名苦心、一名志取、一名虎鬚、一名白參、一名識美、一名久希、一名虎須、〈出釋藥性〉一名虎治須、〈出蘇敬注〉唐、

〔和漢三才圖會〈九十二本山草〉〕羊角菜　羊嬭科　合鉢兒　細絲藤　過路黃〈今云辻人參、又云僊人參、〇中略〉

按羊乳卽沙參之別名也、然陳氏所謂羊乳乃羊角菜、而倭沙參也、〈以有蔓爲蔓人參、又名拉人參、〉和州、河州、信州處々山中有之、蔓生、其莖葉共似初生羅摩及薺苨葉、八九月葉間開小白花、亦有淡紫者、形如鈴鐸、根莖有白汁、但宿根黃皺有横文、理如人參文、尋常用之換人參、最爲沙參、人用藥而有功、害以爲沙參之一類、故代唐沙參者無異、正代人參者不可也、

〔重修本草綱目啓蒙〈七山草〉〕沙參　ツリガチサウ〈同名多シ〉　ツリガチニンジン　トヽギニンジン〈同名アリ〉　ヤマダイコン〈南部〉　キヽヤウモドキ〈但州〉　シヤクシナ〈江州〉　ヤヽナ〈同上〉　アマナ〈同上〉　シナンパ〈備前〉　ヘビヂヤワン〈上總〉　シヤジヤシヤ〈備中〉　ビシヤビシヤ〈城州山科〉　一名加德〈藥譜〉〈本草〉烏羊婆奶〈本草原始〉增一名志遠、〈千金翼方〉

リ、圓莖高サ三五尺、葉ハ稍ニシテ細鋸齒アリ互生ス、或ハ二三葉相對ス、六月以後莖頂ニ花ヲ開ク、肥タルモノハ葉間ゴトニ開ク、單瓣藍紫色ヲ常トス、ソノ品一ナラズ、形ニ單重千葉圓扁ノ分アリ、色ニ深藍淺藍黄白間色ノ別アリ、重葉ナル者ニ紫二重白二重二重仙臺牡丹桔梗アリ、千葉ナル者ニ紫白アリ、扁ナル者ハ摺扇(アフギ)桔梗ト呼ブ、深藍淺藍ノ二品アリ、並ニ千葉ニシテ形壓シ、扁メタルガ如ク、莖亦扁シ、黄ナルモノハ淺黄色、又カキイロト呼ブアリ、單瓣重瓣ノ二品アリ、間色ナル者ハ白花紫點仙臺桔梗ト呼ブ、又南京桔梗アリ、又單葉ニシテ筒ヲナサヾルモノアリ、紋桔梗ト呼ブ、此數品皆花戸ノ重ズルトコロナリ、藥ニハ常品ヲ用テ良トス、

〔草木育種 下藥品〕桔梗 草本　花に碧色、白色ともに重瓣(やえ)あり、又絞あり、春の彼岸に種を蒔なり、根分は二月十月よし、多は人糞、夏は魚洗汁澆てよし、

〔剪花翁傳 三六月開花〕桔梗　花一重、白色青色二種、開花六月初より一番二番三番まで漸々剪て、後れ咲は十月にいたるなり、方日向、地二分濕、土えらばず、肥干鰯をつよく入て、淡小便も度々灌ぐべし、分株春芽出のときすべし、且平莖なるあり、俗にひらぢくとて專ら好めり、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、略〇中 桔梗卅斤、　大和國卅八種、略〇中 桔梗廿一斤、略〇下

〔江家次第 七八月〕相撲召合

官人以上位袍、番長以下靑袍懸緒、略〇中 左插桔梗華、

〔出雲風土記 神門郡〕凡諸山野所在草木、略〇中 桔梗、

〔拾遺和歌集 七物名〕きちかう　　よみ人しらず

あだ人のまがきちかうな花うへそにほひもあへず折つくしけり

〔枕草子 三〕草の花は

ありのひふき、これいまだく秋ちかふ野は成にけり、桔梗の花也、きちかふ也、一重草、異名也、七月のはうすやうの露はなけ共、もうらにうたはや一重草はしくみす、なかくしてよめる也、花也、このはな

〔物類稱呼三生植〕桔梗きゝやう　信州上田にて、くはんさうと云、

〔古今和歌集十物名〕きちかうの花　とものり

あきちかう野は成にけり白露のおける草葉も色かはりゆく

〔倭字例冊雜〕きちかう

きちかうは桔梗なり、桔は玉篇に居屑切にて、漢音ケツ、呉音ケチなるを、いかでキチとはするならむと思ふに、太田氏云、桔音結、呉音キチ、此ハ十七轉質韻ノ吉ニ轉ズルナリ、故ニ田陳音同ジク質韻轉ニ出タリ、といへり、梗ハ漢音キエイ、呉音キヤウにて、キヤの切カなれば、やがてカウなり、今俗呼は、桔の韻を省き梗は本音のまゝに、キヽヤウと呼べり、

〔宜禁本草乾集中草〕桔梗　辛苦微溫、治咽喉痛、溫中消穀、主肺氣促嗽逆、排膿痰、肺癰唾腥吐膿、能開提氣血、治鼻塞、藁名隱忍、二三生煮食之、

〔大和本草六藥〕桔梗　春宿根ヨリ生苗、山野ニ多シ、秋碧花ヲ開ク、又白花アリ、八重アリ、藥ニハ單ノ碧花アル根ヲ、冬月及正二月ニ採ヲ爲良、小根ハ性薄シ大ヲ可用、花鏡曰、以雞糞壅則茂ル、實ヲマケバ早ク生長ス、二年開花根亦大ナリ、花ヲ賞スルニ、苗ヒキヽ時カレバ叢生シテ花多ク莖不高シテヨロシ、

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕桔梗　○ア○リ○ノ○ヒ○フ○キ和名鈔　○ア○リ○ノ○ヒ○ア○フ○ギ　○ヲ○カ○ト○ヽ○キ古歌　○ヒ○ト○エ○グ○サ同上　○キ○チ○カ○ウ　佛吉草和書　○ク○ハ○ン○サ○ウ信州　○セ○イ○チ○イ江州　今ハ通名○キ○ヽ○ヤ○ウ。一吉祥杵通雅鈐　苦莄字彙正譌　鄒乙羅叱郷藥本草　道乙阿叱力村家

山中ニ自生多シ、向陽ノ地ニ生ズ、大抵沙參ノ形狀ニ似テ毛ナク白色ヲ帶ブ、コレヲ斷バ白汁ア

〔本草和名 草上 十〕桔梗、(仁諝音結)一名薺苨、(乃禮反)一名利如、一名房圖、一名白藥、一名便草、葉名隱忍、一名苻鷹、一名房莖、一名盧茹、(已上三名出釋藥性)和名阿利乃比布岐、一名乎加止々岐、

〔倭名類聚抄 草 二十〕桔梗　本草云、桔梗、(音結梗二音、和名阿里乃比布木、)

〔箋注倭名類聚抄 草 十〕説文云、桔梗、藥名、太平御覽引呉普本草云、桔梗葉如薺苨、莖如筆管、紫赤、二月生、蘇敬云、薺苨桔梗又有葉差互者、亦有葉三四對者、皆一莖直上、蘇頌曰、桔梗根如小指大、黃白色、春生苗、莖高尺餘、葉似杏葉而長橢、四葉相對而生、嫩時亦可煮食之、夏開花紫碧色、頗似牽牛子花、秋後結子、李時珍曰、此草之根結實而梗直、故名、王念孫曰、説文云、梗直木也、爾雅云、梗直也、桔梗之名、或取義於直與、(中略)○和名依輔仁、輔仁又云、一云乎加止止岐、按本書菜類載苻鷹、訓乎加度度岐、苻鷹卽桔梗一名、則分載爲二物誤、

〔倭名類聚抄 野菜 十七〕苻鷹　釋藥性云、苻鷹、(音尸、和名乎加土々木、)

〔箋注倭名類聚抄 菜 九〕太平御覽引呉氏本草亦云、桔梗一名苻鷹、新撰字鏡桔梗阿佐加保、又云岡止止支、則知乎加度々岐卽桔梗也、源君草類載桔梗、訓阿利乃比布岐、此載苻鷹、訓乎加度々岐、分爲二物、皆聞奥羽俗呼杏葉沙參爲登登岐、作茹食之、桔梗似沙參、在岡上、故名乎加登々岐、疑源君誤以乎加登々岐爲沙參、又誤以苻鷹爲沙參、故以苻鷹訓乎加止々岐、遂與桔梗爲別、收之菜類也、然桔梗亦可食、陶注本草云、桔梗葉名隱忍、二三月生、可煮食之、療蠱毒甚驗、李時珍曰、爾雅蒡隱忍、郭注似蘇有毛、江東人藏以爲葅、亦可瀹食、葛洪肘後方、隱忍草苗似桔梗、人皆食之、擣汁飲治蠱毒、據此則隱忍非桔梗、乃薺苨苗也、薺苨苗甘可食、桔梗苗苦不可食、尤爲可證、神農本經無薺苨、止有桔梗、一名薺苨、至別錄始出薺苨、蓋薺苨桔梗一類、有甜苦二種、則其苗亦可呼爲隱忍也、又按鷹字諸字書無載、太平御覽引呉普作苻鷹、

〔藻鹽草 草 八〕桔梗

桔梗

安藝遠江ニ產ス、讚岐金毘羅山ニ產スルモノ、幹ノ大サ徑尺ニ近シ、

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕釣藤 カ○ギ○カ○ヅ○ラ○ カ○ラ○ス○ノ○カ○ギ○ヅ○ル○ フ○ヂ○ト○リ○パ○リ○三才圖繪 カ○ギ○ノ○ツ○ル○藝州 タ○ヽ○カ○ヅ○ラ○豐前 フ○ヂ○ツ○リ○パ○リ○ サ○ン○チ○ン○カ○ヅ○ラ○ サ○チ○カ○ヅ○ラ○共同上、南五味子ト同名、 サ○ル○ト○リ○グ○イ○防州 一名釣藤本經逢原 釣鉤藤正字通 天吊藤丹溪纂要

今通名ナリ、花戸ニテチヤウトウカウト云ハ誤ナリ、城州、和州、藝州、長州、防州、讚州、紀州、遠州、其餘諸州山中ニアリ、藥舖ニ賣ル者ハ多ハ藝州ノ產也、年久キ者ハ藤蔓甚大ニシテ木ノ如クナル、其蔓嫩ナル時ハ方莖ノ如ク見ユ、年ヲ經ル者ハ圓ナリ、葉形長ク尖リ、鹽梅葉ニ似テ澀ラズ光リアリ、嫩葉ハ微紅色皆兩對ス、葉ノ微シ上ノ方ニ對シテ兩鉤ヲ生ズ、其次ノ節ニハ單鉤ヲ生ズ、又其次ニハ兩鉤ヲ生ズ、梢ニ至ルマデ皆此ノ如シ、其鉤皆下ニ曲リ綠色、秋ニ至リ灰色ニ變ジ自ラ落ツ、藥ニハ嫩鉤ヲ用ユベキコト、本草匯ニ見ユ、通紫色去梗純用嫩鉤、其功十倍ト云リ、此蔓ノ末ニ五寸許ノ枝ヲ出シ、小叉ヲ對生シ、小花簇リテ正圓毬ヲナス、黃褐色、大サ六七分、花謝シテ小毬殘ル、形チ楊梅ノ如シ、

〔草木育種後編 下 藤蔓之部〕釣藤木 房州清澄山に產す、盆に栽たるは土瓦に入れべし、養水を澆ぎ夏月莖を扦して活す、又根より芽を生ずるを、根を切り置きて、芽長じ勢よき時分け栽べし、暖國にては無用の地に栽え、莖をとり籬とすべし、

〔採藥使記 下 紀州〕重康曰、紀州熊野山中ニ釣藤アリ、其葉形チ櫻ノ葉ノ如クニシテ長ク廣シ、蔓生ス、刺アリテ鉤ノ形ノ如シ、

光生按ズルニ、此物所々ニアリ、豐州中津ニ出ルヲ上品トス、藝州廣島ノ產ハ次ナリ、但俗藤ツリパリト云フ、

〔新撰字鏡 木〕桔梗 上居頡反、下阿杏反、加○良○久○波○、又云阿佐加保、 桔梗 同佐○加○保○、又云阿○止○々○支○

葉長葉種種アリ、夏葉間ニ花ヲ開ク、其形牽牛花ノ如ク極テ小ク三分許、白色ニシテ中心紫色、炙痂ノ脱タルアトノ色ノ如シ、故ニヤイトバナノ俗名アリ、花後圓實ヲ結ブ、大サ二分許、秋冬熟シテ黄褐色ニシテ光アリ、此實ヲ俗ニスヽメノタゴト呼ブ、

八重葎

〔新撰字鏡 草〕葎 牟。久。良。

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕葎草〇中略

古ヨリ葎ノ字ヲムグラト訓ズルハ非ナリ、ムグラハ小葉ニシテ、廢地ニ多ク繁延ス、故ニヤ。ヱ。ム。グ。ラ。ト歌ニヨメリ、コレ救荒野譜ノ猪。殃。殃。ナリ、

〔枕草子 三〕草は

やへむぐら

〔萬葉集 十一 古今相聞往來歌〕問答

念人(オモフヒト)將來(コムト)知者(シリセバ)、八。重。六。倉(ヤヘムグラ)、覆庭(オホヘルニハニ)、珠布益乎(タマシカマシヲ)。

〔伊勢物語 上〕昔男ありけり、けさうしける女の許に、ひじきもと云物をやるとて、

思ひあらばむ。ぐ。ら。の。宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも

〔拾遺和歌集 三秋〕河原院にて、あれたるやどに秋來といふ心を、人々よみ侍りけるに、

惠慶法師

や。へ。む。ぐ。ら。しげれるやどのさびしきに人こそみえね秋はきにけり

釣藤

〔本草和名 十四木〕釣藤、楊玄操音丁叫反、一名吊藤、出二陶景注一一名鵜藤、出二耆婆方一唐、

〔多識編 二蔓草〕釣藤、今案布。知。都。利。波。利。

〔物類品隲 三草〕釣藤　和名カ。ラ。ス。ノ。カ。ギ。ヅ。ル。、依レ木蔓延ス、莖初方ニシテ後圓ナリ、枝相對シテ出ヅ、葉臘梅葉ニ似テ滑澤ニシテ兩兩相對、葉間有レ刺、形鉤ノゴトシ、是ヲ釣藤鉤ト云、小兒方中ニ用ウ、

扦して活す、赤土に植てよし、陰地によし、盆に栽たるは土藏に冬月入れべし、干鰯油かす等を根に入てよし、一種山蘇根(かまのはどろ)といふものあり、是も葉長きと圓きとあり、二種ともに冬月は葉枯る、予は遠州秋葉の山にて採る、赤土の陰地に植べし、盆栽は赤土のごろたに栽てよし、わり胡麻豆肥の類鹽味なきものを撰み用ゆべし、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

美濃國六十二種略〇中巴戟天五斤略〇中周防國十九種略〇中巴戟天、茯苓、各一斤、略〇中長門國十三種略〇中巴戟天、百部根、各一斤、略〇下

ヘクソカヅラ

〔書言字考節用集六生植〕百部根(ヘクソカヅラ)

〔倭訓栞中編二十三〕へくそかづら　定家[illegible][illegible]の歌の注にみゆ、下學集に百部根を訓じ、又馬鞭下といへるは非也、女青也とぞ、女青の上品を鳥のひるづるといふ、

〔大和本草八蔓草〕女青略〇中　今按蔓草ノ女青ハ、俗名ヘクソカヅラト云、葉スコシ蘿藦ニ似テ臭シ、花ハ蘿藦ニ相似タリ、一處ニアレバ混ジテ辨ガタシ、其蔓甚繁茂ス、本草ニ蔓草ノ女青ハ別ニ名目ヲ不立、故ニ性能ヲ不載、只蘿藦ノ下ニノセタリ、本邦ノ方書ニヘクソカヅラヲ百部ト云非ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十二蔓草〕女青略〇中

女青ニ藤本草本ノ二種アリ、略〇中藤本ノ女青ハヘクソカヅラナリ、別ニ本條ハナシ、此集解ニ說タルノミナリ、クソカヅラ、鳳藥 細子草、和名抄 名カバ千ダサ、同上ヘクソカヅラ、オドリコサウ、雲州ヤイトバナ、江州オドリブル、同州ドリバナ、土州ヘタサンボウカヅラ、同上タサバナ、加州ニガイモ、同上タウヘバナ、播州アマクサブル、同上ソウトメカヅラ、東國ソウトメバナ、同上　陰處甚多ク、竹木ニ繞フ、葉ハ大抵蘿藦(ガヾイモ)葉ニ似テ薄ク兩對ス、微シク毛茸アリ、葉ヲ斷レバ臭氣甚シ、大葉小葉圓

ハクサハ冬ニ至レバ葉盡ク凋落、不凋草ト云ベカラズ、根モ又曲節ノミニシテ連珠ニアラズ、眞ノ巴戟天ハ樹下陰地ニ生ズ、草ニアラズ小木ナリ、形大葉ノ虎刺(アリドホシ)ノゴトク、枝葉兩々相對シテ出ヅ、葉出ヅル所ノ左右ニ小刺アリ、葉ノ形頗茶葉ニ類ス、經冬不凋、至秋赤實ヲ結ブ、大サ綠豆ノゴトシ、根赤黄色ニシテ、略牡丹根ニ似テ連珠ヲナス、心アルコト麥門冬ノゴトシ、根乾テ心落レバ小孔アリ、大明宗奭ガ所説ト符合ス、是眞物ナリ、或ハ綱目草部ニ出ルヲ以テ疑フ者アリ、然ドモ綱目木本ヲ以テ草部ニ入ルモノ多シ、牡丹莽草常山ノ類ヲ以テ知ルベシ、肥後產戊寅歲田村先生始テ得之、己卯主品中ニ具ス、讃岐鵜足郡中通村八幡社地產、庚辛歲余(○平賀源内)得之、壬午主品中ニ具ス、

蘇頌所説一種麥門冬葉巴戟天アリ、予未見之、松岡先生用藥須知後編、直海氏廣大和本草、モヂズリヲ以テ麥門冬葉巴戟トシ、藥肆所稱ノ棒樣ノ巴戟、即チ是ナラント云モノ大ナル誤ナリ、東國モヂズリノ一種、大ナルモノアリトイヘドモ、其根巴戟ニ類セズ、且藥肆棒樣ト稱スルモノハ、漢渡ノ內ヲ撰テ、連珠アルモノヲ珠數樣トシ、連珠ナキモノヲ棒樣トス、其本ハ一物ナリ、決シテモヂズリ根ニアラズ、又己卯歲社友福山舜調、箱根ニ遊テ所得ノ草、モヂズリニ似テ花不戾、根二三ノ連珠ヲナス、初謂是麥門冬葉巴戟天ナラント、然是亦眞ニアラズ、又讃岐山中一種ノ草アリ、葉大葉麥門冬ノゴトク、又頗ルキスゲ葉ニ類ス、根連珠アリテ黄赤色、此物稍近シ、然ドモ未決、

〔和漢三才圖會 九十二 山草〕巴戟天(はげき)　不凋草　三蔓草　和名夜末比々良木(○中略)
按巴戟天、往昔有出於本朝、今乃無之、皆用唐藥也、多連珠者佳、俗名數珠巴戟、
其葉如茗也、如麥門冬也、其異大也、三才圖會之圖亦出二種、蓋謂山林人家之異、未審、

〔草木育種後編 下 藥品〕巴戟天(本草)　和名やまひゝらぎ(本草和名)　俗に珠數根の木といふ、享保年間、家祖濃州々官圖に上る、今豆州にあり、予(○岡部寄任)房州清澄山にて採り得たり、葉長短二種あり、五月枝を

下ニ詳ニス、抑染料ハ國家必用ノ品、此茜染精好ナルハ、紅緋ニ亞テ美艶ナリ、故ニ茜根ヲ上品ニ作トセバ、其利潤桑根ニ異ナルコト無シ、

〔令義解 三賦役〕凡〇中略其調副物、〇註略正丁一人、〇中略茜二斤、

〔延喜式 二十四主計〕凡中男一人輸作物、〇中略茜、熟麻、紫各二斤、

〔延喜式 十五内藏〕諸國年料供進

茜大二千斤、〇中略　右太宰府所進

〔延喜式 十四縫殿〕雜染用度

深緋綾一疋、綾羅絹紬綿帛同茜大卅斤、〇中略帛一疋、茜大廿五斤、〇中略葛布一端、茜大十斤、〇下略

〇按ズルニ、茜ヲ染料ニ用ヰルコトハ、產業部染工篇ニ載ス、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

攝津國卅四種、〇中略茜根一斤、　安藝國卅二種、〇中略當歸、茜根各十斤、　長門國十三種、〇中略巴戟天、茜根各一斤、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　茜根

巴戟天

〔本草和名 六草〕巴戟天、一名三蔓草、出釋藥性一名天精、出兼名苑和名也末比々良岐、

〔倭名類聚抄 二十草〕巴戟天　本草云、巴戟天、和名夜末比比良木、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇注云、草葉似茗、經冬不枯、根如連珠、宿根青色、嫩根白紫、陶注云、狀如牡丹而細、外赤内黑、

〔伊呂波字類抄 也植物附雜物具〕巴戟天ヤマヒヽラキ〔同 波植物附雜物具〕巴戟天ハヤヒトグサ

〔物類品隲 三草〕巴戟天　一名不凋草、和名ジユズネノキ、先輩カキノハ草トスルハ誤ナリ、恭曰、其苗俗名三蔓草、葉似茗、經冬不枯、根如連珠、宿根青色、嫩根白紫ト、此形狀カキノハクサニ非ズ、カキノ

ブ、又一種ツクバネサウノ形ニシテ、莖葉共ニ毛刺アルモノアリ、ミヤマアカネト云、共ニ山中陰地ニ產ス、

〔農業全書三六草〕茜根(あかね)

あかねは、山野におのづから生るも多き物なれども、土地を吟味し糞(こやし)し、手入して畠に作るにしかず、土の色黄白にして性よく、和らかなるよし、又は青色にして沙交り、又赤土もよし、柔を作りて、其跡を四五遍も耕しこなし、熟糞を多く用ひて、冬より晒しをき、三月うゆる時、いかにも細にして、たねを蒔べし、蒔終りては、うすく土をおほひ、少たゝき付をくべし、畦の中草少もをくべからず、取わき草痛みする物なり、たねを取をく事は、圃に作りたるにても、又は山野に自らあるにても、九月よく熟し黑くなりて、已にこぼれ落んとする時、取て日に干、俵か籠などに入をくべし、又は山野に生たるを、九十月根を多く堀取て苗とし、畦作りし間遠にうへて糞(こえ)し、手入したるも、盛長みすやかなる物なり、肥地によき糞しを多く用ゆれば、根甚さかへ、染付もよく厚利の物なり、山中など其外五穀を作るにはさはり有て、肥良の地あらば必作るべし、

〔草木六部耕種法二十四〕茜草紫草ノ根ヲ作ル法

茜草山野ノ自然生ハ、其根煎汁色濃シテ上品ナリ、然レドモ多ク得ベカラザルヲ以テ、此ヲ作ルノ法有テ、自然生ニ劣ザル上品ヲ出ス、我家ノ作法ハ、眞土及壚土ニテモ、白黄赤三色ノ土ヲ撰テ、此ニ軟膨(ボクス)ノ法ヲ行ヒ、冬中ヨリ厚ク糞肥ヲ用ヒ置キ、春ニ至リ再能ク細耕シ、蓄種ヲ間疎ニ蒔散シ、少シ土ヲ覆ヒ押付置トキハ、日アラズシテ芽出者ナリ、因テ他草ヲ勤テ耘除ベシ、又秋末ニ山野ノ自然生ヲ掘リ来テ、種トシ植ルモ能ク肥ル者ナリ、且此物ハ七八番ノ煖氣ノ地ニ蕃生ス、故ニ寒國ノ產ハ紅色淡シ、殊ニ黒土暗青黎赭等ノ土ニ植タルモ、染色鮮明ナラズ、又此物ト紫根鬱金等染料ヲ作ルニハ、其根肥太スル法ノ外ニ、其染色ヲ濃厚ニスル培養法アリ、其事ハ鬱金ノ條

一名絳根、一名紅藍、一名染緋草、已上三名出兼名苑、一名蒨、出音義○蒨音同、藘、一名蒐衛、出雜要訣、和名阿加禰、

〔倭名類聚抄 十四 染色具〕茜 爾雅注云、茜、倉見反、和名阿加禰、可以染緋者也、

〔箋注倭名類聚抄 六 染色具〕爾雅、茹藘、茅蒐、郭注今之蒨也、可以染絳、説文、茅蒐、茹藘、人血所生、可以染絳、又云、茜茅蒐也、本草云、茜根可以染絳、陶云、此則今染絳茜草也、蜀本圖經云、染緋草、葉似棗葉頭尖下闊、莖葉俱澁、四五葉對生節間、蔓延草木上、根紫赤色、李時珍曰、茜草十二月生苗、蔓延數尺、方莖中空有筋、外有細刺、數寸一節、毎節五葉、葉如烏藥葉而糙澁、面靑背綠、七八月開花、結實如小椒大、中有細子、此阿加禰、爲茜、按皇國染緋亦用茜根、見延喜式、今俗以紅花染者呼緋誤、

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕茜草 蒨同 風車草 茹藘 血見愁 地血 過山龍 茅蒐 染緋草 牛蔓 和名阿加禰 ○中略

按茜赤根也、河州石川郡山田茜爲上、可以染絳、近世用蘇方木代茜、

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕茜草 アカネ○根赤キ故ニ名ク アカネカヅラ讃州 ベニカヅラ肥州 一名 地蘇木古今醫統 地紅品字箋 綪同上 鋸口刺通雅 牛蔓同上 蒨正字通 過山紅類書纂要 高邑豆豉郷藥本草 古邑道松村家方 古邑豆豉採取月令 增、一名藘茹東醫寶鑑中論 夜紅燈竹堂經驗方 蛇遊草外科大成

山野ニ甚多シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、藤蔓長延莖方ニシテ毛刺アリテ中空シ、葉ハ四四相對ス、形長ニシテ棗葉ニ似テ鋸齒ナシ、秋ノ初藤梢ニ花ヲ開キ大穗ヲナス、枝叉甚多シ、白花ヲ多ク綴ル、大サ一分許、四瓣、後圓實ヲ結ブ、大サ二分許、生ハ綠色、熟スレバ黑色、秋深ク苗枯ル、其根細條多ク簇リ、黃赤色、掘テ藥用染用トス、一種草本ノ者ハ深山中ニ生ズ、圓莖高サ一尺餘、刺ナシ、葉ノ形同シテ三四層ヲナス、四月莖梢ニ花ヲ生ズ、形色相同ジ、只穗長サ二三寸、根ノ形色モ亦異ナラズ、又一種、方莖ナルモノアリ、○中略

增、一種特生ニシテ小葉ノモノアリ、高サ僅ニ五六寸、此レニハ莖ニ毛刺ナシ、ツクバネサウト呼

肉蓯蓉

夏月湖海邊沙地ニ多ク生ズ、又向陽山間ニモアリ、莖高サ五七寸、或ハ一尺許、淡紅色、ソノ半以下ニハ鱗甲アリ、半以上ハ花繁ク綴リテ長穗ヲナス、淺紫色形淤州夏枯草〈ウツボグサ〉穗ニ似タリ、根ニ黃色ノ小塊アリ、長サ半寸許、野州日光山陰地ニ生ズルモノハ高サ一尺許、莖肥大ニシテ花ハ天麻花〈ヌスビトノアシ〉ニ似タリ、コレヲヲカサダケ、一名キムラダケト云フ、駿州富士山ニ產スルモノハ稍瘠小ナリ、俱ニ根ハ大塊ヲナシ、尖ゴトニ苗ヲ發ス、世人以テ肉蓯蓉トスルモノハ穩ナラズ、ソノ莖中空シクシテ舶來ノ者ニ類セズ、又常州筑波和州多武峯山中ノ者ハ、苗瘠小ニシテ莖ニ鱗甲ナク、根ニ多鱗甲アリテ、嫩キ松卵ノ形ノ如クニシテ狹細ナリ、是皆列當ノ一種ナリ、

〔物類品隲〈三草〉〕肉蓯蓉　三四月ニ生ズ、狀稍天麻ニ類ス、莖太ク鱗甲アリ、長ジテ後花ヲ開、其形亦天麻ノ花ニ似タリ、日光產上品、方言ヲ。カ。サ。ダ。ケ。、又キ。ム。ラ。ダ。ケ。ト云、徑寸餘、長尺餘ノモノアリ、讃岐香川郡安原村產上品、以上二種壬午主品中予〈○平賀鳩溪〉具之、

〔重修本草綱目啓蒙〈七山草〉〕肉蓯蓉　一名地精〈石藥爾雅、同名多シ〉、金筍〈本草彙〉、碧水龍〈種杏仙方〉、塔、一名肉菘蓉、〈藥性奇方〉　腎天〈淸異錄〉

和產ナシ、近年新渡甚ダ多シ、明和庚寅〈年○七〉ニモ多ク渡ル、皆甕中ニ鹽藏ス、長サ一尺許、徑一寸餘、或二三寸、截リテ內白色ナル者アリ、黃紅色ナル者アリ、新ナルモノハ紅ニシテ透徹ス、皆上品ナリ、ソノ黑色ナル者ハ下品ナリ、俱ニ外ニ松子〈マツカサ〉鱗甲ノ如キモノ多クツケリ、切開ケバ堅硬ニシテ肉ヲ切ルガ如クナルヲ眞物トス、水ニ浸ス時ハ鱗甲ノ狀見ルベシ、然レドモ久シク水中ニ置ケバ爛碎シヤスシ、又鱗甲ナキ者モアリ、良ナラズ、

〔日光山志〈四〉〕金精峠〈○中略〉　此峠の古名は樾〈こむら〉峠なり、〈○中略〉五音相通しけるよりして、いつしかきむら峠と轉誤せるなり、兹の山中に肉蓯蓉多く生ず、其くさむらの名をもきむら茸と呼り、

〔本草和名〈七草〉〕茜根、〈七見反、陶景注云、今染絳茜草也、〉一名地血、一名茹藘、〈仁諝知閭二音〉一名茅蒐、〈所流反、〉一名蒨、〈仁諝音千練反、已上出陶景注、〉

茜草

ギ○ゴ○ケ○京　サ○ギ○ナ○ウ○同上　ア○ゼ○ナ○　タ○ハ○ゼ○防州　チ○ド○リ○サ○ウ○筑前　ム○ギ○メ○シ○バ○ナ○江州
カ○ミ○ツ○カ○ウ○同上　モ○チ○ハ○ゼ○越前　ト○ノ○ヽ○ム○マ○肥前　ミ○ヽ○ヅ○ク○勢州　コ○ジ○タ○

隨地皆アリ、葉ハ薺葉ニ似テ短小、春ニ至リ莖ノ高サ一二寸ニシテ花ヲ開ク、大サ三四分、淡紫色或ハ淡紫碧色、内ニ黄蘂アリ、外ニ青萼アリテコレヲウク、日ヲ逐テ花ヲ開キ、漸ク穗長クナル、白花ノ者ハ大サ五六分、勢州ニテザギシバト呼ブ、倶ニ夏月根ヨリ蔓ヲ延キ葉對生シ、節ゴトニ根ヲ生ジ叢ヲナシ甚繁茂ス、一種夏月花ヲ開ク者ヲ、夏○ノ○サ○ギ○サ○ウ○ト呼ブ、一名ナツハゼ、花葉共ニ小ナリ、其秋ニ至テ花ヲ開ク者ヲ秋○ハ○ゼ○ト云フ、更ニ小ナリ、一種黄○花○ノ○サ○ギ○サ○ウ○ハ深山溪澗ニ生ズ、花下ニ長實アリ、一名ミブホウブキ、

〔和漢三才圖會九十六 蔓草〕鈴掛草（すゞかけさう）　俗稱、本字未詳

按鈴掛草引蔓、其葉似櫻而圓小、夏秋葉間著花、紫色而圓、略似千日紅之花、

〔重修本草綱目啓蒙十五 隰草〕威靈仙　○中略

又一種草○本○ノ○者○ハ蘇頌ノ說ク、トコロノ威靈仙ナリ、和○名○ク○ガ○イ○サ○ウ○或ハク○カ○イ○サ○ウ○トモ云フ、一名トラノオ、南部ヤマウヽ、佐州タルマサンシチ、江戸此草人家ニ多ク栽ユ、春舊根ヨリ叢生ス、莖圓ニシテ高サ一二尺、葉ハ形長クシテ細鋸齒アリ、風仙（ツマクレナイノ）葉ニ似テ厚ク深緑色、五葉ゴトニ節ニ對生シ層ヲナス、肥タル者ハ十二三層、小ナル者ハ八九層、故ニクカイサウト名ク、夏月莖梢ニ長穗ヲ出ス、六七寸許、小花密ニ綴リ、淡紫碧色、後小尖莢ヲ結ブ、根ハ短シテ黄褐微黒、一種江州伊吹山ニ產スル者ハ、莖短ク葉モ亦短シ、六七葉或ハ二三葉對生シ、或ハ互生シ、齊カラズ、又一種奥州南部津輕ヨリ出ル者ハ、莖葉ニ毛茸アリ、花穗扁ク或ハ穗ヲナサズ、花小ニシテ色淺シ、其根細長一尺許、淺黄褐微黒ヲ帶ブ、

〔重修本草綱目啓蒙七 山草〕列當　ハ○マ○ウ○ツ○ボ○　一名粟列譯群芳　紫花地丁本草原始、同名多シ、

馬先蒿

通泉草

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥
尾張國卅六種、黃芩十四斤、　遠江國十三種、黃芩十斤、〇下略

〔本草和名九草〕馬先蒿、一名馬矢蒿、一名爛石草、出陶景注一名虎麻、一名馬新蒿、出蘇敬注和名波々古久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕馬先蒿　陶隱居本草注云、馬先蒿一名爛石草、和名比木、〇和名與毛木、〇

〔箋注倭名類聚抄十草〕蘇云、此葉大如茺蔚、花紅白色、實八月九月熟、俗謂之虎麻是也、一名馬新蒿、茺蔚苗短小、子夏中熟、而初生二種極相似也、毛詩小雅蓼莪正義引義疏云、蔚牡蒿也、三月始生、七月華、華似胡麻華而紫赤、八月爲角、角似小豆角、銳而長、一名馬新蒿、馬新卽馬先也、爾雅、蔚牡菣、釋曰、蔚卽蒿之雄無子者、郭注、謂無子者、圖經曰、郭璞云、無子、陸機云、有子、二說小異、今當用有子者爲正、時珍曰、別錄牡蒿、馬先蒿、原是二條、陸機所謂有子者、乃馬先蒿、而復引無子之牡蒿釋之、誤矣、又云、蒿氣如馬矢、故名馬先、乃馬矢之誤也、馬新又馬先之訛也、按本草云、一名馬屎蒿、是李說所由生也、

〔多識編二草〕馬先蒿、今案牟末乃比利久左、異名虎麻、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕馬先蒿　シホガマギク　ノコギリサウ江州　一名虎麻茺蔚本草彙言
山中ニ多ク生ズ、向陽溪側ニ多シ、春宿根ヨリ苗ヲ生ジ、高サ二三尺、葉ノ形、楡(ニレ)葉ニ似テ長ク、岐深シテ細鋸齒毛茸アリテ枝葉繁布ス、八月葉間ゴトニ花アリ、大サ六七分、豆ノ花ノ形ニシテ壓扁スルガ如シ、紅紫色花後ニ小扁莢ヲ結ブ、長サ二三分ニシテ尖レリ、内ニ細子アリ、又別ニ一種花相似テ小ク、葉ハ陰地厥(ハナワラビ)ノ葉ニ似テ、薄軟ニシテ毛茸アリテ、手バルモノアリ、小シホガマギクト云、

〔武江產物志藥草〕井ノ頭邊ノ產　馬先蒿(シホガマギク)廣尾ニ　モ

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕石長生〇中略
通泉草ハ　カマツカナ　ハゼナ泉州　ホカケサウ　ジロタラウバナ　カハラケナ上共同　ナ

ナリ、形大ニシテ内虚ス、後ニ列スル四名ハ皆嫩根ナリ、形細長ニシテ内實ス、コレヲ薬舗ニテ棒様ト云、朝鮮ハ唐ヨリ黄色鮮カニシテ堅實苦味ウスシ、故ニ下品トス、朝鮮ノ中ニモ唐様ト呼モノハ、形色混ジヤスシ、此亦苦味ウスシ、ソノ眞ノ黄芩ト呼ブ者ハ、即朝鮮ノ種ヲ栽ルモノナリ、和州宇陀ヨリ出ス、根色鮮ナレドモ、苦味ウスクシテ脂多シ、最下品ナリ、其苗高サ二三尺一根ニ叢生ス、葉ハ千屈菜ノ葉ニ似テ毛茸アリ、兩對ス、秋ニ至リ莖末ニ穗ヲナス、長サ四五寸、花ノ長サ一寸許、本ハ細筒ニシテ端ハ五瓣ニ分レ、コラセウモンノ花ノ如ニシテ紫色ナリ、又淡紫色、又青色ヲ帶ルモノ、又白色アリ、白色ノモノハ稀ナリ、花後萼中ニ四ノ小黒子アリ、子熟シテ苗枯ル、子ヲ種テ生ジヤスシ、根ハ年ヲ經テ枯レズ、然レドモ久モノハ内腐テ枯レ易シ、又一種古ヨリ和ノ黄〇〇〇本ト呼來ル草アリ、サヽヤキグサトモ、チヤンパギクトモ云、是博落廻ナリ、毒草類草麻ノ附錄ニ出、ソノ根ノ形色微黄芩ニ似タリ、故ニ藥肆ニテ黄芩ニ雜ユ、コレヲナシコミト稱ス、此草ハ山中ニ多シ、根ハ肥大ニシテ壹蛀シテ、内空ニナリタルモアリ、然レドモ此根ハ極テ乾スト雖ドモ猶軟ナリ、黄芩ノ堅脆ナルニ異ナリ、

（草木育種後編下品）黄芩本草　和名やまひゝらぎ和名抄俗にこがねやなぎといふ、花に白と碧とあり、享保年中、麟翁先生（鋼目）甲州より採り得、官園に上る、又讃種も享保年間唐山より來る、予（○同書）任会津山中にて自生のものを得たり、形狀皆同じ、根腐りて上品なり、春分の比、畦に種子を布て生ず、其年に花實あり、當時江戸近郊にても多く作る、是を眞の黄芩といふ、作り方惡しき故に、藥用に下品なり、山中赤土の地を選み、是に畦を作り、草綿子(わたね)糠の類きり雜へ、是へ種子を布き、其後は糞水も少しも澆ぐ事なく、七八年過堀り出し見るべし、蘆頭腐りてよし、世間にて作るは斤兩の減ずる事を恐れ、糞汁多く用ひ、三年にして堀る故に功なし、又山中野地の分ちなく、ふり蒔にして數十年の後採り得は、自然生の如く彌上品なるべし、

黄芩

〔紀伊續風土記物産三草木〕地黄
花戸及醫家藥家等に栽う、又近年名草郡山東莊鹽谷村邊に多し、栽えて若山の藥舖中へ出す、

〔本朝世事談綺一飮食〕地黄煎
古へ堂上より醫家に命じて、地黄煎を製せしむ、其法、穀芽末粉に、地黄の汁を合せ、これを煉て用ゆ、腸胃を潤し、氣血を益すの良糕なり、今は地黄の汁を用ひずといへども、此名を以す、京稻荷前にて專製之、江戸にては下り飴と稱す、

〔三代實錄四淸和〕貞觀二年十二月二十九日甲戌、從五位下行内藥正大神朝臣庸主卒、○中略庸主性好醫藥、最爲精、與人言談必以對事、嘗出自禁中、向作地黄煎之處、途逢友人、問云、向何處去、庸主答云、奉天皇命、向地黄處、此類也、然也然處治多効、人皆要引、療病之工、廣泉沒後、庸主獨處、太敬聲價焉、

〔本草和名八草〕黄芩、仁諝音巨金反一名腐腸、其腹中皆爛故以名之、一名空腸、一名内虛、一名黄久、一名經芩、楊玄操音士替反一名姤婦、一名子芩、良者一名宿芩、破者一名純尾芩、出蘇敬注一名虹勝、一名經芩、一名緺尾、一名印頭、出釋藥性一名靑結、一名北節、已上出華佗方和名比。々。良。岐。、一名波。比。之。波。、

〔倭名類聚抄二十草木〕黄芩、本草云、黄芩、音琴、和名比々良木、楊氏漢語抄云、杠谷樹、杠音江、和名上同、一云巴戟天、

〔箋注倭名類聚抄十木〕按杠谷樹、黄芩、巴戟天三物皆有刺、故俱以比々良木名之、雖然其物各異、巴戟天已出草類、宜以黄芩移草類、此獨存杠谷樹、源君合三物爲一者誤、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕黄芩　ヤ。マ。ヒ。ヒ。ラ。ギ。延喜式　コ。ガ。ネ。ヤ。ナ。ギ。種樹家　今ハ通名　一名枯腸
事物異名　裏腐草採取月令　裏朽斤草同上　裏朽草村家方　枯黄芩道生入陸　片黄芩醫學正傳　枯芩本草原始
子芩一名莊肩正字通　條黄芩道生入陸　實芩藥性要略大全
市中ニ販グトコロ三品アリ、唐朝鮮眞ナリ、唐ヲ上品トス、輕シテ色黄黑味最苦シ、ソノ色クロミノ多キ者ヲシンチウデト云フ、是老根ナリ、釋名ニ老根嫩根ノ名ヲ別ツ、前ニ出ス八名ハ皆老根

〔延喜式典藥三十七〕凡山城國地二町在葛野郡十三條水谷下里、四至、(東限岑山、南限堀越山谷、西限岑、北限辛河合、)水爲殖供御地黃地、

〔農業全書十藥種之類〕地黃

地黃是も四物湯六味丸等に入り、其外諸方に出たる良藥にて、醫家多く用ゆる物なり、土地にあひたる所にては多く作るべし、たねにする根を收め置事、冬月掘取たる中にて、甚大きも宜しからず、もとより小きはあしゝ、中ほどなるをゑらびて、壺にても桶にても、又わらのふごにても、細沙を入れ、地黃をいけ置、風ひかざる樣にすべし、尤かはきたるは痛むゆへ、肥たる沙を多く入て厚くおほひ、屋の內に置て、折々乾きて痛むや否やを見て、又もとのごとく收めをくべし、うゆる時分は三四月よし、寒中より耕しこなし、糞をもうち、さらし置たるよし、若冬よりこしらへ置たる地なくば、早麥の跡もくるしからず、畦作りし、六七寸間を置て橫筋を切、となりのかぶと、ぐのめになる樣に、ならびは四五寸あてにうへ、土をおほひ置て、生付とひとしく、何糞にはかぎらず多く入べし、其後がんぎの高き所を、左右へかきわけ、馬屋糞を入べし、なくばあくたにても多く入をくべし、此時は培ふに及ばず、初め苗の小さき時、二三度も根の廻りをかき、わきの土をもみくだき、一科つゝ、能に培ふべし、始終畦の中に草少もをくべからず、掘とる事は、十一二月の間、すきか鍬を以て、根に當らざる樣にほるべし、鐵を忌物にて、すきくはの當る事を甚きらへばなり、さて淨く洗ひ、簾などに擴げて、よく干あぐべし、干かぬる物にて、春までも晴天には每日出して、中まで黑く成たるを見て、收めをくべし、大和にて作る法の大抵是なり、肥たる性のよき黑土よし、大和地黃のすぐれて大きは、一斤の代銀二兩許に藥屋へうると云なり、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

尾張國卅六種、○中略干地黃六斗四升、　相模國卅二種、○中略干地黃三升、○下略

芐ト同（品字箋）　生地黃一名鮮地黃（本經逢原）　玉枝（種杏仙方）　熟地黃一名金筍（種杏仙方）

葉ハ芥葉ニ似テ厚ク、鋸齒粗ク淺綠色ニシテ皺ミ、兩面ニ毛アリ、初ハ地ニ就テ叢生ス、其宿根ノ者ハ春臺ヲ抽コト高サ六七寸、肥地ノ者ハ一尺許葉互生ス、四月莖梢ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、形チ筒子ニシテ末ハ五瓣ナリ、胡麻花ニ似テ大ニシテ、黃白色ニ淡紫色ヲ雜ユ、花ノ後實アレドモ、熟セズ、其莖枯テ旁ヨリ新葉ヲ生ズ、根ヲ采ル者ハ花ヲ開クコトヲ忌、故ニ宿根ヲ栽ズ、十月ニ根ヲ掘リ出シ、乾土中ニ貯ヘ置キ、五月ニ至リテ去年ノ節ヲ采リ、熟土ニ栽ユル時ハ卽生長ス、蘆頭ト根トノツナギヲ節ト云、又五月ニ去年ノ新根ヲ數段ニ切テ栽ルモ可ナリ、

地黃ニ白矢赤矢ノ二品アリ、白矢ハ根細クシテ皮薄ク、肉厚シテ皮ノ皺紋緻密ナリ、藥用ニ上品トス、然レドモ此種養ガタク腐リ易シ、赤矢ハ根肥大ニシテ皮厚ク、皺紋密ナラズシテ疙瘩アリ、下品トス、然レドモ此種養易ク繁茂シ、冬月カコハザレドモ保チ易シ、故ニ今諸州共ニ此種ヲ栽ユ、是卽筑前種ナリ、古ハ和州ニ白矢ノ種ヲ栽ユ、故ニ大和ノ地黃ヲ上品トス、其後大和ニハ赤矢ノ種ヲ栽ヘ、山城ノ鄕ニハ白矢ノ種ヲ栽ユ、故ニ山城ヲ上品トス、今ニ至リテハ山城ニモ赤矢ヲ栽ユ、故ニ大和山城同品ニシテ優劣ナシ、是皆赤矢ハ養ヤスクシテ、其根肥大ナル故ニ利ニ走ルナリ、然レドモ其白矢ノ種ノ廢スルヲ惜スベシ、大和高市郡地黃村ニ多ク地黃ヲ作リ出スコトヲ、大和本草ニ載スレドモ、今ハ其ノ地ニ地黃ヲ栽ズ、其ノ隣村ノ越村ニテ多ク作ル、藥店ニ渡ノ地黃アレドモ皆陳久ニシテ佳ナラズ、和產ヲ良トス、其內大和山城皆根長大ナリ、優リトス、其蘆頭ノ下細クシテ疙瘩多キ者ヲ、地黃ノ節ト呼ブ、藥ニ入ズ、筑前ヨリ來ル地黃ハ、肥大ナレドモ甚短シ劣リトス、

乾地黃ハ冬掘リタル時、直ニ暴乾シ、肉黃色ナル者良ナリ、然レドモ久ヲ經レバ黑キニ變ズ、藥店ニ未ダ全ク乾カザル者ヲ貯ヘ置キ、クサリテ色黑キ者多シ、宜ク撰ブベシ、

〔倭名類聚抄 二十 草〕地黄　本草云、地黄一名地髄、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕本草圖經云、二月生葉、布地便出似車前葉、上有皺文而不光、高者及尺餘、低者三四寸、其花似油麻花而紅紫色、亦有黄花者、其實作房如連翹子、甚細而沙褐色、根如人手指、通黄色、粗細長短不常、衍義云、地黄葉如甘露子、花如脂麻花、但有細斑點、花莖有微細短白毛、李時珍曰、其苗初生塌地、葉如山白菜而毛澀、葉面深青色、又似小艾葉而頗厚、不叉丁、葉中攛莖、上有細毛、莖梢開小筒子花、紅黄色、結實如小麥粒、根長四五寸、細如手指、皮赤黄色、如羊蹄根及胡蘿蔔根、曝乾乃黒、

〔多識編 二 草〕地黄、左乎比米、異名苄(音戸)芑(音起)地髄(本經)

〔宜禁本草 乾 中 草〕地黄　甘苦寒、主男子五勞七傷、女子傷中胞漏下血、填骨髓、長肌肉、利耳目、心法曰、生(大寒涼血、)熟(微温補腎、)葉可作羹、

〔大和本草 六 草〕地黄　生熟トモニ肥大ナルヲ可用、熟ハ生地黄ヲ吾家ニテ蒸スベシ、藥肆ヨリ來ヲ必不可用、好酒ニ砂仁ノ末ヲ人拌テ、地黄ヲ不剉シテ浸シ、柳甑ニカケ、陶釜ニテ度々蒸スベシ、鐵鍋ニテ不可蒸、今日蒸シ冷ヘテ後、明日又右ノ砂仁酒ニヒタシ蒸ベシ、一日ノ内ニテモヨク冷テ後蒸ベシ、蒸後竹刀ニテ剉ミ焙ル、生地黄ハ剉テ酒ニヒタシ、日ニ乾シテ炒ル、或生薑汁ニ浸シテ炒ル事アリ、和地黄ノ上品ハ大和ヨリ出ヅ、唐ヨリ來ルニマサレリ、大和ニ地黄村アリ多ク畜ス、コレヲウフルニ下濕ノ地ヲイム、上ニアクタアルヲイム、又新糞ヲ忌ム、間遠クウヘテ、其間ニ久シキ糞水ヲソヽグベシ、甚繁昌ス、生ナルヲツキシボリ、汁ヲコシトリ、土ナベニテ煮テ膏トスルハ性最ヨシ、

〔物類品隲 三 草〕地黄　大和產上品、淡黄花ヲ開ク、一種紫花ノモノ、和名千里駒ト云、根堅シテ藥用ニ堪ズ、或云、是附錄ノ胡面莽ナラント、未詳、

〔重修本草綱目啓蒙 十一 隰草〕地黄　サホヒメ(延喜式)　今ハ通名　一名還元大品(綱目拾遺)　陽精(本草)　芦

地黃

〔重修本草綱目啓蒙七山草〕玄參　ヲシクサ延喜式　コマグサ　ゴマノハグサ　一名玄武精千金方

野芝麻群芳譜　鹿腸生類書纂要　黑玄參證治準繩　山麻藥性奇方　元參本草新編　能消草鄉藥本草　凌霄草村家方

數種アリ、武州道灌山目黑大宮八幡、及和州ニ產スルモノ眞物ナリ、世人訛傳テ唐種ノ玄參ト云、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、莖ニ四稜アリ、高サ四五尺、葉兩兩相對ス、形長クシテ尖リ、周邊ニ鋸齒アリテ、兎兒尾(トラノオ)葉ニ似テ淡綠色、深秋ニ至リ枝梢ゴトニ穗ヲ出シ、多ク花ヲ綴ル、長サ六七寸、肥タル者ハ一二尺ニ至ル、穗ニ枝ナク花色淡黃、大サ三分許、形チ小臼ノ如シ、後小尖莢ヲ結ブ、內ニ細黑子アリ、根ハ直クシテ肥大、長サ二三寸、數塊アツマリテ天門冬(クサスギカヅラ)根ノ如ク、色白シ、コレヲ切レバ便チ黑色ニ變ジテ漆ノ如ク、此根乾カシテ柔潤ナリ、上品トス、京師山中ニ產スルモノハ皆根堅硬、是レ山玄參ニシテ下品ナリ、葉形ハ異ナラズ、又潤短ニシテ尖者アリ、皆深綠色穗ニ枝多ク、花色紫黑又黃色ヲ帶ルモノアリ、俱ニ俗ヒナノウスツボト呼、略シテヒナノウスト云、花ノ形ニヨルナリ、江州ニテスキノサキト呼ブ、葉ノ形ニ因ルナリ、又ヒナノウスニ一種葉短ク鋸齒粗ナル者アリ、最下品ナリ、市中ニ瀆渡多シ、武州和州ノ產モ用ルニ堪タリ、

〔草木育種後編下藥品〕玄參(ごまのはぐさ)草本　羅甸名にてスコロヒユラリヤといひ、和蘭にてスクローヘル、コロイドといふ、山の赤土或少し陰地にてもよし、畦に春芽出しの比分けて植べし、一年に花實あり、實生自然とあるを畦へ分ち植て、度々養水を澆ぎてよし、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

攝津國卅四種、略〇中　玄參、略〇中　升麻各三斤、　伊賀國廿三種、略〇中　玄參、升麻各八斤、略〇下

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　玄參中里

〔本草和名六草〕乾地黃、一名地髓、一名芐、音戶仁諝　一名芑、音起仁諝　一名地脈、本條　一名蜀黃、出神仙服餌方　花名羊乳、出雜要訣

地黃者土精也、出大淸經

卌七種、〈略〉〇中 署預、麥門冬、胡麻胡各一斗、 伊豫國卌二種、〈略〉〇中 桃人、胡麻子各一斗、

〔毛吹草 三〕丹後 胡麻 伊豫 胡麻 肥後 胡麻

〔本朝食鑑 穀一〕胡麻

京師五畿多種之、以山崎之產爲第一、畿外諸州多種之、亦不相及、黑白俱常用、而爲滋腎烏髮之藥、或用榨油、擇抹餅麵食、此號胡麻餅、

〔新撰字鏡 草〕玄參 於〇之〇久〇佐〇

〔本草和名 八草〕玄參、一名重臺、〈楊玄操音直龍反〉一名玄臺、一名鹿腸、一名正馬、一名咸、一名端、一名顔草、〈出陶景注〉一名鬼藏、〈出釋藥性〉玄參者玄精也、〈出范汪方〉和名於之久佐、

〔頭注〕按陶注无顔草名、今注有顔名草、按藏疑與氏當是藏字、

〔倭名類聚抄 二十草〕玄參 本草云、玄參一名重臺、〈和名於之久佐〉

〔箋注倭名類聚抄 十草〕陶注、莖似人參而長大、根甚黑亦微香、道家時用、亦以合香、蘇注、玄參根苗並臭、莖亦不似人參、陶云、道家亦以合香、未見其理也、今注詳、此藥莖方大、高四五尺、紫赤色而有細毛、葉掌大而尖長、根生青白、乾卽紫黑、新者潤膩、合香用之、俗呼爲馥草、陶云似人參、唐本注言、根苗並臭、重未深識、圖經、二月生苗、葉似脂麻、又如槐柳、細莖青紫色、七月開花青碧色、八月結實黑色、亦有白花、莖有節若竹者、高五六尺、葉如鋸齒、其根一根可生五七枚、陶云、道家時用合香、今人有傳、其法云々、可以熏衣、御覽引吳普云、玄參二月生葉、如梅有毛、四々相値、似芍藥、黑莖、莖方、高四五尺、華赤生枝間、四月實黑、

〔東雅 十五草卉〕玄參をオシクサといふも、古語拾遺に見えし天押草といふもの、如し、

〔古語拾遺〕御歲神發怒、以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神、〈略〉〇中 依教奉謝、御歲神答曰、實吾意也、宜以麻柄作桛桛之、乃以其葉掃之、以天押草押之、以烏扇扇之、

山城國(中略)胡麻子四石〇中略　尾張國(中略)胡麻子四石〇中略　參河國(中略)胡麻子三石〇中略　遠江國(中略)胡麻子二石〇中略　近江國(中略)胡麻子五石〇中略　美濃國(中略)胡麻子四石〇中略　丹波國(中略)胡麻子五石〇中略　播磨國(中略)胡麻子三石〇中略　備前國(中略)胡麻子三石〇中略　備後國(中略)胡麻子二石〇中略　紀伊國(中略)胡麻子五石〇中略　阿波國(中略)胡麻子四石〇中略　伊豫國(中略)胡麻子五石〇中略　右以正税交易進、其運功食並用正税、

(東大寺正倉院文書十五)尾。張。國。天平六年正税帳

尾張國司解　申收納天平六年〇以下字虫損數

合八郡天平五年定穀貳拾伍萬捌仟肆伯肆拾斛壹斗捌升壹合〇中略

胡麻子肆斛　直稻壹伯貳拾束斗別三束

(東大寺正倉院文書四十二)豊。後。國。天平九年正税帳

球珠郡

天平八年定正税稻穀壹萬漆仟貳伯貳拾斛陸斗捌升貳合貳勺〇中略

買胡麻子參斛肆斗肆升　直稻壹伯漆拾肆束二束升別　儲府料春、稻玖伯束

(朝野群載二十七諸國公文)主計寮解　申返抄事

備。前。國。應德二年雜米使正六位上行

年料白米仟伯拾伍斛

大炊寮納〇中略　胡麻子參斛〇中略

應德三年十二月廿九日　正六位上行權少屬縣宿禰〇以下署名略

(延喜式三十七典藥)諸國進年料雜藥

攝津國卌四種、〇中略胡麻子各四升五合、伊勢國五十種、〇中略胡麻子二升、參河國廿一種、〇中略胡麻子三合、相模國卅二種、〇中略桃人胡麻子三斗、上野國十五種、〇中略胡麻、蜀椒、各一斗、讚岐國

一唐胡麻より油絞り出し、燈油幷蠟燭等に用候儀、今度淺草橋外新地喜兵衛、佐右衛門と申者、相願候ニ付、吟味之上申付候、依之關八州之內、御領私領共、右兩人之者ゟ、唐胡麻種請取植付可申候、田地芝地原地之所にて茂、無構出來候之由、百姓勝手にも可相成候間、植付樣之儀者、右兩人之者へ承合作り可申候、

一唐胡麻出來之上、壹石ニ付銀貳拾目之積り、願人共方江何程にても買取候筈、又は油にて請取度ものは、種壹石に付油壹斗五合宛相渡候筈に候間、兩樣之內、相對次第可致候、尤江戶近邊は不及申、何之所にて茂、作り度と存候ものは、右願人方江參、種請取可申候、

一遠方に而江戶出し不勝手之所は、可致相對由候間、可得其意候、

右之通、今度關八州江相觸候間、右在々ゟ作り出し候唐胡麻之分は、願人の外之者、買取候儀、堅仕間敷候、右之段町中へ可觸知候也、

十二月

青蘘

〔新撰字鏡草〕青蘘（胡麻葉）

〔本草和名十九菜〕青蘘（楊玄操音松羊反）巨勝苗也、

〔醫心方一〕青蘘（巨勝苗也、胡麻淳黑者、名巨勝、）

〔康賴本草菜部〕青蘘　味甘寒、无毒、和コマノハ、卽胡麻葉也、其時分採之陰干、巨勝苗也、胡麻淳黑者名巨勝、

〔菜譜下〕胡麻（○中略）　苗を青蘘と云、春秋子をまきて、苗を取てゆびき食之、性よし、味はよからず、

〔宜禁本草乾五〕青蘘　甘寒、巨勝苗也、主風寒濕痺、益氣、補腦髓、堅筋骨、久服聰明增壽、以湯浸之、良久涎出湯黃、沐潤毛髮、

胡麻產地

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

宴會雜給

親王以下三位已上幷四位參議　人別〈○中略〉胡麻子二合

四位五位幷命婦　人別〈○中略〉胡麻子一合

〔延喜式大膳三十三〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、〈○中略〉胡麻子一合五勺、〈菓餅料一合、好物料五勺、〉

〔延喜式典藥三十七〕造備御藥料

胡麻二石〈練料〉

遣諸蕃使

唐使十一種、〈○中略〉草藥五十九種、〈○中略〉練胡麻一斗六升

渤海使十七種、〈○中略〉草藥八十種、練胡麻大五升

〔空穗物語藤原の君〕うごまはあぶらにしぼりてうるに、おほくのせに出て、そのかすみそしろへつかうによし、

〔鈴鹿家記〕應永元年十二月廿六日戊辰、今晩若州御袋ヨリ御モタセ、御內義樣、御表侍從樣御內不殘食、石花ノ吸物、鯛濱燒ヒッシホリ、蒟蒻牛房フト煮、

〔本朝食鑑穀一〕胡麻

發明、近世貪於滋陰壯陽者、專求巨勝而常服之、但是知益陰不知補陽、故早失命矣、加旃不知眞巨勝、仍覓黑胡麻之中、而言本邦無巨勝、適覓華之巨勝、偶得華之巨勝、亦不知苣藤子之氣、而妄蒸熬調服之、嗚呼可憐哉、若不知巨勝、則服黑胡麻而可乎、予〈○平野必大〉之家君、每調製子黑胡麻胡桃肉枸杞葉五加葉山椒白鹽等、細末入飯後白湯而服、以爲旦夕之課、終老强健無病、予亦迄今用之、以爲遺訓焉、

〔享保集成絲綸錄三十四〕享保十三申年十二月

様ゴミニ不淨ヲ用ルカ、魚類ノ腐リタルヲ用ルカ、土肥エヲ用ベシ、馬屋肥エ、ゴミ芥、灰ノ類、用ヒベカラズ、油少ナク實滑キモノナリ、土地ニ嫌ヒ多シ、石地砂地、黑フク惡シキナリ、土重キ粘アル土地ヲ好ムベシ、實入コレ厚クシタハサヤ少ナシ、薄クヌキタチ、枝ヲカキ、サヤ大形ニ付ナラバ、ウラヲ止メヨ、様ニハヤク土ヲ寄セ置キ、肥シヲスベシ、〈略〇中〉蒔テ後土ヲ深クカブセベカラズ、生出ガタシ、

〔類聚三代格八〕太政官符

應營陸田事

右撿案内、〈略〇中〉今被右大臣宣偁、頻年旱炎、水田不稔、黎民窮氣、無所取活、往年詔勅、已設條章、近代牧宰、曾無遵行、宜擇已上一人專當其事、使民因天之時、就地之利、播殖黍稷稗麥大小豆及胡麻等之類、是則所以富國饒民、支給凶年者也、若懈怠無勤、隨狀科責、〈略〇中〉

承和七年五月二日〈〇又見續日本後紀〉

〔宜禁本草乾五穀〕胡麻　甘平、無毒、〈力、巨勝、胡麻〉九蒸、九暴、熬擣餌、充肌長生、蒸不熟令人髮落、〈八角巨勝、四角胡麻〉烏者良、白者劣、補五內、益氣力、長肌肉、填髓腦、明目、治肺氣、潤五臟、益男、初服利大小腸、久食卽否、治勞氣、產後羸困、生嚼塗小兒頭瘡及浸淫惡瘡大効、葉作湯沐潤毛髮、滑皮膚、益血色、湯火傷爛、生嚼厚封、

〔菜譜下穀〕胡麻〈略〇中〉　黑胡麻は服食とすべし、上品の藥なり、水に入、しいなのうかべるを去、日にほして後、酒にかきませて、一夜おきて、半日ほどむして、日にほし、よく干たる時、手にてもめば皮さる、やげんにて抹し、いりたる鹽少くはへませて壺に入、口をよくふさぐべし、飯にかけ湯に入、菜にかけて食す、味よく性よし、朝夕食すべし、身をうるほし、虛を補ひ氣をまし、肌肉を長じ、耳目を明らかにす、中風によし、

〔延喜式三十二大膳〕祈年祭

胡麻栽培

色ナルヲアブラゴマト云フ、

〔農業全書二五穀〕胡麻

早晩の二種あり、白黑赤の三色あり、黑きが食するにハ藥なり、中にもすきとをりて白きが油多し、其さや六角なるもあり、是は實の色うすゐめ色也、蒔時分の事、三四五月の雨の後、しめり氣のあるに蒔べし、白地は胡麻に宜しとて、細砂の肥たるによく出來る物なり、上半月胡麻をうゆべし、下半月は實少し、春蒔たるは虫付て生立にくし、よくそだてば實多し、夏まくは長じ安し、されども實は少し、地のこしらへいか程もこまかにこなし置、うるほひよき時分を待て畦作りし、一反に凡種子を五六合の積りして沙と合せ、むらなき樣に蒔べし、蒔たる上をこまざらへにて、さらさらとかるくかき、或柴をたばね、一方に繩を付、蒔たる上を引ならしたるもよし、種子おほひ厚ければ生じかぬる物なり、中うち三度許し、見合よきところに間引べし、肥地は薄きが取實多し、尤蒔糞を多く用ゆべし、かる時分の事、本なりのさや一つ二つ口をひらかんとするを見て刈取、下に筵などをしき、上にもこもむしろにてもおほひ、二三日も蒸をき、其葉腐り落るをふるひすて、小束にたばね、多き時はやねのごとくふき、少きは所に木を二本立、風にたをれぬ樣に念を入、それに長き竹を横にゆひ渡し、此竹に兩方よりたばねたる胡麻を立かけ、口のひらくを見て打とり、又本のごとく兩方より立かけ干、二三日も間を置て又うつべし、此のごとく四五遍うちて悉く盡すべし、又胡麻を夫婦にて同じく蒔バ實多しと云り、是妄言に似たる事といへども、陰陽變化の理り、しゆべからず、芸り中うちたび〳〵して、畦の中いかにもきれいにすべし、相應の地ある所にては多く作るべし、厚利ある物なり、旱を好みて雨年によからず、他の作り物は少旱痛する所も、胡麻にはくるしからず、

〔百姓傳記十一〕胡麻ヲ蒔ク事

品ニ用フル麻子ハ、常ノ大麻子ニアラズ、其カタチ瓜ノサネノ如クニテチイサク、胡麻ヨリ三四倍モ大ナリ、其色灰靑色ニシテ滑也、是大宛國ノ麻子、倭漢ノ胡麻ナルベシ、

〔和漢三才圖會 百三〕胡麻 巨勝 方莖 狗蝨 油麻 脂麻〈略〉○〈中略〉

本綱黑胡麻〈甘平〉益氣力、長肌肉、塡髓腦、堅筋骨、明耳目、補肺氣、止心驚、利大小腸、久服不老、其中巨勝而肥者、卽巨勝子也、今市肆間僞者多、用眞胡麻烏色者、常九蒸九暴熬搗餌之、〈與茯苓相宜〉

白者〈用取油〉 赤者〈狀如老茄子、殼厚油少、但可食爾、不堪服食、〉

葉〈甘寒〉名靑蘘、候苗出采食、滑美不減於葵也、又以湯浸葉、良久涎出稠黃色、婦人用之梳髮、

花〈甘〉生禿髮眉毛不生者、〈以烏麻花陰乾爲末、以烏麻油漬之、日塗之、〉又生肉丁者、擦之卽愈、〈略〉○〈中略〉

按胡麻〈黑赤〉白有三色、共夏至半夏生之交下種、六月開花、七月實熟、最有早晚二種、性惡霖雨、其形狀皆如上說、但白胡麻莖節節葉對生、如車輪、而葉花共色淺、以爲異耳、處處皆有之、而多出於九州、今自中華所渡巨勝子者、色不黑、疑是以茺蔚子僞者乎、惟倭黑胡麻大粒者佳也、

〔重修本草綱目啓蒙 十七麻麥稻〕胡麻 ウゴマ〈和名鈔〉 ゴマ〈略〉○〈中略〉胡麻ハ原中國ノ產ニ非ズ、大宛ヨリ來ル、故ニ胡ノ字ヲ冠ユ、然ルニ天工開物ニハ擧テ五穀ノ麻トスル者ハ誤レリ、胡麻ニ黑白黃ノ品アリ、藥用ノモノハ皆黑胡麻ナリ、粒ニ大小アリ、薩州ノ者ハ大ナリ、黑胡麻ヲ巨勝子ト云フ、故ニ巨勝子圓ニハ此品ヲ用ユベシ、然レドモ舶來ノ巨勝子皆茺蔚子ナリ、故ニ賣藥家皆茺蔚子ヲ用テ、巨勝子圓ヲ製スルハ甚誤ナリ、〈略〉○〈中略〉白胡麻ハ食用トナシ搾テ油トス〈略〉○〈中略〉胡麻ハ葉三尖ニシテ、蘭草葉ノ如シ、夏葉間ニ花ヲ生ズ、地黃花ノ如ニシテ白色微紫、後角ヲ結ブ、長サ八九分、熟シテ黑色、角ニ二稜四稜六稜八稜ノ分アリ、二稜四稜ナル者ハ白胡麻ナリ、コレヲ二方胡麻、四方胡麻ト呼ブ、六稜八稜ナル者ハ黑胡麻ナリ、六稜ノ者ヲ六方胡麻ト呼ブ、八稜ノ者ハクルマ胡麻ト呼ブ、其子微黃

胡麻種類

可知也、ゝかるに大和本草に、上世に五穀の一とせし麻は、アサノミ也、胡麻にあらずとは、胡麻は胡國より來るとあるに據へる歟、大麻の實も穀になして食ふべきにあらず、凡かの書中に、本邦從來所有の物を、動もすれば舶來の種となせるもあり、見む者なまどひそ、

〔庖厨備用倭名本草二〕胡麻　倭名抄ニゴマ、多識篇同ジ、考本草、一名巨勝、古ハ中國タヾ大麻アリ、其實ヲ蕡ト云、漢使張騫ハジメテ大宛國ヨリ油麻ノ種ヲ得來リテウヘタリ、故ニ胡麻ト名ヅク、昔胡地ニアリシ時ハ、甚ダ大ナリツルガ、中國ニ入シヨリ小クナル、或云、本ハ胡地ニ生ジテ、形體麻ニ類ス、故ニ胡麻ト名ヅク、八穀ノ中ニ最モ大ニスグレタリ、故ニ巨勝ト名ヅク、遲早二種アリ、黑白赤三色アリ、其莖皆方也、秋白花ヲ開ク、又紫艶ヲ帶タルモアリ、節ゴトニ角ヲムスブ、長サ一寸許、四稜六稜ノモノハ、房ホソクシテ子少シ、七稜八稜ノモノハ、大ニシテ子多シ、胡麻ハ夫婦シテ種ヲマケバ、卽チ生ジ茂盛ス云云、

胡麻、味甘、性平、毒ナシ、傷中虛羸ナルニヨシ、五內ヲ補ヒ、氣力ヲマシ、肌肉ヲ長ジ、髓腦ヲミタシム、久服スレバ身輕クナリテ老セズ、筋骨ヲ堅クシ、耳目ヲ明ラカニシ、飢渴ニタヘ、年ヲノブ、五臟ヲウルホシヤシナヒ、肺氣ヲ補ヒ、心驚ヲトヾメ、大小腸ヲ利ス、寒暑ニタヘ、風濕氣ヲヲビ、旋風頭風ニヨシ、傷寒溫瘧大吐ノ後、虛熱アリテ、オトロヘツカレタルニモヨシ、產ヲモヨホシ、胞ヲオトシ、產後ニオトロヘツカレタルニモヨシ、風病ヲ生ゼズ、風病アル人久食スレバ、行步タヾシクナリ、言語ヨクナルベシ、

白油麻、味甘、性寒、毒ナシ、虛勞ヲ治シ、腸胃ヲウルホシ、風氣ヲメグラシ、血脈ヲ通ジ、頭上ノ風ヲサリ、肌肉ヲウルホシ、食後ニ生ニテ一合啖テ、終身トヾムルコトナカレ、又乳母是ヲ服スレバ、孩子永ク病ヲ生ゼズ、

元升井○向曰、右白油麻ハ脂麻ト本草ニイヘリ、常ニ油ヲ取ゴマナルベシ、近年阿蘭陀外科ノ藥

經云、胡麻皆園圃所種、稀復野生、苗梗如麻、而葉圓鋭光澤、嫩時可作蔬、王念孫曰、有黑白紅三種、高者四五尺以來、其莖皆方、紅白二種皆四稜、黑者獨六稜、夏秋間作黄華、九月收實、白者子多、作油甚香美、黑者不及、而入藥則良、

〔類聚名義抄 二十〕胡麻 五馬、俗云ウコマ、 〔同 广七〕胡麻 俗音五マ、俗云ウコマ、 〔同 子七〕胡麻子 オコマ

〔本朝食鑑 穀部二 穀類〕胡麻

沈存中筆談曰、漢使張騫始自大宛得油麻種來、故名胡麻、此所以別大麻也、葉名青蘘、莖名麻藍、音皆亦作蘘、巨勝詳于本條、李時珍曰、胡麻取油、以白者爲勝、服食以黑者爲良、此爲確論、今本邦亦然、又曰、麻枯餅乃笮去油麻滓也、亦名麻枡、音辛、荒歲人亦食之、可以養魚肥田、亦周禮草人、强堅用蕡之義、必大野○平按、枯餅非餅、笮後油滓壓堅作餅形者也、今本邦細碎抹餅稱胡麻餅、其養魚肥田亦然、凡草木疫凋者、臘月樹根四邊土中埋麻胡、則至來年枝葉鬉、花子繁矣、

〔成形圖說 二十五 穀〕伊曾仁 卽胡麻也、重古名と云、未考得す、

字呉麻 和名抄引ニ本草注ニ、胡麻五馬、陸詞云ニ字古来ニ撰に胡を國音に讀は、郡名書に、上野國多胡郡の胡音知、呉とある類なり、又胡麻唐音ウーマ、しかれば字は胡の唐音にして、此國に元より有來る胡麻の外に、舶來の種を指して字胡麻といひしを、後は胡音に從て呉麻とのみ呼びしとは見えたり、 妙荏 胡麻の實炒されば宜しからざるの實實也○中略

呉麻てふ名上世には聞えず、式令の頃は専用ひられて、奉饍にも供へき、新撰字鏡に、青蘘を胡麻葉と訓たれば、いと早く胡麻の名はありけらし、今尙山野自生のものありて實を成せり、後に外域より貢れるが子も大きく巨勝などいひし類にて、且其功能等の說よろこびて、食料に用ひしにや、西土も如斯ぞありぬらし、本艸經云、麻麥稷黍豆爲五穀、麻卽今油麻、中國有四稜六稜者、張騫從外國得八稜黑種、故又曰胡麻、是始より麻てふ者ありしを、胡地より獲しが色黑く子太かりしほどに、胡麻と名けしなり、天工開物云、胡麻卽脂麻、相傳西漢始自大宛來、古者以麻爲五穀之一、若專以大麻當之、義豈有當哉、窃意詩書五穀之麻、或其種已滅、或卽菽粟之中、別種而漸訛其名號、皆未

胡麻名稱

〔古今和歌集十物名〕をみなへし　　とものり
白露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にもいとをみなへし

〔本朝文粹一雜詩〕詠女郎花　　源順
花色如蒸粟、俗呼爲女郎、聞名試欲契、偕老恐惡(去聲)衰翁首似霜、

〔十訓抄二〕野宮歌合判者は源順なりけり、女房をあまたかたせければ、男方より、
霜枯の翁草とは名のれ共女郎花には猶なびきけり、となんいひたりける、是は
花色如蒸粟、俗呼爲女郎、聞名戯欲契、偕老恐惡衰翁首似霜と、順がかけるによりてよめるにや、いと面白し、同雜なれども、やさしくおぼゆかし、

〔紫式部日記〕わた殿の戸ぐちのつぼねにみいだせば、ほのうちきりたる、あしたの露もまだおちぬに、殿(○藤原道長)ありかせ給て、みずいじんめして、やり水はらはせ給ふ、はしのみなみなるをみなへしの、いみじうさかりなるを、一枝をらせ給ひて、木丁のかみよりさしのぞかせ給へり、

〔枕草子三〕草の花は
をみなへし

〔明月記〕寛喜元年六月十九日乙卯、今年草樹花實皆遲、黄梅猶纔殘、昨今初開蟬聲、但萩女郎之中有纔開花、是只自然事歟、

〔武江產物志(藥草)〕道灌山ノ產　白花敗醬(をとこめし)　落合邊　敗醬(をみなめし)(同上〇森ノ)

〔本草和名十九(米穀)〕胡麻(陶景注曰、本出大宛、故名胡麻、)一名狗虱、一名方莖、一名鴻藏、(楊玄操音杜羊反、已上本條、)一名莫如、一名三光之道榮、一名古地之更生、一名流朱、一名九癈、一名幽昌、一名合腴、(已上七名出大清經、)一名玄秋之沆靈、(出大清經)

〔倭名類聚抄十七(麻)〕胡麻　陶隱居本草注云、胡麻(音五〇萬、讃云、字古末、)本出大宛、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄九(稻穀)〕按胡麻載在本草經、恐非本出大宛、蓋胡之言烏也、以其色黑有是名、本草圖

シテ四岐及ビ鋸齒アリテ、カヘデノ葉ノ形ニ似タリ、對生ス、莖高サ一尺許、五月花ヲ開ク深黄色、白花ノ敗醬花ヨリ大ナリ、是蘇恭說トコロノ敗醬コレナリ、凡敗醬ハ根ヨリ長キツルヲ四方ヘ引キ、小葉兩對ス、惡多葉ニ似タ敗醬アリ、只白山ヲミナメシハコノ臺ナシ、竝白花敗醬ハ、花ノ形黄花ノ者ヨリ大ニシテ花後ニ實アリ、百合實ニ似テ小ナリ、花後根モトヨリ臺ノ如ク枝ヲ生ズ、長サ五六尺横行ス、其臺ニ生ズル葉ハ圓長ク、小判ノ形ニシテ莖ニ對生ス、毎節鬚根ヲ生ジ、此ヨリ又苗葉ヲ生ジ、翌年ニ至テ大ニ繁茂シ、舊根枯ル、又子ヲ蒔テヨク生ズ、根ハ牛蒡根ノ如ク、苗根共ニ臭氣アリ、

一種サミダレヲミナヘシ、サツキヲミナヘシトモ云モノアリ、春月地ニ布テ七八葉攢リ生ズ、初夏莖ヲ抽ス、高サ三四尺、葉莖ニ對ス、葉ノ形紫菀ノ小ナルガ如クニシテ、刻アル者アリ刻ナキモノアリ、莖ニ生ズル葉ハ漸ク小ナリ、四月ノ末花始テ開キ、五月ニ盛ナリ、故ニサミダレヲミナヘシト云、黄色ニシテヲミナヘシノ花ト同ク、根株臺ヲ生ズルコト亦同ク、

〔草木育種 下 蒔花〕敗醬(をみなへし) 草本　山の野に自生す、花の黄なるを女郎花と云、花の白きを男郎花(おとこめし)といふ、植る地ハ黒ぼくよし、多ハ細なる芥、又ハ木の葉を覆べし、自然に腐て肥となるなり、

〔江家次第 七 八月〕相撲召合

官人以上位袍、番長以下青袍懸緌、中略○右插女郎花、

〔古今和歌集 四 秋〕題しらず　僧正遍昭

なにめでゝおれるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな

僧正遍昭がもとに、ならへまかりける時に、おとこ山にてをみなへしをみてよめる、　ふるのいまみち

女郎花うしと見つゝぞゆきすぐるおとこ山にしたてりと思へば

たれかおるさがの、原の思ひ草吾なきならば花は咲らむ

女郎花を思草といふ事は、齋院せむざい草盡に見えたり、天智天皇草名異名には薄といへり、又しをんとも、不分明、但女郎花を思草と云事は、彼前栽合に定らる丶條勿論なり、又櫻をも能因法師は詠せり、

〔重修本草綱目啓蒙十一草〕敗醬　オモヒグサ（萬葉集）　コノテガシハ　ヲミナヘシ（共ニ同上）　女郎花（和名鈔、古今集、）　ヲミナメシ　ヲミナエシ（備前）　チメグサ（和名鈔）　菊花女　一名苦薺菜（藥性奇方）　増、一名若蘆菜（古今醫統）　若遼菜（名醫類案）

種樹家ニ多ク黄花ノモノヲ栽ユ、即女郎花ナリ、又山中ニ自生モアリ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、葉ハ玉簪ノ葉ニ似テ多ク叢生ス、圓莖高サ三四尺、節ニ對シテ葉ヲ生ズ、菊葉ニ似テ岐深シ、梢ニ至レバ、變ジテ艾ノ梢葉ノ如シ、夏ノ末花ヲ枝梢ニ簇生ス、未ダ開ザル者ハ細碎ニシテ、粟粒ノ如ク深黄色、已ニ開ク者ハ五出ニシテ色淺ク、臭氣アリ、採テ瓶花ニ供ス、是黄花ノ敗醬ニシテ、救荒本草ノ地花菜ナリ、時珍說クトコロノ者ハ、白花ノ者ヲ指ス、即男郎花（ヲトコヘシ）（和名抄）ナリ、又南燭花（同上）ニ作ル、ヲメシ、オホトチ、ヲトコヲミナノ花、（共ニ古名）トチナ、（信州、土州）ミルナ、（勢州）山野ニ自生多シ、苗葉黄花ノモノヨリ肥大ナリ、腳葉ハ岐深クシテ、タマボウキノ葉ニ似タルモアリ、又岐ナクシテ細鋸齒アルモアリテ變葉多シ、皆短毛臭氣アリ、圓莖高サ四五尺、四月ヨリ秋ニ至マデ白花ヲ開ク、黄花ノ者ヨリ大ナリ、又一種春ノヲミナメシト云アリ、一名カノコサウ、キヌマキ、サクラガハグサ、コレニ雌雄ノ二種アリ、雄ナル者ハ葉黄花ノ敗醬葉ニ似テ小ナリ、薄クシテ尖レリ、三月ニ花ヲ開ク、紅白相雜ル、故ニカノコサウト云、雌ナル者ハ小草ナリ、高サ一尺許、花葉トモニ小ナリ、深山幽谷溪側ニ多シ、俗ニ和ノ甘松ト云ハ誤リナリ、根甚細小ニシテ臭シ、全ク甘松ノ類ニ非ズ、又一種加州ノ白山ヨリ出ルモミヂバノヲミナメシアリ、一名白山ヲミナメシ、種樹家ニテ金鈴花ト云、圓葉ニ

〔下學集下草木〕女郎花ヲミナヘシ

〔壒嚢鈔三〕一女郎花ト云フハヲミナヘシト云フモノ歟他花歟

源順ガ俗呼爲女郎ト云ヘルハ、タシカノ說ナキ心歟、菊女郎花ト云コトハ大概分明ナル歟、靈鬼志曰、何文濱人也、有一女子容貌美、卒死葬、明日見其塚、盡成菊花、故名菊花女亦名女郎花云ヘリ、順ガ花色如蒸粟ト云ヘル、ウキノ女郎花ヲ云ヘルニヤ、又有ル說ニハ如蒸粟云ベキヲ、粟字ヲ誤テ栗トハカクリ、蒸栗トハムセルクリニハ非ズ、蒸栗ト云フ木名ナリト江帥云ヘリ、魏文帝鍾大理與書云、赤擬雞冠、黃侔蒸栗ト云ヘリ、是ハ玉ノ色ヲ云ヘル也、王逸正部論云、赤如雞冠、黃如蒸栗、白如猪肪、黑如純漆ト云ヘリ、

〔東雅十五草卉〕女郎花ヲミナヘシ〇中略　萬葉集に見えし所は、女郎花のみにあらず、美妾、娘子部四、佳人部爲、美人部師等の字をも用ひたり、壒嚢抄に靈鬼志を引て、菊を女郎花といふ事は、本據ありといひけり、されど古今集の序にをみなへしの一時くねるさいふ事を、ふるく釋せしに、むかし小野賴風といふものゝ、八幡に住みて、京なる女と互ひにゆきかよひしに、其女賴風を恨むる事ありて川に身を投て死しけり、死せし時にぬぎ置きし山吹かさねの衣の、土に朽ちて此花咲き出でたりけりといふ事あり、此事また靈鬼志に見えし何文が女の塚に、菊花を生せしといふに似たりし事なれば、女郎花の字借用ひて、ヲミナヘシといはむ、誠にしかるべし、粧樓記に木蘭を女郎花といひしは、只其艶なる事を記せしものと見えたり、又江讃に花色如蒸栗と云ひし事を、文選を引て、蒸粟に作るべしと云ひしも、又誠に然なり、されど此花の如きは、蒸粟にはよく似てけれ、濱にして如何に云ひしものにやあるらん、似たるものどもあれど、それとおにしき者はいまだ見ず、

〔夫木和歌集秋〕思　女郎花

女郎花

シテ紅ナリ、

〔廣益地錦抄五〕陸英（略）〇中　骨間しびれいたみ、または落馬等にて手足を打くじきたるは此莖葉をせんじ、度々浴湯にすべし、又牛馬足をくぢきいたむに、せんじて酒を入れ、むらひて妙也、

〔延喜式　典藥寮五〕所須藥種　蒴藋一斤一分

〔本草和名　草八〕敗醬　陶景注云、氣似敗豆醬、故以名之、　一名鹿腸、一名鹿首、一名馬草、一名澤敗、一名納細、出釋藥性、和名於保都知、一名知女久佐、

〔倭名類聚抄　草二十〕敗醬　陶隱居曰、敗醬　和名知女久佐　氣似敗豆醬、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄　草十〕本草和名云、和名於保都知、一云知女久佐、本書菜類茶訓於保都知、故此不取是名也、按時珍曰、敗醬處々原野有之、俗名苦菜、野人食之、蓋此苦菜之名、唐時俗間既有之、此間人傳之、以於保都知爲苦菜、然源君之時、本草諸書無苦菜之名、但爾雅以苦菜爲茶別名、而茶亦可食、遂以茶爲於保都知者誤也、陶又云、葉似稀薟、根形似柴胡、蘇云、多生崗嶺間、葉似水莨及薇銜、叢生花黃、根紫作陳醬色、其葉殊不似稀薟、時珍云、春初生苗、深冬始凋、初時葉布地生、似菘菜葉而狹長、有鋸齒、綠色面深背淺、夏秋莖高者二三尺、而柔弱數寸一節、節間生葉、四散如織、頂頭開白花、成簇如芹花蛇床子花狀、結小實成簇、其根白紫、頗似柴胡、按蘇敬所云黃花者、可以充乎登古倍之、李時珍所云白花者、可以充乎登古倍之也、醫心方云、和名於保都知、又久知女久佐、又加末久佐、按知上久字恐衍、（略）〇中　袖中抄謂於保登知似乎美奈倍之而白花、一名乎登古倍之、然則敗醬黃花者、謂之乎美奈倍之、白花者謂之於保登知也、未知輔仁以爲白花敗醬否、

〔倭名類聚抄　草二十〕女郎花　新撰萬葉集云、女郎花、倭歌云、女倍芝、乎美那閉之、今案花如蒸粟也、所出未詳、

〔箋注倭名類聚抄　草十〕按女倍芝、既是假字、不可下復有訓注、有乎美那閉之五字非是、又花色如蒸粟、俗呼爲女郎、是卽源君詠女郎花詩、見本朝文粹、則今案以下亦恐後人所加、

〔延喜式 內藏十五〕大神祭 夏祭料〇中略 忍冬花蘂一合、蘂二勝 雜料、綠綵小四兩、安藝木綿大一斤、

〔武江產物志 藥草〕隅田川邊 忍冬 道灌山ニモ

〔新撰字鏡 草〕蒴藋 上所角反、下直角反、曾〇久〇度〇久〇

〔本草和名 草十一〕陸英 蘇敬注云、芹名水英、此名陸英、接骨樹名木英、此三英也、蒴藋也、蘇敬注云、後人出蒴藋條、 一名決盆、一名陸莖、又云是獨

行、出釋藥 和名曾久止久、

蒴藋 陶景注上音朔、下音調、 一名董草、一名芰、蘇敬注云、此即藋之變也、一名蔺節、出陶景注 和名曾久止久、

〔倭名類聚抄 二十 草〕蒴藋 蘇敬本草注云、蒴藋 蒴音朔、藋音調、和名曾久止久、 即陸英也、

箋注倭名類聚抄 十草 衍義云、蒴藋花白、子初青如菉豆顆、每朵如盞面大、又平生有一二百子、十月方

熟紅、蘇敬陸英條注云、此葉似芹及接骨花、亦一類、故芹名水英、此名陸英、接骨樹名木英、此三英也、

花葉並相似、圖經、春抽苗、莖有節、節間生枝葉、

〔大和本草 九 藥草〕蒴藋 ソクヅ 一名陸英、又接骨草、董草、與接骨木葉同、只草ト木ト不同而已、故クサタツト

云、本草蒴藋ト陸英ト別物也ト云說アリ、故陸英ヲ別ニノセタリ、時珍ハ諸說ヲ引テ一物ナリト

ス、風ホロセ身痒キニ煎ジテ洗フ、又煎湯ニ酒少加ヘテ浴ス、本草ニ出ヅ、又和方ニモ功能多、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕蒴藋 ツ〇チ〇ヒ〇ト〇ガ〇タ〇延喜式 ソ〇ク〇ド〇ク〇和名鈔 ク〇サ〇タ〇ヅ〇京 ソ〇ク〇ヅ〇同上

ニ〇ハ〇タ〇ブ〇備前 ソ〇ク〇ド〇ウ〇大和 ソ〇タ〇ド〇同上 フ〇ラ〇ン〇ダ〇ナ〇ウ〇九州 一名續骨草附方 白花

草藥 下總結城 還還活 武江府志

接骨木ノ一名ヲタヅト云フ、蒴藋葉能接骨木葉ニ似テ、本草ナルニ因テ、クサタヅト呼ブ、故ニ接

骨木ヲモ木タヅト云フ、感山ニテモ接骨木ニ木蒴藋ノ名アリ、蒴藋ニ接骨草ノ名アリ、原野ニ多

ク生ズ、春宿根ヨリ叢生ス、高サ六七尺、葉ハニハトコノ葉ニ似テ細鋸齒アリ兩對ス、斷ツ時ハ臭

氣アリ、夏月莖梢ニ繖ヲナシ、五出ノ小白花ヲ開ク、花後圓實ヲ結ブ、接骨木ノ實ノ如シ、生ハ綠熟

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕忍冬　スヒカヅラ　スヒスヒカヅラ播州　スヒバナカヅラ雲州　一名木楊藤東醫寶鑑　甜藤附方　老公鬚青藤録志　金銀藤同上　過東藤藥性要略大全　左紋藤藥性奇方　鷺鷥草群方譜　左紐廣東新語　金銀花草郷藥本草　芀多偽草品字箋　環兒花事物異名、花名　蜜啜花三因方、同上　增、一名左轉藤遵生八牋

山野最多シ、樹ニ纏フテ繁延ス、葉兩對ス、形稍ニシテ尖リ毛アリ、春新葉ヲ生ズ、菊葉ニ似タル者アリ、圓葉ノ者アリ、皆一根ヨリ變生ス、別種ニ非ズ、四月葉間ニ花ヲ開ク、香氣アリ、一蒂二花一節四花同日ニ開ク、長サ一寸許、本ハ細筒ニシテ末ハ深ク分レテ二瓣トナル、上ノ一瓣ハ四ツニ淺ク分レ、下一瓣ハ狹シテ分レズ、内ニ五ツノ白蘂及心アリ、蕾ノ時ハ淡紫色、初テ開ク者ハ白色ニシテ微紫ヲ帶ブ、日ヲ經テ白ニ變ジ、淺黃ニ變ジ、深黃ニ變ジテ落ツ、故ニ一枝中黃白相映ズ、故ニ金銀花ト名ク、土州ニテスヒバナト呼ブ、藥用ノ金銀花コレナリ、又一種花開テ紅色ナルモノアリ、共ニ花後兩圓實一蒂ニ生ズ、一ハ大一ハ小、熟シテ色黑シ、一種肥後ノ產ハ葉大ニシテ厚シ、花モ亦大ナリ、一種金銀木、一名ヒヤウタンノ木ト呼モノアリ、木本ニシテ高サ五六尺、葉ハ忍冬葉ニ似テ小ク、花モ黃白雜リテ忍冬ノ如クナレドモ、蔓アリテ別物ナリ、ソノ實忍冬實ヨリ大ニシテ色赤ク、一蒂ニ大小並ビテ細腰壺盧ノ如シ、故ニヒヤウタンノ木ト云フ、即救荒本草ノ吉利子樹ナリ、

〔廣益地錦抄五〕忍冬　俗にすいかづらといふ、花さき出にはしろく、二三日を過て黃色に成、故に金銀花と云、春かづらの出るをつみ切て、ひたし物にして食、葉をほして茶にせんじて用、甚益ありといへり、多葉あり、人手足をいたみしびれ、あるひはくぢきたるに、かづらを湯にせんじ、浴湯にすべし、又馬足いたむにせんじて洗、此草藪に多生ゆへ、おろそかにおもひ、人參は價高直成ゆへ大事にせり、人參にまさりたる功能あるをしらずと、唐人は笑ふといへり、

古事類苑

植物部二十五

草十四

〔新撰字鏡草〕忍冬〈須〇比〇豆〇夏〇〉

〔本草和名草七〕忍冬〈陶景注云、凌冬不凋、故以名之、〉一名耐冬、一名延門、〈已上二名出雜要訣〉一名飲中蔵、〈出範注方〉一名鷺鷥藤、和名須〇比〇加〇都〇良〇

〔倭名類聚抄二十草〕忍冬 陶隱居本草注云、忍冬〈和名須比加豆良〉凌冬不凋、故以名之、

〔和爾雅草七木〕忍冬〈スヒカツラ〉〈金銀藤、鷺鷥草、蜜桶藤、鴛鴦同、花名金銀花、〉

〔宜禁本草乾中草〕忍冬 甘温、十二月採、煮汁以釀酒、補虚療風、陳藏器曰、小寒〈本經曰温非也〉長年益壽甚、常可採服、治癰疽、經効久服、旋見神功、

〔大和本草六蔓草〕忍冬 諸ノカツラ皆右ニマトフ、只忍多ノカツラ左ニマク、故ニ左纏藤ト云、花開ク時白シ、二三日ヲヘテ黄ニ變ズ、故金銀花ト云、四月ニ花ヲトリ陰乾ニス、莖葉ハ時ニ不拘トリテカゲ干ニス、莖葉花性同、一切ノ腫物諸瘡久不愈ニ煎ジ服ス、甚妙ナリ、腫物久シクシテ穴アキ瀰トナリ、常ニ膿汁出、或不出シテ久不愈ニ、酒ニ浸シテ日ニホシ爲末服ス、或剉テ煎服ス、久用ユベシ必効アリ、風癬ナド久ク不愈ニ、日々煎服シテ効アリ、眞ニ妙藥ト云ベシ、屢驗アリ、試用テ得効タル人多シ、其外功能多シ、本草ニミエタリ、至賤藥至貴ノ功アリ、或茶ニカヘテ煎ジ服ス、久シク服スレバ益アリ、花モ茶ニ加ヘテ服ス香ヨシ、又生乾トモニ煮テ豆油〈シヤウユ〉ニ和シ食スベシ、

靑至熟深紅色、每房有子、五七枚、如皂莢子、斑褐色といひしは、これと同名異物也、

〔山槐記〕治承二年六月廿八日辛卯、中宮〈德子○高倉后〉中略、御懷姙當五ケ月、仍有御著帶事、初度也、○中略御著帶之後、典藥頭和氣定成朝臣、〈衣冠、男主殿頭定長相具參入〉持參仙沼子、〈○○二七粒、其數隨御懷姙之月數也、納瑠璃壺、入白瑠璃高杯、〉自臺盤所方獻之、中將局取之、緘付御帶左方、

○按ズルニ、仙沼子ヲ著帶ノ時ニ用キル事ハ、禮式部誕生祝儀著帶條ニ載ス、

〔多識編〕二草、木鼈子、古可米久左、異名木蟹、

〔重修本草綱目啓蒙〕十四蔓草木鼈子　一名木腎子〈遵生八牋〉　土木鼈　土鼈〈共木經逢原、外科正宗ニ土鼈ト云者是也、又鼈虱ヲ亦土鼈ト名ク、同名ナリ、〉　正木鼈〈本草原始〉

和產ナシ、舶來ノ者ハ核ノ形鱗𥮳枝核ニ似テ大也、長サ八分許、濶サ六分許、厚サ一二分、肌粗ク灰白色、中ニ仁アリ、コレヲ滅バ䑛アリ、仁ヲトリ藥ニ入ル、又生食スベシ、次條ノ番木鼈ニ對シテ土木鼈ト云、土ハ本土ノ義、廣山ニ產スル故ナリ、

〔古今要覽稿草木〕したつきすゝめうり　仙沼子　合草

したつきは、一名すゞめうり、一名すゞめのうり、一名ひめうり、一名よめのごき、一名よめがさら、一名ごきづる、一名からすのごき、一名ひなのかうし、一名かはほうづき、一名からすのごきづる、一名よめのわん、一名きんぶんしきといひ、漢名を仙沼子、一名合子草、一名盍合子、一名聖知子、一名聖先子、一名預知子、一名致疾子、一名神變子、一名總持子、一名獄毒仙、一名詔子といふ、此草はいづれの國にても、池沼及び溝渠のかたはらに多し、春苗を生じ蔓をなし、葉は一種の馬瓝兒葉に似て長く、又頗る旋華葉に似て三尖あり、葉ごとに細鬚ありて、物をまとふ事、又馬瓝兒の如し、夏に至れば、その葉の間に白花を開き後實を結ぶ、大さ棗の如し、其中に二子ありて、形龜子に似て至て小にして、又頗る縮砂の仁のごとし、その子嫩なる時は、外皮白くして中に粘汁あり、老る時はその汁凝りて仁となり、外皮黑色に變じ、曝乾すれば、又灰色或は淡褐色に變ず、その味少しく苦し、此子をとりて延喜の比には、漬物の料と（延喜式）せしを、又旋用多驗と（本草和名）いひ、又治二一切風一補二五勞七傷一、其功不レ可二備述一（日華本草）いふ時は、たゞ食料に供せしのみにはあらず、それより降りて永曆承安の比に至りては、后宮御懷姙の時は、必ず此子二七粒を典藥頭より奉りて、御著帶の中へ入て、專ら催生の料に供せられしなり、（山槐記、玉葉、定長卿記、）それを奉るに和氣氏より奉れるは、皮を除かざれども、丹波氏より奉れるは皮を去ると（醫師長經記）いへり、又その數を二七粒に定められしは、まさに盍合子催生云々、又治二一切病一、每日取二仁二七粒一と（日華本草）みえたるによりてなり、また方言本草に、預知子難產に用ゆ、又產前に三十粒を帶に付るは、（按に、こゝに三十粒を帶に付るといへるは、日華本草に、患者取不レ過二三十粒一、永產といひしによれる也、）まさに產する時に用ゆべき爲也といひ、又萬安方の六物麝香丸の方中に仙沼子あり、小兒大人腹脹氣塊を治すといへり、かく功能多き一奇藥のいと得やすきものを、今にいたりては、絕てこれを用ゆる事をしるものなきは、くち惜き事也、按圖經本草に、預知子蔓生、依二大木一實作レ房、初

聚之變寄生鼠、故以名之、一名總持子此藥辟驗萬不失一、故以名之、和名之多都岐、

〔大和本草 蔓草 八〕スヽメウリ　京都ニテヒメウリト云、甜瓜ノ類ノ姫瓜ニハ非ズ、野生ス、蔓葉王瓜括樓ニ似タリ、葉下ニ有鬚テツメリ、括樓ノ如シ、八九月實ヲ結ブ、實ノ大サ如木槵子、小ニシテ丸シ、內ニ子アリ、瓣片多クカサナリミテリ、實ノ半上ノ皮ヲ去レバ下ニ實付テ殘ル、食器ノ蓋ヲ去テ食ヲ盛ルガ如シ、西土ノ鄙俗ロメノゴキト云、氣味瓜ニ似タリ、是王瓜ノ類ナルベシ、根ハ括蔞王瓜ニ似ズ、漢名不詳、

〔重修本草綱目啓蒙 十四 蔓草〕合子草　ゴキブル　ロメガサラ　カハホウ　ブキ 肥前　ヒナノガウシ

武蔵　ロメノゴキ 同上　ロメノワン 勢州　スヽウリ 肥後　カラスノゴキ　カラスノコキ

ヅル 江州　スヾメノウリ 京師　キンブンシキ 勝州

溝瀆ノ傍ニ多シ、蔓長クヒキ葉互生ス、王瓜葉ニ似テ小ニシテ長シ、馬瓟兒葉ヨリ長シテ五尖アリ、深綠色葉ゴトニ鬚アリテモノニ纏フ、夏月葉間ニ花アリ、蕺花ニ似テ白色、大サ四分許、後實ヲ結ブ、形棗ノ如シ、蔕長ク下垂ス、皮ニイボアリ、蘿藦實ノ皮如ク深綠色ナリ、實熟スル時ハ、皮ノ正中ヨリ横ニ離レ自ラ落ツ、人觸ルモ亦然リ、其形椀ノ如シ、中ニ二核ヲ盛ル、形苦瓜子ノ如ニシテ小ク瓜色ナリ、又一核三核ノ者稀ニアリ、皆地ニ落テ春ニ至リ自ラ苗ヲ生ジ、秋後苗カル、

預知子　一名蠱毒仙 綱目 拾遺　聖子 本草 衍義

此集解ニ說クトコロノ者ハ未ダ詳ナラズ、正字通ニテハ、上ノ附錄ノ合子草ノコトニシテ、ゴキヅルナリ、正字通ニ、預知子一名僊沼子、貫事曰生池間、苗似牽牛有逆刺、節有房殼、殼內二子、陰陽和合能除蠱毒、子狀似龜、經霜則黑色如栗子、霜升其間爆鳴似人兩爪相擊聲、鄕所采者分爲二瓣有聲者何在、又分爲二有聲、則記之佩衣襟間、入蠱毒處自鳴爆、三子爲偏氣不足、不必采用、本草謂蔓生依木子似皂莢非、

多く用ひて、いまだ京大坂にても專ら用ふることをきかず、又此瓜を日にほし貯へおき、婦人顏をあらふとき、糠の中にまじへあらへば、きめを細にし、顏にできもの生せずといへり、殊に藥種ともなれば左に功能をあげ、根を掘て粉に製し、粕は荒年の備ともなれることをのぶる也、

根を掘事幷に製法

根を掘旬は、九十月より多一ばい、翌正月までに掘べし、夏なれば粉至て少し、掘には其蔓をたぐり、尖鍬にてそろ〱わきの土をほり、根に疵付ぬやう掘べし、さて掘て家に持かへり、水にてあらひ、平面の廣き石の上にのせ、槌か又は樫の棒もて、貳人向ひあひて打べし、至つて粉の澤山なるものゆゑ、白き汁顏衣類にかゝるものなれば、前に縫切やうのものをあて、叩くべし、能ひしぎて半切桶やうの物に入おき、夫より四斗樽やうの桶の口に簁をのせ、其中にひしぎたる根を入、壹人は檜杓をもて、水をかけ、壹人は兩手にてもむべし、さすれば粉は水にて下へもり、粕の筋は簁にのこる也、よくしぼり取又入て、右のごとくしぼり終りて、又別桶に木綿の袋をすけ、其中に右の水をくみ込み、袋をふれば、袋の中に細なる粕たまる也、悉く右のごとく仕終らば、右水は其まゝに置、日にほし貯ふべし、荒年の時は、是を細にきざみ、碓にてつき粉となし、麥きびの粉など合して、だんごとし食してよし、扨右こしたる水は上の方すみて、粉は底にをりたまる也、そのとき上水は桶をかたむけすたみすて、又水を入、竹の棒をもてまぜて、又一日も置て、元のごとく上水の澄たるをすたみて、又水を入かきまずること四五度すべし、さすれば溜りたる粉ますます白く、おしろいのごとくなるなり、終りには猶よく上水をすたみ桶底なる粉を庖丁をもて起しとり、糀ぶたやうのものに入、日に乾べし、則王瓜の粉にして、江戸にて菊童といへる家にて鬻ぐ、おしろいしたと名付るものの是なり、

仙沼子

〔本草和名二十本草外藥〕仙沼子、生二仙人沼邊一、故以名レ之、一名救疾子、常於二身上一治レ病、故以名レ之、一名預知子、常入二蠱毒家一藥自鳴、故以名レ之、神發子、

花紋アリ、冬月〈夏ハ根少シ〉葛粉ヲ製スル如ク、水飛シ粉ヲ採ルヲ天花粉ト云フ、〇中略

王瓜。〈カラスウリ　タマブサ　キツネノマクラ丹波　ゴウリ筑後　タマブサゴウリ筑前　ムスピゼウ阿州　ダドウジ土州　ギヤウチゴフ讃州〇中略〉路旁林側籬邊ニ甚多シ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、蔓長シテ縱稜アリ、葉互生ス、其ニ深緑色ニシテ黑色ヲ帶ブ、葉ノ形圓ニシテ尖リアリ、或ハ三尖或ハ五尖齊シカラズ、皆鋸齒アリ、體厚ク毛刺アリ、一葉ゴトニ鬚アリテ瓜ノ鬚ノ如シ、五月葉間ニ白花ヲ開ク、形栝樓花ニ異ナラズ、其瓜大サ倭鷄卵ノ如シ、栝樓ヨリ小ニシテ長ク、秋冬熟シテ朱紅色ナリ、瓜蔞實ノ形大ニシテ、熟シテ黃色ナルニ異ナリ、

〔藥經太素〕栝樓根　寒味苦　無毒　天瓜粉トモ云　土氣ヲ能洗ク、白水ニ付テ、臼ニ入テ擣碎ク、水ニスリ立テコシテイサセテ用、除熱生津幷治乳癰疽痔瘻、補勞損、勝實尤良、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊勢國五十種〈〇中略〉栝樓十九斤

〔廣益國產考四〕王瓜〈ひさごうり、たまづさ、〇中略〉關東などにて、此實をとり、つきつぶして土鍋に入、酒を加へ煮て貯へおき、婦人などの胼にぬれば忽ち治し、痛を忘るゝといふ、又此根より取たる粉に、龍腦を少し加へ匂ひをつけ、菊靈と名づけ鬻ぐ家あり、夏は婦人もとめて白粉の代りに用ふるに、面皰(にきび)そばかすを治し、その外顏のできものを治するといへり、もつとも若き婦人は白粉下にぬりて、其上におしろいをぬるに、きめをこまかにし艶を出すといへり、又老婦は此粉ばかりをぬりてふきとれば、顏のきめこまかになり、白粉を付たるやうにして、おしろいのごとく白き粉うくことなしとて專ら用ふ、是は江戸に

之名、齊人謂之天瓜、象形也、雷斅炮炙論、以圓者爲栝、長者爲樓、亦出牽强、但分雌雄、可也、其根作粉、潔白如雪、故謂之天花粉、

〔東雅十四果蓏〕栝樓カラスウリ　倭名鈔に彙名苑註を引て、栝樓一名瓠㼒、カラスウリといふと註せり、毛詩爾雅本草等の註に依るに、栝樓は天瓜也、瓠㼒は爾雅の瓝姑、一名王瓜也、卽是二物也、彙名苑註、栝樓一名瓠㼒と云ひしは、二物をもて一物とするに似たり、瓠㼒を呼びて、カラスウリとするは、此物一名老鴉瓜といふに因れるなり、天瓜王瓜同じく是れ蔓生にして、其葉も又相似たれば、我國の俗共に呼でカラスウリと云ひしと見えたり、此物もと果蓏の類にあらざれども、名づけてウリといひぬれば、こゝに准す、老鴉瓜の名、始て本草圖經に見えて、李東璧が本草には、王瓜熟しぬれば色赤て、鴉喜食之、故に此名ありと見えたり、

〔物類稱呼三生植〕栝蔞からす瓜　伊勢及紀伊熊野邊にてうりねと云、越前にてくそうりといふ、土佐にてぐどうじと云、其根を周國にてこびと云、肥前にてごうりといふ、和産二三種有、其核玉づさの如くなるものは王瓜なり、

〔重修本草綱目啓蒙二十四蔓草〕栝樓。　キカラスウリ王瓜ニ混ズル故ニ、黄ノ字ヲ冠ス、　クリウリ越前　ミヅカラスウリ同上　カルリ伯州　ゴウリ筑前、肥前、　ゴリ雲州　ウシゴウリ筑後　カラスコンピ勝州　ウシコベ豐後　ヤマウリカブラ泉州　ニガウリ城州貴船　ムベウリ同上　コビノコ土州根名　烏塊　和方書實名○中略

春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、蔓甚長ク葉互生ス、形チ圓ニシテ五七尖アリ、胡瓜葉ニ似テ毛茸ナク光リアリ、王瓜葉ノ厚クシテ毛刺アルニ異ナリ、一葉ゴトニ鬚アリテ物ニ纒フ、五月葉間ニ白花ヲ開ク、本ハ筒子、末ハ圓ニ濶ク五出ニシテ、洛陽花(サツマナデシコ)ノ如シ、瓣末細ク分レテ亂絲ノ如シ、花後瓜ヲ結ブ、王瓜ヨリ大ニシテ微短、生ハ青ク熟スレバ黄色、王瓜ノ形小ニシテ、熟シテ赤色ナルニ異ナリ、瓜ヲ用テ醤藏鹽藏シ食フベシ、瓜中ニ黄肉アリ、味甘シ、肉中ニ子アリ、卽栝樓子ナリ、○中略　栝樓ノ根ハ、土中ニ長ク蔓延シ、葛根ノ如シ、或ハ連珠シテ瓜ノ如ク白色ナリ、採乾シテ用ユ、切レバ内ニ

心なくむさきへちまを出す哉たん袋井の宿のおかかは、と見ゆ、當時湯殿にて絲瓜を以て垢すりしと知る、農業全書に、其上皮をさり、其筋あらき布の如きをもみ洗ひ乾かし、是にて器物をあらへば、たとひ塗たるものにても引めも付ず物の垢をよくとり、又湯手に用て甚よしと云と、合考ふべし、南宋の僧斷崖の詩に、不成蔬菜不成瓜、沿墻傍壁也開花、只與諸人除垢穢、不知自己一團沖、とあるにて、西土にも垢除に用ふることとしるべし、又本草にも釜器を滌べし、故に村人洗鍋羅瓜と云とあり、

〔物類稱呼生植三〕絲瓜〇中略　試にへちまのかはのだんぶくろといふ事有、是は此へちまにはあらず、へちくわんが馬の革一嚢袋といふ事也、へちくはんは茶人にて、茶器を革袋に入、馬につけて遊行せしとなり、侍の隱遁したるにて、粟田口に住めり、

〔毛吹草三〕山城　深草絲瓜

〔日次紀事十月〕深草民家賣絲瓜

〔本草和名草八〕栝樓、一名地樓、一名果贏、(楊玄操音倫果反)一名天苽、一名澤姑、實名黄苽、(已上本條)一名澤巨、一名苦蔞、一名烏鬫、一名椊朴、(已上四名出釋藥性)一名瓞瓝、一名瓝瓟、(主姑二音、出兼名苑)一名苦樓、(出雜要訣)和名加良須宇利、

〔倭名類聚抄草木部二十〕栝樓　兼名苑云、栝樓一名瓝瓟、(主姑二音、和名加良須宇里)

〔康賴本草草部中〕栝樓　(味苦寒无毒、和加良須宇里乃根、二月八月採根、曝乾三十日、)

〔伊呂波字類抄加植物附動物具〕瓝瓟カラスウリ　地樓　果贏(楊玄操)　瓞瓝　栝樓　天瓜　澤姑
實名黄瓜　澤巨　椊朴(已上二名、出釋藥性、已上七名見本草也、)カラスウリ

〔本草綱目草部十八上〕栝樓(本經中品)
時珍曰、羸與蓏同、許愼云、木上曰果、地下曰蓏、此物蔓生附木、故得兼名、詩云、果羸之實、亦施于宇、是矣、栝樓卽果羸二字音轉也、亦作𦼮蔞、後人又轉爲瓜蔞、愈轉愈失其眞矣、古者瓜姑同音、故有澤姑

本綱、始自南方來、故名蠻瓜、唐宋以前無聞、今以爲常蔬、○中略

按絲瓜攝州住吉多作之、不爲食品、唯用老瓜皮、爲浴室之垢磨而已、

〔重修本草綱目啓蒙二十一〕絲瓜　ヘチマ　ナガウリ薩州　トウリ信州○中略

瓜小ナル時ハ漬物トナシ食フベシ、成熟スル者ハ、皮肉ノ筋絡堅シテ食フベカラズ、一種ナガヘチマアリ、瓜長サ三尺餘、琉球ニテハ長サ六尺ニ至ル、薩州ニテハ琉球ヘチマト云、未ダ熟セザル者ヲ食用シテ、苦味ナク柔軟ナリ、又生食スベシ、集解ニ苦則三四尺ト云者是ナリ、ヘチマノ水ハ、蔓ノ本地ヨリ一二尺ニ切リ、瓶中ニ插ミ入置バ、多ク水出、甚清白ナリ、俗ニ美人水ト云、附方ニ絲瓜汁ト云、赤水玄珠ニ、西來甘露飲ト云、秘方集驗ニ、痰火取爾三碗、加瓜蔞仁、天花粉、羗活、紅花、薑汁、煉膏服、卽愈ト云、

〔農業全書三菜〕絲瓜

絲瓜わかき時は料理にして食す、同漬物にして極めてよき物なり、老て皮厚く堅くなりたるを干して、其後水に漬置ば、肉くさり上皮のきて、其筋あらき布のごとく成たるをもみ洗ひ乾し置、是にて器物をあらへば、たとひぬりたる物にても引めも付ず、物のあかを能とり、又湯手に用て甚よし、うへ樣絲瓜に同じ、かきには、ゝせ、かややねには、ゝせたるよし、此瓜は痘疹の藥なり、其外にも功多し、

〔雍州府志六土產〕絲瓜　倭俗所謂倍知麻是也、去肉并皮、陰乾則其形狀如紗巾、如羅綱、故有絲瓜之名、剃髮時以是浸湯、洗頭髮則柔軟而易剃、或亦洗鍋釜底亦可也、故中華村人、呼爲洗鍋羅瓜、或稱布襆履、所々有之、然稻荷社前町所有爲佳、

〔柳亭雜筆二〕寬文五年作者不知東海道路の記に、袋井に泊り、行水し侍るに、むさきへちまを出しけれぱ、

子、瓤味甘可食、其子形扁如瓜子、亦有鋒稜、南人以青皮煮肉及鹽醬充蔬、苦澀有青氣、

〔重修本草綱目啓蒙二十 蔬菜〕苦瓜　ツルレイシ　レイシ　ニガウリ勢州　ゴウリカブラ長崎　ニガゴウリ筑後　トウゴウリ島原　中略　○

春種ヲ下ス、藤葉諸瓜ヨリ小ナリ、葉大サ三寸許、五七岐ニシテ鋸齒アリ、淺綠色、毎葉一鬚、葉間ニ花ヲ生ズ、大サ六七分、五瓣ニシテ黃色、蕊ハ細シテ綠ノ如シ、雄花(アダバナ)多シ、蔕下ニ小塊アル者ハ、花謝シテ瓜ヲ結ビ下垂ス、皮ニ疙瘩多シ、長サ三寸、徑リ二寸許、初ハ綠色、瓜ノ末ヨリ漸ク黃色ニ變ジ、自ラ裂テ紅肉ヲ見ス、是其熟スルナリ、其肉ハ六七分許ノ大ニシテ多ク重ル、味甚ダ甜シ、內ニ皆一核アリ、形木鼈子ニ似テ小ナリ、霜後苗根共ニ枯ル、一種長レイシハ、長サ一尺五六寸、九州ニ多シ、京圖ニ載ユル者ハ六七寸ニ過ズ、

〔和爾雅七 蔬菜〕絲瓜(ヘチマ)〈布瓜、天羅、蠻瓜、綿瓜、絮瓜、〉

〔書言字考節用集六 生植〕絲瓜(ヘチマ)〈一名魚鰦、文殊僧、長曰二洗鍋羅瓜一、〉　蠻瓜〈同、重出本草〉

〔物類稱呼三 生植〕絲瓜へちま　信濃にてとうりと云、奧州にてながうりと云、とうりは糸瓜(いとうり)の上略なるべし、或人の曰、へちまといふ名は、とうりより出たり、其故はとうりのとの字は、いろはのへの字と、ちの字の間なれば、へちの間といふ意にて、へちまとなづくるとぞ、

〔本朝食鑑三 菜類〕絲瓜〈訓二倍知麻一〉

集解、二月下種生苗引蔓延樹竹或竹棚架、其葉大如蜀葵而多丫尖、有細毛刺、其莖有稜、六七月開黃花、五出、微似胡瓜花、蕊瓣俱黃、其瓜圓六七寸許、長一二尺、甚則三四尺、深綠色有皺點、瓜頭如鼈首、嫩時食之者僅有尤希、老則筋絡纏紐如織成、經霜乃枯、華人造器、本邦惟作垢摩(アカスリ)、浴湯中用之、而摩去肌膚之垢、則塵垢凝脂悉脱焉、

〔和漢三才圖會百 蓏菜〕絲瓜　天絲瓜　天羅蠻瓜　魚鰦布瓜　俗云閉知末

苦瓜

の暑き日にて、供奉の人々これをくるしみ、のどかはきけれど、あたりに結ぶべき清水もなし、此邊のはたは西瓜を一般につくる事なれば、こゝもかしこも累々としてあるをみれど、田圃のものを損ずる事は、常々かたく禁じ玉ふことなれば、指さすものもなかりしに、いづれもの疲たるさまを御覽じ、其地の代官伊奈半左衞門忠達をめされ、何事にやひそかに仰あり、半左衞門心を得しさまなりしが、やがて圃中に入て、なかにも大きなる西瓜一つをとり來り、手にてつきやぶり一口食ひ、あら心よや、これにて咽を潤したりといふに、あたりの人々これをみて、半左衞門代官の身にてさへ、かゝる擧動すれば、我々とても憚るべきにあらずと、いそぎはたの中に分入、思ひ〳〵にとりくひて、いづれも渴を忘れけり、これ田圃のものを、みだりにとるべしとは仰られ難きにより、わざと半左衞門に御心をさとし玉ひ、衆人の渴を救はせ玉ひしなるべし、さて其後西瓜の數をあらためしめて、其價を農民に賜ひしとなり、

〔和爾雅七菜蔬〕苦瓜（錦茘枝同、又云癩葡萄、）

〔書言字考節用集六生植〕錦茘枝

〔物類稱呼三生植〕錦茘枝つるれいし　長崎にてにがごうりといふ、是は苦瓜の轉語なるべし、

〔大和本草七草〕錦茘枝　一名苦瓜ト云、春子ヲマキ、長ジテ籬垣ニ延シム、本草蔬菜部ニノセタリ、本草ニ其實青キ時瓤ヲ去テ青キ皮ヲ煮テ、肉ト豆油ニ入テ煮食スト云、皮ノ味甚苦シ、故苦瓜ト云、其實ノ形茘枝ニ似タリ、熟シテ色黃ナリ、錦色ノ如シ、皮開破ル、其中ノ子紅ニシテ甘シ、小兒好ンデ食フ、本草ニ大如鷄卵ト云、今又一種長八九寸アルモノアリ、

〔和漢三才圖會百蔬菜〕苦瓜　錦茘枝　癩葡萄　爾加古宇里、一云蔓茘枝、
本綱、苦瓜原出南番、今閩廣皆有之、五月下子、生苗引蔓、莖葉卷鬚並如葡萄而小、七八月開小黃花、五瓣如椀形、結瓜長者四五寸、短者二三寸、靑色皮上痱瘟、如癩及茘枝殼狀、熟則黃色自裂、內有紅瓤裹

〔浪花の風〕七夕には西瓜を賞玩す

〔嬉遊笑覽十上飲食〕西瓜を輪ちがひなどに切ることあり、諸艶大鑑嘉祥喰する處に、西瓜を香の圖に切ちらし云々あり、又蕃南瓜を木魚に作ることは、天明ころよりといへり定ならず、西瓜の灯籠、俳諧三疋猿附錄、暮るとも盆の節季は月ありて、西瓜にとぼす燈の行燈、これはたち賣の赤き紙の行燈なるべし、西瓜の肉をほり取て、中に火を點す事は、近きことゝ見ゆ、火光靑くみゆるものなり、廣東新語に似たることあり、廣州時序の條、八月十五日之夕、兒童燃番燈、持柚火、踏歌於道、曰灑樂仔灑樂、兒無咋、蹺塔累碎瓦、爲象花塔者、其塔多、象光塔者其燈少、柚火者以紅柚皮、彫鏤人物、花草中置一琉璃盞、朱光四射與、素馨茉莉燈、交映、蓋素馨茉莉燈、以香勝、紅柚燈以色勝、〇中略類柑子、西瓜は卅年來のはやりものにして、今は和歌所へものしあげらるべかりしを、女房達のきらはせらるゝ方もあるにや、去來抄に、猪の鼻ぐすつかす西瓜かな、卯七正秀云、猪なればこそ鼻はぐすつかしけん、去來云、さすることなし、此頃はいまだ上方に西瓜珍し、正秀も珍しと思より、猪の怪しみたるとは風聞出せり、予は西國生れにて、西瓜も瓜茄子の如し、曾て心ゆかず、總じて人の句を聞に、我知る場しらざる場違ひに有べしと有り、西國より漸々京に上りしなり、娘容儀に、奢り者のことを云て、奥樣の御用とて、西瓜の代三百六十五匁、新小判にて八百屋が請取て云々あり、大に行はれたる也、

〔圖花萬葉記六之三攝津〕諸職人商人買物所付いろは分

す　西瓜　鵜尾新田、同今宮、同天滿、

〔圖花萬葉記七下武藏〕江府名匠諸職商人

西瓜賣　四日市日本橋廣小路　芝新堀端　兩國橋廣小路　中橋廣小路　京橋南がし　四谷鹽町　糀町五丁目、此所毎日市有、

〔有德院殿御實紀附錄十四〕砂村の邊にて、小鷹にて、雲雀をからせたまふ事ありしに、折しも六月

西瓜產地

子植之、藩主ニ獻ゼシヨリ、其名ヲ得タリキ、今ハ近村千塚村羽黒村邊ニテモ多ク植ウ、

〔毛吹草　三〕肥前　水瓜　薩摩　水瓜

〔食物知新　昔〕日域諸國名產

果蓏　大西瓜、肥前　琉球西瓜、薩摩　西瓜、武州、有三黑稜赤核一也、

〔江戸砂子　六〕本所

砂村新田　小名木川の南、此所西瓜の名物也、

〔續江戸砂子　一〕江府名產　并近在近國

山西瓜　世田ケ谷　大丸　北澤　此三ケ所より出ルを西ノ西瓜と云、上品也、

砂村　龜戸　西袋　貫沼　馬加　金町　以上を東と云

大森　羽田　此邊より出るを、南の西瓜といふ也、

山西瓜、又東の內砂村西瓜は上品也、白肉うすく中濃紅ゐ、子黑色、舌あたりあらく、至つて甘美也、これをさつまと云、又子白きあり、甚味ひ劣れり、凡西瓜は、寬永年中に初てわたり、薩摩にうゆる、よつてさつまの種を上品とす、京江戸へ來るは延寶の比也、

〔攝津名所圖會　七武庫郡〕名產鳴尾西瓜、鳴尾村より多く出る、上品とす、

西瓜雜載

つめつてはこゝろのしれぬ西瓜かな　加賀女　珈凉

西瓜くふ跡は安達が原なれや　其角

出女(でをんな)の口紅おしむ西瓜かな　支考

〔昔々物語〕一むかしは西瓜は、歷々其外小身共に喰ふ事なし、道辻番などにて切賣にするを、下々中間杯喰ふ計なり、町にて賣ても喰ふ人なし、女抔は勿論なり、寬文の比より小身調て喰ふ、夫ゟ段々大身小身大名もまいる樣に成、結構なる菓子に成ぬ、西瓜大立身なり、

西瓜栽培

〔南畝莠言下〕香月牛山名啓益著巻懐食鏡西瓜の條に、啓益按、西瓜は寛永年中に、異邦より來れり、然れども義堂和尚の空華集に、和西瓜の詩あり、此時西瓜いまだあるべからず、しらず何物を以てこれを稱するや、或は此物古來ある所にして、其種亡びて近年亦異邦より來れるやといへり、

〔傍廂後篇〕西瓜

西瓜一名寒瓜といふ、西域より出でたる故に、西瓜といひ、冷なる故に、寒瓜といひ、水中に冷し食ふ故に、水瓜といふ、今は西字を水の音によめり、五雜組に、大元世祖皇帝、征西域之後、此種入于中華、代醉四十云、五代史、契丹破回紇、因得西瓜、如中國多瓜、而味甘、丹鉛餘錄に、據此謂西瓜、五代始入中國、故本草不載、水東日記に、西瓜、自大元大祖征西域始得云々と見えたり、

〔農業全書三菜〕西瓜

西瓜、水の多き物なるゆへ水瓜と云にはあらず、是もと西域より出たる物也、故に西瓜の號あり、うゆる法、甘瓜にかはる事なし、種子下す時分も、大かた同じ、少遲も苦しからず、又苗をうへ置て、移しうゆるもよし、畦も區も甘瓜より廣く、こやしもなる程多く用ゆべし、海藻ある所ならば、是を多く入たるがよし、區ごとに立をく數も、畦のひろきせばきにしたがひ、一本者は二本も置べし、多くはをくべからず、又子をば、一本に二つ三つまではをくべし、甚大なるを好まば、一つをきたるにはしかず、わきのつるも花も皆々つみ切べし、是は甘瓜のごとく、先を留る事はなし、無用のつるの出るをきりさるべし、其まゝ置ば瓜ふとからず、甘瓜の終りて後熟し、味よく、暑氣をさまし、酒毒を解し、渇きをやめ、多く食しても人にたゝらず、いさぎよき食物なり、たねに色々ありじやがたらと云、あり、肉赤く味勝れたり、是を專作るべし、海邊ちかき南向の肥たる沙地を好む物にて、山中など取分宜しからず、

〔甲斐國志百二十三産物及製造〕西瓜　本州ハ昔此物ナシ、享保三年、北山筋山宮村市郎右衛門云者、始獲種

西瓜傳來

ノ如シト云、〇中略

增、桃洞遺筆ニ、近年讃州ヨリ一種ノ西瓜ヲ出ス、シロスイクハト云、常ノ西瓜ヨリ皮薄ク白色ニシテ、瓤子共ニ紅色ナリ、味至テ甘味ニシテ、常品ニ勝レリ、コレ群芳譜西瓜ノ附錄ニ、北瓜形如西瓜而小、皮色白甚薄、瓤甚紅、亦如西瓜而微小狹長、味甚甘美、與西瓜同時、想亦西瓜別種也ト云、即是ナリ、所謂月明瓜トハ別ナリト云ヘリ、

〔農業全書三菜〕西瓜

西瓜は昔は日本になし、寛永の末初て其種子來り、其後やうやく諸州にひろまる、

〔和漢三才圖會九十果〕西瓜〇中略

按西瓜慶安中、黃檗隱元入朝時、携西瓜扁豆等之種來、始種於長崎、然亦惡靑臭氣、或瓤汁赤色、以爲似血肉、兒女特不食、今則處處多有之、貴賤老幼皆嗜之、而武陽之產最良、攝州鳴尾亦美、瓤赤黏黑者爲上、其瓤近皮處、白色而味淡、故不堪食、乃連皮藏糟爲香物、或煮食亦佳、凡熟者敲之音和、如中虛、未熟者、香硬如中實也、

〔鹽尻四十五〕西瓜は寛永中に、肥前國に來る、寛文の頃、京田舍に種て人是を食といふ、但し我國僧義堂が空花集第一に和西瓜詩あり、其略、

西瓜今見生東海、剖破含紅玉露濃

此僧は後小松院の御字の人也、然れば當時有て中絕し、近世亦來るにや、凡そ應永末より文明の以後に至り、我國未曾有の大亂ゆゑ、稻麥粟粱の外、かゝる瓜の類も種る所なかりし故、絕て世に知らざりしが、今四海しづけく、唐土人の船も年々我に通商して、萬新なる物を見侍る、

〔鹽尻七十一〕西瓜は東垣、蘊の削瓜の文によりて、古より中國に有とす、然れども中世契丹より傳えしといふもの、實を得たる歟、

濃陰貴人夢食煖做瓜、甚美、敢煖西北地也、豈此時西瓜已有傳入中國者、但不得其種耶、今時諸瓜、
其色澤香味、豈復有出西瓜之上者、始信鄱平五色浪得名耳、

〔物類稱呼三生植〕西瓜すいくわ　大阪にてさいうりといふ

〔空華集一〕和西瓜詩

西瓜今見生東海、剖破對含玉露濃、種性不同江北枳、登人恍似麥門冬、

〔和漢三才圖會九十蓏果〕西瓜　寒瓜　俗云須以久波、唐音之訛也、

本綱、五代之先、瓜種已入浙東、但無西瓜之名、五代時胡嶠征回紇、得此種、始入中國、名曰西瓜、北地多有之、今則南北皆有、而南方者味稍不及也、二月下種、以牛糞覆而種之、蔓生花葉皆如甜瓜、七八月實熟、有圍及徑尺者、長至二尺者、其稜或有或無、其色或青或綠、其瓤或白或紅、紅者味尤勝、其子或黄或紅或黑或白、白者味更劣、其味有甘有淡有酸、酸者爲下、以瓜劃破曝日中、少頃食卽冷如水也、得酒氣近糯米卽易爛、猫踏之卽易沙、食西子後食其子、卽不噫瓜氣、〇中略

一種正圓而稍小、瓤正赤味甚甜、其皮白肉薄、近頃出之、俗呼曰韓西瓜、然瓤沙而不如常西瓜之柔潤、

〔重修本草綱目啓蒙二十二蓏果〕西瓜　スイクワ唐音ノ轉ナリ　サイウリ大阪中國〇

數種アリ、皮深綠色ニシテ瓤赤ク子黑キ者ハ、尋常ノ西瓜ナリ、其子未ダ熟セザル時ハ色白シ、熟スル時ハ黑シ、又黑白斑駁ナルアリ、琉璃子ト云、奥州津輕ニハ、皮白ク瓤黄子赤キ者アリ、シロ西瓜ト呼ブ、本草原始ノ月明瓜ナリ、城州木津ニハ、皮黄ニシテ瓤赤キ者アリ、木津西瓜ト呼ブ、勢州ニハ皮瓤共ニ黄色ナルアリ、下品トス、北伊勢赤堀村ノ產ハ、皮瓤黄ニシテ子赤シ、上品トス、赤ボリト名ク、又九州ノ產ハ瓤子共ニ赤シ、又ナガスイクハハ、濶サ五寸許、長サ一尺、皮淺綠色ニシテ越瓜ノ如シ、瓤赤シテ味佳ナリ、京師ノ菜店ニテ南京ト呼ブ、是西江志ノ雪瓜ナリ、時珍ノ說ニモ、長至二三尺ト云リ、雲州筑州ニテ南京ト呼ブ者ハ、尋常ノ形ニシテ、皮薄ク瓤ニ粉アリテ、味沙糖

南瓜栽培

〔農業全書 三菜〕南瓜
南瓜是南方よりたね來る故、かく云なるべし、甘瓜西瓜のごとく、菓子になる物にはあらず、猪肉、鷄鴨のあつ物、其外魚鳥と合せて煮て食し、料理色々あり、唐人甚賞す、西國にては賞翫する物なり、農書に、陰地によしとあれど、日あて能所よし、うへ様西瓜に替事なし、區を廣く深くし、蒔付にも、又苗うへもよし、取分海邊沙風の當る、南向の肥地沙地に宜し、鷄家鴨の糞など多く用ひてなる程肥し、草屋の上には、ゝせ、又高き岸などに引上、或は棚をかき、冬瓜夕がほのごとくするもよし、柴など折しきて、平地には、ゝするもよし、根の廻り五三尺の間、いかにもよく肥して、つるのゆくさき〳〵は、芝原猶よし、土手などある所ならば、是又宜し、或屋敷の肥地に根を種へ、民の屋の上には、ゝせ、又は前に云ごときの空地、屋敷の邊にあらばは、ゝすべし、蔚れてつる長くはふ物なれば、よき畠には作りがたし、但やせ地に糞すくなくては盛長せず、又是もさきを留る事なし、深き肥たる砂地に、糞にあかせて作りたるには、甚ふとき瓜、一本に二三十もなる物なり、いか程もふとく外堅くすね、色あかく成たる時取て、下に竹のす又は蘆す、ゝきなどの簀をしき、日のあたらざるにはの内などにならべ置か、又かづらにて痛まぬやうにからげ、屋の内につり置もよし、

南瓜產地

〔毛吹草 三〕肥前　ポブラ

西瓜名稱

〔和爾雅 六果蓏〕西瓜(スイクハ)　寒瓜同

〔書言字考節用集 六生植〕西瓜(スイクハ)　一名寒瓜、大元皇帝征西域之後、此種入于中華、見五雜組、

〔五雜組 十一物〕古人於瓜極重、大戴禮夏小正、五月乃瓜、八月剝瓜、豳風七月食瓜、小雅中田有廬、疆場有瓜、是剝是菹、獻之皇祖、曾孫壽考、受天之祜、今人賤瓜爲菹、不可以享下賓、而況祭祖考乎、但古人之瓜亦多種類、非今之西瓜也、西瓜自宋洪皓始攜歸中國、自此而外、有木瓜王瓜金瓜甜瓜、廣志所載、又有烏瓜魚瓜密筩瓜等十餘種、不知古人所云食瓜、的是何種、今人西瓜之外、無有薦賓客會食者、

にや、常見なれざる物なれば、毒物ならんかとて、食せざる人もありし、元文の頃より所々にて種へ弘めて、今は市に多く賣り、夏秋の菜物となれり、

〔本朝世事談綺 二 生植〕南瓜

元和年中に渡る、京都には延寳天和の頃より種をうゆる也、又南京南瓜あり、おなじころにわたるか、

〔長崎夜話草 五〕長崎土產物

南瓜　紅毛詞ぼうぶらといふ、此種唐土日本ともに、亞媽港呂宋等の南蠻國より傳へたり、長崎にも天正年中より普ねく農家に造り、唐人紅毛に賣て生計とす、しかれども本草綱目等にも、毒ありて人に益なきよし見へたれば、恐れて世に食する人すくなかりし、近世は諸國に流布して、人每に食すといへ共、其害ある事をしらず、民家常に食して朝夕の助となれり、是を食して害ありしといふを尋るに、みな肉食の祟りにて、南瓜の祟りにはあらず、牛羊豬肉等を加へ煮て、甚だ過食し、又は熱酒を飮るに依て、食滯諸病を生せし時は、偏南瓜の毒なりといひて、肉食酒飮の毒なりし事を察せず、山家の民は、たゞ南瓜一味あるひは麥粉餅を合せ煮て喰ふといへ共、過食のとがめもなく、病氣を生せし事をしらず、本草綱目時代までは、いまだ南瓜の性詳かに知者すくなかりしにや、

〔嬉遊笑覽 十上 飮食〕かぼちやの小なるを唐茄子と名付、はやり出しは明和七八年の頃なり、唐なすさつま芋の類は、初ものとて賞する人もなし、此二種享保のころ迄は江戸にはなきものなり、元文のころより近國にて作り出す、〇中略 江戸名物鑑、唐茄子、初夢や一ふじ二たか十なすび、薩摩芋、後の月みよ七またのくだり芋、これ專行はるゝの始なり、

〔武江年表 六〕明和八年辛卯六月、東埔寨瓜の小きを、唐茄子と號してはやり出す、

南瓜傳來

番椒末醬炙食亦佳、

〔重修本草綱目啓蒙二十八菜〕南瓜　ボウブラ　ボウブナ肥前　ボブラ加州　ナングハ仙臺〇中略

京師ニテハ誤テカボチヤト呼ブ瓜形圓扁ニシテ竪ユヒダアリ、初ハ深緑色、熟スレバ黄赤色、筑紫ニ產スル者ハ、形甚大ニシテ徑リ尺餘ニ至ル、一種形長ククビアリテ、壺ノ形ノ如シテ深綠色、又熟シテ黄色ニナル者アリ、是ヲトウナスビト云、一名カボチヤ、カボチヤボウブラ、ナンキンボウブラ、日向ウリ、豫州是群芳譜ノ番南瓜ナリ、一種細腰、壺盧ノ形ノ如クナルヲ、クヽリボウブラト云、又一種アコダウリハ、紅小ニシテ六寸許、正圓ニシテヒダナク、皮色赤シ、集解ニ、或紅ノ字アレバ、紅南瓜ト名クベシ、汝南圃史ニ、南瓜紅皮如丹楓色ト云ハ、ボウブラナリ、備前ニ金冬瓜ト呼者アリ、形長ク越瓜ノ如ニシテ、皮赤色ナリ、傳言フ、浮腫ヲ治スト、

增、〇中略盛京通志云、南瓜種出南番、故名、其形圓而長、倭瓜類、南瓜深黄色而味較甚、其形扁、本草不分爲二、今因俗呼分之、コノ說ニ據ル時ハ、南瓜ト云モノ、トウナスビニシテ、番南瓜ハボウブラナリ、ソノ倭瓜ハ番南瓜ノ一名ナリ、コレ群芳譜ノ說ニ反ス、

京師ニテカボチヤト呼モノハ、春月種ヲ下シ、甚ダ蔓延ス、葉ノ形蜀葵ノ如ニシテ五尖アリ、處處ニ白斑點アリ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、大サ三寸許、五瓣ニシテ黄色、瓣ニ皺多シ、中ニ淡黄色ノ蘂アリ、甚アダバナ多シ、

〔安齋隨筆前編十五〕南瓜　カボチヤと云、一名ボウフラと云、カボチヤは其出處の地名にてボウフラは其瓜の變名なるべし、運邏と云國の東南に占臘國あり、又眞臘とも書く、一名東埔寨とも云、カンボチヤとよむ、採覽異言に見たり、此カボチヤ瓜、予〇貞丈伊勢が幼少より弱冠のころ、享保年中までは市にて賣らず、無が故也、稀に人の家園に種る者も有し、長崎などより、其種を傳來せし

〔大和本草 八 菜〕アコダ瓜　京都ニ多シ、南瓜ニ似テ小ナリ、味不好、其蔓長ク、其葉蜀葵ニ似テ大ナリ、黃花ヲヒラク、南瓜ヲアコダト訓ズルハ誤レリ、

〔茶道筌蹄 四〕茶入之部　岡蒔茶器

南瓜　山中宗有遺愛の櫻の木を以て、其子宗智天然に茶器の好を賴みしに、如心齋夢中にアコダ瓜の形を得て、此器を好む、細工成就せざる内に天然は卒す、故に天然の書付はなし、身は內黑外溜蓋は木地なり、

〔甲子夜話 六十九〕近村ノ氏神牛御前ノ祭禮ノトキ、市坊ノ戶外ニ掛連ネタル燈籠ニ、種々ノ狂畫奇句ヲ書クコト例歲ナリ、今年出行ノトキ見ルニ、畫ニ一僧(眞言宗ノ衣體ナリ)東埔寨(瓜名)ノ實ノ下ニアルヲ俯シ視ル體ノ上ニ、コノカボチャ黃色ダノウ負ケルダラウ

〔和漢三才圖會 百菜〕南瓜　俗云保宇不良、形色似阿古陀瓜、阿古陀不煮食、蓏果之類也、

本綱、此種出南番、故名南瓜、今處處有之、三月下種、宜沙沃地、四月生苗、引蔓甚繁、一蔓可延十餘丈、節節有根、近地卽著、其莖中空、其葉狀如蜀葵、而大如荷葉、八九月開黃花、如西瓜花、結瓜正圓、大如西瓜、皮上有稜如甜瓜、一本可結數十顆、其色或綠或黃或紅、經霜收置暖處、可留至春、其子如冬瓜子、其肉厚色黃、不可生食、惟去皮穰瀹食、其味如山藥、同猪肉煮食更良、亦可蜜煎、

南瓜甘溫　補中益氣、然多食發脚氣黃疸、

陰瓜　出浙中、宜陰地、種之秋熟、色黃如金、皮膚稍厚、可藏至春、食之如新、疑此卽南瓜、

南京瓜　東埔寨瓜　唐茄子　共俗稱

按南京瓜、本草南瓜下所謂陰瓜是也、乃南瓜之屬、而出於浙江、浙江隣于南京、故自南京得種於長崎、初種之、或名甘埔寨瓜、亦本南蠻之種故耳、其瓜大小似南瓜、而畔筋淺細、形末大本小、似備前瓶之狀、初綠色、熟淡甘帶微赤、似老茄子之形色、故俗又名唐茄子、秋採剝皮煮食、味甚甜、或和鱠、或用

〔空華日工集 一〕貞治五年、七夕、無外大照五六人來遊、勝句、句末、央藤賣瓜聲、乃命侍衣令買之、少頃出謂、瓜太半熟損、不能取之、勿吃、客去、侍衣曰、初取、若以沾具、亦無實可買瓜、是以謂之熟損、余咲曰、眞个薄福住山矣、

〔翰林葫蘆集 一〕聞昔内園春進瓜、華清風雨野人家、温湯一掬山河潰、萬里橋西二月花、　二月進瓜

〔太閤記 十五〕秀吉公異形の御出立にて御遊興之事
文祿三年六月廿八日之事なるに、瓜畑などひろく作りなしたる所において、瓜屋旅籠屋を、いかにも麁相にいとなみ、瓜あき人のまねをなされつゝ、各をも慰め、又御心をも慰み給ひつゝ、長陣の勞を補ひ給ひしなり、御出立は柿帷をめされ、わらのこしみの黒き頭巾、菅笠を御肩に物し、味よしの瓜めされ候へ〱と有しは、勝商人に逢ふ所もなふて、つぎ〱しく有しなり、〇中略
一丹波中納言秀勝は、漬物瓜をになふて、かりもりの瓜、瓜めせ〱とふつゝかに、のゝしり給ひしが、ぶてうほうに有しなり、げにも若きは何事も無功に有よなど思はれて、年はよるべき物なり、いやよるまじき物でも有と云人も多かりしなり、

南瓜名稱

〔和爾雅 七菜蔬〕南瓜ボウブラ

〔鹽尻 七十一〕南瓜は回紇の瓜也、同じ物に亦かぼちやといふあり、

〔物類稱呼 三生植〕南瓜ぼうふら　西國にてぼうふら、備前にてさつまゆふがほ、津國にてなんきん、東上總にてとうぐはん、大坂にてなんきんうり、又ぼうぶら、江戸にて先年はぼうふらといひ、今はかぼちやと云、

〔倭訓栞 後編五加〕かぼちや　柬埔寨と譯す、もと暹羅の内今別國と成とも、南天竺の内也とも、眞臘國也ともいへり、かすたとも云とぞ、慶長の頃より通せしともいへり、瓜の類にいふは、此國より出たる種なるべし、よて群芳譜に蠻南瓜と見えたり、

後ナ其ノ翁ヲ、遂ニ誰人ト不知デ止ニケリトナム語リ傳ヘタルトや。

〔今昔物語二十九〕幼兒盜瓜蒙父不孝語第十一

今昔口ノ口ト云フ者有ケリ、夏比吉キ瓜ヲ得タリケレバ、此レハ難有キ物ナレバ、夕サリ方返來テ、人許ヘ遣ラムト云テ、十菓許ヲ廚子ニ入レテ、納メ置テ出ヅトテ云タ、努々此ノ瓜不可取ズト云置テ出ヌル後ニ、七八歲許ナル男子ノ廚子ヲ開テ、瓜一菓ヲ取テ食テケリ、夕サリ方祖返テ、廚子ヲ開テ瓜ヲ見ルニ、一菓失ニケリ、然レバ又此ノ瓜一菓失ニケリ、此ハ誰ガ取タルゾト云ヘバ、家ノ者共、我モ不取ズ我モ不取ズト諍合タレバ、正シク此レハ此ノ家ノ人ノ爲態也、外ヨリ人來テ可取キニ非ズト云テ、半无タ責問フ時ニ、上ニ仕ヒケル女ノ云タ、壹見候ツレバ、阿字丸コソ御廚子ヲ開テ、瓜一ツヲ取リ出テ食ツレト、祖此レヲ聞テ、此モ彼モ不云テ、其ノ町ニ住ケル長シキ人々ヲ數呼集メケリ、家ノ內ノ上下ノ男女此レヲ見テ、此ハ何ノ故ニ此ハ呼給フニカ有ラムト思ヒ合タル程ニ、鄕ノ人共被呼テ皆來ヌ、其ノ時ニ父、其ノ瓜取タル兒ヲ永タ不孝シテ、此ノ人々ノ判ヲ取ル也ケリ、然レバ判スル人共、此ハ何ナルコトゾト問ヘバ、只然思フ樣ノ侍ル也ト云テ、皆判ヲ取ツ、家ノ內ノ者共ハ此ヲ見テ、此許ノ瓜一菓ニ依テ、子ヲ不孝シ可給キニ非ズ、糸物狂ハシキ事カナト云ヘドモ、外ノ人ハ何カハ可爲キ、侍ハタ可云キニモ非ズ、極タ恨ミ云ケレドモ、父由无キ事ナ不云ソト云テ、耳ニモ不聞入レズシテ止ニケリ、〇下略

〔古今著聞集十八飲食〕あやしげなるけすおとこの、禪林寺僧正に、瓜を四奉りたりければ、

凡夫やつ四菓のうりをぞえさせたりひじりのつらにならんと思ふか

人々あつまりて、瓜をくいける所にて、或人萬法はみな空なりと云法間を出したりけるを聞て、寂蓮法師よみ侍ける、

なにもみなくうになるべき物ならばいざこのうりにかは〇は原脱、今據二一本補、ものこさじ、

ナドシテ、息居テ冷ケル程ニ、私ニ此ノ下衆共ノ具シタリケル瓜共ノ有ケルヲ、少々取出テ切リ食ナドシケルニ、其邊ニ有ケル者ニヤ有ラム、年極ク老タル翁ノ、帷ニ中ヲ結ヒテ、平足駄ヲ履テ、杖ヲ突テ出來テ、此ノ瓜食フ下衆共ノ傍ニ居テ、力弱氣ニ扇打仕ヒテ、此ノ瓜食フヲマモラヒ居タリ、暫許護テ翁ノ云タ、其ノ瓜一ツ我レニ食ハセ給ヒ、喉乾テ術无シト、瓜ノ下衆共ノ云ク、此ノ瓜ハ皆己等ガ私物ニハ非ズ、糸惜サニ一ツヲモ可進ケレドモ、人ノ京ニ遣ス物ナレバ、否不食マジキ也ト、翁ノ云ク、情不座ザリケル主達カナ、年老タル者ヲバ哀レト云フコソ吉キコトナレ、然バレ何ニ得サセ給フ、然ラバ翁瓜ヲ作テ食ハムト云ヘバ、此ノ下衆共戲言ヲ云フナメリト、可咲ト思テ咲ヒ合タルニ、翁傍ニ木ノ端ノ有ルヲ取テ、居タル傍ノ地ヲ堀ツヽ、畠ノ様ニ成シツ、其ノ後ニ此ノ下衆共、何態ヲ此レハ爲ルゾト見レバ、此ノ食ヒ散シタル瓜ノ核共ヲ取リ集メテ、此ノ習シタル地ニ植ツ、其後チ程モ无ク、其ノ種瓜ニテ二葉ニテ生出タリ、此ノ下衆共此レヲ見テ、奇異ト思テ見ル程、其ノ二葉ノ瓜只生ヒニ生テ這絡ヌ、只繁リニ繁テ、花榮テ瓜成ヌ、其ノ瓜只大キニ成テ皆微妙キ瓜ニ熟シヌ、其ノ時ニ此ノ下衆共此レヲ見テ、此ハ神ナドニヤ有ラムト、恐テ思フ程ニ、翁此ノ瓜ヲ取テ食ヒテ、此ノ下衆共ニ云ク、主達ノ不食ザリツル瓜ハ、此ク瓜作リ出シテ食ト云テ、下衆共ニモ皆食ハス、瓜多カリケレバ、道行ク者共ヲモ呼ビツヽ食ハスレバ、喜テ食ヒケリ、食畢ツレバ、翁今ハ罷ナムト云テ立チ去ヌ、行方ヲ不知ラズ、其後下衆共馬ニ瓜ヲ負セテ行カムトテ見ルニ、籠ハ有テ其ノ内ノ瓜一ツモ无シ、其ノ時ニ下衆共手ヲ打テ、奇異ガルコト无限シ、早ウ翁ノ籠ノ瓜ヲ取リ出シケルヲ、我等ガ目ヲ暗マシテ不見セザリケル也ケリト知テ、嫉ガリケレドモ、翁行ケム方ヲ不知ズシテ、更ニ甲斐无クテ、皆大和ニ返テケリ、道行ケル者共此ヲ見テ、且ハ奇ミ且ハ咲ヒケリ、下衆共瓜ヲ不惜ズシテ、二ツ三ツニテモ翁ニ食セタラマシカバ、皆ハ不被取ザラマシ、惜ミケルヲ、翁モ憾テ此モシタルナメリ、亦變化ノ者ナドニテモヤ有ケム、其ノ

賜₂依侍從所₁使〈殿上五位六位高戶者〉

〔續修東大寺正倉院文書二十六〕西市庄解　申₂進上雜物₁事

生瓜參佰陸拾果　直壹佰捌拾文

大七十果別一文　中百五十果一文充₂二果₁、　小百卌果₂一文充₁四果〈○中略〉

右依₂今月十日符₁、買取進上如₂件₁、以解、

天平寶字二年八月十二日　布勢足人

〔日本書紀〈推古〉二十二〕二十五年六月、出雲國言、於₂神戶郡₁有₁瓜、大如₁缶、

〔萬葉集〈五雜歌〉〕思₂子等₁歌一首幷序〈○序略〉

宇利波米婆胡藤母意母保由久利波米婆麻斯提斯農波由〈○下略〉

〔小大君集〕ちいさきうりのきなるを、おなじ色のかみにつゝみて、あさみつの少將のがりやるを、きゝたがへて、よりひらにとらせたれば、

雲のたつうりふの里のをみなべしくちなし色はくひぞわづらふ

こゝろときめきして、いひたりしかひなければ、かへしもせで、とりかへして、はじめの人のがりやるとて、われかとないひそといひければ、

ありどころこまかにいづらしらうりのつらを尋ねて我ならさなん、

左近のきみにとのたまへりしかば、われとしられにけりとねたくて、

うりどころこゝにはあらじ山城のこまかにしらぬ人なたづねそ

〔今昔物語二十八〕以₂外術₁被₂盜食₁瓜語第四十

今昔、七月許ニ、大和ノ國ヨリ多ノ馬共ニ瓜ヲ負セ列テ、下衆共多ク京へ上ケルニ、宇治ノ北ニ不₂成ヌ柿ノ木ト云フ木アリ、其木ノ下ノ木影ニ、此ノ下衆共皆留リ居テ、瓜ノ籠共ヲモ皆馬ヨリ下シ

瓜雜載

む故に、丸づけに替て、白瓜にて雷り干を作るに、柔らかにして至極よろし、

〔續江戸砂子一〕江府名產井近在近國

田畑瓜　越瓜也　田畑村、江府より二里計丑寅にあたる、　大サ尺餘、肉厚く中子すくなし、色靑碧也、漬に藏して上品なり、

〔鹽尻三十七〕或曰、俗禮に瓜を貴人の前にて進むる時、其皮を去て先上のかたを横に薄く輪切にして、是を捨侍るは如何なるゆゑと問へども、さだかならずと、予〇天野信景曰、是禮の玉藻に見えはべる、曰瓜祭上環、食中、棄所操と、註に先神に進めて後食ふ、瓜は昔ことに重んじ侍る故、先一輪を進めて後、君にも奉る古法也、

〔南畝莠言上〕世俗瓜を割に、上の方をきりて先くらふを、鬼をするといへり、禮記玉藻に、瓜祭上環、食中、棄所操とみえたり、鬼神をまつる事なれば、をにのものといひたるなるべし、又天子諸侯大夫庶人の、瓜をさく禮も、曲禮に見え侍る、

〔禮記註疏三十玉藻〕瓜祭上環、食中、棄所操、註、上環頭忖也、

〔貞丈雜記七諸部〕一瓜を參らするに、うりさしをそへて參らすること、條々聞書などに見えたり、うりさしとは、楊枝のごとく成物也、串を五寸二三分に丸くけづり、一方にかど有べし、めんを取るべしと、三議一統にみえたり、瓜はウリと書べし、和名抄ウのかな也、俗にフリと書はあやまり也、

〔公方樣正月御事始之記〕一うりをけづりて、人の給候時、そとたべてそばに置候事、くわんたいなる事にて候、そのうりあしく共、みなくふ事也、

〔延喜式十七內匠〕割瓜刀子廿枚、刃長五寸、每年五月一日、七月一日兩度、盛二楊筥一合一進之、其筥用二年料內一、料、堅鐵大六斤四兩、膠小十二兩、木賊小八兩、伊豫砥二顆、檜小半村、裱料紙十張、敷二刀子一筥料、和炭三斛、單功七十五人、工七十人、夫五人、

〔侍中群要入〕諸使事

還之種耳、在昔三韓朝貢及歸化者、絡繹不絕、是以三韓鄉名傳至于今者頗多、眞瓜密祖(詳于味噌條)之類是也、

〔奧羽觀蹟聞老志 三磐井郡土産〕甜瓜　以名取郡北口村所產爲佳品、有白瓜、謂之梵天、(俗曰幣帛、幣帛謂梵天、取其潔清純白、)(呼瓜相會、)或有青碧而黃筋者、謂之筋好瓜、近年以他邦種植之、往時有名雜屋種、爾後有淺碧瓜、近歲用伊具郡佐倉種、其色青黑而有綠筋細點者、其味有破霜嚼氷之美、曰之鶯都、又有黃色青筋而短小者、謂之狀鍮、尤好瓜也、

〔國花萬葉記 十三出雲〕出雲國中名物出所

瓜(のき村と云所より出る)

〔毛吹草 三〕山城　八條淺瓜　青瓜　狛越瓜

〔雍州府志 六土產〕越瓜　越瓜諸處皆有、特山城狛邊多種之、賣京師、此外茄子角豆生薑等物亦多出自斯所、凡瓜茄子等早熟者、俗謂初物、皆出自斯邊、俗此邊專謂山城、此地向陽、故土地和暖、依之諸物早生早實、然至越瓜、風味不及賀茂河東吉田邊之所種、泉州府志、菁瓜質長而色白、或名白瓜、或稱菜瓜云云、依此則越瓜或稱菁瓜、又稱菁瓜、又一種有菁瓜、其形狀小而味又甘美也、

〔拾遺和歌集 九雜〕三位國章、ちひさき瓜を扇にをきて、藤原かねのりにもたせて、大納言朝光が、兵衞佐に侍りける時、つかはしたりければ、

をとにきくこまのわたりのうりつくりとなりかくなりなる心かな

返し

さだめなくなるなりうりのつら見てもたちやよりこむこまのすきもの

〔浪花の風〕瓜の類、白瓜といふもの大きなるもの多し、冬瓜の如く煮て食ひ、又は漬物とす、丸づけと唱ふるもの絕てなし、夫故雷り干といへるもの拵製することなし、予(久須美祐雋)は香のものを好

鳴子瓜　甜瓜也　柏木村鳴子宿　瓜の名物也　江戸より三里程

府中瓜　同　甲州道高井土の先々　名物　江戸より六里程

鳴子、牟禮、石原、谷保、(ヤホ、俗ニ默トヤ云)國分、水神、府中是等を西山と稱す、此所々江府より西にあたる、山瓜と稱して上品なり、

又豆州香貫(カヌキ)、志下(シヨ)、猪濱、蛇塚、横島、下總の柏井、御門、折立、道邊、中澤等より出るを東と云、西山より稱美うすし、その外目黑、千束、旗ヶ谷、喜多見、金、渡田、綱島、道澤、矢口、鶴見、八幡塚等よりも出る、これらを南といふ也、是も味ひ西山に劣れり、又江府へ一番に出る瓜は、駿州安西、井宮、河原也、

〔圖花萬葉記 美濃十〕美濃國郡名物出所之部

眞桑瓜(書に眞桑瓜と云、本巣郡根本也、)

〔安齋隨筆 後編十五〕眞桑瓜　本名甜瓜、(カンクワ)マクハ瓜は美濃國の地名也、其地の瓜名產也、

〔貞丈雜記 六飲食〕一夏食する瓜は、甜瓜(テンクワ カンクワ)と云物也、黃色にてもえぎ色の細きたて筋あり、古代はほぞちと云し也、今江戸にてまくはうりと云也、美濃の國眞桑と云所より出る瓜名物也、他國他所にて作り出すを、おしなべて眞桑瓜と云は無理なれども、今江戸にてはすべてまくはうりといふ也、

〔玉勝間 八〕眞桑瓜

御湯殿のうへの日記に、天正三年六月廿九日のぶながより、みのゝまくはと申す名所のうりとて、二こしん上とあり、眞桑村は本巣郡也、

〔秇苑日涉 十二〕眞瓜

甜瓜俗謂之眞瓜、(マクワ)朝鮮鄉名也、見村家急救方、美濃有眞瓜村、其地所產、香味異常、開香如有負擔過門者、清異錄曰、瓜最盛者、無踰齊趙、車擔列市、道路濃香、故彼人云、未至舌交、先以鼻選、眞瓜村所產、亦鼻

川甜瓜風味爲勝、又和州南都梵天瓜、泉州界鱸松瓜亦在京師、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、○中略得萬民追從、宅常擅集諸國土產、貯甚豐也、所謂○中略

大和苽、

〔異制庭訓往來〕菓子者可爲荔枝龍眼生栗楾也、夏者唐瓜、大和瓜、白瓜、杏、梅、李、桃、水茄子、芡菱也、

〔國花萬葉記三大和〕大和國中名物之出所

梵天瓜外白色内黃色

〔浪花の風〕眞桑瓜もあれども、大にして銀まくはと呼ぶものにて、味ひよろしからず、江戸の眞桑に類せし黃色なるもの偶には見ることあれども稀なり、鳴子瓜の如きものは、絶てあることなし、

〔張州府志二十四海東郡〕土產　上條瓜　出上條村、至今每年供御、爲尾州名物、里老傳曰、慶長十四年酉夏、東照神祖命令獻之、時寺西藤左衞門爲奉行、其吏竹腰又兵衞、高麗又五郎指揮之、如濃州獻眞桑瓜例、以甜瓜十五顆爲一籠、以四籠爲一擔、凡十擔獻之駿府、其後每年以爲式、賜證文二十通、元和四年午夏、藤田民部爲奉行、其吏州崎十右衞門指揮之、先以甜瓜二擔獻之江戸、六月十五日大雨水沒田圃、瓜悉潰敗、故以證文十八通返上、爾後不賜證文、從瓜有無、驛遞獻之、每獻以瓜十顆充米一升、且復其租、寬永三年子夏、原田右衞門再爲奉行、然以上條村爲剛邑、不敢藉百姓困窮請吏、翌五年原田諭里人云、移租仍舊、以瓜充米、及雇役遞傳一切罷之、里人從之、其后獻瓜之事、或有或無、後年但以瓜進官府、驛遞獻之東都、但賜瓜價、不復租稅、

〔國花萬葉記八駿河〕駿河國中名物出所之部

府中眞瓜

〔續江戸砂子一〕江府名產井近在近國

瓜產地

生物五坏古布、白瓜、黒瓜、白根、蕪、○中略　御湯津ケ様器、和布干蕪、居ニ中盤一、

〔梵舜日記〕慶長二年六月廿一日、淨土寺百姓中へ樽廿五、盃綜廿五、白瓜十遣之、田地水爲禮也、

〔鹿苑日錄〕慶長八年五月十三、自朝晴天、未明ニ赴尊勝院、以心西堂光親、寺志州、同半左衛門尉、玄仍、永旬、藏人、朝之會席、口汁糟糖ニ蔓草、白瓜、煎昆布、○中略　俗客者本膳汁、同白瓜、同煎昆布ノ處ニ、シヲ引二切、二ノ汁ニ笋ニ加鳥、

〔後水尾院當時年中行事上五月〕晦日、○中略　御三間のたれたる簾上げ渡せば、御引直衣めさしまして御座につかしめ給ひぬ、○中略　先御盃、次に初獻、白瓜なすびを供す、御盃參りて女中に通る、次に二獻南瓜を供じて巳後男をめさる、公卿はすのこの疊につく、殿上人は公卿の座の後に候す、次に藏人瓜をもて出す、各一備をたぶ、公卿は座ながら、殿上人は座末にて、一人宛召出してたぶ、

〔毛吹草三〕山城　九條眞桑　鳥羽瓜　大和　梵天瓜　攝津　木津瓜　和泉　紬松瓜

武藏　江戸葵瓜葵ノ御紋有ト云　美濃　眞桑瓜根本ト云

〔食物知新二〕日域諸國名產

果瓜　眞桑瓜濃州　木津瓜攝州　梵天瓜和州　葵瓜武州　鴨子瓜同上　天野瓜越後

〔和漢三才圖會九十果部〕甜瓜

按甜瓜出於濃州眞桑村者良、故總名稱眞桑、武州川越、尾州青蠶、洛之東寺爲上、駿州府中、羽州七浦、攝州氷野、泉州堺紬松皆得名、參州銀甜瓜、白色而有銀筋、加州田中、和州梵田白色也、

〔雍州府志六土產〕甜瓜　倭俗專賞之、所々有之、然東寺邊其味爲勝、世稱東寺眞桑、然其種每年用美濃國眞桑瓜之種核也、故元稱眞桑瓜、至今略瓜字直謂眞桑、上賀茂邊所產、稱賀茂田瓜、其形肥大、然其味劣、凡東寺邊爲腴田、依近京師、不淨之穢水流委溝渔、故乎、所作之瓜、土人自擇其良者、貼黑印於瓜皮面而賣之、是謂判瓜、倭俗印稱印判、其風味不及擇之、倭俗於瓜十箇謂一頭、近世西郊川勝寺村谷

干瓜幷香子梅むぎなど、御所々々より參、月日不定、

十六日

瓜　通照院進上之、月日不定、

五月六月七月中、三籠瓜、次に三籠、次に十籠、次三十籠、次五十籠、次百籠、佐々木六角進上之

六月廿四日

瓜　日吉樹下進上之、日不定、　瓜　水主備前守進上之、日不定、

〔御湯殿の上の日記〕慶長九年六月廿六日、しやうぐん〇德川家康よりうりのひげこ三つ參る、

〔寛政四年武鑑〕尾張大納言宗睦卿〇尾張名古屋　時獻上　六七月內上條瓜

〔官中秘策〕十九年中行事　年中諸大名獻上物之事

六月　暑中之獻上ニ成月ニ入ル

一熟瓜　青山下野守

一熟瓜　暑中　三宅肥後守

一熟瓜　加納遠江守

〔執政所抄〕下七月七日

乞巧奠　供物〇中略　瓜以白瓷鉢、盛之、一種

〔續々東大寺正倉院文書〕四十六秩六〕藍園熟瓜等送進文

菜。苽。壹伯貳拾果

天平勝寶二年七月四日　倉垣三倉

〔類聚雜要抄〕一　宇治平等院御幸御膳〇元永元年九月廿四日、大殿〇藤原忠實〇被下御日記定、

三寸五分様器〇中略

五月五日、山科園進早瓜一捧、若不實者、獻花根、

〔年中行事秘抄五月〕内膳司供早瓜事

差内竪遣常住寺、件早瓜山城國御園所供也、而件御園、桓武天皇所建給也、又常住寺被御願也、仍遣之歟、

〔類聚國史三十三帝王〕延暦十一年十月丁未、停相模國獻橘、伊豫國獻瓜、以路遠也、

〔殿中申次記〕從永正十三丙子、至同十七庚辰歲記錄事、

六月二日

禁裏樣へ參

一初瓜　一籠　佐々木中務少輔入道

此三ヶ所(覆盆子梅漬初瓜)式日不定

十八日

一江瓜　一籠例年進上之　佐々木近江守

一阿古陀　五籠例年進上之　八幡田中

一五色　二籠例年進上之　運照心院

七月朔日

一瓜　十籠　佐々木近江守

九日

一江瓜　百籠　佐々木中務少輔入道〇中略

一江瓜　百籠　佐々木近江守

一瓜　三荷例年進上之　赤松兵部少輔

〔年中恒例記〕五月四日

初瓜進上、右京大夫殿、同右馬頭、伊勢守、日不定、初度は禁裏樣へ參候也、次鹿苑院へ參、

後日(○中略)給王卿饌、如昨、王卿移候南殿、此間撤張筵、近衛次將等以酒熟瓜給王卿、

〔江家次第二十〕新任大臣大饗

七八獻主人勸盃、(○中略)王卿著穩座、(敷當西廊於第三間簀子敷、)差有物、(霜月餌味甘瓜等云云)

〔侍中群要十〕甘瓜氷魚給侍從所使

凡賜甘瓜氷魚侍從所、以侍臣爲大飮者、爲使、近來衰見參、(日貴也)

〔後水尾院當時年中行事七月〕七日、夕方御祝に初獻(そろそろ)御汁を供す、土器に少し御汁をかけられて後、少しづゝ三口めす、(○中略)次に御盃參る、二獻(御まな)三獻(うりから)を供す、女中御前のをしきに、半そろ〳〵なわるゝ、然へい人てたゞ、三獻の唐瓜も御はんに入てもて出て、一錢づゝたぶ、

〔張州府志十九愛知郡〕產物　嫩甜瓜、(出今村、不用熟瓜、採其嫩瓜糟醃、風味殊美也、四方貴物之、)

〔倭訓栞中編四〕かりもり　瓜の末なりをいふ尾張に今もさいへり、(○中略)伊勢にてはかりもぎといへり、

〔延喜式三十七典藥寮〕遣諸蕃使

渤海使十七種(○中略)藥草八十種(○中略)瓜蒂四升、

諸國進年料雜藥

伊豆國十八種(○中略)瓜蒂五兩、相模國卅二種(○中略)瓜蒂二兩、下總國卅六種(○中略)瓜蒂三兩、

〔續江戶砂子一〕江府名產(并近在近國)

暑に傷られて瀉血惡痢を病て痛むに、水を以甜瓜をひたし、數枚食はしめて愈し事、奇效良方に見えたり、

〔延喜式三十九內膳〕供奉雜菜

日別一斗(○中略)生瓜卅顆、(准三升、自五月迄八月所進、)

瓜利用

き引上をくべし、又地には、せたるもよし、是も柴などを立て手をとらすべし、凡黄瓜とかはる事なし、

〔宜禁本草 乾五集〕熟瓜　甘寒、水沈者不可食、雙蒂者殺人、多食下痢、貧者多食、至深秋作痢、爲難治、除瓤食不害人、若覺多即入水漬即消、止渇利尿、通經氣、多食陰下濕痒、生瘡、動宿冷、癥瘕人不可食、

瓜蒂　苦寒有毒、吐痰用之、主面目四肢浮腫、下水殺虫、去鼻中息肉、療黄疸、早青者尤甚、去皮用、春約半寸許暴乾

胡瓜　甘寒有毒、不可多食、動寒熱、多瘧病、發瘡氣虚熱、發百病瘡疥、損陰血脈氣、發脚氣、天行後不可食、小兒切忌、滑中生疳虫、不與醋同食、葉苦平、主小兒閃癖、一歳服一葉、生挼汁服、

越瓜　甘寒、小者可糟藏用、長青白色、不可多食、動氣、令人虚弱、不能行、不益小兒、爲灰傅口吻瘡陰瘡、利腸胃、去煩熱、解酒毒、止渇、遣熱氣、利尿、心鏡云、越瓜鮓久食益腸胃、和飯作鮓並醬得、

〔延喜式 五 齋宮〕七月節 九月亦同

官人已下料、鮭廿隻、熟瓜一百顆、

〔延喜式 三十三 大膳〕正月最勝王經齋會供養料、○中略 僧別日菓菜料、○中略 瓜糟漬瓜茄各一顆、味醬漬糟漬多瓜、各以一顆充三口、

仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、○中略 瓜五顆、醬漬糟漬好物菜生菜等料各一顆、○中略 冬瓜漬菜醬漬糟漬料、各以一顆充十口、顆長二尺、生菜料以一顆充廿口、顆長一尺、

〔延喜式 三十九 内膳〕漬年料雜菜

瓜八石、料鹽四斗八升 糟漬瓜九斗、料鹽一斗九升八合、汁糟一斗九升八合、滓醬二斗七升、醬二斗七升、醬漬瓜九斗、料鹽醬滓醬各一斗九升八合 糟漬冬瓜一石、料鹽二斗二升、汁糟四斗六升、醬漬冬瓜四斗、料鹽八升八合、醬滓醬未醬各一斗六升八合、○中略　右漬秋菜料

〔北山抄 二 年中要抄〕七月

相撲召合事 ○中略

は皆ぬき捨べし、〔右は上方にて上手の作る法也、よのつれの手入にては、一くゐに瓜二三本うゆべし、〕○中略

菜瓜

其作りやう、甘瓜に同じ、

越瓜

越瓜又白瓜とも云、○中略地のこしらへ瓜作り甘瓜に同じ、二月上旬早くうへて、四月取精に漬、其外菜の絶間に出来て、取分賞翫なり、色白きゆへ、是を古来白瓜と云ならはせり、南向の暖かなる所をゑらびて、一しほ早く作るべし、○中略

黄瓜

黄瓜又の名は胡瓜、○中略うへ様大かた菜園の畦りなど、多より地をこしらへをき、種子を下す事、正月晦日、又は二月も三月も晦日にうへて、土を少おほひ、或灰糞をおほひたるは猶よし、但きうりは早きを専にする物なれば、なるほど早くうゆべし、又所によりて多く作る事は、甘瓜のごとく〔きう〕瓜うへにし、こやしをよくすれば、過分になるものなり、さきをとめ手くばり、其外甘瓜にかはる事なし、たねにをく物は中なりよし、本なりは手少なし、うへておほくならず、

冬瓜

冬瓜うゆる法、灰に小便をうちしめし置て、是を泥とかきまぜ、地に厚くしき、はゞ二尺〔ばかりに畦を切、〕間〔四五寸ほどに、〕一粒づゝ蒔、たねの上にも又右の灰ごゑを厚くおほひ、水をそゝぎ置て、其後又水糞をそそぐべし、乾く時は水をそゝぎたるよし、芽立灰をいたゞきて出るを見て、灰をもみくだき、根のわきに覆ふべし、其後も糞水をそゝぎ、三月中旬苗ふとく成て移しうゆべし、うゆる地の事、畦のはゞ五尺ばかりに作り、又其間を四五尺をきて穴を作り、肥土を入置、雨を見て一本づゝ、土をつけて、ほり取てうゆべし、灰糞を多く置、水ごゑは度々そゝぐべし、さてつるながく出るを、棚をか

後行合心得するものなり、急に根の上にかくれば、却て痛みくせ付物なり、さきを留る事は、三葉四葉の時しんをつみさるべし、長くのばすべからず、さて葉の間より出る枝を、四方八方へ手くばりするなり、其蔓又四五葉の付たる時、各さきを摘去るべし、此度出るつるになる瓜よし、もとの一番づるには、よき瓜はならぬ物なり、枝ごとに二つばかり瓜のなり花あるを見て、又さきを留るもよし、とかく初め終り糸のごときつるの出るを見て、其後梢をつみ去べし、凡枝ごとに葉をつくる事、四つ五つには過べからず、若し又なり花もなき細きよはきつる間に出るをば、土ぎはより切て捨べし、此つるにはたとひなり付ても、用に立べからず、其まゝ置ば是に精ぬけて、瘦るつるまで妨る物なり、摠じて瓜は一區に一本づゝ立置くべしといへども、畦の廣さと、間の遠近によりて二本宛、或一まちは一本、一まちには二本をきたるもよし、大かたの畦にては、二本の上は必をくべからず、つるつよくしてうすきが、枝ごとによくなる物なり、じげくもつれあひぬれば、いか程こやし手入をしても、よき瓜ならぬ物なり、其上永雨旱には早く痛む物なれば、つるのしげからずすくやかにて、なり付たるは、瓜のなりよく疵なく、十分熟し落るなり、瓜の多くなる事を好みて、つる數多く生立をきたるは、必うるはしくなりのよき瓜はならぬ物なり時○中　又東寺鳥羽にて瓜を作る法、たねを取をく事右に同じ、うゆる時分の事、二月の中より十日ばかりを定る時とするといへども、其年の寒暖又は霜の考へをして、少のさしひきはあるべし、畦作り、横はゞ一間、溝一尺餘、横一間の内、兩方の端に少よせて、竪筋をかき、麥を蒔置、中のおきだるところを冬より深く打返しさらし、春に成てよくこなし、三尺づゝ間を置て、さし渡し五六寸に小まちを作り、手にて少たゝき付、わきの地よりは少高く成て、水たまりなきほどにして、其小區の中に、たねを十粒ばかりばらりと蒔、其上に片手一盃ほど沙土をおほひ、生そろひて、少づゝ間引、心葉二つ出るまで、段々間引て、心葉ふとく成てより、中にて性の強く大きくなるを一本をきて、殘

畦溝三人、位三百六十歳、贈位一人、下子午人、壺一人、(三歳) 芸三遍、第一遍十人、(三月) 第二遍八人、(四月) 第三遍七人、(五月)

〔農業全書 三〕瓜之類(甜瓜、越瓜、西瓜、南瓜、絲瓜、胡瓜、冬瓜、)

瓜に大小あり、小き物甘く、大きなる物淡し、(うすし)甜瓜甘瓜と云、唐瓜といふ、(略)○(中略)種子を收め置く事は、さかりの熟瓜の味勝れたるを、あとさきを切さり中程の實ばかりを取て、段々灰にまぜ、多くあつめをきて後、ゆかきに入、淸く洗ひ、粘り氣少もなく成たる時、浮きたるをきり、なる程よく干して、布の袋か箱に入おさめ置べし、若其まゝあとさきのたねも共にうゆるか、本なり、又は末なりのたねを用れば、必たねがはりする物なれば、中なりの味よく形よきをもちゆべし、さきの方の子は瓜短し、本の方の子は、口ゆがみ曲りて細し、又種子を收る法、瓜を食して勝れて、甜きをゑらび、すりぬかにまぜて、日に干し晒して、扱てぬかと粃を簸去て、おさめ置もよし、瓜を植る地の事、黑地赤土黃色の、少は沙交りて光色ありて、粘り氣すくなきがよし、さのみ肥たるを好ず、土性よく强く濕氣はなくして、旱に水を引に便りよきをゑらぶべし、土地肥和らかにして、ふくやかなるは、よくさかへふとるといへども、味よからず、瓜を作るべき地は、前年に小豆を作りたるよし、其次は黍跡もよし、多より耕し、雪霜にさらし、幾度もうちこなし置べし、(略)○(中略)さて根のわきをたびたび打こなし、心(しん)葉出る時、四五寸わきに、手のはらほど少しながく穴をなし、但深さ二寸餘り、其中へ濃糞のよく熟したるを、一盃入干付置、其後やがて土をおほひ、又五七日も間を置て、右の所より五六寸も違のけて穴を廣くし、糞を入、土を覆ふこと前のごとくし、又其後も段々かくのごとくすべし、凡かやうに、四方に穴をなし、先四度入るを中分とするなり、又糞は二番までは桶糞を用ひ、其後は廻りを丸くほりまはし、油糟を入べし、かくのごとくする事、二三遍なれば、瓜の味勝れてよき物なり、惣じて糞を入るには、うへ物のわき根のさきと、こゑの氣と五六日も過て

〔當世武野俗談〕冬瓜仁右衞門

本所吉田町に御小性組御番衆象松又四郎と申、御旗本衆の地を借りて、立派に普請をして住居し、大勢家來召仕、子分方多く有て、其土地は云ふに不ㇾ及、吉原境町すべて慰所にて、悉く人に用ひられ、名を得たる所の仁右衞門といふもの有、かれが異名を冬瓜と呼、其根元は、此者本所邊旗本屋敷の中間奉公して居たりしが、癇毒を煩ひ、中年より骨折奉公不ㇾ成して、本所三ッ目通輕き御家人衆の寄合辻番の番人に入けり、此もの辻番ゟ又々出て、少々癇毒本復して商をしけるに、西瓜のたち賣ゟ思ひ付て、冬瓜のたち賣一文づゝ、裏店住居かるき人々の、一朝の汁の實と成程づつ賣ける、此たち賣大にはやり、わづか成事なれども、是に利を得て、少々元手つきけり、茲を以て今とても、冬瓜仁右衞門と呼ばれて、其名高きこと甚し、

〔嬉遊笑覧十上飲食〕卑うして便利なる物は、冬瓜のきり賣なり、武野俗談に、本所三つ目寄合、辻番のものに、仁右衞門といへる者、西瓜の裁賣より思ひ付て、冬瓜をたち賣にして、一錢づゝに裏屋の者に賣たり、大にはやりて冬瓜仁右衞門と異名をとりしとなむ、これ元文寛保ごろの事なり、又或人語りけるは淺草瓦町に大和屋某といふ者、文魚とかいひて、人の知たる放蕩ものあり、その邊に冬瓜のきり賣來りければ、其荷へるを殘らず買ひていひけるやう、此邊にかゝる物もてくるは土地の耻なり、重ねて賣に來ば、其儘にはおかじとて歸したりとか、いと〳〵おこがまし、

〔延喜式三十九内膳〕耕種園圃

營早瓜一段、種子四合五勺、總單功卌六人、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和三人、塌畦溝三人、糞七十五擔、運功十二人半、位三百六十座、踏位一人、下子半人、二月拂虫十二人、壅弁芸三遍、第一遍五人、三月上第二遍四人、三月下第三遍三人、四月

營晩瓜一段、種子四合五勺、總單功卅五人半、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和三人、塌

月開黃花、此亦大於諸瓜、結實大者徑尺餘、長一二尺、嫩時綠色有毛、老則蒼色著粉、霜後尤白、其皮厚硬、其肉肥碧、其瓤白虛如絮、其核亦白、在碧白瓤中而成列、其肉可爲蔬食、近代霜後采之、煮熟而飧、然不爲上饌、民間野人之所用、或有冬瓜者、至明年而肥大也、世俗所謂治久痂、未詳之、

〔和漢三才圖會百中略〕冬瓜　白瓜　水芝　地芝　和名加毛字利、或用字音呼、〇中略按冬瓜處處皆有、攝州西成郡多出之、藏蓄之、以無疵者置棚上及煤行處、至翌夏亦不敗、如有疵者不經旬而腐、

〔重修本草綱目啓蒙二十菜〕冬瓜　カモウリ　トウガン防州　トンガ伊州〇中略

外皮ニ白毛アリ、故ニカモウリト云、カモハ氈ノコトナリト、大和本草ニ云リ、京師ノ產ハ皆形圓ニシテ西瓜ノ如シ、他州ノ者ハ多クハ形長シ、伊州ニハ長サ三尺餘ナルアリ、方言江戶トウガント云、〇中略凡ソ冬瓜ハ遲ク熟シテ霜ヲ經ル者ヲ良トス、故ニ冬瓜ト名ク、然ルニ今ハ早ク種、早ク採ルヲ尙ブ、故ニ六七月ニ多ク出ス、名實ニカナハズ、

增附方ニ、橘氏家藏方ヲ引テ、十種ノ水氣ヲ治スルニ、大冬瓜一枚蓋ヲ切、ヰサナゴヲ去リ、蓋ヲ合シ、ソノ合シタル所ヲ封ジク、ヽリテ、日ニ乾シ、糯糠ニ大蘸ノ內ニテ煨シ、火壺テ後取出シ、焙乾シテ末トシ、梧子ノ大サニ丸シ、每服七十丸、冬瓜子ノ煎汁ニテ日ニ三服ス、此方神効アリ、京師ノ一醫秘方トシテ、專ラ水病ヲ治ス、余〇小野職孝ノ曾テ水腫在蓐トシテ愈ヘズ、巳ニ喘滿氣急スル者ニ、冬瓜一味ヲ黑燒ニシテ服セシム、數十日ヲ經テ全癒ヲ得タリ、

〔長崎聞見錄一〕唐冬瓜

唐種の冬瓜は、唐人館內抔に、唐人自ら作りて食料とするなり、此を見るに到つて長大也、小口切にして差わたし壹尺四五寸ばかり、其長三尺四寸計、日本にて作る冬瓜には、綠色の上白粉あり、彼地の冬瓜は白粉なき也、

冬瓜

〔眞本新撰字鏡瓜十一〕蘋其及反、冬瓜、

〔本草和名十八菜〕白冬瓜、一名冬瓜人、一名地芝、出蘇敬注、一名温食、一名秋泉、一名桂枝、已上三名出雜名苑、和名加。毛。宇。利。、

〔倭名類聚抄十七菜蓏〕冬瓜　神農食經云、冬瓜味甘寒無毒、止渇除熱、和名加毛宇利

〔伊呂波字類抄加植物附植物具〕冬瓜カモウリ　白冬瓜　冬瓜人　地芝出蘇敬注　温食　秋泉　桂枝　已上三名出雜名苑、已上六名カモフリ、見本草、

〔下學集下草木〕鴨瓜カモウリ冬瓜也

〔易林本節用集加草木〕冬瓜カモウリ

〔和爾雅七菜蔬〕冬瓜カモウリトウグハ草白瓜同、又云木芝、地芝、

〔王氏農書二十九穀譜集〕冬瓜以其冬熟也、廣志謂之蔬𧄼、神仙本草曰、一名水芝、一名白瓜、嵩高平澤、今在處園圃皆蒔之、其實生苗蔓下大者如斗而更長、皮厚而有毛、初生正青綠、經霜則白如塗粉、其中肉及子亦白、故謂之白瓜、

〔日本釋名下草〕冬瓜カモウリ　かもハ氈也、順和名にかもと訓ず、毛むしろ也、冬瓜に毛あり、氈のごとし、故に名づく、

〔物類稱呼三生植〕冬瓜かもうり　とうぐは　畿内及中國北陸道、或は上總にてかもうりといふ、東國にてとうぐはといふ、東國にてとうぐはをとうがんとはねてよび、又大こんをば大ことといふこそをかしけれ、

〔本朝食鑑三菜蔬〕冬瓜訓加毛字利、近俗亦同、

集解、冬瓜園圃多種之、正月下種、三月生苗引蔓、葉大圓而有尖、略似諸瓜而大者也、莖葉有刺毛、六七

〔大和本草附録一〕胡瓜　白アリ、黄アリ、白ハ味黄ニマサリ久ニ堪フ、臭アシカラズ、黄ヲ不植シテ白ヲ可栽、

〔本朝食鑑三菜〕胡瓜（和名曾波宇里、俗訓木字里、近代亦同、）集解、正二月下種、三月生苗引蔓、葉如冬瓜亦有毛、四五月開黄花、結瓜、圍二三寸、長者至尺許、青皮上多痱瘰、如疣子、至老則黄赤色、其子與越瓜同、大抵爲蔬不佳、惟醤糟漬藏作香物爲佳、京俗所謂祇園神社氏人、食胡瓜必得祟、此社頭及神輿、自古畫瓜紋故也、凡禁裏及神祇帷幕、畫瓜紋者不少、此胡瓜横截作圖之形也、予（○平野必大）未詳之、

〔和漢三才圖會百菜〕胡瓜　黄瓜（唐音）　和名曾波宇里、俗云黄瓜、本綱、漢張騫使西域得種、故名胡瓜、隋朝避諱、改爲黄瓜、（○中略）一種五月種者、霜時結瓜、白色而短、並生熟可食、兼蔬蓏之用、糟醤不及菜瓜、（○中略）祇園神禁人胡瓜於社地、土生人忌食之、八幡之鳥肉、御靈之鮎、春日之鹿、食則爲被祟、理不可推之類亦不少、蓋祇園社棟神輿以瓜（音輦）之紋爲飾、瓜以爲胡瓜切片形而忌之乎、愚之甚者也、瓜紋乃木瓜（果木之名）之花形、而織田信長公紋文也、信長再興當社、用其紋爲後記耳、

〔重修本草綱目啓蒙二十菜〕胡瓜　ソバウリ（和名抄）　キウリ（同上○中略）瓜ノ最早ク熟スル者ナリ、綠色ニシテ刺アリテ海參ノ肌ノ如シ、熟シテ黄色ナリ、故ニキウリト呼ブ、生食シ、或ハ鹽藏ス、和州ニハ熟シテ白色ナル者アリ、

〔東大寺要録五〕年中節會支度（寛平年中日記）
一七月用　七日節供（○中略）　黄瓜一果（代五合）

〔桃源遺事下〕一西山公（○徳川光圀）仰られ候は、黄瓜をば一名胡瓜といふ、又癩瓜といふ、此瓜甚穢多し、食して佛神へ參詣すべからず、又毒多して能少し、いづれにしても植べからず、不可食との仰也、

胡瓜

子如瓝、正義又云、瓞是瓝之別名、爾雅疏亦云、瓞一名瓝、皆可ㇾ證、釋草瓞瓝以ㇾ瓝釋ㇾ瓞也、源君連ㇾ引瓞瓝二字者誤、說文、瓞㼊也、又云、㼊小瓜也、徐音蒲角切、無ㇾ瓝字、則知瓝俗㼊字、新井氏曰、據詩箋、瓞謂ㇾ瓜之近ㇾ本而小者、非ㇾ一種小瓜之名、源君引爲ㇾ瓜名、非ㇾ是、

〔小大君集〕おなじ人、平兼盛○大監物なりし時、ないし所にみかきまうしに、おほどねりのひきいでにきたりて、ある人内侍のすけのしるやうありて、そこに有けるおりなりければ、まへにありけるたち。ふ。と。い。ふ。う。り。を、きなるしきしにつゝみて、おほどねりなりけるおきなにとらせたりければ、くらづかさにつきて、そこよりいふ、

山しろのとはにかよひてみてしがなうりつくりける人のかきねを

かへし

とことはにゆけばなりけりうりつくりそのことなきにたてりしや君

〔眞本新撰字鏡十一瓜〕瓣。甫田反、平、黃。瓜。也、

〔本草和名十八菜〕胡瓜、胡地多之、故以名之、出孟詵食經、一名再熟瓜、出崔禹、一名勒瓜、小而多汁、一名青瓜、已上二名出兼名苑、和名加。良。宇。利。、

〔倭名類聚抄十七菓蓏〕黃瓣　陸機瓜賦云、黃瓣白䲹、黃音博、瓣音蒲田反、和名木宇利、陸詞切韻云、瓣黃瓜也、

胡瓜　孟詵食經云、胡瓜寒不ㇾ可ㇾ多食、動寒熱、發ㇾ瘧病、和名曾。波。宇。里。、俗云木。宇。利。、

〔伊呂波字類抄加植物附植物具〕胡瓜胡地多之、故以名之、出孟詵食經、　再熟瓜出崔禹、　勒瓜小而多汁、　早青瓜已上二名出兼名苑、已上四名カラウリ、見本草、

〔同機植物附植物具〕黃瓜キウリ　黃瓣蒲田反、黃瓜名也、　白䲹　胡瓜已上同、キウリ、

〔新猿樂記〕七御許者、食飲愛酒女也、所ㇾ好何物、中略○菓物者、無核温餅、勝粉團子、熟梅和、胡瓜キウリ黃、

〔易林本節用集木草〕胡瓜キフリ

〔和爾雅七蓏菜〕胡瓜キウリ、ソバウリ　黃瓜同

青瓜　斑瓜　寒瓜　瓞

トモ云、是田舍瓜ナリ、本經逢原ニ、有青白二色、青者尤勝ト云、〇中略
釋名、菜瓜同名アリ、一種ノ菜瓜ハ、カタウリ若州、加州、ナリ、一名カキウリ、豫州松山、筑前、同名アリ、ナウリ、和州、讚州、ハナ
ボ、和州ハナンボ、ナウリ、ソ、共同上ヤサイウリ、若州、加州、アヲサギ、伊州、勢州、マルヅクウリ、同上マルヅケ、江戸
センシカ、備前センシタハ、同上ツケウリ、同州ツケモノウリ、防州形狀甜瓜ト同シテ大ナリ、用テ
漬物トス、初ハ綠色、熟シテ黄色トナル、

〔德川禁令考四十九魚鳥野菜諸食物〕貞享三寅年五月
　野菜もの之儀節に入候日より賣出之事
　　覺〇中略
一白瓜。　　五月節ゟ

〔倭名類聚抄十七菓蓏〕青瓜　兼名苑云、龍蹄一名青登、和名阿乎宇利〇青瓞瓜也、唐韻云、瓞、豆韻反、與𤬪同、青皮瓜名也、
〔伊呂波字類抄安植物附植物具〕青瓜アヲウリ　龍蹄　青登　瓞已上同
〔東大寺要錄五〕年中節會支度寬平年中日記
一七月用　七日節供〇中略　青瓜二菓代五合
〔倭名類聚抄十七菓蓏〕斑瓜　兼名苑云、虎蹯一名貍首、和名末太良宇利〇黄斑文瓜也、
〔倭名類聚抄十七菓蓏〕寒瓜　兼名苑注云、寒瓜和名加毛宇利〇至冬熟也、
〔新撰字鏡十一瓜部〕瓞徒結反、瓞小瓜也、　瓞浦宰反、小瓜也、瓞
〔倭名類聚抄十七菓蓏〕瓞瓜　爾雅集注曰、瓞瓞瓞音二音、和名保曾知、小瓜名也、
〔箋注倭名類聚抄九菓蓏〕釋草、瓞瓞、郭注、俗呼瓞瓜爲瓞、與此異、毛詩正義引舍人曰、瓞名瓞、小瓜也、此
所引蓋是、則名字當在瓞字上、然標目題瓞瓞二字、則源君所見本錯亂、遂連讀瓞瓞二字、爲小瓜名
也、按毛詩傳云、瓞瓞也、鄭箋云、瓜之本實、繼先歲之瓜必小、狀似瓞、故謂之瓞、正義引孫炎曰、瓞小瓜、

集解、白瓜處處多有、二三月下種生苗、就地引蔓、青葉黃花、如甜瓜花葉、夏秋結瓜、有青白二色、一種長者至二尺許、則羊角也、其子狀如麥粒、其瓜肉淡而微甘、瓤苦、去瓤而生食、或鹽漬晒乾可充果蔬、味醬糟鹽漬而藏、皆宜、此則香物也、一種皮色深青、如青甜瓜、有縱文、不光滑、其肉如越瓜、俗呼稱漬瓜、此即醬瓜乎、又有似漬瓜而甚少如桃李、俗呼稱小瓜、此二瓜最宜香物也、近時以醃藏越年、瓜色不變、如生時者、其法、豆腐滓一升、白鹽三合、採合數次令鹽滓相交不滑、陰晒一日、用白瓜劈作二片、以蛤殼去瓤令淨、如舟形、用紙拭去水濕、縱入鹽滓中、要使瓜不相揹、若橫入相揹、則腐熟不久、如此法、則至明年、瓜色不變、而如生也、乾瓜法、用生瓜細切作片入盤、抹鹽拌勻、待晴日炎盛時、晒乾一日、自辰至申、取收入壷甕而貯之、則香味脆美、久而不變、又法用生瓜二劈去瓤如舟、舟中盛鹽、放屋上而暴日、經數日待白乾而收藏、則經兩年、用時、洗淨細切、浸水去鹹、和好酒而食、或漬味醬而食、亦佳矣、

〔和漢三才圖會百蓏菜〕越瓜　菜瓜　稍瓜　羊角瓜　青瓜　和名阿乎宇利　白瓜　和名之呂宇利○中略

按青瓜一名龍蹄、又名青登、白瓜一名女青、又名羊角、二種一物也、通名淺瓜、田舍呼曰白瓜、凡每枝結二瓜、但有早晚二種、早者俗云伊瓦利　結瓜多而白色、肉薄瓤多、味不美、晚者結瓜少而青色、肉厚瓤少、味亦美、

菜瓜　俗云奈宇利　本草曰、菜瓜者越瓜也

按菜瓜葉似越瓜而小、背有微毛、六七月結瓜、似甜瓜、皮厚深青色、有縱白紋、肉似越瓜而不宜煮食、藏糟及醬俗名香之物、硬脆美、然不上品、

一種有似菜瓜而小如鵝卵者、名小瓜、漬糟食、

〔重修本草綱目啓蒙二十蓏菜〕越瓜　アサウリ　一名生瓜本經逢原

胡瓜ニ次テ出、形胡瓜ヨリ長大ニシテ刺ナシ、青白色、糟ニ藏シテ食用トス、又生食熟食亦可ナリ、和州ニハシロウリ、アサウリ二品アリ、竪ニ筋アルヲアサウリト云フ、豫州ニテハ通ジテシロウリト呼ブ、讃州ニハタロウリト呼ブアリ、皮色深ク肉ハ白シ、ナマスニ上品トス、故ニ又モミウリ

瓜の類也、雀瓜といふ、西國によめのごき、安房にきんぷんしきといふ、合子草なり、

〔續山の井夏上〕姫瓜

姫瓜のまがきや深きまどのうち　すて

はそおちは轉ころびか小姫瓜　出羽山形 末覺

〔本草和名十八菜〕越瓜陶景注曰、作菹食之、出孟詵食經、一名春白、一名女臂、一名羊角、一名羊髓、已上四名出兼名苑、女臂瓜、一名玉臂、出七卷食經、和名都乃宇利、

〔本草和名十八菜〕白瓜子蘇敬注曰、白字誤、當作甘、一名水芝、一名瓜子、一名水芝瓜、出蘇敬注、一名甘瓜子、出崔禹、一名兎延、白瓜釋也、出神仙服餌方、和名宇利乃佐禰、

瓜蔕陶景注曰、用早青蔕也、和名阿加宇利乃保曾、

〔倭名類聚抄十七菜〕白瓜　兼名苑云、女臂一名羊角、和名之路宇利、白瓜名也、

〔伊呂波字類抄志植物附殖物具〕白瓜シロウリ　女臂　羊角同已上

〔易林本節用集志草木〕越瓜シロウリ

〔和爾雅七菜蔬〕越瓜シロウリ、梢瓜、菜瓜並同、長者名羊角瓜、　蕃瓜アヲウリ 或云俗頭花

〔物類稱呼三生植〕越瓜しろうり　京にてあさうりといふ、一種筑紫にてつけうりといふ有、江戸にてはなまるといふ、

菜瓜なうり　京にてあをうり、大坂にてなうり、大和にてはなんぼ、江戸にて、まるづけ、相模にてかたうりといふ、東國にある瓜と異なる有、別種也、

〔本朝食鑑三菜〕白瓜訓古今切字、京俗謂淺瓜、

釋名、羊角、源順曰、女臂、一名羊角、白瓜名也、必大(平野)按、李時珍曰、長者至二尺許、俗呼羊角瓜、女臂亦同、其長白乎、源順和名曰、兼名苑曰、龍蹄一名青登、青皷瓜也、唐韻曰、皷直漿反、與鴻同、青皮瓜名也、有與白瓜同種者、併爲越瓜、今毎種白瓜、中有青皮者、又別有一種稱皷瓜、者花皷枕頭花也、

姫瓜

瓜

佐保殿卅五駄　宿院卅五駄　平田卅五駄　吉田廿駄

件事六月下旬式日、七月十五日可進上之由、雖下知、寄事於負田牢籠并權門寄人對捍、進三分二之間、依不滿百駄、山所等請取不申行之、因之行事出納、徒於送文數日經廻、叡岳五包濱損不能會用之、僅滿本數、可被糺行事歟、

〔朝野群載七攝籙家〕遣天台瓜送文

關白前太政大臣家政所

奉送瓜百駄事

右天台熟瓜會分、奉送如件、

永久四年七月日　　造東大寺長官兼左中辨藤原朝臣

〔德川禁令考四十九魚鳥野菜諸食物〕貞享三寅年五月

野菜もの之儀節ニ入候日より賣出之事

覺〇中略

一眞桑瓜　　六月節ゟ

〔和漢三才圖會百菜〕姫瓜　俗稱

按姫瓜、葉花小、五六月生瓜、大二寸許、圓而淺青色、味苦不可食、熟則稍黃、雖微甘不堪食、唯小兒取之畫眼鼻口之狀、以爲翫耳、故俗名姫瓜、

〔雍州府志六土產〕姫瓜　出自九條田間、其大如梨、其色至白、故以姫稱之、女兒求斯瓜、少留莖、傅白粉於其面、以墨畫鬢髮眉目口鼻、以水引結其莖、提携爲玩具、

〔倭訓栞中編二十一〕ひめうり　金當府也といへり、稍大なるをかきうりといふ、野生によぶは王

六月日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　散位橘

謹上博士判官殿

〔源平盛衰記　十五〕宇治合戰附頼政最後事

平家ノ方ヨリ懸キ法師ノ振舞哉、サノミ一人ニ多者討レタルコソ安カラヌトテ、シコロヲ傾テ、ナガヘヲ揃出タル兵アリ、明春是ヲ見テ、面白シ、東門五色ノ熟瓜ゾヤトテ、甲ノ鉢ヲ打破テ、喉笛マデ打ナカント打タリケルニ、太刀モコラヘズシテ、目貫穴ノモトヨリ折ニケリ、太刀ハ折タレ共、甲モ頭モ打破レテ、眞逆ニ川中ヘゾ落ニケル、

〔山槐記〕治承四年八月十一日辛卯、巳剋出守部、午剋着西宮、暫休息、未剋出西宮、申終剋着福原宿所、依窮屈今日不參、參告參入之由於頭辨、自大理許被送五色瓜、

〔吾妻鏡　十一〕建久二年八月一日丁丑、今日大庭平太景能、於新造御亭獻酒盃、其儀殊不極美、以五色鱸魚等爲肴物、

〔古今著聞集　十八飮食〕曉行法印人の許へまかりたりけるに、瓜を取出たりけるが、わろく成て水ぐみたりければよめる、

山しろのほぞちと人やおもふらん水くみたるはひさごなりけり

季經卿泰覺法印がもとへ、瓜をつかはして、此瓜くいて、これがかはりには、此般若かきてとて、料紙一兩卷をくりたりける返事に、

なめ見つる五の色のあぢはひもきはだの紙ににがくなりぬる

〔梵舜日記〕慶長二年六月十八日、幽齋女房衆爲見舞、マクハ瓜一籠持參也、

〔執政所抄　下七月〕十六日

天台熟瓜合事

師、天長十年四十にて身つかれ眼くらし、命久しかるまじと思ひ、叡山の北谷に草庵をむすび、三年つとめ行ひて、おわりをまたれければ、ある夜夢に、天人來りたり、これ靈藥なりとてあとふ、其形瓜に似たり、牛片を食す、其味蜜の如し、人ありて告るやうこれ梵天王の妙藥なりと、夢さめて口中餘味あり、しかして後やせたるかたち更にすくやかに、くらきまなじりますます明らかなり、その牛片を土にまきければ、全き瓜の生せしいまの梵天これなり、元亨釋書に見えたり、(これ附會の說なり、釋書には有二一人告曰、是切利天妙藥也云々、瓜形更健、骨肉益明、於レ是以二石蠻草一書二妙法華一云々、この以下彼の牛片の瓜の事なし、そのうへ切利天と梵天とは異なり、ほでん瓜の名によりて、かゝることを云ひそへたるなり、)瓜を六かは牟にむくといふも久き事にや、五元集に、あたまから章魚になりける六皮牟、

〔古事記中景行〕爾其熊曾建白、信然也、於二西方一除二吾二人一、無二建強人一、然於二大倭國一、益二吾二人一而建男者坐祁理、是以吾獻二御名一、自今以後應レ稱二倭建御子一、是事白訖、卽如二熟瓜一振折(○折恐拆誤)而殺、

〔古事記傳二十七〕熟苽ハ本叙知(ホゾチ)と訓、〇註略和名抄に熟瓜、和名保曾知、或說極熟蔕落之義也とあり、(全く熟て、おのづから蔕より絶て落たる由の名なり、(中略)さて熟瓜は、保曾知宇理と云べきを、宇理を省きて云は此例常に多し、)

〔元亨釋書義解二〕釋善珠、姓安都氏、京兆人、或曰、太皇后藤宮子之猶子也、少魯鈍、而以レ此爲レ恥、學二唯識宗一、習二因明論一、昏窒不レ通、勵レ志無レ撓、時寒暑頭腦如二熟瓜一、鬢髮盡落、珠之勤業率類レ之、以レ故博該二三藏一、延曆十六年正月、侍二皇太子病一、事在二資治表一、其年四月化、歲七十五、

〔大槐秘抄〕村上の御日記に、蜜瓜のたねを鴻臚館のあづかりに給ひて、鴻臚にうへさせられたりとこそ候めれ、おほやけはよき瓜うへさせて、きこしめしけるにこそ候めれ、

〔玉造小町子壯衰書〕又集二神嶺之美果一、聚二靈澤之味菜一、東門五色之苽(ウリ)、西窓七斑之茄(ナスビ)、

〔雲州消息下末〕桂邊有二領地一、尋二邵平之跡一、令レ殖二五色之苽一、而隣子村男每レ夜掠レ之、令條所レ指准レ盜論歟、已乖二不レ納レ履之儀一、衆仰二里長一、可レ加二制止一、彼邊散所雜色多以居止、可レ被レ仰二案內一也、謹言、

〔下學集 下草木〕甛瓜(甘瓜名也)眞

〔易林本節用集 加草木〕甛瓜

〔增補下學集 下三草木〕甛瓜

〔物類稱呼 三生植〕甛瓜まくはうり　西國にてあじうり、奥の仙臺にてでうり、佐渡にてちんめうと云、又江戸にて云きんまくはを、備前にてせんしかと云、奥の津輕又松前にてしまうり、南部にてはきんくはと云ふ、眞桑瓜は美濃國眞桑村の產を上品とす、故に名づくとぞ、又越前にてねづみ眞瓜といふ、味ひ甚美なり、吐方に用る所の瓜蒂是なり、其味ひ甚苦し、餘國の產は吐方に用ひて功なし、

〔和漢三才圖會 九十 蓏果〕甛瓜　甘瓜　果瓜　甛(音恬、甘也、)　阿末宇里　熟蔕落者(和名抄)　今云眞桑瓜

本綱、甛瓜味甛于諸瓜、故名、二三月下種延蔓而生、葉大數寸、五六月花開黃色、六七月瓜熟、其類最繁、有團有長、有尖有扁、大或徑尺、小或一捻、其稜或有或無、其色或青或綠、或黃斑、糝斑、或白路、黃路、其瓤或白或紅、其子或黃或赤、或白或黑、凡瓜最畏麝香、觸之卽至一蔕不收、(中略)

按甛瓜(中略)○一種有韓瓜、(似甛瓜而大、皮不滑、味劣、)　一種有阿古陀瓜、(形似南瓜、今人不好、)有瓤味、誤瓜汁著刀劒則忽生鏽、

〔嬉遊笑覽 十上 飮食〕眞桑瓜は、濃州眞桑村の種を京師東寺邊に栽し故、夫を眞桑瓜といひしが、今は一般にしか呼なり、一種皮の白めなるあり、增補江戸鹿子、本所瓜味美ならず、本田瓜といふ、形甚大なり云々いへり、是ほんでん瓜なり、今これを銀まくはといふ、金まくはに對しての名なり、寛永發句帳に、後藤判とあるべき金まくは哉(貞德)懐子集、大和人こんと賣なり白まくは(好方)續山井、類ひなき佳味の梵天の眞瓜かな、(義)今も肉多く肥たるをホテタルと云是なり、おもふに本田瓜は、梵天瓜なるを、本田と書、ほんだと訛れるなり、醒睡笑、和州より出るほでんと云瓜は、延暦寺慈覺大

保曾知、

〔倭名類聚抄 十七菓蓏〕熟瓜　廣雅云、虎掌、羊骹、小青、大斑、和名保曾知、俗用熟瓜二字、或說極熟蒂落之義也、皆熟瓜名也、

〔箋注倭名類聚抄 九菓蓏〕按保曾知、甜瓜之熟者、甜瓜以美濃國眞桑村產爲佳、故今俗呼眞桑瓜、

〔伊呂波字類抄 保植物 附植物具〕熟瓜 ホソチ

〔庭訓往來〕菓子者、柚柑、柑子、橘、熟瓜、澤茄子等、可隨時景物也、

〔倭訓栞 中編保 二十三〕ほぞち　和名抄に熟瓜をよめり、極熟して蒂落るの義也といへり、枕草紙にほうちはうたうまいらせんと見ゆ、うはうの誤字なるべし、

〔安齋隨筆 前編 一〕ホゾチ　清愼公の集に云、女御すの子御簾子みかふしおろしたるまぎれにうせたれば、

ぬす人はほぞちを見ても雨ふればほしうりとてや取かくすらん

和名抄に、熟瓜和名保曾知、俗用熟瓜二字、或說極テ熟蒂落ノ義也とあり、ほぞちはほぞおちの略語にて、うりの至極うみたるは、おのづからほぞはなれ落るゆへほぞちと云也、是今俗にまくわうりといふもの也、まくわうりといふを、甜瓜の本名と心得は誤なり、美濃國本巣の郡眞桑といふ地所より作る甜瓜を、眞桑瓜といふ、味よきゆへ賞する也、他所にて作りたるを眞桑瓜といふは非也、甜瓜と書てカラウリとよむ、唯うりと計も云也、白瓜きうり其外さま〳〵の瓜と名付る物多き中に、唯甜瓜のみをうりといふ事は、花もさま〳〵多き中に、櫻のみ花といふが如し、又かな文字にて瓜を書くには、うりと書ずしてふりと書事、かなづかひの習也といふ說あり、甚あやまり也、ふの字を上に置て、うとよむ古例なし、和名抄に宇利と書れば、うりと書を本とすべし、定家假名遣ひなどゝ云俗書は、日本紀、古事記、萬葉集、其外の古書のかなづかひと相違する事、俗說は取にたらず、

瓜種類

いふにあらず、此等皆甜瓜の類、漢人のいひし果瓜也、又白瓜はシロウリ、冬瓜はカモウリ、胡瓜はソバウリ、俗にキウリといふと註せし、白瓜は、陳藏器がいふ所の越瓜にて、白冬瓜子を白瓜子といふものにはあらず、冬瓜をカモウリといふは、カモとは氈也、皮の上白を生じて氈の如くなるを云ひしなり、胡瓜をソバウリといひしは、其稜あるを云ひて、又キウリとも云ひしは、其老て色黄なるに因れる也、漢にも亦一名を黄瓜とも云ひけり、此等は漢人の云ひし菜瓜也、また兼名苑を引て、寒瓜はカブウリ、至多熟也と註したり、永嘉記の寒瓜、李東壁本草に寒瓜と云ひし物ならむには、これもまた果瓜也、今に於ては我國に是等の種ありとも聞えず、されど永嘉記に據るに、其寒瓜といふも、八月熟すと見えたれば、卽今の晩瓜の如きをや云ひぬらん、亦別に此種もやありつらむ、カクウリといふは名をあはせて不詳、爾雅樊註を引て、瓞瓝はタチフウリ、小瓜名也と註せしは、毛詩疏に據るに、瓜實近本而小なるをいふなりとあり、さらばいづれの瓜にもあれ、其本に近きが小しきなるをば、タチフウリといふべし、別に其種ありとは見えず、タチフといふ義もまた不詳、（胡瓜をキウリといふ、或は其臭あるをいふ歟、[illegible]漢に胡瓜といふが如き、此俗臭をばキといふ、玉字彙を併考ふべし、）

〔倭訓栞前編四宇〕うり　瓜をよめり、口渇をうるほすより名とせる成べし、ふりと書は非なり、其名を専らにする者は甜瓜也、からうりとも、あまうりともいへり、

〔南留別志五〕一瓜をふりとかく事は、壺盧をとり違へたるにや、壺盧の唐音うるなり、うとふとの閒をいふより、ふとかくなるべし、るもりゆといふやうなれば、りといふなるべし、

〔和漢三才圖會九十蓏果〕瓜類不同、其用有二、供果者、甜瓜、西瓜、供菜者、胡瓜、越瓜、凡實在木曰果、在地曰蓏、大曰瓜、小曰瓞、（和名多知布宇里）其子曰瓣、（音辧）其肉曰瓤、（音讓、俗云奈加古）其跗曰環、謂脫花處也、（俗云豆之、人頭之旋毛、）其蔕曰蔕、（一名瓜丁）謂繫蔓處也、

熟瓜

〔本草和名十八菜〕熟瓜、（陶景注曰、熟瓜有數種、去瓤食之、）一名水芝、一名蜜筩、一名摶樸、一名厭須、（熟瓜總名也、已上四名出雜要訣）和名

〔下學集草木下〕瓜（ウリ）或作苽也　青門（セイモン）　東門（トウモン）共瓜異名也、秦東陵侯、種瓜長安城東、瓜有五色、甚美、謂之青門瓜、東門瓜也、

〔新撰類聚往來上〕菓子類、集山海之珍產、度存候、尋出分有之、○中略

瓜○中略　胡白瓜　諸冬瓜　熟唐瓜　細地　梵天　狐　榎子瓜

〔易林本節用集宇草木〕瓜（ウリ）五色青門　瓣（ウリザネ）　〔同古食服〕五色（コシキ）瓜名　〔同世草木〕青門（セイモン）瓜名

〔干祿字書平聲〕苽瓜上俗下正

〔日本靈異記上〕无慈心而馬負重駄以現得惡報緣第廿一

昔河內國有苽販之人、名曰石別也、過馬之力而負重荷、馬不往時、瞋恚捶駈、負荷勞之、兩目出淚、賣苽竟者、卽殺其馬、如是殺之爲多過、

〔日本靈異記考證上〕苽部苽字、苽瓜俗字、見干祿字書、按瓜與爪字體相近易混、故加艸以分之也、說文苽彫苽、非此義、又按本草和名作苽、新撰字鏡作苽、皆筆迹少異耳、醫心方亦作瓜苽、

〔枕草子八〕うつくしきもの

ふりにかきたるちごのかほ

〔枕草子春曙抄八〕ふりにかきたる　姬瓜の事なるべし

〔夫木和歌抄九瓜〕六帖

百敷やくらのつかさのふりうりに我おとらじとつどふうなひこ　衣笠內大臣家良○藤原

〔東雅十四果蓏〕瓜ウリ　義不詳、ウリとは其熟ぬるをいひしに似たり、轉の註を可併考　古事記にも、小碓命筑紫の熊曾が衣をとりて、劒をもて其胸より刺通し、熟瓜の如く振折而殺し給へりといふこと見えたり、或說に、俗に瓜をフリとしるす事よからずといふなり、古語にウといひフといふは、相通じていひけり、されば古事記にもフリサクといふ枕詞に、ウリの如くとはしるしたりけり、熟瓜をば、倭名鈔にはホソヂと云ひて、俗用熟瓜二字、或說に極て熟し蒂落つるの義なりと註し、また青瓜アヲウリ、斑瓜マダラウリ、黃瓤キウリと註せり、其キウリといふものは、胡瓜の事を

瓜名稱

ふほどに、女のかほをうちみて、くちより露ばかりのものをおとしをくやうにして、とびていぬ、女なに丶かあらん、すゞめのおとしていぬる物はとて、よりてみれば、ひさごのたねをたゞひとつおとしてをきたり、もてきたる様こそあらめとて、とりてもちたり、あないみじ、すゞめの物えて實にし給とて、子どもわらへば、さばれ植てみんとて、うへたれは、秋になるまゝに、いみじくおほくおいひろごりて、なべての杓にもにず、大におほく成たり、女悦けうじて、さと隣の人にもくはせ、とれども〳〵つきもせずおほかり、わらひし子孫もこれをあけくれ食てあり、一里くばりなどして、はてにはまことにすぐれて大なる七八は、ひさごにせんと思て、内につりつけておきたり、さて月比へて、いまはよく成ぬらんとて見れば、よくなりにけり、とりおろしてくちあけんとするに、すこしおもし、あやしけれどもきりあけてみれば、物ひとはた入たり、なに丶かあらんとて、うつしてみれば、白米の入たる也、思がけずあさましとおもひて、大なる物にみなをうつしたるに、おなじやうに入てあれば、たゞごとにはあらざりけり、すゞめのしたるにこそと、あさましくうれしければ、物にいれてかくしおきて、のこりの杓どもをみれば、おなじやうに入てあり、これをうつし〳〵つかへば、せんかたなく多かり、さてまことにたのもしき人にぞ成にける、となり里の人も見あざみ、いみじきことにうらやみけり、

〔異本新撰字鏡七草〕苽菰〈二形同、古胡反、彫胡、〉〔同十一瓜〕𤓰瓜〈二形作、古花反、平、蓏菜也、食于菜三百六十一、以瓜爲長也、〉

〔新撰字鏡草〕瓞〈字〇羽〇〉

〔倭名類聚抄十七菓蓏〕瓜〈類附〉　唐韻云、瓜〈音寡、和名宇利乃佐類、〉瓜瓠屬也、

〔伊呂波字類抄宇植物附[illegible]物具〕瓜〈ウリ〉　瓞〈廣雅云、龍蹄、虎掌、羊骹、兎頭、桂髓、密筩、小青、大斑、温瓜名也、〉　苽　瓢　已上　瓤〈ウリノサネ、瓜ノ實也、〉

白瓜子〈ウリノサネ、蘇敬注曰、白字誤、當改爲甘、〉　水芝　苽子　水芝瓜〈出蘇敬注〉　甘瓜子〈出崔禹〉　兎延〈白瓜子也、出神仙服餌方、已上大系ウリノサネ、見本草、〉　瓣〈ウリノサネ〉

皆最勝ノ聖ヲ讃ム、法花ノ聖田ノ狐ヲ見テ、奇異ノ思ヒヲ成シテ、一狐ヲ取テ、破テ其ノ中ヲ見ルニ、精タル米滿テ有リ、粒大ニシテ、白キ事雪ノ如シ、聖人此レヲ見テ希有也ト思テ、斗ヲ以テ此レヲ量ルニ一ノ狐ノ中ニ、五斗ノ白米有リ、亦他ノ狐ヲ破テ見ルニ、毎狐ニ皆如此シ、爰ニ法蓮聖喜ビ悲テ、鄕ノ諸ノ人ニ告テ、此レヲ令見ム、其後先ヅ此ノ白米ヲ佛經ニ供養シ、諸ノ僧ヲ請ジテ令食ム、又一果ノ狐ヲ、光勝聖ノ房ニ送リ遣ル、光勝聖此レヲ見テ、妬ミノ心有ト云ヘドモ、法花ノ威力ヲ見テ悲ミ貴テ、法蓮聖ヲ輕メツル事ヲ悔テ返テ隨ヌ、卽チ行テ禮拜シテ懺悔シケリ、法蓮聖其ノ狐ノ米ヲ以テ、國ノ内ノ道俗男女ニ施シ與フ、人皆心ニ任セテ荷ヒ取ル、然レドモ狐尙十二月ニ至ルマデ更ニ不枯ズシテ、取ルニ隨テ多ク成ニケリ、此レヲ見聞ク人、法花經ノ威力ノ殊勝ナル事ヲ知テ、法蓮聖ヲ歸依シケリトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔宇治拾遺物語三〕今はむかし、春つかた日うらゝかなりけるに、六十計の女のありけるが、虫うちとりてゐたりけるに、庭に雀のしありきけるを、童部石をとりてうちたれば、あたりてこしをうちおられにけり、羽をふためかしてまどふほどに、烏のかけりありきければ、あな心うからす取てんとて、此女いそぎてとりて、いきしかけなどして物くはす、略○中あからさまに物へいくとても、人に此すゞめみよ、物くはせよなどいひをきければ、子まごなど、あはれなんでう雀かはるゝとて、にくみわらへども、さばれいとおしければとて飼ほどに、飛ほどに成にけり、今はよも烏にとられじとて、外にいでゝ、手にすへて、飛やするみんとてさゝげたれば、ふらふらととびていぬ、女おほくの月比日比、くるればおさめ明ればものくはせならひて、あはれや飛ていぬるよ、又來やするとみんなど、つれづれに思ていひければ、人にわらはれけり、さて廿日ばかりありて、此女のゐたるかたに、すゞめのいたくこゑしければ、すゞめこそいたくなくなれ、ありしすゞめのくるにやあらんと思て、いでゝ見れば、此すゞめ也、あはれにわすれずきたるこそあはれなれとい

瓢產地

瓢靈驗

五月　松平加賀守

一瓢。野。干。瓢、鯖脯、

（延喜式二十三民部）交易雜物

遠江國（中略）大瓠廿口○中略　常陸國（中略）大瓠十口○中略　右以正税交易進、其運功食並用正税、

（毛吹草三）攝津　今宮千生瓢簞

（今昔物語十三）陸奥國法花最勝二人持者語第四十

今昔、陸奥ノ國ニ二人ノ僧有ケリ、一人ハ最勝王經ヲ持ツ、名ヲ光勝ト云フ、○此間恐有脫文本奥福寺ノ僧也、此ノ國本ノ生國ナルニ依テ、各本寺ヲ去テ來リ住ス、此ノ二人ノ聖人、皆心直ク身淸クシテ、各法花最勝ヲ持テ靈驗ヲ施ス、○中略而ルニ光勝云ク、此ノ二ノ經○經、法花經、最勝王何レカ勝レ給ヘル、勝負ヲ可知シ、若シ法花ノ驗勝レ給ヘラバ、我レ最勝ヲ棄テ、法花ニ隨ハム、若シ亦最勝ノ驗勝レ給ヘラバ、法蓮法花ヲ棄テ、最勝ヲ可持シト、如此ク云ヘドモ、法蓮更ニ此レヲ執スル心无シ、光勝亦云ク、然ラバ我等二人各一町ノ田ヲ作テ、年作ノ勝劣ニ依テ、二ノ經ノ驗ノ勝劣ヲ可知シト、郷ノ人此ノ事ヲ聞テ、各一町ノ田ノ間程ナルヲ、二人ノ聖ニ預ケツ、而ルニ光勝聖此ノ田ニ水ヲ入レテ、心ヲ至シテ最勝ニ申シテ云ク、經ノ威力ニ依テ、種ヲ不蒔ズ、苗ヲ不植ズシテ年作ヲ令増メ給ヘト祈請シテ、田ヲ作ルニ、一町ノ田ノ苗等クシテ茂リ生タル事無並シ、日ヲ經月ヲ重ネテ、稔ヒ豐ナル事勝レタリ、法蓮聖ノ田ハ作ル事モ无ク、心ノ如ク入ルヽ人モ无クシテ荒レテ草多カリ、然レバ馬牛心ニ任セテ、田ノ中ニ入テ食ミ遊ブ、國ノ内ノ上中下ノ人此レヲ見テ、最勝ノ聖ヲ貴ビ、法花ノ聖ヲ輕シム、而ル間七月ノ上旬ニ、法花ノ聖ノ田一町ガ中央ニ、瓠一本生タリ、此ノ瓠漸ク見レバ、枝八方ニ指テ、皆ク一町ニ敷滿タリ、高キ莖有リテ隙無シ、二三日計ヲ經テ、花開テ實成レリ、一々ノ瓠ヲ見ルニ、大ナル事壺ノ如クシテ、隙无ク並ビ臥タリ、此レヲ見ルニ付テモ、人

干瓢

尺餘、主大水面目四肢浮腫、食之令人吐利、壓熱服丹石人方可食、餘人不可輙食、匏甘冷圓而扁、日華子曰、除煩渇心熱、利小腸、潤心肺、治石淋、孫眞人曰、甜瓠患腰脚腫氣及虚腫者、食之永不瘥、

〔農業全書三菜〕瓠(ひさご)、夕がほとも云、丸き長き又短きもあり、又ひさくにするは、つる付の方いかにも細長く、末の所丸し、長き方を柄にして水を汲手水のひさくにして、おかしき物なり、唐の許由が木の枝にかけしが、風に鳴たるをむづかしといひし事、つれ〴〵草にも書たり、則此物なり、又丸く大なるは、水を泳ぐに用ゆべし、炭取にし、或器物とし、菜のたねなどを入置てよし、又鷹のほど細きは、古より酒器に用ひ來れり、ひさごに苦きと甘きと二色あり、甘き物わかき時色々料理に用ひ、干瓠にして賞翫なる物なり、

〔下學集下飲食〕干瓢(カンペウ)　〔同下草木〕腸瓢(カンペウ)

〔易林本節用集食服〕干瓢(カンペウ)

〔和爾雅七菜蔬〕匏蓄(カンペウ)(俗云乾瓢、按釋名云、瓠蓄皮瓠以爲脯、蓄積以待冬月時用之也、)

〔和漢三才圖會百菜〕壺盧

乾瓢　土用中取之横切片去皮及瓤、用白肉、薄剝連一二丈、如紙綟掛架晒乾、如逢雨變色不佳、釋名云、皮瓠以爲脯、蓄積以待冬月時用之、故名瓠蓄、(卽此乾瓢也)信州尾州剝冬瓜作、(稱尺瓢)眞干瓢河州木本、攝州木津難波多出之、送于四方、可煮食、味甚甜美也、瓠長二尺許、最長者三四尺、味少苦、煮食則甘、匏圍大(呼之名不久借)堪爲腰舟、味甘、懸瓠柄長以爲杓及花瓶、味甘、(性悉美、古書在甘瓢圖味會苦)

〔國花萬葉記四河內〕同國(河內)○名物出所

干瓢

〔官中秘策十九年中行事〕年中諸大名獻上物之事

にもれざる様にして、其中に肥たる土を入、鷹のふん或鶏家鴨の糞などを多く入をし付、水をかけ、土と思ひ合せ、たねを四粒宛入、灰糞を以ておほひ、生出て後も力次第、糞水を度々そゝぎ、つる長く成てはなり花を見て先を留べし、あやしき屋の上にはゝせ、或は棚をゆひて、其上にまとはするもよし、地にはゝする時は、瓜の下に、わらなどをしかせ、折々上を下に取返しをくべし、又手にてなでさすれば、ながくはならずして厚く成ものなり、三月うへて、八月收むべし、器物にするは、よく熟し堅くなりたるを取て、水濕なき地を四五尺も深くほり、わらかこもを、土肌にしき隔て、下には筒厚くしき、瓠を其中に頭の方を下にしてならべ、土を二尺ばかりおほひ、廿日ほどして取出せば、黄色に成たるを、口をきりあけ、さねを出し、それ〴〵の器物とすべし、○中略又大瓢を作る法、穴を深さ廣さ各三尺ばかりに掘、其中に糞と土とを等分にまぜ合せ、穴の中一盃に入ふみ付、底までしめりとをる程水を入、水のひいるを待て、たねを十粒ばかり、ばらりと蒔、土糞をおほひ、生じて長さ二尺餘の時、十筋のつるを一つに取合せて、土ぎは五六寸ばかりを布にて卷、其上を苧を以てまとひ、其上を泥を用ひて厚くぬりをけば、十日も過ずして、帶たる所付合て、つる一筋に成なり、其莖の中にてうるはしく性の强きを、一筋殘して、餘は悉く切去べし、其後一つのつるを棚に引上れば、やがて花咲實を結ぶ、其内にて性のつよく、難なくふとるべきを一つ二つ殘し、餘は枝をも皆々つみ去べし、つるのさきをも長くはのばすべからず、但もとなりの一つ二つはつる付よはくて、ふとりて後あやうし、中なりのふとるべきを二つ殘し置べし、もし旱せば、たび〳〵水をそゝぎ、つねにうるほひを持すべし、かくのごとくすれば、水の四五斗も入ふときが出來るものなり、十筋のみにかぎらず、二筋三筋にても、右のごとくゆひ合せ、糞を多く用れば、如形ふとし、又苗をうへをき、三月移しうゆる事冬瓜に同じ、

〔宜禁本草乾五菜〕苦瓠　甘寒有毒、多食發痼疾脚氣、虛服冷氣人忌之、瓠忽苦如膽者不可食、似越瓜長

瓢栽培

長頸葫蘆、(授時通考)小柄葫蘆、(附方苦瓠)長柄茶壺盧、(附方敗瓢)匏。ハフクベ、一名ヲホフクベ、スミトリフクベ、カンピヤウユウゴ、(雲州)其形大ニシテ圓扁、茶人炭斗ニ製スル者ナリ、一名盆盤葫蘆、(汝南圃史)其形至テ小ニシテ煙合トナスベキ者ヲ、肥後ピヤウタント呼ブ、考槃餘事ニ、小匾葫蘆ノ名アリ、壺ハクピアルフクベ、番南瓜(カボチヤ)ノ形ノ如キヲ云、一名扁蒲、(汝南圃史)蒲蘆。ハヒヤウタン、其形二重ニナリタル者、今用テ酒ヲ入ル、器トス、コレヲ酒葫蘆(水滸傳)ト云、油ヲ入ル、ヲ油葫蘆(汝南圃史)ト云、又形小ナル者アリ、百。ナ。リ。ピ。ヤ。ウ。タ。ン。ト云、考槃餘事ニ二三寸葫蘆ト云、苦瓠ノ附方ニ小藥壺盧ト云、又至テ小ナル者ヲ千。ナ。リ。ピ。ヤ。ウ。タ。ン。ト云、考槃餘事ニ天生一寸小葫蘆ノ名アリ、

苦。瓠。　ニガヒサゴ　一名苦不老(附方)　秋壺盧(同上)　苦匏(郷藥本草)、甘瓠培養宜シカラザレバ變ジテ味苦クナルヲ云、又本經逢原ニハ、卽細頸葫蘆ト云、是ハ一說ナリ、ヒヤウタンハ味苦キ故ナリ、

〔三養雜記四〕瓢の種類

瓢にくさ〴〵の種類あり、その水に浮べること泡の如く、また漂ふがごとくなれば、匏とも瓢ともいへり、和名フクベ略○圖その長こと越瓜の如く、首尾一のごとくにして、大なるものを瓠。と云、和名ユウガホ略○圖小にして細腰のものを蒲。盧。といへり、葫蘆といふは非なり、俗にいふヘウタン略○圖同じかたちにて、至て小ものを藥。壺。盧。といふ、これを略○圖俗にセンナリといへり、匏に似て圓く大きく、短柄のあるものの壺。といふ、略○圖瓠の頭大からで、柄の長きものを懸。瓠。と云、略○圖本草に苦。匏。あり、國語に苦盧といふ、綱目に苦壺盧と名く、その味膽の如し、詩に苦葉といふものこれなり、和名ニガフクベといふ、略○圖

〔農業全書三〕瓠

種る法肥地を深く耕し區(ツボ)を作り、深さ廣さ各一尺ばかり、杵にて土をつきかため、うるほひの下

瓠。形長如越瓜、首尾如一者也、
懸。瓠。瓠之一頭有腹長柄者也、
匏。無柄、而圓大形扁者也、
壺。匏之有短柄而大腹者也
蒲。盧。壺之細腰者也、蒲盧今之藥壺盧是也、〇中略
按壺盧彼岸中下種、立夏前後移種、苗五六月開正白花、日午凋暮復開、故俗稱夕顏、朝顏部牽牛花、晝顏部旋花、結
實有早晚二種、早者多結實而不久、晚者久結實而不多、
苦。瓠。　苦壺盧　苦匏　蒲盧　和名比佐古、又云不久倍、　俗云、瓢簞〇中略
按苦瓠俗云瓢簞與壺盧一類別種者明、葉花小似壺盧、瓢味苦不堪食、圓大者多作炭斗、有長而細腰者、
可作酒樽、有長五七寸者、俗稱百生、有二三寸者、稱千生、佩腰盛藥物及椒類、久不失味、本草所謂蒲
盧是也、細腰本末相均者、俗呼曰闇夜(ヤミノ)露珠、

〔重修本草綱目啓蒙 二十菜〕壺盧　ス、ケバナ古歌　ス、ケノハナ　タソガレグサ共ニ同上　ユウガ
ホ　ユウガウ勢州　ユウゴ肥州、對州、　ナリヒサゴ　シトミグサ草名〇中略
凡ソフクベ、ヒヤウタン類ハ、皆白花ニシテ、夕ニ開キ朝ニ萎ム、故ニ總ジテユウガホト呼ブ、品類
多シ、分別ノ說一ナラズ、釋名ノ註ニ說ク所ヲ正トス、瓠。ハナガユウガホ、一名ナガフクベ、形長シ
テ首尾同ジ大サニシテ越瓜(アヲウリ)ノ形ノ如ヲ云フ、一名淨街槌事物紺珠　甜瓠千金方　扁蒲群芳譜　匾蒲大倉州志　ウス
タ片ニシテ乾タルヲ、カンピヤウト云、勢州ヨリ出ル者佳ナリ、備州ヨリモ出ス、加州ノ者ハ劣レ
リ、漢名瓠畜劉熙釋名　葫蘆乾物類相感志　又甚ダ長キ者ハ、五六尺ニ過グ、用テ花瓶トス、肥後ヨリ出ス、懸。瓠。
ハヒサゴ、一名ツルクビ、シヤクユウガホ、シヤクビヤウタン、其形圓ニシテ大サ四五寸ニシテ、長
サ尺餘ノ狹柄アリ、豎ニ二ツニ割ク時ハ、自然ノ杓トナル、一名長柄葫蘆汝南圃史　瓢子本草蒙筌　東臾名物法言

〔雍州府志 六土産〕壺盧　或謂葫蘆、又稱瓠瓜、又謂匏瓜、倭俗謂瓢簞、又稱浮壺便、凡壺酒器也、盧飯器也、老硬者作盛藥佳器、或盛山椒粒、或用編絮展、盛酒茶、爲遊山之具、是稱約腹壺、以其腹有約束也、其大者盛飯、又一種長如越瓜、而首尾如一者爲瓠。又瓠之一頭有腹、長柄者爲懸。瓠。又稱杓瓢、老硬者作杓、輕快堪用、倭俗謂柄杓瓢簞、又短柄大腹者、存短柄之心、伐其側之左右、盛炭於腹內、以手提携短柄之所存、置爐邊、倭俗稱手浮壺便、又一切伐短柄盛炭者、是謂炭斗浮壺便、茶人專用之、是亦爲茶亭之一具、凡瓠瓢小者處々有之、其大而盛炭者、自近江國武佐來、又洛東田中村人、農業暇種之、到秋成實、其未熟時、好事茶人自行其棚頭、就蔓上之有所、而約其形狀之所稱心者、或以縄縛之、則其形隨所好、而成後伐之、陰乾而用之、其外皮微腐而有斑點者爲良、又大瓢去瓤核、緊塞其口、著胸腸之間、以縄縛肩、而浮水則不沈、有便游泳、故倭俗或稱浮壺便、

〔本朝食鑑 三菜〕乾。瓢。俗作干瓢、干與乾通、瓢乾也、故可互用、

釋名、夕顏、必大(平野)按、用乾瓠之花、本邦自古稱夕顏、顏讀加保、歌人最賞之、其花午間暮盛、故曰夕顏、實及葉莖亦俱稱夕顏也、

集解、處處多有、正二月下種、生苗引蔓、延緣于門牆屋及樹竹、其葉似冬瓜葉而稍圓、有柔毛、嫩時爲蔬可食、去青皮及瓤、細剉令長、日晒則白長、如裂紙及布、其味甘美、代乾鰹爲僧家用、或煮熟食亦佳、此俗曰乾瓢、五六月開白花、狀閑雅有野姿、故歌人詠賞之、以其夕美、呼曰夕顏、結實青白色而長、老則晒乾、渡水憑河者著之、其瓠中之子、齒列而長、此詩所謂瓠犀也、又一頭狹腹長柄者懸瓠也、本邦作瓶作杓也、○中略

附錄、瓢、瓢及壺盧者總稱也、瓠。子。謂布久遠、瓠瓜亦同、蒲。盧。者俗謂百生瓢簞也、俱不食、俱暴乾可用器、此亦正二月下種、莖葉花實與瓠同、大者作酒瓢炭瓢、小者去瓤入椒及丸散香藥之類、或作佩瓢、生時治形之不好、則乾後全好、近代爭誇奇異、

〔和漢三才圖會 百菜〕壺盧　瓠瓜 瓢同　匏瓜　由不加保　俗云由不古　味甘、故對苦瓢名甘瓢、

本綱壺盧象形 壺酒器、盧飯器也、長瓠、懸瓠、匏瓜、蒲盧、名狀不一、其實一類、有遲早之殊、○中略

〔源氏物語四夕顏〕六條わたりの御忍びありきの比、うちよりまかで給なかやどりに、大貳のめのといたくわづらひて、あまに成にけるとぶらはんとて、五でうなるいへたづねておはしたり、略○中さきもをはせ給はず、誰とかしらんとうちとけ給て、すこしさしのぞき給へれば、かどはしとみのやうなるをしあげたるみいれの程なく、ものはかなきすまゐを、哀にいづこかさしてとおもほしなせば、玉のうてなもおなじことなり、きりかけだつ物に、いとあをやかなるかづらの、こゝちよげにはひかゝれるに、しろき花ぞをのれひとりゑみのまゆひらけたる、をちかた人に物申とひとりごちたまふを、御隨身ついゐて、かのしろくさけるをなん、夕。が。ほ。と申侍る、花の名はひとめきて、かうあやしきかきねになんさき侍けると申、げにいと小家がちに、むづかしげなるわたりの、このもかのもあやしう打よろぼひて、むねむねしからぬのきのつまなどに、はひまつはれるを、口おしの花のちぎりや、ひとふさおりてまいれとの給へば、このをしあけたる門に入ておる、さすがにされたるやり戸口に、きなるすゞしのひとへばかま、ながくきなしたるわらはの、おかしげなる出きて、うちまねく、しろき扇のいたうこがしたるをこれにをきてまいらせよ、枝もなさけなげなめる花をとてとらせたれば、かどあけて惟光の朝臣のいできたるして、たてまつらす、略○中修法など又々はじむべきことなど、をきての給はせて、出給とて、これみつにしそくめして、ありつる扇御らんずれば、もてならしたるうつり香、いとしみふかうなつかしうて、おかしうすさびかきたり、

心あてにそれかとぞみる白露の光そへたる夕がほの花

〔徒然草上〕六月の比、あやしき家に、夕顏のしろくみえて、かやり火ふすぶるもあはれなり、

〔六百番歌合夏〕十二番　夕顏　右勝　中宮權大夫

折てこそみるべかりけれ夕露にひもとく花の光ありとは

〔五雜俎十物〕匏亦瓜之類也、與瓠一種而有甘苦之異、甘者爲瓠、詩所謂幡幡瓠葉是也、苦者爲匏、不可食、但可用以渡水而已、詩所謂匏有苦葉、濟有深涉是也、故夫子謂子路、吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食、言但可繫而不可食也、注者乃以繫於一處而不能飲食解之、則凡草木之類皆然、何必瓠瓜、此大可笑也、然匏瓠古亦通用、廣雅曰、匏瓠也、惠子謂莊子、魏王貽我五石之瓠、則亦匏也、河汾之賓、有曲沃之懸匏焉、則亦瓠也、今人以長而曲者爲瓠、短項而大腹者爲葫蘆、即匏也、亦謂之壺、豳風八月斷壺、鶡冠子、中流失船、一壺千金是也、然則壺嫩而甘者亦可食、老而苦者、古人皆用以渡水、今人則用以盛水而已、與瓠形質既殊、其熟瓠先而匏後、而古人通用之者一種也、陸佃埤雅斷以爲二種、固亦無害、乃釋匏而又釋壺與瓠爲三誤矣、

余於市場戲劇中見葫蘆、多有方者、又有突起成字爲一首詩者、蓋生時板夾使然、不足異也、最後於閩中見一葫蘆、甚長而拗、其頸結之若繩狀、此物甚脆、而蔓係於樹、腹又甚大、不知何以能結之也、云云、以燒酒沃之、則軟而可結、山東亦嘗見之、但長頸者另一種耳、

〔倭訓栞前編三十五〕ゆふがほ　壺盧也、夕顏の義、今俗ゆふごといひ、信濃にてよふがふともいへり、六百番歌合にも、夕露にひもとく花とよめり、枕草子に、夕がほは朝がほに似て、いひつゞけたるをかしかりぬべき姿にて、花のありさまこそいとくちをしけれと云り、一説にふるき源氏繪などに云るは、王瓜也といへども、その花夕かげには却てしぼめり、夕がほの雪といへるは花をいへり、

〔傍廂後篇〕瓢簞

瓢と簞とは別物にて一物にあらず、一簞の食、一瓢の飲といふは、竹にて組みたる器に、飯を入れたるを一簞の食といひ、ふくべに入れたる酒を、一瓢の飲といへるにて、瓢と簞とは似よりたるものにあらず、さるを瓢のみをへうたんといへるは、いみじき誤なり、

慢驚風の藥ニ用云、

〔草木育種後編下蔓草〕曼陀羅花草本　花戸にて朝鮮朝顏といふ、和蘭にてドル、アップルといふ、春分に實を蒔てよし、度々糞水魚腥血水を澆ぎ、漸長じて花實あり、實をとり藥用とすべし、之を多服すれば昏睡するに至る、容易に口中に入る事なかれ、

〔浚明院殿御實紀附錄二〕弘福寺のほとりを過させ玉ふことのありしに、その邊の村長中田喜右衞門といへる翁、なにとかして御こゝろに應ずるばかりのこと設て、御覽に備むとて、夏菊の花と曼陀羅花とを寺內に植置て見せ奉りしかば、めで興じ玉ひ、曼陀羅花は實一つ摘てもちかへらせ玉ひしかば、側邊の者どもいと有がたく忝き事に申傳へたり、何事もわざとこゝろを用ひ設たることとは、かりそめにはせさせ玉はずといへり、これよりして曼陀羅花は、江戸にもてはやすことゝなれりしとぞ、

〔採藥使記中總州〕重康曰、此比總州ニテアル寺ニ一宿セシニ、十五六歲ノ沙彌、戯レニ曼陀羅花ノ實ヲ食ヒケルガ、卒ニ發熱シ、讝語シテ狂人ノ如クニテ有リシニ、色々藥ナド用ヒケレドモ、暫ク癒ヘズ、一夜煩ヒ至朝瀉下シテヨリ平愈セリ、誠ニ本艸ニ毒草ノ部ニ入タルモムベナリ、此所ニテハ木アサガホト云フ、江戸ニテ朝鮮アサガホ、又チャメラ草トモ云フ、

〔大和本草九雜草〕曼陀羅花　本草毒草ニ載ス臺草ニハ非ズ、葉如茄、八月開白花、アサガホニ似タリ、花不足觀、

〔和漢三才圖會九十五毒草〕曼陀羅花　風茄兒　山茄子○中略

按近頃來於朝鮮、今人家多栽之、花似大牽牛花及博多百合花、故俗曰朝鮮牽牛花、其實似檳榔子而有細刺文、又別有名曼陀花者同名異種、

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草下〕曼陀羅花　テウセンアサガホ　ヤマナスビ　ナンバンアサガホ　ハリナスビ讃州　トウナスビ同上　外科コロシ讃州　外科ダワシ石州、伯州、讃州、　天竺ナスビ防州　イガナスビ同上　ギバサウ豐前　チヤメラサウ江戸　キチガイナスビ石見　アキス備後　イガナス長州　キアサガホ下總　テウセンタバコ遠州　トウアサガホ　パラモンサウ

一名佛花幼幼新書　顚茄香山志　悶陀羅草名山志　天茄彌陀花花暦百詠　增、一名風茄、本草逢原實ノ名

伯耆、豐前、周防、及諸州ニハ野生アリ、京師近道ニハナシ、春種ヲ下ス、葉ノ形茄葉ニ似テ刺無ク、綠色ニシテ互生ス、莖高サ二三尺、枝ノ形狀モ亦茄ニ同ジ、夏秋ノ間梢葉ノ間ニ白花ヲ開ク、形牽牛花ノ如クニシテ長大、一瓣ニシテ端ニ五尖アリ、其本ハ筒ニシテ長サ三寸許、花後實ヲ結ブ、大サ一寸許、圓ニシテイボアリ、故ニハリナスビト呼ブ、内子圓扁、黑色ニシテ褐色ヲ帶ブ、秋深テ根苗共ニ枯ル、若誤テ此花及葉ヲ食ヘバ、狂亂ス、然レドモ其毒氣盡レバ自ラ愈ユ、

〔廣益地錦抄五〕曼陀羅花　春たねをうゆる、はへ出は茄子苗のごとくにて、段々枝出て葉も茄子のごとし、故に異名山茄といふ、秋花さく白大りん、花形あさがほのごとく、たくましく異形なれば、俗に唐人笛といふ、尤そのかたちなり、花壇に植て朝鮮あさがほといふ、朝にひらき夕にしぼむ、時珍が曰、曼陀羅花人家に植、春苗生夏長、獨莖直上高四五尺、葉茄子の如く、八月白花開云、葉牽牛花の如く大シ、朝に開夕に合スといへり、よくも見たり、此葉を湯にせんじ、寒濕脚氣を治、小兒

かいへるもの、狂歌とて、

雲と見る芳野たばこのうすけふりはなのあたりを立のぼるかな、と戯むれしもおかし、又親しき友どちよりつどひて、舊きをかたらひつゝにも、これなくては其しほなきにも似たり、たとひ山海の珍味をつくせる酒宴のむしろにも、時々これを吸ざれば、物たらぬ心地す、又野邊の遊び川せうえう、月の前花のもと、酒の後、茶のさきにも、この煙をかをらし、雨に對し、雪を賞し、閑窓のうちに、ひとりつくゑによりて物かうがふる折ふし、又旅ゆく朝戸出に、たばこ吸ながらにあゆめる趣、又家のうちにありても、あやにくに事しげきところ、たゞひとひきすひたるは、いはんかたなくぞおぼゆる、憂につけ、樂しきにつけても、これを伴はざれば、悶る氣もひらかず、嬉しき心ものびざるがごとし、近き世の人のはいかいのほくとて、

西行の秋はたばこもなき世かな、といひしもさることぞかし、すでに此物世にあまねくひろまり、人ごと家ごとに用ふることになりては、客人をもてなすにも、まつ前に是を進むるを常のならはしとすることになんなりける、いはんもかしこけれど、それのみかどの御製とて、

もくづたくあまならねどもけぶりぐさなみよる人のしほとこそなれ、とよませ給へりとか、また妙法院の宮の御言葉とて、たばこに七の德ありとの給ひしものも見えたり、又もろこし人は、一名を相思草といひて、人ひとたびこれを吸ふときは、朝夕思ひこがれて止ときなしとなん、とにもかくにも、あやしきまで人のめづる草にこそありけれ、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕六玉川に、せきの小まんもうす色をのむ、といふ句有り、昔はたばこのむ女稀なりしとぞ、娘容儀草子に、昔は女のたばこ呑むこと、遊女の外は怪我にもなかりしことなるに、今たばこのまぬ女と、精進する出家は稀なりと云り、

〔多識編二毒草〕曼陀羅花、今案也末奈須比、

へ古して、今さらいふもくどければ、かの愛蓮にならひて、たゞ此類の品定せむに、酒は富貴なる者なり、茶は隠逸なる者なり、烟草はさしづめ君子の番にあたりて、用る時は一座に雲を起し、ゑりぞく時は袖の内に隠る、こゝに神龍の働ありともいふべし、下戸と妖物は世にすたれて、下戸は猶少からず、今や稀なるは、たばこぎらひにして、野にも吸、山にも吸へば、たばこ入の風流、日々にさかんに、きせるの物ずき、とし／＼にあたらしくて、若輩の目を迷せども、楠が金剛山の壁書をみて思ふに、たばこははさがぬを専とし、きせるはよく通り、灰吹はころばぬを最上とこそ、さらば色みえでうつろふ花の人心にも、畢竟そのもの、本情實儀をうしなはざれとなり、

〔めざまし草〕古今形勢

たばこといふもの、異國よりこゝへ傳來せしより二百年にあまりて、久しきならはしとなりぬれば、世の人貴賤ともに、其罰をも知らず、よるひるとなくけふらすることゝなりて、今はひとひもこのきみなくてはともいふべく、まことに酒にも茶にもまさるものになん、されば手と口とに離さず、ゑばしもかたはらにおかねば事かくるがごとしげにも飽けばうゑしめ、飢ればあかしめ、醒ればゑはしめ、酔ばさますとぞ、世の人なべて此功徳を知り、世界のかぎり所として此草を植ぬもなく、人として此葉を嗜ぬもなく、世に行れて、年暦百年にも及びしころほひより、詩にも賦し、歌にも詠じ、これを稱美して止ず、其くさ／＼の徳をいはんには、あつさをも忘れ、寒さをもしのぎ、夏の日永の眠がちなるをさまし、春の曉の覺めがたき夢をもやぶり、あるは秋冬の夜ながき、老が身のねぶりがたきには、從者女童など、たばこ吸ふ火はありやなしやと問ひて、わびしきを助くる心しらひを喜び、又何くれと物がなしきうきをもわすれ、あるはすまのうらさびしき、ひとり住の身の上には、よきしほがまのけぶり草とも知らるゝなり、或人の口ずさめるに、

昔し誰が寢覺の床のさびしさを忘るゝ草の種はまきけん、とあるもさることなり、又貞柳と

而出或傀儡口中令噴出之、或所吸之烟、入而鼻孔不他洩之類、曲曲怪異、千狀萬態、愈出愈奇、乘皆奇之、未知其所為、彼又自謂、恐諸客疑余之雜烟中別有所設、乃請傍人之煙、一吸乍為奇狀、如初、曲名數十、畢畫題記、都下人毎有讌宴、爭召助其興云、噫此技固出於偶得、而入此妙境、何用心之至于此、可不謂一奇技乎、夫煙草之盛于天下也、終至如此、可謂奇亦甚矣、實昇平之餘事也、

〔春波樓筆記〕余江漢曰く、タバコは天正の頃、異人持ち來る、長崎の櫻の馬場に之を種ゑ、遂に天下に流行す、此を今思ふに、長崎の者十人あれば、三四人之を吸ふ、京の者十人あれば、七八人之を吸ふ、江戸の者十人あれば、九人之を吸ふ、其吸ふ事甚夥し、東奥の人十人にして、十人吸はざる者なし、蝦夷國に至りては之を嗜む、

〔鶉衣前篇拾遺〕煙草說

夜道の旅のねぶたきとて、腰に茶瓶も提られず、秋の寐覺の淋しきとて、棚の餅にも手のとゞかねば、只この烟草の友となるこそ、琴詩酒の三つにもまさるべけれ、堠のもえ杭をさがしたるは、宰予が晝寢の目ざましにて、行燈に首延したるは、小侍從が待宵ならむ、達磨は九年の壁にむかひて、炭團の重寶を悟り、西行は柳陰にしばし火打の光を樂む、されば出女の長きせるは、夕ぐれの柱にもたれて、口紅兀さじと吸たる、少は心づかひすらんを、船頭の短きせるは、舳さきに匍匐て、有明の月を詠ながら、大海へ吸がら投たるよ、いかに心のはれやかならむ、やごとなき座敷に、緞子張の煙草盆を、あまた數に引わたしたるより、路次の待合に、吸口包たるはにくからぬ風流なれど、さすがに辭儀合に手間も取べし、只木がらしの松陰に駕立て、継きせる取まはせば、茶屋の嚊のさし心得て、蚊がらに薬火もりてさし出したる、一瓠千金のたとへも此時をいふにや、または雲雀なく空のどかに、行先の渡場とひながら、烟打のきせるに、がん首さしあはせて、一ふく吸付たる心こそ、漂母が飯の情より、うれしさはまさらめ、そも煙草の德も、むかしより人のかぞ

あしき事也、伽羅を入て呑し人に、健忘の症を煩ひ、死なざる人あらずと云事なし、さのみ是計は好色にもならぬことなれば、さりとてはいらぬ事也、

〔ひとりね上〕たばこのむに、輪をいくつともなく吹く人あり、壁に針を打て、それに輪をかける人あり、はじめ一つ吹出して、其内をまた吹様に、ちいさく輪を吹人有、或は又けむりを外へ出さず、ことごとく内へ呑て、ほのぼのとあかしの浦の朝霧にと、一首よみしまいて、けむりを出す人有、今のごとく引て鼻の元より出す人有、女郎様などの、鼻の穴より吹出し給はんはいまり燒の香爐の如く、見苦しなんどはおろかの事なり、けふもさめはてぬべし、○中略余はきらひにて、たばこのむことならねども、人の呑をいとふにしはあらぬに、人によりて手まへの嫌ひなれば、人の呑もいとふ生れ有、やまひといへども心つくべし、心つくれば其儘なをるもの也、我まゝよりおこることなり、

〔閑田次筆四〕黄檗開祖隱元禪師は、煙草を惡み給ふこと甚し、其偈にいはく、一管狼烟呑復吐、恰如炎口鬼神身、當年鹿苑有此草、不說五辛說六辛、此偈語錄には洩たるよしなり、昔彼宗徒に聞しが逍亡せしを、又此比一和尙語られき、座禪看經の勤を空しくせるを惡み給ふならん、されば此物と飮酒は、彼僧衆凡て不喫ことなりしが、當時は不喫人は數ふる計也とぞ、

〔蕉錄下追譯增補〕吹煙戲曲說

烟草之盛行于世也久矣、其極至有吹烟爲戲曲者、元祿年間、有猫莊兵衛者、○中略都下近有幇間吉藏者、兼爲此戲云、余未見之頃亦城西有一狎客、好善此戲、其技最奇、自號輪玉亭吹烟、俗稱錢源茂質機○大一夜、在一友人宅親視之、其人晤處設坐、煙盆煙具在其側、戲曲數番、先向諸客告其曲名、把管裝烟、點火仰噴之、則坐上起一推之雲、雲中忽爲輪、或圓或楕推頹扣頹、大小綿連迸出、或爲連環、或爲連珠、或握扇貫其所噴之輪、或一或二三、或令輪在扇上、或吹入於一管中、管尾噴出數輪、或吹己懷中、則自其袖

たなればのめといはるゝとも給ずとて不給、其比かくれなき奴といはるゝ人も、六ほううでだて我意を盡す人も、感歎の座敷又は殿方老人の前にて、たばこ呑人なし、

〔大和本草六民用草〕烟花〇中略初ハ竹筒ニ入テ火ヲ吸フ、後ニ眞鍮ノ煙筒ヲ用、請取ワタシノ禮アリ、今ハ其禮スタレリ、

〔壺齋錄四飲食〕酒始乎儀狄、其來也遠矣、茶則始於晉、今遍五方、爲日用之物、今日人家見客、必設烟具、先於茶酒、此則百年前所无、傳諸耆舊、寬永中自南蠻國來、其始以種植甚廣、致妨本業、官禁甚嚴而不止、至於今日、其用甚盛、毎爲應酬之衆矣、

〔翁草五〕當代奇覽と題せるものに、あらゆる雜談有り、十が一爰に拾ふ、
一寬文の比迄有し古老の云く、多波粉の流りしは近き事也、〇中略其時分世にこせ煙と云物はやりしに、多波粉呑む人は、此頃ひ無きと云ひはやらせて、世にはやり廣まりし也、

〔煙草考〕煙草所用于世、且百有餘年、至今則通貴賤、無處不植焉、无人不嗜焉、賓燕會宴、野步舟行、登山臨水、花下月前、對雨賞雪、羇旅寓店、群談獨居、幽棲市塵、讀書吟詠、起居坐臥、无處不好矣、无時不宜矣、〇中略余〇貝原篤信幼時、見世人服烟者、吸烟數口、不噴而呑焉、少時悉從鼻孔出、當時人皆然矣、其吸而不呑者、此謂伊達多波古、或花多波古、只風流者子徒爲容態吸之、實不吸也、今世人呑納者鮮矣、間老翁有之而已、

〔おほうみのはし〕久世大納言、通夏寶永四年薨事ものへまうづとて湯あみ給ひけるに、此湯には穢れたることあるべし、火をあらためてこそ更におほせよとて、あみはてずしてあらためさせ給ひけり、後に火たきたるもの、あやまちて烟草をたびて侍ると申しけり、此大納言の常にかゝることおはしければ、只人にはおはせずとぞ申しける、

〔ひとりね上〕多葉粉ににほひを入て呑人多し、靑樓の人などすべて有、伽羅など入てのむ事、一入

鳥也草也菓也、本草稱有毒者非無之、然常食之而無妨、則何必惡莨菪乎、凡人所嗜不同、蔥韮之輩、誰不知之、然食而不飽、餒而不厭、何必惡烟酒之臭乎、且適其口、則以文王之聖、不能不嗜菖蒲葅、從其俗則以昌黎之賢、不嫌食蝦蟇、今人於烟酒、亦如此乎、若以至自蠻國、故甚惡之、則琵琶箏篥之聲、可掩耳乎、海棠海榴之花、不觸目乎、若其中華食物可慕之、則牛羊豕、何不供朝夕之膳乎、加之内則所記品物、以今見之、則難下箸者多多、然則食物何必論華夷哉、鵝是鼠所化也、鼠之不可食、孰與烟酒之不可飲乎、然鵝者人人食之、鼠者人人嫌之、所以者何、則化流俗也、近歲多嗜蕎麥麵者、盛器成堆、放飯流歠、張口脹臉、滿腹擁喉、更十餘椀、果然不厭、非消麵蟲、則不及此乎、蓋是田舍野人之食也、然侯伯之席、文雅之筵、往往以是爲頓點、流俗之化、無奈之何、烟酒之行、既五十餘年、蕎麵之行、殆三十年、共是雖無益於人、亦無害者必矣、蕎麵可以救饑、烟酒可以消食、小皿之草、一管之烟、不可爲毒、大器之堆、十椀之食、恐有脾胃之傾、取捨以爲如何、彼和汁之輩、使不嗜者在其傍、則殆成嘔吐、其害果孰與烟酒之臭哉、烟酒果可惡、則蕎麵亦可惡也、嗜與不嗜者、人之性也、二物何必惡之哉、强惡之者僻也、强好之者亦癖也、古人之癖、有賤於蕎麵者、又有祿於烟酒者、所謂錢癖痔痂癖之類是也、嗚呼我國本神國也、爲胡佛被掠既千年、可惡之甚無過於此、今不及其大、而及烟酒之小、不亦僻乎、近歲顯達、而好儒者非無之、然惡浮屠、而不能禁之、則予之力、雖惡烟酒、果其不能絶之、余是非愛烟酒、然爲予之惡之甚過、聊以解嘲而已、辛丑孟冬

〔昔々物語〕一むかしは懷中たばこと云事なし、よくともあしくとも、亭主のたばこ盆に有を呑なり、のみやうも、亭主座敷へ出る迄は呑ず、亭主物語して、たばこ參れと進むれば、客は先御亭主より參れと、歪茶の如く二三度は言、其時亭主鼻紙をへぎて、きせるのつ。ばをはづし、きせるを拭ひ、是にてまゐれと差出す、客戴きて呑、たばこ能はほむる、一ふくも二ふくも吸、つばかけて我前に置、歸る時は鼻紙にて拭ひ、たばこ盆へ入る、尤ぬぐふ時、亭主其儘差置れと云、若亭主頭役か親か

效之縮頸而食甜菹三年然後膠之蓋是呂覽所記其有無不可知也鄉黨篇所載可以見之然世之所傳可以傳疑若其嗜與不嗜殆如大戶小戶之於酒乎捕者性癖有時吸之若而人欲停之未能聊因循至今唯暫代酒當茶而已歟非若西域幻人吐火駭人是誠可惜可誅也乃者三品羽林源君賜赤土蕢蕢。藪多束一筥厚荷之至謝而有餘赤土者君封國內之腴地此草良產之勝區也嘗之則尋常煙火食之所不及也可謂神農所試之吹咀耶食公處劑之刀圭耶若進之文王孔子則未知彼此孰取孰捨哉今所言類類俳非無恐懼然戲言出於思也故饒滑稽之謔詞以期電矚之莞爾頓首再拜謹言

（寬峯文集五十二文）戲答惡煙酒文（未書證設澹泊子論靜子攸聲之求鮮）

清靜子出澹泊子顏色不平侍童見而問曰何爲不平哉澹泊子曰清靜子偶來怪余嗜烟酒余爲說其所以嗜之彼遂其無益而有害其言如流其辨如河余不遑答之然亦不能退烟酒是以不平也童曰其言奈何其辨奈何澹泊子曰彼旣出於其口旣筆之於劄子名曰惡烟酒文童曰其文何在曰在案上請示之童展觀曰余爲君解嘲乃出門追之不及於是呈一簡於清靜子曰大禹惡旨酒桀紂以是亡國果其可惡乎然周官有酒正孔聖亦曰酒無量果不可惡乎惡與不惡不在酒唯是在人乎烟酒亦然不見彼俗客乎其叢之織以韋皮包之而他適出自懷中以漆器盛之而代酒茶爲待客之具其管之美以金銀爲小匣以容其叢以彩竹爲筒以通其烟其細口亦以金銀飾之或鞍上攜之或市中提之或花前吸之或月前吹之代鳥使以通蜂媒如此者惡之而可也若其方夜讀書氣體倦勞更闌燈暗則一吸之間破孤悶遣愉懷而一管之烟餌之塵囊倫兩乎餌之靜中同參乎聊擬先儒之微醺乎吸了而又吸飲了而又飲者抑其一盃一盃又一盃之彷彿乎果是一椀重二三四及五六至七椀之流亞乎如此者何必惡之哉方今流俗比比無家不蓄之無人不携之且往歲屢見韓客嗜之其筆談之間乃知國俗所謂多波古是烟酒也其廣布如此今子雖欲惡而絶之亦可得乎自烟酒行於我國以來考諸方書未詳是爲何草也强以貨蓍當之疑其有毒然未聞飮烟酒以中毒者果其無毒乎況其尋常朝夕所食魚也

賣なき故か、闕しき中に、手々に薬切にして、あたら莨菪を粉灰にするを、是はとおもひ寄、台口計殘りしを賣て、うずば一丁、たばこ一斤求めて、竹のはかり、石のおもりして、小屋々々を賣りあるく、

〔梵舜日記〕寛永五年正月一日癸亥、長三郎タバコ持來也、安田九郎兵衛筆一對、

〔羅山文集雜著五十六〕佗波古希施囊

羅佗波古以丁香沈香黃熟香、方今細馬輕轎綺綾佩玉之蒋倖郎、金雀銀鱗翠鈿珠袂之歌舞妓、朝遊于東阜、暮出于北野、必執此佗波古、以爲寄聲通意之媒、一吸一呑、必相酬酢、謂之何哉、闔國禽獸行而不知焉、穿穴隙之女、隘巷不撿之人、未足責之、於乎悲夫、

〔羅山文集雜著五十九〕莨菪文奉謝水戸羽林君

神農去久矣、吾邦五十易草木以前有一奇草、自舶上來者、曝乾其葉、剪抹燒之、以竹筒引煙吸之、不知其爲主治也、有損而無益、但爲弊爲費而已、然年引一年、俗習不休、考諸本草、則莨菪歟、焉知神農中七十毒時有此草否、倉公所用莨菪、唐兵所餌毒飯蓋是乎、初試吸者多暝眩、然及其盛行而無貴賤、無男女吸之者衆、故擇小竹良者、爲筒通解谷、其本末或用銅鍮筒連接之、塗乇于作金銀筒、其末曲鉤形如牽牛花樣、以盛抹葉、其本稍細、含之附炭火及燭火以牽煙、三韓呼之曰煙酒、以呑煙暝眩如醉故也、嘗聞之韓人乃云、頃年此草來自南方、然則與吾邦之弊習不異、醫方只熏其子治蟲牙孔、未有用其葉、近歲往々栽植、以衆所嗜好也、花開逢風不易落、以白樂天所謂、不見莨菪花、狂風吹不落、并考之則益知此物爲之歟、杜鵑花羊喫之躑躅而倒、故號躑躅花、其有毒明矣、於人亦宜、然其習慣漸久則毒變爲藥亦有之歟、故譚紫霄以莨菪之油配躑躅之酒、并論俗習嗜好之不爲害也、雖中華復有吸之者乎、其弊不易改焉、然有時慰閑寂適喉咽亦不可言無之歟、石癖石媼好嘗醋、曝三尺面百摺、其所嗜如此、柳柳州有云、奇異之草、苦鹹酸辛、雖蜇吻裂鼻縮舌澀齒、而有篤好之者、援文王之蒲菹以證之、如孔子聞而

（賤のをだ巻）前に記す地紙〇略賣の歩行時分、きざみたばこやとて、是も小奇麗なる形をして、是は年ばいの者おやぢなどいふ歩行たりいくつも引出しを付たる、小簞笥様なる箱を脊負て、品々の刻たばこを入、商に歩行たり、是は不限〇中略四季ともに家々を廻り、出入取付など出來て重寶なりき、地紙やと同じく、今〇享和はすたりて知る人もなし、

（江戸町鑑天保十五年版）新材木町里俗多葉粉河岸ト唱煙管所有之

（煙草記）歌仙

東風吹や赤。柿。色。の。長。暖。簾。。

柚子をとみへき。ざ。む。七くさ

〇按ズルニ、煙草記ハ、寶曆六年ノ出版ニ係ル、赤柿色ノ長暖簾ハ、煙草賣店頭ノ光景ナルベシ、

（八水隨筆）多葉粉のひろまりしは、色々の書に樣々記して見えたり、予が父弱年の頃、大坂高麗橋にて、唐人の裝束したる商人、竹のきせるにて、一ふく一錢づゝにて、人にのませたるよし常にかたりぬ、

（還魂紙料下）煙草の一服一錢

此書〇八水隨筆の作者、姓名は詳ならざれど、江戸の士にて、享保元文中を經たる事、書中に見えたり、其父の弱年の比といふは、承應明曆のころにやあらん、

（尾張名所圖會前編四愛智郡）高倉結御子神社〇中略本地堂に毘沙門天を安置せしも、今は社人の家に納む、しかれども例年正月三日には、當社の神供所にて此像を開扉し、諸人に拜せしむ、〇中略此日神前にて、き。ざ。み。た。ば。こ。、或は飴にて作りし小判を商ふ、

（商人職人懷日記二）信州に涌出る金のべ澤の金山最中の時分、賑はしきに目とまり、よろづ見めぐるに、〇中略葉たばこは賣て、きざみ

煙草商

浩然の氣を養ふ、〇中略其なす所によりては、害ありとのみもいひ難かるべし、今時の人さのみ好まざるも、煙管の一具不揃は、事闕たる如く思ふより、つひに呑習ひて側をはなたず、されば若年よりよくいましめて呑さゞらしむべし、

〔目ざまし草〕考證雜話

近頃ある人の話に、越後出雲崎、天正十七八年の頃の撿地帳を見つるに、たばこや何某といへる名を載せたり、されば古き事なりといひき、

〔人倫訓蒙圖彙四〕若莨屋(タバコヤ)　丹波吉野高崎新田、其外國々のたばこをかい、これをあきなふ刻師此所にてかふ、きざみは大津柴屋町よりはじめしとかや、駒臺やあり、庖丁は堺よりいづる、黒うち三文字石わりよし、代二匁なり、

〔我衣〕貞享年中迄、刻多葉粉、見世賣計リニテ、世利ウリナシ、葉烟草ヲ調ヘ、手前ニテ刻ムナリ、然レドモ若キ女中ナドノ類ハ、ヤニ深キヲキラヒ、刻ミタバコヤニテ、色合キナル和ラカナルヲ調ヘノミタリ、元祿年中ヨリ、刻烟草セリ賣出ル、箱圖ノ如シ、〇圖略夫ヨリ寶永年中ニ至テ、世利箱丁寧ニ致ス、

其後元文年中、神田鍋町ニ、叶ヤト云刻多バコヤ出ル、十餘人切子ヲカヽヘ、カツギ荷、六七荷出ス、江戸中ヲ賣弘メタリ、此時ヨリカツギ荷始ル、

寶暦年中ニ至テ、スベテ刻タバコヤ、ニナヒ箱ニナル、

〔塵塚談上〕ガチヤ〳〵多葉粉賣の事、我等幼年頃は、〇寶暦年間藥簞笥のやうなる箱に引出しを附けて、引出しの中に仕切りを入、二行に刻多葉粉を入、蕨拳の鐶を引出し毎に附、肩へかたかけにして賣歩行けり、鐶がガチヤ〳〵と鳴により、其香を聞て呼入かひけるなり、此箱にて商ふもの、五十ケ年以前ゟ絶たり、

麥門冬　紫蘇子　瓜蔞仁　枇杷葉　甘草右等分　砂糖一兩

痔疾には、脂深き烟草の劑たるを丸め、肛門にはさみ居れば、忽痛を去、

烟草の黑脂、竅を塞通ざる時は、味噌汁醴湯奇妙也、和國の人は常に是を飲故脂の患なし、

烟脂衣類につきたるには、瓜子仁を碎て洗ば卽去、又味噌汁の熱にて洗ても忽散す、又昆布を嚙、汁をとりて揉あらうも又良といふ、

〔養生法〕煙草

煙草は其質を委しく論ずれば、害のみにして良とすべき所なし、されど今世界中追々盛に成て、貴賤に限らず、好嗜し馴たるもの、其害なきが如くなれど、馴ざるものは眼前に眩暈し、咳嗽を發し、口舌を荒し、又胃の氣を弱らする事甚し、煙草に種々有、嗅ぎたばことて、粉末にして嗅ぐもの有、嚙み煙草とて、口に入て直ちに其葉を嚼るものあり、又煙管もて只其煙を吸ふもの有、則我國の劑煙草、西洋人の卷煙草など此類也、西洋人の煙草をふくを見るに、皆只煙りを口に入て是を吹出すのみ、我國人の習はしは、氣息に深く引て腹の中に入、これを吐くに鼻より出す、されば西洋人にくらぶれば、其害尤多しといへども、年來のならはしにて、本に其毒にあたる事なし煙草は一二吹して、つれ〴〵を慰め勞れを忘る丶など、其煙の口に入て一種の佳味を覺え、精神を鼓舞せしむるが故也吸ひ入ると吸ひ入ざるにはよらず、されど弱き葉は吸ひこまざれば功なきが如くなれば、强き葉を口中のみにて吹去る事とすべし、今假に禁ずれば、又これが爲に害あり、年若き人は、つとめて吸ならはざる中に禁ずべし、

豐城〇木書補註者山内氏 云、煙草はもとより害多く益なき事、皆人のしる所にして、既に昔制禁せられしとかきけど、今は大やけにして制するものなし、されど旅行する人、道にいこふ程煙草一ふくに遠足の勞を忘れ、或は閑居のつれ〴〵を慰め、深窓に書見する人など、是をもて鬱を發し、

此物元來毒草にして人に益なし、性辛烈にして無病に津を生ず、津は一身の液なり、潤養せずして、反て枯竭する時は損あるべし、畢竟は少々鬱を開く能あるのみ、本草備要に、飽則能饑、饑則能飽と載せたれども、烟草の饑飽を救ひし事を見ず、

〔烟草百首 顯昔〕功能

佗波古は、○中略霜露風雨の寒を禦ぎ、山嵐鬼邪の氣を避、小兒食て癖積を殺し、婦人食へばよく癥瘕を消す、氣血を廻し、二便を通じ、惡瘡を治す、○中略

大飲飽食して腹脹滿時、二葉を採、熱灰を其中に包、暫ありて腹の上を按ときは、其脹卽解す、○中略

烟草の水を絞て膏藥に入る時は、能痛を止、膿を吸、腐肉を蝕し肌を生ず、金瘡によし、皆人卽時の血留にするを以、功能しるべし、

葉色青綠なるを錫蒸にして、其露を採、硝子器に入置、金瘡惡瘡腫物一切にぬる時功有、又眼かすむ時は、眶にぬりて寢ときは、翌旦あきらかに見ゆ、きせるの脂にても妙なり、

水腫には、烟草の末を香爐に焚、烟を呑、其水氣能消す、又吐劑にも用、粉を爆らしこれを嗅ば嚔ことを止、

灸治を嫌ふ小兒には、きせるの脂をとり、灸點におす時は蟲の病を去、大人にも功能あり、

蛇蚖諸蟲此烟を嫌ふ、蛇の皮を剝、一葉を剌時は速に死、又これを薫しても宜し、きせるの脂口にいるゝ時は死、蚤虱蚊遣に用ゆるは、皆人の知る所なり、諸鳥犬猫、皆烟氣を惡、獨猿のみこれを好、

又金魚などの病つきたるに、烟蚕を集め、鱗をこくときは忽活、奇妙なり、

烟草の實を食へば、胎を墮といふ、味噌汁鹽湯冷水其毒を解す、

烟毒を解には、砂糖檳榔子よし、又多く服して醉て頭痛する時は味噌汁よし、なき時は生味噌嘗、

烟毒方

土流求及朝鮮等、所用之管皆長、而其製亦不同、如我邦屢改者、且也如和蘭人所用磁器而長管、其管頭通內之孔細小、而似防煙氣者、又有製煙葉法、先湯煠、而去其辛辣煩暴之氣、曝乾之數日、而後切爲縷、故其味至淡薄也、服之亦至一二吸而止、蓋彼方俗、凡百之制極精緻妙、有他邦之不可企及者、獨煙管不用巧、只磁器而不改者、義取之于不須服邪、又見瓜哇、暹而粗等煙管之圖、其長或及四五尺餘、夫他邦之管、用管長者、爲其煙氣不徒薰灼臟府、而有除煉氣之功乎、其如是、而始可謂無害已、嗚呼八害之論不行、則請別立一法、先長其管乎、而十日一換、以要管中不生煙脂已、○中略庶幾世之嗜之者、亦嘗以余之所標者、標爲天明壬寅之春、玄澤大槻茂質識、

〔北窻瑣談後篇一〕備後福山の家中內藤何某といふ人、或時庭に出たりしに、烏蛇を見付たりしかば、杖もて强く打けるに、其まゝ走りて、草中へ入りければ、草の上より頻りに打て尋求けれども、つひに見失ひぬ、暫程へて、奴僕見當りて、草中に蛇死し居れりと告しかば、內藤出て、杖もてかきのけんとしける時、其蛇頭をあげ內藤に向ひ、烟草の煙のごときものを吹かけゝるが、其烟內藤が左の目に當りて、蛇はそのまゝ倒れ死しける、內藤が眼俄に痛てはれあがり、寒熱出て苦惱言んかたなし、既に命も失なふべく見えし程に、內藤煙草のやにの蛇に毒なることを思ひ出して、煙管のやにを眼中に入れしに、やう〳〵に腫消し痛みやはらぎて、一日計に苦惱退き、眼赤きばかりなりしかば、日々やにを入れたるに、五六日にして全く癒たり、其翌年其時節、又眼痛出したるに、色々の眼科醫の治療を施しけれども癒ざりしかば、蛇毒の事を思ひ出し、又煙管のやにを入れしに忽ち愈たり、二三年も其時節には必目痛みければ、いつも其後はやにを入れて癒ぬ、此事村上叠娘物語なりき、又云、蛇を打し人は助右衞門と云人にて、毒に當りし人は、その庭に居合せし內藤なりとぞ、

〔茅窻漫錄下〕烟草

て利害を論じ、害は多く益は尠きさまに書り、然も極老まで嗜む人さしたる害もなし、おのれも亦此たぐひなり、例せば茄子は食物本草の類、害多きよしに記せれども、本邦には中夏の比めづらしとてもてはやすより、晩秋に至り、或は糠に漬しては終年喰へども、一人も此害をおぼえたる人なし、脾胃に馴ては害なきものにや、唐山の人の獸肉を常に喰ひて其害をしらず、かへりて本邦の米の美味に過て、泥滯をおぼゆるといへるに同じ、

〔蔫錄下〕附考並餘考

蓋此物〇烟草除惡氣、驅寒濕、通痰滯之類、僅僅三四功已、而其爲害者非淺鮮、如諸書所誌矣、夫石龍氏、嘗論四功、余試定八害、按人身元與天地一橐籥也、天氣降、地氣升、人在其中、呼吸吐納、亦是清淨之氣也、其養而營、豈有它乎、而是邪火、日夜熏灼臟腑、而暗殘賊清淨之氣焉、其害一也、人之有飮食也、唯後天之氣是養、於是五味各有司、而如煙者、五味亡所當、故多服、則其人頭痛目眩、卒然發病也、其害二也、酒曰禍泉狂藥、先王之大禮必將、茶曰偏味、廟堂以薦鬼神、今夫煙也、進不能備大禮、退不能携君父師前、只猥褻閭閻之物、而千金之價是競、其害三也、植煙草也、非腴地則不殖、通萬國計之、費稼地者、其壤殆大於公侯之國焉、且民情趁利、於是用力於煙草、而公田稍生莠者不少、其害四也、煙草之初生也、培養灌漑、拂蠹蟲、障風露、其採也、曝乾修造、大妨農暇、其害五也、雖以天下之大乎、則錦繡金銀之費於煙具者許多、恐王侯之服器爲之不給、其害六也、都會接宇之地、火制甚嚴、而必亡賴之徒、慢煙灰而失火者往々有之、其害七也、老人小兒以煙管誤傷咽喉者、余嘗見十數人、是自煙草出後之患也、其害八也、八害中費腴地、妨農暇、賊人壽者、尤爲可恐、〇中略余一日訪苅屋侯醫官推元玄長、談次及之、〇中略主人又曰、予嘗歷見漢土朝鮮流求及和蘭人所用之煙管、皆長管也、服之僅一二吸而止、嘗聞之古老、我古之製亦然也、距今三十年所有稱坂本製者、其管接續而長及二尺餘、則煙氣之薰咽喉者、亦應稍疎乎、未聞短管競美、日夜不絕口者也、由是觀之、今之盛不亦怪乎、此說實與余所論符、〇中略余亦細考之、漢

〔長崎夜話草五〕長崎土產物

煙草○中略　能は煙を吸て鬱氣を開き、氣力を益し、山嵐瘴氣を避け、冷濕を散ず、葉を齒窠に入て、蠹虫を除く、脂は蛇毒を解し、虫齒を堅くす、金瘡に葉を付て血を止む、內障の眼、又は青盲に好といへども、いまだ其驗を見ず、又煙を吸て食を消すといふ、

毒は、多く煙を吸ぬれば口中損ず、又上氣耳鳴に忌べし、眼病に可禁、但虛眼には忌ずといへども、多く吸ては、相火を助くる故に仇となるべし、常に多く吸ときは、呼息を暴くして、血脉運散なり、故に壽命を減ずるの恐あり、いはんや壯年血氣强盛なる人をや、痰喘の人可忌之、勞瘵の病大に禁ずべし、胃火を生じ、心熱を壯にす、

煙草の毒を解するの方、麥門冬、紫蘇子、瓜蔞仁、枇杷葉、甘草、巳上五味等料、如常煎じ、査を去て、砂糖一匙を入て服す、尤妙なり、

〔烟草記〕用法

書物の間に、たばこをはさみおけば、しみさりぬ、

〔安齋隨筆前編十一〕煙草　烟草は古代なき物也、慶長の頃、蠻國より渡り來ると云傳たり、是を不好人は、毒物也とて、其害を論ずる人もあり、酒を多く呑人は、酒毒にて終に內損の病になり、或は吐血、或は浮腫、或は黃疸等にて死する人あり、烟草を好て烟毒に中り內損し、病を發して死したる人を不見不聞、然れば毒物に非ず、良物にも非ず、烟を吸て試るに、讀書寫字に而、心倦み氣鬱したる時には氣を運し鬱を開くを覺ゆ、食後に煙を吸へば、口中爽になるを覺ゆ、此外には何の事もなし、尤無益の物也、

〔閑田次筆四〕烟草は唐山も此方も、なべて二百年來、もはら人の嗜むものにて、一たび吸ては忘れがたきゆゑに、相思草ともいへり、蠻國より出て世に弘まれるにて、本草備要などにも是を出し

〔養生訓 四飲食〕飲茶 附烟草

烟草は性毒あり、烟をふくみて眩ひ倒るゝ事あり、習へば大なる害なく、少は益ありといへども損多し、病をなす事あり、又火災のうれひあり、習へばくせになり、むさぼりて後には止めがたし、事多くなり、いたづかはしく家僕を労す、初よりふくまざるにしかず、貧民は費多し、

〔和事始 四飲食〕烟草

慶長十年の比はひ、始て日本に渡る、そのゝち諸人これを賞飲す略○中今俗に飲食のうちにも、ことに酒、茶、烟草の三飲は、貴となく賤となく、智あるもおろかなるも、わきてこれを賞す、されば酒は毒ありといへども、少く飲時は、人に益ある事醫書に見えたり、ことに聖人もこれをすて給はず、茶は渇を潤し、煩膩を去の能あり、たゞ烟草のみ、益なく害多き事これに過たるものなし、俗輩奴婢のこれを吮は責るにたらず、士君子たる人の蠻國の俗をしたひ、身に害あるものをこのみ賞する事は、甚ひが事成べし、元和元年六月廿八日、將軍家より天下に命を下して、烟草を吸事を禁じ給ひしは、理ある御おきてなりしが、今其禁い弛げるこそなげかしけれ、

〔和漢三才圖會 九十九 葦草〕煙草 略○中

南蠻流外科、青膏藥中、入煙草嫩葉汁、用能止痛排膿、止血殺蟲、凡藍及諸草葉生蟲者、以煙草莖汁灑之、猫犬蛇諸鳥皆惡煙氣、獨猿見刻煙草則抓食、凡人醉煙草者、吸未醬汁解之、冷水亦可、

〔煙草考〕震軒云、烟草氣味辛、性熱有毒、諸家之說皆同也、略○中其有毒、試以管中凝脂少許納蛇口、脂之所至、肉色隨變、遂殭直死、田野人被蝮蛇嚙、急採青葉、絞汁塗患處、即愈、永無遺毒之禍、或藏書以紙包葉、或莖置于卷帙之間笈笥之內、能辟蛀蠹、最勝芸草銀杏葉及樟腦等、諸虫恐其毒如此、亦嗜之者、朝夕起臥、采管不能厭、雖未見甚有害也、其暗損天年亦不可知矣、其過服雖穀肉酒茶平和之物、亦能爲害、其要只在節之耳、

辛氣温有毒、又論四功、者詳矣、至於臟腑經絡、皆稟氣於胃、煙入胃中、頃刻而周於身、不循常度、而有駛疾之勢、是以氣道頓開、通體俱快、然火與元氣、兩立、一勝則一負、人之元氣、豈堪此邪火終日薫灼乎、勢必真氣日衰、陰血日涸、暗損天年、人不覺耳、則能論煙草之害者亦詳矣、然煙草之煙氣、聚則薫灼有毒、散則發越無痕、今人人吸煙吐煙、漸至咽喉之間、不至胃口而出、若有連薫則時飲湯水唾汁、悉下降而去竭、故不受氣火勝負之害者可知矣、加蔗吸煙草之人得壽者多、不吸煙草之人得夭者多、是以亦可知、若自初不嗜者、不耐論是非矣、

附方、蛇毒敷瘡、用二黒膠少許、以末點之、則止、剪刀誤傷、血出不止者、用乾煙草葉敷之、厭之而愈、

〔大和本草六 畏用草〕煙花略○中 鼠ハ好ンデタバコヲ食ス、犬ハ苦キラフ、物性各異也、蛇ニタバコノヤニヲツタレバ、變色カハリテ死ス、

〔見聞小說八 集〕文政八年八月見聞會

京　角鹿比豆流

筑前御儒者井上佐市より、京都若槻幾齋翁へ之書狀與に、

怪談らしく思召さるべく候へ共、實事に付、爲御慰申上候、去る六月初、弊邑管内宗像郡初の浦と申す所の山續に、煙草を作り置候處、何物かあらし候者有之候に付、百姓共申合、猵猴之所爲にて可有御座候間、退拂可申とて、數十人一山に入候處、猵猴五十餘群居候に付、扱こそと能々見候處、中に長一丈二三尺、圍一尺五六寸の大蛇を取り圍み、方に闘居申候、猿ども口と手に、煙草の葉を持ち、蛇前後にかゝり候へば、後猿蛇尾を曳、其闘果しなき摸樣に御座候故、所之獵師、鳥銃にて蛇を打殺し申候、猴は火音に驚き逃去申候、猴共蛇の煙草を嫌ひ候儀を能く存候事、驚入申候、略○中 其所は治下より八里計の處にて、うきたる儀にては無御座候、

七月念三

是は去年申七月の書狀なり

際スル一念ノ起處ハ同事也、ハヅカシキ一念トゾ、是獨愼ノ人ニ非ンバ、是ヲ感得スベカラズ、凡飲食モ多中ニ、火煙ヲ以慰トスル事、末法惡世ノ印也、人ノ短氣短才ナルハ、皆火ノ情也、此一凶ヲ止ズンバ、往々彌火難燁ナラン、

以上、○中略或人ノ隨筆三卷中ヨリ抄出ス、此隨筆未詳作者名字、文中ヲ按ズルニ、元祿ノ比ノ人ニテ、明暦ノ火事ヲモ見シ人ト見ユ、

〔閑際筆記 中〕煙草此ヲ多波古ト云、林羅浮、以本草ニ載所ノ莨菪ト爲ナリ、未知然ヤ否ヤ、大清人吳與沈穆ガ著所ノ本草洞詮ニ、稱之煙草ト爲、其言ニ曰、煙草味辛氣温毒アリ、寒濕痹ヲ治ス、胸中ノ痞膈ヲ消シ、經絡ノ結滯ヲ開、然ニ臟腑經絡、皆氣ヲ胃ニ稟ク、煙胃中ニ入、頃刻ニシテ身ニ周、是以氣道頓ニ開通、體俱快、然ドモ火元氣ト共立ズ、人ノ元氣、豈此邪火終日薰灼スルニ堪ヤ、眞氣日ニ衰、陰血日ニ涸、暗ニ天年ヲ損ズレドモ、人不覺耳ト、稱爾洞詮ニ言所、略其能ヲ説ト雖、實ハ則人ヲシテ其毒ヲ知ラ俾ト欲而已、豈須臾ノ快ヲ爲テ、終身之患ヲ遺哉、且夫人初テ吸之、眩瞀ザルコト鮮、煙管ノ中ニ油煤アルヲ禽蟲誤テ甜之卽死、峻烈如此、咸常ニ見所ナリ、曷洞詮ニ言所ヲ竢テ、而後多毒ヲ知哉、或人曰、豆醬能煙草ノ毒ヲ解、故ニ吸者病ヲ不成ト、然ドモ豆醬ノ力、安其峻烈ノ氣ニ克コトヲ得、銖積寸累、遂爲大患必矣、

〔本朝食鑑 四味果〕煙草

近代癘醫、煉生煙草葉作膏、和膿止痛、或合白占以吮膿、最得奇効、是蕃國之流也、煙草之黑脂塞竅不通、則味噌汁鹽湯能通之、本邦之人、常飮味噌汁鹽湯、故膠脂自不塞咽喉胃口也哉、○中略

葉氣味辛温有毒、(實亦同、俗言食于煙脂、未詳、若然則得味噌汁鹽湯冷水之類、自可解其毒耳、)主治通胸膈、開胃口、拂鬱破悶、消痰解飽、固齒牙、通二便、利九竅、開皮毛、能令一身之氣而上下之、運轉之、快利之、發散之、若有熱湯病者宜忌之、

發明、明順治年中吳與沈穆集本草洞詮、初載煙草曰、一名相思草、言人吸之、則時時思想不能離也、味

ヤ戸口マデ火ノ付ケレバ、早々出ラレコトムリニ引立出シケリ、路スガラモ是ヲホイナタ、予ヲ恨、セメテ一服ノマセザラデト云ツブヤキケレ、其後世モ靜ニ成、參會ノタビゴトニ、カノタバコノ意恨、今ニアリトゾ申ケリ、此者ノ嫁ハ、其〻產後七夜ニ當リ、女房ハ獸病ニテ嫁モロトモニ下人ニ手ヲヒカレテ、行方不知ナリケリ、風ノハゲシキコト云バカリナシ、日ノ光モ見ヘズ、百千ノ雷ノ一度ニ落カヽル樣ニテ、四方鳴ワタリシ也、カヽルヲリカラ、天草ノ烟、サテ〳〵思ヘバ、著心妄執ノ深草ゾヤ、其比ノ舊記、多ク家々ニ有ベシ、故ニ詳ニ記サズ、

一歲淺草堀田殿ノ屋舖ニテ、煙硝ヲハタヽトテ、天草ノ火移リ、四五人打殺サレ、江府カクレ無、響雷ノゴトシ、其時廣間ノ番人、朝請取ノ者遲參トテ、二人ノ內一人、屋舖ヨリ直ニ他出スルトテ、相番ヲ頼、代ヲ待ウケズ出ケリ、其以後ノ事也、番人料ニ行ハルヽ、次第ハ、請取遲參ノ者ハ閉門也、他出ノ者ハ追放、請合ノ者切腹シケリ、常々カヤウノ類ミタノマルヽコトハ多事ナレドモ、互ノ事トテ、弓斷スル也、吟味ノ上ニハ、カヤウゾト知ベキ爲ニ記置也、廣間番人ヘ、火ノ用心申付ベキ由仰渡ノ故也、近年大坂ニテモ煙硝飛ケルモ、カヽルタバコノ故ナルベシ、カヽル惡事日々ナレドモ、天草ノアヤマチハ、人トガムル者更ニナシ、御父上野守〈○守名今闕〉殿ハ、タバコ嫌玉ヒ、常ニ仰ラルルハ、無類ノ侍ヨシトイヘドモ、天草ヲ含ヲ見テハ、無類ノタハケトロソ見ナセト仰ラレシト也、又御祖父ハ、タバコ初ハスキタマヒケレドモ、其後上ニ御嫌トテ、宿ニテバカリ用玉フ處ニ、或時念比ノ衆來、咄居ラレシニ、タバコヲ用玉フヲ見、此人ノ云、貴公ニ於テハ、御用有マジキ事ト申サレケレバ、其時赤面シ玉ヒ、其タバコヲ呑ナシ、烟ヲ吹出シ捨、夫ヨリ堅ク御止リアリケリ、其一服ハ、吸ハタシ玉フベキ事ナルニ、誤ヲ改バ、卽座ニカヤウナルヲ手本ニナシタキモノト沙汰セリ、誤ヲ人トガムレバ、明日ヨリアラタメン、來月ヨリトテヲタル人ハ、一生アラタメザルモノ也、歷歷道ヲ論ズル人モ、此草ノ迷ニ於ハ、法ヲ破リカクレ忍テ用ヒ玉フ、況ヤ凡下ノ者ヲヤ、一切物ヲ

一キセル掃除、人前遠慮ノ事、
一上下トモニキセルクハヘ、コトワザ成ベカラザル事、
一天草飽マデ、チヂ入、永呑殊ニウヘラセ、度々痰ヲハキ、唾スベカラザル事、
此外悪事數多有トイヘドモ、右九〈〇九或八誤〉ケ條ハ極タル罪業也、總テ威イカヽリ、續ザマニ飽マデ呑風情、見苦コソアレ、願クハ我子孫相續セバ、此書ヲ傳テ堅ク守リ、カヽル悪草ヲ手ニダモトルベカラズ、悲哉、此草ハヤリ初シ時、其比ノ明君、末代ノ失ヲ考思召、御法度堅仰出サレ、或時ハタバコ作リタル者ヲ籠舎セシメ、或時ハタバコキセル、辻ニサラシ燒捨、商賣人禁玉フトイヘドモ、此草ニ一度フレ、味ニ著シタルモノハ、命ヲ捨ルコトヲ更ニ不厭、御成敗ニカナハズ、切支丹ヨリモ止ガタク、依之ソロソロ高人ノ中ニモ用玉フ方出來ル、故ニ今ハ是ヲ嫌者アレバ、却テ希有ノ思ヲナセリ、鼻有猿ノ笑ヲ得ガ如ノ世トゾナリケレ、〈中略〉
紀州笠寺ノ住僧、六十歳ニシテ煙草ノ悪ヲ知テ止ケリト、唐ノ蘧伯玉ハ、五十ニシテ四十九年ノ非ヲ知リ、今ノ住僧ハ、六十ニシテ、五十九年ノ非ヲ知トイヘリ、其國ノ大守、ヲリヲリ彼寺ヘ御來臨トゾ、此守護モ煙草アナガチニ嫌玉ヘリ、彼御守殿ヘハ、常ニ戸ザシテ人ヲ入ザル處ニ、或人所望シテ拜見シケルヲリカラ、緣ノホトリニテカノ悪草ヲ呑ケル所ニ、三句ヲ經テ、守護入セ玉ヒ、此所ニ太破己(タバコ)ノ息氣サカンナリトテ、忌玉ヒシト彼僧ノ語レリ、清淨ノ鼻ヘハ、一入悪臭ウツルベシ、〈下略〉
明暦酉歳、武州大火ノ節、予ガ知人本鄕ニアリ、淺草ヨリカケ付見舞ケレバ、亭主病人ニテ、疾家ヲ明退ケリ、亭主ノ伯父ガ家モ疾類火ニ逢、此處ヘ退來ル處ニ、ハヤ鄕マデ火移ケレバ、トクトク出ラレヨト申セドモ、イロリノハタヲ離ヤラズ、何ゾ尋ルテイニ見ヘシホドニ、イカヤウノ大切ノ物ヲ失ヒタルカト問ケレバ、イヤトヨタバコヲ一服呑タキトテ、キセルヲ尋ルトゾ答ケリ、モハ

吹出シ、菓子食物ニ入事ヲシラズ、ヒトヘニ己ガスケル心ニマカスルハ、サリトハアサマシキ愚人ト云ツベシ、イカナル好物トテモ、二六晝夜用ルコトナシ、此草ニ於テハ、片時ノヒマナク是ヲ用ユ、人四五人モ寄合トキハ、キリフカキ山中ニ居スルガ如ク、飢タル者ノ食ヲムカヘ、渇シタル者ノ水ヲ求ムルニ不異、甚見苦敷アリサマ也、若キ女兒法師ナド、責テ用ヒヤウノタシナミ、心付ベキコト也、是ヨリ名香ハ名ノミ殘リテ、惡臭世間ニ滿々タリ、著心ヲ厭事ハ、三道一致ナレドモ、此草ニ於ハ、誰見トハナケレドモ、此失ヲ不尤、禪律ノ師モ甚是ヲ著スル所ニ、隱元來朝、是ヲ忌バ、僧寺計ハ禁ズルト見ヘタリ、ヤサシクモ心付ラレケリ、只物ハ見馴キヽナレシコトハ、誤事モ人是ヲトガメズ、此ニ痰涇ノ病有人、痰壺ヲサゲテ人ノ交ヲセバ、誰カ是ニ近付者アラン、然ニ灰吹ト號、痰ヲ吐事一人ニ限ラズ、數多ノ痰ヲ吐タメ、座中ニ是ヲ置、其匂ヒ已ニ糞土ニコトナラズトイヘドモ、好所ノ迷ニ是ヲ知ザル也、或時ハ堂社佛閣ノ靈場、談義講釋ニモ、半時一時ヲ堪ヘズ、火ヲ覓、痰ヲ吐、又ハ前後ノ人ノ衣服ヲ燒穢スコト、甚テモ餘リアリ、カヽル人ノ參詣ハ、惡業ノ種ヲ蒔ナルベシ、是末法ノ出來病ナラズヤ、辛事ヲ蓼薫ニ習、臭事ヲカハヤニ忘ルヽトハ是ナルベシ、又人ノ喰穢シタル箸ハ、イタク是ヲ忌嫌トイヘドモ、キセルニ於テハ、イカナル癩病瘡毒ノ者ノ痰咽ノ付タルヲモ更ニ不厭、是ヲ用テ樂トナスコト、アサマシキ迷也、業深止メ難キモノハ、責テ大分ノ無作法ヲタシナムベシ、

一第一痰ヲ吐事

一談義講釋ノ時不可用事

一呑ガラノ灰ヲ吹出時可心付事

一食事ノ時、煙草出スベカラズ、尤呑ベカラズ事、

一風上ニテ人ノ面ニ煙ヲ可恐事

し、

〔本朝食鑑 四 味是〕煙草〇中略

煙草有宜新葉者、有去年葉者、或有二三七八年之陳葉、最宜者倶有藏之法、先用厚紙包封、重用油紙包之、或柿澀紙、及用稻草薦而緊縛之、而收于桐匱、或磁壺中、及舊酒槽中亦好、其剉之法、氣烈者極細、氣柔者粗麁、不可風乾、不可火乾、不可日乾、不可水濕、不可湯氣濕、不可酒濕、不可雨雪濕、惟自然半乾半濕爲佳、今市上販之者、膩于葉面、以其柔滑易細剉、然油臭熏咽、不可忍之、最爲毒人、若甚乾甚濕難速剉者、酒水各半合、以荃帚輕輕點之則易剉、此爲急促而不可常用耳、

〔塵塚談 下〕多葉粉剉やうのかはれる事、我等二十歳頃迄は、五分切といふて、あらく剉を伊達にせしに、近歳は至て細く糸の如くに剉む也、四五年巳來は、そのうへにこまかになり、こすりとかいふを賞翫す、剉むに押ゆる板をこまといふ、其こまの木口をすりてのみゐるやうに剉む事なり、

〔烟草百首〕上州館秩父館大山田の土葉、江戸にて用ざる烟草は、大坂へ登事夥し、彼地にては土砂を篩、豐後葉を以卷、鉋にて切に、一日に壹人にて三四十斤切事也、細く猫の毛のごとく、手ざわり至て和らか、然れども油のしめりぬけざる故、快晴の日に干、能乾し、日を經て賣出す、甚油臭し、味も土葉なれば下品なり、唯和かにして火を點するによく、價賤しきを賞してこれを吸、關東の人、此油の匂ひを嫌ふ、鉋にて切工能せしもの故右に圖す、〇圖略

〔一話一言 十五〕烟草の事

世ハ末法ニ下リ、人ニ一ノ大病付ク、所以者何ハ、慶長元和ノ比ヨリ、烟草ト云妖草、異國ヨリ亘リ、人年々ニ賞翫シ用ルコト、日々ニ熾也、無德ニシテ失多トイヘドモ、風味ノ美ニ迷、此失ヲ顧ル人ナシ、聖人ノ世ニ此草出ナバ、五辛五戒ノ誡ヨリ堅カルベシ、第一座席ヲ穢シ、火難是ヨリ起トイヘドモ更不厭、好マザルモノヽ氣ヲ破リ、剰禮義ヲ不知、ケブリシタヽカニ吹カケ、呑ガラノ灰ヲ

烟草刻害

長大、八九月開小花、紫頭簇簇、絶厚面淡赤色、略似石蒜紫苑之類、結子如桐實、而有稜黄色、七八月采葉晒乾、青變作赤黄褐色、而厚爲上、深赤黒而厚者次之、淡赤黒者、淡赤黄者又其次也、薄黄淡青而薄者爲下品、農家湯圃多種之、以貨于四方、得利者不爲小、種之若種去年之田、則苗短葉微而薄、色淺味惡、故年年易田種、新地而種則佳、略似種瓜法、

〔和漢三才圖會 九十九 葷草〕煙草○中略

按、煙草二月下種、五月移栽、摘去新芽、除蟲也、毎旦不可怠、高三四尺、葉似商陸而長大、七八月采葉、覆藁筵蓋之、一宿取出、毎一葉挾繩如編成而晒乾、一夜露宿、復晒乾、則成黄赤色、纍纍收之、八九月莖頭出朶莖、開小白花帶赤色、略似紫菀花、結子、内有細子、黄褐色、有小蟲、而食其子、故能不避蟲、則難得其種、

〔烟草百首〕叢續〇考るに、高三四尺とあれども、館大山田の類、豐作の時は五六尺に延、葉三十四五枚もつくなり、其地所にあひしものなるべし、國府安房葉龍王は、六月末に葉をとり、館は八月、大山田沼田の類は、九月末に葉をかくなり、國府は葉を攝す、根本より刈、莖のまゝ乾し、黄赤の色つきし時葉をとる故、葉の莖形よく、駒の爪のごとし、

〔烟草百首 叢書〕烟草和漢ともに禁むること、一體此草腴田にあらざれば味惡、これを種するに、若去年の畠に植る時は、則苗短く葉微にして、枯葉多く色淺、味宜からず、年々畠を易肥を入、新地に種する時は、則葉の實入よく、力ありて薫よし、至て地所を荒す草故、五穀の妨をなす、殊に日用一切の糧にもならざれば、天下に令して、是を種することを禁ず、本朝は田地異國に勝れて、米穀は悉多、新地年々增、中にも常州水戸、武州秩父山は、田面少く畑地多、山々谷々、新地を開きてこの草を種するに、地所にあひけるや、季夏のころは、莖長さ五六尺に延、葉三十枚除を生ず、初冬に至て、東都へ出し販賣するに、五穀に利を倍し、其國潤へる故、自然と盛なりしも、愛度御代の驗なるべ

烟草栽培
烟草製方

矣、所謂登米郡猥河原、鱸淵、岩井郡東山之保呂波、舞草、膽澤郡衣川、宮城郡國分之三十人街、皆上人口者、而猥河之長崎村、衣水之常法院、三十人街之杉下、其尤也、氣味芬香、不讓隅州國府煙、近時輸奥煙中最麁惡者於都下、奸商僞呼猥河原、懸牌販賣、故都人士、以猥河原爲凡煙、何其寃也、余鄕之土產、以其素所知附記焉、

〔色音論末〕此ごろ世間には、いかなることやはやるらん、かたり賜へといひければ、中略されば、しよてらも多けれど、ほつけのおてら御門跡、上手のくすし、もろはくと、丹波たばこに肥後ぎせる、くはんせがしまひこんばるが、うたひは今のはやり物、

〔長崎夜話草五〕長崎土產物

煙草　蠻人種子を持來りて、長崎櫻馬場といふ所に植てより、普ねく世にひろまれり、此故に今も櫻馬場のたばこは、色も香ほりも他所とは各別なるもの也、

〔賤のをだ卷〕其比は寬延年間女は、龍王、もきの類、男は館殿藤などを呑たり、今はうつりかはりて、もき至て和かく色は黃なりなど呑む女は一人もなし、貴賤男女ともに國府たばこならでは、呑ぬやうに成たり、

〔後は昔物語〕彼瘁也といふ隱居が云、近頃は薩摩國府といふたばこ、所々に見ゆ、火附のよきたばこなりといへり、其頭は和泉新田とて、白く黃色なるたばこを、女は多分のみたりと見ゆ、傾城もこれをのみたりと聞く、

〔南方海島志下〕八丈島土產

烟草、頗ル佳也

〔本朝食鑑四味果〕煙草

集解、煙草素自南蠻國來、移種子本邦、不過六七十年、此苗叢生類萵苣、莖高三四尺、葉似南星商陸而

尾州　畑百五十三町八畝歩　二萬三千七百斤餘
濃州　畑百二十三町八反歩　一萬八千五百七十斤餘
江州　畑一町八反歩　二千七百斤餘
肥前基肄養父兩郡の内　畑一町四反歩　二千百斤餘
右聯の地所たりとも、午年より半減の作方なり、その後諸國新田開發し、烟草を種することおびたゞし、當時に至りては國々の業算るに遑あらす、

〔雍州府志土產六〕多波古〇中略多波古、山城州山科郷山、攝津州服部、丹波新田、河內、和泉新田產爲宜、悉貢京師、

〔雅筵醉狂集雜〕たばこを
人の來てさしの言の葉きれ口によしや芳野のたばこ一ふく

〔新編相模國風土記稿三〕山川名所圖產附
國中山海原野ニ產スル物ハ、〇中略煙草、大住郡波多野庄村々ノ產ナ、波多野煙草ト稱シテ佳品ナリ、足柄上郡、八澤、萬龍、柳川、虫澤、境、境別所、坊窪、松田總領、同庶子等ノ九村ニ產スルヲモ、波多野煙草ノ佳品ト賞セリ、其內松田二所ノ產ハ、松田煙草トモ云フ、

〔善光寺道名所圖會一〕生阪眞御前生坂など、世に賞する其根元を尋るに、犀川の河上に、川並十三ケ村といふあり、其內の上生坂村にて製するを眞の上品といふ、慶長の頃、生阪稱名寺の禪僧、西國筋修行し侍りし砌、長崎にて煙草の種を得て持歸り、我菴室の庭に植て作りしより段々廣まり、異村にても多く作り出し、諸國へ運送して產物となりし也、今も其寺中に出來たるを上品とす、御前生阪といふは、上生阪村につくるをのみいふとぞ、

〔蔫錄上〕土宜
茂質〇大槻曰、近時煙草之盛也、我邦毎州至無處不產、但其品類有好惡耳、〇中略如吾奥中所出、亦極多

く、秩父館大山田は、脂ふかしといへども、和らかき事餘葉のおよぶ所にあらず、是を五町烟草といふ、

又曰、館。大山田。脂ふかきは至て汐風を嫌ふ、もし汐風あたる時は、きつく脂臭くなるもの也、遠國へおくるにも心得ざるときは、東都の名產もほいなく、餘國の葉にも劣るべし、

一ケ年の內に、諸國より江戶へ來る烟草の高、大概を左に記す、最江戶近在へ贈荷物夥出る有、又諸國より香料の葉江戶へ入あり、これを差つぎて凡を見る、

國分舞留下り物十四萬八千斤餘　上州秩父館百六十萬斤餘　水戶下野大山田二百十六萬斤餘　甲州其外諸國三十萬斤餘　水戶下野奥州切粉百六十五萬斤餘　信州切粉百五十萬斤餘

都合七百三十五萬八千斤餘

大概の積、人數百十餘萬人に割付て見る時は、一人に一ケ年六斤六分八厘九毛餘、是を以て之を見る時は、百中喫ざる者、唯二三人といへるも宜なり、

常州水戶領赤土年員は、寛文の初より烟草を植けるに、元祿の末は盛し、其斤高左に記す、

常州　畑千百五十八町七反二畝五歩〔畝ニ十五斤積〕百七十三萬八千八十斤餘、

下野　畑三百十五町七反九畝二十八歩　四十七萬三千六百八十斤餘

合テ二百二十一萬千七百六十斤餘

右は元祿十五午年、常州野州兩國にて種する所也、其內近國及上方筋へも登すことなり、この頃は切粉にては出ず、全葉のみなり、〔當時より見る時は半にも足ず〕然處作方盛にして、米穀の妨ならんと、元祿十七〔〇七恐六誤〕未年より、半減の作方仰付らる、

紀州勢州兩國にて　畑八百五十二町八反四畝　百二十七萬九千二百六十斤餘

攝州服部の地　畑二町九反二畝歩　四千三百八十斤餘

丹波桑田郡

山本

國府に續きたる名葉にて、奇香異味國分舞留美を競、然といへども此葉甚辛烈故、人是を好ず、近來鬪和を毀所似なり、上を留葉と云、通て中を舞葉と云、下を薄舞と云、上土地に產すれば、葉に力なくとも嘗有、畠地へ產するを上品として俗に舞と云、田地へ產するを下品にして服部と云、下品なるは火を點するに忽滅、都て我國は、何地にても田へ產る烟草は皆下品也、稻を耕すに聊障なし、舞留上中下の葉、ともに五年七年の古葉を賞美す、殊に止葉は數年圍置しを上品とす、氣味辛といへども香氣る口中清凉にして水を嗽がごとし、

葉○補考るに、中葉未熟せずして枯萎する者味薄けれども芬郁也、これを舞と云、葉の其横壘に潤みて見ゆ中葉下力なきを鑿婆と云、俗にば、アとも云、舞といふ名あるによりて、姫の老たる意なるべし、○中略

烟草は味辛く氣温にして毒ありと、醫書に見ゆれども、一體異國の烟草は、葉に力ありて辛烈故に毒多し、東洋の烟草は人命を助るほどの能あるが故に、又毒もあるべし、我邦のたばこは、能もなく毒もなし、明和安永の頃までは、辛を上品とせしが、近來作方肥を撰み、和柔に乾晒す、中にも舘は葉に力ありて、和らかなる名葉なれば、日本の中にても、江戸の烟草は名產なり、都て關西の品はきつく、關東は和らかなり、蠻國にても東洋は勝れて、西洋は劣といふ、唐土にても閩の產は上品とす、燕の產は中品、浙江石門は下品なりといふ、○中略

〔烟草百首〕烟草至て好る人旅行の時用る、五町烟草の取合は、野州馬頭山の最上の油脂の深きに、秩父薄邊の脂つよき葉と等分に合せ剉、道中は度々つき替ことを厭へば、右の烟草に火を點る時はきゆることなく、きせるに息をいれざれども、五町が間滅ざるを奇とす、前にもいへるごと

食鑑に、水戶赤土の產を著、然る時は天正の頃、タバコ島より渡て、大隅國噲唹郡國府へ植、又慶長頃、西洋の種を長崎へ栽しものか、其後丹波の笹山、攝州服部、和泉河內、及中國筋、信州埴科郡、甲州小松、上州山名館、奧州邊迄、諸國種せざるといふ事なし、野州。常州。は、近年の產地なり、江戶にておほく吸へるところの、武州秩父の名葉出初しは、四十年以來、又信州生。坂。は、三十年にたらず、昔服部を第一の名產とすれども、あじはひ辛烈故、今は國。府。を極上品となす、芬都なるが故(價も高し)なり、和柔を好めるものは館を良とす、辛とも香氣を好者は舞留を上品とす、

〔烟草百首頭書〕烟草諸國名產

大隅噲唹郡

國府　砂走　車田　武元　龍王　伊勢ヶ屋舖　砂ヶ町

大隅の名產にて諸葉の最上とす、薰り高く風味佳、國分寺の境內に產する葉勝れて美味也、其故に國分の名あり、產する地聊なる故販賣するに足ず、皆噲唹郡の內より出る、薩摩の產といふは誤也、島國府と云は、薩摩の國の郡也、葉形も賤く下品とす、一體此國暖なる故、中春種蒔、夏土用明頃懸乾、初秋には江戶へ積出、故に葉に粘脂なく、火を點ずるにうつりよく消ざるを賞す、三四年圍置、古葉になる時は薰り勝れて美也、價高し、葉に力ありて、細刻するに碎けざる故鬘(カモジ)たばこの名あり、

長崎は初て栽し土地なれども、至て下品なり、日向の葉形に似たり、

攝津島下郡

服部　塚脇　西河原

山城乙訓郡

石津

乞食集りて、燧火打にてたばこのむ、呵る體なし、

〔新增犬筑波集〕

　にが〳〵敷もたうとかりけり、

　　皆人のまいるやふきの塔供養

　たばこ法度の春の山でら

當世ふきのたうをたばこの代にのむ故なり、速着僧房欵多花といふ詩もあり、

〔毛吹草三〕山城。　則多葉粉　花山多葉粉　伊賀。　多葉古　丹波。　野々村多葉粉　肥前。

　白多葉粉

〔本朝食鑑四 味毛〕烟草〇中略

今諸州多產、攝州服部之產、葉色赤黃赤黑、有奇香異味、爲當世第一、和州吉野。萱村。之產、亦葉色赤黑、有異香美味、而次之、此兩品俱䏸美、其氣不烈不麤、多吸不損口舌、最少脂膩、泉州新田。之產、亦有佳香、然氣弱者香多、氣烈者香少、亦次之、甲州之門前。小松。信州之和田。玄古。上野州高崎。之產、葉色或赤黃、或黃黑、亦有異香、而不相劣、爲佳品、就中氣最烈者、丹之周山。甲之石火宮。也、常之赤土、世人有僞賣者、然味宜氣濁、而不爲佳、肥之長崎者、蓋煙草初起之地、其產葉色黃靑、氣柔薄有臭、而不足用耳、

〔大和本草六 民用草〕烟花〇中略　初山州花山ニ刺ミタル、花山タバコト云、又吉野ニ植ヘ、後ニ丹波ニウツス、

〔和漢三才圖會九十九 葷草〕烟草〇中略

備後備中、及關東多出之、今攝州服部之產爲第一、泉河新田次之、上州高崎、和州吉野、甲州小松、萩原

信州玄古、薩州國分、丹波大野、皆得其名者也、

〔烟草百首〕これ〇和漢三才圖會三 正德二年の印本にて、いまだ此頃は常州野州の產は著ざるなり、本朝

ヤ煙草ニ於テヲ乎、君子如何ゾ是ヲ禁ズルコトノ要乎、

〔春波樓筆記〕夫タバコの大害は、田畑を損ず、又火災の患、此の微火より發る、屢禁ありと雖も敗る、戻る事なき術あり、今よりして小兒に之を吸はしむべからず、若禁を背く者あらば、父子をして共に死罪にす、大約三十年四十年にして、漸々止むべし、

〔宇佐問答〕中略或云、天下の奢美故、諸士の用不足にて、年々に高めんになりぬれば、百姓も地の者計り作りては、年貢にまどふ故に、烟草を作りて商人へ賣、年貢の足しとす、御たばこに塞ぐ地計りも、日本國中を合せて、近江程なる大國、二三ケ國は空しからん、それにかゝりて過る者は、皆々遊民也、烟草の道具に費ゆる竹木銅鐵やきもの、其外あげて數へがたし、煙草きざみになりて世を渡る者計りも、三萬餘人あるべしといへり、烟草を作らぬやうに、それに懸りたる者共もいたまぬ樣に、五六年程に御止めなされたらば、此一色にても日本の國々廣くなり、諸人ゆる〳〵と可仕候、此御仕置計りにても、奉公人は多くなり侍らん、其なされやうは長々しければ略しぬ、

〔我衣〕寶永ノ比、鶴ト云名高キ比丘尼アリ、中略宿ハ神田ニテ、同店ノ裏ヨリ出火アリケリ、中略御吟味有ケルニ、一人彼鶴ト申比丘尼、朝クハヘギセルシテ、廁ヘ行タル由申上ル、彼鶴ヲ召シテ、右クハヘギセル致セシト申者ト對決ニ及ブ、鶴申ヒラキ成ガタクシテ火附ノ科ニオチ、火罪ニナリタリ、中略前々ヨリ往還幷門外クハヘギセル御停止ニテアリケル、可愼々々、

〔見た京物語〕町々御行燈或は張紙に

御法度

たばこの火出し不申候

くはへぎせる無用

とあり

覺

一來申年多葉粉作候儀、當未年之通、去午年迄作候高之半分作之、殘半分之所には、土地相應之穀類可作之候、若相背蜜於有之は、曲事たるべく由、御料は奉行御代官、私領は地頭より、急度可被申付候、

右之趣、此方より可申通由、御老中被仰候間如此候、去冬御觸書之通、無相違樣可申付候旨被仰出候、以上、

未十二月

永井伊賀守
松平伊豆守
丹羽遠江守
萩原近江守

〔享保集成絲綸錄二十二〕享保六丑年六月

一御祭禮(江戶山王祭禮)御供之者共(中略)御曲輪之內にて、烟草一切給申間敷候、

〔和漢三才圖會九十九草〕煙草(中略)

和漢煙草、凡同時始矣、初出海外、後傳種於津州泉州、今處處有之、葉大於茱、開紫白細花、葉老曝乾、細切如絲、大明崇禎十一年令云、有私販煙酒賣通外夷者、不拘多寡梟斬、由此觀之、則大明季人最貴之(嘗本朝寬永年中)矣、往古無煙草、而莫不足、多吸之亦不充一飢、徒費田圃、減穀類、故呼曰貧報草、元和寬永之比、天下令禁種之、然不得止、竟以立於茶酒之上、不嗜者百中唯二三人耳、雖有小毒、多嗜者亦無害矣、(阿蘭陀朝鮮琉球人、亦皆嗜之、)

〔閑際筆記中〕近世烟草ヲ嗜コト愈衆シテ、之樹ル者モ亦多、最良田美地不限所、以穀少ナリ、夫酒ハ天ノ美祿、養耆頤祀、人ノ爲ニ歡ヲ合ス、如有可闕ハ、聖賢猶コレヲ廢トセズ、戒之ヲ制止ス、而ヲ況

ざるむね、前々令せられしに、このころ犯すものあり、東は保科肥後守正容が邸邊、西は牧野備後守成貞が表門邊まで、小人目付して見廻らしめ、煙草用ふるものあらば、其主の姓名をも糺さしむべしとなり、

〔常憲院殿御實紀三十一〕元祿八年十月二日、町奉行に命ありて、所屬の與力をして、晝夜ともに途上にて、煙草喫ながら往來する者あらば、見及ぶまゝにいましめしむべしとなり、

〔德川禁令考四十四煙草作禁〕元祿十五午年十二月

たばこ作之儀、當年迄作り來候半分可作事、

覺

前々よりたばこ粉本田畑ニ作間敷旨、度々相觸候得共、連々たばこ大分作出し候、來〔未〕年たばこ作候儀、當年迄作來候半分作之、殘半分之處ニハ、土地相應之穀類可作之候、若相背輩於有之ハ、可爲曲事者也、

〔午〕十二月

覺

相觸候書付之通、御料ハ奉行御代官、私領ハ地頭より申付候、當年迄たばこ作候、前々町未〔〇町未恐作來〕〔脱〕候高書付、其内半分たばこ作候様申付、殘半分ハ穀類作候様ニ申付候段書記之、來年二月迄之内、御勘定所へ可被差出候、且又穀類可作之所々、種不足之所ハ、奉行御代官地頭より種之儀申付之、田畑荒ざる様可被致候、以上、

〔午〕十二月

元祿十六未年十二月

〔申〕年多葉粉作候儀達

り、
○按ズルニ煙草百首ニ、上文白木屋ノ事ヲ載セタ、此れ甚非なり、元和の頃は、下ざまにてきせるを用べき皆なし、羅山文集に合て考べしトアリ、

〔煙草記〕禁発

或書にいはく、日本元和寛永のころ、天下に令して、たばこをうゆることを禁せしむ、然れども止ことをえず、つゐに茶酒の上にたつ、

〔京城紀事十六〕小笠原右近大夫、捕賊偽將山田右衛門作、致之信綱、○松平伊豆守右衛門作、素爲良民、未嘗與賊通謀、住口津村、及事起、賊捕其妻子、爲質、不得已從賊、賊爲其用、欲伺釁于功贖其罪、○中略信綱携右衛門作還、寓諸邸中、密捡數匠殘黨、時都下屢失火、毎多延燒、信綱邸、嚴禁喫烟、有邏所本竊喫烟燒其席者、信綱處之斬、且曰、非殺其尸、未足懲人心、而邸中無由殺尸、則使右衛門作描其始末、掲之邸中胸人所、○中略右衛門作、更名古庵、以西洋畫聞世、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕慶安四年辛卯町觸に、烟草呑候處、家内ニ定め置候て、其場所より外にて、たばこ呑ざる樣可仕事、

〔德川禁令考四十四煙草作禁〕寛文七未年閏二月十九日

本田畑にたばこ作候事停止、野山は不苦旨、

覺

於諸國在々所々、本田畑ニたばこ作候事、自今以後可被停止之、但野山を新規ニ切起シ作候儀ハ不苦候、右之趣、各御代官中江堅可被申付候、以上、

未閏二月十九日

〔常憲院殿御實紀二十八〕元祿六年十月、此月令せられしは、東西内外の下馬所にて、煙草喫べから

呑み、不存寄珍ら敷物を給べ、過分乜とて座を立て又立かへり、今日の義は、手前も各も同前の事なり、重てより必御無用也、御上にて殊之外御嫌ひ被遊候事に候へば、此以後は無用にと御申有るに付、其段内々にて入申迄となり、其以後湯呑所の多葉粉、ひしと相止むとなり、

〔翁草五〕當代奇覽と題せるものにあらゆる雜談有り、十が一爰に拾ふ、

寛文の頃迄有し古老の云く、○中略大猷院殿○徳川家光御代に、烟草は世の費也とて、堅く御停止に成、江戸町々烟草狩を仰付られ、日本橋の傍に矢來を結、江戸中のきせるを其中へ取捨る、夥敷事云計なし、如此堅御法度なりしが、其後間もなく破れぬと老翁の語き、

〔本朝世事談綺二器用〕烟管

元和元年六月二十八日、天下一統に多波古御停止ありける、そのころ白木屋といふ者、柳原の封彊を通るに、うかれたる乞食の、菰の下にしのびて、たばこを呑を見る、渠がおもふは、かくきびしき御停止に、儻につきたる者だに、これを捨得ざる事、かほどに世の人好むなれば、近ほどにゆるやかならん事を考へ、江戸京大坂の捨れるきせる、其外たばこの器の、當時用だゝざるを買求め庫に納む、はたして程なく此禁の弛けり、時に右の器物を賣て、大きに利を得て、富有と成りて今に榮ふ、

〔本朝世事談綺正誤器用一〕烟管

按るに程なく御制禁の弛けりといへるはひがことなり、ひと度御禁しのありしより、今に、御免はなきを、つき〴〵ことゆるやかになりもて行しなり、そがゆへにきせるのみ、御用とて名のれる職はあらず、今兩國に村田屋といへる喜世留○留下恐脱二職字一も、御飾御用といへるとぞ、また白木屋の事、俗間に傳ふる所のもの、本文にかはれることなし、今現にかの家の印に、〆如此なるものをつくるは、きせるをもて、ふたつうちちがへたるかたちを、かたどりたるものといへ

一同作候在所者、爲過料、百姓壹人に付て、鳥目百文づゝ可出之事、

一同作候所々代官、爲過錢五貫文出すべき事、○中略

右條々堅所被仰出也、仍下知如件、

元和二年十月三日

安藤對馬守
土井大炊頭
酒井備後守
本多上野介
板倉伊賀守

〔梵舜日記〕元和四年六月十七日甲戌、タバコ賣者共、伊州○板倉伊賀守ヨリ俄改、數十人取籠、雜色ニ申付事行也、

〔落穗集追加六〕多葉粉初りの事

問曰、何れの御代の義に有之や、多葉粉を作る義、諸國共に御法度被仰出、御城内にては、多葉粉を給る義、御制禁堅被仰出と申傳るゝは、其通りの義にて有之や、答曰、我等承り及候は、多葉粉御制禁の義は、台德院樣○德川秀忠御代の義に有之由、多葉粉作り申間敷旨、諸國へ被仰出を以て、向後御城内に於ては、多葉粉給る義、堅御法度被仰出るゝ由、其砌之義にも有之候哉、御城にて御番衆の溜呑所へ各々寄り集り、多葉粉を呑被居るゝ所へ、土井大炊頭殿御老中の節、ふと御越の義有之、何も驚天被致、手ん手に多葉粉道具を取りかくし候を、大炊頭殿見給ふに付、御番衆に、其御ふすまを立て被申候樣にと御申、則書座有りて、只今何れもの呑れし物を、我等へも振舞れ候樣にと御申され候へば、何れも迷惑被致、兎角の挨拶無く、赤面の體にて居られければ、達て所望に付、無是非袖の中より多葉粉入きせる抔取り出して差上られければ、大炊頭殿被取て、二三ふくも御

いふことはやれり、是は南蠻より渡りたりといふ、廣き草の葉をきざみ、火をつけて烟をのむなり、

〔煙草考〕芝峯類說曰、淡婆姑、草名、亦號南靈草、近歲始出倭國、雲軒曰、謂煙草出倭國者誤也、蒋氏詳說、西洋人得其種於東洋、通震旦以傳日本琉球、此說甚明矣、

〔慶長日記 五〕慶長十四己酉年卯月、一此比荊組、皮袴組とて、徒者京都に充滿ス、五月中搦取之、〇中略依此儀たばこ法度也、右の徒者もたばこより組ニ成と云々、きせるを大にして腰にさし下人にもたせ候、　七月、一たばこ法度之事、彌被禁、火事其外有費故也、〇泰平年表傳ニ七月十四日

〔安齋叢書 三〕烟草集說

腐濃集 俳諧師立志著 曰、〇中略

條々

一たばこ吸事被禁斷畢、然上は賣買者迄も見付輩は、雙方家財を可被下也、若又於路次見付候に付ては、たばこ幷賣主を所に押置可言上、則付たる馬荷物以下、改出すものに可被下事、

附於何地もたばこ作べからざる事

右の趣御領內へ急度可被相觸候、此旨被仰出者也、仍而執達如件、

慶長十七年八月六日

〔武家嚴制錄 二十三〕一たばこ作幷賣買御停止札

條々

一たばこ作者、町人は五十日、百姓は三十日、自分兵粮にて籠舍たるべき事、

一同賣買候もの同前之事

〔大和本草六民用草〕烟花略〇中 日本ニ初テ来ルコト、天。正。ノ。初。年。ナルベシ、或曰、慶。長。十。年。初テ来ル、

〔和漢三才圖會九十九葷草〕煙草略〇中

按煙草天。正。年。中。、南蠻商舶、始貢此種、略〇 註 以植於長崎東土山、

〔奥州會津四家合考附録十二〕會津舊事土直考 采撰於先聖略記者之土直、而不加其實録焉、以備後之博覧矣、

第百八代後陽成院 慶。長。四。年。己亥 此年、略〇中 貢蓍始用焉、

〔武江年表一〕慶。長。十。年。乙巳、南蠻よりタバコ蕃椒を渡す、長崎にて櫻馬場へ、はじめてタバコを栽る、一説天正中、蠻人持渡るといふ、

〔地方凡例録二〕田畑名目之事附四木三草貢蓍始之事

一貢蓍は、三草〇紅花、藍、麻、には非ざれ共、倭漢高卑共是を嗜、三草に續たる物也、元蠻國に生じたる由、本朝へ種草之渡たる始は、慶長十乙巳年、南蠻國お肥前國長崎へ種渡り、同所櫻之馬場へ作り始、其後海内に廣まり、今國々に名產有、併禁庭御會には不用之、諸侯方に而も賓客招請には用ゐざる事なり、

〔北窻瑣談後編二〕一後世などはだん〳〵諸國の通路ひらけ、產物器物等迄も多くなれり、或人の話に、煙草は慶長十年、南蠻國より種を渡せり、漢土へ渡れるも大抵同じ頃とぞ、始の程は火災のおそれありとて、官よりも禁ぜられしかど、其禁終に破れて、今にては飲食につぐものとなれり、漢土も始は禁ぜしに、其禁破れたりとぞ、味の美なるにもあらず、酔て面白きにもあらず、腹滿るにもあらず、何の事無きに、かくまで人の好めるはいかなる故とも知がたし、

〔慶長日記三〕慶。長。十。二。丁未二月、此比たばこと云事はやる、是は南蠻ヨリ渡と云々、煙草葉を刻、火ナ付、煙をのむ、

〔嬉遊笑覧十上飲食〕煙草は慶長十二年の頃はやりて、其種を長崎櫻の馬場に植しとかや、望一千句に、たばこやも雖し、御恩や思ふらん治れる世の末も長さき、或書に、其頃の日記に、此ごろ多葉粉と

烟草傳來

〔昆陽漫錄〕絲烟

前年或人西土のきざみ烟草一包を惠む、その包内の小票に云く、福建陳元禮、向在浦城西關馬頭開張、特選上々頂葉佳製生烟、發販四方、味甘絲明、色鮮勁足、向有異路低烟、冒稱浦城者多、但買者眞假難辨、今本號特設包内小票、凡賜顧者、請認富有圖記、庶不致冒稱、眞假辨矣、謹白と、何處にても後世はことみな便利なるを好むなり、且そのきざみ甚だほそきゆゑ、絲烟と云ふなり、

〔蜀山百首〕戀

うづみ火のしたにさはらでやはらかにいひよらん言の葉烟草もがな

〔嬉遊笑覽十上飲食〕一種嗅たばこと云もの有り、其器物紅毛の細工にて、犀角瑪瑙などに金銀を飾り、精巧に造れる物あり、其形圓扁にして、昔の薄き貝木入の如く、蓋は螺つがひなり、

〔蕉錄下〕附考並餘考

玄澤氏曰、答跋菰之傳種乎歐羅巴洲也、距今不甚遠矣、中略古老相傳、此物傳於我邦、在元龜天正際、頗是波爾杜瓦兒人所傳、何者按白石先生采覽異言、西番之來、自波爾杜瓦兒國始到于豐之神宮浦、實爲天文十年辛丑秋矣、十二年癸卯、又泊于多禰島、爾後來我西鄙、歲歲不絕、元龜元年庚午春、至肥前國、求以互市、置場於彼杵海口、今長崎港卽此、由是觀之、其初傳之、果波爾杜瓦兒國人、而在元龜天正之際者、可以知也、

〔落穗集追加六〕多葉粉初りの事

問曰、世上の貴賤上下共にもてはやす多葉粉の義は、上古來は無之物にて、近來のはやり物に有之由、其元には、如何聞き被及候や、答曰、我等若年の比、或老人の物語り仕るは、多葉粉と申者は、古來は無之所に、天正年中の切支丹宗門と申事の世に廣り候時節より、多葉粉も初る也、然ば元來は無之所、南蠻國の土產の草抔にても有之や、下略

〔大和本草 六民用草〕烟花 略○中 日本ニ初テ來ルコト、天。正。ノ。初。年。ナルベシ、或曰、慶。長。十。年。初テ來ル、

〔和漢三才圖會 九十九葷草〕煙草 略○中

按煙草天。正。年。中、南蠻商舶始賣此種、略○ 註以植於長崎東土山、

〔奥州會津四家合考 十二附錄〕會津舊事土直考 采二煙於先鑒略記者之土、其而不脚ニ其處實、載焉、以備二後之博覽一矣、

第百八代後陽成院 慶。長。四。年。己亥 此年、略○中 莨菪始用焉、

〔武江年表 一〕慶。長。十。年。乙巳、南蠻よりタバコ蕃椒（たうがらし）を渡す、長崎にて櫻馬場へ、はじめてタバコを栽る、一説天正中、蠻人持渡るともいふ、

〔地方凡例錄 二〕田畑名目之事附四木三草莨菪始之事

一莨菪は、三草○紅花、藍、麻、には非ざれ共、倭漢高卑共是を嗜、三草に續たる物也、元蠻國に生じたる由、本朝へ種草之渡たる始は、慶長十乙巳年、南蠻國ゟ肥前國長崎へ種渡り、同所櫻之馬場へ作り始、其後海内に廣まり、今國々に名產有、併禁庭柳營には不レ用之、諸侯方に而も賓客招請には用ゐざる事なり、

〔北窻瑣談 前篇 二〕一後世などはだん〳〵諸國の通路ひらけ、產物器物等迄も多くなれり、或人の話に、煙草は慶長十年、南蠻國より種を渡せり、漢土へ渡れるも大低同じ頃とぞ、始の程は火災のおそれありとて、官よりも禁せられしかど、其禁終に破れて、今にては飲食につぐものとなれり、漢土も始は禁せしに、其禁破れたりとぞ、味の美なるにもあらず、醉て面白きにもあらず、腹滿るにもあらず、何の事無きに、かくまで人の好めるはいかなる故とも知がたし、

〔慶長日記 三〕慶。長。十。二。丁未二月、此比たばこと云事はやる、是は南蠻ヨリ渡と云々、煙草葉を刻、火を付煙をのむ、

〔嬉遊笑覽 十上飮食〕煙草は慶長十二年の頃はやりて、其種を長崎櫻の馬場に植しとかや、望一千句に、たばこやも對し御恩や思ふらん治れる世の末も長さき、或書に、其頃の日記に、此ごろ多葉粉と

烟草傳來

〔昆陽漫錄〕絲煙

前年或人西土のきざみ煙草一包を惠む、その包內の小票に云く、福建陳元禮、向在浦城西關馬頭開張、特選上々頂葉佳製生烟、發販四方、味甘絲明、色鮮觔足、向有異路低烟、冒稱浦城者多、但買者眞假難辨、今本號特設包內小票、凡賜顧者、請認富有圖記、庶不致冒稱、眞假辨矣、謹白と、何處にても後世はことみな便利なるを好むなり、且そのきざみ甚だほそきゆゑ、絲煙と云ふなり、

〔獨山百首〕戀

うづみ火のしたにさはらでやはらかにいひよらん言の葉烟草もがな

〔嬉遊笑覽十上飲食〕一種嗅たばこと云もの有り、其器物紅毛の細工にて、犀角瑪瑙などに金銀を飾り、精巧に造れる物あり、其形圓扁にして、昔の藥入の如く、蓋は螺つがひなり、

〔蕉錄下〕附考並餘考

玄澤氏曰、答跋菰之傳種乎歐羅巴洲也、距今不甚遠矣、中略古老相傳、此物傳於我邦、在元龜天正際、顧是波爾杜瓦兒人所傳、何者按白石先生采覽異言、西番之來、自波爾杜瓦兒國始到于豐之神宮浦、實爲天文十年辛丑秋矣、十二年癸卯、又泊于多禰島、爾後來我西鄙、歲歲不絕、元龜元年庚午春、至肥前國、求以互市、留場於彼杵海口、今長崎港即此、由是觀之、其初傳之、果波爾杜瓦兒國人、而在元龜天正之際者、可以知也、

〔落穗集追加六〕多葉粉初りの事

問曰、世上の貴賤上下共にもてはやす多葉粉の儀は、上古來は無之物にて、近來のはやり物に有之由、其元には、如何聞き被及候や、答曰、我等若年の比、或老人の物語り仕るは、多葉粉と申者は、古來は無之所に、天正年中の切支丹宗門と申事の世に廣り候時節より、多葉粉も初る也、然ば元來は無之所、南蠻國の土產の草抔にても有之や、下略

ロノ木ヲ檀トカクト同キコトニテ、煙ノ音ヲカリテ草冠ニ從ヒ、菸ノ字ヲ用タルトミエタリ、コノ外近年ノ本草ノ末疏ニハ、種々詳ニ載ヲケ[illegible]、又晋ヲ記ス、唐詩紀ノ內、李白ガ詩ニ、相思如煙草、撩亂無多春ト云リ、相思草ト名タルハ、コレヨリ出ルニヤ、偶然ニ符合セルニヤ、李ガ詩ハ本ヨリ烟ト草トノコトナリ、

〔煙草考〕蘐軒云、煙草初至于本邦、人不知其正名、只以番名稱焉、鉅儒宿奮、或以爲莨菪、或以爲不然、是非不一、信疑相半、近世賈舶、載來本草綱目、人買之、初識煙草之名也、其後諸書續至、益知煙草非莨菪也、

〔長崎夜話草五〕長崎土產物

煙草〈略〉○中 此草は、日本の東方にあびりかといふ國あり、此國に一人の美女あり、名を淡婆姑(たんばこ)といふ、國中の男子、此女を戀したふもの甚多かりし、死せし後まで世になつかしむ人多くて、ある時一人の男子、此墓に詣でしに、秋の日早く暮にければ、其儘にて通夜せしに、夜更て甚飢たり、仍そのあたりを探りみれば、草のかうばしきあり、一葉をとりて喫ふに、飢忽ちにやみ、身温かに冷風肌を犯す事なくして、寒氣を防ぐ事、酒を飲るが如し、此故に南靈草と號し、又は煙酒共いひ、あるひは相思草ともいへり、是より世界萬國に流布す、一度此煙を嗜ぬる人は、是を忘れんとしても忘るゝ事あたはず、相思草の名義なるかな、

〔おほうみのはし〕延寶の帝〈靈元〉煙草をよませ給ひける、

烟のかゝる蔭にはあらねどけぶり草なみゐる人のしほとこそなれ

○按ズルニ、此歌近代世事談〈一飲食〉ニハ、後水尾天皇ノ御製トセリ、

〔雅筵醉狂集四〕寄烟戀

ねられぬ夜むせぶ思ひにくらぶればきざみたばこのけぶりうす色

花（花鏡）淡把姑（同）擔不歸（同）淡芭菰（漳州府志）淡婆姑（芝峯類說）南靈草（同）淡肉果（物理小識）菸（行厨集）芬（同）煙（景岳全書）返魂草（李時珍食物本草）　細切如線、名金絲煙（花鏡）返魂煙（同上）煙酒、

〔大和本草（六民用草）〕煙花　タバコハ、蓬溪類說ニ、淡婆姑草ト云、漳州府志ニ、淡芭菰トカク、タバコ異國ノ方言ナリ、或曰、日本ニ初來リ、丹波ヨリ其粉ヲキザミ出ス、故ニ丹波粉ト云、此說妄語也、○（中略）今案本草洞筌ニ所載　煙草モ、亦淡婆姑ト同物ナリ、今南京ニハ烟ト云、漳州福州ニハ芬ト云、キザミタバコヲ切芬ト云、朝鮮ニハタバコヲ南草ト云、○（中略）今國俗スベテ莨菪ヲタバコト訓ズ、アヤマレリ、中華ニ莨菪ハ古ヨリアリ、延喜式ニ莨菪ヲノセタレバ、日本ニモ昔ヨリアル草ナルベシ、タバコハ日本ニモ中華ニモ古ハナシ、近代外國ヨリワタルト云、故ニ本草綱目ニハノセズ、○（中略）長崎ニテ、唐人ハミナ煙草ト云、莨菪トハイハズ、是ヲ以莨菪ニ非ル事ヲシルベシ、

〔秉燭譚（四）〕煙草ノコト

タバコハ南蠻ノ產ナリ、百年前ニ日本ニ來ル、ソノカミハ本草ノ莨菪ナリトイヘリ、此ハアヤマリナリ、ソノ後沈穆ガ本草洞詮ト云書新ニ渡リ、ソノ九卷ニ煙草ヲ出ス、曰煙草一名相思草、言人食之、則時時思想不能離也ト、ソノ說甚詳ナリ、コレヨリ世間ノ人、タバコハ煙草タルコトヲシル、四五十年前ニ朝鮮人ノ撰スル、芝峯類說ト云モノアリ、ソノ十九卷ニ曰、淡婆姑、草名、亦號南靈草、近歲始出倭國云々、或傳、南蠻國有女人淡婆姑者、患痰疾、積年服此草得瘳、故名ト、此書ハ朝鮮ニテ、何人ノ撰ト云事ヲ知ズ、相國寺白長老ノ從子ニ、松村昌庵ト云老人アリ、先子ノ舊キ門人ナリ、タダコノ一段ヲ寫シテ傳フ、全部ハ何ホドアルコトヲシラズ、對州ヨリ携ヘ來ルナルベシ、予○（伊藤長胤）弱年ノ時ニ寫シヲケリ、コレヨリ淡婆姑ノ名世ニ弘リ、比日市店ヲ見レバ、招牌ニコノ字ヲ書ケリ、近年清人陳淏子ガ花鏡一套東來シ、金絲烟、擔不歸等ノ名、サマ〴〵ノセヲケリ、擔不歸モタバコノ唐音トミエタリ、又行厨集ヲミレバ、菸ノ字ヲ書リ、是モ日本ニテ、マキノ木ヲ槇トカキ、ム

地多產答跋菰草一云、此地土宇開拓、及產物等說、別有譯文、故略、又采覽異言曰、係南亞墨利加洲中、屬加蠟哥斯(カラコス)、海上諸島
都十八、其中一島、始出煙草之所也、其地號稍相近、有南北之異、當時傳譯之日、偶致此錯誤也乎、

〔鹽石雜志 一〕物の名
煙草、たばこは蠻呼なり、

〔和漢三才圖會 九十九〕煙草(たんばこ) 相思草(本草綱目) 淡婆姑(蠻國紀) 淡芭菰(漳州府志) 煙酒

〔煙草記〕異號(凡一百餘今擧過半)
煙 芬 切芬 煙草 薰草 煙兒 煙火 煙花 煙葉 煙酒
煙草火 返魂草 返魂草 金絲煙 金絲草 相思草 擔不歸 淡婆姑 淡把姑 淡芭菰
南蠻煙 南蠻草 南蠻草 南草 慶長草 貧報草 貧乏草 愛敬草 敬愛草 思案草
分別草 長命草 延命草 延壽草 慶喜草 常樂草 永樂草 常盤草 養氣草 長嗜草
長嗜煙 延嗜草 愛煙草 開友草 太平草 丹波粉 多葉粉 多波古 太羽古 太婆古
打破魂 賓發粉 た 貫若 闔蕩 貫蕩 濮蕩 闔菰 菰蕩 蘊蕩

○按ズルニ、本書此下ニ於テ、上文揭ル所ノ稱呼ニツキテ、一々釋義ヲ下シタレドモ、要スルニ固ヨリ俗傳ニ過ギザレバ、今姑ク稱呼ノミヲ摘錄シテ、此ニ異聞ヲ廣ム、

〔羅山文集 五十六 雜著〕佗波古希施婁
。。。佗波古、希施婁、皆番語也、無義釋矣、(中略)○或曰、此藥香船載來而自長崎達於群國、其盛行如此、然出何醫書歟、曰比年諸醫不知之、頃聞醫者如見、撿本草綱目而到貫若、其狀貌主治及竹筩引煙之事、皆似之、蓋其流乎云爾、

〔一本堂藥選續編〕煙草
此物在古未洽人間、故無其名之可定、按本草貫若爲尤近、後世盛行、呼爲煙草、(本草綱目)又名相思草(同上)煙

烟草名稱

ニシテ末ハ五瓣、小キ桔梗花ノ如シ、色紫又黄花モアリ、共ニ蔕ハ沙參桔梗花ノ蔕ノ如シ、花謝シテ蔕漸ク大ニ成テ棟子ノ如ク、淡綠色、中ニ細子多シ、褐色ナリ、三月ニ實熟シテ苗枯ル、根ノ形山草薢根ノ如シ、誤テ食ヘバ其味腹内ニアルアイダハ狂氣奔走ス、故ニハシリトコロノ名アリ、和俗誤テ烟草ヲ以テ莨菪トス、大ニ非ナリ、コレハ證類本草及ビ綱目莨菪ノ圖、實ノ形チ烟草ノ花ニ似タルヲ以テ誤ルナリ、

〔草木育種後編 下藥品〕莨菪 本草　醫心方おにほみぐさといふ、俗にハシリドコロ、ホメギグサ 肥後 などいふ、番名にてベルラドンナ 蘭名 といふ、處々深山に生ず、根の芽を一ッ付てかき、木口へ灰を付、赤土の陰地に栽てよし、山の蛭樹木の下によし、春早く根を分てよし、油かす干鰯等少し根に入てよし、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥
伊豆國十八種 中略 莨菪子一斗、　相模國卅二種 中略 莨菪子二升、下略

〔北窻瑣談 前篇四〕肥後の國の山中に、方言ドウタウといふ草あり、烟草の葉に似たり、甚毒草にて、是を喰へば發狂して、三日計はさめずといふ、ドウタウとは、莨菪の事なるにや、

〔本朝食鑑 四味果〕煙草 俗稱多波古　釋名、煙酒、俗客稱之、言服煙則面熱眼眩如醉酒也、

〔雍州府志 六土產〕多波古　倭俗莨菪謂多波古、然其形狀氣味小異、本草洞詮所載煙草是也、

〔蕉窻録 下〕附考並餘考
答跋菰名通行于萬國、是以其所產爲名者、猶我俗稱其地產呼甘孛知亞、加奈乃兒、應帝亞、沒厠箇未亞類也、雖然乎世人未知答跋菰之爲地名、其偶有知之者、亦未知答跋菰地屬何洲、其長廣幾何、今考噫蘭萬國與地略、其第一千零五十九葉曰、答跋鶴 一名泥可止亞奈、一名泥物哇兒設力、者、北亞墨利加北海安止兒力斯諸島中跋兒路扁咄所屬之一小島也、其地東西十六里許、南北六里餘、乃西北水路之一要港、而此

〔廣益地錦抄七〕白英(ひよどりじやうご) 蔓草、多もかれずして有、春葉を出す、葉に白色あり、四五月に白小花を開く、實は葉の間々より下へさがりて、一所に十數ほどづゝ付ク、秋玄ゆくして色赤、竹にからませてながめ有、花壇にうへべし、俗ひよどりせうごといふ、

〔本草和名草十〕莨蓎(楊玄操音、蓎作二薚一)一名行唐、一名横唐、一名狐鷗根(出二釋藥性一)和名於。保。美。留。久。佐。

〔倭名類聚抄草二十〕莨蓎子 本草云、莨蓎子(和名於保美留久佐)

〔箋注倭名類聚抄草十〕千金翼方、證類本草不載、本草和名亦無有、按下條有莨蓎子、和名與此同、則知莨是莨字之譌、而複重者、宜從删去也、

〔倭名類聚抄草二十〕莨蓎子 本草云、莨蓎(蓎音二唐、和名於保美留久佐)

〔箋注倭名類聚抄草十〕千金翼方、證類本草下品作莨菪子、本草和名作莨蓎、無子字、與舊同、伊呂波字類抄莨蓎莨蓎子並載、蓋其所見本、或有或無、故並擧二名也、按無子字、蓋其實非是、然源君所載草本名、似多從本草和名、引之則有子字者、恐是後人依增、非源君之舊、(略)○(中略)玄應音義引埤倉云、莨礍毒草也、廣雅、恣草、莨礍也、玉篇廣韻並云、莨礍藥也、史記倉公傳、作莨礍藥、

〔和漢三才圖會九十五毒草〕莨菪(略)○(中略)按莨菪海濱有之、其葉形略似野菊、而莖葉皆有白細毛、四五月開花、有白有赤、結實如罌子、俗稱之河原艾、非也、(阿蘭陀國有二一種一、今人不レ知二眞莨菪和名一、西國瀕海之間已、或以爲二莨菪草一者誤)

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草〕莨菪 オ。ニ。シ。ル。グ。サ。(延喜式) オ。ホ。ミ。ル。グ。サ。(和名鈔) ツ。メ。キ。グ。サ。 ホ。メ。キ。グ。サ。 ヤ。マ。サ。 ナ。ヽ。フ。桔。梗。(江戸) ハ。シ。リ。ト。コ。ロ。(肥後) 一名猥蓎(類書纂要) 虎茄(月令廣義) 草牛黄(本草綱目) 牙疹子(本草原始)

肆中ニ眞渡ナシ、深山幽谷ニ生ズ、宿根ヨリ早春ニ苗ヲ生ズ、紫黒色、長ズレバ淡緑色、圓莖高サ一尺餘、葉ハ互生ス、形ハ商陸ノ葉ニ似テ小ク狹シ、又長葉ナル者アリ、梢葉ノ間ニ花ヲ生ズ、本ハ筒

白英

多熟シテ深紅色、白頭鳥好テ食フ、霜後苗枯ル、

〔新撰字鏡草〕白英（保○呂○志○草、又豆○具○禮○乃○伊○比○留○、）

〔本草和名草六〕白莫、（○莫恐英誤、本草綱目引拾遺、一名白草、）一名穀菜、一名白草苦菜、（陶景注云、疑或是）一名鬼目草、（出蘇敬注）一名排風草、一名鬼目、（出拾遺）一名酸迷、（出稽疑）和名保呂之、一名都久美乃以比禰、

〔倭名類聚抄草二十〕白英　蘇敬本草注云、白英一名鬼目草、（和名保○曾○之○、一云豆久美乃伊比留、）

〔箋注倭名類聚抄十草〕本草和名、保曾之作保呂之、與新撰字鏡合、此作曾恐誤、蘇又云、蔓生、葉似王瓜、小長而五椏、實圓如龍葵子、生熟紫黑、今按爾雅、苻、鬼目、注似葛葉有毛、子赤如耳璫珠、若云子熟黑誤矣、

〔和爾雅草七木〕白英（穀菜、白草並同、）

〔和漢三才圖會草五十六〕白英○中略

按、白英葉似菊葉而柔大深叉、七月開小白花、五瓣、抱子蘂外、有飛鳥之狀、其子赤、熟時鵯喜啄之、故俗曰鵯上戸、赤鶺鴒嗜之、（故曰鶺鴒之飯稱乎）然鶺鴒不如嗜螻蛄、

〔重修本草綱目啓蒙草十五〕白英　マ○ル○バ○ノ○ホ○ロ○シ○　マ○ル○バ○ノ○ヒ○ヨ○ド○リ○ジ○ヤ○ウ○ゴ○　ム○マ○ノ○ナ○ン○バ○ン○北國　イ○ヌ○ノ○ナ○ン○バ○ン○同上　ノ○ナ○ン○バ○ン○越後　ノ○ゴ○シ○ヤ○ウ○同上　ツ○ル○ト○ウ○ガ○ラ○シ○大坂

ホロシト訓ズルハ非ナリ、ホロシハ蜀羊泉ナリ、此草ハ即蜀羊泉ノ剜缺ナキモノナリ、故ニマルバノホロシト云フ、山ノ幽谷又江邊ニモアリ、春舊根ヨリ苗ヲ生ジ甚繁延ス、藤葉共ニ毛ナシ、葉ハ圓長ニシテ尖リ互生ス、夏花ヲ開キ穗ヲナスコト、蜀羊泉ニ同シテ、邊ハ淡紫色、内ハ深紫色ニシテ黄心ナリ、其實亦蜀羊泉ニ似タリ、秋ニ至リ熟シテ深紅色、ソノ形圓ナル者アリ、微長ナル者アリ、微長ナル者ハ番椒ノ形ニ似タリ、故ニナンバンノ名アリ、番椒ヲ東北國ニテナンバント呼ブ、秋深テ苗枯ル、

龍珠

蜀羊泉

ツノ葉實根外家ノ要藥ナリ、

〔延喜式 内膳 三十九〕漬年料雜菜

龍葵味葅六斗、料鹽四斗八合、楡三升、○中略 右漬春菜料、○中略 龍葵葅六斗、料鹽六升、楡二升四合、龍葵子漬三斗、料鹽九升、○中

略 右漬秋菜料

〔續々修東大寺正倉院文書 四十六帙六 裏書〕豐國熟瓜等進送文

龍葵拾五把 ○中略

天平勝寶二年七月四日　倉垣三倉

〔武江產物志 園草〕道灌山ノ產　龍葵

〔重修本草綱目啓蒙 十一 隰草〕龍珠　ヤ○マ○ホ○ウ○ヅ○キ○　ハ○ダ○カ○ホ○ウ○ヅ○キ○

山谷及山足陰地ニ生ズ、其形龍葵ト相似リ、唯葉龍葵ニ比スレバ狹シテ毛茸ナシ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、一莖ニ簇ラズ、形チ苦蘵花ニ似テ淡黄色、其實蜀羊泉ニ似タリ、生ハ青ク熟スレバ深紅色、已ニ實ヲ結ブ者ハ、秋深テ根枯ル、未實ヲ結バザル者ハ、春ニ至テ更ニ苗ヲ生ズ、

〔本草和名 九 草〕蜀羊泉、楊玄操音本草作全字 一名羊泉、一名羊飴、一名漆姑、出蘇敬注 一名羊全、出雜要訣 唐

〔多識編 二 草〕蜀羊泉、今案于○波○之○計○之○、異名羊飴、別錄

〔重修本草綱目啓蒙 十一 隰草〕蜀羊泉　ホ○ロ○シ○古名　ヒ○ヨ○ト○リ○ジ○ヤ○ウ○ゴ○　ツ○タ○サ○ン○ゴ○ジ○ユ○備前　ツ○ル○サ○ン○ゴ○ジ○ユ○同上　ツ○ル○サ○ン○ゴ○　チ○ヤ○ボ○ノ○ホ○ウ○ヅ○キ○勢州　ウ○ル○シ○ケ○シ○　烏蔓 和方書　一名青杞 救荒本草　雪下紅 秘傳花鏡　珊瑚珠 同上　雪裏珊瑚 農圃六書　漆草 附方　萃葉 品字箋

原野ニ多シ、蔓草ナリ、春月舊蔓ヨリ苗ヲ生ジ、草木ニ纏繞ス、毛アリテ赤牛藤ノ如シ、葉ハ菊葉ニ似テ、薄ク柔ニシテ鋸齒ナシ、毛アリ互生ス、夏葉間ニ小枝ヲ生ジ、上ニ多ク小叉ヲ分チ、叉ゴトニ一花ヲ開ク、白色黄蘂大サ四分許、形番椒花ニ似ツ、後圓實ヲ結ブ、南天燭子ヨリ大也、生ハ青ク、秋

〔東雅十三穀蔬〕茄子ナスビ〇中略　倭名抄に、〇中略　龍葵はコナスビといふと註せしは、本草に據るに、其葉如茄子、其實味酸、中有細子、亦如茄子なるによりて、此名ありし也、もとこれ茄子の類にはあらず、防葵を呼てヤマナスビといふが如きは未詳、今俗に玫瑰をハマナスビといふなり、此物東國の地方にては、海濱に生じて、其實を結ぶこと茄子の如くなれば、方俗呼びて此名あるなり、

〔古名錄四十三蓏〕古奈須比倭名類聚抄　漢名牛嬭茄中藏經　今名コナスビ ヒトクチナスビ

正誤按ニ後人臆度ヲ以テ、龍葵古訓古奈須比ト云ニ據、イヌホウヅキトス、非也、古奈須比ハ今一口茄子ト云者此也、古ヘ龍葵ニ誤リ充、イヌホウヅキハ實黒色、南天子ノ大ニシテ、食用ニナルベキモノニ非ズ、

〔大和本草九雜草〕龍葵　コナスビ、一名イヌホウヅキ、又ヒタイホウヅキ、葉ハ茄ニ似テ子小ニシテマルシ、熟スレバ黒シ、茄子ニハ似ズ、且大小甚異、其實ヲ汗瘡ニ付レバ愈ユ、本草ニ此能アル事ヲ不載、又一種實ノ赤アリ、龍珠ト云、日本ニハ此種未見之、

〔草木育種後編下蔬品〕龍葵草本　山中にあり、原野の濕地に實熟するをとりすぐにまき、又春蒔て生じ易し、糞水を澆ぐ時は別て勢よし、又畦へ蒔てもよし、和蘭にて偏痺に用ふ、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕龍葵　イヌホウヅキ　イヌホウヅキ　コナスビ　ウシホウヅキ城州　ヒタヒホウヅキ大和本草　イノホウヅキ讃州　イヌゴセウ豐前　一名狗尿珠千金翼方　天茄兒苗救荒本草　老鴉睛正字通　鴉睛同上　加个曹面采取月令

原野及人家ニ自生多シ、宿子地ニアリテ春苗ヲ發ス、高サ一二尺、或ハ三四尺ニ至ル、枝葉トモニ互生ス、枝ハ多ク横ニ廣ク繁布ス、葉ハ酸漿ノ葉ニ似テ、短毛多シテ臭氣アリ、夏月葉間ニ花開ク、數十萼一莖ニ簇垂ス、五瓣ニシテ白色黄蘂、形番椒花ニ似タリ、花後圓實ヲ結ブ、大サ南燭子ノ如シ、生ハ青ク、熟スレバ紫色後黒色ニ變ズ、内ニ小扁子アリ、苦蘵子ニ似テ淡黄色ナリ、霜後根枯ル、

龍葵

案内者（寛文二年印本中川喜雲著）四の卷、七月七日東西本願寺の花、東西ともに對面所の簀に立らる、造物籠にさす、○中略近年は江戸酸漿子とて、七月に色のあかきをもとめ出して、よき採色の物とすといふ事あり、寛文の初に近年といへば、此江戸ほゝづきは萬治のころよりありし物歟、俳諧毛吹草（寛永十五年編）の季寄八月の條に、鬼灯（青ほゝづきは夏なり）とあり、案内者にいふところを見れば、七月に色づく鬼灯は萬治前はなかりしなるべし、

江戸新道（延寶六年印本言水編）　里の子やすゑに吹らん江戸鬼灯　必色　柳亭云、此句江戸廣小路には、上の五文字いかなる風とあり、○中略いま丹波鬼灯の名をいひて、江戸鬼灯の名をいはず、今六月より色づきたる鬼灯あるは、是則江戸鬼灯歟、又いつか江戸鬼灯は絶て、丹波の國の種をもとめて、植けるもの歟、

江戸酸漿の條○追考

延寶四年梅盛が著し、類船集に、山灰草むかしよりありつらめど、近年江戸酸漿とて、美しく赤きあり、青ほゝづきの時分に、はや珍らしければ、もてはやす事とぞ、丹波より來る青酸漿は吹散されぬべし、青になり、端にはさまれ云々、かゝれば前にもいふごとく、いま夏より色づくは、江戸鬼灯にて、丹波の種にはあらざるなるべし、

〔本草和名　十八〕龍葵、一名苦菜、（出二蘇敬注一）和名古。奈。須。比。一名久。佐。奈。須。比。

〔倭名類聚抄　十七〕龍葵　本草云、龍葵（和名古奈須比）味苦寒無毒者也、

〔箋注倭名類聚抄　九〕蘇敬曰、龍葵即關河間謂之苦菜者、葉圓花白子若牛李子、生青熟黑、但堪煮食、不任生噉、本草圖經云、葉圓似排風而無毛子亦似排風子、李時珍曰、四月生苗、嫩時可食柔滑、漸高二三尺、莖大如筯、似燈籠草而無毛、葉似茄葉而小、五月以後開小白花、五出黃蘂、結子正圓、大如五味子、上有小蒂、數顆同綴、其味酸、中有細子、亦如茄子之子、

〔百姓傳記十二〕ホウヅキヲ作ル事

一ホウヅキノ種今三色見ヘタリ、地ホウヅキハ節間永ク、葉大キニ育チ、サヤ大キニトヲナリシヲ、ホウヅキ小サク、秋ノ末ナラデハ熟セズ、惡キ種ナリ、サツマホウヅキト云テ、フシ合短カク、葉地ホウヅキヨリ小サク、サヤモツマリ、ホウヅキ大キニシテ、フシ毎ニナリ、デク際ヨリ赤クナリ、ホウヅキ大キナル種アリ、又南蠻ホウヅキ共云、チンチクリントモ云テ、木タデフシニシテ、葉小サク、ホウヅキノサヤ小サク、先ヲ内ヘ押込タルヤウニシテ、五月末ツ方ニ赤ヲミ、大キナル種アリ、必フシ毎ニナル見事ナルモノナリ、土地ニ嫌ヒナク育ツ、然ドモ黒フク土輕土、日蔭木下ニハ忌ムベシ、フシ間延過、虫付テ葉枯花落テホウヅキナシ、濕ケ地ニ猶能ラズ、種ヲ二月蒔テ夏中ニ實ナリ、秋ニ色付、夫ハ六ツ箇數キナリ、植付ノ根ヲ冬ヨリ正月ノ節ニ入マデ植直シテヨシ、其儘置テハ茂ク生ヘ出、木ニ病ヒ付、ホウヅキナラズ、植直スニ根ノフシヲ助ケ、フシ間ヨリ折テ間ヲ遠ク植ヨ、肥エ地ニ植テハ、木蔓コリ花付ズ、瘠地ニ好ミテ植ヨ、

〔草木育種下藥品〕酸漿草本　根分ハ二八月よし、濕地を好もの也、魚洗汁人糞を澆ぐべし、又瓔珞ほゝづきは、實の形長刀ほゝづきに似たり、

〔古事記上〕須佐之男命、〇中略問汝哭由者何、答白、言我之女者自本在八稚女、是高志之八俣遠呂智、此三字以音毎年來喫、今其可來時故泣、爾問其形如何、答白、彼目如赤加賀智而、身一有八頭八尾、〈中略〉此謂赤加賀智者、今酸醬者也、

〔日本書紀二神代〕一書云、〇中略先驅者還白、有一神、〇中略眼如八咫鏡、而赩然似赤酸醬(アカヽヾチ)也、

〔枕草子九〕おほきにてよき物

ほうづき

〔還魂紙料下〕江戸酸漿

〔本朝食鑑四山草〕酸醤子(和名保保豆木、今訓保宇豆木、)

集解、酸醤者世常所用之保宇豆木也、田園家圃皆種之、草不過二三尺、葉如蘩蔞頭而薄、四五月開小花黄白色、紫心白蘂、狀如中華之盃、無瓣、但有五尖、結一鈴殼、凡五稜一枝、一兩顆下懸、如燈籠之狀、夏青至秋變赤、殼中一顆如金橘、而深紅作瑠璃色、女兒愛啄去瓤核、吹之啣之而鳴、作草蛙之聲、或鹽漬藏封貯、多春之用、以爲庖厨之供、或貯夏土用之井水、漬連赤殼之酸漿子、則至冬春而外殼如紗羅、中間之紅子、似白紗燈籠中之火、若過秋不替水、則易敗也、近時洗衣之舊汚不脫者、用酸醤汁而滌之則脫去、脫後復醤汁色不消者、用木患子皮或赤豆粉而再滌之則悉脫盡矣、今農家與西瓜番椒同作貨殖者也、江都甚多、關西京師倶不多者土地不宜乎、

子、氣味、甘酸寒無毒、主治、消酒毒、

發明、蘇頌曰、尤益小兒、必大(野)○平(按)、今時不然、予往見小兒誤食之發熱吐而驚、後又聞有若斯者、然亦有常嗜食之而竟不中毒者、此二者因其腸胃之強弱耶、因其時之幸不幸耶、然則曰無毒而可也、未至有益者耳、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕酸漿　カヾチ　アカヾチ　ヌカヅキ　ホウヅキ(ホウト云虫ツク故ニ名クト、大和本草ニ見ヘリ、)

一名姑娘菜(救荒本草)　燈籠兒(同上)　掛金燈(本經逢原)　絳囊(行厨集)　叱利阿里(鄕藥本草)

春月宿根ヨリ苗ヲ生ズ、形狀時珍ノ說ニ詳ナリ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、一瓣ニシテ牽牛花ノ如ク、五尖アリテ五瓣ノ如クニ見ユ、故ニ如盃狀無瓣、但有五尖ト云リ、花後實ヲ結ビ下垂ス、熟スレバ外殼紅色ニシテ美ハシ、一種外殼矮扁ナルアリ、コレヲキンチヤクホウヅキト云、カボチヤホウヅキ、ヒラホウヅキ(作州)、タ、リヅキン(江戸)其餘數品アリ、凡酸漿實已熟スルモノヲ盆ニ栽ヘ、冬月紙袋ヲ覆テ寒ヲ防時ハ能久ニ堪ヘ、其殼筋脈ノミ殘リ、蟬翼ノ如クシテ、中ノ紅實ヲ透見シテ燈籠ノ如シ、

様、但龍葵莖光無毛、五月入秋開小白花、五出黄蘂、結子無殻、累々數顆同枝、子有蒂生青熟紫黒、其酸漿同時開小花、黄白色紫心白蘂、其花如盃状、無瓣、但有五尖、結一鈴殻、凡五稜一枝、一顆下懸如燈籠之状、殻中一子状如龍葵子、生青熟赤、以此分別、便自明白、

〔下學集 草木 下〕山灸蓝(ホウヅキ) 又云鬼燈、其實赤如灯也、

〔東雅 草卉 十五〕酸漿ホヽヅキ　舊事紀に八岐大蛇の眼如赤酸漿と見え、日本紀もこれに依られて、赤酸漿はアカヽヾチと註せられたり、古事記にも赤加賀智としるして、今の酸漿といふ者也と註し、又猿田彦神の眼の事をも、かくぞしるされたりける、太古の俗の常語とこそ見えたれ、倭名鈔には錄名苑を引て、酸漿一名洛神珠、ホヽツキと註せり、並に義詳ならず、萬葉集抄に、カとは赤き也と見えたり、カヾとは其赤くして赤きをいひ、チとは其汁の血の如くなるを云ひしなるべし、ホヽヅキとは或人の説に、ホヽといふ蟲のつきぬる者なればかく云ふなり、ホヽとは蛓(イチムシ)也といふなり、

〔古今要覽稿 草木〕くたに○

くたに、古今物名、源氏物語、古今六帖、くたには苦薏の轉音にて、酸醬のごとなり、たんのんをにといふことは、しをんをしをに、せんをせにといふに同じ、古今集の打聞に、木丹の略也といひしは信じがたし、かゞち、日本書紀神代卷　通證云、重遠云赤燭血也、譬其顔三色也云々、この説いかゞ、按にかゝは赫の字の意にて、明らかなることをいへり、出雲風土記に、光加賀明也と云ことみえたり、酸醬はその色赤くかゞやくものなれば、かゞとはいふなるべし、ちはそへいふことば也、ほゝつき、和名鈔 篤信云、保々は虫の名好て食之、故に名づく云々の説非なり、谷川士清云、保々都伎は火々著なり、この説よし從ふべし、火々は加賀と同じく、その色の熟するに從ひて、あかくかゞやくいろのそはる故に、火火著といふなり、ぬかつき、本草和名 按にぬははつ語にて、かづきは加賀著の中略なり、○中略 洛神珠、嘉祐本草 本草綱目釋名時珍云、以子之形名也、三母珠、嘉祐本草名義同上、苦蔵、郭璞爾雅注 本草綱目釋名時珍云、以苗之味名也、皮弁草、本草和名引古今注 本草釋名時珍云、以角之形名也、○下略

俟テ、其上清ヲ傾ケ去リ、雙次モ此ノ如クニナシテ、其上清無色無味ニ至ルヲ度トシ、水氣ヲ去リ太陽ニ曝シ、或ハ微火ニ上セ乾カスナリ、用法葛粉蕨粉ノ如クニシテ、此ニ勝ルコト萬々ナリト云フ、

燒酒

馬鈴薯モ亦甘藷ノ如ク、製シテ酒トナス可シ、但シ蒸餾トナシテハ用ヒ難シ、蒸露シテ火酒トナス可シ、然ルトキハ其性猛烈其味芳辛ニシテ、上好ノ琉球酒アハモリニ減ゼザルナリ、

〔新撰字鏡 草〕酸醬 加。波。豆。支。又奴。加。豆。支。

〔本草和名 草〕酸漿、一名酢漿、一名酢菜、出雜要訣一名苦蔵子、出小品方一名洛神珠、一名王母苦蔵珠、出兼名苑針音一名寒漿、已上出陶景注一名苦蔵、一名苦蔵子、一名王母珠、一名皮弁草、已上出古今注一名酸芳草、出雜要訣和名保。々。都。岐。一名奴加都岐、

〔倭名類聚抄 二十 草〕酸漿 兼名苑云、酸漿一名洛神珠、和名保保豆木

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕按爾雅蔵、寒漿、郭注云、今酸漿草、江東呼曰苦蔵、古今注、苦蔵、長安兒童謂爲洛神珠、兼名苑蓋本於此、陶云、子作房、房中有子、如梅李大、皆黄赤色、蜀本圖經云、根如菹芹、白色絶苦、圖經曰、苗似水茄而小、實作房如囊、囊中有子、蘇敬曰、燈籠草、枝幹高三四尺、有花紅色、狀如燈籠、内有子、紅色可愛、嘉祐本草云、苦耽、生故墟垣塹間、高二三尺、子作角、如撮口袋、中有子如珠、熟則赤色、關中人謂洛神珠、一名王母珠、一名皮弁草、衍義、苗如天茄子、開小白花、結青殼、熟則深紅、殼中子大如櫻亦紅色、櫻中腹有細子、如落蘇之子、此即苦耽也、今圖經又立苦耽條、顯然重複、本經無苦耽、時珍曰、楊愼卮言云、本草燈籠草苦耽酸漿皆一物也、修本草者、非一時一人、故重複耳、此說得之、酸漿以子之味名也、苦耽以苗之味名也、燈籠皮弁以角之形名也、王母洛神珠以子之形名也、又云、龍葵酸漿一類二種也、酸漿苦蘵一種二物也、但大者爲酸漿、小者爲苦蘵、以此爲別、其龍葵酸漿苗葉一

八十八夜頃ニ、此ヲ種ユベキ地ヲ耕シ、其土塊ヲ細碎シ、其後馬鈴薯ヲ取リ、毎處二三塊ヅヽ、種ユテ、其上ニ輕ク土ヲ覆ヒ、逐次ニ此ノ如クニシテ種ルナリ、其法常ニ甘藷ヲ種ル法ト同ジ、又此薯ハ地ヲ揀ムニ及バズ、田畔路傍砂石交錯スル地、其外他ノ穀類播殖ニ妨害トナラザル處ニ、培養ス可シ、又其性寒ニ堪ユルヲ以テ、山野ニ種ルモ佳ナリ、大抵播種ヨリ三十日許ヲ經レバ、嫩芽ヲ萌出シ、莖ヲ生ジ蔓生スルナリ、蔓二尺餘ニ至レバ、其端末ハ殘シテ、其中央ノ處ニ輕ク土ヲ覆フ可シ、此ヨリ新根ヲ出シ蔓ヲ生ズルナリ、凡ソ此ノ如クニシテ、莖葉次第ニ蕃茂スルニ至レバ、一根ヲ以テ數十塊ノ薯ヲ得ルナリ、但シ新根ノ薯ハ其數少ナク、其形小ニシテ又水氣多シ、舊根ノ纖根ニ附ク者ハ、連珠ノ如ク數十塊攢簇シテ、其形モ太ク、且ツ滋味多シ、故ニ之ヲ上トス、又之ヲ以テ明年ノ種子トナス可シ、和蘭地方ニ於テハ、一根ヲ以テ、百塊若クハ百四五十塊ノ薯ヲ得ルト云フ、然レドモ本邦ニ於テハ、大率一根ヲ以テ、四五十塊ヨリ六七十塊ニ至ルヲ極トス、

〔二物考〕馬鈴薯　食用

新生ノ者ハ直ケニ煮熟シ、又ハ蒸熟シ用ユ、若シ蘞味アルトキハ、先ヅ灰汁ニ投入シテ其氣ヲ去リ、又乾固スル者ハ、温湯ニ浸シ、軟和スルニ至リ、其後煮蒸シテ、或ハ單味之ヲ食トシ、或ハ飯ニ和シテ之ヲ用ヒ、或ハ羹ニ調シ、菜蔬ニ代テ之ヲ用ユ、其他人ノ好ム所ニ從テ用法頗ル多シ、〇中略

製粉

薯粉ハ、葛粉蕨粉ト同ジ、此ヲ製スルノ法、此薯ヲ取リ、水ニ浸スコト凡ソ六時ニシテ取リ出シ、其皮ヲ去リ、又水ニ浸スコト一二時ニシテ、後切リテ薄片トナシ、臼ニ入レ搗爛シテ餅ノ如クナラシメ、水ヲ加エテ稀解シ、緻布ヲ以テ濾過シ、白汁ヲ取リ、又其滓ヲ臼ニ入レ、更ニ搗爛シ、又水ヲ加テ攪動シ、濾過シテ白汁ヲ絞リ取リ、幾次モ此ノ如クニシテ、白汁出デザルヲ度トシ、其汁ヲ沈定シ、薯粉悉ク器底ニ沈着スルヲ俟テ、徐々ニ其上淸ヲ傾ケ出シ、又水ヲ加テ攪動シ、又沈定スルヲ

ルナリ、蘭書ニ賀スルニ、此薯ハ元來西印度ニ產セリ、而シテ拂郎察(フランス)人及諳厄利亞(アンゲリア)人之ヲ得テ播殖シ、其後之ヲ和蘭地方ニ傳タリト云フ、又此薯亞墨利加州ニ甚ダ多シ、西洋ヨリ此ニ遷ル者、常ニ之ヲ以テ糧ト爲スト云フ、然ラバ則此ハ其始ハ西印度及ビ亞墨利加ニ產スルナリ、而シテ西洋紀元千六百年ノ後〔今丙申ノ歳(天保七年)ヨリ距ルコト二百有餘年ナリ〕和蘭始メテ之ヲ播殖シ、今ニ及ンデハ專ラ其糧食トナストト云フ、林娜斯(リンナウス)〔上ニ詳カニス〕ノ書ニ、此薯ノ三益ヲ擧グ、其一ハ、砂土石田穀類熟セザル地ニ、好ンデ蕃茂スルナリ、其二ハ、烈風暴雨久霖ニ逢フテ害ヲ受ケザルナリ、其三、蕃殖容易ニシテ、人力ヲ勞スルコトナシト云フ、其他寸地ニ耕シ、尺地ノ穫アリ、故ニ又八升芋ノ名アリ、誠ニ以テ荒年ノ善糧ト云フベシ、

馬鈴薯種類

〔經濟要錄四〕蔬菜

近來渡リタル馬鈴薯、俗ニジヤガタライモ、或ハオランダイモト云フ者アリ、葉ハ菊ノ如クニシテ大ニ、根ハ黃獨(カシウ)ニ似テ毛ナク、燒テモ煮テモ食フベク、葉モ菜ニ用ベシ、

〔二物考〕馬鈴薯　種類

馬鈴薯ニ三種アリ、一ハ白ク、一ハ赤ク、一ハ黃色ナリ、赤キ者ハ大塊トナル、然レドモ水氣多シ、故ニ滋味薄シ、黃色ノ者ハ稍蒼味アリ、故ニ白キ者ヲ上トス、和蘭地方殊ニ白色ノ者ヲ培養シテ食用ニ供スト云フ、然レドモ土地ノ性ニ從テ、赤色ノ者肥大セズシテ、白色ノ者却テ大塊ヲナシ、黃色ノ者ニ蒼味ナキコトアリ、故ニ一定シテ之ヲ言ヒ難シ、宜シク先ヅ其地ニ播殖スルノ後、其地ノ性ヲ詳ニシ、此ニ適合スル品ヲ撰ミテ培養スベキナリ、

馬鈴薯栽培

〔草木六部耕種法三十一〕馬鈴薯ハ〔中略〕白色ト微赤色ノ二種アリ、煮テモ燒テモ此ヲ食フベシ、白色ノ者ハ味勝レリ、此芋ハ土地ノ瘠薄タル畑ニモ能ク豐熟ス、

〔二物考〕馬鈴薯　培養

言カヤアフルキト同上ともいふ、葉は菊に似て大なり、○中略植るには四月頃野土の肥地へ植、人糞を澆てよし、十月根を掘採、種にするには芋を貯如く、日向よき地を深く掘埋置、春の末ほり出して植べし、

〔農家備要五〕馬鈴薯

莖の高さ凡一尺五六寸、狀ち如圖、○圖略莖葉共に毛茸あり、春三月の初め球根を分ち植置く時は、一根より二三莖を出し、六七月に至て、根に三四の球根を生ず、培養至て易きものなり、糞も水糞一兩度にてよし、地合は先砂地を好む、然れども何れの地にも能く生育するもの也、甘藷に比すれば、甘味少く、皮も至て薄く、風味格別勝れしものなり、甘味少きを以て、酸敗液を釀す事なく、餘分に喰ふてさまたげなし、今長崎其外諸國に培養し、酒を釀し味噌を作る所多し、又甘藷より永く貯ふ事出來るもの也、

〔二物考〕題言

同國上野○伊勢街ナル柳田鼎藏ト云フ者、一種ノ芋ヲ贈レリ、之ヲ見ルニ、其形萆薢ノ如ク、又土圞兒ノ如シ、土俗之ヲ咬𠺕芋ト稱ス、是レ卽チ和蘭ニ所謂アルド、アップルナリ、炮炙シテ之ヲ食フニ、其淡白ナルコト薯蕷ノ如ク、其甘キコト甘藷ノ如ク、更ニ滋味粘氣アリ、其性毒ナシ、以テ日用ノ食ニ充ツ可シ、和蘭地方單ニ之ヲ以テ食トスル處アリ、而シテ甘藷ノ寒ヲ恐ルヽガ如クナラズ、寒地熱國ニ關セズ、荒野瘠地ヲ厭ハズシテ、一根數十塊ヲ得ベシ、○中略

丙申天保七年○重陽之夜、高野讓識於東都麴街甲斐坂之大觀堂、

〔二物考〕馬鈴薯和名ジヤガタライモ、甲州イモ、チヽブイモ、アツプラ、清大夫イモ、八升イモ、カツネンイモ、ジユミヨウイモ、テイゾウイモ、蘭名アールド、アツプル、

此薯モ又其傳ル所ヲ詳ニセズ、甲信等ニハ古ク傳ハリテ播殖スト云フ、蓋シヂヤガタラ芋、又アツプラ奥地ノ方言ナリ、按ズルニ此ハアールド、アツプルノ略言ナリ、ノ稱名ニ因テ之ヲ考ルニ、此ハ蘭人ノ齎來シテ種ヲ傳フ

番椒漬物

馬鈴薯名稱

〔雍州府志土産六〕唐芥子　所々有之、稻荷邊所種爲佳、唐芥子中華所謂番椒是也、

〔甲子夜話五十四〕久能山ノ麓ニ、八年枯ズ每歲花咲キ實ナル唐ガラシアリシニ、去年〇文政五年カ大風ニテ吹キ折リテ絕タリト、併シ六年ニナル者今ニ存セリト云、コレ暖國ユヘナリ、右ハ駿河ニ限ル由、又番椒ハ久能ノ名物トテ、日光漬ノヤウ成ル辛キ漬ヲ、紫蘇ニ染テ大分造リ出ス、

〔日光山志四〕日光誌處の名產

飲食類　漬番椒

〔風俗文選序五〕番椒序　　野坡

とうがらしの名を、南蠻がらしといへるは、かれが治世、南蠻にて久しかりしゆへにや、未詳、醍醐番子、天晛き、空見、八ツなりなどいへるは、おのがかたちを好める人々の、翫びて付たるなるべし、皆やさしからぬ名目は、汝が生得のふつゝかなれば、天資自然の理、さら〳〵うらむべからず、かれが愛をうくるや、石臺にのせられて、竹椽の端のかたにあるは、上々の仕合なりともすれば擂鉢のわれ底ぬけ釣瓶に植れて、やねのはづれ、二階のつま、物ほしの日陰をたのめるなど、あやうく見え侍るを、朝晩のはかなきたぐひには、誠も〳〵おもはず、大かたはかづら髭つり髭の益雄にかしづかれて、貧乏樽の口をうつすみさかなとなり、不食無菜の時、不圖取出され、おほくは奴僕豆腐の比、紅葉の色を見するを、榮花の最上とせり、かくはいへど、ある人北野錦の歸るさに、道の邊の小童に、こがね一兩くれて、汝が育々とひとつみのりしを、所望せし事ありといへば、いやしめらるべきにもあらず、しかじ今は其人々も此世をさりつれば、いよ〳〵愛をも頼むべからず、からき目も見すべからずと、小序をしかいふ、

　石臺を終に根こぎや番椒

〔草木育種下〕馬鈴薯（ジヤガタラいも）松岡府志　せうろいも、又ゑぞいも、又おらんだいもとも云、蠻名カイトース、道蘭利加

此種の皇國に入しは、文祿の比ほひ、煙草と共に將來ると云、

蕃椒栽培

〔農業全書四菜〕蕃椒

苗を種る事、又地ごしらへの時分も、皆茄子と同じ、苗長じて後移しうゆべし、其實赤きあり、紫色なるあり、黄なるあり、天に向ふあり、地にむかふあり、大あり、小あり、長き短き、丸き角なるあり、其品さま〴〵おほし、手入よければ、一本にも多くなる物なり、盆にうへて雅玩をたすく、人家おほき大邑に近き所は、多くつくりて賣べし、其性つよきものなり、つかへたる食氣を消じ、氣の滯を散じ、脾胃をくつろげ、魚肉などのあしき氣をけす物なり、

蕃椒利用

〔大和本草附錄一〕蕃椒　能ホシ、ヨクカハキタル時、俄ニ末シテ糊ニ和シ、紙或綿布ニヒログ、凡人身疼痛ノ處ニ貼ベシ、能愈ユ、腹痛ニハ腹ニ貼、頭痛ニハ頭ニ貼、手足痛ニハ其處ニツク、甚效アリ、時氣感冒ニハ、三四ノ椎ノ間ニ貼テ、被ヲアツクキテ汗ヲ出スベシ、又蕃椒青キ時トリ、糊ニスリタダキ鹽ヲ加ヘテヲサメ置、諸食ニ少加フ、蕃椒ヲ諸鳥好ンデ食フ、鷄ナド甚好ム、諸鳥ノ藥ナリト云、猫ノ藤天蓼(マタヽビ)ヲ好ンデ食フガ如シ、

〔一話一言一〕蕃椒西瓜の毒を治す

西瓜に食傷したるには、蕃椒を一味きざみて煎じ用ゆれば、卽座に瀉して毒を解するよし、德廟(德川吉宗)の御時、朝鮮の聘使西瓜にあてられたる時、朝鮮の醫これを以て藥を解したるよし、淺草醫師荒川榮記の話也、天明二年八月十八日の朝聞之、

〔塵塚談上〕蕃椒は齒牙を損ずるの毒ありと思はる、喰ふべからず、人毎にすき好む者多し、是を嗜む事甚き者を見るに、壯歲にして齒も弱く、或は脫(ヌケ)る類の人多ければ、喰ふべきものにあらず、記して識者の是正を待也、後藤左一郎が蕃椒說あり、新奇にして僻說多し、

蕃椒產地

〔毛吹草三〕山城　稻荷唐菘(タウガラシ)

たり、さらば椒屬にして、南方の水土に應ひ、その本邦西土に入ては、自艸本と變れるにぞ、亦奇むべし、

〔經濟要錄 四〕諸菜

番椒ニハ數種アリ、其丈ケ二丈餘ニ至ルアリ、十丈辣茄(トウガラシ)ト名ク、龍葵(イヌホウズキ)ノ子ノ如クナル有リ、金橘辣茄ト名ク、其實丸クシテ茄子ノ如クナル有リ、或ハ長クシテ筆ノ管ノ如クニ尺餘ニ及ブ者アリ、深紅色アリ、黃色アリ、下野ノ國日光、及ビ江戸内藤新宿名產ナリ、

番椒傳來

〔對州編年略 下〕慶長十年、此比自朝鮮蕃椒渡、

〔和漢三才圖會 八十九 味果〕番椒(たうがらし)　番者南番之義也、俗云南蠻胡椒、今云唐芥、○中略

按番椒出於南蠻、慶長年中、與烟草同時將來也、中華亦大明之末始有之、故本草綱目未載之、

〔鹽尻 九十二〕番椒(トウガラシ)ハ我國是を食する事、百年に過ず、淡婆姑(タバコ)と相前後す、倶に蠻人より傳へ種して、今世に廣く食ふ、むかしはもろこしになかりしにや、本草等に見えず、近代明の黃氏が畫譜に是を載す、今我國見る所、實の大なる小なる圓にしてほうづきの如き、長くしてくこの實の如き、黃なるも紫なるも、種々ありて、愛觀すべき物也、

〔本朝世事談綺 二 生植〕番椒

秀吉朝鮮征伐の時、はじめて取來ると云、又慶長十年、たばことおなじく蠻國よりわたるともあり、南蠻胡椒と云、中華には番椒と云、番は南蠻の事也、

〔草木六部耕種法 十七 需實〕抑蕃椒ノ最初ハ南亞墨利加洲ノ東海濱ナル伯西兒(ブラレリア)國ヨリ生ジタル物ニテ、天文十一年ニ波爾杜瓦爾(ポルトガル)人ノ持來ル所ナリ、○中略故ニ西洋人ハ此物ヲ「ブラシリペイプル」ト名ク、「ペイプル」ハ辛キ實ノ義ニテ、胡椒ヲ番人ハ「ペイプル」ト呼ブナリ、

〔成形圖說 二十五 菜〕唐芥○中略

蕃椒名稱

〔書言字考節用集 六生植〕白芥 蕃椒同

〔物類稱呼 三生植〕番椒たうがらし　京にてかうらいごせうと云、大閤秀吉公朝鮮を伐ち給ふ時、種を取來る、故に此名有、西國及奥の仙臺にてこせうといふ、東國にて眞の胡椒をのみこせうといふ出羽にてとこぼしといふ、但奥羽のうちにてもなんばんと稱する所もあり、上總及參遠にてなんばんといふ、越前にてまづものこなしといふ是は江戸にて番匠の隱語に、かけやといふにもおなじ心なり、

〔倭訓栞 後編十一 多〕たうがらし　番椒也、秀吉公朝鮮征伐の時種を得たり、よて高麗胡椒といふと、貝原氏說也、色に黃赤ありて百餘品に及べり、出羽にとこぼし、參遠總に南蠻、西國仙臺に胡椒といふ、東國に眞の胡椒をえのみこせうといふ、味甘き一種あり、

〔內安錄〕長崎にて番椒を胡椒と唱へ、トウガラシは、唐を枯しといふ同音なれば、必ず胡椒といふ、長崎の地役人共、唐船の爲に扶助せらるゝなれば、唐國を尊み敬ふ事如此、

蕃椒種類

〔成形圖說 菜二十五〕唐芥 即番椒也、芥菜に依て命ぜし名なり、俚言にマヅモノコナシなどゝも呼べり、　南蕃胡椒 或說に原その種を蕃國より漢國に傳ける故に　高麗かくいへり、我東北國にてはたゞ南蕃とのみいひ、九州地方にては胡椒とのみいふ、胡椒は郡蕃地よりいづる蔓幹の實にして味辛し、故に此物の辛よりその名を借用るなり、胡椒 或曰、豐太閤朝鮮を征れし時に、此種を携來しより、この名ありといへり、○中略大なるは實の長さ五六寸にいたる、幹立は七八尺に近し、頃間花師養得て一丈紅といふ、小なるは鷹爪の如し、目て鷹爪といふ、圓大なるは王瓜の如く微尖あり、目て胡頹胡椒と云、圓小なるは南天燭子の如し、その實上に向ふをば天上守など呼べり、遵生八牋云、白花子如筆頭、又下に垂るものを垂胡椒とも、下胡椒とも稱ふ、一種短肥にして味辣からずて甘きものあり、是を甘唐辛子といひ、黃熟のを黃唐辛子といひ、金橘の如きのを金柑唐辛子など呼べり、其種族多く皇國に入て化生れるなり、蓋暖地に生ものは最辣し、本藩鹿兒島南邊に生ふるは愈太く愈辛し、其木冬を經て槁れず、又南島に及び沖繩に至りて、皆木本となりて、高さ四五尺に長ッヽ、宛然として一灌木に似

には三文に直段を定めと云り、これ其頃初茄子の價なり、五元集、さみだれや酒句でくさる初茄子、寶永ごろの吟なるべし、そのかみ駿河より五月出すを初茄子とす、今は年の寒暖に拘らず、三月に砂村より出るなり、初茄子の賣版こゝのみにも非ず、東京夢華錄大内の條下に、其歳時果瓜蔬茹新上市、并茄瓠之類新出、每對可直三五十千、諸閤分爭以貴價取之、また秋茄子わさゝのかすにつけませてよめにはくれじ棚におくともといへる古歌あり、望一後度千句、のこれるもはや末なりの秋茄子にくまれにたる姿がしうとめ、大帶に、なれ〳〵なすび、せどのやのなすび、ならねばよめの名のたつに、落陽集に、切形や青梅水に茄子浮、元好、靈鑑茄子の浪に寄にけり、吉故今まつもどきといふやうに切たるなるべし、松もどきとは、松茸に似せて切たるなり、又丸ながら竪にきりめを多く付る茶筅茄子と云ふ所見なけれど、近頃の名には有べからず、又竪に二つにわりてきり目付たるは、蓮の花びらに似たり、これを蓮花茄子といへり、矢の根鍛冶後集、和尚への馳走茶物もれんげ茄子、雙紙輪伊勢辯は料理にも蓮花茄子、といふ付句あり、

〔本朝無題詩七〕若狹屋津有感　同人〇藤原

沙月淸風秋皓々、自然遊子感吾胸、同津上下客、舟集、分岸東南民戸重、土民比屋云、天岸有二庄、土俗每朝先賣菜、賣瓜、賣茄、土人賣之、故云、釣魚終夜競燒松、漁舟燒松也、不圖再到於斯地、思復憫干涙忽降、往年曾觀、路次此泊、今又來、故云、

〔翰林葫蘆集二〕紫茄含露傍籬笆、再摘分來野老家、堪咲一僧夢求命、夜行踏殺作蝦蟆、題茄畫

〔鷲峯文集百五〕茄子高僧乞贊

離家頃裏植箇茄子、纔葉之青其實之紫、既見於眼、宜味于齒、孟乎莊乎、須辨彼此、

〔大和本草九雜草〕唐ガキ　又瑠璃茄ト云俗名ナリ、葉ハ艾葉ニ似テ大ナリ、又南天燭西瓜ノ葉ニ似タリ、鋸葉小片兩々相對シテ大小相挾メリ、實ハホウヅキヨリ大ニシテ樹莖ナシ、熟スレバ赤シ、其サネハ龍葵ノ如シ、稻若水曰、天茄子ナリ、老鴉眼睛茄ヲモ天茄子ト云、ソレニハ非ズ、

茄子を見せてとりたる態は、臍かならず小なりとぞ、(中略)高橋文亮話

〔梅園日記四〕夢茄子

一富士、二鷹、三茄子とて、これらを夢に見るを吉徴とす、その子細をしらず、笈埃隨筆に、或人いふ、この三事、夢の判にあらず、皆駿州の名產の次第をいふ事なり、富士はさらなり、二鷹は富士より出る鷹は、唐種にて良なり、こまかへりと云、三茄子は此國第一に早く出す所の名產なりとみえたり、しかるに唐土にては、茄子を夢に見る事を忌なり、宋の樓鑰が攻媿集七十二に、劉允叔夢茄子、而作舍萌題其後して云、退之送窮而延上坐、子厚乞巧而甘抱拙、若允叔之舍萌、則眞驅之、雖未能絕紫瓜之生、畏君之嗣、自爾當不復敢入吾夢矣、然此種一名不落、彼夢滿甑三顆、不妨甲科釋褐者、殆以此、又似不必力驅之也、爲書其後、以壯昆季西上之氣、(舍萌は周禮占夢に、舍萌于四方、以贈惡夢、注に、舍讀爲釋、舍萌、猶釋菜也、萌菜始生也、贈送也、釋文に、萌莫耕反とあり、)西湖遊覽志餘二十二、(委巷叢談)紹興二年、兩浙進士、類試於臨安、湖州談誼謁上天竺觀音、祈夢、夢人以二樣貯六茄、爲餽遺之、蓋杭人以茄爲落蘇、而應試者、以落蘇爲下第也、

〔甲子夜話五〕樂翁ノ話ラレシハ、世ニ一富士二鷹三茄子ト謂コトアリ、此起リハ神君駿城ニ御坐アリシトキ、初茄子ノ價貴クシテ、數錢ヲ以テ買得ルユヱ、其價ノ高キヲ云ハン迚、マヅ一ニ高キハ富士山ナリ、ソノ次ハ足高山ナリ、其次ハ初茄子ナリト云シコトナリ、彼土俗ハ足高山ヲタカトノミ略語ニ云ユヱナルヲ、今ニテハ鷹ト訛リ、其末ハ三物ハ目出度モノヲヨセタルナド心得、晝ニカキ掛テ祝ブニ至ルハ、餘リナルコトナリ、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕初ものを賞すること、昔も今もかはる事なし、唯賞するものとさもなき物と有り、茄子は昔はめでたる物なり、懷子集、庄屋さへやく田樂を食かねてと云句に、(意通)初茄子とて守護にとらるゝ、寛永發句帳に、(幸和)初なりや先是式のさゝげ物、(此句瓜茄子の句中にあり、其頃賄賂を是式と云り、)永代藏(貞享五年)東寺邊りの里人、茄子の初生(ナリ)を目籠に入て賣來るを、七十五日の齡、これ樂みの一つは二文、二つ

千住茄子　足立郡也、江戸より二里東に當り、

寺島茄子　西葛西の内也、中の郷の先、江戸より一里餘、

形長きあり、丸きあり、横ひらくしてみぞあるあり、

〔續修東大寺正倉院文書三十二〕造佛所作物帳斷簡年紀不詳、按成卷文書四十五卷、載天平六年造佛所作物帳中卷斷簡、恐與此同物也、

買雜菜直錢廿一貫七百十六文中〇略

茄子十一斛直一貫三百五十六文二斛五斗六升、升別二文、八斛四斗四升、升別一文、

〔時慶卿記〕慶長八年五月廿七日、茄子初而賣買アリ、

〔德川禁令考四十九魚鳥野菜諸食物〕貞享三寅年五月

野菜もの之儀、節に入候日より賣出之事、

覺中〇略

一なすび　五月節ゟ

〔日次紀事七月〕凡茄子自此月尾至九月首、其味特美、俗言秋茄子不使婦食之、凡婦姑間多相惡、故不欲使婦食味良者、此言元出自姑語、

〔安齋隨筆後編一〕一秋茄子　秋茄子嫁にくはせぬ歌、秋なすびわさゝのかすにつけませて嫁にはくれじたなにおくとも、夫木集にあり、予按に、生々編、茄子性寒利、多食必腹痛下利、女人能傷子宮也と、これに據る歌なるべし、俗に茄子味佳也、姑たる者嫁を憎みて食すまじきと云意也と解くは捧腹すべし、ワサヽは早酒新酒也、

（頭註）秋なすび云々、夫木にありといへるは誤也、此歌春雨抄に出たり、

〔筆のすさび一〕一熊茄子をいむ事　熊は茄子をいむ、深山の人薪をこりにゆくに、かならず茄子を帶ぶことを見れば、熊必ずはしりさる、茄子野にあるときは、熊膽小なり、茄子なき時は大なり、

〔延喜式 内膳 三十九〕供奉雜菜

日別一斗、○中略 茄子卅顆、准二二升、六七八九月、

〔續々修東大寺正倉院文書 裏書 四十六帙六〕藍園茄子送進文

藍園進上

茄子伍斛

天平勝寶二年六月廿一日　　　　　　　　資人倉垣三倉

〔執政所抄 下七月〕七日

乞巧奠　供物 ○中略 茄子 作丸盛之

〔類聚雜要抄 一〕一供御御齒固、從內膳司貢定、自弓場殿獻之、從元日至三日、

用途料　山城國 ○中略 奈良御園 菘、茄子、蕪菁、

〔年中恒例記〕九月十三日

明日御祝參、於內儀也、茄きこしめさる、、御祝調進儀、八月十五日同、

茄子產地

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、○中略 得萬民追從、宅常擁集諸國土產、貯甚豐也、所謂○中略 山城茄子、

〔毛吹草 三〕山城　狛茄子 外ヨリ早シ

〔雍州府志 六土產〕茄子　處々種之、或有紫茄黃茄白茄之異、然紫色者爲佳、其於形狀也、或有細長者、民間稱長茄、然風味不及圓大者、洛東河原之產爲殊絕、

〔浪花の風〕茄子は長茄子の方多し、尤常の茄子も有れども、風味は同樣にして優劣なし、いづれも色合等、江戶よりはあしき方にて、漬物などにしても美ならず、

〔續江戶砂子 一〕江府名產 并近在近國

茄子利用

〔宜禁本草乾五菜〕茄子　甘寒、久冷人不可多食、損人動氣、發瘡及痼疾、熱者少食之、冷者即損胃氣、根莖葉、煮湯洗凍脚瘡、茄蒂灰止腸風下血、食前米飲下、

〔大草家料理書〕一生齋豊料理之事○中略すましみその時は、なすびを酒煎にしても吉也、

〔本朝食鑑菜三〕茄

凡今貴茄子者、不獨菜食、而醃藏糟糠味噌漬呼稱香物、以經年之用、而上下賞之、故民家多需而貨之、

〔養生訓飮食四〕茄子本草等の書に性不好と云、生なるは毒あり、食ふべからず、煮たるも瘧痢傷寒などには誠に忌べし、他病には皮を去り、切て米泔に浸し、一夜か半日を歷て、やはらかに煮て食す、害なし、葛粉水に浸て切て線條とし、水にて煮、又豉汁に堅魚の末を加へ、再煮て食す、瀉を止、胃を補ふ、保養に益あり、

〔重修本草綱目啓蒙菜二十〕茄

本邦ノ俗瘧疾ヲ患フルモノ、必ズ茄ヲ食フコトヲ忌ム、甚キニ至テハ、茄圃ヲ過ルモ亦再發ストス云、然ルニ唐山ニテハ乾茄子ヲ以テ瘧疾ヲ治ルコト、釋名ノ注ニ見ユ、又格致鏡原ニ、芝田錄ヲ引テ、茄子ノ瘧ヲ治スルコトヲ云ヘリ、蓋シ茄子熟スルニ至ルト雖モ、落ズシテ仍枝上ニアリ、故ニ瘧ノ落ズト云フコトヲ忌ク、久シテ風ヲナシ、遂ニ醫家患者ヲシテ禁ゼシムルニ至ル、

〔雍波樓叢記〕茄子の性寒、本草に皆言ふ、人を損じ氣を動かし、瘡及痼疾を發し、人をして腹痛下痢せしむ、

余江濱曰く、此の二の物○茄子、蕈、毒ある事、本草に違ふる如し、然れども吾日本これを喰ふをつねとす、其の毒に當る事なし、

〔延喜式大膳三十三〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、○中略茄子六顆半、醬漬料二顆、糟漬料二顆、未醤料一顆、荏裹料一顆、中子料半顆○中略干茄子五勺、

どく、ひろみぞのかたより、おほく土かふべし、小根は秋までもかけたるがよし、茄子たばこなど、葉ひろくさかへ、上の重き物の類は、何れも木の動く事を嫌ふゆへ、培ふ事を厚くし、少は堅くすべし、又麥をまかず菜園などにうゆる事は、細雨の中か、晴たる晩方、苗の土ぎはの所を紙にて卷てうゆべし、日おほひは、ふきの葉、桐の葉、何にても少しおほひてよし、尤こもなどにておほふは、上もなく宜し、覆よければ早にうへてもいたまず、茄子は肥過てあしき事なきゆへ、夏中は云に及ばず秋に成ても、糞水を五七日もをきて、たび／＼そゝぐべし、しかればます／＼さかへ實多し、又云、苗を移しうゆる時、立根の先を少ばかりきりたるは、わき根に力入てよく有付物なり、又は立根の先長ければ、底のにが土に當りて、痛みかゝる事あり、いか樣長き立根あるをば、少ばかりづゝ切てうゆべし、糞しを用る事は、くろきしん葉少出て、よくあり付たるを見て、根のわきをかきくぼめ、鯖にても油糟にても入て、土をおほひ置、ふとるに隨て段々多く入べし、されども二色の糞の求めなりがたくば、わきを能程ほり、粉糞を入、其上に濃糞度々かくべし、又硫黄を粉にして、根のわきに少入れば、よくなりてふとく、味も常にまされり、凡一本に豆粒ほど置とあれども、薄茶一服程も入べし、甚驗あるよし、農書に記せり、茄子は小き時つよき雨にあへば、根の下の土をたゝき上て、葉をけがせば、痛む事あり、うゆる時大雨ならばうゆべからず、苗を植て後、根の廻りの土をきれいにをし付て置べし、切虫の用心ともなるべし、又茄子を區うへする事は、冬の中うゆべき畠の中に、はゞ二尺四方、ふかさ一尺四五寸に穴をほり、其中に牛馬糞、其外何にてもこやしに成べき物を半分も入、其上に土を一重かけ、其上より又濃糞を多く入、土をおほひ置て、さて雪のふりつみたるを、穴の所にかきあつめて、上をふみ付をき、春苗のふとるを待て、うゆる事前のごとし、一區に三四本うゆれば、草立の高き事五六尺もありて、枝葉殊にさかへ、其實り勝れて大きにて、甚多くなるなり、芋瓜などもかくのごとくしてうゆる法あり、土地のすくなき所にて、取分用てよき法なり、

さて苗地のこしらへは、馬糞を埋みこゑをうち、冬より晒し置たるに、何にてもやき草を用意し置、寒氣も漸く退きたる比、土のこがるゝ程やき、細かにかきならし、むらなく蒔て、灰糞と肥土とを合せ、種子おほひ指の厚さにして、かるく踏付、古むしろ古ごもにてもおほひ置、晝の間はおほひをのけ、日にあて、泔(しろみづ)に小便を少し合せ、或水糞を合せて、わらのはゝきにて、日中に小雨のふりかゝる樣に、度々ふりかくれば、夕立のする心にて、苗ほどなくふとりさかへ、時ならずうへしほどなる物なり、尤暖かなる肥地、やしき内などの肥熟したるに、移しうゆれば、四月に早くなる物なり、さてうつしうゆる事、早麥を間を廣く蒔て、中うちを細くしをきたるに、一本づゝうゆべき所に、穴の深さ五六寸ほどにほり、やき土を一盃入、其上より濃糞をかけをきて、さて苗のふとるにまかせて、うつしうゆべし、尤焼ごゑなくては、他の糞土にても入べし、麥の中なるゆへ、うるほひなくても、晝過よりうへて、泔を少そゝぎをけば、痛む事なし、茄は移しうゆる事、少は遲くなるとも、苗よくふとり、草のせいつよくなりてうへたるは、早くあり付てさかへやすき物なり、いまだちいさくよはき苗を、いそぎて早くうへたるは、ありつきおそき物なり、すべて苗を取うゆるに、うるほひある時、ほりくいにて、根のきれぬ樣にほり取べし、うるほひなくば、水をそゝぎてほり取べし、手あらく引とれば、いたみてありつきおそし、又うゆる法、茄子をうゆる麥、畦は、麥を蒔時より、凡其間の能程をはかりて、たてのならびは一尺二三寸、横の間は一筋は二尺はかり、一筋は三尺餘にし、草を取糞をする時も、廣き筋を通り、せばきはとほらずして、培ふ事も廣きすぢばかりより、土をかい上れば、せばき筋の中は小溝と成て、うるほひをよくたもち、又は糞水をそゝぐにも、此みぞよりながし入れば、うるほひともなり、根の土廣く厚ければ、わき根よくはびこり、風雨の時たをれず、其上根に日風とをらず、旁以てよくさかへしげりて、實多くなる物なり、但一茄子一つ二つなるまでは、少土かひて、根に糞だまりを、くぼめ置、水糞と小便をたび〳〵かくべし、小便は五日に一度ほどかくべし、凡なすび二ツ三ツもとる時分、草だち大きになりて後、右にいふご

樹、自七八月至九十月、毎旦采茄子七八個作蔬、其法、前年九月、先掘好地、方三尺深三尺許、以爲窖、窖中充糞、至十一月十二月、其糞乾減半時、復取溝渠泥以充其半、至正月又減半時、取園圃之好土以充其半、經四五日、鋤耕其窖中之糞土、取出攤于地上、暴乾十日餘、而別復用好土揉合、以埋窖中、與地合平均、至春二月彼岸時、耕其糞土下種、其苗至五六寸許、殘留其中最長者五個、而要長後枝葉不相揁、若相揁易枯、其餘苗悉拔去、移栽于他圃矣、五個殘苗過尺時、於早晨日出已前、用好硫黃細末、入馬尾篩飛于苗上、則不生油蟲黑蟲也、

〔農業全書 三菜〕茄

なすびに紫白青の三色あり、又丸きあり長きあり、此内丸くして紫なるを作るべし、餘はおとれり、丸きは味甘く和らかにして肉實し、料理に用ひ能煮ても、みだりにとけくだくる事なし、かうの物其外にも專ら是を用ゆべし、又長き茄子にをそく老て大なるあり、是又よきたねなり、種子を收め置事、二番なりのうるはしきに札を付置、九月よく熟したるをわりて、子を水にて洗ひ、洗たるをゆり取、其まゝよくさらし乾し、さら〳〵とする程よく干たる時、收め置べし、又丸ながら庭の火たくあたりに埋み置て、春ほり出し、洗ひゆり取、灰に合せ蒔もよし、是早く萠るなり、又二つにわり、かづらなどにつらぬき、軒の下につりをきて、蒔時ぬる湯にひたし、しばし有て子を洗ひ取、灰沙に合せ蒔もよし、苗地の事、冬より度々うち、細かにこなしをきたるを、正月早くこゑをうちよく〳〵こやし、細かにこなし、塊少もなくして、畦作り横三尺あまりにして、正月雪きえて蒔べし、所により二月の中を以て、蒔たるもよし、又一說に、苗地をいかほどもよくこしらへ熟しをき、三月の初雨を得て蒔たるは、二月蒔たるにをとらず、却て早く生ずるものなり、或盛長の早きを望む者は、種子を灰と肥たる細土に交せ、ゆるりの邊り火氣近くをき、又あたゝかなる日は外の日にあて、家の內にて萠たるを、世間漸く暖かになりて後、よく才覺して苗地にうつすべし、

アリ、薄キ者ヲ良トス、臨桂縣誌ニ、徑五寸者名合包茄ト云、形圓ニシテ横ニ濶シテ堅ニメヒダアル者ヲキンチヤクナスビ南部ト云、豫州松山ニハアフギナスビアリ、形偏ク縱ニヒダアリテ、本狹ク末廣ク一尺許アリ、又一蔕ニ七八實ナルモノアリ、又一莖ニ連珠シテ重リ生ズルモノアリ、又尾州勢州ニハ、白色ニシテ圓ナル者アリ、卽チ白茄一名銀茄ナリ、和名ニギンナスビト云ハ則ナリ、一名キンナスビ、タマゴナスビ、是ハ苗小ク實モ亦小ニシテ雞卵ノ如シ、初ハ白色、熟スレバ黄色、故ニ濃名黄茄肇慶府志ト云フ、此書ニ黄茄ト云ハ、タネナスビニシテ、常茄ノ黄熟スル也、附方ニ黄老茄子老黄茄ト云是ナリ、又形長キ者アリ、ナガナスビト云、卽水茄也、筑前及東國ニハ長サ尺ニ過ル者アリ、色白シテ長キ者モ筑前ニアリ、又綠色ナル者ハ水ナスビト云、奥州ノ產ナリ、群芳譜ニ、一種水茄、形稍長、亦有紫青白三色ト云、

增、酉陽雜俎云、有新羅種者、色稍白、形如雞卵、コレ卽和名ノタマゴナスビニシテ、肇慶府志ノ黄茄ナリ、格致鏡原引花木考云、大食國茄樹、高丈食餘○飲食經三四年不瘁、子大如西瓜、重十餘觔、以梯摘之、又南方草木狀ニ、茄樹ノコトヲ云ヘリ、阿州海部郡出羽島ニ、茄子年ヲ經テ枯レズ、三年ニ至レバ子ヲ結ブコト甚少ナシ、冬月掩ハザレバ苗枯ル、又秋ニ至テ大ニナラズシテ、芥醃トナスベキモノヲ、俗ニヒトクチナスビト云、卽遵生八牋ノ牛奶茄ナリ、

茄子栽培

〔延喜式三十九内膳〕耕種園圃

營茄一段、種子二升、總單功卅一人、耕地二遍、把犂一人、取牛一人、牛一頭、畦料理平和三人、下子半人、三月採苗一人半、殖功十人、四月壅二遍、第一遍三人、五月第二遍三人、六月芸三遍十八人、度別六人

〔本朝食鑑三菜〕茄

茄之樹葉莖生小黑蟲、如黑胡麻子、又生青蟲如芥子者、俗稱油蟲、黑蟲易除、油蟲不能取捨、故盡葉及芽易枯、若欲避之、四五月移苗時、用竹針刺根莖之分處、入眞硫黄末而植之、則不生蟲、近時種茄四五

集解、茄者四方民間多栽之以貨之、二月下種、四五月移苗五六寸者、至高二三尺、葉大如掌、莖紫黑有刺、自夏至秋開紫花、五瓣相連、五稜如縷、黃蘂綠蒂、蒂包其茄、茄中有瓤、瓤中有子、子如脂麻、其茄有圓、有長四五寸者、有大如斗者、色有青紫白及雜青紫黃斑、既老則變成黃白、如銀者其味不佳、故種之者少、

〔和漢三才圖會 百菜蔬〕茄子　落蘇　崑崙瓜　草鼈甲　和名奈須比

本綱、茄子種宜於九月黃熟時收取、乾至二月下種移栽、株高二三尺、葉大如掌、自夏至秋開紫花、五瓣相連、五稜如縷、黃蘂綠蒂、蒂包其茄、茄中有瓤、瓤中有子、子如脂麻、其茄有圓、如栝樓者、長四五寸者、有青茄、紫茄、白茄、白茄一名銀茄更勝青者、諸茄至老皆黃也、茄葉摘布路上、以灰圍之、則子必繁、謂之嫁茄、茄多食必腹痛下利、國人又下於暖處厚加糞壤、遂於小滿前後、求貴價以售、既不以時、損人益多、茄類有數種、

渤海茄、白色而堅實、　番茄、白而扁、甘脆不澀、生熟可食、　紫茄、色紫、蒂長味甘、　水茄、形長味甘、可以止渴、

江南一種藤茄、作蔓生、皮薄似壺盧、

交嶺茄樹、經冬不凋、有二三年漸成大樹者、其實如瓜也、

大明一統志云、蘇門荅剌有大茄樹者、乃此類也、○中略

按、茄子白者味不美、黑者次之、紫者最良、小而多結子者、俗呼曰錫杖茄、皆二月下種、芒種前後移栽、有早晚、其早者六月取食、俗稱伊羅里、小而圓、其瓤稍硬、晚者七八月取之、大而帶長結子不多、味最美、故諺云、勿令食秋茄於子婦、又有長如瓜者、味不美、故人不種用、

〔重修本草綱目啓蒙 二十菜〕茄　ナスビ　ナス　○中略

數品アリ、色紫ニシテ形圓ナル者ハ尋常ノ茄ナリ、コレヲ荷包茄廣東新語ト云、土地ニ隨ヒ皮ニ厚薄

古事類苑

植物部二十三

草十二

〔新撰字鏡 草七〕茄（求伽反、茄子、又菡萏也、）

〔倭名類聚抄 十七菜〕茄子（附鹹字） 釋氏切韻云、茄子一名紫瓜子、（茄音加、和名奈須比、）崔禹錫食經云、茄子味甘鹹、（唐韻力減反、鹹味也、鹹音胡讒反、酢味也、俗語云惠久之、）温有小毒、蒸煮及以水漬之食爲快菜、

〔伊呂波字類抄 奈植物附喉物具〕茄子ナスビ　紫瓜子同　崙菝　落蘇ナスビ（出拾遺、已上二名見本草、）

〔下學集 下草木〕茄子（ナスビ）（又名落蘇、又名崑崙瓜、花時取茄跡、人謂之、則又實多生也、）

〔和爾雅 七菜蔬〕茄（音伽、崑崙瓜、落蘇、紫茄、草鼈甲、）　銀茄（ヒロナスビ）　水茄（ナガナスビ）　青茄（アヲナスビ）

〔東雅 十三穀蔬〕茄子ナスビ　義詳ならず、倭名鈔に註せし所に依らば、ナとは中也、スとは酸也、ビとは實也、其實の味澀りぬるをいふ也、倭名鈔茄子の下に、鹹字を附して、崔禹錫食經に、茄子味甘鹹といへり、唐韻に鹹は鹹味也と見ゆ、鹹は酢味也、俗にエグシといふと註せり、（今俗にエグシといふ、酸味には同じからず、されど古の時に是を醋鹹の味となせしと見えたり、諸家の本草によるに、字のエグキ、茄子のシアキ、並に鹹なしもて云ひけり、）

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一なすび　なす。

〔見た京物語〕茄子をなぎそうといふ

〔本朝食鑑 三菜〕茄（訓奈須比）

ズ、蔓荊(ハマボウノ)子花ニ似テ白クシテ淡紫碧ヲ帯ブ、秋ハ色淺ク冬春ハ色深ク盛ニ開ク、花後蕚中ニ一子アリ、形黍ノ如ニシテ、稜ナク、黒褐色ナリ、

シ、春宿根ヨリ叢生ス、ヒキヲコシニヨク似テ混ジヤスシ、莖方ニシテ兩對ス、葉ノ形紫蘇葉ニ似テ小ナリ、秋ニ至リ莖ノ高サ三五尺、紫花ヲ開ク、穗ノ長サ一尺餘、花ノ形鼠尾草花ニ似テ小ク、層ヲナシテ生ズ、葉ニ微シク香氣アリ、味苦シテセンブリノ如シ、

延命草

〔大和本草九雜草〕薺寧　ヒキヲコシト云草也、ヤ。マ。ハ。ツ。カ。トモ云、其葉ノ形如此、○圖略方莖茂生ス、其草如薄荷、又似益母、微有臭氣、本草芳草類ノ末ニノセタリ、

〔和漢三才圖會九十三芳草〕延命草　俗云比木乎古之、引起之義、國在起死之謂歟、

按延命草、和州河州及西國山麓有之、叢生高二三尺、方莖葉並似狗茴廬、六七月枝椏開小花、作細穗、結子、其花實似紫蘇、而有香、其葉味甚苦、能治蟲積腹痛、相傳有行人於山中腹痛垂死者、時遇弘法大師登山、令此草吃之、即立愈、後亦試之皆有驗、因名延命草、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕薺寧

和產詳ナラズ、ヒキヲコシニ充ル古說ハ穩ナラズ、ヒキヲコシハ一名エンメイサウ、トンボサウ大和ムラタチ、伯州ヲロトヽ、因州ヲロントヽ、阿州ヲソド、土州山野ニ多シ、春宿根ヨリ叢生ス、ソノ苗甚ダヤマハツカニ似タリ、葉ハヤマハツカニ比ブレバ稍長クシテ尖リ、色淺クシテ白毛アリ、秋枝ノ末ゴトニ花ヲ開ク、ヤマハツカヨリ後レ、八九月ニ開ク、穗ハヤマハツカヨリ長大ニシテ枝多シ、花ハ形小クシテ色淺ク、杜荊花ノ形色ニ似タリ、又紫花ナルモノアリ、皆ソノ莖葉甚苦シ、故ニ仙臺ニテ蟲オサヘノ藥ニ用ユ、藏器薺寧ハ味辛溫ト云ヒ、又可爲生菜ト云フ、ヒキヲコシハ味苦ク且臭氣アリテ、生食スベキモノニ非ザレバ、薺寧ニアタリガタシ、

迷迭香

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕迷迭香　マ。ン。ル。サ。ウ。　マ。ン。チ。ン。ロ。ウ。　一名迷迭香瑯琊代醉編

紅毛ノ產ナリ、苗ハ小木ノ如シ、高サ一二尺、枝葉對生繁茂ス、葉細長シテ甚厚シ、濶サ一分餘、長サ一寸許、面深綠色ニシテ、背ハ白シ、香氣多クシテ莖醋ノ氣ノ如ク、又排草香ノ如シ、花ハ葉間ニ生

て、藥屋にうるべし、是八新の一にて、古きをば用ひず、若二年にこゆるあらば、捨て賣べからず、〔草木育種下品〕薄荷木草　めぐさと云、野土の濕地に栽てよし、魚洗汁折々澆てよし、夏の內刈て一日日に干、それより陰乾にすべし、藥に用るには新き程よし、古きは氣味薄くなるなり、

〔草木六部耕種法八薄荷〕薄荷ノ作法ハ、大抵藿香ニ同ジ、且此物ハ葉ニ油ノ多キヲ上品トス、油多ク葉ニ湊集ンコトヲ欲セバ、上ニ擧タル温養水五荷ト、人溺一荷、馬溺一荷トヲ調合シテ、時々根傍ニ澆ベシ、如此スルバ油多ク葉ニ集リテ、其香氣ノ烈々タルコト、常ノ薄荷ニ十倍ス、

積雪

〔和漢三才圖會九十三芳草〕積雪草○中略　胡薄荷　地錢草　連錢草　海蘇　加岐止乎之○中略

按積雪草無枝朶、圓葉一一光潔引蔓可潛離、俗名離通也、本草必讀積雪草之圖有枝朶者非也、亦倭名抄以之訓豆保久佐者非也、

○按ズルニ、ツボクサト、カキトホシトノ辨明ハ、積雪草條ニ在リ、參看スベシ、

麝香草

〔書言字考節用集六生植〕麝香草本草所謂羅勒是矣　羅勒本草俗呼之麝香草香菜、蘭香並同、今按

〔大和本草八芳草〕麝草　彙苑曰、色紅而甚芳香、今按ニ此草葉ハ薄荷ニ似テ少アカシ、手ニテ其莖葉ヲシゴケバ、其香麝香ノ如シ、ジヤカウグサヲ水蘇ト云ハ非也、

〔和漢三才圖會九十三芳草〕麝香草　俗稱本名未詳

按麝香草高尺餘、葉似馬蓼而厚潤、微有麝香氣、而甚於茴香葉之香、三月開花、單葉淺紅色而小、

水蘇

〔本草和名十八菜〕水蘇一名鷄蘇、出兼名一名勞蒩、仁諝音賁都反一名芥蒩、仁諝音子居反、香蘇作一名茵蒩、一名華莖、一名薺薴、仁諝上音齊、下女耕反、唐實用、崔禹仕角反、和名知比佐岐衣、

〔多識編二芳草〕水蘇、今案加良惠、俗稱利宇那宇久左、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕水蘇　マヽヲガラ古名　一名萎荷本草蒙筌　菜蘇品字箋　勞祖本草證類

和產詳ナラズ、古說ニヤマハツカトスルモノハ穩ナラズ、山ハツカハ一名エグサ、藝州山野ニ多

原野ニ自生アリ、根ハ多モ枯レズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、莖方ニシテ葉對生ス、形圓カニシテ淺キ鋸齒アリ、面ハ深緑色、背ハ紫色ナリ、稍長ズレバ緑色ニ變ジ、形長クナル、揉レバ香氣多シ、秋ニ至テ高サ二三尺、葉間ゴトニ節ヲ圍ミテ、碎小花ヲ叢簇ス、色白シテ微紫ヲ帶ブ、藥舗ニ貨ルモノ和產ノミ、舶來ナシ、城州山城ノ郷、和州奈良、泉州堺ニ多ク栽出ス、一種小葉ノモノアリ、ヒメメグサト呼ブ、一名コハツカ、微ク香氣アリ、是石薄荷ナリ、一種細葉ノモノアリ、葉濶サ三分、長サ寸餘ニシテ鋸齒アリ、越中ニテハタサト呼ブ、

增、天保十年ノ頃、阿蘭陀種ノ薄荷舶來ス、形容尋常ノ者ニ似テ、肥大ニシテ葉ニ皺文多シ、ソノ氣甚猛烈ニシテ暑臭ヲ帶ブ、葉ニ蒂ナクシテ直ニ莖ニ對生ス、尋常ノ薄荷ノ葉蒂五六分ナルニ異ナリ、移シ栽テ繁茂シ易レ、故ニ今處處ニ多シ、

〔廣益地錦抄六〕薄荷　宿根より春生、又たねを蒔てよくはへ出、はやくしげる、葉形は藿香に似て兩對に付、葉のまはりにあらくきざあり、葉の間々より枝多く出る、葉末に花さく、うす白く小穂見るにたらず、葉莖に香氣有、少しつまみ切れば、香鼻をとほる、又野薄荷ハ葉はそながくして、へりに鋸のきざみもなく香氣あり、宿根より多ク生ル、本庄邊に生るは異土ゆへにや、香氣甚しく龍腦薄荷にまされり、兩種ともに花壇に植べし、眼目かゆくむつかしきに、葉をはりてよし、あきらかにしてすゞしむ、又たばこにきざみ入れて用、口中をすゞしむ、

〔農業全書十藥種之類〕薄荷

薄荷是も藥に多く用ゆる物なり、作るべし、二種あり、一色はりうはくかとて、氣味のよきあり、是をうゆべし、又ひはくかと云あり、あし、作るべからず、肥地に一度うへをけば、年々自ら生る物なり、たねを取をき、苗にしてもうゆべし、畦作りしうゆる事、菜にかはる事なし、刈時分は小むぎかるころ、下葉色付を、日和を見て刈取、うすくあみて一日ほし、其後日かげにつりて、かげ干にし

蘇注云、薄荷莖葉似荏而尖長、根經冬不死、又有蔓生者、嘉祐本草引藥性論云、尤與薤作葅相宜、李時珍曰、方莖赤色、其葉對生、初時形長而頭圓、及長則尖、

〔多識編 二芳草〕薄荷、於保阿良岐、俗稱也末波加、

〔庖廚備用倭名本草 五野菜〕薄荷ハクカ〇中略〇元升向井曰、薄荷ハ其香龍腦ノ如シ、故ニ西國俗ニハ龍腦草ト云、風寒ニアタリ、目赤ク痛ミ、眵淚出ルニハ生薄荷葉ニテ目ヲサスリ、或ハ少シ肉ヲアラヘバ、目ノ中スヾシクナリテ、眼疾イエヤスシト云、多識篇ニ水蘇ノ和名ヲ、リウノウクサト云ハ未穩當也、今ノ人飮食ニ薄荷ヲ用フルコトナシ、古人ハ是ヲ用タルベシ、倭名抄飮食部薑蒜類ニ載タリ、食物本草ニモ載タレバ、今爰ニ是ヲ書セリ、吸口ニシテモヨシ、

〔宜禁本草 乾五菜〕薄荷　辛苦溫、下氣發汗、新病瘥人勿食、虛汗不止、能去憤氣、發毒汗、破血止痢、通利關節、治傷寒頭痛中風失音、吐痰除賊風、療心腹脹滿宿食、治小兒驚風、水入耳以汁點立効、衍義曰、薄荷世謂南薄荷、有一種龍腦薄荷、故也、能引諸藥入榮衞、去風氣壅幷傷寒頭痛、

〔大和本草 六藥〕薄荷　二種アリ、國俗ニ龍薄荷ト云ヲ用ユベシ、是龍腦薄荷ナリ、氣味香ク辛シ鼻ニトホル、一種非薄荷ト云ハ香氣アシヽ、不可用、龍薄荷家園ニウヘ、四五月雨後ニ早ク葉ヲツミトリ、半日日ニホシテ後カゲボシニスベシ、乾シテ後器ニ納メ或厚キ紙袋ニ包ヲクベシ、生葉ヲキザミ膾ニ加ヘ、又煎茶煖酒ニ和シテノム、本艸ニモ茶ニ代ヘテノムト云ヘリ、痩弱ノ人久ク食ベカラズ、猫クラヘバ醉フ、猫ノ酒ナリト云、猫ノ咬タルニ汁ヲヌルベシ、相制スル也、蜂蛇ニサヽレタルニ葉ヲモンデ付ベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕薄荷　ハクカ和名鈔　オホアラキ古名　メグサ　メハリグサ西國　ミヅタバコ佐州　メザメグサ尾州　一名冰喉尉綱目拾遺　炙蘇壽世保元　蕃荷本草原始　雞蘇同上、救荒本草、本草蒙筌　本草彙言ニテハ花葉蘇ノ一名、綱目ニテハ水蘇ノ名ナリ、　英生鄕藥本草　菝蔄品字箋　番荷通雅　婆蔄同上　蔢蔄正字通

同上　通名荊芥　一名靜風尾(綠種)　鄭芥(鄭藻本草)　京芥(野本草義)　一捻金(附方)　再生丹　擧卿古拜散(共ニ同上)

京師ニ自生ナシ、城州山城ノ鄉長池、和州紀州ニ栽蒔シ藥舖ニ出ス、其苗一年ニシテ枯ル、藥舖ニ售ルトコロノ新種ヲ下シテ生ジヤスシ、苗高サ二尺許、方莖ニシテ葉兩對ス、艾葉ニ似テ小サク、一寸餘ニシテ五枝アリ、莖葉トモニ黃綠色、香氣多シ、莖頭ニ穗ヲ成シ、細小花ヲ開ク、莖葉穗トモニ藥用ニ入ル、南部ニハ自生アリ、藥舖ニ舶來ナシ、此草魚品ニ反ス、

〔廣益地錦抄六〕荊芥(けいがい)　葉ほそ長ク切りまはし、見事にあひらしく、草形ながめ有り、花ハ見るかいなし、秋實をむすぶ、取置て二月蒔べし、一年草にて根ハ多枯る、

〔農業全書十藥種之類〕荊芥

けいがいも多く用ゆる藥なり、紫をうゆるごとく、畦作りし、たねをちらしまきをき、苗にしてうゆる事薄荷と同じ、少間遠にうゆべし、六月土用に葉を取干べし、七月葉さかへたる時又取べし、其後七月花咲て刈取あみて干し、其まゝ藥屋にうるべし、少みのらんとする時刈取ものなり、

〔本草和名十八〕薄荷(仁諝音可)、唐、

〔倭名類聚抄十六菜蔬〕薄荷　養生秘要云、薄荷(和名波加、今案薄字所出未詳、)

〔箋注倭名類聚抄四菜蔬〕按本草和名云、薄荷、仁諝音可、蒪字諸書無見、恐誤、若是作蒪、希見之字、唐有音釋、而但音可、可證蒪字之誤也、又按薄荷當是唐本草之舊、千金翼方、證類本草作薄荷、恐宋人所改、蓋以說文玉篇廣韻無荷字也、然千金方作茇荷、醫方類聚引食醫心鏡作菝荷、亦皆作荷、集韻云、蕃荷菜名、或從何作苛、荷字見韻書、是爲始、又證類本草薄荷條引陳士良有與菝蕳胡菝蕳、玉篇云、菝草藥蕳、李時珍曰、甘泉賦作茇葀、字林作茇苦、千金方作蕃荷、蓋此草原胡種、無其字、假借薄阿薄可薄何字、或作菝蕳菝蕳、後從艸諧阿可何蕳聲、則作苛非煩苛之苛、作荷非夫渠之荷也、○中略　本草

荊芥

此イヌカウジユハ原野ニ甚ダ多シ、高サ一二尺、其莖方ニシテ香薷ヨリスルドナリ、枝葉對生ス、香薷葉ニ似テ短クシテ毛少シ、葉ヲ採デ初嗅ゲバ微シク香氣アリ、再カゲバ臭氣ヲ覺ユ、八月枝梢ニ花ヲ開ク、紫蘇ノ穗ノゴトクシテ小ク、香薷ノ穗ニ異ナリ、長サ三四寸許、淡紫色、花ノ大サ一分ニ盈タズ、花後實ヲ結ブ、其蔕ノ形紫蘇ニ同ジ、子熟シテ苗根共ニ枯ル、又白花ナルモノアリ、此外ニイヌカウジユト呼モノ數多シ、

增、一種小葉ノモノアリ、泉州地方海ニ近キ溪澗流水ノ傍ニ生ズ、莖方ニシテ高サ五寸許、葉莖ニ對生シテ、全ク爵狀ノ形ニ似テ小ナリ、臭氣ナシ陸地ニ栽テ能ク生ズ、一種地黃葉ノイヌカウジユト云アリ、高サ二三尺、葉ニ皺多ク、地黃ノ葉ニ似タリ、秋ニ至テ穗ヲ生ズルコト三四寸、相似テ大ナリ、又桑ノ葉ニ似テ莖ニ互生シ、淡綠色ニシテ高サ一尺許ナルモノアリ、コレモイヌカウジユト云、又救荒本草ノ風輪菜モイヌカウジユト云、同名ナリ、又風輪菜ニ似テ小葉ニシテ直立セザルモノアリ、コレモイヌカウジユト云フ、

〔本草和名菜十八〕假。蘇。一名鼠蓂、楊玄操音莫狄反、又音冥、音覓、音銘、一名薑芥、一名荊芥、蘇敬注曰、薑者荊聲訛也、是菜中荊芥是也、和名乃。々。衣。、一名以。奴。衣。、

〔下學集草木下〕荊芥ケイガイ

〔多識編二芳草〕假蘇、野乃惠、異名薑芥別錄、荊芥、吳普鼠蓂、本經

〔大和本草六藥〕荊芥　本艸約言曰、性凉而輕、能凉血疎風、諸瘡風熱皆當用之、陳久者良、本艸ニ荊芥反魚蟹河豚一切無鱗魚、又黃鱨魚ヲ食テ後荊芥ヲ食ヘバ吐血シ或死、又曰、服荊芥忌食魚、時珍曰、荊芥乃日用之藥、其相反如此、荊芥ハ穗ヲ用テ良シ、久キガヨシ、魚ト同食スル事忌ム、荊芥ヲ服スル病家ニ敎ユベシ、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕假蘇　ノ。ヽ。エ。古名　ネ。ズ。ミ。グ。サ。南部方言、鼠ノ穴ニ此草ヲ插メバ出テズ、故ニ名ヅク、　ネ。ズ。グ。サ。

石香葇　假床

ニ連リテ小花ヲ綴リ、數夕反張ス、故ニナギナタ香薷ト云フ、ソノ色紫或藍色ヲ帶ブ、大香薷ハ葉圓大ニシテ荏葉ノ如シ、其穗濶長淡紫色、深山幽谷ニ生ズ、其香氣小香薷ヨリ劣レリ、藥ニハ小ヲ用ユ、藥舖ニ售ルモノ二品アリ、一ハ夏月葉ヲ採リ收ムルモノヲ葉香薷ト云、コレニハ假床葉ヲ混ゼリ、一ハ秋月穗ヲ採リ收ルモノヲ、ナギナタ香薷ト云、コレ眞ニシテ僞雜ナシ、是皆小香薷ナリ、大香薷ハ藥舖ニ出サズ、

〔農業全書十藥種之類〕香薷
香薷是大小あり、小香薷とて葉細く、みどり少たはみて長刀のやうに見ゆる、俗になぎなたかうじゆと云、園に作る事、又干上るまで荊芥にかはる事なし、山野に自ら生ずるが勝れり、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
山城國卅二種、略○中香薷夜干各十五斤、大和國卅八種、略○中香薷澤蘭各十五斤、攝津國卅四種、略○中香薷七斤、近江國七十三種、略○中芎藭香薷各十五斤、播磨國五十三種、略○中香薷烏賊骨各十五斤、美作國卅一種、略○中香薷商陸各五斤、

〔多識編二芳草〕石香葇、今案伊和伊努薷、異名石蘇、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕石香葇　ヤマカウジユ　イハカウジユ　ヒメカウジユ　一名山茵蔯
遠志略
時珍ノ說ニ從ヒ、小香薷ノ山中崖石ノ上ニ生ジ、瘠テ小キ香薷ノ香氣烈シキヲ石香薷トスベシ、石トハ小キモノヲ指テ云、駿州富士山ノ麓ニ甚ダ多シ、

〔本草和名九草〕假床、一名浴赤眼老母草、出蘇敬注一名雀荏草、出雜門方一名天香葇、野俗名也、出稽疑、

〔多識編二芳草〕假牀、今案古加宇志由、異名赤眼老母草、唐本

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕假床　イヌカウジユ

〔箋注倭名類聚抄稻穀九〕按千金翼方、證類本草菜部中品、水蘇香薷並載、廣韻亦云、茙、香茙菜、蓋依唐韻也、本草唐韻非俳書、源君不引此等書、依漢語抄載、非是、又香薷水蘇不同、楊氏以水蘇爲香薷別名、恐誤、本草圖經云、香薷似白蘇而葉更細、本草衍義云、香薷生山野、葉如茵蔯、花茸紫、在一邊成穗、凡四五十房爲一穗、如荆芥穗、別是一種香、李時珍曰、方莖尖葉有刻缺、頗似黃荆葉而小、九月開紫花成穗、有細子、本草水蘇、蘇敬注云、此蘇生下澤水側、苗似旋復、兩兩相當、大香馥、蜀本圖經云、葉似白薇、兩葉相當、花生節間、紫白色、味辛而香、本草衍義云、水蘇氣味與紫蘇不同、辛而不和、然一如蘇、但面不紫、及周圍槎牙如鴈齒、香少、李時珍曰、水蘇三月生苗、方莖中虛、葉似蘇葉而微長、密齒面皺、色靑、對節生、氣甚辛烈、六七月開花成穗、如蘇穗、水紅色、穗中有細子、狀如荆芥子、可種易生、宿根亦自生、沃地靑苗高四五尺、按水蘇倭產未詳、

〔類聚名義抄八〕茙(香茙菜、イヌエ、)　香茙(同)

〔易林本節用集伊草木〕犬荏(イヌエ)

〔和漢三才圖會芳草九十三〕香薷(香茙)　香茙　香菜　香茸　密蜂草(略)○中按香薷今有長刀(ナギナタ)香薷、葉香薷二種、有實如穗參者、謂之長刀、惟葉而已謂之葉香薷、是所謂大葉細葉如二種之差、皆用倭、

〔重修本草綱目啓蒙芳草九〕香薷　イヌアラヽギ(延喜式)　イヌエ(和名抄)　ネズミアブラ(奥州中略)○今ニテハ和漢通名、俗ニナギナタ香薷ト呼モノ眞物ナリ、大小ノ二種アリ、共ニ俗ニナギナタカウジユト呼ブ、宿子地ニ在テ春自ラ生ジ、夏以後長ズ、方莖ニシテ枝葉對生シ、毛茸アリ、九月ニ至リ、高サ三四尺或ハ一尺許、枝梢ゴトニ花ヲ開キ實ヲ結ビ、熟シテ苗根トモニ枯ル、小香薷ハ葉ノ形小ク長シ、黃荆(ニンジンボク)葉ニ似リト時珍モ言ヘリ、黃荆ハ牡荆ナリ、牡荆ハ五葉一蒂ナルモノナリ、ソノ一葉離シタルニ能似タリ、齊𦙾(イヌカウジユ)ノ葉ヨリハ長ク、香氣甚シ、ソノ穗長サ一寸餘、濶サ三分許、ミナ一

香薷

レバ萼中ニ小子四粒アリ、熟シテ苗枯ル、乃夏至ノ候ナリ、故ニ夏枯草ト名ク、苗枯ルレバ直ニ根ヨリ新苗ヲ生ズ、春ノ苗ヨリ長大ナリ、冬寒ニ逢テ枯ル、冬至ヨリ新苗ヲ發シ花ヲ含ミ、春ニ至テ開ク、古ヨリウツボグサヲ以テ夏枯草ニ充ツ、今藥肆ニ賣ル所ノ夏枯草皆ウツボグサナリ、然レドモウツボグサハ、滁州夏枯草ニシテ異物ニ非ズ、稲先生ノ説ニモ、夏枯草ハウツボグサニ非ズ、用ヲ効ナレト、大和本草ニ載ス、ウツボグサハ一名スイ〱バナ、江州スイ〱、同上スイバナ、佐州スモトリ、遠州ウシボタト、長崎ヒグラシ、豐州シビトバナ、筑州シビトノマクラ、同上狐ノマタ、同上ウバチコ、奥州ウバノチ、同上トリゲグサ、ヤリバナ、マツカサグサ、雲州山野甚多シ、四時葉アリ、形チ薄荷葉ニ似テ微尖リ鋸齒淺シ、冬ハ地ニ就テ叢生ス、春巳後方莖ヲ抽デ、高サ二三寸葉兩對ス、五月ニ至テ六七寸、上ニ穗ヲ出シ、深紫色ノ花ヲ開クコト二寸許、靫(ウツボ)ノ形ニ似タリ、又深紫色ニシテ青ヲ帶ルモノアリ、又淡紫色深紅色白色ノモノアリ、此草夏枯レズ、夏至以後始テ花アリ、夏枯草ノ名ニ稱ハズ、然レドモ効用ハ近シテ代用スル故ニ、滁州夏枯草ト云フ、

增按ニ夏枯草夏至ノ候ニ枯レタ、舊草脱シテ直ニ新葉ヲ生ズ、ソノ直ニ新陳相代ルヲ以テ、十二一重ノ名アリ、

〔廣益地錦抄 五〕空穗草(うつぼぐさ)　田野に多生ズ、葉はそ長ク冬の中より出る、春五六寸に花を出ス、花形松かさのごとく、又空穗に似たるとて、うつぼさうといふ、花の色うす紫なり、此草夏は枯るゆへに夏枯草共云、本草に冬至の後葉を出す、三四月花をひらく、穗をなす、五月かるゝと有、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　除州夏枯草(うつぼくさ)　堀ノ內大窪谷邊ノ產　夏枯草(じうにひとへ)〈道灌(カン)山ニモ〉

〔本草和名 十八 菜〕香薷〈楊玄操音柔由反〉　一名胡薷〈本名胡薷、石勒諱胡、故改名香薷、出蘇敬注〉　一名莯薷〈出范汪方〉　一名鼠趣〈出拾遺〉　和名以。奴。衣、一名以。奴。阿。良。良。岐。

〔倭名類聚抄 十七 菜〕香薷　楊氏漢語抄云、香葇〈香戎二音、和名以奴衣〉、一云、水蘇〈今按所出未詳〉

色成小花さく、葉を手にてもごけバ香氣甚敷有り、

〔本草和名 十一草〕夏枯草(蘇敬注云、五月枯、故以名之、)一名夕句、(楊玄操上音鉤、下音店、)一名乃東、(楊玄操音尺字反、諸本作東字、)一名燕面、一名少可乃東、一名逆草、一名苦枯、一名春草、一名白微、一名華、一名戴逢、(已上七名出釋藥性)一名莫英、一名夕可、(已上二名出釋藥)一名少句、一名夏格、一名乃連、(已上三名出雜要訣)和名宇◦留◦比◦、

〔倭名類聚抄 二十草〕夏枯草　蘇敬本草注云、夏枯草、(和名宇◦流◦木◦)五月枯、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇注又云、此草生平澤、葉似旋復、首春即生、四月穗出、其花紫白、似丹參花、五月便枯、圖經云、冬至後生、三月四月開花作穗、結子亦作穗、衍義云、自秋便生、經冬不瘁、春開白花、中夏結子遂枯、李時珍曰、苗高一二尺許、其莖微方、葉對節生、似旋復葉而長大、有細齒、背白多故莖端作穗長一二寸、穗中開淡紫小花、一穗有細子四粒、按今俗呼十二單者可以充之、一種有今俗呼靭草者、是亦夏枯草之類、或曰、本草圖所載滁州夏枯草即是、

〔多識編 二草部〕夏枯草、宇流岐、又稱宇◦豆◦保◦久◦左◦、

〔大和本草 六藥類〕夏枯草　若水云、葉似金沸草、裏有紫條、花微紅、似空穗草而長、ウツホ草ニハ非ズ、ウツボ草ハ用テ功ナシト云、

〔和漢三才圖會 九十四本濕草〕夏枯草(かこさう うつぼぐさ)　燕面　乃東　夕句　鐵色草(和名宇流木、今云宇豆保草、〇中略)

按夏枯草出攝河州者最良、丹波次之、穗形似矢箙之穀、故俗曰宇豆保草、

〔重修本草綱目啓蒙 十隰草〕夏枯草　ウルキ(和名鈔)　十◦二◦一◦重◦　一名血見愁(古今醫統)　猪屎草(本草原始)　云

鷲壷(採取月令)　四牛闘草(藥性要略大全)　鷲矢壷(郷藥本草)

山中陰地ニ生ズ、方莖紫色、高サ三五寸、葉ハ旋覆(ヲグルマ)花ノ葉ニ似テ粗鋸齒有、又金瘡小草(キランサウノ)葉ニ似テ兩對ス、莖葉ニ白毛多シ、三四月莖頭ニ穗ヲ成シ、小ナル花密ニ綴ルコト二三寸、花大サ三分許、五瓣ニシテ本ハ筒ナリ、金瘡小草花ニ似タリ、色白クシテ淡紫色ヲ帶ブ、又紫碧花白花ノ者アリ、花終

ジテ鼠尾草ナレドモ、秋ノ田村草極テ多ク、集解ノ說ニモヨク符ス、古來誤テミソハギヲ以テ鼠尾草トス、今藥肆モ亦然リ、故ニ和ノ方書ニ、鼠尾草トアルハミソハギヲ用ユベシ、唐山ノ書ニ鼠尾草トアルハ、秋ノタムラサウヲ用ユベシ、ミソハギハ救荒本草ノ千屈菜ナリ、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥
山城國卅二種〇中略 鼠尾草三斤、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產 鼠尾草(ミゾハギ)

〔多識編 二 芳草〕藿香、加波美土利、異名兜婁婆香、

〔大和本草 六 草〕藿香 今藿香トテ世人種ル物アリ、本草所云ト粗相似タリ、只香氣不相類、其葉厚薄亦不同、日本ノ土地不宜ニヨツテ性不好カ、若ハ可爲同類異品、中華ノ產ト云ドモ、無香氣ハ不可用、ウヅミ藿香アリ、青葉アリ、用時洗テ少日ニホスベシ、青葉爲佳、

〔和漢三才圖會 九十三 芳草〕藿香 兜婁婆香 楞嚴經 但羅香 金光明經 迦算香 四分律 鉢多摩羅跋香 法華經 〇中略
被藿香多自廣東來、他處舟少有之、
青葉(アヲバ)藿香 近聞舶來有葉端青者、稱青葉藿香、其芬香甚用合香具、但採葉末黃者陰乾製之、
倭藿香 今有得眞藿香種栽之者、春生苗、其高二三尺、節節生葉、似木芙蓉葉而小長、開紫花、似夏枯草花、其香有往氣面烈、摘葉用鹽泥一宿乾、武州多種之、與唐藿香無異、

〔重修本草綱目啓蒙 九 芳草〕藿香 一名藿去病 事物異名 玲瓏藿去病 同上
舶來ニ二品アリ、青葉ト呼モノ眞物ナリ、和產ナシ、葉大ニシテ厚ク毛茸アリ、五ツ許刻缺アリテ邊ニ鋸齒アリ、兩對シテ生ジ香氣アリ、古ハ惟其葉ヲ用ヒ、枝梗ヲ用ヒズ、今人ハ枝梗ヲ併テコレヲ用ユ、蓋僞多キニ因ル故耳ト時珍云リ、〇下略

〔廣益地錦抄 四〕藿香(くわつかう) はハまその葉に似て青く、南方へ對して付、葉の間より枝出て、夏の末ふち

〔本草和名草十一〕鼠尾草、一名勤（仁諝音巨斑反）一名陵翹、和名美曽波岐、

〔倭名類聚抄草二十〕鼠尾草　本草云、鼠尾草（和名美曽波木）

〔箋注倭名類聚抄草十〕爾雅、勤鼠尾、釋可以染皂草也、陶注田野甚多、人採作滋染皂、蜀本圖經云、所在下濕地有之、葉如蒿、莖端夏生四五穗、穗若車前、有赤白二種花、陳云、鼠尾草紫花、莖葉堪染皂、時珍曰、鼠尾以穗形命名也、

〔多識編二隰草〕鼠尾草、美曽波岐、今案俗云美豆賀介久左、七月十五日用之祭鬼、

〔宜禁本草乾中隰草〕鼠尾草　苦微寒、（白花主白下、赤花主赤下、）治寒熱下痢膿血不止、主諸痢（煮汁服、末服、粥飲下、）紫花莖葉堪染皂、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕鼠尾草　勤（音勤）　山陵翹　烏草　水青　（和名美曽波木、俗云水掛草、○中略）

按鼠尾草多出自攝河州、于蘭盆聖靈祭用鼠尾草供水、因稱水掛草、（無別意、但穗花長以灑水有便耳、）俗傳鼠尾草莖葉浸醋投陰地、不日蚯蚓化生、亦一異也、海帶（アラメ）浸雨水則化蛭之類矣、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕鼠尾草　タムラ草（種樹家ニテメムラサキト呼ブモノハ、玉ガウキノコトニシテコレト別ナリ、）メクログサ

加州　一名鼠菊（救荒本草）　陵翹（證類本草）　鼠尾子（類書纂要）

春夏秋ノ三品アリ、秋ノタムラサウハ山野ニ多ク生ズ、冬ヲ經テ枯レズ、脚葉ハ地ニ就テ叢生ス、霜雪ノ時ハ背紫色、暖ニ向ヘバ漸ク綠色ニ變ズ、葉ハ五葉（末三葉ニシテ本二葉對ス）ニシテ鋸齒アリ、又七葉（末三葉ニシテ本二兩對二節）ニモナル、又枝ヲ分テ小升麻（アカシヤウマ）ノ葉ニ似タルモアリ、春以後漸ク方莖ヲ抽コト七八寸、葉對生ス、梢葉ハ三葉或ハ一葉ニモナル、コノ草變葉多シ、八月長穗ヲ成シ花ヲ開ク、ヤマハッカノ花ニ似テ淡紫色、又白花ノモノアリ、皆六七等一節ニ連リ、層層尺餘ニ至ル、一種夏ノタムラサウアリ、形狀同ジ、山ノ幽谷ニ生ズ、五六月ニ花アリ、形チ大ニシテ深紫色愛スベシ、又春ノタムラサウアリ、苗葉花穗共ニ小ク、葉莖トモニ青シ、春末花ヲ開ク、白色ニシテ至テ小シ、以上三種通

子ナリ、ソノ形小長ニシテ四稜アリ、唐山ヨリコレヲ巨勝子ト名ヲ渡ス、漢渡ノ僞物ナリ、巨勝子ハ島麻子ナリ、故ニ巨勝子圖ニハ島麻子ヲ用ベキコトナルニ、世上ノ賣藥巨勝子圖ニ多ク茺蔚子ヲ用ルハ、舶來ノ巨勝子僞ナルニヨリテ誤ルナリ、時珍モ藥肆往往以作巨勝子貨之ト云、本草必讀ニ、近世以茺蔚子爲小胡麻、遂混稱巨勝以誑、僞識不可勝言ト云、巨勝ハ茺蔚ニ非ルコト明ニ辨ゼリ、又胡麻集解ニ詳ナリ、然ルニ本草新編ニハ、巨勝子非胡麻ト云ハ大ナル誤ナリ、藥肆ニ賣ルモノ皆和產ナリ、苗ヲ益母草ト云ヒ、實ヲ茺蔚子ト云、苗ヲ賣ルニ多ク鐵刀ニテ剉テ乾カス、然レドモ此草ハ銅鐵共ニ忌ム、故ニ自製シテ用ユルニシクハナシ、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

大和國卌八種 中略〇 茺蔚子六升、

〔武江產物志 藥草〕行德邊 茺蔚 品川ニモ

〔多識編 二 園菜〕茺蔚、今案加遠久須利、

〔重修本草綱目啓蒙 十 隰草〕茺蔚 一名天麻草 白花ノ茺蔚、[illegible]五母麻ノ[illegible]草 兩說アリ、藏器ノ說ハキセワタト呼草ナリ、時珍ノ說ハ白花ノ益母草ナリ、藏器ノ說ヲ優トス、キセワタハ江州伊吹山ニ多シ、移シ植テ繁茂シ易シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、方莖高サ四五尺、脚葉ハ益母草ノ葉ニ類シテ厚クシテ毛アリ、梢葉ハ漸ク變ジテ、續斷葉ニ似リ、皆節ニ對シテ生ズ、秋ニ至テ節ゴトニ花ヲ開ク、形續斷花ヨリ大ニシテ毛アリ、淡紫色又白色ノ者アリ、花後萼內四子ヲ生ズ、茺蔚子ヨリ大ナリ、四稜ニシテ長シ、白花ノ益母草ハ、形狀常ノ益母草ト同ジ、唯白花ナルヲ異トス、

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕羅生門 らしやうもん 俗稱、本名未詳

按羅生門蔓草也、葉似胡麻葉而短、三月葉間開小花、深靑、俗云紺色

草云、益母茺蔚也、故劉歆云、蓷臭穢、臭穢卽茺蔚也、李巡爾雅注、亦同二劉歆一、案今益母草氣惡近レ臭、故有二臭穢之稱一、曹植藉田說云、蘩蓬臭蔚乘レ之乎遠强、臭蔚猶二臭穢一也、古香蔚如レ鬱、廣雅釋器云、鬱臭也、故茺蔚之草一名鬱臭、陳藏器本草拾遺云、茺蔚田野間人呼爲二鬱臭草一是也、此草高者三尺以來、其莖四方而葉三岐、五月作レ花、攢銳而小、叢二生莖節間一、郭璞爾雅注、言二華白一、今則亦有二紅者一、陶注葉如レ荏方莖、子形細長三稜、別本注云、其子狀如二菥蓂子一、而稍危大、稍有二陳氣一、日華子云、乃益母草子也、節節生レ花、如二雞冠一、子黑色、

〔宜禁本草〕乾部中草　茺蔚　辛微溫、明レ目益レ精、除二水氣一、一名益母、五月採レ葉、九月採レ子、治二一切產後血病、癰疔病一、生葉煮レ粥食、初春可二煮作一レ菜、竹刀切煎、浴二新生小兒一、不レ生二瘡疥一、

〔和漢三才圖會〕九十四本濕草　益母草　茺蔚　益明　貞蔚　猪麻　蓷音推　野天麻　火枕　鬱臭草

苦低草　夏枯草　○中略

按益母草莖似二胡麻一、而葉似レ麻、俗云二女之木一、其葉梗兩兩對生、而一層指二東西一、一層指二南北一、更爲二十字一、節節著二小花一、

〔重修本草綱目啓蒙〕十隰草　茺蔚　メハジキ　ニガヨモギ　益母草(ヤクモサウ)通名　一名千層塔醫宗粹言　臭鬱草夏枯草正誤、　負擔附方　透骨草救荒本草　天芝麻　鬱臭苗共ニ同上　目非也叱郷藥本草　野蘇子草訓蒙字會

反魂丹備州府志　小胡麻本草必讀　蕢通雅

自生ノモノ原野ニ多クアリ、秋中子落テ自ラ苗ヲ生ズ、初ハ地ニ就テ叢生ス、葉形圓ニシテ岐多ク、草烏頭葉ニ似テ薄軟ニシテ毛茸アリ、春以後ハ薹ヲ抽テ漸ク高ク五六尺ニ至ル、莖四稜ニシテ大麻(アサ)莖ノ如シ、葉對生ス、莖上ノ葉ハ漸ク長ク、梢ノ葉ハ艾葉ノ如クナリ、脚葉ノ形圓ナルニ異ナリ、夏秋ノ間葉間ゴトニ、節ニ多ク並ビテ花ヲ開ク、大サ三四分、淡紫色ニシテ微ク紅色ヲ帶ブ、形積雪草(カキドホシ)花ノ如シ、花後實ヲ結ブ、蕚ゴトニ四粒アリ、集解ニ如二同蒿子(シュンギク)一ト云ニヨク合ヘリ、卽茺蔚

茺蔚

〔重修本草綱目啓蒙草十八〕茺蔚　メ。ハ。ヽ。キ。　一名蘭香菜(本草彙言)　蘆芳(正字通)

野生ナシ、種ヲ傳ヘ種ユ、四月宿葉初テ出ル時、地ニ下シテ都生ズ、苗長ジテ一尺餘ニ至ル、方莖枝葉皆兩對ス、葉ハ爵牀葉ニ似テ淺綠色、香氣アリ、枝梢ゴトニ六七寸ノ穗ヲ出シ、葉上ゴトニ莖ヲ周リテ花ヲ生ズ、紫蘇ノ花ニ似テ白色、後萼ゴトニ四子アリ、熟シテ黑色、秋深ニ至テ苗根共ニ枯ル、其子至テ小ク車前ノ子ノ如シ、水ヲ見レバ都外ニ白脂ヲ纏フテ、一分餘ノ大サニナル、故ニ目中ニ入テ痛マズ、能塵ヲ粘シテ出、故ニメハヽキト云フ、

〔廣益地錦抄六〕茺蔚　春種をまく、尺にたらぬ小草也、草立葉形枝ぶり莖、とうがらしの草に似タリ、五月はなさく、花形穗のごとく一年草にて多は枯る、二月種を蒔、二葉にはへ出ルより、薰香自然にありて蘭のかほりなれば、草花に名を蘭香とも蘭草とも云、實は小細にして極て小粒也、眼目に物の入りたるに此實を入ル、目のごみを瀉らすとりて、目の藥なりと云、俗に目帯ともいふ、小草にてあひらしく、鉢にうへて愛すべし、庭に植て不斷薰香せり、

〔新撰字鏡草〕茺蔚(女波自支、又云益母、又益明、又太札、又貞蔚、又天麻草、)

〔本草和名六〕茺蔚子、一名益母、一名益明、一名大札、一名貞蔚、(已上本條)一名天麻草、一名苦低草、(已上二名茺蔚子莖也、出□□)一名鬱臭草、(田野人之、出本草拾遺)一名虎麻、一名馬新蒿、一名馬矢蒿、(已上三名出爾雅)一名萑蓷、一名臭穢草、(二名出□□)和名女。波。之。岐。

(頭書)按人之間說呼字、又按虎麻、馬新蒿、並中品馬先蒿之別名、此乃錯出、

〔倭名類聚抄二十〕茺蔚　本草云、茺蔚、(充尉二音、和名女波之木、)

〔箋注倭名類聚抄十〕爾雅、萑蓷、郭注云、今茺蔚也、葉似荏方莖白華、華生節間、又廣雅、益母茺蔚也、王風中谷有蓷傳云、蓷鵻也、王念孫曰、蓷者茺蔚之合聲、茺蔚者臭穢之轉聲、韓詩云、蓷茺蔚也、陸機詩疏云、舊說及魏博士濟陽周元明皆云、菴䕡是也、韓詩及三倉說悉云、益母、故曾子見益母而感、案本

草石蠶

羅勒

〔毛吹草三〕山城　紫蘇

〔書言字考節用集六生植〕草石蠶甘露子、滴露子、並同、見本草、

〔本朝食鑑三菜部〕知也宇呂岐

集解、卽草石蠶、一名甘露子、古來未聞有、近世華舶移種、頃者家家栽之、二月生苗、長者近尺、方莖對節、狹葉有齒、並如荏葉、但葉皺有毛、四月開小花、成穗、如紫蘇花穗、結子如荊芥子、其根連珠、狀如老蠶、或根之旁引一絲、着連珠者亦有、四五月采根煮食之、味微甘而淡、以爲蔬爲菓耳、

〔和漢三才圖會百二柔滑菜〕草石蠶　甘露子　地蠶　土蛹　滴露　地瓜兒　知也宇呂木〇中略

按草石蠶近年有之、捲莖埋地、則節々生根也、其根二三寸、正白色、促節、形狀略似柳蠹、用淡醬油煮食、

〔農業全書五山野菜〕甘露子

甘露子、又草石蠶とも、地瓜兒とも云、今俗にてうろぎと云物なり、苗の時四五寸、長じて後は莖ながくつるのごとし、かどありて節ごとに葉向合て生じ、薄紫の小花をひらく、其節々より、土に根ざし、かいこのごとくなる白き根多く生ず、玉をつらぬきたるごとくつゞきて、白くすきとをりて、きれいなる物なり、味甘く煮て、茶うけ、くはしにもなり、あへ物、吸物其外に物などに入、料理色色あり、めづらしき物なり、殊に多く作りては、飢をも助るものなり、多くひろがる物にて、根も多く出來るなり、畠の端にては多く作り、飢を助ると記せり、種る地の事圖の少日かげの所を畦作りし、夏月に麥ぬかを多く覆て糞とす、一尺餘り間を置てうゆべし、芸り培ひ、廻りをも草なき様にきれいにし、又上より麥糠を覆ひをけば、かぎりなくさかへて、纔なる圖の端にうへても、其根たくさんにいでくる物なり、淨く洗ひ、かはかして、蜜に漬、醬に藏して、甚よき物なり、土地廣き所にては、多く作りて、飢を助くべし、陰地の肥たるによし、木かげなどにも種べし、やせ地かはきたる地によからず、

〔多識編三菜〕羅勒、惠。阿。良。良。岐。、異名香菜、綱目醫子草、

大小便、破癥結、消五膈、止嗽、潤心肺、消痰氣、治脚氣濕痺、消無毒、衍義云、子治肺氣喘急、多服令人溫滑、

〔延喜式三十九内膳〕漬年料雜菜

荏裹二石六斗、料鹽九升、醤一斗二升、春鹽七升、未醤四升、醤子六升、醤滓一石、荏四升、○中略　右漬秋菜料、

〔古名錄十八香草〕乃良衣

令義解曰、古記云、荏而枕反、方言、蘇亦荏也、關之東西或謂之蘇、或謂之荏、野王按、蘇細而香、其實色黑、荏大而有毛、其實色赤、一作二物總是一類、其狀不同也、觀此則古ヘエハ紫蘇荏通ジテ呼ルコト明也、其荏裹ト云モノ、紫蘇ノ葉ヲ用、荏ノ葉ハ毛アリテ味不美、香亦アシタシテ食用トナスベカラズ、證類本草ニモ、蘇有數種、有水蘇、白蘇、魚蘇、山魚蘇、皆荏類ト云ヘリ、

〔農業全書四菜〕紫蘇

四五月葉をつみて、梅漬其外鹽醤につけ、貯ひやしる種々料理多し、生魚に加れば魚毒をころす、又藥に用ゆるには、梅雨のやみたる後、二三日過て、未極暑に至らざる時、朝とく葉をつみ日に干べし、暑にあへば、葉の色青くなる、青くならざる内に早くつむべし、或曰、六月極熱の中にかりて、半日日にほし、其後かげ干にし、ほし上て、俵に入をき、藥屋にうるべし、又葉よくさかへて是を取、多くかさねまき、わらにてゆひ、みそにつけたるハ酱よき物也、是も八新の一つにて、古きは用ひず、明年の新しきが出來るまで用ゆる物なり、未實の房枯ざるを刈取て鹽漬にし、炙りてさかな茶うけなどによき物なり、紫蘇子を取には、穗よく實りて、已におちんとする時刈取、下に筵かき紙などを敷て干、小竹にて打て實を取べし、是又藥屋にうるべし、葉も實も氣を散し氣を下し、性よき物なり、子は少いりてあへ物に加へてよき物なり、

紫蘇產地

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊勢國五十種、○中略　蘇子一升、　尾張國卅六種、○中略　菟絲子、紫蘇子、各五升、

名ヅク、其子朝鮮ヨリ來ル、故ニ朝鮮紫蘇トモ云、食品ニモ藥ニモ可用之、汗ヲ少シ發ス、故ニ輕症ニ麻黃ニ代用ユ、他ノ紫蘇ノ苗ト子トヲスチヽ是ヲ可種、秋實ノリタル時卽地ニ蒔ベシ易生、春マケバ生ジガタク消ヤスシ、

紫蘇栽培

〔農業全書 四菜〕紫蘇

しそは八九月たねを收め置て、正月熟地に苗床を作りて、灰沙に合せ、うすく蒔てこえを少かけ、土を少しおほひをくべし、あつくば間引て、莖短くふときを、三月畦作りし、肥地ならば、間を遠くうゆべし、

〔成形圖說 菜二十五〕奴加延(三代實錄○中略)紫蘇(名醫別錄○中略)

此もの性濕地を好む、春月種子を布べし、その佳なるものは葉に皺ありて鋸齒深く、表裏紫色なり、俗にこれを縐紗(チリメン)紫蘇といふ、梅儲(ウメツケ)及藥用に此をよしとす、よろしく花穗を發せざる內に、その葉を收めとるべし、あるひは地の乾瘠(ヤセ)たるによりて、表靑色に變ずるものあり、かゝるものはおのづから芳香も薄し、また一種表裏ともに靑色荏葉の如くにし、芳香よろしきものあり、東都の俗にあるひは靑紫蘇といふ、按に農圖六書に白蘇といへるもの是にや、(中略)○往今藥用のものは、山城、紀伊、相模よりいだす、また東都の官園にて養なふものあり、性味ことにまされり、之かれども、民間に稀なり、その子は關東にては、武藏鹿濘よりいだす、あるひは荏子をもて僞り充るもあり、

紫蘇利用

〔藥經太素 下〕紫蘇　溫味辛

裏面トモニ紫色成ヲ用、枝莖ヲ去、日ニ干モミ研テ用、下氣開胃治脹消痰利大腸、若寬喘欬子尤吉、又脚氣ヲ治ス、

〔宜禁本草 乾五菜〕紫蘇　辛溫、(日用本草曰、純紫尤佳、證類本草、葉下氣甚靑、)與鯉鮓同食、腸中生癰成痔、子主上氣欬逆、腰脚濕風結氣、葉下氣除寒、治心腹脹滿、霍亂轉筋、開胃下食、通大小腸、子調中下氣、主嘔吐反胃、肥建人、利

但粮一升ニ付油荏五合替

一油荏不納村　四　大野田村　大野川村　稲核村　島々村

紫蘇名稱

〔本草和名　十八菜〕蘇、野蘇（不香者）假　一名桂荏、一名薌、（已上二名出釋名）和名以奴衣、一名乃良衣、

〔倭名類聚抄　十七菜〕荏　野王案云、葉大而有毛、其實白者曰荏、（而枕反、和名衣、）野王案云、葉細而香、其實黑者曰蘇、（新抄本草云、和名乃良衣、一云以奴加衣、）此二物雖一類、其狀不同耳、

〔名物據古小識　生植一〕奴加衣　出（類聚抄）○（倭名）深（和名○本草）丹（續紀）○深又曰乃良衣、深丹又曰以奴衣、俱爲蘇、即紫蘇也、今俗稱此音、式（貢進○延喜式）年料貢有蘇子、

〔類聚名義抄　八艸〕蘇（音素、イヌエ、一云ヌカエ、）

〔易林本節用集　之草木〕紫蘇（シソ）

〔段注說文解字　一下艸部〕蘇　桂荏也、（桂上蓋本有蘇字、此復寫隸字、刪之未盡者、蘇桂荏、釋艸文、內則注曰、薌蘇荏之屬也、方言曰、蘇亦荏也、關之東西或謂之蘇、或謂之荏、郭樸曰、蘇荏類、是則析言之則蘇荏二物、統言則不別也、桂荏今之紫蘇、）从艸穌聲、（素孤切、五部、）荏　桂荏、蘇也、（是之謂轉注、凡轉注有同部互見者、有異部互見者、荏之則爲荏弱之荏、）从艸任聲、（如甚切、七部、）

紫蘇種類

〔本朝食鑑　三華和〕紫蘇（訓如字）

集解、處處多有、或人家田圃栽之、二三月下種、又宿子在地自生亦有、其莖方、其葉圓而尖、四圍有鋸齒、肥地者面背皆紫、瘠地者面青背紫、其面背俱青白者白蘇也、七八月開細紫花、成穗作房、如荊芥穗、九月半枯時收子、子細如芥子而色黃赤、或謂此亦可采油如荏油、紫蘇葉嫩時可爲羹、以去魚肉毒、可爲蔬茹、或醃藏味噌漬俱佳、與梅子同淹藏、則其汁香紅、故同漬者悉香紅可愛、最經年亦好、子亦醃之乾之俱可愛賞、

〔大和本草　附錄菜蔬一〕紫蘇　李中梓曰、雙面紫者佳、不敢用麻黃、以少代之、今ノ世チリメン紫蘇ト云モノロシ、ウラヲモテ鮮紫、味モ氣モヨロシ、ウチノ紫蘇ニマサレリ、其葉チヾム故ニチリメン紫蘇ト

荏產地

〔延喜式三十九内膳〕供御月料
胡麻子、荏子、各一斗二合五勺、
〔延喜式四十三主膳〕月料
荏子四升九合五勺
〔七十一番歌合上〕廿二番　左　傘張
え。の。あ。ぶ。ら。がたらぬげな
〔延喜式二十三民部〕交易雜物
山城國(中略)荏子四石〇中略　尾張國(中略)荏子四石〇中略　美濃國(中略)荏子十二石〇中略　右以正稅交易進、其運功食並用
正稅、
〔東大寺正倉院文書十五〕尾。張。國。天平六年正稅帳
尾張國司解　申收納天平六年〇以下虫損
合八郡天平五年定穀貳拾伍萬捌仟肆伯肆拾斛壹斗捌升壹合〇中略
年料荏肆斛　直稻捌拾束束別五升
〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
攝津國卌四種、〇中略荏子二升五合、　相模國卌二種、〇中略荏子二斗、　下總國卌六種、〇中略荏子二升、
〔地方凡例錄五〕荏大豆納之事
關東方荏大豆納高百石に大豆貳斗、荏壹斗掛る、尤荏大豆共、貳升に代米壹升、代永なれば、荏大豆五石に代、永壹貫文づゝ被下之、
〔信府統記八〕每年收納高ノ内〇信濃安曇郡
一油荏八俵三斗　納四斗入　拾七ヶ村ヨリ定納

及ぶ物にあらず、作るに造作なくして、極めて勝手よき物なり、土地餘計ある所にては、多く作るべし、刈收る事、時分の見合せ肝要なり、若刈時分過れば皆に零落す、葉悉く黄になりて、本なりの子はやこぼれんとする時、朝露に刈取、下に筵を敷、其上につみ置、又上よりも筵などをおほひ、むして四五日して、葉くさりたる時、ふるひあげ葉を落し、下にむしろをしき、照日に一日二日干てうち取べし、其後又干打事、二三遍にして悉くおち盡べし、唐人は此油にて餅をあげ、又和物のかうばしなどにもすると見えたり、凡五穀三草などの外の作り物には、利潤是に及ぶ物すくなし、土地多き所にては廣く作るべし、若おほく作りては、內に取込事なり難きゆへ、胡麻の如く外にふきをき、能干たるを見て、筵を敷て打て取べし、

〔和漢三才圖會芳草九十三〕荏音任 白蘇俗云

本綱、荏形狀與紫蘇無異、但面背皆白者即白蘇、乃荏也、其子可取油、

按荏關東多種之、用子搾油、爲燈油、又引傘挑燈雨衣等、不濕而能凌雨、又煉代漆、

造法　密陀僧大 滑石中 枯礬少入油、以文火煉用、以燈心寸許、植之不倒爲度、髹物白粉辰砂綠靑等和調、其色鮮明、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕荏　エ古名　エゴマ嘔羅　シロジソ　ジウネン仙臺　ジウネアブラ南部　一名茬通雅　白荏正字通

苗葉花實皆紫蘇ニ同クシテ香氣アリ、唯葉ノ色靑ク、花ノ色白シ、野圃ニ多ク栽ヘ、子ヲ收メ油ニ搾リ、雨衣雨傘ノ用ニ供シ、チヤンツ製ス、又子ヲ用テ小鳥ニ飼フ、原野ニ自生ノモノヲ野荏ト云、俗ニノヱト呼ブ、子小ニシテ香氣殊ニ烈シク、小鳥モ食フコトアタハズ、

〔延喜式大膳三十三〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓。菜。料。略○中 荏子七勺、菓餅料

荏栽培

〔書言字考節用集 六生植〕白蘇草(エゴマ)　荏(エ)〈本名亙麻〉

〔段注說文解字 一下艸〕荏、桂荏〈逗〉蘇也、〈是之謂ニ轉注ニ、凡轉注有ニ各部互見者ニ、有ニ同部類見者ニ、荏之別義爲ニ荏染ニ、〉从ㇾ艸任聲、〈如甚切、七部、〉

〔東雅 十三穀蔬〕倭名鈔穀類にしるせし所を見るに、荏讀てエといひ、蘇讀てヌカエといひ、香薷讀てイヌエといひ、稗讀てヒエといふと見えたり、已上の三種并に荏により名を得し所と見えけり、荏をエといふ義不ㇾ詳、韓地の方言の轉せしに似てけり、凡我國の俗、細にして小なるものを呼びて、ヌカといふは、糠の義也、似て非なるものを呼びてイヌといふ、蘇をヌカエといふは、荏の類にして、葉の細なるを云ひしなり、香薷を呼びて、イヌエといふは、荏に似て非なるをいひしなり、

〔倭訓栞 前編 五衣〕え〈中略〉○荏は倭名抄に見えたり、今え胡麻といふ、

〔本草和名 十八菜〕荏。子。、一名蕉〈楊玄操、音魚、面作蕉、〉重油、〈其子作ㇾ油、日蘇名也、〉和名於保衣乃美、

〔醫心方 一〕荏子〈和名於保衣乃美〉

〔農業全書 四菜〕白蘇〈上方にては、ゑごまと云也、〉

白蘇は子を取て油にする物なり、雨具などを調へ、さし笠にひくも皆此油なり、其外用多し、燈油にして光よき物なり、是も白黑の二種あり、二色共に宜し、肥たる細沙地取分よし、すべて何土にても深く耕しこなしをき、苗四五寸の時畦作りし、地の肥瘠を見合せ、がんぎを切、一本づゝ種る間七八寸、或肥たる地は一尺餘も隔、少深くうへ、糞は何にても有にまかせて多くも用ゆべし、厚く培ひ芸りなど、大かたにしをきても、少も草痛みもせず、よくさかゆるものなり、是なを牛馬のさはる物にあらず、畠の端道ばたなど、牛馬の喰ふ穀のふせぎとなるべき所にうゆべし、木かげ物かげ、屋敷廻りの、他の作り物の、かつてよからぬ所にも、大形には出來、殊に旱なが雨にも痛まず、秋大風時分はいまだ花咲ずしてつぼみ、葉の間にあるゆへ、風損も大かたはなし、小鳥は少々付といへども、他の鳥けだ物は、そこなはず、大抵の地にてよく作り合せぬれば、雜穀等の利分の

ナルコトヲ云リ、龍牙草ハ卽救荒本草ノ龍牙草一名瓜香草ナリ、和名キンミヅヒキ、又シヽヤキグサ、同名多シ、クソボコリ上州トモ云、葉ハ紫蘇葉ノ如ニシテ鋸齒アリ、初ハ叢生シテ地ニ就ク、夏月莖ヲ抽コト二三尺許、其末一尺許ハ穗ニシテ五瓣ノ黃花ヲ開ク、大サ三分許、實綠色大サ椒ゴトシ、毛刺アリ、觸スレバ人衣ニ粘ス、

〔廣益地錦抄七〕龍牙草　宿根より春生る、葉の色うるはしく、青色、葉おもてに小筋ありて、ながめにたれり、八九月花さく黃色なる穗をなし、段々にひらく、俗に鬼の矢柄といふ、

蠅取草

〔大和本草九雜草〕蠅取草　葉ハ似薄荷微長シ、葉莖柔軟、葉ヲ飯ニヲシマゼテ、蠅ニ飼ヘバ死ス、毒草ナルベシ、或曰、是本草瀑草上所載曲節草ナルベシ、

荏名稱

〔倭名類聚抄十七菜蔬〕荏　野王案云、葉大而有毛、其實白者曰荏、而甚反、和名衣、野王案云、葉細而香、其實黑者曰蘇、新抄本草云、和名乃良衣、一云奴加衣、此二物蓋一類、其狀不同耳、

〔箋注倭名類聚抄九菜蔬〕新撰本草云、乃良江、一云奴加江、廣本新撰作新抄、下總本有和名二字、本草和名云、蘇、和名以奴衣、一名乃良江、與此引不同、按本草和名又云、假蘇和名乃乃衣、一名以奴衣、無名奴加衣者、此所引恐誤、○中略下總本有和名二字、本草和名云、荏子、和名於保衣乃美、水蘇、和名知比佐岐衣、今俗呼衣古末、或白紫蘇、○中略今本玉篇艸部云、蘇荏屬、又云、荏蘇屬、與此引不同、爾雅說文並云、蘇桂荏、本草陶注云、蘇葉下紫而氣甚香、又云荏狀如蘇、高大白色不甚香、李時珍曰、紫蘇白蘇皆以二三月下種、或宿子在地自生、其莖方、其葉團而有尖、四圍有鉅齒、肥地者面背皆紫、瘠地者面青背紫、其面背皆白者卽白蘇、乃荏也、紫蘇嫩時采葉、和蔬茹之、八九月開細紫花、成穗作房、如荊芥穗、九月半枯時收子、子細如芥子而白黃赤、王念孫曰、今人多種院落中、青紫二種、子皆生莖節間古單呼紫者爲蘇、今則通稱耳、

〔伊呂波字類抄江植物附植物具〕荏エ

壹度堀紫草根、守一人、從三人、(井四人二日、)單捌人、上貳人、守從陸人、

〔享祿本類聚三代格(六)〕太政官符

一聽運九箇使料米事○中略　紫草使料十斛○中略

大同四年正月廿六日

〔毛吹草(三)〕遠江　紫根　出羽　秋田紫根

〔武江產物志(藥草)〕堀ノ内大箕谷邊ノ産　紫草(小金ニモ)

馬鞭草

〔本草和名(草十一)〕馬鞭草、(楊玄操音必綿反、蘇敬注云、穗類鞭鞘、故以名之、)一名龍草(出范注方)一名襄草、一名蕢襄、(出雜要決)和名久末都良、

〔倭名類聚抄(二十草)〕馬鞭草　蘇敬本草注云、馬鞭草(和名久末豆々良)其穗類鞭鞘、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄(十草)〕陳藏器云、若云似馬鞭鞘、亦未近之、其節生紫花、如馬鞭節、按陶注、莖似細辛、花紫色、葉微似蓬蒿也、蘇云、苗似狼牙及茺蔚、抽三四穗、紫花似車前、都不似蓬蒿也、蜀本圖經云、生濕地、花白色、圖經云、春生苗、莖圓高三二尺、時珍曰、馬鞭下地甚多、春月生苗、方莖、葉似益母、對生、夏秋開細紫花、作穗如車前穗、其子如蓬蒿子、而根白而小、陶言花似蓬蒿、韓言花色白、蘇云莖圓、皆誤矣、

〔古名錄(十四野草)〕久末都々良(本草和名)　漢名馬鞭草(本草)　今名ウシギク

〔宜禁本草(乾藥中草)〕馬鞭　辛涼、通月經、主癥癖血瘕久瘧、破血、食魚鱠及生肉、住胷膈不化成瘕、擣汁飲之、(生姜亦得)木治男子陰腫大核痛、擣馬鞭草塗之、

〔和漢三才圖會(九十四末温草)〕馬鞭草　龍牙草　鳳頸草　(和名久末豆々良○中略)

按馬鞭草處處有之、攝州之產良、陰囊腫痛者、用馬鞭草鼠尾草煎汁洗之佳、

龍牙草

〔重修本草綱目啓蒙(十二隰草)〕馬鞭草○中略

釋名龍牙草ヲコノ釋名中ニ列シテ、馬鞭草トスルハ誤レリ、宜ク分ツベシ、閩書南產志ニモ其誤

此折とき根の方へ木の付ざるやうすべし、木付ときは直段格別引下らるゝ也、拐根につきたる土砂を能ふるひ取て、水にてあらひたるやうにすべし、此根に色あるもの故、決て洗ふべからず、木と根を折分てより、又籠に入一兩日干て、塵をよく去りて俵に入べし、

極上出來　烟壹反ニ五拾貫目　中出來　同四拾貫目　直段ハ紅花など、同じく、高下あるもの也、大體均し金壹兩ニ付目方五貫目かへ位なり、　拐此紫草に山根と號し、山に自然生のものあり、幾年も立たるは、煙管のらう竹位に、箸ぐらゐの大鑑あるもの也、是は直段も格別高直也、藥に用ふるは此自然生のもの也、

(令義解三賦役)凡〇中略其調副物〇註略正丁一人紫三兩、

(延喜式二十三民部)年料別貢雜物　右別貢雜物達依前件、

太宰府(中略)紫草日向八百斤、大隅一千八百斤、〇中略

交易雜物

甲斐國(中略)紫草八百斤〇中略　相模國(中略)紫草三千七百斤〇中略　武藏國(中略)紫草三千二百斤〇中略　下總國(中略)紫草二千六百斤〇中略　常陸國(中略)紫草三千八百斤〇中略　信濃國(中略)紫草二千八百斤〇中略　上野國(中略)紫草二千三百斤〇中略　下野國(中略)紫草一千斤〇中略　出雲國(中略)紫草一百斤〇中略　石見國(中略)紫草一百斤〇中略　太宰府(中略)紫草五千六百斤〇中略

右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

(東大寺正倉院文書四十二)豐後國正稅帳

球珠郡　天平八年定正稅稻穀壹萬漆仟貳伯貳拾斛陸斗捌升貳合貳勺〇中略

國司巡行部内、合壹拾肆度〇中略

壹度蒔營紫草園守一人、從三人、并四人、二日、單捌人、上貳人、守從陸人、〇中略

壹度隨府使檢挍紫草園守一人、從三人、并四人、一日、單肆人、上壹人、守從參人、〇中略

干鰯の粉、又は油粕の粉を一トつかみを、二穴づゝに入て土をきせる也、又は干鰯を蒲簀に入、口を閉、其とぢ目の両方へ長く縄を付、肥瓶の中に水を入て、其中に十日もつけ置ば、干鰯の體とろける也、其時付おきたる蒲簀の縄を両手に持、かたみに引きてゆれば、干鰯の體とろけ水に出、骨ばかりかますの中に殘る也、蒲簀は引あげ、中の骨を出し、干てくだき、外の植もの、肥しにすべし、扨其出したる水を葉にかゝらぬ様、根際に筋を引、其筋へ流しこみて施べし、麥などより肥しを多く施ざれば、根のはりあしゝ、又は糞の熟したるを施てもよし、　二番肥は貳寸五分にも成たる頃、見合せ施べし、　三番肥は土用前に施べし、尤一番に油粕、貳番に干鰯ならば、三ばんに糞を施べし、二番糞ならば三番を干鰯か油かすにすべし、　生出てより三十日もすれば、餘ほど伸るものなれば、末壹寸五歩ほど、又貳寸も鎌にてはらひ刈に切べし、左すれば根のはり宜しく收納多し、　若小出來のときは、右三度の肥しの間に、何肥にても施べし、肥氣ぬけては次第に黄色になり、枯る事あるもの也、依て肥しを拔目なくすること肝要也、餘の作りものとちがひ、出來あしき時は、皆無同様のものなれば、手入肥しのさし引油斷なくすべし、

收納の事

收納は秋土用に入日よりこきあげて宜し、根を用ふるものなれば、先根際に鍬を入、土をくつろげて引ぬくべし、日照つゞきて土かたき時は、水を澤山かけ、よくしみこみたるとき、土をくつろげ引てもよし、鋤を用ひざる所にては、鍬をうちこみ土をくつろげても宜し、いづれ根の切ざるやうにして引べし、　扨引ぬきて土をふるひ落し、其まゝ筵に入、三四日干すべし、曇天ならば五七日も干すべし、随分薄く干ざれば熱り來て、一夜のうちに腐ることあり、

製法の事

製しやうは、根と木との堺に両方へ少し芽出ある所より折て、根と木とを分べし、（愛に木といふは、莖の事なり、）

上トシ、讃州、豫州ヨリ出ルヲ次トシ、和州、江州、河州、ヲ次トス、上品ノ者ハ染家ニ送リ、下品ノ者ヲ紫根ト名ケテ醫家ニ賣ル、用ユルモノ宜シク擇ブベシ、

〔廣益國產考三〕紫草〔根を用ふるものゆゑ紫根とよべり〇中略〕

紫草を作る土地の事

温地の北うけ、あるひは山陰の陰地は忌べし、随ぶん日あたりよき地に作るべし、砂眞土の水氣の滯ふらざる地宜し、黒ぼこと重つての赤土はあし、、ねば土あし、流水場などの極砂土は宜しからず、綿、麥などの能くできる地ならば、生育せずといふ事なし、

蒔旬幷地ごしらへ

蒔旬は五月の中より、四五日まへに蒔て宜し、都ての作物に時節のたがひて宜しきものはなけれども、別して此紫草は時節をはづし蒔ては、生育あしきものなれば、其時をはづすべからず、早過ても遅くても宜しからず、扨蒔べき畑は、先一面に塊をくだきて打ならし置、畦幅一尺五寸づゝ、小鍬〔又土地の鍬大ならば、少し小形の鍬にてきるべし、〕にて筋を引、畑一反に種子貳升五合を升やうのものに入、左りへもち、右の手にてひねり蒔にすべし、此實を雀どりよく好んで喰ふものなれば、蒔たる時其用心すべし、花咲實に成たるときは、猶更此防をすべし、蒔終て麥の通りに土を覆べし、尤生出で間引くものにあらざれば、餘り繁くしては宜しからず、随分むらなきやう蒔べし、併しあまりしげきは間引すつべし、植肥しは糞の熟したるを敷て蒔て宜し、又は干鰯油粕の水には、だしたるにても宜し、何れも熟したるを用ふべし、もつとも麥まくより多く施て蒔べし、

肥し手入

生出十日もすぎて鍬を入、又引つゞきて二度も入べし、草多き地は三度もつゞきてけづるべし、

生出て壹寸位に伸たる時、干鰯にても、油粕にても、穴肥にすべし、穴肥といふは、生出たる紫草の根際壹寸貳三分脇に、間五寸ほどづゝ、置、穴つきと云研木(すりこぎ)の先のごとき棒をもて突明、其中に

其染綠者謂之綠莀、染紫者謂之紫莀、廣雅釋器云、綠緅、紫緅綵也、續漢書輿服志注引徐廣云、緅草名也、以染似綠、又云似紫、則染草之莀、本有綠紫二色、莀與藍通、漢書百官公卿表、金璽藍綬、晉灼注云、藍草名、出琅邪平昌縣、似艾可染綠、因以爲綬名、此綠莀也、史記司馬相如傳、攢戾莎、徐廣注云、草可染紫、此紫莀也、莀通作茢、周官掌染草鄭注云、染草、茅蒐豕首紫茢之屬、疏云、紫茢即紫莀也、今本玉篇云、紫色也、又云、茈草可染、說文亦云、紫帛青赤色、茈茈艸也、二字不同、但茈不釋何草、按爾雅、藐茈草、郭注云、可以染紫、西山經注云、茈草中染紫也、是知紫是帛之青赤色者、轉爲青赤間色之總名、茈可以染紫之草、本作紫草者、轉注以紫爲茈也、故云茈即古紫字也、

〔和爾雅 七草木〕紫草（ムラサキ、紫丹、紫芺、茈莀、並同、爾雅謂之藐、）

〔和漢三才圖會 九十二末山草〕紫草　紫丹　紫芺　茈莀　地血　藐（音邈）　鴉銜草　和名無良佐木○中略

按紫草出於薩州者最佳、奧州（南部津輕）羽州（秋田）遠州（中泉）豫州（大洲）河州（山田）皆良、但家種者不入藥用、

葢醫方藥曰、紫草可用根、若謂紫草茸則可用嫩苗葉、

染絹帛、用紫根煎汁染之、浸梣木灰汁、一方用蘇方木煎汁入綠礬少許染之、浸梣木灰汁、成名之贋紫、經年色變、

〔重修本草綱目啓蒙 七山草〕紫草　ムラサキ　ムラサキネ　ネムラサキ江戸　一名紫果（增訂致富奇書）

藐茅（事物紺珠）　紫葯（正字通）　芝草（郷藥本草）

諸州ニ多ク栽ユ、春分後種ヲ下ス、長ジテ苗高サ二尺許、葉ハ細長ニシテ旱蓮草（タカサブラウ）葉ノ形ノ如ク、互生ス、夏月枝梢葉間ゴトニ白花ヲ開ク、五出形梅花ニ似テ大サ三分許、內ニ蘂ナシ、外ニ萼アリ、亦五出ニシテ細長シ、花謝シテ實ヲ結ブ、萼ゴトニ一二實形圓尖ニシテ紅藍花實ニ似テ小シ、熟シテ白色或ハ淡褐ヲ帶テ光アリ、京師ノ山ニ自生ナシ、奧州、羽州、豫州、播州、江州、甲州、總州ニハアリ、ソノ根直ニシテ皮深紫色皮汁ヲ採テ布帛ヲ染ム、藥舖ニハ薩州、奧州南部、羽州最上ヨリ出ルヲ

雜木ありて下に草ある處に生ずる也、初草に植後には木の上まで紆、根は枯てなし、秋實を採土に埋貯置、三四月頃取出し、雜木ありて下に草ある處へ蒔べし、肥を用ず、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

攝津國卅四種、〇中略 菟絲子二升、　伊勢國五十種、〇中略 菟絲子五斤、〇下略

〔武江產物志 藥草〕早稻田邊　菟絲子

留紅草

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕留紅草　俗稱 本名未詳

按留紅草細莖蔓、葉細密如杉葉、而表裏淺青色、莖端出蕚、八月枝叉抽短莖、開花形如丁子樣、而紅色、長六七分可愛、花畢結角、中有細子、

〔剪花翁傳 三 六月開花〕縷紅艸　花の色極鮮、莖至て少く、葩五瓣にして形ち弄に似たり、長六七步に過ず、開花六月上旬、方日向ならんには、地一分濕りよし、方一分陰ならんには、地乾きよし、土撰ばず、肥油粕芽出し後より入べし、下種春彼岸よし、芽を出すことの甚遲きもの也、最早はえざるかと待かね、疑ひて必掘穿ち見ることなかれ、下種して十四五日目に生ずるあり、尙或は五六日或は十日廿日ばかりも段々後れて芽生ず、又はえざるものもまゝあり、一時に出揃ふものにあらず、都て種の形ち長きものは此のごとし、牛房人參の種なども亦同じ、葉の形ち眼艸の葉に似て、至て細く長一寸許なり、尤蔓物にして、竹の枝或は艸莖等を建副べし、是插花の料なり、

紫草

〔本草和名 八 草〕紫草、一名紫丹、一名紫芺、一名藐、仁諝音亡角反、出蘇敬注、一名野葵、一名紫給、一名茈莀 音戾、出釋藥名、一名紫莀 出雜要注、和名无良佐岐、

〔倭名類聚抄 十四 染色具〕紫草　本草云、紫草 和名無良散岐 兼名苑云、一名茈莀 紫戾二音 今按玉篇茈卽古紫字也、

〔箋注倭名類聚抄 六 染色具〕陶云、是今染紫者、蘇敬云、苗似蘭香、莖赤節靑、花紫白色、而實白、圖經云、二月有花、時珍曰、種紫草、三月逐壠下子、其根頭有白毛如茸、〇中略 王念孫曰、說文、茈艸也、可以染留黃、

菟絲子

じ、塊をなすなり、

〔新撰字鏡 草〕菟絲子{禰奈志乃鬘}

〔本草和名 草六〕菟絲子、一名菟蘆、一名菟縷、一名蓎蒙、一名玉女、一名赤網、一名菟累、{本條}一名菟丘沙、{已上出蘇敬注}名菟 菟糸子者人精也、{出范汪方}和名禰奈之久佐、

〔和爾雅 草木七〕菟絲子(ネナシカヅラ){一名菟縷、菟蘆、火燄草、金線草、並同、}

〔物類稱呼 三生植〕菟絲 ねなしかづら　東國にてさうめんぐさと云、筑前にてうしのさうめんと云、

按に下野の國日光山さうめん谷の水中に此草を、し、東武には隅田川に有、

〔重修本草綱目啓蒙 十四蔓草〕菟絲子　ネナシカヅラ　ウシノサウメン{江州、ヲリアチサウニモコノ名アリ、}　ムマグ　サルノハマイ{城州玉木}　サウメングサ{東國}　ナツユキ{佐州}　サバ{同上、大豆圃中ニ此草生ズレバ全圃ヲ枯ラス故ニ名ク、}

一名無根藤{醫學正傳}　藤蘿{事物異名}　黄絲草{先醒齋筆記}　金線藤{揚州府志}　迎陽子{藥譜}　狐絲{酉陽雜俎}　野狐

藥草{附方}　鳥麻{採取月令}　老禿鷲{事物異名}

二三月舊子地ニアルモノヨリ、細絲ノ如キモノヲ生ズ、一頭ハ地ニ入テ根ノ如シ、其絲一寸餘ノビテ、傍ノ草木ニトリツキ纏ヘバ其本枯レ、隨テ長ジ隨テ枯ル、其纏ヘル所ヨリ草木ノ津液ヲ吸フ、モシ始メ旁ニトリツクベキ草木ナケレバ枯ル、其藤漸ク蔓延ス、始メハ白ク後ハ黄白色又黄赤色トナル、大サ一分許多ク枝ヲ分チ、草木ノ頂ニ亂布シテ、索麪ヲ散スルガ如シ、夏ノ末花ヲ開キ穗ヲナスコト二三寸、白色ニシテ筒子樣ヲナシ椶木ノ花ノ如ニシテ小シ、後實ヲ結ブ、潤サ一分長サ一分餘、熟シテ褐色微黑內ニ二子或ハ三四子アリ、コレ藥用ノ菟絲子ナリ、實熟シテ蔓黑色ニナリ枯ル、始終葉根ナシ、一種海濱ニ生ズルモノハ蔓細ク子小ナリ、今藥舖ニ賣ルモノ多クハヨレナリ、

〔草木育種 下藥品〕菟絲子{本草}　和名ねなしかづらといふ、日光足尾、江戸早稻田本所邊稀に在所あり、

蕃藷也、乃陳官求種子于薩摩、試種之官藥苑中、則極蕃衍、於是以國字著蕃藷考一卷、而演其培植之法、官鏤版併種子行下諸島及諸州、未數年無處不種、至今上下便之、歳雖不登、民不遭饑者、實昆陽之惠及無窮矣、題其墓門之碑曰甘藷先生之墓、有以哉、

〔一話一言 四十〕甘藷

甘藷　享保年中、昆陽先生青木敦書、文藏上總國塚崎町千町田へはじめて命下りて植初しといふ甘藷、山口觀山田安之助土、より贈れり、昆陽甘藷の事、書上にも有之、百姓の言葉に符合せりとぞ、文政二年己卯冬月廿九日にしるす、

〔田畯年中行事 上〕前編

下總國葛飾郡撿見川ハ、高五百石ニ足ラザル村ナリ、近來甘藷ヲ作ルコトヲ數タヨリ、年々金三四千兩ノ物產ト爲レリ、其隣邑ナル馬加ヨリモ、每年三千兩餘ノ甘藷ヲ出ス、

〔茅窻漫錄 上〕甘藷

此物人に益ある事、時珍綱目に詳なり、授時通考には、十二勝を載せたり、異邦には固より食糧に充つるゆゑ、南方草木狀には、藷糧とも見え、博聞類纂に、種芋三十畝、可省米三十斛ともいへり、又酒にも釀すと見えて、類腋に徐玄扈の說を引きて、甘藷可充籩實、可以釀酒ともいへり、調用によりては、酒にも作り、又葛粉餅の代ともなる、鈴木俊民が甘藷記あり、蕃藷百珍といへる書などには、百品の料理やうを載せたり、國中農民の制ある時に、家々に是を作り貯へおく時は、第一菜蔬の資となり、又米穀とおなじく荒年の助ともなるべし、琉球國には、其法制あると見えて、是を掘る時に、頭人[illegible]にて男女に下知をなす事、此邦の農豐田地を巡り、撿見するがごとし、或一故家に、琉球國より[illegible]來る實圖あり、左のごとし、○圖略

彼地は、暖國ゆゑ海邊砂地に栽ゑて、莖を生ずる時、其莖に土をかけおけば、その所より根を生

も尋とはせられしに、新兵衛答申けるは、某が父新右衛門貞恒、長崎にすまゐけるが、かの地はもと米三千石ばかりいだす地にして、市中になりはひするものは五百戸にこえたれば、土地の米をば十日あまりにして食盡すべし、諸國運漕の米とだゆる時は、たちまち飢に及ぶべきことなりとて、甘藷を植て食料とする事を教けれど、農民のならひ、手なれざるわざをいとひ、其頃はさのみ植もせざりしかど、享保六年彼地にいたりてみれば、はや次第に植まして、食用ともなせり、されば、こたびの凶荒にも、おほくのたすけとなり侍るべし、これより先薩州にては、とくこれをつくり、農民日用の食となし侍れば、かしこに行かふ舟人等、かひもとめて江戸に來り、うりかふ事となりしに、いつしか痰の毒ありといひ出せしものありて、人々これをきらひしかば、ふたゝびうる者もなくなりにたり、されど毒ありといふはひが事にて、かへりて補益多く、薩州にては味噌にもつくり、または水にてさらし、葛にもかへ用ひ、濱邊などの五穀を生せざる鹵地にもおほくつくり、よく繁茂するものなりとて、培法など書て奉れり、青木文藏敦書も、甘藷考など書て進らす、そのころ長崎の鐵工平野良右衛門といへるもの、江戸に來りしが、彼培法に精しきよし、新兵衛より薦擧せしかば、文藏良右衛門して、吹上の御庭にてつくらしめ玉ひしに、これも年をへて繁植しければ、それより近國の代官におほせて、温暖の地をえらびうゑさせ玉ひしに、いくほどなく上總下總のあたり、これをつくるものおほくなりて、江戸にも常にもち來りて、これをひさぎ、のちは日用の食となりし事、ひとへに御仁慈の御心、天意にかなはせ玉ひしものなるべし、

〔先哲叢談〕八　青木敦書、字厚甫、小字文藏、號昆陽、武藏人、仕二大府一、嘗嘆曰、凡有二罪非一レ死刑者、遠二放之島嶼一、要レ在レ使二其終一二天年一耳、然諸島少二五穀一、常以二海產木實一給レ食、是以往往不レ能レ免二饑死一、豈不二亦痛一哉、卽雖二磽确之地一、遇二歲歉一則民不レ能レ無二菜色一、意者百穀之外可三以當二穀者一、莫レ如二

同ニ作付ス、

〔十三朝紀聞 中御門 四〕享保十八年二月、西國大疫、中略○先是琉球始貢甘藷于薩摩藩、長崎亦獲之於外舶、各種之、是歳也、其民頼免死者多、至是上國亦識其良栗、始傳種、

〔見聞漫録〕番藷

敎書民間に在りし時、番藷は甘藷と云ふ饑年第一の助ゆゑ、諸書を考へ集めて一卷となす、享保十九年敎書に命じて、養生所の塲地に作り試みしむ、敎書元來近年關東島々困窮して、飢人在と聞くによりて思へば、罪人を島々へ流さるゝは、罪人の天年を終しめられん爲なるに、却りて飢うれば上の御惠みに違ひ、甚だ不便なることゆゑ番藷を考へ集めしなれば、關東島々へ渡し度と申上げければ、關東島々へ渡さる、敎書身に餘り難有ことなり、其後島々にて作り習ひたるや否や、絶えて知らざりしに、寶暦六年、罪人神津島へ漂泊しけるに、島人番藷を與へて食はしむ、漂泊人この島にいかゞして番藷ありと問ければ、島人答へて云、享保年中上より番藷の種を渡し下されたれども、貯へあしくして種くさりしに、其比薩州人島にありて番藷を作り、貯へ様を悉しく敎へしにより、精を出だし作り習ひ、大さ大椀に入らざるほどに出來る、神津島は至りて小く、食物すくなく、飢人ありしが、番藷を作りてより、食物とぼしからずして、飢に及ぶことなく、人も次第に多くなるにより、上の御惠の難有あまり、小祠を立て、番藷を祀ると云、これ今年夏間聞くところなり、誠に一人にても飢人を救ふは廣大のことにて、有德廟の御仁政深く仰ぎ奉るべきなり、さて八丈島にては、番藷を少し作り、其外の島々は作らざるにや、いまだ聞かず、作り習はせ度きことなり、これ寶暦九年聞くところなり

〔有德院殿御實紀附錄 十七〕沙糖に次ては、甘藷をもつくらしめ玉はむとて、あつく沙汰し玉へり、これは享保十七年西國蝗災ありて、農民飢餓せし時、深見新兵衛有隣に、長崎の邊凶荒のさまど

内は其蔓の節々地に著ぬ樣に、時々草を除き蔓を左右へ移し轉すれば、根に力いり、塊を成こと大にして且多し、かくするを蔓反といふ、其まゝにして滋蔓しめ、節々地に著て鬚を生ずれば、根に塊少し、初種しより二三度も草を除き、蔓を移すまでにて、水を瀉ぎ糞を用ること絶てなし、た富民初苗を種るとき、一株ごとに糞灰を少しづゝ根に置て種れば、塊を成こと速くして大なりといふ、今北陸の農家は、甘藷の苗床をなさず、畑の耕しこしらへして、畦筋を通し、塊種一を二つ三つに引缺て、蹲鴟うゝるやうして、土を掩おくこと也といへり、されどかくしなんは、種塊多く費て、工夫も殊にかゝりぬれば、必蔓種にじくものなし、

〔草木育種下〕甘藷草本　又琉球いもとも云、薩州より來り、諸國に多し、武藏、相模、上總、安房等の砂地にて作るもの味よし、皮に赤みあるもの上品なり、山土にて作るものは形大なれども味劣り、赤土にても砂まぢりたる所へは作るべし、○中略肥を用ず、

〔蕃薯考〕青木先生書○薯の植法は、十二月に其苗の地を耕し肥し置て、春の彼岸すぎにうゆるに、灰又ハ牛馬の糞を土にまぜ、深サ二尺ほどにして、薯種を二三寸に切てうへ、土を五寸ばかりかけ、薯蔓を植るごとく間廣くうゆるなり、

〔八丈島年代記〕一享保八年、公命御厚情の御仁惠を以、被差遣候品々左之通、○中略

一薩摩芋種　一蕃苡茈種

右之通被差遣候處、さつまいも蕃苡茈は作付不手馴爲哉、無間も此品ハ絶失申候、

一享保十二年、公命御仁惠を以、左之通被差遣ル、

一龍眼樹　身木二本　一薩摩芋種

右之通、貳品被差遣候、○中略

右薩摩芋種手入いたし作付、樫立村より仕覺、夫々村々江も相弘メ、當時一方の助ケニ相成、一

甘藷栽培

れ ばとて、蕃薯とも稱せしなり、是本邦にしては後陽成天皇の文祿三年に當れり、其後百六十年餘を經て、淸國の乾隆廿年乙亥の頃、(乾隆廿年は寶曆五年なり)新方經綸五世の孫陳世元、其男雲相次て、郡縣膠靑豫等の州に種しより、漸く東浙の地に轉へ致しける、其始末は金薯傳習錄に詳にせり、されば西土へ流傳せしは甚近し、

〔成形圖說二十五穀〕藷芋(是專藷の通用なり)○中略

此藷春暖新芽を發す、其莖紫色を帶び、漸く蔓をなし、節あり、其節地に着ば根鬚を生じ、地につかざれば葉を生ず、葉は蕺菜の葉に似たるあり、又三尖を成して牽牛子葉に似たるあり、南方の暖地にては、秋淡紅花を開く、夕顏の形と相同じ、其根塊を成し、子母鉤連して五六相簇つく、其塊皮紫赤色なるもの多し、赤白あり、深紅あり、淺紅あり、微黃あり、濃黃あり、淡紅白の二色をなすあり、形ちは圓にして長し、本末皆鋭りて末には少し細鬚あり、肉の質理膩潤ありて、其色は白と黃との二つなり、氣味は甘平無毒、生熟俱に食べし、○中略 凡此ものは二月なかば、園圃中日あたり宜しく、南向の暖地をえらみ深く耕し、故藁類をきりこみ、馬糞を覆ひ、地の温に和ぐ樣にして、藷塊を縱に淺くうゝる也、又其半を出し、半に土をかけ置もあり、都而土を覆ふも宜し、さて上には腐りたる茅藁類を覆ひ置ば、三月に至り芽を叢生し、漸く蔓をなす、是を苗床といふ、蔓一二尺に及ころ、細雨中もしくは雨後の曇りたる日をえらみ、芽を鋏とり、別に耕し拵らへ置たる畑に、二尺ばかりづゝ、間を明け、横相距こと七八寸間に種べし、是をかぎうゑといふ、(苗床一歩に藷塊四五斗をうゑ、一ばん苗にて二三畦にうゑ及すなり、)はじめてかぎとりたるを一ばん苗といふ、又跡に出芽したるを二ばん苗、三ばん苗といふ、四月初より六月の初までは殖るなり、二三ばんの苗を種るときは、一ばん苗にて種置し蔓成長ぬるゆゑ、是をきりても種るなり、農業全書等に、旱せば水を灑ぐなどいへども、手廣く種れば民力及ばず、故に雨後に種置時は、何樣の烈日にも活すといふことなし、如此種終りて、夏の

此もの吾邦に入りしは、既に慶元、〇慶長元和の頃ほひ、呂宋等の諸蕃より、吾薩、〇鹿兒島の唐港に郡坊津互市せし時、齎し來し由いひ傳へぬ、當初吾藩の僧文之が著せる南浦文集、呂宋國に贈る書牘の中に、彼國の商船贈信交易せしことゞも詳に載たり、當時の番舶吾邦に入貢せしは、多く川邊郡坊津に幅輳せしかば、歌にも唐の湊とはいひける、是もの唐芋ともいふは、我俗海外の地をさして、なべて加良と呼びしが故ぞかし、大和本草、和漢三才圖會等の書は、元祿中に撰しものなるに、甘藷は先年より薩摩長崎へ種ると記せる、是にて元祿よりもいと早く西偏にはうゑ始けるを見るべし、且吾沖繩島には、儀間親雲上が西土へ渡りし時、福建より持歸て種廣めしといふ、其後元祿十一年戊寅の歲、中山王より甘藷一筐を、藩の大夫種子島久基に贈りしかば、室老西村某に命じて、久基の采邑熊毛郡種子島石寺野といふ處に種そめしこと、其家乘に載たりき、〇註略又薩摩頴娃郡山川の鄕兒水に、利衛門といふ者、寶永二年乙酉のとし、沖繩よりもち來りて植たてしとて、今も山川の者語り繼つ、利衛門が事を德とせるあり、此等の說どもをおもふに、此もの始呂宋國より直に持渡りしほどに、唐芋と呼名せしとしらる、若琉球より始致ましかば、琉球芋とこそいふなるべけれ、しかるを筑紫中國にては、本藩の船どもの琉球より登りつ、又は浪華へ往來する時、此種子を琉球の芋なりとて傳へ弘めしより、琉球芋の名を負せたるならし、和漢三才圖會曰、甘藷は琉球國多有之、薩州及肥州長崎亦多種之と載て、本外國より舶傳せしことはいはざる也、按に甘藷は、明の李時珍の綱目を著すの時までは、いまだ唐山にもなかりき、故に異物志卉木狀を引て、出交廣、南方珠崖之不業耕者惟種、此等の說ありて、現に見たりとはいはず、本綱成て後十六年にして、明の萬曆廿二年甲午のとし、閩人陳經倫なるもの、其父振龍嘗て呂宋國に商ひせしに、朱藷の多きを見て、陰買して持歸り、及び其種法を傳へ置しを、時の巡撫金學曾といひし者に獻り、初て閩中に種廣めて、大に歲荒を救ひしかば、民其利を德とし、金薯と名け、蕃國より渡

甘藷傳來

長崎には薩摩より傳へて、今は九州に流布す、但寒地には榮へがたし、唐人は酒にも造り、又水飛し粉を取て餠にしたるは、上品の物なり、

〔浪花の風〕薩摩芋は殊に多し、靑みあるものと、赤みあるものとの二種にて、靑みあるものは、俗に水。芋。と唱ふる種なり、水芋の方都て甘みは强し、

〔大和本草五菜蔬〕甘藷〈○中略〉 此種元祿ノ末、琉球ヨリ薩州ニ渡ル、煖土ニ宜シ、寒地ニ植レバ生ゼズ、番藷ノ如シ、經久味ヲトル事本草ニ云ガ如シ、

〔本朝世事談綺二生植〕甘藷

元祿の末、琉球より薩摩へわたる、煖土によろし、寒土に植れば生ず、本綱云、南方の海人多壽なるは、五穀を食せず、甘藷を食するゆゑなりとあり、此蔓を切植に、根生て活す、土人朝夕飯に充、あるひは蒸て干粉にして糧とす、民食を助け飢を救ふ、其利大なり、肥前薩摩に多植る、東武へ來るは頃年保○事なり、

〔塵塚談下〕薩摩芋の事、日本には寶永元申年より、琉球芋薩摩ゟ種來る、長崎にて專ら種たるよしなり、靑木文藏名敦書、號昆陽〈當時百五十歲、實木伯太郞祖父か曾祖父なるべし、〉蕃藷考と云ふ書を著し、享保二十年乙卯二月十五日上書す、書中に薩摩よりも蕃藷種藏の法を上書せし事を載たり、最初唐土より琉球へ渡り來り、琉球より薩摩へ渡りて、三十四五年程に相成よしに見へたり、同年三月、文藏に植立候樣被仰付、小石川養生所內へ圃をこしらへ造り、元文元辰年御止になり、同二巳年三月三日、養生所勤役の者へ芋割賦し、芋畑引拂被仰付、其後諸國へ流布して人每に食し、朝夕の助となれり、寶曆年間に至りては、上總下總銚子岩槻伊豆大島、其外諸所ゟ多く作りて江戶へ運送す、銚子を上とし、大島より出るを島芋といふて絕品なり、近歲に至り大なる國益といふべし、

〔成形圖說二十五穀〕唐芋〈カライモ是專俗の通稱なり○中略〉

種分別せらるれど、實は兩種一物なり、

〔官中秘策年中行事十九〕年中諸大名獻上物之事

三月

一甘藷　　　　松平右近將監

〔重修本草綱目啓蒙柔滑十九〕甘藷　リウキウイモ　サツマイモ　シマイモ讚州　トウイモ肥前

カライモ　ハチリ共同上○中略

本薩州ヨリ來ル、今ハ東國ニモ多ク種ユ、土地ヲ撰バズ、砂礫ニモ繁殖ス、種ル法ハ農業全書ニ詳ナリ、蔓生葉ハ梓葉(アカメガシワ)ニ似テ鋸齒ナクシテ一尖、或ハ三尖アリ、質厚クシテ深緑色、新葉ハ紫色ヲ帶ブ、皆互生ス、花ハ鼓子花(ヒルガホ)ニ似テ大ナリ、色モ異ナラズ、其根皮色白ク、或ハ微紅、生ナル時ハ肉白シ、煮ル時ハ黄色トナル、是ヲリウキウイモト呼ブ、肥前ニテハ、シロイモト云フ、甘藷中ノ下品ナリ、上品ノ者ハ薩州ニアリ、方言ボク、一名アカバチリ、肥前サツマバチリ同上此品甚寒氣ヲ畏ル、故ニ東國ニテ蒔ルコトアタハズ、其皮薄シテ紫赤色、煮ル時ハソノ肉色白クシテ黄ナラズ、味沙糖ノ如シ、又肥前ニモチバチリ、サクラバチリアリ、皆上品ナリ、唐山ニテ甘藷ノ至テ大ナルモノヲ、玉枕藷、群芳譜三家藷草實花木考ト云フ、

増、○中略蘭山翁シロイモヲ甘藷中ノ下品トシ、アカバチリ、一名アカイモヲ上品トスルハ誤ナリ、シロイモハ緊實ニシテ味甜美、最上品ナリ、アカイモハ鬆疎ニシテ緊實ナラズ、味甚ダ淡シ、甘藷中ノ下品ナリ、但アカイモハ、收成多クシテ民用ニ益アルノミ、

〔長崎夜話草五〕長崎土產物

赤芋琉球芋　二種一類にて、赤芋はすぐれて甘味なり、赤芋は薄皮は紅色にて、内は甚白し、琉球芋は內外黃色、甘味うすし、田家多く種て糧として、凶年の飢を助け、脾胃を補ふ、利益尤多し、根本

〔大和本草五菜蔬〕蕃藷　閩書曰、萬暦中、閩人得之外國、瘠土砂礫之地、皆可種、蔓生如瓜蔞、黄精山藥之屬、而潤澤可食、或煮或磨爲粉、其根如山藥、皮薄而朱、今案に、此物長崎ニ多シ、菓トシテ食ス、味甚甘シ、寒ヲフソル故、他邦ノ寒土ニウフレバ消ユ、暖地ニウフベシ、甚繁茂ス、藥肆ニ白蘞トナウルハ蕃藷多シ、辨別スベシ、不可用、

甘藷　蕃藷ノ類ニテ別ナリ、俗ツクテイモト訓ズ誤ナリ、ツクテイモハ佛掌薯也、甘藷ハ蔓草也、葉ハ蕃藷ト龍葵ノ葉ニ似タリ、葉ノ形カクノ如シ、〇圖略　根ハ瓜樓根ニ似タリ、根下ニモ短キ蔓アリ、根ノ餘ノヒゲナリ、又鵞卵ニ似テ大キナリ、鴨卵ノゴトク小ナルモアリ、大ナルハ重一斤アリ、長キアリ、圓キアリ、夏月蔓長ク生ズ、其蔓ノ節地ニツケバ根生ズ、故ニ蔓ヲ切テ植レバ根生ジテ活ス、貧民朝夕飯ニ充ツ、或蒸テホシ、細末シテ餅トシ糧トス、來年ニ至リ久ニ堪ヘ、民食ヲ助ケ、飢饉ヲ救フ、其利益大ナリ、是其功能ノ第一ナリ、

〔大和本草附錄二〕蕃藷　閩海而南有呂宋國、渡海而西爲西洋、呂宋其國有朱藷、被野連山、而是不待種植、其初入吾國時、値吾國饑、得是而人足一歲、其種也不與五穀爭地、凡瘠鹵沙岡皆可以長、糞治之則加大、泉人鬻之斤不値一錢、二斤而可飽矣、是與甘藷不同、長崎多、長崎ニテハアカイモト云、

〔五雜組十一物部〕百穀之外有可以當穀者、芋也、薯蕷也、而閩中有番薯、似山藥而肥白過之、種沙地中、易生、而極蕃衍、饑饉之歲、民多賴以全活、此物北方亦可種也、按諸書草木狀、有甘儲、形似薯蕷、實大如甌、皮紫肉白、可蒸食之、想卽番薯、未可知也、

〔茅窻漫錄上〕甘藷
甘藷さつまいもと訓ずるは、最初薩摩へ來す故なり、琉球いもといふは、彼土に多く作る故なり、元來は蠻種にて、和漢ともになき者なりしが、今は和漢とも甚多し、白赤黄の品種ありて、赤き者は閩書に、蕃薯根如山藥、皮薄而朱とあり、貝原翁は赤きを赤芋とし、甘藷を常のさつま芋とし、而

〔赤染衛門集〕あさがほのはなをとくみんとて、つま戸をあけたれば、露いみじうおきたるを、
朝がほのとくゆかしさにおきたればわれよりさきにつゆはゐにけり

〔梅花無盡藏〈六雜文〉〕江戸城留別碧牽牛花詩序
余嘗司馬公花庵之碧牽牛、就武陵寓處之東西籬、插數百莖、爛熳捧露、長享戊申仲秋、棄地而去、斯花如知、而曉碧蕭條映分袂、無端爲慰花、作留別之詩、蓋擧東坡留別牡丹之例也、巨福之聖緒文翰墨之志、九牛毛中塞鵲之一角也、邇來移几案於武之江城、雖云騷屑之時、與余往還無虛日、投片紙需一辭、不遑製旅裝、烏可得舒嘯乎、漫寫牽牛之一落、索萬分之一、有今時之王摩詰則碧尤之體度、請畫爲圖、

〔駿臺雜話二〕朝がほの花一時
此時松永某とて、鈴木氏が道學の友ありけり、其人朝がほの歌とてかたりしが、自からよめる歌にや、又は鈴木氏がよめるにや、とかく兩人の內にてあるべし、
あさがほの花一ときも千とせ經る松にかはらぬこゝろともがな、此歌も意味ふかきやうにおぼへ侍る、昔よりあさがほをよめる歌おほけれども、大かた朝がほのあだなる事をいひて、秋のあはれをそへ、世のはかなきをしらするを趣向とする外は見へず、〇中略今松永氏が松にかはらぬ心といへるは、それにてはなかるべし、各いかゞおもひ給へる、翁〇室鳩巣は朝に道を聞て夕に死するも可なりと、いへる意とこそ思ひ侍れ、〇下略

甘藷名稱

〔和爾雅〈七蔬菜〉〕甘藷(リウキウイモ)〈朱書、紅山藥並同、〉蕃薯(アカイモ)〈見于閩書〉

〔書言字考節用集〈六生植〉〕琉球薯(リウキウイモ)〈本名番薯〉蕃薯(アカイモ)

〔物類稱呼〈三生植〉〕甘藷りうきういも　畿內にてりうきういもと云、東國にてさつまいもといふ、肥前にてからいもといふ、享保年中薩州より來る、味ひ美にして其性よろし、又長崎にりうきういも、てうせんいもと稱する物有、是は別種にして蕃薯なり、

けにごしは牽牛子なり、牽字は、韻鏡二十三轉先韻にて舌內聲なり、牛は、三十七轉尤韻の字にて、音ギユウ、呉音グウなり、然るにゴといふ音に用るは、萬葉集に瞿麥を牛麥と書るは、ウ韻を略きてグと呼なり、又普通に鏈樓をレユロウと唱ふる例と同じことにて、また其グを通音のゴに轉じたるなるべし、牛王、牛頭、牛膝等の類ひ准らへ知べし、太田氏云、尤虞通用ニテ、牛ノ呉音ギユナリ、其ギユノ切ゲトナレリ云々、又云、牛ノ呉音ゴハ、富ニホ、敍ニコノ音響也といへり、

〔拾遺和歌集物名七〕あさがほ

我やどの花のはにのみぬるてふのいかなるあさかほかよりはくる

よみ人しらず

けにごし

わすれにし人のさらにも戀しきかむけにこしとはおもふ物かは

〔拾遺和歌集哀傷二十〕朝がほの花を、人の許につかはすとて、

藤原道信朝臣

あさがほを何はかなしとおもひけむ人をも花はさこそみるらめ

〔源氏物語寄生四十九〕つねよりもやがてまどろまず、あかし給へるあしたに、霧のまがきより、花の色色おもしろく見えわたたる中に、あ。さ。が。ほ。のはかなげにてまじりたるを、猶ことにめとまるこゝち し給、あくるまさきてとか、つねなき世にもなずらふるが、こゝろぐるしきなめりかし、かうしもあけながら、いとかりそめにうちふしつゝ、あかし給へば、此花のひらくる程をも、たゞひとりのみぞみ給ける、人めして北の院にまいらんに、ことごとしからぬ車さし出させよとの給、〇中略朝がほをひきよせ給ふに、つゆいたうこぼる、

けさのまの色にやめでんをく露のきえぬにかゝる花とみるみる、はかななどひとりごちて、をりても給へり、

〔源氏物語湖月抄寄生四十九〕細、〇細流抄槿は常なき花の色なれや明るまさきてうつろひにけり、

牽牛子雜載

じ、これをすかすべきなり、

〔萬葉集八秋雜歌〕山上臣憶良詠秋野花二首
秋野爾、咲有花乎、指折、可伎數者、七種花、
芽之花、乎花、葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、朝貌之花、

〔萬葉集十秋相聞〕寄花
展轉戀者死友、灼然、色庭不出、朝容貌之花、

〔箋注倭名類聚抄十草〕岡村氏曰、萬葉集云、山上臣憶良詠秋野花二首、秋野爾、咲有花乎、指折、可伎數者、七種花、其一芽之花、乎花、葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、朝貌之花、其二是朝貌之野生可知也、而牽牛子漢種、無野生、或訓木槿為阿佐加保、木槿亦漢種、無野生、則萬葉集所詠朝貌非牽牛花、又非木槿也、竊按古之朝貌、蓋謂旋花也、旋花所在有之、是萬葉集所以詠阿佐加保於野花中也、萬葉集詠花歌云、朝果朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮、亦詠旋花、雖其名曰朝貌、然日晩猶不衰也、今本載在荻歌中者、傳寫錯亂也、後牽牛子自漢土至、當時未有和名、故古今集物名謂之計爾奧之、而其花甚似旋花、故謂牽牛又為阿佐加保、牽牛開花亞於旋花殆一時、其花大而美、倍於旋花、遂以專朝貌之名、於是俗名旋花為晝貌、以避牽牛花之阿佐加保、蓋以旋花至日晩猶不萎、不與牽牛花之逼日影則萎同也、按旋花本名舜、見說文、俗從艸作蕣、以別堯舜字、木槿一名蕣、亦見說文、或假舜為蕣、毛詩顏如舜華、傳舜木槿也、是也、然則旋花之舜或可作蕣、木槿之蕣或可作舜、而木槿亦朝華暮落者、則謂木槿為朝貌者、蓋因蕣舜通作與朝花暮落而誤也、是亦可以證旋花為朝貌也、

〔古今和歌集十物名〕けにごし　やたべの名實
うちつけにこしとや花の色をみんおく白露のそむるばかりを

〔倭字例附錄〕けにごし

今ノ世ノ人心相應ノ玩物コト思ヘバ、長大息シテ其花モ見ラレヌヤウニ覺ユ、此巧思ト人力トヲ以テ、五穀ノ中何ナリト、新タニ作リ出サバ、後世民用ノ助トナル嘉穀ノ別種モ、生ズベキニヤ、

〔延喜式 三十七 典藥〕雜給料

四味理仲丸廿劑、〔中略〕牽○牛○子○丸五劑所須、〔中略〕牽牛子三斤十三兩、

〔廣益地錦抄 四〕牽牛子　あさがほの實也、はなに白、紫、淺黄、紅、櫻色あり、藥種にはむらさき花さくを用ゆ、

〔四方の硯 月〕いつの時にか有けん、西國に經濟の志ある人、國の窮乏をなげき、國守に富國の術をすゝめて、堤に水蠟樹と唐牽牛子とを、多く植しめけるが、牽牛子は油に製すとなり、この國それよりして、大富强國となりぬといふ、管子の富に通せる人なるべし、

〔今昔物語 二十八〕越前守爲盛付六衞府官人語第五

今昔、藤原ノ爲盛ノ朝臣ト云フ人有ケリ、〔中略〕早ウ此ノ爲盛ノ朝臣ガ謀ケル樣ハ、此ク熱キ日平張ノ下ニ、三時四時炮セテ後ニ呼入レテ、喉乾タル時ニ、李、鹽辛キ魚共ヲ肴ニテ、空腹ニ吉クツヽシリ入サセテ、喉キ酒ノ濁タルニ、牽牛子ヲ濃ク摺入レテ呑セタラバ、其ノ奴原ハ不痢デハ有ナムヤト思テ、謀タリケル也ケリ、

〔福富草紙〕此女は七條のとね翁の妻にてさぶらふ、あやしのへひりの秀武、きなにはかされ、朝良の實をすきたれば、そののちかくひ候へば、心をみさせ給くすりを給べき也、ひでたけと申すやつのわざにてさぶらふ術をすかして、朝良のみを十つぶいりすかせてさぶらへば、其後はらたれとけて、はざうのみづをいだすやうにつかまつれば、としおいたるもの、かくさぶらへば、なにをたのみ、さながらふべきぞ、うねべどの、たすけさせおはしませ、朝良のみは、ひとつだに腹とくる物なるを、さてすきてんには、よき事ありなんや、さりともこの藥をすきては、けしうはあら

る、節壹升ほど入鉢に、こへ土に干鰯等をまじへ鉢の底にしき、その所へ其儘にうつし、外を右之屎土の砂がちなるを、やわらかに入、扨其鉢を土の中にうづむか、又は三升ばかり入鉢等にうづむべし、花三りん又四りんつけて、其餘の莟出次第にとり、前日夕方につぼみ臺より末にいたり、二寸六分あれば、翌日四寸經りの花ひらくとしるべし、葉小にして花大なるを好とす、○下略

〔剪花翁傳三五月開花〕蕣　花種々近世異花數百品枚擧べからず、よて育方略之、開花五月上旬より漸々咲て、七八月にもおよぶ也、升水の方切口を沸湯に入て後、水器に扦入おくべし、されどいまだ盡す、酢煮して後冷水に扦置べし、慥に升水る也、又方龍骨を以よく煮るもよし、又午後より夕方までに花を開かせんには、前夜に、莟の蔓を切、さて葱の末を莟をいる、許に切て、莟に帽せ、よく詰置、重石を結て井中に深く扦入おき、翌日備用のとき帽を脱して插花にすべし、

〔武江年表七〕文化十二年乙亥、今年ゟ肇り朝顔の異品を玩ぶ事行、文政の始迄、都下の貴賤、園へ栽へ、盆に移して鑑會を設く、

〔甲子夜話十四〕近クハ牽牛花ノ變甚フシテ、花色ノミナラズ、葉ノ形狀モ變ジテ、柿葉、柳葉、楓葉、葵葉ナド、唱へ、イカニモ其呼所ノ如キ葉ナリ、花ノ品類ヲ賞スルハ聞ヘタリ、葉形ノ變ゼル何オモシロカルベキヤ、人ノ好尚モカク迄ネヂケタルコトヨト、興醒ルバカリナリ、又一變シテ、花ノ大輪ヲ賞スルコト流行出シ、花ノ指渡シ數寸ニ及ブ、其種法ヲ聞クニ、肥土ヲ臘月ヨリ製シ、牀下ニ藏メ、春雨ニアテ、盆ニ上セ種ヲ下シ、又移植シテ培養シ、蔓ノ延ザルヤウニ先ヲ留メ、葉モ多クテハ精力洩ル迚摘去リ、花數モ幾ツケテ、只一花ノ輪ノ太キナルヲ互ニ戰ハス、其盆栽ノ形容、臺生トモ見ヘズ、譬ヘバ鳥ノ翎毛ヲムシリ取シガ如ク、誠ニ見苦シク見ルニ堪ザル計ナリ、菊牡芍ナドハ、盛モ久シケレバ、花ノ見所モ長クアリ、牽牛花ノ朝ニ開キ、晝ハ萎果ル物ナルヲ、頃刻ノ觀ニ供スル迚、半年餘ノ人力ヲ費スハ、餘リトイヘバ了簡モナキ、淺ハカナル娛樂ニテ、イカニモ

けんごし、黑白の二色あり、子の白きが、直段少高し、是又屋敷廻り餘地あらばうゆべし、かきにははせ、叢にもまとはせ、其外他の物のさのみ蔓長せざる所にうへ置て、竹を立は、すべし、土地の費へさのみなく、長くはひまとひ、子多くなる物なり、子を二月蒔置て、三月移しうゆるもよし、かきのもとなどにうへ付にして、少糞灰などかけ置べし、秋の末子熟し、蔓も枯て後下に筵など敷、垣をそしたをし打て取べし、又一々つみ取もよし、多少により、所によるべし、藥屋に賣て利なき物にあらず、又子を多く取、油をしめ取もよし、

〔草木六部耕種法十四〕凡牽牛ヲ作ルニハ、先其種子ヲ能ク撰ビ、苗代ヲ造テ苗ヲ爲立ベシ、苗代ハ赤土ニ腐土小便灰等ヲ能ク紀交ヘ、二月上旬ヨリ春分頃マデニ種子ヲ下シ、其培養ノ法ハ、悉ク豐苗ヲ爲立ル如クシテ、八十八夜過テ此ヲ移シ植ベシ、植地ハ花壇ニテモ盆栽ニテモ、牡丹ヲ植ル心持ヲ少シ含テ植付置キ、時々糞養水ヲ薄クシテ灑ギ、盆栽ハ殊ニ此ヲ乾燥セシムルコト無カルベシ、

〔朝顏通下〕附錄土拵方

植木しめの随分赤みあるあらき土に、砂三分を和して、立冬より春分にいたる迄、雨のあたらざる所に囲ひ置、其後乾し、ほど能通し用ゆ、或はマイゴミ赤川同じ、○中略

糞入方

芽出葉生ひ蔓のびて、既に莟あらはるゝ、節糞を入、又半月を經て糞を入、十日廿日目と次第に糞を見合て入べし、尤大抵のものは直入よりは、糞水をかけるべし、極日當りを吉とす、又斑のにぶきものは糞を和へて能日に當べし、大暑後の日は晝までの日を好て、晝後の日をいむべし、○中略

大輪仕様

土五合入鉢によし糞土を入、たね四五りうを眞中へまき、種よきを殘して、其餘を去り、莟あらは

送りたり、

〔榮巓使記 下 備州〕照任曰、備中ノ松山ト云フ所ニ、此頃珍シキ牽牛花ヲ生ゼリ、花葉ノ形ハ古來ヨリ有リ來ルニ同ジクシテ、丈長カラズ、三四尺位ヲ限トス、花ノ色白ト紺ト咲分ケ、或ハ白地ニ紺ノ細カナル星入リ、又紺ニ白キ細キ筋入ルモアリ、其年ノ子ニテ又生ジ花咲ク、近比京師ニテ松。山。ア。サ。ガ。ホ。ト云フ、

〔玄同放言 二〕山牡丹

因にいふこの兩三年來の刻本、牽牛品、及朝顏通を閱するに、異樣雜色、數十種を載せたり、しかれども黑牽牛はさらなり、黃。花。も。亦。稀。な。り。、好むものゝ云、今年異黃處々に出づ、これ未曾有の奇品なりといへり、按するに、元祿三年の印本、俳諧物見車の卷端に、朝顏に黃あり白きありといふ腰句を出だして、當時の俳諧師似船、晩山、言水等數人に、上の五文字をおかせたるに、似船は末の世や云々、常牧は惜いかに云々、我黑は時世かな云々、晩山は蝕の夜や云々、と五文字を冠らせたり、又如泉は、當分は五もじ置きかね申し候と辭し、言水は朝顏に黃なるは稀なりとのみいひて、五文字を置かず、方山は返答もせざりしよしを、その名の上に注したり、この事は北條團水が犢牛(コトヒウシ)に飽まで辨じたれども、こゝに要なければ贅せず、よりて思ふに、天和貞享のころ、牽牛花の流行せしことあるなるべし、もししからずば、黃花は今も稀なるに、當初あるべうもあらず、あらずば黃あり白ありといふべからず、

〔武江產物志 遊觀〕牽牛花(あさがほ) 下谷本所 花形の變りは 孔雀 亂獅子 椿咲 桔梗咲 ちやみ 茶屋 采咲 八重孔雀 濡黃 牡丹咲 龍膽咲 吹切 咲 糸咲 風折 縮咲 いぎりす 眉間尺 卷絹 薩摩紬 絞り類 葉形の變りは 孔雀 龍の眉 龍田川 葵葉 黃葉 松 島 柳葉 唐糸 鳳凰葉 柿葉 宇津川 いさは類 南天葉 七福神 芙蓉は 金剛獅子 銀龍 圓葉 紅葉ば 通玄仙 破柳 春葉 山島 石花 木立 鳳葉

〔農業全書 十 藥種之類〕牽牛子

石下（数多ノ蕊皆簪首ア、一節ノ間キ大蕊ト成テ、枝ノ無ク花ノ多ク開タル者ヲ云フナリ）、縮緬（花ノ細カニ縮ルヲ云フ）、月暈（花白クシテ、筒中紅ナルヲ云フ）、濱千鳥（其葉小クシテ花モ小ク、蕊多ク花開クモノヲ云フ）、柳葉（葉細長クシテ、柳ノ如キ者ナリ）、鳳尾（其葉ノ鳳凰ノ尾ニ似タル者ヲ云フ）等ナリ、牽牛ノ花ハ琉璃色ト白ハ古ヨリノ常色ナレドモ、今ハ淡紅、深紅、淡紫、深紫、淡藍、流黄（へんおう）等モ有テ、且又間道モ縦横モ種々色ノ間錯タル者アリ、花ノ形状モ大小長短アリ、瓣切タルアリ、切ズシテ縮タル有リ、八重モ有テ變異叢出ナ、其名目ヲ記スベカラズ、總ナ其筒ノ轉ジタルヲ茶臺ト名ク、

〔草木育種下編〕牽牛（あさがほ）（本草）藥に入には黒白の二種を用、李氏本草綱目に丁香茄（ていこうか）苗（本草啓蒙）を以て白牽（はくけん）牛とするは誤なるべし、白牽牛は常のあさがほの中にて、種の色白ものなり、近頃江戸大坂にて、多植るゆへ種類甚多、悉擧に暇あらず、花の色は碧色は常品なり、紫淡黄紅、又淺青に紺の竪筋あるものあり、又白して筒の紅きあり、又花瓣切たるあり、又切ずして縮たるあり、又花切て瓣多ものを亂獅子と名く、又花の筒より細長き花瓣出るを孔雀と名く、又八重あり、筒を轉ずるものを茶臺と云、又葉の形變ものあり、葉小く厚縮たるを宇津川と名く、又葉黄綠色にして綠斑あるものを松島と名く、又葉細長して柳の如きものあり、又絲瓜（へちま）の葉に似たるものあり、又數多の莖皆寄著て累層くなり、枝なくして花多開ものあり、是は石下なり、その餘二百餘種あり、

〔嬉遊笑覽草木十二〕安永七八年、さくら草形のめづらしきがはやり權家の贈りものとす、數百種に及ぶ、これは下谷和泉橋通りに、谷七左衛門といふ大番與力あり、其人の老母、花を植作る事を好み、櫻草を多く植作れり、○中略其後朝がほを多く作り、さまざまの花出來しかば、この度は六枚折の小屏風を腰貼にて作り、細き青竹處々節ある處にて、竹の花生のやうに口を切て、節毎に水を貯へ、朝がほの蔓の先葉一寸ちぎりたると、花一りんとを、花生の口ごとに插み、これを件の屏風にかけならべて、屏風はたゝまるゝやうに、縁を厚く作るなり、是も人に借して見せたり、この屏風はあまた有き、文化五六年の事なりし、一とせ谷氏大坂に在番したる頃は、彼地へ多く牽牛子を

尋常ノモノナリ、又五瓣筒マデ切レタルモノアリ、又花頭五尖ナルモノヲ桔。梗。ザ。キ。ト云、葉モ亦五尖ナリ、其圓瓣ナル者ヲ梅。ザ。キ。ト云フ、尋常ノ花ノ形ニシテ、中ニ小瓣アルモノヲ孔。雀。ト云フ、紫アリ、淡紫アリ、紅アリ、淺紅アリ、間色ナルモノアリ、碧白相間ル者ヲ黒白江南花〔秘傳花鏡〕ト云、俗ニマ。ツ。ヤ。マ。ア。サ。ガ。ホ。ト云、又藍色ニシテ紅點ナルモノアリ、又千葉ニシテ間色ナルモノアリ、瓣多シテ重シ、故ニ正開スル時ハ莖自ラ折テ實ヲ結ビ難シ、

集解、時珍曰、白者人多種之云云、此草ハハ。リ。ア。サ。ガ。ホ。ナリ、一名ヲウジナスビ、トウナスビ、マンパラス、或ハモンパラストモ云フ、寛延ノ始薩州ノ商人此種ヲ携ヘ來ル、今ハ諸州ニ多ク栽ユ、春月種ヲ下スコト牽牛子ノ如クス、葉ハ何首烏葉ノ如ニシテ光アリ、藤ニ桑刺アリ人ヲ傷ラズ、花牽牛花ニ同クシテ小ク淡紫色、筒ニ近シテ色深シ、申ノ時開テ戌ノ時萎ム、故ニ今俗ユウガホト呼ブ、其蔕肥テ柔刺アリ、甚茄ノ蔕ニ似タリ、上ニ房ヲ結テ牛奶茄ノ形ノ如シ、熟スル時ハ白色微褐牽牛子殼ノ如シ、內ニ子アリ、子形亦同シテ微大白色、其嫩ナル者ハ食フベシ、コレ救荒本草ニ載スル所ノ丁香茄兒一名天茄兒ナリ、白牽牛ニ非ズ、時珍ノ說誤レリ、白牽牛ハ白花ノ牽牛ヲ以テ眞トスベシ、

一種ヒ。ラ。ザ。ク。ア。サ。ガ。ホ。ト云者アリ、莖ノ形覇王樹(サボテン)ノ如ニシテ毛茸アリ、厚サ一分餘、濶サ三四寸ニ及ブ、花ノ形尋常ノモノニ同フシテ、色ニ數種アリ、葉ノ形三尖アリテ莖ニ互生ス、唯梢葉ハ女青(ヘクソカヅラ)葉ノ如ク長クシテ、左右ニ尖リナシ、又一種矮生ノ者アリ、高サ四五寸ニ過ギズ、莖硬クシテ蔓延セズ、コレヲ木。ア。サ。ガ。ホ。一名二葉アサガホト云フ、

〔草木六部耕種法二十花〕牽牛ハ近來大ニ用ヒラル、ヲ以テ、種々ノ珍花多ク世ニ現レ、其品二百七十餘種アルニ至レリ、其中ニ於テ名ノ最高キモノハ、亂(ラン)獅子〔花切レテ辨ノ數多ナル者ヲ云ナリ〕孔雀〔花筒ヨリ細キ花辨ノ、長ク延出タル者ヲ云フ、〕重樓(チウロウ)〔花筒ヨリ長キ臺抽テ、其端ニ菊ノ如キ、花開クモノヲ云フ、〕宇津河(ウヅカハ)〔葉小サクシテ、厚ク縮メル者ヲ云フ、〕松島〔葉ノ黄色ニテ、青キ斑ノ有ル者ヲ云フ、〕

数種アリ、晝ニ至テ不萎、花ノ大サハ如常、好種ナリ可栽賞、

〔大和本草七草〕東籬寨牽牛花 蔓草也、寛永年中長崎ニ來ル、東籬寨又甘字智ト云、眞臘國ナリ、葉ハ草決明、又豌豆ニ似テ甚細也、七八月開細紅花、形似丁香可愛ス、好事ノ者瓮ニウヘ籬ニ延シム、根ハ當年枯ル、實ヲマクベシ、

〔和漢三才圖會九十六蔓草〕牽牛子 黑丑 白丑 盆甑草 草金鈴 狗耳草 和名阿佐加保○中略

按牽牛花寅卯辰三時爲盛、向日光則萎再不開、而餘蕾開花、乃一莖數十花、逐日開不經旬皆結實、其花有深翠淺翠純白淺紅色四種、而紅者希也、

一種有小牽牛花、高三四寸、未延蔓不倚架、二葉而開花、故名二葉牽牛花、亦小美也、蓋此生瘠地不能長者也、復種其子乃如之、

有朝顏晝顏夕顏之三品、朝顏牽牛花也 晝顏鼓子花也 夕顏瓠瓜之花也 皆以其花盛時稱之、

〔物類品隲三草〕牽牛子 和名アサガホ、黑白二種アリ、

黑丑 黑牽牛子ナリ、花色數十種アリ、黑白江南花和名シボリアサガホ、花鏡曰、近又有異種、一本上開二花者、俗因名之曰黑白江南花、重瓣ノモノアリ、奇品ナリ、不結實、其餘近世花色數十ニ及ブ、藥用ニハ碧花ノモノヲ用ベシ、

白丑 白牽牛子ナリ、是牽牛子ノ花實皆白キモノナリ、東璧天茄子ヲ白丑トスルハ非ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十四蔓草〕牽牛子 アサガホ和名鈔 クニゴシ古今集 一名假君子秘傳花鏡 三白草村家

古アサガホト云ハ木槿ナリ、故ニ萬葉集秋七種歌ニアサガホト云フハ牽牛ニアラズ、牽牛ハ人家ニ多ク種ユ、花青碧色ノ者ヲ黑丑ト云、又黑牽牛トモ云フ、又白色ノモノヲ白丑ト云、又白牽牛ト云ナリ、葉ノ形皆三尖ニシテ互生シ微毛アリ、品類尤多シ、花鼓子ノ形ヲナシテ五尖アル者ハ

牽牛子種類

曰、胡菌者世謂之木槿、或謂之日及、郭璞曰、似李樹、其華朝生夕殞可食、或呼曰日及ト云云、スモヽ、ナツメニニタリト云ニルニテシリヌ、木ノスガタナリトハ、ヨノツチノアサガホノツルニハ非ズトキコユ、此邊ノムクゲハスモヽニニタリトモオボエズ、所ニシタガフニヤ、ヒサゴノ花ヲ夕顏ト云フニ對シテ、牽牛子ノツルヲバ朝顏ト云ナラハセリ、今ハ又ムクゲニ通用シテ、槿花トモ云フナルベシ、

〔松の落葉二〕あさがほ

あさがほとは、あしたにさくかは花を、なべていへるにて、ひとつの草の名にはあらず、そのよしつぎ〳〵にときあかすべし、まづ新撰字鏡に桔梗、加良久波又云阿佐加保とあるもその證なり、からくはといふが正しき名にて、あしたにさくうつくしき花なれば、あさがほともいへるなり、今の人牽牛子をのみあさがほとおもへるはたがへり、略○中此草は野山におのづから生ることなきは、から國よりたねのわたり來て、ひろごれるにぞあらん、其わたり來つるは、今の京のはじめのころなるべし、さて朝がほといふこゝろを、くはしくいはんとす、いにしへかほ花といひしは、かほのすぐれてうつくしきはなの事なり、かほといふは、今の世にかほかたちといふ意なり、かほかたちのすぐれたる人を、中ごろには、かたち人といひき、それと同じこゝろなり、されば何にまれ、朝さきてかほのすぐれたる花をめでゝ、あさがほといひはやしたるにて、花の名にはあらず、略○中牽牛子のわたり來ては、これもあしたにうつくしき花さけばしかいひ、槿花もさやうなれば、あさがほとはいへるなり、略○下

〔大和本草六〕牽牛子　朝間花容美シク、見晛則萎故朝顏ト號ク、盆ニ植テ室下ニヲケバ不早萎、花ニ淡青深青紫色白色アリ、本草曰、有毒雄烈、瀉人元氣毒藥ナリ勿妄用、黑。牽。牛子。ハ花ノ深青ナルヲ可用、油ヲトリテ燈ニ點ス可也、略○中小。牽。牛。花。アリ、蔓ノ本二葉ヨリ花早ク開ク、其色紺白碧紫

牽牛子名稱

一種オホヒルガホ、葉長大花モ大ナリ、又淡紅色白色ノ二品アリ、讃州ニテチヨクパナト云フ、救荒本草ノ藤長苗一名旋菜ナリ、又一種海濱及江湖邊沙地ニ生ズルヲ、ハマヒルガホト云フ、一名カツポウバナ、アメフリバナ、ハマチバナ、ガウブル、越前ヘビアサガホ、相州アフヒカヅラ、花戸葉形圓ニシテ厚ク、大サ一寸許、蔓ハ長カラズシテ、花ハ尋常ノ大サナリ、

〔武江產物志草〕本所邊　藤長苗　隨地有之類　旋花

〔本草和名草十一〕牽牛子陶景注、此出於田舍、凡人取之牽牛易藥、故以名之、和名阿佐加保、

〔倭名類聚抄草二十〕牽牛子　陶隱居本草注云、牽牛子和名阿佐加保此出於田舍、凡人取之牽牛易藥、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄草十〕陶注又云、作藤生、花狀如扁豆黃色、子如小房、實黑色、形如梂子核、蘇注云、此花似旋葍花作碧色、又不黃、不似扁豆、按旋葍花、卽鼓子花、詳見旋花條、開寶本草云、此藥蔓生、花如鼓子花而稍大、作碧色、子有黃殼、作小房、實黑稍類蕎麥、蜀本圖經云、苗蔓生、花碧色、子如蕎麥、三稜黑色、圖經云、二月種子、三月生苗、作藤蔓遶籬牆、高者或三二丈、其葉青、有三尖角、七月生花、微紅帶碧色、似鼓子花而大、八月結實、外有白皮裹作毬、每毬內有子四五枚、如蕎麥大、有三稜、有黑白二種、

〔下學集草木下〕牽牛華　蕣華俗謂朝顏也

〔書言字考節用集生植六〕牽牛花草金鈴、陶耳草並同、本草花如鼓子花、碧色、日出開日西萎、盆甑草同、圖經韓保昇朝顏同俗字槿花同、本朝俗、以槿花、日及、蕣等字為牽牛花、宜合考木槿下、

〔塵袋三〕一樣花ハアサガホノ花歟、別ノ物歟、

アサガホニ、アマタノ名アリ、明花ト名ケ、日及トナヅケ、王蘂トナヅケ、赤菫トナヅケ、又ハ胡菌ト云フ、又蕣ト云フ、但シアサガホトムクゲトハ、アシタニサキテ、夕ニオツル物也、是故ニ二ノモノノ名ミナマギレテ、カロヒモナリ、潘岳ガ胡菌ノ賦ト云フニハ、ムクゲヲ思ヒテ云ヘルニヤ、彼賦

相州海邊にへびあさがほといふ、日中に咲もの也、又かつほう花といふ、近き御代の御製とぞ、ひるがほは源氏の内になかりけりはたの赤きは平家成べし、墨莊漫錄に、明宣德年、帝夢神語、雨打無聲鼓子花、帝口占、風吹不響鈴兒草、至今傳爲絕對、鈴兒草は沙參、俗につりがね草といへり、濱ひるがほは打碗花也といへり、犬ひるがほは救急本草の藤長苗也といへり、讃岐の方言ちよく花といへり、白ひるがほあり、南京晝顏は小輪なり、

〔大和本草入蔓草〕鼓子花ヒルガホ　又旋花ト云、二種アリ、一種ハ葉ニ兩岐アリ、蔓長ク三四尺アリ、一種ハ葉圓ク蔓短シ花ハ同、三才圖繪ニ、其根似筋、故一名筋根蒸煮堪啖甚甘美トイヘリ、花ハ牽牛花ニ似テ、淡紅色又白色アリ、晝シボマズ故ニ名ヅク、救荒本草葍子根モ亦與此同、曰採根蒸食之、或晒乾杵碎炊飯食亦好、或磨作麪作燒餅蒸食、根ヲ鹽ニ和シテ煮食フ、凶年ニハ貧民根ヲホリテ食シ飢ヲ助ク、葉モ亦可食、時珍云、一種千葉者色似粉紅牡丹、俗呼爲纏枝牡丹、此種本邦ニアル事ヲ不聞、

〔和漢三才圖會九十六蔓草〕旋花　鼓子花　旋葍　豘腸草　筋根　天劒草　美艸　續筋根　和名波夜比止久佐　中略○

按旋花盛于日午而且暮萎、故俗對以牽牛花稱朝顏、此名晝顏、比留加保

〔重修本草綱目啓蒙十四蔓草〕旋花　ハ。ヤ。ヒ。ト。グ。サ。和名鈔　ヒ。ル。ガ。ホ。　ハ。タ。ケ。ア。サ。ガ。ホ。和州　ミ。ヽ。ダ。レ。グ。サ。江州　チ。ヨ。ク。バ。ナ。備前　カ。ツ。ホ。ウ。備後　ア。メ。フ。リ。バ。ナ。仙臺　一名掛金燈農圖六書　葍子根救荒本草　打碗花　兎兒苗　狗兒秧　燕葍根共ニ同上　牽枝牡丹盛京通志

原野ニ尤多シ、一タビ生ズル時ハ、細長キ白根地中ニ蔓延シテ治シ難ニ至ル、春舊根ヨリ苗ヲ生ジ草木ニ纏繞ス、葉互生ス、形長シテ尖リ、本ニ小兩尖アリ、又短シテ本ニ四尖アル者アリ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、辰後ニ開キ日夕ニ至テ萎ム、淡紅色ト白色トノ二品アリ、形牽牛花ニ似テ小シ、其蕚ハ短濶ノ兩葉コレヲ挾ム、牽牛花ノ蕚ノ細長ニシテ、五出ナルニ異ナリ、

いよかづら〈本草綱目啓蒙〉按にかづらは即葛蔓の義なれども、いよの義未だ詳ならず、からすのひるつる〈同上〉按にひるの義いまだ詳ならず、 藍漆〈出雲風土記、延喜式、本草和名、醫心方、東寶記、〉按に藍漆は蓋しその葉青くして、光澤あるによりて、その名を得しなるべし、又唐本草に白前の一名を石藍といひしも、即石藍漆の省呼にして、石は唐本草に、生沙磧上義なり、その磧は說文に、水階有石者とみへたるにて、その義は推はからる、 藍藤〈本草拾遺、東寶記、〉名義字のごとし、

〔延喜式〈三十七典藥寮〉〕諸國進年料雜藥

伊勢國五十種〈○中略〉藍漆一斤、 尾張國卌六種〈○中略〉藍漆五斤、 近江國七十三種〈○中略〉白前一斤二兩、

〔本草和名〈七草〉〕旋花〈蘇敬注、音似緣反、楊玄操音詳緣反、〉一名筋根花、〈蘇敬注云、根似筋、故以名之、〉一名金沸、一名美草、一名山薑、〈出陶景注〉一名營旋、〈營、本草作旋、出雜要訣、〉一名鼓子花、〈出拾遺〉和名波也比止久佐、一名加末、

〔倭名類聚抄〈二十草〉〕旋花 本草云、旋花一名美草、〈旋音璿、和名波也比止久佐、〉

〔箋注倭名類聚抄〈十草〉〕按蘇云、此即生平澤旋葍是也、其根似筋、故一名筋根、蜀本圖經云、旋葍花根也、蔓生葉似薯蕷而多狹長、花紅白色、根無毛節、衍義云、旋花蔓生、今田野中甚多、最難鋤艾、治之亦生、世又謂之鼓子花、言其形肖也、四五月開花、亦有多葉者、其根寸截、置土中、頻灌溉方涉旬、苗已生、〈○中略〉岡村氏曰、說文舜艸也、楚謂之葍、秦謂之藑、蔓地連華、象形、从舛、舛亦聲、是即本草旋花、則知本草借旋爲舜也、蘇敬謂之旋葍、蕭炳謂之葍旋、累呼二名也、又按爾雅注云、葍華有赤者爲藑、蓋赤花爲藑者、與赤玉爲瓊同、說文瓊下載琁字云、瓊或从旋省、蓋重文也、然則本草旋花即藑花、藑瓊同音、義亦得通、故借瓊爲藑、又用瓊或字作琁花、以字形相近、誤爲旋也、是說亦通、

〔和爾雅〈七草木〉〕旋花〈ヒルガホ〉〈旋葍、鼓子花、美草、筋根草、天劍草、並同、〉

〔倭訓栞〈中編二十一比〉〕ひるがほ 鼓子花をいへり、野州越後仙臺の方言あめふり、越前にこうづる、

増、一種紅花ノ者アリ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、高二三尺、莖弱クシテ直立セズ、葉莖ニ兩兩相對ス、葉ノ形尋常ノモノヨリ微大ニシテ、長サ三寸、幅一尺五六分ニモ及ブ、深緑色ニシテ面背共ニ毛ナシ、三四月梢葉間ニ枝叉ヲ分チ、五瓣ニシテ、淡紅色ノ花ヲ開ク、中ニ黄蕊アリ、花後實ヲ結バズ、根ハ白色ニシテ硬ク長シ、

〔古今要覽稿草木〕いよかづら。藍漆

いよかづら、一名からすのひるつるは、漢名を藍漆一名藍藤といふ、これ即唐本草にいはゆる白前の一種にして、その苗春宿根より生じて、蔓をなし、小樹をまとふ、葉の形頗る女青に似て、稍長く兩々相對し、秋に至れば、その梢葉の間に小叉枝をわかちて、徐長卿に似たる五瓣の紫黒花を開き、後細長角を結ぶ、また徐長卿角の如し、其根は數條簇生リ、状細辛に似てや丶粗にして且長し、扨藍漆は古より今に至て、其種何物たる事をしるものなかりしに、今以て藍藤となすものは、東醫寶鑑に、藍藤根處々有之、根如細辛、即今藍漆也、性温味辛無毒、主上氣冷嗽煮服之といへるは、本草拾遺に、藍藤生新羅國、根如細辛、味辛無毒、主冷氣咳嗽煮汁服といへる、爾説符節を合せたるが如くなるによりて也、されば藍漆藍藤は即一物なる事明かなりといへども、天平のむかし、出雲國意宇郡島根郡以下の五郡に產し、延喜の比に、伊勢尾張以下の二十八箇國より貢せし、その草木はいかなる物なるべきか、さらにわきまへざりしが、此比千金方藥注を讀みて、漸くに明白になりしなり、白前の一種いよかづらとなすものは、唐本草に白前葉似柳、或似芫花、苗高尺許、生洲渚沙磧之上、根長於細辛、味甘、俗以酒漬服、主上氣、不生近道、俗名石藍、又名嗽藥、今用蔓生者、味苦非眞也、按に藍漆藍藤は既に味辛とみへたるに、こゝに蔓生のもの味苦といふ時は、其物の異なるやうにもおもはるれど、これは風土によりて、その味のたがひはある事にて、こゝには白前味甘とみえたれども、藥性論には白前味辛といへるたぐひ也、といへるによりて也、○中略

釋名

〔武江產物志草〕品川邊ノ產　白薇　木原

〔本草和名九草〕白前、一名石藍、一名嗽藥、出蘇敬注已上二名和名乃加々牟、

〔倭名類聚抄二十草〕白前　本草云、白前一名石藍、和名能加々美、

〔箋注倭名類聚抄草十〕千金翼方、證類本草中品有白前、不載一名、證類本草引唐本注云、俗名石藍、本草和名云、一名石藍、出蘇敬注、源君蓋依之而罷引本草非是、○中略　陶注云、似細辛而大、色白易折、蘇注云、葉似柳或似芫花、苗高尺許、生洲渚砂磧之上、根白、長於細辛、味甘、今用蔓生者、味苦非眞也、別本注云、根似牛膝白薇輩、嵩謂曰、似牛膝粗長、堅直易斷、白前也、似牛膝短小、柔軟能彎者白薇也、

〔重修本草綱目啓蒙山草〕白前　スヾメノオコゲ

白薇ノ一種ナリ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、一科數莖高サ一尺餘、葉ハ形チ鞘ニシテ忍冬葉ノ如ク對生ス、莖ト共ニ微毛アリ、四五月梢葉間ニ數花ヲ開ク、形白薇ノ花ニ似テ小ク白色ナリ、根モ亦相似リ、一種黃花ナル者アリ、始ハ草本ナリ、後ハ蔓草トナル、一種始ヨリ蔓生ナル者アリ、又一種蔓生ニイヨカブラ、一名カラスノヒルブルト呼アリ、ツル長ク草木ヲ纏フ、葉兩對ス、形女青葉ニ似テ長ク毛ナク臭氣ナシ、秋梢葉間ニ小キ枝叉ヲ分チ花ヲ開ク、徐長卿ノ花ニ似テ小ク、紫黑色角モ亦相似タリ、又一種短葉ノ者アリ、又一種カモメブルト呼者アリ、池澤邊ニ多シ、イヨカヅラニ似タツル短シ、葉間ゴトニ只一花アリテ微シ大ナリ、是皆白前ノ類ナリ、又一種越州白前ハヤマホトヽギスナリ、古來白前ヲシラハギニ當ルハ穩ナラズ、シラハギハ一名ヤナギサウ、ヒメトラノオ、ヌマトラノオ、コヘマグサ、江州ヌマハギ、水邊ニ多アリ、春苗ヲ生ズ、高サ五六寸或ハ一二尺、千屈菜ノ葉ニ似テ大ク密ニ互生ス、圓莖フトクシテ赤シ、夏莖頭ニ二三寸ノ穗ヲ出シ、五瓣ノ白花ヲ攅生ス、珍珠菜ノ花ニ似テ小シ、後一分餘ノ圓實ヲ結ブ、秋ニ至テ紅色、是救荒本草ノ星宿菜ナリ、

和名美奈之古久佐、一名久呂女久佐、一名阿末奈、

〔倭名類聚抄 二十草〕白薇　釋藥性云、白薇、和名美奈之古久佐、一云久呂久佐、一云阿末奈、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕本草和名云、白薇一名白幕、一名薇草、一名春草、一名骨美、一名白蜜曹、出釋藥性、按千金翼方、證類本草、骨美以上五名皆本草本條所載、則白蜜曹一名、出釋藥性也、而本草和名骨美下失著出典、源君誤謂諸名皆出釋藥性、非是、○中略陶隱居云、根狀似牛膝而短小、爾雅圖經云、莖葉俱青、頗類柳葉、六七月開紅花、八月結實、根黃白色、

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕白微　フナワラ　ロクエンサウ　テツポウサウ　オホフナワラ　マルバノフナワラ　カキシホ阿州　一名知微老[illegible]　竹葉細辛[illegible]本草　百吉草同上

救荒本草ノ說ニ據リテ、ロクエンサウニ充ツ、山野向陽ノ地ニ生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、圓莖高サ二三尺許、葉對生ス、柹葉ニ似テ小ク短シ、莖及葉ノ兩背共ニ白毛アリ、夏月梢葉ノ間ゴトニ花ヲ開ク、末ニテハ數花簇生シテ穗トナル、花ノ大サ四五分、五瓣ニシテ紫黑色、形徐長卿花ニ似テ大ナリ、花後角ヲ結ブ、長サ二寸許、內ニ白絮及ビ子アリ、又白花ノモノアリ、花葉ノ形狀同ジ、阿州ニテクサタチバナト云、淡州ニテシホカゼサウト云、共ニ根ハ細長ク數多ク簇生ス、又細葉ノ白微アリ、葉剪夏羅(ガンピ)ニ似テ末尖ル、六七月ニ花ヲ開ク紫黑色、是ヲペンケイサウト云、又大葉ノ白微アリ、種樹家ニテツルガシハト云、柹葉ニ似テ長サ七八寸四葉對生ス、其上ハ細小葉兩對シテ蔓草トナル、其葉間ニ小紫花簇生ス、藥舖ニ白微ノ葉ヲ取リ、葉フナワラト名テ鬻ル、增淡州ニテシホカゼサウト云ハ、白前ノ混淆ナリ、一種黃花ノ者アリ、葉小ニシテ細葉ノ白微ニ同ジ、花モ小ナリ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

伊勢國五十種、○中略白薇一斤四兩、　伊豆國十八種、○中略白薇七斤、○下略

白薇

〔倭名類聚抄 二十草〕徐長卿　本草云、徐長卿、〔和名比女加加美〕

〔箋注倭名類聚抄 十草〕陶注云、今俗用徐長卿者、其根正如細辛、小短扁々爾、氣亦相似、唐本注云、葉似柳、兩葉相當、有光潤、所在川澤有之、根如細辛、微麁長、而有臊氣、蜀本圖經云、苗似小麥、兩葉相對、三月苗青、七月八月著子、似蘿藦子而小、九月苗黄、十月凋、時珍云、徐長卿人名也、常以此藥治邪病、人遂以名之、其說不知所據、恐是李氏臆度耳、

〔和爾雅 七草木〕徐長卿〔一名石下長卿〕

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕徐長卿　フ。ナ。ワ。ラ。　ヤ。ナ。ギ。サ。イ。コ。　リ。ウ。ヤ。ウ。サ。イ。シ。ン。　ス。ヾ。ザ。イ。コ。　コ。フ。ナ。ワ。ラ。　ハ。マ。ヤ。ナ。ギ。佐州　一名尖刀兒苗〔救荒本草〕　摩何草〔本草彙言〕

白薇モフナワラト云、故ニ此ヲ小フナワラト云テ別ツ、スヾザイコハ花ノツボミ鈴ニ似タル故ナリ、山野ノ陽地ニ多シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、莖細クシテ堅ク、高サ一二尺、葉細長クシテ瞿麥ニ似タリ、綠色淺シ、兩葉相對ス、夏莖梢ニ枝ヲ分テ多ク花ヲ開ク、大サ三分許、五瓣ニシテ黃紫色ナリ、後角ヲ結ブ、長一寸餘、圓長ニシテ尖リアリ、秋熟ス、蘿藦ノ角ニ似テ小シ、中ニ白絮アリ、絮ノ本ニ小クシテ扁タキ子アリ、根白クシテ細長ク、數多ク攢リ生ジ、細辛ノ如シ、乾セバ黃白色トナリ、牡丹皮ノ氣アリ、

增、一種深山ニ大葉ノ徐長卿アリ、形狀尋常ノ者ニ同クシテ、高サ四五尺、葉ノ長サ五六寸許、花實モ大ナリ、南方暖國ニ產ス、

〔武江產物志 藥草〕鳳山ノ產　徐長卿〔アスカ山ニモ〕

〔佐渡志 五物產〕徐長卿　方言ハマヤナギ

〔新撰字鏡 草〕白薇〔夜。末。無。、一云久。留。末。、〕

〔本草和名 入草〕白薇、一名白幕、一名薇草、一名春草、一名骨美、一名白薑曹、〔出釋藥性〕一名白草、一名巖草、〔出雜要訣〕

徐長卿

本草綱目、蘇恭曰、荊襄山谷今有之、蔓生、山南人謂之白葛、苗似蘿藦、葉圓厚、莖有白毛、與衆葉異、用蓄療毒有効、

救荒本草、牛皮消、生密縣野中、拖蔓而生、藤蔓長四五尺、葉似馬兜鈴葉寛大而薄、又似何首烏葉亦寛大、開白花、結小角兒、根類葛根而細小、皮黑肉白味苦、

蔓草ナリ、山野ニ自生ス、春宿根ヨリ苗ヲ出ス、蔓青シテ紫ヲ帶ブ、葉ハ兩對シテ形圓ク先尖レリ、蘿藦ニ似テ光ナク、白薇ノ葉ノ如シ、六月葉間ニ細莖ヲ出スコト一二寸、小花聚リ開ク、五瓣淡黄色、徐長卿ノ花ニ似テ大ナリ、花後小莢ヲ結ブ、徐長卿ノ莢ニ似テ大ナリ、中ニ白絮アリ、莢自裂テ風ニ隨テ飛ブ、根ハ巨クシテ山藥ノ如シ、蝦夷産ハ根ノ狀チ和産ト稍異ナリ、藥店ニ多シ、解毒ノ効アリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕白兔藿　詳ナラズ

イケマニ充ル說ハ穩ナラズ、イケマハ救荒本草ノ牛皮消ナリ、

增、白兔藿ハ花戸ニテ鬼女蘭ト呼モノナリ、和州、播州、阿州、紀州等ノ深山ニ產ス、藤蔓最モ大ナリ、葉ノ形圓ニシテ厚ク末尖リ、深綠色ニ滑澤ナリ、大ナルモノハ六七寸ニ及ブ、花ハ蘿藦ニ似テ白色、實モ亦相似テ大ナリ、藤絲最強ク弓弦トナスベシ、京師ニ來ルモノハ高サ一尺許ニシテ蔓延セズ、卽救荒本草ノ牛嬭菜ナリ、蘭山翁蘿藦ノ一種トス、

〔草木育種後編 下 蔓品〕牛皮消 救荒　松前にて生ずるもの名あり、處々山中に生ず、赤土に植て糞水を澆ぎてよし、又園中の木に纏はしめてもよし、是芄蘭の類にて、根長大なるものなり、實は莢を結ぶ、内に絨あり、パンヤの代になすべし、

〔本草和名 七 草〕徐長卿 楊玄操音 良兩反　一名鬼督郵 本條　一名龍銜根、一名淸陽、已上出蘇敬注　一名石下長卿、出釋藥性　和名比女加々美、

山野ニ最モ多シ、春舊根ヨリ苗ヲ生ジ、藤蔓繁延ス、葉形橢ニシテ尖リ、本ニ一缺アリ、深緑色、光澤ニシテ厚ク兩兩對生ス、小ナル者ハ長サ一寸餘、大ナル者ハ四五寸、莖葉ヲ斷ズレバ白汁出、夏月葉間ニ、穗ヲ生ズ、長サ一二寸、小長花ヲ開ク、五瓣ニシテ形鈴鐸ノ如シ、白色紫點、雌ナル者ハ莢ヲ葉間ニ生ズ、穗上ニ生ゼズ、長サ三四寸、徑リ一寸許、長圓ニシテ末鋭ナリ、皮ニイボアリテ胡瓜ノ如シ、嫩ナル者ハ飯ヲ雜シ油煎シ食フベシ、葉モ亦同ジ、莢熟スレバ殻紫色ヲ帶ブ、竪ニ自ラ折テ舟ノ形ノ如シ、内ニ白絨アリ針ノ如シ、針根ゴトニ一子アリ、形圓扁ナリ、其針鼠ヲ見レバ便チ張リ開テ綿ノ如シ、白光銀ノ如シ、然レドモ砕ケ易クシテ綿トナスベカラズ、甚木綿(パンヤ)ニ似タリ、故ニ俗ニ和。ノ。パ。ン。ヤ。ト云フ、此綿ヨク血ヲ止ム、秋深テ苗枯ル、其莖皮中ニ白絲アリ、甚強ク釣緡トナスベシ、略○中

增、蘿藦ノ生實ヲ飯ニ雜ミ油煠トシ、醬油ニテ煮食ヒ、又生葉ヲ煠キ茄ト爲シ食フ、共ニ味佳ナリ、又葉ヲ陰乾シテ、炭上ニ焚ケバ諸臭氣ヲ去ル、

〔廣益地錦抄 五〕蘿藦 蔓草なり、多は枯れて春宿根より生ズ、葉はそ長くあつく兩對にして表にうす白く筋あり、根をほりて火にあぶり食す、甚甘し、葉切れば白く汁出る、赤腫にぬりて早くいたみを止ていゆ、葉莖を日に乾燒ば惡臭をけす也、花はみるにたらず、實はほそ長く三四寸計有、さきとがりてへちまのごとく、秋の末熟し、かれて二つにわれ、中より綿のごとく成物多く出、取て、敷物の綿としてやはらか也、しめり地に生、蘆原の中に多く生、

〔古事記 上〕故大國主神坐出雲之御大之御前時、自波穗乘天。之。羅。摩。船而、内剝鵝皮剝爲衣服、有歸來神、略○下

〔本草和名 七〕白兎藿、一名白葛、出蘇敬注、一名白葛穀、一名兎藿、已上二名出釋藥性、唐

〔百品考 上〕白兎藿 一名白葛、一名牛。皮。消。 和名イ。ク。マ。

蘿ハ藤生也、是ヲ摘バ白汁アリ、人家ニ多ク種フ、葉アツクシテ大ナリ、生ニテ喫フベシ、蒸テモ煮テモ食スベシ、諺云、去家千里勿食蘿藦枸杞、イフコヽロハ精氣ヲ補益シテ、陰道ヲ強ク盛ニナスコト、枸杞葉ト同ジケレバ也、三月ニ苗ヲ生ズ、籬垣ニ蔓延シテ極メテ繁リヤスシ、其ノ根ハ白クヤハラカニ、其ノ葉ハ厚ク長クシテ、後ヘ大ニ前尖、根ト莖葉ト斷バ皆白汁アリ、六七月長花ヲ開ク紫白色也、其ノ實ハ長サ二三寸、大サ馬兜鈴ノ如シ、一頭トガル、殼ハ青クヤハラカニシテ、其ノ中ニ白絨ト蕤トアリ、霜後ニ枯裂テ其ノ子ハ飛チル、子カロクウスクシテ兜鈴子ノ如シ、商人其ノ絨ヲトリテ、坐褥ヲ作リテ綿ニ代テ、甚輕煖也ト云、元升井○肉曰、此註ヲミレバ蘿藦ハ肥前ノ山野人ノカブナト云フモノナリ、カブナハツルカヅラニテ、山野ノ樹ニカヽリ生ジテ、ハビコリサカヘ、其ノ實モ莖葉モ本草ノ註ニイヘルガ如シ、霜枯テ後、其ノ實サケテ、內ヨリ白ハンヤノ如キモノ出テ風ニ吹チル、異國ヨリ渡ル白ハンヤハ是ナランカ、吾人ハ是ヲトリテ綿ニ代ル事ヲシラズ、又莖葉ヲ食スル事ヲシラズ、故ニ人家ニ種ルモノナシ、今人家ミナ種ナバ、衣食ノ一助ナルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 十五蔓草〕蘿藦　カヾミタサ　ガヾイモ　ガブナ筑前　ガブロ同上　ドウガメヅル　チヽグサ　チグサ大和本草　チトメ　チガイモ　トンボウノチ羽州津輕　ガヾラビ加州　ガンガラヒ越後　ハトカミ　タトウガミ下總　ゴガミヅル仙臺　ゴガミ同上　ゴウガミ同上　ゴガラヒ羽州　コウガモ遠州　ゴウガメ駿州　カトリグサ江戸　カラスノモチ勢州　ムジナノチ佐州　シコヘイ備前　イカシキ泉州　ゴマンザイ南部　ゴマザイ同上　ゴマシロ同上　ゴマジヨ津輕、莢下皆同名　ゴマシロカイ南部　ハンジヤ讃州　カラスナベ雲州　スヾメノマクラ越前　一名苦丸千金方　欱合草本草綱註　羊角菜救急本草　羊婦科　合鉢兒　婆婆鍼杙兒　細絲藤　過路黃共ニ同上　烏朴郷藥本草　線包本草彙言、實名、

瓢是女青別名、草葉相似、以葉似女青、故兼名雀瓢、〈中略〉爾雅、雚芄蘭、郭云、雚芄蔓生、斷之有白汁可啖、邢昺曰、如此注、則似雚芄一名蘭、或傳寫誤、芄衍字、焦循曰、田野間所謂麻雀棺者、蔓生、葉長二寸、橢圓上鋭、藤柔衍、斷之白汁出、實狀如秋葵實而哭、霜後枯、破内白絨、準之本草諸家之說、此爲芄蘭也、雀棺乃雀瓢之遺稱、而棺音同瓢、爾雅名雚、說文名莞也、

〔多識編 二草〕蘿藦、何波知久左、今案可可伊毛、

〔和爾雅 七草木〕蘿藦〈ガヾイモ〉〈雚、芄蘭、白環藤、斫合子、實名雀瓢、〉

〔物類稱呼 三生植〕蘿藦　ちゝくさ〇〇〇　京にてちゞくさ、又らまさうといふ、江戸にてちゝぐさ、又らまさうともいふ、上總にてやいとばな、〈花灸に似たり〉つくしにてがゞぶなといふ、土佐にてがゞいもといふ、

〔東雅 十五草卉〕芄蘭カヾミ　倭名抄に本草を引て、蘿藦草一名芄蘭カヾミ、徐長卿はヒメカヾミ、白前はノカヾミ、白蘞はヤマカヾミと註したり、芄蘭白蘞共に蔓生す、芄蘭は籬落の間に蔓延して、白蘞は山谷の間に生じぬれば、山カヾミといふ、白前は洲渚沙磧の上に蔓生して、芄蘭に似たる所あれば、ノカヾミといひ、徐長卿は叢生にはあらねど、其子の蘿藦子に似て小しきなれば、ヒメカガミといひしなり、少彦名神天蘿藦船に乘り給ひしとも、白蘞皮をもて船とせられしとも見えて、並に讀てカヾミといひしは、即是等の物なり、たゞ其のカヾミといふ義は不詳、〈舊事紀には兩說を併せしるされしみ、古事記には天之羅摩船としるし、日本紀には白蘞皮を船とすと見えたり、蘿摩船とは其實をいひ、白蘞皮とは其欄皮をいひしなるべし、共に實小しきなる事を取りて云ひしなり、蘿摩は今俗にチヾサといふなり、蘿摩共に皆白乳の汁あるをいふなり、蘞具嬬は俗にフナハラといふ、其義は知らず、カヾチといひ、カヾミといふもの、語に太古の時に隔えしなり、カヾチは赤き事、アカカヾチの如しと見えたれば、そのカヾといふは、赤くして赤きの義とも知らるゝなり、もし其例によらば、カヾミとは其實の赤くして赤きを云ひし如くなれども、カヾミといふもの、い實然るにしあらず、しと見えたり、されば此物によりてカヾミの名あるべしとも思はれず、凡そ古語の一例をもて推すべからざる、かかる事ども多し、〉

〔庖廚備用倭名本草 五野菜〕蘿藦〈ガヾイモ〉　倭名抄ニ蘿藦ナシ、多識篇ニカバチクサ、今案シカイモ、考ニ本草蘿

山野ニ皆アリ、樹石垣籬ヲ纏フ、ソノ藤舊キ者ハ粗大ナリ、葉ハ橘葉ニ似テ兩對ス、厚シテ深緑色、冬モ凋マズ紅紫色ニ變ズ、莖葉ヲ斷バ白汁ヲ出ス、又細葉ナル者アリ、皆夏月葉間ニ細莖ヲ抽テ枝ヲ分テ花ヲ開ク、大サ錢ノ如シ、五瓣ニシテ微ク回旋ス、其色白シ、老スレバ黄ニ變ズ、瓣厚シテ香氣アリ、後小莢ヲ結ブ、筑後ニテパ。パ。ノ。カ。ン。ザ。シ。ト呼ブ、其莢圓長七八寸、形箸ノ如シ、一莖ニ二角下垂ス、又變ジテ五六角ナル者モアリ、熟スレバ紅紫色内ニ白絮アリ、蘿藦莢ノ如シ、後莢自ラ開キ絮飛ビ去ル、絮ゴトニ一子アリ、落テ生ジヤスシ、一種葉至テ小ナル者、冬ニ至テ紅或ハ紫ニ變ジ、土石間ニ繁延スル者ヲ、セ。キ。ダ。カ。ブ。ラ。ト呼ブ、即石血ナリ、宜シク藏器ノ說ニ從フテ別物トナスベシ、

〔廣益地錦抄七〕絡石　葉は蔦に似たり、鴨の掌のごとく、四季共に青葉にて冬もかれず、大木にからみて高く上る、後は大木の葉をかくすほどしげる、蔓より根を出して木にとり付、繁く實をむすぶ、

丁子草

〔大和本草七花草〕丁子草　花ハ丁子ノ形ニ似テ淺碧色ナリ、四月ニ開ク、葉ハ柳葉ニ似テ、中ノタテ筋微白シ、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕丁子草　俗稱本名未詳

按丁子草高尺許、葉似澤桔梗而細長、又似山丹葉而細三月葉間著花、層層其形如丁子而紫色、結莢大可緑豆而一樹二莢、向上如角、

〔武江産物志藥草〕尾久ノ原　丁子草

蘿摩

〔本草和名九草〕蘿摩子、一名九蘭、一名雀瓢、一名苦丸、出荷杞條一名地乳、出大清經和名加。々。美。

〔倭名類聚抄二十草〕芄。蘭。　本草云、蘿摩子、一名芄蘭、上音丸、和名加々美、

〔箋注倭名類聚抄十草〕唐本先附云、蘿摩子、陸機云、一名芄蘭、幽州謂之雀瓢、此所引即是、蘇注云、按雀

睡菜

〔新撰六帖六〕あさゞ　　家良
水まさるぬまのあさゞのうきてのみあるは有ともなき我身哉

〔重修本草綱目啓蒙二十水草〕睡菜　ミ。ブ。ガ。シ。ハ。　ミ。ヅ。ハ。ン。ゲ。　ミ。ツ。ガ。シ。ハ。　ミ。ヅ。ゴ。ボ。ウ。　ミ。ヅ。タ。ケ。　ヌ。マ。ゴ。ボ。ウ。　ト。ウ。オ。モ。ダ。カ。　ミ。ツ。パ。ゼ。リ。備前　カ。デ。ノ。ハ。同上　ミ。ツ。パ。オ。モ。ダ。カ。江戸　キ。ジ。ン。サ。ウ。

池沢中ニ生ズ、甚ダ繁茂シ易シ、春旧根ヨリ葉ヲ生ズ、一茎三葉、半夏葉ノ如ニシテ大ナリ、一窠ニ叢生、三月茎ヲ抽ルコト高サ二尺許、花ハ長ク穂ヲナシテ茎上ニアリ、五弁或ハ六弁、大サ五分許、未ダ開カザル時ハ、白色ニシテ末紅アリ、已ニ開ク時ハ内雪白色ニシテ長毛アリ、萼モ白シ、根ハ緑色、横行シテ節多シ、形竹鞭ノ如ク大ニシテ、萍蓬草ノ根ニ似タリ、

絡石

〔多識編二石草〕絡石、豆多、今案天。伊。可。賀。豆。〔○豆下恐脱夏字〕異名耐冬、等

〔書言字考節用集六生植〕絡石〔ていかかづら、本草、一名絡石、木蓮、生木者名〕石龍藤〔同上〕

〔宜禁本草乾中草〕絡石　苦温微寒、生陰湿、冬夏青、実黒、〔石鯪葉細厚短圓、生葉大者、〕在主口乾舌焦癰腫喉舌腫、養腎堅筋骨、利関節、久服明目潤沢好顔色、煮汁服之、主一切風、変白宜老、〔石血葉尖、一頭赤、絡石葉圓正青、〕茎節著処生根鬚、六七月採茎葉、宮寺人家山石間種以為翫、

〔和漢三才図会九十六蔓草〕絡石〔ていかかづら〕　石鯪　懸石　耐冬　雲花　雲丹　雲英　石血　雲珠　石龍藤

中略

按絡石〔和名豆太〕俗云定。家。葛。、相伝黄門定家卿之古墳石生、因名之、葉似薮柑葉、而無刻歯、無花実、又変白汁無、

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕絡石　テ。イ。カ。カ。ヅ。ラ。　ツ。ル。ク。チ。ナ。シ。勢州　シ。ホ。フ。キ。薩州　一名鬼繋腰〔附方〕　鬼纏帯腰〔外科精要〕　鬼腰帯〔三因方〕　石薜茘〔医学叢函〕

座、又せにもく、下野にくさあふひ、常陸にとはす、仙臺にたぶなぎといふ、

〔大和本草八水草〕莕　關雎ノ詩ニ詠ゼル莕菜是ナリ、又莕ト云、其葉ハ馬蹄ニ似タリ、又ヨク睡蓮ニ似タリ、葉ノ形蓴菜ノ如クニシテ、其端分ル事睡蓮ノ如シ、蓴菜ノ葉切レザルニ異ナリ、葉水面ニウカブ、單ノ黄花ヲ開ク、莖根長シ、花モ水面ニウカブ、江州唐崎ノ水中ニ多シ、莕菜ヲアサヾト訓ズルハ誤ナルベシ、アサヾハカハホネニ似タル水草ナリ、アサヾハ根アラハル、莕菜ハ根アラハレズ、蓴菜ニ似タリ、○中略

アサヾ　池沼ノ中ニ生ズ、葉モ花モ萍蓬草ニ似テ別ナリ、萍蓬草ハ莖ツヨクシテ、水上ニ立ノボリ、根地上ニアラハル、アサヾハ莖カウホネヨリ長ク、水中ニ横タハリテヨハク、葉ハ水面ニウカビ、水上ニ不上、花ノ形色ハカウホネニ似タリ、五六月水面ニ黄花ヲヒラク、新六帖光俊ノ歌ニ云、見レバ又アサザオフテフ澤水ノソコノ心ノ根ヲゾアラハス、是アサヾノ根ノアラハルヽヲイヘリ、莕菜ヲアサヾト訓ズルハ誤ナリ、莕菜ハ根アラハレズ、又古歌ニ水マサル沼ノアサヾノウキテノミアルハ有トモナキ我身哉、コレアサヾノ水ニウカベル事ヲイヘリ、カウホネノ葉ハ水上ニ立ノボリテ、水面ニウカバズ、莕菜ヲアサヾト訓ジ、萍蓬ヲアサヽト云ハ皆非ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕莕菜　アサヾ○和名鈔中略
池澤中ニ生ズ、葉ハ水面ニ浮ビ、根ハ水底ニアリ、故ニ莖ノ長短ハ水ノ淺深ニ從フ、莖ハ細シ、葉橢ニシテ蓴菜ノ如ニシテ小ク、一方ニ缺アリ、面ハ緑色、背ハ紫色、周邊ニ雲頭齒アリ、夏月花ヲ水上ニ開ク、大サ錢ノ如シ、五瓣黄色ナリ、一種莖ニ葉互生シ、葉間ニ數十花簇生シ、黄色ナル者アリ、又一種葉大ニシテ、葉間ニ數十花簇生シ、瓣末白ク、本黄ナル者アリ、金銀蓮花ト云通名ナリ、

〔古今和歌六帖六〕あさゞ
見るからに思ひますだの池に生るあさゞのうきて世をばへよとや

増、センブリハ本條ノ一種ナリ、鐐牙菜ノ種類トスル説ハ穩ナラズ、又古ヨリ和ノ胡黃連トスルモ誤ナリ、此集解ノ山龍膽、本草彙言ノ石龍膽ニシテ、ハルリンダウハ石龍膽ノ一種ナリ、センブリハ龍膽ニ代用スルニ佳ナリ、

〔本草和名 九草〕鳧葵、一名著菜、興荇一名接與、一名猪蓴、出雜要訣注一名茆、音卯一名水葵、已上出蘇敬注和名阿佐々、

〔倭名類聚抄 十七水菜〕荇 爾雅注云、荇菜上杏音、字亦作莕、和名阿佐々、叢生水中、葉圓在端、長短隨水深淺者也、

〔箋注倭名類聚抄 九藻〕說文、莕菨餘、本草圖經引陸璣云、白莖、葉紫赤色、正圓徑寸餘、浮在水上、根在水底、大如釵股、上靑下白、後漢書馬融傳注、鳧葵、葉圓似蓴、生水中、今俗名水葵、唐本草云、鳧葵生水中、即莕菜也、別本注云、葉似蓴莖澀、根極長、江南人多食、圖經云、花黃色、水中極繁盛、李時珍曰、莕與蓴一類二種也、並根連水底、葉浮水上、其葉似馬蹄而圓者蓴也、葉似蓴而微尖長者莕也、夏月俱開黃花、亦有白花者、結實大如棠梨、中有細子、

〔醫心方 一〕鳧葵 和名阿佐々

〔伊呂波字類抄 安植物〕荇 アサヽ、亦作莕 同 䓇 同

〔日本釋名 下草〕荇 アサヽ 水のあさき所に生じて、黃花さく草也、あさざき也、或云、あさゝはかうほね也、荇にあらず、荇は小草也、蓴に似たり、

〔東雅 十三草〕荇アサヽ 〇中略 アサヽの義不詳、或人の説に、アサヽとはアサヽなり、流水に生じて、花さくをいへりといふなり、如何があるべき、萬葉集鈔に、鹿跋といふものゝ如し、アサアサといふに似たり、水淺き所にあるの義なりけむも知るべからず、又此菜に鬼葵の名あるによりて、俗におにアフロといふ物なしての羅ふ事あり、また是たまたま鬼葵の字の、カミアフヒといふ名に相合ふのみ、カミアフヒといふものは、既にこれ一物なり、

〔倭訓栞 前編一〕あさゞ 荇菜をいふ、倭名抄に見ゆ、淺などの淺き所に生草のうるはしき花の咲ものなり、よて俗に小蓮花といふ、藏信云、あさゞは葉も花も萍蓬草に似たり、近江にちやんきん、甲斐にくりじやけ、加賀にいもなぎ、肥後にはかはいも、備前にすつぽんもく、江戸近邊にかて圃

當藥

〔古今和歌集十物名〕りうたんの花　　とものり

我やどの花ふみしだくとりうたん野はなければやこゝにしもくる

〔拾遺和歌集七物名〕りうたん　　よみ人しらず

川かみにいまよりうたんあじろにはまづもみぢばやよらんとすらん

〔枕草子三〕草の花は

りんだうは枝ざしなどもむつかしげなれど、こと花みな霜がれはてたるに、いと花やかなる色あひにて、さし出たるいとをかし、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　龍膽タキノ川ヲチ合ニモ　目黑邊ノ產　コケリンダウコマバアスカ山ニモ

志村邊ノ產　武者リンダウ

〔佐渡志五物產〕龍膽　方言リンドウ　山中ニアリ、又蔓龍膽、春龍膽モ路傍ニ見ルコトアリ、

〔大和本草九雜草〕センブリ　トウヤクトモ云、白花サク又淡紫花アリ、白花ノ者尤苦シ、山ニ生ズ、小草也高サ五六寸ニ不過、葉ハ龍膽ニ似テ小也、葉モ花モキハメテ苦シ、虫ヲコロス、倭俗是ヲ胡黃連ト云非也、胡黃連中華ヨリ來ル別物ナリ、或曰、倭方ニ胡黃連ト云ハ、センブリヲ可用ト云、是ヲ用テ糊トシ、表褙ヲシ、屛風ヲ張リ、紙ヲ續ケバ虫クハズ、

〔和漢三才圖會九十二末山草〕當藥　正字未詳、俗云世牟不利

按當藥播州三木郡多有之、苗高五六寸、一根數莖、其莖細而淡紫色葉似地膚草而小、七月開花形似桔梗花而小、色黃有無花者、根細長黃色、

氣味大苦寒　倭方丸散諸蟲積聚藥入用、或有代胡黃連用之者不可、今人用染兒衫衣黃色也、云能避蚤虱、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕龍膽

淡紅ナルアリ、ウラベニト云、又フジリンダウアリ、淡紫色ナリ、又蔓生アリ、是ハ深山陰地ニ生ズ花微シ、早クシテ淡紫色、形チハ同ジクシテ微小、後花中ニ實ヲ出ス、桃葉珊瑚實ノ如シ、冬ニ至テ熟シテ赤シ、春ニ至テ猶存ス、コレヲツルリンダウト云フ、又春リンドウハ陽地ニ生ズ、高サ二三寸、四月莖梢ニ花ヲ開ク、一二莖或ハ四五莖簇生ス、形ハ龍膽ト同シテ小シ、日中ニ開キ暮ニ收ル、葉ハ圓小ニシテ尖ル、伊勢ニテハ水澤中ニ生ズ、方言ナハギヽヤウト云、水泥ニ種ヘ、鳥籠ノ中ニ入ルヽト云、集解ノ山龍膽ハハルリンダウナリ、本草彙言ニ石龍膽ニ作ル、嶺南ニテハ小ナルヲ石ト云、イトスヽキヲ石ぜト云例ノ如シ、

〔廣益地錦抄四〕龍膽　さゝりんだうの根をいふ、花紫なるを藥種に用、花ざかりは久しく、ながめあり、花壇に植べし、

〔草木育種下藥品〕龍膽草本　山の崖などにあり、植る地は赤土又粘ある野土によし、米泔水を澆、外の肥は惡し、

〔剪花翁傳四九月開花〕笹龍膽　花濃青又白、形ち朝顏の蕾のごとくにして中開也、白花を上品とす、開花九月上旬より十月迄あり、方二分陸、地三分濕、土囘塵、肥干鰯、淡小便、分株移とも春芽出しの時よし、水はもし上がたき時ハ、切口を又切捨、わら盆の類にてよく包み、水にひたして後、水器に入をくべし、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略龍膽通草、各五斤、　大和國卅八種、○中略龍膽三斤、○下略

〔出雲風土記神門郡〕凡諸山野所在草木、○中略龍膽、

〔伊勢集〕りうたん

風さむみなく雁がねの聲すなりうたむ衣をまづやかさまし

誤說にて、あたらぬことなり、くたにのりうたんにあらざる證は、源氏もの語をとめの卷に、夏のかたの前栽に、さうびくたにをうゑられたること見えたり、これに仍て考ふるに、りうたんは本草綱目啓蒙等に見えたるごとく、暮秋より初冬へかけて、花さき實をむすぶものにて、夏のものにあらず、しかれども夏のかたのせんざいにも、春秋の花をませてうへられしよしあれば、いかゞとおもふ人もあるべけれど、さにはあらず、それはさうびくたにの外に、春秋の花はませてうへられたるにて、いかでか夏のかたのせむざいに、夏の花を置て、春秋の花を詮とはうへられべき、

〔大和本草六藥〕龍膽　倭名リンダウ、一名クタニト云、又思草ト云、秋碧色ノ好花ヲヒラク、山野ニアリ、葉ハ末ニ尖アリ、白花モアリ、又山龍膽アリ、雜草載之、又サヽリンダウト云草アリ、

〔和漢三才圖會九十二末山草〕龍膽　陵游　和名衣夜美久佐、一云爾加奈、今云里牟止字、○中略

按龍膽和漢共用之、藝州廣島之產良、豐前中津次之、葉似笹而厚、六月開花、紫如鈴鐸形向上、花中有蕊子、又有正白花者、名笹龍膽、形狀小、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕龍膽　○リ○ン○ダ○ウ龍膽ノ音轉ナリ　○ニ○ガ○ナ和名抄　○エ○ヤ○ミ○グ○サ同上　○ク○ダ○ニ古歌　○オ○モ○ヒ草同上　○ア○ゼ○枯○梗　○ヲ○コ○リ○オ○ト○シ播州　○サ○ヽ○リ○ン○ダ○ウ奧州、勢州、　一名斜枝大夫藥譜

斜枝大士輟耕錄　觀音草郷藥本草、東醫寶鑑、

向陽ノ山野ニ多ク生ズ、葉ハ竹葉ノ如ニシテ短シ、故ニサヽリンダウト云、葉兩對シ三縱道アリテ桂葉ノ如シ、圓莖高サ一二尺、肥地ニ生ルハ三尺許、八九月莖梢或葉間ゴトニ、三五花ヲ開ク、花ノ本ハ牽牛花ノ如ク、筒形ヲナス、末ハ五瓣ニ分レテ桔梗ノ花ノ如シ、青碧色愛スベシ、晝ハ開キ夕ニハ收ルコト數日、後小莢ヲ生ズ、冬ニ至テ苗枯ル、又細葉ノ者アリ、葉ノ濶サ一分長サ二三寸、紀州ノ熊野ニ產ス、救荒本草ニ圖スル所ニヨク合ス、花戸ニハ白花モアリ、又白花ニシテ瓣ノ外

謂シ過コトヲ云リ、

〔新撰字鏡 草〕龍膽 太〇豆〇乃〇伊〇久〇佐〇又云山比古菜、

〔本草和名 六草〕龍膽 陶景注曰、味甚苦、故以膽爲名、一名陵游、和名衣〇也〇美〇久〇佐〇、一名爾〇加〇奈〇、

〔倭名類聚抄 二十草〕龍膽 陶隱居本草注云、龍膽和名衣夜美久佐、一云爾加奈、味甚苦、故以膽爲名也、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕播磨人呼於古利於登之、蓋衣夜美久佐之名之遺也、〇中略陶弘景又云、龍膽狀似牛膝、開寶本草引別本注云、葉似龍葵、味苦如膽、因以爲名、圖經云、宿根黃白色、下抽根十餘本、大類牛膝、直上生苗、高尺餘、四月生葉、似柳葉而細、莖如小竹枝、七月開花如牽牛花、作鈴鐸形、青碧色、冬後結子、苗便枯、

〔下學集 下草木〕龍膽リウタン

〔書言字考節用集 六生植〕龍膽りうたんりんだう一名陵游 龍膽ヱヤミグサ 陵游同草

〔倭訓栞 中編二十八利〕りんだう 徒然草にみゆ、龍膽なり、音をもて訓とするなり、元眞集などにりんだうとも見えたり、女房の裝束にもいへり、俗にさゝりんだうといふは、小きを指ていへり、山龍膽なり、變生の石龍膽なりといへり、藤りんだうあり、裏紅あり、武者りんだうあり、

〔藻鹽草 入草〕龍膽 物の名によめり、和名に多都の伊久佐、

えやみ草 おもひくさ たゞし一說になでしこをもいふともいへり、またまへに注するごとく、女郎花をもいへり、證云歌體によるべき也、 下草の花をみつればむらさきに 時平歌合によめり、是もりんだうの事也と云々、秋の野のをばなにまじりさく花の色にやこひんあふよしをなみ、この花をまじり花さくといへるも、りんだうの事也と云々、 くたに 苦膽、りんだうの一名、

〔古今要覽稿 草木〕くたに〇中略

今按りうたんにくたにの和名あるごとくいふはひが言なり、すでに和名類聚抄にも、龍膽和名ニカナ、エヤミクサ、とあげて、くたにの和名は見えず、こはりうたんの字音よりして、後におしあてたる

〔剪花翁傳三月開花二〕九輪草(くりんさう)　花一重、色赤白二種、開花三月下旬より四月、方二分陰、地二分濕、土回鵜肥油粕淡小便折々澆ぐべし、種收まらず、分株移春芽出し前よし、花莖長六七寸節なし、花形ちさくら草の如く、房の形ちは莖頭の毎節に一段々々數の英節を遶りて咲也、恰塔上の九輪に似たり、

〔甲子夜話四十九〕蕉子話ス、日光山廿日御靈屋道傍ノ渠ノ水アセタル所ニ、九輪草夥シク生ジテ、花ヲ開キ美觀ナリシカバ、案内ノ僧ニ如何ニシテカクハ此草多キヤト問シカバ、コノ渠ノ上ニ九輪澤ト云フアリ、ソノ澤水流レテコノ渠ニ入ル、九輪澤邊ハ皆此草ナリ、自然ト其種流レ來テ實ニ生ルナリト答フ、是マデ何ユヱニ九輪ト云フヤ知ヲザリシガ、是ニテ其名ヲ得ル所以ヲ解シタリ、

虎尾草

〔書言字考節用集六生植〕虎卷草(トラノヲ)

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕虎尾草(とらのを)　俗稱、本名未詳　農政全書有虎尾草、莖葉形狀似之、然不言開花、又山草有同名、各別也、

按虎尾草高二尺許、葉長三四寸、末窄尖深綠色、厚皺有鋸齒、六月莖端著花、極細白如穗、末窄似獸尾故名、

一種有淺紫色者、俗呼曰瑠璃色、

番木鼈

〔多識編二蔓草〕番木鼈、今案末知牟、異名馬錢子、綱目

〔書言字考節用集六生植〕番木鼈　一名馬錢子、時珍云、蔓生、夏開黄花、結實如括蔞者、

〔重修本草綱目啓蒙十四蔓草〕番木鼈　マチン(馬錢ノ音轉ナリ)シタルナリ　一名苦實(本草原始)　馬前子(萬病回春)　番鼈(本經逢原)

番末別子(蓮生八賤)　苦實把豆兒(附方)

和產ナシ、舶來多シ、咬𠺕吧(ジャガタラ)ヨリ來ル、形木鼈子ヨリ小ク、圓扁ニシテ白色毛茸アリ、此實ヲ用テ狗ヲ毒ス、狗コノ毒ニ中ルニ、豆腐ヲ食シムレバ解ス、故ニ集解ニ、人ノ病ヲ治スルニハ、豆腐ヲ以テ

わりさうあり、小ざくらと云、日光山にあり、葉小く花も頗小く淡紅し、又阿闍陀には黄色のさくらさうありといふ、

〔草木六部耕種法十二花〕櫻草モ作法同様ナリト雖ドモ、眞土野土ヲ論ズルニ及ベズ、少シク砂ノ交ルニ、馬屎干鰯油糟粗糟、及ヒ鶏屎ノ能熟タ細ニ成タルヲ、交ヘテ植ベシ、耕此物ハ種類頗多ク、又雪割草ト云モ有リ、俗ニ小櫻ト呼ブ、日光山ニ多シ、葉モ花モ小クシテ淡紅ナリ、又ホクドギト稱スル有リ、莖葉頗大ニ紅白黄ノ三色アリ、出羽奥州ニ甚多シ、此ヲ作ルニハ野土ノ粘ラザルモノ一荷ニ、炎日泥ニ塘泥ノ能ク乾燥ニ碎ナリ一荷、鶏糞五升、鰮粉五升、以上四種共能耕交タルヲ花壇ノ如クニ置テ、二月初旬ニ其根ヲ分ケ植ウベシ、或ハ馬溺ヲ澆バ花多シト云フ說有リ、然レドモ肥養ノ過タルモ宜シカラザルコト有リ、

〔武江産物志遊觀〕櫻草、紫雲英(げんげ)　戸田原　野新田　尾久の原 すみれあり れんげさう　染井植木屋 立春より七十五日位

〔守貞漫稿六生業〕三都トモニ市店無之、唯江戸ノ陌上ヲ巡ル生業、

櫻草　サクラ草ハ季春ノ比賣之、瓦鉢ニ植ル、○中略植木屋ト同形ノ具ヲ以テ擔ヒ巡ル、

〔書言字考節用集六生植〕寶輪花(ホウリンクワ)又云寶輪花　空輪草(クウリンサウ)又云寶輪花

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕山高苣(さんかうきよ)　俗云九輪草

救荒本草云、山高苣生山野間、苗葉苣地生、葉似高苣葉而小、葉脚花叉頗少、葉頭微尖、邊有細鋸齒、葉間攛葶開淡黄花、苗葉味微苦、

按山高苣此云九輪草乎、似高苣葉而扁、邊有細鋸齒、而葉脚窄葉心莖淡紫、三四月抽葶開小花似櫻草花而略大、生於莖圍八椏各一樣如車輪、至梢如此、七層或九層、宛然似浮屠九輪、故名、有紅白紫三種、結子茶褐色、其葉心莖中有紫色强糸、凡形狀乃九輪草也、唯山高苣花色黄也、九輪草花未有黄色者、以爲異、

櫻草

餘數品アリ、一種播州及紀州ニ生ル者、高サ三四尺ニシテ實少シ、花戸ニテシキンジヤウト呼、紀州ニテヤマシキミト云フ、

增、一種ヒメマンリヨウト云アリ、莖葉花實共ニ小ナリ、又實ノ直立シテ生ズル者アリ、タチマンリヨト云、實ノ大ナルヲオホミト云、小ナルヲコミト云フ、

センリヨト云モノアリ、深山ニ自生ス、マンリヨヨリ葉薄クシテ狹シ、節ノ處ニ高キフクレアリ、花實モマンリヨニ似タリ、コレ汝南圖史ノ珊瑚ナリ、石ノ部ノ珊瑚ト同名ナリ、又ヒヨトリジヤウゴヲ雪裏珊瑚ト云、アヲキヲ桃葉珊瑚ト云フ、共ニ汝南圖史ニ見ヘタリ、

〔佐渡志物産五〕硃砂根　方言マンリヨウ　此二種昔ハナカリシガ、今雜太郡新保村ノアタリニ多シ、本南國ノ產ニテ、甚雪霜ヲ恐ルトイヘリ、

〔書言字考節用集生植六〕櫻草

〔大和本草花草七〕櫻草　三月紫花ヲ開ク、櫻花ノ形ニ似タリ、又白色アリ、ウスキ紅黃色アリ、高キ事一尺餘ニスギズ、葉ハ蘿蔔ニ似テ小ナリ、花如錢大、畏寒暑、又九輪草アリ、七重草アリ、此類ナリ、好陰地、

〔和漢三才圖會濕草九十四末〕櫻草

按櫻草生山谷中、卽九輪草之一類異種也、葉形相似微小、邊無齒刻、不甚光澤、而葉心白、九輪草葉心紫三四月抽莖頂生花、似九輪草花而單、淡紫色、或白色、又如櫻花最艷美、故名櫻草、結莢兒青色、內結子、初靑後茶褐色、人家移種之、

〔草木育種美花下〕櫻草　種類甚多し、悉擧に暇あらず、大抵黑ぼく土五升、下谷邊の溝のあげつちを、驅し墾し、細に篩たるを五升、鳥のふんを入てませ合せ、此土へ二月初に根を分植てよし、一說に馬糞水を澆ば花多しと云、あまり肥過たるは葉大にして花の莖長く、且少して不揃なり、又ゆき

硃砂根

の土を七所にて取、各等分となし、先に云ごとく砂に合して、橘の實をうゆべし、かならず化樹となりてはゆるなり、尤土は城州八幡の土を最上とす、八幡ばけの生し傳なり、
但し人家の廻りの土とは、あるひは門口千數など、家舗の廻りにて陰地の土を取べし、又人煙遠きところとは、里はなれ家屋舗なきところなり、是も陰地をゑらびて取べし、田畠など蓄けある土を取べからず、大にきらふ、これ大に秘事なり、

〔草木六部耕種法十一〕百兩金ハ大抵鉢植ニノミスル者ナリ、假令ヒ花壇ニ作ルトモ、草能ク繁生スル野土山土ヲ採テ篩ニテ能透シ、此細末ニシタル土十荷ニ、干鰮粉五升、油糟粉五升ヲ能ク調合シテ植ベシ、最モ陰地ヲ良トス、其植タル上ニ日覆ヲ設テ、夜ハ此ヲ除テ露ヲ受シメ、小雨ノ當ルモ苦シカラズ、然レドモ濕過ルトキハ根ノ腐ル者ナリ、夏ノ間ハ刷毛カ筆ヲ以テ、隔日ニ水ニテ葉ノ表裏ヲ能ク洗フベシ、然セザレバ微細ナル蟲ヲ生ジテ、葉ノ落ル事多シ、凡ソ百兩金ノ實ヲ蒔ニハ、三月頃ニ採テ直ニ蒔キ、淺ク植テ實見ユルヲ良トス、既ニ生タルヲ實生モ故木モ、四月ニハ土ヲ替テ移シ植ベシ、如斯スルトキハ能肥リテ勢壯ニナル者ナリ、接木スルニモ四月頃ニ接ベシ、凡ソ百兩金ハ、實ニハ赤、淡赤、黄、白、紫等アリ、葉ニモ多羅葉、鳳凰、縮緬、獅子、笹葉、樒葉、鶴岡、斑紋、覆輪、闇道、白星等アリ、下品ナルヲ切テ砧トナシ、珍奇ナルヲ接木スベシ、又別ニ木立百兩金ト云フ者アリ、高サ五六尺ニ及ビ枝多ク、其葉ハ血槠ノ如クニシテ厚大ニ、花實モ珠砂根ニ似テ大ナリ、此亦栽覽スベキノ一物ナリ、

〔多識編二山草〕硃砂根綱目　今案阿。加。岐。、

〔重修本草綱目啓蒙入山草〕硃砂根　マ。ン。リ。ヨ。
花家ニ多クアリ、高サ一尺以來、葉ハ百兩金ニ似テ短ク、邊ニ尖ラザル鋸齒アリ、葉ハ莖端ニ叢リ互生シテ傘ノ如シ、數百ノ圓實枝ヲ分テ葉下ニ倒垂ス、冬春紅熟シテ觀ニ堪タリ、又黄實白實、其

れ今謂橘なりとあり、是かの蜜柑のたぐひなり、本草綱目に言所、これに同じ、茅藤果は本艸に見へず、

〔橘品類考〕橘白生業品類

近世さまざまの化樹を生ず、人々これを以て賞玩することおびたゞし、なかんづく城州男山の麓に此道好事の人ありて、常たちばなの實を植て、七種の化樹となす、この種弘りて所々に化樹を生ず、これを八幡七化といふ、

凡からたちばなの種を植るには、隨分極上の橘をゑらびて植ふべし、常橘といへども、隨分勢力つよく、きづなき實をゑらびて植ゆべし、春のひがんすぎてこれを植、土かげん、

砂五分　但し極上のまいだまりをよしとす

土五分　但し清瘦の土を用ゆべし、こへけある土をきらふ、

凡て菓木のるいは、人氣を受てよく盛なりと、本草綱目に見へたれば、やしき廻り人家の土をよしとす、又人煙遠きところの清瘦の土をもよしとす、花史に陰地を好とあるこれなり、但し種を植て後、土のかわかざるよう心をつくべし、土かわく時は種いたむなり、

四季の内、夏冬は座敷に入て圍ひ、暑寒をいとふべし、去かれども草木は天地の氣を受て育するものなれば、折を見合して夜氣を受露をとりてよし、

大寒の節珍重して箱などに入ることあり、これもよけれども、多分至て暖氣になす時は、樹自然と春暖の氣を受て、新芽を吹出すことあり、時ならずして芽を吹出す時は、春過て芽をつくといふて、樹心をそれることあるものなり、よくよく勘て暖氣すぎざるよう心得べし、

常橘の實を植て化樹を生せしむる法

常橘の實を植て化樹となすには、人家の廻りにて十ケ所の土をとり、又人煙遠きところの清瘦

葉ハ竹葉ニ似テ厚ク長シ、深緑色圓實ヲ結ンデ葉間ニ聚ル、一枝數顆、生ハ青ク熟シテ赤シ、庭際ニ多ク種ユ、又一種黄實ノモノ、白實ノモノアリ、又黄ニシテ光ル者アリ、キンミノタチバナト云、

此外品類甚多シ、

增花戸ノ稱呼種種アリ、變葉ニタラヤウバ、ホウワウバ、スルガバ、スルガチリメン、チリメンバ、チヤボバ、デリハ、タカノハ、カレハバ、アザミバ、ウスバ、ワシバ、サヽバ、オホハ、カツラチリメン等アリ、コレニ各白實、黄實、水晶實等アリ、葉ニ斑ノ入タルニフマジロ、シモフリ、ベタフ、フリトリ、ホシフタラフ等ノ名アリ、又ナヽバケト云アリ、實ヲ蒔テ七種ニモ變ズルナリ、コレニモ八幡バケ、江戸ナヽバケ、畫櫻ナヽバケ等ナリ、

〔草木育種下 實賞べきもの〕紫金牛　種類多し、黒ぼく野土等の竹林の下に植ればよく繁茂なり、鉢に植るには水抜をよくして、雨除の下陰地に置べし、米泔水又油精など少し澆てよし、

〔橘品類考〕本草家の說に、千。兩。金。和名カラタチバナと云、これ本艸綱目に云百兩金のたぐひなるがゆへなり、

貝原篤信云、茅藤果高サ尺に不過、實ハ紅なり、好事の者盆に植ゆ、京都の方言にカラタチバナと云、筑紫にてヤブコウジと云ものなりといへり、

平。地。木。和名ヤマタチバナ、春花さき夏實のり、秋にいたりて熟す、不可喫、高サ數寸にすぎず、衆木の中にて最小なるものなり、又小青樹通仙木となづく、葉ハ枇杷に似て小にしてあつし、世俗おふく庭にうゆと、遂生八腱など、中華の書にみへたり、

右にいふ茅藤果、平地木の二品、世俗今通じてタチバナトなづけて、専ら鉢植となして賞玩す、俗に橘の字を書するは誤なり、橘は柑類の總名にして、蜜柑、柑子、金橘のたぐひすべての總名なり、

橘は日本紀に、垂仁天皇田道間守（垂仁帝ノ五下也）を、常世の國に遣して、非時の香果を求しむ、こ

實、花梅雨開ク、

〔和漢三才圖會 八十四 灌木〕山橘(やまたちばな/やぶかうじ) 藪柑子 俗 正字未詳 夜不加字之

按山橘巖壑石間有之、高不盈尺、葉似茶葉而色淺、莖紫色、花實似仙靈木、而只二三顆攢生、深赤色、今俗小兒髮結初時、用此莖葉、爲髮及銚子飾、以四時不凋、爲嘉祝乎、

六帖 我戀をえのびかねては足曳の山橘の色に出ぬべし

平地木 小青樹 通仙木 俗云唐橘 又云之々久和須

草木花詩譜云、平地木高一尺餘、葉深綠子紅甚若、棠梨下綴且托根多在甌蘭之傍、巖壑幽處似更可佳、

按平地木深山陰處有之、大抵六七寸、高者至三四尺、葉似珊瑚樹葉而長五六寸、四五月開小白花、六七月結子、五六顆攢生正紅色、性怖日亦惡霜雪、鼠喜食之、人栽盆中、翌年秋復青色、後如舊若橙重、歲也、然三月宜摘子、新花實繁美種子易生、

〔重修本草綱目啓蒙 八 山草〕紫金牛 ヤブカウジ ヤブタチバナ サルノメ アカダマノキ 江戸 ハナチヤウジヤノタハシ 佐州 ヤマタチバナ クサタチバナ 加州 ヤマウンジユ 肥前 タチバナ 筑前 一名平地木 秘傳花鏡 通仙木 濟世全書 小青樹 同上 千年矮 群芳譜

山中樹下ニ多ク生ズ、高サ三五寸許、四五葉互生ス、茶葉ニ似テ薄ク細鋸齒アリ、夏小白花ヲ開キ、赤實ヲ結ブ、一種蔓生ノモノハ深山ニ生ズ、葉小クシテザラツキアリ、實小クシテ赤シ、增、一種イヌヤマカウジト云モノアリ、又カマヤマカウジトモ云、蔓生ニシテ三尺許ニ及ブ、莖葉共ニ大ニシテ、花實ノ形相似タリ、コレ朝鮮ノ產ナリト云フ、

〔重修本草綱目啓蒙 八 山草〕百兩金 カラタチバナ サヽツバタ 勢州 キヤウタチバナ 同上 ヤブカウジ 筑前 ナヽカマド 筑後 サヽリンダウ 石州

來よ也、こゝにいふ山橘は藪柑子の事也、大和本草（卷十一雜木部）平地木の集解に、遵生八牋、畫譜、濟世全書、及古今集纂疏が注を引きて、俗にいふ藪柑子也といへり、まかれども大醫博士輔仁（深江、日本紀略作二深根一、見二醍醐紀延喜十八年九月十七日條下一、）本草和名（上卷）云、牡丹一名鹿韮、一名鼠姑、一名百兩金、（出二蘇敬注一）一名白朮（出二釋藥性一）和名布加美久佐、一名也末多知波奈といへり、か、ゝれば深秘抄なる說を僻事としもいひがたし、かくはいへども同名異物和漢に多かり、（古に牡丹の一名に白朮といふが如し、）彼一說に泥むもの、萬葉集なる山橘を牡丹也と思ふはたがへり、この他古今集（十三）新撰六帖（第六）夫木抄（二十八）等に見えたる山たちばなの歌も、皆平地木をよみたるなり、こは萬葉集をよくも見ざるもの、爲にいふのみ、牡丹はふかみくさといはんこそ正しき和名なるべけれ、今さま〴〵なる異名を負するはうるさし。（下略）○

〔大和本草（卷七草）〕瑞香（チンチヤウ）　國史及農圃六書ニノセタリ、葉ハ如橘及莽草、剌缺アリ、莖長シテ有節、夏白小花ヲヒラキ、實南天燭ヨリ小ニ、冬ニ至テ紅ナリ、陰地ヲコノム、盆ニウヘテ愛玩ス、根ヨリ叢生ス、二三月可分種、寒ト日ヲ畏ル、十月ヨリ屋下ニ置、二月ニ出スベシ、陰地ニ宜シ、日ヲ畏ル、本草綱目隰草中、有百兩金、恐與此同物歟、

〔大和本草（卷十一雜木）〕平地木（ヤマタチバナ）　又號小靑樹通仙木、遵生八牋畫譜ナド、中華ノ書ニノセタリ、和名ヤマタチバナ、古歌ニモヨメリ、小樹高數寸ニ不過、葉ハ枇杷葉ニ似テ、小ニシテアツシ、世俗多ク庭ニウヘテ石ニ伴ハシム、古今集纂疏注曰、山タチ花世俗ニヤブカウジト云、實アカシ、髮ソギノ時、山菅ニソフル草ナリ、今案筑紫ニテヤブカウジト云物ハ別ナリ、龔雲林ガ濟世全書曰、小靑樹又號通仙木、通根莖葉、而陰乾能焙、煎用治疝氣、是平地木ナリ、

茅藤菓　京都ノ方言カラタチ花ト云、筑紫ニテヤブカンジト云モノ也、花史ニ出タリ、實ヲマクベシ、高サ一尺ニ不過、陰地ヲコノミ、兩年ニ長ジテミノル、實ハ冬赤シ、葉ハセバクシテ如竹、可玩

イハナシ

紫金牛
百兩金

〔倭訓栞 後編 二 伊〕いはなし　方丈記に見へたり、小草也、夏月子を結ぶ、色赤く食ふべし、一名いはゝせ、山枇杷也といへり、山中岩ある所に生ず、備前に磐梨郡あり、北國にては砂いちごといふとぞ、梨品にも石梨あり、肉堅く食べからず、

〔和漢三才圖會 九十二 本 山草〕伊波奈之

按伊波奈之、江州三井寺山中有之、苗高二三寸、葉大如瓢樹葉而不尖、攅地生、二月開小白花、似虎耳草花、三月結子、如青大豆而圓、數顆攅生如楊梅樣、裏於葉交、外色青內紫黑色、小兒剝皮食、味微酸甘

〔方丈記〕小童あり、時々來て相訪ふ、もしつれ〴〵なる時は、是を友としてあそびありく、かれは十六歲、われは六十、其齡事の外なれど、心を慰る事はこれ同じ、或はつばなをぬき、岩なしをとる、又ぬかごをもり、芹をつむ、

〔書言字考節用集 六 生植〕平地木 高五六寸、而有二小紅實一者、見二遊生入膝一

〔倭訓栞 前編 三十四 也〕やまたちばな　延喜式大嘗祭に山橘子と見えたり、俗に藪柑子といふ是也と、古今榮雅抄に見えて、山すげにそへて、卯槌髮そぎの時に用る物也、萬葉集に草なるを、淸少納言は木とせり、新六帖に、ふりにける卯月のけふの髮そぎはやまたちばなのいろもかはらず、

〔玄同放言 二〕山牡丹 ○山橘。附出 ○中略

覺憲深秘抄に、山橘ハ牡丹也といへり、是よりして後、萬葉集に牡丹の歌ありといふものさへあるはこゝろえがたし、

萬葉集 第四　春日王

足引之、山橘乃、色丹出而、語言繼而、相事毛將有、

同第十九　大伴家持

此雪之、消遺時爾、去來歸奈、山橘之、實光毛將見、

同第二十

氣能己里乃、由伎爾安倍氏流、安之比奇之、夜麻多知波奈乎、都刀爾通彌許奈、

けのこりは頃日也、雪にあへてるは、萬葉略解 廿下 に相照也といへり、つとにつみこなは、家裏に摘

鹿蹄

一此島田方無之、畑方少々有之、粟稗胡麻多葉粉等作リ申候、其外〈略〉〈○中略〉あした草を取、夫を食の足類に仕候、〈○三宅島、御藏島、青ヶ島等略同、〉

〔甲子夜話三十七〕アシタ草ハ、今日穉ヲオロセバ明日ニ生ズ、八丈島ニアリ、莖大根ノ如クニ作リ常食トス、是ヲ食スレバ疱瘡ヲ免カル、匂ハ芹ノ如ク、葉ハ前胡ニ似テ三葉ニ分ル、八丈島ハ世ニ所謂女護島ナリト、本綱附錄ニ云、扶桑之東有二女國一、產二鹹草一ト、

〔甲子夜話四十七〕去年八丈島ノコトヲ掌トル同心ニ憑リテ、其種〈○鹹草〉ヲ得、當春ノ彼岸ニ蒔キテ、明日ヤハユルト待タドモ、十日ヲ經テモ生ゼズ、人々モ不審シキル中、或日〈卯月〉ノ頃永代橋ノ邊ヲ過シトキ、八丈ノ問屋ニアルヲ見タレバ、彼草ノ云々ヲ問タルニ、コノ草八丈ニテハ如斯ナレドモ、他邦ニ移シテ蒔ケバ、曾テ生ゼズト答ヘキ、尙試ムベキナリ、

〔多識編二〕〈草〉鹿蹄草、今案加乃豆米久佐、

〔重修本草綱目啓蒙十一〕〈草〉鹿蹄草　イチヤクソウ　ノアフヒ〈若州〉　アタゴヤク〈加州〉　カバミソウ〈濃州〉　カヾミグサ〈江州〉　ヤマナイシン〈河州〉　キツコウサウ〈江戸〉　スヾラン〈同上〉　ベツコウサウ〈同上〉　マキヲモテ〈紀州〉

イチヤクサウ二種アリ、圓葉ノイチヤクサウハ、時珍ノ說ノ菟葵ニシテ紫背天葵ナリ、本條ハ長葉ノイチヤクサ、ナリ、山中陰地ニ生ズ、葉大サ二寸許、形圓ニシテ微ク長ク厚シ、深綠色、莖長サ四寸許、色多ハ赤シ、數葉地ニ就テ叢生ス、冬ヲ經テ凋マズ、葉背微紫色、夏月別ニ莖ヲ抽ツ、長サ七八寸、肥タル者ハ數莖、其梢ニマバラニ花アリ、六瓣白色、大サ三四分、開テ下ニ向フ、又葉花ナルモノアリ、共ニ花後圓實ヲ結ビ下垂ス、熟スレバ黑色、一種細葉ノイチヤクサウアリ、一根一莖上ニ三葉對生ス、葉形絡石葉ニ似テ細長シ、花實共ニ鹿蹄草ト同シテ小シ、コレヲキヌガササウト云、

〔武江產物志〈藥草〉〕道灌山ノ產　鹿蹄草〈大ミヤニ多〉

〔八丈物產志　一〕アシタ草ハ初冬ノ頃ヨリ種ヲ下シ、翌年ノ春ニ至リテ、其名ヲコバナト云、此時ヨリ根葉トモ食ス、三年ニ至リ、始テ白キ花開キ小キ實ヲ結ブ、夫ヨリ四年アシタヨリ九年アシタマデアリ、根ノ味ヒ甘ク苦シ、葉香氣アリ、丈ケ花ノ頃ハ四五尺ニ及ブ、根ノ廻リ五六寸有、クキモ食シテ香氣アリ、島人平常ノ食料ニ、此草ヲ麥ナドニ交ヘテ食フ、

〔採藥使記中豆州〕重康曰、八丈島ヨリアシタ艸ト云フ草ヲ生ズ、根葉トモニ食フ、是レヲ食ヘバ、痘瘡ヲカロクスルト云、一名八丈草、又海峯人參トモ云フ、

光生按ズルニ、八丈島ハ伊豆ノ下田ヨリ百里バカリ辰巳ノ方ニ當レリ、此島ニテアシタ艸ヲ専ラ作ル、他所ニテ蘿蔔牛房ヲ作ルガ如ク、常ニ五穀ニ雜ヘ餌トス、根葉トモニ煮テサハシ、飯ニ入テ食フ、又菜類ニモ製ス、正月ヨリ九月頃マデヲ旬トス、其味胡蘿蔔ノ如ク、少シ鹽氣アリト云フ、此島ハ常ニ鹽風烈シキユヘ、アシタ草ニカギラズ他ノ菜モ、少ク鹽氣アリト云、葉ノ形チ前胡ニ似、マタ三葉芹ニモ似テ、三椏三葉ニシテ、面ハ染青ニシテ背ハ青白色ナリ、其葉光滑ニシテ葉ノヘリ細鋸齒アリ、莖ニ少シ赤キ所アリ、葉莖芹ノ香アリ、此草四時凋マズ、新葉舊葉相マジハル、嫩葉ヲ取リ食フ、味甘ク淡ク佳ナリ、此草日暮ニ子ヲ蒔ク時ハ晨ニ芽ヲ生ズ、故ニアシタ艸ト云フ、是レ煖國ノ產物ナル故カ、此草子種ヨリ三年ヲ經テ、細白花ヲ開ク形狀芹ノ如シ、八丈島ノ土人ノ曰、此草此島へ來リ初テ食フ人ハ、殊ノ外氣ヲ上ニ頭痛ナドスル、五七日トモ食ヒ馴レテハ害ナシ、故ニ島人モ此國ノ人參ナリト云フ、貝原氏ハ文獻通考ニ載ル處ノ鹹草ヲ、アシタ草ナリトス、然レドモ文獻通考ニ、葉邪蒿ニ似タリトアルニ合ハズ、松岡氏ノ曰、鹹草ハ、救荒本草ニ出ス鹹蓬草ナルベシト、又或說ニアシタ草ハ本草滙草ニ出ル都管草ナルベシ、然レドモ本草蘇頌ガ說ニ詳ニ的當セズ、

〔伊豆七島調書〕神津島

古事類苑

植物部二十二

草十一

鹹草

〔書言字考節用集 六生植〕明日草(アシタ)〔在豆州八丈島〕

〔大和本草 五雜草〕鹹草　アシタト云草、八丈ガ島ノ民多クウヘテ、朝夕ノ糧ニ充ツ、彼島米穀ナキ故也、江戸諸州ニモアシタヲウフ、葉ハ前胡防風ニ似タリ、各三葉分ル、莖微紅小者不紅、微有香氣、微辛、本草綱目三十二卷、蜀椒子ノ附錄ニ、鹹草ヲ載タリ、曰、扶桑東有女國、產鹹草、葉似邪蒿而氣香、味鹹、彼人食之、今案是アシタナルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙 二十二味〕鹹草　ハチジヤウナウ(大和本草)　アシタバ　トウダイニンジン　イヌサイキ　カイホウニンジン

本八丈島ヨリ來ル、今市中ニ多ク傳ヘ栽ユ、但俗彼ノ島ニハ痘瘡ナシト云、故ニ栽テ厭勝トスルナリ、葉ハ獨活ノ葉ニ似テ大ニ厚シテ、光アリテ色淺シ、莖葉ヲ切レバ黃汁出ヅ、凡ソ子生ヨリ三年ニ至テ、莖ヲ抽デ高サ三五尺、葉互生ス、五月枝梢ゴトニ花ヲ開ク、碎小ニシテ白色、數百傘ヲナシ、獨活花ノ如シ、實モ亦形同シテ大ナリ、熟スレバ根枯ル、子ヲ下シテ生ジ易シ、往年嫩根ヲ採リ、製シテ和人參ニ僞リシコトアリ、故ニ今ニトウダイニンジン等ノ名殘レリ、コノ草自ラ鹹味アリ、故ニ大和本草ノ說ニ從テ鹹草トス、然レドモ的當ニハアラズ、諸州海濱ニオニウドト呼ブ草アリ、形狀八丈草ニ異ナラズ、只黃汁出デズ、毒草ナリ、

くすべし、薄き程根ふとし、よき程さかへたる時、上をしかとふみ付べし、かくせざれば土和らかにうきて、葉のみしげり、根却てふとからず、ひげもありて中うつけ、柔らかにして牙脆からず、種子を殘し置て、來三四月早く蒔て、手入を委しくしたるは、よくいでき根大きなり、にんじむは、土地のつよくかはきて、あらきを好まず、常に畦の中少うるほひ有事よし、いか程も薄く間引て、一本づゝのわきをほりて、油糟を入れば、大かたの大根ほどはふとる物なり、是菜中の賞翫にて、味性も上品の物なり、菜園にかくべからず、但にんじんは其種子を家におさめずとて、其地を前よりよくこしらへをき、子を取て家へ入ず、其まゝ蒔物なり、

〔甲斐國志 百二十三 產物及製造〕胡羅蔔　長芋　是モ本州ニ乏ク、常ニ江戸ヨリ馱運セシニ、今ハ江戸ニンジント云種ヲ植テ、彼物ニ劣ラズ、所在ヨリ產出セリ、物皆時運ニ乘ジ令然カ、此等ハ種藝ノ功ニ依ル程ノ事ニモ非ジ、

らんや、名醫補澄の言に、世無難治之疾、有不善治之醫、藥無難代之品、有不善代之人、とあれば、滑夫論、治世不得眞實の譬ひなれども、曲がれるを矯て直に過ぐと云ふべし、本草綱目に、元の時より胡蘿蔔西土に來るとあれども、滑夫論にてみれば、胡蘿蔔は、後漢の前より西土にありとみゆ、小朱蘿蔔、丁香蘿蔔の名を載せざるは、本草綱目一缺なるべし、

〔本朝食鑑三菜之〕人參菜

集解、即胡蘿蔔也、六月土用下種、生苗如蒿、莖有白毛、辛苦臭亦如蒿、八九月采葉莖、煮而作茹、多十一月臘月及春采根、長五六寸、大者盈握、色黃赤似鮮地黃羊蹄根、小者形似人參、截斷之、赤暈作圈、故俗稱人參、三四月開白花、攢簇如傘、狀似蛇牀花、子亦似蛇牀子、稍長有毛褐色、采根煮食則甘、或味噌漬糟漬食之、一種有野人參者、而形相似不堪用之、野人參與藥人參同、而其中有毒、本不可不細辨也、

〔重修本草綱目啓蒙十八菜之一〕胡蘿蔔　セリニンジン　ニンジン　ナニンジン　ニジ　ハタニンジン備前中略〇根ニ赤黃白ノ三種アリ、京師及大坂ノ產ハ、色赤黃ニシテ紫ヲ帶ブ、和州泊瀨及遠州ノ產ハ、深紫赤色名品ナリ、味亦美ナリ、京下鴨邊ノ者ハ、色黃ナリ、木津村及江州ノ產ハ白色ヲ帶ブ、

〔農業全書五菜之三〕胡蘿蔔

にんじん根の黃なるをえらびて作るべし、白きは味も劣れり、たねを取事、春莖の立時、中にて細きはぬき去、ふとくして根の黃なるばかりを立をき、花の付時枝をも皆切のけて、本莖ばかりの子を取べし、同じくうゆる地の事、大根に替事なし、いか程も細かにこなし、糞を多く打からし置、うるほひを得て、たねを砂と灰とに合せ、横筋を五六寸にきりて薄く蒔べし、糞水をなる程多くそゝぎ、種子おほひを、指の厚さ程にして、早せば猶もさい〳〵水をそゝぎ、草を取さり、二三寸にもなりたる時は間引立、間を緖手にてかきあざり、段々間引て、後は五六寸に一本宛ある程に薄

胡蘿蔔

姪ノ血ドメトス、故ニ名ク、クサマチン勢州、蓋ニ審スル故ニ名ク、ヨロヒグサ佐渡　ヲニゴケ江都　チヤウチンゲサ越後

一名土芫荽諸便方　嗜星草藥性纂要　野園石胡荽本草彙言　碎米草吳氏食物本草　地光錢郡武府志

人家庭際墻側盆中多ク生ズ、小草ナリ、地ニ就キ蔓ヲ引、葉圓カニ五岐ニシテ鋸齒アリ、大サ三四分、淡綠色ニシテ光リアリ、蔓ニ互生ス、葉ゴトニ鬚根ヲ下シ、地ニ入ルコト深ク拔去リ難シ、夏月葉間ニ一分許ノ小毬ヲ生ズ、楊梅ノ形ノ如ク綠色、卽小花ノ聚ルナリ、後實ヲ生ズ、落テ自ラ生ズ、其野外路旁ニ生ズル者ハ、葉大サ一寸許ニシテ、ツボクサニ混ジ易シ、

〔多識編三菜〕胡蘿蔔、今案世。利。仁。牟。志。牟。

〔和爾雅七菜蔬〕胡蘿蔔（キリニンジン、ニンジン）　野胡蘿蔔（ヤブニンジン）

〔書言字考節用集六生植〕胡蘿蔔（キリニンジン）時珍云、元時始自胡地來、氣味微似蘿蔔、故名、

〔和漢三才圖會九十九草〕胡蘿蔔（にんじん）○中略

按胡蘿蔔、六月下種、秋食苗、冬食根、味甜而不辛、有赤黃二色、黃者生沙地、就中自遠州出深赤色者、攝州生玉造、亦出赤色者、唐人呼曰紅胡蘿、今四時種之、茹秧葉、凡根略似人參、故倭唯稱人參、終不改、

〔續昆陽漫錄〕胡蘿蔔

胡蘿蔔は形の人參に似たるを以て、我國の俗、人參と云ふと思ひしに、先年八住順庵の話に云く、明錢希言集曰、治疾當得眞人參、反得支羅服、當服麥門冬、反得丞横麥、三代以下皆以支羅服丞横麥、合藥、病日痁而遂死也、按潛夫論如此、支羅服疑今小朱蘿蔔也、吳越間有之、謂之丁香蘿蔔、其形如參、故誤用耳、丞横麥疑卽本艸穬麥是矣、陶弘景曰、根似穬麥、故謂之麥門冬、以訛傳訛、曷所底止、按ずるに、潛夫論に、治疾當得人參、反得支羅服、當得麥門冬、反得丞横麥、已而不識眞、合而服之、病以侵劇、不自知爲人所欺也云云、三代以下皆以支羅服丞横麥合藥、病日痁而遂死也に作る、とこれにて觀れば、小朱蘿蔔は胡蘿蔔にて、人參に代へしゆえ、我國にて人參と云ふなるべし、胡蘿蔔味甘美にして、極めて補益の功あるべければ、人參に代たればとて、何ぞ病日に痁して遂に死するに至

防葵

右之品々致商賣候儀、先年月切ニ御定被成候得共、自今以後は此書付之通に、節ニ入候日より可致商賣之、○中略 右之趣相背者於有之は、急度曲事可申付者也、

五月

〔本草和名 六草〕房葵 疏注云、葉似葵、味似防風、故名防葵、 一名梨蓋、一名房慈、一名爵離、一名農菓、一名利茹、一名方蓋、本條 一名票蓋、出錄名苑 一名梁蓋、一名房苑、一名農葵、一名和利、出藥性 一名方慈、一名梨蓋、出雜要訣 和名也末奈須比、

〔倭名類聚抄 二十草〕防葵 蘇敬本草云、防葵 和名夜末奈須比 葉似葵、味似防風、故名防葵也、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕陶注云、本與狼毒同根、猶如三建、今其形亦相似、圖經云、其葉似葵、毎莖三葉、一本十數莖、中發一幹、其端開花、如葱花狀天蓋、而色白、

〔重修本草綱目啓蒙 十三毒草〕防葵 ヤマナスビ 和名鈔 ○ボタンニンジン ○ヒラノニンジン ○御赦免ニンジン ○御免ニンジン ○五島ボウフウ ○キボウフウ ○ケヅリボウフウ ○クヒボウフウ 江州 ○ボタンボウフウ 尾州 ○ナツマボウフウ

種子ヲ傳ヘテクユ、世上ニ誤テ朝鮮人參ト云、葉ハ牡丹ノ葉ニ似テチイサク、白色ヲ帶テ粉ヲカケタルガ如シ、子生ヨリ三年ニシテ花實ヲ生ズ、其葉初ハ數箇叢生ス、三年ノモノハ莖ヲ抽ブルコト三四尺、葉互生ス、葉間ニ枝ヲ生ジ、夏月枝梢ゴトニ小白花ヲ開キ、傘ヲナスコト、大葉芎藭ノ如シ、花後實ヲ生ズ、又大葉川芎ノ如シ、實熟シテ苗根共ニ枯ル、故ニ二年ノ秋根ヲ取リ用ユ、古ハ御免ヲ蒙リ、嫩根ヲ製シテ、和人參ニ充テ賣ルコトアリ、故ニ御メン人參等ノ名アリ、老根ハ大ニシテ白色、今ハ其根ヲ縦ニ割キ、削リ防風ト稱シ賣ル、コレ防風ノ僞物ナリ、肥前ノ五島ニテ多栽エ出ス、故ニ五島防風トモ云フ、

石胡荽

〔重修本草綱目啓蒙 十六石草〕石胡荽 ○チトメグサ 京 ○ウブラグサ ○カヤミグサ 播州 ○ヒルグサ 江州

又藥舖ニ削リ防風、一名五島防風、木防風ト云アリ、是レ即防葵ナリ、毒草類ニ本條アリ、亦防風ニ非ズ、人參類ニテハ牡丹人參、御免人參ト稱スルモノナリ、此根白シテ大ナリ、堅ニ割テ乾ス、故ニケヅリ防風ト云、

又別ニ濱防風アリ、春中菜店ニ嫩葉ヲ賣リ食品トス、故ニ八百屋防風トモ云、又伊勢防風トモ云、海濱ニ自生ス、根皮黄赤ニシテ疙瘩アリ、常州、羽州、奥州、肥前ノ五島ヨリ藥舖ニ出ス、是菜類ニシテ防風ニ非ズ、

〔農業全書 四菜〕防風

是は藥種の防風にてはなし、海濱の和らかなる白沙に生ず、其莖あかく、その葉も其香も防風に似たる物なり、莖を取てわりて膾の具に用ひ、或酢にひたして食ふ、甚其香よく味よし、實を取て沙地の畠に植て、少手入すれば、よくさかゆるものなり、大邑に近き所は、多く實を蒔て作り、市町に出すべし、

〔剪花翁傳 三四月開花〕防風　色白く、瓣小細し、開花四月下旬より五月まで咲、方日向、地干、土砂雜、肥濱小便、下種移(うゑかへ)とも、秋彼岸より十月までよし、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

駿河國十七種、〇中略防風、夜干、防己、各十斤、　伊豆國十八種、〇中略防風十五斤、　相模國卅二種、〇中略防風三斤、　上野國十五種、〇中略防風六十斤、

〔毛吹草 三〕和泉　防風　伊勢　二見防風　石見　防風

〔享保集成絲綸錄 三十六〕貞享三寅年五月

覺〇中略

二月節ゟ〇中略

一ばうふう

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕防風　ハマオホネ（延喜式）　ハマニガナ（和名鈔）　ハマスカナ（同上）　一名曲
方氏（綱目）　屏風菜（村家方）　山花菜（盛京府志）　防丰（多識編）
享保年中ニ渡ル所ノ唐種、和州ノ宇陀、城州八幡ニテ栽ヘ出ス、葉ノ形白頭翁（オキナグサ）葉ニ似テ大ニ厚ク、毛ナク光滑ナリ、色白ヲ帯ク防葵ノ葉ノ色ノ如シ、一根数十葉叢生ス、三年ノ者ハ薹ヲ起ス、高サ三尺許、枝叉ヲ分コト甚繁シ、夏秋細叉ゴトニ花ヲ開ク、砕小白色芹ノ花ノ如シ、實ハ獨活ノ如シ、已ニ實ヲ結ブモノハ根枯朽ス、故ニ根ヲ採ル者ハ二年ヲ良トス、三年ナルモノハ根硬ク用ルニタヘズ、凡ソ諸藥草大抵此ノゴトシ、江戸ニテ栽ル者ハ根甚長ク、三四尺ニ過ギ、徑四五分ニシテ白色ナリ、京師ノ官園、及ビ和州ニテ栽ルモノハ、根長サ一尺五寸許ニシテ淡白色ナリ、是土地ニ因リテ然リ、根ヲ切バ内ニ黒キ圏アリ、此ヲ本草原始ニ金井玉欄ト云、ソノ内ニ菊花紋アリ、藥用上品トス、然ドモ京師ノ藥舗ヘハ宇陀ヨリ少シ出スノミナリ、諸州ニコノ種ヲ栽テ宜シカルベシ、今舶來ノ者ハ形小ク、蘆頭上ニ葉ノ莖ヲ一寸餘連子タリ、ソノ形禿筆頭ノ如シ、故ニフデ防風ト云フ、眞物ナレドモ皆陳久ニシテ蟲蛀多シ、
今藥舗ニテ眞ノ藥防風ト云アリ、一名伊吹防風、山人参、青葉防風、江州伊吹山ノ自然生ナリ、根細長ク六七寸ニシテ堅實ナリ、肥地ニ栽ルモノハ微ク潤ヒアリ、ソノ葉ハ胡蘿蔔葉ニ似テ、細小ニシテ毛ナシ、深緑色薹ヲ起スコト二尺許、多ク枝叉ヲ分チ、小白花簇生スルコト芹花ノ如シ、子モ芹子ノ如シ、是即邪蒿（ヤマニンジン）ノ一種細葉ナルモノニシテ防風ノ類ニ非ズ、
又別ニ一種諸州ニ山人参ト呼ブ者アリ、葉略芹ノ葉ニ似タル故、芹葉ノ防風トモ云、京師白川山ニ多キ故、白川防風トモ云、葉硬クシテ光リアリ、初メハ数葉叢生ス、秋ニ至レバ莖高サ二三尺許リ、枝梢ニ花ヲ開ク、花實共ニ川芎ニ同ジ、根ハ長六七寸黄白色ニシテ硬シ、是集解ノ石防風ナリ、本草原始ニ俗山防風ト云ヘリ、此根舶上遠志中ニ多ク混入スト云フ、

一名逵草、一名蔄芸、已上出纂名苑、按百蕿以上七名、千金翼方、證類本草本條載之、又本草和名於蔄根下百蕿下、載仁楊二家音、則七名出本草、無疑、逵草蔄芸二名乃出纂名苑也、或纂名苑亦有屏風之名、以本草既有是名、輔仁不引及之歟、抑以本草和名百蕿下失著出典、源君誤謂百蕿以上諸名亦出纂名苑、亦未可知也、蘇注本草云、葉似牡蒿附子苗等、蜀本圖經云、白花、圖經云、根土黄色、與蜀葵根相類、莖葉倶青綠色、莖深而葉淡、似青蒿而短小、初時嫩紫、作菜茹、極爽口、五月開細白花、中心攅聚作大房、似蒔蘿花、實似胡荽而大、又有石防風、出河中府、根如蒿根而黄、葉青花白、五月開花、又宋亳間及江東出一種防風、其苗初春便生、嫩時紅紫色、彼人以作菜茹、味甚佳、恐別是一種耳、李時珍曰、防禦也、其功療風最要、故名、屏風者防風隱語也、

〔藥鹽草八〕和名少々　防風　波○万○多○か○な○

〔和爾雅草木七〕防風バウフウ 回草、回芸、並同、其苗曰珊瑚菜、

〔物類稱呼生植三〕防風ぼうふう　畿内及藝州信州にて、山○に○ん○じ○んといふ、是和名也　按に今野菜となす物は、濱防風なり、江戸の市にあるもの、相州鎌倉よりをゝく是を出す、莖葉ふとくして、胡蘿蔔に似たる物、眞の防風なり

〔宜禁本草乾藥中草〕防風　甘辛温、主大風頭眩痛風赤眼、瀉肺實、又頭者令發狂、又尾者發痼疾、葉主中風熱汗出、嫩紫作茹爽口、子似胡荽調食用之療風更優、誤服瀉上焦元氣、

〔本朝食鑑柔滑三〕防風呼如字、和名波萬須加奈、一曰波萬仁加奈、釋名屏風源順、必大按、水邊砂濱生者稱濱防風、生于山中溪石間、而苗如莖頭者稱莖防風、又號石防風也、源順和名所言者、倶濱防風也、集解、防風苗葉略類芹、而葉淺綠、一莖頭有二三葉、其莖初紫赤色相抱、類生薑之苗、稍長而葉圓厚深青有鋸齒、莖亦濃綠、根上白、根黄色、今作蔬者濱防風也、家園砂中栽者亦好、其山石間生者入藥用、不堪作蔬也、

防風

積雪草生田家溝際、其圓一莖一葉、面無枝蔓及花實、高六七寸、葉大一寸、頗似蕗而小者也、今人用積雪草壺草、共入小兒方藥中、云能治肺毒、蓋以積雪草誤爲壺草之謂、覺二物混用矣、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕積雪草

此條ニカキドヲシ、ツボクサノ兩說アリ、ソノ苗共ニ相似テ混雜シヤスシ、カキドヲシハ一名カキドウロシ、カキドウロ、筑前ツルハツカ、カイチダハラ、奧州カイトリバナ、カイトリグサ、共ニ同上カイチンヅル、加州カイチグサ、佐州カントリグサ、羽州ウグサ、丹州綾葛、和書カ蔓草ナリ、道旁ニ多ク生ズ、莖ハ方ニシテ葉ト共ニ毛茸アリテ香氣烈シ、葉ハ形圓ニシテ粗ナル鋸齒アリ、薄クシテ深綠色、長柄アリテ對生ス、冬ヲ經テ凋マズ、春ニ至レバ別ニ新苗ヲ生ジ、直立スルコト五七寸ニシテ草本ノ如シ、葉間ニ花ヲ開ク、益母草ノ花ノ形ニ似テ大ナリ、淡紫色ニシテ紫斑點アリ、又色淺キモアリ、又青ヲ帶ル者アリ、花終レバ莖地ニ偃シテ蔓草トナル、是兩蘇及李時珍說トコロノ積雪草一名連錢草、地錢、海蘇、胡薄荷、新羅薄荷ナリ、

ツボクサ和名鈔ハ一名タツクサ、大和田野道旁埭側ニ多シ、葉ノ形圓カニシテ厚ク淺キ鋸齒アリ嫩綠色ニシテ光滑ナリ、一根ニ叢生ス、蔓草ニ非ズ、根上葉間ニ花アリ、紫黃色、至テ碎小ナル花數十毬ヲナシテ、小ナル楊梅ノ如シ、石胡荽花ニ似リ、夏以後ハ根ヨリ細圓蔓出ルコト尺餘、節ゴトニ葉アリ、地ニ就テ根鬚ヲ下セバ、ツル自ラ朽テ數窠トナル、是寇宗奭說トコロノ積雪草一名連錢草ナリ、

〔本草和名七草〕防風、一名銅芸、一名回草、一名百枝、一名屛風、一名蕳根、仁諝音間一名百蜚、仁諝音斐、楊玄操音非、一名遙草、一名茼芸、已上出兼名苑一名同雲、一名百種、已上出釋藥性一名夏友、出雜要訣和名波末須加奈、一名波末爾加奈、

〔倭名類聚抄二十草〕防風　兼名苑云、防風一名屛風、和名波末須加奈、一云波末仁加奈、

〔箋注倭名類聚抄十草〕本草和名云、防風一名銅芸、一名回草、一名百枝、一名屛風、一名蕳根、一名百蜚、

積雪草

地を細かにこなし、春たねを蒔て、明る正月苗ふとりけるを、いかにも肥和らかなる性よき地に、葉をうゆるごとく畦作りして、當歸を作る法のごとくうゆべし、九十月根を掘取て淨く洗ひ、干上て堅く成たる時收めをくべし、二年なれば根もふとく性も强し、一年の物はいまだ小さし、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種、〇中略 白芷十八斤、　伊勢國五十種、〇中略 白芷卅四斤、〇下略

〔出雲風土記 神門郡〕凡諸山野所在草木、〇中略 白芷、

〔本草和名 草九〕積雪草 陶景注云、此草以當寄寒冷耳、 一名地錢草 葉如錢、故以名之、 一名連錢草 已上二名出蘇敬注 一名停雪 出釋藥 一名水氷 出雜要訣 和名都保久佐、

〔倭名類聚抄 草二十〕積雪草　本草注陶隱居曰、積雪草 和名豆保久佐 寒冷故以名之、蘇敬曰、其葉如錢、故亦名連錢草、

〔箋注倭名類聚抄 草十〕蘇敬又曰、葉圓如錢大、莖細勁蔓延、酉陽雜俎、地錢、葉圓莖細有蔓、一曰積雪草、一曰連錢草、頌曰、俗間或云、圓葉似薄荷、好近水生、經冬不死、或名胡薄荷、夏五月放花、時珍云、蘇恭注薄荷云、一種蔓生、功用相似、蘇頌圖經云、胡薄荷與薄荷相類、但味少甘、生江浙間、彼人多以爲茶飮、俗呼爲新羅薄荷、天寶單行方所用連錢草是也、據二說則積雪草卽胡薄荷、乃薄荷之蔓生者爾、衍義、積雪草生陰濕地、形如水荇而小、面亦光潔微尖爲異、今人謂之連錢草、蓋取象也、小野氏曰、豆保久佐、今大和俗呼久都久佐、非蔓草、可以寇宗奭所說積雪艸充之、蘇敬蘇頌所說是蔓艸、可以今俗呼蔓薄荷、或呼加岐土保之、或呼加伊登利久佐者充之、

〔多識編 二芳草〕積雪草、豆保久左、案豆留波加、異名海蘇、

〔和爾雅 七草木〕積雪草 ウツボグサ カキドホシ チドメグサ 地錢草、連錢草、海蘇、胡薄荷並同、

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕蘞草　正字未詳　豆保久佐

良斜殺者名殺白芷大之、細長而似殺口者名殺手、爲下品（殺口者、吹ニ類草器之名也、）

（物類品隲三芳）白芷　和名ロロヒグサ、又ウマゼリト云、和産所在ニアリ、漢種上品、享保中種子ヲ傳テ、今官園ニ多アリ、形状和産ニ同シテ香氣ヲヨロシ、八月實ヲ蒔、翌年秋掘取ベシ、一年ニテハ根小ニシテ用ルニ堪ズ、春植テ二年ニ至レバ、花ヲ開テ根堅、季秋ニ至テ悉ク朽ナリ、故ニ八月ニ植テ翌年掘取ヲ佳トス、

（重修本草綱目啓蒙九芳草）白芷　○ヨ○ロ○ヒ○グ○サ（延喜式）　○サ○イ○キ（信州）　○ム○マ○ゼ○リ（勢州）　○ヤ○マ○ウ○ド（作州）　○カ○ン○ラ（勢州）　今ハ通名　一名神寶（王氏彙苑）　三閭小玉（輟耕録）　蘭槐（荀子）　澤芳（典籍便覽）　杜若（名物法言）　芳草（事物異名）　佚里竹根（廣動植本草）　佚里大根（村家方）　增、一名都梁香（本經逢原）

舶來ノ白芷二種アリ、一種車切ト稱スルハ、根ノ大ナルヲ輪切ニシタル者ニテ、是古渡ナリ、今ハナシ、又一種殺口様ト稱スルハ、根細シテ烟管ノ殺口ノ如シ、是上品ナリ、今渡ルモノ皆此ノミ、漢種ハ享保年中ニ渡ルト云ヘリ、苗ハ和産ニ同シテ根ニ香氣多シ、和産ハ山城及ビ大和ニ多ク栽ユ、葉ハ大葉ノ川芎ニ似テ、一寸許ノ葉枝ヲ分テ多ク著キテ、二三尺ノ大サニナル、皆周邊ニ鋸齒アリ、大葉ノ川芎ヨリ濶クシテ、背ニ粟紋アリ、苗高サ七八尺葉互生ス、花ハ小ク白シテ胡蘿蔔ノ如ク繖ヲナス、又大葉川芎ノ花實ニモ似タリ、凡ソ秋日下種スレバ三年ニシテ花實アリ、根堅硬ニシテ用ルニタヘズ、冬ニ至リテ苗根枯腐ス、故ニ八月ニ種ヲ下シ、翌年ノ秋根ヲ采ルベシ、城州宮野ニテ作ルハ、肥地ニ種ヘ、根大ナル故香氣薄シ、和州宇陀ニテハ瘠地ニ種ヘ、養力ヲ借ラズ、故ニ香氣アリ、奥州南部ノ自然生最良ナリ、根細クシテ香氣多シ、舶來ノ白芷ニ石灰ノツキタルアリ、コレハ白芷蛀ミ易ク、並ニ色白カランコトヲ欲シテナリト時珍モ云ヘリ、

（農業全書十藥種之類）白芷

白芷は唐のを用ゆるがよけれども、山城にては倭を作りて、是も藥屋に賣て、利ありと云なり、肥

白芷

〔本草和名 八草〕白芷、一名芳香、一名白茝、仁諝音昌改反一名虈、仁諝音許驕反一名莞、仁諝音丸一名苻蘺、一名澤芬、葉名蒚麻、仁諝上香歷一名蘭茝、出陶景注一名葯、烏角反、出兼名苑一名白芝、出雜要訣和名加佐毛知、一名佐波宇止、一名與呂比久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕白芷　雜要決云、白芷一名白芝、和名加佐毛知、一云與呂比久佐、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕按家語與善人居、如入芝蘭之室、芝即芷字、此所載白芷即是、芷香草、故與蘭並言、正作茝、內則佩帨茝蘭是也、後諧止聲作芷、又諧之聲作芝、遂與瑞草之芝混無別、○中略　按本草和名藁本訓佐波曾良之、白芷香巳出、藁香具、本草云、白芷一名芳香、一名白茝、一名虈、一名莞、一名苻蘺、說文茝繭也、楚謂之蘺、晉謂之虈、齊謂之茝、內則云、婦或賜之茝蘭、釋文芷本又作芷、漢禮樂志、茝蘭芳、注茝今白芷、按芷即茝省字、猶頤字隷或作頣也、後人以爲從止聲、遂音止、其白色故曰白芷、楚辭招魂云、菉蘋齊葉兮白芷生、圖經、根長尺餘、白色麁細不等、枝幹去地五寸以上、春生葉相對婆娑、紫色、闊三指許、花白微黃、入伏後結子、立秋後苗枯、

〔大和本草 六草〕白芷　蠹好ンデ食ス、アラクワリテ暖日ニ曝ベシ、中華ノ產ヨシ、山城州ニモウフ、然レドモ中華ヨリ來ニハ不及、又一種白芷ニ似タル物アリ、節紫ナリ、香少ナシ、若水曰、白芷市人以石灰拌勻晒收、用時水洗淨ムベシ、當世ノ醫藿香正氣散ヲ用ルニ、無風邪頭疼症ニハ、必白芷ヲ去ル、去ザレバ食氣ヲ滯ラシメ、嘔吐ヲ生ズト云、

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕白芷　白茝　澤芬　芳香　苻蘺　莞音官　虈音鴞　葉名蒚麻、葯音約　和名加佐毛知、一云與呂比久佐、○中略

按白芷本朝處處出者有二種、而一種苗高五六尺、莖葉似川芎而甚大、花實亦似川芎大房、但葉色淡於川芎、無香氣、一種苗高三四尺、莖有細白毛、葉似川芎而甚大、其色淡於川芎而甚有香氣、並其根形狀和漢無異、但經久則輕虛而如朽木、以不分明官令禁售之、單用唐白芷、其大輪切者俗呼名車切、最

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇敬又云、藁本莖葉根味與芎藭小別、圖經、葉似白芷香又似芎藭、但芎藭似水芹而大、藁本葉細耳、五月有白花、七八月結子、根紫色、

〔多識編 二芳草〕藁本、宇多米、又稱左波曾良之、異名鬼新、本經 鬼卿、同 藁茇、綱目 微莖、同綱

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕藁本　微莖　鬼新　藁茇　鬼卿　和名佐々波曾良之、一云曾良之、○中略

按藁本往昔本朝有之、今乃無之、自唐來者有二種、赤黑手者多鬚者也最爲良、川芎手者少鬚、形似川芎、不佳、本草所謂江南之產似芎藭而細者是乎、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕藁本　カサモチ 延喜式 ○ハソラシ 和名鈔 ○ソラシ 同上　今ハ通名

一名地新 村家方　山園荽 救荒本草　保生靈 藥譜　土弓 性試　增、一名山茝 博雅　蔚䒷 同上

今渡種ヲ傳ヘ栽ユル者多シ、最繁衍シ易シ、葉ハヤマゼリノ葉ニ似テ小クシテ毛アリ、莖ハ紫色、舊根ヨリ叢生ス、根ハ久ヲ經テ枯レズ、莖高三四尺ニシテ葉互生ス、秋ニ至リテ小白花枝ノ末ゴトニ繖ヲナシテ簇生ス、實ハ芹實ノ如ニシテ圓長、熟スレバ黄褐色、地ニ下シテヨク生ズ、根ハ蒼ノ大サノ如ニシテ簇生ス、曝乾スレバ古渡ノ藁本ニ似テ細シ、今藥舖ニテ眞ノ藁本ト稱シ、或ハ當歸様ノ藁本ト呼モノ此根ナリ、其ワナビデノ藁本ト呼モノハ野胡蘿蔔(ヤブニンジン)根ナリ、藁本ニアラズ、其川芎様ノ藁本ト呼モノハ、大葉ノ川芎ノ根ナリ、誤リ用ユベカラズ、舶來古渡ハシヤグマ様ト稱シテ、根ニ數條アリテ馬尾ノ如ク紫色ナリ、最上品ナレドモ今甚稀ナリ、今渡ル者ハ根皆細シ、又享保年中ニ多ク渡タルハ、根黄黑ニシテ堅ク、大ニシテシヤグマノ形ニナラズ、タマ〳〵種ノ中ニ葉ヲ連子タルモノアリ、コレヲ以テ諦視スルニ、勢州鈴鹿ノ山谷ニ此草多シ、形狀白芷ニ似テ小ク、葉尖リ又芹葉ニ似テ枝多シ、此ヲスヾカゼリト云、藁本ニ非ズ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略 枳實漏廬藁本各九斤、　大和國卅八種、○中略 藁本、升麻、各八斤、○下略

藁本

川芎も良藥なり、古は本朝にはなかりしを、寛永の比長崎よりたねを傳へ來て、大和にて多く作る、其外諸所に作るは性よからず、先たねに取置事は、蘆頭と又は小節のある細き所を、ほり取時別にゑり分置、桶か箱に沙を入、いけ置て、すぐれて肥たる性よき土の、上畠を多よりさい／＼耕し熟したるを、又二三月の比よくこなし、畦作りし、橫筋を麥をうゆるごとく、八寸一尺ばかりも、間を置て切、ならびの間も、六七寸に一科づゝうへ、土をおほひ置、生て後芸り培ひなど、他の作り物に同じ、糞を用ゆる事、先初めは少づゝをくべし、花のつぼむを見てより、多く入べし、沙がちなる黑土、又は白きもよし、但中分より下の土には必作るべからず、吉野にて作る畠は、赤土に沙少少小石も交りたる、いかにも肥たる山畠なり、掘取事は、十月十一月の間よし、鬚をよくむしり、わきの細根も悉く去りて、淨く洗ひかはかしをくべし、釜に湯を立、一ゐは煮て、箸にてさして見るに、よくぬくる時、其まゝあぐべし、煮へ過ればあしゝ、干上る事は、干過ると云事なし、是又四物湯の一色、其外諸方に多く用ゆる物なり、山下など性よき肥地ある所にては、多く作るべし、厚利の物なり、

〔廣益國產考〕一國產となるべき物を左にあぐ

川芎　薄地を修理して作れば、よくできるものにして、香氣も格別よろし、豐後岡領にて多く作り出す也、

〔延喜式〕三十七典藥諸國進年料雜藥

尾張國卅六種、略〇中芎藭廿二斤、遠江國十三種、略〇中芎藭三斤、略〇下

〔本草和名〕八草藁本蘇敬注云、根上苗下似藁根、故以名之、一名鬼卿、一名地新、一名薇莖、出本條一名傲玉、出兼名苑和名加佐毛知、一名佐波曾良之、

〔倭名類聚抄〕二十草藁本　蘇敬本草注云、藁本和名佐々波曾良之、一云曾良之、根上苗下似藁、故以名之、

和州赤羽根之產最佳、丹後山城次之、豐後肥後爲劣、藥肆以圓者稱川芎、以稍長者稱芎藭者、不識名義之甚者也、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕芎藭 オムナカブラ〇〇〇〇〇〇式藥寮 ウシクサ〇〇〇〇丹後、牛ノ諸病ヲ治ス、故ニ名ク、 一名川元蘆綱目 綱目 几元蘆綱目 蛇休草月令根取 蛇避草同上 紫藭譯方 壺藭山海經廣注 藥芹江南通志

俗ニ川芎ト云、卽和漢通名ナリ、蜀ノ川州ヨリ出ル者上品ナリ、故ニ川芎ト云、舶來ノモノ上品ニシテ僞物ナシ、和產ニ大葉小葉ノ二品アリ、藥ニハ小葉ノ者ヲ用ユ、大和ニ多ク栽ユ、葉ハ夏ノ芹葉ニ似テ枝多シ、莖葉トモニ淺綠色ニシテ香氣多シ、秋月花實アリ、形狀當歸ニ同ジ、苗高サ一二尺ニ至ル、此根雀腦ノ大サアリ形モ似タリ、故ニ釋名ノ下ニ雀腦芎ト云フ、大和ノ產ハ舶來ニ同ジ、氣烈シクシテ白色微黃ナリ、年ヲ經テ黃色トナル、年ヲ經タルヲ良トス、豐後及奧州仙臺ヨリ出ル者ハ下品ナリ、豐後ハ自然生ナリ、根ノ色黑赤ヲ帶ブ、又丹後ニモ自生アリ、大葉川芎ハ苗最大ニシテ、小葉ノ者ニ異ナリ、葉ハ白芷葉ノ如ニシテ狹長ナリ、一葉ノ長サ二尺餘、濶サ一尺餘、苗高サ五六尺許ニシテ莖フトシ、花實ハ白芷ト同ジ、根ハ大ニシテ小塊ヲ連珠ス、此形狀ヲ象ドリテ、釋名ノ下ニ馬銜芎藭ト云フ、藥ニ入ルヽニ堪ヘズ、藥舖ニ此ヲ川芎撫ノ藁本ト稱シ貨ル、藁本ノ僞物ナリ、又藥舖ニ角川芎ト云モ有リ、小葉川芎ノ根ニ著タルフトキ鬚ヲ取タルナリ、

蘼蕪 增、一名王孫草本草異名 蘼蕪本經逢原

川芎ノ葉ナリ、小葉芎藭ノ葉ヲ用ユベシ、

〔廣益地錦抄六〕川芎 宿根より春生、葉切れこみ多く、莖たちのび、夏のすゑ秋白花さく、時珍の胡荽に似たりといふがごとく、胡荽より葉あつく大キシ、草にふし有てふとし、葉の香氣甚ありて一聚うゆるに遠くかほる、不斷風なき時もかほる事、藥種にきざみたるがごとし、植てながめ有、

〔農業全書十藥種之類〕川芎

與伊呂波字類抄及爾雅、山海經、廣韻合、作䕷作蘼並通、然此引唐韻則作蘼恐誤、又按䕷音麋、在六脂、蘪音微、在八微、其音不同、義亦無通、本草和名云、䕷蕪一名薇蕪、則知薇蕪是䕷蕪之一名、非同字、此云音微、云又作薇、並誤、蜀本圖經云、苗似芹胡荽蛇牀輩、叢生花白、吳氏、葉香細青黑文、赤如藁本、冬夏叢生、五月華赤、七月實黑、莖端兩葉、陶注云、節大莖細、狀如馬銜、謂之馬銜芎藭、圖經、其苗四五月間生、其葉倍香、或蒔於園庭、芬馨滿徑、七八月開白花、根堅瘦、黃黑色、蘼蕪、陶云、葉似蛇牀而香、蘇云、此有二種、一種似芹葉、一種如蛇牀、香氣相似、時珍云、其莖葉靡弱而繁蕪、故以名之、

〔多識編 二 芳草〕芎藭、於。无。奈。久。左。、異名川芎(綱目)山鞠窮、

〔書言字考節用集 六 生植〕芎藭(一名川芎)　蘼蕪(一名江蘺、本草芎藭之苗也、)　川芎(本草、芎藭出蜀中者爲川芎、因地而名也、)

〔本草辨疑 二〕芎藭

和ニ三產アリ、丹後上品、山城大和次之、豐後肥後下ナリ、草ニ二種アリ、(丹後根形如雀腦)葉細シ、大和山城ハ大葉ナリ、今丹後ノ產希也、皆山城大和ヲ用ユ、豐後肥後ハ皺アリテ小ニシテ輕虛ナリ、藥力弱、

和名ウ。シ。ク。サ。ト云、牛ノ諸病ニ最上ナリ、故ニ名ヲ牛草ト云、牛ノ多キ國ニハ、必自ラ生ズル者ナリト、故ニ丹後ニ自ヲ生ズトナリ、是天ノ賦ハル所ナリ、

〔大和本草 六〕川芎　時珍云、出蜀中者爲川芎、出江南者爲撫芎、皆因地而名也、川ハ蜀ナリ、川芎ノ葉ヲ名蘼蕪、本艸曰、川芎不可久服、多令人暴死、況存中亦云然、

〔和漢三才圖會 九十三 芳草〕川芎　芎藭　胡藭　香果　山鞠窮　闍莫迦(金光明經)　和名於無奈加豆良(○中略)

按芎藭葉似芹而山中獨生者根長、人家栽者根團略似薯蕷而小、未見別種者、劉氏鴻書云、日本有諸藥而無甘草芎藭云云、慶長元和之比、有唐川芎稍久不來、而價貴至凡一兩代銀十五六錢、故重之如人參、於是閒用倭之川芎、因處處多移植用之、既知其功勝於中華者、形狀亦無異、但其微辛味甚爾、

花さく、うす黄色、花葉ともに香氣有り、花壇にうへてよし、時珍が云、深冬苗を生ズ、しげりをなす、五六月黄花をひらくと云、ちがひなし、宗寅が云、香胡荽に似たり、本草の註には大ク誤なりといへどもしからず、胡荽によく似たる物なり、葉形は似て、ういきやうハ極て青し、こゑんハ黒みあり、

〔農業全書四菜之類〕茴香 ういきやうは、屋敷内など肥地をえらび作るべし、やせ地によからぬ物なり、兩傍苗にして、栞をうゆるごとく、間を二尺ばかりに實くうゆべし、うへ付にするもよし、其年はいまだ子少し、尤見合せ糞を用ひてよし、

〔草木育種後編下藥品〕茴香本草 和蘭にてヘンクルといふ、二如亭群芳譜に曰、收子陰乾、宜向陽地、以糞土、和土種之、又曰、十月糞土を以て根下を壅すべし、秋月種子を布き、糞水を澆ぎてよし、根と實を藥用とすべし、

〔剪花翁傳四八月開花〕茴香 花黄色、形ち至て少く、房女郎花に似たり、開花八月下旬、方日向、地干、土山土、肥小便、下種春彼岸よし、株十月頃に分べし、よく育れば高さ六尺にもおよぶ、剪得てもはやく凋むなり、升水の方ハ蠹にて枝葉をしぼりよせ、切口を少し切捨、冷水を逆水して水器に扦し、暫くして水上る也、

芎藭

〔本草和名七草〕芎藭、一名胡窮、一名香果、葉名蘼蕪、一名馬銜、(陶景注云、狀似二馬銜一、故以名之、)一名胡果、(出二雜要訣一)和名於无奈加都良久佐、

蘼蕪、(芎藭苗也、)一名薇蕪、一名江離、(本條)一名殷蕪、(出二雜要訣一)

〔倭名類聚抄二十草〕芎藭 唐韻云、芎藭、(弓窮二音、和名本草、於無奈加豆耳、)香草也、根曰芎藭、苗曰蘼蕪、(蘼無二音、蘼或作䕷、)

〔箋注倭名類聚抄十草〕下總本蘼作蘪、廣本同、按作蘪與證類本草、管子地員篇、淮南子氾論訓合、作蘪

加香草　採取月令

春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、又舊莖ヨリモ出、葉互生ス、形至テ細ク、茵蔯蒿ノ梢葉ニ似テ長ク絲ノ如シ、故ニ時珍絲葉ト云フ、莖ト共ニ白色ヲ帶テ香氣アリ、苗高サ六七尺、莖圓ニシテ粗シ、一根叢生、夏ニ入テ枝上ゴトニ花ヲ開ク、數百聚リテ傘ノ如シ、花ハ碎小五瓣黃色、南柴胡ノ花ニ似タリ、後實ヲ結ブ、亦相似テ長サ二分許、纍積アリ、熟シテ苗枯ル、莖ノ本ハ枯レズ、年ヲ積テ愈繁茂ス、其子藥用ニ入ル、地ニ下シテ生ジ易シ、一種大茴香アリ、一名舶茴香、八角茴香、角茴香、蠻產ニシテ和產ナシ、其實大サ一寸餘、厚サ三分許、其形八瓣、瓣ゴトニ末尖リ、中ニ一核アリ、甚莽草實ニ似タリ、故ニ今多ク是ヲ以テ僞リ賣ル、宜ク擇ブベシ、莽草實ハ形同ケレドモ、臭氣アリテ毒多シ、蠻書ニ八角茴香ノ彩畫アリ、草本ニシテ葉モ莽草葉ト異ナリ、舶茴香ト蘹香トハ、形狀大小同ジカラザレドモ効能同ジ、故ニ此條ニ混ジ入ル、大小茴香ノ分別三等アリ、蘹香ヲ小茴香トシ、舶茴香ヲ大茴香トスルコト、附方中ニ見ヘタリ、又次ノ條蒔蘿ヲ小茴香ト云フニ對スレバ、此條ヲ大茴香トス、又時珍ノ說ニ、寧夏ヨリ出者ヲ大茴香トシ、他處小者ヲ小茴香・云、是本條ニ大小ノ分チアルヲ云フ、然レドモ角茴香ヲ大茴香トスルコト普通ナリ、本草滙ニ形如麥粒、爲小茴香、性溫宜入料食、形如柏實、裂成八瓣者爲大茴香、性熱損目、不宜入食料ト云フ、

增、桃洞遺筆ニ大茴香ノ圖ヲ載テ云、濟ノ張璐玉ガ本經逢原ニ、八角茴香卽櫁香トアルヲ以テ、本草香木類ニ載ル、櫁香ノ實トス、蘭山先生モ此說ヲ是トセラレアリシニ、先年予〈謙○桃〉先生ノ門ニ遊ビテ東都ニアリシ時、桂川氏蘭書ウエインマン中ニ載ル大茴香ノ圖ヲ以テ、先生ニ示ス、コレニテ璐玉ノ說モ誤リナルコトヲ識ル、予モ其席ニアリテ、見ルコトヲ得タリ、因テ今茲ニ摸寫シ出ス、變名アニイシト云トイヘリ、

〔廣益地錦抄 四〕茴香　葉こまかに切レて網のごとく、靑色、冬より葉しげりてながめあり、夏の比

作二人、薮百卅二擔、運功卅二人、下子半人、(三月、八月、)

〔農業全書四菜〕胡荽

南蠻の詞に、こゑんとろと云、食物等の悪臭をよく去ものなり、猪肉鷄肉などの料理に加ゆれば、あしきかを消し甚宜し、其子は痘疹の出かぬるをよく發す、さま〴〵其用ゆる法あり、痘瘡の時けがれにふれてわづらふに、此實を酒に煎じ、病人の違りのかべ帳などに吹かくれば、能穢を去、又魚肉などの悪氣を殺す、不時に用ある物なり、必少作るべし、

〔延喜式三十二大膳〕園韓神祭雜給料(春冬同)

胡荽五升

〔延喜式三十九内膳〕供奉雜菜

日別一斗、(中略)○胡荽二合、(正月、九月、十月、十一月、十二月)

〔本草和名九草〕蘹香子、一名時羅、(出兼名苑)一名懐芸、一名香芸、(已上出雜要訣)和名久禮乃於毛、

〔倭名類聚抄二十草〕蘹香　兼名苑云、懐香一名懐芸、(和名久禮乃於毛)

〔箋注倭名類聚抄十草〕按千金翼方、證類本草並作蘹香子、蓋本草作蘹香子、兼名苑作懐香、二書不同也、下總本懐香作蘹香、恐係據本草校改、非是、又按蘹字、説文、玉篇、廣韻並無、唯集韻有之、蓋俗字也、○(中略)蘇敬云、葉似老胡荽極細、莖麁高五六尺、叢生、今注、一名茴香子、圖經云、三月生、五月高三四尺、七月生花、頭如傘蓋、黄色、結實如麥而小、青色、

〔下學集下草木〕茴香(ウイキヤウ)

〔宜禁本草乾中草〕茴香　辛平、主膀胱腎間冷氣、調中止痛、治癩疝陰疼、入藥炒、調脾胃進食、(生擣葉汁和酒服、治惡毒腫、)

〔重修本草綱目啓蒙十八芳草〕蘹香　クレノヲモ(和名抄)　ウイキヤウ　一名草蘹香(本經逢原)　時蘿(南寧府志)

胡荽

先ニ實二ツ宛附テ熟スレバ赤シ、小兒ノタメニ殊ニ畏ルベキモノナリ、マタ民間ニフロシキヅツミト唱ヘ、方言ニ鍋破ウツギトイフモノ、コレモ其毒酷烈畏ルベキモノナリ、斯ニ三種ノ圖ヲ出スヲ以テ、ヨク〳〵合セ觀テ、殊ニ畏レ避ベキコトナリ、稻若水ノ鉤吻圖說、松岡玄達ガ鉤吻考ニ、逐一記シタレドモ、此國ノ山民輙モスレバ、小兒ヲアヤマツコトアルヲ以テ、更ニ擢テ出ス、

〔倭名類聚抄十六菜蔬〕胡荽　崔禹錫食經云、胡荽息遺反、和名古仁之、味辛臭、一名香荽、魚鳥膾尤爲要、博物志云、張騫入西域得之、故曰胡荽也、

〔類聚名義抄八艸〕蒝荽コニシ　荽音綏、奥ノ上同、　胡荽和綏、コニシ、

〔伊呂波字類抄古植物附植物具〕蒝荽コニシ

〔多識編三菜〕胡荽、古仁志、異名香荽、拾遺　胡菜、外臺

〔東雅十三穀蔬〕胡荽コニシ　倭名鈔に、崔禹錫食經を引て、胡荽はコニシ、味辛臭、一名香荽、魚鳥膾尤爲要と註せり、コニシとは、其字の音を轉じて呼びしなるべし、今の如きは、是等の物を食に充る事は聞えず、

〔重修本草綱目啓蒙十八菜〕胡荽　コ。ニ。シ。　コ。エ。ン。ド。ロ。蠻語コリアンデルノ轉ナリ、○中略

蠻種長崎ヨリ傳ヘ來リ、今處處ニ栽ユ、八月種ヲ下ス、初出ノ葉ハ形圓小ニシテ、鋸齒アリテ石胡荽葉ノ如シ、漸ク長ズレバ分テ三葉トナリ、漸ク花岐多クナル、春ニ至テ薹ヲ起ス、高サ一二尺、葉互生ス、梢葉ハ細クシテ絲ノ如ク、茵蔯蒿ノ梢葉ニ似タリ、四月薹上ニ花簇リ傘狀ヲナス、五瓣ニシテ碎小、瓣ゴトニ一缺アリ、花ウドノ花ニ似テ至テ小ナリ、淺紫色、後實ヲ結ブ、大サ一分許、正圓ナリ、熟スレバ分レテ兩片トナリ、根乃チ枯ル、

〔延喜式三十九內膳〕耕種園圃

營胡荽一段、種子二斗五升、總單功廿八人、耕地二遍、把犁一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、畦上

此ノヤブニンジンハ、爾雅ニ載ルトコロノ藒車ニ能充レリ、又藥性纂要ニ說トコロノ鶴虱草ノ形狀ニモ能合ス、此草ニ限ラズ、總テ衣服ニ著ヤスキ實ヲ、ヤブシラミト云、鬼鍼草及土牛膝ノ如キ是也、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

尾張國卅六種略○中 蛇床子一升、 相模國卅二種略○中 蛇床子一升、略○下

〔毛吹草三〕河內 蛇床子

〔重修本草綱目啓蒙十三隰草〕鉤吻略○中 蔓生、黃精葉、芹葉等數種アリ、略○中 芹。葉。ノ者ハ、金匱要略ニ、鉤吻與芹菜相似、誤食之殺人ト云モノコレナリ、俗ニオホゼリト呼ブ、池澤中ニ生ズ、土人モ毒アルコトヲ能知レリ、葉ハ白芷ノ葉ニ似テ毛アリ、莖中空虛高サ四五尺、五月ニ花アリ、胡蘿蔔ノ花ニ同ジ、江州ノ土人此草ヲ採リテ席下ニ置キ、其上ニ倚テ臥シ、積氣ヲ治スト云、稻若水先生鉤吻考アリ、松岡先生鉤吻說アリ、堀元厚鉤吻考アリ、併考フベシ、略○中

〔草木育種後編下〕芹葉鉤吻略金匱 俗にどくせり、花戶にて鳳凰角延命竹など云、大毒あり、和蘭にていふ、シキウタなるべし、一種奧州より來るものは、葉に斑紋ありてよく蘭說にあへり、大毒あり、口中に入るべからず、蘭園先生本草綱目の透山根に充られたり、

〔武江產物志藥草〕上野邊ノ產 芹葉鉤吻下谷

〔佐渡志物產五〕鉤吻 蔓生黃精葉芹葉ナド、イフ數種アリ、蔓生ノモノハツタウルシト名付テ、山野ニ多シ、木石ニトリツキテ生ズ、物ニ纏ハズ、故ニマタ三葉ノ鉤吻トモイフ、黃精葉ノ鉤吻ハ草木二種アリ、又世俗ニフタコナリトイフモノ、越後方言ニフタコロビカヘルツリトモイヒテ、山中ニ生ズ、灌木ニシテ高六七尺許リ、形狀圖ノ如シ、略○圖 五六月ノ際葉間ゴトニ細枝ヲ出シ、ソノ

至輕虛、時珍云、其花如碎米攢簇、其子兩片合成、似蒔蘿子而細、又有細稜、凡花實似蛇牀者當歸芎藭水芹藁本胡蘿蔔也、又云、蛇虺喜臥于下食其子、故有蛇虺蛇粟諸名、

〔多識編二芳草〕蛇牀、比留牟之呂、今案俗稱也布志羅美、異名蛇粟、本經蛇米、同虺牀、爾雅馬牀、廣雅

〔和漢三才圖會九十三芳草〕蛇牀　牆蘼　蛇米　蛇粟　虺牀　馬牀　和名比流無之呂○中略

按蛇牀子處處山野有之、攝河最多、其苗花子皆如本草之說、蓋子大如蝨、俗呼名蝨蝨、蓋春意藥方中多用之、以大有益陽事之功也、其他藥方用之者希、水草有蛭筵者、蛭在其葉之謂也、別是一種而與蛇牀不同、以蛇牀呼蛭筵之名義未詳、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕蛇牀　ハマニンジン　ハマゼリ　セタヲニンジン廬州　キリシマニンジン同上　一名建陽八座輟耕録　蛇都羅叱鄉藥本草　蛇音崔良只採取月令　蛇道乙羅叱村家方

和名鈔ニヒルムシロト訓ズルニ因テ、古ハ藥舖ニ誤リテ水草ノヒルムシロノ實ヲ、蛇床子ト稱シ貨レリト云フ、ヒルムシロハ救荒野譜ニ載ルトコロノ眼子菜ノ一種ナリ、其後ハ今ニ至ルマデ、皆ヤブジラミノ實ヲ用ヒ來レリ、恕菴先生モ、コレニ左祖セラレタリ、然レドモ古渡ノ蛇牀子ハ形小ニシテ毛刺ナク、竪ニ細稜アリ、集解ニ說クトコロノ如シ、形ミリンカニ似テ、微大ニシテ長ミアリ、是眞物ニシテヤブジラミノ實ト、形甚ダ異ナリ、今諸州海邊ニ濱ニンジント呼モノ有リ、苗ノ形チ水芹ニ似テ數莖地ニツキテ藤蔓ノ如シ、葉モ亦水芹ニ似テ細ク滑澤ニシテ香氣アリ、秋月枝ノ梢ゴトニ細白花ヲ簇生ス、亦芹花ニ似リ、實ノ形及味古渡ノ蛇床子ニ異ナルコトナシ、唯微大ナルノミ、是眞ノ蛇床子ナリ、ヤブジラミハ一名ヤブニンジン、秋ノ後苗ヲ生ズ、冬春ハ色紫ナリ、形胡蘿蔔ノ葉ニ似テ小ク毛茸アリ、夏ニ至レバ綠色トナル、漸ク莖ヲ抽テ高サ二尺餘、葉互生ス、葉間ゴトニ、枝叉ヲ分チ、叉ゴトニ碎白花ヲ簇生ス、一種ツボミノ時、淡紫色ノモノアリ、開ケバ白シ、皆米粒ノ形ノ如キ實ヲ結ブ、毛刺アリテ衣服ニ著ヤスシ、胡蘿蔔ノ實ニヨク似タリ、

蛇床

月植替てよし、五六寸間をおいて植、梅雨の後人糞を澆べし、十月十一月に根を掘採、米泔水に少ひたし、土気を去、毎日日に乾、壺に入て貯べし、湯に入て干バ性味薄くなるなり、

〔延喜式 典薬 三十七〕諸国進年料雑薬

大和国卅八種 略○中 澤瀉、當歸、各四斤、 伊賀国廿三種 略○中 當歸十一斤、略○下

〔和漢三才図会 芳草 九十三〕當歸 略○中

按當歸出於山城久世郡者最佳、大和之産次之、以花葉似芹名山蘄、蘄古芹字

〔広益国産考 一〕国産となるべき物を左にあぐ

當歸　薄地につくりて利を得るもの也、大和の吉野郡宇多郡に作りて、多くいだす也、

〔草木六部耕種法 四十 薬種〕當歸白芷ヲ作ル法

當歸ハ古来大和国ニテ能ク作レリ、今ハ仙台ヨリ此物ヲ出スコト頗多シ、當歸モ能ク作ルトキハ、一歩ニテ六斤宛ハ出来ル者ニテ、一歩六斤ナレバ一段千八百斤ナリ、此ヲ金一両百二十斤ニ賣ト雖ドモ、一段十五金ノ益ナリ、

〔新撰字鏡 草〕蛇床 比留牟之呂、又云蛇粟(粟恐栗誤)蛇米、又虺床、又思益、又蝿毒、又墻蘼、

〔本草和名 七 草〕蛇床子、一名蛇粟、一名蛇米、一名虺床、楊玄操音虚鬼反 一名思益、一名縄毒、一名棗棘、一名墻蘼、一名苹、仁諝音子反、出蘇敬注 一名蛇珠、一名覆棘、一名蛇肝、一名石米、一名株粟、一名馬床、已上六名出釈薬性 和名比留无之呂、一名波末世利、

〔倭名類聚抄 二十 草〕蛇床子　本草云、蛇床子、和名比流牟之呂

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕爾雅、肝虺牀、郭注云、蛇牀也、淮南説林訓云、蛇牀似麋蕪而不能芳、陶注、花葉正似蘼蕪、蜀本図経云、似小葉芎藭、花白、子如黍粒、黄白色、生下湿地、図経曰、三月生苗、高三二尺、葉青碎作叢似蒿枝、毎枝上有花頭百餘、結同一窠、似馬芹類、四五月開白花、又似傘状、子黄褐色、如黍米、

し、されども土餘り和らか過れば、根の性うつくる物なり、山城の富野、寺田などいふ里、専ら當歸を作る所なり、其所の土は、細沙に土と河ごみの交りて、赤土も少々まじれる、牛蒡の出來る土の性と見えたり、凡土の性よはき所惡土の交りたる地などは出來あしく、藥性も宜しからず、大方の土地には作るべからず、是を掘取事は、十月に入て、すきか鍬にて根のきれそこねざる樣に、かたはしより念を入れほるべし、悉く掘取て、淨く洗ひ乾しをき、莖の所を細繩にて四五寸廻りにたばねをき、釜に湯をにやし立、其中に莖の方を下になして入れ、湯煮をするなり、其ゆで加減、根の方をひねりて見るに、指を燃る樣に、和らかに覺る時先あげて、さて又根さきの方を下にして少煮て、是も燃り心みて上るなり、殘らず湯煮し上て、日當の所に、竹にてならしを、二段と三段も横にゆひ、衣桁のごとくして、大きは二かぶ、小さくば四科、莖の中程をわらにてゆひ、竹にうちかけ干なり、又筵に干時は、頭の方を上になし、ならべて段々にをくべし、よせかくる心なくては、根先おるゝ物なり、さて干上て後、蘆頭に莖の方を五分ばかりかけてきり揃へ、箱に入れをくなり、久しく收めをくならば、箱の內に樟腦を段々ふりかけ、箱のすみ〱をば、紙にてはりをくべし、凡一段の畠に、大かたの直段にても、代銀四五百目は有と云なり、是は當歸を藥屋の仕立收る法なり、本法は湯煮したるは、性うすくなりてあしゝ、生ながら數日よく干すべし、壺に入をきて、梅雨の前四月に一度、梅雨の後一度、八九月に一度、凡年中に三度干べし、かやうにすれば藥性よく、數年をきても虫喰損する事なし、是よくためし心見たる良法なり、其味藥屋にある物にくらぶれば、甚甘くして味よし、本草に當歸を湯にて煮事見えず、日にほして、あつき中につぼに入、口をはりてをくべし、時珍が說に見えたり、

〔草木育種下藥品〕當歸　二月種を蒔、人糞を少づゝ用、三年にして花あり、實を採置べし、土地ハ牛房など植る土にて赤土か野土に細なる砂まじりたる地に宜し、寒中人糞少用よく耕てさらし、二

ヨリ出ルモノ同物ナリ、根ノ形チ岐少クシテ、羌活根ノゴトシ、馬尾ノ形チヲナサズ、潤ナク味ト辛クシテ氣烈シ、藥用ニ良ナラズ、ソノ苗葉花實ハ二州ニ栽ルモノト同シテ、只莖ノ色青ヲ帶ブ、集解ニ謂トコロノ饅頭歸是ナリ、

〔農業全書 十 藥種之類〕當歸

當歸は種子を取置事、去年の苗をうへ付にして、當年花咲子をむすびて、秋よく熟したるを收め置べし、又は去年のかぶを移しうへて、たねを取もくるしからず、其畠肥地ならば、糞を用るに及ばず、瘠地ならば見合せ、過ざるほどをはかりて、糞を入べし、莖あかく實の所も色付たる時、取てもみ、粃を簸去りて袋に入れ、つり置べし、青く不熟なるに、少も交をくべからず、早くたう立て根に入ず、苗地は寒耕し、いか程も細かにこなし、さらし置、是又瘠地ならば寒中、糞をうちたるよし、畦作り、菜園に同じ、種子を下す時分は、正月中を定る時とするなり、若寒氣つよくば、二月早く蒔べし、をそきは宜しからず、生て後草あらば去べし、萬の手入、菜の苗の仕立にかはる事なし、移しうゆる地は、いかにも性よき細沙の交りて、少はねばり心もある牛蒡など作るやうの、つまりたる肥地よし、明る二月移しうゆる物なり、畦作り麥を蒔うねのごとくすべし、がんぎを一尺ばかり間ををきてきりならび五六寸に一本づゝ、うゆべし、先苗をほりおこし、うゆる所に、杖のさきにて深く穴をつき、一本づゝさし入れ、根さきの底につかへぬ程に、ふかくさすべし、さし入れて穴の廻りくつろぎあらば、是又杖のさきにてつきうづむべし、苗の大小をゑり分、一畦の中大小なくそろひたるをうゆべし、こやしを入る事、當歸は五月と八月と二ケ月、取分よくふとりさかゆる物なるゆへ、此時にきゝわたる心得して、前方より時分をはかり、糞を多くかくべし、五月は梅雨の後よし、尤五月のみにかぎらず、さい〳〵こゑを用ゆる物なれど、此時殊によき糞を多く用ゆべし、糞は何にてもよし、人糞ほどろ、鰯、油糟などは取分よし、中うち、草かじめ、さい〳〵すべ

所ニウツシ、三年ニ至リトレバ、根大也、其年ニトレバ小ナリ、植處ノメグリニ他草生ゼバ拔去ベシ、生ナル時煮テ食スルニ味ヨシ、生ナルヲ其マヽカゲ干シタルハ、年ヲヘテモ潤アリ、味甘ク虫ハミヤスク、久シク保ガタキ故、藥店ニアルハ皆蒸煮テホシタル物也、故性ヨハシ、長池ヨリ來ル生ナルヲ乾シテ、熱湯ニ浸シテ又乾ベシ、如此スレバ虫クハズ、性ヨシ味最ヨシ、ヨク乾タルヲ口セバキ壺ニ入テ固ク封ジ、時々ホセバ虫ハマズ、身尾トモニ其マヽヲケバ虫ハミヤスシ、身ト尾ト別ニ悉ク引サクベシ、大ナルハ二ニ割ルベシ、刻ミ置テ日久ケレバカビ生ジ、氣味ヌケテアシシ、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕當歸　オホゼリ　カハゼリ　ヤマゼリ　ムマゼリ 以上皆古名　今ハ通名ヨメノワン 肥前　一名女二天 輟耕錄　大芹 事物異名　夷靈芝 種杏仙方　地仙圖 靈仙雜記　僧庵草 郷藥本草
增、一名僧掩草、村家方　一品妃 香奩筆記、花ノ名、

當歸舶來ノモノ最上品ナリ、集解ニ謂トコロノ馬尾當歸是ナリ、蘆頭短クシテ細根長ク叢垂シ、馬尾ノ形ノ如クニシテ潤多ク、肉ハ紫赤色、味辛甘ニシテ香氣アリ、和產ハ大和及ビ山城ヨリ出ス、大和ヲ上品トス、潤多ク氣味モ舶來ノモノト同ジ、山城ヨリ出ルニ二品アリ、一品ハ湯ヲクヾラシ乾タルモノナリ、藥舖ニテコレヲ蒸ト稱ス、其實ハ蒸シ熱シタルニハ非ザルナリ、此物潤ナク氣味モ薄シ、藥ニ入ルヽニ良ナラズ、一品ハ根ヲ洗ヒタルマヽニテ乾タルモノナリ、藥舖ニテコレヲ生乾ト云フ、味甘シ、蒸ト稱スル方ヨリハ潤アリテ、藥用ニ良ナリ、然レドモ蛀ミ易クシテ貯ガタシ、故ニ藥舖ニ蒸當歸多シ、二州ニ栽ル處ノ草ハ、皆葉厚クシテ細長ク、牡蒿(オトコヨモギ)葉ノ如クナルモノ、三枝九葉或二十餘葉ヲ一葉トス、深綠色、光澤アリテ香氣多シ、苗高サ二三尺葉互生ス、夏月枝頭ニ小白花多ク簇リ開テ、傘ノ狀ヲナス、胡蘿蔔ノ花ニ似タリ、一種伊吹當歸アリ、江州伊吹山ノ自然生ナリ、古ハコレヲ越後當歸又丹後當歸ト呼ブ、然レ共今ハ此國々ヨリ出サズ、奥州仙臺

〔延喜式 典藥寮 三十七〕諸國進年料雜藥

尾張國卅六種、〇中略 柴胡、玄參各十二斤、 美濃國六十二種、〇中略 柴胡、〇中略 升麻各十斤、〇下略

〔武江產物志 藥草類〕臥山ノ產 委陵菜二輪同 柴胡 同上

〔新撰字鏡 草〕當歸 山〇世〇利〇

〔本草和名 八草〕當歸、一名乾歸、一名馬尾歸、多肉少枝、一名草歸、氣味薄、已上二名出陶景注、一名蠶頭當歸、麁細者、一名馬尾當歸、大實者、出二蘇敬注、一名山蘄、出崔豹古今注、一名山歸、出雜要訣、一名山蘄、出爾雅注、和名也末世利、一名宇〇末〇世〇利〇、一名加〇波〇佐〇久〇、

〔倭名類聚抄 二十 草〕當歸 本草云、當歸、和名夜末世里、一云、於保〇世〇里〇、又云宇馬世里、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕蘇注云、當歸苗有二種於內、一種似大葉芎藭、一種似細葉芎藭、惟莖葉卑下於芎藭也、細葉者名蠶頭當歸、大葉者名馬尾當歸、圖經云、春生苗、綠葉有三瓣、七八月開花似蒔蘿淺紫色、根黑黃色、爾雅、薜山蘄、廣雅、山蘄當歸也、郭注爾雅云、當歸今似蘄而麤大、釋文、蘄古芹字、圖經又云、當歸芹類也、在平地者名芹、生山中而麤大者名當歸也、李時珍曰、當歸本非芹類、特以花葉似芹、故得芹名、陳承曰、當歸治妊婦產後惡血上衝、倉卒取效、氣血昏亂者、服之卽定、能使氣血各有所歸、恐當歸之名必因此出也、李時珍又曰、古人娶妻爲嗣續也、當歸調血、爲女人要藥、有思夫之意、故有當歸之名、

〔下學集 下 草木〕當歸 山〇世〇利〇 同

〔書言字考節用集 六 生植〕當歸(タウキ) 當歸(ヤマゼリ) 白芹、文無、蠶頭、山芹 同本草

〔大和本草 六 草〕當歸 山州長池ノ邊ニ多クツクル、江州伊吹山ノ自然生ハ、根形小ナレドモ、乾シテ香氣甚シク油色ノ如シ、自然生ト園ニウフルト形味不同、自然生ハ形小シ、園ニウフレバ大也、凡藥ハ中華ノ產ヲ爲佳、然長池ノ當歸大和ノ地黃ハ唐ニマサレリト云、伊吹山ノ外ニモ高山處々ニアリ、園ニ栽ルニ風フキ通ゼザル所ニウフレバ、花開タコトマレナリ、當年生ズル地ヲカヘ、他

謬妄可笑、後人從之非是、

〔書言字考節用集 六生植〕柴胡　柴胡（サイコ）

〔藻鹽草 八草〕和名少々　茈胡 のせり、又のくさ、

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕柴胡　アマアカナ古名　ノゼリ同上　今ハ通名　一名蘆頭豹子錄驗群

山芹カ村家

鎌倉柴胡眞ナリ、圖集解ニ竹葉圭葉ト云モノ是ナリ、春未ダ薹立ザル時、地ニ叢生スル、葉ハ細長シ、コレヲ圭葉トシ、薹タチテ後ハ葉短シ、コレヲ竹葉トス、二物アルニ非ズト、炮炙全書ニ云ヘリ、然レドモ今國ニヨリテ濶葉ノ者一種アリ、是竹葉柴似ナリ、其尋常ノ者ハ韭葉柴胡ナリ、今ハ鎌倉ヨリ柴胡ヲ出ザレドモ、ソノ初鎌倉ヨリ出セシ故、舊ニ仍テ今モ鎌倉柴胡ト稱ス、今藥肆ニ鎌倉柴胡ト稱スルモノ僞雜多シ、用ユルニ堪ヘズ、ミシマ柴胡ト呼ブモノ佳ナリ、柴胡ハ京師四邊ニ產セズ、勢州、紀州、中國、四國、九州、ソノ餘諸州ニ生ズ、葉ハ麥門冬（ヤブラン）葉ニ似テ短クウスク堅條多シ、又稍濶クシテ箬竹（チマキザ）葉ニ似タル者アリ、皆莖ニ紫條アリ、秋ニ至テ長サ二三尺葉互生ス、形漸ク短小ニナリ、葉間ゴトニ枝叉ヲ分チ小花ヲ開ク、攢簇スルコト、芹ノ花ノ如ク黄色ニシテ、茴香花ノ形ノ如シ、實モ茴香ニ似テ小シ此實ヲマキテ生ジ易シ、又城州白川山ニ大葉ナルモノ一種アリ、大柴胡ト呼、又ホタルサウ同名アリトモ云フ、葉最大ニシテ紫蕚（ギボウシ）葉ノ如ク、長サ一尺餘、濶サ二三寸、秋ニ至リ粗莖ヲ起シ、高サ六七尺、枝ノ末ゴトニ花ヲ開ク、花實亦相同シテ微大ナリ、是集解ニ謂ユル南柴胡ニシテ最下品ナリ、舶來ノ者ハ唐ノ筆防風ノ形ノ如ク、蘆頭ニ毛アリ、今ハ稀ナリ、和ハ單蘆ニシテ細長ク、澀味ナキモノヲ眞トス、今藥舖ニ鎌倉柴胡ト稱スルモノハ、薩州肥後邊ヨリ出ス、數蘆連生シ澀味アルモノヲ雜ユ、是南柴胡根ニシテ下品ナリ、三島柴胡ト稱スルモノハ東國ヨリ出ス、此ニハ單蘆ナルモノ多シ、藥用ニ入ルベシ、

伊賀國廿三種、前胡八斤、　伊勢國五十種、前胡一斤四兩、○下略

〔出雲風土記意宇郡〕凡諸山野所在草木、○中略前胡、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　前胡　同白花平塚中里

〔佐渡志五物產〕前胡　方言イワウセリ　山中ニ多シ

〔本草和名六草〕茈胡、蘇敬注云、茈是古紫字也、一名地薰、一名山菜、一名茹草、葉一芸蒿白蒻、陶景注云、茈胡也、仁諝音□胡　茈薑、蕿茈、

茈草、蘇敬注云、紫胡是也、一名山梨、出兼名苑決、和名乃世利、一名波末阿加奈、

〔倭名類聚抄二十草〕茈胡　本名云、茈胡和名乃世利、一云波末安加奈、蘇敬注云、茈古紫字也、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陶注云、如前胡而强、引博物志云、芸蒿葉似邪蒿、春秋有白蒻、長四五寸、香美可食、圖經云、二月生苗甚香、莖青紫、葉似竹葉稍緊、亦有似斜蒿、亦有似麥門冬而短者、七月開黃花、生丹州、結青子、與他處者不類、根赤色、似前胡而强、蘆頭有赤毛、如鼠尾、獨窠、李時珍曰、北地所產者、亦如前胡而軟、今人謂之北紫胡是也、南土所產者不似前地、正如蒿根强硬、其苗有如韭葉者竹葉者、○中略本草和名阿末作波末、類聚名義抄、伊呂波字類抄並同、則作阿末者恐傳寫之誤、非源君之舊也、○中略按證類本草引蘇注又云、上林賦云、茈薑、及爾雅云、藐茈草、並作茈字、且此草根紫色、今太常用茈胡是也、又以木代糸相承呼爲茈胡、按說文云、紫帛青赤色、又云茈草也、徐鉉音並將此切、徐鍇曰、茈卽今染紫草也、漢書上林賦茈薑、顏師古注云、薑之息生者、連其株本、則紫色也、顏師古李善並茈音紫、爾雅藐茈草、郭璞注云、可以染紫、陸音子爾反、卽本草所載紫草也、故蘇氏云、茈古紫字、引上林賦爾雅及目驗、以證茈胡卽紫胡、又以唐時太常寫作茈胡爲是、則知證類本草載蘇注、作茈古柴字誤也、醫心方治鮮食方引廣利方、有紫胡、亦可以證、證類本草作柴字之誤、蘇氏又云、以木代糸、相承呼爲茈胡、言雖俗或作柴胡、然非柴薪字、其讀猶與茈胡同也、蓋茈胡以其根赤色、故得其名、廣韻茈薑、茈草、音紫、茈胡音柴、誤分爲二音、李時珍遂言茈胡嫩則可茹、老則采而爲柴、以蘇說爲殊欠明、

ひたし物、魚鳥の汁、煮物などに加へて、ことに能ものなり、子よくなりて生やすく、程なく多くなる物なり、

〔藥經太素下〕三。葉。芹。

氣ヲ下ト痰ヲ減ニハ、酒ニ浸シテ用、小兒夜啼ニハ、蜜ヲヌリテ炮シテ用、總ジテハ白水ニ浸シテ、節トケ、ミヲ去テ、對焙用、傷寒ノ風熱ヲ治ス、下氣消痰安胎止嗽治兒疳、又懷妊ヲ安ス、

〔大草家料理書〕一肥生鳥の事、作候て薄酒を懸て、ふくさみそをこくして、かへらかして入候也、但みつばせりを湯にをしても吉、

〔本草和名八草〕前胡、和名宇。字作ノ宇、蓋是、曾心方 多。奈。一名乃。世。利。

〔書言字考節用集六生植〕前胡ウタナ 前胡ヒツバタナ

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕前胡 コ。マ。ゼ。リ。 ノ。ゼ。リ。 タ。ニ。ゼ。リ。 ミ。ツ。バ。ク。サ。延喜式 ウ。タ。ナ。ム。
マ。ゼ。リ。 ヤ。マ。ゼ。リ。 ノ。ダ。ケ。筑前 今ハ通名 一名西天蔓綱目拾遺 蜘香菜鄉藥本草 全胡痰火點雪 射香菜村家方

向陽ノ山野ニ多ク生ズ、初テ生ズルモノハ、只三葉ナル故ニ、ミツバグサト云、長ズルニ隨ヒ數岐ヲ分チ大ニナリ、大抵二活ノ葉ニ類シテ同ジカラズ、莖ヲ起スモノハ高サ七八尺葉互生ス、秋ニ至リ枝端ニ花ヲ開ク、胡蘿蔔ノ如ク傘ヲ成テ簇生ス、紫黑色又白色ナル者アリ、一種細。葉。ノ。前。胡。アリ、和州ニ多シ、葉細長ク岐多クシテ、當歸葉ノ如シ、花實ノ形狀ハ異ナラズ、市中ニ舶來ノ者稀ニアリ、和ハ和州ヨリ多ク出ス、又田。舍。前。胡。ト呼モノハ黑色ニシテ下品ナリ、又若州及ビ江州ノ朽木葛川ヨリ出スモノハ、堅實ニシテ香味アリ、甚下品ナリ、凡テ陳久ナルモノハ惡シ、

〔藥經太素下〕前胡　大冷味苦　西天蔓トモ云

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

芹三千三百九十六束

〔曾根好忠集〕正月中

ね芹摘春の澤田におり立て衣のすそのぬれぬ日ぞなき

〔新撰六帖六〕せり　　知家

いたづらにある、そのふのはたけせり侘しげにても有世成けり

〔饅頭屋本節用集草木〕芙蓉葉(ミツバゼリ)

〔書言字考節用集六生植〕蜀葵野(ミツバゼリ)

〔古名録二十二水草〕みつばせり(大草家料理書)　漢名未詳

〔大和本草五菜蔬〕野蜀葵(ミツバゼリ)　和名ミツバゼリ、救荒本草ニノセタリ、稲若水以為三葉芹、春宿根ヨリ生ズ、茎ハ芹ノ如ニシテ大ナリ、香味モ亦似タリ、春月茎ヲトリ葉ヲ去、煮テ豆油ニ和シテ食フ、香味美シ、又生ニテ生魚ノ膾ニ加フ、無毒、脾胃無害益於人、佳蔬トス、又ツケモノトス、夏月茎モ葉モ食フベシ、嫩葉ハ飯ニ加ヘ食ス、

〔食物知新二菜部〕滲芹(弘景)

釋名、三葉芹、(ミツバゼリ)(和名)三葉攅生一處、氣微似芹菜、故名之、○中略

辨疑、或曰、近時調釋家、以野蜀葵當于三葉芹、吾子不取何哉、予(○神田玄泉)曰、野蜀葵非可為三葉芹者、可見救荒本草云、野蜀葵生荒野中、就地叢生、苗高五寸許、葉似葛勒子秧葉而厚大、又似地牡丹葉、味辣云々、蓋三葉芹不似葛勒子、味亦不辣、故不取之也、

〔農業全書五山野菜〕野蜀葵(みつばぜり)

三葉芹うへ様、芹に同じ、水濕の邊り、樹下かきのもと、其外陰濕の肥たる所に、畦作りしてうへたるは猶よし、草かゞめ手入を加ふれば、一入さかへ、料理に用ひやはらかにして、風味ある物也、餡

生るには甚勝れり、朝鮮には肥たる田に多く作りをき、鎌にて刈取、常に菜に用ゆると云、

〔宜禁本草乾五菜〕水斳　甘平無毒、置酒醬中香美、和醋食須生喫、食療寒令人肥健、主女子赤沃、止血養精、保血脈、益氣、令人肥健、嗜食殺藥毒、莖葉擣取汁、去小兒暴熱、治大人酒後熱毒鼻塞、利二腸、葉根寒、子辛温、養神益力、治煩渴、療崩中帶下、治五種黃病、生食、煮食、並得、三月八月勿食芹、恐病蛟龍瘕、

〔延喜式三十九内膳〕供奉雜菜

日別一斗、○中略　芹四把、准四升、自正月迄六月、

漬年料雜菜

芹十石○中略料鹽八斗　右漬春菜料

〔公事根源正月〕供若菜　上子日

若菜を十二種供事あり、其くさ〴〵は、若な、はこべら、葺せり、蕨、なづな、あふひ、芡蓬、水蓼、水雲、松とみえたり、○中略　尋常は若菜は七種の物也、薺、はこべら、芹、菁、御形、すゞしろ、佛の座などなり、

〔日本書紀二十七天智〕十年十二月乙丑、天皇崩于近江宮、癸酉、殯于新宮、于時童謡曰、美曳之弩能、曳之弩能阿喩、阿喩舉曾播、施麻倍母曳岐、愛倶流之衞、奈疑能母縢、制利乃母縢、阿例播倶流之衞、

〔萬葉集二十〕天平元年班田之時、使葛城王從山背國贈陘○陘恐薩誤妙觀命婦等所歌一首、副芹子褁、

安可禰佐須、比流波多多婢氏、奴婆多麻乃、欲流乃伊刀末仁、都賣流芹子許禮、

陘妙觀命婦報贈歌一首

麻須良乎等、於毛敝流母能乎、多知波吉氏、可爾波乃多爲爾、世理曾都美家流、

右二首、左大臣讀之云爾、左大臣是葛城王、後賜橘姓也、

〔出雲風土記意宇郡〕津間抜池、周二里卅步、有鳧鴨芹菜、

〔續修東大寺正倉院文書三十二〕造物所作物帳斷簡年紀不詳、接成卷文書四十五卷所收天平六年遣佛所作物帳中卷斷簡、恐與此同物也、

〔本朝食鑑 三菜〕芹（訓世利）

集解、芹有水旱及赤白二種、水芹生于水中、而根多、旱芹生于平地、而根少、赤芹味惡不用、白芹味美而常用、處處陂澤田川多有、或水田水圃溢養之、而言四時俱有、二三月生苗、其相對如芎藭、其莖有節稜而中空、其根細長而白肥者、如索餅、而柔脆過尺、最可賞美之、其氣亦芬芳可愛之、五月開細白花、如蛇床花、秋冬至春初可食根、春後夏月至秋初可食莖葉、今世人言有毒者、蜒蚰留卵、蛇蝮蜥蜴留溺糞、以染于葉莖、人不能知之、而過遭毒、故食芹者必苦可洗邪、爾本邦自古爲七種菜之一、而正月七日作粥嘗之、以禳一歲之邪氣、歌人亦詠之、稱根芹者、以其根潔白芳美可愛也、必大謂○平按、芹者菫也、菫菜亦芹屬、

〔大和本草 五菜蔬〕芹　國中ノ陸ニ生ジタルハ、水ニ生ズルニマサレリ、本草ニシルセリ、然レドモ泥中ニ生ジタ白根長キヲヨシトス（略）○中一種柳芹ト云アリ、味ヨシ、葉ノ形モ常ノ芹ヨリウルハシ、紅毛芹アリ、根似羊蹄根、其色赤黄、山芹、山谷ニ生ズ、形水芹ニ似タリ、葉長ク厚ク堅シ、傍ニ小剋アリ、イラアリ、根長白シ、香味ハ常ノ芹ニ似タリ、大ナリ、

〔延喜式 三十九内膳〕耕種園圃

營芹一段、苗五石、總單功卅四人、耕地二遍、把犂一人、取牛一人、牛一頭、料理平和一人、養百廿擔、運單功廿人、殖功六人、二月採苗功十人、刈功五人、

〔農業全書 五山野菜〕芹

せりをうゆるは、根を取て、濕地に畦作りしうへ、常に水濕の絶ざるやうにすべし、地かはけばそだゝず、又濕ある圃に作りて、さかへ肥たるは、殊に甜く牙脆く、口中取分快し、澤などに生るは、葉の間に蟲ありて、見えかぬるゆへ、若蟲の子を食すれば毒なりと、本草に記せり、取分圃の濕地に筋うへにしたるは刈て食し、泥水をさい〳〵そゝげば、跡よりやがて生ず、味も見かけも、野澤に

獨活產地

〔食物知新首〕日城諸國名產
栞蔬　丹波有土、丹州越前山羌活、越前作、有土、武江

〔和漢三才圖會九十二末山草〕獨活(うど)○中略
備中平福之產佳、藝州廣島者次ㇾ之、羽州最上獨活芽、有ニ長二三尺者一、太柔可ㇾ食、

〔播磨風土記賀毛郡〕室原山、屛風如ㇾ室、故曰ニ室原一、生ニ人參獨活一○中略○下略、

芹

〔本草和名十八菜〕水斳、仁諝正作ㇾ芹、音勤、一名水英、渣斳、仁諝音側加反、出ニ陶景注一、水英一名水勤、出ニ釋藥性一、一名楚葵、出ニ兼名苑一、和名世利○、

〔倭名類聚抄十七菜〕芹　陸詞切韻云、芹音勤、和名世里、菜生ニ水中一也、本草云、水芹味甘平無毒、一名水英、

〔日本釋名下草〕芹　せまり也、其生ずる事、一所にしげくせまり合もの也、

〔東雅十三穀蔬〕芹セリ　義不詳、倭名鈔に本草を引て、水芹一名水英、セリといふ、セリをもて呼びし物も少からず、茈胡をノセリと云ひ、一にアマアカナといひ、當歸をヤマセリとも、オホセリとも、ウマセリとも云ひ、莘塵一にはハマセリといふ如き是也、

〔倭訓栞前編十三〕せり○中略　芹を訓ず、神代紀にそりと見えたり、此草一所にせり合て生ずるをもて名とせる也、川せりともいふ、水芹也、大せりは渣芹也、三葉芹は野蜀葵也といへり、歌人根せりと稱するは、根の實すべきをもて也、はたけせりふかせりは、新六帖に見ゆ、はたけせり又野せりといふは早芹也、黃花のものを毛芹とす、

〔藻鹽草八草〕芹　せりの異名也、又云、如蕃とかきてゑことよめり、閑事花すはうにさく草の水邊にある也、又ゑぐ云、人のくふ草也といへり、又僞類仲實もとへ、なかみ河うきつにはゆるゑごのうれなつみしなへよくもそこのみためぞ、返し、心ざしふかき谷のつみためていしみゆすりてあらふねせりか、又いしくみは實論には、矢田とかく、蘭矢田と云個也、但萱とよむべし、別の字と云々、からたみ簀、しだみ鱧、あしか習體の物也と云々、此兩首の様も、ゑこは芹同か、
ね芹　ふか芹　野芹　根白草

に芽を切取べし、尤早く芽を取たる跡へは、又菌のごとく芥を懸置ば、又芽を生るなり、

〔藥經太素上〕獨活　微溫味苦甘
白水ニ一日付テ、切タ干、又剉炒、傷寒、傷風、肺氣、中風、熱ノ目ヲ治、大瘡ニハ霜ニシテ以髮油付、風ニ破ラレ、百節ノ痛ヲ治、頸背ノチマリテ延ガタキニ吉、又疵ノ痛ヲ止、眼赤、頭疼、并水氣用之、各有神功云、

羌活　微溫味苦甘
土氣ヲ能洗テ細髮ヲ去、白水ニ付タ剉炒、肺氣、頭風、中風ヲ治ス、散肌表八風之邪、利周身百節之痛、排巨陽肉腐之疽、除新舊風溫之證、二八月ニ取之、只時ハ取ザル也、

〔宜禁本草乾中草〕獨活　苦甘平微溫、主金瘡痛、風寒所擊、賊風、百節痛、齒疼、頰腫、多痒、血癩、頭旋、目赤痛、

〔延喜式典藥三十七〕元日御藥
白散一劑、度嶂散一劑、屠蘇一劑、千瘡萬病膏一劑、〇中略所須、〇中略獨活一兩、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥
大和國卅八種、〇中略獨活廿五斤、攝津國卅四種、獨活、藺蘆、各五斤、伊賀國廿三種、〇中略獨活、苦參、各廿斤、伊勢國五十種、〇中略獨活卅五斤、

〔年中恒例記〕二月廿四日
うど、沼田進上之、日不定、

〔官中秘策二年中行中〕年中諸大名獻上物之事
十月寒中獻上此月ニ入ル
一蕁麥芽獨活　本多伊勢守、

活ト呼ブ、皆用ルニタヘズ、舶來本手ノ羌活、一名竹ノ節手ノ羌活ト呼ブモノ眞物ナリ、根ニ節アリ、又橫文多ク、紫黑色ニシテ香氣アリ、味辛シ、然レドモ久シク渡ラズ、近年他ノ藥品中ヨリ揀出スモノアレドモ少シ、新渡獨活中ニモ少ハ混入セリ、寛政未年ニ渡ル羌活ハ、眞ノ竹節手ナリ、○中略

土。當。歸。土、救荒本草ニ杜ニ作ル、 ウド シカ筑前 ドゼン豫州 ○中略

此ニ其形狀ヲ闕ク、獨活ノ集解ニ根ノ形狀ヲ說キ、救荒本草ニ略苗ノ形狀ヲ載スルニ據リテ考レバ、ウドニ充ルヲ穩トスベシ、

增、ウドハ羌活ノ一種ナリ、土當歸ハハマウド、一名ハマアシタバトモ云、海濱ノ砂地ニ生ズ、春苗ヲ生ズ、葉ノ形大抵シヽウドニ似テ、深綠色ニシテ厚ク硬シ、面背共ニ光澤アリ、莖ニ數條アリテ紫色ヲ帶ブ、ソノ趣當歸ニ能ク似タリ、實生ヨリ三年ヲ經テ、夏月臺ヲ抽クコト六七尺、葉莖ニ互生シ、秋ニ至テ莖頂ニ枝ヲ分チ、小白花ヲ攅生シテ傘狀ヲナス、花謝シテ後實ヲ結ブコト、亦獨活ノ如シ、故ニ土獨活ノ名アリ、又鹹草ニモ似タリ、故ニハマアシタバト云、三年ノ後苗根共ニ枯ル、

獨活栽培

〔農業全書四菜〕獨活

三四月芽立を生ず、貴賤あまねく賞味する物なり、里遠き山野に生ず、多より土中なる芽を取て食品とす、されど時ならざるを食ふは、よからぬ事にや、山野の空地多き所にては、地をひらきよくこなし、其根を取、わけて多くうゆべし、其地味よき所にては、甚早く生へ、殊に味よし、貴賤皆このみ用ゆるものなれば、都近き所、又諸國の國都など、大邑ある近方にて、山野の餘地あらば、多く作り立て、市中に出すべし、

〔草木育種下菜〕うど　山の荒地を三四尺も掘、内を平にして其低處へ植付、冬の始より塵芥の内にて、木の枝竹等を拾捨、細き芥ばかりを、段々厚く覆ひ置、芽出る時、右の芥を取除、根へさわらぬ樣

苗、此俗稱兎字止、二三月生、苗似蘆筍、有節有短毛、上紫下碧黃白、漸長而苗綠黃、根白有紫小點、從其兎字止至長苗、可爲蔬茹、既生葉如靑麻、高四五尺、或七八尺至丈餘、此時不可食也、六月開花作叢、或黃或紫、結實時葉黃者、亦有此石上所生也、秋末下種、然今大抵皆采宿根而栽之、近時有春初生苗者、至自駿陽、駿地在江之南、而土地和暖、故先期而生、苗生實生花乎、

本邦以宇土爲獨活、今比于始上中華之獨活、則難爲是、此經年乾枯之故歟、羌活今本邦山中處處所生之獨子字土實、

〔本朝食鑑 三華和異同〕獨活 假借

〔重修本草綱目啓蒙 八山草〕獨活。シヽウド　イヌウド　ウマウド〇城州貴船〇中略

山中ニ多生ズ、苗大抵土當歸ニ似リ、葉モ亦相似テ異アリ、食用ニ中ラズ、莖葉ニ毛アリテ糙澀ス、夏以後薹ヲ起シ、葉互生ス、秋ニ至リ高サ六七尺、枝端ゴトニ小白花ヲ開ク、數百攢簇シテ傘蓋ノ如シ、後實ヲ結ブ、並ニ大葉ノ前胡ニ異ナラズ、其根白色臭氣烈シテ微香アリ、暴乾セバ内淡白色ニシテ、外皮淺黑色、市人呼デ眞羌活トスル者ハ非ナリ、是獨活ノ一種下品ナル者ナリ、ソノ氣味最猛烈、病人厭ヒテ服スルコト能ハザル者多ケレドモ代用ユベシ、獨羌二活ノ說、古來紛紛タリ、頌ハ二物一類トシ、機ハ本非二物ト云、時珍ハ一類二種トス、士鐸モ兩種トス、今此ニ從フ、和名鈔ニ獨活ヲウド、訓ズ、ソノ後正保年中ヨリ、ウドノ宿根ヲ獨活トシ、或ハウドノ全根ヲ獨活トス、皆非ナリ、古渡ハ獨活羌活ヲ一器ニ混入ス、長崎ニテ擇分チ、本手、馬皮手、前胡手ノ三品トス、總テ羌活ト稱シテ四方ニ貨ス、ソノ本手ノ羌活ト稱スルモノハ、眞ノ羌活ナリ、其前胡手ト稱スルモノハ、輕虛ニシテ黃色味辛シ、是眞ノ獨活ナリト云傳レドモ、ソノ後久ク渡ラズ、〇中略

羌活。ウドモドキ　ウドタラシ〇中略

古ヨリ土當歸ノ嫩根紫色ナル者ヲ羌活トス、今藥舖ニウド羌活ト呼ビ、シヽウドノ根ヲ眞ノ羌

獨活名稱

久シキ者ハ、其藤最大ニシテ木ノ如ク或ハ直立ス、故ニキブタト呼ブ、葉形變ジテ一尖ニシテ狹クナリ、初ノ葉トハ形甚異ナリ、夏月葉間ニ花ヲ生ズ、小ニシテ白シ、數十簇生ス、後圓子ヲ結ブ、大サ二分許、熟シテ黑色中ニ紫汁アリ、

〔武江產物志 藥草〕隨地有之類　常春藤

〔本草和名 六草〕獨活（陶景注云、不レ爲レ風搖、故名二獨活一、）一名羌活、一名羌靑、一名護羌使者、一名胡王使者、一名獨搖草、（陶景注云、此草得レ風不レ搖、無レ風自搖、）一名藢藖、（出二雜要訣名苑一）一名口花使者、（出二雜要訣一）和名宇。止。一名都。知。多。良。

〔倭名類聚抄 二十草〕獨活　本草云、獨活一名獨搖草、（和名宇止、一云豆知多良、）陶隱居注云、無レ風自搖、故以名レ之、

〔類聚名義抄 八艸〕獨搖草（ウド、一云ツチタラ、）

〔伊呂波字類抄 宇植物 附雜物具〕獨活（ウド、ツチタラ、ウドリノアシ、）

〔下學集 下飲食〕烏頭布（ウドノ）　〔同 下草木〕羌活（キヤウクワツ）　獨活（ドククワツ ウド）又云二獨搖草一、此草無レ風時亦獨自搖、故云レ爾、末云二羌活一、蘆頭云二獨活一也、

〔易林本節用集 宇草木〕獨活（ウド）

〔物類稱呼 三生植〕獨活うど　西國にてしかといふ、西國にては、土中に有を獨活（とつくわつ）といひ、二三寸地上に生じたるをうどといふ、尺以上になりたる物をしかと呼、阿部氏云、松前千砂野の濱より眞の獨活を出す、土人これをさいきと云、京嵐山にも有、しゝうど、又いぬうどといふ、

〔倭訓栞 中編三 宇〕うど　新撰字鏡、倭名鈔に、獨活をよめり、うどめは其芽也、西國に土中にあるを獨活と呼也、地上に生じたるをうどといひ、尺以上のものをしかと呼り、古へ醍醐の產を貢せり、されど庭訓に烏頭布と書たるをもて、黑き和布也ともいへり、しゝうどは羌活也、うどもどきともいふ、をはりうど枕草紙に見ゆ、今も名產とせり、

〔本朝食鑑 三柔滑〕獨活（訓二宇土一、和名豆知多良、）

集解、獨活冬采レ根藏二甕中之土一、或塗レ土藏二于桶中一、其根作レ塊、上尖下蹲而有レ脂、冬至二春初一、根之尖處有二紫

堀出すなり、

〔出雲風土記 仁多郡〕凡諸山所在草木、○中略 人參、

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十一年十二月戊辰、渤海使己珍蒙等拜朝、上其王啓幷方物、其詞曰、○中略 附大虫皮羆皮各七張、豹皮六張、人參三十斤、蜜三斛進上、至彼請撿領、

〔七十一番歌合〕六十番 右 藥うり

御藥なにか御用候、にんじん、かんざう、けいしん候、ちんも候、

〔武江產物志 藥草〕志村邊ノ產 志村人參 野新田ニモ ムカゴ人參 同上 鼠山ノ產 ムカゴニンジン 下田

〔甲斐國志 百二十三 產物及製造〕人參 ○中略 近時明和二年春、逸見西井出村農兵衛云者、一橋殿ヨリ御種人參種六十二粒賜ハリ、八岳中央ノ風穴ヲ運ビ、庭中ニ栽培植之、頗ル風土佳品ヲ出セリ、獻上スルコト十餘年ニシテ、初所賜種子ヲ返納セシカバ、猶又百二十粒、永久ニ賜ヒシト云、

〔紀伊續風土記 物產三 本草〕人參

享保年中、在田郡山保田莊山中に、朝鮮種を培養す、今は絶ゆ、人家には稀に栽る者あり、又直根圓根竹節根の三品は、牟婁日高在田三郡の諸深山、雜木多き陰地に自生あり、

○按ズルニ、人參ノ事ハ、猶ホ方技部藥方篇ニ載ス、參看スベシ、

〔多識編 二 蔓草〕常春藤、今案於。曾。末。左。岐、異名土鼓藤、龍鱗薜荔

〔重修本草綱目啓蒙 十五 蔓草〕常春藤 カ。ベ。グ。サ。古名 イ。ツ。マ。デ。グ。サ。同上 キ。ヅ。タ。 フ。ユ。ヅ。タ。 カ。ン。ヅ。タ。勢州 一名長春藤 花鏡

藤蔓長ク延フ、葉互生、形圓扁ニシテ尖リアリ、或ハ三尖五七尖ナルモアリ、其五七尖ナル者ハモ。ミ。ヂ。カ。ヅ。ラ。ト呼ブ、皆冬枯レズ、深綠色ニシテ厚シ、其葉邊紅白相雜ル者ヲニ。シ。キ。ヅ。タ。ト呼ブ、年

瘠する地は、下野國都賀郡日光山、信濃國など皆白めなる砂地にてよく出來るなり、植る所より南の方に並木ありて、南風の塵氣有を防、北風の陰氣を入べし、故に海邊にては長せず、植るには竹の簀をあみ、土中へ埋、鼹鼠を防べし、多作には鼹鼠を狩べし、注は上巻に見へたり實ばへの内は搭棚を低作、北を高、南を低、杉皮にて葺、椋楕の如く拵、日よ大雨を除るなり、人參三四歳に至ば、葦簾或女竹を編て平にかけ置べし、雨滴人參にかゝりても苦からず、却て勢氣を益ことあり、肥は荏の實を蒔芽を生じたる時墾、又荏の莖を土へ切まぜたるもよし、又夏の内人糞を土へまぜ置、寒にいてさせたるを、根廻へ切まぜ置べし、植付たる所へ直に肥を用れば、蘆頭腐もの也、植替るには、右の肥土をまぜて植べし肥過分れば種々の蟲を生ずる也、人參は夏實のり、赤くなりたる時採て土にまぜ、土中に埋置、十月に至て植る時、右の荏を切まぜたる土を入、實を植べし、初より人糞を用るは惡し、二年めより少づゝ土へまぜ用べし、

〔渡邊幸庵對話〕一人參之事、人形共、トサム共云、是本人參也、總て人參の生ずる所十七ケ所あり、其内人形人參の出生は、第一朝鮮、第二中華に在、朝鮮にてはトサムといふ處也、三十里四方岩石の山にて、草木不生、皆岩石の間に、自然にごみはこりの溜り申處に出生す、人形と申は人の首の樣に上太り、夫より左右の手左右の足の如く枝付て、人の形の如く也、故に人參と號す也、麓の里をトサムといふ、第二中華の人參も岩石の中に生ず、其外は土に生る也、此土に生るは人形不備不具に候、枝の付やう全體にあらず、是も人參にして功大に劣れり、故にあなたにて人形トサムを用て、土に生る人參を第一日本へ渡す也、夫共に昔は人形も渡りし也、當時稀也といふ、同じ人參ながら、人形は大に違故に、トサム人形は自國にて用ひ、他國へは土に生るを渡す也、依之古は人參の煎粕を又煎じ、病氣も無之者呑て亂心せし者多し、是氣の德厚き故也、トサムにて彼岩石の中に生ずる所、少葉立延候得者、其葉を鶏喰候故に、出生少し青み見ゆると、斧にて岩石を打碎き

種類ニ一黒ヲ點シ、相思子（トウアヅキ）ノ如キ者アリ又莖上數枝ヲ分ツモノアリ、實ヲ結ブコト至テ繁腐、觀ルニ堪タリ、ソノ實地ニ落チ、春ニ至リ苗ヲ生ズ、一莖三葉、次年ハ一莖五葉、三年ニハ二椏五葉、四年ニ至テ三椏五葉トナル、然レドモ肥地ニ種ルモノハ初年一莖三葉、次年二椏三五葉、三年ニ至リテ三椏五葉トナル、三椏ノ後ハ皆花實ヲ生ズ、其葉大ナルモノハ尺餘ニ及ブ、鋸歯ニ粗密アリ、色ニ淺深アリ、體ニ厚薄澤濇アリ、皆生ズルトコロノ地ニ因テ異ナリ、讃州山中ニ生ズル者ハ、葉細長ニシテ鋸歯最大ナリ、コレヲ細葉ノ人參ト云、俱ニ根ニ横圓直ノ分アリ、横根ノモノハ竹鞭ノ如クシテ節多シ、竹節人參トモ節人參トモ云、圓根ノ者ハ珠ノ如シ、タマニンジントモ、カブラトモ、カイルコ手トモ云、並ニ皆白色ニシテ臊氣アリ、味至テ苦シ、用テ蟲ヲ殺シ、積聚ヲ治ス、直根ノ者ハ形狀韓參ニ似テ鬚少ク、味微甘、又人形ノ者モアリ、京師ノ山中ニ生ズル者ハ、横圓ノ二品ノミ、紀州熊野、和州芳野ニ生ズル者ハ、三品雜リ生ズ、薩州、加州白山、信州松本、木曾、豆州等ニモ直根ヲ出ス、已上ノ和人參皆形狀遼參ニ同ケレドモ、其性最下品、補藥トナスベカラズ、秘傳花鏡ニ、土參ノ條ヲ載ス、唐山ニテモ此草ヲ栽ヘテ、紅實ヲ玩賞スト見ヘタリ、

竹節參ノ鬚ハ微ク甘味アリ、藥用ニ入ルベシ、薩摩ノベシテ乾シタルヲカモロ手ト云、日光ニンロン カ言カモロ 信濃ノ產ヲ上品トス、但馬丹波ノ產ハ苦味多クシテ下品ナリ、

朝鮮種ヲ栽ルヲ御種人參ト云フ、形狀ハ和人參ト同ジクシテ皆直根ナリ、其異ナル所ハ、實ノ形正圓ナラズシテ、早ク熟スルニ在リ、コレヲ劈ケバ、一實ノ內ニ二三子並ビアリ、故ニ其形扁シ、六月實紅熟スル時、下種スレバ生ジヤスシ、外皮乾燥スレバ生ジ難シ、

〔草木育種〕下品人參本草　朝鮮種人參なり、植る土地は山にて高き所よし、白めなる砂地に尤宜、人參耕作記、又物類品隲に黒ぼくに植ると云、この黒ぼくは今云黒ぼく土とは別の物歟、今云處の黒ぼくに植る時は根腐易し、赤土に白めなる砂を等分くらいにまぜたる土に植べし、人參に相

〔和漢三才圖會　九十二本 山草〕和人參（わにんじん）○中略

按人參往昔本朝有之、而中古不用之、出於薩摩者名小人參、一名節（フシ）人參、近年得唐人參種、多植圖、攝州平野庄多出之、二月下種、初生一莖三葉、及長數椏皆三葉、其葉厚潤有深刻、而無筋、略似銀杏葉、毎八月中心抽一莖、高三四尺、開細白花、如葺似蘹香及胡蘿蔔花、秋後結子細小、亦似胡蘿蔔、霜後枯宿根亦能生也、九月採根、如胡蘿蔔、而淡白色、以甘草汁蒸乾、則能類人參、但頭無横文、蘆頭不括縮耳、功能亦不及、故用者鮮、

和州吉野山中有自然生者、又有得異朝鮮參種植者、並其葉根與朝鮮不異、然甚希而未足賣買、

〔重修本草綱目啓蒙　七 山草〕人參

和人參　サツマニンジン　ロシノニンジン　トチニンジン　トチノキニンジン　トチバニンジン　ゴヤウニンジン　ウコギニンジン　テンシゴヤウサウ　ゴヤウサウ〈城州貴船〉　コニンジン〈駿毛同名〉　クマモトニンジン〈肥後〉　ヤマニンジン〈日光〉　ニツカウニンジン〈下野〉　シマバラニンジン〈肥前〉　シマニンジン〈津軽〉　ス、クシニンジン〈南部〉　カモジニンジン〈會津、駿トモニ連子乾シメル〉ナ云、

延喜典藥寮式諸國貢藥目次中ニ、攝津、伊勢、陸奥、若狹、丹波、美作、太宰府、伊豫、越前、甲斐トアリ、貝原翁ノ說ニハ、沙參ナラント云ヘリ、此說近シ、和人參ノ出タルハ、稻松岡兩先生ヨリ以後ノ事也、人參ニ限ラズ、今詳ナラザル藥品、式ニ載ルモノ多シ、和人參ハ今諸國ニ產ス、皆深山幽谷雜木多キ陰地ニ生ズ、其初薩摩ヨリ出ヅ、故ニ總ジテ薩摩人參ト呼ブ、又俗ニ三椏五葉ト云、一莖直上シ、梢ニ三枝ヲ分チ、枝ゴトニ五葉ヲ生ジテ、五加葉ノ如ク皆鋸齒アリ、然レドモ三椏五葉ニ限ラズ、年久キモノハ六七椏八九葉ニ至ルモノアリ、又層椏ナル者アリ、並ニ椏中別ニ一莖ヲ出シ、其梢ニ細小花ヲ簇生ス、五瓣ニシテ淡綠色、中ニ白蕊アリ、亦五加花ニ似タリ、又紫藥ナル者アリ、コレヲ紫花人參ト云、城州岩屋ニアリ、花後實ヲ結ブ、形圓カニシテ綠色、秋冬ニ至リテ紅熟ス、又一

〔箋注倭名類聚抄 十〕説文、人薓藥草、出上黨山谷、太平御覽引呉普云、人參三月生、葉小鋭黒、莖有毛、根有頭足手面目如人、本草陶注云、人參生一莖直上、四五相對生、花紫色、高麗人作人參讃曰、三椏五葉、背陽向陰、欲來求我、椵樹相尋、椵樹葉似桐甚大、陰廣則多生陰地、圖經云、其根形狀如防風而潤實、春生苗、多於深山中背陰近椵漆下濕潤處、初生小者三四寸許、一椏五葉、四五年後生兩椏五葉、未有花莖、至十年後生三椏、年深者生四椏、各五葉、中心生一莖、俗名百尺杵、三月四月有花、細小如粟、蘂如絲、紫白色、秋後結子、或七八枚、如大豆、生青熟紅、自落、根如人形者神、

〔下學集 下草木〕人參(ニンジン)

〔鹽尻 三〕一人參ヲカノニケクサト云フハ、鹿ノニゲテユク歟、鹿コトニ好ミクフ故ニ、カノニケクサトハ云フ、ニケトハニレト云フ事也、ニレカムト云ヒテ、ノドヨリモノヲフキイダシテカム也、鹿ノ齝(ニレ)草ト云フナリ、ニケト云フベキヲ人アヤマリテニレトハ云フナリ、牛ノニケヲバ齝トカク、羊ノニケヲバ齸ト書ク、物ニ隨テ字モカハルナルベシ、

〔大和本草 六〕人參 參字本薓或省作蓡、有如人形手足者故人參ト云、朝鮮ノ產ヲ爲上品、中夏ニモ用之、○中略 唐人參ハ長崎ニ來ル者朝鮮ニ次ゲリ、ヒゲ人參ハ人參ノヒゲナリ、是又自異邦來ル、非本邦ノ產、堅實ナル故大人參ノ性淡キニハマサル、節人參ト云モノアリ、葉ハ芹ニ似タリ、根ニ節アリヒゲ多シ、山中陰濕ノ地ニ生ズ、其鬚ヲヒゲ人參ト云、節人參ハ其大ナル根ナリ、藥肆ニ其根及鬚ヲウル、味苦シテ氣ヲ泄ス、人參ノ氣味ニ似ズ不可用、草醫是ヲ以人參ニ代ヘ用ユ甚非也、又近年世上ニセリ人參トテ、芹ニ似タル草ヲウフ、味モ芹ニ似タリ、ムカゴノ如クナル、其根味甘シ、未詳其性、本邦ノ醫人參ノ價貴キ故代ヘ用ル物多シト、トキ人參、ツル人參此二種ハ砂參ナリ、人參ニ代ヘ用テ驗無大補、然レドモ害ナシ、○中略 延喜式日本諸州ノ土產ニ人參アリ、是亦砂參ヲ以テ人參トセシナルベシ、

人參

〔延喜式三十九内膳〕供御月料

搗橘子、菱子、各二斗二升五合、〇中略 右月料、小月減卅分之一、

〔日本書紀十應神〕十三年、天皇知大鷦鷯尊感髮長媛而欲配、〇中略 大鷦鷯尊蒙御歌、便知得賜髮長媛而大悅之、報歌曰、〇中略 委愚比菟區、伽破摩多曳能、比辭餓羅能、佐辭鷄區辭羅珥、〇下略

〔萬葉集七雜歌〕羈旅作

君爲、浮沼池、菱採、我染袖、沾在哉、

右四首、柿本朝臣人麻呂之歌集出、

〔枕草子七〕おそろしきもの　ひし

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之體、心事難申盡候、〇中略 時以後菓子者、〇中略 菱、

〔尺素往來〕茶子者、〇中略 刺薇、菱、

〔看聞日記〕永享四年九月廿三日、上樣御留守事、一獻經一、菱一合、播二荷、自南御方進之、〇中略 仙洞へ菱一合進之、

〔毛吹草三〕河內　菱　三河　岩堀菱此菱角二ツアリ、味勝レリ、　若狹　蒺藜子

〔國花萬葉記八參河〕參州國內中名物之部

岩堀菱此ひし角二つあり

〔新撰字鏡草〕人參久万乃伊、有人云、加乃爾介久佐、

〔本草和名六草〕人參一名人銜、〇銜恐衡誤 一名鬼蓋、一名神草、一名人微、一名土精、一名血參、一名黃糸、〇糸恐參誤 一名玉精、已上三名出釋藥性 人參者藥精也、出范注方 一名人徵、出雜要訣 和名加乃爾介久佐、一名爾己太、一名久末乃以、

〔倭名類聚抄二十草〕人參　本草云、人參一名神草、和名加乃仁介久佐、一名久末乃伊、

リテ人ヲ刺ス、初緑色秋ニ至リ熟スレバ黒色、煮テ白肉ヲ採リ食フ、コレヲユデビシト云フ、時珍ノ說ニ、野菱家菱ノ別アリ、形小ナル者ハ野菱ナリ、形大ナル者ハ家菱ナリ、〇中略増、ヒシノ葉ハ七八葉攢生シテ水面ニ浮ブ、夏月四瓣ノ黄白花ヲ開ク、大サ五分許アリ、又實ノ小ナルヲ野菱トシ、大ナルヲ家菱トスル說ハ穩ナラズ、コノ根ヲ水田ニ栽テ培養シタルヲ家菱トシ、野生ノモノヲ野菱トス、野山藥家山藥ノ例ナルベシ、

〔百姓傳記十三〕ヒシヲ植ル事

一ヒシハ池川溝堀ニハナスベシ、種色々アリ、角ノ二ツアルヲ能モノト知レ、角ノ二ツ有内ニモ、皮ノトツト剛キモノアリ、夫ハ悪キゾ、皮ノ柔カナルニ實多シ、沼ニ生ジ安シ、石地砂地ノ池川ニハ生エ悪シ、蔓多ク出ルモノナリ、七月下旬八月ニハ、ハヤ實ノ入モノナリ、冬ニ至テ蔓モ腐リ水底ニ沈ム、ヒシハ蠶以沈ムナリ、多ク實ナリ、饑ノ助ケトナル、三河國岩堀ト云村ニ池アリ、此池ニ名物ノヒシアリ、近村ノ土民寄合、冬春ノ内取テ喰フ、又ハ市町ヘモ出シ賣ナリ、水底ノヒシヲ取ニ、コクウト云テ、板ヲ以テハサミヲ拵ヘ、柄ヲ長ク付、船ニ乘リ泥ノ底ヲコクウニ狹ム、其ハサミノモトニ、荒キ布袋カ網ヲ付、ヒタモノコユスリ落ヲハサム故、泥ノ内ニ魚マデカヽル程ノコトナリ、

一何國イカナル村里ニモ、池川ニハ鬼ビシ多ク生ル、ミナ喰フモノナリ、然レドモ味ヒ能ラズ、ユデヽ後庖丁小刀ヲ以皮ヲムク、上皮堅キナリ、三河國岩堀近處ノ男女ハ、之ヲムクコト上手ナリ、生ノ儘モユデヽモ、日ニ能干シ、臼ニテカラハ皮ムケ實コナルヽ、トヲシテ以テフルキ、擂鉢ニテ素皮ヲユリアゲ、實ヲ取食ニモ、粥ニモスル、田夫喰ヒテ力アリ、切疵ウチ身ニハ大毒ナリ、

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子

丹波國（中略）菱子二〇中略　右依前件、貢獻臨時増減、随到撿收附内膳司、

古語には刀をばヒといひけり、此物の實核、角ある事の刀に似たれば、此名ありけるにや、さらばシと云ひしは詞助なり、魚をとる器に、ヒシといふもの、あるは、此物に因りて名づけ云ひしと見えたり、

〔倭訓栞前編二十五〕ひし　菱子を訓せり、蒺藜もよめり、鰭薢の義なるべし、ひし蔓ともいへり、菱に兩種あり、小なるを黑菱といふ、稜硬して人を刺す、大なるは稜脆し、参河國岩堀の菱は二稜也といへり、

〔宜禁本草乾五菓〕芰實　甘平冷、一名菱角、江淮乾以代糧、不能泰刺、多食生蟯虫、令人臟冷損陽氣、痿莖或腹脹、飲薑酒即消、主安中補五臟、與蜜合食生虫、

〔本朝食鑑三水菓〕菱和名比之、今亦同、

集解、湖澤處處多有之、菱子落于泥中、最易生發、三月生蔓延、引葉浮水上、扁而有尖、光面如鏡、葉下之莖有股如蝦股、一莖一葉、兩兩相差、如蝶翅狀、五六月開小白花、背日而生、晝合夜炕、隨月轉移、其實有數種、或三角兩角四角無角、嫩靑老黑、葉實俱小、其角硬直刺人、謂之烏菱、嫩時剝食甘美、老則蒸煮食之、一種種于陂塘、葉實俱大、角耎而脆、亦有兩角彎卷如弓者、其色有靑紅紫、此亦與烏菱同、煮熟作果、野人以爲救荒之具者也、近世取菱殼燒作紫灰、以入香爐、能保火、故人以爲珍焉、

氣味、甘冷無毒、多食傷人、主治、解暑及傷寒積熱、止消渴、解酒毒、

〔重修本草綱目啓蒙二十二水菓〕芰實　ミズモグサ古歌　ヒシ　一名翻鶏事物異名　紫角　子陵上共同

胡速兒事物異名、蒙古ノ名、　菱角本經逢原　水菱本草蒙筌　蟾蜍股事物紺珠　未栗實郷藥本草　菱栗村家方　花一名水

客事物紺珠　穿萍名物法言

水澤中ニ多ク生ズ、根ハ水底ニアリテ、葉ハ水面ニ叢生ス、形扁シテ蛺蝶ノ翅ノ如ク、厚クシテ光リアリ、其莖フクレテ蝦蟆ノ股ノ如シ、夏花ヲ開キ實ヲ結ブ、形三角四角或兩角アリ、ソノ角皆尖

和產ナレ、漢渡ノモノ僞ナシ、長サ一寸許、中濶ク兩頭尖リテ五稜アリ、栗殼色、肉ハ白色生色スベシ、陳久ノモノハ、色變ジカビアリテ食フベカラズ、新ナルモノハ、地ニ下シテ生ジ易シ、享保年中清種ヲ傳テ、駿州ノ官園ニ栽ラル、今ハ花戸ニモ多シ、然レドモ甚寒氣ヲ畏ル、故ニ冬月土窖中ニ入レ、培養フテ本大ナル者ハ花ヲ開ク、實ヲ結ベドモ熟シ難シ、勢州尾州紀州等ノ暖地ニテハ、年年多ク花實ヲナス、葉濶サ一寸、長サ三寸許、其末微シ濶クシテ尖リアリ、大抵梔子葉ニ類シテ薄ク色モ淺ク對生ス、莖ト共ニ微毛アリ、年ヲ經タル者ハ藤大ニシテ紫藤ノ如シ、三四月花ヲ開ク、一朶二三寸、花攢簇ス、形チ紅藍花ノ如ク、五出下ハ細筒ヲナス、長サ一寸許ニシテ莖ナシ、花始ハ白色漸ク紅色ニ轉ジ、紫色ニ轉ク、後漸ク黃色ニ變ズ、一朶中數色相雜リ美觀ナリ、花中ニ短蘂アリ、後實ヲ結ブ、舶來ノモノニ異ナラズ、

〔新撰字鏡 草〕芰。〔渠知反、去、菱也、比志。〕○菱〔亡鉤反、水中菜也、比志、〕 蔆〔二作、青遊反、水菜、比志、〕 蕎〔比志〕

〔倭名類聚抄 十七 菓〕菱子。 說文云、蔆〔音陵〕秦謂之薢茩、〔皆后二音〕楚謂之芰、〔音岐、字亦作茤、和名比之、〕

〔箋注倭名類聚抄 九 果蓏〕原書艸部、蔆作蔆、玉篇蓤亦作蔆、原書茤作芰、說文又云、芰蔆也、茤杜林說芰从多、蜀本圖經云、生水中、葉浮水上、其花黃白色、實有二種、一四角、一兩角、本草圖經云、花落而實生、漸向水中乃熟、又有嫩皮而紫色者、謂之浮菱、食尤美、李時珍曰、三月生蔓延引、葉浮水上、扁而有尖、光面如鏡、葉下之莖有股如蝦股、一莖一葉、兩々相差、如蝶翅狀、五六月開小白花、背日而生、晝合宵炕、隨月轉移、其實有數種、或三角四角、或兩角無角、野菱自生湖中、葉實俱小、其角硬直刺人、其色嫩青老黑、

〔下學集 下 草木〕菱〔ヒシ、角也〕

〔書言字考節用集 六 生植〕芰實〔ヒシ、兩角者曰芰、四角者曰菱、〕 菱〔同、本字作蔆、名抄、〕 一 水栗〔同、風俗通〕

〔東雅 十四 果蓏〕菱子ヒシ 此物の名は、仁德天皇の御歌にも、すでに見えたれども、其義の如きは不詳、

使君子

形楠ノ葉ニ似テ、本狹ク末濶シ、鋸齒ナク、毛刺ナク、厚シテ深綠色ナリ、葉中ノ縱脉背ニ起發シテ刎脊ノ如シ、長ズルニ隨テ落葉シテ、莖ニハ葉痕ト刺ヲ存ス、甚寒氣ヲ畏ル、冬月土窖ニ育スレバ落葉セズ、扦插シテ能活ス、

〔草木育種下葉莖實觀べきもの〕仙人掌滇南雜記　又覇王樹ともいふ、本暖國より來る、駿河安房等には大樹ありて、花を開實を結、花は老虎黃にして形黃薔薇のごとし、實は母指の大にして中に仁あり、蒔てよく生ず、又枝を折て折口へ灰を付、少し日に乾て植れば、よく活ものなり、夏中人糞汁を澆べし、近頃白斑あるものあり、又石下さぼてんと云あり、扁して枝少く、其形狀扇をひらくがごとし、或云さぼてんの汁、目に入る時は盲といふ、

〔多識編二蔓草〕使君子、今案可羅久知那志、異名留求子、

〔書言字考節用集六生植〕使君子蔓草也、一名留求子、使君子本草、其蔓如葛繞樹而上、葉如五加葉、

〔和漢三才圖會九十六蔓草〕使君子　留求子

本綱使君子原出嶺南交趾、今閩蜀皆栽種之、亦易生、其藤如葛、繞樹而上、葉青如五加葉、五月一簇一二十葩、紅色輕盈如海棠、其實長寸許、五瓣、合成有稜、類梔子、嫩時半黃、老則紫黑、其中仁長如榧子、色味如栗、久則油黑不可用、此藥療小兒疾、故名留求子、

氣味甘温　治小兒百病、五疳、小便白濁、瀉痢、虚熱、健脾胃、凡殺蟲藥多是苦辛、惟使君子榧子甘而殺蟲亦異也、服之者忌飮熱茶、犯之卽瀉、此物殺蟲小兒要藥也、俗醫乃謂殺蟲至盡、無以消食、鄙俚之言也、樹有蠹、屋有蟻、國有盜、禍耶福耶、修養者先去三尸、可類推也、

按原始曰、使君子味甘、卽是用肉、然肉少難得、今醫家或兼用也、近來所渡者多無仁、故皆用殼、

〔重修本草綱目啓蒙十四蔓草〕使君子　一名風稜御史輟耕錄　史君子花譜、群芳譜、本草彙言、　史均子醫學正傳　使君花花曆百詠、花名、

生ズ樹ニアラズ、出于花史、曰殆天地間之奇構也、マコトニ草中ノ異物ナリ、寒氣ヲ畏ル、寒月ニ早クオホフベシ、ヲホヒナケレバ枯ル、油ノケガレヲヨクトル、

〔草木性譜〕天仙人掌緋牡丹花麒麟 同 龍骨木桂海虞衡志

南國の產にして甚寒を畏る、多煖室に藏、水を灌べからず、寒中水を澆ば腐爛し活せず、枝を發し葉なく深綠色、尖刺有て只扁なる而巳、大なる者は八九尺に及び、夏中新芽を頂に生ず、互扁なり、暖地に有る者は花を開く、忽然として扁上に發し、生處定らず、重瓣褐色、細縱文あり、黃蘂叢く、心中に白蘂有り、大さ茶梅花の如し、花後五稜の實を結ぶ、其一片を折て暫時日乾し、播插すれば即活し、嫩芽を生ず、刺あり、一說にこれを庭際に置ば火患を避と云ふ、花鏡に亦其說あり、今獅子と云ふ者は其變種なり、又龍骨木を以て仙人掌の一種とするは非なり、別種なり、

〔重修本草綱目啓蒙〕十六石草仙人掌草 サ。ン。ボ。タ。イ。 サ。ボ。テ。ン。 サ。ン。ボ。タ。讃州 イ。ロ。ヘ。ロ。 サ。チ。 ラ。サ。ワ。ボ。ク。 ト。ウ。ナ。ツ。 ト。ウ。ナ。ス。勢州 ニ。ヨ。ロ。リ。讃州 一名覇王樹八種畫譜 仙人掌秘傳花鏡

花家ニ多シ、寒國ニテハ多腐リ易シ、形手掌ノ如ニシテ長シ、大小等シカラズ、綠色、又黃瓜ヲ壓シ扁メタルガ如シ、體ニ疣刺多シ、縱横ニ一二層ヲナシ、或ハ數層、或ハ旁ニ數枝分ツ者アリ、至テ大ナル者ハ丈餘ニ及ブ、夏花ヲ開ク、生處定マラズ、或ハ頂ニアリ、或ハ旁ニアリ、大サ二三寸許、重瓣赤黃色、千葉黃櫁花ノ如ク、或ハ小蓮花ノ如シ、暖地ニテハ花後實ヲ結ブ、長サ二三寸、五稜ニシテ兩頭狹シ、墜スル者ハ地ニ下シテ生ジ易シ、コノ物夏中ハ甚ダ生活シ易シ、幾段ニ切リ栽ユルモ皆生ズ、

增、〇中略一種キ。リ。ン。カ。ク。ト呼モノアリ、即慣火ノ圓キモノナリ、ソノ形胡瓜ノ如ク直立シテ幹狀ヲナシ、深綠色ニシテ稜ニ五稜アリ、稜上ゴトニ小瘤ヲ起シ葉ヲ生ズ、五葉互生シテ圓ク莖ヲ圍ミ、層ヲナスコト數十葉、卒ニ見レバ對生互生ノ別ナキニ似タリ、葉蒂ノ本ニ細刺二條アリ、葉ノ

秋海棠

きらふ九十月比、日向よき所に植てまはりと上をかこひ寒氣をふせぐべし、暖なる日は晝の間時々日をあつべし、左からざれば春に成りてかるゝものなり、三月中旬比、砂黒土にて鉢に植かへ、油かすか又は魚の洗汁などかけて、やしなふべし、

〔剪花翁傳 三四月開花〕土圭艸　花八重、一重、形鐵線風車に似たり、色此二種より濃し、開花四月下旬より五月上旬迄あり、分株春彼岸よし、

〔書言字考節用集 六生植〕秋海棠（シウカイダウ）古詩云、腸々秋海棠、人言斷腸草、見遶在八陵、

〔大和本草 七花草〕秋海棠　名花譜曰、一名斷腸花、嬌冶柔軟、眞如美人捲粧、性喜陰、見日卽瘁、九月收枝上黑子、撒於地上、明春發枝、老根過冬者花發更茂、寛永年中中華ヨリ初テ長崎ニ來ル、ソレヨリ以前ハ本邦ニナシ、花ノ色海棠ニ似タリ故ニ名ヅク、其葉左ニ顛ルアリ、右ニ顛ルアリ、他草ニ異ナリ、第一葉左ニ顛レバ、第二葉ハ右ニ顛ル、上下カハル〴〵左右ニ顛ル、六七月花ヲヒラク日ヲ畏ル、日ニアヘバ色變ズ、陰地ニウフベシ、日アテニウフレバ枯ル、北ノ屋カゲ垣根ニ宜シ、間ヒロクウフベシ、葉大ナル故ナリ、沙土ヲ好ム、黃硬土ニ宜カラズ、零餘子ニ似タル小子アリ、子ヲマキテ生ズルハ、二年ニシテ花サク、或曰、子ヲマキテ糞ヲソヽゲバ、當年花サク、宿根ヨリ生ズルハ年々サク、大風ニ破レヤスシ、七月初ヨリ小竹ヲ立テ助クベシ、花鏡曰、爲秋色中第一、又曰澆灌卽萎、

〔和漢三才圖會 九十四末濕草〕秋海棠　斷腸草〇中略

按秋海棠莖葉略似欵冬（フキ）、而小軟有艶、梗帶赤色、抽莖開花似蕙蘭玉簪（ギボウシ）花之輩、而淡紅可愛、其子生枝葉間、形色似零餘子、而大如豌豆、種之易生、

仙人掌

〔書言字考節用集 六生植〕覇王樹（サボテン）覇又作伯、遠生八陵、如掌、色翠綠、上多未點子、葉生大上、爲奇樹、

〔大和本草 七圖草〕覇王樹　花史ニ出タリ、葉ナクシテ其形枇杷葉ノ如クニシテ厚ク、肌ハ胡瓜ノ如シ、枝ヲ生ジテ又枇杷葉ノ形ノ如シ、多茨子、其頂ヨリ生小葉、コトアリ、高至二三尺、ヲリテ挾セバ

〔百品考上〕西番蓮　和名トケイサウ

廣羣芳譜百花詩餘註、西番蓮出廣中、登架引蔓、葉尖長叢茂、六月開花、至十月止、下萼分十大白瓣、中起紫有翡翠色花、如細絲刷狀者、並心五瓣、如西瓜小子大、瓣上白點邊、中滿黃色、瓣如綴、以手指撥之、似乎不平著、而旋轉活動、仍不安落、五瓣心中、另抽一黑紫、莖末分三枝、枝末如圓珠、而光禿、又彎下、人見之俱不勝驚喜、眞花之功而奇者、肥土扦種、

一蔓草ナリ、花戸ニ多ク栽ウ、葉ニ岐アリテ、破葉ノ如シ、葉傍ニ細鬚アリテ物ヲ纏フ、夏月花ヲ開ク、鐘鏈ニ似テ大ナリ、狀チ自鳴鐘ノ車ニ類セリ、故ニトケイサウト云、

〔地錦抄附錄一〕時計草　長崎にてぽろんといふ

草はかづらのごとくにてかづらにあらず、葉の間々よりほそきつる出て、竹木に取つきてのばる、枝多くしげり葉に切込ありて、もみぢ葉のごとく、花形てつせん風車に似て、輪の大きさてつせんのごとく、色白く櫻色にうるみあり、花の內に留り、こん色と白色と、紫色と、三段ほどに染たる糸しべ、ちやせんの如くに立ならびて、花十分に開く時、そのしべ花の內へまはり敷て、三段ほどの色かはり、虹の吹たるがごとく、見事に眞中よりしん立て、ゆりのしべのごとくなるもの、五本五方へわかれ、そのさきに三分ほどの物横に付く、上の方靑茶色、下の方うこん色、その上に丸き玉あり靑し、玉の上に黑紫色のしべ、三本三方へわかれ、そのさき丁子頭なり、朝四つ過に花開き、蕚六つどきしぼむ、その次のつぼみ、又明日開く、花は一日なれ共、葉の間々ことに、つぼみ多くつくもの、さかり久し、五月上旬比より咲く、又秋のころもさく、秋咲は二三日も花しぼまず有り、花ひらく時の樣子、傀儡を操がごとく回るまべあり、實蘂も有り、上下へかへる蘂も有り、さまざまの品見物あり、花開きていさぎよく、水をそゝぐがごとくに露玉ありて、總體うつくしく、是を繪書ば畫工も筆をなやむべし、享保八年に、長崎より初て來る、枝を切てさしてよくつく、寒氣を

トリグサ 京　スモトリバナ 同上　カギトリバナ 備前　カギヒキバナ 同上　キヽヤウグサ
泉州　アゴカキバナ 越後　カギバナ [illegible]州　一名菫菫菜 救荒本草　金芹菜 物理小識　草角子 山東通志
随地皆アリ、葉長ク叢生ス、葉似柳ト集解ニモ云リ、陽地ニアレバ春早ク正月ヨリモ花開ク、深紫色又淺紫花白花ノモノアリ、葉形花色ト地ニ因テ各異ナリ、一種圓葉ノ者アリ、又數品アリ、草生藤生ノ異アリ、総ジテコマノツメト云フ、古歌ニツボスミレト云フ、コレ菫菜ナリ、又一種黄花ノモノヲキスミレト云フ、即菫菜ノ一種ナリ、加州白山、和州芳野等ニ産ス、葉形圓カニシテ尖リ、鋸歯アリテ光澤ナリ、花ハ黄色五瓣ノ中一瓣紫黒色ニシテ光アリ、又一種叡山スミレアリ、葉形アサモミヂノ葉ニ似テ大ナリ、花ハ淡紫色、即雑草類ニ載スル所ノ胡菫草是ナリ、一種紫背ノスミレアリ、救荒本草ニ載ル所ノ匙頭菜也、以上二品皆幽谷ニ生ズ、

〔重修本草綱目啓蒙十六雑草〕胡菫草　エゾスミレ　エイザンスミレ　サツマスミレ　カクレガサ
オホスミレ　サツマシメリ 加州　深山幽谷ニ生ズ、葉ニ五岐深歯アリテ、アサモミヂノ葉ノ如シ、數葉一根ニ叢生ス、夏已後葉ノ形變ジテ兩岐トナル、春時花ヲ開ク淡紫色、形狀紫花地丁ノ花ニ同シテ大ナリ、實ノ形モ相同ジ、ソノ莖兩枝ヲ對シ分ツヲ異ナリトス、

〔萬葉集八春雑歌〕山部宿禰赤人歌四首〇三首略
春野爾、須美禮採爾等、來師吾曾、野乎奈都可之美、一夜宿二來、

高田女王歌一首
山振之、咲有野邊乃、都保須美禮、此春之雨爾、盛奈里鷄利、

〔枕草子三〕草の花は
つぼすみれ、すみれおなじやうの物ぞかし、おいていけばおなじなどうし、

〔武江産物志藥草〕上野邊ノ産　菫々菜（つぼすみれ）　尾久ノ原　紫花地丁（すみれ）玉川ニモ

本草註云、此菜野生、非人所種、俗云菫菜、葉似蕺、花紫色者、本草云、味甘、此云苦者、古人語倒、猶甘草謂之大苦也、元升曰、此說ヲミタイロ〳〵明クシ、スマフトリ草ハ菫菜ニアラズ、又西國民間ニ食スルモ菫菜ニアラズ、菫菜ハ野菜類也、今ハスミレヲ知人ナシ、名不正シテ物不從ツキニ食物ノ用ヲナサズ、一物徒生ノ物トナル可惜也、能識人是ヲ正シテ、眞菫ヲ殺出スベシ、

〔本朝食鑑 三 菜〕菫菜釋名、今之訓分也、一名一夜草、或曰一葉草、倭歌人今古詠賞之、菫菜野生、葉似柳葉而微小、二月生苗、高四五寸、纔地叢生、三四月開紫花、如菊花而微小、四五月結子成莢、莢中有細子、子微白、生機似菫而俳、古人采食之、近人未食、但兒女摘花弄之、落之四野多有、或采子以種庭園、實花之紫貌近年江都人白絵綾及種子賞、一種俗有謂相撲草、名此亦菫菜之類、原野庭畔多生、葉似事之葉刀、故謂曰刀草、三四月開小花、似小菫狀、有紫白二色、倶菫類之節而作鉤鏃、故採之開花相撲者不堅者露、時以作角力之狀、故號相撲草、而鄙兒女之弄戲耳、

〔重修本草綱目啓蒙 十八 草 蔓〕○ハ○ハ○ク○セ○リ○

陸生ノ芹ナリ、食用ノミツバゼリモ、コノ一種ナリ、恭說ノ菫菜ハ圓葉ノ紫花地丁ナリ、コマノツメト呼ブ、數品アリ、葉圓ニシテ尖リ、菾菜葉ノ如ニシテ鋸齒アリ、又圓ニシテ尖ラザル者アリ、大小異形ナル者一ナラズ、花ニ深紫淡紫白色ノ別アリ、形ハ皆紫花地丁ニ同ジ、又蔓生ノ者アリ、此ニモ圓葉長葉ノ品アリ、花ハ皆淡紫色ナリ、馮鶚ノ說ハ、紫花地丁也、隰草類ニ本條アリ、時珍ノ說ニ、黃花ナル者ヲ即毛芹也ト云ハ非ナリ、毛芹ハ毛茛(ウマノアシガタ)ナリ、大觀本草ニ、菫黃花害人ト云フヲ優レリトス、是レキケマンナリ、一名ウバコロシ、土州ウバコロシ、同上ヘビニンジン、江州モヽチトリ、江戸花戸ヒトコヘヨボリ、勢州ワウキン、此草ハ路旁樹陰、或ハ垣砌ノ間ニ多ク生ズ、四時枯レズ、苗ハ紫菫(ムラサキケマン)ニ似テ白色ヲ帶ブ、コレヲ斷バ黃汁出、甚臭氣アリ、花モ紫菫ノ花ニ異ナラズシテ黃色ナリ、時ナラズシテ常ニ開ク、大毒アリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕紫○花○地○丁○

○ス○ミ○レ○和名鈔　○ヒ○ト○ヨ○グ○サ○古歌　○ヒ○ト○バ○グ○サ○同上　○コ○マ○ヒ○キ○ク○サ○筑後　○京○ノ○ム○マ○筑前　○ト○ノ○ヽ○ム○マ○ノ同上、温泉草モ肥前ニテ、トノヽムマト云、同名ナリ、　○ト○ノ○ム○マ○薩州　○ス○モ○

花のいたうひろごらざるよりいふにもあるべし、から國ふみには菜の部にいれたり、若葉をくふ事ならんかし、大かた花は折とこそいへ、つむとはいはざるを、此花にしもゝかいふは、莖いとみじかくて、折とはいふべくもあらぬさまなれば也、ゝかるを此あたりのものしり人、なまくに菜の類なる事をも聞しり、又つむといへるが、若菜などのやうにきこゆるなど、おもひあはせてのわざなるべし、此花をいと多くつみもて來てくへりしが、いたうわづらひてえもいはぬ事などしてくるしみけるとぞ、足八ツありとて、あらぬ蟹をくひし事、から人にもあり、物ゝり人の、中々なるひがごとする、今にはじめぬ事なりかし、

〔宜禁本草乾五菜〕菫菜　苦寒、此菜野生、非人所種、葉似柳、花紫色、子如米、汋食之滑、久食除心煩熱、身重、懈惰、多睡、擣傅熱腫、主寒熱瘰癧生瘡結核、下瘀血、

〔庖厨備用倭名本草一貫壁〕菫菜　倭名抄ニスミレ、多識篇野セリ、元升井〇向曰、今人皆駒引(コマヒキ)草ヲスミレト云、コマヒキ草ハ俗ニ云スマフトリ草也、然ニスミレハ、古人ツミトリテ春ノ菜茹ニス、春野ニ生ズ、古人ハ春日ニ野ニ出テスミレヲツム、其花紫ニシテ可愛、古歌ニ、打ムレテ菫ツミニト來ワレゾ野ヲナツカシミ一夜寝ニケル、又ヨク荒野ニ生ズルナルベシ、古歌ニ、昔ミシイモガ垣ネハアレニケリツバナマジリノ菫ノミシテ、今云スマフトリ草ハ、食スル人ナシ、其花モ愛スベキ形色ニモアラズ、歌ニヨミナツカシムベキ花ニモ、菜ニモアラズ、古人ノ愛セシ菫ハスマフトリ草ニハアラザルベシ、又西國民間ニ云スミレハ、莖葉根トモニ水仙胡蒜ニ似タリ、三四月麥未熟以前ニ根ヲ堀取リ、蒸熟シテ食ス、春日民家ノ糧ニシ飢ヲ救フ、根ノ形ハ胡蒜ニ似テ白シ、蒸熟スレバ蜜色ノ如シ、其甘キコトハ糖蜜ノ如シ、農家ニ是ニ麥麨ヲカケテ食ス、其花色赤クシテマンジユシヤケノ如ジ、ヤヽ愛スベキ形色也、然レドモ其莖葉ヲ食モノナシ、是モ古人題詠ノスミレト云ガタシ、爾雅云、齧苦菫、註云、今菫葵也、葉似柳、子如米、汋食之滑、疏云、齧一名苦菫、可食之菜也、唐

苗長、其後葉間攢葶開紫花、結三瓣蒴兒、中有子、如芥子大、茶褐色、味甘、是其細葉者、本草綱目所云紫花地丁也、李時珍曰、紫花丁、其葉似柳而微細、夏開紫花、結角、平地生者起莖、溝壑邊生者起蔓、是也、須美禮依輔仁、

〔下學集草木下〕菫菜（スミレ）

〔書言字考節用集六生植〕菫（スミレ）〔苦菫、早芹、菫葵、皇岡、本草、菫菜、紫色、葉細、如千束、〕

〔八雲御抄三上〕菫菜　つほ　又嚔すみれ　野又あれたる所につむ也

〔東雅十三穀蔬〕菫菜スミレ　倭名鈔に本草を引て、菫菜はスミレ、俗謂之菫葵と註せり、其義不詳、爾雅に齧は苦菫也といふ、註に菫葵は、本草に言味甘而此云苦、蓋古人語倒、猶甘草謂之大苦也と見えたり、さらば此にもスといひしは酸也、酷を苦酒といふが如し、ミレといひしは、ニレの轉語にして、其性の滑る事の楡の如くなるを云ひしなるべし、内則に菫荁枌楡とも見え、淡齊會が賦にも、烈有椒桂、滑有菫楡と見えたり、

〔物類稱呼三生植〕菫すみれ　畿内及近江、加賀、能登、又東海道筋すべてすまふとりぐさと云、江戸にてすみれと云、上野にてすまふばな、仙臺にてかぎばなと云、大和の奈良小兒、治郎坊太郎坊と云、西國にてとのゝ馬と云、菫一名こまひき草といふ、漢名剪刀草、花紫白二色有、共に莖のかたはらに鉤の形あり、兩花まじへ相ひきて、小兒のたはふれとす、故にすまふとりぐさの名有、又東武にてすまふとり草と稱する別種有、江戸邸（いへ）にてはぐさとよぶ、草の穗に出たるを云、漢名不知、尾州にてやつまたといふ是也、貞砂が足を空なるすまふとり草と聞えし附句も、むかしがたりとなりぬ、

〔年々隨筆一〕すみれ二種あり、いづれもよろし、葉の細くてながきが殊によろし、ひろくて短きは色あさし、これをつぼすみれ也といふ人もあり、さる事にや、つぼすみれ、すみれもと一品にて、此

菫菜

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕弟切草　正字未詳

按弟切草初生似地膚子秧而兩兩對生、有枝椏而葉葉挼之有汁、須臾變紫色、六七月開小黃花、單五瓣有細蘂、結莢有三稜、中有細子黑色、(味甘香美)莖葉傅金瘡折傷及一切無名腫物、有神効、相傳花山院朝、有鷹飼名晴賴、精其業也入神、有鷹被傷採草傅之則愈、人乞問草名秘之不言、然有家弟密洩之、晴賴大忿刃傷之、自此知鷹之良藥名弟切草、

一種莖弱不起如蔓而葉花子不異、葉略小、其味辣强、

〔重修本草綱目啓蒙 十二 隰草〕鱧腸

集解、小連翹ハヲトギリサウ、此草山野ニ多シ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、長ジテ高サ一二尺、葉ハ細長ク、柳葉ニ似テトガラズ、兩兩相對ス、夏月莖末ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク五瓣、大サ三四分、色黃ニシテ小紫點アリ、故ニ時珍花黃紫ト云、雲母ノ發明ニ紫連翹草ト云、此花瓣ヲトリ、兩紙ノ間ニ挾テ摩時ハ紫色ニ染ル、葉モ亦同ジ、葉ニモ小紫點アル故ナリ、又葉ヲ水ニテ煎ズレバ、ソノ汁色赤シ、一種小ナル者、葉長短數種アリ、又一種形極テ小ナルヲ、ヒメヲトギリト云、亦數品アリ、皆枝梢ニ一花ヲ開ク、葉ヨリ大ナリ、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產　小連翹(志村ニモ)

〔本草和名 十八 菜〕菫汁(仁諝音謹)一名菫葵(出蘇敬注)一名苴(乾者也、出七卷食經)和名須美禮、

〔倭名類聚抄 十七 野菜〕菫菜　本草云、菫菜俗謂之菫葵(菫音謹、和名須美禮)

〔箋注倭名類聚抄 九 菜〕按證類本草下品菫汁條、引唐本注云、此菜野生、非人所種、俗謂之菫菜、本草和名引作俗謂之菫葵、與此合、則知此所引蘇敬注文也、蘇敬又曰、葉似蕺、花紫色、按蘇所說、是須美禮之圓葉者、俗呼曰駒爪、又說文、菫艸也、根如薺、葉如細柳、蒸食之甘、爾雅、齧苦菫、郭注、今菫葵也、葉似柳、子如米、汋食之滑、救荒本草云、菫々菜、一名箭頭草、生田野中、苗初搨地生、葉似鈹箭頭樣、而葉蒂

人家往々花圃ニウフ、青虫多シ去ルベシ、花落テ後久シクシボマズ、アツメテ見ルニ堪タリ、又花ヲ散スニ皆仰ク、一モ俯カズ、苗長ジテ時々魚汁ヲソソグベシ、此草金銀共ニ本草ニ不載、

銀錢花。花鏡農圃六書等ニノセタリ、午時紅ノ花白キ也、莖葉少異レリ、京都北野ニアリ、北野ニテモ銀錢花ト云、金銀共ニ好花ナリ、何モ多ハ根枯ル、春實ヲマキテ生ズ、金錢花ハ多ク銀錢花ハマレ也、

〔草木育種後編下草類并育草の類〕午時花花類　夜落金錢同上分といふ、春分に子を下して生ず、初生牽牛子の初生に似て小也、夏に至り高さ一尺許り、五瓣の紅花を開く、又野西瓜苗あり、花似て白色なり、是も春分子を下して生ず、二種ともに多く糞水を澆ぎてよし、

金絲梅

〔大和本草花草七〕金絲梅　圖史ニノセタリ、花色棣棠ニ似タル好花ナリ、葉ハ三片アリ、莖ノ高尺ニ不過、陰地ニ宜シ、日ノ影ヲ畏ル、正二月ニ舊根ヨリ苗ヲ生ジ、三月黄花ヲ開ク、其花ノ形如仰碗、其シベ如金絲、金絲綫ヨリ細短シ、六月葉莖枯レテ後ハ、來春マデ莖葉ナシ、

弟切草

〔大和本草雜草九〕ヲトギリ草　葉ハ柳ノ如ニシテ短シ、花ハ黄色ニシテ小ナリ、秋開ク高二尺許、其葉ヲモミテ其汁ヲ金瘡ニヌリテ血ヲ止ム、又鷹ノ病ト犬ノ病ヲ治ス、其葉ヲモメバ黄色ノ汁イヅ、唐ヨリワタル、繪ノ具臙脂ト云物アリ、俗ニ生臙脂ト云紫色ナリ、此草ノ生葉ヲシボリテ汁ヲ綿ニヒタセルナリト云、日本ニ近年漸此草ノ汁ナル事ヲシレリ、多クトラザレバ用ルホド無之、本草臙脂ノ集解ニ、種々草花ノ汁ニ綿ヲ染テベニトスル法アリ、又蘇木ノ煎汁ニ胡粉ヲヒタシ、綿ニヌリタルヲモ生エンジト云、ソレハ似セモノ也、眞ニアラズ、正眞ハヲトキリ草ノ汁ト云、生臙脂ヲ以テ血ヲトムルニ甚效アリ、ヲトギリ草ノ汁ナレバナリ、本草濕草下ニ蛇銜草アリ、ヲトキリ草ニ似タリ、其異同未詳、又或人コレヲ劉寄奴ナルベシト云、本草劉寄奴ノ集解、時珍ガ說、略ヲトキリ草ニ似タリ、又未詳、

ハムケ棄ル、又ネカシ過テハ弱ナル、其ノ見分ケ肝要ナリ、ムキ取タルイチビヲ、竹ノワリコハシニテ上皮ヲコキステ、水ニテ洗ヒ日ニ干シ、麻ノ代リニ使フ、第一大船ノ碇綱、其外太布モ織、馬道具ニ用テ德多シ、

〔廣益國產考三〕苘麻作りやう

苘麻は何國にもあるものにて、作りやうを諸人知るといへども、此琉球表を織には專らいちびを經に用るによつて、作りやうを爰にしるす也、

四月早麥を刈取たる跡に、麥を蒔やうの地こしらへして、種子を芥の燒灰等にまぶして、麥を蒔やうにして蒔べし、尤壹畝に種子壹合宛に蒔て宜し、然して厩肥しか油糟を施置ば、追々芽を生じ貳三寸になる頃、間三寸ほどづゝに間引仕立、肥しを見合せ施てよし、六月土用すぎる頃は、花咲實登り、丈凡五六尺に伸る也、刈旬は、凡蒔付て九十日めより百日目に刈べし、根よりこぎて土を落し束に結、其上に葉の古きぬれ筵を、透間なくかぶせ、三四日蒸て根の所を爪にてむくり、末まで引はれば、むざうさに末まではげる也、是を竹にかけ干揚て圍ひ置用ふる也、皮の上出來は壹畝に八貫目、中出來は五貫目あるもの也、

夢花金錢

〔倭名類聚抄二十草〕金錢花　梁簡文帝有金錢花賦、金錢俗云無歌

〔書言字考節用集六生植〕午時草

〔大和本草七花草〕夜落金錢〇中略　今案紅白二色アリ、紅ヲ金錢花ト云、一名午時紅、瓶史ニ見エタリ、倭俗午時花ト云、又金盞花ヲモ和俗金錢花ト云、同名異物也、午時紅ハ葉ハキイチゴノ葉、又イチビノ葉ニヨク似テサキトガリ、本小ナル樫アリ、初生スル時小葉四ニワカル、莖長キハ二尺ニイタル、花ハ七八月ニ開ク、大サ錢ノゴトシ、紅ニシテ內フクラナリ、蘂二重アリ、每節枝生ジテ花開ク、午時ニ開キ其夜半ヲツ、故又子午花ト云、寒月ニハ夜花不落シテ晝マデアリ、牽牛花ノゴトシ、

ガラト云、白タシテ輕麻ナリ、奥州仙臺ニテモ、燒テ炭トナシ、ホクチト云、又一種イチビト呼草アリ、阿州ニテイチブト云、勢州ニテワナソト云、沿海ノ地ニ多ク栽ユ、苗高サ三五尺、葉稍長ク濶サ寸餘、長サ三寸許、鋸齒アリテ末尖リ、葉ノ本ノ左右ニ一ノ細枝アリテ角ノ如シ、花實ハ苘麻ニ似テ小ク、子ハ苘麻ニ異ナリ、胡麻ニ似テ小ク扁ナラズ、大和本草ニ詳ナリ、是胡麻、集解ニ謂ユル黄麻子ニハレテ、大麻ト同名ナリ、○中略
境、イチブハ阿州ノ名産ニシテ、沖ノ洲濱ヲ上品トス、コレヲ備前備中備後ニ送リテ、席ヲ織ル糸トス、又舟ノ綱ニモ製ス、乾燥ノ地ニ產スルモノハ、紫赤色ニシテ蔓延ズシテ短ク、皮堅クシテ下品トス、下濕ノ地ニ產スルモノハ、皮青白色ニシテ軟ニ、長ク延テ上品ナリ、苘麻ノ種類ニシテ、別ニ黄麻ト名ク、コレモ皮ヲ去リ炭ニシテ小匣ニ收メ貯ヘ、發火ニ代フ、雨ニサレテ古キヲ良トス、

〔蒙鏡評四〕苘麻ノ事

土佐醫官舘方宗哲談ズ、國ニイチビト云モノアリ、其狀如麻、ソノ皮舟ノ纜ニツクルベシ、イチビ綱ト云ク、海人尤コレヲ貴ブ、其種麻粹ノゴトク蒼白色ナリ、火ヲ灶スレバ火繩トスベシ、本草ニノスル苘麻ナリト、因テ本草ヲ考ニ、果シテソノ通リナリ、中庸綱衣ノ章ノ大全ヲ見レバ、又作䔰テ、即コノ物ナリ、シカレバ麻ノ一種トミエタリ、後ニ人ノ話ヲ聞ケバ、土州ニカギラズ海南ノ諸州ニハ、イチビ繩ヲ用ユト、マタ蒙圖草ヲ撿スレバ苘麻トアリテ、イチビト訓ズ、昔ノ人モヨクワキマヘシレルニヤ、

〔百姓傳記十一〕イチビヲ作ル事

イチビヲ蒔ニ、土地ニ嫌ヒナク、地深キ處ニ蒔ベシ、麻ト異ナルモノナリ、冬春迄ニ蒔、夏ノ土用ノ内ニコギトリテ、葉ヲ取捨ヨク日ニ干テ、其後水ニツケテ取揚ゲ、筵菰ヲ敷キ、イチビヲ積重ネ、又上ニ筵菰ヲカブセネサセ、皮ヲハギテ見ヨ、カラニ取付カズシテ能ムケル、ネ加減マヘオタニテ

濕ニ直貴ク、和州產ニ權衡セリ、

〔大和本草六民用草〕苘麻　又蕡麻白麻トモ云、倭名コ。サ。イ。バ。ト云、葉桐ニ似テ花黃ナリ、實ハ農家ノ唐臼ノ牟ノ如シ、莖ノ高五六尺、本草綱目濕草上ニアリ、皮ヲトリテ麻トシ布ニヲル、又繩ニ用ユ、本幹ニ莖ハ硫黃ヲツケテ、トモシ火トストアリ、發燭(フクタケ)ニ用ユベシト也、又黑染ニ用ユ、別ニ赤カシハト云木アリ、是モ黑染ニス、是又赤ゴザイバト云同名異物ナリ、葉ハ似タリ、又一種葉似香薷而大ニ、莖圓ク高二三尺、其皮可爲繩、葉柔ニテバリアリ、秋花ヲ開ク、是亦苘麻ノ類ナリ、

イ。チ。ビ。　葉ハ麻ニ似タリ、又午時紅ノ葉ニ似テ、實ハ木イチゴニ似タリ、故ニイチビト云、苘麻ト一類二物ナリ、是モ皮ヲトリテ苧ノゴトクニ用ユ、農人園ニツクリテ利トス、救荒草ニ苘實(ケイ)ヲイチビト訓ズ、アヤマレリ、苘麻トイチビハ別也、又先輩補骨脂ヲイチビト訓ズ、甚アヤマレリ、

〔和漢三才圖會九十四本濕草〕苘麻　苘音頃　蕡同　䔢同　白麻　俗用市尾字、稱以知比、○中略

按苘麻西國有之、日向、薩摩多種之、四國亦少有之、九州之土產、其葉微似胡麻葉、大有鋸齒、然本草綱目似桐葉者未精乎、○中略剝皮織布脆於麻易裂、打大繩爲碇綱、海舶必用之具以亞加賀苧、亦爲蔺席之經、甚勁強而難截斷、

〔重修本草綱目啓蒙十濕草〕苘麻　イ。チ。ビ。　ゴ。サ。イ。バ。攝州　カ。ナ。ビ。キ。豐前　シ。ナ。ノ。オ。伊賀　一名

苘尤藥性要略大全

春種ヲ下シテ秋後根枯ル、苗高サ六七尺、葉圓大シテ末尖リ、鋸齒アリ、桐ノ葉ノ形ノ如ク薄ク、軟ニシテ毛アリ、互生ス、夏月葉間ニ花ヲ開ク、五瓣黃色、大サ錢ノ如シ、朝ニ開キ暮ニ衰フ、花後實ヲ結ブ、牟磨ノ形ノ如シト時珍云リ、石ウスノ牟分ノ如キ形ナリ、圓ニシテ高サ五分許、濶サ六七分、上廣ク下微狹クシテ小莖アリ、頂ハ凹ニシテ粗キ菊紋アリ、外ニハ殼ニ稜多シ、是扁莢多ク圓ミ並テ、此形チヲナスナリ、○中略此草ノ皮ヲ剝ギ繩索トス、既ニ皮ヲハギタル稭ヲ、江戸ニテホクチ

内ヱ積登せ可申候、諸事榮秤同樣に相心得可申候、
右之趣此度改相觸候上は、大坂ヱ積登せし榮秤綿實他所にて猥道買或は艀下買、且隱絞致間敷候、勿論大坂表問屋共、榮秤實買込外の紛鋪儀、向後不爲致、尤是迄取扱候口錢の掛り物迄も、今般相改引下げ、大坂問屋々々にて、明細に懸札に記差置、無那餘慶之懸り物無之樣取計、聊疑敷儀致間敷候、若用ひざる族於有之は、遂吟味曲事に可申付候、諸國一統急度可相守候、右之通、御料は御代官、私領は地頭より可觸知候也、

八月

〔農稼肥培論中〕綿實粕

此綿實は、畿内にて專ら絞り、關東にて聊絞る計にて、北國西國にて曾て絞る事なければ、肥しに用ふる事もなし、

〔廣益國產考五〕綿 草綿

綿は用ひざる國なければ、何れの國にても作るべき物なれ共、東海道にては、尾張、三河、遠江、駿河は作れども、關東北國にて餘り作ることを聞ず、又九州の地は、能心がけて種々の產物を出せども、綿を作る事は疎にて、多く中國の綿を求め用ひ來れり、然れども豐後國日田郡の内隈町豆田町といへる所、其間十町も隔りぬる近邊兩所の四方計り、綿を作り出し、爲金凡千兩位は取入るよし、其外に家内にて著用の島木綿を織て用ふる所は、凡七八百兩は取入るべし、○下略

〔甲子夜話四十六〕播州ニ褐色ノ草綿アリ、生織ノマヽニテ、染タル如シトイフ、又綠綿モアリ、是ハ明石ノ邊ニ種ヲ傳ルトゾ、カノ地其種ヲ愛惜シテ他ニ出サズト云、

〔甲斐國志百二十三產物及製造〕一木綿　古綿ナリ、和名キワタ、畿内國和州產上品トス、凡暖地ニ宜シ、於東海諸國、本州ノ產ハ、其色皎白ニシテ綿强シ、巨摩、山梨中郡多且美ナリ、奈胡庄最名產トス、四方ニ

は蒔べからず、たねを水にひたし、灰をふりもみ合せ、一粒づゝばら〳〵となりたるを、手籠に入れ、左の手にさげ、或わきにはさみ、先筋をかき置て、かたよりなくばらりとまき、種子おほひ四五分ばかりして、上をかるく蹈付べし、たねを土と思ひ合すべきためなり、但しめりたる埴土をば蹴べからず、中より下の地ならば、下に灰糞をまき、其外肌ごゑをも入べし、肥たるに肌ごゑは入るに及ばず、尤雨氣に蒔べからず、若又うゆべき時分に旱せば、水をそゝぎ、ぎしめして蒔もよし、○下略

〔農家業事後編一〕草棉名目幷に土佐棉の事

草棉のことは、前編に如水翁○見島の說あれば、委しく記さず、先攝津、河内、大和邊にて作る所の種類、

かぐら　八寸黄花　備中ころり　麻わた　長九郎　太こくび　ちんこ　のら　山城麻棉

河内ぼたん　今七兵衞　早わせ　てつぽう　黄花　權九郎　猿の耳　赤わた　青わた

其外國々によて數多し、右の内にも早中晩三段ありて、少々の勝劣はあれども、いづれもすぐれたる種子なり、

爰に又文政四五年の頃より、土佐といへる一種を攝州にて專ら作りはじめてひろまりぬ、元來土佐の國より來れる種子なるゆゑ、土佐と名付しとみへたり、此綿はくり粉多く、通例の綿七十目ある分量には八拾目もあり、旱魃にいたまず、風にまけず、雨につよく、綿の色白し、性堅實成ゆゑ、糸にして强し、しかしながらねばり氣少しうすし、花は白くして小さく、桃とがりあつく大きし、木は小ぶりなれども、桃多く生ずるなり、木肌は色の青がゝりたるに似たり、

〔寶曆集成絲綸錄二十八〕寶曆九卯年八月

一綿實の儀も、近來專水油に絞出、菜種同樣の事に候上は、向後大坂綿實問屋相定候間、右問屋之

たねなり、此等のたねは桃のつく事、葉の數とひとしく、枝また葉の出べき所より、蕚と云て、つばみ付て、核子は小さく、くり粉殊に多し、かくのごとく種子によりて、實のり甚多少あれば、能たねをゑらびて求め作るべし、但其土地によりて、取分相應ある事なれば、其考をもよくすべし、又赤わたののらと云て、昔唐より來るたねあり、是はさかへやすくよくふとる物なれど、桃すくなくくりこ少し、但糸はつよき物なり、糸のつよきを好むものは、是をも作るべし、又山城の麻わたとて、あさの葉に似たるあり、是も又よきたねなり、雜種色々多しといへども、利分勝れたるは、此等に限れり、○中略うゆる時分は、八十八夜を五六日見かけて蒔を上時とし、八十八夜過て、やがて蒔を中時とし、それより段々勝手次第に、一日も早きにしかず、夏至(五月の中)の廿日前までは蒔てもくるしからず、晩うへも木はさかゆれども桃少し、秋の日よはくなりては、末のもゝふききらず、且大風又は秋雨つゞく事ありても、早きは大かたのがるゝ物なり、蒔てすき間なく糞し、手入を用れば、七月中にはや木吹はする物なり、惣く種る地の事、さのみ肥たる深き柔かなるを好まず、さかへ過れば又桃付ぬものなり、假令付ても落實し、とかく沙少雜りて、性よく強き中分の地に、よき糞を多く用ひ、手入を委しくしたるが、利分多き物なり、すべて何土にてもあれ、濕氣はよくもれて、旱に水を引便りある所は、山中など霧ふかき地を除ては、凡木綿の作られざる地は稀なる物なり、山城、大和の山内にて、よく出來るを以てしるべし、なを又濱邊河ばたなどの、風のよく吹通りて、日當のよき所は、勝れて木綿によろしき物なり、又年々相つゞきて同所に作る事はいむ物なり、一兩年若は三年までは作るべし、田の地味をゑらび、木わたを作れば、一兩年は取實過分にありて虫も付ず、其外くせも付ぬ物なり、其後又稻を作れば、地氣新にして、必二年ばかりの取實はあるものなり、草も生ず、糞も多く入ずして、利潤多し、○中略同くたねの分量の事、一段の畠、凡二貫目一貫五百目にても、地の肥瘠と、きり虫の考へして、糞もなく肥たる地ならば、さのみ多く

草綿キワタ　トウワタ　ワタ　一名棉(群芳譜)　家貝(通雅)　綿花(秘傳花鏡)　木綿草(書醫叢說)　子花(東西洋考)　吉貝花(同上)　無縫綿(河間府志)

木綿草綿ノ別アリ、木綿ハパンヤ、草綿ハトウワタ、即今本邦ニ栽ユル所ノ者ナリ、時珍ノ說ニハ、草木通ジテ木綿トス、故ニ木綿有草木二種ト云、似木之木綿、似草之木綿ト云、其名紛ハシ、輿籍便覽、廣東新語等ニハ、草綿木綿ヲ分ツ、宜シク從フベシ、〇中略。草綿ハ今諸國ニ栽ユルワタナリ、〇中略唐山ニテモ宋ノ初時、南蠻ヨリ始テ江南ニ來ルト云、其草高サ三四尺、枝葉互生、葉三五キレコミテ、ツタモミヂノ葉ノ如シ、秋ニ入テ葉間ニ花ヲ開ク、五出淺黃色、瓣心ゴトニ深紫色アリテ、黃蜀葵花ノ如シ、後實ヲ結ブ、形桃實ノ如シ、俗ニモヽト呼ブ、唐山ニテモ、花桃(群芳譜)又花鈴子(松江府志)ト云、又內ニ綿ナキモノアリ、偃囊(松江府志)ト云、熟スル時雨フラザル時ハ、モヽ開キ綿ヲ吐ク、潔白ニシテ中ニ種子アリ、ワタザネト呼ブ、是ヲ白綿子、(東醫寶鑑)綿種子(同上)ト云、又赤花ナル者アリ、晚種ナリ、尋常ノ者ハ早種ナリ、又近年蠻產ノ草綿ヲ傳ヘ栽ユ、苗長サ丈餘ニ及ブ、種子小ニシテ小豆ノ如ク褐色ナリ、尋常ノ者ハ子圓大ニシテ色黑シ、綿ト子ト粘シテ離レ難シ、故ニ赶車ニカケテ核ヲ去ル、蠻種ノ子ハ綿ト自ラ離テ、綿モ尋常ノ者ヨリ强ク、布ニ織テ益アリ、

〔農業全書三六草〕木綿

木綿は、古は唐にもなかりしを、近古宋朝の時分、南蠻より種子を取來りて後、もろこしにひろまり、本朝にも百年以前其たねを傳へ來りて、今普く廣まれり、南北東西いづれの地にても宜しからずと云事なし、其中に付て、河內、和泉、攝津、播磨、備後、凡土地肥饒なる所、是をうへて甚利潤あり、故に五穀をさしをきても、是を多く作る所あり、〇中略先種子をゑらぶ事專一なり、其たね色々ある中に、白花のかぐら、黃花のかぐら、是すぐれたるたねなり、又紅葉わたとて、楓の葉のごとくなるあり、是又花黃白の二色あり、又赤わたの大ごくびと云もあり、又ちんこなどヽ云、何れもよき

大抵枝葉花似黄蜀葵而花淺黄色、其實如桃、呼曰綿桃、四裂中吹出白綿、以攪車繰去中子、其子小者精綿多稱殖生綿爲上、而品類甚多、有白花者、有本赤末白花、或日午前黄色、午後赤紫色者、名曰半夏、

多田綿　出於攝州、花黄而綿甚白、稍強最良、然不殖生、故今多不稱用、

蝦手綿　其葉深剳如蝦手樹葉、故名之、白花而桃大、其綿潔白、然桃數少、

神樂綿　其花有白有黄、杈亦攢生、狀似神巫所持鈴、故名、種之有大利、

佐利綿　出於河州、其枝葉帶赤色、其花本淡紅末黄色、或名赤杈者亦此類也、繰之能殖生、凡神樂佐利之二品爲最上、三十餘年以來行于世、蓋佐利者棄去之謂也、相傳有人變於子稱、始得此稱、有鋸乞之而不與、因棄去其實、故名、但假不肥圃不能茂、

烟草綿　其葉青色而枝椏際生小葉、形如烟草芽、故名之、桃小而不佳、

凡攝津及備後之產爲最上、播磨丹波備中並佳、河州紀州次之、泉州爲下、其他亦出處不枚擧、但北國不種、

凡至白者無如攝州者、精細者無如河州者、大顆者無如丹波者、

綿子綿核　一桃中子六七、或八九有之、小者綿佳、

其用甚多也、磨末搾燈油、謂白油、光大明也、搾精爲田糞良、其磨殼燒火以代薪、其灰以琢銅鐵器、滌垢能脫、其灰汁以洗晒布帛、汚穢去爲純白、造糕屋作睫果子、以綿子灰汁少許和麪糕、令果子脹大、然有小毒、

綿子油、灌不燈用、攝州平野人如用石灰少許澱、始考澄法、今盛用、

〔重修本草綱目啓蒙　二十五灌木〕木綿　パンヤ　一名攀桂花明一統志　娑樹清稗類書　劫貝通雅　板枝花類書　纂要、叙ハ讓ノ略字、　瓊枝群芳譜　迦攀羅正字通

温公通鑑ニ、梁武帝ノ木綿皂帳ノ事ヲイヘリ、史炤ガ釋文ニ、木綿江南多有之、其形狀ウヘ時ヲ詳ニ云ヘルコト、今ノ木棉ナリ、イブカシ、又本邦類聚國史ニ、桓武帝ノ御時、崑崙人木綿種ヲモチ來ルコトアリ、今ノ木棉ト同物ナリヤ、是亦イブカシ、斑(パンヤ)枝花ハ木ナリ別物ナリ、是モ木棉ト云、本草ニノセタリ、是亦布トシ、絮トシ、ツチノ木棉ハ絮トシテ久ケレバ堅シ、斑枝花ハ久ヲヘテモ堅クナラズ、パンヤハ蠻語ナリ、神書ニ木綿ト云ヘルハ紙ナリ、棉花ニアラズ、今祝人綿花ノ絲ヲ用テ木綿襷トスルハ、古制ニアラズ、木綿手繦、日本紀允恭帝紀ニアリ、本朝賦役令曰、木綿ハ紙木皮也、順和名ニ楮ヲ由布ト訓ズ、延喜式ニモ木綿ハ楮ニテ作ルヨシ見エタリ、木綿ハ無毒、子ノ油ハ微毒、燈ニトモセバ目ヲ損スト、本草ニイヘリ、商家此油ヲ菜油ニマジユ、食品藥品トスベカラズ、

〔和漢三才圖會　九十四末　濕草〕草綿　古終　(久佐和多、俗云木綿、蠶綿曰眞綿、故稱之木綿、別有木綿、即斑枝花、蕃木綿)

本綱、有草木二種、似木者名古貝、(出于閩木類、即斑枝花也、)似草者名古終、此種出南番、宋末始入江南、今則徧及江北與中州矣、不蠶而綿、不麻而布、利被天下、其益大哉、四月下種、莖弱如蔓、高者四五尺、葉有三尖、如楓葉、入秋開花、黄色如葵花而小、亦有紅紫色者、結實大如桃、中有白綿、綿中有子、大如梧子、亦有紫綿者、八月采梂謂之綿花、並出中核紡爲細縷、以爲帛甚軟白、

子油(辛熱、微毒)治惡瘡疥癬、燃燈損目、○中略

按相傳往昔蠶綿之外、以穀皮爲衣服、謂之木綿、(訓由布)中古草綿始也、(本朝桓武帝朝、中華宋之末、)先於中華凡可二百年矣、今閩唐綿灰白色、不如倭綿潔白者也、下種先漬水一宿可移灰、否則生出而蟻子害其苗、蓋有早晩、早者八十八夜以後於麥苗之際撒之、晩者四月刈麥攪株傍撒之、既生待梅雨晴可拔去繁生者、稍長後摘去樠葉、至立秋前三日則止、其花向日、性惡北風、喜西風、最惡雨濕、從來南方之種也、俗呼曰日照草是也、如値濕雨則桃不開口而凋、謂之保呂綿、爲濕熱所蒸則不意葉凋落、此乃綿之病名阿天、(急乗朝露、灌灰遽之)

綿としも呼ならへるは、はやくより其名人の口實になりて、草綿にもやがて移して、稱來れりし也、(名物のうへには常に此類おほし)五雜俎をみれば、綿花有草木二種、綿罽之木綿花、ともあれば、彼邦の語も同じきと見えたり、さて眞の木綿も稀にはありとぞ、されど一二歳も經ぬれば、悉く消失ぬといへり、安齋隨筆に、木綿は近年渡り來りて、所々に種る由傳へ聞けりと有り、諸國の人によく訪きゝて尋ねしらまほしき事なり、

さて檜村氏か(市郎右衞門長高といへり、天文永祿の頃の人なり、)室町殿日記には、天文九年の條に、中國衆木綿三十五匹買取といふ事みえたり、(永祿年中の事を書たるに、木綿一反代二百文とあり、)この文によれば、天文の頃既に渡り來れりとも覺ゆ、これも艸草綿なるべし、それより溯て、玄惠法印(建武の頃の人)の庭訓往來十月の條に、木綿一寬配とも見えしは、何れを指るにか定がたけれど、かの衣笠内府の歌にあはせて考れば、此等も木綿とはおもはれず、かゝれば草棉のこゝに傳はりしも、實は鎌倉の代などに、五山の緇徒の、宋元より隨來れるにもやあらむ、(宋々我國の傳へたる類とすべし)

書禹貢に、島夷卉服厥篚織貝と、蔡沈が注に、木綿の事なりといひ、大學衍義補にも、此說によりて、島夷時或以充貢中國未有也、中國有之、其在宋元之世乎といへれど、虞夏の世の卉服を木綿とは定がたし、氣麻葛の類なるべければ、これも五雜俎によりて、梁武帝の木綿皂帳など物にみえたれば、南北朝に權輿して、宋元の頃より盛なりと知べし、

〔大和本草(六民用草)〕木棉　棉布ハ異國ヨリ近古ワタル、其種子ハ文祿年中ニ來ル、朝鮮ニハ洪武二十二年、大元ヨリ種來ル由、東國通鑑ニイヘリ、木棉ナキ時ハ、貧士賤民皆麻布ヲカサネテ寒ヲフセグ、近世木棉ノ種ワタリテ、南北トモニ土地ニ宜シク、四民寒苦ヲマヌカル、誠ニ萬世ノ利、群國ノ寶也、明王ハ金玉ヲイヤシミテ五穀ヲ寶トスト古人イヘリ、木棉モ五穀ニ同ジク寶トスベシ、金玉ニマサレリ、中華ニモ宋ノ末始テ種ヲ南蠻ヨリ傳ヘタリ、兵璦山李時珍諸說皆然リ、然ルニ

布、形似二袈裟一、年可レ廿、身長五尺五分、耳長三寸餘、言語不レ通、不レ知二何國人一、大唐人等見レ之僉曰、崑崙人、後頗習二中國語一、自謂二天竺人一、常彈二一弦琴一、歌聲哀楚、閲二其資物一、有レ如二草實一者上、謂二之綿種一、依二其願一、令レ住二川原寺一、卽賣二隨身物一、立二屋西郭外路邊一、令二窮人休息一焉、後遷二住近江國國分寺一、

〔類聚國史〕百九十九殊俗 延暦十九年四月庚辰、以二流來崑崙人所レ賫綿種一、賜二紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐、及太宰府等諸國一殖レ之、

〔木綿通考〕吾皇朝にいにしへ棉有しを聞ず、唯萬葉集巻三に、しらぬ火の筑紫のわたは身につけていまだはきねどあたゝかにみゆ、とあるを物にみえたる初とす、これ船來の物なるべし、續日本紀に、神護景雲三年三月、始勅二太宰府一、歳貢レ棉、とあるも、唐山より齎わたせる棉を貢りし也、其後類聚國史に、延暦十三年七月、有二蠻船一漂二流至參河一、其人以レ布覆レ背、○中略とあるぞ、其種を傳へ來れる始なりける、然れども中頃の世に絶はてたりと覺しくて、夫木集に新撰六帖にも見ゆ衣笠内大臣の歌、衣笠内府は定家卿の門人にましまして、鎌倉實朝卿と同時にて同門なり、敷島のやまとにはあらぬから人のうゑてし綿の種は絶にき、ともよみ玉へり、卽延暦の世に植たりし種をさし玉へるなり、野語述說には、永祿天正の頃、始て棉種西域より渡り來て、今に百年餘になりぬ、祖母嘗て語られしは、わが十五六歳の時、美濃の岐阜にて木綿といふ物を始て著たりき、當時は人々綺綾の如くに珍重したりしを、それより在在所々に多く植て、一般にひろまりたりと也、されどもいまだ紡織の法を悉さで、今日の精緻には及ばすとみえたり、これ延暦より後ふたゝび棉種の傳來せるなり、但しこたびのは木綿には非ず、草綿にて、今の世に天下なべて物する綿すなはち是なり、

徹成○吉田按ずるに、貝原好古の和事始、及續和漢名數、伊藤長胤の秉燭談などには、文祿の頃渡り來れるよしみえたれば、秉燭談には、南蠻人來貢すと有、永祿は文祿の訛にも有べし、又右の書どもに、此をも木綿の事としたるはわろし、卽今の世まで連綿して、歳々に繁り行める草綿なり、さるを木

草綿
木綿

歟、大凡物之得名皆有所由來、如鮮于枢井、童本舍國、徐老海棠巢、仲蔚蓬蒿宅、王儉蓮府、王祜槐堂、和靖梅屋、元之竹樓、佛印松軒、魏氏菊莊之類、皆有斯物而後得斯名也、今余所名其不然、既有名而後得物、初余譜倣商鞅以設此名、然非不思此花、唯未遑穀之、其有所待乎、然則家僮所爲偶合、余意不亦可乎、於是新名不遷、以益起向陽之志而已、〇下略

〔多識編 三 木〕木綿今按、岐和多、異名古貝、日用 斑枝花、今案波牟仁也、自南蠻來、古終和名岐和多、日本民間所作是也、

〔書言字考節用集〕棉 木綿 古終

〔倭訓栞 前編 七〕きわた　木綿の義、布花ともいへり、今世に行はるゝ物の俗稱也、西竺には太古より有しかども、宋の末に始て種を傳へ、朝鮮には元より種を得たり、我邦には天正永祿の頃より渡來し、万民日用の要物となれり、紅毛語にかとうんころいといふ、かとうんは綿也、ころいは草なりといへり、花を綿といひ、實を桃といふ、似たるをもてなり、本草にも如桃といへり、凡そ木綿と稱するもの四品あり、上古我邦にゆふとよべる是一種、彼邦にて杜仲の一名にいふもの是一種、蠻名ばんやと稱するもの是一種、今の綿花布是一種也、近年一種の木わたあり、高さ七八尺に及、桃は常の如く、實はそ長して小也、又一種あり、其實丸くて小也、棉花と稱す、肥後に安永の初に、紺色の綿できたり、一年にして絶にき、

〔鹽尻 三〕綿花をきわたといふは、唐にも木と草と二種あり、木綿はふとくして桐のごとく、葉は胡桃に似たりとかや、されども草綿には劣りけるよし、草をもすべて木綿といふ、梵語には都貝とも、迦波羅ともいふよし、翻釋名義抄に見えたり、通鑑梁紀史炤が釋文、及び大學衍義補、綴耕錄等に、木綿の事をいへり、

〔日本後紀 八 桓武〕延暦十八年七月、是月有一人、乘小船、漂著參河國、以布覆背、有犢鼻、不著袴、左肩著紺

菜瓜葉ノ形ニ類ス、梢葉ハ剗缺漸ク深クナリテ、大麻葉ノ如シ、故ニ集解ニ開岐有五尖、如人爪形ト云、莖ハ直ニシテ高サ二三尺、葉互生ス、秋ニ至テ葉間ゴトニ一花ヲ開ク、朝ニ開キ夕ニ萎ム、其花五瓣、淡黄色ニシテ瓣根深紫色、草綿花ニ似テ大サ二三寸、コヽニ六瓣ト云ハ非ナリ、花後角ヲ結ブ、桐實ノ形ノ如クニシテ五稜アリ、コヽニ六稜ト云ハ非ナリ、角ニ毛茸アリ、生ハ青ク熟シテ黒シ、自ラ綻テ五ニ分ル、内ニ五隔アリ、隔内ゴトニ小子多シ、形苘麻子ニ似テ、褐色ニシテ微黒ヲ帶ブ、猴頭ノ態アリ、因テ今俗ニサルゴマト云、子熟スル時苗根共ニ枯ル、其根葵根ノ如ク白色ナリ、此根ヲ採リ還魂紙天工開物ノ粘リニ用ユ、一種苗大ナル者アリ、其高サ六七尺、葉亦大ナリ、花大サ三四寸、此品ハ唯種テ花ヲ賞ス、花戸ニテオホカウブト云、ニチイサウ、チヨウセンアサガホ江州トウアサガホ、サンカツサウ備州秋葵、

〔草木六部耕種法四十一〕諸藥物小草根ヲ作ル法

黄蜀葵ハ植地ノ調理、此亦全ク夏ニ異ナルコト無シ、唯其根大ナルヲ以テ、先苗ヲ別畠ニ爲立テ移シ植ルヲ異トス、但一坪ニ十六本ヅヽ植ベシ、四月中旬ニ植テ、九月下旬堀採トキハ、一坪四貫匁ノ根ヲ得ベシ、卽一段千二百貫匁ナリ、金一兩百貫匁ニ賣モ、金十二兩ニテ頗利潤大ナリ、然レドモ此物ハ紙ヲ漉ザル土地ニ於テハ、無用ノ物ナリ、宜ク勘辨シテ作ベシ、此ノ物ノ實ヲ韃靼胡麻ト名ク、一段ノ地ニ黄蜀葵ヲ作ラバ、其實五斗ト七八斗ハ採ベキヲ以テ、油ヲ榨ルモ頗ル出ル者ナリ、又別畠ニ苗ヲ爲立ルモ、蘿蔔ニ異ナルコト無キノミ、

〔鵞峯文集一賦〕黄葵賦井序○中略

偶閲楊萬里題張商弼葵堂詩、誰知半點向陽心之句、且曰、商弼堂不種葵、但取面勢向陽、而是最有稱余心、乃又自號葵軒、○中略慶安辛卯之秋、余舊痾旣愈登營、過庭之暇、閑步後園、見葵花盛開、其長數尺、蕚大色黄、余見之驚曰、余所不栽、從前無之、何爲有之哉、家僮曰、往日曾攜其種以植之、今年生長以至如此、余曰、善哉、夫葵多品類、所謂露葵、兎葵、龍葵、冬葵、蜀葵、黄蜀葵等也、考其時與形色、則黄蜀葵惟肖

黃蜀葵

〔萬葉集 十六 有由縁并雜歌〕作主未詳歌一首
成棗寸三二粟嗣延田葛乃後毛將相跡葵花咲、

〔枕草子 三〕草の花は
からあふひはとりわきて見えねど、日のかげにしたがひてかたぶくらんぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき、

〔千載和歌集 三 夏〕堀川院の御時百首の歌奉りける時、あふひをよめる、　藤原もととし
あふひ草照日は神のこゝろかは影さすかたに先なびくらむ

〔錦林胡蘆集 二〕庭下紅葵屬末乾、手隨日影上欄干、仙桃祇有花堪羨、分與九重春色看、　葵花傾日 永正八年五月盡之會

〔武江產物志 園圃草〕品川邊ノ產　多葵スヽガ瓜

〔佐渡志 五 物產〕葵　方言フユアフヒ　國中ニ栽ユ、食用ニアラズ、

〔多識編 二 濕草〕黃蜀葵、今案土呂呂造紙者用之、壹家曰、和字違、

〔大和本草 七 花草〕黃蜀葵(ワウシヨクキ)　實ヲマキテ生ズ、葉ハ廣ク大ニシテ、切コミタル處岐フカク、蜘蛛ノ足ヲヒロゲタル如シ、其花木槿花又棉花ニヨク似タリ、黃花ヲヒラク下品ナリ、其葉モ花モ甚子バル、其汁ヲ用テ紙ヲスク、トロヽト云、

〔重修本草綱目啓蒙 十一 隰草〕黃蜀葵　トロヽ　カミノキ　ヲヽスケ筑前　カウヅ丹波　カミトロヽ　カボチヤアサガホ　フノリ豐州　京ノフノリ土州　京ブノリ同上　子リ紀州　ヲヽレン肥前　トロヽアフヒ野州　トロノヽ同上　ピナンサウ雲州　一名秋葵汝南圃史　一日花

〔鄉藥本草〕績金木槿事物類聚

春月實ヲ下ス、初生ノ葉ハ三尖ニシテ鋸齒アリテ葵葉ノ如シ、漸ク長ジテ出ル葉ハ、五尖ニシテ

（凡早作畦、不得、且畦者省地而菜多、一畦供一口、）畦長兩步廣一步、（大則水難均、又不用人足入、）深堀以熟糞對半和土覆其上、令厚一寸、鐵齒杷耬之、令熟、足蹋使堅平、下水令徹澤、水盡下葵子、又以熟糞和土覆其上、令厚一寸餘、葵生三葉然後澆之、（澆用晨夕、日中便止、）每一掐輒杷耬地令起、下水加糞、三掐更種、一歲之中凡得三輩、（凡畦種之物、治畦皆如種葵法、不復條列煩文、）早種者必秋耕、十月末地將凍、散子勞之、（一畝一升、五月末散子亦得、）人足踐踏之乃佳、（踐者菜肥、）地釋即生、鋤不厭數、五月初更種之、（春者既老、秋葉未生、故種此相接、）六月一日種白莖秋葵、（白莖者宜乾、紫莖者乾即黑而澀、）秋葵堪食、仍留五月種者取子、（春葵子熟不均、故須留中輩、）於此時附地剪却、春葵冷根土枯生者柔輭至好、仍供常食、美於秋菜、掐秋菜必留五六葉、（不掐則莖孤、留葉多則科大、）凡掐必待露解、（諺曰、觸露不掐葵、日中不剪韭、）八月半剪去、（留其歧多者則去地一二寸、獨莖者亦可去地四五寸、）栟生肥嫩、比至收時、高與人膝等、莖葉皆美、科雖不高、菜實倍多、（其不剪早生者、雖高數尺、柯葉堅硬、全不中食、所可用者、唯有菜心、附葉黃澀至惡、煮亦不美、看雖似多、其實倍少、）收待霜降、（傷早黃爛、傷晚黑澀、）榜簇皆須陰中、（見日亦澀、）其碎者割訖、即地中尋手糺之、（待萎而亂者必爛、）

〔延喜式 二十大學〕釋奠十一座

従祀九座（閔子騫、冉伯牛、仲弓、冉有、季路、宰我、子貢、子遊、子夏、）座別（○中略）豆二（葵菹、鹿醢、）

〔延喜式 三十三大膳〕仁王經齋會供養料　僧一口別（○中略）葵半把（生菜料）

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

攝津國卅四種（○中略）葵子大五升、近江國七十三種（○中略）葵子四升、美濃國六十二種（○中略）秦椒、葵子各一斗五升、阿波國卅三種（○中略）葵子五升、

〔延喜式 三十九内膳〕供奉雜菜　日別一斗（○中略）葵四把（准二升、八九十月、○中略）中宮准此、

耕種園圃

營葵一段、種子二升、總單功卅一人半、耕地二遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、畦上作二人、糞百卅二擔、運功廿二人、下子半人、（八月）芸一遍三人、

ナレ、乾苔ニ代ベシ、一種葉邊ピラツキテ平カナラザルモノアリ、最可ナリ、故ニ其草ヲオカノリト呼ブ、

蜀葵　ハナアフヒ　ツユアフヒ　タチアフヒ　オホアフヒ　オホガラアフヒ南部　一名一丈紅群芳譜　衛足同上　丈紅訓蒙圖彙　衛足葵秘傳花鏡　葵花本草綱目　杖葵和州府志　黍蜀花盛京通志

凡ソ花ノ書及詩文ニ葵花ト稱スルハ、皆此ノ蜀葵ヲ指ス、人家ニ多ク栽テ花ヲ賞ス、苗ハ舊根ヨリ叢生ス、葉ハ多葵葉ヨリ大ニシテ、極リ七八寸、莖ノ高サ七八尺一丈ニ至ル、梅雨前葉間ゴトニ一花ヲ生ズ、木槿花ノ形ノ如ニシテ大ナリ、白色紅紫淺深ノ數品アリ、深紫色ニシテ黑ヲ帶ルヲ黑葵秘傳花鏡ト云、花ハ小ナリ、蜀葵ニ單葉アリ、千葉アリ、瓣ノ形ニ數品アリ、圓ナルヲ圓瓣群芳譜ト云、狹細ナルヲ細瓣同上ト云、瓣ノ鋸齒ノ如キヲ鋸口秘傳花鏡ト云、細ニ剪レテ瞿麥瓣ノ如キヲ、剪絨同上ト云、

錦葵ハ、コアフヒ、一名ゼニアフヒ、

唐山ニテモ錢葵ト云、秘傳花鏡ニ見タリ、葉ハ蜀葵葉ヨリ小ク、多葵葉ニ似リ、莖ハ短ク、同時ニ葉間ゴトニ多ク花ヲ開ク、錢ノ大サニシテ單瓣淡紅色ニシテ、紫色ノ線文アリ、又白花ノ者深紅花ノ者アリ、本草彙言ニ曰、錦葵五月人家供于庭賞、俗云蔣衆、

〔農業全書十藥種之類〕多葵子

多葵子是も藥園に作りて賣べし、十一月たねを蒔、夏實り次第に刈收めて、又二番を立る物なり、是は小葵とて葉にまたありて、花紫なり、小さくして見るにたる物にあらず、葉丸く花大に變らしきは、藥にはならず、

〔齊民要術三〕種葵

臨種時、必燥曝葵子、葵子雖經歳不浥、然濕種者疥而不肥也、地不厭良、故墟彌善、薄即糞之、不宜妄種、春必畦種水澆、春多

シ、左傳爾雅翼曾植表證スベキモノ也、下略○

〔大和本草六蔬〕冬葵　冬ミノル、葉有小岐五ニワカル、花甚小不足觀者是也、古ハ菜トシテ食ス、內經ニ五菜ノ一トス、後世ノ人不食之、故時珍綱目ニ移入濕草、錢葵ノ花ハ是ヨリ美也、

〔大和本草七花草〕蜀葵アフヒ　五月ニ花サク、莖高數尺、花ハムクゲニ似テ、深紅淺紅紫黑白色單葉千葉アリ可玩賞、鮮紅最ヨシ、宿根ヨリ生ズ、又子ヲマキテ生ズルハ、二年ニシテ花サク、其クキヲ水ニ二日ヒタシ、皮ヲトリテナハトシ、又布トスベシ、枯タル莖ヲヤキテ灰トシ、火ヲオサメテ久シクキエズ、是酉陽雜俎ノ說ナリ、中略○

錦葵ゼニアフヒ　本草綱目蜀葵集解ニノセタリ、又錢葵ト云、冬葵ニ似テ別ナリ、冬葵ハ葉ニ岐アリテ五ニワカル、錦葵ハ葉圓ニシテ岐ナシ、錦葵ハ其花紅紫白數色アリ、四五月ニ開ク、錢ノ大ノゴトシ、實ヲウヘテ翌年莖不高花サク、三年ヲフレバ莖高ク、枝多クシテアシヽ、

〔重修本草綱目啓蒙十一草〕葵　カンアフヒ　冬アフヒ　一名奇菜通雅　藤菜同上　滑葵授時通考　阿郁採取月令　向日葵本經逢原、ヒアルマチモ向日葵ト云、秘傳花鏡ニ出ヅ、　葵菜蜀葵條下　增、一名冬蜀葵救荒本草　女菜要覽百國　甜菜同上

凡單ニ葵ト稱スルハ、皆此ノ冬葵ノコトナリ、古ハ食用トス、五菜ノ一也、故ニ古文ニ菜ノコトヲ葵ト書タル例モアリト、通雅ニ辨ズ、此草ハ京師ニ自然生ナシ、諸州江海濱ニ多ク生ズ、近年城州山城ノ鄉ニ多ク栽ヘ、子ヲ收テ四方ニ貨ス、是冬葵子也、一タビ種レバ永ク絕ヘズ、繁茂ス、葉ハ錢ゼニ葵アフヒ葉ニ似テ大サ三四寸、圓ニシテ五凸ヲナシ、尖ラズ、細鋸齒アリ、靑莖直立ス、高サ三五尺、又紫莖ナル者アリ、葉互生ス、春月葉間ニ花ヲ開ク、大サ三四分許リ、五瓣ニシテ多ク攅簇ス、色ハ白シテ微シク淡黃紫ヲ帶ブ、形錢葵花ノ如ニシテ至テ小ナリ、花後實ヲ結ブ、亦錢葵子ノ如ニシテ小シ、花ハ春ヨリ冬ニ至マデ開謝相續キ、寒中ニモ花アリ、冬葵ノ生葉ヲ採リ焙リテ末トナシ、食用ト

〔藥經太素 下〕多葵子 冷味甘

剉焙テ用、消渴淋病小便道結シタルヲ治、乳不通ニ吉、癰腫出キテ毒熱内ヲセメ、未膿時水ニテ五七枚呑バ、必穴出キ膿出。

〔宜禁本草 乾 五集〕多葵 爲百菜主、其心傷人、秋種葵、覆養經冬、至春作子、謂之冬葵子、葉尤冷利、不可多食、天行病後食之頓喪明、根甘寒、主惡瘡、療淋利小便、解蜀椒毒、子甘寒、主五臟六腑寒熱羸瘦五癃、利小便、療婦人乳難内閉、霜葵多食吐水、合鯉食害人、癰腫毒熱内攻未出膿者、水呑葵子五枚、作竅膿出、

〔庖厨備用倭名本草 一 七〕葵 倭名鈔ニアフヒ、園菜部ニ載タリ、多識篇ニコアフヒ、古人ハ種テ常ニ食ス、故ニ舊本草ニハ菜部ニ載タリ、今人ハ食スルモノナク、亦種ルモノナシ、郊野ニ自生ス、故ニ本草綱目ニハ、菜部ヨリ移シテ隰草部ニ入タリ、元升〈井○向〉曰、葵菜ヲアフヒト云、コアフヒト云ハ、種類當ナラズ、此ハ是フキナルベシ、アフヒハ本草ニ蜀葵ト云モノ也、其說分明ニシテ眼前ニアフヒヲミルガ如シ、然バ今云アフヒハ葵ニアラザルコト分明也、吾人古ニハフキヲアフヒト云クルニヤ、倭名鈔園菜部ニ入テ食物トス、然ドモ露葵ヲ同部ニ入テ、和名ヲフヽキト云葵菜ヲアフヒトイヘバ二種トセリ、本草ニハ葵菜ト露葵ト一種二名也、異物ニ非ズ、今經傳本草ノ諸說ヲ擧テ、左ニ辨之、本草釋名一名露葵、李時珍曰、按爾雅翼云、葵者揆也、葵葉傾日不使照其根、乃智以揆之也、古人採葵必待露解、故曰露葵、詩采菽云、樂只君子、天子葵之、注云葵揆也、左傳云、鮑莊子之智不如葵、葵猶能衞其足、魏曾植表云、葵藿之傾葉、太陽雖不回光、然向之者誠也、元升曰、此諸說ハ皆葵葉ノ大ニシテ、數葉相並違テ、日光ニ其根ヲ照シメザルヲ云、是皆フキヲ指テ云ニ似タリ、フキトツワトハ幹身ナシ、其葉ハ數莖根下ヨリ生出シ、直上シテ莖頭ニ圓葉ヲ開ク、大ニシテ廣シ、數葉並綴テ上ニ覆ヒ、日影ヲモラサズ、故ニ其根ヲ日光ノ照スコトナシ、此外ノ諸葵ハ葉大ナリトイヘドモ、皆幹枝ニ生ズ、故ニ其根ヲ覆ハズシテ、日影ヨク其根ヲ照ス、是知ル葵菜ハフキヲ指テ云ベ

冬葵苗葉作菜茹、更甘美、李時珍曰、葵菜古人種爲常食、今之種者頗鮮、有紫莖白莖二種、大葉小花、花紫黃色、其最小者名鴨脚葵、其實大如指頂、皮薄而扁、實内子輕虚、如楡莢仁、四五月種者可留子、六七月種者爲秋葵、八九月種者爲冬葵、經年採收、正月復種者爲春葵、然宿根至春亦生、是今俗呼塞阿布比、延喜大膳職内膳司等式所云葵、蓋是物也、又爾雅有菺戎葵、郭注云、今蜀葵也、似葵華如木槿華、本草圖經云、戎蜀蓋其所自出、因以名之、花有五色、李時珍曰、蜀葵春初種子、冬月宿根亦自生、苗嫩時亦可茹食、葉似葵葉而大、亦似絲瓜葉有岐叉、過小滿後、長莖高五六尺、花似木槿而大、有深紅淺紅紫黑白色單葉千葉之異、昔人謂其疎莖密葉翠萼艷花金粉檀心者、頗善狀之、其實内仁、如馬兜鈴及蕪荑仁、輕虚易種、是今俗呼於保阿布比、或呼波奈阿布比者也、爾雅又有菟蚍衃、郭注云、今荊葵也、似葵紫色、爾雅翼云、比戎葵葉俱小、花似五銖錢大、色粉紅、有紫文縷之、一名錦葵、本草圖經亦云、蜀葵小花者名錦葵、是今俗呼古阿布比、或呼世爾阿布比者、皆冬葵之屬也、又按古所謂阿布比、即加茂祭所用、今俗呼加茂阿布比者是也、其葉似葵葉、故古人誤以葵充阿布比、新撰字鏡所訓當是、至今俗亦訓葵字爲阿布比、謂加茂阿布比、非以阿布比爲葵菫之葵也、本草所載冬葵子葵根、即葵菫之葵、故本草注諸家皆云可食、明非加茂阿布比也、輔仁慣訓葵爲阿布比、誤謂葵菫之葵亦可爲阿布比、遂訓冬葵子爲阿布比乃美、訓葵根爲阿布比乃禰、其誤與訓澤蘭爲佐波阿良々伎、全同、源君依之、訓菜類之葵爲阿布比、後人謂冬葵蜀葵錦葵爲阿布比別名、眞阿布比爲加茂阿布比者、皆襲輔仁之誤也、其加茂葵者、細辛之一種、本草圖所繪、華州細辛近之、

〔類聚名義抄八〕葵音霍 アフヒ　蒲葵棕櫚、一名猪葵、下音逵、アフヒ、

〔下學集下草木〕葵アフイ 又云一丈紅、此草長日以葉衞其足也、左傳云、鮑莊之智不如葵、葵者猶能衞其足、此時鮑莊見刖、謂遭刖足、故云爾也、

〔東雅十三穀蔬〕葵アフヒ　アフヒとは、日を仰ぐをいふなり、猶說文に、黃葵常傾葉向日といふが如し、古の時には、其苗葉を菜となして、常に食ひしと見えたり、其種又少からず、

葵　錦葵　蜀葵　冬葵

ニシテ鋸齒アリテ滑澤ナリ、小ナル者ハ二三寸、大ナル者ハ一尺許、又三葉ニ分レテ隨軍茶葉ノ如クニモナル、又夏巳後ニ生ズル葉ハ圓尖ニシテ鋸齒アリ、大サ一寸ニ登タズ、夏葉間ニ花ヲ生ズ、淡黄色數十攅簇ス、五出ニシテ二分許、後圓實ヲ結ブ、熟シテ秋ニ至リテ其紅葉美ナリ、故ニ人家ニ栽テ、樹身或ハ屋壁ニ延布セシメテ之ヲ賞ス、

〔伊勢物語 上〕昔男ありけり、其男身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまのかたにすむべき國もとめにとて行けり、○中略うつの山にいたりて、わがいらんとする道は、いとくらうほそきに、つたかえではしげり、物心ぼそくすゞろなるめをみる事と思ふに、す行者あひたり、○下略

〔玉葉和歌集 五秋〕題しらず　前大僧正慈鎭

年をへて苔にうもる、古寺の軒に秋あるつたの色かな

〔新撰字鏡 草〕葵芥 同平、音民、葵名、鬩也、又臣惟反、平、阿保比、 蔔 古賣反、葵 加○波○保○比○

〔本草和名 十八〕冬葵子 陶景注、秋種葵、覆養經冬、至春作子、謂之冬葵子、 一名靑葍 出兼名苑 一名姑活 弁治葛也、出疏文、 和名阿布比乃美、

葵根 陶景注同、冒霜可主、 春葵子 赤者羅勒、取茎角黒葉作、服之、於此地即生羅勒、敢同、北人謂之蘭香、爲石勒諱故也、 一名西王母菜 已上三名出陶景注 一名

香菜 出兼名苑 一名冬死夏生、一名野葵 已上出雜要訣 和名阿布比乃美

○蔠葵、一名天葵、一名繁露、一名承露 出陶景注 一名終葵、一名遊蕸 已上出兼名苑 和名加○良○阿○布○比○

○蜀葵、一名戎葵、一名蕮 音堅、花紅紫色、葉如葵、已上二名出兼名苑 一名荊葵、一名芘芣 出古今注 一名吳葵 出神農食經 一名石葵

出七卷食經 一名錦葵 出拾遺 和名加○良○阿○布○比○

〔倭名類聚抄 十七 菜〕葵 本草云、葵 音逵、和名阿布比、 味甘寒無毒者也、

〔箋注倭名類聚抄 九菜〕按葵有三種、本草葵根陶注云、以秋種葵、覆養經冬、至春作子、謂之冬葵、多入藥用、至滑利、春葵子亦滑、是常葵爲、唐本注云、此即常食者葵根也、左傳能衛其足者是也、本草圖經云、

〔箋注倭名類聚抄十草木〕蘿類本草引作以其苞絡石木而生故名絡石、本草和名引作苞絡石木而生、故以名耳、此所引脫絡字、蘇敬又云、此物生陰濕處、冬夏常靑、實黑而圓、其莖蔓延、繞樹石側、若在石間者、葉細厚而圓短、繞樹生者、葉大而薄、人家亦種之、俗名耐冬、山南人謂之石血、別錄謂之石龍藤、陳藏器曰、絡石生山之陰、與薜荔相似、更有木蓮石血地錦等十餘種藤、並是其類、若呼石血爲絡石、殊誤爾、石血葉尖一頭赤、絡石葉圓正靑、蜀本圖經云、生木石間、凌冬不凋、葉似細橘、蔓延木石之陰、莖節著處、卽生根鬚、包絡石傍、花白子黑、陳藏器云、地錦葉如鴨掌、藤蔓著地、節處有根、亦緣樹木、冬月不死、一名地噤、蘇恭注曰、絡石々血、亦此類也、

〔下學集草木下〕蔦蘿二字義同、毛詩蔦與女蘿云々

〔節用集六生植〕蔦　蘿同　絡石同　蘿蔦

〔日本釋名草下〕地錦　つたふ也、木の上をつたふもの也、

〔東雅十五草卉〕絡石ツタ　倭名鈔に本草を引て、絡石一名領石、ツタといふと註せり、萬葉集抄には、イハヅナと云ひしはツタ也と釋せり、イハヅナは石綱也、猶絡石といふが如し、ツタの義不詳、ツタとはハ轉ツタフといふが如し、ツタフとは又ツタヒハフと云ふが如し、蔓に蔓延の義と見えたり、

〔倭訓栞前編十六〕つた　倭名抄に絡石をよめり、されど絡石はていかかづら也、或は蔦字をよめれど、新撰字鏡にほとと訓じ、說文に寄生也といへば、やどり木也、和名抄豐前國築城郡に樢木あり、集韻に樢同蔦と見ゆ、地錦を訓ずべしといへり、海道記に蔦をよめり、つたかづらともいひて、蔓延するものなれば、傳ふの義也、

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕木蓮

地錦　ツタ　マツナグサ古名　一名地朕嘉祐補註本草　承夜同上　夜光同上

山野ニ皆アリ、其蔓樹石土壁ニ著キ鬚根ヲ生ジ、物ニ纏繞セズ、春嫩葉ヲ舊藤ヨリ互生ス、形三尖

蔦

〔質問本草綱目啓蒙（十五蔓草）〕白斂　和漢通名　一名菟（正字通）　五福蔓（網目拾遺）　菟芙（正字通ニ開寶ヲ引）　加海吐

（採取月令）　犬矣吐邑（村家方）

和産ナシ、漢種享保年中ニ渡リ、今傳栽ル者多シ、花戸ニモ亦多シ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、藤蔓甚長シ、其葉初生スル者ハ圓ニシテ尖リ、次ニ生ズル者ハ三尖トナル、並ニ鋸齒アリテ蛇葡萄（ノブドウ）葉ニ似リ、梢ノ葉ハ變ジテ五叉ヲナシ、叉ゴトニ細葉對生シ鋸齒アリ、莖ニ直葉アリテ甚脚葉ニ異ナリ、葉ノ柄皆赤ニシテ互生ス、其葉ニ對シテ一鬚ヲ生ジ物ニ纏繞ス、四五月鬚末ニ小花簇生ス、五出白色、後圓實ヲ結ブ、大サ豆ノ如シ、初ハ綠色也、碧色紫色ニ變ジ、秋ニ至リ熟シテ白色小黑點アリ、內ノ黑子透見ス、枯ルレバ黃褐色、秋深テ尚枯ル、根ハ雞卵ノ如ク兩頭尖ル、凡一窠ニ數枚攢生ス、皮赤黑色、內ハ白シ、肆中ニ鬻グ者舶來ヲ眞トス、和ハ小ナル者多ク斜ニ薄ク切リ乾シテ僞ル、白色ニシテ粉アリ、皮厚ク微褐色ナリ、舶來眞物ハ縱ニ中解シ、皮薄ク淡黑褐色、內ハ白褐色ナリ、

〔延喜式（五宮）〕所須雜藥　白蘞十兩二分

〔延喜式（三十七典藥）〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、（略）〇（中）白蘞二斤二兩、　尾張國卅六種、（略）〇（中）白蘞十三斤、（略）〇（下）

〔日本書紀（神代一）〕一書曰、（略）〇（中）初大己貴神之平國也、（略）〇（中）頃時有一箇小男、以白蘞（カガミ）皮爲舟、以鷦鷯羽爲衣、隨潮水以浮到、

〔出雲風土記（飯石郡）〕凡諸山野所在草木、（略）〇（中）白歛、

〔本草和名（草七）〕落石（蘇敬注云、纏絡石木而生、故以名耳、）一名石鯪、（仁諝音陵、）一名石磋、（仁諝音千何反、）一名路石、一名明石、一名領石、一名懸石、一名耐冬、一名石血、一名石能蘚、（已上三名出蘇敬注、）一名鱗石、一名雲母、一名雲華、一名雲珠、一名雲英、（已上五名出釋藥性、）一名破血傳（出雜要訣、）　和名都多。

〔倭名類聚抄（二十草）〕絡石　本草云、絡石一名領石、（和名豆太）蘇敬曰、此草包石木而生、故以名之、

白蘞

（頭註）按白芷以下至菼盧根別名、誤出于此、

〔多識編 二蔓草〕烏蘞苺、和名比左古豆留、今按豆多、

〔重修本草綱目啓蒙 十五蔓草〕烏蘞苺　ヒサゴヅル（和名鈔）　ビンボヅル　ビンボウカヅラ　フタブル　五葉カヅラ　カキドヲシ（河州）　ヤブカラシ　一名珠子草（名醫別錄）　猪積草（同上）　諫母藤（綱方集驗）　五龍草（本草述）　五葉藤（附方）　五葉草（猪蒫附方）　黒蘞（正字通）

隨地皆生ズ、春末宿根ヨリ苗ヲ生ズ、初出藤葉共ニ赤黒色、漸ク長ジテ淡綠色ニ變ズ、葉互生ス、葉ゴトニ鬚アリテ纏繞ス、其葉一枝五葉、人參葉ニ似テ鋸齒アリ、中ノ一葉尤長シ、夏ニ至リ藤蔓甚繁延ス、故ニヤブカラシト云フ、六七月枝梢ゴトニ叉ヲ分チ花ヲ開ク、四瓣綠色、大サ一分餘、中心黃赤色四蘂アリ、後圓實ヲ結ブ、大サ南天燭子ノ如シ、生ハ綠色、熟スレバ黒色、秋深テ苗枯レ、根ハ枯レズ、長クシテ藤蔓ノ如ク褐色ナリ、寸斷スルモ春ニ至テ猶苗ヲ生ズ、此草和州南都越後高田越前鯖江土州高智等ノ地ニハ生ゼズト云フ、

〔本草和名 十草〕白蘞（仁諝音廉僉反）一名菟核、一名白草、一名白根、一名昆侖（楊玄操音論）一名甘草、一名蚖蚵、一名良侖（已上三名出釋藥性）一名白臨（出葛氏方）一名菟菀（出兼名苑）和名也末加々美、

〔倭名類聚抄 二十草〕白蘞　本草云、白蘞（廉僉反、和名夜末賀々美、）

〔箋注倭名類聚抄 十草〕陶注、作藤生、根如白芷、蘇注、此根似天門冬、一株下有十許根、皮赤黒肉白如芍藥、殊不似白芷、蜀本圖經云、蔓生、枝端有五葉、圖經云、二月生苗、多在林中作蔓、赤莖、葉如小桑、五月開花、七月結實、根如鷄卵、三五枚同窠、皮黒肉白、

〔多識編 二蔓草〕白斂、和名可可美久左、又云也末加加美、又云保登、

〔物類品隲 三草〕白蘞　先輩ホトトスルハ誤ナリ、漢種享保中種ヲ傳テ官園ニアリ、葉五爪龍ニ似テ小ナリ、根ニ塊アリ、秋結實大如大豆、生青熟青碧色、

〔箋注倭名類聚抄十〕按證類本草紫葛在草部、蒲萄在果部、又紫葛條引唐本注云、苗似蒲萄、是可證紫葛蒲萄非一物、故本草和名云、紫葛和名衣比加都良、蘡薁和名於保衣比加都良、與漢語抄以蒲萄訓衣比加豆良乃美、其說不同也、源君以本草和名紫葛漢語抄蒲萄、其和名同、混爲一條、誤、按蒲萄本西域所產、漢無其字、故假借蒲陶字、見漢書西域傳、後人從艸作萄、與訓艸也之萄混、蘇注紫葛云、苗似蒲萄、根紫色、大者徑二三寸、苗長丈許、蜀本圖經曰、蔓生、葉似蘡薁、根皮肉倶紫色、圖經曰、春生多枯、郭上林賦注、蒲陶似燕薁、可作酒、

〔大和本草八草〕紫葛　本草蔓草門ニ出ヅ、根紫色春生ジ多枯トイヘリ、和名ガ。チ。プ。ト云、是亦蒲萄ニ似タリ、本草ニ根皮搗爛惡瘡ヲ治ス、搗末醋和封之ト云ヘリ、是押薬ナリ、和方一切無名腫毒ニ、ガチブノ根ノ末糯米粉ト等分、温湯ニ調和シ、患處ニ付ル、熱毒ニハ勿用、忌鐵、或酒ニ和シテ付ル妙方也、苦味アリ、又救荒本草蛇葡萄アリ、三才圖繪草木第十巻有蛇葡、是亦紫葛ナルベシ、蔓生葉似葡而小花、結子如豌豆トイヘリ、ガチブハ根ノ味シブシ、根ニ粉アリ、カラミニハ粉ナシ、カラミハ葉ノ岐フカク、ガチブハ淺シ、或曰嫩葉老葉カハル故ニ淺深アリ、カラミハ多ク、ガチブハ少シ、カラミヨリモ蒲萄ニヨク似タルハガチブ也、

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕紫葛　ガ。チ。プ。　カ。モ。エ。ピ。　エ。ピ。プ。ル。和州

深山幽谷ニ生ズ、苗葉蛇葡萄ニ似タリ、或ハ三尖或ハ五尖皆鋸齒アリ、葉ゴトニ鬚アリテ物ニ纏フ、葉紫色ヲ帶ビ光リアリ、紋脈紫色、背モ亦紫色、花實ハ蛇蒲萄ニ似タリ、實熟シテ紫色嫩葉ト秋葉ト紅色ニシテ美ハシ、秋後葉落テ、蔓ハ枯レズ、根紫色ニシテ粉アリ味澁シ、

〔古事記上〕於是伊邪那岐命見畏而、逃還之時、其妹伊邪那美命言、令見辱吾、卽遣豫母都志許賣(此六字以音)令追、爾伊邪那岐命取黑御鬘投棄、乃生蒲子、○(蒲子、日本紀作蒲陶)

〔本草和名十一草〕烏蘞苺、一名白𦮙、一名莅、一名蕺(古叛反)一名莨(吐敕反、已上四名出雜名苑)和名比。佐。古。都。良。

紫葛

地ヲ呼テ取苗代(ナヘシロ)ト云ヒ、城正寺ノ雨宮ヲ以テ栽培家ノ首祖トスルニ至ル、

〔甲斐國志 百二十三 產物及製造〕一葡萄 和名エビ 又作蒲桃 本州名產ナリ、岩崎村第一ニシテ、勝沼驛ノ產之ニ次グ其它所植アレドモ遙ニ不相及ト云、二村ハ山續ノ畠上ニ架ヲ並ベ設ルコト、市中瓦屋ノ鱗次セルガ如シ、松平甲斐守時、九月ノ獻上物ナリ、今モ猶府中藩鎭ヨリ獻之、又上岩崎村ヨリモ每年公儀ヘ納ム、八九月ノ間荷駄シテ四方ニ販グ、一駄ノ直金壹兩貳兩許ト云、日ニ曝シ乾ケルヲ干ブドウト云、樹ニテ自然ニ乾ケルヲ製タルハ稱爲上品 拌煉シテ膏トスルヲ蒲桃膏ト云、共ニ珍味ナリ、古童謠ニ、甲州みやげに何にもろふた、郡内しま絹ほしぶだう、芭蕉ノ發句ニ勝沼や馬士は蒲桃を喰ながらイニぶどうを一ツづゝ、蜀都賦ニ、蒲桃亂潰檘栗罅發ト、本州ノ蜀ニ似タルコト物產ニ至ルマデ皆然リ、又蜀人釀以爲酒、富人藏酒至千斛、十年不敗ト云リ、徂徠詩アリ、甲陽美酒綠葡萄、行霜三更濕客袍、可識良宵天下少、芙蓉峯上一輪高、ト賦セシモ即是ナリ、培養ノ方、冬至ノ頃ニ古藤ヲ剪リ去ルニ法アリ、寒中ニ三度人糞土苴ヲ用フ、酒糟ヲ善トス、春彼岸ニ及ビ、以竹木造架、生芽蔓長スルニ隨ヒ、有用無用ノ條ヲ撰テ透シ去ベシ、季春ヨリ除蟲ニ始マリ、夏中ノ調理ニ至ル、多年鍊磨ノ功ニ依テ能之スト云、

〔木曾路名所圖會 三〕信濃藪原(やぶはら)

土產 中略〇 葡萄　木曾の諸村みなこれを種る、此邑特に佳味なり、上供す、

〔紀伊續風土記 物產五〕葡萄(ブダウ) 本草 本草和名ニ於保衣比加都良、醫心方ニ衣美、 綠葡萄(アヲブダウ)本草　水晶葡萄(シロブダウ)本草　紫葡萄(クロブダウ)本草　馬乳葡萄(ナガブダウ)本草

右五種、各郡人家に皆栽う、今市中に售るもの高野領より多く出す、

〔本草和名 十一草〕紫葛　和名衣比加都良。。。。。

〔倭名類聚抄 二十草〕紫葛　本草云、紫葛 和名衣比加豆良 文選蜀都賦云、蒲萄亂潰、萄音陶、漢語抄云、蒲萄衣比加豆良乃美、

多日ナラズ、曾能ク干固モノニテ、其味極美ナリ、且能ク手入スルトキハ、土用ヲ越テ貯ルト雖ドモ、損スルコト無シ、近來漢土人此ヲ時々持來ルコト有リ、舶來ナルハ最上品ニシテ佳味ナリ、又甲州ニテモ干葡萄ヲ製ス、然レドモ其品大ニ舶來ノ者ニ劣レリ、其製法ノ飴ニシテ、蜜亦下品ナルガ故ナリ、嚴老〇佐藤信淵先年土佐產ナル上蜜ヲ用テ製セシニ、甘味極テ美ナルコト、遙ニ舶來ノ上ニ出タル佳品ヲ得タリ、故ニ干葡萄ヲ上品ニ製セント欲セバ、宜ク極上ノ蜜ヲ用ベシ、

〔甲州葡萄栽培法上〕第一章　甲州地方葡萄樹繁殖來歷

夫レ葡萄ノ我國中ニ蔓延シタル所ノ初メヲ繹ヌルニ、未ダ悉ク其由來スル所ノ地方、及ビ其經歷スル所ノ年度ヲ詳ニスルコト能ハズト雖モ、〇中略文治二年後鳥羽天皇ノ御宇ニ當リ、甲斐國八代郡祝村今上岩崎村ニ屬セル所ノ、入會山中ニ一塲地アリ、里人之ヲ字シテ城の平ト稱フ、往古ヨリ此ニ石尊宮ノ祠ヲ安ク、每年三月二十七日ヲ以テ之ヲ祭ルヲ例トシ、遠近ノ里人相群賽セリ、歟中雨宮勘解由今雨宮作左衞門ノ先祖ナリト云ヘル者アリ、固ヨリ其村人タルヲ以テ、是歲モ亦此ニ來リ賽スルニ會セシガ、偶其路傍ニ一種自生ノ蔓生植物アルヲ發見シ、卽チ衆ニ觀シ云ク、此植物ハ山中ニ於テ未ダ曾テ見ザルノ物ニシテ、又人ノ之レ有ルヲ語ルモノナカリシハ、亦眞ニ奇ナラズヤ、案ズルニ其莖蔓及ビ皮葉ノ形狀ハ、大ニ尋常ノ山葡萄ト異ナル所アルモ、又他ノ之ニ類似スルモノナシ、蓋シ其一種ノ變生シタルモノナランカ、若シ我思想ノ如クニシテ美果ヲ得ルコトアラバ、卽チ是レ尊宮ノ賜ニシテ、永ク祭賽ニ供スルニ足ルモノト云フ可シ、故ニ今衆ト相議リ、之ヲ我ガ園中ニ移植シ、以テ其生長ヲ試ミントスト、然ルニ衆皆之ヲ疑ヒ、敢テ其可否ヲ云フ者ナシ、是ニ於テ雨氏ハ愛物ノ情更ニ畜テ巳マザレバ、遂ニ之ヲ城正寺ノ家園ニ移植シ、務メテ之ヲ培養スルコト、恰モ慈母ノ孩嬰ヲ鞠育スルガ如ク、專ラ其結果ノ秋ニ至ルヲ待シトゾ、(是ヲ甲州ニ於テ葡萄ヲ栽培スルノ第一期トス、此緣由アルヲ以テ、今尙ホ土人等、城の平ノ葡萄始生

斯ノ如キ三俣、本八尺許ナルヲ二尺埋込テ、高六尺ニ棚ヲ造リ一間ニ渡シ、竹五本ヅヽ架ルヲ定法トス、毎年正月下旬ヨリ二月上旬迄ニ、竹ノ縄目ヲ結ビ直ス、芽出ノ時分ニ至リ俗ニブンテウト云フ小蝶、日夕ニツルミテ飛來テ枝ニ泊リ、朝日ノ出ル頃ニ見ヲ枝ニ產ミ付テ飛去ル、其見悉ク虫ト化テ葉モ芽モ喰ヒ盡スニ至ル、日出ザル前ニ棚下ヲ巡察シテ、見當リ次第ニ打殺ベシ、既ニ日光ニ遇フトキハ飛コト速ニシテ及ベキニ非ズ、万一此ヲ殺サヾルトキハ、枝ノ下裏ノ方ニ見ヲ產ミ付ケ置クヲ以テ、小刀ニテ削去ベシ、此ヲ捨置クトキハ大ナル禍ナリ、又羽光テ三分許ナル小金虫（コガネムシ）ノ如キ蟲ヲ、木皮間ヨリ生ズ、此ヲモ速ニ取リ去ベシ、別ニダイギリト名クル蟲アリ、此ハ葡萄二年木三年木ノ枝中ヨリ生ズ、此虫生ジタル枝ヲ上ヨリ視レバ、少シ黒ク色附者ナリ、其處ヲ小刀ニテ削リ虫ヲ去ベシ、此ヲ早ク除ザレバ木ヲ喰殺ガ故ニ、其處ヨリ根本ハ害シト雖ドモ、其ヨリ末ハ皆悉ク枯者ナリ、　甲州ニテハ實生ノ葡萄ニハ實結ザル者ト心得テ、專ラ壓條（トリキ）ト揷木シテ其株ヲ多ス、然レドモ是ハ未ダ實生ニ實ヲ結シムルノ法ヲ知ラザルナリ、且其肥培ヲ用ルモ、大地ニ溜桶ヲ埋メ雨覆シテ下水ヲ湛ヘ、酒粕ト糠ヲ饒ニ調和シテ、寒中根邊ニ濃糞ヲ澆ギ、且每年薄キ水糞ヲ用ルノミ、未ダ葡萄ヲ作ルノ善ヲ盡セル者ニ非ルナリ、又勝沼ニテ壓條ニシタル二年木ヲ、一根金二銖ヅヽニ鬻ク、右樣ノ事ニテ、右二村每年万金以上ノ盛產ナルヲ觀レバ、葡萄ヲ作ル利潤ノ廣大ナルコトヲ察スベシ、若此ヲ海運自由ナル土地テニ作ラバ、其利益大ナルベシ、近來葡萄ヲ作ル者ハ、甲州種ヲ稱スト雖ドモ、我家別ニ良法有テ、其實ノ小者ハ培養ヲ以テ大粒ニシ、其味ノ甚酸シテ且苦者ヲバ糞苴ニテ、此ヲ甘美ニスルヲ以テ、白蒲桃ノ種ナレバ、何レニテモ早ク揷テ早ク蔓延シムルヲ利トス、但水晶種ナレバ殊ニ宜シ、　乾蒲桃ヲ製スルニハ、能ク大ナル實ノ未ダ熟過ザルヲ採テ、蒲桃二升ナラバ、先ヅ銅鍋ニ蜂蜜一升ヲ煎ジ、其沸タルニ臨ミ、蒲桃ヲ入レテ五六沸モ煮染メ、籠ニ揚テ蜜ヲバ垂シ、此ヲ曬乾ニスルトキハ、

すニテ宜シ、備其葡萄ノ枝ノ本末ヲ其穴ニ插込テ、其根邊ノ土ヲ輕ク蹈付置テ、乾過ザル許ニ泔水ヲ澆ギ、時々潤ストキハ、春暖ノ陽氣ヲ得テ直ニ芽ヲ出ス者ナリ、最初ノ間ハ其根邊ニ種々ノ雜草生ズルト雖ドモ、耘ラズシテ捨置クベシ、土用過ニ至リ蔓ノ頗延タルニ及テ、他草ヲ悉耘リ根ヲ去ルコト一尺餘ヲ隔テ、土ヲ穿リ竪直ヲ埋ベシ、寒中ニ至テ其插タル枝ヲ能ク関シテ、二本ノ内ノ强壯ナル一本ヲ遺シ、弱キ一方ヲバ利刀ニテ伐棄ベシ、且又寒中蠶ヲ埋ルヲ要トス、翌年ノ二月マデニ棚ヲ構テ、其上ニ蔓延シムベシ、揷木ハ二年目ヨリ必實ヲ結者ナリ、葡萄ヲ多ク作ランコトヲ欲スルトキハ、棚亦數多構ズンバ叶ベカラズ、凡葡萄棚ハ大抵長五間横二間高八九尺ニモシテ、大風ニ吹倒サレザルヤウ、丈夫ニ構ベキコト專一ナリ、葡萄ハ幾本ニテモ適宜ニ穿插シテ蔓菜シムベシ、棚一ケ所十坪ヅヽナルヲ以テ、一段ノ畑ニ二十二棚以上ハ構難シト知ベシ、備其一棚ノ葡萄能ク豐熟スルトキハ、三四駄ノ實アリ、然レドモ此ヲ二駄ヅヽト積テモ、二十二棚ニテハ四十四駄ノ實ナリ、甲州山梨郡勝沼岩崎二村ハ、葡萄名產ニテ、夥ク此ヲ作リ、年々八千駄許ヅヽ、生ズト云フ、其中三千駄許ハ其ノ處ニテ倒キ、二千駄許ハ、乾葡萄及葡萄膏、葡萄醃等ニ製シ、葡萄一駄ト云フハ十六貫ニテ、一籠ノ斤量一貫七百目ナリ、籠ハ巾五六分ナル身竹ノ調ヲ五籠ニテ、一籠ハ横ヘ二籠故ナリ、一籠底共巾一寸、皮付竹ニテ、横巾九寸、長一尺三寸五分ニ裁入、此ニ小籠ヲ詰ル、一籠ヘ先小籠ヲ入、宜カラザレ、一籠ヲ以テ中央ニテ左右ニ分テ、又匡中ニ籠丈ニ小籠ヲ詰、上ニ置テ、其上ニ籠ヲ三一貫ニ五十六七匁ヨリ六十匁ヲ限トシ、大ナルハ五十一二匁ナルヲ上品トス、且詰ルトキニ、レヤ、其餘三千餘駄ハ江戸ニ輸テ賣リ換フ、勝沼邊ヨリ江戸マデ一駄賃金三分ト云フ、江戸問屋肆田町ニ三軒、宮田町金二郎、一屋、甚ノミ、ツ輸由ナリ、大體三段一駄金二兩一歩位ヨリ金三兩一歩位マデ、小判一兩七十匁、銀一割ノ口銭ニテ、問屋ハ八掛六四ニテ賣、仕切ハ十月十一月中旬ニ皆濟、勝沼岩崎二村ニテ葡萄ヲ作ルニハ、大抵一畝二本、一段二十本、一町二百本、炎熱ノ年ニハ一本ノ善術スル者ハ一駄餘リモ實ヲ生ズ、每年五月中頃ニハエノミト稱シテ、豐熟ノ委願ル者ナリ、甲州ノ葡萄棚九尺間ニ七八寸、圍リノ

葡萄

ヲナスベキ者ナリ、

〔百品考上〕青藤　和名アヲカヅラ

廣東新語、有青藤仔、葉長三四寸、多芒刺、莖大如指而堅韌、人日用之、比北地之用柳條、花名假素馨、煎湯以洗瘡疥甚良、

肥後ニ自生アリ、蔓生山藤ノ如ク、舊莖ハ褐色、新條ハ色青シ、鉤刺多シ、葉ノ狀細長ニシテ深綠色光アリ、長三四寸、幅七八分、春イマダ葉ノ生ゼザル前ニ花アリ、五瓣ノ小黃花、素馨ノ花ニ似テ至テ小ナリ、大サ三分許、花後圓實ヲ結ブ、熟シテ深碧色、小葉麥門冬ノ實ノ如シ、冬月葉落ツ、蔓ハ山藤ノ如ク、堅韌ニシテ用ヲナスベキ者ナリ、

〔採藥使記中相州〕照任曰、相州猿島ヨリ清風藤ヲ出ス、其葉山茶ノ葉ニ似タリ、先生按ズルニ、本艸ニ清風藤ノ葉ノ形狀ヲ載セズ、輕卒ニハ藥用トスベカラズ、

〔伊呂波字類抄江植物附植物具〕蒲萄エビスカヅラノミ　葡萄、蒲萄、葡萄子、

〔書言字考節用集六生植〕葡萄ブダウ　一名草龍珠、本草見酉陽雜俎、蒲桃漢名

〔草木六部耕種法十九實〕蒲桃ブダウモ名譽ノ果物ナリ、種類ニ黑、紫、白ノ三色アリ、白色ナル者ヲ上品トス、且其白色中、皮美ク透明スキトホルガ如クナル者有リ、此ヲ水晶蒲桃ト名ク、卽是ヲ最上種トス、宜ク此種ヲ作ベシ、此物ハ種子ヲ蒔モ、能生ズル者ナレドモ、早ク繁蔓テ實ヲ結シムルニハ、揷木サシキニスルヨリ良ハ無シ、地ヲ擇デ能揷タルハ、其年內ニ實ヲ結ブ者ナリ、且其蔓ノ繁リ延ルコト極テ、盛ニシテ、一年ノ中ニ四方數丈ノ間ニ蕃衍スル者ナリ、　此ヲ作ル地ハ、能ク肥タル北向ノ山畑ニ宜ク、或岩石ノ間ナル土地モ能ク繁榮スル者ナリ、或水田ヲ乾テ此ヲ揷木スルトキハ殊更ニ宜シ、此ヲ穿揷スル法ハ、去年出タル枝ノ無名指クスリユビノフトサ太ナル、利刀ヲ以テ、長三尺許ニ斷リ、正月下旬ヨリ二月中旬頃マデノ間ニ揷ベシ、先ノ細棒或竹杖等ヲ用テ、一尺程ヲ隔テ地ニ穴ヲ二ツ突ベシ、其深五六

ツリフネ草

蘆未ダ見ズ、飛入ノ者ヲ倒影花、(群芳譜)又洒金(二錦白實紅點花纈註)ト云フ、其實圓ニシテ微シク長ク末尖ル、單瓣ノモノハ桃實ノ形ニ似テ小ク、千瓣ノモノハ瘠セ狹シ、熟シテ物ニ觸レバ、縱ニ皮自ラ拆ケ、卷テ拳ノ如シ、ソノ勢ヒニ因テ中子飛出、故ニ急性子ノ名アリ、コノ子ヲ骨鯁ニ用ユ、唐山ニテハ此花ヲ以テ女兒ノ爪ヲ染ム、長崎及琉球ニテモ然リ、故ニツマクレナヰノ名アリ、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕赤車使者 〇中略

增、赤車使者ハツリフネサウナリ、集解蘇恭ノ說ニ參考スベシ、山中溪澗ノ傍ニ生ズ、高サ一二尺、多ク枝ヲ生ジテ橫ニ繁茂シ易シ、ソノ莖紫赤色、多ク水氣ヲ含ミ、透明潤澤ニシテ蚯蚓ノ色ノ如シ、莖ノ背ハ淡綠色ナリ、葉莖ニ互生ス、形香薷(カウジユ)ノ葉ニ似テ大ナリ、又羅勒ノ葉ニ似テ長シ、大抵長サ二三寸、濶サ一寸五分許ニシテ、前後頭ニ尖ル、秋ニ至テ葉間ゴトニ細枝ヲ垂テ、其末ニ花ヲ開ク、橫ニ長キコト一寸五分許、恰モ船ヲ釣タル形ノ如シ、故ニツリフネサウト呼ブ、花後莢ヲ結ブ、實ヲ落テ生ジ易シ、又キツリフネト云アリ、尋常ノモノヨリ纖嫩ニシテ、莖葉共ニ淡綠色ナリ、甚ダ水氣ヲ含ム、秋ニ至テ黃花ヲ開ク、花ノ形微シク異ナリ、クチナハジヤウゴハ赤車使者ノ一種ナリ、

淸風藤

〔重修本草綱目啓蒙 十五蔓草〕淸風藤 詳ナラズ 一名海風藤(藥性纂要註) 增、一名靑風藤(綱目備要)

增、此條、集解ノ文甚ダ短クシテ考フベカラズ、然レドモ釋名ニ靑藤ノ名アル時ハ、廣東新語ノ靑藤ト同物ナルベシ、百品考ニ云、靑藤和名アヲカヅラ、廣東新語曰、有靑藤、仔葉長三四寸、多芒刺、莖大如指、而堅韌、人日用之、比北地之用柳條、花名假素馨、煎湯以洗疥癬甚良、肥後ニ自生アリ、蔓生山藤ノ如ク、舊莖ハ褐色、新條ハ色靑シ、鉤刺多シ、葉ノ狀細長ニシテ深綠色光アリ、長サ三四寸、幅七八分、春未ダ葉ノ生ゼザル前ニ花アリ、五瓣ノ小黃花、素馨ノ花ニ似テ至テ小ナリ、大サ三分許、花後圓實ヲ結ブ、熟シテ深碧色、小葉麥門冬ノ實ノ如シ、冬月葉落ツ、莖ハ山藤ノ如ク、堅韌ニシテ用

鳳仙花

て、まかりたゝんとしけるほどに、

てる月を正。木。の。つ。なによりかけてあかず別るゝ人をつながん　河原左大臣

かへし　行平朝臣

かぎりなき思のつなのなくばこそ正。木。のかづ。ら。よりもなやまめ

〔十六夜日記〕十九日、(十月、○中略、建治三年)すのまたとかやいふ川には、舟をならべて、ま。さ。き。の。つ。なにやあらん、かけとゞめたるうきはしあり、いとあやうけれどわたる、

〔饅頭屋本節用集 草木〕鳳仙花

〔多識編 二草〕鳳仙、今案保爾奴岐、俗云保。宇。世。牟。久。和。、

〔書言字考節用集 六生植〕鳳仙花(金鳳花、菊婢、小桃紅、並同、)　鳳仙花　金鳳花(鳳仙花一名、又異種同名多、)

〔尺素往來〕先為庭上之景、莊嚴前栽仕候、○中略秋花者○中略鳳仙花、

〔大和本草 七花草〕鳳仙花　一名金鳳花、又名夾竹桃、其實急性子、其花數品アリ、女兒此花ト酢漿草ノ葉ヲモミ合セテ爪ヲ染ム、紅色トナル、六七月ニ花開ク、其實ハ骨鯁ヲ治、

〔重修本草綱目啓蒙 十三下隰草〕鳳仙　ホ。ウ。セ。ン。ク。ハ。(通名)ツ。マ。グ。レ。ナ。キ。(古名)ツ。マ。ベ。ニ。　ツ。マ。子。

ホ。子。ヌ。キ。(肥前)ツ。マ。グ。ロ。(筑前)ツ。マ。グ。レ。(同上)ト。ピ。シ。ヤ。ゴ。(豫州)ミ。ヤ。コ。ワ。ス。レ。(藝州)

カ。ウ。セ。ン。ク。ハ。(南部)　一名染指草(壽世保元)　指甲花(典籍便覽)　鳳兒花(汝南圃史)　透骨草(同上、同名多シ、本草原始ノハ詳ナラズ、救荒本草ノハ金盞草、透骨子ハ淡竹葉ナリ、)　指甲草(廣東新語)　指甲桃(同上)　滿堂紅(寧波府志)　夾指紅(山東通志)　增、一名鳳娘(西湖遊覽志)

春種ヲ下ス、宿子地ニアルモ亦自生ス、莖ハ圓大、葉ノ形桃葉ノ如ク密ニ互生ス、葉莖共ニ淡綠色、夏ニ至リ葉間ゴトニ花ヲ開ク、單葉ノ者ハ二瓣、二葉ノ者ハ多瓣ナリ、色ニ品多シ、紅アリ、紫アリ、紅花紫蕚アリ、淡紅アリ、水紅アリ、雜色アリ、白花ノモノ稀ナリ、唐山ニハ黃花ノ者モアリト云、和

るまさきのかづら色づきにけりとよみしは、總て常葉なる草木も、冬の初めには、去年のふるはの色づき落る物なるが、ことに山の岩木などに纏へるとこはかづらの、葉は南天燭に似て繁み有が、冬の初に古葉のえもいはず紅づる侍り、是ぞ山ゆく時專ら目に付てみゆれば、右の如くはよみつらん、是を思ふに此かづらをまさきづらといひて、さて神事には用ゐつらめと覺ゆる也、

〔大和本草　蔓草八〕正木ノカヅラ　其葉花實トモニマユミニ同ジ、只其カツラ甚長シ、皮ノ中ニ絲アリマユミノ如シ、漢名レレズ、是杜仲ノ別種ナルベシ、マユミヲ正木ト云、蔓生ト木生トノカハリニテ一物ノゴトシ、和語ニ長キト云枕詞ニ、マサキノカツラト云、古今集序ニモカケリ、此カツラ甚ナガクノブル故ナルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙　蔓草十五〕扶芳藤　マサキノカヅラ　ツルマサキ　ツタマサキ和名　一名巴山虎綠丹

葉花實共ニマサキニ異ナラズ、樹上ニ蔓延シ、四時青翠、コレ藤本ノマサキナリ、

〔古事記　上〕天宇受賣命、手次繫天香山之天之日影而、爲𦆅天之眞拆而、略○下

〔古語拾遺〕令天鈿女命、註略○以眞辟葛爲鬘、中○巧作俳優、相與歌舞、

〔日本書紀　皇極二十四〕七年九月、勾大兄皇子、聞○安觀聘春日皇女、略○中口唱曰、略○中伊莾我堤嗚、倭例儞魔柯攞每、倭我堤嗚麼、伊莾儞魔柯攞每、麼左棄逗囉、多多企阿藏播梨、略○下

〔萬葉集　雜歌七〕芳野作

皇祖、神之宮人、冬薯蕷、彌常敷而、吾反將見、

〔古今和歌集　大歌所御歌二十〕とりもの丶歌

み山には霰ふるらしと山なるまさきのかづら色付にけり

〔後撰和歌集　雜十五〕家に行平朝臣まうできたりけるに、月のおもしろかりける夜、さけなどたうべ

眞辟葛

ク漆葉又ハゼウルシノ葉ノ如シ、其嫩葉ノ三葉ナル者ト大ニ異ナリ、秋ニ至テ紅葉スルコト亦漆葉ノ如シ、故ニツタウルシ、ヤマウルシ等ノ名アリ、

〔書言字考節用集 六生植〕薜荔（マサキノカヅラ）木名、木蓮、本草、四時不凋、厚葉堅強、大于絡石、不花而實者、　木饅頭（同）　眞辟葛（アマキノカヅラ）（同）古語拾遺

〔倭訓栞 前編二十九〕まさきのかづら　古語拾遺に眞辟葛と書り、古事記に天之眞折と見ゆ、されど眞榮の義なるべし、常葉に榮ゆる葛也、神事に專ら用るは、眞幸の義とも取れるなり、延喜式に眞前葛と見え、日本紀の歌にまさきづらとよみ、万葉集に多𦯶禮（ヒナキ）葛、又多𦯶禮都良とも書り、いや常（トコ）しきにとも、尋てゆければともつゞけるは、常磐に長くはひ續くをいふなり、薜荔也といへれど、薜荔はいたび也、杜仲（マサキ）の葉に似て小に蔓生するものの一種ありて、蔓甚長く、皮中に木綿あり、是也といへり、仙覺はさねかづらと訓じたれど、古今六帖に、まさきかつらとて、右の萬葉の歌入たり、

〔冠辭考 九麻〕まさきづら　○中略　眞さきづらの事は、万葉にいや常しきにとよみ、多𦯶禮とも書つれば、常に榮る葛なるはしるし、さてその常葉なる故に眞榮葛（マサキカヅラ）と云を、略きてまさきづらとはいふ也、かの眞さか木てふも眞榮樹の意なるを思ふべし、何となれば古へ神事にも公事にも、言（コト）あげするには、常磐に堅磐になど讃稱（ホメタヽヘ）る物多し、そのをり、は木をもかづらをも常葉なるをもてすめれば、そをほめたゝへて、眞榮樹といひ、眞榮葛とはいへる也、且神社によりて松杉樫などをさか木といひて、一種ならぬをおもふに、かづらも常葉なるをば、すべて眞榮づらといふべし、然ればいと古へはまさきかづらも、神社によりて用ゐなれしは、さま〳〵有べきが中に、一つによりていはゞ、その常葉なるさか木が中に、かの鏡幣をかけ髻華にさしなどせしは、樫なる據あり、是が如くまさきかづらといふ中に、檞とし鬘とせしは一種有つらんかし、そのよしは古今集に、み山にはあられふるらし、外山な

一名鐵綫草(救荒本草)　小蟲兒臥單(同上)　小蟲臥單(本草原始)　挨地錦(同上)

氣校正ニウブラグサト訓ズルハ是ニ非ズ、此モ小草ナリ、夏ヨリ子生ズ、莖ハ地ニ就テ布キ上立セズ、纖細ニシテ赤色毛アリ、長サ數寸、葉ハ兩對ス、形雀舌草ニ似テ短ク、廣シテ尖ラズ、綠色ニシテ微紫ヲ帶ブ、背ニ毛アリ、六月五瓣ノ小赤花ヲ開ク、馬齒莧花ノ如シ、實ヲ結ブ、形圓ニシテ三角、大サ黍ノ如シ、綠色、內子青白色、秋後苗根共ニ枯ル、救荒本草ノ地錦苗ハ紫菫ナリ、木蓮ノ附錄ノ地錦ハツタナリ、釋名ニ載ル所ノ地朕、地噤、夜光、承夜ノ四名ハツタノ一名ナ𪜈、コヽニ入ルヽハ誤ナリ、

〔本草和名 十草〕鉤吻(楊玄操音上古侯反)　一名野葛、一名固活、(釋藥之書出者)　一名除辛、一名毒根、一名毛茛、又有陰命、(已上四名出陶景注)　一名巴人、一名草莽、(已上二名出釋藥性)　一名大陰之精、(出大清經)　一名黃葛、(𢇅皮經散者、出雜要訣)　一名胡蔓、(出拾遺)　唐、

〔多識編 二草〕鉤吻、今案伊。奴。久。都。、

〔書言字考節用集 六生植〕鉤吻(一名大陰、草有大毒、)　冶葛(同)　鉤吻　斷腸草(同)　冶葛(又作野葛)

〔重修本草綱目啓蒙 十三下草〕鉤吻　一名香苗(小品備)　黃野葛(本經逢原)　皂葛(山谷便方)　苦吻(廣東新語)　苦藥　苦蔓公　大葉茶　妖草(共同上)　增、一名胸吻(泉州府志)

蔓生、黃精葉、芹葉等數種アリ、蔓。生。ノ。者。ハツタウルシ、一名ヤマウルシ、カキウルシ、(雲州、阿州、)山野ニ多シ、地錦ノ如ク木石ニトリ附テ生ジ、物ニ纏ハズ、三葉ゴトニ攢生シ、漆葉ニ似テ大ナリ、故ニツタウルシト名ク、又三葉ノ鉤吻トモ云フ、蘇恭葉如柹ト云是ナリ、夏葉間ニ黃白色ノ花ヲ開ク、地錦ノ花ニ似タリ、實モ亦相似タリ、蔓ノ末ハ木石ニ著カズ、垂ルコト二三尺許、(中略)○增、蘭山翁野葛ノ三葉ゴトニ攢生シ、漆葉ニ似テ大ナリ、故ニツタウルシト名クト云ハ穩ナラズ、ツタウルシノ年ヲ經ザルモノハ三葉ナレドモ、深山ニ生ジテ數年ヲ經ルモノハ、物ニ纏ハズト雖ドモ、喬木ニ依テ直上シテ、其木ニ根ヲ下スコト、常春藤ノ如シ、ソノ葉左右各七八葉アリテ、全

地錦

用代蠟燭、又取油法、萞麻仁去殼、五升用水一斗煎之、沫出盡取一點入水不散爲度、

〔重修本草綱目啓蒙 十三 毒草〕萞麻 カラヱ 和名鈔 カラガシハ 同上 トウゴマ 今名 ウノゴマ

遠近子 實、〇仁 和方書 中略

一年ダチノ草ナリ、春分種ヲ下ス、苗高サ一丈許、莖ハ直上シ、枝ナク圓ニシテ空虚、節アリテ竹ノ如シ、徑リ一寸餘、皮白色ニシテ粉アリ、又紫色ナルモノアリ、葉節ニ互生ス、大サ一尺餘、モミヂ或ハ八角金盤ヤツデノ葉ノ如シ、七ツ或ハ九ツニ深クキレ、岐ヲナシテ鋸齒アリ、附方ニ九尖萞麻ノ名アリ、葉モ白色ヲ帶ブ、秋ニ至テ莖梢或ハ葉間ニ花アリ、日ニ向テ開ク、黄白色碎屑アツマリテ、稡巣ノ鈴ノ如シ、實ハ圓ニシテ七分、外ニ柔刺アリテ栗毬イガノ如シ、時珍子無刺者良ト云、和産ナシ、熟スレバ中ニ三子アリ、形雲實ノ如ク、白黑斑アリ、此仁ヲ採リテ油ヲ搾リ、印色ニ合セ、及ビ紙ニヒクベシ、秋深テ苗根共ニ枯ル、

〔多識編 二石草〕地錦、今案仁志岐久左、異名雀兒臥單、綱目

〔和漢三才圖會 九十八石草〕地錦 醬瓣草 地朕 草血竭 承夜 血風草 地噤 血見愁 夜光

雀兒臥單 馬螘草 猢猻頭草 俗云赤草

本綱、地錦田野寺院及階砌間有之小草也、就地而生、莖赤葉青紫色、夏中茂盛、六月開黄花、或云紅花也、結細實色黑、狀如蒺藜之朶、斷莖有汁、此草馬螘雀兒喜聚之、故有其名、

葉 辛又云苦 通流血脈、亦治氣、能散血止血、利小便、故血淋血痢臟毒、及婦人血崩、皆服之有効、金瘡出血不止者塗之良

按地錦原野敷地生、莖赤勁有白汁、葉似馬齒莧而薄小、六月開小赤花、結小角兒中有細子、莖葉赤、有地錦之名、與此不同、

〔重修本草綱目啓蒙 十六石草〕地錦 ニシキサウ チヽグサ 備後 アカクサ 攝州住吉 トウアミサウ 石見

狀ハ、昔ノウルシニ同ジ、四月ニ至テ紅葉シテ根枯ル、ノウルシノ枯レントスルトキニ、葉ノ色黃、春ノ芽モ赤著紅ナラザルニ異ナリ、其根ハ大ニシテ短キ蘿蔔ノ形ノ如シ、黃赤色微黑ヲ帶ブ、コレヲ切レバ黃汁ヲ出ス、ノウルシノ根ノ細クシテ白汁ヲ出スニ異ナリ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

信濃國十七種 ○中略 蘭茹卅七斤、　美作國卅一種 ○中略 𦶇茹蘭茹各一斤六兩、

〔本草和名 草十一〕草麻 陶景注云、其子如蜱、故名之草麻、 一名荀蜱、一名蜱麻、一名野蜱、一名仙人骨、一名故蜱、已上五名出兼名苑、

和名加良加之波、

〔倭名類聚抄 二十草〕草麻　本草云、草麻、上音蒲米反、和名加良加之波、一云、加良衣、

〔和爾雅 七草〕蓖麻 カラカシハ、

〔朱氏談綺 下〕蓖麻 ヒマ、

〔和漢三才圖會 九十五毒草〕蓖麻　和名加良加之波、一云加良衣、

本綱、蓖麻夏生苗葉、其莖有赤有白、中空、其葉似大麻葉而甚大、每葉凡五尖、夏秋間椏裏抽出花穗、累累黃色、高丈餘、每枝結實數十顆、上有刺攢簇、如蝟毛而軟、凡三四子合成一顆、枯時劈開、狀如巴豆、殼內有子、大如豆、殼有斑點、狀如牛螕、再去斑殼、中有仁、嬌白如續隨子仁、有油可作印色及油紙、子無刺者良、子有刺者毒、

子 甘辛有小毒、　外用屢奏奇効、但不可輕內服、搗膏貼、六畜舌根下、卽不能食、貼肛內、卽下血死、其毒可知矣、食蓖麻者、一生不得食炒豆、犯之必脹死、　治口眼喎斜、搗膏左貼右、右貼左、卽正、又催生下胞、取七粒去殼研膏塗脚心、若胎及衣下、便速洗去、不爾則子腸出、如子腸出、卽以此膏塗頂、則自入也、

油 以機取、乃外科要藥、竊鍋油能引病氣入內、蓖麻油能拔病氣出外、故諸膏多用之、

按蓖麻和名唐柏 カラカシハ、其葉似槲、今俗稱唐胡麻、出於和州者良、紀州藝州之產次之、近頃煉成、

分二三小枝、二三月開細紫花、結實如豆大、一顆三粒相合、生青熟黒中有白仁、如續隨子之狀、今人往往皆呼其根爲狼毒誤矣、狼毒葉似商陸大黄、莖無漿汁ト、此物大戟甘遂ニ似テ、莖葉肥大、根形商陸根ノゴトクニシテ黄赤色、斷之汁出藤黄色ノゴトシ、其餘皆東璧ガ説ノゴトシ、和產ナシ、漢種享保中種ヲ傳テ、今官園ニアリ、此物漢土ヨリ渡ス時狼毒ト稱ス、漢人誤來ルコト久シ、

草䕡茹　一名白䕡茹、東都方言ヤブソバ、陶弘景曰、次出近道、名草䕡茹、色白、蘇頌曰、又有一種草䕡茹、色白ト、此物所在濕地ニ生ズ、狀大戟甘遂ニ似テ大ナリ、春末黄花ヲ開ク、根䕡茹ニ似テ小ニシテ色白シ、

〔重修本草綱目啓蒙十三草〕䕡茹　チアザミ和名鈔　ニヒマグサ同上　一名吾獨毒只綱彙本草

䕡茹ニ草䕡茹、漆頭䕡茹ノ二種アリ、草䕡茹ハサハウルシ城州ノウルシ同上伏見ハカノチヽ、狐ノチヽ、ナベワリ共ニ同上チグサ江戸、ヂテウサウ信州ナベナグリ越後此草河邊湖澤傍ニ多ク地ニ滿テ生ズ、城州伏見、淀、宇治邊ニ最モ多シ、春早ク宿根ヨリ芽ヲ叢生ス、淡紅色、長ズレバ圓莖、高サ二三尺ニ至ル、葉ハ金絲桃(ビヤウヤナギ)葉ニ似テ狹ク微毛アリ、數多ク互生ス、莖葉ヲ切レバ白汁出ヅ、莖梢ニ五葉對生ス、ソノ上ニ五枝ヲ分チ出ス、各二三寸此レニ附ク、葉ハ狀チ短ク尖リテ脚葉ノ形ト異ナリ、枝端ゴトニ四葉對生ス、三月ニ其上ニ小花開ク、四瓣淡紫黄色、花中ヨリ細莖ヲ出シ實ヲ結ブ、續隨子ニ似テチイサク、僅ニ一分餘、皮ニ疙瘩アリ、中ニ子三粒アリ、花下ノ四葉黄色ニ變ジ、遠ク望メバ花ノ如シ、四月ニ苗枯ル、根ハ年ヲ經テ枯レズ、形チ肥長ニシテ叢生ス、大ナルモノ徑一寸許リ、皮白色微黄ヲ帶ブ、此ヲ切レバ白汁出ヅ、漆頭䕡茹ハ和產ナシ、生根享保年中ニ唐山ヨリ來ル、ソノ時ハ狼毒ト名ケテ渡ス、唐山ニテ䕡茹ヲ誤リテ狼毒ト呼ブコト、集解時珍説ニ辨ゼリ、冬ノ末春ノ初、宿根ヨリ芽ヲ叢生ス、其色紅紫觀ツベシ、二三月ニハ圓莖高サ一尺餘、葉互生シテ密ナリ、微シク毛アリ、莖葉ヲ切レバ白汁出ヅ、莖梢ニ一所ヨリ五枝ヲ對シ出シ、五方ニ分ル、ソノ葉及花實ノ形

人か漢種を得て、その地に播蒔せしが、今にいたりても年ごとに生出るものなるべければ、これを以て國產の證とはなし難し、例續隨子はその苗葉花實すべて大戟に似て、たゞ長大なるを異なりとし、その功能に至りても、また大戟澤漆輩のに似て、專ら利水解毒の要藥なりといへども、大戟は根、澤漆は莖葉を用ひ、此物は子を用ゆるを異なりとす、又本草和名に續隨子薦用多聞といひ、いはゆる百兩金、また千金子などの名によりても、古に此ものを貴みて用ひし事はしられたり、今はたゞ紫金錠の料のみに用ひて、解毒の功を知るといへども、利水の藥に至ては、絶て世の人用ゆる事をしらざるは、さらに古を考へざる也、

〔草木育種後編下毒品〕續隨子（ほるとさう）本草 秋分に畦へ種を布て、來春に至り生長し、實を結ぶ、一本にて三尺四方も蕃殖ものなり、根に多く糞水干鰯あぶらかすを入て、實を多くとり、油を搾りてよし、此油を搾るかすを、又此草の肥にして尤妙なり、

〔本草和名十一草〕閭茹、一名屈据（仁諝音九劬反、下音鋸）一名離婁（仁諝音力朱反）漆頭閭茹（出高麗）草閭茹（已上二名出陶景注）一名離樓、一名屈居、一名久居、一名大要（已上四名出雜要性）一名散熱、一名散杰（已上二名出雜要訣）和名阿佐美。一名爾比万。久佐。

〔倭名類聚抄二十草〕閭茹 本草云閭茹（閭如二音、和名阿佐美、一云仁比呂久佐）

〔箋注倭名類聚抄十草〕太平御覽引吳普云、閭茹葉員黃、高四五尺、葉四四相當、四月華黃、五月實黑、根黃有汁、亦同黃、黑頭者良、本草陶注云、今第一出高麗、色黃、初斷時汁出、凝黑如漆、故云漆頭、次出近道、名草閭茹、色白、葉似大戟、花黃、二月便生、蜀本圖經云、葉有汁、根如蘿蔔、皮黃肉白、圖經云、三月開淺紅花、亦淡黃色、不著子、

〔物類品隲三草〕閭茹 東璧曰、春初生苗、高二三尺、根長大如蘿蔔蔓菁狀、或有岐出者、皮黃赤肉白色、破之有黃漿汁、莖葉如大戟、而葉長微闊不甚尖、折之有白汁、抱莖有短葉、相對團而出、尖葉中出莖、莖中

一名反時生〔物理小識〕　牛枝蓮〔本草述〕　拒多實〔普濟保元〕　白隨子〔青囊藥性賦〕

八月子生ズ、又四五月ニモ生ズ、初出ル葉ハ形細長クシテ、瞿麥ノ葉ニ似テ厚ク黑ミアリ、中ノスジ白色、葉背莖ト共ニ白シ、兩葉節ニ對シ、節ゴトニ互ニ四方ニ正ク對シテ十字ノ如シ、莖ハ太クシテ圓ナリ、葉ト共ニ切レバ白汁ヲ出ス、冬ニ至テタヾチニ聳ユルコト高サ一二尺、肥地ニ栽ユル者ハ四五尺ニスグ、春ニ入テ生ズル葉ハ、頓ニ濶クシテ脚葉ニ異ナリ、漸ク莖ヲ長ジ、梢ニ至テ五葉對生シ、其上ニ五方ニ小枝ヲ分チ出シ、上ニ兩葉對生ス、其葉形短クシテ本廣ク末尖ル、其兩葉漸ク開ケバ、其中ニ一花ヲ生ズ、四瓣黃紫色、形チ大戟甘遂花ニ似テ大ナリ、旁ニ又一莖ヲ斜ニ出ス、上ニ兩葉アリ、漸ク莖タチ葉開ク時ハ中ニ又一花アリ、此ノ如ク一節ヅヽ增シテ枝長クナリ、五方ニヒロガリ、實熟スル時ニハ、重クナリテ末皆下垂ス、初メ花ゴトニ中ニ小綠實ヲ出シ偃垂ス、花謝スル時ハ實漸ク大ニナリテ莖タツ、實大サ四五分許、形圓ニシテ三道アリ、熟シテ黑褐色、內ニ三隔アリ、隔ゴトニ一子アリ、形蓖麻子ニ似テ小ク、褐色實熟シテ苗根共ニ枯ル、市中ニ賣ル者ハ和產ノミナリ、

〔古今要覽稿草木〕ほるとさう

ほるとさう、一名こくどさう、一名朝鮮やなぎは、漢名を續隨子、一名拒冬、一名拒冬實、一名耐冬花、一名百兩金、一名千金子、一名菩薩豆、一名蜀隨子、一名白隨子、一名聯步、一名反時生、一名牛枝蓮といふ、此種はいづれの國にても、山野に絕て自然生なきものなれば、そのもとは天平のむかし、太宰府より漢種を傳へしが、代々にうへつぎこしものにて、國產にてはあるべからず、所謂ほるとさう、またこくとそうの名ありといへども、これは近世の俗名にして、延喜の比には、たゞ續隨子の字音のみにて通用し、さらに和名なきにても、此種の國產にあらざるはあきらけし、然るを讃岐國瀨島といふ所に、此物の自然生あるよし、物類品隲にみえたれども、これは中むかしの比、何

一名𢾾、一名夾蓋、一名承露、已上出丸名藥性 和名阿波宜、一名阿比宜、

〔倭名類聚抄 二十草〕甘遂 本草云、甘遂、和名阿波宜、一云仁比宜、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇注、異甘遂、苗似澤漆、草甘遂苗一莖、莖端六七葉、如蓖麻鬼臼葉、圖經、莖短小而葉有汁、根皮赤肉白、作連珠、又似和皮甘草、

〔重修本草綱目啓蒙 十三草〕甘遂 通名 ナツトウダイ 江戸 一名隨湯給事中

早春宿根ヨリ芽ヲ叢生ス、色紅初ハ横ニ偃シテ出ヅ後ニ直立ス、圓莖ニシテ高サ六七寸或ハ一尺餘、葉大戟葉ニ似テ末尖ル、三月莖頭五葉上ニ五枝ヲ分チ、花ヲ開ク、黄紫色、大戟花ニ同ジ、枝ニツク葉ハ本廣ク末尖リ、牛面ノ形ノ如ニシテ脚葉ニ異ナリ、一葉ゴトニ一花アリ、花後小實ヲ結ブ、大戟ニ似テ小ク疙瘩ナシ、夏ニ入テ莖ノ末枯レ、枝皆節ヨリ折レ、落莖根別ニ枝ヲ出シ葉ヲ生ズ、又根上ヨリモ別ニ苗ヲ出ス、秋深テ枯ル、紀州熊野及東國ニ野生多シ、高サ二尺許、葉長大ニシテ二寸許、共ニ其根皮黑ク皺多シ、城州鷹峯官園ノモノモ同ジ、舶來ノ者ハ根長サ寸ニ近ク、中フクレ兩頭細ク皮赤クシテ皺ナシ、内白色、嘗ダ蛙ヒ易シ、是赤皮甘遂ニシテ上品ナリ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

參河國廿一種、甘遂十斤、 武藏國廿八種、中略 甘遂一斤、

〔本草和名 二十本草外藥〕續隨子、一名耐多花、一名百兩金、本一名蜀隨子、一名拒多、一名千金子、已上出拾遺

〔下學集 下草木〕續隨子

〔多識編 二草〕續隨子、巳波都、異名千金子、日華 千兩金、同

〔物類品隲 三草〕續隨子 和俗ボルトガルト云ハ非ナリ、ボルトガルハ木ナリ、絶テ別物ナリ、處處多有、然ドモ皆種ヲ傳テ植ルモノナリ、讃岐瀨島稀生ノモノアリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十三草〕續隨子 通名 ホルトサウ コクドサウ チヤウセンヤナギ 種樹家

甘遂

李時珍ハ古ヨリ澤漆ハ大戟苗或ハ花ナリト云ノ說ヲ駁シテ別ノクサトス、コレ本經ニ無毒ノ文ニ符ス、ヨロシク從フベシ、大戟ノ苗ハ毒アリ、時珍ノ說ハスヾフリグサ、佐渡、トウダイクサ、京カヤツリグサ、伯州ミコノスヾ、備前ゼニツナギ、越後トウミヤウサウ、越後野ニ自生シ、八九月ニ實生ズ、春ニ至リ一尺許、瘠地ノ者ハ七八寸、一根一莖莖圓ニシテ、葉互生シ、密ニ著ク、馬齒莧スベリヒユノ葉ニ似テ薄ク細鋸齒アリ、葉ヲ摘メバ白汁出ヅ、三月莖頭ニ五葉對生シ、五枝ヲ分チ四瓣ノ小花ヲ開ク、綠色、一莖五枝ナル故、圖ニシテ錢ヲツナギツラヌクベシ、故ニ錢ツナギト名ク、夏ニ至リ根苗共ニ枯ル、一種小ナル者アリ、雌ノトウダイグサト云フ、水中又水邊ニモ生ズ、陸地ニハナシ、初出ノ葉ハ形チ圓ニシテ石胡荽ノ葉ノ如シ、五ツノ鋸齒アリテ尖ラズ、深綠色、地ニシイテ生ズ、春ニ至テ高サ三四寸、莖葉淡綠色ニ變ジ、葉ノ形モ變ジテ、トウダイグサニ同シテ、梢ニ五枝ヲ分チ花ヲ開ク、五瓣、綠色ニシテ黃蘂、花後短カキ莢ヲ結ブ、長サ一分、濶サ二分許リ、熟シテ自ラ中解スレバ、淺碟ノ形ノ如クシテ色黃ナリ、中ニ至テ細ナル褐色ノ子多ク盛ル、形色猫眼ニ似タリ、故ニネコノメト云フ、攝州住吉ニテミヅゲンゲト云フ、釋名中ノ猫兒眼睛草ヲ別テコノ草ニ充ツ、先師ノ說ナリ、又ネコノメノ一種、深山幽谷土石上ニ生ジ、四時トモニアリ、圓葉ニシテ厚ク大サ七分許、深綠色ニシテ紋脈多シ、四葉方布ス、故ニヨツ葉ユキノシタト云、三月花アリ、山中ニテハ四月ニ花ヲ開ク、ネコノメニ同ジ、

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥
近江國七十三種、中略○ 澤漆十五斤五兩、

〔武江產物志 草藥〕隨地有之類　澤漆

〔本草和名 草十〕甘遂、一名主田、一名甘藁、楊玄操音古晧反 一名陵藁一名陵澤、一名重澤、楊玄操音逐龍反 一名草甘遂、出陶景注、一名蚤休、一名重臺、已上二名出蘇注、一名畜、一名日澤、一名愁、○愁字無攷 一名鬼醜、一名丘重澤、一名蘢雷、

ウダイ東部ニハ林下道傍ニ多シ、形狀唐種ニ異ナラズ、微毛アルモアリ、倶ニ莖微短シ、城州長池邊山中ニモ亦アリ、是土大戟ナリ、江州鹿飛邊ニ小葉ノ大戟アリ、伊吹山ニモ多シ、方言チヽモドキ、形狀タカトウダイニ同シテ小ナリ、苗高サ七八寸、葉小ニシテ羌花葉ノ如シ、コレヲ鹿飛大戟ト云、人家ニ移シ栽レバ大ニナリテ、タカトウダイト同ジ、花實モ亦同ジ、又一種海邊ノ石間ニ生ズ、岩大戟ト云フ、淡州、土州、筑前、紀州、播州等ノ國ニ產ス、八月舊根ヨリ新芽ヲ叢生ス、其色紅紫觀ルベシ、葉ハノウルシヨリ小ニシテ狹長、白綠色ニシテ周邊紫色ナリ、寒キ時ハ葉背紫色、莖ハ紅紫色、後淡綠色ニ變ズ、高サ一二尺、春花實ヲ生ズ、ノウルシニ同ジ、秋ニ至テ苗枯ル、ツイデ新葉ヲ生ズ、根ノ形ノウルシニ同ジ、皮微紫色晒乾シテ折レ易シ、コレ紫大戟一名紅芽、大戟ノ一種ナリ、藥ニハコレヲ用ユベシ、然レドモ未ダ藥家ニ出ズ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種、（略）○中 枳實通草大戟各十斤、伊勢國五十種、（略）○中 大戟五斤四兩、（略）○下

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產 大戟（并ノ圖二、）

〔新撰字鏡 草〕澤漆（大戟苗、生時摘去葉莖、）

〔本草和名 十草〕澤漆（陶景注云、大戟苗、有白汁、故名澤漆、）一名漆莖、（大戟苗也、）一名得文、一名生道、一名綿柳、一名柳苗、一名耶茸、一名貴泉、一名晶滴、一名重泉、一名大戟、一名白澤、一名野桑、（已上十一名出釋藥性、）和名波○也○比○止○久○佐○乃○女○、

〔和漢三才圖會 九十五毒草〕澤漆（略）○中（俗云燈臺草）○中略

按此草形狀似燈臺、俗呼名燈臺草、其莖汁能治疣鼠子、且牛馬亦不食此草、乃有毒明矣、

〔物類品隲 三草〕澤漆 和名トウダイクサ、又スヾフリバナ、備前方言ミコノスヾ、處處田野ニ多シ、陶氏大戟苗トシ、日華子大戟花トスルハ誤ナリ、東璧排之明ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十三毒草〕澤漆 一名柳漆（綱目本草）猫兒睛（救荒野譜）猫眼（秋叢）猫兒眼草（石鐘乳氣味）

之、宜禅

〔物類品隲三草〕大戟　和名ノ。ウ。ル。シ。伏見方言キ。ツ。ネ。ノ。チ。ヽ。江戸方言タカトウダイ、頌曰、春生紅芽、漸長、叢高一尺以來、葉似初生楊柳小團、三月四月開黃紫花、團圓似杏花、又似蕪荑、根似細苦參、ト云モノ是ナリ、處處山中ニ多シ、

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草〕大戟　ハ。ヤ。ヒ。ト。グ。サ。延喜式　ハ。マ。ヒ。ト。ダ。サ。同上　タ。カ。ト。ウ。ダ。イ。江戸

一名破軍殺綱目拾遺　勒馬宜古今醫統

品類多シ、古渡ニ綿大戟紫大戟アリ、綿大戟ハ根柔ニシテ採メバ綿ノ如シ、徑リ六七分、黃白色味養辛、大ニ咽ヲ腫ラスコト、時珍ノ言トコロノ如シ、天明年中他ノ藥中ニ混ジ來ルコトアレドモ、今ハ甚稀ナリ、紫大戟ハ根黑赤色、コレモ採メバ綿ノ如シ、味微辛咽ヲ腫ラスニ至ラズ、綿大戟ヨリ緩ナリ、故ニ上品トス、杭州紫大戟爲上ト云フ是ナリ、享保以後渡ル者ハ、根形細キ甘草ノ如シ、外皮紫赤色、味澀クシテ蘞カラズ、僞品タルベシ、天明ノ比ヨリ絕テ渡ラズ、故ニ他ノ藥中ヨリ揀ビ出シテ賣ル者、皆細長ニシテ多クハ皮ノミ、紫赤色、裏面ハ淺褐色、味微澁ニシテ蘞カラズ、是眞ニ非ズ、藥店ニ唐ノ大戟ト云、或ハ雌大戟ト云フ、和ノ大戟ト稱シ賣ル者ニ、僞品アリ、野苧麻根ヲ以テ僞ルアリ、黃白色ニシテ堅ク折レ易ク、味蘞カラズ、コレヲ粉大戟ト云フ、又アカソノ根ヲ以テ僞ルモノアリ、皮淡赤色、內白ク蘞味ナシ、皆用ユルニ堪ヘズ、藥用ニハ唐種及土大戟ヲ用ユベシ、岩大戟モ佳ナレドモ皆藥店ニ出ズ、ノウルシヲ伏見ノ大戟ト稱シテ賣ル者アリ、コレハ草蘭茹ニシテ、大戟ニ非ザレドモ、蘞味アリテ相遠カラザル者故、野苧麻根ノ僞ヲ用ユルニハマサルベシ、唐種ノ大戟ハ享保年中ニ渡ル、春宿根ヨリ苗ヲ叢生ス、圓莖高サ四五尺、葉ハ草蘭茹ヨリ狹細ナリ、色深綠微黑ニシテ中道白シ、葉ヲ斷テバ白汁ヲ出ス、夏ニ入テ莖梢及葉間ニ小枝ヲ抽デ、花ヲ開キ實ヲ結ブ、形狀草蘭茹ニ同シテ小ナリ、只花下ノ葉黃色ニ變ゼズ、秋深テ苗枯ル、タカト

蘐園事物異名 心天漢異

遠志ノ名ハ、巳ニ釋名時珍ノ說ニ見エタリ、山野陽地ニ多シ、苗高サ二三寸許、一根數莖、莖ゴトニ數枝ヲ分チ、葉互生ス、形圓小黄楊葉ニ似テ薄ク、深緑色多ヲ經テ枯レズ、霜ヲ被ルモノハ紫色ナリ、三月葉間ニ深紫色ノ花ヲ簇生ス、胡枝子花ニ類シテ、中ニ蕋多シ、又淡紫色、白紫間色、白色ノ者アリ、花後實ヲ結ブ、形圓扁、大サ二三分、楡錢ノ形ニ似タリ、內ニ小扁子アリ、一種細葉ノ者アリ、佳品トス、又一種大葉ノ者アリ、高サ一尺許、葉モ亦大ニシテ、五六分許、花モ大ナリ、市中ニ販グモノ、始來ニヒメ遠志ト呼ブモノアリ、根柔軟ニシテ滋潤、藥用良トス、是和產細葉ノ者ナルベシ、又オニ遠志ト呼ブモノアリ、根堅强ニシテ滋潤ナラズ、下品ナリ、是和產大葉ノ者ナルベシ、然ドモ和產ハ皆根狹細ニシテ、入用ニ堪ヘズ、又朝鮮遠志ハ形大ニシテ硬シ、亦下品ナリ、

〔武江產物志藥草〕嵐山ノ產 遠志遠志村ニモアリ

〔新撰字鏡草〕大戟余反、一云波夏草、

〔本草和名十草〕大戟、一名邛鉅、仁諝音上巨反字、下音距、一名嬴藤、一名澤枯、一名擇、一名明吠、一名秦茯、一名儹、一名澤砧、已上七名出釋藥性、一名大鼎出兼方、和名波止比止久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕大戟 本草云、大戟、和名波夜比止久佐

〔箋注倭名類聚抄十草〕蜀本圖經云、苗似甘遂高大、葉有白汁、花黄、根似細苦參、皮黄黑、肉黄白、爾雅云、蕎邛鉅、注云、今本草大戟也、圖經、春生紅芽、漸長作叢高一尺已來、葉似初生楊柳小團、三月四月開黄紫花、團圓似杏花、又似蕪荑、其根似細苦參、秋冬采根陰乾、

〔會言字考節用集六生植〕大戟草ハヽキ、大戟ダイゲキ

〔和漢三才圖會九十五草〕大戟 功鉅一下馬仙 和名波夜比止久佐○中略

按大戟和州金剛山之產良、名小大戟、丹波伊豫次之、其葉圓葉間開細花、有白赤紫數品、結實似蓖麻子、之、

〔草木育種後編〈下 藥品〉〕白鮮(ひやくせん)〈本草〉 金雀兒根〈本草〉ともいふ、此草葉に虫を生ず、頗る椒虫の如し、春芽出しの比、根を分て栽てよし、赤土よし、豆肥を澆ぎてよし、煖地に作るべし、盆栽冬煖窨に入れ養ふべし、

〔延喜式〈三十七 典藥〉〕諸國進年料雜藥
上總國廿種、〈中略〉○白鮮六斤、下總國卅六種、〈中略〉○白鮮、大戟各五斤、

遠志

〔本草和名〈六 草〉〕遠志、葉名小草、一名棘菀、一名要繞、〈仁諝音上於小反、楊玄操又作䙌、〉一名細草、一名張華、一名棘温、一名要翹、一名萩苑、〈已上四名出釋藥性〉一名略苑、〈出雜要訣〉 唐

〔書言字考節用集〈六 生植〉〕遠志(ヲンジ) 遠志(コグサ) 葽繞〈同 本草〉 遠志(モノシリグサ) 葽繞〈同〉

〔大和本草〈六 藥類〉〕遠志 小葉似黃楊木而小ナリ、處々有之、其葉小ナリ、小草ト稱スルモ宜ナリ、西土ノ俗ハ野茶ト云、花淡紫色ナリ、又海濱ニ小草アリ、莖小ニシテ高キ事一二尺、花ハ桔梗ニ似テ甚小ナリ、根亦小ナリ、根粗遠志ニ似タル故、俗アヤマリテ遠志トス、非也、

〔和漢三才圖會〈九十二 本 山草〉〕遠志(をんじ) 苗名小草 葽繞 棘菀 細草
本綱、遠志生山谷、有大葉小葉二種、莖葉似大靑而小者其花紅、是大葉也、狀似麻黃而三月開白花者、是小葉也、根形如蒿根而黃色、長者及一尺、去心取皮、一斤止得三兩、如不去心則令人煩悶、〈得茯苓龍骨良、畏珍珠藜蘆〉
氣味〈苦温〉 入足少陰腎經、其功强志益精、治善忘、
蓋精與志皆腎經之所藏也、腎精不足則志氣衰、不能上通於心、故迷惑善忘也、能益智强志、故名遠志、

〔重修本草綱目啓蒙〈七 山草〉〕遠志 ヒメハギ コグサ シバハギ スゞメハギ〈江戸花家〉 ノチヤ〈筑前〉
一名醒心杖〈綱目拾遺〉 葽〈詩經〉 苦葽〈通雅〉 阿只草〈郷藥本草〉 苶草〈品字箋葉ノ名〉 增棘菀〈爾雅〉 蕀菀〈博雅〉

〔箋注倭名類聚抄十草〕證類本草中品白鮮條引云、俗呼爲白羊鮮、氣息正似羊羶、或名白羶、圖經大草略同、據證類則白鮮一名、羊羶似當作白鮮一名白羊鮮、一名白羶十一字、然本草和名云、白鮮一名羊鮮、一名白羶、無一名白羊鮮之白字與此所引合、源君引羊鮮之名、不引白羶之名也、證類本草白字疑是衍文、蘇云、葉似茱萸、苗高尺餘、根皮白而心實、花紫白色、圖經曰、莖青、葉稍白如槐、四月開花淡紫色、似小蜀葵、根似蔓菁、皮黄白、時珍曰、此草根白色、作羊羶氣、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕白鮮　ヒツジグサ和名鈔　一名檢花根村家　増一名白羊羶正字通

漢渡ノモノ眞物ナリ用ユベシ、古渡ハ心ナク皮ノミニシテ色白シ、新渡ハ心ヲ去ラズ、全根ナリ、形チ長大ニシテ色ニウルミアリ、和産ハ未詳ナラズ、今漢種白鮮ト呼者二品アリ、ソノ一ハ葉小ク椒葉ノ如シ、ソノ一ハ葉大ニシテ野薔薇葉ノ如シ、寛政午年ニ來ル、白鮮皮中ニ苗葉ヲ連ル者アリ、其葉今殺ルトコロノ大葉ノ者ニ異ナラズ、根味モ同ケレバ、此品眞ナルベシ、古説ニ、ハナシノブ、一名タサレノブ、ハルダワフカウト云草ヲ充レドモ穩ナラズ、其草ハ種樹家ニ多ク栽ユ、春宿根ヨリ生ズ、苗ノ高サ二三尺、葉ハ崖椒又皂莢ノ葉ニ似タリ、四五月莖梢ニ五寸許ノ穗ヲナス、花ノ形桔梗ニ似テ五瓣、大サ三四分、色紫碧又白花モアリ、實ハ房ヲナス、南天燭子ヨリ小シ、熟シテ褐色、根ハ蒼細ク用ユルニ耐ヘズ、今一種大葉ノ者アリ、花モ大ナリ、倶ニ眞ニ非ズ、又コマツナギ、此ヲ以テ本條ニ充ルモ亦非ナリ、コマツナギハ救荒本草ノ馬棘ナリ、

増、文化年間以來、花戸ニ唐種ノ白鮮一名金雀兒椒ト呼ブ者アリ、木本ニシテ一株數條ヲ生ズ、大抵狀牛花ノ葉ニ似テ、高サ四五尺ニモ至ル、春月新葉莖ニ互生ス、四葉排生シテ一葉トナル、一葉ノ形水蠟樹葉ニ似テ、深綠色ニシテ微ク硬シ、又迎春花ノ葉ニモ似タリ、葉莖ノ本ニ兩刺アリ、四月葉間ニ花ヲ開ク、赤小豆花ニ似テ黄赤色ナリ、花謝シテ後小キ莢ヲ結ブ、根ハ長ク皮厚クシテ臭氣アリ、ソノ金雀兒椒ハ白鮮ノ一名ナレドモ、白鮮ノ類ニハ非ズ、コレ救荒本草ノ壖齒花ナリ、

ーダ（羅甸）の轉訛なり、又リウダ艸といふものは土荊芥（俗稱）也、四時ともに葉あり、冬月暖處に養ふべし、四月の初芽をきり、玉を付て畦へ栽べし、度々糞汁肥水をそゝぎ、刈り乾かし藥用とすべし、實をとり清明の比にまくもよし、一種山中に松風艸といふものあり、芸香の一種なり、

香婆草

〔大和本草（九、蠻草）〕ルウダ　蠻語ナリ、是南蠻ルウダト云、其葉麻及羅勒ニ似タリ、左右ニ缺刻アリ、蠻醫コノンデ用之、腫物ニ葉ヲモミテヌルベシ、ヨク腫毒ヲ消ス、又汗斑ニツクレバ驗アリ、ヘビ是ヲオソル、故ヘビノサシタル所ニ付レバヨシ、凡諸毒虫ノサシタルニ付ベシ、功能多シ、園ニ栽ベシ、臭氣アリ、葉零陵香ニ似タリトイヘドモ別ノ物也、中華ヨリ來ル零陵香ハ別也、秋初花サキ秋季ミノル、春子ヲマク、冬ハ枯ル、又宿根ヨリ生ズ、寛永ノ初、此種南蠻ヨリ來ル、中華ノ草ニ非ズ、今處々ニアリ、俗ニ香波三禮草ト云、此草ヲ服スレバ山嵐ノ瘴氣ニ感ゼズ、時疫ハヤル時、此艸ヲ門戸ニカクレバ其災ヲ免ル、熱病時疫又勞瘵ノ病人ヲ介保スル人コレヲオビ、又モミテ鼻孔ニヌレバ染ズ、山ニ入テ此草ヲ帶レバ毒蟲サヽズ、サシテモハレズ、コレヲ厠中ニ投ズレバ虫生ゼズ、コレヲ食スレバ五辛ノ葷臭ヲ除ク、疱瘡出シキリニ痒ク、百方不效、此草ヲブダウ酒ニテセンジ、瘡頭ニヌル忽效アリ、

〔和漢三才圖會（九十三、芳草）〕香婆草　芸草（香草）（俗云留宇太、蠻語也、能治瘡疥、避惡虫、俗呼香婆草耳、）

按天正年中、蠻人此草將來名留宇太、春生、苗似雞腸草及蒿類、而有刻齒、甚臭香、至秋不花生穗實、似帶草莖穗、能治瘡疥、折傷惡腫及惡蟲被螫者、擣葉傅之、置床褥下避蚤虱、納書篋中蠧不生、字彙曰、芸香草也、可避書蠧、採置席下能去蚤虱、爾雅翼曰、仲冬月芸始生、似邪蒿而香可食者、恐此草矣、（沈括曰、芸類豌豆作小叢生、其葉芬香、秋後葉間微白如粉、今謂之七里香、但此說不當耳、可考、）

白鮮

〔本草和名（草八）〕白鮮（楊玄操音私延反）一名羊鮮、一名白羶、（陶景注云、氣息正似羊羶、）和名比都之久佐、

〔倭名類聚抄（二十、草）〕白鮮　陶隱居本草注云、白鮮一名羊羶、（和名比豆之久佐、式連反、羊臭也、）氣似羊羶、故以名之、

ス、コレモヒシト云、皆形ニヨルナリ、蒺藜ハ海濱沙地ニ多シ、山中ニハ生ゼズ、苗地ニ就テ四布シ直立セズ、葉ハ大巢菜葉ニ似テ狹ク厚ク、深綠色ニシテ毛アリ、互生ス、夏月葉間ニ五瓣ノ黃花ヲ開ク、形蛇含花ニ似テ大サ三分、花後子ヲ結ブ、大サ三分許、ソノ形或ハ三角或ハ四角、角ゴトニ皆刺アリテ人ヲ刺ス、五六子圓ニナラビ、一莖ニ生ズ、生ハ綠色、熟スレバ白色、秋ニ至リテ苗根共ニ枯ル、今藥肆ニ賣ル所ノモノ皆異物ナリ、藥ニ入ニハ刺ヲ去ル、沙苑蒺藜ハ和產詳ナラズ、古來タナキムニ充ル說ハ穩ナラズ、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

出雲國五十三種 中略 決明子、蒺藜子各二升、 播磨國五十三種 中略 蒺藜子、蜀椒各三升、 下略

〔倭名類聚抄 二十 草〕芸 禮記注云、芸 音云、和名 久佐乃香 香草也、

〔古名錄 十八 香草〕久佐乃香 倭名類聚抄 漢名芸香 本草 今名ヘンルウダ

伊勢家集ニ、式部卿宮のせんざい合に、草のかういろかはりぬるまらつゆは心おきてもおもふべきかな、トミユルハ、全ク當歸ヲ云、當歸ハ秋ニ至黃ミ枯ル、芸香ハ四時不枯、秋ニ至テ色變ルモノニ非ズ、然レドモ和歌物語ニ草の香トアルハ、皆大芹ニシテ當歸ヲ云ル者ナリ、

〔大和本草 九 雜草〕ヘンルウダ 近年紅夷ヨリ來ル、是紅夷ルウダナリ、紅夷人ハ是ヲ用テ食品ニ加ヘ、其香氣ヲ助ケ、他食ノ惡臭ヲ去コト、日本人山椒ノ葉ヲ用ルガ如シ、葉ハ細ニシテ莖ノ本木ノ如シ、三四月ニ黃花ヲ開ク、四出ニシテ一片ノ間、各一蕊ヲ出ス、花ノ心ニ實アリ、岩葵ノ實ニ似タリ、夏實ノル、其年子ヲマケバ來年花サキ實ナル、其莖葉根多不枯、此草常ノルウダノ性ニ相似テ、性猶スグレタリ、ツネノルウダヨリ惡臭甚シ、故ニ草ハ別ニシテ不相似ドモ、ルウダト稱ス、又鳥ノ病ヲ治ス、

〔草木育種後編 下 藥品〕芸香 遠西藥名 牛芸 群芳譜 和名くさのか 和名抄 俗にヘンルウダといふは、番名リユ

蒺藜

フウロ、又ミカヱリフウロトモ云フ、又伊吹山ノ產ニ細葉ノモノアリ、ソノ花淡紫色ニシテ小ナリ、コノ草ヲ手ニ觸レバ、胡麻醬油ノ氣アリ、

〔佐渡志物產五〕現ノ證據　牛扁ノ一種ニシテ、救荒本草ニノスルトコロノ牻牛兒、又鬪牛兒トイフモノコレナリ、山野處々ニ生ズ、莖細ク蛀ノ如クニシテ、白キ花ニ薄キ紅紫ノ點アリ、梅花ニ似テ小サシ、六七月ノアイダ花サク、往年因幡伯耆ノ二州ニ痢病流行セシトキ、國守ヨリ令アリテ、痢ノ藥ヲ用ヒズ、コノ草一味ヲ味噌汁ニテ煎ジテ、飮シメラル、ニ、悉ク効アリトキク、

〔新撰字鏡草〕蒺藜子(波。麻。比。志。)

〔本草和名草七〕蒺藜子、一名旁通、一名屈人、一名止行、一名犲羽、一名升推、一名卽棃、一名茨、(楊玄操音在私反)一名地茂、(出雜要訣)一名地毒、(出神仙服餌方)一名地茵、(出雜要訣)一名地行、一名地菴、(已上出蘇敬注)和名波末比之、

〔倭名類聚抄草二十〕蒺藜　本草云、蒺藜、(疾棃二音、和名波末比之、)

〔箋注倭名類聚抄草十〕陶注云、多生道上、而葉布地、子有刺、狀如菱而小、長安最饒、人行多著木履、今軍家乃鑄鐵作之、以布敵路、亦呼蒺藜、易云、據于蒺藜、言其凶傷、詩云、牆有茨不可掃也、以刺梗穢也、爾雅、茨、蒺藜注、布地蔓生、細葉、子有三角、刺人、圖經云、又一種白蒺藜、今生同州沙苑牧馬草地、而近道亦有之、綠葉細蔓、綿布沙上、七月開花黃紫色、如豌豆花而小、九月結實作莢、

〔書言字考節用集生植六〕蒺藜(ハマビシ)　升推草(同、又云ヒシクサ)　旱草(ヒシクサ、南、蒺棃一名、)

〔物類品隲草三〕蒺䔧　二種アリ

○○○刺蒺䔧　和名ハマビシ、海邊沙地ニ生ズ、葉翹搖ノゴトク蔓延ス、黃花ヲ開キ實ヲ結ブ、刺多シ、

〔重修本草綱目啓蒙隰草十二〕蒺藜　○ハマビシ○(古今通名)　○シロビシ○(古名)　○ヒシ○(勢州)　一名棗尖(救荒本草)(楊縣新鐃)　旱草(埤雅)　古冬非居塞(月令採取)　推升(群芳譜、升推ノ誤、)　臘居塞(村家方)　資(群芳譜)　卽藜(救荒本草)

水草ノ菱ヲヒシト云、蒺藜子ハ菱ニ似テ小ナリ、故ニ又ヒシト云、又鐵蒺藜ハ鐵ニテ菱ノ形ヲ製

コト各雨三許、一莖生ズレバ一花ヲ開ク、ソノ花必ズ横ニ向ヒ、淡紅色ニシテ大サ七八分、本ハ筒子ニシテ末五瓣、互ニ相重リテ盞子樣ヲナス、筒中ニ短キ黃蕊五條アリ、コノ花形色共ニサクラサウノ花ニ能ク似タリ、花謝レテ後、層中ヨリ又枝ヲ生ジ、花ヲ開クコト始ノ如ク、肥タルモノハ三層ニ至ル、多ク經テ枯レズ、五月ニ至テ苗葉共ニ枯ル、

〔枕草子三〕草は

かたばみ、あやのもんにても、ことものよりはおかし、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕牻牛兒　鬪牛兒

同〇集解嘉謨云、牻牛兒生田野中、就地拖秧而生、莖蔓細弱、其莖紅紫色、葉似芫荽葉、而瘦細而稀疏、開五瓣小紫花、結青蓇葖兒、上有一嘴、其尖銳如細錐子狀、小兒取以爲鬪戲、其葉微苦、

〔重修本草綱目啓蒙十三濕草〕牛扁

古ヨリ牛扁ヲゲンノシヤウコニ充ツルハ非ナリ、ゲンノシヤウコハ一名ホツケサウ、ホツケバナ、木曾レンゲサウ、ミコシグサ、長州サタラガハ、江戸フウレイ、江州フウギク、播州子コアシ仙臺ベニバナ、越州岩倉多ノムメ、越後チゴグサ、土州路旁ニ甚多シ、葉ノ形五岐ニシテ猫ノ足痕ノ如シ毛アリ、大サ一二寸、白莖紫莖ノ二種アリ、夏秋ノ間五瓣ノ紫花ヲ開ク、白花モアリ、又淺紫色モアリ、コノ根苗共ニ末ニシテ、一味用テ痢疾ヲ療スルニ効アリ、故ニゲンノシヤウコト云、是救荒本草ノ牻牛兒一名鬪牛兒ノ一種ナリ、〇中略

增、尋常ノゲンノシヤウコニ、一種紅白相雜ナシボリノ者アリ、至テ美ナリ、又花大ニシテ色ノ異ナルヲ、花戸ニテ風露草ト名ク、紅色ノモノヲベニフウロト云、斑駁ナルモノヲサラサフウロト云、瓣ニ縱道アルモノヲ郡内フウロト云、又加州白山ノ産ニ、大葉ニシテ白花ノモノアリ、江州伊吹山ノフウロサウハ、葉ノ形大ニシテ缺刻深ク、直立シテ延布セズ、花大ニシテ淡紅色ナリ、タチ

按酢漿草和訓加太波美、俗云須伊毛乃久佐、處處多有之、繁衍如蔓、葉色紫或綠、小兒採之和鹽裹于銖吸汁、又挼其葉琢眞鍮色黯者、則如新、然淡白失本色、但用絲實殺灰琢、則本色不變、鮮明、

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕酢漿草　カタバミ　カタバミグサ　スイモノグサ　スイモグサ　スイモノグサ尾州

スイグサ雲州　スグサ江戸　スカンコ津輕　スカスカ南部　ハスグサ相州　コガネバナ

筑前　コガネグサ肥前、讃州、　カンガミグサ防州　カバミグサ石州　カマタサ播州　タマクサ

同上　スズメノハカマ備後　トンボグサ江州　トンボノキウリ加州　スモヽ泉州　三谷

六葉草俗名　一名酸啾啾附方　三葉酸漿草　酸草　醋草　雀兒草共上同　歲寒漿八閩通志　鵓

鴿飯醫學六要　布谷飯　酸梅草共上同　鵝鴣飯大醫治遷　酸車草醫學入門　鳩漿草醫治準繩　鹹酸草閩書

酸𧄍草古今秘苑　蟠蜞青草藥圖

庭間ニ多ク生ズ、小草ナリ、地ニ蔓延シ、葉互生ス、形三瓣、瓣ゴトニ一缺アリテカタバミノ紋ト呼

ブ狀ニ同ジ、大サ三五分、肥地ニアル者ハ大サ一寸許、蔓モ赤長シ、二三月花ヲ開ク、黃色五瓣、大サ

三分許、他時ニモ赤花アリ、野州中禪寺ニハ粉紅色ナルモノアリ、花後圓角ヲ結ブ長サ四五分、熟

スレバ自ラ裂ケテ内子飛出ス、其子小ニシテ白色落テ苗ヲ生ズ、一種葉色紅紫ナル者ハ赤孫施

ナリ、花中ニ紅色アリ、アカカタバミト云フ、一種エイザンカタバミト呼ブアリ、葉大ニシテ一寸

餘、肥タルモノ二寸餘、葉末ニ尖リアリ、春花ヲ開ク、白花大サ七八分、又淡紅色ナル者アリ、花後新

葉ヲ生ズ、根上一寸許鱗甲ヲナス淡紅色、コレ舊葉ノ蒂ノ殘レルナリ、○中略

增、天保十四癸卯年舶來大葉ノ酸漿草ヲ齎來ス、蠻名オギサトリスローザト呼ブ、七月舊根ヨリ

苗ヲ生ズ、高サ七八寸許、一根十餘葉叢生ス、三葉一蒂ニシテ淡綠色、形エイザンカタバミノ葉ニ

似テ、葉頭ニ微シク凹ミアリ、一葉ノ大サ徑二寸餘ニ及ブ、八月ニ至テ葉中莖ヲ抽ズルコト七八

寸餘、莖頂ニ細枝七八條ヲ四方ニ分チ、一層ヲナシ、枝ノ末ゴトニ二寸餘ノ細蒂ヲ生ジ、蕾ヲ綴ル

古事類苑

植物部二十一

草十

酢漿草

〔本草和名 草十一〕酢漿草、一名酢母草、一名鳩酸草、已上二名出蘇敬注、和名加多波美、

〔倭名類聚抄 草木二十〕酢漿 本草云、酢漿草、和名加太波美、

〔箋注倭名類聚抄 草木十〕蘇注、葉如細萍、叢生、莖頭有三葉、蜀本圖經云、葉似水萍、兩葉並大、葉同枝端、花黄色實黑、生下濕地、圖經、葉如水萍、叢生、莖端有三葉、葉間生細黄花、時珍曰、苗高一二寸、叢生布地、極易繁衍、一枝三葉、一葉兩片、至晩自合帖、整々如一、四月開小黄花、結小角長一二分、内有細子、冬亦不凋、

〔下學集 草木下〕鳩酸艸

〔物類稱呼 三生植〕酢漿草 かたばみ 一名すいものぐさ 京にてとんぼぐさ、泉州堺にてすもゝ、筑紫にてこがねばな、出雲にてすいぐさ、相模にてはすぐさ、江戸にてすぐさ、奥津輕にてすかんこ、尾張にてすいもの草と云、

〔宜禁本草 乾中草〕酢漿草 酸寒、主惡瘡瘑瘻、傳之殺小虫、解熱渇、初生嫩時小兒多食之、揩鍮石器白如銀、

〔和漢三才圖會 九十八石草〕酢漿草 三葉酸 三角酸 雀林草 酸母 雀兒酸 酸箕 赤孫施 鳩酸 小酸弟 醋母 ○中略

故紙〔同 風病〕　破胡子〔本草 蒙筌〕　骨脂〔同上〕

今ハ通ジテ破故紙ト云、享保年中ニ唐種渡ル、又紅毛人持來リシ新ナル種ヲ下シテ生ズ、共ニ同物ナリ、今和州ニ多ク栽ユ、苗高サ三四尺、葉ハ胡麻葉ニ似テ短シ、又カツラノ葉ニ似テ、皺紋鋸齒アリ、夏秋ノ交リ葉間ニ一寸許ノ穗ヲ出シ花ヲ開ク、形胡枝子〈ハギ〉花ノ如ク淺紫色、後圓小實ヲ結ブ、大サ一分餘、熟シテ外皮黑ク内ニ子アリ、形圓扁ニシテ茼麻子〈イチビ〉ニ似タリ、味微シク麗ク香氣ツヨシ、城州及和州ニ栽ルモノハ、實多ラカンコトヲ欲シ培養スル故氣味薄シ、瘠地ニ栽ユル者ヲ良トス、古者ハ茼麻子ヲ破故紙ト名ヲ貸ル、形能似タル故僞ルナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十四 隰草〕　榼藤子　モ。ダ。マ。　一名藤檻子〔綱目〕　猪腰子〔同上、同名多シ〕、

和產ナシ、此子古ハ紅毛ヨリ來ル、今ハ然ラズ、蠻國ヨリ四邊ノ國海濱ヘ漂流シ來ル、故ニ佐州、若州、紀州、但州、土州、豫州、筑前等ノ國、其他諸州ニアリ、皆海藻中ニ混ズ、故ニ拾ヒ得ル者アレバ誤認テ藏寶トス、因テモダマノ名アリ、或ハ蠻語ナリトモ云、其子形圓扁、大サ或ハ一寸、厚サ三分許、或ハ二寸、厚サ四分許、大小常ナラズ、栗殼色、或ハ赤ヲ帶、或ハ黑ヲ帶ブ、其肌ヘ或ハ皺澀、或ハ光滑、其一顆ヲ橫ニ切リ、内ノ肉ヲ去テ藥籠〈インロウ〉トシ藥ヲ入ル、ソノ皮甚厚硬、故ニ藥ヲ貯ベシ、コノ實全キ者ハ外ニ大莢アリ、濶サ三寸許、長サ二尺餘アリ、故ニ角如弓袋ト云、子中ノ肉色白シ、鮮ナル者ハ夏月地ニ下シテ生ジ易シ、其藤綠稜アリテ絲瓜〈ヘチマ〉藤ノ如シ、葉ハ木通葉ニ似テ左右各二ツ、四葉一蒂ニシテ末ニ二鬚アリテモノニ纏フ、年久クナレバ左右各四ニシテ八葉一蒂トナル、其一葉ヲ離セバ形長ク尖リテ、南天燭葉ノ如シ、光澤アリ、莖ト共ニ深綠色甚寒ヲ恐ル、

葉小也、

〔物類品隲三草〕蒺藜　二種アリ、○中略

白蒺藜　一名沙苑蒺藜、和名クサネムノキ、葉合歡木葉ニ似テ夜ネムル、至秋結莢、形綠豆莢ノゴトク微刺アリ、熟スレバ莢ノ節節ヨリ折易シ、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕蒺藜○中略

沙苑蒺藜ハ和產詳ナラズ、古來クサネムニ充ル說ハ穩ナラズ、クサネムハ華陀中藏經ニ載ル所ノ水茸角一名合萠ナリ、能州ニテキツネネム、越後ニテカウカグサト云、カウカハ合歡ナリ、水旁ニ多ク自生ス、夏秋ノ間多シ、葉ハ合歡木葉ニ似タリ、夜亦合ス、莖高サ二三尺、葉間ニ花ヲ開ク、黃色後莢ヲ結ブ、長サ一寸餘、濶サ三分許、扁ニシテ疙瘩多シ、熟スレバ粒粒莢ト共ニ折離テ數段トナル、秋ノ末苗根共ニ枯ル、

鬼皂莢

〔本草和名二十本草外藥〕鬼皂莢　如皂莢、高一二尺、和名久々佐

〔倭名類聚抄十七野菜〕鬼䓞莢　楊氏漢語抄云、鬼䓞莢久々散、道偽二音、一云鬱茂草、辨色立成云、鬱萠草、今按本文未詳、

〔箋注倭名類聚抄九菜類〕按鬼皂莢鬱茂草不詳、依皂莢之名與云高一二尺、疑是今俗呼草合歡者是也、

〔醫心方一〕鬼皂莢　和名久々佐

〔類聚名義抄八艸〕鬼皂莢　クヽサ

〔延喜式三十九內膳〕漬年料雜菜

鬱萌草搗三斗　料鹽四升五合○中略　右漬秋菜料

補骨脂

〔多識編二芳草〕補骨脂、伊知比、異名破故紙、開寶婆固脂、藥性論

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕補骨脂　ヲランダビユ　一名天豆綱目拾遺　補骨鴟本草原始　破過紙外科正宗

按、服牙山野處處有之、高一二尺、莖枝葉花並似萩而小、七月開花、作莢如小豆莢、中子黑色、其根甚強、故農人可厭、牛馬俗呼名駒繫、

(本草和名十八)苜蓿、一名掇面芝、(出人名、之崔禹、)和名於保比乃美、

(倭名類聚抄十七野菜)苜蓿 蘇敬本草注云、苜蓿(目宿二音、和名於保比、)茎葉根並寒者也、

(箋注倭名類聚抄九草)證類本草上品引作、莖葉平根寒、此所引恐誤、李時珍曰、二月生苗、一科數十莖、頗似灰藋、一枝三葉、葉似決明葉而小、如指頂、綠色碧豔、入夏及秋、開細黃花、結小莢圓扁旋轉、有刺數莢累累、老則黑色、內有米如穄米、今俗呼宇麻胡也之、又呼圓坐草、

(醫心方一)苜蓿(和名於保比乃美)

(類聚名義抄八草)苜蓿(上目音、下宿音、オホヒノミ、オホヒ)蓿正

(倭訓栞前編十六)むまごやし 苜蓿也といへり、げゝばなに似て花黃也、一說に百脉根也ともいへり、よ、ひま達花ともいへり。

(重修本草綱目啓蒙十九隰草)苜蓿 オホヒ(和名鈔) カタバミ ムマゴヤシ マゴヤシ サバ コウ トイゴヤシ(播州) カラクサ ミツバ エンザブル(城州一乘寺村○中略)

原野ニ多シ、秋間子生ズ、長ジテ一根ニ叢生ス、莖地ニ布ク、蔓ノ如シ、長サ一二尺、葉互生ス、形隨軍茶ノ葉ニ似テ小ク、五六分ノ大サニシテ、邊ニ細鋸齒アリ、深綠色、三月葉間ニ三五小花穗ヲナス、黃色、隨軍茶花ニ似テ小シ、後莢ヲ結ブ、卷曲シテ柔刺アリ、夏月熟シテ苗根共ニ枯ル、一種葉間ニ細莖ヲ生ジ、數花穗ヲナス者アリ、

(大和本草九雜草)沙苑蒺藜 本草綱目隰草下蒺藜集解曰、一種出同州沙苑牧馬處、子如羊內腎、ト云、其葉合歡木葉ニ似テ莖赤シ、夜ハネブル、又別ニヨク合歡葉ニ似タルモノアリ、沙苑蒺藜ハソレヨリハ合歡ニ似タルコト較劣レリ、又草決明モヨク合歡ノ葉ニ似タリ、沙苑蒺藜ハ草決明ヨリ

胡盧巴

〔延喜式 内藏十五〕諸國年料供進
茳蘆香大廿四斤卅把 淡路國卅把、阿波國廿四斤、

〔多識編 二草〕胡盧巴、和名䒮。波。知。須。今按南。蠻。大。根。

〔物類品隲 三草〕胡盧巴　葉苜蓿ニ似テ大花、白シテ微黃色ヲ帶ブ、實莢ヲ結ブ、禹錫蘇頌輩、蠻國蘿蔔子トスルモノハ誤ナリ、此物和產ナシ、蠻種享保中種子ヲ傳テ、官園ニ植、

〔重修本草綱目啓蒙 十草〕胡盧巴　一名胥曾都尉 藥譜　胥曾都護 綠蔭錄、胡巴 萬病回春
世人禹錫ノ番蘿蔔子ト云語ニ據テ、南蠻大根ノ實ト謂ズルハ非ナリ、蘿蔔ノ類ニ非ズ、舶來ノモノ異物ナリ、享保年中唐種ヲ傳テ、今ハ多ク栽ユ、春秋下種ス、苗高サ一尺許、或ハ三四尺、葉ハ一蒂三葉ニシテ、苜蓿葉ニ似テ微窄シ互生ス、夏葉間ニ一花ヲ開ク、小ニシテ白色、未ダ開ザル時ハ微シク黃色ヲ帶ブ、形胡枝子ノ花ニ類ス、花後細莢ヲ結ブ、長サ二三寸、內ニ小扁子アリ、ソノ形色舶來ノ者ト同ジ、初微ク青シ、年ヲ經レバ淡黃褐色、大サ一分ニ過ズ、莢熟スレバ根枯ル、莖柔弱莢ヲ結べバタヲレヤスシ、

〔草木育種後編 下草品〕胡盧巴(ころは) 本草　和蘭にてへーチギリイキといふ、享保年間漢種來る、春分に實を布きてよし、一枝三葉五瓣の黃花を開く、後莢を結ぶ、蒔く前に圖に糞汁を澆ぎおくべし、生長して米泔水肥水を澆ぎてよし、

猿牙

〔倭名類聚抄 二十草〕猿牙　陶隱居本草注云、猿牙一名犬牙 和名古末豆奈木　根牙似獸牙齒、故以名之、

〔撮壤集 中草〕猿牙(コマツナギ)　駒繫 同

〔饅頭屋本節用集 草木〕猿牙(コマツナギ)

〔書言字考節用集 六生植〕猿牙草(コマツナギ) 本草、苗似蛇莓、根黑若獸牙、　金剛草 同上　犬牙草 同 又云支蘭

〔和漢三才圖會 九十五毒草〕猿牙 和名古末豆奈木　○中略○中略

零零香外科正宗　燻草名物法言　丹陽草鎮江府志　多褐羅金光明経　芥香事林廣記　陵香同上

舶來ノ零陵香ニ豆葉樣麥藁樣ノ二品アリ、豆葉樣ノ零陵香ハ、一名豆樣ノ零陵香トモ呼ブ、コノモノ眞物ナレドモ久ク渡ラズ、苗ヲ一尺許ニ切リテ、束シテ葉ノ形チハ薄荷葉ノ如クシテ鋸齒ナク、香氣多シ、和產漢種共ニアリ、麥藁樣ノ零陵香ハ古渡モアリ、明和七年ニ多ク渡リ、其後モ追追來ル、苗ヲ一尺許ニ切リ束ネタルモアリ、稍長クシテ根ヲ連ルモアリ、皆莖空ク光澤アリ、麥藁ノ狀ノ如シ、葉ハ小ニシテ互生ス、形ハ茼蒿葉ニ似テ微ク長ク鋸齒アリ、莖頭ニ穗ヲ成ス、長サ一寸許、花ハ胡枝子ノ花ニ似テ小シ、枯物ナル故、色ハ見分ガタシ、香氣多シ、是救荒本草ニ載スル所ノ草零陵香ナリ、曰又名莬香、今人遇零陵香缺多、以此物代用ト、今種樹家ニテ唐種ノ黃蓄ト稱シテ售モノアリ、卽草零陵香ノ一種ニシテ、黃蓄ニハアラズ、形狀麥藁樣ニ同ジク香氣多シ、總州ニ自生アリ、此草子生ヨリ三年ニシテ、苗高サ五六尺ニ至リ、小黃花ヲ開ク、救荒本草ニ開淡粉紫花ト云ニ異ナリ、莖モ空虛ナラズ、故ニ草零陵香ノ一種トス、又山海經ノ薰草ヲジヤカウサウニ充ルハ穩ナラズ、ジヤカウサウハ、苗葉ヲ撚レバ、其氣麝香ノ如シ、葉ヲ採又乾セバ、香氣ナシ、漢名彙苑詳註ノ麝草ニ近シ、

增天保十四年鐙種ノ草零陵香舶來ス、獲名レノンクルト云、春種ヲ下シ、高サ二尺許、莖中空ニシテ葉互生ス、三葉一椊ナリ、一葉ノ形胡枝子葉ニ似テ薄ク粉綠色、梢葉ハ至テ細シ、夏月葉間ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、破故紙ノ花ニ似テ小ク淡綠色、後三分許ノ白莢ヲ綴リ數粒攢生ス、子ハ白芥子ノ大ニシテ扁ク淡褐色、夏月萌ケバ多モ枯レズ、生ハ香氣ナク、乾ケバ香氣アリ、救荒本草ノ圖ニ能合ヘリ、一種モロコシグサハ、春舊根ヨリ生ズ、圓莖高サ一尺餘、葉互生ス、番椒ノ葉ニ似テ濶ク微ク紫色ヲ帶ブ、香氣ナシ、六月葉間ニ莖ヲ生ジ、五瓣、三分餘ノ黃花ヲ開ク、子ハ麻仁ノ如シ、熟シテ白シ、

〈倭名類聚抄草二十〉苦參　本草云、苦參一名苦蘵、音識、和名久良々、一云末比里久佐、

〈箋注倭名類聚抄十草〉本草又云、一名地槐、一名菟槐、一名驕槐、陶注、葉極似槐樹、故有槐名、花黃、子作莢、根味至苦、圖經云、其根黃色、長五七寸許、兩指麁細、三五莖並生、苗高三二尺已來、葉碎青色、春生多凋、其花黃白、七月結實、如小豆子、時珍曰、七八月結角、如蘿蔔子、角內有子二三粒、如小豆而堅、又曰、苦以味名、參以功名、

〈藻鹽草八草〉和名少々　苦參くらゝ、又まとりくさ、

〈重修本草綱目啓蒙八山草〉苦參　クラヽ、延喜式　マトリグサ古歌　キツネノサヽゲ仙臺　苦辛和方書　カナミツサヽゲ越後、讃岐同名、　一名鑽眉根[illegible]　鹿白本草補遺　板麻秘藏本草　土塊三才圖繪

山野ニ極テ多シ、宿根ヨリ春苗ヲ生ズ、高サ三四尺直立ス、葉ハ槐或ハ黃芪ノ葉ニ似タリ、切レバアワクサシ、夏月莖梢ニ淡黃色ノ花ヲ開ク、形赤小豆ノ花ノ如シ、又白花紫花紅花アリ、角ヲ結ブ、長サ二寸蘿蔔ノ莢ノ如シ、秋ニ至レバ苗枯ル、根黃白色、甚大ナル者アリ、味至テ苦シ、

〈延喜式三十七典藥〉諸國進年料雜藥

山城國卅二種、〇中略牛膝、苦參各廿五斤、　伊賀國廿三種、〇中略獨活、苦參各廿斤、〇下略

〈武江產物志藥草〉尾久ノ原　苦參目黑邊ニモ

〈佐渡志五物產〉苦參　方言クラヽ、　山野ニアリ、一種ムジナノ苦辛トイフモノ、野生アリ民家ニ方言セムブリトイフ、

零陵香

〈大和本草六藥類〉零陵香　カラヨリ來ル芳草也、昔日本ニ見知シニヤ、延喜式十五卷、遠江國交易所進零陵香三十把トアリ、イブカシ、今モ本邦ニアリヤ、獸醫ノ用ユルルウタト云草アリ、本艸ノ零陵香ノ形狀ニ似テ異ナリ、別物也、

〈重修本草綱目啓蒙九芳草〉薰草零陵香　一名鈴鈴香八閩通志　陵陵香壽世保元　零香草廣西通志　鈴子香同上

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、略〇中 地楡、黄耆各十斤、 伊勢國五十種、略〇中 黄耆十一斤、略〇下

〔大和本草 雜草 九〕百脈根(ミヤコクサ)、細草也、四月黄花ヲ開ク、花形豌豆花ニ似タリ、色ヨシ、葉小ニシテ三ニ分ル、仙臺ハギノ如ニシテ小也、京都大佛ノ前耳塚ノ邊ニ多シ、本草山草上ニ出タリ、實ハ莢アリテ兩々相生ス、

〔重修本草綱目啓蒙 山草 七〕百脈根 ミヤコグサ ミヤコバナ コガネバナ コガネメヌキ キレンゲ エボシグサ江戸 キツネノエンドウ江州 コガネグサ加州

原野極メテ多シ、一根叢生、莖長七八寸、皆地ニ就テ生ジ、荷花(レンゲバナ)紫草ノ狀ノ如シ、五葉ゴトニ一處ニ生ジ、迎春(ワウバイ)花葉ノ形ノ如ニシテ薄小ナリ、色ハ深緑、三四月莖端ニ七八花攢簇ス、形モ荷花紫草花ノ如クニシテ大ナリ、金黄色又褐色ヲ兼ユル者アリ、花後細莢ヲ結ブ、長サ寸許、生ハ青ク熟ハ褐色ナリ、

〔廣益地錦抄 六〕百脈根(ひやくみやくこん) 葉は萩のかたち、極てちいさくしげく付、えだ多く地にしく、花形さゝげの花のごとく、うこん色おほく付、四五月にさく、花も葉もあひらしくながめたへず、實はさゝげのごとくにして、一所に二ツ宛付、近邊所々芝の間道のかたはらに多ク生ル、目黒邊、淺茅、王子邊芝野の中、又は道のかたはらに多ク生、花ざかりの節は、行人あしをとゞむるほどながめあり、宿根より生ル、又種を蒔てもよくしげる草花の名烏帽子草共、みやこ草ともいふ、

〔新撰字鏡 草〕苦參 久。良。々。

〔本草和名 草 八〕苦參、一名水槐、一名苦蘵、出仁諝音義 一名地槐、一名菟槐、一名驕槐、陶景注云、葉似槐、故有槐名、 一名白莖、一名虎麻、一名岑莖、一名祿白、一名陵郎、已上出本條 一名祿光、一名熟公、一名岏、一名虎麻、一名委提蓳、一名顚棟、一名使、已上七名出雜要訣 和名久良々、一名末比利久佐、

木黃耆　富士山產、蔓延スルコト翹搖(ノエンドウ)ノゴトク、花淡黃色又紫花ノモノアリ、根ハ横ニ延ブ、雷斅曰、凡使勿用木耆草、眞相似、只是生時葉短幷根橫也ト云モノ是ナリ、根堅實ニシテ味苦澁、葉ハ味甘シ、豐後產根甘シテ葉苦キモノト相反ス、讚岐阿野郡川東山中產、富士山ノモノト同種ナリ、日光又一種ヲ產ス、特生スルコト豐後ノ產ニ似タリ、根堅シテ味苦澁ナリ、以上三種皆下品ニシテ不堪藥用、

〔重修本草綱目啓蒙　山草七〕黃耆　ワ。ウ。ギ。通名　一名百藥綿　綱目　綿耆　原始本草　甘板麻　採取月令　黃嗜　華陀內照圖　羊肉　蒙筌

綿木ノ分アリ、略〇中京師北山中ニ生ズルモノハ、葉ノ形槐葉ニ似テ、莖柔弱直上セズシテ地ニ偃シテ藤蔓ノ如シ、夏月葉間ニ花ヲ生ズ、淺黃色、他州ニハ淡紫色ナルモアリ、形豆花ノ如クニシテ小、數朶穗ヲナス、後角ヲ結ブ、小豆角ヨリ狹細中ニ一隔アリ、子ソノ内ニ滿ツ、形至テ小ク、淡褐色ナリ、秋後苗枯レ、春ニ至リ舊根ヨリ叢生ス、葉味甘ク根味微苦ニシテ硬シ、是木耆ナリ、豐後、下野、信濃ニ產スルモノハ、葉味苦根味甘シテ柔軟ナリト云、然ドモ未ダ肆中ニ出デズ、ソノ加州白山、和州金剛山、駿州富士山上ニ生ズルモノ、形狀皆同ジ、富士山麓ニ生ズル小葉紫碧花ノモノハ別種ナリ、黃耆ニ非ズ、廣島種近來傳ヘ、花戶ニ植テ唐種ト云フ、春舊根ヨリ苗ヲ叢生ス、莖幹直上シ高サ三四尺、苦參ノ形ニ似タリ、圓カニシテ毛アリ、葉ハ槐葉ニ似テ微狹ク、又苦參葉ニ似テ毛アリ、淡綠色、夏月梢葉間ニ花ヲ開ク、黃白色、形小豆花ニ似タリ、後短莢ヲ結ブ、秋深テ苗枯ル、藥舖ニ販グ者漢渡ハ形纖長二尺許、箭幹ノ如シ、略〇中朝鮮ヨリ來ルモノハ味微シ苦シ良ナラズ、和產ハ加州白山、越州立山、和州金剛山ヨリ出ス、根柔ニシテ味甘シ用ユベシ、富士黃耆ハ根硬シ、下品ナリ、今廣島種ヲ河州和州ニ栽ヘテ、大坂ノ藥舖ニ出ス、僞テ唐種ノ黃耆ト云、根柔軟ニシテ白肉、黃心舶來ノ者ニ異ナラズ、味甘厚上品ナリ、

ト云フ、其形チ石榴ニ似テ內黑ク其味甘シ、甚ダ珍物ナリ、小兒殊ニ好テ食フ、

〔新撰字鏡 草〕黃耆〈[illegible]久佐〉

〔本草和名 七 草〕黃耆、一名戴糝、〈仁諝音[illegible]反〉一名戴椹、一名獨椹、一名芰草、〈楊玄操音作、[illegible]寄反〉一名蜀脂、一名百本、和名也波良久佐、一名加波良佐々介、

〔倭名類聚抄 二十 草〕黃耆　本草云、黃耆、〈和名夜波良久佐〉

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕蘇注云、此物葉似羊齒、或如蒺藜獨莖、或作叢生、蜀本圖經云、獨莖、枝扶疎、紫花、根如甘草、皮黃肉白長二三尺許、圖經云、枝幹去地二三寸、七月中開黃紫花、其實作莢子長寸許、李時珍曰、葉似槐葉而微尖小、又似蒺藜葉而微濶大、青白色、花大如槐花、結小尖角、

〔藻鹽草 八 草〕和名少々　黃耆かはらさゝけ

〔物類品隲 三 草〕黃耆　本草綿黃耆、白水耆、赤水耆、木耆等ノ數種アリ、按ズルニ白水赤水ノ二種ハ所出ノ地名ヲ以テ名ク、綿黃耆ハ蘇頌曰、其皮折之如綿、謂之綿黃耆、陳承曰、出綿上者爲良、故名綿黃耆、非謂其柔韌如綿也、松岡先生綿大戟ノ例ヲ以テ頌ガ說ヲ優レリトス、今從之、木耆ハ堅剛ニシテ木ノゴトクナルヲ以テ名ク、本邦數種アリ、

綿黃耆　根柔ニシテ味甘キモノ上品ナリ、藥肆鐵椎ヲ以テ木黃耆ヲ打テ綿ノ如クナルモノアリ、用ベカラズ、豐後產上品、莖葉苦參ノゴトク特生ス、五六月淡黃花ヲ開ク、狀槐花ノゴトシ、花謝シテ後短小角ヲ結ブ、根直ニ土ニ入コト二三尺、皮赤色ニシテ甘草ニ似タリ、肉白柔韌ニシテ綿ノゴトク味甘シ、丁丑主品中田村先生具之、下野日光山產上品、莖葉大抵豐後產ニ同ジ、豐後產ニ比スレバ、幹弱ク叢生シテ去地數寸、根柔ニシテ味甘シ、信濃戶隱山地藏谷產至テ上品ナリ、其形大抵日光產ニ同ジ、花淡黃色、又紫花ノモノアリ、實狀魁搖子ニ似テ、長寸許ニシテ扁ナリ、根柔ニシテ味甘シテ餘味アリ大サ一虎口ノモノアリ、同國善光寺青山仲菴是ヲ得タリ、壬午客品中具之、

ヅ、奥州ニモアリ、直海氏曰、古ヨリ富士甘草トテ、富士山ヨリ出ヅト、按ズルニ今官園ニ所ﾚ有ノモノ、本甲斐國ニ出ヅ、然ドモ山中多出ルコトヲ聞ズ、又其他處產スルモノ未ﾚ見ﾚ之、甲斐產苗ノ長二三尺、葉ハ紫藤葉ニ似テ、稍小ニシテ微毛アリ、根皮紫赤色、肉黄色ニシテ味甘シ、此物甲斐國山梨郡上於曾村伊兵衞、同郡下石森村與兵衞園中ニアリ、其始所ﾚ出未ﾚ詳、或云、甲斐深山中ヨリ出ヅ、或云、武田信玄漢土ヨリ得テ植ルモノ、今尙存スト、何レカ是ナルコトヲ知ズ、享保中阿部將翁、台命ヲ奉ジテ、甲斐國ニ至テ是ヲ得タリ、今東都及駿府官園ニアルモノ是ナリ、駿府ニテハ甚繁茂ス、東都ニテハ繁茂セズ、戸田先生非藥選曰、一種稱ﾆ南京樣ﾆ者、御園之種而人間幾希ト、今官園ニ此種ナシ、又甘草苗漢土ニ徴スコトヲ聞ズ、

〔草木育種 下 藥品〕甘草 木草　和名抄にあまきと云、本甲斐國に甘草あり、今又二種あり、葉小く圓して、根横に延ざるもの上品にして、南京種に近し、一種は葉紫藤に似て小く、根細くして蔓の如、節々より芽を生ずるもの、是福州種なるべし、ともに三月頃芽出ざる時、堀て節を籠て三四寸ぐらいに切て、山の締たる赤土を深堀、右の根をはすに栽、よく根廻を踏かためてよし、土柔なれば腐ものなり、少しづゝ肥土をませて植べし、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

常陸國廿五種、○中略 甘草廿五斤十三兩、　陸奥國六種、甘草十斤、　出羽國二種、甘草五斤、

〔採藥使記 下 甲州〕照任曰、甲州石部ト云フ所ヨリ甘草ヲ出ス、又ヲリト云フ所ニモアリ、二種アリ、即チ獻上ス、

重康曰、甲州石森村ヨリ甘草ヲ出ス、又打栗ト云フ所ニモアリ、土人ノ曰、昔ヨリアリテ甲州ノ名物ナリト云ヘリ、

重康曰、甲州栗林村ト云フ所ニ、土甘草ト云フ物アリ、多ク楮木ノ林ノ中ニ生ズ、土人呼テクヌギ

なり、其幹枯すして春に至て芽を生ず、

〔本草和名 六草〕甘草、一名蜜甘、一名美草、一名蜜草、一名蕗、仁諝音路 抱罕草、仁諝上音浮、下音漢、抱罕羌地名也、 鰌魚腸者 不好常甘草、之三 楊玄操音、明、已上出陶景注一 一名大苦、一名甘、出蘇敬注、已上 和名阿末岐、

〔倭名類聚抄 二草十〕甘草 本草云、甘草一名蜜草、和名阿末木

〔箋注倭名類聚抄 十草〕圖經云、春生青苗高一二尺、葉如槐葉、七月開紫花似柰、冬結實作角子如畢豆、根長者三四尺、麤細不定、皮赤上有橫梁、梁下皆細根也、爾雅蘦大苦、說文同、以苦爲苓、蘦苓也、正義引孫炎曰、本草云、蘦今甘草是也、蔓延生、葉似荷青黃、其莖赤有節、節有枝相當、或云、蘦似地黃、郭璞注同、王引之曰、大苦者大芐也、爾雅云芐地黃、芐苦古字通、公食大夫禮、羊苦、今文苦爲芐、是也、蘦似地黃、故一名大苦、沈括筆談云、郭璞注、乃黃藥也、其味極苦、故謂之大苦、非甘草也、甘草枝葉悉如槐、宋本草圖經謂、甘草葉似槐、與古相違、殊不足信、苦乃芐之假借、非以其味之苦也、據圖經、黃藥葉似蕎麥、而大苦葉乃似荷似地黃、形狀亦不同、不審括何以知爲黃藥、孫炎據本草以蘦爲甘草、今本草無復蘦名、蓋傳者失之、名醫別錄生河西川谷積沙山及上郡、又云、木甘草生木間、三月生、大葉如蛇牀、四四相值、然則木甘草亦是枝葉相當、孫炎謂甘草枝相當、得其實矣、

〔下學集 下草木〕甘艸 亦名國老、言諸藥與此藥投合、相和藥時以甘草加之、則諸藥和合、不成害、故一切藥加甘草也、猶若國相數成毒時、有國老來而調理、非和睦之、則不成害也、故以之爲國老、見本草、詳

〔和漢三才圖會 九十二本 山草〕甘草 蜜甘 蜜草 美草 蕗草 靈通 國老 其大者名粉草 和名阿末木 ○中略

按甘草出於南京陝西河東山西者爲上、皆稱之南京甘草、出於福州者細脆帶微苦味、又細而如秆者、俗謂之蔓手、又大者名粉草、俗謂之棟手、

往昔日本有甘草、延喜式云、陸奧出羽常陸每年貢之、如今絕不出、雖希有而細硬不佳、

〔物類品隲 三草〕甘草 ○中略 稻生先生曰、今甲斐國地方山皆有之、貝原先生曰、近世甲斐國ヨリ多ク出

茳芒決明

〔農政全書〕江南豆（花暦百詠）秋小豆（採取月令）

享保年中ニ渡リシ漢種、今城州山城郷長池富野邊ニ多ク栽ヘ、子ヲ收テ藥舖ニ送ル、春分ニ種ヲ下シ、苗高サ二三尺、葉互生ス、初出ル葉ハ四葉排生シ、後ニ出ル葉ハ六葉排生シテ一大葉ヲナス、鶯豆ノ葉ノ如ニシテ薄小ナリ、其六葉ノ内末ノ二葉ハ長大ナリ、已下漸ヲ以テ小ナリ、夏月葉間ニ花ヲ開ク、五瓣ニシテ梅花ノ形ノ如ク、深黄色、大サ錢ノ如シ、花謝シテ角ヲ結ブ、長サ六七寸、小豆莢ノ如シ、内子ハ赤小豆ニ似テ一頭尖リ、斜ニソギタルガ如シ、黄褐色ニシテ光リアリテ堅シ、秋後苗根共ニ枯ル、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

駿河國十七種、○中略 麥門冬、決明子各五升、　伊豆國十八種、○中略 決明子二升、○下略

〔百品考上〕茳芒決明　一名望江南、一名江南豆、一名槐葉梅、一名蛇滅門草、　和名ハ。ブ。サ。ウ。

本草綱目、李時珍曰、一種茳芒決明、苗莖似馬蹄決明、但葉之本小末尖、正似槐葉、夜亦不合、秋開深黄花五出、結角大如小指、長二寸許、角中子成數列、狀如黄葵子而扁、其色褐味甘滑、○中略

琉球種ヲ傳種ウ、苗ノ高サ三四尺、馬蹄決明ニ似テ莖巨ク、葉モ馬蹄決明ニ似テ葉數多ク、十二三ヨリ十四五ニ至ル、葉ノ形チ馬蹄決明ニ類シテ前後尖レリ、夜合セズ、七八月梢ニ聚リ花アリ、馬蹄決明ノ葉間每ニ花ヲ開ニ殊ナリ、五瓣黄色、梅花ノ狀ナリ、故ニ槐葉梅ノ名アリ、花後莢ヲ結ブ、小指ノ巨サニシテ長サ二寸許、中ニ扁子二行ニナラブコト、本草ニ說クトコロノ如シ、子ハ扁クシテ圓シ、馬蹄決明ヨリ小ナリ、黄褐色實熟シテ苗枯ル、寒地ニテハ實熟シガタシ、

〔草木育種下藥品〕望江南（救荒本草）又蛇滅門草と云、琉球より來る、薩摩、駿河、伊豆、安房等の暖地によし、寒國にては養がたし、四月種を蒔べし、形狀馬蹄決明に似たり、實を結事遲ゆへ、霜降れば實のらず、子を採には初より盆へ蒔、夏中度々魚洗汁人糞等を灌、十月比より唐むろへ入置ばよく實入

〔本草和名 七草〕決明（陶景注云、主明目、故以明之、）一名馬蹄決明、（陶景注云、子形似馬蹄、故以名之、）草決明一名萋蒿子、（已上二名出陶景注、）一名草用、（明眼用、出雑要訣、）一名羊明、（已上二名出釈薬性、）和名衣比須久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕決明　陶隠居本草注云、決明（和名衣比須久佐）石決明是蚌蛤類、皆主明目、故並有決明之名、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕證類本草上品決明子條引陶隠居、不載所引文、引唐本注云、石決明是蚌蛤類、形似紫貝、附見別出、在魚獸條中、皆主明目、故並有決明之名、其文全同、此引為陶注誤、按本草和名誤引陶景注云、主明目故以名之、爾雅、薢茩芵光、郭注云、芵明也、葉鋭黄赤、華實如山茱萸、陶云、葉如茳芏、子形似馬蹄、呼為馬蹄決明、蜀本圖經曰、葉似苜蓿而濶大、夏花、秋生子作角、陳藏器曰、江芏是江蘺子、芏字（音吐）草也、似莞生海邊、可為席、又與決明葉不類、本草決明注又無、好事者更詳之、圖經、人家園圃所蒔、夏初生苗、高三四尺許、根帶紫色、七月有花黄白色、其子作穗、如青菉豆而鋭、又有一種馬蹄決明、葉如江豆子、

〔多識編 二草〕決明、伊。多。知。左。左。介。

〔宜禁本草 乾中草〕決明子　鹹平、主青盲赤白膜眼赤痛涙出、常可作菜食、除肝家熱、作枕勝黑豆、治頭風、明目、食療曰、（葉明目、利五臓、食之甚良、子主肝家熱毒氣風眼赤涙、）

〔大和本草 九草〕決明　本草時珍曰、決明有二種、一種馬。蹄。決。明。コレハ仙臺ハギノ葉ニ似タリ、稀ニアリ、其葉如代合、其莢長五六寸、其子如馬蹄、其子ノ形異常モノナリ、本草ニ詳ナリ、一種茳。芒。決。明。葉槐葉ニ似タリ、山野ニ多シ、又其葉合歡木ニ似タリ、其實ハ豆ノゴトク莢アリ、本草ニ詳ナリ、其莢ノ皮ヲ去テ、火ウチノ付ダケニス、能火ヲ發ス、筑紫ノ方言ニ秋ボトクリト云、又草決明ハ青葙子也、別物也、

〔重修本草綱目啓蒙 十一 隰草〕決明　エ。ビ。ス。グ。サ。（延喜式）　今通名　一名金豆兒（通雅隰生入）　槐藤（秘傳花鏡）　槐豆

土圞兒

蔓藤袴

矢筈草

按矢筈草出野堤小草也、小葉似槐及奴(イヌ)柘(ツゲ)而長抱莖生、高二尺許、枝條希而如蓍(メド)萩(ハギ)之萱、秋葉交結小花穗、微似帶草穗、其葉及晩景則如萎如睡、朝乃如故也、

薹薹菜(出于前)眞矢筈草矣、此草名矢筈之謂未審、

〔倭訓栞(前編保)二十入〕ほど(略○中)土圞兒をもいへり、蔓の長きに間ありて、芋子の如き丸根多く連り附り、よて名くるなるべし、飛驒にてはふ。ど。といひ、遠江のあたりには岡。ぐ。わ。ゐ。藤。ぐ。わ。ゐ。などもいへり、(略○中)土芋をもよめり、

〔和漢三才圖會(百二十果蓏類)〕土芋　土卵　土豆　黄獨(本草綱目)　土圞兒(救荒本草)　地栗子(同上)　俗云保止

本綱、土芋蔓生葉如豆、其根似芋而圓如卵、肉白皮黄、生食吐人、以灰汁煮食甘美、

根(甘芋寒有小毒)　解諸藥毒、生研水服、當吐出惡物、

按土芋北地有之、畿内種之者希、奥州津輕人、端午日角黍土芋相並食之、以爲嘉例、(黄獨別此一種、爲土芋異名者非也、)

〔成形圖說(二十二菜)〕保度(り卽土芋な○中略)

此もの山林に生ず、亦人家に種るなり、蔓細く、葉山芋に似て五葉一處に出づ、根蔓長く連茄(ヒつへと)て、卵の如き芋許多も著り、味甘美にして亦山芋に似たり、北地奥邊に糸(まま)し、灰汁を以て煮食ふ、但饑器を急ともいへり、

〔甲斐國志(百二十三産物及製造)〕一苦蔞　方言ホド、凶歳ニハ山中民採テ食之、何首烏ノ類ナリ、

〔大和本草(入蔓草)〕蔓藤袴　莖葉如豌豆、花長、垂ル、事如藤花、色モ紫ニテ美ハシ、蔓長ク方ニシテ稜アリ、葉ノ付タル小枝ト花付タル小枝ト一處ニ相對シ、毎節ニ生ズ、小枝ノ末ニ各鬚三條アリ、鬚ノ長二寸許、括蔞ノヒゲノ如クマガレリ、冬ハ莖葉根枯、

砕米薺

ハ總珠ノ音ナレバ、コノ草ノ名トスルハ誤ナリ、

〔書言字考節用集 六生植〕砕米薺　蓮花菜

〔大和本草 九雑草〕砕米薺　京畿ノ小兒コレヲレンゲバナト云、筑紫ニテホウザウバナト云、三月花サク、赤白色、高三四寸アリ、小兒取アツメテ其莖ヲタヽリ合セ玩弄トス、山野ナキ地ニハ此草ヲ圃ニウヘテ、其葉莖ヲ馬ニ飼フ、其葉ワカキ時食ス、食物本草救荒野譜ニノセタリ、本草不載、又白花アリ、日久ケレバ色變ジテ赤シ、其花愛スベシ、

〔和漢三才圖會 九十四末濕草〕砕米薺　俗云蓮華花

救荒本草云、砕米薺三月采葉可作齏、

按圖不明、其形狀而所圖似今云蓮華花也、蓋砕米薺之名義未解也、蓮華花春生苗、其葉似皂莢及槐之嫩葉、兩兩對生、枝莖布地如蔓、節上抽莖頂開花、自三月至四月末盛、其花淺紫色、本朝有白花者形似蓮華故名、結莢三稜、黑色、長五六分、中有細子、自撒畠生、其多處如敷錦於地、人以爲野遊之一興、有白花者、和州多有之、能治湯火傷、採葉傅汁、

一種有似砕米薺莖葉、而四月開正黄花者、其花生莖末形如苧邊運、五月結莢、長一寸許、似野豌豆、

蛆草

〔大和本草 九雑草〕蛆草　此草ヲ醤ナドニ少加ユレバ蛆生ゼズ、漢名不知、其葉ハ莖ノ末ニ各三葉アリ、葉小ニシテ木葉ノ如シ、本ハ小木ノ如シ、葉味レプシ、本草蛆ノ集解、草烏頭ヲ切ヘギテ醤ニ投ズレバ蛆生ゼズトアリ、此草モ亦然リ、然レドモ毒草ナルベシ、性未詳、

葦蓋菜

〔和漢三才圖會 九十四末濕草〕葦蓋菜　箭頭草　俗云矢筈草、又別有矢筈草、見于後、

農政全書云、生田野中、苗初搨地生、葉似鈚箭頭樣、而葉蒂甚長、其後葉間攛葶開紫花、結三瓣蒴兒、中有子如芥子大、茶褐色味甘、今人用根葉、搗傅諸腫毒良、

按矢筈草高尺許、葉厚青色、頗似麥葉、又似矢羽形、開小白花帶微紫、結子如芥子大、

黄環

擣之計、如石曼鄕種桃而用破草鞋、猥陶侃拾竹頭木屑之意乎、

〔本草和名 十四 木〕黄環、一名陵泉、一名大就葛、子名狼○狼下恐脱跋字子、已上二名出雜要訣一名蜀黄環、一名黄還、一名生蒭、一名根韭、已上四名出釋藥性一名度谷、一名雞屎藤、一名土防己、已上出稽疑和名布知加都良、

〔本草和名 十一 草〕狼跋子、楊玄操音薄葛反一名度谷、一名就葛、已上二名出雜要訣和名布知乃美、

〔多識編 二 草〕黄環、布知可豆良、

〔重修本草綱目啓蒙 十四 蔓草〕黄環 根名 狼跋子 實名 中略 ○

増、黄環ハハマナタマメナリ、一名インナタマメ、ハマタズカヅラ、筑州ハマタナワキ、阿州タチワキ、土州南方暖國海濱ノ砂地ニ自生アリ、春舊莖ヨリ葉ヲ生ズ、葛ノ類ナリ、葉莖ニ互生ス、形葛ノ葉ニ似テ圓ク、厚シテ三葉一帶ナリ、一葉ノ形柿葉ニ似テ、面背共ニ光澤アリテ、葛葉ノ褐毛多キニ異ナリ、六七月葉間ニ數花簇生ス、形チ刀豆花ニ似テ淡紫色、花後莢ヲ結ブコト、刀豆ノ莢ニ似テ長サ僅ニ二三寸、中ニ實アリ、各二粒或ハ三粒大サ六七分、淡褐色ニシテ扁シ、歳ヲ經ル者ハ根巨クシテ塊狀ヲナス、集解蘇恭ノ說ニ取葛根誤食之吐利不止、土漿解之、此眞黄環也ト雖ドモ、根ニ限ラズ實ヲ食フ者モ、必ズ吐利シテ止マズ、又弘景ノ說ニ、投水中魚無大小皆浮出而死ト云時ハ、苗根花實共ニ毒アルモノト見ユ、阿州海部郡土州海濱等ニテハ、小見誤テコノ子ヲ炙リ食ヒ、毎毎ニ中ルコトアリ、

ワンジュ

〔重修本草綱目啓蒙 二十四 喬木〕無患子 中略 ○

釋名鬼見愁 古說ニワンジユニ充ツ、ワンジユハ暖地ノ產ナリ、九州紀州ニアリ、肥後ニテハカマカヅラト云、海濱ニ生ズ、葉ノ形防己葉ニ似テ、末凹ナルコト牛ニ過テ、ヤハズノ形ニ似タリ、互生ス、夏月花ヲ開キ後莢ヲ結ブ、刀豆角ニ似テ短ク、内ニ三四子アリ、大サ四五分ニシテ圓扁ナリ、厚サ三分許、色黑シテ光リアリ、至テ硬シ、用テ念珠トス、ワンジユノ數珠ト云、然レドモワンジユ

也、又四國の山には南天の大木有、俱に畿内邊の人は異也とす、

〔武江產物志草類〕胡枝子花八月■より 龍眼寺柳島萩寺ト云 清水寺淺草 正燈寺淺草 觀音奥山淺草 三圍稻荷

〔一話一言十五〕萩寺

本所押上村龍眼寺を萩寺といふ、龍眼寺和尙萩を數寄て、數塞をうゆ、予に詠せよといふ、

きゝしより見る目ぞまさる此寺の庭におりしく萩のにしきは　高辻大納言家長

此寺に碑をたて、芭蕉翁の發句をかけり、

ぬれてゆく人もおかしや雨の萩

近比萩寺にゆきてみしに、此碑なし、

〔萬葉集八秋雜歌〕山上憶良詠秋野花二首○一首略

芽之花、乎花、葛花、瞿麦之花、姫部志、又藤袴、朝貌之花、

〔萬葉集十三挽歌〕九月之、四具禮乃秋者、大殿之、砌志美彌爾、露負而、靡芽子乎、珠手次、懸而所偲、○下略

〔臥雲日件錄〕寶德四年○享德元年十一月十一日、南禪島東主來、○中略予又問曰、妙興開山有柱故事、昔年赴關東時、聞諸道途、故不敍于入東錄、島曰、州中養于薪柴、妙興開山曾於去寺可三里買大洲、人不知其故、州中飢饉之歲、師勸里中兒童曰、持破草鞋捨于路傍者來、則當與錢、諸兒各從命來者必如約、如此者殆乎一歲、破草鞋積如山、師於是命寺之力役刈萩來切、根可包鞋、又命折柳枝來切之、亦如萩長、然后從諸僧到彼洲、凡緊乎一萩以一草鞋、插散州中、柳枝亦然、其不知幾千百、人又不知爲其事、到明年萩與柳生洲中、鬱々葱々、爾來刈之爲薪也、洲廣可方五百里、○五百里恐誤故一年受用殆乎三百貫之資云、寺用有餘、故州中養于薪者亦刈之、率三分一以供寺、于今如此云々、又曰、人傳開山乃高野大師再來、故雙桂賛有高山起定歸禪派、熱社施田護法門之句、蓋熱田明神有施田之異、下句謂之也、予曰、栽萩

の古枝に咲けると、古歌に亦詠じ、或山民は、弓などにも作るなり、宮城野產も同種なり、其幹頗る高く、花は稍小さく、幹の本ハ疎なれば、モトアラの小萩とも云ふとぞ、

今世上にて宮城野萩と呼ぶハ、紫色、薄紫又紫白、交り等共に眺めよく、枝も長く垂れ、窈窕として亦愛すべき者多し、花戸にては、就中その紫艶最美なるを撰て、眞の宮城野種なり抔と云囃し賣るもの也、其枝細くして糸の如くなるを、亂れ萩と呼ぶ、

〔剪花翁傳前編四 八月開花〕萩　糸はぎ、花赤色、形小く、枝垂る也、白はぎあり、宮城野、花の色赤し、形ち少し、矢筈又めどはぎともいひ、又雀はぎともいふ、色白し、高さ四尺許にも及ぶ、開花八月上旬也、方地土撰ばず、肥大便塞中に入べし、移分株多より春彼岸迄よし、升水は灰汁にて煮るべし、又上酢にて煮れバ尚よし、又方本口を沸湯に扦入、此湯さむれば沸湯と仕替扦入、如是二三度も沸湯に替て後、冷水にとくと漬、よく水上たる時用ふべし、又方薄き筵を覆ひ、此上より沸湯を澆ぎかけ、しばらくして、冷水に漬おきて後扦べし、

〔玉勝間十三〕萩の大木の事

みちのくの宮城野わたりの萩は、高さ二丈あまりばかりなる多し、又同國の津輕の弘前の二里ばかりこなたに、大鰐といふところに、大日堂のある、前なる林の中に、一木の大木の、十餘丈ばかりの高さの、かこみ四圍ばかりなるあるを見れば、葉も花も全萩也、又さつまの國にも、萩の大なる木有といへりと、ある物にしるしたり、まことにや、

〔翁草三十九〕宮城野の萩は木萩にて、灌木のごとく、尋常の草萩とは異にして、弓などに作る樹也、また本あらこ萩といふは、梢に青き枝生出て、其枝に花咲ゆへ、本のあらはれざると云下略歟、宮城野の本あらこ萩露をもみ風を待ごと君をこそまて、

一山萩は北國の山中に有木也、花は白或は白紫咲分抔有、其大なる物は凡の柱に成べき程の木

〔萩花集說〕はぎの和名、異稱頗る多し、波疑(爲忠集)、波義(同)、芽子(同)、芳宜(續日本後紀)、芽子花(和名抄、漢語抄)、初日草(同)、野守草(同)、古枝草(同)、秋驟草(同)、紅染草(同)、月見草(藻鹽草)、水カヽグサ(同)、鹿鳴草(古歌)等なり、又漢名ハ、天竺花(圖經本草)、胡枝子(救荒本草)、隨軍茶(同)、觀音菊(百花集譜)、和血丹(植物名物圖考)といふ、古來萩の字を假用するハ、字形の會意にして、秋草の殊著なるものなれば、恰もつばきに椿の字を用ゆるが如し、錦窠家の說には、萩ハカハラハヽコ又アラレギクにして、別物なり、而るに中山傳信錄にも萩の字を用ひ、又周煌琉球國志略に、萩は枝條纖弱如柳、小葉如槐、亦作品字、九月開花、葉間通滿紫艷如扁豆花形」とあるは、實にははぎにして、沖繩ハ固より本邦の物名を大約通用し異ならざるなり、

一萩花の類尠からず、常品及び若干種を左に掲げ、參觀に便す、

通常の品は、諸國山野自生多くして、山萩野萩と云ふ、又人家園庭にも、亦多く栽ゆるものにして、春月宿根より萌芽し、又舊幹よりも新枝を出し、楕圓品字形をなし、秋月莖高さ六七尺、枝を分ち窈窕として、葉間花を着く、紅紫美にして最愛すべし、早く咲くを花戸にて夏萩と云、又一種白萩は淡雅亦賞すべし、紫白相交り咲は更紗萩なり、木萩ハ葉狭く小にして、其幹年々枯れずして枝葉を出し、小さき花咲くものにして、卽宮城野萩也、宮城野ハ、古來萩の名所にして、此萩小はぎとも云ふ、古歌に、小萩のすゑやちしはなるらん、と詠せしものなり、又仙臺の人の話に、宮城野と云ふは、今の仙臺市街より東、山榴岡の東南に渉り、漠然たる曠野なりしが、先年より追々開墾し田畝となりたり、又舊藩諸邸の庭際には、宮城野萩の植へ殘りたる者もありて、頗る大株となりて、舊幹より萌芽し、花を着くとぞ、又近世、仙臺本荒と呼ぶ所あり、この町内の某邸内には、頗る巨大のものもありと、是卽ち木萩にして、諸國山中に產し、常州筑波山、又信州にも多し、コメハギ(濃州)チヤウハギ(勢州)等の方言もあり、又大萩から萩とも云、舊幹より每歲枝上に花を着るれば、秋萩

事、埃嚢抄に見えたりか、れば古へより漢名さだかならず、花史左編に出し天竺花也ともいひ、或説に農政全書にのせし胡枝子なるべしともいへり、又隨軍茶を訓せり、伊勢鈴鹿郡あのだ村に一株に千枝ある萩あり、昔大内の御用たりきといふ〇中略南京はとぎ稱するは小也、日光はぎと稱する品もありて、花觀つべし、みだれ萩は大しだれ也、別に草萩と稱する一種あり、短草也、合明草也といへり、仙臺はぎと稱するは、紅芒決明也といへり、そとが濱ともいふ、

〔大和本草 七花草〕天竺花　花史云、觀音菊、天竺花是也、五月開至七月、花頭細小、其色純紫、枝葉如嫩柳、其幹之長與人等、篤信曰、和名抄及漢語抄ニハ、鹿鳴草ヲハギト訓ジ、又萩ヲハギト訓ズ、萬葉集ニハ芽子ヲハギト訓ジ、又榛ノ字ヲモハギト訓ズ、和歌ニ多クハギノ花ヲヨメリ、中華ニハ不賞之、ハギニ數品アリ、其莖冬枯テ春新苗ヲ生ズルアリ、是ヲ小ハギト云、莖冬不枯シテ春莖ヨリ葉ヲ生ズルアリ、コレヲ木ハギト云、萬葉集ニ眞芽子ト云リ、宮城野ハギアリ、其花最ヨシ、是ハ多カレテ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、又白ハギアリ、綠ハギアリ、綠ハギハ花紅ニ盛久シ、ハギノ莖枯タルハ、籬トシ薪トス、

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕胡枝花　和名波木　隨軍茶 救荒　天竺花 花史　鹿鳴草 以下出和名抄　芽子花　芳宜草　萩 音秋　蕭 音宵 中略 〇

拔、胡枝花、叢生、枝長垂敷地、狀似絲垂櫻、而一梗三葉、其葉似棗葉、又似南天燭、狹而不尖、柔軟、秋著小花、淡紫色、新撰万葉集吾妹相思詩云 晩露鹿鳴花始發者是也、俗專用萩字、奥州宮城野、方二里許萩生茂、

万葉 秋宿の秋の芽子さく夕蔭に今も見えしか妹が姿も

有山萩、有白花者、有白紫開分者、北國山中有大木、可為柱者、四國山中有南天燭大木、倶畿内人不信、

山萩 又名濕萩　葉大圓、有大木、　雄萩葉大、亞山萩花、淺紫　雌萩 宮城野　葉花小、共結實、褐色、大可豌豆、扁中有細子、

など、衣に著ると云へる趣同じきを以ても、榛は波理と訓むべきことを知るべし、さて又榛の字をさに雙べて、蓁とも書けるに、つくをなは夢ならむかと疑ふ人もあるべけれども、蓁は榛と字の通ふを以て、通はし書けるのみなり、

〔倭訓栞 前編二十四〕はぎ　日本紀には、榛字蓁字などを用て、はりともかはぎとも訓せり、蓁も榛に同じ、潘岳詩に、荊棘成榛といへば、はりは針の義なるべし、よて万葉集に針原とも書せり、はぎははりの木の略なるべし、かはぎといふは木萩の義、今きはぎといへり、万葉集に異榛といへる物にして、顕昭の大萩といへるも同じ、本たちの木はかれずて、としごとに古枝よりはか枝を生ず、よて古今集に、秋はぎの古枝にさけるこよみ又本あらのこはぎとよめり、是一種也、冬は枯て春は生出て、長く糸を垂るもの是又一種也、同種に夏萩あり、花の時をもて名く、白花あり、飛入あり、されば類聚抄にいへる如く、木類あり、草類有て、ともにはぎなれば、万葉集に木類には榛をかり、草類には芽子と書せるにや、奥州の宮城野、信濃の山路などにはいと大なる木もありて、弓などにも作るといへり、梢に青き枝生て花さく、故に宮城野の本あらのこ萩ともよめり、本のあらはなる意也とぞ、又年毎に刈て若ばえ出たるが、たをやかに高く、一丈餘りも打みだれて花咲也ともいへり、宗祇旅日記に、本あらのさくらなどもよめれば、春刈のこしたる去年の古枝に咲たるをいふと聞置きたるに、宮城野のあたりに、もとあらといふ里ありて、色なども外には殊なる萩のありし、枝ざしなべての萩よりもそは〳〵しく、あばら也といへり、今宮城野と稱するは、四五月に花咲り、芳宜花の宴は、仁明紀に出たり、新撰万葉集には、芽とのみ書させ給へり、唐韻に芽は草名也といへるに據するか、漢語抄に鹿鳴草と書るは、詩小雅呦鹿篇の意を取也、萩をよむは和名抄より見えたり、新撰字鏡に萩をいらと訓じ、蒿蕭類と注せり、史貨殖傳千樹萩の注には、梓木也と見えたり、二合字の意にて、はぎと訓せしにや、菅清公尾州記に、はぎ田を藤木田と書せし

を、ふるくより萩とのみおもへり、よく〳〵萬葉を見て、わきまふべし、

（頭書）眞淵云、萬葉にも史にも、榛とも芽子とも書けるに付けて、此人はこの說を常書きたれど、なづめる說なり、萬葉に寄木とて、歌は萩をよめるも有り、又榛と書きて、必萩なる歌あり、よくみざる故に偏論をなせり、いにしへの摺衣には、草木の花實など卽色あるものを以て、まだらに摺りたりとみゆ、榛の木の皮を以ては、直にすりがたかるべし、煮汁もてすらば、するべけれど、さ樣にするは、今少し後のわざなり、よく萬葉の歌をみるべし、字に泥むべからず、

宣長云、云ざままぎらはしきことあり、草のはぎと云へるは、萩のこと、木のはぎと云へるは、波理のことなり、是まぎらはし、其故は萩に草なると、木なると二種ありて、顯昭が榛と云へるは、木なる萩のことにて、榛をそれに當てたるは誤なれど、契沖なほこれを波岐と訓を木のはぎと云へるは、かの木なる萩の如くにも聞えて、まぎらはしきなり、榛と書けるは波理の木にして、萩には非ず、但波理をも波岐とも云ひしことはありしか知らず、もし波岐とも云ひしことあらば、契沖が云へるごとく、波理木の略なるべし、そはいかにまれ、萬葉に榛と書けるは波理なり、たとひ波岐とはよむとも、萩のことには非ず、又萬葉なる榛を波岐とは訓むべきに非ず、すべて萬葉によめる榛と芽子とは歌のさま異にして、よく分れたり、榛は衣に摺ることをのみよみて、花をよめり、然るを師の萬葉考別記に、榛をも花咲く芽子と一つなりと云はれたるは誤なり、一の卷に、引馬野爾仁保布榛原入亂衣爾保波勢とあるも、色よくにほへる波理の木原に入り交りて、衣を摺れと云ふことなり、三の卷に、往左來左君社見良目とあるも、榛木を見むと云ふにはあらず、眞野之榛原のすべて地を見むと云へるなり、此上ある歌に猪名野者見せつ、角松原何時しか見せむとある類なり、榛を萩の花のこととな思ひまがへそ、十四の卷に、伊可保呂乃蘇比乃波里波良、和我吉奴爾、都伎與良之母與云々、一の卷に、狹野榛能、衣爾著成、此

小藤

谷藤　岩藤

萩

かたく、かならずことと木によりて、たけ高き勢ひみするが、そのよりそふ木の枝もはも、みえぬ計におほひぬれば、その木もつひにかれぬるにぞ、われひとりの心ばへみえて、木高く咲きみちぬとおもへば、嵐などにあふときも、もとよりかれし木なれば、うちたふれてけり、高うみえしはなもつひにくさむらにうづもれて、またみる人もなし、代々の小人の情態にもたとへつべしと、ひとのいひけり、

〔大和本草　花木七〕小藤。　蔓草也、葉モ花モ藤ニ似テ小ナリ、花白シ、又紅モアリ、

〔和漢三才圖會　九十六　蔓草〕谷藤。ふぢ　俗稱未詳、本字

按谷藤蔓草也、葉似小梅葉、面闊、三月葉間開花、似紫藤花、

一種有岩藤、而此無花也、詳于毒草類、

〔倭名類聚抄　二十　草〕鹿鳴草　爾雅集注云、萩一名蕭、萩音秋、一音焦、蕭音肖、和名波木、今按、牧名用萩字、萩倉是也、辨色立成、新撰萬葉集等用芽字、唐韻音胡反、草名也、國史用芳宜草三字、長讀圖抄、又用鹿鳴草三字、讀本文未詳、

〔撰集抄　中八〕鹿鳴草　萩也、和名類聚、

〔書言字考節用集　六　生植〕萩　ハギ　万葉、用芽子字、今按、萩者蕭之類也、本朝俗以天竺花爲萩、因來謬矣、　芳宜草　同、和名

〔玉勝間　珠庵隨筆記〕はぎに二つあり、榛と萩となり、榛ははりの木といふを、俗にはんの木といふ、それをはぎといふは、針の木といふべきを、りもじ　奥義云、りもじを略すといふは、書きたる所を見ていへば、りはんはまりも有るべし、こといはかゝでもいふなれば、りの音を略せりと書くべきなり、總て後人ことばといふべき所を、もじと書ける多し誤なり、を略せるなり、山のきし川みぞのあたりにおほき物なり、其皮をとりて物を染るを、はんの木染といふ、日本紀、日本後紀等に、蓁摺衣といへるも是なり、神樂歌にもさいばりに衣はすらんとよめり、今はよき人のきぬなど染むることは聞えず、山里には、猶用ふるなり、萬葉第七に、寄木とて、此榛をよめり、然るに、萩にもまた萩が花ずりとよめば、いよ〳〵人まどへり、遠里をの丶眞榛もて、又白菅の眞野の榛原とよめるは萩、にはあらぬ

堀傳妙寺の藤、小日向清水谷　むかしは名におふ藤也、今は老木となりて英もみぢかくさして見所あらざれども、名木のむかし殘りて温ぬる人多し、

堀戻り藤、淺草熊谷稻荷社の傍に有、享保始のころ、境内辨天山の水石を疊の時、此藤を池の邊へはこび植るに、ほどなく枯たり、時に熊谷社の堂司見性坊夢みらく、我が藤をいかにしてか他へ植るのいはれなし、すみやかに元の地へかへすべしといふ事、兩度におよぶ、よつてその枯たるを以前の所へかへし植るに、幾ほどなく活て、枝葉さかへ、靑葉を見せたり、此藤今に存す、〇中略

四時遊觀

藤　龜戶天神宮　樓門の前御手洗の池の上左右に棚あり、紫白のはなぶさ、池水に影をまづめて底さへ匂ふけしき也、〇中略

藤　佃島住吉社　神前に方六十餘丈棚、枝葉つらなり、一向にそらをとぢて、木の下闇の陰茶店多く酒肴を貯ふ、花は紫白根は二もとあり、攝州の住吉も藤の名所也、〇中略

藤　上野山王社　鳥居(常のとりゐと異也、さうがうの鳥居と云、)の前に棚有、わたり二十間に及ぶ、紫白英をたれてなゝめならず、〇中略

藤　根岸の里寶鏡山有　圓光寺と云曹洞の禪林也

堂のうしろに辨天の宮あり、その池邊にそひて三十餘間の棚、紫白の色をあらそふ、

〔佐渡志 五物產〕藤〇中略　稚葉ハ饑荒ノトキ、賤民食ニ交ヘテ糧トスルニ味美ナリトイフ、根ヲトリ水ニ浸シ、賤民ノ衣服ニ製ス、風俗ノ部ニイダストコロノ、十畝帷子ノ一種ニ供ス、加茂郡川崎村ノイダストコロヲ上品トス、

〔花月草紙 五〕藤の花はちかうみればうつくしけれど、餘りにちかづくれば、かほりはまたよからず、はなやかにさくかとみれば、末まではひらき得ず、ことにおのれひとりさかりをみすること

〔沙石集二上〕佛舎利感得人事
法華ニハ舎利弗モレンヲ以テ入レリト説キ、シン無キ者ヲバ一闡提ト名テ、佛ニナラヌ者トイヘリ、或在家人山寺ノ僧ヲレンジ、世間出世フカクタノミテ、病事モ有レバ藥マデモ問ケリ、此僧醫骨モナカリケレバ、ロブノ病ニ藤ノ瘤ヲ煎ジテ、メセトゾヲシヘケル、シンジテコレヲモチフルニ、ロブノ病イヘズトイフコトナシ、或時馬ヲウシナヒテ、イカヾ仕ルベキトイヘバ、例ノ藤ノ瘤ヲセンジテメセトイフ、心得ガタケレドモ、ヤウゾ有覽トシンジテ、アマリニ取盡シテ、近近ニハ無カリケレバ、山ノ麓ヲ尋ケルホドニ、谷ノホトリニテ、ウセタル馬ヲ見ツケテケリ、是モ信ノイタス所也、

〔建内記〕永享十一年二月廿八日、藤一本近年不慮感得植庭前、或人云、藤ハ初而不植之、不敬之時有其恐之故也云々、仍奉進神花院鎮守也、彼五社之内春日御寶之前也、住持返報懇懃候也、

〔鳩巣文集後九〕古藤記
肥後國士沼田延秉寓東武、依紹介請余曰、延秉庭砌有古藤樹、花白蔓大、其枝高而柴枯木、構架於其下三段、橫施可八九歩、圖中分數其根處處有之、皆以是爲本、〇中略藤有兩種、或白或紫、彼其紫也間色不正、不免惡朱之論、此其白也如梅竈之破氷雪、假櫻蕊之垂絲絡、并得梅櫻之美、而秉僞臺蔓延、則花中之尤物、可無比倫、延秉所誇説不爲過乎、乃知一庭之中不可無刁氏之塢也、

〔國花萬葉記攝津六之三〕大坂諸所名藤之棚
谷町玉木町觀音堂　同大藤棚　天王寺町寺　洞岩寺ノ藤　同大乘寺ノ藤　天滿天神ノ内ノ藤　同老松町ノ藤　同神明社ノ藤　木津唯專寺ノ藤　野田ノ藤

〔續江戸砂子五〕雜樹
龜戸の藤　天神のみたらし　佃の藤　住吉の社　山王の藤　上野　根岸の藤　圓光寺

ば、

世中の淺き瀨にのみ成ゆけば昨日のふちの花とこそみれ、とありければ、人々見て、限なくめでありけれど、たがみさうしのしたまへるとも、えしらざりけり、おとこどものいひける、

藤花色のあさくも見ゆる哉うつろひにけるなごり成べし、

〔日本紀略醍醐一〕延喜二年三月廿日、於飛香舎有藤花宴、

〔枕草子三〕木の花は

藤の花しなひながく、色よくさきたるいとめでたし、

あてなるもの

藤の花

〔枕草子五〕めでたきもの

いろあひよく花ぶさながくさきたる藤の、松にかゝりたる、

〔栄花物語三十二歌合〕三月つごもり方に、○長元七年藤壺の藤の花、えもいはずおもしろく、へいにさきかゝりて、みかは水をやり水にほりわけてながさせ給へるに、さきかゝりたるいとおかし、この花の宴せさせ給、○中略大夫權大夫などものすむじ、歌うたひなどあそび給、女房、

むらさきの雲たちまがふふちのはないかにおらましいろもわかれず

夏にだにちぎりをかけぬ花ならばいかにかせまし春のくるゝを、女房殿上人などおほかれどとゞめつ

〔本朝無題詩二植物〕賦紫藤　藤原在良

何物送春思更侵、紫藤花綻艶方深、齊桓欲誤朝衣色、漢后可疑雲蓋陰、蘭圃秋風遙結契、竹林夜雨未知音、多年業道無成士、儒學空催射鵠心、

ぬれつゝぞしゐて折つるとしの内に春はいくかもあらじと思へば

昔左兵衛督なりける在原行平といふありけり、その人の家によきさけ有と聞て、うへに有ける左中辨ふぢはらのまさちかといふをなん、まらうどざねにて、その日はあるじまうけしたりける、なさけある人にて、かめに花をさせり、其花の中にあやしき藤の花ありけり、花のしなひ三尺六寸計なん有ける、それを題にてよむ、よみはてがたに、あるじのはらからなるあるじし給ふと聞てきたりければ、とらへてよませける、もとより歌のことはしらざりければ、すまひけれど、しゐて讀せければかくなん、

咲花のしたにかくるゝ人おほみありしにまさる藤のかげかも、などかくしもよむといひければ、おほきおとゞの榮花のさかりにみまそかりて、藤氏のことにさかゆるを思ひて、よめるとなんいひける、皆人そしらずなりにけり、

（古今和歌集二）しがよりかへりけるをうなどもの、花山にいりて藤の花のもとにたちよりてかへりけるに、よみておくりける、　僧正遍昭

よそにみて歸らん人に藤の花はひまつはれよ枝はおるとも

家に藤の花さけりけるを、人のたちとまりてみけるをよめる、　みつね

我宿にさける藤浪たちかへりすぎがてにのみ人のみるらん

（大和物語上）亭子院に、みやすむどころだち、あまたみそうじしてすみ給ふ事年比ありて、河原院のいとおもしろくつくられたりけるに、京極のみやすむどころ○宇多后藤原褒子ひと所のみそうしをのみしてわたらせ給にけり、春のことなりけり、とまり給へるみさうしども、いとおもひのほかにさう〴〵しき事をおもほしけり、殿上人などかよひまいりて、藤の花のいとおもしろきを、これかれさぶりをだに御らんせでなどいひて見ありくに、ふみなん結びつけたりける、あけてみれ

中、平日は入るに及ばず、株尋常の花は、春彼岸に蔓を地中に伏、根生じて後切放ち取るもよし、又同節に株を取分るもよし、名物の花は多分盆栽、或は棚に蔓登せありて、取木になしがたし、故に勢ひよき株をもて、寄接(よせつぎ)になすべし、因にいふ、河州刈田村の庄官が母屋子宅、両家共に庭中なるは房長きこと、五六尺におよべり、近世の名賞也、

〔禁秘御抄 上〕草木

藤壺（昔堀遣水、上古昇遣水歟、近来殊勝物也、）

〔肥前風土記 藤津郡〕昔者日本武尊巡幸之時、到於此津、日没西山、御船泊之、明旦遊覧、繋船纜於大藤、因曰藤津郡、

〔古事記 応神中〕故茲神之女名伊豆志袁登賣神坐也、故八十神雖欲得是伊豆志袁登賣、皆不得婚、於是有二神、兄號秋山之下氷壯夫、弟名春山之霞壯夫、故其兄謂其弟、吾雖乞伊豆志袁登賣、不得婚、汝得此孃子乎、答曰易得也、〇中略　爾其弟如兄言、具白其母、即其母取布遲葛而、（布遲二字以音）一宿之間、織縫衣褌及襪沓、亦作弓矢、令服其衣褌等、令取其弓矢、遣其孃子之家者、其衣服及弓矢、悉成藤花、

〔出雲風土記 意宇郡〕凡諸山野所在草木、〇中略　藤、

〔萬葉集 三雑歌〕防人佑大伴四綱歌二首〇中略
藤浪之(フヂナミノ)花者盛爾(ハナハサカリニ)成來(ナリニケリ)、平城京乎(ナラノミヤコヲ)御念八君(オモホスヤキミ)、

〔萬葉集 十九〕十二日〇天平勝宝二年四月　遊覧布勢水海、船泊於多祜灣、望見藤花、各述懐作歌四首〇三首略
藤奈美能(フヂナミノ)影成海之(カゲナスウミノ)底清美(ソコキヨミ)、之都久石乎毛(シヅクイシヲモ)珠等曽吾見流(タマトゾワガミル)、
　守大伴宿禰家持

〔伊勢物語 下〕昔おとろへたる家に、藤の花うへたる人有けり、彌生のつごもりに、その日雨そぼふるに、人の許へ、折て奉らすとてよめる、

パフツル、酒ト互ニ相助ル事奇異ナリ、是亦本草ニ出タリ、一本ヨリ苗多ク生ズレバ長ジガタシ、一條ヲノコシテ餘ハ切ベシ、

（物類品隲三草）紫藤　和名フヂ、山野ノモノ花短シ、ノフヂト云、攝津野田產上品、花至テ長シ、紫花白花二種アリ、漢種粉紫花ノモノアリ、希品ナリ、壬午主品中田村先生具之、一種深紫色重瓣ノモノアリ、至テ希品ナリ、府中俠園中ニアリ、

（重修本草綱目啓蒙五十藤草）紫藤　フヂ　サノカタノハナ古歌　ムラサキグサ　マツミグサ　フタキグサ　マツナグサ共ニ同上　一名朱藤汝南圃史　藤花菜救荒本草

人家ニ栽テ花ヲ賞スルフヂナリ、年久シキ者ハ藤甚大ニシテ木ノ如シ、處處ニコブアリ、フヂコブト云フ、和方書ニ藤瘤ト云フ、花ニ紫白ノ二色アリ、紫花ノ者ハ培養ニヨリテ、穗ノ長キコト五六尺ニ至ル、白花ノ者ハ穗短ク、開クコト早シ、葉ハ紫花ノ者ヨリ大ニシテ厚シ、一種漢種ノ紫藤アリ色淺シ、又一種重瓣ニシテ深紫色ナル者アリ、凡山野自生ノ者ハ花穗短シ、コレヲノフヂト云フ、攝州野田ノ產ヲ上品トス、花穗長シ、コレヲ野田フヂト云、嫩葉蔬トナシ、飯トナシ食フ、花モ亦食フベシ、其實莢ヲナス、形刀豆ノ如クニシテ小ク、內ニ圓扁ナル豆アリ、棋子ノ形ノ如シ、燒食ヘバ味栗ノ如シ、又一種ドロウフヂアリ、一名ナツフヂ、山野ニ自生多シ、葉至テ小ク色淺シ、六月花ヲ開ク、形小ニシテ黃白色、穗長サ四五寸、後莢ヲ結ブ、長サ三四寸、

（草木育種下蔓花）紫藤本草　攝津國野田の藤は長さ四五尺に至る、常の野ふじとは別なり、又花大にして短ものあり、又白ふじあり、又土用ふじは葉も花も小し、三月頃きり接にしてよし、又根を掘採て砧とするもよし、人糞に酒粕をまぜ根廻へ入べし、夏中細長き蔓を多出すとき、その蔓を刈べし、

（剪花翁傳二三月開花）藤　花紫白、開花三月末より四にかけて咲、方日向、地濕土えらばず、肥大便寒

藤亦作縢、故其義同矣、

〔東雅 十五 草木〕藤フヂ ○中略 フヂとはフシといふ語の轉せしなり、凡そ藤生の節あるをいふなるべし、鞭をムチといふも、古には藤を鞭となせしと見えたり、藤鞭といふ卽此也、藤をいひ鞭といふ、其詞を轉じて呼びしと見えたり、

〔塵袋 三〕一藤ハ木歟草歟

草ヲ篇ニシタガヘタリ、カツラノ類ナレバ草ナルベシ、昔シ尾張國春部郡國造川瀨連ト云ケル物、田ヲ作リタリケルニ、一夜ノ間ニ藤オヒタリケリ、アヤシミヲソレテ、切棄ルコトモナカリケルニ、其藤大ニナリニケリ、其ノ故ニ此ノ田ヲバハキタト云ト云ヘルトカヤ、此事ヲ菅淸公卿ノ尾州記ニ云ヘルニハ、其藤漸大ニシテ如樹、遂號藤木（俗云波木）田ト云ヘリ、藤ヲバハキト云フニコソ、如樹ト云ヘバ、ウチタヘテ、モトヨリ木ト云ベキニアラザルベキ、仁和寺ニモフチノ木ト云フ所アリ、是モ同心歟、

〔宜禁本草 乾中木〕紫藤　甘微溫、作煎如糖、下水良、四月紫花可愛、花挼碎拭酒醋白腐壞、子角中仁熬香著酒中、令不敗酒、敗者用之亦正也、京人種飾庭池、

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕紫藤　招豆藤（和名布知、止用藤一字訓名、○中略）

按紫藤花朶二三尺、纏樹垂架最艷美、攝州野田藤得其名、蓋冬月酒糟汁及米泔汁、澆根則茂盛、

又有白藤、　蔓葉皆無異、唯花白耳、　凡插藤花於水最易萎、灌酒於其本莖則歷時不凋、

〔大和本草 八蔓草〕紫藤　葉ワカキ時食フベシ、花ハ春ノ末ヨリ四月ニサキカヽル、花ノ長三尺ニミツルアリ、其實ヲ炒テ酒ニ入レバ酒敗レズ、敗酒ニ入レバ味正クナル由、本草ニイヘリ、又藤ノ枯ントスルニ酒ヲソヽゲバ活ス、花瓶ニ紫藤ヲサスニ、酒ヲ加レバ久シク萎マズ、酒毒ヲ解スルニ藤ノ花生ニテモ、カゲ干ニシテモ服ス、酒醋ノ衣服器物ニ付テカビタルニ、フヂノ花ヲ用テスレ

此大納言〈○藤原成親〉ノ中納言ニテ御座シ時、尾張國守ニテ、嘉應元年冬ノ比、目代ニテ衞門尉政友ヲ當國ヘ下サレケルガ、美濃國杭瀬河ニテ宿ヲ取、山門領平野庄ノ神人、葛〈クズ〉ヲ賣テ出來レリ、政友是ヲ買ントテ、直ノ高下ヲ論ジテ、様々ニナブル程ニ、葛ニ墨ヲゾ附タリケル、斯ケレバ神人等憤起テ、山門ニ擧登テ致訴訟、

〔源平盛衰記　三十三〕頼朝征夷將軍宣附康定關東下向事

兵衞佐〈○源頼朝〉ハ布衣ニ葛袴ヲ著セリ、

○按ズルニ、葛ハ玉篇ニ草長蔓貌トアリ、本書ニハクズト傍訓ス、而シテ長門本平家物語、參考本源平盛衰記ニ葛ノ字ヲ用キタリ、

〔武江產物志　藥草〕道灌山ノ產　葛〈秋日開紫ケ、ア[illegible]ニ唱〉

〔佐渡志　五物產〕炒　和名クズ　家園ニ栽ル家葛ナリ、マタ山野ニ自生ノモノアリ、民家採リテ葛粉ヲ製シ、市中ニ賣ルナリ、吉野葛ニ亞グベシ、

〔倭名類聚抄　二十葛類〕藤〈狠跋子附〉　爾雅注云、藟〈力軌反、字亦作藟、和名布知、〉藤也、似葛而大、蘇敬本草注云、藤其子狠跋子、

〔箋注倭名類聚抄　十葛類〕釋草、諸慮、山櫐、郭注云、今江東呼櫐爲藤、似葛而麁大、此所引蓋舊注、而郭依之也、按爾雅釋文云、櫐字或作藟、說文云、藟木也、又云、藟艸也、詩云、莫々葛藟、不載櫐字、廣韻云、櫐藤、爾雅云、諸慮、山櫐、藟上同、又云、藟葛藟、葉似艾、或作虆、二字不同、然毛詩釋文云、藟本亦作櫐、則二字自古通用、〈○中略〉證類本草木部下品貫衆條引唐本注云、藤其子名狠跋子、〈○中略〉本草和名云、貫衆和名布知加都良、狠跋子和名布知乃美、易困卦、困于葛藟、釋文引毛詩草木疏云、藟一名巨荒、似燕薁、連蔓而生、幽州人謂之椎藟、詩周南樛木篇、葛藟纍之、釋文引草木疏云、藟葉似艾白色、其子赤可食、王念孫曰、藟之言纍也、藤之言縢也、纏蔓林樹、故謂之藟、亦謂之藤、小雅南有嘉魚傳云、纍蔓也、秦風小戎傳云、縢約也、約亦纏也、中山經云、卑山其上多櫐、郭注云、今虎豆貍豆之屬、櫐一名縢、是藟亦作櫐、

〔日本靈異記中〕力女捔力試緣第四

聖武天皇御世、三野國片縣郡少川市有一力女、爲人大也、名爲三野狐、○中略時尾張國愛智郡片輪里有一力女、爲人少也、是昔有元興寺道場法師之孫也、其聞三野狐凌弊於人物而取、念試之、蛤捕五十斛、載船泊彼市、也、亦儲備副納熊葛練鞭廿段、時狐來、彼蛤皆取令賣、然問之言、自何來女、蛤主不答、亦問不答、重四遍問、乃答之言、來方不知、狐念无禮打起、依即二手待捉、熊葛鞭以一遍打、打鞭著肉、亦取一鞭一遍打、打鞭著肉、十段鞭隨打皆著肉、○下略

○按ズルニ、熊葛トハ葛ノ一種ナルベケレド、今其物ヲ詳ニセズ、

〔日本靈異記下〕將寫法花經建願人斷內暗穴賴願力得全命緣第十三

美作國英多郡部內有官取鐵之山、帝姫阿倍天皇御代、其國司召數役夫十人、令入鐵山、入穴堀取鐵、時山穴口忽然崩塞、勵役夫驚恐從穴競出、九人僅出、一人有後出、彼穴口塞合留、國司上下思之所壓而死、徒惆悵之、○中略穴開通廣方二尺餘、高五丈許、于時卅餘人取葛入山、自穴邊往、穴底人見人影叫言、取我手云、山人側聞如蚊音、卽聞怪之、取葛繫石下底而試、底人取引、明知人也、結葛爲繩、編葛爲籠、以四葛繩籠、四角樓立穴門、漸下穴底、底人乘籠、以樓牽上、持送親家、

〔萬葉集四相聞〕大伴坂上郎女歌一首

夏葛之、不絕使乃、不通有者、言下有如、念鶴鴨、

〔萬葉集七旋頭歌〕釼後、鞘納野邇、葛引吾妹、眞袖以、著點等鴨、夏草苅母、○中略

右二十三首、○二十二首略柿本朝臣人麿之歌集出、

〔枕草子三〕草は

くずの風にふきかへされて、うらのいとしろく見ゆるおかし、

〔源平盛衰記七〕成親卿流罪事

べし、晒場ハ家の外に、屋根ばかりの小屋を建て晒べし、扨初め起したる葛の下面の方、壹分ばかりも土氣まじれば、是を削てとり置たる分は、又水を入攪交て暫見合、上の白水を別の半切に静にすため取、底に殘りたる砂ハ捨べし、白水の分も水を仕替て、跡より仕込分に入込て用ふべし、

凡晒場たる葛粉、壹斗にて四五合のわりには減するなり、

晒には寒中を最上とす、然れども九月より翌三月迄は宜し、水暖になりては悪し、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、略○中 葛根卅二斤、 伊勢國五十種、略○中 葛根十斤、 安房國十八種、略○中 葛花旋覆花各一斤、略○下

〔寛政四年武鑑〕水戸少將治保 時獻上 暑中 葛粉

松平越後守康致 美作津山 時獻上 十月 葛粉

細川與松立之 字土肥後 時獻上 暑中 [illegible]粉

〔日本書紀 三 神武〕己未年二月、高尾張邑有土蜘蛛、其爲人也身短而手足長、與侏儒相類、皇軍結葛網而掩襲殺之、因改號其邑曰葛城、

〔播磨風土記 宍禾郡〕御方里、土上下所以號御形者、葦原志許乎命與天日槍命、到於墨志爾嵩、各以黑葛三條著足投之、爾時葦原志許乎命之黑葛一條、落但馬氣多郡、一條落夜夫郡、一條落此村、故曰三條、天日槍命之黑葛、皆落於但馬國、故占但馬伊都志地而居之、

〔出雲風土記 意宇郡〕所以號意宇者、國引坐八束水臣津野命詔、略○中 童女胷鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須々支穗振別而、三自之綱打挂而、霜黑葛聞々耶々爾、河船之毛々曾々呂々爾、國々來々引來縫國者、自去豆乃打絶而、八穗米支豆支乃御埼也、略○中

凡諸山野所在草木、略○中 葛根、

手にて程よくわりて、麹蓋に置て干乾かす也、
初め剖げ除たる黒葛は、又水を入とかして暫置ば、桶の底に砂たまる也、是を又別の桶に入、砂をよく除きさりて一日置ば、底に葛はたまり、水は上に浮をよくしたみ査し、堅く成たるを庖丁にて起し、白葛同様に干て、貯おく事もあり、多く其日々々食する事也、
葛の性に國所土地又は寒暖によりて、强きあり、弱きあり、大坂紀州邊にて晒葛とするには、强弱を調合して晒し、諸國に商ふ、又京大坂にては、麩をとりたる跡のジンといふものを、扇の地紙に引粉とす、色白き事晒葛に似たれば、水干して塵氣をとり、晒葛と號し商ふ、尤見分がたし、白粉に交るものは、吉野葛にかぎれりと聞けり、是は性弱きがゆゑ也、弱ハのびよし、
藥に用ふる葛根は寒中に掘たるうち、實入よくすべの宜きを、長さ壹尺五寸、厚八分又は壹寸位、堅わりにして日に干、和藥屋へ商ふ、又ハ葛根湯等にもちふるやうに、細かに刻て出す事もあり、
○中略

曝葛の仕法

右に記す所の灰葛を、酒造家に用ふる位の半切桶に三斗入、清水を汲入、棒をもてかきまぜ、能くとかして水嚢にて漉し塵を去り、其儘に覆ひをして半日も置ば、葛は下に沈み着、水は上に浮なり、此水をかたむけ捨、又元の如く水を入かきまぜ、二日程も置て上水をすため、底なる葛の堅くなりたるを、前條にも云如く、泥鏝をもて起し、下面に著たる黒き砂まじりのものをけづり取り、白きばかりを、又水にかきまぜ、木綿の袋にて漉て一日程置、上水をすたみ、又水を仕かへ、如此する事數度にして、十四五日も過れば、葛存分に白く成る、其れを度として、能々水をすたみすて、泥鏝をもて始の如くつき起し、手にて程よくわり、麹蓋に入、干乾かせば、曝葛と成る也、尤是ハ田舎にてのさらし法也、大坂紀州邊の晒屋にてさらすは、又格別道具も揃ひ、日數早くあがる術ある

水を盥にすたむれば、葛は白く下にをり溜りて、どろ〳〵位になりたるを、別の桶に靜にうつせば、下に黒き葛居り溜る也、是は別にのけ置、白き分に又水を入かきませ、一晝夜半も置ば、葛計り下に堅く付、上水澄てうきたるを、したみ取ば、上面に少し濁りたる垢付也、是は布巾にてふき取、庖丁をもて●此ごとく切目をいれ起しとれば、下面へ取殘しの黒葛付居るをけづり取除、白き分を麹蓋のやうなるものに入、干乾かすべし、此時若庖丁にて起すに、ゆるく水氣あらば、半日又は一日置ば、水は上に浮堅くなる也、急に干んと思ふ時は、釜の下の灰を庭に盛立程よく敲し、少し中窪にして、其處へ桶なる葛をうつしあくれば、（此時取殘りの黒葛、底にあるをよくとりわくべし。）水氣は灰に吸込み、葛は堅く成也、是を取上れば、灰と葛とは少しも付ず、葛計きれいにとれる也、是を手にて細かに欠とりて、麹蓋のやうなるものに並べ干乾かすべし、此干揚たるが則灰葛粉なり、

扠除き置たる黒葛は、灰葛同様に、灰にて乾かし、干揚て貯てよし、多くは其時々生にて葛餅のごとくかためて厚二分位に切て葛、鹽に付、又は醤油味噌抔付て、夕飯のかはりに食するなり、一日の堀分にて変ものをすれば、三四人一度に食する程はあるもの也、又は豆の粉砂糖などまぶし喰すれば、白葛にて拵へたるより、香氣ありて美味也、併、少し土くさき氣味あり、

又大和吉野郡にての製法は、山より堀來る葛根を水にて洗ひ、にぎりこぶし位に切て、碓にて踏くだき、桶に入、水を入て手にてもみ、糟をすて濁水を袋に入絞り、又一へん袋にて漉し、能ませて二時も置ば、上水すみて葛は下へ着を、桶の横に［図］此ごとく栓をつけ置、呑口をぬけば水は出て、下に着たる葛ばかり殘る也、夫を一日置ば、ます〳〵葛は堅く桶の底に着、上に又水の浮たるをしたみ覆し、葛を庖丁にて起し、下面に着し黒葛の分を削取、白き計を又桶に入、水をいれてかきませ、半日又は一日置ては、栓をぬき上水を捨、又水を入かきませて、元の如く都合三度すれば、葛の色白く上品に成也、然して三度目には一日半も置、水をよくすためきり、葛を庖丁にて起し、

は太き糸にて、古中華に織もの、今の越後縮のごときもありと見へたり、クズと云は細屑の儀にて、水粉につきての名にして、草の本名は葛なり、フヂは即韈なり、古製是をもつて韈とす、故に號、葛服を葛衣といふは、葛布なればなり、

〔製葛錄〕葛製法

前日堀かへりたる根を、其夜か又ハ翌日に製すべし、幾日も置べからず、先土をよくこそげ落すべし、水にて洗へば正味減ずるとて、洗はざる所あり、又洗ふ所もあり、拵面の平かなる石を其家の庭にすゑ置、其上に、根をのせ、家内三人あらば三人打寄、槌をもて扣きひしぐ事懸にして、扣終りて桶の中にいれ、又水を入、手にてもめば、水は灰色となり、根は苧すさの如き筋と成也、是を絞りあげて、灰色に濁りたる水を篩（關東にてはざるといふ、九州にてはそうけといふ）にて漉て、外の桶にいれ、篩に殘りたる筋の切々と、皮の落たるは取捨、しばらく置ば桶の底に砂たまる也、上の濁り水を別の桶に入、砂ハとり除け、別の桶のふちに竹簀を置木綿袋をのせ、其中に濁り水をくみ込、口をしつかりとくゝり、豆腐を絞る如くして絞れば、濁り水は桶に落精は袋に殘るなり、

袋の中に殘りたる細かなる精と、初め取除きたるすさの如き筋と日に干置、荒きすさの如くなるは、竈の下の焚付となし、細かなるは目のあらき水嚢にて通し飯を焚に煮あがりたる時、少し宛入て焚あげ交れば、黑き色の飯と成也、尤壹合入れば米貳合にもありて、糧と成もの也、此精を九州にてはカンニイと云り、又は貯へ置て、饑饉の手當にもなし、或は麥の粉米の粉の團子の中に交てもよし、

扨右の濁り水を又袋に入て、別の桶に絞り込歟、目の細かなる水嚢にて漉し込て、少しも精なきやうにして、半日も置て見れば、上水澄居るなり、此澄たる水だけ桶をかたむけ水をすため、（すたむとも、すたむるとも、はへるともいふなり、）又水を入棒をもてませ、如此する事凡三四度にして、夫より一日も置て、又上

し、〇中略

堀取たる跡にて、葛根の蔓付に、根貳三寸程づゝ付其跡へ殘し植置ば、又三年目には元の大きさの根に成長するものなり、此三年目のものを第一よろしきものとす、當年立たる根にても、葛粉は同じ事也、根の太きは赤下品なるものあり、大き成は正味多し、又伊豆の深山にては、五寸廻りぐらゐなる堅あるよしきけり、是は上古より堀たる事なければ、定て人身位の根あるべし、

葛の蔓は無害也、一名甘葛、細名國譯いいし、又りうきういも、九州にてはたういもと云處あり、同様にて、根に近き方の蔓の節を二ふし込て切、少し濕氣の土に蔓の節をさし置ば、節より根を生じて追々下へさし入、三四年目には堀取やうに成ものなり、

又葛の實をとり蒔て、苗を拵へ植るも佳なり、先苗床をこしらへ、糞水を打乾かし置、鍬にて土を和らげ實を蒔、上より砂土をふりかけ置ば、追々芽を出し、一寸位に伸出たるを、よく見れば二葉あり、又一葉あり、一葉は雄、二葉は雌と見分るなり、最早一尺にも伸ては、雌雄甚見分がたし雌の方實多し、

根を堀らざる所にても、草ある處の野山には蔓を植置、其葉を刈て牛馬の飼とするなり、好て喰ふ事大豆の葉に同じ、又肥しにもなり、山人は葉を木の葉に交てきざみ、干て煙草のかはりに呑事とぞ、蔓は刈て葛布に製し、心はさらして葛籠とす、誠に少しもすたれる事なく、可尊有益のものなり、

〔日本山海名產圖會二〕葛　葛蕨一名鹿豆

蔓草なり、根を食、是を葛根といふ、粉とするを葛粉といふ、吉野より出すもの上品とす、今は紀州に六郎大夫といふを賞す、もつとも佳味なり、是全く他物を加わへざるゆへなるべし、〇中略蔓は水に浸し皮を去り、績連ねて器とし、是を葛籠といひて水口に製するもの是なり、葛籠は蔓をつらねたるの名なり、葛布は蔓を煮て苧のごとく裂紡績て織なり、詩經に絺綌と云は、絺は細糸、綌

遠州邊にてハ葛粉を製せず、五月のころ蔓をとり、蒸して苧となし、緊て布に織のみなり、則掛川の產物にて葛布を商ふ家多し、總て布に織にハ、何れの地に生じたるも高下なく、只績きて長きをよしとす、

堀る節

葛根を堀には、冬十月葉の黄みたる時より堀始め、春正二月頃、葉の出る迄を節として堀事也、山家の農家は、麥を蒔仕廻て後、春迄の稼とする也、

葛根を堀事

一、爰に圖する道具は○竹のおふこ、つるのはし、鎌、金鐵茶筒、略圖、を持山に入、蔓をよく見極めて堀るに習ひあり、然れども至て見分がたきもの也、雌葛雄葛犢葛なば葛といふは、大和の土人付たる名なり、と三通りあり、雌雄は實あれども、犢葛には粉なし、兩手にて蔓を折みれば、女男は潤あり、是根太く葛粉あり、潤ひうすきは、根も瘦て粉少しと知べし、堀には根を鍬にて切か、ざるやうに、脇より土をかきのけて堀べし、又堀に心得あり、葛根の蔓付の所より太きは粉なし、細く自然に中太くあるは粉あり、又粉のなき根のつる續に、粉のある根有もの也、又根に少し鎌を入て見れば、粉のあるは白き乳汁のごときもの出る也、粉なきは出ず、深山谷間抔にて堀時は、かまひなけれども、若堀所の下は、往還か住家にてもある處にて堀に、其根のさし入たる上に、大きなる石などあるは、多く其石を堀起して外へこかし、根を堀取事あり、其石を心なくこかし落す時は、往來をふさぎ人家をそこなふ事あり、其折には石の入べき程の穴を堀りて、其穴の中へ石をこかし入べし、葛は農家の夫食、又ハ飢饉の時、専ら堀ものなれば、九州にては其處により、人の持山他村の野山たりとも、葛を堀にはとがむる者なし、又堀たる跡は其儘にて、少々畑中に石を堀いるれども、作物に害なければ咎る事なし、淳朴の風俗尊ぶべし、中國畿內邊にては、他領他村に入て堀事を禁ずるよし、其國處にて定法あるべ

ヲ野葛ト云、又毒草ニ野葛アリ、別物ナリ、混ズベカラズ、是ハ冶葛ト音相同ジ、ツタウルシノコトナリ、鉤吻ノ釋名ノ註ニ詳ナリ、本邦ニハ葛ヲ家圃ニ栽ユルコトナシ、皆山野ノ者ヲ採ル、其葉互生ス、圓尖ナル三葉一蔕ニシテ、眉兒豆葉ニ似テ大ナリ、梢葉ハ毎葉三尖ニシテ小豆葉ノ形ノ如シ、莖ト共ニ褐毛多シ、肥タル者ハ葉大サ尺ニ過グ、和州芳野山ノ產別シテ肥大ナリ、七月梢葉ノ間ニ花穗ヲ出ス、長サ三五寸下垂ス、花ハ豆ノ花ニ似テ紫赤色、上代ハ名花ナク、此花ヲモ賞セシニヤ、萬葉集秋七種ノ歌ニアリ、花後莢ヲ結ブ、豇豆ノ莢ニ似テ狹薄褐毛多シ、江州水口及高宮邊ニテ莖ヲ採リ、水ニ漬シ皮ヲ去リ、織テ器トナス、フヂゴウリト云、根ヲスリシボリ水飛シテ葛粉トス、城州ニテハ和州ノ芳野葛ヲ上品トス、蒼潔白ナリ、然レドモ近年僞雜多シ、若州ノ熊川、及他州ノ產ハ色潔白ナラザレドモ僞雜ナシ、葛粉ヲ和方書ニ水粉ト云フ、唐山ニテ水粉ト云フハ、鉛粉ノ一名ニシテ京オシロヒナリ、

葛根藥舖ニ生乾トサラシト二品アリ、サラシハ白色ニシテ粉ヲ帯ブ、生乾ハ黄褐色藥用ニ入ベシ、唐山ニテハ生葛ヲモ用ユ、故ニ乾葛ト云フテ分ツ、

〔製葛錄〕葛生育する土地の事

葛ハ寒國暖國のへだてなく、山野に限らず、何れの所にも生ずといへども、平らかなる野の堅實の地なるハ、根痩て粉を得る事少し、又樹木の茂れる中なるは、根肥たれども粉少し、何國にもあれ、黑土又ハ狐色にて輕き土の堅き纍地ハ、粉至て少く色も勝からず、又陰地ハ根細く粉も少し、陽地ハ根もよく粉も多しと知べし、只樹木の稀なる山の半腹、又ハ東南を請て日あたりよき谷間の岩石に添て生たる根宜し、夫ハ小さきも粉多し、譬へバ木山平原の地たりとも、土性少しかろく石の多き土地にてハ、根よく粉多し、砂ばかりの地の土肉のなきハ生育せず、總て暖國より寒國の葛よろし、

堅、丹石、去煩熱、利大小便、止渴、治小兒壯熱嘔吐驚癇、解鴆毒、

〔本朝食鑑 三 柔滑〕葛 訓久須

集解、葛有野生、有家種、其蔓延長取收、可作布袴、其葉有三尖、似楓手栢而長、面青背淡、至秋自枝端、次第葉已黄凋、故歌人賞之、詠其末枯葛葉及葛葉色變、以諷人之變約也、其花成穗、纍纍相綴、黄白色、或紅紫色、入藥用、其莢如小黄豆莢、亦有毛、其子綠色扁扁、如小梅核、生噉有腥氣、此卽葛穀也、其根外紫内白、長者七八尺、根頭入土五六寸以上、名葛脰、而不用、入土五六寸以下、卽葛根也、晒乾入藥用、秋末冬初采生葛根搗爛、入水中揉出取粉、晒乾、其粉入沸湯中、久作餅狀、色如膠、或煉粉作餅、而蒸熟亦好、或作麪切、入沸湯作凍子、又入水中和葉汁、合胡桃肉蘿芥砂糖食、此曰葛切、或號水線、凡葛粉處處多出、就中以和州吉野之產、爲第一、色白如雪、紀泉河州次之、郡守貢獻之、民間以貨于四方、

葛粉、氣味甘平無毒、主治除熱袪煩、開胃止渴、利便解酒毒及諸毒、卽是足陽明經藥、兼入脾經、餘詳于綱目、

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕葛 音割 雞齊 鹿藿 黄斤 鹿食九草、此其一也、故名鹿藿、和名久須加豆頁、〇中略

按葛蔓長者二三丈、其葉靭薄、微似于楮葉、而面青背白、至風能飜、恰如反掌、婆娑而作聲、故稱歌人葛葉裏見、警人偵、其蔓青黑色、有微毛、强靭不可截斷、本草綱目謂紫色者、乃枯舊色也、以堪縛器物、

葛根出於和州金剛山者良、丹波次之、葛粉吉野澡葛爲最上、西國亦多有之、春月取根搗爛、漬水一宿、以白堊爲上、其次灰白色者、名之布人、野人充食、渣如絲瓜皮、以代薪、凡此物葉及蔓至根、其用居多、大爲民利用、

〔重修本草綱目啓蒙 十四 蔓草〕葛 クヅ マクヅ 古歌 クゾ 南部 カブチ 筑前 イノコノハカチ 備後

一名走根梅 事類 麪葛 鎭江府志 葛藤根 衛生易簡方 土瓜 輟耕錄正誤 絺綌草 本草原始

山野倶ニ多ク自生アリテ甚ダ繁延ス、唐山ニハ家園ニモ栽ユ、コレヲ家葛ト云フ、故ニ野生ノ者

葛利用

ヽタ義也と見えたり、さらばツルといふも、ツラといふも、ツーラといふも、直にツヽタといふの義なり、舊事、古事、日本紀等に、伊弉諾神の黒鬘のヱビカツラと化りしといふ事見えたれば、葛をカツラといふも、是等の縁にやありけむ、さらば其カといふはカミの闕也、カミは頭髪也、また葛讀てカヅラと云ひしは古訓と見えたり、日本紀に神武天皇葛網を結びて土蜘蛛を殺し給ひしなどいふが如き、葛の字讀てカヅラといひしなり、亦讀てタヅといふは、細屑の儀にて、其纈な紛となして戦ふに依りて、此名ありしと見えたり、

〔新撰字鏡 草〕葛 加豆良

〔日本釋名 下草〕葛 かづらはながつる也、上略なり、るとらと通ず、

〔倭訓栞 前編六加〕かづら 蔓をよむも葛に同じ、たかつらの類也、葛も蔓の義なり、くずかづら、ふぢかづら同じ、

〔萬葉集 三雜歌〕登神岳山部宿禰赤人作歌一首并短歌
三諸乃、神名備山爾、(○中略)玉葛、絶事無、在管裳、不止將通、(○下略)

〔冠辭考 五多〕たま葛 たゆることなく
万葉巻三に玉葛絶事無在管裳云云、こは蔓の長くはひひろごる物なれば、たえぬとも長きともいへり、玉とは是も子ある物なればいふ、

〔和漢三才圖會 九十六蔓草〕玉蔓
按玉蔓其蔓引、地葉似忍冬葉而厚、春開小花、色青緑可愛、

〔圓珠庵雜記〕もろかづらにふたつあり、新古今に、みればまづいとゞ涙ぞもろかづらいかにちぎりてかけはなれけむ、これは祭の日、桂にあふひをかけたるをいへり、後撰に、あしびきの山におふてふもろかづらもろともにこそいらまほしけれ、六帖に、神つ代のいがきにはへるもろかづらこなたかなたにかけてこそ見れ、これらははひあへる葛をいへるなるべし、
(頭書)眞淵云、はひあへる故にもろかづらといふともきこえず、さる名のかづらひとつあるにや、

〔宜禁本草 乾玉〕葛粉 甘大寒 佩年以代糧

〔倭名類聚抄二十葛〕葛　蘇敬本草注云、葛穀一名鹿豆、葛音割、和名久須加豆良乃美、葛實名也、葛脰音豆、和名久須加豆良禰、葛根入地五六寸名也、

〔箋注倭名類聚抄十草〕證類本草草部中品葛根條引云、葛穀即是實爾、無鹿豆之名、本草和名亦不載是名、按本草葛根條、有一名鹿藿之名、而草部下品別有鹿藿、陶隱居云、方藥不復用、人亦罕識、葛根之苗、又一名鹿藿、唐本注云、此草所在有之、苗似豌豆、有蔓而長大、人取以爲菜、亦微有豆氣、名爲鹿豆也、是葛根苗之鹿藿、與下品之鹿藿、同名異物、故陶於下品鹿藿條云、葛根苗又一名鹿藿、以示二物同名而其實不同也、輔仁據解陶注、謂下品鹿藿即是葛根苗之一名、訓爲久須加都良乃波衣、蘇君覈其誤、以葛根苗之鹿藿、下品之鹿藿爲一物、故以下品鹿藿之一名鹿豆、爲葛根苗鹿藿之一名、然鹿豆不宜以名苗、故亦改爲葛穀之一名也、○中略　本草和名云、葛根久須乃禰、圖經曰、春生苗、引藤蔓長一二丈紫色、葉頗似楸葉而靑、七月著花、似豌豆花、不結實、根形如手臂、紫黑色、今人多以作粉、食之甚益人、○中略　證類本草引云、其根入土五六寸已上者名葛脰、本草和名引作根入土五六寸者也、下總本無葛根之葛字、似是、

〔下學集下草木〕葛クズ

〔和爾雅七草木〕葛クズ一名鹿藿　葛粉カツフンクズノコ　葛根カツコンクズノネ

〔南留別志三〕一葛、くず、かづら、かどゝいふ、皆音なるべし、

〔段注說文解字一下艸〕葛絺綌艸也、周南、葛之覃兮、爲絺爲綌、从艸曷聲、古達切、十五部、蔓葛屬也、此專謂葛屬、則知滋蔓字、古祇作曼、正如曼延字多作蔓、从艸曼聲、無販切、十四部、

〔東雅十五草卉〕葛クズカツラ　倭名鈔に蘇敬本草註を引て、葛穀一名鹿豆、クズカツラノミ、葛脰はクヅカツラノネといふと註したり、クズの義不詳、凡そ蔓生の物をカツラと云ひ、ツヾラといふ如きも又不詳、カツラとは、古語に頭の上の飾にカといふ事あり、ツラとはツルといふ詞の轉也、ツルとは部蔓也、万葉集抄に、ツとはツヾタといふ詞也、ツヾといふもツ

葛
名稱

の處へ此實なると云傳ふ、日本にて植てもはゆるなり、近來渡る、博愛心鑑に有りと云、
〔鹽尻七十一〕落花生ハ藤蔓繁葉、一遍豆に似たり、其花落地、一畢土中結、其味甘美常に異なり、人珍貴とす、東垣食物本草三に見ゆ、山韓と同類なるよしなれば、元より奇なく補虛の物にて侍ると覺へ侍る、是豆の類なり、
地錦抄に、其植やうなんど委しく記せり、煎りても蒸してもよし、此頃唐土よりも多く來り、亦我國にても種まきて實をとる、
〔本朝世事談綺二生植〕落花生
元祿のすへにわたる、典籍便覽に云、藤の蔓葉扁豆に似て、花開地に落、一花地に就て一莢を結ぶ、大さ桃のごとし深秋取、味甘美也、人甚美實す、
〔草木育種後上〕落花生(典籍便覽)香芋(花鏡)とも云、和名とうまめ、又長崎にてなんきんまめといふ、紀伊國にて多作、野土黑ぼくに砂まぢりの山畑にて、陽地へ植べし、冬中畑へ灰人糞をませ耕置、別に代を拵、落花生の莢を剝て、豆ばかり淺く植、葉を生じて畑へ移べし、相應の地なれば、畑へ直に蒔付てよし、植たる圃へ稻藁を切まぜ埋たるがよし、葉の間より根を下し、土中に入て莢を結ゆへ、土ハ柔なるがよし、十月根廻を遠ほりて採べし、水にてよく洗、二日程乾、紙袋に入て、風のあたる所へさげ置、炒て食し、又挽て粉にして、餅などにかけ食へバ香く味よし、脾胃を補効あり、
〔桃源遺事下〕西山公(德川光圀)むかしゟ禽獸草木の類までも日本になきものをば、唐土より御取寄被成、又日本の中にても其國に有て此國になきものをバ、其國ゟ此國へ御うつしなされ候、覺し召末に記す、草之類(中略)落花生、
〔本草和名八草〕葛根一名葛穀(蘇敬注云、是鄙實耳)一名鷄齊根、一名鹿藿、一名黃斤、一名葛脰(蘇敬注云、根入土五六寸者也、脰頸也、仁諝音三恩豆反)○黃葛根一名鹿藿(出雜要訣)一名團、一名播亦(朱字蘇敬)已上出雜要訣和名久須乃禰、

落花生

類猶多シ、皆黎豆ノ類ナリ、其實ニ貍首ノ文アルモ有之、何レモ莢ワカク柔ナル時煮食フベシ、實熟シタルハ氣ヲ塞グ、性不好、

〔和漢三才圖會 百四 菽豆〕黎豆　貍豆　虎豆（俗云八丈豆）

本綱、黎豆三月下種生蔓、其葉如豇豆葉、但文理偏斜、六七月開花、成簇紫色、狀如扁豆花、一枝結莢十餘、長三四寸、大如拇指、有白茸毛、老則黑而露筋、宛如虎貍指爪之狀、其子大如刀豆子、淡紫色有斑點、如貍文、煮去黑汁、同猪鷄肉再煮、食味乃佳、

氣味（甘微苦温 有小毒）　温中益氣（多食令人悶）

按黎豆秋采其子、入銅甕中煮食、有斑點而美、故賞之、蓋初得種於八丈島乎、未詳、

〔重修本草綱目啓蒙 十七 菽豆〕黎豆　八升マメ　ハセウマメ（肥前）　十里マメ　八里半　クヅマメ

ナンヂクマメ　フヂマメ　センゴクマメ（尾州）　ナルコマメ（賀州）　シャクジャウマメ（播州〇中州）

葉刀豆ヨリ大ニシテ、花深紫色美シ、穗ヲ成テ生ズ、莢ハ蠶豆ノ莢ニ似テ、大ニシテ毛アリ、熟スル時ハ、黑色ニシテ筋見ル、豆ハ蠶豆ヨリ大ニ、刀豆ヨリ小シ、白色ニシテ灰斑、或ハ灰色ニシテ黑斑、數品アリ、

〔和爾雅 七 菜蔬〕落花生（ラクワセイ）（出于本草約言）

〔書言字考節用集 六 生植〕落花生（ラクワセウ）（草名）

〔大和本草 四 穀〕落花生　典籍便覽云、藤蔓莖葉似扁豆、開花落地、一花就地結一菓、大如桃、深秋取食、味甘美、人共貴之、今案ニ、本草約言、東垣食物本艸等、諸書ニ出タリ、本艸綱目不載之、豆ノ類ナリ、長崎ニ多ク種之、

〔遠碧軒記 下 生植〕落花生と云ものあなたより渡る、松の子の類なり、相傳この花の露が地へ落て、そ

食フ、汝南圃史ニ、凡豆倶食子、唯豇豆與刀豆連莢食、而刀豆味全在莢ト云、熟スレバ豆長サ八九分、淡紅色ニシテ光リアリ、一種白花ノ者ハ、豆モ亦白シ、シロナタマメト呼ブ、

〔農業全書 五二〕刀豆

なた豆是を刀豆と名付る事は、劔の形に似たる故なり、三月初うへ、灰にておはひ、古き筵ぎれ、其外何にても此類のくさり物など種をくべし、又種やう、多より穴をほり、こゑ土を入置、春になりて一粒づゝ、目の方を下になしてうへ、少土をかけ、灰にておはひ、土おほくかけず、其上によるきざうりの類、何にてもかるきものをおほひ置、五七日の後は去てよし、めだち出、根葉少生ずるを見て、糞水をそゝぎ、つる長くなるを待て竹を立、是にまとはせ、又籬をゆひ、かきには、するもよし、風にうごかぬ様につよくすべし、うごけばおほく實ならず、是又肥地に糞を多く用ゆれば、過分に實なる物なり、但かきに種るには、其間を近くうゆべからず、

〔本朝食鑑 一〕刀豆

八升豆(此[illegible]豆也、三月下種生蔓、其葉如紅豆葉、似文殊蘭鋭、六七月開花成簇、紫色、状如扁豆花、一枝結莢十餘、長三四寸、大如拇指、有白茸毛、老則黒而露筋、其子大如刀豆子、淡紫色有斑點、民間食之、味不甚佳、氣味甘微寒、有小毒、主治未詳、)

〔農政全書 二十六〕黎豆(古名貍豆、又名虎豆、其子有點、如虎貍之斑、故名、爾雅所謂攝虎者、三月下種蔓生、江南多炒食之、)

〔物類稱呼 三〕黎豆おんげんさゝげ　近江にてはつしやうまめと云、關西にてふぢまめといふ、西國にててうせんさゝげと云、勢州白子にてなたまめといふ、(同名有、混すへからず、)伊勢駿河ににどなりと云、奧之南部にてさゝげと云、(此所にていふ十六さゝげは別也)下總佐倉にてせんだいさゝげといふ、東上總にて二度十六といふ、

〔大和本草 四〕黎豆　又名貍豆　蒙本艸蔓如葛、子如皂莢子、作貍首文、莢有毛刺、六七月開花、成簇紫色、狀如扁豆花、一枝結莢十餘、長三四寸、大如拇指、有白茸毛、老則黑而露筋、國俗天竺豆藤豆ナド云

刀豆

〔萬葉集略解二十上〕はほまめは籬豆也、上にもははつたとよめり、和名抄藊豆阿知萬女、籬上豆也といふ也、

〔和爾雅六穀〕刀豆(ナタマメ)、挾劍豆、刀鞘豆並同、

〔書言字考節用集六生植〕刀豆(ナタマメ)本草 挾劍豆酉陽雜俎

〔朱氏談綺下穀〕刀豆ナタマメ

〔庖廚備用倭名本草二菽豆〕刀豆(ナタマメ/タウヅ) 倭名抄ニ刀豆ナシ、多識篇ニナタマメ、元升〇向井曰、西國民間ニ又タラワキト云、考本草、一名挾劍豆、莢ノ形ヲ以テ名ヅク、

〔本朝食鑑一穀〕刀豆(訓奈多末女) 釋名(本邦讀刀字訓奈多、或以伐木刀如此豆形、名稱奈多、故名此豆歟、古未聞名、)集解、處々多種之、三月下種、蔓生可引一二丈、葉如大角豆葉而稍長大、六七月開紫花、亦如豇豆花、結莢長者近尺、略似皂莢、扁而劍脊三稜、色深青、中有扁豆、嫩時連莢鹽漬糟藏以作香物、其餘不耐用也、

〔大和本草四穀〕刀豆(ナタ) 本草約言曰、可入醬用之、其莢ワカク軟ナル時、皮トモニ煮テ食シ、又熱湯ニユビキテ鹽ニツケ、後日ニ味噌ニツケテ菹トス、其性味良、然レドモ實ノ既熟シタルハ、味好トイヘドモ、食スレバ甚氣ヲ塞ギ傷人、或食之シテ死スルコトナリ、不可食、燒タルハ最害人、一種花白キアリ、實ハ小ナリ、

〔和漢三才圖會百四菽豆〕刀豆 挾劍豆(俗云奈太末女)○中略 按刀豆伐薪刀稱奈太、此豆莢形似之、故名、相傳曰、刀豆能治初發癰疔、以子燒末傳之、服亦可、又連莢煮食、有脣腥氣、人不爲美、漬糟爲香物、

〔重修本草綱目啓蒙十七菽豆〕刀豆 ナタマメ〇 タチハキ(四國九州)〇 タラワキ(土州)〇中略 葉豇豆ヨリ大ニ、花モ亦大ニシテ紫色、莢ノ形長大ニシテ栞刀ノ如シ、未熟ノ者ハ莢ヲ連ネテ煮

〔三養雜記三〕藤豆　鈴鹿松森

京師の人云、江戸にて隱元豆といふものを、かみがたにては藤豆といへり、そはその形狀の藤の實に似たれば、藤豆といふなりといへど、江戸にては藤葉に似たる豆なれば、藤豆といへるにて、いづれもそのことわりあり、

〔浪花の風〕江戸にて隱元豆と唱ふるもの、大坂にては江戸豆といふ、至て少し、五六月比僅に見ることあり、浪花にて隱元豆といふものは、江戸にて藤豆といふものなり、是は格別多からず、

〔農業全書五二〕藊豆

藊豆、又たう豆とも云、民俗には入升豆とも云、甚多く實り、一本に入升もなると云ならはせり、又天竺豆近來渡る、南京豆隱元さゝげなど云も、此類なり、藊豆に黑白の二種あり、白きは白藊豆とて、藥種に用る物なり、凡此類甚多し、其中に南京豆極めて味よし、秋の末冬の初、おほく實り、莢ともに、(但實のふちの筋をとば、實入て後もよし、)日用の食物に用ひて、益多き物なり、農家多く作るべし、此藊豆の類は、其根さへ肥地によくはびこりぬれば、其つるは民家の軒、屋の上にはひ、或籬には、ゝせ棚をかまへてまとはせ、又屋敷境の嶮き岸ばな、るかしき片岸の野山、枯たる立木などにもはひひろごり、都て農家無用の地に生長し、みのり多くよろしき物なり、此類の豆うゆる時分の事、三月の節たねを下し、少し土をかけ、灰を以ておはふべし、土をおはくかくべからず、芽立三四寸も出る時、分て植べし、尤糞付にするは猶以て宜し、

〔宜禁本草乾五〕藊豆(ヘンヅ)　味甘、性微溫、(白者溫黑者冷)(一名沿籬豆一名鵲豆)和中下氣、其莢蒸食甚美、主女子帶下、主霍亂吐下不止、傳蛇咬、治殺食瘀、云微寒治嘔、久食頭不白、

〔萬葉集二十〕美知乃倍乃、宇萬良能宇禮爾、波保麻米乃、可良麻流伎美乎、波可禮加由加牟、

右一首、天羽郡(○上總)上丁丈部鳥、

一種葉花同而莢、有微毛、硬而不可食、俗云加木末女是乃藊豆之種類也、人雖不種、自變成之亦有、

白扁豆(へんづ)〇中略

按白扁豆、卽藊豆之白扁者也、花色亦白、出於日向者良、山州攝州者次之、皆勝於唐藥、

〔食物知新 一穀〕藊豆 別錄中品

釋名平豆 和名 因形名、此種隱玄禪師持來於此邦、故名隱玄豆、下(ケ)有白黑蛾眉之三種、

〔長崎夜話草 五〕長崎土物產

八升豆　隱元和尙持來て、種子を南京寺の内にうへおかれしより世に流布す、此故に隱元豆といへり、又南京豆ともいへり、

〔重修本草綱目啓蒙 十七菽豆〕藊豆　アヂマメ 和名鈔　トウマメ 土州　カキマメ 豫州　ヒラマメ　一名雪眉同氣 綱目 白蛾眉豆 本草原始

鵲豆　インゲンマメ　カキマメ 雲州　ツバクラマメ 遠州　カンマメ 同上　ナンキンマメ 筑前　フヂマメ 江戸　八升マメ 勢州　サイマメ 上總　センゴクマメ 勢州白子　インゲンナ、ゲ 佐州　トウマメ〇城州眞薗 中略

鵲豆ハ春種ヲ下シ、藤蔓(フル)甚長シ、葉ハ葛ノ葉ニ似テ小サク毛ナシ、花ニ紫白ノ別アリ、後扁莢ヲ結ブ、未ダ熟セザルトキ、莢ヲ併テ煮食フ、熟スレバ豆圓扁、黑褐色、或ハ茶褐色ニシテ、旁ニ白眉アリ、白花ノ者ハ色潔白ニシテ小黑點アリ、藥用ノ白藊豆ハ、苗葉ノ形狀鵲豆ニ異ナラズ、只莢濶ク內ニ硬殼アリテ、未熟ノ者モ煮食フニ堪ヘズ、豆ハ白キ鵲豆ニ比スレバ、微黃ヲ帶テ、黃大豆ノ色ノ如ク黑點ナシ、

〔物類稱呼 三生植〕眉兒豆ゐんげんまめ　京にてゐんげんまめといふ、江戸にてふぢまめと云、西國にてなんきんまめと云、上總にてさいまめと云、伊勢白子にてせんごくまめといふ、

す、或人の說に、其味をほめてかく名づけしと云にやなどいへども、藊豆の類にこの物の味、殊に勝れしとしふべからず、

〔庖廚備用倭名本草 二 穀〕藊豆 倭名鈔ニアヂマメ、多識篇同ジ、又云ヒラマメ、元升〇向井曰、西國俗ニハ〇シ〇ヤ〇ウ〇マ〇メト云、八升豆ト書リ、此豆穗多クナカフ、一粒ウフレバ豆八升ヲトル、故ニ此名ヲ云トイヘリ、又破墻豆トカケリ、此豆墻ノ本ニ植レバ、ヨクシゲリサカヘテ、垣ニカヽリ、垣モタハミカタブクバカリニ盛フル故ニ、破墻豆ト名ヲ得タリト云、本草註ヲミレバ破墻豆ナルベシ、薪〇本草ニ、人家ノ籬垣ニ、三月ニ種ヲ下ス、蔓生シテ延纏トシゲリハビコリマトヒテ、籬垣ヲオホフ、故ニ沿籬豆ト云、其葉ノ大サ盃ノ如クニテ圓ニシテ尖アリ、其花ハ小蛾ノ如シ、翅尾ノ形アリ、其莢ノナリアヒ十餘樣アリ、或ハ長ク或ハ圓ク猫ノ如ク、或ハ龍爪虎爪ノゴトク、或ハ猪耳刀鎌ノ如ク、種々同ジカラズ、皆累纍トシテ枝ヲナス、白露ノ節ノ後、其實更ニ繁衍ト多シ、嫩キ時ハ蔬食茶料ニス、老枯テ子ヲ取リ收ム、煮テ食シテ香味アリ、子ハ黑白赤斑ノ四色アリ、一種莢堅キハ食スベカラズ、其子ハ粗圓ニシテ色白シ、藥ニ入ベシ、是白藊豆ナリ、

〔大和本草 四 穀〕白〇扁〇豆 其類多シ、黑赤白斑色アリ、藥ニハ白ヲ用ユ、ワカキ時サヤトモニ食ス、實ハ藥トス、肥地ニハ植之不可用、養肥スグレバ實ノラズ、又シゲクウフベカラズ、甚繁茂ス、

眉兒豆 救荒本草ニ出タリ、近年中華ヨリ來ル、春子ヲウフ、秋ノ末ニイタリ實多シ、花紫ナリ、蔓生ス、ワカキ時莢トモニ食ス、扁豆ノ類ナリ、扁豆ヨリ味ヨシ、京都ニテハ隱元豆ト云、筑紫ニテハ南京豆ト云、甚蔓盛シテ實多シ、シゲク植ベカラズ、且肥過レバ不實、

〔和漢三才圖會 百四 穀〕藊豆 沿籬豆 蛾眉豆 和名阿知萬女、俗云隱元豆、〇中略

按藊豆、本朝自古有而不甚用、承應中黃檗隱元禪師來朝、以後處處多種之、其葉大似紫豇豆葉、嫩葉煮食、六月開花、紫白相交、似藤花而短向上、其長四五寸、每穗頭如蛾狀、其莢長二三寸、嫩時煮食、軟甘美、老則硬不堪食、收豆爲種、如栗色、或黑色、嘴耳處正白而大、如黑大豆、開、蓋炒煮不可食、

藊豆

〔浪花の風〕そら豆は殊に多し、はじき豆と稱して、夏秋の間殊更に賣販す、

〔新撰字鏡草〕藊九晉反、扁豆也、天豆也、阿地万女、

〔本草和名十九米穀〕藊豆楊玄操音補殄反　一名蘊豆、以其黑而間白故也、和名阿知末女、

〔倭名類聚抄十七豆〕藊豆　辨色立成云、蘊豆、藊音邊、又比顯反、和名阿知末女　籬上豆也、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕今俗呼藤豆、以其花似藤也、○中略　廣韻、稨、籬上豆也、或作藊、集韻作褊稨稿藊、新修本草、本草和名作藊、千金翼方、證類本草作藊、與集韻合、古人禾ネ多通作、蘊卽藊字、此引辨色立成作蘊、亦蓋俗字、按說文無稨稿等字、蓋是物莢扁濶、不與他莢同、故有是名、本草陶注云、人家種之於籬援、圖經云、藊豆蔓延而上、大葉細花、花有紫白二色、莢生花下、其實亦有黑白二種、李時珍曰、扁豆二月下種、蔓生延纏、葉大如盃、圓而不尖、其花狀如小蛾有翅尾形、其莢凡十餘樣、或長或團、或如龍爪虎爪、或如猪耳刀鐮、種種不同、皆纍纍成枝、白露後實更繁衍、嫩時可充蔬食茶料、老則收子煮食、子有黑白赤斑四色、按藊豆出本草、源君引辨色立成、載之非是、又依云籬上豆、則或正文脫唐韻云稨四字、其弁色立成云蘊豆七字、本是夾行小字、及阿知万米四字共在注末者、誤爲正文也、

〔康賴本草米穀〕藊豆　味甘微温、主和中、和比良末女、禹錫註有之阿知末女、

〔醫心方一〕藊豆和名阿知末女

〔類聚名義抄五豆〕藊豆アヂマメ　〔同八艸〕蘊豆音邊、又比顯反、アヂマメ、　藊豆音扁

〔多識編三穀〕藊豆、阿知末女、又云比良末米、

〔書言字考節用集六生植〕藊豆ヘンヅ本字扁豆、時珍云、有黑白赤斑四色、云々　藊豆アヂマメ　沿籬豆同、又云蛾眉豆　藊豆ヒラマメ　蛾眉豆同

〔東雅十三穀蔬〕豆マメ　○中略　倭名鈔に、○中略　辨色立成を引て、藊豆は籬上豆也、アヂマメと云ふと註せしものは、今俗に呼びてカキマメといふ、カキマメとは卽籬豆也、またヒラマメともいふも扁豆也、アヂマメといふ如きは、義不詳、萬葉集の歌に、アヂと云ひしは鳥也、アヂマメといふは、ツヒマメといふが如く、鳥の名によりて名づけ云ひしも知るべから

より洛陽に寓居し、今丑の春攝州有馬に往來し、路次にて農人の話を聞て、そら豆を多く作るゆへを求れり、たとへば麥を一町作る農夫ハ、其内二反或は三反餘もそら豆を種る事は、其利麥にまさるゆへにハあらず、凡麥作は種付るこやしより後、段々糞を入る事尤多し、又其地こしらへ、初の耕より度々中うち、草かじめ土おはふにいたるまで、萬に人でまの費ゆる事甚多し、されば其考へをよくする時は、たとへば一町の地を三反はあらして、其人でま其こやしを以て、殘る七反の麥を能作り立たるは、一町を皆作りて、段々の手入あしく、其糞し不足したるよりも、麥を取事却て多し、去ながら何國にても、農人のくせにて貪りにおほく作りちらし、其手入糞し不足すれば、害損なる事を聞ても、只半反も多く作るを悦ぶならひなれば、各其麥作の反數をへして、殘る田畠によく功を用ひて、僅に利を得る術を勤る事なし、又そら豆は初地こしらへを少全を入れて種へ糞をちと加たるもよし、其後四月初引取まで、中うちこやし草かじめなども用ひず、もし草あらば、畑になり、一度をつとひきすつるまでにて、人力ついへず、さて右七段の麥に、手入をよくして、糞をましぬれば、能こやしの不足なる、一町の麥よりも取實多し、其上そら豆中分に榮たらば、三段に六石有べし、少よく出來たらば、八九石あるべし、然ば麥は多く出來、其こゑ人でまを省き、其上又大分のそら豆を作出し、是を以て米の代とし、麥飯に加れば味よく、或はみそとし、又麥もちのあんに入れ又所により、なら茶に用ひ、様々食となりて、利を得る事多し、殊に麥に先立て熟し、農人の仕舞よく、又麥より早くいでくる故、凶年には飢を助くるに便あり、此様々の徳分あるゆへ、能作人は其考をなし、そら豆を多く種て、利を得ること少からずと也、されば諸國にても、此事をよく考へ、そら豆を多く作り、其餘力を取て、麥をよく作り立、兩様の利を以て、窮來の助となすべし、そら豆は大坂に多し、種子を求むべし、

〔毛吹草三〕大和　空菽

増、一種オホソラ豆一名オタフク豆ト云ハ、甚肥大ニシテ、濶サ六七分、長サ一寸許、卽西湖志ノ王墳豆ナリ、西湖志云、王墳豆、紫桃軒雜綴、南屛山邵皇親墳左側、有地產蠶豆、顆大而味鮮、杭人呼爲王墳豆、綱註云、汪懋麟酒令詩、酒令爭傳段七孃王墳小豆摘新嘗、春殘花事都無了、別有幽芳出院牆、

〔農業全書二五穀〕蚕豆（大和に多く作るゆへ、大和豆とも云、西國にてハたう豆と云、）そら豆さやの形、かいこに似たるゆへ蚕豆と名付、又は蚕の時分に熟するゆへ、かくは呼とも云なり、百穀に先立て熟し、青き時莢ながら煮て菓子にもなり、又麥より先に出來るゆへ、飢饉の年取分助となる物なり、又麥と合せ飯にして宜し、又豆ハ多く、麥は少く粉にして、餅に作り、食するもよし、肥たる濕氣地に八月初うへて、臘月厚く培ひ置て、三月中旬にぬきとるべし、又云、蚕豆は大かたの地にハできかぬる物なり、こやしを用る事を忌と云ならはせり、されどもよく熟し、久しくかれたる灰ごゑを用るはくるしからず、八月中分に蒔てよしと知べし、種子に二色あり、江戶豆とてふとくひらめなるは味よからず、小粒にして丸きを用ゆべし、味よく取實もおほし、（一說に、大なるが味よしと云、然れば大なるにも二色あるにや、心み考ふべし、）是もいや地を嫌ふ故、年にかへてうゆべし、損毛の年多くうへて飢を救ふべし、麥に先立て實るゆへなり、其利分も又麥に劣らず、畿內にて多く作る、一反に五六石も出來るものなり、取分大和國に多く作る、いりて皮をさり、茶に用ひ、粥にもしたゝめ、又みそに造るなり、又是を菜園の邊、又は花園に花がらをきながら、其中にうへて霜をふせがせ、三月花の苗生する時分、ぬきとるべしといへり、是は濕氣をにくむといひならはせども、水田の稻の跡におほく作ると見えたり、しかれば大かたの濕氣には、さのみいたまず、却てつよくかはきたる所にはよろしからず、是下品のものといへども、農家にかくべからずとしるしをけり、（凡畿內の、土地を大切にする所にて、多く作るを見れば、よく農の助となる物と見えたり、何の國にてもおほく作るべし、）

菜軒云、上方の國々にそら豆を多く蒔事は、其利麥とひとしき故なりと思へり、しかるに去年

メト云、寿本草、豆ノ莢ノ形ハ老蠶ノゴトシ、故ニ蠶豆ト云、又蠶カヒスル時始テ熟ス、故ニ蠶豆ト名ヅクトモ云、八月ニ種ヲ下シ、冬苗ヲ生ズ、葯ニスベシ、方莖中空ナリ、葉ノ形匙ノ頭ノ如ク、本円ニシテ末トガリ、面緑ニシテ背白クヤワラカニシテアツシ、一枝ニ三葉アリ、二月ニ花ヲ開ク、蛾形ノゴトシ、紫白色ナリ、其角連綴シテ大豆ノ如シ、眠ル蠶ノ形ニ似タリ、

〔和漢三才圖會 百四穀豆〕蠶豆　胡豆　俗云曾良末女 ○中略

按蠶豆畿内多種之、和州之產爲良、八月下種、其葉似景天(ベンケイサウ)草嫩葉、而硬不可食、三月開花、淡白色二瓣、中有黑點、乃是生莢之本也、頗似蠶狀、性怖雷乎、花時有霹靂、則不多實、凡其莢向上、故呼曰空豆、每莢黑物剛堅、四月取嫩莢豆煮食、五月熟、收豆可炒可煮可饌、未醬可拌飯食、並得鹽味良、但皮厚肉脆、多食則膨脹、此豆中秋下種、中夏收穫、經閏也僅兩月耳、不用多糞培、故既生後傍多生蘖、十月古株即死、蘖背處長而生花實、故以爲子孫繁昌草、

〔重修本草綱目啓蒙 十七穀豆〕蠶豆　○ソラマメ　○ヤマトマメ 和州　○ナツマメ 雲州、備後、　○四月マメ 阿州、土州、　○五月マメ 豆州、駿州、　○アマメ 土州　○トウマメ 四國、讃州、　○フユマメ 相州　○ユキワリマメ 下總　○高野マメ 讃州　○トウノマメ 筑前　○タンジクマメ 中國　○ノラマメ 尾州　○エンドウ 備州　○ガンマメ 勢州、讃州、　○中略

秋月種ヲ下シ、翌年ノ夏ニ至テ熟ス、苗高サ三四尺、莖ハ方ニシテ空シ、葉ハ景天(ベンケイサウノ)葉ニ似テ厚シ、四葉一簇、肥タル者ハ六葉トナル、春葉間ニ花ヲ開ク、大ニシテ白色黑點アリ、墨色ノ如シ、後莢ヲ結ブ、直立シテ生ズ、故ニソラマメト呼ブ、形圓ニシテ指ノ如シ、始ハ緑色、熟スルトキハ黑色、其豆豌豆ヨリ大ニ、刀豆(ナタマメ)ヨリ小サシ、未ダ熟セザル者、皮ヲ帶テ煮食ス、熟スル者ハ煮食シ炒食ス、或ハ仁ヲ採テ味噌ニ造ル、一種黑粒ノ者アリ、莢モ黑シ、一種咬噹吧(ジャガタラ)ノ產ハ豆小ニシテ、蠶豆ヲ二ツニワリタル大サナリ、葉形ハ同ジ、是救荒本草ニ說所ノ文ニ合ス、

蠶豆

〔農業全書 五 菜之二〕豌豆

ゑんどうは、二三月種るとあれども、是も八月まきて、寒中をへて花咲、春に至てはやくもろくの豆にさきだちて、實のるを賣販とするなり、又おほくうへをき、春になり其苗をとり、田の糞に用ひて、すぐれてよくきくものなり、ことに苗代のこゑとして、無類のものなり、

〔農政全書 二十六 樹藝〕豌豆（據本作_二同豌豆_一、唐史作_二畢豆_一、崔寔作_二豍豆_一、即青斑豆也、田野間不中、往往有之、俗名_二小寒_一者是也、）

務本新書曰、豌豆、二三月種、諸豆之中豌豆最為_二耐陳_一、又收多熟早、如近_二城郭_一、摘_二豆角_一賣、先可_レ變_レ物、舊時莊農往往獻_二送此豆_一、以為_二嘗新_一、蓋一歲之中、貴_二其先_一也、又熟時少有_二人馬傷踐_一、以_レ此校_レ之、甚宜_二多種_一、

玄扈先生曰、豌豆與_二蠶豆_一各種、蠶豆之利倍_二于豌_一十一、其耐陳則一也、

〔大鏡 七 太政大臣道長〕かばかり安穩泰平なる時にはあひなんやとおもふは、おきならがいやしきやどりも、おびひもをときて、かどをだにさゝで、やすらかにのいふしたれば、としもわかく、いのちものびたるぞかし、まづはきたのかたかも、かはらにつくりたる野。。。のまめ。。。さゝげ、うり、なすびといふもの、このなかごろは、さらに術なかりし物をや、

〔多識編 三 穀〕蠶豆、曾。良。末。米。異名胡豆、

〔和爾雅 六 米穀〕蠶豆（ソラマメ）胡豆（同）

〔朱氏談綺 下 米穀〕蠶豆ツクマメ

〔日本釋名 下 米穀〕蠶豆　其實空（ソラ）に向ひてなる物也

〔物類稱呼 三 生植〕蠶豆そらまめ　東國にてそらまめといふ、西國にてたうまめ、出雲にてなつまめ、尾張にてのらまめ（同名有、別種なり、是は空豆の轉語にや、）伊豆駿河にて、五月まめ相模にてふゆまめ下總にてゆきわりまめ、伊勢及遠江にてがんまめ、中國にててんぢくまめと云、（空豆とは、其實の空に向て生る故になづくとかや、）

〔庖厨備用倭名本草 二 菽豆〕蠶豆（サンツ）（ソラマメ ナツマメ）　倭名抄ニ蠶豆ナシ、多識篇ニソラマメ、元升（井〇向）曰、俗ニハナツマ

ノ如シ、煮テモ炒テモヨシ、磨シテ粉餅ニシテ甚白ク細膩ナリ、百穀ノ中ニ最先登タリ、又野豌豆アリ、粒小ナリ、其苗モ食スベシ、巣菜ト名ヅク、菜部ニミエタリ、

(和漢三才圖會 百四 穀)豌豆　胡豆　戎菽　畢豆　回鶻豆　青小豆　麻累　青斑豆　和名乃良末女○中略

按豌豆花瓣如蛾形、外白内有深淡紫、面中心黑色、其子褐色、大如麻仁、六月收取之、不堪煮食、惟炒以爲菓子、味甜美、今人炒用、飴餹作圓餠狀、賣之、最下品、

白豌豆　大如大豆之小者、正圓面色赤、似豆面白色、此乃煮食亦佳、俗曰長崎豌豆、

(重修本草綱目啓蒙 十七 穀 豆)豌豆　ノラマメ 和名鈔　エンドウ 京　ブンドウ 備州　ツルブンドウ同上　エンブ 上總　カキマメ 奧州　シヽクハズ 上州○中略

秋月種ヲ下シ、翌年ノ夏ニ至テ熟ス、蔓草ナリ、葉ハ紫藤葉ニ似テ、形圓ク白色ヲ帶ブ、葉頭ゴトニ細鬚アリ、春花ヲ開ク、扁豆花ニ似テ大ナリ、紫色賞花ニ供スベシ、花後莢ヲ結ブ、其豆ハ黃豆ノ大ナニシテ四角黑褐色、加州ノ者ハ至テ小ク、赤小豆ノ如シ、又白花ナルモノアリ、ソノ豆圓ニシテ色白シ、一種豐產ノ豌豆ハ、俗ニサルマメト呼ブ、苗ノ形狀同ジク紫花、豆大ニシテ四角、色淺褐ニシテ斑アリ、蠻舶ニ出、胡地者、大如杏仁、ト云者是ナリ、

(春日正預祐範記)慶長十年乙巳正月以來御神事次第

四月

一十一日、旬、日並朝夕、○中略　一莞豆備進之、豆腐ノ所在、

(宜禁本草 乾 五穀)豌豆(エンドウ)　甘平、隔年種、初夏熟、能發寒病、調順榮衞、益中平氣、可作醬、

(庖厨備用倭名本草 二 穀 豆)豌豆○中略　味甘性平毒ナシ、淡煮シテ食スレバ消渴ヲ治シ、吐逆ヲトヾメ、瀉ヲトヾメ、痢澼下利ニモヨシ、榮衞ヲ調ヘ、中ヲマシ、氣ヲ平カニシ、乳汁ヲ下ス、煮テ汁ヲ用テ、鬼毒心病ヲ治シ、乳石毒發ヲ解ス、又外科ノ用多シ、

菝葜葉、兩兩相對生、嫩時可食、三四月開小花、如蛾形、淡紫色、結莢寸許、子圓如藥丸、亦似甘草子、王念孫曰、齊民要術引崔寔四民月令云、正月可種春麥豍豆、盡二月止、案今北方人種豌豆、在正月中、與四民月令相符、故北方農人爲之語云、豌豆大麥不出九也、南方人種之、則於八九月、此土地異宜、故遲速不齊也、豌豆枝莖柔弱布地而生、葉間有鬚連卷、然葉形頗圓、兩兩相値、初生時肥嫩可食、南方人多摘以爲蔬、味極美、三四月放小花、四瓣向內者二、向外者二、亦皆相對、花色淡紫可愛、四五月作莢、長寸餘、莢中子皆圓如珠子、煮食之香美、亦可以爲餳、大抵與麥備熟耳、齊民要術云、豍豆大豆類也、豌豆類也、則是分豍豆豌豆爲二、與廣雅異、下總本有和名二字、本草和名豌豆野豆並在赤小豆條、別無和名、今俗呼豌豆字音、按豌豆無野生、恐不得名乃良万女、乃良万女或是陳藏器所謂穭豆也、本草拾遺云、穭豆生田野、小而黑、堪作醬、李時珍曰、此卽黑小豆也、小科細粒霜後乃熟、穭乃自生稲也、此豆原是野生、故名、

〔類聚名義抄 五豆〕豌烏官反、ノラマメ　豌正　豋俗　野豆ノラマメ

〔伊呂波字類抄 能植物〕豌　野豆　豌又作豋　𧯷野生豆也　〔同 衣植物附植物具〕圓豆エンドウ

〔多識編 三穀〕豌豆、乃良麻米、異名胡豆、拾遺　戎菽、管雅

〔和爾雅 六米穀〕豌豆エンドウ、ノラマメ胡豆、戎菽、回鶻豆、畢豆、青小豆、青斑豆、麻累、一云野豆、

〔物類稱呼 三生植〕豌豆ゑんどう　畿內にてのらまめと云、東國にてゑんどうと云、伊勢にてぶんどうと云、上總にてゑんづといふ、

〔庖厨備用倭名本草 二穀豆〕豌豆　倭名抄ニノラマメ、多識篇同ジ、元升升○向曰、今俗ニエンドウト云、考本草、一名胡豆、又胡戎青斑麻累ナド云諸名アリ、八九月ニ種ヲ下ス、其苗柔弱ニシテ蔓ノ如シ、ヒゲアリ、葉ハ菝葜葉ニ似テ、兩兩相對シ生ズ、嫩キ時ハ食スベシ、三四月ニ小花ヲ開ク、蛾ノ形ノ如シ、淡紫色ナリ、莢ノ長サ一寸バカリ、ミノ圓ナルコト藥丸ノ如シ、胡地ニ出ルモノハ大サ杏仁

豌豆

六月におそくうへたるは、八九月に實なる、平地よりひきくふかくしてうへ、漸々に糞土を置くべし、地高ければ、水を澆ぎ糞を數に、ながれてとゞまらず、後まで少くはめるが、糞水たまりてよし、灰糞水小便に宜し、苗の時蟲好て食す、毎朝ほり去べし、或他草の葉を株に置て、翌朝きりむしの有無を試て、有時は堀去べし、或云、豇豆をうふるに、區を作事方三四尺、あなをほり糞土をみてて中を空くし、まはりに圍くうへまはし、蔓を生じて竹をまるく立べし、風にたをれず、蕃長せざる間は、きり虫食しやすし、虫多きには、紙或竹皮しらんの葉を、三寸ばかりに切て、それを以莖をまけば食せず、蔓長じて梢末を早くつみ、されば實多し、

〔農業全書 二十六〕豇豆 一名蜂䗈、其心雙生、紅色居多、故名、李時珍曰、頭、花、實、必兩兩、生熟皆可食之物、其子煮食、如菜、爲飯、宜以此豆爲之、

穀雨後種、六月收子、收來便種再生、八月又收子、一年兩熟、

〔玉露叢〕一寬文五年正月ニ、將軍家ノ仰出レ、

一大角豆　右同斷〇六月

〔毛吹草 三〕河内　小角豆 廿五サヽゲト云、蔓ニ生ナガクサヤ長ニ、干置テ、種是ヲ煮テ用ニ、サヤ生ノ如ト云、

〔雍州府志 六土產〕角豆　白赤角豆實、日乾而用之、是稱實角豆、在三條南大宮、延喜式載山城國交易雜物大角豆六石云云、

角豆幷刀豆　處々有之、然角豆東河原之產爲佳、刀豆九條邊所種特爲良、

〔倭名類聚抄 十七〕野豆　本草疏云、豌豆 豌音於丸反 一名野豆、和名乃良末女

〔箋注倭名類聚抄 九〕本草和名云、小豆一名苔、類出、豌豆、江豆、野豆、不載出典、按伊呂波字類抄載本草和名云、頭豆、豌豆、江豆、野豆、蠶、以上五名出疏文、則知今本本草和名不載出典者、傳寫脫文、蓋源君從本草和名引之、所見本未誤脫也、然頭豆以下皆以類並舉者、故不云一名、源君以野豆爲豌豆一名誤、按廣雅、豍豆豌豆豌豆也、李時珍曰、豌豆種出西胡、八九月下種、苗生柔弱如蔓、有鬚葉似

實るを收め其まゝうゆれバ、又八月實る物なり、生長して後、つるのさきをつみ切べし、其まゝをけば蔓みだれ合て、多くみのらず、實をば朝露にもり取べし、日たけてとれば實おつるものなり、是腎の穀なりと云て、性もよく賞翫する物なり、白さゝげ取分よし、又一種霜さゝげとて、六月の末に種て、十月霜をおびて取あり、早き粟跡、又ハ早苗の跡にも蒔と見えたり、所によるべし、〇籬豇豆には白きあり、青きあり、赤きあり、長短かれこれ品々多し、三月の節より五月の中まで、其間十日十五日を隔て、漸々に種べし、まかれば七八月まで、段々に實る、但餘り早すぐれば、寒に痛み生せず、又生じても生長しがたし、沙地なれば、苗のやはらかなる内、きり虫切てそだちがたし、其根のまはりに、苣の葉などを置、朝ごとに其葉に虫の食ひたる跡あるを見て、虫を殺すべし、此長豇豆種る地は、冬より溝をたて、それに能こゑ土を入、或はこゑをもうちからし置、右に云時節にうゆべし、間一尺ばかりをきて、三四粒づゝうゆべし、又其間も二寸あまりへだつべし、よく生長して後は二本か三本に定むべし、段々うすきこゑをそゝぐべし、蔓の長さ四尺ばかりの時、さきをとむべし、枝おほく出るを、悉く籬にまとはすべし、まとはざれば實ならず、夏の菜の內第一の物なり、家々に欠ずつくるべし、猶手入多し、小民なべて作る物にて、人みなしれる所なれば、くはしくは記さず、沙地におそく種れば、切虫きりてそだち難し、早く蒔べし、

〔菜譜下〕豇豆　さゝげを角豆とかくは非也、農政全書、穀雨の後にうふ、三月中月令廣義曰、灰にて壅ふに宜し、豇豆はつる長して籬にはふさゝげ也、白あり、紅あり、へり赤きあり、いづれも味同じ、性よし、さや長きは一尺四五寸、二尺にいたる、又みじかくして一ふさに多くなるあり、いづれもさやともに煮て食す、性よし、夏菜の上品なり、民用を助る事、茄子に對す、三月の節より六月の中の初まで、間十日十五日程へだてゝ、漸々にうふべし、甚早ければ寒にいたみて不生、生じても苗長じがたし、又早くうふれば早く枯る、故に追々におそくうふれば、七八月九月の初まで實あり、五

〔東大寺要錄〈五〉〕年中節會支度〈寛平年中日記〉

一七月用

七日節供〈○中略〉大角豆〈代二合〉

〔朝野群載〈二十八諸國功過〉〕大炊寮

爲前山城守從五位下賀茂朝臣保道任中四箇年取濟納畢事

承德二年〈○中略〉

大角豆六石

康和元二三幷三箇年〈各色目同前〉

右依宣旨、納畢如件、

康和五年二月日

正六位上行少屬笠宿禰

正六位上行少允惟宗朝臣

從五位上行頭兼曆博士丹波介賀茂

〔日次紀事〈八月〉〕一日　角豆〈仕丁獻角豆〉

〔延喜式〈三十九内膳司〉〕耕種園圃

營大角豆一段、種子八升、總單功十三人、耕地一遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理一人、畦上作二人、殖功二人、芸一遍二人、採功三人、

〔農業全書〈二五穀〉〕豇豆

凡て豇豆と云は、本は籬にはふさゝげを云と見えたり、畠に種る短きも、形味も皆よく似たれば、同じくさゝげと云なり、豇豆と名付るハ、紅色多き故なりとも云なり、莢かならず二つゞゝ雙び生ず、畑に作る短き豇豆、三月初灰ごゑを少用ひて種べし、肥地ならば糞ハ用ゆべからず、六月

州ニテ三尺フロト云、時珍ノ說ニ蔓短ト云ハ、ツ。プ。サ。ヽ。ゲ。ナリ、一名サヽゲ土州、三州、ハタケサヽゲ、アヅキサヽゲ、ミトリサヽゲ、ミサヽゲ、雲州イラリコ、モリサヽゲ、筑前料理サヽゲ、ハコザキサヽゲ俱ニ同上サナリ、備前チフロウ、攝州漢名戳豇、時珍食物本草コレハ蔓短クシテ畑中ニ栽ユ、莢短シテ上ニ向フテ生ズ、熟シテ豆ヲ採食フ、紅白黑斑ノ數品アリ、斑ナル者ヲヤ。ツ。コ。サ。ヽ。ゲ。ト云、一名ニンギヤウマサメ、筑後ゲンプクマメ、備前白豆ニシテ黑斑アル者アリ、赤斑アル者アリ、俱ニ漢名花豇豆、授時通考又一種ト。ウ。サ。ヽ。ゲ。ト呼ブアリ、一名インゲンマメ、江戸信濃マメ、伊州五月サヽゲ、和州甲州ヲロウ、讃州江戸サヽゲ、播州江戸フロウ、攝州銀フロウ、フロウ、マゴマメ、ニドフロウ、共同上ニドナリ、勢州三度サヽゲ、同州チヤウセンサヽゲ、筑州ナタサヽゲ、奥州カマサヽゲ、丹波八升マメ、江州カヂハラサヽゲ、ギンサヽゲ、越前仙臺サヽゲ、下總漢名菜豆、盛京通志コレハ苗葉扁豆ニ似テ、早ク莢ヲ結ブ、形扁クシテ長サ三四寸、未ダ熟セザル時、皮ヲ連テ煮食フ、熟スル者ハソノ豆鵲豆ヨリ小ニシテ光澤ナリ、白紅黑十數色アリ、其早ク熟スル者ヲ栽テ再三豆ヲ生ズベシ、故ニ二度フラウ、三度サヽゲノ名アリ、

〔新猿樂記〕三君夫出羽權介田中豐益、偏耕農爲業、更無他計、〇中略園畠所蒔、麥、大豆、大。角。豆。小。角。豆。粟、黍、稗、蕎麥、胡麻、員盡登熟、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

山城國（中略）六石〇中略大角豆　大和國（中略）四石〇中略大角豆　右以正稅交易進、其運功食並用正稅、

〔延喜式三十三大膳〕正月最勝王經齋會供養料、〇中略　僧別日菓菜料、〇中略　大角豆、白大豆各一合、

七寺盂蘭盆供養料、東寺、西寺、佐比寺、八坂寺、野寺、出雲寺、聖神寺、寺別餅菜料、〇中略　大角豆一升、

五月五日節料、〇中略　大角豆五位已上一合、

七月廿五日節料、〇中略　生大豆、大角豆五位已上二把、

〔大和本草卷四〕豇豆　二種アリ、蔓長キハ菜トシ、蔓短キハ穀トシ果トス、共ニ上品ナリ、蔓長キハ籬ニマトヒノボル、其莢長コト二尺ニ餘ルアリ、又短クシテ一所ニ房ヲナシテ多ク實ノルアリ、蔓長キハ春分ヨリウヘ、六月節マデ蒔ベシ、六月ニウヘタルハ、八月中旬ニミノリ、九月マデ有之、最珍トス、苗ノ初生スル時、鹿食ヒ絶ツ、筍皮及白及ノ葉、或ハ紙ニテ本ヲ巻ベシ、夏秋ノ菜ノ上品ナリ、毎年地ヲカヘテウフベシ、ブル短キハ實黑ク、大ナル者性味最ヨシ、煮テ飯ニ雜ヘ、或澆茶飯ニ加ヘ食ス、性味共ニ赤小豆ニマサレリ、又鹽醬ニテ煮食ス、或沙糖ヲカケ果トシテ食ス、皆佳シ、本綱ニ曰、補腎氣、每日空心煮入少鹽食之、與諸疾無禁ト云ヘリ、又時珍云、此豆可菜可果可穀、備用最多乃豆中之上品トイヘリ、長キハ其實下リ垂レ、短キハ上ニサヽゲ、サヽグルヲ以テサヽゲト名ヅケタリ、又環豇豆アリ、其實ノ端ニ莢アリ、二莢左右ニ相對シ、兩方ニマガリテ如環、葉モ味モ常ノ豇豆ニ同、是モ短紅豆、蔓ミジカシ、綱ニハフ類ニアラズ、臘月ニ豇豆ヲ蒸テ日ニ乾カシ、多ク貯ヘヲキ用レバ、早ク熟シ久キニ堪フ、隱元豆、豇豆ノ類ナリ、漢名未詳、近年異國ヨリ來ル、又梶原ナサゲト云、皆鄙俗ノ名ブタル所ナリ、葉ハ赤小豆ニ似テ蔓生ス、莢ハ大豆ヨリ長ク、豇豆ヨリ短ク廣シ、五月ニ早クミノル、又穀レバ一年ニ二度ミノル、菜トシテ煮食スル事、豇豆ニ同ジ、子ノ色白ク、腎ヲスルガ如シ、京都ニテハ眉兒豆ヲ隱元豆ト云、與此別也、

〔重修本草綱目啓蒙〔二十七穀豆〕〕豇豆　サヽゲ〔和名鈔〕　大角豆〔同上〕　サヽカ〔和書〕

蔓ノ長ト短トニ種アリ、共ニ春月種ヲ下ス、時珍ノ說ニ、蔓長丈餘、又長者至二尺ト云ハ、十。八。サ。サ。ゲ。ナリ、一名十六サヽゲ〔佐渡〕、十六〔東國〕、ナガサヽゲ〔南部〕、ナハサヽゲ、フロウ〔四國〕、ナガフロウ〔讃州〕カキブロ〔同上〕、モガリ〔遠州〕、ダラリ〔雲州〕、漢名裙帶豆〔時珍食物本草〕、一名十八豇〔常熟縣志〕、十八粒〔嘉興縣志〕、十六粒豆〔丹徒縣志〕、是ハ莢長シテ一尺餘ニナリ豆多シ、肥タルハ十八粒アリ、故ニ十八サヽゲト云、一種皮紅紫色ニナルハ、救荒本草ノ紫。豇。豆。ナリ、一種三。尺。サ。ヽ。ゲ。ハ、莢廣ク長サ二三尺ニシテ柔軟ナリ、獣

は、莢大きし、信濃にては唐さゝげといふ、○中略陸元さゝげは豇豆也、近江には八升まめ、西國に朝鮮さゝげ、伊勢駿河ににどなりといふ、

〔庖廚備用倭名本草二蔬豆〕豇豆　倭名抄ニ豇豆ナシ、多識篇今案ニサヽゲ、考本草ニ三四月ニ種ヲ下ス、二種アリ、一種ハ蔓ノ長サ一丈餘、一種ハ蔓短シ、其葉二種トモニ、本大ニ末尖ル、嫩キ時食スベシ、其花ハ紅白二色アリ、其ノ莢ハ白紅紫赤斑駁ノ數色アリ、長キハ二尺ニ及ブ帶ノゴトシ、裙帶豆ト名ヅク、嫩トキハ莢トモニ蔬菜ニス、老テハ子ヲ取リ收ム、短キハ尺ニ及バズ、或ト名ヅク、莢ハ食スベカラズ、其子更ニ香味也、飯ニ和シテ精ロシ、此豆ハ菜ニシ菓ニシ穀ニスベシ、其用最モサシ、豆中ノ上品ナリ云云、元升按○中略曰、此說ヲミレバ、サヽゲナルコト疑ナシ、倭名抄ニ大角豆ヲサヽゲトヨミテ、崔禹錫ガ食經ヲ引タリ、古今ノ名ノカハリアルニヤ、

〔本朝食鑑穀一〕大角豆

釋名源順曰、崔禹錫食經、大角豆一名白角豆、色如牛角、故以名之、和名散散介、必大(平野)按、角豆者豇豆也、邇俗稱大角豆、

集解、大角豆處處田園種之、三四月下種、有蔓大角豆者ツルササゲ、蔓長丈餘、有地大角豆者、蔓短似大豆之高、二種俱其葉本大末尖、嫩時作茹食、味亦好、民間最食之、開花有紅白、莢有紅白紫赤綠斑駁雜色、長者至二尺許、嫩時作茹、上下愛之作和物、或交飯煮食、此稱角豆飯、大抵夏時至秋、與茄子爲蔬中之上品也、其子老則采子、晒乾煮食、味與赤小豆爲伍、其最佳者號十六角豆、莢長肥、兩端微紅色、而一莢有十六子、子亦肥大如大豆大、味亦甘美、世以賞之、民家多誇之、一種有一年兩度收者、五六月采初結子者、半爲食用、半則晒乾、至八月種之、則九十月再用之、不惟爲珍、其味亦美、其莢亦柔軟而俱佳、

〔本朝食鑑二華和異同〕豇豆

一名醉䠊、卽本邦之大角豆也、華亦有長蔓短蔓二種、花有紅白、莢有白紅紫赤斑駁數色、而可菜可果、乃言豆中之上品也、

種之、一種蔓長丈餘、一種蔓短、其葉倶本大末尖、嫩時可茹、其花有紅白二色、莢有白紅紫赤斑駁數色、長者至二尺、嫩時充菜、老則收子、此豆可菜可果可穀、備用最多、乃豆中之上品、而本草失收何哉、又曰、豇豆開花結莢、必兩兩並垂、豆子微曲、如人腎形、是可以充佐佐介、離離見西京賦、蜀都賦、及西征賦、

〔醫心方三十〕白角豆〈中略〉和名佐々介

〔類聚名義抄三〕豆角ササゲ　〔同五〕大角豆ササゲ　白角豆同

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一さゝげ　さゝ

〔日本釋名下菜蔬〕豇豆　竹垣にたかくはひのぼりて、其實は物をさし上たるがごとく、たかくなる故にさゝげと名づく、

〔東雅十三穀蔬〕豆ササゲ〈中略〉倭名鈔に本草を引て、〈中略〉大角豆一名は白角豆、サヽゲといふと註せしは、サヽは細小也、ゲといひ、キといふは轉語にして、並に角をいふ、角とは即莢をいふ也、日本紀には、豆角讀てササゲと云ひけり、今俗にはササゲといふ

〔日本書紀十七繼體〕元年三月癸酉、納八妃、〈中略〉息長眞手王女曰麻績娘子、生荳角皇女、〈荳角此云娑佐礙〉

〔物類稱呼三生植〕紅豆さゝげ　九州及上州信州總州にてふらうと云、關西にて十八さゝげと云を、關東にて十六さゝぎといふ、叉に關東にて大角豆の短く生るものをみづらと呼、西國にてはふたなりといふ、

〔倭訓栞中編九佐〕さゝげ　日本紀に角豆をよめり、倭名抄には大角豆とみゆ、九州及上州信州にふろうといふ、さしあげの義成べし、實のなるさま、竹垣などにさしあげたり、地さゝげあり、籬に及ばず、十八さゝげは、關東に十六さゝぎといふ、十八豇豆さゝげは裙帶豆也といへり、信濃さゝげ

大角豆

〔朝野群載諸國公文二十七〕主計寮解　申返抄事

備前國應德二年雜米使正六位上行

年料白米仟佰漆拾伍斛

大炊寮納略〇中

小豆拾玖斛漆斗略〇中

應德三年十二月廿九日　　正六位上行權少屬縣宿禰〇以下署名略

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、略〇中赤小豆四斗六升、

〔毛吹草三〕近江　納小豆俗ニ是ヲ大納言ト云　美濃　赤豆俗ニ當國ノ赤豆ヲ大納言トモ云　丹波　大納言小豆

豐後　赤豆

〔雍州府志土產六〕赤小豆　是亦自近江來者爲良、其色淡黑而帶紫色者、外面不麗、民間謂都盧豪(ホコリカブキ)、其味爲佳、外面色偏赤者、其味不堪用、

〔浪花の風〕赤小豆は名物なれば、素より宜し、赤豆飯に焚、又は強飯に加へても、江戸のさゝぎより大粒にして、且色味ひもよろし、

〔本草和名米穀十九〕白角豆、一名大角豆、色如牙豆、故以名之、出崔禹、和名佐々介、

〔倭名類聚抄豆十七〕大角豆　崔禹錫食經云、大角豆一名白角豆、和名佐々介穀　色如牙角、故以名之、其一穀含數十粒、離離結房、離離讀如佐奈流、見文選、

〔箋注倭名類聚抄稻穀九〕和名依輔仁、繼體紀有荳角皇女、訓注荳角此云娑佐礙、按荳角疑角荳之誤倒、荳蓋俗豆字、今俗謂呼佐佐伎、略〇中本草和名云、白角豆一名大角豆、色如牙豆、故以名之、出崔禹、此所引卽是、牙豆蓋誤、當以此作牙角爲是、按本草綱目有豇豆、云此豆紅色居多、故名豇豆、三四月

小豆產地

〔延喜式三十二大膳〕鎮魂(宮內省、中宮、東宮)
大直神一座　座別(中略)小豆二合八勺、(中略)已上七種(神四座料)
雜給料　參議已上人別(中略)小豆二合八勺、(中略)五位已上滑人、人別(中略)小豆一合五勺、(中略)
六位已下二百六十人、人別(中略)小豆六勺、
〔延喜式三十三大膳〕正月最勝王經齋會供養料(中略)並僧料日別菓〇菜〇料〇(中略)小豆四合、(各二合、餅料)
仁王經齋會供養料　僧一口別菓菜料(中略)小豆一合六勺、(羹料四勺、餅料二勺、好物料并菓餅料各三勺、)
〔延喜式三十六主殿〕新嘗祭供奉料(中宮准此)
小豆三升(燈〇豆〇料〇)
〔朝野群載二十一雜文〕具輸寮物、申應齋治方事(中略)
傷寒病豆病治方(中略)　又小豆粉、和雞子白、付之、
右依宣旨謹申
天平六　月　日
〔時慶卿記〕慶長八年六月十三日、土用ニ入、旅小豆、大麻ヲ飲、
〔官中秘策二十年中行事〕年中諸大名獻上物之事
九月
一小豆　織田八百八
〔延喜式二十三民部〕交易雜物
播磨國(中略)小豆三石(中略)　美作國(中略)小豆六石(中略)　備前國(中略)小豆十九石七斗(中略)　備中國(中略)小豆一石六斗(中略)隔三年進、但大豆七石、小豆十六石、　備後國(中略)小豆一石七斗(中略)　紀伊國(中略)小豆卅石(中略)　阿波國(中略)小豆十六石(中略)　右以正税交易進、其運功食並用正税、

小豆利用

とし飯とし餌とし炙とし、或磨て粉とし餉とし、其味甘而不熱、乃濟世之良穀也、又以水ひたしもえ出るを食す、味よし、月令廣義曰、麻をかりおはりて、其あとにうふべし、種樹書曰、菉豆は瘦地に宜し、四月に種て六月に收む、子再種て八月に收む、

時珍曰、三四月に下種、豆粥、豆飯、豆酒となすべし、肥地にあしゝ、一年に二度みのる、或曰、再うふるによろしからず、一たびうへて二度みのるものなり、二度子を取るべし、

〔王氏農書二十八穀譜集〕小豆

北方惟用菉豆最多、農家種之亦廣、人俱作豆粥豆飯、或作餌爲炙、或磨爲粉、或作餉材、其味甘而不熱、煩解藥毒、乃濟世之良穀也、南方亦間種之、

〔藥經太素下〕赤小豆　味甘鹹

能消熱毒、研塗癰腫、可排膿、又攻水腫、除消渴、腳氣逢之有大効、

菉豆　寒味甘　野大豆類也

炒スコシテ用、除熱氣頭疼目暗、搗爲枕、霍亂將來止吐反、

〔宜禁本草乾五穀〕赤小豆　甘酸平、解小麥毒、久食令人枯燥、（鯉食闕經、人食體重）下水排癰腫膿血、利小便、止泄、下腹滿、水腫從脚起入腹則殺人、多煮爛、取汁服之、（又漬腹下）忌魚鮓、令消渴、爲粉餅油衣粘、食葉明目、和鯉煮食、治脚氣大腹水腫、辟溫病、布囊盛置井中三日、出擧家男十枚、女二十枚服之、婦乳難、小豆莽草爲末、醋和傳之、下乳汁、煮汁飮之、

菉豆　甘寒、圓小綠者佳、主丹毒煩熱風疹、和五臟、行十二經、消腫下氣、壓丹毒煩熱、厚腸胃、作枕明目、治頭風頭痛、

白豆　甘平、葉利五臟、下氣、嫩者可作菜、補五臟、益中、助十二經脉、調中暖腸胃、可常食、腎病宜食、殺鬼氣、

は用ひがたし、

〔齊民要術二〕小豆

小豆、大率用麥底、然恐小晩、有地者常須兼留去歲穀下以擬之、夏至後十日種者爲上時、（一畝用子八升）初伏斷手爲中時、（一畝用子一斗）中伏斷手爲下時、（一畝用子一斗二升）中伏以後則晩、（諺曰、立秋葉如荷錢、猶得豆者、指謂宜晩之歲耳、不可爲常矣、）熟耕耬下以爲良、澤多者耬耩漫擲而勞之、如種麻法、（未生白背、勞之極佳、）漫擲犂䊵次之、耩（上用反）種爲下、鋒而不耩、鋤不過再、葉落盡則刈之、（葉未盡者、難治而易濕也、）豆角三靑兩黃、拔而倒竪籠叢之、生者均熟、不畏嚴霜、從本至末、全無秕減、乃勝刈者、牛力若少、得待春耕、亦得稀種、凡大小豆、生旣布葉、皆得用鐵齒鏂楱、（俎候切）縱橫杷而勞之、

雜陰陽書曰、小豆生於李、六十日秀、秀後六十日成、成後忌與大豆同、

氾勝之書曰、小豆不保歲、難得、椹黑時注雨種、畝一升、豆生布葉鋤之、生五六葉又鋤之、大豆小豆不可盡治也、古所以不盡治者、豆生布葉、豆有膏、盡治之則傷膏、傷則不成、而民盡治、故其收耗折也、故曰、豆不可盡治、養美田、畝可十石、以薄田尚可畝取五石、（諺曰、與他作豆田、斷言豆美可惜也、）

龍魚河圖曰、歲暮夕四更中、取二七豆子、二七麻子、家人頭髮少許、合麻豆著井中、呪勅井使、其家竟年不遭傷寒、辟五方疫鬼、

〔農業全書二五穀〕菉豆（いなかにてはまるめと云）

綠色なるゆへ菉豆と名付るとなり、農家是を多く作りて粥にし、飯にも合せ、餌（だんご）とし、炙（あぶりもの）とす、或すりて粉とし、餅となすべし、又酒に造るべし、其外餅のあれによし、味甘く、藥の毒をとり、性のよき物なり、種る地の事、肥過たるを好まず、糞をば用ゆべからず、四月に蒔て六月に收む、其たねを蒔て八月に收む、此ゆへに農人是を二なりともいふ、又菉豆をもやしにして味甚よし、

〔菜譜下〕菉豆　農政全書曰、粒大而色鮮者爲官綠、皮薄粉多、粒細而色深者爲油綠、皮厚粉少、又曰、粥

小豆栽培

〔延喜式 内膳 三十九〕耕種園圃

營小豆一段、種子五升五合、總單功十三人半、耕地一遍、把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理一人、畦上作二人、五月下子半人、芸二遍四人、採功二人、打功二人、

〔農業全書 五 二〕赤小豆

赤小豆是又色々あり、赤白緑の三色、尤形の大小色づき所により品々おほし、中にも小粒のほそき赤小豆を專種る事なり、小豆は李に生ずとて、すもゝのさかゆる年、小豆よく實るものなり、うへて六十日にして花咲、又六十日にして熟する物なり、種る地の事、大かた麥跡を用ゆべし、是も夏秋二色あり、夏小豆は麥跡は遲し、畑餘計あるものは、去年の粟跡を用ゆべし、又秋小豆は夏至の後十日過て、うゆるを上時とし、土用の入を中時とし、同じく半を下時とす、是を過ればをそし、麥跡にてもかきこなし、磽地ならば少灰糞を用ゆべし、種子を凡一段に二升、或二升五合、横筋を切ても、又ちらし蒔にても、薄くむらなく、さかへ茂りて後、枝葉のつき合ざるを好む物なり、中うち芸り二遍ばかりして、葉こと〴〵く落て後ぬき取べし、小豆は三青四黄と云て、さやの三つはいまだ青く、四つ黄なる時、ぬき取といへども、小豆は霜にあふまで置ても落る事なし、本より末まで粃なくよく實る物なれば、勝手にまかせて取收むべし、又椹黑き時、雨の後小豆を種るとも云なり、又春蒔て夏熟し、さやの黑きばかりを、さゝげをもるごとく段々もりてとるあり、常の小豆に味はおとれり、是を夏小豆と云なり、又一種蟹の目小豆とて、其粒細ながく、蟹の目に似たり、是はつる長く、かきや竹などにはゝせ、糞養によりてことの外さかへはびこり、實り多き物なり、味は秋には劣れり、又緑色の物あり、是又味ひよからず、蔓長くそらに榮へ、土地の費すくなく、實り多き事を好む者は、是を作るべし、又白豆(しろあづき)あり、菉豆(ろくづ)のごとくにして子長し、四五月種るのよし、本草に見えたり、白豆なまりてさゝげと云はあやまりなり、總じて小豆は八新の內の一種にて、出來代りて後は性あしく味もよからず、古き

有近代未患痘瘡之災、收畜作常食以預防毒氣、故毒此皆然焉、

〔和漢三才圖會百四菽豆類〕綠豆　俗云文豆、又云不宇止字、○中略

按綠豆類顆、有利小便消水腫之功、性寒凉多食則瀉下也、脾胃虛弱者最不宜食、赤小豆亦同、蓋此與本草有異矣、豈譬淺盛注水浸、一二夜生白芽長數寸、

〔重修本草綱目啓蒙十七菽豆類〕綠豆　ブンドウ　ヤエナリ東國　トウロク同上　マサメ奥州　アヲアブキ阿州　フタナリ雲州　サナリ備前　バヽコロシ同上　バコロシ同上　ブドウ同上　トウゴ泉州　カフモリ豐州　アブキブンドウ防州

苗ハ赤小豆ニ似テ小ク、莢モ亦相似テ小ク、粒モ亦小ナリ、正綠色ナル者ハ官綠也、一名明綠、事物異名綠色ニシテ褐ヲ帶ル者ハ油綠ナリ、一名灰綠、事物異名共ニ夏ヨリ秋マデ斷ヘズ實ノル、又早ク種テミノリタルヲ再ビ種ユレバ其秋又實ノリ、一年ニ二度實ノル故ヤエナリト云、集解ニ早種者呼爲摘綠ト云ハ、フミブンドウナリ、遲種呼爲拔綠ト云ハ、ヒキブンドウナリ、此粉ヲ藥用トス、綠豆粉ト云、方書ニ眞粉ト云ハ、眞ノ綠豆粉ノ略ナリ、一名豆粉事物異名解毒、同上

〔成形圖說十八五穀〕二成豆（フタナリ）大和風土記綠豆即是

二番早成豆（フタヘヤナリ）、八重成豆、眞小豆（マアヅキ）、本は麻末を書ける也加通毛利、粉豆、本草粉豆より字に轉れり菉豆、字に宛然綠の面文ある故也綠豆、圖實本綱、時珍云、綠以色名也、舊本作菉者非矣、綠小豆、綱目名引食經植豆、綠に小綠豆中の大なる者也官綠、粒大にして色鮮なる者なり油綠、粒小にして色光ある者也摘綠、一名摘角綠、早く種て一時に摘取る者也、拔綠、一名拔角綠、遲く種て一時に拔取る者也、以上綱目及授時通考、明綠、灰綠、以上群芳譜　書名カテイアンボーン、

此もの一歳に再び蒔て實を收るゆゑ、二成（フタナリ）といふ、八重成も夏秋頻に實成を以て名けたり、毎日に成實を摘採ものぞ、若怠ぬれバ莢腐、子黴（カビ）して用に中らず、○中略此もの即小豆の青きにて、又種の早晩あり子の巨細あり、色の淺深あり、各處の方名一（オナジ）からず、

〔物類稱呼 三生植〕綠豆ぶんどう　東國にてやへなりとよび、又とうろくまめ共よぶ、畿内にてぶんどうといふ、遠江にてとうごと云、備前にてさなりといふ、伊勢にてかつもりといふ、尾張にて云ぶんどうあづき、又十六寸などいふは別種也、

〔庖厨備用倭名本草 二蔬〕綠豆　倭名抄ニ綠豆ナシ、赤小豆條下ニ、綠小豆トイヘルハ、此綠豆ナルベシ、多識篇今案ニフントウ、元升升〇向曰、關東ニテハヤヘナリト云、京師ニテフントウト云、西國ニテハフタナリト云、考本草、三四月ニ種ヲ下シ、苗ノ高サ一尺バカリ、其ノ葉小ニシテ毛アリ、秋ニ至テハ小花ヲ開ク、莢ハ赤豆莢ノ如シ、粒アラク色アザヤカナルヲ官綠トス、皮ウスクシテ粉多シ、粒小ニシテ色フカキヲ油綠トス、其用甚ヒロシ、粥ヲナシ、飯ヲナシ、酒ヲナシ、炒食ヲナシ、麪食シ、磨シテ餅ヲトリテ、水ニタテスマシテ、粉ヲ取テ餌ヲナシ、餻ヲナシ、素餅ヲ作ルベシ、食中ノ佳品也、又モヤシヲナシテ、菜中清潔ノ味也、又牛馬ニ與ヘテヨシ、眞ニ濟世ノ良穀也、

〔大和本草 四穀〕綠豆　倭名ブンドウ、ヤエナリ、夏ヨリ秋マデシキリニヲヒ〱實ナル、又早クウヘテ早ク實ノリタルヲマケバ、其秋又實ノル、一年ノ内二度ミノル、故ニヤエナリト云、他豆ニ異ナリ、能小便ヲ通ジ熱毒ヲ消シ、一切ノ毒ヲケス、殊ニ酒毒燒酒ノ毒、附子ノ毒ヲケス、粉ヲ水飛シテ爲餻、水綠トス、水綠ハ時珍食物本艸註曰、索粉トス、凉無毒、凉血解諸毒ト云ヘリ、宋ノ陳達叟ガ蔬食譜、碾破綠珠、撒成銀縷ト云シハ、水綠ナルベシ、又水ニヒタシテ白芽ヲ生ジタルヲ煮テ、豆油及醋ニ和シ蔬トナシテ食ス、食物本艸註云、脾胃虚寒之人不宜久食、綠豆ハ榧子ノ殻ニ反ス、害人ト本艸ニイヘリ、倭俗ニ云、綠豆ト蕨粉ト同食スレバ、腹ハリテ死ス、種樹書曰、種蒜豆地宜瘠、

〔本朝食鑑 一穀〕綠豆 訓如字、或稱二也惠奈利、京俗稱二文豆、

集解、三四月下種、苗高尺許、葉小而有毛、至秋開小花、莢如赤豆、粒亦如赤豆小而色綠、或有薄皮粉多者、或有厚皮粉少者、色亦有淺深、作餅作餌、其用處亦與赤豆略同、又以水浸濕生白芽、采之作蔬食亦

緑豆

増、白豆ヲシロアヅキニ充ツルハ穏ナラズ、時珍ノ說ニ、小豆ト云ハ、小粒ノ豆ヲ指ス、赤小豆ノコトニ非ズ、俵俗赤小豆ヲ單ニ小豆ト稱スレドモ、唐山ニテハ小豆トハ言ハズ、且ツ頌ノ說ニ、作醬作餻ト云ヘドモ、白アヅキハ豆腐ニ作ルベキ者ニ非ズ、本條ハ尋常ノ大豆ノ白色ナル者ヲ云、ゴゼンマメノ類ナルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙十七穀豆〕赤小豆

増、一種シロアヅキト呼モノアリ、形狀常ノ赤豆ノ如クニシテ白色ナリ、上品ノ餡ニ用ユ、コレヲ漢名白赤豆ト云、汝明縣志十一卷云、赤豆外有白色者、俗呼白赤豆ト是ナリ、

〔成形圖說十八五穀〕阿豆佐〇中略

白小豆、豐乃駿、馬鹿小豆の種の目と同じく、物異なり、石綿豆、シヤガムス者、石綿の香色、サホーヌの轉音なり、豆斛を臍状の目て呼べる耳、〇中略

此もの亦二種あり、荷葉赤小豆に似て稍大也、農人臍の目と呼べり、一種ハ莢長くして色に嬌ふ、能く油膩を除く、皆四五月に蒔べし、凡白小豆ハ米に和煮ハ早熟る也、

〔多識編三穀〕緑豆、今案布。牟。登。宇。也。倍。都。利。

〔和爾雅六菽穀〕緑豆(ブンドウ/ヤヘナリ)菉豆

〔朱氏談綺下菽穀〕緑豆ヤヘナリ菉豆同、

〔農政全書二十六樹藝〕菉豆、菉豆本作綠、以其色名也、粒大而色鮮者、爲官綠、皮薄粉多、粒細而色深者、爲油綠、皮厚粉少、早種者、呼爲摘綠、以次摘取、晩種者、呼爲拔綠、以水浸濕、生白芽、爲菜中佳品、

〔日本釋名下菽穀〕緑豆(マメ)　まハ丸き也、さは小也、めは豆也、丸く小なる豆也、又やゑなりとも云、やゑハ彌重也、なりハみのる也、一年に二度みのるもの也、故にやゑなりと云、

〔東雅十三穀蔬〕豆マメ〇中略　緑小豆といふは卽緑豆、俗にブンドウとも、ヤヘナリともいふもの是也、或說にアンドウとは餡豆也、其餡の餌となす宜しきをいふ、ヤヘナリとは八重生なり、其早く種るしの、飢に備むべきをいふと云ひけり、

白豆

の節といへども、莢子の脱散ことなし、莖根共に拔き、一時に實を收(トリ)をさむるなり、

〔多識編 三穀〕白豆、今案志呂阿豆岐、俗云由岐乃志多、

〔和爾雅 六米穀〕白豆(シロアヅキ/ユキノシタ)(飯豆同)

〔庖厨備用倭名本草 二穀豆〕白豆(ハクヅ/シロササゲ)　倭名抄白豆ナシ、多識篇今案ニシロアヅキ、俗ニ云ユキノシタ、元升曰、俗ニシロサヽゲト云アリ、是ナルベシ、倭名抄ニサヽゲヲ大角豆トカケリ、又白角豆ト云アリ、此シロサヽゲヲ云カ、考本草、一名飯豆、其苗嫩キヲ菜トナシテ食スベシ、生ニテ食スルモヨシ、豆ノ色白シ、又土黄色モアリ、大サ綠豆ノ如クニテ長シ、醬ヲ作リ腐ヲ作リテ尤ヨシ、粥ニシ飯ニシテ食シテヨシ、四五月ニ種ヲ下ス、苗葉皆赤豆ノ如クニテ、略尖リタリ、食スベシ、此說ヲミレバ、白サヽゲウタガヒナシ、

〔大和本草 四穀〕赤小豆(中略)〇　白豆アリ、白アヅキナリ、苗葉莢皆赤小豆ニ似タリ、サヽゲト訓ズルハアヤマレリ、二種アリ、一種ハ籬ニノボル、蔓長シ、一種ハ蔓短シ、赤小豆ノ如シ、民俗鹽ノ目ト云、

〔和漢三才圖會 百四穀豆〕飯豆　白豆　(俗云白小豆)
本綱、飯豆卽小豆之白者也、亦有土黃色者、豆大如綠豆而長、四五月種之、苗葉似赤小豆而略大、可食、莢亦似小豆、其豆(甘平)　補五臟、調中、助十二經脈、腎病宜食之、
一種蔓豆。　其葉如大豆、可作飯作豆腐、亦其類也、
按白小豆和米煮之、早熟不如赤小豆難熟、而味不劣、故名飯豆乎、然爲粥及饅色不佳、故人不好之、

〔重修本草綱目啓蒙 十七穀豆〕白豆　シロアヅキ　シヤボンマメ　一名白小豆(天工開物)　白豆(千金方)
豆屑(同上)　(豆屑ノ名)
白色ナルアヅキナリ、今澡(アラヒコ)豆ニ用ユ、故ニシヤボンマメト云、油ヲ落ス者ヲ皆シヤボント云、又饅頭ノシロ餡トス、

ブモノヲ用ユ、一名尾張アブキ、大納言アブキ、粒小ニシテ微黒ヲ帶、時珍赤黯色ト云ル者ナリ、コレヲ赭肝赤（本綱集解）ト云、本草彙言ニハ、以緊小而赤、黯有黒斑者入藥最良ト云、コレハウ。ブ。ヲ。ア。ブ。キ。ナリ、稍大而鮮紅、及紫紅色者、名赤大豆、僅可供食用、幷不療病ト云リ、又粒小ニシテ淡紅色ナルヲキ。ダ。ア。ブ。キ。（江州）ト云、食用ニ良ナリ、饅頭ノ餡ニ用ユルハ、泉州日。根。ア。ブ。キ。ヲ良トス、粒大ニシテ色赤ク兩頭平ナリ、一種粒長小ニシテ白目ノ長キヲ、カ。ニ。ノ。メ。ト云、一名ツルアブキ、ヘイハクアブキ、（勢州）蔓長ク延キ、黄花穗ヲナシテ美クシ、瓶花トナスベシ、莢モ多ク垂レ狹長ナリ、漢名豇豆（[illegible]）ト云、又夏アブキノ形ニシテ、淺青ニシテ光リ、小黒斑アルヲ、ネ。コ。ノ。メ。（江州）ト云、又小ニシテ深黒色ナルヲ、ク。ロ。ア。ブ。キ。ト云、一名シヽタクワズ、味良ナラズ、

（成形圖説五十八）同豆僞（中略）○（中略）

小豆に赤春小豆、秋小豆、早晩の二種あること、大豆に異ならず、且小豆の同類なるも亦多なり、（中略）○又夏小豆あり、麥の跡に蒔てハ後れぬ、早麥の隴の中に蒔て、麥かりとりて卽土を壅べし、或ハ菜蔬叢青成ハ甘藷の下にうゝべし、植て六十日にして莢吐、又六十日にして子熟、而莢の黒くなるを、隨に時々摘採べし、しかせざれバ莢に徹して地に委去ぬ、

○八。成。小。豆。　○蛩。小。豆。

此もの粒至て細く、色微綠なり、彼岸比播てやがて竹籬に引べし、地に施てハ實よからず、子を結ぶ最乘し、熟なバ速く摘收れ、

○蟹。乃。目。　○馬。蜂。小。豆。（其子淺紫色、或淺黄色）あり、形細長し、（中略）

○紫。小。豆。

此もの瘠土樹陰を擇ず、色に隨て能滋ふ、下品といへども其熟やすきが爲に、今人多く作れり、されど皮厚く煮がたし、洗粉に做べし、又一種蔓に延ものあり、巖岡にも作るべし、又此ものハ霜降

作葛餅之餡、或煮熟抹餅、此皆所毎用也、近世用赤豆粉浸水洗衣服及婦人面脂、能除油垢、呼稱志也
保牟、又外有同名、而木患子殼、此亦能除垢者也、

〔和漢三才圖會　百三菽豆〕赤小豆　荅音　赤豆　紅豆　葉名藿　花名腐婢　和名阿豆木中略○
按赤小豆有早晩、大抵土用中撒種、九月收之、其粒大而深紅色者、俗稱大納言、阿州石川郡之產爲勝、
此爲粥及飯所宜也、如陳久者煮之難熟、試之以息吹採之色鮮紅者乃新也、爲末盛袋、婦人洗面、能去
脂垢甚佳、凡赤小豆不易煮、加茶煎汁同煮則早熟、鼠嚙咬人永急食赤小豆凡被瘋犬、煮赤小豆令食之則易愈、或
云治狗諸病、

小豆初見

〔日本書紀　一神代〕一書曰、中略○天照大神復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲
牛馬、中略○陰生麥及大豆小豆、○天熊人悉取持去而奉進之、于時天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生
可食而活之也、乃以粟稗麥豆爲陸田種子、

〔古事記　上〕速須佐之男命、中略○殺其大宜津比賣神、故所殺神於身生物者、中略○於鼻生小豆、下略○

小豆種類

〔本草和名　十九米穀〕赤小豆、葉名藿、出蘇敬注鹿小豆、色赤小珂豆、似赤小豆而小靑小豆、甘黑小豆、紫小豆、白小豆、黃小豆、
緑豆、巳上入種、雜要、

〔王氏農書　二十入穀譜集〕小豆
廣雅曰、小豆荅也、本草經曰、張騫往外國得胡豆、今世有小豆、有菉豆、赤豆、白豆、江豆、營豆、皆小豆類
也、

〔重修本草綱目啓蒙　十七菽豆〕赤小豆　アカアヅキ和名鈔　小角草和書　サヽリグサ歌書　アヅキ
一名紅小豆本草原始　小赤通雅　赤菽上疏
アヅキニモ夏秋ノ二種アリ、早ク熟スルヲナツアヅキト云、粒小ナリ、漢名麻熟、授時通考秋ニ至テ熟
スルヲ秋アヅキト云、粒大也、漢名秋赤豆、群芳譜夏秋二品共ニ數種アリ、藥ニハホコリカヅキト呼

赤小豆〈〇和名抄中略〉大納言〈〇中略〉〈註〉胡類小豆、〈一の名は黒小豆にて大なる者也、是〉字使奈使て、〈新撰字鏡、苔小豆とあり、訓み詳ならず、〇中略〉

阿豆伎とは赤解也、色赤而支之穂熟する故なりと、書紀注にいへり、今按に、草にして某の伎と呼者衆し、其幹の樹植するを従て解に似たり、小豆、豆角、忘闘の董の如きしかり、〈和名抄に、此等の種には伎といふ〉に、〈皆木の字を書つ、鈔と同じ、又は、皆の字を書し、同類のごとあり、〉さらば小豆も赤粒木などの義にや、

〔本草和名 十九木〕腐婢〇〇小豆花也、和名阿豆岐乃波奈、

〔倭名類聚抄 十七穀〕小豆〇中略 〈漢語抄云、〉蘇敬本草注云、腐婢〈和名阿豆岐乃波奈〉小豆花名也、

〔伊呂波字類抄 阿植物〕腐婢〈小豆花也〉 小豆花也〈アヅキノハナ〉

〔宜禁本草 乾玉〕腐婢 辛平、治陰不起、主消渇病頭痛、明目散気満不能食、治小児丹毒熱腫、主寒熱、

〔和漢三才圖會 百四穀〕腐婢 小豆花 〈和名阿豆木乃波奈〉

腐婢〇〇有三〇物〇、一葛花也、一此小豆花也、一海邊小樹也、〈木狀如梔子、莖葉多曲、其氣似腐臭、〉一名同物異也、此所謂腐婢乃赤小豆花也、

気味〈辛平〉 飲酒不醉〈小豆花葉陰乾百日、爲末、水服方寸匕、或加葛花等分、〉

〔本朝食鑑 一穀〕赤小豆〈訓阿豆木、〉

集解、赤小豆亦有早晩、四五月下種、七八月收之者早也、六月下種、九十月收之者晩也、有形緊小而赤者、有淡紅紫黒白青者、有稍大深紅者、此俗稱大納言、味亦最美也、赤小豆生苗高尺許、枝葉似大角豆、葉微圓鋭而小、至秋開花、亦似大角豆花而小、黄白有光、似褐色、其臭有腐氣、一名腐婢、和名阿豆岐乃波奈、結莢長二三寸、比緑豆莢稍大、皮色初青後有微白帶紅、或青黄或黒而收之、凡赤豆煮則赤紅變作紫黒色、今本邦所用者同、與飯同煮、與粥同煮、與糯飯同煮、或煮熟擂爛、調糯葛粉、黒白砂糖、釜蒸等物、造餅、此號羊羹、〇中略 或煮熟擂爛、合黒砂糖、和白鹽少許、又合白糖、亦有、供作饅頭餡、又作糯餅之餡、

小豆名稱

〔本草和名十九米穀〕小豆一名荅、顆豆、䜺豆、江豆、野豆、和名阿加阿都岐、

〔倭名類聚抄十七豆麥類附〕小豆　本草云、赤小豆、和名阿加安豆木　崔禹錫食經云、黒小豆、紫小豆、黄小豆、緑小豆、

〔箋注倭名類聚抄九穀〕本草和名赤小豆條云、鹿小豆、小瑪豆、青小豆、黒小豆、紫小豆、白小豆、黄小豆、緑豆、已上八種出崔禹、此所引節是文、而青白二種似不可省、其緑小豆彼引作緑豆、恐誤脱、說文、荅小尗也、本草稷米條陶注引董仲舒云、小豆一名荅、有三四種、李時珍曰、赤小豆以緊小而赤黯色者入藥、其稍大而鮮紅淡紅色者、並不治病、俱于夏至後下種、苗科高尺許、枝葉似豇豆、葉微圓峭而小、至秋開花、似豇豆花而小、淡銀褐色、有腐氣、結莢長二三寸、比緑豆莢稍大、皮色微白帶紅、三青二黄時卽收之、

〔伊呂波字類抄安植物附植物具〕小豆アヅキ　赤小豆アカアヅキ　顆豆　䜺豆　江豆　野豆　豋

〔運歩色葉集阿〕紅豆アヅキ、已上五名出二說文一、アカアヅキ、

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一あづき　あかとも　あか〳〵共

〔朱氏談綺下米穀〕赤豆アヅキ　紅豆色深紅ニシテ、小豆ヨリ大ナリ、日本ニ云唐アヅキ、唐山ニテモ食品不ㇾ夫、

〔段注說文解字一下艸〕荅小尗也、鍇注有二麻荅一、廣雅云、小豆荅也、假借爲二䜺荅一、从艸合聲、都合切、七部、

〔日本釋名下米穀〕赤小豆アヅキ　あは赤也、つきはとけ也、他の穀よりやはらかにして、煮てはやくとけやすし、又つきはもちなどにつくるなり、

〔東雅十三穀蔬〕豆マメ　中略　○小豆をアヅキといふは、アは小也、ツキはツムギといふが如し、中略　○其莢の小しきにして、角あるをいふ也、

〔成形圖說十八五穀部〕阿豆伎古事記、小豆也、

大炊寮納○中略

生大豆肆拾肆斛柒斗○中略 醬大豆二拾伍斛○中略 左馬寮秣大豆捌拾斛○中略

寛徳三年十二月廿九日 正六位上行權少屬縣宿禰○以下署名略

〔朝野群載 三〕對馬國貢銀記

對馬島者、○中略 全無田畝、只耕白田、或置諸租税、當此島以大豆爲正税、

〔教令類纂 初集八十八〕貞享四丁卯年十一月

定○中略

一關東方在大豆納之儀、米壹升ニ貳升代、永壹貫文に五石代之積、高百石に大豆は貳升掛り、在は壹斗掛り之積、向後高役ニ可相納、私領之上り地不同之所は、可爲右同斷、在大豆共ニ大分御入用有之年者、可有増減、但各別之子細有之歟、在大豆難納所は、前方御勘定所江可伺之、但伊豆甲斐陸奥出羽上方筋者、可爲有來通事、

〔拾遺和歌集 七物名〕そやしまめ 高岳相如

いさりせしあまのをしへしいづくぞやしまめぐるとてありといひしは

〔古今著聞集 六管絃歌舞〕樂所預小監物源賴能は、上古に恥ざる數奇の者也、玉手信近に順て横笛を習けり、信近は南京にあり、賴能其道の遠きをいとはず、或は隔日にむかひ、或は二三日をへだててゆく、信近ある時にはをしへ、或時は敎ずして、道路をむなしく歸るおりも有けり、○中略 ある時は又豆を苅所にいたりて、又是をかり、苅をはりて後、鎌の柄をもて、笛にして敎けり、

〔七十一番歌合 中〕卅五番 右 まめ賣

こひすればやせちのまめのさるなかせ涙の川は我ぞましける

〔時慶卿記〕慶長十年二月廿五日、晩ニ雷鳴入、夜ハ光帯タヽシ、初雷ナレバ節分大豆ヲ用、

萬壽二年七月四日　左少史小野朝臣奉政奉

〔延喜式三十七典藥〕凡供御乳、○中略乳牛七頭秣料、米大豆各日一斗二升、二升顧別

大豆產地

〔農家備要三〕大豆は稲田に用ひて最上の糞とす、間には其儘用ふるものあれども、此を能く煮熟して、一二夜を過ぎて用ふる時は、速に化爛して、別して效能あるべし、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

河内國三種、○中略黑大豆大五斗、

〔毛吹草三〕河内　大豆　伊豫　豆腐皮　豐後　豆腐皮

〔雍州府志六土產〕黑大豆　所々出、近江產爲勝、黑大豆之中、一種至小者、俗謂呑豆、每朝生呑之、則治痰鬻賈、悉在京師米店、莢豆惠牟豆部牟豆、悉在大宮三條南、

〔播陽群談十六名物土產〕阿部野大豆小豆　同郡生○東阿部野村ノ田圃ニ作リ、味勝テ宜、世ニ能以求之、諸方ニ種ヲ設ク、

〔浪花の風〕總じて豆類は都てよろし、乍去平豆江戶にて雁喰豆と唱ふるものは絕てなし、

〔百姓傳記十一〕大豆ヲ蒔事

常陸國ノ河邊大豆上々ナリ、坂東ガ總テ大豆能國ナリ、河邊大豆種ヲ諸國へ持來リ植ルニ、一年モ二年モ其性ニ出來テ、味ヒヨク取實アリ、皆夏豆ナリ、

大豆雜賦

〔令義解三賦役〕凡一位以下、○注略及百姓雜色人等、○注略皆取戶粟以爲義倉、○中略大豆二斗、小豆一斗、各當粟一斗、

〔朝野群載二十七諸國公文〕主計寮解　申返抄事

備前國應德二年雜米使正六位上行

年料白米仟佰漆拾伍斛

仁王經齋會供養料

僧一口別菓子料、略○中生大豆二合讀經料

九月九日節料　生大豆五位已上二把

〔古事談僧行三〕藤原大僧正ハ、近江國淺井郡人也、叡山戒壇ヲ依不合期、人夫エツカレザリケル比、淺井郡司ハ、相親之上、師檀ニテ修佛事之間、此僧正ヲ奉請、僧膳キコエムトテ、前ニテ大豆ヲイリテ、酢ヲ掛ケルヲ、僧正ナニシニ酢ヲバ懸成ト被問ケレバ、郡司云、溫時懸酢ツレバ、酢ムツカリトテ、ニガミテヨクハサマレ候也、不然バスベリテハサマレヌ也云々、

〔大草家料理書〕一のたあへ鱠は、酒のかすを能擂て、大豆の粉を入て、花鰹を擂てまぜて、魚に鮓を掛てあへる也、

〔爲房卿記〕康和三年七月七日早旦、向日飲大豆七枚小豆七枚、是例事也、避病之秘術、

〔牧民金鑑十一〕享保十八丑年月御書付

時疫流行の節、此藥を用ひて其煩をのがるべし、

一時疫は、大豆大つぶなるを能いりて壹合、甘草壹匁、水に而せんじ出し、時々呑てよし、右書面に出ル、○下略

〔延喜式圖書寮十三〕凡年料裝潢用度、○中略大豆五斗、細料

〔延喜式陰陽寮十六〕凡造曆用度者、○中略糊料大豆三升三合、

〔朝野群載陰陽道十五〕陰陽寮解　申請寫來年料曆用物事

合曆百七十九卷○中略

大豆五升○續紙料中略

右寫來万壽三年曆料、用度雜用料、依例陰陽寮所請如件

則其用十之一二、惟言白不言黄、而黄白混作白豆也、

〔本草和名 十九米穀〕大豆黄卷 仁諝音丘萬反、崔禹錫曰、以大豆為蘗、牙生便乾之名也、和名末女乃毛也之、

〔醫心方 一〕大豆黄卷 和名末女乃毛也之

〔藥經太素 下〕大豆黄卷　平味甘

黑大豆ヲ蘗、一寸生タル時干ト云、能炒テ用、

〔宜禁本草 五穀 乾〕大豆黄卷　甘平、以大豆為芽長五分、便乾之煞用、主濕痺筋攣膝痛、胃氣結積、去黑皯、潤澤皮毛、益氣、

〔和漢三才圖會 百四 菽豆〕豆蘗　黄卷　萬米乃毛夜之

本綱、黑大豆為蘗、芽生五寸長、便乾之煞過服食、　氣味 甘平　治濕痺筋攣膝痛、益氣宜腎、治周痺、在二血脈之中一、

〔重修本草綱目啓蒙 十七 菽豆〕大豆黄卷　クロマメノモヤシ　一名卷蘗 本草蒙筌　黄卷皮 同上　大豆卷 千金方　豆牙 本草原始

黄豆ノモヤシハ、黄藥山ニテ卷煎ト云、油アゲニシテ料理ニ用ユ、薩州ニテモ常ニ用ユ、麥芽ノ如ニ製スレバ、腐リテ生ジ難シ、豆ヲ地ニ下シテ、芽ヲ採ヲ佳ナリトス、又萬ノ上ニ豆ヲ撒シ、上ニ二萬ヲ覆ヒ、流水中ニ置ケバ生ジヤスシト云、食用ハ皆黄大豆ノ芽ナリ、藥用ハ黑大豆ノ芽ナリ、

〔庖丁聞書〕一向の菜は五種の削物、○中略 具足餅の時は、大根の香の物、田作、甲の大豆を用ゆ、一甲の大豆とは萌したる豆也、

〔延喜式 三十二 大膳〕鎭魂 宮内省、東宮亦同、

大直神一座　座別○中略 大豆一合八勺七撮、(中略)已上七種神四座菓○餅○料○

〔延喜式 三十三 大膳〕正月最勝王經齋會供養料○略 僧別日菓○菜料○○中略 大豆二合五勺、餅料菜料一合、五勺、

崔寔曰、正月可種䜣豆、二月可種大豆、又曰、二月昏參夕、杏花盛、桑椹赤、可種大豆、謂之上時、四月時雨降、可種大小豆、美田欲稀、薄田欲稠、

〔康頼本草 上米穀〕生大豆　味甘平、陰乾、和マメ、九月採之用之、於保末女、

〔宜禁本草 乾五穀〕黒大豆　甘平、煮汁解烏頭丹石諸藥毒、久服身重、炒爲屑、甘主胃熱、去腫除痺、消穀止脹、炒熟合猪肉不可食、十歳以下小兒忌食、　白大豆不入藥用、炒黒煙未斷、及熱投酒中、主風痺癱緩、口噤、産後諸風、食罷生、去心煩熱風恍惚、明目鎭心、久服好顔色、變白不老、烏髭髪、煮大豆黒者、去豆煎令稠、傳髪、煮食塞下熱氣腫、壓丹石煩熱、消渇脊水脹、汁解諸藥毒消腫、和甘草煮湯、去一切熱毒氣、卒失音生豆一升、靑竹筭子四拾九枚長四寸闊一分和水煮熟、日夜二服瘥、

〔本朝食鑑 一穀〕大豆訓末米

釋名菽本作尗 眞菽、音叔、和名末米、俗作荳、和名末米加豆、今大(平野)按、李時珍曰、角曰莢、葉曰藿、莖曰萁、又曰、大豆菽也、小豆荅也、今本邦以黄白大豆作用者多、以黒大豆作用者少、故今以黄白大豆爲先、以黒大豆次之、

集解大豆有黄白青赤黒褐斑數色、今本邦以黄白大豆造味噌醤油、作旦夕之用、有夏大豆秋大豆、而黒白倶同、夏大豆者三月末下種、七月采實、秋大豆者五月初下種、八九月采實、其苗高四五尺、葉團有尖、秋開小白花、成叢結莢、長寸餘、莢角肥大似黒豆、其嫩時作蔬食、味甘美、經霜乃枯、田家種于稻田畦間、亦有本邦自古用大豆者不減稻麥、不獨人食、爲馬食亦多、故田圃之外庭園別墅、亦爲糀養種之、采實後莖葉令馬食之、或多種采莖葉以貨之、俗曰苅豆、江東最多、不如京師、濃尾、江南、江西之美、

〔本朝食鑑 二 華和異同〕大豆

大豆有黒、白、黄、褐、青、斑數色、惟言黒豆名烏豆、可入藥及充食作豉、而專用之爲勝、其黄白豆炒食作腐造醤笮油、盛爲時用而已、本邦常造味噌醤油專爲日用、故以黄白爲勝、黒者入藥作豉作蔬、然比黄白

き、一二粒づゝうへ、灰にておほひ置たるも、取み多し、二月蒔て四月はや實るあり、是を梅豆と云なり、煮て菓子によく、料理にめづらしき物なり、都の近く、又は城下など、凡て人多き大邑に遠からぬ所にてはよく作り、青豆にてうるべし、又大豆を芸る時、雨露のあるおりには、必手を觸べからず、葉に虫の付ものなり、

〔齊民要術　二〕大豆

春大豆、次植穀之後、二月中旬爲上時、（一畝用子八升、）三月上旬爲中時、（用子一斗、）四月上旬爲下時、（用子一斗二升、）歲宜晚者、五六月亦得、然稍晚稍加種子、地不求熟、（秋鋒之地、卽摘種、地過熟者、苗茂而實少、）收刈欲晚、（此不零落、刈早損實、）必須耬下、（種欲深、故豆性強、苗深則及澤、）鋒耩各一、鋤不過再、葉落盡然後刈、（葉不盡、則難治、）刈訖則速耕、（大豆性炒、秋不耕、則無澤、）種茭者用麥底、一畝用子三升、先漫散訖、犁細淺䂎（匹豆反）而勞之、（旱則萁堅、葉落稀則苗莖不高、深則土厚不生、）若澤多者、先深耕訖、逆垡擲豆、然後勞之、（澤少則否、爲其浥鬱不生、）九月中候近地葉有黃落者速刈之、（葉少不黃必浥鬱、刈不速、逢風則葉落盡、遇雨則爛不成、）

雜陰陽書曰、大豆生於槐、九十日秀、秀後七十日熟、豆生於申、壯於子、長於壬、老於丑、死於寅、惡於甲乙、忌於卯午丙丁、

孝經援神契曰、赤土宜菽也、

氾勝之書曰、大豆保、歲易爲、宜古之所以備凶年也、謹計家口數、種大豆、率人五畝、此田之本也、三月榆莢時有雨、高田可種大豆、土和無塊畝五升、土不和則益之、種大豆夏至後二十日尚可種、戴甲而生、不用深耕、大豆須均而稀、豆花憎見日、見日則黃爛而根焦也、穫豆之法、莢黑而莖蒼、輒收無疑、其實將落反失之、故曰、豆熟於場、於場穫豆、卽青莢在上、黑莢在下、氾勝之區種大豆法、坎方深各六寸、相去二尺、一畝得千六百八十坎、其坎成、取美糞一升、合坎中土、攪和以內坎中、臨種沃之、坎三升水、坎內豆三粒、覆上、上勿厚、以掌抑之、令種與土相親、一畝用種一升、用糞十六石八斗、豆生五六葉鋤之、旱者溉之、坎三升水、丁夫一人可治五畝、至秋收、一畝中十六石、種之上土、纔令蔽豆耳、

は、尤よくさかへ、枝も多く付て、足もとよりさや多くつき、節の間もしげく、よく實るものなり、又早過たるはつるとなりて、さや小さく實少し、又時にをくれたるは實短く、本にさやならず、又大豆は槐に生ずとて、ゑんじゆの木のさかゆる年が、豆のよき物と、農書に記せり、凡蒔て百廿日にて刈收る物なり、又夏大豆を蒔時分の事、杏の花ざかり、桃の赤き時、又四月雨の後、大小豆を蒔べし、ともによし、秋大豆を夏至（五月の中なる）の後廿日ばかりの比種べしとも云り、たねにより所により、早晩段々ある事なれば、一概には定めがたし、第一は其所のためし、心おぼえして、いか様ちと早きをよしとす、中うちする事、大豆生出て、甲を戴て出る時、深くうつべからず、長じて後中うちせば、根に土をうちおほふべし、旱の時根の下に日のとをらぬためなり、同じく刈時分の事、大豆は葉に熟すとて、末のさやは少々青く、下は大かた黒くなりたる時、晴天を見てぬきとり、たばねさかさまに立て、根をからせば、さや早く枯る物なり、よく干たるを見て打て收むべし、但おほく作るものは、そばや胡麻を干ごとく、やねをふく様に下地を作り、日のよく當るやうにふき置て、よく干たる時打てとるべし、積置て久しく日數をふれば、損ずる物なり、もし又日和のあしきに取込てつみ置ば、くさる物なり、此時はこき落して擴げをくべし、又豆は花の咲時、旱をにくむ物にて、花黄色になりて根こがるゝ物なるゆへ、根の土のかはかぬ様に、兼て心得してうゆべし、又大豆を區うへする法は、畦作りし穴を深さ廣さ各六寸ばかりにほり、糞と土とかきまぜをき、うゆる時、其穴の中に水多く入れ、水乾て後、能程に糞土を入れ、豆を三粒其中にうゑ、又右のこゑ土を上におほひ、手にてをし付、土と思ひ合せ置べし、但此區と區との間、各一尺餘りにすべし、かくのごとくすれば葉へふとる事、常の三倍もあるものなり、土地のすくなき所にてする法なり、總じて此まちうへは、手間入て多く作る事成がたければ、がんぎを深く切糞し手入をよくし、薄くむらなく作れるは、區うへとさのみ替る事なし、又杖のさきにて、五七寸に一つ二つづゝ、あなをつ

大豆栽培

スペカラズ、

〔延喜式 內膳 三十九〕耕種園圃

營大豆一段、種子八升、總單功十三人、耕地一遍、把犁一人、牛一頭、料理平和一人、畦上作二人、殖功二人、三月 芸一遍二人、採功二人、打功二人、

〔農業全書 五 二 菽〕大豆

大豆色々あり、黃白黑靑の四色あり、其外つぶの大小、形のまるき平き、其外さま〳〵多、又つる大豆あり、又かき色なるもあり、此內黃白の二色を、夏秋の名をつけて專作る事なり、赤土は大豆に宜しとて、豆の類はあか土に取分よき物なり、種る時分の事、三月上旬を上時とし、四月上旬を下時とす、秋大豆は五月中旬より六月上旬まで種べし、但其年の節に隨て、五日十日は斟酌あるべし、種て肥地の深きをば好まず、でき過て實りよからず、又地のこなしの餘りくはしきもよからず、先大かた夏大豆は麥の中にうへ、秋は麥跡にうゆるをよしとす、麥の中に筋をふかくかき、一段に凡種子五升まくを中分とす、是も肥瘠により、やせ地は少あつく蒔べし、又瘠地に大豆をうゆるには、灰を用てうゆべし、豆にはならびなきこゑなり、いかにもむらなく蒔て、土を覆ふ事は深くすべし、豆は極熱の時分、底土のしめり氣に根先とゞきて、其うるほひにより實る物にて、地淺き沙地は、旱のつよき年は必痛み枯る故、蒔付る時其心得して少深く蒔べし、さて中うち芸る事二度、但麻は地を芸り、豆は花を芸るとて、麻は草のいまだ目に見えざる內に早芸り、豆は花を見ても、猶芸りてくるしからざるものなり、又豆は初め終り地のこしらへより、中うち芸るに至るまで、手入の餘り委しく念比なるは、却てよからぬ物なり、豆のにた蒔とて、他のうへ物にかはりて、大豆ばかりはぬれ土に蒔たるがよく生長し、蒔て其まゝよく生るものなり、又大豆を每年同じ地にうゆべからず、いや地を嫌ふものなり、蒔時分其所のよき時節に蒔合せざれば、實りよからぬ物なり、時分よく蒔たる豆

毛豆

ニシテ黒シ、粒コマカナリ、霜後ニ熟ス、醤ヲ作ルベシ、元升曰、(弁〇陶)此說ヲミレバ、此豆小ニシテ黒シト云、今俗ニ黒豆ヲ生呑シテ、痰ヲ治シ精氣ヲマスト云ハ、粒コマカニシテ圓キ黒豆ナリ、此穭豆ヨク似タルモノナリ、

(大和本草 四 穀)大豆(中略〇)穭豆タンキリ豆ト云、野豆也、三葉アリ、ホドノ葉ニ似テ蔓生ス、野ニ多シ、其子ハ黒大豆ノ如クニシテ小ナリ、尤ナシ、本草ニノセタリ、救荒本艸ニ載ス、勞豆生平野中、莖蔓延附草木上、葉似黒豆葉、而窄小微尖、開淡粉紫花、結小角、其豆似黒豆形極小、味甘、是穭豆ト同物ナル歟、

(和漢三才圖會 百 穀 三)穭豆　山黒豆　(俗云痰切豆〇中略)

農政全書云、山黒豆生山野中、苗似家黒豆、毎三葉攅生一處、居中大葉如菉豆葉、傍兩葉似黒豆葉微圓、開小粉紅花、結角、比家黒豆角極痩小、其豆亦極細小、味微苦、

按穭豆、出於金剛山者良、相傳能断痰、故名痰切豆、然本草不載、然功用未知可否也、甚小不利、爲食用、故穭之者希、

(重修本草綱目啓蒙 十七 穀豆)穭豆　タンキリマメ　ノミマメ　クハレマメ　一名小黒豆(群芳譜)綱

黒豆(本經逢原)　料豆(同上)　馬料豆(本草必讀)

黒豆ノ類ノ一種小粒ナル者ナリ、菉豆ヨリモ小ナリ、苗モ小クシテ末ハ藤蔓トナル、タンキリマメニ同名アリ、柔滑類ノ鹿藿ニモコノ名アリ、

(庖厨備用倭名本草 二 穀豆)毛豆(ケマメ)　和名抄、多識篇ニ、毛豆ナシ、考本草、黄大豆ノ類也、夏初ニ食ス、莢ニ實スクナシ、秋深クホコロビテ實多シ、煮テ果子ニ用テヨシ、油鹽椒酒ニテ煮テ蔬ニシテヨシ、此豆莢殼ノ上ニ毛アル故ニ毛豆ト云、元升(弁〇陶)曰、和名ハケマメト云ベシ、

毛豆、味甘、性平、小毒アリ、鬼氣ヲ殺シ、痛ヲヤメ、水ヲワビ、胃熱ヲ除キ、痰血ヲ下シ、藥毒ヲ解ス、多食

略

曾比豆は、和名鈔大豆條烏豆の次に出せり、曾比とは燕の羽色にや因りぬらん、按にいにしへ語土を曾保といふも紫赤の色なり、又鴟を曾比と云は別義なるべし、畠豇とは、蔓豇に對へし名なり、赤實取とも、粒とも云ハ、蔓豇の莢を併食に異なれバいへり、此もの早晩二品あり、その狀は小豆に似て、其實梢に著て、莢上に向ふこと、獨大小豆に異へり、故に䲸の義にていふと見えたり、されど狹々解などの意にや、佐々利辨の名亦おもひ合すべし、中略〇早豇は四月廿日より晦日まで、晴夜に蒔る也、月夜に種おろせば實ならずといへり、藏中沙場ともえらばず皆うゝるなり、草とり肥養にも及ず、七月頭收て、其下に蕎麥を種るべし、晩豇豆一ハ霜豇と名く、〇中略この二種ともに實房の成著より漸々摘採なり、幹ハ特生にして、苗の高四五寸許、莢に双生と數生とあり、作れる地は去年の粟蕎の跡よろし、畠の肥過たるは、其葉にのみ勢至てあし、只磽埆閑散、又ハ大小麥の中に併植べし、是良田をつひやさずして、培養の難なく、又飯粥にまじへ、餛飩の餡ともなす、其用またく赤小豆とおなじ、亦濟生の良穀なり、奴豇ハ、但黑白の斑文あるを稱へり、

珂孚豆

〔倭名類聚抄豆十七〕珂孚豆　崔禹錫食經云、珂孚豆和名古末女〇〇〇〇井知〇　狀圓似玉而可愛、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄穀九〕本草和名引孚作禾、下總本孚作愛、按依云如玉而可愛、作愛似勝、下總本如作似、廣本同、與本草和名合、則作似是、然伊呂波字類抄亦作如、今姑依舊、本草和名無故以名之之四字、

〔類聚名義抄豆五〕珂孚豆キ〇ト〇コ〇マ〇メ〇

〔伊呂波字類抄植物附植物具〕珂孚豆キトコマメ狀圓如玉可愛也

穭豆

〔多識編穀三〕穭豆、或云古〇久〇仁〇加〇志〇、

〔庖厨備用倭名本草穀二豆〕穭豆　倭名抄ニ穭豆ナシ、多識篇或云コクニカシ、考本草、田野ニ生ズ、小

ナ色靑キ豆ニ、淺深ノ品アリ、深キモノハ靑◦皮◦豆◦〈授時通考〉ト云、淺クシテ銀杏ノ色ノ如キモノヲカゲマメ〈勢州〉ト云、漢名白◦果◦靑◦〈江陰縣志〉又裏マデ靑キモノアリ、コンリンザイ〈同州〉ト云、一名コリンザイ、アヲヤギ〈仙臺〉ズイアヲ〈江州〉肉◦裏◦靑◦〈大倉州志〉ト云、又骨裏靑、透骨靑ノ名、授時通考ニ出、

〔延喜式 三十三 大膳〕七寺盂蘭盆供養料〈東西寺、佐比寺、八坂寺、野寺、出雲寺、聖神寺、〉寺別餠菜料〈○中略〉靑大豆卅把、靑大豆三束、

○靑大豆實、肉、醤料、

同節〈○九月九日〉文人料　靑大豆二把

〔東大寺要錄 五〕年中節會支度〈寬平年中日記〉、

一七月用　七日節供〈○中略〉　靑豆〈代二合〉

〔薊州府志 六 土產〕靑豆　西京田疇種之、熟時去其莢、村婦盛皿盆、戴頭上、賣京師、自季夏至仲秋、晩出、西京、昧爽賣來京師、故民間昧爽鬻靑豆時、

〔倭名類聚抄 十七〕䝁豆　崔禹錫食經云、䝁豆〈和名曾◦比◦末◦女◦〉紫赤色者也、

〔箋注倭名類聚抄 九 稻穀〕按曾比末米、蓋以其色似鵐羽名之也、〈○中略〉按齊民要術云、豍豆、䝁豆、大豆類

豇豆是、

〔類聚名義抄 五 豆〕䝁豆ソヒマメ

〔伊呂波字類抄 所 植物附嚥物具〕䝁豆〈ソヒマメ、紫色也、〉

〔本朝食鑑 一 穀〕黑大豆

䝁豆〈源順曰、紫赤色、和名曾比末女、今稱二阿◦波◦久◦豆◦末◦女◦一、近代以二黑豆黑者一爲二䝁豆一、一名䝁豆、〉

〔成形圖說 五十八 穀〕曾比麻米〈和名抄〉

佐々利餠、〈續玉集、秋ならぬ風にや散むさいりぐさ花の下枝もなびく五月雨、或ひとの此ものにも注したれば、姑く載て後の考に備ふ也、〉畠豇、實取豇、粒豇、霜豇、奴ヤツコ豇、䝁豇〈和名抄引二食經一、䝁豆紫赤色者也、〉燕豆〈齊民要術、食貨、高麗豆、黑高豆、蠶豆、豍豆、大豆類也、〉赤豆、〈圖經〉大赤豆、〈土人呼二赤豆一〉紫豆、大紫豆、〈以上授時通考○中略〉

〔重修本草綱目啓蒙　十七穀豆〕大豆〈本草彙言ニ大豆ニ作ル〉生マメ　クロマメ　カキマメ〈豫州、同名アリ、〉一名五臟穀〈典籍便覽〉大黑豆〈閩方〉烏金子〈醫便〉

和名ニ大豆ト呼ブハ、ミソマメノコトニシテ、黃大豆ナリ、藥方ニ大豆ト呼ハ、皆黑大豆ニシテ、クロマメノコトナリ、コレニ雌雄アリ、食用ニスル粒ノ長大ナルハ雌ナリ、藥用ハ雄ヲ良トス、蘇頌圖經、宗奭衍義ニ緊小者爲雄豆ト云是ナリ、大豆ニ數品アリ、宗奭ノ說ニ、有綠褐黑三種ト云、時珍ノ說ニ有黑白黃褐青斑數色、黑者名烏豆、可入藥及充食作豉ト云、烏豆ニ數種アリ、ゴイシマメ、一名ユキノシタ、ハチブマメ、〈水戶〉形大ニシテ扁ク、棋石ノ如シ、本草彙言ニ謂ユル零烏豆ナリ、一名馬料、〈同上〉一種五葉豆、一名ガンクヒ、ナツジマメ、〈播州〉常ノマメハ皆三葉ナリ、此ハ五葉ニシテ五加葉ノ如シ、豆ニ一ツノ凹アリ、

〔延喜式　三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別菓菜料、〈中略〉黑大豆一合五勺、〈索餅料一合、好物料五勺、〉

〔官中秘策　十九年中行事〕年中諸大名獻上物之事

二月

一黑豆　松平右京大夫

青大豆

〔和爾雅　六米穀〕青豆

〔食物知新　一穀〕黑大豆

青豆〈作ニ豆用餅、〉

〔重修本草綱目啓蒙　十七穀豆〕大豆

時珍ノ說ニ有黑白黃褐青斑數色、〈中略〉青ハ青大豆ナリ、揚州府志ニ大青ト云、宗奭ノ說ニ綠ト云ト同ジ、綠大豆ナリ、綠豆ニ非ズ、俗名アヲマメ、一名アヲハダ、〈勢州〉アヲニブ、〈播州〉アヲブル、大ニシ

借一口別東楽料、略○中白大豆五斗、紛物料

〔梵舜日記〕慶長四年十月廿八日、味噌大豆代錢子十ノ目、善等方持遣了、

〔秋齋日抄七〕民間歳節

立春前一日謂之節分、至夕家家燃燈、如除夜、炒黃豆、供神佛祖先、向歳德方位、撒豆以迎福、又背歳德方位、撒豆以逐鬼、謂之儺豆、老幼男女、喫豆如歳數、加以一、謂之年豆、トシマメ

〔秋齋日抄六〕民間歳節

二月十五日、寺院懸臥佛圖像、爲涅槃會、略○中俗以黃黑諸豆、像糭子鞭炒之、以供佛薦祖先、

〔倭名類聚抄十七豆〕烏豆 崔禹錫食經云、烏豆一名雄豆、和名久呂末女圓而黑色者也、

〔箋注倭名類聚抄九穀〕按本草和名云、白大豆云々、青斑豆云々、雄豆黑色、珂禾豆云々、卵斑豆云々、烏豆如烏玉、而員員然、雙豆云々、雙豆云々、已上八種出崔禹、據云八種、則雄豆烏豆各自一種、本草圖經云、大豆黑白二種、入藥用黑者、緊小者爲雄、用之尤佳、則知烏豆雄豆俱是黑豆、然有大小之別、源君以雄豆爲烏豆一名誤、圓而黑、亦疑似併混烏豆之員員然與雄豆之黑色、廣本黑下有色字、李時珍曰、大豆有黑白黃褐青斑數色、黑者名烏豆、可入藥及充食作豉、

〔類聚名義抄五豆〕烏豆 クロマメ 雄豆 同

〔運歩色葉集〕○腸○食豆也

〔本朝食鑑一〕黑大豆

集解、黑大豆小似白大豆、其大者亦與白大豆同、其種類名品稍多、本邦用者不少、而作果肴藥酒、近造納豆、貴婦人賞之、治痢、比白大豆則爲佳、必大〇中略按、黑大豆今雖不用味噌醬油、而性平可入、爲腎之穀、能活血解毒、利水下氣、事詳于綱目、或有一種小而圓、比尋常黑小豆則稍大者、或四邊白而中全黑者、京俗此謂鞍掛豆也、

黄大豆

〔庖厨備用倭名本草 二穀豆〕黄大豆　倭名抄ニ黄大豆ナシ、右ノ大豆ヲマメトシ、黒大豆ヲ烏豆トカケリ、是又本草ノ一名ナリ、多識篇今案ニマメ、元升 向井〇 曰、只大豆トカキタルハ、黒大豆ヲ主トシテ云コト、本草ノ例ナリ、多識篇ハ本草ニシタガフ、只大豆トカキタルヲマメト云ハ、是レ日用ノ豆ナル故ニ、日本ノ國例也、倭名抄ハ國例ニシタガヘリ、二書トモニ誤ニ非ズ、然ルニマメトハ總名也、豆字ヲ用フ、クロマメ、シロマメ、アカマメ、ノラマメ、ソラマメナドノ類ナリ、考本草、大豆ニ黒靑黄斑ノ數色アリ、黒豆ハ藥ニ入ル、其黄白豆ハ炒リテ食シ、腐ニ作リ、醬ヲ作リ、油ヲトリ、盛ニ時ノ用ヲナス、元升曰、此ノ大豆ハ味噌醬油ヲ作ル大豆也、黄豆ノ苗高サ一二尺、葉ハ黒大豆ノ葉ニ似テ大也、角ヲムスンデ、黒豆角ニタクラブレバ、ヤヽ肥大也、其葉ワカキトキ食スベシ云云、

〔重修本草綱目啓蒙 十七穀豆〕黄大豆　マ。メ。　ダ。イ。ヅ。　シ。ロ。マ。メ。　ミ。ソ。マ。メ。〇中略 俗ニシロマメト呼ベドモ、色ハシロカラズ、黄色ヲ帶ブ、故ニ唐山ニテハ黄豆ト云、漢名ニ白豆ト云ハ、シロアヅキナリ、黄豆ニハ夏秋ノ二收アリ、早ク熟スル者ヲナ。ツ。マ。メ。ト云、粒小ニシテ下品ナリ、故ニ豆腐ヲ製スルニ用ユ、因テトウフマメトモ云、漢名梅豆、月令廣義 一名半夏黄、揚州府志 春豆、泉州府志 五月黄、天工開物 六月爆、同上 又秋ニ至テ熟スル者ヲ、ア。キ。マ。メ。ト云、粒大ニシテ上品ナリ、味噌ヲ製スルニ用ユ、故ニミソマメト呼ブ、漢名報秋豆、說治要訣 一名九月豆、津州府志 歷來枯、揚州府志 紗社黄、同上 冬黄、天工開物

〔延喜式 民部二十三〕交易雜物

近江國(中略)大豆六十石、(中略)當大豆廿石、(中略)隔二三年進二當大豆十石、大豆十四石、〇中略　丹波國(中略)大豆卅石、(中略)隔三年進二當大豆五石、〇中略　右以正税交易進、其運功食並用正税、

〔延喜式 大膳三十三〕正月最勝王經齋會供養料、〇中略 僧別日菓菜料、〇中略 大角豆、白大豆各一合、

仁王經齋會供養料

鵲豆　黒色有白文、如鵲羽、炒食、

虎彪豆　白色有黒文、如虎文、大豆可煮食、

〔成形圖說 十八 五穀〕麻米 ○古事記 中略

凡大豆に二種あり、其子白青黄黒紫褐等十數色あり、一種を夏大豆と云、春植て秋熟るなり、色白し、一種を秋大豆と云、夏種て秋熟るなり、豆ハ本保食神の陰に生といふ、必陰地を喜めり、豆花日を見に宜しからざるをも知るべし、圃ハ赤土によし、うゝる塊は淺く耕を習とす、汗莱の草を土ながら打反しつゝ蒔入なり、○中略 梅豆は二月蒔て、四五月ハ既實成れり、故に嫩うちハ莢ともに食料に充べし、熟るものハ子を用うべし、秋豆は農民稲をうゑ上りて、其後このものをうゝるなり、成實最多し、八成豆ハ房生にして色ハ青白なり、五月雨あがり畑にうゑて、八月に熟く、下種豆は六月に蒔時、裏あるは野稲の中に併蒔入なり、故に下種と呼べり、十月十一月の頃收むべし、又何れの箇ともいはず蒔てよく生ぬ、又虎彪豆、鵲豆、奴僕、鼻黒などいふは、皆秋豆にして、各其斑色に因て名る所、この他數十種あり、舉て識別す、○中略

黒豆 和名　穀雁豆 黒豆の中にて最大きく、雁の翅に似たるなり、　雁食豆 黒豆の形くして大なる者、雁好て之を食ふ、故に名とす、○中略　黒豆ハ粒細し、一種大なるを碁石黒といふ、煮豆につかふ、○中略

青豆　青滌豆　大豆にして緑色もの、釜の膳に用う也、此もの五月雨の出に蒔べし、大青豆子ハ粒太し、

粉子豆　奈良茶豆 此もの茶粥に入て味宜し、故に名く、

褐豆 眼目、色の褐なるによれり、　味噌醬油に造てよろし、其成實甚夥し、農人作て益あり、　小石豆　雪下豆

零鳥豆 本草綱目　粒の大サ大豆より小圓色白し、但成實多きが故、農人喜て作れり、豆腐になしてハ煮がたく、又乳すくなし、

似玉可愛 雨 卵斑豆似雀卵斑文 鳥豆如鳥玉之色 鵲豆黒白色 雀 營豆生原野、已上八種出崔禹

〔大和本草四菽〕大豆　凡五穀ノ内、稻ニツギテ大豆最民用ノ利多シ、コヽヲ以農ノ多ク種ル事稻ニツゲリ、農夫土地ノ宜ニ隨テツクル、其品多シテ窮盡シガタシ、黄大豆秋熟ス、豆ノ類ニシテ第一民用ニ利アリ、近江州ノ産最佳シ、夏豆ハ六月下旬ミノル、早ク熟シテ民食利用ヲ助ク、故ニ農夫多ク種ル事、秋豆ニツゲリ、黒大豆大小アリ、性味最ヨシ、味噌ニシテ味ヨシ、豆淋酒ノ方、本草大豆ノ附方ニアリ、中風及産後ニ用ベシ、性ヨシ、菜豆常ノ大豆ヨリ大ニシテマルク、色紫褐ナリ、味菜ノ如クニシテヨシ、醬油ニテ煮テ果トシ、村人味噌トシテ食ス、味美シ、ウヅラ豆黒大豆ヨリ少大ニシテ圓シ、マハリハ黒クシテ、兩方ニウヅラノ文アリ、山原ニモ所々間ヒロタウフレバ、豆甚多ミノル、ヤブ豆トモ野豆トモ云、春ウフ、鞍カケ豆、兩端白シテ中間黒シ、馬ノクラヲカケル形ニ似タリ、葉マルシ、黒大豆ヨリ大ナリ、以上三豆、漢名未詳、此外豆品猶多シ、

〔和漢三才圖會百四菽豆〕大豆略○中

黒大豆　生甘平、煮甘寒、炒甘熱、作豉極冷、黒水入腎、治水消脹、下氣補風熱、活血解毒、入鹽煮、常時食之補腎、黒五色〓服萆麻子者忌炒豆、犯之脹滿致死、服厚朴者亦忌之、動氣也、古方稱黒豆解百藥毒、毎試之大不然、又加甘草、其驗乃奇、如此之事不可不知、今人食之、氣之冷、

黄大豆　生温炒熱　大豆有黒青黄白斑數色、惟黒者入藥、而黄白豆炒食、作豆腐、造醬笋、油、盛爲時用、其葉似黒大豆葉而大、結角比黒豆角稍肥大、其莢葉嫩時可食、○中略

鵲豆　和名曾比末女　赤褐色、可炒食、今謂之檜皮豆、比漢太

青豆　阿乎末米　青色炒磨粉、糝餅餻、色味共美、

鞍掛豆　久良加介末女　白色有黒枚、而狀如馬鞍、故俗名之、

奴僕豆　古也都古末女　白豆黒文、形如人頭顙角尖黒髮之形、蓋此夏大豆之異品者、惟堪炒食、小豆赤角有如此者、

て、鬼の作る、故也、爆竹の如し、

〔類聚名義抄 八僧〕藿。音霍、マメノハ、

〔易林本節用集 末草木〕藿マメノハ

〔書言字考節用集 六生植〕藿マメノハ 豆葉 説文

〔倭訓栞 中編二十四〕まめのは 藿なり、今干たるをかひ葉と稱す、馬を飼をもてなり、

〔和漢三才圖會 百三 菽豆類〕大豆　ホ 俗音 作 菽　略○中

本綱、菽豆之總稱、皆曰豆、曰菽、（小字注略）大豆有黑白黄褐青斑數色、黑者可入藥及作豉、黄者可作腐榨油造醬、餘但可作腐及炒食而已、皆以夏至前後下種、苗高三四尺、葉團有尖、秋開小白花、成叢結莢長寸餘、經霜乃枯、夏至種豆不用深耕、豆花忌見日、則黄爛而根焦矣、得時之豆、長莖短足、其莢二七爲族、多枝數節、大菽則圓、小菽則團、先時者必長蔓浮葉、疎節小莢不實、後時者必短莖疎節、本虚不實、略○中

按大豆大抵夏至十日以前下種、諺曰、夏至之鳥鳴、言秋生鳥鳴 如鳥鳴也、七月開花、九月結莢、十月收之、謂之秋大豆、最圓而大也、立夏時、芽出頃下種、立秋收穫、謂之夏大豆、圓小也、黑豆可以入藥、或炒食、或和醬油煮、名座禪豆、羽州上山之產最大、黃白二色釀味噌醬油、爲豆腐、爲馬飼、或炒食、用最多、豫州之產爲上、畿內次之、豐前國大豆次之、關東北國又次之、有數品、不悉記、

〔日本書紀 一神代〕一書曰、略○中天照大神、復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬、略○中陰生麥及大豆。小豆、天熊人悉取持去、而奉進之、于時天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生可食而活之也、乃以粟稗麥豆、爲陸田種子、

〔古事記 上〕速須佐之男命、略○中殺其大宜津比賣神、故所殺神於身生物者、略○中於尻生大豆、略○下

〔本草和名 十九 米穀〕生大豆一名黴豆、一名虎、虎豆 出崔禹錫食經 白大豆 味相似 青斑豆 色斑々狀如栗而小 雄豆 色黑 珂禾豆 狀似貝

大豆始見

大豆種類

〔伊呂波字類抄末植物 植物具〕大豆　菽

〔下學集草木下〕大豆

〔和爾雅六 米穀〕大豆（木賢、俗作菽、）　黄豆（豆又作荳）

〔日本釋名下 米穀〕大豆　まハまるき也、めハ實也、みとめと通ず、丸き實なり、

〔東雅十三 穀蔬〕豆マメ　舊事紀に、保食神の臍尻に豆を生せしと見え、古事記には、大宜津比賣神の鼻に小豆を生じて、尻に大豆を生せしと見えたり、マメとは萬葉集鈔に、マとは圓也といふ詞也と見えたり、メとは實也、ミといひメといふは轉語也、其實の圓なるを言ひしなり、

〔倭訓栞前編 末二十九〕まめ（中略）○豆は丸實の義なるべし、菽も同じ、今世祝賀の物とするは忠誠の義をとれり、通鑑集覽に、豆者眞實の物ともみえたり、（中略）○和名抄に烏豆をくろまめ、鵲豆をそびまめ、珂字豆をいちごまめ、穭豆をあぢまめ、豌豆をのらまめとよめり、そびは翡翠也、つばくらまめともいふ、又鵲豆あり、鵲の羽色したり、栗豆あり、紫褐色也、鞍懸豆あり、四邊白く中黒し、又八升豆あり、天竺豆あり、藤豆あり、蔦豆あり、ともに藊豆の類也といへり、近來鷄頭豆あり、龍豆ともいふ、中の形狀にて名く、豆は常の白豆也、夏豆は梅豆也、豆腐によし、痰きり豆は穭豆なり、狐豆ともいふ、たぬき豆は貍豆也、唐人豆といふは落花生也、

〔新撰字鏡草〕𦬆（巨之反、平、菜、似蕨、又豆莖也、豆加須、）

〔倭名類聚抄十七 豆〕大豆（食附 中略）○　野王按云、萁（音其、亦作萁、和名萬米加良、）豆莖也、

〔類聚名義抄五 豆〕萁（或萁、其音、マメカラ、）

〔下學集草木下〕萁（曹子建七歩詩云、煮豆燃豆萁、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急、云云、）

〔倭訓栞中編二十 末四〕まめがら　新撰字鏡に萁をよめり、豆莖の義也、節分の夜豆を煮に萁を燒、いわしを挾むに萁を用ゐ、信濃には雪國ゆへひゝらぎをもて、いわしまめがらをさすは、燒ば音し

古事類苑

植物部二十

草九

大豆名稱

(本草和名十九米穀)生大豆一名䝁䝁豆一名虎(虎下疑脫豆、蘇敬注文、○中略)大豆一名菽一名戎菽一名荏菽一名蹋豆、(已上四名出蘇敬注文)和名於保末女、

○按ズルニ、干祿字書ニ、尗叔(上通下正)トアリ、尗ノ以テ叔ニ作ルベキヲ知ルベシ、

(倭名類聚抄十七)大豆(麻類) 本草云、大豆(味甘平)一名菽(音叔、和名於保萬米)

(箋注倭名類聚抄九穀)原書中品有生大豆、不載一名、按本草和名云、大豆一名菽、出蘇敬注、蓋源君從彼引之、誤爲本草正文也、又按詩采菽箋云、菽大豆也、廣雅、大豆菽也、本草疏蓋依之、說文菽作尗、云豆也、象尗豆生形、段玉裁曰、尗豆古今語、按說文、豆古食肉器也、从口象形、以爲尗豆者假借也、藝文類聚引楊泉物理論云、菽者衆豆之總名、管子地員篇、五穀之狀蕃々然、不忍水旱、其種大菽細菽、呂氏春秋審時篇、大菽則圓、小菽則摶以芳、是大小豆皆稱菽、但小豆別名爲荅、而大豆仍名爲菽、故菽之稱專在大豆矣、陶注、穫米引董仲舒云、菽是大豆、大豆有兩種、李時珍曰、夏至前後下種、苗高三四尺、葉團有尖、秋開小白花成叢、結莢長寸餘、經霜乃枯、下總本有和名二字、本草和名云、和名於保末女、新井氏曰、末米圓實之轉、

(醫心方三十)大豆(中略)和名末女

(類聚名義抄五豆)大豆マメ、一名菽升、(同八草)菽(音叔、マメ、)

半夏ノ如シ、熊野ニ產スルハ微シ黃色ヲ帶ブ、藥肆ニテ售ル、漢渡ノモノ上品ナリ、根圓ク或正圓ナラズ、外皮黃褐色、內ハ色黃ナリ、唐山ニテ小キ半夏ヲ煮テ、色ヲツケ僞ルコト、錦囊秘錄ニ見エタリ、

增漢渡ニ鬱金汁ヲ以テ零餘子ヲ煮タル者アリト云、真ヲ注グベシ、又近年和州宇陀ニテ唐種ヲ作リ出ス、然レドモ色白シ下品ナリ、

〔草木育種下編〕延胡索　漢種のものは牡丹葉と云、其葉牡丹に似て小なり、根圓零餘子のごとくにして黃色なり、又尾張國より來るものに三葉のものあり、形狀ハ牡丹葉に似て葉中に紫斑あり、花は皆地錦苗に似て大なり、二種ともに藥用に上品なり、又同國より來るものに竹葉のものあり、葉至て細く竹葉に似て甚小なり、武藏國道灌山に生ずるものは竹葉に似て、葉稍潤く、根小く淡白し下品也、山の野土黑ぼくに植べし、秋冬の中、灰人糞少入、土を肥置、植替てよし、兎好て此の根を堀食ものなり、よく圍置　し、

〔武江產物志草〕道灌山ノ產　延胡索ニモアル

華鬘草

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕華鬘草　俗稱

按華鬘草高尺餘、葉似石龍芮而小、三月莖耑開花、淡紅色作房、其花柑略長、似鈎華鬘狀故名、

〔剪花翁傳三四月開花〕華鬘艸　花二種、赤、黃、[illegible]蔓豆の花に似たり、開花四月中旬、方半陰、地二分濕、土囘塵、肥淡小便、移春彼岸、花二箇向ひならぶ、よて俗に掛鯛といふ也、

シシヤキ草

〔大和本草九雜草〕シシヤキ草　和黃芩ト云、武藏國ニテハナナヤクト云、處處山野或河原ニアリ、伊豆ノ三島ト箱根ノ間路傍ニ多シ、葉ハ菊ニ似テアツク大ナリ、根ハ黃芩ニ似タリ、葉ノウラナド霜ノフリタルヤウニ白キ處アリ、或曰、茼茹ナルカ、又博落廻ナラント云、一種イヌマヲニ似タル草ヲモシシヤキト云、同名異物ナリ、

延胡索

〔多識編二山草〕延胡索、世無布、異名玄胡索、

〔書言字考節用集六生植〕延胡索本名玄胡索　延胡索本草、苗葉如竹葉

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕延胡索　ツブチ江州　ゲモ南部　一名滿金卵藥譜、穉鮮　元胡索品字箋

玄壺索百一選方　玄胡萬病回春　延胡同上　武胡索外科大成

享保中漢種渡ル、大葉小葉ノ二品アリ、大葉ヲ牡丹葉ト云、一葉三枝、枝ゴトニ三葉、葉ノ末五ニ分レ、至テ小ナレドモ牡丹葉ノ狀アリ、十二月或ハ初春苗ヲ生ズ、大葉ハ苗高サ五寸許、小葉ハ短小ナリ、葉ハ皆和產ヨリ厚シ、正二月花ヲ開ク、形紫菫花ニ似タリ、初ハ紫色、後ハ漸ク靑色ヲ帶ブ、花後小扁莢ヲ結ビ、四月ニ苗枯ル、和產ニ大葉中葉小葉ノ三種アリ、大葉ハ濃州ニアリ、葉ハ荷包牡丹ノ葉ニ似テ小ナリ、中葉ハ紀州勢州田野道傍ニ多シ、勢州粥見ニテ此花ヲ次郎坊ト云、紫花地丁ノ花ヲ太郎坊ト云、小兒ノ戲ニ、兩草ノ花𦚰ヲ互ニ勾引シテ勝負ヲ決ス、花ハ漢種ト同ジ、三月ニ開ク、小葉ハ山ノ幽谷ニアリ、葉至テ小シ、苗高サ僅ニ二三寸、莖細シテ絲ノ如シ、花ハ漢種ヨリ微シ小シ、深山ニテハ四月ニモ花アリ、地冷ナル故ナリ、和產ハ根大ナルモアレドモ、多ハ色白ク

葉を切るべし、むしおほく出来ては葉をくひからし、後には実をもくひつくし、其むしなし其ほとりのうへものに害をなす事はなはだおほし、ゆだんなく葉をきりてさるべし、

〈草木育種下〉罌子粟(けし)草本 八月種を下し、灰人糞を壅して度々澆べし、又ひ玄んそうも、罌子粟に似て小きもの也、肥も同じ、花鏡云、罌粟花、未種前須糞地極肥、後以釜底烟煤拌撒、用細泥蓋之可免蟻食、

〈食物和歌本草五〉罌子(けし)粟

けしの実は邪熱を退て風気やり反胃(ほんい)胸中の痰をながせり けしの実を粥となしつゝ竹瀝(ちくれき)をませつゝ、瀉痢や燥渇を治す

〈佐渡志物産五〉罌粟子 方言ケシノミ 羽茂郡ニ多シ、花ヲ賞シテ佛前ニ供ス、美人草ノ名アリ、チリヤスキヲ以テ、佛ニ供スルナルベシ、稀ニ阿片トナシ、臍ヲトリ製スルモノアリ、

〈書言字考節用集六生植〉虞美人草(ぐびじんさう) 一名錦被花、本名麗春花。本朝俗所呼花罌粟也、

〈大和本草七花草〉虞美人草 名花譜云、花四瓣色艶、類罌粟而小ナリ、国史云、呉俗呼為虞美人草、蓋罌粟之別種也、今國俗ニ美人草ト称ス、ケシニ似テ小ナリ、紅紫白ノ三種アリ、千葉アリ、單葉アリ、重葉アリ、紅莢ヨリ来ル種アリ、八月ニ子ヲマク、早ク生ズルハ單葉也、千葉八重ハ單葉ヨリヲソク生ズ、他花モ亦如此、肥テ軟ナル沙土ヨシ、ウヘテ上ニ灰ヲオホヒ、冬月糞ヲ澆ベシ、春月ハ糞ヲイム、虫生ゼバ去ベシ、春ハ魚汁ヲソヽグベシ、四五月ニ花ヲヒラク、花甚艶ナリ、好花トス、苗生ジテノチ他土ニウツシテモヨシ、不移ニハシカズ、冬月早ク糞水小便ヲソヽグベシ、此物根小ニ莖多長大ニシテ、風ニ倒ヤスシ、毎根厚ク培カヒ、小竹ヲ立テ助ケ結ブベシ、

〈剪花翁傳三四月開花〉美人艸 麗春花(ひなげし)、花一重あり、八重あり、色緋紅に臙紫、開花四月中旬、方日向、地一分濕、土えらばず、肥濃小便、芽出し後一度そゝぐべし、花前に四五度そゝぐべし、下種秋彼岸苗代にすべし、分株十月上旬にすべし、

へり、此種ハ和邦ニ未ダ見ヘズ、

〔多識編 三穀〕罌子粟、今案介志、異名御米、(圖實)象穀

〔書言字考節用集 六生植〕罌粟(ケシ)(本草)、米嚢(同上)、御米(同上)

〔大和本草 五菜蔬〕罌粟　花單葉千葉紅白アリ、種品多シ、八九月ニ種ヲ下ス、單葉ノ白花ニ實多シ、千葉ナルハ實少シ、千葉ナルヲ麗春花ト云、紅白紫淡濃品多シ、錦點瘡ガ花譜ニ、此花ノ美ナル事ヲ詳ニイヘリ、群花ニフトラズ愛スベシ、凡ケシノ苗ワカキ時、爲蔬ナ食フ、味ヨシ、苗生ジテ後他土ニウツシウヘテハ不榮、實猶青キ時根早ク枯ル、他草ニ異レリ、又實ヲ多ク貯ヘ置テ、炒テ飣品ニ加ヘテ美味ヲ助ク、日用ノ嘉蔬ナリ、肥土ヲヨクコヤシテ和ニシ、種子ヲ釜下ノ灰ニマゼテマクベシ、蟻不食、救荒本草曰、隔年種則佳、又曰、取米作粥、或與麪作餅皆可食、

〔農業全書 四菜〕罌粟

けしは花の白き一重なるが實多くかうばし、料理には是を用る物なり、又花紅紫色々あり、是を米嚢花と云て、詩にも作れり、花殊見事にて、菜園にうへて尤愛すべき物なり、されども千葉の色あるは實少なく、子の色も雜色にて料理によからず、蒔時分の事、秋の半いか程も地を細かにこなし、中分に肥し、畦を平らかによくならし、八月半比蒔べし、地を少たゝき付て、薄く蒔たるがよし、たねを灰と沙に合せ、筋うへにても、ちらし蒔にても、各心にまかすべし、種子おほひはするに及ばず、わらはゝきにて、さら〳〵とたねのかたまらざる様にはきそくべし、生て後芸り間引、中を度々かきあさり、ふとるにしたがひて、段々正月までまびきて菜に用ゆべし、又云若むら生せば蒔つぐべし、小きをへらにてほりて移しうゆるも生付物なり、人糞など多く用ひて、餘り肥過れば、葉に虫付て實らざる事もあり、冬中よき程に見合せ、糞し培ひ、春雨の中たをれぬ程にすべし、肥たる沙地におほく作りて、利あるものなり、(但花の咲ころ、葉に虫の付事おほきゆへ、よく心を付、もしむしの付べきならば、いたまぬやうに)

(武江產物志野草)道灌山ノ產　木防己　野火留平林寺　防己

(重修本草綱目啓蒙十五蔓草)千金藤　詳ナラズ○中略
增、鎮解一種似荷葉、只大如錢許、亦呼爲千金藤、又名古藤、主痢及小兒大腹ト云ハ、ハ°ス°ノ°ハ°カ°プ°ラ°ナリ、一名ペウブル、ヤキモチカブラ、(豐州)ガタマタ、チヤワチヤワカブラ、(紀州)イヌフイラ、(同上熊野)設國ノ產ナリ、四國紀州泉州等ニ自生多シ、四時枯レズ、蔓長ク繁延シ、葉莖ニ互生ス、形薩摩(サツマイモ)葉ニ似テ大ニシテ圓ク薄シ、ソノ莖葉中ニ在テ荷葉ノ如シ、夏月葉間ニ細莖ヲ抽レ、小白花ヲ簇生シ、實ヲ結ブ、大サ紫金牛(ヤブカウジ)子ノ如ク、熟シテ赤シ、根ハ防己ノ如ク巨シ、コレヲ防己ノ一種トスル說ハ穩ナラズ、

(重修本草綱目啓蒙十五蔓草)防己○中略
又一種ハ°ス°ノ°ハ°カ°プ°ラ°ト呼ブ者アリ、一名イヌフヾラ、(熊野)ペウブル、ヤキモチカブラ、(豐州)ガタマタ、(豐州、又紀州ニ同名アリ、)暖地ニ自生アリ、紀州ニ多シ、葉ノ形圓尖ニシテ薄ク、紋脈荷葉ノ如シ、其莖モ葉中ニアリテ荷葉ノ如シ、初夏舊根ヨリ苗ヲ生ジ、藤蔓長ク引キ葉互生ス、夏月葉間ニ小花簇生シ、黑子ヲ結ブ防己ノ如シ、是又防己ノ一種下品ナリ、今花戶ニ一種唐種漢防己ト呼ブ者アリ、葉形オホツヾラフヂニ似テ薄ク色淺シ、莖モ微シク葉中ニヨル、根ハ細ク色黃ニシテ、內ニ白暈アリテ車輻紋ヲナサズ、此草ハ豫州深山ニモアリ、紀州ニテコウモリブタト呼ブ、越前ニテ、コツラフヂト云フ、

(採藥使記上奧州)照任曰、奧州南部ヨリ千金藤ヲ見出ス又甲州ニモ稀ニアリ、
先生按ズルニ、或曰、本艸ニ載器ガ曰、一種葉荷葉ニ似テ大サ錢ノ如シト云ル物モ、亦呼テ千金藤ト名ヅク、此種和邦畿內所々ニアル處ノイチヤク草ナルベシ、又載器ガ曰、江西ノ林間ニ草アリ、葉ヲ生ジテ頭ニ鬚子アリテ、鶴膝ニ似テ葉ハ柳ノ如クナル物モ、亦千金藤ト名ヅクト云

ヤ。マ。カ。シ。讃州　ハ。ク。サ。カ。プ。ラ。　ム。マ。ノ。メ。肥前實名　一名載君行本草彙言、根名、

山野ニ甚多ク、藤蔓至テ長シ、葉互生ス、形女青(ヘクソカヅラ)ノ葉ニ似テ厚ク短毛アリ、其形狀一ナラズ、圓尖ナル者、稍尖ナル者、三尖ナル者、兩岐深シテ牽牛葉ノ如キ者、長葉ノ者、苦蕎麥葉ノ如キ者、凡數十種アリ、三四月新葉ノ間ニ小花簇リ生ジ、菝葜(サルトリイバラ)花ノ如シ、後圓實ヲ結ブ、大サ三分許、秋ニ至リ熟スレバ、黑色ニシテ淡青粉アリ、內ニ一子アリ、藥舖ニ藤蔓ヲ採リ賣ル、其車輻解細ナリ、根モ亦同ジ、是木防己ナリ、一種オ。ホ。ツ。ヾ。ラ。フ。ヂ。ト呼アリ、一名フタノハカヅラ、フツナ、加州メクラブドウ、津輕深山中ニ多シ、葉互生シ、形圓ニシテ尖リ、七ツノ粗岐アリテ、ツタモミヂノ葉ニ似テ至テ厚ク、深緑色、毛茸ナシ、大サ三四寸、形亦一ナラズ、圓ニシテ岐アラザル者、或ハ長葉ナル者、或ハ三五尖ナル者アリ、皆一藤中ニテ數樣ニ變ズ、其根フトクシテ處處ニ塊アリ、車輻解アラシ、是漢防己ナリ、木防己漢防己ノ分別ノ說一ナラズ、苗ヲ以テ分ツ說アリ、陳藏器ハ根苗ヲ以テ分チ、漢木二防己ハ卽是根苗爲名ト云フ、本草蒙筌本草彙言本經逢原、並ニ漢防己ハ是根、木防己ハ是苗ト云、此說ニ從フヲ優レリトス、其苗ヲ用ユルニハ、ツヾラフヂヲ上トス、本草彙言、本草原始ニ圖スル所ノ條防己是ナリ、舶來ノ防己根ハ、塊ヲナシテ小瓜ノ如シ、濶サ一寸餘、長サ二三寸、白色、コレヲ切レバ、其肌密ニシテ輻解明カナラズ、本草彙言、本草原始ニ圖スルトコロノ瓜防己ナリ、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

駿河國十七種、中略〇夜干、防己各十斤、　伊豆國十八種、中略〇木防己、赤石脂各十斤、　安房國十八種、中略〇木防己一斤、　上總國廿種、中略〇枸杞、木防己各十斤、

〔枕草子三〕草は

あをつゞら

好ミ食フ、江州高島郡奥ノ島權兵衞ト云フ者、每年十一月一日、禁中ヘ獻ズ、褒美ニテ賜タル小キ船ヲ作リ、其內ニ件ノムベヲ釣リ下ゲ供ズ、文武天皇ノ比ヨリ、今ニ絕ヘズト云フ、土人此葉ヲ採リ、煎ジテ鍋釜ヲ洗フ、能ク鏽レズシテ平滑ナリト云フ、

防己

〔本草和名 九草〕防己　一名解離、一名石解、木防己一名解燕、一名解名、一名解蠡、一名方己、(已上六名出釋藥性) 和名阿乎加都良、

〔倭名類聚抄 二十草〕防己　本草云、防己一名解離、(和名阿乎加豆良)

〔箋注倭名類聚抄 十草〕本草云、文作車輻理解者良、蘇云、防己本出漢中者、作車輻解、黃實而香、圖經、莖梗甚嫩、苗葉小類牽牛、折其莖、一頭吹之、氣從中貫、如木通類、陳藏器云、作藤著木生、

〔日本釋名 下草〕葛　つゞくかづらなり、くとかづとを略す、長くつゞくかづらなり、

〔倭訓栞 中編一〕あをかづら　倭名抄に防己を訓せり、靑葛の義延喜式に防己をあをつゞらと點せり、萬葉集にあをつゞらこにめとり入てといへり、今つゞらふぢといふ是也、つたのはかづらといふは防己の一種、はすのはかづらといふは漢防己也、かふもりかづらは木防己也といへり、

〔和漢三才圖會 九十六蔓草〕防己　解離　石解　和名阿乎加豆良○中略 按防己有漢木二品、而今自中華所渡者皆長六七寸、切大者徑寸許、黃色帶赤、破之文作車輻解、而甚香、所謂漢防己也、而別木防己者不來、倭之產長七八寸、切大小如木通莖、而靑白色、皮皺不香、所謂木防己是也、二物共苗莖而非根也明焉、今藥肆以唐爲漢防己、以倭唯稱防己、藝州廣島爲上、丹波之產短細爲下、蓋本草必讀所圖之瓜防己者未知、

〔重修本草綱目啓蒙 十五蔓草〕防己

アヲカヅラ(和名鈔、豐州)　アヲツヾラ　ツヾラカヅラ　ツヾラフヂ
ザンチンカヅラ(作州)　ピンピンカヅラ(播州)　メツブシカヅラ　ヤブカラシ(雲州、五爪龍ト同名、)

木蓮子

木蓮（和名ムベカヅラノ生葉肥タルヘ、是ヨリ少シ大タモ出ル、）今花木ニ木蓮花ト云アリ、是ハ大和本草ニ園史、蓮生八牋、花史、酉陽雜俎續編等ヲ引テ云、玉蘭花ナリ、是ト不同、

○按ズルニ、薁ハ、康熙字典（申集上艸部）ニ唐韻於六切、音郁、蘡薁也トアリ、

〔本草和名　十七〕木蓮子（出崔禹）和名以○多○比○、

〔倭名類聚抄　十七菓〕木蓮子　崔禹錫食經云、木蓮子（和名以太比）本草云折傷木、

〔箋注倭名類聚抄　九菓〕按本草拾遺云、薜荔夤緣樹木、三五十年漸大、枝葉繁茂、葉圓長二三寸、厚如石韋、生子似蓮房、中有細子、一年一熟、一名木蓮、打破有白汁、停久如漆、本草圖經、絡石條云、薜荔與此極相類、但莖葉麁大如藤狀、木蓮更大如絡石、其實若蓮房、李時珍曰、木蓮延樹木垣墻而生、四時不凋、厚葉堅強、大于絡石、不花而實、實大如盃、微似蓮蓬而稍長、正如無花果之生者、六七月實內空而紅、八月後滿腹細子、大如稗子、一子一鬚、其味微濇、其殼輕虛、鳥鳥童兒皆食之、充以太比爲允○中略千金翼方、證類本草木部中品載之、蘇敬曰、折傷木、藤生、繞樹上、葉似茵草葉而光厚、按本草和名果部載崔氏木蓮子、訓以多比、木部載本草折傷木、亦訓以多比、蓋輔仁不能辨定、存疑於二物也、源君以其所訓同、合爲一者誤、新撰字鏡、折傷木伊太比、一云木蓮子、其誤亦同、

〔伊呂波字類抄　伊植物〕木蓮子（イタビ　菓子類）　折傷木（同）

〔日本後紀　十三平城〕大同元年五月己卯、是日停諸國雜贄腹赤魚木○蓮○子○等、以息民肩也、

〔日本書紀　十八安閑〕元年三月戊子、立三妃、立許勢男人大臣女紗手媛、紗手媛弟香香有媛、物部木蓮子（イタビ）、（木蓮子此云伊多寐）

〔採藥使記　上奥州〕照任曰、奥州南部ノ田奈部ト云フ所ヨリ木饅頭ヲ出ス、

光生按ズルニ、是レ本草ニ載スル木蓮ノ實ナリ、郁子（むべ）トモ、ユベトモ、其實秋熟シテ味甘シ、小兒

奥島供御人等中　　中務少輔重忠

元祿年中ノ請取如左　折紙片表○略

> 奥島御節之事
> 一折　　貳合
> 一鬮　　壹合
> 一曼表　　拾帖
> 右請取所如件
> 元祿十四年巳霜月朔日　　生島左兵衛尉
> 奥之島下司殿

慶長七年近江國撿地帳　近江國蒲生郡奥之島村五百拾三石六斗七升

王濱村高拾三石　近江國繪圖ニ王濱在蒲生郡丸山東○中略

郁子(ムベ)

ムベ

一本ニ如梨實而味酸シ、西土ニテ審砂糖ニ漬テ食ス、蔓草之部如藤蔓アリ、郁子ノ字ヲ古來ムベニ用タルハ誤也、郁子ハ木實而小キ物也、ニハザクラノ類也、郁李仁ハ藥種ニ用ル也、

郁子、本草綱目三十三附錄諸果、郁、時珍曰、賈思勰齊民要術云、藤生交阯合浦、緣樹木、正二月花、四五月熟如梨、赤如雞冠、核如魚鱗、生食味淡、　按、四五月熟事不審、ムベヲ賈スルハ十一月ナリ、今木蓮木通ノ二種アリ、木通ハ林間ニ生ジ、木蓮ヨリ葉小ク、紫花ヲ開キ、實モ異也、大和本草ニ藤菰云ハ木蓮ナリ、廣益地錦抄(伊兵衛ハ植木屋ナレド、家業故形狀悉也、)ニモ木蓮木通ノ二種ヲ出ス、木蓮ノ實ヲ俗ニムベト云、一枝五葉(四葉出ル)、四時不凋、和名ムベカツラト云、

に御座候、一つ生りは島目百文、二つ生り三生り御座候へば、壹つ百文宛御增、御祝儀出申候、外に疊表拾枚は、每年御取次生島殿へ遣申候事、

一往古より人等八人之末孫共、相續仕、例年霜月朔日に調貢仕、生島殿より請取切手相渡り申候御事、

文二月　　　　郁子供御人等中

〔郁子請幷圖〕郁子請

每年十一月朔日、近江國高島郡奧之島村王濱ヨリ郁子ヲ獻ズ、

延喜式ノ下三十一、宮內省、諸國例貢御贄、近江郁子、同三十三、大膳式ノ下、諸國貢進菓子、近江國郁子二輿籠、○中略

每年十一月朔日、近江國高島郡王濱ヨリ郁子ヲ獻ズ、文安二年郁子之宣旨、

近江國蒲生郡奧之島莫供御人等中、任先例止非分之課役、可專調貢之由被聞食畢、可令下知給之旨、天氣所候也、仍言上如件、俊秀誠恐謹言、

文安二年十一月十一日　　左中辨俊秀

尹大納言殿

右宿紙禮紙、有禮紙之上、

尹殿　　左中辨俊秀

近江國蒲生郡奧島莊之內、莫供御人等、被停非分之課役、綸旨如此、早存其旨可專調貢之由、中山大納言殿仰所候也、仍執達如件、

十一月廿一日　　中務少輔重忠印

右一紙口ノ表、

若水は、郁子をもて、ムベにあて、白石先生は實は野木瓜なりといはれし、弘賢按ずるに、郁子はアケビなり、アケビとムベとは自ら別種なれば、如何有べき、さて我邦にて漢字を用る所は、中古以來、かならず其正名ならねども、假借せる事ありたとへば、數多をもて、春のヤマブキにかり用るがごとし、これ古人數多をヤマブキといへば、たま〳〵其名の同じきをもて、假用ひたる也、是をもて漢名の當否を論ずべきにはあらず、實は郁李の一名にて、共にムベといひ、野木瓜をもムベといひけるより、假借せることと有しなり、又漢名にも古今の差別ありて、一概に論じがたきことあり、猶下にことはるべきなり、○中略

菓實獻上候由緒申傳之覺

一聖德太子之御時、奥島庄之内へ御成行幸、それより此所を王之濱と申傳候由、其時奥島之内男子八人有之、夫婦長命堅固にて罷在候旨に御座候、其時太子被仰候は、汝等はめでたき者共なり、何故一家不殘長壽堅固に在之哉と御尋被成候へば、夫婦之者共申上候は、私屋敷内箇樣之菓實毎年生り申候を、家内給べ申候故、無病延命に罷在候かと申上候得ば、其菓實菓と御附被遊、自今後供御に差上候樣にと被仰付候而、菓供御料として、奥島山を被下置候之故、隣郷へ山をおろし、山年貢を以、供御に仕候由申傳之事、

一其後菓供御中絶仕候處、文安二年之比、御詮議被遊、夫より改獻上仕候、御綸旨幷御除書等頂戴仕、于今所持仕罷在候事、

一信長公御全盛之比、人等山を御取上被成候而、供御料米壹石五斗に御定被成候由申傳候事、

一郁子蔓御座候者、宮地又は人等之持林之内に御座候、尤御除地に而者無御座候事、

一例年供御料米壹石五斗者、御地頭より御代々被下置、八人之者配分仕候事、

一郁子供御料如此仕、折三合毎年差上候内、一合御取次生島殿へ納り申候、右之御祝儀、例年不同

之一種也、

〔倭訓栞前編三十一〕むべ〇中略　和名抄に郁子むべと訓ず、延喜式諸國貢進の菓子に近江國郁子と見えたり、今も蒲生郡白部村より霜月に貢せり、麥わらにて小さき殿を作り、其内に赤く熟したるを釣さげたり、むべは御贄をおほむへとよめるの略也、今俗ときはあけびといひ、花肆には朝鮮あけびともいふ、本艸にいふ藺子、齊民要術にいふ藤子なりといへり、南部に木まんぢうといふ、又詩經の薁をむべとよめり、薁と郁と同音なるをもて、郁子と書りといへり、土人此葉を煎じ瘡腫を洗ふ、よく平癒すといふ、

〔古今要覽稿草木〕むべうべ野木瓜　郁子眞實漢名ときはあけび、

むべは近江國蒲生郡奥島の產物にて、毎年十一月朔日、京都へ貢する也、蔓一すぢに二つも三つもなりたるを、葉にて包たる足高き折に入て奉る、其形狀圖(圖略)のごとし此事いづれの御時よりはじまるといふことさだかならず、

奥島供御人等が傳ふる所は、聖德太子の御時よりといひ、或說には天武天皇御時よりといふ、共に信じがたし、さればこそ後水尾院年中行事には、いつより奉りそめけるにかと遊ばされしなり、又延喜式に近江より郁子を貢することを載られたれど、これは今のむべの事にや、眞の郁李のことにや、さだかならず、供御人等が傳へし文安の綸旨に見へたる所は、今のむべのことにて有べければ、其文に例にまかせてと見え、たるに據ときは、その先より奉けるものなるべし、

さて文字には郁子とも薁實とも書たれ共、ともに正しき名とはおもはれず、蘭山翁の說に、救荒本草にみえたる野木瓜といへるもの、今のむべなりといへり、其圖說を按ずるに、此說荷擔すべきなり、

郁下品、作郁李人、本草和名作郁核、皆不作郁子、此或郁李之誤、一名棣、千金翼方、證類本草、本草和名同、略○中本草和名云、和名字倍、按爾雅、常棣棣、毛詩常棣傳同、說文、棣白棣也、郭注爾雅云、今山中有棣樹、子如櫻桃、可食、齊民要術引詩義疏云、其實似櫻桃薁、麥時熟、食美、北方呼之相思也、又引爾雅七月篇義疏云、鬱高五六尺、實大如李、正赤色、食之甜、邢昺爾雅疏、引陸疏云、許愼曰、白棣樹也、如李而小、如櫻桃、正白、今官園種之、一名薁李、(引爾雅略)又有赤棣樹、亦似白棣、葉如刺楡葉而微圓、子正赤如郁李而小、五月始熟、閑居賦、梅杏郁棣之屬、李善注云、郁今之郁李、棣實似櫻桃也、張揖上林賦注曰、薁山李也、郁與薁音義同、郭璞上林賦注云、棣實似櫻桃、郝懿行曰、郁棣棲霞山中尤多、白棣殊少、人俱呼爲山櫻桃、小於櫻桃而多毛、味酢不美、又論語疏引舍人曰、唐棣一名栘、又引陸機云、唐棣即奧李也、一名雀李、亦曰車下李、所在山中皆有、其華或白或赤、六月中成實、如李子可食、(本草圖經引)陸氏以常棣形狀說唐棣誤、唐棣正作棠棣、其字與常棣近而混也、本草云、郁李一名爵李、一名車下李、一名棣、陶注云、子熟赤色、亦可噉之、蜀本云、甚甘香、有小澀味也、蜀本圖經云、樹高五六尺、葉花及樹並似大李、惟子小若櫻桃、甘酸、本草衍義云、郁李仁其實如御李子、至紅熟堪啗、微澀、李時珍曰、其花粉紅色、實如小李、是郁可以充今俗呼庭梅者、救荒本草云、野木瓜、出新鄭縣山野中、蔓延而生、妥附草木上、葉似黑豆葉微小光澤、四五葉攢生一處、結瓜如肥皂大、味甜、採嫩瓜、換水煮食、樹熟者亦可摘食、是可以充无佮、

〔伊呂波字類抄　无植物附噉物具〕郁子（本作棩、亦作鬱子）

〔本草一家言　三〕榴子。　本出于賈思勰齊民要術、一名侯騷、一名藤詔子、一名野木瓜、一名波斯蔔萄、此諸名散見于諸書、而綱目釋名遺而悉不收載、今併而爲一、和名牟邊、

按延喜式有郁子之供、其稱郁子者是物也、江州王乃濱村年々臘月獻之於朝廷、今京南上醍醐山中多生之、自非經年者則不結實、其藤葉實俱似木通而稍大、俗名常盤阿氣比、於是乃知、是即木通

郁子

り、この藤蔓は通草なれども、其實は多く食しても瀉下する事なくして、油には大便閉に用ひて佳なるべしと(佐竹壹岐守冠木請書)の說なり、あけびかづらは處々に自生多きものなれども、年を經し蔓にあらざれば、實のらぬものなり、花は年をへざるつるにも開く、花信は淸明の比よりひらく、その色淡紫紅にして三瓣の小花、さがりあつまり開く、その小花と同じ形狀にして、大さ寸許のものあり、この大輪の花は小花のかたより濃紫なり、この種は實を結ぶ花なれども、年を經し蔓にあらざればみのらず、又淡碧白のものあり、その形狀種類は、本草綱目啓蒙に詳なれども、出羽の圖には、實も大にして、四五寸許のものあり、その色も紫色にして美なるあり、この紫色に染なして美なるものは、味美なりといへり、凡通草に三葉五葉の別あり、五葉のものゝ實は、熟して皮われ、白瓤あらはるゝものといへども、其皮褐色少は紫色を帶れども美色ならず、いまだ三葉のあけびの實を結びしを見ざれば、三葉のものにやと問ふに、通し事にて葉の三葉五葉のことは、わきまへずといへり、核は黑澤にして升目のごとし、破れば內に白肉あり、卽油を取ものなり、(中略)○和名抄(草類)郁子の次に蔔子、(和名分比)又同書(葛類)通草(和名阿介比加都良)と訓じて、實と蔓とを別條となしたれば、古は專ら食用とせしものなり、

〔延喜式(典藥三十七)〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、(中略)○龍膽、通草各五斤、　大和國卅八種、(中略)○枳實、通草、大戟各十斤、

〔武江產物志(藥草)〕道灌山ノ產　木通(あけびかづら)

〔倭名類聚抄(草木十七)〕郁子　本草云、郁子一名棣、(郁計反、和名牟閉、今案郁宜作槨、於六反、見唐韻、)

〔箋注倭名類聚抄(九草木部)〕按廣韻、郁文也、亦郁郅縣在北地、又姓、又云、棈棈李、俗作槨、二字其義不同、故源君謂郁子之郁宜作槨、然郁槨字古所無、說文不載、故本草借右扶風郁夷縣之郁字爲之也、間居賦亦云、梅杏郁棣、其訓文也之郁字亦假借、說文檅有文章也、是爲正字、(中略)○千金翼方、證類本草木

〔重修本草綱目啓蒙 十五蔓草〕通草 アケビ和名 アケビカブラ同上 アケビブル タヽパ江州 タトパ播州 ギウスイサウ雲州 タンボボ同上 アッペ若州 ゴサイボブル同上 ハダ フカブラ上野 ハンダフカブラ アタピ共ニ同上 チンタナコンホウ甲州 フドリパナ若州以下 花名、女郎花同上 チロチロピ江州 一名出様環瓏輟耕録 烏獣草通雅 燕覆本草彙言 實名、

山野共ニ多シ、葉形長楕ナリ、五葉ゴトニ一處ニ攢生ス、其五葉ノ大サ四五寸、又大小アリ、舊蔓ハ葉大ニ、嫩蔓ハ葉小ナリ、皆互生ス、四月嫩葉ノ間ニ細枝ヲ生ジ、少又ヲ分チ花ヲ開ク、大サ四五分、淡紫碧色ト白色トノ二品アリ、皆下垂ス、花ハ三瓣、稀ニ大花ナル者雜リ生ズ、亦三瓣ニシテ深紫碧色後實ヲ生ズ、瓜ノ形ニ似タリ、徑リ一寸、長サ二寸餘、熟候ニコレヲ肉袋子ト云フ、久蔓ナラザレバ實ヲ結バズ、其皮厚ク肉白ク、核深黒ニシテ光リアリ、此蔓ヲ採リ藥用トス、木通ト云、切レバ車輻解アリテ菊花ノ如ク、針眼通レリ、一頭ヨリ吹バ其氣一頭ニ透ル、和産ヲ眞トス、舶來ハ多ク葡萄ノ根ヲ雜入ス、本草新編ニ即葡萄根也ト云フ、形ハ異ナレドモ、其効ハ粗同ジ、然レドモ和産多ク且新ナリ、故ニ和ヲ用ユベシ、本經逢原ニ木通ハ蘡薁ノ根ナリト云ハ非ナリ、物理小識曰、准木通能行氣、色似沈香有車輻紋、川木通色白止通小便、僞者蒲萄藤也、本草彙言曰、色黄白者良、黒褐色者爲兩暢所浸以致形色驚黒用之力少不及、

又一種三葉ノ木通アリ、大豆葉ノ如シ、又一種三葉ニシテ粗キ鋸齒アル者アリ、

又別ニ一種五葉ノ木通ニ似テ大ニシテ、多ヲ凌ギ凋マザル者アリ、コレヲトキハアケビト云フ、即ムベニシテ救荒本草ノ野木瓜ナリ、

〔古今要覽稿 草木〕あけびかづら 通草

あけびかづらの實より、油を搾り用る事は、信濃の國、出羽の國には、此あぶらにて物をゆびき食す、燈油はさらなり、その油清潔にして上品なり、されども多く食すれば、瀉すものなりといへ

物大者徑三寸、毎節有二三枝、枝頭有五葉、其子長三四寸、核黑穰白、食之甘美、陳藏器曰、子如算袋、穰黄子黑、食之當去其皮、蘇云、色白、乃猴葍也、本草圖經云、生作藤蔓、大如指、其莖幹大者徑三寸、葉頭類石韋、又似芍藥、三葉相對、夏秋開紫花、又有白花者、結實如小木瓜、

〔和爾雅七草木〕通草(アケビ)〇木通、〇萬年藤、並同、子名燕覆、

〔東雅十四果蓏〕蔔子アケヒ　倭名抄に本草註崔禹錫食經倭名本草等を引て、蔔藤一名烏蘡、又附通子はアケビといひ、通草はアケビカヅラといふと見えたり、これ則木通附支、其實を燕覆と名づくるもの也、アケとは赤色、ビとは實也、實小さく木瓜の如くにして白く、熟しぬれば其內の赤きをいふなり、

〔古今要覽稿草木〕あけびかづら　通草

あけび、和名抄　あけびかづら、本草和名　和名抄、あけびは朱實の義なりと、國史草木昆蟲攷にいへども、この實あかく色づくものにあらず、あけびはあけつびの省呼なり、歌にやまひめとよむも同意なるべし、山女の字を用、又ある人の曰、加賀の國にあけび村と云處あり、一には赤日村と書、一には山女村と書り、山女の字を以てあけびと讀事、いかなる義にや詳ならざりしに、或人越前の國へ行時、山中の茶店にやすらひ、菓子樣の物を乞しに、外には何もなし、山をんなのみといへり、夫にても出すべしといへば、あけびの實を出せりと、これにて山女の字を用る事も解せしとぞ、

〔宜禁本草乾集中草〕木通　甘辛平微寒、通利九竅關節血脈、不忘、治痳、治脾疸常睡、心煩、出音聲、散諸結不消、墮胎、利尿、療乳結、下乳、子甘利二便、去煩熱、心止渇、下氣、去皮、

〔大和本草六〕木通　蔓草也、蔓長ク大ニシテ堅シ、蔓卽木通也、葉莖ヲ通草ト云、無毒、鞍馬ノ木芽漬ハ通草也、葉ハ五葉ニ分ル、三月紫花開、花容三分、秋單子結ブ、此草山野林中ニ多ク生ズ、和名アケビ赤實ナリ、又トキハナルアリ、

季夏莖葉共ニ枯ル、根ハ白ヲナシテ質精根ノ如レ、此レモ莖上ニ花咲ク、蓋天ノ名ニ合ハズ、然レドモ其一種ナルベシ、

通草

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥
太宰府十二種、〇中略 通草四升、

〔新撰字鏡草〕通草 於〇萬〇、又於〇女〇萬〇

〔本草和名八草〕通草陶景注云、莖有細孔、兩頭皆通、一名附支、一名丁翁、一名萱藤蔓、仁諝音、出陶景注、一名鶺鴒、仁諝音方屏反、一名烏覆、一名萱藤、已上三名出蘇敬注、一名附通子、出雜要訣 一名擎子、一名猴萱、已上出拾遺、一名丁翁萬、出雜要訣 和名阿〇介〇比〇加〇都〇良〇

〔倭名類聚抄二十草〕通草 和名本草云、通草、陶弘景注云、莖有細孔、兩頭相通、和名阿介比加都良

〔箋注倭名類聚抄十草〕按證類本草通草條注引陶隱居云、繞樹藤生、汁白、莖有細孔、兩頭皆通、含一頭吹之、則氣出彼頭者良、或云即葍藤莖、此所引節是文、則宜引本草注而引和名本草載之、非是、蘇云、此物大者徑三寸、毎節有二三枝、枝頭有五葉、其子長三四寸、核黑穰白、食之甘美、南人謂爲燕覆、或名烏覆、今言葍藤、聲相近耳、圖經、生作藤蔓、大如指、其莖幹大者徑三寸、葉類石葦、又似芍藥、三葉相對、夏秋開紫花、亦有白花者、結實如小木瓜、今人謂之木通、而俗間所謂通草、乃通脫木也、〇中略 按果蓏類載葍子、即通草實也、與音云、通草葉青、蔓延樹生、汁白、

〔倭名類聚抄十七菓蓏〕葍子 本草注云、葍藤上音福 一名烏覆、音伏、和名阿介比 崔禹錫食經云、附通子、

〔箋注倭名類聚抄九菓蓏〕按證類本草草部中品通草條引唐本注云、南人謂爲燕覆、或名烏覆、今言葍藤、葍覆聲相近爾、本草和名云、通草一名燕覆、一名烏覆、一名萱藤、已上三名出蘇敬注、此引本草、載葍藤烏覆二名、蓋源君從本草和名引之、又按依蘇云、葍覆聲近、則萱藤似當作葍藤、本草和名作萱藤、亦恐誤、陶注云、通草繞樹藤生、汁白、莖有細孔、兩頭皆通、含一頭吹之、則氣出彼頭者良、蘇注云、此

〔多識編 二毒草〕鬼臼、奴波乃美、異名害母草、鐵闌

〔重修本草綱目啓蒙 十三毒草下〕鬼臼　カサグサ　ツリガネサウ　ツリガネガサ　一名獨揺 同上雅

馬目 正字通　玉芝 山海南　一握金 六書故

漢渡ナシ、此草一根一莖ニシテ大カザグルマノ如ク、莖頭ニ七八葉輪次ス、大カザグルマヨリ莖長シ、葉下ニ小莖ヲ出シ、一花ヲ開キ下垂ス、鈴鐸ノ形ノ如ク、貝母花ニ似タリ、外ハ紫色、内ハ細金點アリテ、撒金キンスナゴノ如シ、此花葉下ニ隱テ見ヘズ、故ニ羞天花ノ名アリ、今此草絶テナシ、一種ヤグルマサウト呼アリ、一名ハウチハサウ、カサグサ、種樹家ニ多ク栽ユ、深山ニ生ズ、東國ノ山中最多シ、宿根ヨリ春苗ヲ生ズ、一莖直上ス、高サ二尺許、葉互生ス、其葉五葉一蒂、葉ゴトニ末濶ク、三尖ニシテ本ハ窄ク、箭ノ羽ノ如シ、細キスヂ多アリテ皺ノ如シ、周邊ニ鋸齒アリ、夏月莖頭ニ細白花ヲ開キ穗ヲナス、コレヲ古ヨリ鬼臼ニ充ツレドモ、ソノ花葉上ニ高ク出ルトキハ、羞天花ノ名ニ應ゼズ、藥肆ニモ此根ヲ以テ鬼臼ニ充テ賣ル、其根莖一寸許、長サ六七寸、コレヲ六分許ニ横ニ切テ乾ストキハ、兩頭邊ハ高ク、内ハ凹ニシテ、魚彙骨ノ形ノ如ク褐色ナリ、眞物ハ全根臼ノ形ヲナス、正字通ニ、獨脚蓮ハ鬼臼ト別ナルコトヲ云リ、其説ヤグルマニ近シ、今藥肆ニテ唐ノ鬼臼ト云者ハ眞ニアラズ、

增、ヤグルマサウハ、集解時珍ノ説ニ鬼燈檠ト云者ニシテ、卽蘇州府志ニ、鬼燈檠一莖挺立、對發五六幹、如燈檠、毒草也、能治毒ト云モノナルコト、百品考ニ見ヘタリ、又近世花戸ニ山荷葉ト稱スル草アリ、北國加越ノ深山ニ産ス、初春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、一根五六莖、高サ七八寸ニシテ、莖頂ニ葉ヲ生ズルコト荷葉ノ如シ、葉微シク横ニ長ク、前後微シク凹ミ、葉面ニ微皺アリ、文脈モ荷葉ニ似タリ、肥タルモノハ莖ニ枝ヲ分ツ、夏莖ノ半ヨリ別ニ莖ヲ生ジ、其端ニ小葉ヲ生ジテ、其上ニ白色ノ細花六七ヲ簇リ開ク、甚小ニシテ讃見ヘ難ク、卒ニ見レバ金線草ミヅヒキサウノ花ヲ一ツ放シタルガ如シ、

甚稀ナリ、叡山產葉厚硬ニシテ光澤アリ、冬ニ至テ枯ズ、蘇頌曰、湖湘出者葉如小豆、枝莖緊細、經冬不凋ト云モノ是ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十七山草〕淫羊藿 イカリサウ クモキリサウ 江戸 カリガネサウ 加州 カナビキサウ 豫州 タンドリバナ 城州大山崎 サンシクヤウサウ 一名黃德祖 綱目拾遺 乾雞筋 本草原始

紬　仙靈皮 全俗書

深山背陰ノ地ニ生ズ、春分後舊根ヨリ莖ヲ抽テ出ス、長サ尺許、柔軟ニシテ直ナラズ、上ニ數花ヲ連ヌ、首側垂ス、ソノ花四瓣、瓣内ニ細長キ距瓣ニ旁テ四ニ出ス、ソノ端上ニ曲リテ花ノ中ハフトク高ク、鐵錨兒ノ形ニ似タリ、大サ八九分淡紫色、又深紫色藍紫色、淡黃色、白色ナル者アリ、京師ニハ淡紫色ナル者多ク、白色ナル者少シ、勢州紀州江州ニハ白色ノ者多シ、白花ノ者ハチドリナウ同名アリト呼ブ、俱ニ花漸ク闌クトキハ其根下ヨリ新葉尋テ出ヅ、凡ソ一根數葉、ソノ莖細ク硬ク、光澤アリテ栗稈ノ如シ、莖ゴトニ三枝、枝ゴトニ三葉、故ニ三枝九葉草ノ名アリ、ソノ葉初出ノ時色淡紫ヲ帶ブ、長ズレバ淺綠色又紫暈ナルモノアリ、ソノ形ハ長觜ニシテ硬ク、端ニ一尖アリ、後ニ兩尖アリ、周圍ニ細刺アリ、冬ヲ經テ凋マズ、紅紫色ニ變ズ、花戸ニ唐種ノ淫羊藿ト呼ブモノアリ、葉和產ヨリ長大ニシテ厚シ、六葉ノ端ニ四出ノ小花數多ク穗ヲナシテ直生ス、穗ニ枝アリテ莖藍花形ニ似タリ、初ハ紫色、開ク時ハ色淺シ、イカリサウノ花形ト大ニ異ナリ、花ハ集解ニ碎小獨頭子ト云ノ文ニ符シ、葉ハ舶來ノ者ニ異ナラザル時ハ、此品眞物タルベシ、此草江州ニ自生アリ、市中ニ販ク者舶來ノ葉ミナ陳久、和產ノ葉ミナ新シ、イカリサウノ花ハ異ナレドモ、必シモ別品ナラザル時ハ、通ジ用ユルモ可ナルベシ、

〔本草和名 十草〕鬼臼 一名爵犀、一名馬目毒公、一名九臼、一名天臼、一名解毒、一名雀頭、一名雀草、已上二名出陶景注 一名雀手、出雜要決 和名奴波乃美

淫羊藿

〔本草和名 草八〕淫羊藿陶景注云、羊食此藿一日百遍、故以名之、一名剛前、一名先靈裨草、出蘇敬注一名可怜筋草、一名百年亡杖草、已上二名出陶隱居方、和名宇无岐奈、一名也末止利久佐、

〔倭名類聚抄 草二十〕仙靈毗草 陶隱居本草注云、淫羊藿、和名宇無木奈、一云夜末止里久佐、羊食此藿一日百遍、故以名之、一名剛前、蘇敬曰、俗名仙靈毗草是、漢語抄云、仙靈毗草、末巨多介里久佐、

〔箋注倭名類聚抄 草十〕證類本草中品引云、服此使人好爲陰陽、西川北部有淫羊、一日百遍合、蓋食藿所致、故名淫羊藿、本草和名引與此同、按百遍下合字不可刪節、恐本草和名傳寫誤脫、源君承之也、○中略按是四字○剛前一名本條文、千金翼方證類本草並載之、源君引併爲陶注誤、○中略證類本草引、作仙靈脾草、本草和名作先靈裨草、時珍曰、仙靈脾剛前、皆言其功力也、然則剛前、剛強前陰之義、仙靈裨、言若有仙靈裨益之者、則作仙作裨正字、作先作脾毗假借也、○中略本草云、主陰萎、證類引食醫心鏡云、益丈夫興陽、理腰膝冷、蘇又云、此草葉形似小豆而圓薄、莖細亦堅、圖經、葉青似杏、葉上有刺、莖如粟稈、根紫色有鬚、四月開花白色、又有紫色碎小獨頭子、湖湘出者、葉如小豆、枝莖緊細、經冬不凋、根似黃連、關中俗呼三枝九葉草、苗高一二尺、時珍曰、一根數莖、莖粗如線、莖三椏、一椏三葉、葉長二三寸、如杏葉及豆藿、面光背淡、甚薄而細齒有微刺、

〔書言字考節用集 生植六〕淫羊藿(ヤマトリグサ/イカリグサ)放杖艸、棄杖艸並同、顧和名、羊食此草一日百遍、故名、

〔和爾雅 草木七〕淫羊藿(イカリグサ)放杖草、棄杖草、仙靈脾並同、

〔和漢三才圖會 山草九十二〕淫羊藿(いんやうくはく)　仙靈脾　放杖草　棄杖草　千兩金　乾雞筋　黃連祖　三枝九葉草　剛前○中略

按、淫羊藿和名宇無木奈、一云夜末止里久佐、出丹波船井郡山中、形狀和漢無異、但唐者莖中虛、倭者中實、

〔物類品隲 草三〕淫羊藿　和名イカリサウ、江戸方言クモキリ、紫花ノモノ所在多シ、又白花ノモノアリ、チドリサウト云、又淡紫色ノモノ、青紫色ノモノアリ、葉又大小ノ別アリ、一種黃花ノモノアリ、

立金花

〔大和本草 雜草 九〕牛扁　レ。ン。ゲ。草。ト云、山野近道處處ニ多ク繁生ス、藍鹽草ニタチマチ草ト訓ズ、又俗ニゲ。ン。ノ。セ。ウ。コ。トモ云、葉ハ毛茛及キジン草ニ似テ、花ノ形ハ如梅花、六七月ニ紅紫花ヲ開ク、葉莖花トモニ陰干ニシテ爲末、湯ニテ服ス、能痢ヲ治ス、赤痢ニ尤可也、又爲煎湯、或細末シテ丸ス、曾驗アリ、本草ニハ此功能ヲノセズ、本草毒草類ニノセタリ、然共曰無毒、一度栽レバ繁盛難除、

〔重修本草綱目啓蒙 毒草 十三下〕牛扁　俗。人。草。 家種

山中ニ陰地ニ生ズ、葉一根ニ叢生ス、形草烏頭葉ニ似テ色淺レ、岐多ク白點アリ、夏方莖ヲ抽デ葉互生ス、秋ニ至テ高サ二三尺、花ハ穗ヲナシテ生ズ、形烏頭花ニ似テ小ク、淡紫色又黄白色ノモノアリ、花後小莢ヲ結ブ、又烏頭ニ似タリ、コノ草享保年中朝鮮ヨリ秦艽ト名ケ渡ス、故ニ今花家ニ誤テ唐種ノ秦艽ト呼ブ、其花黄白色ナリ、然レドモ秦艽ノ葉ハ形長シテ萱葉ノ如シ、渡秦艽中ニ雜リ來ルモノ間アリ又蔓蘆ノ條下ニ、蜂保昇曰、蔓盧似鬱金秦艽蘘荷等ト云リ、コレニ據ル時ハ、秦艽葉ハ烏頭葉ニ似ザルコト明ナリ、俗人草ノ根ハ頭ハ内空シタシテ羅紋アリテ網ノ如シ、其下ニ枝アリタチジレ末ニテハ或數枝相合テ一條トナリ、或ハ左或ハ右ニ糾其形苦秦艽根ニ似タリ、故ニ蘇恭ノ說ニ、牛扁根如秦艽而細ト云、俗人草根ハ皮黒肉ハ白シ、乾ケバ微黒赤ヲ帶ブ、味苦養、秦艽根ハ黄白色味苦シ、古ヨリ牛扁ヲゲンノシヤウコニ充ツルハ非ナリ、

〔和漢三才圖會 水草 九十七〕立。金。花。　俗稱 本字未詳　又有金立花

按立金花生池澤中、葉似虎耳草葉而無白茸、深青色、背色淺微帶紫理、四五月抽莖、頂開六瓣黄花、結實有細子、又其莖葉花皆同而横靭者名金立花、

〔草木育種後編 下 [illegible]〕ゑ。ん。こ。う。艸。　花の莖立を流泉花と云、これを流金花といふなり、春芽出の時植かへざれば花なし、溝泥を乾かして栽べし、根に多く干鰯をさしてよし、芽先より根を生ずるを、鉢の中へ曲て竹をさしてよし、

牛扁

得其實矣、陳藏器云、水堇如蘇所注、定是石龍芮、更非別草、爾雅、芨、堇草、郭注云、烏頭苗也、蘇又注天雄云、石龍芮葉似堇草、故名水堇、如此則依蘇所注是水堇、附子是堇草、水堇々草、二物同名也、

〔書言字考節用集 六生植〕毛茛（タガラシ）一名（毛建）

〔大和本草 八水草〕石龍芮　京都ノ方言ニタガラシトモ、又タゼリトモ云、筑紫ニテウシゼリ、ウバゼリト云、三葉芹ニハアラズ、葉ニヒカリアリテ花不好、人是ヲ食ス、無毒、味三葉芹ニヲトル、食スル者モ亦マレナリ、本草毒草ニノセタリ、一種葉莖實共ニ石龍芮ニ似テ小ナルアリ、可為別種、西土ノ俗名ヒキノカサト云、

〔重修本草綱目啓蒙 十三毒草下〕石龍芮　タガラシ（泮米、同名）タゼリ（摂州、江戸、）タヽナベ（讃州、豫州、）キチ〱（豫州）タヽラビ（下總）ゲジ〱（尾州）タンガラ　タヽロベ（備前）一名龍芮（通雅）油灼灼（秋荒野譜）蝴蝶菜（通雅）芮子（本草經疏）

秋冬ヨリ溝瀆中及水田中ニ生ズ、水深キ所ニハ無シ、葉ハ毛茛（ウマノアシガタ）ノ葉ニ似テ毛無ク光アリ、黄緑色ニシテ厚シ、初ハ叢生ス、二三月莖ヲ抽ヅ、高サ一二尺、中空シ、葉互生ス、葉間ニ枝ヲ生ジ、枝ノ末ゴトニ、五瓣ノ黄花ヲ開ク、赤毛茛花ニ似テ小ク光リアリ、後實ヲ結ブ、形チ楊梅（ヤマモヽ）ノ如ニシテ小ク長シ、深緑色、熟シテ地ニ落テ即苗ヲ生ズ、再生ノモノハ苗小ナリ、此草毛茛ト混ジ易シ、水中ニ生ジ葉ニ毛ナク光リアルモノハ石龍芮ナリ、毛茛ハコレニ反ス、

〔本草和名 十一草〕牛扁（仁諝音甫典反、蘇敬注云、治牛病、故名牛扁、）一名扁特、一名扁毒、（已上二名出蘇敬注）和名太知末知久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕牛扁　蘇敬本草注云、牛扁（甫典反、和名太知末知久佐、）治牛病、故名牛扁也、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕證類本草下品引云、此藥葉似三堇石龍芮等、根如秦艽而細、生平澤下濕地、田野人名為牛扁、療牛蝨甚効、與此頗異、本草和名引與此全同、蜀本圖經云、葉似石龍芮附子等、圖經、六月有花、八月結實、本草云、牛扁殺牛蝨小蟲、又療牛病、

〇中略天雄、烏頭、牡荊子、各六升、〇下略

〔親俊日記〕天文七年七月六日丁丑、瑞竹軒守見錄、附子四兩預ヶ置之、

〔採藥使記中奥州〕照任曰、奥州ノ鍵トリト云フ所ヨリ白花ノ附子ヲ出ス、又碧色ノ花モ有リ、其根大キナルモノ三四寸、種ハ一二寸計アリ、獻上ス、

〔袖中抄二十〕とくきのやちしまのえぞ

あさましやちしまのえぞのつくるなるとくきのやこそひまはもるなれ

顯昭云、とくきのやとは、おくのえびすは、鳥の羽のくきに、附子と云毒をぬりて、よろひのあきまをはかりているといへり、附子矢といふはこれ也、

〔鷺流狂言記二十三〕附子

主〇中略あれはぶすといふて、人の身に大毒の物、〇中略能う番をせい、〇中略レテ砂糖でおりやる、〇中略

二郎實と是は砂糖でおりやる、頼だ人にだまされておりやる、〇下略

〔新撰字鏡草〕石龍芮 不〇加〇豆〇彌〇又云〇乃〇比〇太〇比、又地椹、又彭根、又天豆、

〔本草和名八草〕石龍芮 仁諝音如鋭反 一名魯果能、一名地椹、陶景注云、實如桑椹、故以名之、一名石熊、一名彭根、一名天豆、一名善菜子、出陶景注一名水堇、出蘇敬注一名王孫孫、一名水莨、一名水茛、已上出雜要訣一名水蓳苔、出釋藥性一名水建、出養生方和名之々乃比多比久佐、一名布加都美、

〔倭名類聚抄二十草〕石龍芮 本草云、石龍芮、如鋭反、和名於加豆三、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陶注、東山石上所生、其葉芮々短小、其子狀如葶藶、黃色而味小辛、蘇云、今用者、俗名水堇、苗似附子、實如桑椹、故名地椹、生下濕地、五月熟、葉子皆辛、山南者粒大如葵子、關中河北者細如葶藶、陶以細者爲眞、未爲通論、圖經今惟出兗州、一叢數莖、莖青紫色、每莖三葉、其葉芮々短小、多刻缺、子如葶藶而色黃、蘇恭云々、此乃水堇、非石龍芮也、今兗州所生者、正與本經陶說相合、爲

候第二十番以下ノ寒地ニ繁殖スル者ナリ、自然ニ陰地ニ生ジタル者ハ、性氣極テ强クシテ、其芽ヲ食トキハ卽死ス、故ニ奧羽兩國ニテ此ヲ谷不越(タニコサズ)ト名ク、卽此ヲ食シタル谷ヲ出コト能ハズシテ死スルノ謂ニテ、俗ニ鳥兜(トリカブト)ト呼ブ草是ナリ、卽蝦夷國附子(ブス)ト名ル者ナリ、其花深紫ニシテ鳥兜ノ如シ、又漢種川烏頭アリ、其葉手ヲ開キタル形ニ似テ根長ク、三四寸ニ及ビ、疣瘤アルコト蝦蟇脊ノ如シ、又一種花形菊ニ似テ淡紫ト白色ナルト有リ、俗ニ兜菊ト呼ブ根圓長ク末尖レリ、俗ニ兜菊ト呼ブ者ハ、此種類中ノ上品ナリ、宜多ク作リ附子ヲ製スベシ、此ヲ植ル法ハ野腐壚(ノブチ)ヲ畑ニ埅キ、細耕(コマカウチ)テ木葉枯草塵芥等ヲ耕鋤(スキマゼ)テ、前年秋ヨリ能ク腐朽置テ、春分頃ニ至リ、一歩三條ニ畦ヲ作リ、種子根ヲ八九寸間ニ、五目ニ一箇ヅヽ植ベシ、芽出莖長ニ從ヒ、漸々鎌ヲ以テ行壚(ナカブチ)ヲ耙加(キリカケ)テ、根ヲ肥太スルノ法ヲ行フトキハ、夏秋ヲ經ルノ間ニ、大ニ能ク肥滿(フト)ル者ナリ、其年十月末ニ、掘採モ一歩一斤ノ根ヲ得ベシ、二年目ニ掘採ルトキ、其根一箇秤量一兩餘ノ大ニ至ル、且其蘆頭際ニ數箇兒根ヲ生ズ、雪降ザル前ニ悉ク掘採テ、親根ヲバ窖藏ニシテ附子ヲ製シ、兒根ハ土中ニ埋置、明春又其故畑ヲ耕シ分植ベシ、山北林陰等日映ノ乏キ野土ハ、殊ニ能ク毒氣ノ强キ上品ヲ生ズ、抑此物ハ暖地ニモ生長スレドモ、暖國ニ作リタルハ、根細ク毒弱クシテ藥用ニ勝ザル者ナリ、此物ヲ法ノ如ク作ルトキハ、隔年ニ一歩二斤餘ノ大附子ヲ生ズ、然レバ一段六百斤ニテ金一兩五十斤ニ鬻ト雖ドモ、年々一段六金ヅヽノ產業ナリ、山國陰冷ニシテ作物ノ出來ザル地ニ植テ、骨ヲモ折ズ、年々一段六金宛ノ產業ハ、其利潤亦薄カラズ、土地ヲ領スル者宜ク熟察スベシ、

〔律疏賊盜〕凡以毒藥藥人及賣者絞、卽賣買而未用者近流、〈謂以鴆毒冶葛烏頭附子之類堪以殺人者、○下略〉

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

相模國卅二種、〈○中略〉附子一斗八升、　武藏國廿八種、〈○中略〉烏頭一斛二斗、附子八斗、　上總國廿種〈○中略〉附子八斗、　下總國卅六種、〈○中略〉附子大五升、　常陸國廿五種、〈○中略〉附子一斛、　近江國七十三種、

此條ハ御草烏頭ニシテ、トリカプトノ山中自然生ナリ、故ニ其寄川烏頭ヨリ甚シ、深山ニ多シ、苗ハトリカブトニ同シテ稍小、葉ハ土地ニ因テ小異アリ、花色モ亦然リ、京師ニテハ藥肆ニ金剛山ト稱スル者ヲ良トス、即河州金剛山ノ自生ナリ、凡テ烏頭ハ根ノ先ノトコロ曲リテ尖リ、烏ノ首ノ如シ、又其先二ツニ分レタルヲ烏喙ト云、〇中略

白附子 一名草陽羽玄圖經 新羅白肉綱目 白波串本草綱目

和產詳ナラズ、藥肆ニ漢渡アリ異物ナリ、其形一顆粗ク一顆細ク、附子ノ形ノ如シ、コレ嫩根ナリ、舊根ハ節アリテ節蟲ノ如シ、ヒメクブニ充ツル古說ハ穩ナラズ、ヒメウヅハ一名トンボナウツラチダナ、此草夏ハナシ、秋舊根ヨリ葉ヲ生ズ、冬ヲ經テ夏ノ初ニ枯ル、葉大サ一寸許、草烏頭ニ似テ小ク薄ク、又漏斗菜葉ノニモ似タリ、冬ヨリ春ノ初マデハ、葉背紫色ニシテ美シ、春莖ヲ抽コト一尺許、葉互生ス、梢葉ノ間ニ細キ枝ヲ分チ、枝ゴトニ白花アリテ偶重ス、大サ一分餘、六瓣狹細ナリ、一花ゴトニ四莢攢生ス、濶サ一分、長サ二分許、熟スレバ一方ヨリ縱ニ裂ケテ細子出ヅ、三月ニ子熟シテ苗葉枯ル、根ハ數年枯レズ、形雷丸ノ如、長サ五分、或ハ一寸許、外皮黑ク肉白シ、

〔草木育種後編下〕附子木草 和名於宇和名本草 いふす、和名抄 漢名僧鞋菊汝南圃史 享保七年、將翁先生台命にて蝦夷にいたり、採り得て官園及吹上の御畦に栽ゆ、白花のものは奧州鍵とりといふ地にて採り、官園に上る、此白花のものを春月栽て、油かすを根に少し入て、秋月掘り出し、製してよし、野土赤土少陰ある處もよし、溜園先生園中に蔓生にして碧花を開き、竹木にまとふものあり、

〔剪花翁傳四九月開花〕烏頭 花中紺色又白あり、至て上品とす、開花九月上旬なり、方三分陰、地二分濕、土回塵、肥淡小便、寒中三度、又花前に二度澆ぐべし、株寒中に分べし、

〔草木六部耕種法三根〕我邦等諸藥物ヲ作法

烏頭モ野土ニ應合スルコトハ、鬱金、莪朮等ト同ジケレドモ、其性ノ相反スルコト氷炭ノ如ク、氣

松前及蝦夷ノ產、根肥大ニナリ易シ、コレヲ栽テ附子ヲトルベシ、附子ハ子ノ名、烏頭ハ母ノ名ナリ、當春附子ヲ栽テ四邊ニ子ヲ生ズレバ、子ハ漸ク形大ニナリ、母ハ反テ形小ナリ、烏ノ頭ノ形トナル、コレ川烏頭ナリ、ソノ附子ノ旁ニ附テ生ズルヲ側子ト云フ、形小ク長クシテ兩頭尖リ、榧子ノ形ノ如シ、漏籃子ハ最小キ者ヲ云フ、奥州或ハ蝦夷ノ種ヲ栽テ其子根ヲトリ、鹽ニ浸シ灰ニ埋ミ乾セバ、舶來ノ如クニナル、近年奥州白河ヨリ出ル者ハ、舶來ヨリ大ナルモノアリ、鹽製、醋製、童便製、皆其毒ヲ薄クスル爲ナリ、然レドモ醋製ノ者ハ形甚ダ瘠小ナリ、山中自生ノ者ハ草烏頭ナリ、附子ヲ採タル烏頭ハ川烏頭ナリ、

集解、黑附子方書ニコノ名多ク出、即附子ナリ、白附子ニ別タンタメニ黑ノ字ヲ添ルナリ、形大ナルヲ大附子、或ハ八角附子ト云フ、至テ大ナルモノニハ疙瘩アリ、故ニ八角附子ト云フ、

增、一種蝦夷種ノ烏頭アリ、高サ僅ニ一尺許、葉長クシテ大ナリ、又漢種ト稱スル者ハ高サ一二尺ニシテ、花ノ形尋常ノ者ニ同クシテ淡紫色ナリ、葉ノ形瘠細ニシテ長ク、缺刻粗ク葉中ノ脈理能ク通リテ、氣脈ノ聯絡セザルヲ異ナリトス、然ルニ集解時珍ノ說ニ、附子之色以花白者爲上、鐵色者次之、靑綠者爲下ト云トキハ、上品ニハアラザルベシ、

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草下〕側子

附子ノ側ニ附テ生ズ、烏頭ニハ附カズ、形小クシテ長ク、兩頭尖リテ榧子ノ狀ノ如シ、烏附側雄ノ圖、本草原始、本草必讀、本草彙言ニ詳ナリ、

漏籃子

コレ附子ノ至テ小ナルモノナリ、用ヲナサズ、○中略

烏頭　ヤマトリカブト　一名小昌明〔輟耕錄〕　波串〔採取月令〕　異負〔證類本草〕　增、一名茨菫草〔[illegible]便覽〕

烏頭ニ二種アリ、川烏頭ト草烏頭トナリ、其川烏頭ハ即附子ノ母ナリ、已ニ附子ノ條下ニ詳ナリ、

字、

〔書言字考節用集 六生植〕草烏頭 鷺鷥菊（同） 草烏頭（根有大毒、多生陰地、煎汁傅箭射禽獸、） 鷺莪菊（同）又云 土烏頭（附子母也）
附子（本草、母名烏頭、子名附子、烏頭如字鑑、附子如字、） 草烏頭

〔倭訓栞 中編 十六〕とりかぶと ○中略 草にいふは其花の似たるより名とす、僧鞋菊名の如し、かぶと菊ともいへり、草烏頭也、花に紫白あり、花葉は蔓生の別種なるべし、

〔和漢三才圖會 九十五 毒草〕草烏頭 ○中略 按草烏頭（俗呼名止利加布止、）葉似菊葉而厚、八九月開花、淺紫色、形似伶人所着鳥冠、故名之、又有白花者、其根乃草烏頭也、用爲藥、外科用之、和州金剛山之產良、若州江州次之、今人家種之賞花、

〔物類品隲 三草〕附子 其母ハ川烏頭ナリ、○中略 蝦夷產、享保中、阿部將翁奉台命、至蝦夷、是ヲ得タリト云、己卯主品中予（平賀源内）具之、

烏頭 即草烏頭ナリ、和名トリカブト、又カブトギクト云、所在ニ多シ、花深碧色又白花ノモノ淡紫花ノモノアリ、一種蔓生ノモノアリ、和名ハナブルト云、箱根產葉小ニシテ花叉多シ、

〔重修本草綱目啓蒙 十三毒草〕附子 イ。フ。ス。（和名） ヅ。ウ。（古歌） ト。リ。カ。ブ。ト。 カ。ブ。ト。ギ。ク。 カ。ブ。ト。バ。ナ。 ブ。ス。（佐州） ブ。ス。シ。ド。ケ。（南部盛岡） 一名回陽（宋木文藏） 正坐丹砂（輟耕錄） 九頂公（本草原） 花一名雙鸞菊（花譜花鏡） 鸚哥菊（同上） 僧鞋菊（汝南圃史） 西番蓮（同上） 川烏一名昌明童子（輟耕錄）

附子ハ漢渡多クアリ、皆鹽ニ漬シ製スル者故ニ、水ニ浸シ鹽ヲ去リ用ユベシ、切テ内白色ナルヲ撰ビ用ユ、色黑キ者多シ、腐タルナリ、用ユルニ堪ヘズ、○中略 トリカブトハ人家ニ多ク栽テ花ヲ賞ス、苗高サ四五尺、葉互生ス、形莵葵ノ脚葉ニ似テ厚ク、深綠色光リアリ、秋ニ至テ莖梢ニ花アリ、穗ヲナス、形伶人ノ鳥冠ニ似タリ、深碧色又淡紫色白色アリ、白花ノ者ハ莖弱クシテ藤蔓ノ如シ、種樹家ニテハナカヅラ又ハナブルト云フ、唐種ハ種樹家ニアリ、葉岐淺ク花淡紫色ナリ、奥州南部

○中略按千金翼方、證類本草烏喙條云、長三寸已上爲天雄、則知此所引本條之文、非陶注也、本草和名云、天雄烏喙三寸以上爲天雄、不著出典、故源君誤併爲陶注也、按陶注云、天雄似附子、細而長、便是長者乃至三四寸許、○中略所引文、○八月以下文證類本草載陶蘇及諸注皆無有、按本草和名引疏曰、八月採爲附子、邊角大者爲側子、則知此所引疏文也、按陶云、附子以八月採、又側子注云、此即附子邊角之大者、伐取之、是本草疏所本、蘇云、側子只是烏頭下共附子天雄同生小者、側子與附子皆非正生、謂從烏頭傍出也、以小者爲側子、大者爲附子、今稱附子角爲側子、理必不然、蜀本圖經云、今據附子邊果有角如大棗核及檳榔已來者形狀亦自是一顆仍不小、是則烏頭傍出附子、附子傍出側子、明矣、又云、苗高二尺許、葉似石龍芮及艾、其花紫赤、其實紫黑、圖經曰、苗高三四尺以來、莖作四稜、葉如艾、花紫碧色作穗、實小紫黑色如桑椹、○中略吳普本草云、烏頭正月始生、葉厚、莖方中空、葉四々相當、與蒿相似、十月採、形如烏頭、有兩岐相合如烏之喙者、名云烏喙、又云、側子八月採是附子角之大者、是陶氏所本、皆以形狀爲別者也、御覽引博物志云、物有同種而異用者、烏頭天雄附子一物、春夏秋冬採之各異、名醫別錄云、冬月採爲附子、春採爲烏頭、此皆以時候爲別者也、廣雅云、一歲爲萴子、二歲爲烏喙、三歲爲附子、四歲爲烏頭、五歲爲天雄、此以年歲爲別者也、本草圖經云、烏頭、烏喙、天雄、附子、側子五品、都是一種所產、冬至前布種、至次年八月後方成、本只種附子一物、至成熟後有此四物、收時仍一歲、今一年種之便有此五物、豈今人種蒔之法、用力倍至、故爾繁盛也、王念孫曰、諸名對文則異、散文則有通者、

〔下學集 下草木〕附子フシ 藥類　烏頭ウヅ

〔多識編 二草部〕附子、於宇、今俗云布須伊毛、異名其母、名川烏頭、和名今案於宇乃波波、　天雄、今案於宇乃須須利己、異名白幕、本經　側子、今案於宇乃古、異名萴子、　漏藍子、今案於宇乃末留故、　烏喙、今案於宇乃布多末多古、金鴉、綱目　草烏頭、今案伊布須、蝦夷擣莖煎汁傅箭射禽獸、　白附子、今案志呂於

〔閑窓自語〕瑠璃をだまき草事
松前よりちかき海中に、小島といふ所あり、その所にをだまき草（条○瑠○牟○）といふくさの、るりの色にさけるあり、そのたねを安永中に、たかの入道中納言隆□朝臣のもとへ、松前守護のものゝふよりおくりしをうゑて、近ごろ世に多くなれり、故主殿權助佐伯職朝臣の第に、嵐山といひて博識のものありしが、いづかたよりきたれるやらん、めづらしき草なりといふ、たづぬる人しらずといへりければ、つら〳〵なは見て、この色は海邊に生ずるなるべし、花の色を見るに、東國のものならんといへり、その道をえし人の見るところ、いさゝかたがはざりけりと、見せし人大に感せしなり、

〔本草和名 十〕烏頭（陶景注云、似烏鳥之頭、故以名之、）一名奚毒、一名即子、一名烏喙、（陶景注云、烏頭兩岐者名烏喙、）一名茛、一名千秋、一名毒公、一名果負、一名耕帝、一名煎、一名鹿采、一名耿子、（已上八名出釋藥性）一名闘前、（出雜要決）
烏喙（陶景注云、似烏鳥口、故以名之、）射罔（陶景注云、以八月取汁日曬為射罔、以傅箭射禽獸、中人亦死、）
天雄（烏喙三寸以上為天雄）一名白幕、一名茛、（仁諝音急）一名薑草、（已上二名出雜要決）一名烏登、（出大清經）一名茛、（出釋藥性）
附子（陶景注云、天雄烏頭附子為三建、）
側子（釋藥性曰、此上五種同一物、冬采為附子、云莨也、三月採為天雄、八月採為附子、邊角大者為側子、九十月採為烏頭、如烏口者烏喙、〈上可有烏二字〉烏中有白附子、非此類、）已上五種和名於○宇、

〔倭名類聚抄 二十 草〕烏頭附子　本草注云、似烏鳥頭、謂之烏頭、似口者謂之烏喙、三寸以上謂之天雄、八月採者為附子、其邊角大者謂之側子、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕證類本草下品引陶隱居云、春時莖初生、有腦形似烏鳥之頭、故謂之烏頭、有兩岐共蒂、狀如牛角、名烏喙、喙即鳥之口也、〇中略蘇云、烏喙即烏頭異名也、此物同苗、或有三岐者、然兩岐者少、縱天雄附子有兩岐者、仍依本名、如烏頭兩岐即名烏喙、天雄附子若有兩岐者、復云何名之、

緒手卷

花下ノ葉ニ似テ至テ小ク、毛ナクシテ深綠色ナリ、葉中ニ一花ヲ包ム、立春ニ至テ開ク、故ニ節分草ト云、人家ニ移シ栽ルモノハ、半月後レテ開ク、形梅花ノ如ク、大サモ同ジ、ソノ瓣尖リ、或ハ鋸齒アリ、色白クシテ中ニ白蘂多クアリ、花謝シテ葉ヲ生ズ、烏頭葉ニ似テ至テ小ク、岐多クシテ深綠色、大サ一寸餘一根ニ三葉ニ過ズ、夏ニ至テ枯ル、花後小扁莢ヲ結ブコト二三箇、長サ二三分内ニ二三子アリ、鳳仙花子ノ如ク褐色、熟スレバ莢自ラ裂テ子落チ、次年ノ春生出ス、其根形圓ニシテ半夏根ノ如シ、禹錫ノ說トコロノ者ハ和產詳ナラズ、宗奭說トコロノ者ハ、卽チ救荒本草ノ野西瓜苗是ナリ、和名ギンセンクハ、又播州ニテロトウサウト呼ブ、種樹家ニテ朝露草ト云、春分子ヲ下シ、長ジテ苗高サ二三尺、枝葉互生ス、葉ハ初出ノ西瓜葉ニ似テ大サ三寸許、夏月葉間ゴトニ一花ヲ開ク、錢葵花ノ如クニシテ、淡黃色ニシテ瓣根深紫色、草綿花ノ小ナルニ似タリ、朝ニ開キ午前ニ萎ム、花後實ヲ結ブ、木槿(ムクゲ)花實ノ如ニシテ小シ、內ニ細子アリ、熟スレバ苗根共ニ枯ル、時珍說トコロノ紫背天葵ハ、和名イチヤクサウ、是ニ圓葉長葉ノ二種アリ、是ハ圓葉ノ者ナリ、城州天台山ニ生ズ、一根數葉地ニ就テ生ズ、形チ圓ニシテ硬ク、大サ錢ノ如シ、紋脈龜甲紋ノ如シ、面ハ淺綠色ニシテ光アリ、背ハ淺紫色、其莖紫赤色ニシテ長シ、夏月中心ニ高サ三四寸ノ莖ヲ抽ヅ、其半已上數花連リ垂ル、六瓣白色、大サ二分許、後圓實ヲ結ブ、南天燭(ナンテンノ)子ヨリ小クシテ下垂ス、生ハ青ク、熟スレバ黑シ、其長葉ノ者ハ苗葉大ナリ、是鹿蹄草ナリ、

〔倭訓栞 前編五〕をだまき○中略 一種の草花に名けしは、實の形によれり、紫と白との品あり、又放下借といふ草あり、よく似たり、

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕絲繰草(いとくりさう) 緒手卷(ヲダマキ) 共此俗稱、本名未詳、

按絲繰草高二三尺、葉似胡蘿蔔葉、二三月開花、白色帶黃、形似蔞故名之、

一種有八重絲繰草、其花不單、無闕圓角蔞也、

似梅莖紫色、煮汁極滑、嫁啖、見莖重見草類、

〔倭名類聚抄草二十〕莧菜　本草云、莧菜和名以倍仁禮

〔箋注倭名類聚抄草十〕蜀本圖經云、苗似薺苨、春末生、高三二尺、花黄、角生子黄綱、五月熟、圖經初春生、苗葉、高六七寸、有似薺、根白、枝莖俱青、三月開花、微黄、結角、子扁小如黍粒、微長黄色、

〔類聚名義抄草八〕莧菜イヘニレ

〔東雅草十三〕莧菜イヘニレ　イヘとは家也、なを芋をイヘツイモといふが如し、ニレとは滑かなるをいふなり、その煮啖ふが極めて滑なれば也、楡をニレともヤニレなどもいひ、蕘花をハマニレといふも、皆これ其滑かなるをいふなり、即今俗にトロヽといひて、紙を作る料となし、其涎滑を取る、黄葵といふものも又此類なり、

〔庖厨備用倭名本草野菜五〕莧菜略○中　元升曰○中略、吾人モ古ニハ莧菜ヲ食シクルニヤ、倭名抄菜ノ部ニ入タリ、今人ハ食スルモノナシ、其名ヲダニシル人ナシ、田夫ニトヘバ答テ云ク、下澤ノ田間ニフキニ似タチイサキモナアリ、葉ノウラニ毛アリ、色アヒモフキノ如シ、秋白花ヲ開キテ梅ノ如シ、其名ヲシラズ、食スルモノモナク候ト云、イエニレハ是ナランカ、又抜ズルニ雪ノシタト云アリ、又キシンサウトモ云、其ノ葉フキノ形ニ似テ面アヲタウラ紫ニ、莖モ亦ムラサキニシテ、莖葉トモニ毛アリ、大キナルハ高サ四五寸、

〔大和本草花草七〕一花草ゲ　葉ハツタニ似テ莖ノ長二寸バカリ、冬小寒ニ始テ葉ヲ生ジ、立春ノ朝花ヲヒラク、一莖ニ一花ヒラク、花形白梅ニ似タリ、夏ハ枯ル、他地ニウフレバ花ノ時チガフ、

〔重修本草綱目啓蒙十一菜部〕莧菜　イヘニレ和名抄

集解ニ説トコロ一ナラズ、大抵三種ニ別ツ、恭ノ説トコロノ者ハ、和名セ。ッ。プ。ン。サ。ウ。、一名一。花。草。、蘇頌説山足成ハ原野ニ生ズ、小寒ノ候、舊根ヨリ一莖ヲ抽ヅルコト一寸許リ、其梢ニ一葉アリ、白頭翁オキナグサノ

兎葵

アリ、信濃產上品、花紫色ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕秦艽　ハカリグサ和名鈔　ツカリグサ同上　一名產家大器輟耕錄　綱草村家方

漢渡アリ、根肥大ニシテ黄白色、左ヨヂ右ヨヂアリ、又枝分レテヨヂレ、其末合テ一本トナリテヨヂレタルモアリ、本根內ハ空シクシテ、外ノミ綱ノ如クナリテ、末ハヨヂレタルモアリ、コレヲ羅紋交糾ト云、享保年中朝鮮ノ秦艽ノ苗來ル、ソノ後種ヲ傳テ今多クアリ、葉ハ毛莨ムマノアシガタノ葉ニ似テ毛ナシ、一根ニ叢生ス、方莖直立シテ葉互生シ、淡黄花ヲ開ク、形烏頭花ニ似テ小シ、根黄黑色ニシテ形ヨヂレタリ、此草ハ城州ノ北山、及野州信州甲州ニ多シ、花淡紫色ナリ、又黄白花モアリ種樹家ニテ伶人草ト云、此根ハ漢渡ノ乾シタル秦艽根ニヨク似テ黑褐色ナリ、皮ヲ去レバ色白ク、內空虛ニシテ羅紋交糾ス、味苦ク蒼シ、享保年中、漢渡秦艽ノ中ニ偶其葉雜リ來ルアリ、ソノ形襄荷ノ葉ニ似テ毛莨葉ノ形ニ非ズ、舶來ノ蘆頭ヲ見ルニ、藜蘆葉ノモノト見ユ、綱目藜蘆ノ條下ニ、韓保昇曰、葉似鬱金秦艽襄荷ト、コレニ據テ觀レバ、朝鮮種ノモノハ眞ノ秦艽ニ非ズ、牛扁ノ集解ニ、根似秦艽トアレバ、牛扁根羅紋交糾ナルコト知ルベシ、或說ニ朝鮮種及ビ伶人草共ニ牛扁ナリト云、此說從フベシ、牛扁ヲゲンノセウコニアツル古說ハ穩ナラズ、ゲンノセウコハ犍牛兒救荒本草ノ一種也、

〔本草和名九草〕蔰葵一名蕎、仁諝音虛梂反和名以倍爾禮、

〔倭名類聚抄十七野菜〕兎葵　本草云、兎葵和名以倍仁禮味甘寒無毒者也、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕爾雅、萑、菟葵、郭注云、頗似葵而小、葉狀如藜有毛、汋啖之滑、鄭樵通志云、菟葵天葵也、狀如葵菜、葉大如錢而厚、面青背微紫、生於崖石、本草衍義云、菟葵綠葉如黄蜀葵、花似拗霜甚雅、形如至小者、初開單葉蜀葵有檀心色、如牡丹姚黄蘂、則蜀葵也、蘇敬曰、苗如石龍芮、葉光澤、花白

秦艽

ナリ、亦一種駒岳ヨリ出ル者、長大ニシテ甚美ナリ、相傳、此山ハ自古登ル者ナシ、若犯テ上ル者アレバ、則有山鬼祟ト云、其實ハ嶮骨高峻嶮ニシテ良材希ナル故、仙人モ無主山ナレバ、自ラ此怪說ヲ起セシナリ、近頃偶攀ル者アリ、始テ此物アル事ヲ知レリトナン、唐山ノ書ニモ、倭黃連ハ上ナルト見タリ、

〔延喜式 典藥寮三十七〕諸國進年料雜藥

近江國七十三種 中略 黃連二斤十四兩、　信濃國十七種、黃連十斤、 下略

〔採藥使記 下野州中〕縣任曰、下州日光山シテ根ガ嶽ノ邊ニ、光善院モドレト云フ所ニ、菊葉ノ黃連ヲ出ス、高サ七八寸、其葉大ナルコト菊葉如シ、根モ又性甚ダ好シ、

〔佐渡志 物產五〕黃連　山中ニ多シ、根ノ長四五分ヨリ一寸バカリ、外皮黑色ヲ帶ビ、內ハ深黃ナリ、効能他邦ノ產ニ勝ルトイヘドモ、形ハ美ハシカラズ、

〔本草和名 草八〕秦艽 仁諝音交 一名秦膠、陶景注云、字或作糺、或作糾、正作艽 和名都加利久佐、一名波加利久佐、

〔倭名類聚抄 草木部二十〕秦艽　本草云、秦艽 音交、和名都加里久佐、一云波加里久散、

〔箋注倭名類聚抄 草十〕陶注云、根皆作羅文、相交、中多衘土、圖經云、根土黃色而相交糾、長一尺已來、麤細不等、枝幹高五六寸、葉婆娑、連莖梗、俱青色、如萵苣葉、六月中開花紫色、似葛花、當月結實、蘇注云本作札、或作糾、作膠、正作艽也、按札卽糾字、秦艽本以其根羅文交糾得名、俗从草作芁、玉篇、芁秦芁、藥名是也、或从木作朻、凡从丩字、俗變作丩、又省作乚、如糾作糺、作糺、斜作虬、作虬是也、故芁變作艽、朻變作札也、與艽野字之从八九字、簡札字之从甲乙字、不同也、本草和名引蘇注作利、从禾固誤、然可以證札之卽糾字也、

〔物類品隲 草三〕秦艽　葉ノ形頗鳥頭葉ニ類シ、花亦鳥頭花ニ似タリ、根黃白色ニシテ羅文アリ、朝鮮產上品、享保中種ヲ傳フ、花黃白色又紫花ノモノアリ、日光產上品、黃白花ノモノアリ、紫花ノモノ

台山ノ横川、又鞍馬山、及大原ノ醫王谷等ニ多シ、葉ハ五加ノ葉ノ如ク、五葉一莖ナリ、大サ錢ノ如シ、故ニ錢黄連トモ圓葉黄連トモ云、花戸ニテ梅花黄連ト云フ、此根ハ細キ鬚ニシテ處處ニ小根連珠ス、大サ一分許、故ニ又ツル黄連ト云、苗ハ苔ノ如ク地ニ布テ生ズ、ソノ形他ノ黄連ニ異ナリ、山中ニテハ四月ニ花ヲ開ク、市中ニテハ正二月ニ葉ニ先ツテ一莖ヲ抽ヅ、長サ二三寸、ソノ端ニ一花ヲ開ク、五出ニシテ梅花ノ形ノ如ク、大サ三四分、內ハ白色、外ニハ紫色ノ細條アリ、蘂ハ黄色ナリ、花後ニ小莢數多ク圓ニ連ル、內子ハ罌粟米ヨリ大ナリ、凡テ黄連ノ實皆同ジ、唯葉異ナルノミ、葉大者根亦大ニ、葉小者根亦小也、又三。ツ。葉。黄。連。ト云アリ、形ハ錢黄連ニ同クシテ三葉ナリ、花實根倶ニ異ナラズ、一名クマデ黄連、野州カタバミ黄連、同上加州、奥州、野州、甲州ニ產ス、

〔廣益地錦抄四〕黄連　葉こまかにて花はしろく、初春諸花にさきだちてひらく、正月中の比、雪中にもつぼみを出し、珍敷時節なれば、鉢植にしてながめあり、春末に實有、實のかたちもながめ有、

〔草木育種下藥品〕黄連　加賀菊葉の黄連上品なり、又薩摩の大葉は菊葉に似て甚大なり、是亦上品なり、藥に入てよし、又芹葉の物に數種あり、蝦夷の芹葉は至て細く奇品なり、又五加葉あり、此類に三葉のものあり奇品きなり、此等は根小にして藥に用るに堪ず、總て植る法は、大抵人參を植ると同じ、土地は黒ぼく野土等によし、日陰の地に宜し、若日陽なれば竹か蘆の簀を架日覆してよし、雨は簀の間よりかゝりてもよし、濕地を嫌、肥に及ばず、折々米泔水を澆べし、八月分植、隨分間を近く植るがよし、

〔令義解三賦役〕凡〇中略其調副物、〇註略正丁一人、〇中略黄連二斤、

〔令集解十三賦役〕穴云、此連、黄草者染草料也、

〔甲斐國志百二十三產物及製造〕一黄連和名加久末久佐　加賀、安藝、常陸、陸奥諸州ヨリ出ル者名アリ、本州四方ノ山皆アリ、獨得名コト曉シ、就中白峯諸山及八ガ岳ニ產スル者、色深黄ニシテ光潤アリ、味殊ニ温和

へ渡セシコト、大和本草ニ云ヘリ、本經逢原ニ、蘆川中者、中空色正黃、截開分瓣者爲上、雲南水連次之、日本與楚爲下ト云ヘリ、續編ニテハ加賀ヲ上トス、仙臺ノ產ハ加賀ニ次グ、毛ナクシテ短ク、五分許アリ、續編ニタツプ〱ダト云フ、皮色黃ナルコト加賀ニ同ジ、越前ヨリ出ル者ハ二分許、連珠ノ形ニシテ鬚ナシ、又越後美濃ヨリモ出ス、又江州日野ヨリ出ルモノハ、形細クシテ毛ナク、長サ四五分許アリ、又丹波ヨリ出ル者ハ、最肥大ナルコト加賀ト同シテ多毛ナリ、雞爪モアリ、羽州ノ庄內ヨリ出ルヲ雲樵ト云、形細クシテ、長サ二三寸、連珠ニナラズ、佐渡ヨリ出ルハ、外皮黑ヲ帶ビ、內ハ黃色、長サ四五分ヨリ一寸許、播州ノ笠形山ヨリ出ルモノハ、肥大ニシテ丹波ノ如シ、此外和州紀州ヨリモ出ス、越中ヨリ出ルニハ數種アリ、ブル黃連モアリ、凡ソ黃連ハ形ノ肥瘠ニ拘ラズ、實實シテ黃色ノ深キモノヲ佳ナリトス、形肥大ナリト雖ドモ質虛シ、或ハ青色或ハ黑色ヲ帶ルモノハ、ミナ下品ニシテ用ルニタヘズ、加州及ビ奧州ノ南部津輕ノ黃連ハ菊葉也、卽蘇頌ノ說ニ、葉似甘菊ト云フモノ是ナリ、凡ソ黃連ノ葉ハ厚クシテ硬ク光アリ、冬枯レズ、正二月先ヅ花莖ヲ出ス、高サ三五寸、其末ニ數花互生ス、大サ三四分、外ニ五ノ長瓣アリ、內ニ十ノ短瓣アリ、色白シ、又黃色ヲ帶ルモノアリ、紫色ヲ帶ルモノアリ、花ノ中心ニ小青莢アリ、周リニ黃蕊ヲ布ク、花終リテ新葉ヲ生ジ、舊葉枯ル、花後ニ米粒ノ大サナル莢ヲ結ブ、凡ソ一花ノ後十許ノ小莢圍ニ並ビテ車輪ノ如ク、ソノ大サ錢ノ如シ、莢ノ中ニ黃色ノ小子アリ、熟スレバ自ラ落チ、明春嫩苗ヲ生ズ、又別ニ一種大葉黃連アリ、コノ葉ハ菊黃連ヨリ小ク、岐多クシテ芹葉ニ似テ大ナリ、丹波及城州愛宕山ノ溪間ニ生ズルモノ皆コノ種ナリ、又長葉黃連アリ、大葉黃連ニ似テ長シ、若州ニ產ス、又芹葉黃連アリ、形モ大サモ芹葉ノ如シ、和州畝日山ニ生ズ、又畑葉黃連アリ、芹葉黃連ヨリ細カナリ、江州伊吹山、比良山、城州大原ノ寂光院、及ビ鞍馬山ニアリ、是蘇頌ノ說ニ葉如小雉尾草ト云者ナリ、小雉尾草ハタチシノブナリ、以上ノ黃連ノ花實ノ形皆同ジ、又一種五加葉ノ黃連アリ、城州天

獐耳細辛

〔本草綱目啓蒙圖譜九山草〕獐耳細辛略○圖　スハマサウ　莖ヲ抽テ一花開ク、六瓣或七八瓣、品類多ク、花色各異ナリ、根ハ杜衡ニ似テ紫褐色、單葉ノ菊花ノ如シ、

〔草木育種下美花〕獐耳細辛(さんかくさう)本草　又すはまさうとも、ゆきわりさうともいふ、加賀國白山に多あり、白花のもの多し、又淡紅あり、又薄紫もあり、深碧色深紅色のものは稀なり、夏は日陰にて冬は日陽よき、山の黒ぼく野土等の地に植べし、花は正月に開く、其頭霜除をしてよし、夏中少づゝ米泔水を灌べし、人糞は惡し、

黃連

〔本草和名七草〕黃連、一名王連、本條一名石髓、一名金龍子、已上出釋藥名　和名加久末久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕黃連　本草云、黃連一名王連、和名加久末久佐

〔箋注倭名類聚抄十草〕蜀本圖經云、苗似茶、花黃、叢生、一莖生三葉、高尺許、冬不凋、江左者節高如連珠、蜀都者節下不連珠、圖經云、苗高一尺已來、葉似甘菊、四月開花黃色、六月結實似芹子、色亦黃、生江左者根若連珠、其苗經冬不凋、葉如小雉尾草、正月開花作細穗、淡白微黃色、

〔大和本草六草〕黃連　常州ノ山產尤佳也、賀州ノ產多シ、是亦ヨシ、奧會津又奧州ニモ多シ、葉ハヒカゲノカヅラニ似タリ、日本ノ黃連性ヨシ、故ニ中夏朝鮮ニモ日本ヨリ多クワタル、中夏ノ書ニモ倭黃連ヲ良トス、

〔重修本草綱目啓蒙入山草〕黃連　ヤマクサ延喜式　カクマクサ和名鈔　今ハ通名　一名滴膽芝輟耕錄
宣連方書、宣城黃連ナリ、　川連同上、川中ノ黃連ナリ、　株連同上、上品ノ黃連ナリ、　淨黃連[illegible]　增、一名脚連、證治準繩　宜黃連附方

加州ニ產スルモノハ、形肥大ニシテ根頭三五枝ニモ分レテ、鷹爪雞爪ノ形ノ如シ、卽鷹。爪。黃。連。雞。爪。黃。連。ト名クルモノナリ、今藥舖ニ加賀黃連ト稱スルモノ、多クハ越中ノ產ヲモ總ジテ云フ、昔年ハ舶來ナシ、明和年中ニ渡ル者最上品ニシテ、加州ノ產ヨリ肥大ナリ、又古來本邦ヨリモ唐山

猫草

山野向陽ノ地ニ多シ、春宿根ヨリ數葉叢生ス、形唐種ノ防風葉ニ似テ光滑ナラズ、莖葉トモニ白毛多シ、三四月一尺許ノ莖ヲ出ス、ソノ巓ニ細小葉莖ヲ抱キ並ビ生ジ、上ニ數枝ヲ分ツ、枝頂ゴトニ一花倒埀シテ鈴鐸ノ如シ、長サ八九分、濶サ六分許、後開テ日ニ向テ仰ギ、六瓣ニシテ紫赤色外ニ白毛多シ、中ニ一簇ノ紫絲アリ、黄蘂コレヲ圍ム、花衰テ瓣蘂倶ニ脱ス、中ノ紫絲漸ク長大二寸許圓ニ簇リテ四ニ埀ル、ソノ絲甚ダ細ク、淡紫色ニ變ズ、後又白色ニ變ジ、風ニ隨テ飄リ飛去ル、絲根ニ小子アリ、落ル處ニ苗ヲ生ズ、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥
相模國卅二種〇中略 白頭公一斤、〇中略 安房國十八種〇中略 白頭公三斤、〇下略

〔出雲風土記 仁多郡〕凡諸山野所在草木、白頭公、

〔散木奇歌集 九 雜〕ものへまいりける道に、草のふみつけられて有けるをみてよめる、
道のべによみまだかるゝ翁草かる人もなき歎きをぞする、

〔梅花無盡藏 七二 雷鳴句〕白頭翁草（本草云、白頭翁、又謂二之王使者、又謂二之奈何草一、細午、）
此草深衣司馬公、無端編入藥方中、白頭不改有餘習、元祐老成存一叢、（新應本草叙云、草而不用者白頭翁、石而不用者太陽玄精、）
秋自一莖先時加、無媒偃路厭君家、白頭翁有負時色、合伴元嘉以後花、

〔武江産物志 藥草〕鼠山ノ産　白頭翁（ヲキナグサ）（鼠山村ニ、）

〔佐渡志 五 物産〕白頭翁　方言セカイソウ　山野ノ間ニ稀ニアリ

〔大和本草 九 雜草〕猫草　國俗又曰白頭翁、本草山草上載白頭翁、粗似而不同、山野ニアリ、葉ハ艾ニ似タリ、莖葉堅硬ナリ、花ハ紫ニシテ其形ツルベノ如ク、鈴ヲ俯セタルガ如シ、内紫也、外ニ白毛アリ、花三月ニ開ク、其葉ヲ食ヘバエグシ、南星ヲ食タルガ如シ、毒草ナルベシ、花散テ其アト蒲公英ノ毬ノ形ノ如シ、

寸餘、皆披下、似蠶頭、正似白頭老翁、故名焉、今言近根有白茸、陶似不識、蜀本圖經云、有細毛不滑澤、花蘂黃、開寶本草云、今驗此草叢生、狀如白薇而柔細稍長、葉生莖頭、如杏葉、上有細白毛、近根者有白茸、圖經陶注、則未述其莖葉、唐注又云、葉似芍藥、實大如雞子、白毛寸餘、此皆誤矣、

〔物類稱呼 三生植〕白頭翁　ちごばな　一名　おやぐさ　京都にてうないこ、又せがいさう、(春界の諸に、大會の天狗の首僧正坊と有、其髪に似たりと云、)大坂にてひめばな、江戸にておきなぐさ、(是和名なり)畿内にてちごばな、美濃にてがくさう、加賀にてけし〳〵まないた、甲斐にてけいせいさう、木曾にてかぶろ、越中にておにごろ、又てんぐのもとゞり、仙臺にてちゝんこ、下野にてちゝこ、又かはらちご、筑前にてねこぐさ、せがいろう、飛驒にてものぐるひ、又かつしき、四國にて尉(じやう)どのと云、

〔重修本草綱目啓蒙 七山草〕白頭翁　ナカグサ(和名鈔)　ヲキナグサ(同上)　ゼガイサウ(筑前、信州)　シヤグマザイコ　シヤグマグサ(石見)　チヽカウ　チゴバナ(加賀、播磨)　チンコバナ(信州)　チヽンコ(仙臺)　チチコ(野州)　カハラチゴ(同上)　チンゴ(但州)　チゴノマヒ(越中)　ヲチゴバナ(水戸)　カハラバナ(仙臺)　カハラザイコ(越後全書)　ガクモチ(濃州)　カヅラ(同上)　ガタサウ(同上)　フロワブキ(參河)　子コグサ(筑前)　子コバナ(筑後)　ゲジ〳〵　マナイタ(加州)　ダンゼウ(同州)　ゼウドノ(四國)　カブロ(木曾)　カブロナウ(伊州)　ヒメバナ(大坂)　ヲニゴロ(越中)　テングノモトヾリ(同上)　ウナイコ(花家)　ウ子コ(薩州)　ウナイコ(肥後)　ウバガシラ(松前)　ヲバガシラ(津輕)　ヤマブシバナ(石見)　シヤンゴバナ(羽州、龍野)　ホウコグサ(同上、播路)　コラコラ(同上、築村)木　コマノヒザ(仙臺)　ケイセンタハ(備前、美作)　ケイセイサウ(甲州、信中)　ヌスピトバナ(肥前)　ヌスドバナ(大和)　ハダマ(紀州)　キツ子コン〳〵(備後)　ラカンサウ　モノグルヒ(飛州)　カツチキ(同上)　ガンボウシ(上野)　ジイガヒゲ(薩州)

一名野丈人(本經異名)　老翁鬚(藥性奇方)　注之花(鄕藥)

草木

〔剪花翁傳 三 四月開花〕風車　花白、微淡赤に青みを含み、莖本に陰入也、開花四月上旬、方半陰、地一分黒土えらばず、肥淡小便春彼岸前芽出しの時、一兩度そゝぐべし、分株春芽出しまへよし、形デシンに似たり、

仙人草

〔廣益地錦抄 五〕仙人草　蔓草にてかづらは多くもかれず、夏白花おほくさきてながめたへず、はなくわんかう甚よく遠くくんずる、遠近によらず、かきねにからませ尤うへべし、外科におふく用る、此葉をあやまりて口中に入レば齒うごく、甚敷は齒おつる、いたむ齒をぬきたきには、此莖をくわゆれば早くぬける、

〔草木育種後編 下 蔓品〕大蓼(せんにんさう)　俗に仙人艸といふ、和蘭にてヲッブ、スターンデ、グレマチュスといふ、葉及花を藥用とす、園中の樹木籬邊に纏(まとは)しめてよし、又是が莖葉大毒なり、口中に入る、事なかれ、

唐松草

〔和漢三才圖會 九十二 末 山草〕唐松草(からまつさう)　俗稱 正字未詳

按唐松草生山中、春生苗、苗凋更生、莖葉似人參而細小、面青緑背淡、三椏五葉、四月莖端開白花、無花瓣、而匠人如剪成松葉、俗稱唐松也、花落蕊殘、其蕊青黄色亦似花、聞希結實、有種如麥顆而青色、

一種有小唐松、莖葉稍小而莖帶紫色、其花有白有紫、今人家移種甚可愛、

一種有雪黒草、高四五寸、葉花並似唐松草而白、(又有淺紅及紫)

白頭公

〔本草和名 十一 草〕白頭公(陶景注云、近根處有白茸、似人白頭、故以爲名、)一名野丈人、一名胡主使者、一名奈何草、一名羌胡使者、(出蘇敬注)和名於岐奈久佐、一名奈加久佐、

〔倭名類聚抄 二十 草〕白頭公　陶隱居本草注云、白頭公、(和名於木奈久佐、一云奈加久佐、)近根處有白茸、似人白頭、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕蘇注云、其葉似芍藥而大、抽一莖、莖頭一花、紫色似木菫花、實大者如雞子、白毛

風車草（かざくるま）　本名未詳　小兒所ㇾ翫之風車似ㇾ此花形ㇾ故名

按風車草者、鐵線草之類、而葉不ㇾ同、花亦鐵線六瓣、是乃八瓣也、葉大ㇾ於鐵線、而無ㇾ又、一枝三葉、四五月開ㇾ花、單葉蒼碧色、又有ㇾ白花者、有ㇾ千葉者、花綻藥亂、形與ㇾ鐵線之總ㇾ同、凡鐵線出ㇾ葉於舊枝、風車出ㇾ葉於舊枝、

〔重修本草綱目啓蒙十五蔓草〕威靈仙　一名能消證類本草　壽祖鱗經鉢

集解ニ說クトコロ、草本藤本ノ二種アリ、藤本ノ者ハ時珍說クトコロノ鐵脚威靈仙ナリ、和名テ。ツ。セ。ン。卽漢名鐵線蓮ナリ、秘傳花鏡ニ鐵線蓮一名番蓮、或云、卽威靈仙ト云リ、廣東新語ニ西洋蓮西洋菊ノ名アリ、花戶ニ多ク栽ユ、人家ニモ栽テ花ヲ賞ス、和州ニハ自生アリ、春時芽ヲ舊藤ヨリ發ス、一根數條赤色竹木上ニ纏延スルコト甚長シ、節ゴトニ葉纔相對シ生ズ、葉ハ山蔘（ボタンヅル）ノ葉ニ似テ小シ、夏ニ至リ花ヲ生ズ、一莖一花大サ二寸餘、六出或ハ八出、形玉葉花（トケイサウノ）如ク碧色、中心ニ細小紫瓣簇生シテ菊花ノ如シ、又白瓣紫心ノ者アリ、皆外瓣先ヅ落チ、內瓣後ニ凋ム、其根數十條一窠ヲナシ、長サ一尺餘、淺黑黃赤色、又一種カザグルマト呼ブ者アリ、葉大ニシテ楕ナリ、三葉一朶ヲナシ、大蔘葉（センニンサウノ）ニ似タリ、花ハ鐵線蓮ヨリ大ニシテ紫心ナシ、碧色、白色、千瓣、單瓣ノ數種アリ、赤鐵線蓮ノ一種ナリ、多ク人家ニ栽テ花ヲ賞ス、

〔草木育種下美花〕鐵線蓮（てつせん）鐵花　山の野土にうへ、酒粕人糞を入てよし、枝を伏て土を懸置、根を生じて分植べし、棚を三尺ぐらいに低搆てよし、又花白して千葉（やへ）なるものを、ゆきおこしといふ、又かざぐるまは碧色にして花大なり、

〔剪花翁傳三四月開花〕鐵線花　花一重、色水淺黃、開花四月中旬より六月中旬迄あり、方半陰、地二分濕、土えらばず、肥油粕芽出しまへに入べし、又花前にも入べし、蔓を生ずるを地に入て根を取、秋彼岸に移すべし、葉はハタナ蔓のごとし、

鐵線花 風車草

名ナリト云ヒ、二物ナリトノ説アリ、

(重修本草綱目啓蒙十五草)女萎 ボタンブル ワクブル シンデンカブラ丹州 ワクノテ備前 ナベカラマリ同上 スクモカブラ勢州 チヤカブラ石州 ドンドロ勢州 一名蔓地楚啓蒙

山野ニ多ク生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ジ、藤蔓蓄長シ葉對生ス、形大參(センニンサウ)葉ニ似テ小ク、皆三尖ニシテ牡丹葉ノ狀アリ、秋ノ初枝ノ梢ニ數十花簇生ス、白色四瓣、形大參花ニ似テ小ク、實モ亦相似テ小シ、秋後苗枯ル、是即救荒本草ニ載スル所ノ山蓼ナリ、一種草本ノ者ハ深山ニ生ズ、葉大ニシテ秋芍(シヤ)藥(ク)ノ葉ノ如シ、夏秋ノ間花ヲ開キ穗ヲ成ス、白色又淺紫碧花ナルモノアリ、皆四出ニシテ下垂ス、俗ニフリガチナウト呼ブ、救荒野菜譜ヲ白頭翁トスト云者是ナリ、今花戸ニテ漢種ノ白頭翁ト呼ブ者ト相同ジ、女萎ニ同名アリ、根ヲ用ユル者ハ萎蕤ナリ、苗ヲ用ユル者ハ本條ナリ、

(延喜式三十七典藥寮)諸國進年料雜藥
備中國卅二種、略〇中女萎四斤、阿波國卅三種、略〇中連翹、女萎各二斤、讃岐國卅七種、略〇中連翹、女萎各五斤、

(出雲風土記秋鹿郡)凡諸山野所在草木、略〇中女萎、

(書言字考節用集六生植)鐵線花(テツセンクワ)

(和漢三才圖會九十六蔓草)鐵線花(てつせんくわ) 本名未詳
按鐵線花二月苗生、於宿根一莖三葉、微似芍藥葉而小、莖細靱甚勁、故俗曰鐵線、無蔓、其葉乃倚架繁衍、四月開花、蕚下有六葉抱莖、亦一異也、其花白色六瓣、平開而蘂圓、紫色最艶美、其蘂綻則似綟、天蠶絲爲之綟、其本有子採之、八月種之、
千葉鐵線 外六瓣白色如常、而内瓣亦白色千葉短細隨開、藥青色、外瓣既綻落則内藥開、

草牡丹　福壽草　女萎

如蘭如菊則可也、何爲求其瑕疵、○下略

〔大和本草 七花草〕草牡丹　葉ハ牡丹ニ似タリ、單白花ヲ開ク、實牡丹ニ似タリ、自宿根生ズ、又實ヲマキテ生ズ、是亦牡丹芍藥ノ類ナリ、

〔和漢三才圖會 九十二本山草〕山芹菜　俗云草牡丹

救荒本草云、山芹菜生山野間、苗高一尺餘、葉似野蜀葵、稍大而有五叉、又似地牡丹葉亦大、葉中攛生莖叉、梢結刺毬、如鼠粘子刺毬而小、開花黲白色、葉味甘、

按草牡丹高一尺、葉略似牡丹、四月開白花、似芍藥而單葉稍小、

〔大和本草 七花草〕福壽草　フクヅク草トモ、元日草トモ云、春初ヨリ黄花ヲ開ク、盆ニウヘテ賞ス、花ハ朝開キ夕ハチフル、又明朝ヒラク、葉ハ胡蘿蔔ニ似テ花ハ草山吹ノ如シ、寒ヲヲソル、夏ハ陰地ヲ忌ミ蠶ヲ畏ル、又白花アリ、

〔和漢三才圖會 九十二末山草〕元日草　福壽草

按福壽草洛東山溪陰處有之、冬枯春生於宿根、肥莖高二三寸、葉似胡蘿蔔及石長生葉而小、歲旦初開黄花、似半開菊花、人以爲珍、植盆稱元日草、春夏長尺餘、生枝條花綻開不堪見、

五雜組云、有歲蘭、其花同蘭而葉稍異、其開必以歲首、故名歲蘭、此亦元日草一類二種乎、

〔草木育種 下美花〕獻歲菊（ふくじゆさう）　又雪蓮（西域聞見錄）ともいふ、蝦夷にてはシユクトといふ、山に多生す、一尺餘りて花大なり、又淺黄福壽草あり、莖綠色して花淡黄なり、又重瓣ふくじゆさうあり、形狀八重菊のごとし、是は花開こと遲し、山の野土に植べし、盆栽は花少し、花の時は霜除を揃てよし、夏の内米泔水を根廻へ灌、少し油糟を用もよし、

〔倭名類聚抄 二十草〕女葳蕤　拾遺本草云、女葳蕤、一名黃芝、（葳音威、蕤音汝誰反、和名惠美久佐、一云安麻奈、）

○按ズルニ、女葳蕤ハ女萎葳蕤トアルベキヲ、萎ノ字ヲ脱セシナリ、而シテ女萎葳蕤ハ一物異

〔實隆公記〕永正六年四月廿七日戊子、自室町殿芍藥數莖被下、公條卿〈御使胡同〉祝著之由申入了、

〔時慶卿記〕慶長十四年三月廿五日、御所ノ芍藥牡丹見廻申、芍藥ノ甘汁ヲ懸御目候、女御殿芍藥見廻候、折節御座候ヲ御盃ヲ給、又常御座之所ノ花壇モ申付候、　十五年九月廿日、芍藥駿府へ可進上用意候出來候へ、則入置、

〔伊達文書〕追而申候、〈○中略〉御去年駿下候刻、御數寄屋にて見申候芍藥申請度存候、京都には一切無御座候、被分候御次而も候はゞ大望に候、返々左近身上之儀、猶々上總さまへよきやうに奉頼候、以上、

二月十〈○慶長六年〉六日　勧修寺中納言　光豊〈花押〉

大崎少將殿

〔本朝無題詩〈四〉〕閏三月盡日翫事

鳥散花飄眺望然、顧長臺處恨相同、〈○中略〉芳塘移榻彙斟酒、醉對數莖芍藥叢、　藤原敦基

〔霞峯文集〈百十六論書〉〕題芍藥

時維四月芍藥開數、當階遶砌、有客戲語曰、何爲殿春哉、欲爲姚王魯僧品藻鄙花以用之歟、不然空負花中宰相名乎、余代之對曰、夫人各有所長短、花亦宜然、請試論之、〈○中略〉於是論芍藥曰、曾聞禹貢揚州厥草惟夭、謂芍藥也、蓋未知其眞定論、而出溱洧士女之謔、則其名既久矣、及入上林而相如賦其和味、至謝者中作五言以賞其花、杜少陵王右丞共詠之、白香山柳儀曹等亦題焉、然廣陵遊揚州者不吟之、則當時猶未稱甚歟、逮宋朝有四相之賞、有萬花之會、常父之序、貢父之譜、蘇黃之詩、王觀之論、廣行於世、其名闘姚魏、逮有宰相之號、然則花之隱顯有時者、猶人之有出處也、汝王亦然、謝康樂以前知其名者鮮矣、及唐而盛、及宋而彌繁、其稱王稱后可、謂富貴也、然或嫌其豪奢、或戒其國色、若至褒斜採之爲新、則花之榮辱、亦猶人之有行藏也、汝既爲花相、則宜取其所長莫攻其所短也、唯其清如梅如蓮、其芳

入レテ、二尺許深ニ軟膨(ボヤカシ)置、右苗代ニ爲立タル芍藥ノ苗ヲ、二尺隔ニ一坪九本ヅヽ植付ベシ、既活着タラバ能ク他草ヲ耘リ、時々壅養水ヲ灑ギ、五年許モ右ノ如ク養ヒ置クトキハ、根能ク蔓リ肥テ、一株數十本ノ懸根垂下ル者ナリ、五年目ノ冬十月初ニハ悉掘リ採リテ、其掘跡ニ厩肥ヲ澤山ニ入レ、能ク軟膨置テ、他物ヲ作ルトモ、又芍藥ヲ植ルトモ、其宜ニ任スベシ、芍藥ハ第十番ノ氣候ニ應合スル草ナレドモ、五六番ヨリ第十五番以下ノ寒國ニモ、能ク善衍スル者ニテ、入用極テ多キ藥物ナリ、宜ク多ク作ルベシ、芍藥ハ他ノ作物トハ其趣異ニシテ、五年ノ間ハ植タル儘ニシテ掘リ採ルコトノ無キヲ以テ、甚事簡ニシテ入手ノ掛ラザル者ナリ、故ニ土地廣ク百姓少キ國ニ於テハ、別シテ利潤多シ、能ク培養ヲ厚クシテ、此物ヲ作ルトキハ、五年間ニハ一坪ノ地ヨリ十斤以上ノ根ヲ出ス、一坪十斤アルトキハ、一段三千斤ナリ、此ヲ金一兩八十斤ニ賣ト雖ドモ、其價金三十七兩二歩ヲ得ベシ、此ヲ五年ニ割ルトキハ一年七兩二歩ニ當ル、人手ノ掛ラザル作物ニテ一段年々七兩二歩ノ金ヲ得ルコトナレバ、利潤モ亦大ナリ、國土ヲ領スル者ハ察セズンバアルベカラザル所ナリ、

〔廣益國產考一〕國產となるべき物を左にあぐ

芍藥 是も薄地に作りて益を得るもの也、大和吉野郡宇多郡より作り出せり、隨分作りて農家に利を得るもの也、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略 芍藥四兩、 相模國卅二種、○中略 芍藥黃耆前胡各一斤、 武藏國廿八種、○中略 芍藥三斤、○下略

〔毛吹草三〕信濃 芍藥 若狹 芍藥 但馬 芍藥

〔出雲風土記島根郡〕凡諸山野所在草木、○中略 芍藥、

るとなり、白を多く種べし、是も山に自然と生たるが性よけれども、又里に種るをも用ゆべし、種る地は、よく肥たる砂地に、ちと土のまじりたるよし、眞土も肥たる地の、ねばりけなきはよし、地ごしらへは、粉糞、熟したる馬糞、或やき糞などにても、其地味により見合、是をまじへ、其上に熟糞をかけ、よく乾し、度々うちかへし、こなしならし置て種べし、種かゆる事あらば、八月末九月始、其年の節によりて考へうゆべし、子を種る法、地を右のごとくこしらへ、畦の間一尺ばかり、其上に深さ三寸程に筋をほり、熟糞土を敷、子を蒔る事、一寸餘に一粒づゝ、付合ぬ様にちどりあしに種べし、又肥土にて七八分程に、種子おほひすべし、生て後夏は日おほひをし、冬は雪霜のふせぎをし、二年めの九月の比、又別に熟地をまた・め置て、畦の濶を二尺ばかりにして移し種べし、四五年に至ては、其根大になり、藥種と成べし、十月の初掘取、よく洗ひ日に干、かたくなりたるを收置、藥屋に賣べし、但中以下の地には種べからず、山下の里猪鹿多く、穀物は作り難き所に肥地あらば尤多く作るべし、

〔草木六部耕種法四[illegible]〕芍藥牡丹ヲ作ル法

芍藥　山中自然生ハ、性味强クシテ上品ナルコトハ論ズルニ及バズ、然レドモ入用ノ甚多キ藥物ニテ、勿論自然生ニテ用ノ足ベキニ非ザルヲ以テ、種子ヲ蒔キ苗ヲ爲立テ、此ヲ作ラザルコトヲ得ズ、凡芍藥苗ヲ爲立ル法ハ、先墳土或壚土ノ日當リ能キ場處ヲ撰ビ、新墾故畑ニ拘ハラズ、牛馬ノ力ヲ用テ細耕シ、此ニ馬糞ヲ入ルコト、一畝十荷ノ割合ニシテ能ク耙交置、然シテ後ニ芍藥ノ實ノ能ク熟シ、黑色ニ成タルヲ採リ、直ニ此ヲ右苗代ニ蒔テ、其上ニ小便灰一升、細土二升ヲ混合シテ厚三四分程覆土スベシ、容易ニハ芽ノ出ザル者ナリ、時々壅養水ヲ灑ベシ、且寒中ハ馬糞ヲ厚ク其上ニ掛ケ置クヲ良トス、翌年モ能ク他草ヲ耘リ、秋ニ至テ先其植地モ、墳土カ壚土ノ日當リ能キ場處ヲ、新墾故畑ヲ論ゼズ、牛馬ヲ用テ幾遍モ犂返シ、且厩肥ノ能ク腐レタルヲ澤山ニ

ルニタラズ、ソノ實ハ殻赤色ニシテ黑子アリテ、美ナルコト花ニマサレリ、深山ニ多シ、俗ニタチボタンナト云、信州ニテヤマシヤクジヤウト云、備後ニテノシヤクヤクト云、和州宇陀ニテ此根ヲ栽ヘ培養シタルヲ、宇陀芍藥ト云、粗皮ヲ去リ曝乾シタルモノナリ、外白色切レバ內ニ黑キ輪アリ、味酸シ、又信州ニテ培養シテ出スヲ、信濃芍藥ト云フ、又丹波伊勢ヨリ山生ヲ取、直ニ乾シタルヲ出ス、コレヲ田舍芍藥ト云、最下品ナリ、

〔廣益地錦抄四〕芍藥　しやくやくは花相といふて、ぼたんに次り、はなに數百の品有て、二階三かいあり、金銀のもやうあるゆへ、金しで、銀しで、金手まり、砂金金盞など、みな金銀の名あり、藥種の芍藥は各別の物なり、葉形草立も少似てちがひあり、花ハひとへ小りん、川骨の花のごとくにて天をむきてひらく、ながめにたらず、秋實をむすぶ、其實われて三方四方へわかれ、內は皆朱にぬるがごとくに赤く、花よりまさりて見るにたれり、紅白の二種有り、紅の根は赤芍、白は白芍なり、

〔剪花翁傳三四月開花〕芍藥花　花白、淡紅、濃紅、紅白斑入等品數多し、開花四月中旬、方日向、地中濕、土回塵、肥大便、寒中芽出るまへ、淡小便そゝぐべし、分株、移、秋彼岸よし、上品なるを俗にまがきといふ、蕊大總にして亂れず、莖直く連りて、英皿のごとく、辰の刻より開き、未の刻に蕊收て蕊を掩ひ包む、翌日も開くこと昨日のごとし、是のごとくなる事、四五日におよぶ也、下品なるものを、俗に呼て頭子といふ、乃ち開きしまゝにて次第にしぼむ也、

〔農業全書十草種之類〕芍藥　芍藥は牡丹に相つぎ、和漢古今ともに、世人花を賞するものなり、殊さら近來都鄙其花を弄ぶ事さかんにして、年を追て其花しな〴〵多くなれる事いふばかりなし、藥種には花の一重なるを用ゆ、白を白芍藥と云、赤を赤芍藥といふ、醫家に白芍藥を多く用ひ、赤は只十にして二三も用ゆ

近時名花之芍藥頗多出、凡五百有餘種、不ㇾ遑悉記、惟愛ㇾ花者則紅白最鮮明、其花形如ㇾ盤、而中蘂如ㇾ帶、其帶皆黄金色者爲上品、凡牡丹芍藥連花欲ㇾ插ㇾ瓶、早晩剪不ㇾ宜、至巳時或申時可ㇾ伐用、不ㇾ養長、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕芍藥　ヱビスダサ〔延喜式〕　ヱビスグスリ〔和名鈔〕　ヌミグスリ〔同上〕　カホヨグサ〔歌書〕　今ハ通名　根一名錦繡根〔綱目〕　解倉〔事物紺珠〕　養性〔典籍便覽〕　黒辛夷〔同上〕　黒牽夷〔事物異名〕　婪尾〔同上〕　辛夷〔事物紺珠、時代異名〕コブ　花一名吐錦〔尺牘雙魚〕　儲客〔典籍便覽〕　擁香璉〔同上〕　玉盤盂〔事物異名、典籍便覽〕　冠芳〔綱目〕　近客〔事文類聚、本草綱目〕　艶友〔同上〕　何離〔三才圖會、汝南圃史〕　可離〔古今注、典籍便覽〕　殿春客〔花鏡、事物異名〕　婪尾春〔典籍便覽、酉陽雜俎ニ、飲ムヲ婪尾ト云、三巵〕　大脚花〔本草綱目〕　〔花相〔牡丹ヲ花王ト云、芍藥ヲ花相ト云フ〕　牡丹近侍〔事物紺珠〕　嘗薔薇面〔同上〕　增一名解倉〔千金翼方〕　沒骨華〔王氏畫苑〕

唐山ニテハ揚州ノ芍藥、洛陽ノ牡丹ト稱シテ天下ノ名物ナリ、ソノ品名揚州芍藥譜ニ三十一種ヲ載ス、群芳譜ニ三十九種ヲノス、秘傳花鏡ニ八十八種ヲノス、年ヲ逐テ幻變スルコト知ベシ、和產モ亦然リ、ソノ品類ハ花壇綱目、花壇大全等ニ詳ナリ、藥ニ入ルヽハ、花圃ノ根ヲ以テ養力ヲ假ラズシテ栽ルモノ、生乾ニシテ用ユベシ、藥舖ニテコレヲ眞ノ生乾ト呼ブ、城州長池ヨリ出ス、タダ粗皮ヲ去テ乾タルモノナリ、又唐樣ト稱スルハ、濃波ニ擬シテ沸湯ニ浸シ過シ、乾スユヘニ性味薄シテ生乾ニ及バズ、根ノ赤白ハ花ノ色ニ隨ト、時珍ノ說ニ云ヘリ、然レドモ舶來ノ赤芍藥ハ皆粗皮ヲ去ラズシテ乾タルモノナリ、白芍藥ハ皆皮ヲ去リ蒸乾スモノナリ、正字通曰、舊以ㇾ花色ㇾ分ㇾ赤芍白芍、或言根黑乾爲ㇾ赤芍、刮ㇾ去根皮ㇾ蒸乾爲ㇾ白芍、白者益ㇾ脾、赤者行ㇾ血滯、今コノ說ニ從フ、又和ニテ芍藥ノ陳腐ニシテ賣レガタキモノヲ水ニ漬シ、赤色ニ變ゼシメタルヲ赤芍藥ト稱シテ、貨ルモノアリ、僞物ナリ、

又字陀芍藥信濃芍藥ト云アリ、和ニテ古來上品ト云傳フレドモ、是ハ草芍藥山芍藥ニシテ、山ノ自然生ナリ、眞ノ芍藥ニアラズ、葉ノ形ハ同シテ、花ニ紅白ノ二種アリ、皆單葉ニシテ形チ小ク觀

ツレバ非芍藥、蓮子ノ名ナリ、シテウトヨムヤウアリ、カクヨミツレバホヤノ名也、木ニオウル蔦也、

〔大和本草 花草七〕芍藥　其花牡丹ノ次ナリ、故ニ花相ト云、詩經鄭風溱洧篇ニ芍藥ヲノセタリ、故ニ王元之芍藥詩譜云、百花之中其名最古シト云ヘリ、藥ニハ赤白芍藥共ニ、山中ニ自然ニ生ジテ單ノ紅白花ナクヲ用ユベシ、世俗園中ニウヘテ花ヲ賞スルヲバ用ユベカラズ、中華ヨリ來ルハ其形カハレリ、花園ニウフルハ、中世中華ヨリ來レルナルベシ、今世ハ千葉、單葉、紅白、其品甚多シ、奥州河沼郡千笑(チヤウ)原ニ、壽永年中越後ノ城四郎長茂、千根ノ芍藥ヲウフ、是ニヨッテ千笑原ト云、今ニ滿原皆芍藥ナリト云、是亦自然生ニアラズ、昔ウヘシナリ、王觀芍藥譜曰、今芍藥有三十四品、日本ニ今所在ハ其數彌多シテカゾヘガタシ、

〔和漢三才圖會 芳草九十三〕芍藥(しやくやく)　將離　〇中略　和名衣比須久須里、一云沼美久須里、

本綱、有白者、(名金芍藥)赤者、(名木芍藥)千葉者、(名小牡丹)十月生紅芽、至春乃長、夏初開花五葉、似牡丹而狹長、高一二尺、有紅白紫數種、其品凡三十餘種、有千葉單葉樓子之異、入藥宜用單葉根、結子似牡丹子而小、其根之白赤隨花之色也、洛陽牡丹揚州芍藥甲天下、

氣味、(酸而苦、氣薄味厚)　陰也、降也、爲手足太陰行經藥、入肝脾血分、白補而赤瀉、白收而赤散、其用凡六、安脾經、一ッ治腹痛、二ッ收胃氣、三ッ止瀉痢、四ッ和血脈、五ッ固腠理、六ッ同白朮用、(補脾)同川芎、(瀉肝)同人參、(補氣)同當歸、(補血)以酒炒、(補陰)同甘草、(止腹痛)同黃連、(止瀉痢)同防風、(發痘疹)同薑棗、(溫經散濕)　產後不可用、但酒炒不妨、(惡石斛芒硝、反藜蘆)

按芍藥花容婥約、(婥約者美好貌)故俗亦名貌好草、(加保與久佐)　蓋唐芍藥多內外赤色而白者鮮矣、出於本朝信濃者最佳、伊勢丹波之產次之、凡人家所栽者花美好也、而入藥以山中者爲佳、或用豆知阿介比根僞之、形狀相似矣宜辨之、

徒調夫五味、甘甜之和、勺藥之羹、七命云、味重九沸、和兼勺藥、論衡譴告篇云、酸酒於器、烹肉於鼎、皆欲其氣味調得也、時或鹹苦酸淡不應口者、由人勺藥失其和也、嵇康聲無哀樂論云、大羹不和、不極勺藥之和、皆其證矣、服虔注子虛賦列或說云、以勺藥調食、亦未嘗審信也、而顏師古乃云、勺藥草名、其根主和五藏、又辟毒氣、故合之於蘭桂五味、以助諸食、因呼五味之和爲勺藥、及考古人飲食、未聞有用勺藥者、既已無可據證矣、乃云今人食馬肝馬腸、合勺藥而煮之、是古之遺法、據其說則今人非食馬肝馬腸、且不用勺藥、何以知古人用勺藥助食乎、然且歷詆諸家、妄爲音訓、斯爲謬矣、焦循曰、上林賦云、宜笑的皪、索隱引郭璞曰、鮮明貌也、又明月珠子、玓瓅江靡、索隱引應劭云、其光耀照於江邊也、張衡思玄賦、嫮朱脣而微笑兮、顏的礫以遺光、注云、明貌、左思蜀都賦云、暉麗灼爍、劉淵林注云、豔色也、魏都賦云、丹藕淩波而的皪、注云、光明也、勺藥之華、鮮豔外著、其稱勺藥、猶灼爍也、

〔下學集 下草木〕芍藥（異名將離草、又云可離草、[illegible]云、芍藥[illegible]、[illegible]一對句也、〇[illegible]）

〔重修本草綱目啓蒙 三草〕一芙蓉芍藥ト云芍藥ハ何物ゾ

芍藥ニ二アリ、芍藥ト木芍藥トナリ、此ノ邊ニツチニ牡丹ト云フモノハ芍藥也、木芍藥ト云ハ木牡丹トテ、イロ深紅ニテ一エナルガ、黃ナル色ノアルモノ、、事歟、白芍藥ト云フハシロキハナノサクナルベシ、ウルハシキ牡丹ハ此ノ土ニイマダワタラズ、宋人コトニ秘藏スルウヘニ、大ニシタモタリニタキ故歟、牡丹ハ草ニ非ズ、木ノ如シテイツモクキノカレウスル事ナシ、フルキ枝ヨリメグミイブル也、其レニ花葉ヲ生ズ、芍藥ノ如クトシゴトニツチヨリワカバヘ出ル事ハナシ、芍ノ一字ヲバチヤタトヨムヤウアリ、調美ノ詞ニ芍藥醬ト云ヘリ、是ハ芍藥ヲシホニツクルニハ非ズ、芍藥ノ根ニハ五味ヲ具足スト云フ事、醫書ノ中ニ見エタリ、此ノユヘニ氣味ヲト、ノヘタル心ヲイハントテハ、芍藥ノ和ト云ヒナラハセリ、芍藥ノ醬ト云フモ、醬ノ氣味ヲヨクト、ノフル心ヲ表スルナルベシ、調味ノ方ニハチヤタトヨム、又芍ノ字ヲテキトヨム事アリカクヨミ

芍藥

一地中にありて出はなれざる牙を白子といへり、少にても根あれバ切はなし、植てよくつく物也、牙かくるゝほどに、細成砂をかけて、底なき曲物をきせ、寒中に霜雪を凌ぎ、曲物の中いてあがらぬやうにして置也、春快菜をする物也、他に遣す時、白子などありて、残置時のためなり、

〔本草和名〕八草 芍藥、音若反 一名白木、一名餘容、一名犂食、楊玄操音力兮反 一名解倉、楊玄操音胡買反 一名鋋、仁諝音蟬 一名甘木、出雜要訣 一名里攣夷、出釋藥性 和名衣比須久須利、一名奴美久須利、

〔倭名類聚抄〕二十草 芍藥 唐韻云、芍藥 芍音酌約反、新抄本草云、和名衣比須久須里、又奴美久須里、藥草可和食也、

〔箋注倭名類聚抄〕十草 廣韻引蕭該、藥草作香草、本草、芍藥生中岳川谷及丘陵、陶注云、今出白山蔣山茅山最好、白而長大、餘處亦有、而多赤、圖經云、芍藥春生紅芽作叢、莖上三枝五葉、似牡丹而狹長、高一二尺、夏開花、有紅白紫數種、子似牡丹子而小、根亦有赤白二色、鄭風溱洧毛傳、勺藥香草也、太平御覽引詩義疏云、今藥草勺藥無香氣、非是也、未審今何草、司馬相如賦云、勺藥之和、揚雄賦曰、甘甜之和、勺藥之羹、然則勺藥又入食也、王引之曰、西山經云、繡山、其草多芍藥、中山經句欄之山、條谷之山、洞庭之山、並云、其草多芍藥、則芍藥山草名、名醫別錄云、芍藥生中岳川谷及丘陵、陶注云、出白山蔣山茅山最好、白而長大、餘處多赤、與山經合、則古之芍藥、即醫家之藥草芍藥也、今人畦種之、離騷所謂畦留夷者矣、其根莖及葉無香氣、而花則香、故毛詩謂之香草、猶蘭爲香草亦是花香莖葉不香也、至司馬相如子虛賦、勺藥之和、揚雄蜀都賦、甘甜之和、勺藥之羹、皆是調和之名、陸氏引以證勺藥之草誤也、伏儼注子虛賦云、勺藥以蘭桂調食、文穎云、勺藥五味之和也、韋昭云、勺藥和齊鹹酸美味也、勺丁削反、藥旅酌反、晉灼云、南都賦曰、歸雁鳴鵽、香稻鮮魚、以爲芍藥酸甜滋味、百種千名、文說是也、李善云、枚乘七發云、勺藥之醬、然則和調之言、於義爲得、今案勺丁削反、藥旅酌反、勺藥之言適歷也、適亦調也、說文𪏰字從厤云、厤調也、與歷同、又云秝希疏適歷也、讀若歷、周官遂師注云、磨者適歷、執綍者名也、疏云、分布希疏得所、名爲適歷也、然則均調謂之適歷、聲轉則爲勺藥、蜀都賦云、有伊之

〔採藥使記 甲州 下〕重康曰、甲州御城中ニテ牡丹ヲ見シニ、甚ダ大ク木ノ高サ一丈五尺バカリモアリ、花ハ未ダ見ズトイヘドモ、色紅ニテ年ニヨリ百二三十輪モ花ヲ開クト云フ、誠ニ土地ニ應ジタル故カ、願クハ此根ヲ採リ藥用ニセバ、其功甚効アランコトヲ、

先生按ズルニ、牡丹ノ大木トナルコト所々ニアルコトナリ、攝州兎原郡熊内村ト云フ所ニ、高サ一丈餘ノ牡丹アリト、輿地通志ニモ載タリ、又中華ニモコレアルニヤ、湧幢小品ニイハク、青城山ニ牡丹アリ、樹ノ高サ十丈、六十年ニ一度寫花開ク、永樂年中花咲シ時、蜀獻王使ヲ以テ見セシム、即チ花ヲ取リテ歸リシト、廣群芳譜ニモ引ケリ、

〔武江產物志 草類〕牡丹　西ケ原牡丹屋 日暮立三　深川八幡 門前中富　上北澤村 左内圃中　龜戸社内 先年大牡丹あり、天明の洪水に枯る

〔續江戶砂子 五〕[illegible]樹の部
緋の衣ぼたん　上野御本坊

〔牡丹道しるべ 乾〕一花の盛ハ大かた立春より九十日なり、下品のはなハ十日も早く咲出る也、一國の内にても、少の遲速あるなり、洛中都外二日の違有、南都ハ五日遲し、勢尾の兩國八十八夜の比大概たがはず、駿府ハ六七日はやし、賀州越前五七日遲し、攝州播陽ハ氣候同して京にハ二日もはやし、筑陽ハ五日はやし、

〔牡丹道しるべ 坤〕一牡丹の苗芽を矢と名付る事、人每にいへども、いかなる故といふ事をしらず、或人云、生發の氣をさして矢といふにやと、しからバ矢といふ名ハ余のもろ〳〵の苗芽に通やべしと、おもふに牡丹の子の親木のもとより眞すぐに生出たる、其形恰もよく矢頭に似たるゆへに名付る成べし、げに似たる物を能ぞ思ひ出たるとおかし、それ皆人の物に名付る事、其形をもつてする、此類おほし、尤實ばへのハ矢といはず、

牡丹雜載

有ナルベシ、○中略

林又云コトアリ、曰年少ノ時、王子村飛鳥山ノ手前ニ、西ケ原ト云所アリ、ソノ處ノ豪農斯花ヲ多ク植テ、牡丹屋敷ト稱シ、春毎ノ見物群到セリ、王侯貴人ハ其宅ヲ借切ニシテ終日ノ宴席トシ、各家ノ紋幕ヲ張テ、雜人ノ入ルヲ許サヾル日モ有リキ、然ルヲ何ツノ間ニカ廢シテ、今ハ其處ヲ知ル人サヘ無シ、彼モ一時ナリ、此モ一時ナリトヤ云ベキ、流居士曰、カヽル好事サヘモ盛衰互ニアル、況シヤ朱家權門ノ榮枯老目ノ歷ル所ナリ、

〔玉海〕承安二年四月廿日戊午、此日法性寺所被植置之牡丹、蓮華王院○後白河依有御尋也、以隨身重武令付定能朝臣、

〔攝津名所圖會 七 豐島郡〕熊内牡丹くまうちのぼたん 熊内村醫生の家にあり、初は高サ丈餘の牡丹ありし由、今枯てなし、舊記に載て名世に高ければ、こゝに記す、

〔玄同放言 二〕山牡丹山橘附出

山牡丹ハ苑圃中に植うるものとおなじからず、我邦にはこれなしといふものあり、しかれども煙霞綺談卷四云、遠州秋葉山の麓、いぬゐ川の上なる京丸といふ小村の片邊り、嶮岨なる山の半腹に大木二本あり、その一本は遠くより見る所凡四圍許、又一本は二圍もあらんかし、初夏に花開を見れば、その色白く徑尺許りに見ゆる也、これ牡丹なりといへり、ちかき比その村なる人に問けるに、これまぎれもなき牡丹也といへりとしるせり、鈴木素行神農本經解故卷八云、本邦牡丹無山生者、惟遠江州山中有之云、未詳といひしは、彼京丸なる山牡丹を仄に傳へ聞きたるなるべし、按するに謝肇淛云、五雜組物部二余在嘉興吳江、所見牡丹酒有丈餘者、開花至三五百朶、北方未嘗有也、かゝれば唐山にも牡丹に巨大なるもの罕にはありと見えたり、我遠江なる山牡丹も、そら言にはあらぬなるべし、

日の夕ぐれにさへなりぬればと讀みたる人は、その花のふかみ草をしらぬ類なるべし、まことに紅白相まじへて咲き出づるさま、近來の人擧りて賞とせざることなしといへり、かくてその書に志せる牡丹四十三種なり、花每に注釋あり、詳にして且盡くせり、卷尾に丹花四十三色也、獨遊軒飯會と寫して花押あり、花會の會主なる歟、當時の流行想像るべし、寛永の巨菊、元祿の百椿、ちかくは寛政の橘、昨今の牽牛花と異なることあらじかし、おもふに歐陽氏牡丹譜に載するものの九十餘種、こは錢思公が嘗て錄しつるものにこそあなれ、花品敍には、永叔が親を經る所、人の稱するものを取りて、纔に二十餘種を出だせりか、〻れば我寛永の四十餘種、寔に寡きにあらず、寛永を最盛にして、この花漸々に衰へたり、されば余〇澤解が總角のころまでは、駒込のあなた、西が原てふ處に、茶器を鬻く牡丹屋とかいふもの〻別莊に、多く牡丹を植ゑしかば、俗に牡丹屋敷と呼び做したり、そが家號を牡丹屋といひつるも、牡丹を愛るによりてなるべし、これもはや夢と覺めけん、今は其處に、さるものありとしも聞えず、海内の名產輻湊して、よろづに乏しからぬ大江戸なれども、今にして牡丹の生花を見んことは、三千歲に一たび花さくといふ優鉢羅花よりもかたくなりぬ、

〔甲子夜話九十八〕林蜂洲折簡往來ノ次デニ、北澤ノ牡丹屋敷ハ、君知ルヤ否ト、予〇松浦清知ラザルヲ以テ答フ、又云フ、ソノ花品數種版刻セシ者アリ、君見ルヤ否ト、予未ダ見ザルヲ以テ對フ、又我儕ニ此編九十五卷ニ題目掌果ト云ル、武州玉川邊ノ村里ヲ記ス者ヲ載セシ中ニ、甲州道新宿ノ奥ヲ高井戸ト云フ近所ニ、北澤鈴木左内庭中牡丹多シト記セシガ、正シク是ナルベシト思ヒシニ、尋テ林子ヨリ彼ノ版刻ノ摺本ヲ贈ル、展觀レバ花王ノ富貴恰モ盡セリ、但楊紙幅大ニシテ縮寫シ難キヲ以テ、分豁シテソノ次第ヲ綴ル、

林又曰、名花ノ品七百種ヲ論ルハ珍甚ニ止ム、眞ニ泰平ノ餘化ト云ベシ、實ニ斯花始リ自來未曾

いへども、牡丹のはなにてハなし、牛の異名也、昔唐土の劉訓と云し人、繋水牛在前、指曰、此劉訓が黒牡丹也と、それよりして牛の異名なりとす、

第三
一重に四品あり、一重、八重、千重、万重也、此内八重千重を上とすべし、一重ハたらず、万重ハおほし、又盛上て芎藭咲矢倉咲といふハ、蘂の中より細き蕋出る、皆下品也、凡蕋五蕋より十五六に及迄を一重とし、廿蕋より廿四五蕋に及ぶを八重とし、それより次第におほく、百蕋近きまでを千重とし、百蕋以上あらバ万重と知べし、重おほきはなハ、木によつて綻る時、内へ雨入て蘂くさる事有、雨入ざる様にすべし、自然雨入たらバ、よく其雫を落べし、吹拂てもよし、

第四
一實ハ紅にハ赤き實よし、白にハ黒ろきよし、いづれも小瓶子なりを上とす、白牡丹に青き實有、是も赤く黒くうるみたるよりハよし、紫陽より出し花に、袖の内といへる白ハ實異黒也、されども花色花形よきによりて上品と、すたとへバ松の葉北斗紅ハ實裂る也、裂るハ實の第一疵なれども、花の色能によつて上品とせり、九品相揃ふ事なきにより、一ツ二ツの難ハゆるす、餘ハ是になぞらへて知べし、實ハ小く破れざるをよしとす、大にして破るを嫌ふ、○下略

〔閑窻自語〕本朝愛牡丹事
わが國にぼたんを愛せしこと、保元以前よりはじまれるなり、○中略靈元院法皇ことにめでおはしましけるよし、たしかに志るせり、

〔玄同放言 二〕山牡丹（山欅附出）
本邦にても、近世牡丹を鍾愛すること盛になりしかば、種々の異名さへ負はして、吟味せざるものなかりき、されば寶永の比に至りて、この花を弄ぶこと、異朝唐宋の時に讓らず、當時春桃散人といふもの、牡丹論談一卷を著はしたり、こは寶永八年二月上旬の事なり、撰者の自序に云、春の

とも稱するなり、

一（第二）花好人ハよくはなを見知べし、されど年を追ふて國々より名花あまた出れバ、中々見覺がたし、見知たるはなにても、年によりて出來不出來あれば、かたく爭ふべきにあらず、或ハ白に染出る事肥過る故也、紅に黑み出、またハ薄色の様になる事も賤く肥過る故也、むざと褒しする事嘉しと覺ゆ、本草に、秋多移接以壌土、至春盛開、其狀百變、故其根性殊失本眞とあれば、色替り花形替事尤也、又春雨繁き年は、紅色必薄しと知べし、

上花ハ色重實葉形畫葉能よくして、葩のもとに染なきを上品とする也、

色ハ紅白とふに艶く麗しく光り有をよしとす、咲出る時ハよきとても、早くさむるハほめず、散まで色を失はざるを第一とす、むかしの魏家の紫牡丹ハ、ならびなき名花なりと聞ゆ、今ハ紫とだに聞バ見る人なし、姚家の黄牡丹のたぐひ今ありたりとも麗しく興有べしと思ん哉、叟に薄黄牡丹と名付ル有、色ハ木槵の花に似たり、かさね薄し、或ハ白に紫の飛入ハ有物也、昔唐の明皇の時、牡丹を獻ずる者有、貴妃其時おもてをとゝのふるに、口脂手に有を以て葩上に印す、然しむるに來歳花開て紅の迹有、それにより一捻紅と名付給ふ、今筑陽に此名を呼あり、其類といふべし、韓湘子が瑠璃盆中に、碧玉の花の牡丹に似たるを咲せけるハ、仙術なれバ、さも有ぬべし、又宋の單父と云し人ハ、種藝の術を得て、牡丹を千種に變せしめしかバ、上皇勅して驪山に牡丹万株を植しむるに、花開て其色をのゝ異なりしかバ、是より呼て花神と稱し、又花師と名づけ給しとなり、今叟に紅白定めがたき花あり、爪紅粉、柿牡丹、はじもみぢ、法花、臘月、行事官など、其外も有、いづれも替ずといへども色替りと云、花壇の彩に間種る也、總て花に青黄赤白の四色有て、黑色ハなし、いかんとなれバ、黑ハ北方の色水にして陰也、母の道なれバ、母は内にゝありて養ふ事をつかさどりて、外に色をあらはす事なき故成べし、世に黑牡丹と

一ニ位といふに四等の分有り、一位未見、二位三位ヲよしとする、四位ははふれたるとぞ、
二ツニ形といふに五様あり、富貴、艶麗、厳格、亂雑、枯槁なり、富貴艶麗をよしとす、
三ニ色に二種有り、咲出あかみたる様なるは珠玉咲也、あをみたる様なるは碧玉咲也、珠玉咲は花ニ光りありてよし、碧玉咲は花につやなし、又是にたがへるもあるべし、酢あり、しみ有、しひしみ有ルは上花の外なるべし、
四ニ重は、五ツ葩より十五葩にいたりて一重とす、廿葩より四十葩までを八重とす、四十五葩より百葩迄を千重とす、百葩の外万重とす、八重千重をよしとすとぞ、
五ニ實に形容大小高下赤白有り、白ニ黄白有り、銀白青白有、赤に薄赤、木瓜色、濃赤、薄紫、こい紫、黒色有り、形ニ瓶子有、實の首五ツにわれ、七ツにわる、あり、白は銀白、紅はこいあか、小瓶子をよしとす、芥子實鈴實共いふ、
六ニ蘂はすべて黄なり、淡濃多少長短あり、黄にして少をよしとす、
七ニ葩は厚圓薄缺有り、捏縮有、ひらめくつぼむあり、厚圓にしてつぼむをよしとす、
八ニ葉に大小長短類縮弱垂圓尖あり、其色紫碧淡濃あり、細長にしてつよきをよしとす、黛たる色をよしとする、
九ツ木に強直なるあり、巻曲なるあり、のびやかにほそすぐ成有、すなをにのびやかなるをよしとす、
〔牡丹道しるべ乾〕第一牡丹と題に書てハ、紅牡丹の事に成べきか、丹の字あかしと讀バ、赤きハ花の本體也、白く咲により白牡丹、紫に咲により紫牡丹とハ云めり、又紅牡丹と云も、紫白にえらばんがためしにあれバ、重言といふべきにもあらじ、本草、時珍曰、牡丹以色丹者爲上、雖結子而根上生苗、故謂之牡丹とあれバ、元來紅なるべし、群花品の中に、又以牡丹第一とすれバ、世に花王

牡丹賞翫

く覆たるハ花のたもち久しき物也、心を付べし、
一花壇の引墓ハ、或ハ紫或ハ黒く、あるひハ青きよし、赤白の二色ハあしかるべし、
〔剪花翁傳 前編二 三月開花〕牡丹〈ぼたん〉 季ハ四月なれど、剪花者ハ好て蕾搭を剪を以て春牡丹と稱す、花の色赤、淡紅、中紅、濃紅、底紅、紫白朱諸色斑入等、花名數十種枚擧すべからず、開花三月末八十八夜頃也、方日向、西北の塞がりし所いとよし、春彼岸より專ら風透をよくすべし、地花壇三分砂、土回鏃、肥寒中大便、移春彼岸、又立冬前後よし、接春彼岸切接にすべし、春芽出し前油粕を入べし、又十日ばかり經て一度、又同じく一度、都合二十日に兩度許入べし、花の時に雨覆ひすべし、夏月炎天に葭簀もて日覆ひすべし、花長の刻より開きて直花亂れ、花共に約やかに正しく、末の刻より葩收て蕾を掩ひ包む、翌日亦開くこと昨日のごとし、是のごとくなること、四五日におよぶを上花とす、下花なるは開し形ち約かに正しからず、葩外裏に反て、聊も蘂を掩ひ包ますして凋む也、さて花壇の花の明日咲べきを、今日開かんことを需バ、兩三日已前より藁筵などをもて四方を圍ひ、油障子を覆ひ、天日を隔て受べし、乃今朝開花すべし、又今日開くべき蕾を明日迄保たせんにハ、若蕾而已を昨夕方に剪て、逆水をかけ水器に入、雨風の當らぬ冷陰の所におくべし、冷寒あらバ益よし、夜に入て水器と共に紙袋を覆ひ、戸外の庭に置く、雨も亦厭ふべし、戸外ハ夜分冷氣强し、斯して明日まで開かず、〈略〉○〈中略〉圖に云、千兩牡丹是春牡丹の一種也、開花も育方も上に同じ、花の色初開は極紅にして、中頃ハ白く、後は淡紅になる也、毎一輪に是のごとく色變れり、此樹ハ池田北の口より三町許北、木の部村、牡丹屋嘉十郎の庭中に在、是一家の珍花にて、剪花者の扱へるものにあらざれど、名種たるをもて出せり、
〔地錦抄 一〕牡丹凡例
牡丹は總體を九品に分て見るべし、九品と云は、一位、二形、三色、四重、五實、六蘂、七葩、八葉、九木也、

枚張位の鳳しの糸程なるしゆろ縄にて、接口をざつと結び置、花だんに植、穂共に土を懸、末つば鉢を懸置、二月中頃見廻りて、夜中鉢を取、晝ハ又懸、霜降様子なれバ夜中も懸置、雨降らバ雨に當、一度に鉢を取らず、默し取にすべし、芽出たる後下肥二三度懸べし、上方にてハ瓦にて燒たる末鍋程の鉢、頭に巾一寸計窻のごとく切拔たる鉢をかける、當所ハ寒氣强きゆへ末鍋鉢よし、正月末頃より右の窻明たる鉢を覆ふても吉、植替ハ九月初より二月迄吉、至くハ九月よし、

〔牡丹道しるべ乾〕廿六一瘦木にてもあれ、假に長せしめんとて、糞などつよくする事よろしからず、雨の水取置て、日を經て少小便をませて、寒に入て根先とおもふ所にかくるよし、總じて有つかぬ木に糞を嫌ふ、膠なども少ハよろし、

廿七一寒を凌ぐに、馬糞を根にをく人あり、寒國の雪ふかき所にてハ、さもあるべきも、暖國にてはすまじき事也、寒中に疊の表を切合て、根もとをよく覆たるよし、やはらかなる藁を敷てもよし、寒强く土いてあぐる所ならバ、わらのうへにひらみなる石など置てよし、木に霜覆する事よろしからず、木健ならず、さくはなもよはし、寒暑ともに少ハあつるよし、極寒極暑にハ蘆簾をかけてよし、寒國にて大雪など凌ぐハ、格別の事なれバ覆すべし、大雪に覆落て牡丹折る事ある事也、心得あるべし、

廿八一木を洗ふ事、葉落て後、雨降に根のうごかぬやうに、棕の箆にて苔を落すべし、洗ふて後椿の實をくだき、布につゝみて油の出る程にしてぬぐふてよし、常の油にてもよし、木立うつくしくなりて、花なけれ共、一入挑と成物也、但さい〳〵につよくあらふハ、痛にも成べければ、心をつくべし、あらはざる木は無奇麗にて惡し、

廿九一覆ハ、油引たる障子ハ移りよく、はなも一入ひかりありて、能見ゆれども、日氣油氣をとをしおかして、花痛事なれバ、いかゞと覺ゆ、何の覆にても、高く仕たるハよし、はなにちかきハ惡し、遠

は、初より本壽にして然るべし、

生て後水肥度々懸、四月末頃より下肥二三度懸てよし、其年九月初頃分て植る、節一本立にして根元の芽をかきて植べし、分木等植るも皆同様なり、

植替至き時節は秋彼岸より三十日過たる時植替時節也、夫より十一月迄よし、又は二月頃もよし、

植替の節根に腐りあらバ、竹べらにてこそげ、日に干て植る、又白きかびあらバ水へ漬、まゆろだわしにて洗ひ、日にほして植べし、腐りたる根ハ多くあるとも残らず取捨、能あらひ植るに、少し根あれバ氣遣ふ事なし、

九十月頃、木の皮を竹べらにてこそげ見改むべし、上皮の下に白く貝がら虫付あらば、こそげ落し、跡を柔らかなる筆にてこすり、生姜のしぼり汁を付て置べし、

植土ハ、畑の並土一升、赤土一升、砂三合、黒土の場所にてハ砂計少し入て吉、下肥を懸置て用ゆる

花だん植肥ハ、寒中右三品の合せたる土を少し高くして、其中へ人ふんをたび〳〵入（[illegible]るにてハなし）埋置、腐りたるを其土にもみ合せ置、根の元近所を見計ひ掘、其土と取替る、秋冬の中かくのごとくす、其節根を改白くかびたるごとく見ゆる木は堀出し、根を前文の如く洗ひて植る、左に記すごとく、秋冬のうち[illegible]にても吉、作方委くハ十一巻目にあり、爰には荒増を記す、摂州豊島郡池田の在に山方谷郷とて十三ケ村有て、諸木の苗木牡丹を接挿して諸國へ出す、株牡丹ハ丹波國、又ハ攝州の中高平にて挿、池田の郷へ送る、

牡丹接挿方

當所にてハ株拂底ゆへ、接挿心の儘に出來ず、若株木あらバ接も吉、秋彼岸十日程後接時節也、穗の削様ハ少しはすに削て吉、細き株ハ穗も株もはすに削合す、是をいも接といふ、油紙にて包、二

をも濯ほどそゝぎてよし、牡丹のめにどろ付たる所あらば、白水にてあらふべし、木に白虫付時是を不洗ば木枯る也、實の蒔やうは、六月土用過七月初に實を取則蒔なり、茶がら壹升に土をまぜ一粒づゝ並て、其うへに茶がら五分ほどかけて、蛤貝かぶせて置なり、二月中旬の比、右の貝をとるべし、

〔草木育種下編品〕牡丹本草　和名はつかぐさ詞花集ふかみぐさ延喜式なとりぐさ万葉集といふ、山城にて多作、又大坂にて接江戸へ送、其類多し、秘傳花鏡に百三十一種を載、總て赤土に合肥を切まぜ植てよし、又砂を少し入たるもよし、接法は常の牡丹の砧へはす接にしてよし、群芳譜に牡丹八月接べし、又枝を扦て活といふ、〇中略肥は人糞を多土へ切まぜ、百日ほどねかし置て用べし、又猪屎を用、又狗糞を用て妙なりと花鏡に見ゆ、然ども群芳譜に、牡丹尤忌犬糞と云り、種樹書曰、牡丹花上穴如針孔、乃蟲所藏處、花工謂之氣窗、以大針點硫黄末、針之蟲乃死、或百部草塞之、貝原花譜曰、牡丹冬至前後、鍾乳粉と硫黄とを末し、根を掘開て周圍に置べし、來春花盛なり、牡丹道知邊に小科を白子と名く、分植べしと云、

〔草木錦葉集〕牡丹實蒔幷植作方

牡丹の事は上方より下る品を植置たる事はあれど、實蒔其外作りたる事一切なし、予が父〇水野某父牡丹の實蒔して作りたるを、見聞し事どもを左に記す、

牡丹實蒔は七月末頃、實黒く成たるを採、すぐに實少しなれば土器に入、多くあらば土ほうろくへ乾きたる土を誠に少し厚サ一分程入、其土の上へ實を程よく並べ、古板にても蓋をしてかりまきにしたるの也水地にてなき場所を一尺五六寸掘て、右の土器を埋置、寒明て四十日程過掘出し、花壇にても畑にても土を少し高くして植る、其節土器の中にて根出あるゆへ、日の當らざる様にすべし、當所は寒氣强きゆへ、初より地へ蒔ては根計出て芽出ざるゆへ、列て枯る也、暖氣なる土地にて

をき、二月蒔べし、手かたく皮厚く、其まゝうへては生じかぬるゆへ、中までは痛まざる程少かみて、皮にちとわれめをつけてうゆべし、又は秋實を取て、深くよく肥たる地に、其まゝ蒔置て、糞土を以ておほひ、霜の中馬糞を多くおほひ置たるは、皆がたを付ずしても春になりて生出る物なり、南向の所に蒔べし、移しうゆる事は、一二年にもかぎらず、苗四五寸ばかりの時、九十月の比よし、うゆる地の事、區を廣さ二尺餘にして、一尺五寸程深くほり、埋糞に牛馬糞枯草など多く入れ人糞の類は入ずして、肥土を以てふさぎ、區ゝと〱の間、三尺餘に一科づゝうへ置て、毎年馬屋糞、其外糞を多くをきて、四五年の後根を掘取べし、淨く洗ひ、手にてをしはり、曲らざる様にして、干をくべし、賣て厚利の物なり、尤毎年は根をとらずして、二三年に一度づゝ掘取といへども、手入により根莖はびこり、其上斤目多物なるゆへ、過分の利を得べし、是久しくして、利を見る物なるゆへ、廻り遠き事の様なれども、沙泥の肥たる暖なる所にて、いつとなく、年々に苗をうへ立置ば、却て他の作り物より手間も入ず、無生作にて利潤は多し、殊多く作りたらば、若、園に勝れたる名花も出來べし、然れば一へんの利賣のみにあらず、面白くやさしき作り物なり、

〔花壇綱目下〕牡丹植養の事

一牡丹植の法は、九月中旬より十月中旬の比まで、分植て可然なり、掘て植時、根の高卑其節を見分、土を間々へ能入て、根のいごかぬやうに土をかけ植る、土高く置あげて、其うへに植て根先のさがるやうに植べし、土はしらけたる赤土に、砂を十分一くわへ、下肥を多く切ませ、百日計置て糞氣くさりませて、土の肥たる時こまかにくだきふるい用なり、霜月初よりくわだんに馬のふみたるわら、馬糞どもあつく置べし、根廻ほり置は悪し、正月の末二月中比雪きへて、右のわらをとるべし、砂計に油糟壹升程ませて、壇にちらし、塵埃のなきやうに掃て置なり、花の時は蘆簾にて日覆をして可然也、花の後にはとるべし、夏は茶がらを根廻に置て、晩景に白水あるひは清水

牡丹栽培

功ヲ以天地造化ノ力ヲヌスンデ成之、良ニ可佳也、近年本邦ニ牡丹ヲ賞スル事甚盛ナリ、歐陽永叔ガ牡丹ノ譜ニ、牡丹ノ名九十餘種ヲ載タリ、今日本所在其品甚多シ、

〔和漢三才圖會九十三芳草〕牡丹(ぼたん/ふかみぐさ)　花王　鼠姑　鹿韭　百兩金　木芍藥　和名布加美久佐○中略

按、牡丹根皮、山城大和多出之、而家種者不入藥用、凡牡丹芍藥花貴重也、和漢時代同、本朝聖武帝時盛賞之、今亦奈良多出名花、諸國富家一株價以數百金移栽之、歲歲出珍花、故近於千品、其名不枚舉焉、千葉而厚徑六七寸、純紅如柘榴花色、而形儀全備、甕子小而不綻者爲極上、純白者亦以此可准知、夏月採川圯、西乾古園土細砂以上三品篩和、八九月出紅芽後可移栽、培之不可用糞灊、冬月用油滓、少入根傍、或濃鮮魚洗汁亦佳、四月開花、花落甕破結子、七八莢、八月莢裂中子黑色、十粒許如豆大、候將落時、採直蒔之、如經久者難生、春載粒出生、如豆初生、五六年後初可見花、總珍花出於子種、而有紫花而白殺者、或本純白末紅者、或黑牡丹、多牡丹等之異品、然所貴重者、止純白純紅之二耳、紫者爲最下、正黃者未曾見之、謝肇淛成之言當焉、歐陽氏所謂姚黃牛家黃者其如何色耶、凡二十年以來人能接得之、而名花流布處處、蘇頌旣謂秋冬移接、則太唐自昔接之矣、

〔廣益地錦抄四〕牡丹　唐の牡丹は日本の獅子ぼたんなり、紅白の二品あり、紅といふはむらさき紅にて、花のまわりしらけてうす色なり、白といふはつやもなくうるみて、はなのうらに黑豆(コクヅ)のごとく成ルつけ有、唐繪に書しハみな此二種なり、今は、實生(みしやう)よりかわりて、紅白品々多シ、藥種には花ひとへにて紫白成ルを用といふ、

〔農業全書十藥種之類〕牡丹

牡丹は是を花王と云、しかるに花を見るのみならず、根をとり藥種とし、尤良藥にて多く用ゆる物なり、是も山城にて多く作る、花一重にして白く、又は紅紫なると、兩樣を藥種に用るなり、子をうゆる法、秋實よく熟し黑くなりたる時取置て、肥地を肯もよく糞し、なる程細かにこなし、熟し

なりぐさ(同)夜白いろぐさ(同)、たゞしこれはまめか、山たち花(是一説也、いしのうへなどにある物にはあらず、ぼたんと云り、)

〔慶玉和歌集 夏〕不加見草　牡丹(此花さく日數廿日也、仍廿日草とも號す、)

万名ばかりは咲ても草のふかみ草花の比とはいかでみてまし(○中略)

名取草　牡丹

閑竹歌折人のこゝろなしとやなとり草花みる時はとがもすくなし

むかしある女此花を愛して、おほくうへおきて、晝は終日ながめくらし、夜は終夜風に可損事を歎きけるによりて、男他心ありとて離別しけり、答なきよし聞ひらきて、もとのごとくすみけるとなん、仍名取草と號、

〔梅花無盡藏 六〕尾州中島府中總社大明神化緣疏井序(中島郡名也○中略)支那之一百五紅者、(一百五日謂牡丹名也)則敷島之二十日草也、(本邦曰牡丹二十日草、)城二而其揆一乎、

〔大和本草 七 花草〕牡丹　中華ニテ花王ト稱シ、花ノ富貴ナル者トス、中華ニ洛陽ノ牡丹ヲ名產トス、日本ニ上代ハイマダ牡丹ナカリシニヤ、萬葉古今集等ニハ詠ゼズ、詞花集ニ新院(崇德)御位ニヲハシマシヽトキ、牡丹ヲヨマセ給ヒケルニヨミハベリケル、關白太政大臣(藤忠通)咲ショリチリハツルマデ見シ程ニ花ノモトニテハツカヘニケリ、倭名フカミ草、又ハツカ草ト云、此花凡二十日アリト云、古ハ左ホド賞翫モナカリシニヤ、歌人ノ詠多カラズ、中華ニモ神農本草ニ牡丹ヲノセタリ、上代ヨリアレドモ只藥ニ用ユ、其花ヲ賞スル事、唐ヨリ以前ハマレナリ、鶴林玉露曰、牡丹自唐以前未有聞、至武后時、樵夫採山乃得之トイヘリ、中華ニモ唐以前牡丹ノ好花ハナカリシニヤ、文士ノ詠作ナシ、日本ニテ古代賞翫ナキコトムベナリ、古代ニ牡丹アリトモ、今ノ艶麗ナル花ハ未可有、牡丹、芍藥、罌粟、山茶、百合等、人ノ好ミ盛ナルニヨツテ好花イデキテ、變態百出スルハ近年ノ事也、今又多牡丹アリ、八月ヨリ葉出テ十月ヨリ花サク、臘寒ノ時モ花アリ、凡如此ナルハ、人

畫牡丹處極分明、子華北齊人、則知牡丹花亦已久矣、唐李濬摭異記云、大和開成中有程修已者、以善畫得進謁云云、會春暮內殿賞牡丹花、上頗好詩、因問修已曰、今京邑傳唱牡丹花詩、誰爲首、修已對曰、臣嘗聞公卿間多吟賞中書舍人李封正詩曰、天香夜染衣、國色朝酣酒、上聞之嗟賞移時、樂史楊太眞外傳云、先開元中、禁中重木芍藥、卽今牡丹也、注云、開元天寶花木記云、禁中呼木芍藥爲牡丹也、廣群芳譜引海記云、隋帝闢地二百里爲西苑、詔天下進花卉、易州進二十箱牡丹、圖經曰、百兩金、葉似荔枝初生、背面俱靑、結花實後、背紫面靑、苗高二三尺、有幹如木、凌冬不凋、初秋開花靑碧色、結實如豆大、生靑熟赤、根入藥、採無時、用之槌去心、嶺津、河中出者、根赤色如蔓菁、莖細靑色、四月開碎黃花似星宿花、

〔書言字考節用集 六生植〕牡丹(ハウタン) 廿日草(同、和俗所用) 牡丹(ボタン、百兩金、富貴花、一捻紅、鹿韭並同、或云一名鼠姑、未詳、宜考、本草又詩格註以其花富貴、故謂之花王、)

牡丹(フカミグサ)

〔倭訓栞 中編二十二不〕ふかみぐさ　和名抄に牡丹をよめり、周茂叔の說に、牡丹花之富貴者也といへり、かみノ反きなれば、富貴草の義なるべし、一說に牡丹の名によりてふかにくさといふ成べし、みとにと橫音通せり、牡丹は赤き花を主とすといへり、宵柏の發句に、春さかぬ花やこゝろのふかみ草といへるより、牡丹花と呼なせりとぞ、牡丹は和歌には春の季とすれど、連歌には夏の景物とす、春の末より夏かけて咲ものなり、

〔野史 歌人二百六十一〕肖柏、字夢庵、號牡丹花、太政大臣源具通之後也、(〇國史實錄中略) 大永七年四月沒于和泉南郡、年八十五、(實錄、續寄人談、)嘗詠牡丹歌曰、波留差可奴(ハルサカヌ)、波南乃許々路也(ハナノコヽロヤ)、布伽美久佐(フカミクサ)、而後聯俳家皆以牡丹附首夏、蓋自肖柏始、(〇下略)

〔藻鹽草 八草〕牡丹
ふかみぐさ (異名也〇中略) 廿日草 (このはなのさく日數廿日をかぎりてさく也、仍號廿日草とや、顯玉に有、) 名とりぐさ (〇略) (註) 照發草 (これも異名) と

古事類苑

植物部十九

草八

〔本草和名 九草〕牡丹　一名鹿韮、一名鼠姑、一名百兩金、出蘇敬注一名白朮、出陶景注和名布加美久佐、一名也末多知波奈、

〔倭名類聚抄 二十草〕牡丹　本草云、牡丹一名鹿韮、韮擧有反、和名布加美久佐、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇敬云、牡丹苗似羊桃、夏生白花、秋實圓綠、冬實赤色、凌冬不凋、根似芍藥、肉白皮丹、出漢劍南、土人謂之牡丹、亦名百兩金、京下謂之吳牡丹者、是眞也、詳蘇敬所說、本草牡丹、即皇國西俗所呼藪立花、東俗所呼藪柑子也、輔仁謂布賀美久佐、一名也末多知波奈、是草生林叢中、故名布賀美久佐、又是草葉凌冬不凋、其實四時常赤、有似橘橙、故名山橘、古藥方中牡丹皮、宜用之、今人以木芍藥根皮、爲古方中牡丹皮者誤、唐以來別有賞花之牡丹、即木芍藥也、蘇敬曰、今俗用者異於此、別有臊氣也、言唐俗藥方牡丹、誤用木芍藥也、蘇頌本草圖經曰、牡丹、花有黃紫紅白數色、此花一名木芍藥、近世人多貴重云云、圖經引崔豹古今注云、芍藥有二種、有草芍藥木芍藥、木者花大而色深、俗呼爲牡丹非也、此牡丹亦入皇國、即以漢名呼保宇多无、源君以本草牡丹誤爲賞花之牡丹、故列之女郞花瞿麥之下、金錢花萱草之上、可知也、末多知波奈是百兩金、非賞花牡丹、删之、然未知布加美久佐亦爲所謂吳牡丹、存之而不削、皆誤、後世歌人或咏牡丹爲布賀美久佐者、皆襲源君之誤也、又按唐李綽尙書故實云、世言牡丹花近有、蓋以國朝文士集中無牡丹歌詩、張公嘗言、楊子華有

核葛、後相、夢耳、受日度、年經乍、

(大和物語上)本院時平の藤原の北方の、まだ帥の大納言國經藤原のめにていますかりけるをりに、平中がよみて聞えける、

春ののに緑にはへるさねかづら我きみざねとたのむいかにぞ、といへりける、かくいひくてあひちぎることありけり、略○下

(後撰和歌集十一)女のもとにつかはしける　三條右大臣

なにしおはゞあふさか山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

(北條五代記五)關東昔侍形儀異樣なる事

諸侍の形儀異樣に振ひし、上下のひだのためやう、衣紋かりきやうに至迄も、小田原やうとて、皆人まなべり、略○中髮をばびなんせきにて、びんを高くつけあげ給へり、

(採藥使記中相州)重康曰、相州鹿倉ノ湯場ノ山中ヨリ五味子ヲ出スナリ、方言五九ノ伊ト云フ、御獻上ス、

増、南五味子ニ葉甚ダ薄クシテ、小白斑アリテ霜ノカヽリタル如クナル者アリ、冬ニ至テ紅葉シテ美ナリ、故ニ花戸ニテニシキカヅラト呼ブ、又一種尋常ノ者ニシテ、葉ニ白斑アル者アリ、又南五味子ノ莖ヲ切テ水ニ浸ス時ハ粘汁出ヅ、コレヲ以テ束髮ノ用ニ供スレバ膩垢ノ患ナク、且ツ髮ヲ長ス、

〔草木育種 下藥品〕五味子 本草 武藏、下野、甲斐等の山中にあり、略○中南五味子(びなんかづら)はさねかづらと云、下品にして藥に入らず、山の陰地に植べし、蔓太なれば肥に及ばず、初は酒粕人糞等を用べし、蔓をたわめて土をかけ置ば根を生ず、是を切て分植べし、

〔宜禁本草 乾集中草〕五味子 酸溫、皮肉甘酸、核中辛苦、都有鹹味、此五味具也、 紅熟時蒸爛、研取汁去實、熬成稀膏、量酸甘入蜜再上火、待蜜熟、後冷器中貯、作渇、脇虚寒人可化作湯、時々服作果可以寄遠、

〔延喜式 三十七 典藥寮〕諸蕃使
唐使略○中草藥五十九種、略○中五味子略○中僕奈各四斤、 新羅使略○中草藥廿四種、略○中僕奈、五味子各五升、

諸國進年料雜藥

美濃國六十二種、略○中五味子三斗三升、 安藝國卅二種、略○中五味子三升、

〔古事記 中 應神〕爾大雀命○仁聞其兄備兵、略○中既知王子○宇遲能和紀郎子之坐所、而、更爲其兄王渡河之時、具飾船檝者、舂佐那此二字以音葛之根、取其汁滑、而塗其船中簀椅、設蹈應仆、略○下

〔出雲風土記 意宇郡〕凡諸山野所在草木、略○中五味子、

〔萬葉集 二 相聞〕内大臣藤原卿報贈鏡王女歌一首

玉匣(タマクシゲ)將見圓山乃(ミムロノヤマノ)狹名葛(サナカヅラ)佐不寐者(サネズバ)遂爾(ツヒニ)有勝麻之目(アリカテマシモ)、

〔萬葉集 十一 古今相聞往來歌〕寄物陳思

泉州、紀州、播州、土州山中ニ多シ、葉ハ橢形ニシテ尖ル、南五味子葉ヨリ至テ短ク、粗キ鋸齒アリ、光澤多シ、春新葉ヲ生ジ、冬枯ルコトハ北五味子ニ同ジク、花モ亦同ジ、實モ亦穗ヲナシテ生ジ、熟シテ黑色ナリ、故ニウレシブトウド云フ、久ク貯テ潤アリ、此草蔓ヲキレバ松ノ氣アリ、故ニマツブサト云フ、年久キモノ蔓フトク皮厚シテ柔ナリ、故ニワタカヅラト云フ、コレモ亦和產ノ北五味子ナリ、南五味子ハサネカヅラ、一名ビンツケカヅラ、武州トロヽカヅラ、石見ビナンセキ、伊州ビジンソウ、大和ビナンカヅラ、豫州クツイ、紀州フノリ、土州フノリカヅラ、日州オホスケカヅラ、武州ビランジキ、江州山野共ニ多シ、市中ニモ種テ籬トス、藤蔓蒼繁茂ス、葉冬ヲ經テ枯レズ、形長ク厚ク莽草葉ノ如ニシテ、光潤ニシテ粗キ鋸齒アリ、冬春ハ葉背紫色、夏ノ末葉間ニ花ヲ開ク、形チ北種ニ同ジ、其蒂長サ一寸餘、端ニ數十實圍簇ヲナシテ下垂ス、大サ一寸許、北種ノ穗ヲナスニ異ナリ、コノ簇ヲ江州ニテ、サルノコシカケト呼ブ、實ハ落霜紅ノ大サアリ、熟シテ赤色、乾シテ仍ヲ赤クシテ潤ナシ、苦味多シテ五味備ハラズ、和ノ五味子ト名ケ賣モノコレナリ、藥舖ニ販者數品アリ、朝鮮五味子ハ形大シテ久ヲ經ル者モ潤アリ、色黑クシテ白キカビノ如者アリ、五味全備ル、尤上品ナリ、本草彙言曰、生青熟紫、八月收採、陰乾則紫黑、今吳越建南等處亦有名、南五味子陰乾色仍紅、乾枯少潤不若遼北高麗色黑肥大且滋潤也、如入滋補藥必用北產者乃良ト、漢渡五味子ハ實小ニシテ潤ナシ、サネカヅラト同ジ、即南五味子ナリ、滋補ノ藥トナスニ宜シカラズ、然レドモ朝鮮ヨリハ年久ク渡ラズ、纔ニ對州ヨリ少ブ、來ルコトアリ、色微黑赤也、本草原始ニ、鮮紅色久シテ黑色ト云ニ合ズ、今朝鮮ト名ケ賣ル者數品アリ、多ハ尾州ヨリ出ルヲ朝鮮五味子ト云、是名古屋五味子ナリ、粒大ニ黑色潤アル者ハ朝鮮ニ異ナラズ、宜用ユベシ、又マツブサノ實ヲ賣ル者アリ、通用シテ可ナリ、其粒小ナル者ハ南五味子ヲ煮テ色ヲ黑クシ、味ヲツケ乾タル者アリ用ユルニ堪ヘズ、

にてとろゝかづらと云、伊勢白子にてくつばと云、土佐にてふのりかづらといふ、又さねかづらの實、則藥物の五味子也、相州底倉邊にて五九の伊と云、

〔和漢三才圖會 九十六 蔓草〕五味子　荎藸　玄及　會及　和名佐禰加豆良〇中略

按五味子、朝鮮之產最良、中華次之、倭亦次之、日本處處多有之、而紀州田邊之產良、藝州廣島、及日向丹波之產次之、其梗(乾者形色似甘草)浸水取粘汁、塗髮甚佳、俗呼名美軟石、(名義未詳)

〔物類品隲 三 草〕五味子　二種アリ

北五味子　朝鮮種、享保中種ヲ傳テ、今官園ニ植、葉杏葉ニ似テ蔓延ス、實南五味子ト大體相似タリ、駿河產朝鮮種ト異ナルコトナシ、享保中台命アリテ藥ヲ採シムル時、始テ此物アルコトヲ知、至今每歲是ヲ官ニ獻ズ、

南五味子　和名サネカヅラ、處處ニ多シ、

〔重修本草綱目啓蒙 十四 蔓草〕五味子　一名嗽神(輟耕錄)　紅內消(醫學正傳、何首烏ニモコノ名アリ、)　菋(爾雅)　六亨　荊亨(篇海、輟耕錄ニ亨ヲ停ニ作ル、)　紅內藤(本草原始)

南北ノ異アリ、朝鮮ノ產ヲ遼五味子トシ、又北五味子ト呼ブ、朝鮮ハ唐山ノ北ニ當ル故ナリ、享保年中朝鮮ヨリ種ヲ渡ス、今人間ニ多ク栽ユ、葉杏(アンズ)葉ニ似タリ、又木天蓼(マタヾビ)葉ニ似テ鋸齒粗ク皮アリ、春舊藤ヨリ芽ヲ出シ、四五葉一所ニ攢リ生ズ、其苞內葉下ニ花ヲ出ス、嫩藤長ズレバ葉互生ス、三四月花ヲ開ク、白色ニシテ微綠ヲ帶ブ、形荷(ス)花ニ似テ至テ小ク、小錢ノ大サニシテ八九瓣、質厚クシテカヽユ、中ニ小紅毬アリ、瓣落レバ其毬漸ク大ニシテ長ク、下垂スルコト一二寸、圓實多クツヅル、生ハ靑ク熟ハ赤ク、大サ南燭(ナンテン)子ノ如シ、秋後葉落チ藤枯レズ、黃赤色ニシテ微黑ヲ帶ブ、此實久ヲ經レバ色黑ク五味備ルコト、此書ニ云所ノ如シ、此ノ種駿州ニ自生アリ、一種マツブサト云アリ、一名ヤハラブル、ウシブドウ、マツブドウ、モチカヅラ(泉州)ヤハラカヅラ、(同上)ワタカヅラ、(熊野)

落葵

新御節供事〇中略

御菜二前　一折敷　海松、青苔、午房、河骨、

〔多識編三草〕落葵、布布岐、今案豆留牟良佐岐、

〔書言字考節用集六生植〕落葵(ツルムラサキ)(天葵、繁露、同)藤菜、臙脂菜(同)　繁露草(同)

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕落葵　ツルムラサキ　一名紫草(食物本草同名アリ)　紫果(通雅書図志)　染嘉子(丹鉛録)

染絳子(本草原始)　藤菜(食物本草)　繁露(救荒本草)　浮藤菜(福州府志)　鉢菜(同上)　架菜子(物理小識)　胡臙脂(食物)

細

山野自生ナシ、春種ヲ下ス、生出コト遅シ、蔓草ナリ、葉ハ圓尖ニシテ莧(ヒユ)葉ノ如ニシテ厚ク光リアリ、淡緑色互生ス、藤蔓長シテ草木ニ纏フ、夏ノ末葉間ゴトニ穂ヲ出シ、圓小顆ヲ綴ル、白色ニシテ頭ニ五瓣アリ、粉紅色漸ク大ニナリテ實トナル、緑色ニシテ圓扁、大サ三分許、堅ニヒダ多シ、後紫色ニ變ジ、熟シテ黒色トナル、此汁ニテ物ヲ染レバ深紫色ニシテ美ナレドモ、久シカラズシテ色變ズ、實中ニ圓核アリ、大サ一分餘甚硬シ、霜後苗根共ニ枯ル、

〔廣益地錦抄七〕落葵　春種を蒔、蔓ながく垣にからみてしげる、秋實をむすぶ、まゆくして黒むらさき、色紙そむる色見事なり、つるむらさきといふ、葉は菜としてよし、つる菜ニ似たり、

五味子

〔本草和名七草〕五味(陶景注云、皮肉甘酸、核中辛苦、都有鹹味、故名五味、具、)　一名會及、一名玄及(出本條)　一名莖著(出蘇敬注、出釋名)　和名佐禰加都良

〔倭名類聚抄二十草〕五味　蘇敬本草注云、五味(和名佐禰加豆良)皮肉甘酸、核中辛苦都有鹹味、故名五味也、

〔和爾雅七草木〕玄及(サネカヅラ)(五味子、會及同、其實名)

〔書言字考節用集六生植〕五味子(サネカヅラ)　茎藷(同)　玄及(同)藤　狭名葛(万葉)

〔物類稱呼三生植〕五味さねかづら　大坂にてびじんさうといふ、東國にてびなんかづらと云、出雲

ともにかふほねに似たり、立泉花ともいふ、又丸葉あり、

〔本朝食鑑 三水菜〕萍蓬草 俗訓加波保禰

釋名、骨蓬、源順和名鈔訓加波保禰、近俗訓河骨、是據源順字典、

集解、三四月出水、莖大如指、葉似荇葉而大、初生如荷葉、長則徑四五寸、色深青、六七月開黄花、四出結實如角黍、長二寸許、内有細子、一包如罌粟、其根有如栗者、有如荷莖者、今時以如荷莖者入藥用、源順載崔禹錫食經、謂根如腐骨、花黄色、莖頭著葉、此能形容之者也、

〔大和本草 八水草〕萍蓬草 カハホネ 葉ハ芋ニ似テ厚ク光アリ、莖ツヨク水上ニタチノボル、葉モ花モ水面ニウカバズ、根大ナリ、夏月黄花ヲ開キ、秋ノ末マデアリ、一莖開一花、堪賞、本草陳藏器李時珍ガ説可考、倭流ノ外醫及女醫コノンデ用之、性ヨク血ヲ收ム、

〔重修本草綱目啓蒙 十六水草〕萍蓬草 カハホネ 骨蓬 和名鈔 骨髓 和方書 カハ 同上 カハト 仙臺
タイコノブチ

池中ニ生ズ、根ハ水底ニアリ、葉ハ芋葉ニ似テ、狭長ニシテ厚ク、面ハ深緑色ニシテ背ハ淺シ、一根ニ叢生ス、水淺キ時ハ葉水上ニ見ル、深キ時ハ水中ニアリテ、體薄クシテ色モ淺シ、夏ヨリ秋ニ至テ、粗莖ヲ抽テ水ヲ出テ一花ヲ開ク、五瓣黄色光リアリ、梅花ノ形ノ如ニシテ、大サ一寸許、瓣皆上ニ向フ、中ニ黄蘂アリ、其未ダ開カザル者ハ、形圓ニシテ鼓槌ノ如シ、故ニタイコノブチト呼ブ、一種ベニカハホネハ、花赤黄色、一種黄瓣紅蘂ナルヲ、シンクレナヰノカハホネト呼ブ、共ニ根ハ粗ク長ク、節多クシテ深緑色ナリ、和方ニ多ク用ユ、一種ヒメカハホネハ、花葉皆小ナリ、一種オカカハホネハ陸生ナリ、形狀ハリウキンクハニ似テ、莖垂レズ、花瓣ニ尖リアリ、

〔長生療養方 一藥案功能〕骨蓬 治黄疸、消渴、喉痺、

〔執政所抄 上正月〕十五日

ウフベシ、蕺ノ内ニアナアリ、絲アリ、ワカキ時皮ヲ去テ食フベシ、根ハ煮テ食フ、芋ノ如シ、

〔延喜式 内膳 三十九〕漬年料雜菜

莢一石五斗 料鹽一斗五升、米七升五合、○中略 右漬秋菜料

〔本草和名 十八〕骨蓬 根如腐骨、故以名之、一名鼓根 出崔禹 和名加波保禰

〔倭名類聚抄 十七 水草〕骨蓬 崔禹錫食經云、骨蓬 和名加波保禰 味鹹、大冷無毒、根如腐骨、花黄色、莖頭著葉者也、

〔箋注倭名類聚抄 九〕本草拾遺云、萍蓬草、生南方池澤、大如荇、花黄、未開前如算袋、根如藕、飢年當穀也、崔氏骨蓬卽是、李時珍曰、萍蓬草卽今水粟也、三月出水、莖大如指、葉似荇葉而大、徑四五寸、初生如荷葉、六七月開黄花、結實狀如角黍、長二寸許、內有細子一包、如罌粟、其根大如栗、亦如雞頭子根、儉年人亦食之、作藕香味如栗子、

〔類聚名義抄 八 草〕荊根 カハホネ 蓬 カハホネ 骨蓬 カハホネ

〔運歩色葉集 加〕骨蓬 カハホネ

〔饅頭屋本節用集 加 草木〕河骨 カハホネ

〔書言字考節用集 六 生植〕萍蓬草 カハホネ 本草、葉圓四五寸、如小荷葉、黄花結實、如小角黍者、 骨蓬 同 和名 若松 會津風土記 川骨 同

〔東雅 十三 草卉〕骨蓬 カハホネ ○中略 カハホネといふ義不詳、根如腐骨といふ註に依れば、その水中にありて、根腐骨の如くなれば、此名あるが如し、されば此物倭名抄にも、水草の類に見えて、古の時には、水菰となしてふ所の物にてありけり、言をホホネといひ、言をコホネと云ひしによらば、此物をかくいひして、別に其義ありしも知るべからず、但此物の如きは、骨蓬の字の骨を呼びてカハホネと云ひしと見えたり、

〔倭訓栞 後編 加 四〕かはほね 骨蓬をいふ、倭名抄に見ゆ、川骨の義也、かふほねともいへり、根如腐骨と食經に見えたり、蝦夷の地川骨達など一丈あまりに及ぶものあり、陸かふほねあり、花相似たり、唯水に生せず、一種萍蓬草と稱するものあり、姫かはほねと稱するは矮生のもの也、一種黄蕚紅蘂のものあり、心紅といふ、又赤花あり、べにかふほねといふ、飛入あり、薄色あり、立金花も花葉

芡

〔延喜式大膳三十三〕仁王經齋會供養料
僧一口別菓菜料、〇中略 根蓴一把、漬菜料
〔古事記中應神〕天皇聞看豐明之日、於髮長比賣令握大御酒柏、賜其太子、〇中略、仁德、御歌曰、美豆多麻流、余佐美能伊氣能、韋具比宇知、比斯賀良能、佐斯祁流斯良邇、奴那波久理、波閇祁久斯良邇、和賀許々呂志叙、伊夜袁許邇斯氏、伊麻叙久夜斯岐、
〔古今和歌集十九雜體〕題しらず　たゞみね
かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬなはたゝじくるないとひそ
〔曾根好忠集〕四月中
河上のあらふの池のうきぬなはうきことあれやくる人もなき
〔拾遺和歌集十六雜春〕題しらず　したがふ
年ごとに春はくれども池水におふるぬなははたえずぞ有ける
〔新撰字鏡草〕芡疾險反、菱屋、水〇不〇々支、　芡巨儉反、鷄頭、水不々支、　蔆水不々支
〔倭名類聚抄十七菜〕芡　爾雅注云、芡音儉、和名三豆不々木、一名雞頭草、其實似鳥頭、故以名之、
〔箋注倭名類聚抄九菜〕按是草生水中、葉似款冬、故名水款冬、今俗呼於爾波須、蜀本圖經云、葉大如荷、皺而有刺、是所以得鬼荷之名也、
〔饅頭屋本節用集草木〕水〇入〇中
〔書言字考節用集六生植〕芡實鷄頭、雁頭並同、時珍云、三月生葉貼水、大于荷葉、五六月開紫花、花開日結、
〔大和本草八水草〕芡實　葉ハ蓮ニ似テ大ニシテ、葉水上ニウカビ、皺アリ、ハリアリ、實ハ莖上ニアリ、苞ノ形鷄頭ノ如シ、故ニ鷄頭實ト云、苞アリテツヽメリ、其内ニ實數十顆アリマルシ、實ノ内白クシテ、抹スレバ米粉ノ如ク、味モ亦甘美ナリ、藥トシ食トス、毒ナク性ヨシ、凶飢ヲ助ク、池塘ニ多ク

（類聚名義抄〈八草〉）蓴、蓴、〈下正〉音純、水葵、ヌナハ、

（八雲御抄〈三上草〉）蓴　うきぬなは　ぬぬ　一説こもくろめをも云り

（下學集〈下草木〉）蓴〈ヌナハ〉菜〈晉張翰見秋風起、思呉中蓴菜鱸魚膾也、〉

（日本釋名〈下草〉）蓴　ぬは沼也、なは、繩也、沼の内にありて、くき長して繩の如し、

（東雅〈十三穀蔬〉）蓴ヌナハ　倭名鈔に、玉篇蘇敬本草注等を引て、蓴にはヌナハと註せり、莖長く繩を延べし如くにして、涎滑なるをいふなり、

（倭訓栞〈前編二十一奴〉）ぬなは　新撰字鏡に、蓴をよめり、沼繩の義也、俗に蓴菜の音をもて呼べり、根ぬなはともよびくれば、そといひかけたり、又所によりて銅拍子(ドビヤウシ)とよべるは、其葉の形の似たるをもてよべる也、池に浮て生ふるものなれば、歌に多くうきぬなはとよめり、

（本朝食鑑〈三水菜〉）蓴〈和名抄、訓奴奈波、今亦同、或以字加知作字而呼之、〉集解、處處湖澤有之、而不多、惟江州琶湖多有而肥美、味亦佳、葉如荇菜而差圓、形似馬蹄、毎浮于水上、其莖紫色、大如荇莖、而柔滑、三四月嫩葉生、昇時、煮之、則莖上著涎粘、如煮葛粉、其味稍佳、夏月開黃花、結實青紫色、大如小棟子、中有細子、子墜于水中而自生也、凡蓴作羹可食耳、

（重修本草綱目啓蒙〈十六水草〉）蓴　ヌナハ〈[illegible]〉　ウキヌナハ〈古歌春〉　ネヌナハ〈同上秋〉　ジユンサイ　〇〈中略〉池澤中ニ生ズ、葉ノ形楯ニシテ深緑色、厚シテ光リアリ、莖ハ葉ノ中央ヨリ出、葉ハ水面ニ浮ビ、根ハ水底ニアリ、故ニ莖長クシテ臺ノ如シ、莖及葉背ニ涎アリテ氷ノ如シ、嫩葉ハ卷テ荷ノ卷葉ノ如シ、春夏採テ食用トス、半夏生ノ候ヲ過ル時ハ、堅クシテ食フニ堪ヘズ、六月ニ花ヲ開ク、紫色ナリ、

（長生療養方〈一菜功能〉）蓴　主消渴熱痹、多食動痔、

世にこゆるねがひはむねの蓮にてたのむよりこそ又むかふらめ

〔時慶卿記〕慶長九年七月十一日、昭高院殿新殿ニテ連歌初而御興行也、〇中略申下刻ニ満、酒數盃、又外ノ池ノ蓮ノ邊ニテ進酒、蓮葉飯アリ、陽明ハ早御立也、廣橋ト予則御跡ニ立歩行ニテ歸京候、

〔御湯殿の上の日記〕慶長九年七月十五日ながはしより、あしたの物に、御はすのく御、御てうしひさげらる、女院の御所よりはすのく御參る、

〔武江產物志蓮類〕蓮　不忍池六月中より　赤阪溜池　池の妙恩寺下谷　向島白鳥の池　增上寺赤羽橋内

睡蓮

〔大和本草八水草〕睡蓮ヒツジグサ　ヒツジグサハ京都ノ方言ナリ、此花ヒツジノ時ヨリツボム、荇菜ノ葉ニ似タリ、酉陽雜俎及本草綱目萍蓬草ノ下ニ、唐ノ段公路北戸錄ヲ引ケリ、夏秋花サク、花白クシテ數重ナリ、蓮ニ似小ナリ、其葉如荇、其花夜ハツボミテ水中ニカクル、晝ハ又水面ニウカブ故ニ睡蓮ト云、北戸錄ニ所云ト相同、他花ニコトナル物也、蓴菜荇菜ノ類ナリ、畿内江州西土處々ニ多シ、他州ニモ多シ、

〔剪花翁傳四八月開花〕睡蓮　ひつじ艸、花一重色白く蘂黃なり、開花八月中旬、形懺泉花風車などに似たり、水中に生ず、葉莖ともに蓴菜じゆんさいにも又似たり、

〔武江產物志藥草〕井ノ頭邊ノ產　睡蓮ひつじくさ井ノ頭邊、木下川ニモ、

蓴

〔新撰字鏡草〕蓴蒓莼　三同、正補各反、直費荷也、浦穗也、借視倫反、平、奴○奈○波○、　蘋薲　同、府隣反、大萍、字○支○奴○奈○波○、　蓱　奈○女○奴○奈○波○

〔本草和名十八菜〕蓴仁諝音純、瓠立、百音義、蓴菹同、　絲蓴三四月至七八月、通名絲蓴、　環蓴、霜降以後至二月、名環蓴、已上二種出蘇敬注、和名奴奈波、

〔倭名類聚抄十七菜蔬〕蓴　野王案云、蓴視倫反、和名沼奈波、水菜也、蘇敬本草注云、自三四月至七八月、通名絲蓴、味甜體軟、霜降以後至二月、名環蓴、味苦體澀、

〔醫心方一〕蓴和名奴奈波

曾用荷葉誅人酒器飼鉢賂肆乃錄兵衞云、爾其荷葉而作此歌者、登時應聲作斯歌也、

〔菅家文草 四〕仁和二丙午之歲、四月七日、予初莅境、巡視州府、府之少北有一蓮池、池之近東有一長老、長老曰、是蓮也、元慶以往、有葉無花、仁和以來、花葉俱發、適至夏末、已過花時、長老之言誠而有驗、爾時予向彼屬作是唱言、採摘池中百千萬莖、分捨部內二十八寺、聞者隨喜、見者發心、加之香油東西供養、乃謂自我爲故、將貽後人、至于去年、亦復如是、意之所約、不爲不諾、今茲自春不雨、入夏無雲、池底塵生、蓮根氣死、天與人失、心與事違、非佛力不至、蓋人心之不信、聊叙文章、便以嗟嘆云爾、

門外小池池內蓮、圓來誰種又誰穿、種廣葉屢幾承宣、情儒漢通不得捐、提挈一時風景改、下車三度月光圓、及翦灼灼新花發、終信嚼嚼故老傳、心眼非唯似岸障、厭疑紅燭出泥燃、西方色相聞爲實、南郡榮華見可憐、尋釋凡夫機利鈍、泥成業處善因緣、同僚僵草耕權首、闔境奔波供佛前、郡計道場唯四七、擬施世界滿三千、人皆採摘分如去、我獨思惟合掌眠、未昔離心於我興、如今事竟不唐捐、先新海內長無事、次願城中大有年、從自初來言已立、欲令後到禮相沿、豈圖此歲無膏雨、何罪當州且旱天、風卷春山雲宿潤、火燒夏日地生煙、毒龍貪惜神通水、邪鬼呵留智慧泉、刺史投驅煩弊赴、禪僧修著讀經筵、悲哀鄭白渠流溜、夢想黃龍化宜近、見龜塵芳等死、遙知土穢稼苗燕、善根遂斷呼甘樹、眞實誰窮稔福田、莫笑芳修偏少力、應緣政理每多愆、魂迷案牘貲羸馬、手攜揭新編少鮮、愧館呪噉、更途厭步更遠遷、剝肌剝骨身爲餓、此偶事非消命篇、

〔古今和歌集 三夏〕蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

はちすばのにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

〔新撰六帖 六〕はちす　家良

すましかね心の水はにごるともむねのはちすはひらけざらめや　爲家

〔延喜式三十九内膳〕荷葉

稚葉七十五枚、波斐四把半、〈起五月中旬、盡六月中旬、〉壯葉七十五枚、蓮子廿房、稚藕十五條、〈起六月下旬、盡七月下旬、〉

黄葉七十五枚、蓮子廿房、稚藕十五條、〈起八月上旬、盡九月下旬、〉

右河内國所進、各隨月限、隔一日供之、

〔古事記下雄略〕天皇既忘先所命之事、問其赤猪子曰、汝者誰老女、何由以參來、爾赤猪子答白、其年其月、被天皇之命、仰待大命、至于今日、經八十歳、今容姿既耆、更無所恃、然顯白己志、以參出耳、於是天皇大驚、吾既忘先事、然汝守志待命、徒過盛年、是甚愛悲、心裏欲婚、憚其極老、不得成婚而賜御歌、〈中略〉爾赤猪子之泣涙、悉濕其所服之丹摺袖、答其大御歌而歌曰、〈中略〉久佐迦延能、伊理延能波知須、波那婆知須、微能佐加理毘登、登母志岐呂加母、

〔萬葉集十三相聞〕御佩乎、劍池之、蓮葉爾、渟有水之、往方無、我爲時爾、應相登、相有君乎、莫寢等、母寸巨勢友、吾情、清隅之池之、池底、吾者不忍、正相左右二、

〔萬葉集十六有由縁幷雜歌〕詠荷葉歌

蓮葉者、如是許曾有物、意吉麻呂之、家在物者、宇毛乃葉爾有之、

獻新田部親王歌一首

勝間田之、池者我知、蓮無、然言君之、鬚無如之、

右或有人聞之曰、新田部親王出遊于堵裏、御見勝間田之池、感緒御心之中、還自彼池、不忍憐愛、於時語婦人曰、今日遊所見勝間田池、水影濤濤、蓮花灼灼、可憐斷腸、不可得言、爾乃婦人作此戲歌、專輙吟詠也、

久堅之、雨毛落奴可、蓮荷爾、渟在水乃、玉爾似將有見、

右歌一首、傳云、有右兵衛、〈姓氏未詳、〉多能歌作之藝也、于時府家備設酒食、饗宴府官人等、於是饌食盛之、

散り、一本は開き、一本は蕾なり、即是を圖して、窪田安家庭池にてしたしく見し人に見せしに、かくのごとしといへり、疑ふ所は願仲方百詠に出せし、並帶黃荷花の圖は、其莖叉をなして左右にわかれたり、又成形圖說に出す所の圖も、叉を成してわかれたり、見る所の雙頭は常の蓮莖にして唯二花並ぶのみ、されば成形圖說に所載願仲方百詠に出す所は、是ならずして、今圖せしを以是となさん、尤日本紀にも一莖二花と見え、又一莖二萼といひ、續日本紀にも一莖二花とみえ、秘傳花鏡にも、一幹兩花といひて、叉を成すとは見えず、西土には一帶三花のものあり、是を品字蓮と名く、一帶四面の物を四面蓮といへり、皆一莖より生ず、一種年々雙頭に開くは、大坂の豪商鴻池善右衞門にあり、甚秘藏して外へ出さず、淡紅色なりと（水戸藩家臣佐藤成裕）いへり、

（日本書紀 二十三 舒明）七年七月、是月瑞蓮生於劍池、一莖二花、

（日本書紀 二十四 皇極）三年六月戊申、於劍池蓮中、有一莖二萼者、豐浦大臣妄推曰、是蘇我臣將來之瑞也、即以金墨書而獻大法興寺丈六佛、

（續日本紀 六 元明）和銅六年十一月乙丑、大倭國獻嘉蓮、

（續日本紀 三十四 光仁）寶龜八年六月戊戌、楊梅宮南池生蓮一莖二花、

（三代實錄 十八 淸和）貞觀十二年七月九日己未、從四位下行伊勢守多治眞人貞峯、獻蓮一莖二花、

（嬉遊笑覽 十二 草木）享和元年、深川猿江の泉養寺の池に、並頭蓮開て見物群集したり、予も見たりしに紅花と覺ゆ、我友に寬保二年戌七月、難波の瑞龍寺池中に一莖二花の蓮さく、後に信州大水出づ、深川猿江の蓮開きし翌夜大水あり、異なることなりといへり、

（延喜式 三十三 大膳）正月最勝王經齋會供養料、（中略）荷葉半節、（中略）

七月廿五日節料、（中略）

蓮子（參議已上五房、五位已上二房、）

線に通らずして隔ありて、斑點の形をなせば、錦邊とはいひ難し、斑蓮の類なるべし、

〔見陽漫錄〕十。二。時。蓮。

江州野州郡田中村名主田中源兵衛が家に十二蓮あり、慈覺入唐の時に持ち渡り植うと云ひ傳ふ、近頃乾たる十二時蓮を觀るに、一房に五六花ありて、白蓮と見ゆ、實は無しと云ふ、世には色々珍らしきものあるものなり、十二時の義は知るべからず、

〔古今要覽稿草木〕芍。藥。蓮。湘。妃。蓮。

芍藥蓮二種ありて、外葩は大にして中の花瓣小にして、芍藥のごとし、白芍藥と呼ぶは白し、又瓣の先紅暈にして、紅條の鮮なるあり、今の人多く植て愛玩なせども、是も諸書に載せず、又湘妃蓮と呼ぶも、白の芍藥蓮のごとくにして、外の葩黃を帶べり、此湘妃蓮といへるも諸書に見えず、今花戸にまゝあり、是等本唐蓮の種なるべし、大和本草に近年世上に唐蓮多く植ゑ、品多しといへる、遺種なるべし、

〔古今要覽稿草木〕雙。頭。蓮。○中略

雙頭蓮、一名合歡蓮、一名嘉蓮、一名同心蓮とも、時珍は雙頭蓮、一名催生草、主婦人難產、左手把之卽生といへり、秘傳花鏡に、並頭蓮、紅白俱有、一幹兩花といひ、又顧仲方百詠にも、並蔕黃荷花と云て、圖を載せ詩もあり、雙頭並蔕ともに同じ、古は一莖二花、一莖二萼を奇といひて稱せしなり、又詩に詠せしは、梁の朱超が詠同心芙蓉といふ、五言古詩あり、又劉商が詠雙開蓮花といふ、七言絕句あり、又韋莊が合歡蓮花の七言絕句あり、雙頭蓮何處にも蓮の多く生ずる中には、極めて雙頭も生ずべけれども、遙にみては見えざるべし、偶目前に見る故、奇としてめづれども、みえずしてしらざる者あるべし、近比田安家庭池に、雙頭蓮二三花生せしと聞り、昨年も武藏國足立郡草加在百姓の田中に多く蓮を植しに、雙頭の蓮三本生せしとある人いひし故、共に行て見るに、一本は

つまべに、錦邊蓮、其花白くして邊紅なり、此蓮紅蓮白蓮の中に植れば、皆つまべにとなるといへり、今は多くあれども、是唐蓮なるべし、地錦抄に、唐蓮花、白きは大りん、くちべには小ぶりといへり、ある人の池中に、つまべに多く繁茂して、夥しく成りし故、蓮堀に命じてはらせんといひしが、此つま紅は、葉の併せしうちはゆるし給へといひて、堀らざりし故、いかにと問ふに、此つま紅の葉の刺は、常の蓮より尖り強くして、肌を破るにたへ難し、先年この蓮を堀りて難儀せしといへりとぞ、つまべには處々にあり、秘傳花鏡所載の錦邊蓮にして、白色每瓣邊、上有二一線、紅暈或黄暈といへる種にして、錦邊蓮なれども、張木威は綠邊蓮といひて、七言律あり、又或黄暈といへるは未だ見ざれども、菊地容齋曰、京の清水觀音境内に、辨財天の小池中に黄邊の白蓮あり、日に映し見れば、銀の花瓣に金の福輪を鏤たるごとしといへり、

〔佐渡志物産五〕蓮藕　和名ハチス

天竺蓮トイフモノハ、花形大ニシテ白色、每邊一分バカリ深紅色、コレヲ秘傳花鏡ニ錦邊蓮ト云、又尋常ノ花ヨリ小クシテ、臺上ニ二三四五花簇リヒラキ、千瓣ニシテ内ニ房ナキモノ、和州當麻寺ヨリ出ヅ、秘傳花鏡ニ、品字蓮ハ一臺三花ヒラク、ツノ二花ヒラクモノヲ、集解ニ合歡並頭ト云、〇中略金蓮ハ詳ナラズ、荇菜ニモ金蓮ノ名アリ、

〔古今要覽稿草木〕蜀紅蓮　白蓮

蜀紅蓮を斑蓮といふは、白色に紫色の斑文あり、是も處々にありて斑蓮といひ、蜀紅蓮と呼べり、又故桑名少將定信朝臣の蜀紅蓮と呼べるは、此花戸にいふ種と異なりて、常の紅蓮のごとくにして鮮紅なり、蜀紅と呼て可なり、彼白花紫斑の種は斑蓮といひて可なり、此斑文のある種も一ならず、天竺斑蓮と呼は、殊に紅斑にして、尤美なるは是に及びなし、又不忍白蓮といへるも、深白にして邊に紫の斑あり、又錦邊蓮、前にいふ一線に紅邊の通りたる種にあらず、邊に紅暈あれども、一

中上に附て側にこれ有り、莖生じ亦二葉生じ、心中より嫩藕を生じ横行す、是藕の初なり、凡蓮に數種あり、皆變種なり、薄紅色の者と同種すれバ、變種ハ必枯る、秘傳花鏡云、或曰、春分前種一日、花在葉上、春分後種一日、葉在花上、春分日種則花葉兩平と、尤自生の者ハ其花葉上に秀づ、格物叢話云、荷花有重臺者、有雙々者、世人指以爲瑞、蓮ハ群花品中に於て第一品、清淨潔白なる者これに如ず、故に不清の水を灌バ即枯る、又塵氣を惡む、周茂叔愛蓮說云、蓮花之君子者也と賞せずんばあるべからず、

〔古今要覽稿草木〕毎葉蓮。

毎葉蓮、普通の紅蓮にたがふ所は、立葉生ずれば必花を生ずる故に名く、蘤も常の蓮の蘤より、丸く尖らずして、色も常の紅蓮に勝れり、葉も若葉のうちは紅を帶び、莖も葉莖花莖ともに下の方紅を帶べり、此毎葉蓮の名は諸書ともに見えざれども、故桑名少將定信朝臣の蓮譜圖中に、毎葉蓮の圖あれども、花やせて蘤も細ければ、盆植の漸く開きしを寫されしなるべし、此毎葉蓮いづれの種にや、詳ならざれども、今まゝあり、

〔榕軒小錄〕千葉蓮之事

此冊書寫の折節、井上毅齋氏の蜴來り語る、江州益須郡田中村と云ふあり、其土豪田中氏園中に池あり、珍しき蓮をうゑ傳ふ、其樣子を尋ぬるに、大白蓮にてわたり四五寸も有り、一莖の上に九の花房あり、みちあうて咲く、小なるは或は七或は三あり、中元の比より咲き初め、八月上旬まで咲く、其花落つることなく、來年まで枯れ殘る、萬葉蓮と云ふとなん、或云、此花とくとは咲き切らずと也、即群芳譜を見るに、千葉蓮と標し、分注云、花山有池、產千葉蓮花、服之羽化、今人家亦有之、然頭重易萎、多難開完となり、詳ならねど大樣此なるべし、

〔古今要覽稿草木〕つまべに。くちべに。へりとり。飾邊蓮。

根、氣味、甘平無毒、（以鹽水食則不損口、同油[illegible]煮熟、最食則無[illegible]）主治、除煩悶熱渴、開胃消食、解酒毒及蟹毒、散産後留血、此主心脾血分之疾、四時可食、令人心懽、

。。蓮實（即蓮肉也）氣味、甘平濇無毒、李時珍曰、嫩菂性平石蓮性温、主治發明、附方詳于綱目、花褪連房成菂、菂在房、如蜂子在窠之狀、六七月采嫩者、生食脆美、至秋房枯、子黑其堅如石、謂之石蓮子、㪽去黑殼、謂之蓮肉也、

（採藥録 五）。蓮肉。　ハスノミ

秋子ノ熟シタルヲ採リ、日乾スベシ、時過レバ自然ニ殼シテ不易得、藥肆ニ鬻グハ、皮ヲ去リ仁許也、皮ヲ去リ久ク貯ヘ、時ヲ過レバ、氣味大ニ劣レリ、其儘貯ヘ置キ用時皮ヲ去リ、仁新シテ其功力尤勝レリ、

（草木性譜 天）蓮

池沼に生ず、其藕泥中を横行す、其性大率歳閏に遇ば、十三節毎に十二節を生ず、是一歳の月數に順り、初舊藕の一節毎に兩芽を生ず、其一ハ晩春先づ錢荷を發し、一ハ藕芽を生ず、其藕芽の末に亦兩芽を生ず、其一ハ藕荷にして水面に浮き、一ハ嫩藕を生ず、其嫩藕の末に亦兩芽を生ず、其一ハ支荷、一ハ藕、此の如く二三葉水を出れば節より小藕を生じ、藕荷支荷を發す、亦藕末に三芽を生ず、其一は支荷、一ハ菡萏、一ハ藕を生ず、後節より小藕を生ずること始の如く、一節毎に此のごとし、其節に鬚蒻を生ず、其藕細く泥の淺を横行し、秋に至り花葉盡れば卽太くして泥の深に入る、食用にする者是なり、其葉陽に隨ふ、其藕茄中葉脈皆孔あり絲あり、其花十六七瓣、薄紅色縱文あり、陽に隨て且に開き暮に至り相合し、明且復開き、二日にして卽謝す、蓮蕋嫩黄色甚だ清潔、芬香且に發し午時に收る、蓮房初黄色後綠色、熟すれば黑色、形蜂房に似たり、蓮實甚だ堅硬、秋に至り熟すれば自づから飛ぶ、其殼頭の傍に必一點あり、其子生ハ初莟なく、先づ二葉生ず、卽苦薏實

〔提醒紀談　五〕蔡花

蓮華を蔡華とも云、しかれども蔡の字に蓮華の義、字書に無きところなり、浄家の說に、善導の觀無量壽經義に云、此華相傳へて蔡花と云、これは蓮華を指て云なり、相傳、古人ありて、天竺國に到て、無熱池の蓮を得て歸りて、これを蔡の池に栽たり、故に蓮をやがて蔡と云なり、猶いはゞ蔡池に龜を出すによつて、龜をも蔡といへるが如し、（龜氏乘）按ずるに、論語集解の何晏注云、蔡は國君の守龜蔡地に出づ、因て以て名とすと見えたり、

〔本朝食鑑　三水菜〕蓮根

釋名（蓮根者藕也、和名爾雅曰、荷芙蕖、其本蔤、其莖茄、其蓮亦荷子也、其華菡萏、總名荷、云蓮花已開曰芙蕖、未舒曰菡萏也、其子蓮、其中的、的爲蓮中子也、李時珍、釋名詳論名義、）集解、處々泥池及沼澤湖多有之、以蓮子種者生遲、以藕芽種者最易發、其芽成白蒻、卽蔤也、長者丈餘、五六月嫩時沒水取之、則得此謂藕絲菜、華人賞之而作蔬茹、本邦自古號波惠而賞之、歌人亦詠之、節生二葉、一爲藕荷、其葉貼水、其下旁行生藕也、一爲芰荷、其葉出水、其旁莖生花也、其葉清明後生、六七月開花、花有紅白粉紅三色、花心有黃鬚、蘂長寸餘、鬚內卽蓮也、又有千葉紅者、近頃有白蓮花葩之端淡紅一二寸者、呼謂口紅、或有碧色者、今在駿陽、土人所謂卽是佛之靑蓮座也、予（必大）○平野未見之、若一池中以紅白而雜種、則其少者枯盡、故變塘隔之、然池廣過四五十步、兩方相阻種之、則俱盛美、近代種子芽者鮮矣、惟采新根而穿泥種之、則旁行易蔓、旣蔓茂而復采根、根皮灰黃或白、其節黑有鬚、刮去根皮、則純白、有孔有絲、其根大者如肱臂、長六七尺、煮蒸而熟則淡黑、或熱湯中入嚴醋少許煮之二三沸而取出、則白而不變黑亦奇也、凡野生及紅花者、蓮多藕劣、種蒔及白花者蓮少藕佳也、世俗所謂蓮者佛之所愛、故欲枯衰時、池中浸僧衲則不死、大抵蓮素喜藍汁、今僧衲染藍故然焉、今有養小蓮于盤中而賞花者、先將好土合砂煉水暴日、細末入于木盤中、貯水用蓮實、以鑢或砂、磨核頭令薄而後種之、則其年必發花、遲者經年開花、又種酒壺空罅尤可也、當時家々爭弄之、

ひといふ、證類本草、救荒本草等の圖に、藕より花葉を出せしは誤なり、此はひの延る事、夏より九月まで縱横にはひて、二三間にも及ぶあり、このはひに節ありて葉花を生じ、末秋に至りてはひの止りに藕を生ず、故に藕を掘るは多より初む、今七月比新蓮根とて出す、此小なるは作りばすとて花葉を去り、其精氣を泥中のはひに持せて、小根を生ずる也、和調菜にはちすのはひ、和名鈔に蔤を訓せり、はひは延の義なるべし云々、延喜式に荷葉七十枚、波斐四把半と見ゆ、藕牙也と注す、後撰集に蓮葉のはひにぞ人はおもふらん世にはこひちの中に生つゝ、はひを古は食用とせし也、今にても酒肴に酢に漬て食ふ人あり、香有て美味なりと、藕も大いなるは五六尺に至る又それより小藕を生ずる枝の如し、藕は泥中より掘出せし時は、潔白にして美なり、宿を越ば色つきて小點をあらはす、藕の孔は十孔なり、尤大いなるは十孔の間にまた小孔を生じて數極りなけれども、十孔を性とす、清商も食用として藕を持來る、其藕大にして一握に過る、長さも五六尺に過、生にて食ふに味梨のごとしと、本邦にても越後にては酒肴なぞに生藕を食、味可なりといへり、風土によりて然るべし、又清人蓮肉を多く持渡り、自療に用ひ食用ともなせり、赤藕粉も持渡れり、是蓮根を舂水飛して製せし物を、甚稱美せるよし、されども其色潔白ならず、蕨の粉の如き色にして美ならず、故にこの方の葛粉におとれり、大和本草に生藕をつきくだき汁を取、水飛し陰乾し、餅團子とすといへり、赤花も蕊も用ゆれども、花はゆひき熟し水に浸し置ても澀みあり、是こはければ食用とはなし難しと、亦その房も食する事、致富全書、多服食方に、蓮房取嫩者、去皮子幷蒂、入灰煮、又以清水煮去灰味、同蔗糖法焙石壓令扁作片食之といへば蓮房も用ゆべし、亦はちすの絲を用ひて、物を作りし事は、西土には見えざれども、中將姫の蓮の絲にて織し曼荼羅といへるは、大和國當麻寺の什物にて、人皆知所なり、亦成形圖說にも、寛政の比蓮布を製せるよし見えたり、

を傳へて各其酒を吸はしむ、これを碧筩杯と名づく、東坡が詩に、碧筩時作象鼻彎、白酒猶帶荷心苦といへり、蓮の葉は秋分よりおとろへ初めて、寒露に至れば多く枯る、蓮は寒を嫌ふ故に、芽を出すも夏の季に至らざれば生せず、枯るゝも諸草よりはやし、枯葉を、白樂天は詩に衰荷といひ、賈濤は敗荷と作れる詩あり、花は紅色を本色となして多く紅花なれども、其中に差別ありて、深紅あり、淡紅あり、大輪あり、小輪あり、瓣白くして上の紅なるあり、白色にして紅條の通りたるあり、また赤褐色にして黄を帶べるあり、これらはまゝ常の紅蓮のうちに生せり、また白蓮は香殊に紅に勝れり、その苔は綠色常なれども、黄を帶べるもあり、また蓮の實七月比、いまだ熟せざるを生にて食ふ、黒く熟せしも食す、これは藥用となして、蓮肉といひて脾胃を補ひ、心を淸くし、中を補ひ、志を强くし、虚を補ひ損を益す、みな實の功なり、其最もちふべき實を首とし、蓮稱と稱せるなるべし、蓮といふは實の總名にて、くはしくいへば蓮房といひて、實をつゝむものなり、實は蓮肉といひ、菂といふ、菂の内の靑芽を薏といふ、この靑芽菂のうちにさかしまに成であり、故に實の下を切て泥中に入置ば、五六日の中に芽を出し、葉を生じて、其まゝ置ても三年にして花を開く、地錦抄にも指南次第にて春植たる實生に秋花咲といへば、手入をなさば早く花を生すべし、されば多く實を植て生じなば極めてかはりたる花を生ずべし、佐藤成裕曰、蓮子は四五十年を經たるも、上下を磨して泥中に植置ば生せざるはなしといへり、蓮子熟して黒くなりたるを石蓮子といふ、諸書に見えたり、用藥須知に蓮肉はすの實なり、一名石蓮肉といふ、熟するに至て硬きをいふなり、別物にあらず、近來一種漢より渡る、石蓮肉あり、眞にあらず、石蓮樹實なり、鬱爽の中より出づ、何培元本草必讀云、治痢疾禁口者、石菖蒲石蓮肉、非此石蓮肉、無功ことを賛す、其他淸心蓮子飮等には、誤てもちふべからずといへり、又はすの根は、九月末十月に至らざれば生せず、五月より九月まで藝藕のみにして葉花を生ずるも、藝より生ず、藝藕ともに和名はちすのは

して、本草にも、蓮藕となし、日本紀、續日本紀、三代實錄、萬葉集、菅家文草にも蓮葉また蓮荷をはちすと訓じ、西土にても周茂叔が愛蓮說、惠遠が白蓮社詩にも採蓮曲といひ、觀經阿彌陀經にも池中蓮華、大如車輪」と見えたり、詩の鄭風には隰有荷華、また陳風に有蒲與荷、また有蒲菡萏」といへり、凡てはちすは立夏より漸く浮葉を生ず、初めて出る小なる浮葉をせにばといふ、漢名を荷錢といへり、詩にも荷葉、初浮」水上錢」、蓮葉出」水大如錢」などいへり、夫より大なる浮葉を生ずるをみづはといひ、是を漢名藕荷といふ、夫より立葉を出す、是を漢名芰荷といへり、たちは生ずれば蕾を出して、早きは小暑より開きて大暑を盛とす、故に張秋穀も消夏三友の一となせり、此三友は蓮花、素心蘭、梔子花なり、蓮花は小暑より開きて、大暑立秋處暑迄は盛にして、おくるゝは白露に至れり、浮葉立葉も追々に生ずる故、七月魂祭の比にもみのりたる實あり、又未だ開かざる蕾も多し、暑にて盛の久しきはまらるゝなり、又是よりおくるゝものも多し、又歌には葉を詠せし事多く花をよめるは稀なり、萬葉集にもはちす葉にたまれる水の玉に似たる、また古今集にも、何かは露を玉とあざむくなどよみ、西土にても、顧仲方が百詠に露珠といひて、蓮葉に露のたまりし圖有て、詩もあり、又若葉を延喜式に稚葉といへり、今もきざみ飯に煮雜へて、はすめしと呼て食す、蓮飯に盛りて香氣有て美味なり、延喜式大膳にも、盂蘭盆供養料の供に荷葉あり、又萬葉集の歌の傳記にも、「備設酒食饗宴府官人等、於是饌食盛之、皆用荷葉」と見えて、上古饌食をもるに用ゆ、中元には蓮葉に飯を包みて、上下共にさし鯖を添て祝ふ、今の人おほく七月靈祭の佛事の供物に備ふ類のみにして、人事には用ふることまれなり、又生葉を乾し藥用となす、又蓮の葉莖をつらね採て、葉の正中より莖に孔を明けて酒をつぎて、其莖の元より吸ふを藥なりとて、人のなす事なり、是は雞跖集に、魏の鄭公慤、夏月三伏の際に賓僚を率て、使君林において暑を避るに、大ひなる蓮葉を取て酒を盛り、簪を以葉を刺て柄と通はしめて、莖を屈輪囷て象の鼻の如くして、是

雅釋文云、的或作菂、同、源君所見蓋陸氏所謂或本也、那波本作的、係依今本校改、那波本無音漁釣之釣又音的八字、那波氏改菂作的、故刪去是注也、廣本蓮中子上有謂字、恐非、

〔南遠隨筆下〕蓮をはちすといふこと、ゆへなきにあらず、はすの實のぬけ出たるあと、蜂といふ虫の窠によく似たるゆへはちすといふ也、俊頼口傳

〔倭訓栞中編十九波〕はちす　蓮をいふ、荷も同じ、蜂窠の義也、西土の書にも菂在房如蜂子在窠と見えたり、古事記の歌にははなばちすとも見ゆ、花と實と一時に相具するもの也、歌にうき葉、たちは、なびき葉などよめり、まきはといふは捲荷也、蓮葉宴は光仁紀にみゆ、十二時蓮は天竺蓮也、群芳譜にいふ千葉蓮なるべし、近江の國田中の里佐々木の末葉今に是を所持せり、一莖數花にて其蕋ちらず、莖に糸なし、此十二時蓮は梁武帝の佛式に出たり、又天竺蓮と稱する別種あり、太平清話に、清水池在儋州城東、其中四季荷花不絶、臘月花盛と見ゆ、東國にむくげをはちすといふ、齊東昏侯、好奢侈、以黃金鑿成蓮花、列之於地、令妃潘玉奴行其上曰、歩々生蓮花、

〔古今要覽稿草木〕はちす　はす　蓮

はちすは古名にして、はすは通稱なり、古事記をはじめ、日本書紀、續日本紀、三代實錄、延喜式、萬葉集、菅家文草の詩にも見え、本草和名、和名本草、共に藕實をはちすのみといひ、和名類聚抄蓮類に、蓮子はちすのみと出し、亦蓮類を出して芙蕖、爾雅にいふ荷は芙蕖、郭璞注云、芙蓉江東呼て荷となす、藕ははちすのね、その本は、蔤ははちすのはひ注にいふ、莖下の白蒻泥中にあるものなり、茄ははすのくき、其葉は蕸注にいふ、蕸また荷の字なり、其華は菡萏、兼名苑にいふ蓮花、すでに開くを芙蕖といふ、またのびざるを菡萏といふ、其子は蓮、其中は的、注に蓮は房をいふなり、的は蓮中の子なり、以上爾雅、兼名苑、亦多識篇にも詳なり、神農本經上品の藥なり、本草綱目水草類にも載す、はちすは和名鈔に爾雅を引ていふごとく、莖葉花實根共に各名を異にすれども、實の名なる蓮を通稱と

蓮葉、後借為蓮荷字、遂為借義所奪、故別諸聲作蕸、非古字也、爾雅釋文云、其葉蕸、衆家並無此句、唯郭有、然就郭本中、或復脫此一句、亦並闕讀、段玉裁曰、無者是也、高注淮南云、荷夫渠也、其莖曰茄、其本曰蔤、其根曰藕、其華曰夫容、其秀曰菡萏、其實蓮、蓮之藏者菂、菂之中心曰薏、大致與爾雅同、亦無其葉蕸三字、蓋大葉駭人故謂之荷、大葉扶搖而起、渠央寬大、故曰夫渠、爾雅假葉名其通體、故分別莖華實根各名、而冠以荷夫渠三字、則不必更言其葉也、荷夫渠之華為菡萏、菡萏之葉為荷夫渠、省文互見之法也、或疑闕葉而補之、亦必當曰其葉荷、不嫌重複、無庸臆造蕸字、

〔倭名類聚抄 二十〕菡萏　爾雅云、其華菡萏、上胡感反、下徒感反、並上聲之重、　兼名苑注云、蓮花已開曰芙蕖、未舒曰菡萏也、

〔箋注倭名類聚抄 十〕按說文云、菡萏、扶渠華、未發為菡萏、已發為夫容、菡萏卑其筋見玉篇、段玉裁曰、扶渠說文各本作芙蓉、誤、今從玄應所引、爾雅說此草、以夫渠建首、蓋意扶渠為華葉實根之總名、故云菡萏扶渠花、蓮扶渠實、茄扶渠莖、荷扶渠葉、蔤扶渠本、藕扶渠根、段說是也、已開之蓮花可謂之夫容、不得謂之扶渠、然御覽引毛詩義疏云、芙蕖華未發為菡萏、已發為扶渠、既誤芙蓉為扶蕖、兼名苑云、已開曰芙蕖者、蓋本之也、王念孫曰、菡萏之言已啗也、說文云、已啗也、艸木之華、未發函然、象形、讀若含啗、含深也、芙蓉之言、敷蕍也、郭璞爾雅注云、敷蕍花之貌、說文云、蕍華葉布、讀若傅、聲義與芙同矣、又云、甬、艸木花甬々然也、聲義與蓉同矣、但菡萏芙蓉散文亦通、爾雅云、荷芙蕖、其花菡萏、陳風澤陂篇有蒲菡萏、傳云、菡萏荷華也、則即以菡萏為芙蓉也、又按爾雅毛傳皆云、其華菡萏者、蓋統言之、不論其未發已發也、楚辭有芙蓉、無菡萏、亦然、是不與說文析言同、

〔倭名類聚抄 二十〕蓮　爾雅云、其子蓮、音連　其中的、〇的下一本有音滴的之的、又音的八字、為注、郭璞云、蓮謂房也、的謂蓮中子也、

〔箋注倭名類聚抄 十〕原書作其實蓮、然本書識類引亦作子、蓋源君所見本不同也、原書菂作的、按爾

蓮

かしげなる菊の生たるをもてきたれば、
　つめどなをみゝな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり、といはまほしけれど、聞いるべくもあらず、

〔本草和名十七〕藕實。〈楊玄操音偶有反〉一名水芝丹、一名蓮、〈本條〉一名水旦、一名靈芝、一名澤芝、一名美蕖、一名菡萏、〈已上五名出兼名苑〉一名水華、〈出古今注〉一名加、實一名臉實、一名蓮、華一名扶容、葉名荷、小根名芊、大根名藕、初根名交興、〈已上出大清經〉一名石蓮、〈黑者出拾遺〉和名波加知須乃美、

〔倭名類聚抄二十蓮〕芙蕖。　爾雅云、荷芙蕖、〈符渠二音、芙音膚、〉郭璞注云、芙蓉、〈音容〉江東呼爲荷也、

〔箋注倭名類聚抄十蓮〕原書芙蓉上有別名二字、呼爲荷也、作呼荷二字、

〔倭名類聚抄二十蓮〕藕。　爾雅云、其本蔤、〈音密、和名波知須乃波比、〉郭璞注云、莖下白蒻〈音弱〉在泥中者也、

〔玉勝間四〕蓮葉のはひといふ物

和名抄に、蔤爾雅云、其本蔤、郭璞注云、莖下白蒻、在泥中者也、和名波知須乃波比、このはじめの蔤字を、今のすり本に藕と書るは誤也、今は古本によりて引り、藕は古本には別にあげて、波知須乃美とある、延喜内膳式に、荷葉稚葉七十五枚、波斐四把半云々、はひは葉につきたる物ならぬに、歌にはちす葉のはひとよめるは、いかゞなるやうなれども、葉ならでたゞ蓮をもはちす葉と、歌には多くよめれば、はちすのはひといふこゝろなり、

〔倭名類聚抄二十蓮〕茄。　爾雅云、其莖茄、〈音加、和名波知須乃久木、〉

〔箋注倭名類聚抄十蓮〕念孫云、廣雅釋木、柯莖也、樹莖名柯、因而草莖亦以爲名、爾雅荷芙蕖、其莖茄、茄猶柯耳、

〔倭名類聚抄二十蓮〕蕸。　爾雅云、其葉蕸、〈胡歌反〉郭璞注云、蕸亦荷字也、

〔箋注倭名類聚抄十蓮〕原書無是注、此恐誤引、按說文云、荷芙蕖葉、不載蕸字、廣韻乃云、蕸蓮葉、按荷本

て候、

〔俳諧類船集中二十五〕み〻なぐさ　七種菜にいへり、卷耳なり、俗にみ〻なしとも、猫のみ〻ともいふなり、

〔古今要覽稿草木〕み〻なぐさ　ねづみのみ〻　卷耳

み〻なぐさ一名み〻なし、一名ねづみのみ〻、一名ねこのみ〻、一名はとけのみ〻は、漢名を卷耳、一名苓耳、一名苓、一名葈、一名爵耳菜といふ、此草はいづれの國にても、河邊の堤、あるはこだかき山ぎしの、日あたりよき所に、多のうちより地にしきて、むらがり生出て、その大なるものといへども、わづかに一尺には過ざるなり、莖ははこべらに似て、うす紫の色を帶び、それにつく葉は、ふたつづ〻相並びて、かはらけ菜に似て、少し狭くして長し、その色はこきみどりにて、莖にも葉にもうす白き毛あり、彌生の頃に至りて、そのくきのすゑに、いさ〻かなる枝をわかちて、いと小さき五ひらの白き花さきて、後に一分ばかりのあをき實を結び、そのなかにこまかなる子あり、扨此み〻なぐさは、もとより古の七くさのうちの、一くさにあらざるよしは、清少納言の見もしらぬ草を、子供のもて來るをといはれしにて明らけし、然るを壒嚢抄に載し、あしな耳なしまたすなみ〻なしとよみし二首の歌につきて、世の人彼是のうたがひをもおこしぬる事なれども、此歌は清少納言よりはるかに後の人の、かの草子にきくもまじれりと、けうせし歌などあるによりて、たはむれに此草をも、七種のうちによみ入しものなれば、それにか〻はりて、古の七くさをあげつらふは、片腹いたきひが事なり、

〔枕草子七〕七日のわかなを、人の六日にもてさはぎとりちらしなどするに、見もしらぬ草を、子どものもてきたるを、何とかこれをばいふといへど、とみにもいはず、いざなどこれかれ見あはせて、み〻な草となんいふといふもの〻あれば、むべなりけり、きかぬがほなるはなど笑ふに、又お

トウジンカブラ〈紀州〉ナンバンハコベ〈肥前〉ツルセン〈大阪花戸〉エンメイサウ〈播州花戸〉姫路コンパルサウ〈摂津池田花戸〉山中ニ生ズ、春舊根ヨリ出、藤蔓甚長シ、葉形細長ニシテ、女萎菜葉ノ如シ、兩對ス、夏ニ至リ枝梢ゴトニ花ヲ開ク、五瓣大サ錢ノ如シ、瓣ノ端細ク剪レテ石竹花ノ瓣ノ如シ、故ニツルセント云、淡黄色、花後圓實ヲ結ブ、大サ南天燭ノ子ノ如シ、熟シテ色黒シ、内ニ小黒子アリ、一種ヤマハコベアリ、葉圓尖ニシテ大サ四五分許、莖ノ長サ四五寸許、頂ニ一花ヲ開ク、大サ四分許、白色ナリ、一種ユキノシタアリ、一名コナスビ、路旁ニ多ク生ズ、葉大サ四五分許、形圓ニシテ厚ク兩對ス、一根ニ數莖出、長サ四五寸蔓ニ非ズ、夏葉間ゴトニ花ヲ生ズ、五瓣ニシテ黄色、形酢漿草花ニ似タリ、後小實ヲ結ブ、圓ニシテ稜アリ、形茄子ノ如シ、黄花繁縷是ナリ、深山ニ生ズル者ハ藤本ニシテ長ク、莖ニ毛アリ、花葉モ大ナリ、肆中ニ生ズル者ハ、小ニシテ莖ニ毛ナシ、

〔百姓傳記十二〕ハコベヲ作ル事

ハコベノ種兩種アリ、大葉ナルト小葉ナル違ヒアリ、冬春ニ葉多キ者ナリ、夏秋ニ葉少ナク、日陰ニナラデハコタヘズ、土地ニ縁ヒナク生ル者ナリ、然ドモ温ケ地ニヨク育ツ、地ヲクレ蒔置ニ不及、軒下垣ギハニ種ヲフリ置、冬春葉ヲツミ喰フ也、

〔宜禁本草乾五菜〕鷄腸菜　酸平微寒〈白花蘩蔞、黄花鷄腸、〉無毒、主毒腫、止小便利、其莖作蔓斷之有絲縷、細而中空似鷄腸、因名之、治産後血塊、炒熱和童便服、惡血盡出、治惡瘡有神効、食療不用、長食恐血盡、主遺尿、〈赤可生食、一云菜食之、〉益人、去脂膏、治小兒赤白痢、取汁和蜜服之甚良、心鏡曰、主小便利、豉中者作羹粥食之、

〔年中行事秘抄正月〕上子日内藏司供若菜事

内膳司同供之〇中略

七種菜〇中略　蘩蔞

〔料理物語〕はこべじる　はこべをきり、もみあらひ、三月大こんなどくはへ入、是もみそにてたた

〔倭名類聚抄 十七 野菜〕繁蔞 本草云、繁蔞、〈蘩音煩、和名八久倍良、〉味酸平無毒者也、陶隱居曰、即是雞腸草也、

〔易林本節用集 波 草木〕繁蔞〈ハコベ〉 蘩蔞

〔書言字考節用集 六 生植〕雞腸菜〈ハコベ、節用集雞腸字〉 蘩〈同〉 蘩縷〈同、本草〉 蔞〈同〉

〔東雅 十三 穀蔬〕蘩蔞ハクヘラ 義詳ならず、今俗にハコベといふもの是也、ハクヘラとは、蘩蔞の音の轉せしに似たり、〈これらの如き、轉地方言の轉に似たり、〉

〔倭訓栞 中編 十九 波〕はくべら 倭名抄に繁蔞をよめり、新撰字鏡に蔞をよめり、一名也、葉をくばりまくの義にや、今はこべといへり、丹波にひんずり、賀州にてあさしらげといふとぞ、水はこべは雞栄也といへり、又筑紫にて牛はこべと呼もの有、

〔本朝食鑑 三 柔滑〕繁蔞〈和名八久倍良、訓波古倍、〉

集解、平原曠野及庭園下濕地自生極多、正月生苗、其葉如指頭、細莖引蔓、斷之中空有一縷如絲、作蔬甘脆、三月以後漸老、開細瓣白花、結小實、大如稗粒、中有小子、如葶藶子、野人多食之、此亦古來作人日七種菜之一物、其餘藥皆多用之、

〔重修本草綱目啓蒙 十九 柔滑〕繁縷

ハクベラ〈和名鈔〉 ハコベラ〈古名〉 ミキクサ〈古歌〉 ハコベ ハベ
ラ〈駿州〉 アサシラゲ〈加州、羽州秋田、〉 ヒヅリ〈播州、石州、〉 ヘヅリ〈同州〉 ヒヅル〈雲州〉 ヒンヅリ〈丹波〉 マ
ヒヅル〈備前〉 ヘンヅル〈若州〉 ムシツリ〈中國〉○

庭際路旁ニ甚多シ、四時常ニアリ、春夏尤盛ナリ、方莖地ニシキテ蔓ノ如シ、內空シテ一ツノ細縷アリテ斷シ、葉ハ兩對ス、形圓ニシテ尖リ、長サ一寸餘、瘠地ノ者ハ至テ小ク、肥土ノ者ハ長サ二寸ナルモアリ、ウシハコベト云、皆正二月花ヲ開ク、暖地ニテハ冬モ花アリ、又夏秋ニモ旋花ヲ開ク、莖頭ニ多ク簇リ生ズ、大サ三分許、ソノ瓣狹細ニシテ白色、十瓣ナレドモ五瓣ノ如ク見ユ、中ニ十蘂アリ、後小房ヲ結ブ、內ニ小黑子アリ、落テ生ジ易シ、一種オホヤマハコベアリ、一名ツルハコベ、

紫菀

增、一種ヲグ。ラ。セ。ン。ノ。ウ。ト云アリ、草質尋常ノモノヨリ小ニシテ、葉細長ク花亦小ナリ、數色アリ愛スベシ、

〔地錦抄附錄二〕小倉仙翁花　花形よく小輪、花のまはり切りさきて、なでしこの花のごとく、花數多く咲、くれなゐと白色の二品あり、葉ほそ長くして、柳葉のごとく、六月末比開く、此種子延寶年中に渡り、其後中絕したるを、又近年見出して植る、

〔剪花翁傳三四月開花〕松本仙翁花　花白淡赤み黑紅等也、開花四月中旬、育方瞿麥に同じ、形瞿麥より大きく和らか也、分株冬巢に入頃より、春芽出しまでにすべし、

〔剪花翁傳三五月開花〕仙翁花　剪秋羅　略してセンともいへり、花赤、開花五月中旬より八月まで咲、方日向、地三分濕り、土芥埃土、肥油粕よし、分株正月芽出しまへよし、

〔殿中申次記〕七月六日
一仙翁花一荷　右京大夫殿　一同　一荷　眞木島次郎
七日
一仙翁花一筒　蔭凉軒　一同　三筒　三條殿　一同　一筒　藤兵衞佐殿　一同
同　細川右馬頭　一同　同　入道林坊

〔後深心院關白記〕永和四年八月三日癸卯、二條宰相來、有續歌興、披講之時分、日野大納言來、詠物名各一首、せにをうくゐ、宰相書題、庭前有此花、今日賞之、近來出來花也、尤有興、

〔新撰字鏡草〕菝五勞反、紫綬細草、波。久。邊。耳。、　蘚波久邊耳

〔本草和名十八草〕紫蘩仁諝上音煩、下棘珠反、一名鷄腸、本條一名蘩蔞、一名菽、音叔、已上二名出蘇敬注、一名百滋草、出雜要訣、和名波久倍良、

中論花甚夥、未聞有此名、蓋此仙翁花乃剪紅羅花也、疑僧寶然取得種於中國者矣、仙翁寺舊地在大覺寺西、今爲村名、〈今愛宕山一島〉〈明夏謙詩有小雪ニ說仙翁寺ニ〉當時所賞數者記于左、

剪○紅○羅○〈今云雪李〉葉形似梅葉而無鋸齒、裏有微白毛、對生、六七月開花正紅色、大如錢有剉齒、周匝如剪成、今時又有白花者、

剪○秋○羅○〈俗云松本雪李〉莖葉與常剪羅相似、而五六月開花深紅色、其周匝如剪成之處不缺、今時有數色、紅、白、及裏朱、臙紅、樺色等、變於子種、

剪○紅○紗○〈俗云小雪李〉葉細長、而五六月開花淺紅色、形如石竹花、其剉齒赤深而美、今又有白花者、

〔重修本草綱目啓蒙〈十一草〉〕剪○春○羅○　マ○ツ○モ○ト○　一名春羅〈紗譜花鏡〉　碎剪羅〈同上〉　剪金羅〈群芳譜〉　篇竹〈汝南圃史〉　翦絨羅〈同上〉　漢宮春〈八閩通志〉　剪羅〈花史左編〉　剪秋羅一名漢宮秋〈群芳譜〉　剪秋紗〈名花譜〉　剪金紅〈閩書南産志〉　秋羅〈花史左編〉　剪絨花〈閩書藥物〉

マツモトセンノウゲ、略シテマツモトト云フ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、圓莖高サ一二尺叢生ス、葉ハ千日紅葉ニ似テ兩對ス、四月ノ始莖頂ニ花ヲ開ク五瓣、石竹花ニ似テ大ニシテ、深紅色又淺紅白色黃色間色等ノ二十餘品アリ、一種花樓レテ開ク者ヲ剪○夏○羅○ト云フ、和名ガンピ、苗形剪春羅ニ異ナラズ、五月ノ末花ヲ開ク石竹花ニ似テ大ナリ、紅黃色又紅白間色等ノ數品アリ、又一種俗ニフ○シ○ト呼ブ者アリ、フシハ黑フシノ略稱ナリト云フ、又節間ニモ花ヲ生ズル故ニ名クトモ云、一名遠坂サウ、此草モ亦形狀相似テ節黑ク、葉背モ亦紅紫色ナリ、花ハ色赤シ、又シロフシ、サクラフシ、ヌケフシ、ムラサキフシ等ノ品アリ、又一種秋ニ入テ花ヲ開ク者ヲ剪○秋○羅○ト云フ、俗名センノウケ、古歌ニハ紅梅グサ、ゾリノハナト云、彙集解ニ稱ユル剪紅紗花ナリ、花色紅又白色間色金黃色等ノ數品アリ、唐山ニハ剪○冬○羅○モアリト、遵生八牋ニ載ス、和產詳ナラズ、

或ハ他子ヲ雜ユルモアリ、皆宜ク擇ビ去ルベシ、又藥舖ニ漢種ヲ栽タル子ヲ鬻ニモ、又大巣菜子ヲ雜ユト云フ、近年舶來スル者ヲ下セバ、小巣菜ノ一種生ズ、僞物ナリ、其形正圓ニシテ、甚與物ニ似タリ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、略○中王不留行十二斤、大和國卅八種、略○中王不留行二斤、略○下

〔出雲風土記仁多郡〕凡諸山野所在草木、略○中王不留行、

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　王不留行○今ハナシ文政

〔下學集下草木〕仙翁花嵯峨仙翁寺始出此花、故云仙翁花也、

〔大和本草七花草〕剪秋羅　花史ニ出タリ、曰日カゲヲ好ミ糞ヲ長ル、河水ヲソヽクベシ、樹下ニ宜シ、今世人賞玩シテ品類多ク出ヅ、花紅ナリ、又白色アリ、褐色アリ、本草剪春羅ノ集解ニ、剪紗花トイヘル、剪秋羅ナリ、剪春羅ト一類ニテ別ナリ、ガンピヨリ花マサレリ、毎年土ヲ改テ肥土ニウフベシ、不然レバ不榮キエヤスシ、初秋花ナク尤可賞、二種共ニ子ヲマクベシ、又梅雨ノ時、枝ヲ切テサスベシ能活ク、センヲウハ嵯峨ノ仙翁寺ヨリ出タルユヘ名ヅクト云、仙翁寺今ハナシ、花史曰、結子收藏來春下種、

○フシハ剪春羅剪秋羅ノ別種ナリ、葉剪秋羅ニ似タリ、葉ハ缺刻ナシ、毎節ヨリ小枝出テ花ナク、剪春羅ニマサレリ、赤フシ白フシアリ、葉ハ同ジ、

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕剪紅羅　剪春羅　剪秋羅　剪紅紗花　俗云仙翁花、今云世牟、略○中

按剪紅羅總名而有數種、皆夏月開花、稍遲者至秋耳、冬乃枯死、宿根春生苗、故未見春冬開花者、蓋譜說不是也、相傳嵯峨仙翁寺始出之、仍名仙翁花、今止曰剪、略

五鳳集云、吾邦有一種奇花、毎歲以六七月著紅、謂之仙翁花、世傳自嵯峨仙翁寺所出也、大唐詩文之

〔箋注倭名類聚抄十〕本草和名云、王不留行、一名王不流行、出釋藥性、按千金翼方、證類本草、並作王不留行、是王不留行本草所載、王不流行之名出釋藥性也、此恐源君誤引、○中略陶注本草王不留行云、葉似酸漿、子似菘子、蜀本圖經云、葉似菘藍等、花紅白色、子殼似酸漿、實圓黑似菘子、如黍粟、圖經云、苗葉俱青、高七八寸以來、根黃色如薺根、葉尖如小匙頭、亦有似槐葉者、四月開花、黃紫色、隨莖而生、如菘子狀、又似猪藍花、河北生、葉圓花紅、與此小別、時珍曰、苗高者一二尺、三四月開小花、如鐸鈴狀、紅白色、結實如燈籠草子、殼有五稜、殼內包一實、大如豆、實內細子、大如菘子、生白熟黑、正圓如細珠可愛、陶氏言葉似酸漿、蘇氏言花如菘子狀者、皆欠詳審、以子爲花葉狀也、又曰、此物性走而不住、雖有王命不能留其行、故名、按是草皇國不產、今則漢種繁殖、俗呼漢名、

〔下學集草木下〕王不留行(ワウフリウギヤウ)日本俗云川原石竹也、本名剪金草、因漢主最好此草、後宮嬪妃作寵、人言此事曰王不留行也、

〔書言字考節用集六生植〕王不留草(ワウフリウサウ)謂宮花、剪金花、鼓盞草也、　花鹽草(ツナ)本綱俗呼王不留行、云實、事詳本草、　王不留行(ワウフリウギヤウ)本草、三四月開小花、

〔藻鹽草八草〕和名少々　王不留行すゝくさ　如鐸鈴狀、紅白色者云々、

〔古名錄十九草部〕須々久佐本草和名　漢名王不留行本草　今名ドウクワンサウ

〔重修本草綱目啓蒙十一濕草〕王不留行　スヾクサ延喜式　道灌草古ヘ道灌山ニ漢種ヲ栽シコトアリ、故ニ此名アリ、　一名木藍子備州府志　麥藍子同上　王留通雅　長鼓草郷藥本草　孩兒嬰童百問　剪金子壽世保元

今漢種ヲ傳テ栽ユ、秋分ニ子ヲ下ス、ソノ葉細長ニシテ瞿麥葉ノ如シ、淡綠色對生ス、春ニ至リ葉形漸長大ナリ、濶サ四五分、長サ一寸餘ニ至リ、脚葉ニ異ナリ、苗高サ二尺餘、三四月枝上ゴトニ花ヲ開ク五瓣、形フデナデシコノ花ノ如ニシテ色モ同ジ、花下ニ房アリ、外皮五稜ヲナス、花衰テ房漸ク大也、內ニ數子アリ、正圓ニシテ鳳仙花子ノ如ニシテ小也、熟シテ黑色、五月苗根共ニ枯ル、藥店ニ賣トコロ、古渡ノ者異物ナリ、其內ニ形相似テ扁長微綠斑アル子ヲ雜ユ、コレ大巢菜子(カラスノエンドウ)ナリ、

泣ケリ、

〔枕草子三〕草の花は

なでしこ、からのはさら也、やまとのもいとめでたし、

〔枕草子八〕うつくしきもの

なでしこのはな

〔源氏物語二十六常夏〕御まへにみだりがはしき前栽などもうゑさせ給はず、なでしこのいろをとゝのへたる、からのやまとの、ませいとなつかしくゆひなして、さきみだれたるゆふばへ、いといみじうみゆ、

〔和泉式部集五〕おなじところなる人の、ことかたにおきて、からなでしこを、やまとならぬなむあるとて、おこせたるに、

かひなきはおなじかきほにおふれどもよそふるからのなでしこの花

〔更科日記〕もろこしがはら相模○といふ所も、すなごのいみじうしろきを二三日ゆく、夏はやまとなでしこのこくうすく、にしきをひけるやうになん咲たる、これは秋の末なれば見えぬといふに、なを所々は打こぼれつゝ、あはれげに咲わたれり、もろこしがはらに、やまとなでしこも、咲けんこそなど、人々おかしがる、

〔武江産物志藥草〕道灌山ノ産　瞿麥キノカシラニモアリ

〔武江産物志遊觀〕石竹　木所植木屋

王不留行

〔新撰字鏡草〕王不留行加○佐○久○佐○

〔本草和名草七〕王不留行　一名王不流行、出釋藥性和名須○々○久○佐○、一名加佐久佐、

〔倭名類聚抄草二十〕王不留行　釋藥性云、王不留行、今案一本留作流、和名加佐久佐、

瞿麥花非一、移栽供王臭、蒔菁曾結簇、叢艾敢同行、諸種應相妬、頻芸自得常、數芬新禁擬、變化舊疎荒、春採尖峯鬢、烟含細葉暖、晴霜初寸截、晩露纔分將、鵝軟紅蘇萮、軟坐嬾紫房、半陰榮鳳暑、斜景射虹梁、坐對艶顏客、行隨笑臉娘、衞添深者草、天深淺濃芳、乍訝殘投地、那知斷堅場、採鐵風斷綴、文綺露開章、落口玦玕竹、通明玳瑁床、透簾腸觸候、依砌助葬堂、樂發施屛畫、塵除出篋粧、當時臨蝶子、毎日引蜂玉、月宇霊焼流、星壇圖燎芒、彤庭看取近、淸畫陊來長、宴步承仙履、宸居襲御香、補衣驚奉使、錦服念歸郷、接影瑤階合、連輝寶幔張、實經推解記、僧澀遣憂忘、獨餡青三秀、偏僣過九陽、似燒任冒暑、欲慘未殘霜、縱使迭流火、還猶送迅商、重榮愈繪畫、異色度炎涼、不同洲藾白、誰占縣菊黃、薔薇嫌有刺、芍藥愧無光、比譬心難喩、吟題手又慌、乾風圖照甚、傾覆眞爭鷸、

〔古今和歌集夏三〕となりよりとこ夏の花をこひにをこせたりければ、おしみてこのうたをよみてつかはしける、　みつね

ちりをだにすへじとぞ思さきしよりいもとわがぬるとこ夏の花

〔古今和歌集秋四〕寛平御時きさいの宮の歌合のうた　素性法師

われのみや哀と思はむ蛬なくゆふかげのやまとなでしこ

〔大鏡五太政大臣伊尹〕花山院は風流者にさへこそおはしましけれ。略中なでしこのたねをついひぢのうへにまかせ給へりければ、おもひもかけず、四方にいろ〳〵に、からにしきをひきかけたるやうにさきたりし。略下

〔今昔物語二十四〕一條院失給後上東門院讀和歌語第四十一

今昔、一條院失サセ給テ後、後一條院ノ幼ク御座ケル時ニ、瞿麥ノ花ノ有ケルヲ、何心モマシマサズ取ラセ給タリケルヲ、母后上東門院見給テ、此ナム讀給ヒケル、

ミルマヽニツユゾコボルヽオクレニシコヽロモシラヌナデシコノハナ、ト此レヲ聞ク人皆

六七寸、形狀尋常ノ者ニ同クシテ、花ニ白色又淡紅色ニシテ赤心、白花ニシテ紅斑黑心等ノ品アリ、

〔草木育種 下 美花〕瞿麥なでしこ 本草○中略　七月種を蒔べし、黑ぼくに眞土等分に合せ、人糞を澆、夏の內蒔置、此土をませ蒔植てよし、植替は二八月よし、三四月蘆を添て結立、苔出たる時、枝の苔を摘去ば、花大く咲もの也、又石竹は眞土に魚洗汁を澆てよし、又富士なでしこ、かわらなでしこは、眞土に砂をませてよし、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

伊賀國廿三種、○中略 連翹、瞿麥各六斤、　上總國廿種、○中略 瞿麥、貝子各三斤、　下總國卅六種、○中略 瞿麥六斤、　近江國七十三種、○中略 瞿麥一斤二兩、○下略

〔出雲風土記 仁多郡〕凡諸山野所在草木、○中略 瞿麥、

〔萬葉集 八 夏雜歌〕大伴家持石竹花歌一首

吾屋前之瞿麥乃花、盛有、手折而一目、令見兒毛我母、

〔萬葉集 十八〕詠庭中牛麥花一首

比登母等能、奈泥之故宇惠之、曾能許己呂、多禮爾見世牟等、於母比曾米家牟、

右先國師從僧清見、可入京師、因設飮饌饗宴、于時主人大伴宿禰家持、作此歌詞、送酒清見也

〔田氏家集 下〕五言、禁中瞿麥花詩、三十韻、幷序

瞿麥一名巨句麥、子頗似麥、因名瞿麥、花紅紫赤、又有濃淡、春末初發、夏中最盛、秋冬不凋、續々開拆、竄文圖類、異彩同葩、四時翫好、蕃籬可愛、今年初種禁籬、物得地而增美、雖有數十名花、傍若無色香耳、但古今人嘲詠知小、蓋此花生大山川谷、不在好家名處、不亦然者、何得右薔薇、左牡丹、前蘭菊、後萱草乎、花亦有時、人亦有時、人臣奉勅而賦之、前修之未能去焉、詩曰、

瞿。麥。　獻太高尺餘、葉厚形似點首面深青色、抱節兩兩對生、其花數朵小形似桔梗、而白帶紫、蕚長淺青、

倭。石。竹。　莖葉細柔、其花有數品、從春至秋皆發、於子種而異品者爲珍賞、

阿。蘭。陀。石。竹。　株莖大、葉硬剛、花亦大有數品、[illegible]

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕瞿麥　ト。マ。リ。グ。サ。　ナ。ツ。カ。シ。グ。サ。　チ。ヽ。コ。グ。サ。　ヒ。ク。レ。グ。サ。　ト。コ。ナ。ツ。古歌上名　ナ。デ。シ。コ。古今名　カ。ワ。ラ。ナ。デ。シ。コ。　ヤ。マ。ト。ナ。デ。シ。コ。　チ。ヤ。セ。ン。バ。ナ。奧州　一名瞿麥綱目　句麥同上　地面品字箋　石竹一名錦竹同上、南寧府志　繡竹花鏡

此草山野ニ極テ多シ、葉細長シテ深緑色、兩々相對ス、夏秋ノ間花ヲ生ズ野生ノモノハ皆淡紅色ナリ、山生ノモノニハ稀ニ紅花ノモノアリ、其ニ花後小圓長角ヲ結ブ、内ニ小扁黒子アリ、熟スレバ角頂自開キ、風ニ隨テ子落ツ、此子ヲ收テ藥用ニ入ル、一種薩摩種ト呼ブ者ハ、花尤大ニシテ、單葉千葉紅白紫深淺間色數品アリ、觀ルニ堪タリ、此種ヲ下シテ花色ヨク變ズ、野生ノ者ハ然ラズ、時珍洛陽花ト云フ者ハ、即雲州種ノ瞿麥ナリ、故ニ通雅ニ時珍ノ説ヲ駁シテ、至曰石竹、即洛陽花剪絨花、瞿麥則是野生者、洛陽花、此必以洛陽擅名、瞿麥、北人以爲美人花、[illegible]ト云リ、又俗ニ石竹ト呼者アリ、卽漢名ノ石竹ナリ、和名カラナデシコ、此モ亦トコナツト云フ、野生ナシ、家園ニ多ク種テ花ヲ賞ス、色ニ數品アリテ甚觀ルニ堪タリ、花瓣ミナ鋸口ナリ、瞿麥ノ瓣ノ端細ニ分レタ、絲ノ如ナルニ異ナリ、千葉ノ者ヲ十姉妹河間府志ト云フ、國名多シ、ボサツイバラ及[illegible]、又一種ノ品ニ十姉妹ノ名アリ、古ヨリ瞿麥一名石竹トス、故ニ方書ニ石竹子ト云者皆瞿麥子ナリ、後世ハ分テ二種トス、今本邦ニモ二品アリ、然レドモ古方ノ石竹子ハ瞿麥ヲ用ユベシ、〇中略坿、一種白山ノ產ニ、フ。ツ。メ。ナ。デ。シ。コ。ト云モノアリ、高サ八九寸、形容尋常ノ者ニ同ク、其花白色千瓣ニシテ數瓣相重疊シ、毬狀ヲナス、甚ダ美ナリ、又一種矮生ノ者アリ、江戸ナデシコト呼ブ、高サ

少納言のいはゆるからのをさしていひしにはあらず、然といへども、和泉式部の歌にみるに、猶此世の物と覺えぬはと〈千載和歌集〉よみしは、全くからなでしこの事にて、からより渡りこし後は、山野にをのれと生出るものをさして、大和なでしこといへるは、寛平の御時に、きさいの宮の歌合を始とし、〈古今和歌集〉それよりつぎ〳〵の撰集家などにその名をよみし歌殊に多し、扨やまとなでしこは、小野の日あたりよき所に生出て、葉は少さきささの葉に似て、それよりは極めて細く、莖は麥稈に似て、節ありて青くまたほそし、その高さ二三尺に至れば、梢ごとにひとへなる五瓣の花を開き、大さは錢程ありて、後に房をむすび、そのうちに少さき黒子あまたあり、またからなでしこは、これにくらぶれば、その莖やゝ大く、葉もまた相似て少しく大いなり、花を開く事、淺深紅紫、また白花のものあり、此種は時珍の說に洛陽花といへるものにて、その花瓣の鋸歯ありて、缺刻はなきもの也、また紹興本草に圖する所の絳州瞿麥といへるも、これと全く一物なり、また阿蘭陀石竹、南京瞿麥、朝鮮なでしこ、やまと石竹の數種あり、いはゆる阿蘭陀石竹、朝鮮瞿麥の二種は、後光明天皇の寛文年中に渡りこしものなれども、〈増補地錦抄〉今あるものは阿蘭陀石竹の一種のみにて、その餘は皆詳ならず、また弘景の說に、一種葉廣相似而有毛、花晩而甚赤と、〈集注本草〉いへるは、これ卽今の仙翁花にて、寺島良安の說に、藤瞿麥(フヂナデシコ)葉厚形似菫菜、其花數朶、形似桔梗、而白帶紫と〈和漢三才圖會〉いへば、共に今ある草なれども、眞の瞿麥にはあらず、

〔和漢三才圖會〈九十四末濕草〉〕瞿麥〈○中略〉

按瞿麥卽石竹也、今以爲二種、其葩周圍有剡齒、而有切叉、似剪紅紗者爲瞿麥、無切叉者爲石竹、並出於豫州者良、丹波紀伊次之、

倭瞿麥　莖葉細弱、花有紅紫白赤斑爛(ハダラ)、單葉千葉數種、

南京瞿麥　株太莖細、而葉大於倭、其花單瓣紅、

〔古今要覽稿草木〕なでしこ　とこなつ　瞿麥　石竹

なでしこ、一名やまとなでしこ、一名とこなつ、一名ひぐらしぐさ、一名かたみぐさ、一名なつかしぐさ、一名かはらなでしこ、一名いしのたけ、一名のなでしこ、一名ちやせんばなは、漢名を大菊、一名大蘭、一名蘧麥、一名瞿麥、一名巨句麥、一名句麥、一名麥句薑、一名石竹、一名石菊、一名繡竹、一名南天竺草、一名天南竹といふ、此草は、古よりいづれの國の山野にも、そのれとよく生出るものなれども、その名の僅に口物にあらはれしは、元明天皇の御時に、出雲國に生いづるよし、その國の風土記にみえたるをはじめとし、(出雲風土記仁多郡條)聖武天皇の御時には、雪島のいはほにおふるなでしこと(萬葉集)いひ、野邊みれば瞿麥の花咲にけりど(同上)いひ、また見渡せば向ひの野邊の石竹、或は瞿麥はわがしめし野の花(同上)など歌によみて、皆人それぞれの思ひを述、延喜の御時には、いはゆる出雲、及び伊賀近江、また上總、下總などよりも、此子を採て藥用に奉りし也、(延喜式典藥寮)そのをのれと生出る中に、野邊のものは、その花淡紅色にて、山生のものは稀に紅色のものあり、(本草綱目啓蒙)今は野邊のものといへども、また白色のものあり、これは弘景の說に、一種微大、邊有叉椏といへるものにて、近ごろはこれにも數種あり、(大和本草)また近世薩摩種といふものあり、その花尤大にして、單葉千葉、及び紅白淺深、間色の數品ありて、みるに堪たり、此たねをまくときは、花色よく變じ、野生のものはしからずとも(本草綱目啓蒙)いへり、これ即野邊に生出るなでしこの一種にして、又からなでしこあり、これ清少納言のからのはさら也と(枕草紙)いへるものにて、今は字音のまゝにこれを石竹とのみいひて、なでしことはいはず、清少納言は深養父の孫元輔の女にして、圓融院の御時の人なれば、それより以前に渡りこしものなれば、歌にいしたけ、またいしの竹とよめるは、此からなでしこの事なるべしとおもひしが、春日野に石の竹にも花咲と(夫木和歌集)いひ、あづまのおくにおふる石竹(萬葉草引後撰和歌)ともよみしによれば、舊よりよみ來りしなでしこと同じ事にて、清

〔箋注倭名類聚抄 草十〕按說文菊字注云、大菊蘧麥、爾雅亦云、大菊、蘧麥、本草瞿麥、卽蘧麥之假借、本草大蘭、當是大菊之譌重複也、又按陶弘景云、一莖生細葉、花紅紫赤可愛、子頗似麥、故名瞿麥、圖經云、苗高一尺以來、葉尖小靑色、根紫黑色、形如細蔓菁、花紅紫赤色、亦似映山紅、二月至五月開、七月結實作穗子、頗似麥、故以名之、李時珍曰、石竹葉似地膚葉而尖小、又似初生小竹葉而細窄、其莖纖細有節、高尺餘、梢間開花、田野生者、花大如錢紅紫花、人家栽者、花稍小而嫵媚、有細白、粉紅、紫赤、斑爛數色、俗呼洛陽花、結實如燕麥、內有小黑子、

〔東雅 草十五 卉〕瞿麥ナデシコ　倭名鈔に本草を引て、瞿麥一名大蘭、ナデシコ、一にトコナツといふと註せり、万葉集には石竹讀てナデシコといひけり、瞿麥また石竹の名あるが故なり、今の如きは、田野に生ずるものを、ナデシコといひて瞿麥の字を用ひ、人家栽るものをば、石竹の字を用ひて、其字の音をもて呼ぶなり、古にも石竹をば又ヤマトナデシコなど云ひけり、ナデシコといふ義詳ならず、トコナツとは其花の開く事、春より秋に至て、常に夏の如くなるをいふなり、（藻鹽草にトコナツ、万葉集に四時美とかけり、夏秋は歌によむ、春冬はいまだよまずと見えたり、されど霜さゆる朝のはらの冬枯にひとはなさけるやまとなでしこ、といふ歌の如きは、冬によみしと見えたり、）

〔塵袋 三〕一石竹ト云フハ何レノ異名ゾ
石竹ニ二ノ說アリ、一ニハヤマスゲト云フ、一ニハ瞿麥ト云フ、多說ノ中ニナデシコト云フハ、ナヲヨロシキ說歟、万葉ノ家持ガ詠云、
石竹（ナデシコ）ノ其花ニモカアサナ〱手ニトリモチテコヒヌ日ナケン、又同集介云、
ミワタセバムカヒノ野ベノ石竹（ナデシコ）ノヲチナクヲシモアメナフリコソ、此等ノ歌ハ石竹ト書テ、ナデシコトヨメル事明也、樂府ニハ石竹金錢ナンゾクタ〱シキト云ヘリ、ヤマスゲモ花ハサケドモ、サシモモテナスベキ物ニシモ非ズ、是モ撫子ナルベシ、金錢ト云フハ、カラナデシコトテ、丹ノ色シタル花ノ、ナデシコニ似テ大ナルモノニヤ、

リ、黃泥ヲ好ム、肥レバ花シゲシ、宿根ヨリ生ズ、又正二月種子ヲウヘテ其年花ヲ開ク、宿根ヨリ生ジタルハ、六七月ヨリ花開ケ、九月ノ末ニ終ル、甚久シ、中華ノ書ニテ未見之、外國ヨリ來レル物ナルベシ、其性及功能シレズ、

〔和漢三才圖會草部九十四本〕白粉草　正字未詳、　於。之。呂。以。乃。木。

按白粉草、春生苗冬枯、高二三尺叢生、葉淡青柔、似白鷄頭葉微小圓、其花朝以後萎、至夕陽開、深紅色五出單葉蕚長一寸餘、亦紅花中出紅蕊、細如絲、蕚本結子灰黑色、大如胡椒、而中滿白粉、採之塗婦人面、光澤優於鉛粉、俗呼曰白粉草、其葉採汁傅折傷及疥瘡小瘡皆良、重劑皮取用白粉、敷泥膏佳、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕火炭母草　詳ナラズ

ヲシロヒバナニ充ル古說ハ穩ナラズ、ヲシロヒバナハ蓮生八腱ニ載スル所ノ粟。茉。莉。ナリ、一名臙脂狀同上狀元紅秘傳花鏡春分子ヲ下ス、圓葉高サ二尺許、枝四旁ニ繁布シ、高ク聳ヘズ、節高ク紅ニシテ秋海棠ノ莖ノ如シ、其枝葉兩兩相對ス、葉圓ニシテ尖リ、莧葉ノ如シ、淡綠色、秋ニ至テ枝ノ梢ゴトニ花ヲ簇生ス、夕ニ開キ朝ニ萎ム、形牽牛花ニ似テ小ク、五尖アリ、內ニ長キ蘂ヲ吐ス、其花深紅色ナリ、又白色紫色黃色アリ、黃ニシテ深紅間ル者ヲ花戶ニテ、キングシヤウト呼ブ、花謝シテ圓實ヲ結ブ、大サ三分許リ黑色硬クシテ皺アリ、打破スレバ殼甚厚シ、其內ニ白キ粉アリ、故ニヲシロヒバナト呼ブ、根ノ形直長ニシテ萊菔ダイコンノ如シ、子熟スレバ苗根共ニ枯ル、然レドモ九州ニテハ舊根枯ズ、春ニ至テ更ニ苗ヲ生ズト、大和本草ニ云リ、

〔新撰字鏡草〕瞿麥　奈。氐。之。古。

〔本草和名八草〕瞿麥仁諝音劬、陶景注云、子頗似麥、故以名之、一名巨句麥、楊玄操音九體反一名大菊、一名大蘭、根名紫葳、華名葉、已上二名出蘇敬注和名奈天之古

〔倭名類聚抄草二十〕瞿麥　本草云、瞿麥一名大蘭、和名奈天之古、一云止古奈豆、

ハ人形ノ如キモノアリ、年久キ者ハ甚大ニシテ、徑リ一二尺ニ至ル、一種赤花ナル者ヲ赤昌ト云フ、毒アリト集解數ノ説ニ見ヘタリ、

〔草木育種 下品 藥〕商陸 木草 何れの地にてもよく生ず、肥に及ばず、實を蒔てもよく生ず根大くして數年枯ず、葉を採手にて摘切、菜となすべし、鐵にふるれば苦くなる也、此根水腫を治す、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略 商陸八兩　伊豆國十八種、○中略 商陸白石脂各五斤、○下略

〔出雲風土記 意宇郡〕凡諸山野所在草木、○中略 商陸、

〔佐渡志 五 物產〕商陸 方言ヤマゴボウ　山野間畔皆アリ、本草集解ニ赤花ナルモノ毒アリトイヘリ、此國ニアルハ白花ノミナリ、

狼毒

〔本草和名 十一 草〕狼毒、一名續毒、和名也末佐久、○佐久恐倒置

〔倭名類聚抄 二十 草〕狼毒　本草云、狼毒、和名夜末久佐

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕陶注云、與防葵同根類、但置水中沈者便是狼毒、浮者則是防葵、蘇注云、此物與防葵都不同類、生處又別、開寶本草云、狼毒葉似商陸及大黃、莖葉上有毛、根皮黃肉白、蜀本圖經云、根似玄參、圖經云、四月開花、八月結實、

〔重修本草綱目啓蒙 十三 毒草〕狼毒　ヤマクサ 和名鈔　一名續毒 本經　吾獨毒只 月令 採取

和產未ダ詳ナラズ、古ハ漢渡アリ、今ハ渡ラズ、藥肆ニ持傳ルモノアリ、形商陸ノ如ク、皮黃白色密ニ横紋アリテ、本手ノ羌活ノ如シ、疙瘩多シ、肉ハ白色、然レドモ古物ニシテ蛀多シ、

〔出雲風土記 島根郡〕凡山野所在草木、○中略 狼毒、

紫茉莉

〔大和本草 七 花草〕白粉花　葉ハ雞冠花ニ似テ枝節多ク繁茂ス、花ハ丁子ノ形ノ如ク少長シ、深紅色一又黃花アリ、朝開夕ニ萎ム、實黑ク大サ胡椒ノ如シ、内ニ白粉アリ、根ハ黑クシテ大根ノ如ク大ナ

插枝亦活、凡如鷄花無實者、近年如此花、

〔草木育種後下花〕千日紅(せんにちこう)鶏花 天和貞享年中に本邦へ初て渡と云、今甚多し、異土赤土ともによし、二三月種を蒔、秋花あり、紅白二種あり、魚洗汁人尿等澆てよし、

〔本草和名十一草〕商陸 一名葛根、仁諝音力羊反 一名夜呼、華名、葛華、出兼注 一名商棘、一名陽根、一名常蓼、一名馬尾、已上四名出釋藥性 一名章陸草、一名當陸、一名莧陸、一名長根、一名神陸、一名白華、一名逐耶、一名天草、一名逐陰之精、已上九名出大清經、云、此神草也、 地精、赤華實也、出大清經、和名以。乎。須。岐。

〔倭名類聚抄二十草木〕商陸 本草云、商陸、和名伊乎須木、

〔箋注倭名類聚抄十草〕易莧陸、蘭雅蓫薚馬尾、廣雅、常蓼、馬尾、蔏陸也、蜀本圖經云、葉大如牛舌而廣厚、有赤花者根赤、白花者根白、圖經云、春生苗、高三四尺、葉青如牛舌而長、莖青赤至柔脆、夏秋開紅紫花、作朶、根如蘆菔而長、

〔書言字考節用集六生植〕商陸(ヤマゴボウ)本名葛根 夜呼草 同上 鳴國時記、三月三日杜鵑初鳴、乃止、故謂此草夜呼、

〔宜禁本草乾中草〕商陸 辛酸平、方家不甚乾用、白者入藥、赤者有毒、治水腫、生根切和鯉煮作湯、

〔重修本草綱目啓蒙十三草〕商陸 イ。ホ。ス。キ。延喜式 イ。フ。フ。キ。和名鈔 ヤ。マ。ゴ。ボ。ウ。 ト。ウ。ゴ。ボ。ウ。南部 イ。ヌ。ゴ。ボ。ウ。上州 ジ。ヤ。コ。ス。ギ。丹州 一名牛舌頭救荒野譜 杜大黄同上 文章柳採取月令 蓫薚本経 逐里君郡縣本草 樟柳同上 鹿腸嘈雜 章陸同上 葛根本經 葦柳正字通 者里芎村家方 中庸幼幼新書 増、一名蔏陸品字箋 蓫薚同上 葦同上

山中及ビ竹林中ニ多シ、好デ陰地ニ生ズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ圓莖直立ス、高三四尺、烟草葉ニ似テ小ク末尖ラズ、毛茸ナク光リアリテ互生ス、夏枝梢ゴトニ穗ヲナス、長サ三四寸、珍珠菜(トラノオ)穗ノ如シ、花大サ三四分、五瓣白色、中ニ綠實アリ、數多ク圓ニ並ブ、漸ク大ニシテ緑色ニ變ジ、又黑色ニ變ズ、花瓣モ亦赤色ニ變ジ、下ニ托シテ蕚ノ如シ、實熟ナ生ジ易シ、其根皮淡黄褐色、形萊菔(ダイコン)ノ如シ、或

千日紅

ヤブタラミ勢州ノ名アリ、ソノ川牛膝ハ集解ニ謂ユル夏藍(タテアイ)葉ノ牛膝ナリ、是ヲモ柳葉牛膝ト云フ、山麓及ビ林下陰地ニ生ズ、葉ハ柳葉ノ土牛膝ト同クシテ、毛ナク光リアリ、莖色赤ク、或ハ紫、其節尤高シ、陶弘景ノ説ニ、莖紫節大者為雄トハ是ナリ、土牛膝モ節高ケレドモ、コレニ比スレバヒキシ、故ニ弘景ノ説ニ、青細者為雌トイヘリ、花實ハ柹葉ノモノニ異ナルコトナシ、藥店ニ和産二種アリ、野生ノモノヲ採リ、數年肥地ニテ培養シタル根ヲ、眞ノ牛膝トイヽ、山野ノモノヲ堀リ採タル根ヲ牛膝ト云、是皆土牛膝ニシテ下品ナリ、舶來牛膝ニ比スレバ、根短クシテ潤ナク、中心大ニシテ、味初苦ク後チ甘シ、舶來ノ牛膝ハ長サ二三尺、肥軟ニシテ潤多ク黄白色ナリ、根ヲ切レバ中ニ小白心アリ、其味初甘ク後苦シ上品トス、今夏藍葉ノ牛膝ノ根ヲ曝シ乾ス、漢渡ノモノニ異ナラズ、然レドモ野生故ニ根短シ、肥地ニ培養セバ、漢渡ノ如ク長クナルベシ、

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、○中略 牛膝苦參各廿五斤、　大和國卅八種、○中略 茵草、牛膝各七斤、○下略

〔佐渡志 五物産〕牛膝　方言チイソク　コノ國ニアルモノハ、山野自生ニテ土牛膝ナリ、

〔大和本草 七花草〕千日紅　花鏡曰、本高二三尺、莖淡紫色、枝葉婆娑、夏開深紫色花千瓣、細碎圓整如毬、生於枝杪、至冬葉雖萎而花不蔫、婦女採簪於鬢、最能耐久、略用淡礬水浸過、晒乾藏於盒内、來歳猶然、鮮麗子生瓣内、最細而黒、春間下種、即生喜肥、今案千日紅、近年中華ヨリ來ル、其花千葉ニテアツク、形楊梅ニ似タリ、コキ紫色ニテウルハシ、冬ニ至テシボマズ好花也、魚汁馬糞ヲ肥トスベシ、或曰畏寒、早ク霜雪ヲフセグベシ、子甚細微、

〔和漢三才圖會 九十四末 濕草〕千日紅(せんにちこう)

按千日紅、高二三尺、莖似秋海棠而淡紫色、葉似雞頭草而大、面有毛茸、八九月生花、深紫色、千葉圓而形似楊梅形、其盛久可百日矣、有樹名百日紅者、以勝之稱千日紅、不實唯收花、二月揉碎之蒔種生、或

牛膝

和名ムラサキケマン、

〔新撰字鏡 草〕牛膝（爲○乃○久○豆○知○、又爲○乃○伊○比○、又云百倍草、）

〔本草和名 六草〕牛膝（陶景注云、莖節似二牛膝一、故以名レ之、）一名百倍、一名其稜、一名解倉、一名牛莖、一名薽、一名餘容、一名白木、（已上六名出二釋藥性一）一名牛唇、（出二小品方一）一名蓋薇、（出二雜要訣一）和名爲乃久都知、一名都○奈○岐○久○佐○、

〔倭名類聚抄 二十草〕牛膝 陶隱居本草注云、牛膝（和名爲乃久豆知）節似二牛膝一、故以名レ之、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕御覽引二吳普本草一云、牛膝生二河內或臨卬一、葉如二夏藍一、莖本赤、陶注有二雌雄一、雄者莖紫色而節大、圖經、春生レ苗、莖高二三尺一、青紫色、有レ節如二鶴膝一、又如二牛膝狀一、葉尖圓如レ匙、兩々相二對於節上一、生レ花作レ穗、秋結レ實甚細、時珍曰、牛膝處々有レ之、謂二之土牛膝一、不レ堪二服食一、惟北土及川中人家栽蒔者爲レ良、秋間收レ子、至レ春種レ之、其苗方莖暴節、葉皆對生、頗似二莧葉一而長且尖䯤、秋月開レ花作レ穗、結レ子狀如二鼠負虫一、有二濇毛一、皆貼レ莖倒生、

〔書言字考節用集 六生植〕牛膝（ヰノコヅチ）　對節菜（同、山莧菜、牛莖並同、見二本草一、）　牛膝（コマノヒザ）　對節菜（同）

〔古今要覽稿 草木〕ゐのくつち　こまのひさ　牛膝

ゐのくつち、（延喜式、新撰字鏡、本草和名、和名抄、名義詳ならず、蓋しくとこと音通なるべし、）ゐのこつち、（本草類編、和漢三才圖會、）岡村尙謙曰、古今醫統に牛膝一名鼓槌草、其莖有レ節如二鼓槌一、ゐのは全く猪のにして、恐らくは犬山椒犬蓼の犬の如く、ゐは其狀相似たるものをさしていひしにや、さらば鼓槌の名、和漢暗合の通稱なり、然るを本草啓蒙に讚州にてはゐのこつち、又ゐのころつちといふよしかゝればゐのこは全く狗字なれば、卽狗槌の義也、さはいへゐのこは、蓋し土人のゐのこを誤りていひ傳へしものなるか、又はゐはゐの音通なるもしるべからず、ゐのいひ、（新撰字鏡）つなぎぐさ、（本草和名）いなきくさ、（醫心方、以上名義詳ならず、）こまのひざ、（本草類編）駒はなを馬の如し、おもふに皇朝にては、古より牛膝を午膝とよみ來りしより出來し名なるべし、されば千金方藥注にも、こまのひざは牛字を午とあやまりたるなりとみへたり、ふし

角、子黑而扁光、似莧實而大、生下濕地、蜀本圖經、葉細軟長、亦爲莖、圖經云、二月內生青苗、長三四尺、葉闊似柳細軟、莖似蒿青紅色、六月七月內生花、上紅下白、子黑光而扁、有似莨菪、根似蒿根而白、直下獨莖生根、時珍曰、青葙生田野間、嫩苗似莧可食、苗葉花實、與雞冠花一樣無別、但雞冠花穗或有大而扁或團者、此則梢間出花穗、尖長四五寸、狀如兔尾、水紅色、亦有黃白色者、子在穗中、與雞冠子及莧子一樣難辨、蘇恭言其結角誤矣、

〔和爾雅七草木〕青葙子（ノゲイトウ）萋蒿、崑崙草、野雞冠、雞冠莧、子名草決明、

〔重修本草綱目啓蒙十二草〕青葙　○アマサク和名鈔　○ノゲイトウ　○イヌゲイトウ雲州　○キツネピ播州　○ノピキヤン同上　○イヌノオ備州　一名雞冠莧救荒本草　崑崙子事物正傳　青葙子品字箋　白蔓月阿比本草圖經　蔓月阿[illegible]村家方

ノゲイトウノ名アレドモ、常ノ雞冠花ノ野生シタルニ非ズ、別ニ一種アリ、春後苗ヲ生ズ、一根一莖直上ス、高サ一二尺或ハ五七尺、圓葉互生ス、雞冠花葉ニ似テ淡綠色、又瘠地ノ者ハ狹小ニシテ、番椒葉ニ似タルモアリ、夏ノ末枝梢ゴトニ穗ヲ出ス、形圓細長サ三五寸、小花密布シテ長筆頭ノ形ノ如ク、大サ指ノ如シ、色白クシテ尖ニ淡紅色アリ、故ニキツネピノ方言アリ、一種穗末淡黃色ナルモノアリ、黃花ノ青葙ナリ、花後實ヲ結ブ、圓扁ニシテ極テ小ク、雞冠花子ニ似タリ、黑ク光リ漆ノ如シ、是藥用ノ青葙子ナリ、實熟シテ苗根共ニ枯ル、

〔多識編二草〕桃朱術、今案鮓奈留能計伊土介、

〔和漢三才圖會九十四本草〕桃朱術　陶朱術 略○中

按桃朱術、初生似青葙、而葉似野蜀葵、其花黃或白或紫、似百合花而小、子作角、中子白、

〔重修本草綱目啓蒙十二草〕青葙 略○中

附錄、桃朱術、　董炳說トコロノ陶朱術ハ、黃花ノ青葙ナリ、陳藏器說トコロノ桃朱術ハ紫菫ナリ、

青葙

〔書言字考節用集 六生植〕雁來紅(ガンライコウ)一名、老少年、時珍云、其葉九月鮮紅、望之如花、故名、又一種、六月葉紅者、名二十樣錦一云々 雁來紅

〔和爾雅 七草木〕雁來紅(ガンライコウ) 同 老少年 十樣錦(シフヤウキン)(葉早紅面紫黃綠者爲二十樣錦一、雁來面紅而紫紫葉者爲二雁來紅一、)

〔藻鹽草 八草〕雁來草

かまつかの花 又はかきつか花ともいふ也、此花さく比雁來と云々、

〔重修本草綱目啓蒙 十中隰草〕青葙 ○略

雁來紅 ハゲイトウ、ガンライサウ、佐州 ハゲイトウニ數種アリ、雁來紅ハハゲイトウノ内ニテ、脚葉ノ色紫ニシテ秋ニ至テ頂ニ深紅色ノ葉ヲ出スヲ云、一名春不老、(通雅)還少年、(遵生八牋)秋紅、(三才圖繪)秋色、(閒情偶寄)還童草、(同上)映日紅、(汝南圃史)百日紅、(事物紺珠)後庭花、(救荒本草)一種脚葉綠色ニシテ、秋ニ至テ頂ニ黃色ノ葉出ルヲ雁來黃ト云、花戸ニテ黃ガンライト云フ、十樣錦ハニシキサウ、モミヂサウト呼ブ、此モハゲイトウノ内ニテ、秋ニ至テ紅綠黃紫ノ四色雜ル者ヲ云、一名錦西風、(秘傳花鏡)錦布衲、(群芳譜)玉樹後庭花、(汝南圃史)十錦、(空明子草譜)

〔剪花翁傳 四七月開花〕葉雞頭 雁來紅 にしき葉 黃色葉あり、猩々葉あり、十分の色は七月下旬より用ふ、方日向、地中乾、土塵交、肥淡小便、下種春彼岸よし、

〔枕草子 三〕草の花は

わざとととりたてゝ、人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげ也、名ぞうたてげなる、かりのくるはなともじにはかきたる、

〔本草和名 十草〕青葙(楊玄操音私羊反)子名草決明、一名草蒿、一名萋蒿、一名崑崙草、(出二蘇敬注一)一名卑高、一名葙棄子、(已上出二釋藥性一)一名青蒿、(出二疏文一)和名字末佐久、一名阿末佐久、

〔倭名類聚抄 二十草〕青葙 本草云、青葙、(私羊反、和名字末佐久、一云阿萬佐久、)

〔箋注倭名類聚抄 十草〕陶注、青葙子云、似二麥欄花一、其子甚細、蘇云、此草苗高尺許、葉細軟、花紫白色、實作

云、南京ノ種尤ヨロシ、好種ヲマキタキ鍛ロク頭クナルアリ、シゲタクウヘテ花初テ開ク時、アレキヲバ早ク抜去テ、好花ヲ養フベシ、三四月子ヨリ苗ヲ生ズ、六月ヨリ花サキ霜後ニ萎ム、凡五箇月ノ間シボマズ、百日紅山茶花海紅ナド、花久シクアリトイヘドモ、花落テカハル〴〵サキツヾク事久シキ也、一花ノ如此久シキニ堪ル事、雞冠花ニシクハナシ、其葉嫩キ時可食、性アシカラズ、草花譜曰、有紫白開帶者、名二色雞冠、實ヲマキテ遲ク生ズルハ花ヨシ、

〔重修本草綱目啓蒙十草〕雞冠　ケイトウ　一名洗手花（群芳譜）　杜若（藥圃同春）　一捧雪（閒情偶寄）　紫冠（鼠璞）

種類　波羅奢（花鏡）

俗ニケイトウト呼ブ、雞頭ノ意ナルベシ、然ドモ此花ハ雞ノ冠ニ似タリ、雞頭ニハ似ズ、唐山ニハオニバスノ實ヲ雞頭ト云、雞冠數種アリ、一種莖短ク、僅ニ三五寸ニシテ、大ナル花ヲ開ク、高麗ゲイトウ、又南京ゲイトウ、チヤボゲイトウト云、漢名壽星雞冠（群芳譜）、廣東雞冠（同上）、一種花ノ形圓ニシテ末尖ルヲヤリゲイトウ、又スギナリケイトウト云、漢名掃帚雞冠（花史左編）、一種花ノ形扁大ナルヲトサカゲイトウ、又ヒラゲイトウト云、漢名扇面雞冠（群芳譜）、此外ニモ種類甚多シ、一種掃帚雞冠ノ形ニシテ、花ノ末及傍ニ細枝ヲ出シ、其梢各小扇面ノ如ナル者出テ、多ク下垂スルヲミダレゲイトウ、又ヤウラクゲイトウト云、漢名瓔珞雞冠（群芳譜）、一種紅黄二色間リ開クモノヲ、サキワケケイトウト云、漢名二色雞冠（花史左編）、二喬雞冠（同上）、唐山ニハ五色相間ルモノアリ、五色雲（閒情偶寄）ト云、

〔農業全書四菜〕雞頭花

肥地に宜し、手入よくこやしぬれば、莖葉大きになり、茹てあへ物ひたし物とし味よし、花さまざま見事なるあり、其味も莧には增れり、其性も能ものなり、

〔尺素往來〕爲庭上之景、莊嚴前栽仕候、（中略）秋花者、（中略）雞頭花、

〔多識編二草〕雁來紅、毛美知久左、枕草子云加留久左、

鷄冠

ウ佐渡　ヌメリヒユ防州　イヌヒヤウ相州　ズンベラビヤウ加州中略○此草春ハナシ、夏ノ初子生ズ、莖ハ圓ニシテ赤ク、地ニ布テ直立セズ、葉兩對ス、形稍ニシテ厚ク、長サ五七分光リアリ、故ニ保昇ノ說ニ、此草ヨリ水銀ヲ取ルコトヲ云リ、

〔農業全書四菜〕莧

莧種々數多し、二月に種子を下し、三月の末うゆべし、其色靑きあり、赤き、紫、又まだらなるあり、料理には、靑きを用ゆべし、味もよし、是葉菜の絕間に盛長し、めづらしき物なり、七月以後は食するに宜しからず、種る事は、四五月圓の廻りにうへ、又は茄子のわきにうへて、同じくこゑを少用ゆれば、よくさかへしげりて、味もよく和らかなり、赤き莧は霜にあひて、色濃愛すべし、但此時は食味には用ひず、又瓜と莧と鼈と、同じく食すれば、甚病を生ず、おなじ時分に多き物なれば、同食を愼むべし、馬齒莧とてあり、是莧の類にあらず、葉馬の齒のごとく、其性又莧に似たれば、馬齒莧と書り、和名すべりひゆと云意は、其性なめらかにして莧に似たるゆへなり、其葉をすりて、腫物歷瘡にぬりてよく治す、茹てあへ物さしみなどに用ゆべし、脾胃よはき人には、よろしからず、

〔宜禁本草乾五菜〕莧菜　甘寒無毒、人莧葉小、白莧葉大、赤莧莖葉俱赤、赤莧能療赤下、而不堪食、殺虫毒、孟詵云、莧補氣除熱、人白二莧、實主靑盲白翳、明目除邪、利大小便、去寒熱、殺蚘虫、霜後採、益精去肝風客熱、葉多食動氣煩悶、冷中損腹、與鼈同食生鼈瘕、赤莧根莖、精藏食之甚美、性微寒、故主血痢、

〔延喜式三十九內膳〕供養雜莧

日別一斗、〇中略莧四升、五六七八月

〔多識編二四草〕鷄冠、今案登里佐久左、俗稱計士介、

〔書言字考節用集六生植〕鷄冠草(トサカノクサ)俗云鷄頭花　鷄頭花(ケイトウゲ)本名鷄冠

〔大和本草七花草〕雞冠花(ケイトウゲ)　花紅白黃三色アリ品多シ、鮮紅ニシテ大ニ重ナル者上品ナリ、錦雞頭ト

地者、

赤莧、莖葉赤紫色、高者三四尺、略似雁來紅而美也、五色莧亦似十樣錦、而共種庭園愛之、

〔重修本草綱目啓蒙 十九菜部〕莧 ヒユ○和名鈔 ヒヤウ○俗名 ヒヨ○筑前、江州、 ヒイ○雲州、備前、 カラヒイ○備前 ヒイナ○阿州 ヒヤウアカザ○津輕 ハビヤウ○加州 ヒヤウナ○紀州 マヒユ○ トウビユ○ ト○ ウノヒユ○勢州 ○中略

莧ハ總名ナリ、數種アリ、食用ノ者ハ人莧白莧ナリ、故ニ單ニ莧ト云ハコレヲ指ス、人莧白莧同物ニシテ、大小ニテ名ヲ異ニス、即今俗ニヒヤウト呼ブモノナリ、春種ヲ下ス、苗雞冠ニ似テ紅ナラズ、葉モ赤相似テ圓ニシテ尖リ互生ス、秋ニ至リ高サ四五尺、葉間ゴトニ穗ヲナシ花ヲ開ク、極テ細小ナリ、後小黑子ヲ結ブ、光リアリテ雞冠子ノ如シ、霜シテ莖根共ニ枯ル、

〔成形圖說 二十三菜部〕比由○和名鈔 中略

本艸に六種ありといへども、要は四種ぞあなる所謂白莧、赤莧、斑莧、野莧なり、家莧は葉莖大にして方五六寸に至るものあり、白莧をよろしとす、斑なるは白莧の變色にて形は殊に大なり、○中略 今試るに、莧の類六月以後は食ふに堪へず、老なる時は長甚高く、細花を開き穗をなす、穗中に細子あり、形扁くして光黑し、○中略 野莧は、田野に自生す、是を細莧と云、其莖紫色にして柔に葉細し、其味却て家莧に勝れり、

〔本朝食鑑 三菜部〕汰莧 訓比由、古訓字未詳、

釋名 如馬齒莧也、葉細似馬莧、本地面生、其葉細微、俗呼爲馬齒莧、野大(平野)莧、俗稱爲汰莧、是汰利之義耶、汰字俗誤爲飴猶、

集解、田野家園多生、柔莖帶赤、布地細細對生、葉細微似馬齒、狀柔滑有光、采苗作蔬、六七月開細花、結小尖實、實中細子如葶藶子狀、此亦三月下種、然野生者甚多矣、

〔重修本草綱目啓蒙 十九菜部〕馬齒莧 ウマビユ 和名鈔 スベリヒユ イハヒブル 伯州 スベリヒヤ

〔下學集草木下〕莧(ヒユ)〔陝澗反、莧與鼈不可合食、莧葉裹鼈甲、以土覆之、一夜變爲鼈也、〕

〔和爾雅七菜蔬〕莧(ヒユ)　馬齒莧(スベリヒユ)〔馬莧、五行草並同、〕　白莧(シロヒユ)〔大者曰白莧、又云人莧、〕　野莧(ノヒユ)〔小者爲野莧、又云猪莧、〕　黃莧(アカヒユ)〔爾雅云、赤莧曰蕢、〕

〔東雅十三穀蔬〕莧ヒユ　義不詳、倭名鈔に本草を引て、莧味甘寒也など見えし事もあれば、或は其性の寒なるによりて、此名有けんもしるべからず、〔ヒユとは、冷なるといふが如き也、〕莧染色具に、本草註を引て赤莧あり、莖葉純紫不堪食之と註せしは、これをもて染料となしける也、また陶隱居本草を引て、馬莧一つに馬齒莧、漢語抄にウマヒユと註せしは、即今俗にスベリヒユといふ是也、

〔物類稱呼三生植〕莧ひゆ　東國にてひやうと云、奥津輕にてひやうあかざといふ、加賀にてはびやうと云、馬齒莧、相模にていぬひやうと云、加賀にてすんべらびやうと云を、江戸にてすべりびやうと云、

〔倭訓栞前編二十五比〕ひゆ〇中略　和名抄に莧をよめり、性冷の義にや、東國にひやう、津輕にひやうあぎ、加賀にはひやうといふ、赤莧をあかひゆとよめり、染色部に入たり、馬齒莧をうまひゆとよめり、相模にいぬひやうといふ、今いふすべりひゆ也、加賀にすんべりひやうといふ、白莧は唐ひゆ也、五色莧は花ひゆ也、又まひゆといふは、常のひゆにや、

〔本朝食鑑三柔滑菜〕莧〔訓比由、本朝式亦同、〕

集解、田野家園處處多有之、其下種培養者長大也、其野生者細小也、狀類在藍雞冠、而長大者四五尺大抵三月撒種、苗葉似藍而小圓有皺文、莖葉俱可作蔬茹、六月勁梗不堪食、開細花成穗、或著莖結子、其穗中細子扁而光黑、與雞冠子相同、九月收之、不收則至冬不凋、又有紅莧、初嫩則赤、長而紅、老而紫、莖葉同色、可食可愛、霜後不變亦佳、

〔和漢三才圖會百二柔滑菜〕莧菜　和名比由〇中略

按莧似藍而微圓有皺、六月開細花成穗、子扁光黑似雞冠子、人採莖葉爲蔬、野生者葉小、又有莖葉數

ニ異ナラズ、又七葉ノ者ハ救荒本草ニ說ク所ノ、雞腿兒一名翻白草ナリ、葉ハ紫藤葉ニ似テ鋸齒アリ、葉背ニ白毛多シ、花ハ三葉ノ者ト同ジ、根ハ皆小指ノ大サノ如クニシテ兩頭尖リ、一窠ニ數枚アリ、赤皮白肉生食スベシ、小兒採テ食フ、又葉背白カラザル者亦二品アリ、七葉ノ者ヲ大葉ノカハラザイコト云、是雞腿兒ノ一種ナリ、三葉ノ者ヲミツバザイコト云フ、一名ムマノミツバ京北山是翻白草ノ一種ナリ、花ハ二品トモニ形色同シテ大ナリ、又委陵菜ニモ翻白菜ノ名アリ、救荒本草ニ出ヅ、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕柴胡〇中略

又河原柴胡ト呼ブモノアリ、胡蘿蔔葉ニ似テ背ニ白毛アリ、故ニウラジロトモ云、中夏ニ至リ、五出ノ黃花ヲ開ク、根ハ皮赭黑色肉黃白ニ粗皮ヲ去リテ乾シ貨ル、庸醫誤用テ解邪ノ材トス、コレ柴類ニシテ柴胡ノ類ニ非ズ、卽救荒本草ノ委陵菜一名翻白菜ニシテ、本草原始ノ翻白草一名雞腿根ナリ、又一種河原柴胡アリ、此ニ三葉ナル者ト、七葉ナル者トアリ、總ジテブクレウサウト呼ブ、三葉ナル者ハ俗名ミツバザイコ、卽菜部ノ翻白草、一名湖雞腿、一名雞腿根是ナリ、コノ七葉ナル者ヲ救荒本草ニ、雞腿兒、一名翻白草ト云フ、三葉七葉ノ二品皆葉背ニ白毛アリ、故ニ翻白草ノ名アリ、今又大葉ノ河原柴胡ト呼モノアリ、葉七葉ノ方ニ同ジクシテ背ニ白毛ナシ、是雞腿兒ノ類ナリ、又三葉ノ者ト形同クシテ、背ニ白毛ナキモノアリ、赤ミツバザイコト呼、是翻白草ノ類也、又白頭翁ニシャグマザイコノ名アリ、又徐長卿ニスヾザイコノ名アリ、

〔本草和名十八菜〕莧實仁諝音胡諫反一名馬莧、一名莫實、一名莧菜、白莧、細莧、赤同一名䉋莧、赤莧一名賁、徒逢反馬莧一名馬齒莧、本條一名鶲莧、出雜要決一名蕣莧、出大清經和名比由、

〔倭名類聚抄十七野菜〕莧　本草云、莧音現、去聲、和名比由、味甘寒無毒者也、

〔類聚名義抄八草〕莧莧之去聲ヒユ　赤莧アカヒユ　馬莧ウマヒユ

〔重修本草綱目啓蒙十三毒草〕狼牙

和名鈔ニコマツナギト訓ズ、大葉ノダイコンサウヲ狼牙ニ充ル古說アリテ、今藥肆ニモダイコンサウヲ狼牙ト稱シ賣レドモ穩ナラズ、其大葉ノダイコンサウハ、隰草類ノ水楊梅ナリ、又小葉ノダイコンサウアリ、救荒本草ノ水蘿蔔ノ類ナリ、狼牙ハ野州日光及足尾山中ニ生ズ、圓莖高サ一二尺、葉互生ス、三葉一蒂ニシテ蛇含(オヘビイチゴ)葉ノ形ニ似テ毛アリ、六月枝梢ニ花ヲ開ク、五瓣黄色、形蛇(ヘビ)苺(イチゴ)花ニ似テ小ナリ、ソノ根曲リ尖リテ、獸牙ノ形ニ似タリ、嫩根ハ色白ク舊根ハ色黑シ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

常陸國廿五種、〇中略　狼牙一斤九兩、　近江國七十三種、〇中略　狼牙十四斤、〇下略

水楊梅

〔大和本草九雜草〕水楊梅　狼牙草ニ似テ葉小ニ、黄花如穗、路傍多生高一尺餘、其實似楊梅、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕水楊梅　ダイコンサウ　ダイコンナ大和本草　ノダイコン備後　八丈草

江州　コマツナギ大坂

別ニ小葉ノダイコンサウアリ、故ニ此草ヲ大葉ノダイコンサウト呼テ分ツ、山野道傍ニ極テ多シ、春ハ地ニ塌シテ叢生ス、葉ノ形蘿蔔(ダイコン)葉ニ類シテ厚ク深綠色、柔毛アリテ澀刺ナシ、夏月莖ヲ抽コト二三尺、枝葉互生ス、枝頂ゴトニ一花ヲ開ク、五出、形梅花ノ如ニシテ深黄色、下ニ重蒂アリ、花謝シテ楊毬ヲ結ブ、大サ三四分許、楊梅ノ形チニ似リ、根ハ年ヲ經テ枯レズ、形ハ杜衡ノ如ク淺黑色ナリ、

翻白草

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕翻白草　ツチナ新校正　ツチグリ　ブクレウサウ大坂　ウラカゼグサ

ミツバザイコ　カワラザイコ同名アリ

此ニ三葉七葉ノ二種アリ、此書ニ說ク所ノ翻白草ハ三葉ノ者ナリ、葉ハ蛇含葉ニ似テ、背ニ白毛多シ、一根數葉冬凋マズ、春ニ至リ莖ヲ生ジ、地ニ布キ梢ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、五瓣黄色、委陵菜(カハラサイコノ)花

狼牙

〔和漢三才圖會九十二末山草〕繡線菊 俗云之毛豆介

按繡線菊高一二尺、葉似薔薇葉而小、五月開碎花、狀似胡蘿蔔而淡赤色可愛、又有白花者、一種樹有繡線菊、其樹葉似粉團花而枝頂上開花、狀似繡線菊、故俗呼曰木繡線菊、未知其本名、

〔枕草子三〕草の花は

しもつけのはな

〔和泉式部續集下〕二十日、とはきはどよりとみゆるふみを、もてきたれば、さもやとおもひてとはすれば、あらぬ所のなりけり、

しもつけの花とみるこそかひなけれ人のとふべきみかはと思へば

〔散木弃謌集十雑部〕しもつけ

恨みても何にかはせん花みると今朝しもつけぬ心せばさは

〔本草和名十草〕牙子、一名狼牙、一名狼子、一名犬牙、陶景注云、狼牙似獸之牙齒、一名虎牙、一名支蘭、一名天牙、一名狍牙、一名代、一名義、一名附子、正月採根、名之、已上七卷出同藥性、和名宇末都奈岐、

〔倭名類聚抄二十草〕狼牙 陶隱居本草注云、狼牙一名犬牙、和名古末豆奈木、根牙似獸牙齒、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄十草〕千金翼方證類本草中品有牙子、云一名狼牙、一名犬牙、則二名並本條之文、源君引併爲陶注、非是、○中略蜀本圖經曰、苗似蛇苺而高大、深綠色、圖經曰、根黑、

〔書言字考節用集六生植〕狼牙草コマツナギ 本草、苗似蛇苺、根黑若獸牙、 金剛草同上 犬牙草同又云文選

〔大和本草九雜草〕狼牙草 葉如蘿蔔有岐、ヨコ廣シ叢生ス、鮑グナトヲ假ニ赤ク腫ル丶ニ、此草ヲスリテ付レバ忽愈ユ、其生ナルシボリ汁ヲノミ、或センジテノム、或云、外ニ此草ヲツケ、內ニハ紫花ノキラン草ヲモミテ、其汁ヲ呑ベシ、又金瘡ノ血ヲ止ム、モミテ付ベシ、小兒ノ赤草ナドニ用、必效アリ、別ニ又大根菜ト云草アリ、

草下毛

石州　キ○ウ○リ○グ○サ○日州　ボ○ウ○ブ○パ○ナ○大和　ノ○コ○ギ○リ○グ○サ○近江　テ○ン○ピ○サ○ウ○紀州花色赤キ故名ク、和方書
ニ天皮草ト云ハ竹ノ青皮ナリ、　一名無名印綿経　玉札譜群芳　豚楡係石薬爾雅　菰菜本草綱目　境、一名描除、博雅
ワレモカウニ同名多シ、蔚草、蒼朮、カルカヤニ似タル草、皆ワレモカウノ名アリ、
諸州皆アリ、山野向陽ノ地ニ生ズ、一窠數十葉叢生ス、形紫藤葉ニ似テ大ニシテ鋸齒アリ、楡葉ノ如シ、夏月叢葉中ヨリ數莖ヲ出ス、高サ四五尺葉互生ス、葉間ゴトニ枝叉ヲ分ツコト長シ、ソノ端ニ細花簇マリ毬ヲナス、長サ六七分濶サ三四分、形筆頭菜ノ如シ、又重層シテ生ズルモノアリ、赤紫色ノモノ多シ、又紅色ナルモノ粉紅色ナルモノ白色ナルモノアリ、白色ナルモノ粉紅色ナルモノモ穗長ク、葉モ細長ク、苗高サ六七尺ニ過グ、白花ハ筑前ニ多シ、粉紅花ハ江州湖邊ニ多アリ、此外數品アリ、此根ヲ採リ日乾シ搗キ碎キ艾絨ノ如クシ、瓷器ニ灸シテ孔ヲ穿ツベシ、舶來ノ者ハ直根ナリ、和產多クハ横生シテ硬シ、下品ナリ、國ニヨリ直根ナルモアリ、粉紅花白花ノ者ハ直根ナリ、享保年中ニ渡リシ唐種ハ、根柔直ニシテ防風根ノ如シ、上品ナリ、

〔草木育種後編下藥品〕地楡われもかう木草　和蘭にてピンピテといふ、山の赤土に植てよし、糞を澆ぎて勢にし花に白と紅と種々あり、和蘭にて根を豚畜蠻綽の弛弱に用ふ、種類多し、

〔剪花翁傳四八月開花〕仙蓼われもつかう　花形竹茶色開花八月中旬より十月上旬まであり、方日陰地二分濕、土肥えらばず、分株春彼岸よし、形ちはりの木のごとく、高さ三尺にもおよぶなり、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
山城國卅二種、略○中　地楡、黃蓍各十斤、　大和國卅八種、略○中　地楡十六斤、略○下

〔武江產物志藥草〕志村邊ノ產　白花地楡　鳳山ノ產　地楡道灌ニモ

〔倭訓栞前編十一〕ゑもつけ略○中　草○下○つ○毛○あり、綉麻也といへり、花に紅白あり、

〔大和本草七花草〕草下毛シモツケ　木ニモ下ッ毛アリ、花ハ相似タリ、初夏發二細紅花一、一朶群開如二敗醬一、

〔新撰字鏡 草〕地楡 曾。比。久。々。佐。

〔本草和名 九草〕地楡 一名玉豉、(陶景注云、子黑如豉、故以名之、)一名玉札文、一名玉豉文、一名金玉之香華、一名豉母、(雜人呼之、)地楡者莠蕘之精也、(出大清經、)和名阿。也。女。多。牟。、一名衣。比。須。禰。、

〔倭名類聚抄 二十草〕地楡 陶隱居本草注云、地楡一名玉豉、(和名阿夜女太無、一云衣比須禰、)子黑似豉、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕證類本草中品引、作葉似楡而長、初生布地、而花子紫黑色如豉、故名玉豉、一莖直上、此節引、○中略 圖經、宿根三月內生苗、初生布地、莖直高三四尺、對分出葉、葉似楡少狹細長、作鋸齒狀、青色、七月開花、如椹子紫黑色、根外黑裏紅、似柳根、時珍曰、其葉似楡而長、初生布地故名、

〔多識編 二山草〕地楡、也。末。布。之。、今案乃。古。岐。利。久。佐。、

〔東雅 十五草卉〕決明をエビスグサといひ、地楡をエ。ビ。ス。チ。といひ、○中略 始て出でし地方をもて呼ぶに似たり、

〔宜禁本草 乾中草〕地楡 微寒、治熱痢血痢疳痢、止汗消酒、葉作飲代茶甚解熱、

〔大和本草 六草〕地楡 ワ。レ。モ。カ。ウ。也、京大坂ノ植木屋ニアリ、ノコギリ草ヲ地楡トスルハアヤマリ也、別ニワレモカウト云物アリ、ゼ類ナリ、花如穗似荻花、

〔物類品隲 三草〕地楡 和名ワレモカウ、處處ニ多シ、花紫色ナリ、一種白花ノモノアリ、葉細小花長コト寸餘ニシテ細シ、以上二種皆下品ニシテ不堪用、漢種上品、享保中種子ヲ傳テ、今官園ニ多シ、葉大抵和產ト同シテ、又別ニ小椅葉アリ、和產ハ椅葉ナシ、根ノ狀沙參防風ノゴトク、直根ニシテ軟ナリ、年ヲ經タルモノ旁根生ズトイヘドモ、皆下ニ向フ、和產根橫ニ出テ紫黑色ニシテ、堅剛ナルニ異ナリ、譬ヘバ朝鮮參ト和ノ竹節參ノゴトシ、功用優劣辨ヲ待ズシテ明ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 七山草〕地楡 ア。ヤ。メ。タ。ム。(和名鈔) エ。ビ。ス。子。(同上) シ。ヒ。モ。ノ。マ。タ。ラ。(古歌) ノ。ヅ。チ。(同上) ワ。レ。モ。カ。ウ。 タ。ン。ゴ。イ。タ。バ。キ。(江州) ダ。ン。ゴ。バ。ナ。(伊勢) ノ。コ。ギ。リ。サ。ウ。 ノ。カ。ヘ。リ。

雉莚

〔本草和名 十一草〕女青 一名雀瓢、(蘇敬注云、子似瓢形、故以名之、)蛇銜根也、(蘇敬曰、非也、)一名雀由祇、(出釋藥性、)和名加波禰久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕女青 本草云、女青一名雀瓢、(和名加波禰久佐、)蘇敬注云、子似瓢形、故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇注云、葉似蘿摩、兩葉相對、根似白薇、生平澤、莖葉並臭、又引別錄云、葉嫩時似蘿摩、圓端、大莖、實黑、莖葉汁黃白、亦與前說相似、○中略證類本草引子似瓢形大如棗許、故名雀瓢、本草和名引與此全同、源君蓋依補仁、然欠大如棗許字、則雀字義不斷、節略失當、

〔多識編 二草〕蛇含、宇豆末米久左、一云、幾良牟左宇、

〔重修本草綱目啓蒙 十二隰草〕蛇含 ウツロメクサ(延喜式) オヘビイチゴ オトコヘビイチゴ キラン サウ(金瘡小草ニモコノ名アリ、故ニ黃花ノキランサウト名テ別ツ、) 五葉草(勢州、漢名ノ五葉草ハ五爪龍ナリ、) キヂムシロ(大和本草) 一名蛇瓢草(集驗方) 蛇纏草(蛇藤ノ條) 增、一名紫背草、(附方) 路旁ニ多シ、葉ハ蛇苺葉ニ似テ五葉トナリ、五加葉ノ形ノ如シテ長ク、深綠色叢生ス、又七葉八九葉トナルモアリ、春末數莖ヲ抽ヅルコト一尺餘、葉互生ス、三葉ニシテ蛇苺葉ノ形ノ如シ、莖ニ枝又ヲ別チ黃花ヲ生ズ、蛇苺ヨリ小シテ委陵菜(カハラサイコノ)花ニ似タリ、○中略

女青 蛇含ノ根

女青ニ藤本草本ノ二種アリ、本條ハ草本ノ女青ニシテ、卽蛇含ノ根ナリ、藤本ノ女青ハヘクソカヅラナリ、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥

信濃國十七種、○中略女青六斤、

〔大和本草 九雜草〕雉莚 五葉アリ、葉ノ側刻缺アリ、四月ニ單黃花ヲ開ク、毛莨ノ花ニ似タリ、其莖如蔓シテ短シ、

〔武江產物志 藥草〕道灌山ノ產 雞腿兒(きじむしろ)

一覆盆子　一莓 同年　　　　　　　　　　　　中澤掃部助

〔武江産物志 菓〕道灌山ノ産　懸鉤子(いちご)　鶯田藨(こじやういちご)　早稲田邊　覆盆子 關口、本所ニ多、　飛鳥山ノ産
蓬虆(くさいちご) 根レハイサ所レ

〔續江戸砂子 一〕江府名產 并近在近郷
地覆盆子　牛込の先關口の邊より出る
近在は青梅、和田、植木下村、島中、駒木野、神護寺、金剛寺、河崎稻荷新田などより出る、

〔肥前國郡志 上 土産〕覆盆子　出佐西郡能見島、土人取之賣酒店、酒家漬此於酒中、以爲覆盆酒、其味大甜、

〔日本書紀 十四 雄略〕九年七月壬辰朔、河内國言、飛鳥戸郡人田邊史伯孫、○中略 月夜還、於蓬蔂丘譽田陵下、蓬○蔂此云伊致寐姑、

〔本朝無題詩 二 雜物〕賦覆盆子、　法性寺入道殿下 ○藤原忠通
夏來偏愛覆盆子、佗事又無樂不窮、味似金丹勞眼美、色分青草只呈紅、眞珠万顆周墻下、寒火一鑪孤壷中、附酒嘗詩歌餘處、猶爲珍物自然充、

〔古今著聞集 十九 草木〕同大將○源賴朝 もる山にて狩せられけるに、いちごのさかりになりたるをみて、ともに北條四郎時政が候けるが、連歌をなんしける、
もる山のいちごさかしくなりにけり、大將とりもあへず、
むばらがいかにうれしかるらん

〔庭訓往來〕御札之旨、大齋之饌、心事難申盡候、○中略 時以後菓子者、○中略 覆盆子、

〔本草和名 十〕蛇全 楊玄操音泉、陶景注云、是蛇含、蘇敬注云、全是含字誤也、宜改爲含、含銜義同、一名蛇銜、一名朝生、出釋藥性 一名女青、出釋藥 一名兜鈴蛇銜、出雜要決 和名都木女、

埒一種モミヂイチゴト云者アリ、葉ノ形槭樹ノ葉ノ如シ、又一種フクベイチゴト云モノアリ、實ノ形フクベニ似タリ、又近世阿蘭陀種ノ蛇苺ト呼ブ者アリ、春舊根ヨリ數莖ヲ叢生ス、高サ一尺許、常ノ蛇苺ノ葉ニ似テ厚ク大ニシテ莖勁シ、面深綠色ニシテ、背ニ白毛多シ、花ハ白色ニシテ實ハ淡黄色、大サ楊梅ヨリ大ニシテ味ヨシ、

〔剪花翁傳二月開花一〕唐覆盆子　花一重、白色、開花二月末より三月まであり、方二分陰、地三分濕、土撰ばず、肥大便、寒中入べし、下種春彼岸、分株春彼岸に出て筍のごとし、是を缺分植べし、移十月也、葉は葡萄のごとし、此月より紅葉して散ざるものを、春まで插花にもちふ、正月中旬より彼岸にかけて、若芽生ずるを用ふるなり、

〔剪花翁傳三月開花二〕山覆盆子　花一重、色白、形ち儀奘に似て、葉は五加子に似たり、芒刺あり、開花三月中旬、方地土えらばず、肥大便、寒中入べし、下種分株春彼岸よし、移十月中よし、

〔延喜式内膳三十九〕供奉雜菜
日別〈〇中略〉覆盆子二升、〈五月〇中略〉〇中宮准此、
覆盆子園二段
右依件令殖、若不滿數遷替之時拘其解由、

〔延喜式大膳三十三〕諸國貢進菓子
山城國〈中略〉覆盆子一擔〈〇中略〉河内國〈中略〉覆盆子一擔〈〇中略〉攝津國〈中略〉覆盆四擔〈〇中略〉
右依前件、〈其數臨時增減〉隨到撿收附内膳司、

〔枕草子三〕あてなるもの
いみじううつくしきちごの、いちごくひたる、

〔殿中申次記〕六月二日

ロイチゴトモ云、コレ亦覆盆子ノ一種ナリ、舶來ノ覆盆子ハ實ノ長サ三分濶サ二分餘、末尖リ、スギナリニシテ盆ヲ覆シタルガ如シ、故ニ覆盆ト名ク、色綠ニシテ紅ナラズ黑ナラズ、是半熟ノ時採ル故ナリ、寇宗奭收時五六分熟便可采ト云フ、

懸鉤子。キイチゴ（木本ナリ、又實ノ色黄ナリ、コノニクサ號テ名ク、）　カナイチゴ泉州　ツルキイチゴ（木本ナレドモ、枝蔓テ蔓ノ如キ故名ク、）　ナガリイチゴ播州　ホガロイチゴ備後　一名懸鉤草（[illegible]）

山中多ク生ズ、高サ三五尺叢生ス、莖ニ刺多シテ衣服ニカヽル、故ニ懸鉤ト名ク、葉互生ス、形細長クシテ本ニ兩尖アリ周圍ニ鋸齒アリテ、午時花ノ葉ニ類ス、又五七岐ニシテ、カイデノ葉ニ似タルモアリ、共ニ葉ニ刺多シ、葉ノ形變ジテ異ナルモノ數十品アリ、皆種ハ別ナリ、或ハ土地ニ因テ然リ、一根ニシテ形變ズルニ非ズ、四月葉間ニ花ヲ開ク、白色五瓣、梅花ヨリ微小シ、後實ヲ結ブ、大サ五分許、五月ニ熟ス、色黄食フベシ、一種實小ク熟シテ赤色ナルアリ、葉ハ三尖ニシテ山字ノ形ニ類シ背白シ、コレヲ五月イチゴト云フ、播州　一名ニガイチゴ同上　ツホカハイチゴ備後　コガネイチゴ（丹波 中略）○

蛇莓。クチナハイチゴ　ヘビイチゴ　ミツバイチゴ（勢州田丸ト同名ナリ）　カラスノヤマモヽ　一名雞冠果（救荒本草）　野楊梅（同上）　蛇藨子草（集驗方）　蛇達只（本草綱目）

原野ニ甚ダ多シ、人家ニモ自生ス、秋新苗ヲ生ジ、長蔓ヲ延キ冬モ枯レズ、葉ハ互生ス、三葉一蒂ニ簇リ、形長クシテ鋸齒アラシ、正二月葉間ニ花ヲ開ク、一莖一花、五瓣黄色、大サ四五分、委陵菜（カハラサイコ）花ニ似テ大ナリ、緑蕚二重、後實ヲ結ブ、蓬蘽ノ如シ、大サ六七分、熟シテ赤シ、コノ苗蛇含ト相似タリ、蛇含ハオヘビイチゴナリ、五葉七葉ニシテ花オクレテ三四月ニ開ク、形蛇莓ヨリ小ナリ、然レドモ蛇含ニ三葉ノ者アリ、蛇莓ニ一種五葉ナル者アリテ混ジ易シ、五葉ノ者ハ救荒本草ノ雞兒頭苗ナリ、

シクダシ(筑前)ミツバイチゴ、ホウラクイチゴ、ハタライチゴ、(丹後)ハクランイチゴ、(豊前)ウシイチゴ、(讃州)

原野ニ多ク生ズ、蔓ト木ト相兼ヌル者ナリ、三葉ヅヽ一處ニ集リ生ズ、形圓ニシテ鋸齒アリ、背白シ、四月枝頂ニ枝ヲ分チ、多ク花ヲ開ク色赤シ、大サ四分許、五月實熟ス色赤シ、一毬五六子他苺ヨリ粒大ニシテ毬小シ、一種深山幽谷ニ高サ六七尺ニ直立シ生ズルアリ、莖ニ紫赤色ノ毛及刺アリテ、玫瑰(ハマナス)枝ノ如シ、葉ノ形大ニシテ背殊ニ白ク、花モ大ニシテ白シ、懸鉤子ハ時珍ノ說是ナリ、蛇苺ハタヂナハイチゴ、

增、(啓蒙)〇中(略)蘭山翁深山幽谷ニ高サ六七尺、莖ニ紫赤色ノ毛刺アリテ、玫瑰ノ枝ノ如シト云モノハ、ソノ葉楓(カヘデ)ノ葉ニ似タル故ニ、カヂノハイチゴト云フ、一種タハノハイチゴト云アリ、葉ノ形桑葉ニ似テ、莖葉共ニ毛刺アリ、秋ニ至レバソノ毛刺紫色ニ變ズ、冬ニ至テ葉落ツ、又蓮ノ葉イチゴト云アリ、ソノ莟葉中ニアリテ藕(ハス)ノ莖ノ如シ、又スナイチゴ、ヤナギイチゴ等アリ、

覆盆子　トツクリイチゴ　ナツイチゴ　一名叢生藥王(事物異名、藥譜及群芳譜生ニ叢ヲ叢ニ作ル、同字ナリ、)〔義物錄 物産〕

異名設　秋膠(同上)　末廬德連(本草綱目)　末廬德連只(本草附方)　增、一名覆盆子、(外臺秘要)

今漢種アリ、卽浙江ノ覆盆子ナリ、蔓生甚繁茂ス、莖ニ刺多シ、高サ六七尺ニ過グ、葉互生ス、形蘆田(アシタ)燕(バ)葉ヨリ狹ク、五葉或七葉ツヽキテ、茶蘼(トキンイバラ)葉ノ如クニシテ短シ、莖ト共ニ白色ヲ帶ブ、夏月舊莖ノ新枝ノ端ニ花ヲ開ク、一朶數十蕚枝ヲ分コト野薔薇(ノイバラ)ノ如シ、花ハ五出白色、野薔薇ヨリ小ナリ、後實ヲ結ブ、形寒苺(フユイチゴ)ノ如シ、熟シテ紅紫色ナリ、トツクリイチゴハ伊勢及越前ニ產ス、形狀漢種ニ同シテ白カラズ、實形トツクリニ似リ、故ニ名ク、又一種タマイチゴアリ、一名御所イチゴ、フクロイチゴ、形狀甚ダ蓬藥ニ似テ、紫黑毛及ビ刺多シ、高サ四五尺枝梢ニ花アリ、五瓣白色漢種ト同ジ、實形末尖リ大サ二三分、熟スレバ一夜ノ中ニ俄ニ長ジテ五六分ニナリ、色黃ニシテ中空シ、故ニフク

抜木苺、似覆盆苺葉而硬、深青色、莖無刺、(時珍所謂者、蛇苺之類是也、)

蛇。苺。　蛇䓘　地苺　蠶苺　俗云久。知。奈。波。以。知。古。

本綱蛇苺田野道旁有之、其地引細蔓、節節生根、每枝三葉、葉有齒刻、四五月開小黃花、五出、結實鮮紅、狀似覆盆、而面與蒂則不同、其根甚細、其實不堪噉、

蛇苺根汁(甘酸大寒有毒)治傷寒大熱胸腫大熱不止、三月無、又孩兒口噤、以汁灌之、傅湯火傷、痛卽止、(俗傳食之能殺人、亦不然、止發冷涎耳、)

按、蛇苺、攝州處處多出之、俗傳用蛇苺實裹藥服治癆瘵、或與鷄卵同用、治溫瘧癰瘡也、未知其據、蓋有毒草多服豈得宜乎、今人治便毒腫痛、灰藥丸如大豆、二三粒空心服、多試皆有效、

〔重修本草綱目啓蒙　十四蔓草〕蓬蘽。　クマイチゴ　ヤブイチゴ　ワセイチゴ　ニナヘイチゴ　タハンスイチゴ(京師)　ホソイチゴ(肥前)　ワバイチゴ(讃州)　ナベイチゴ(雲州)

路傍ニ多ク生ズ、葉茶藨葉ニ似テ、深綠色ニシテ皺アリ、莖ト共ニ毛多シテ刺アリ、三月枝ノ梢ニ花ヲ開ク、白色五出大サ一寸許、肥タル者ハ七八出ニ變ズルモアリ、複瓣二重花後實ヲ結ブ、四月ニ熟ス、形蛇苺ノ如シ、莓中ノ尤早ク熟スル者ナリ、故ワ。セ。イ。チ。ゴ。ト云フ、實ノ形ノ似タルヲ以テタハンスイチゴト呼ブ、集解陳士良ノ説ニ、葉似野薔薇有刺ト云、紹興本草ノ圖モ、タナイチゴノ形ナリ、時珍ノ蓬蘽ヲ寒苺トナシ、割田藨ノ名ヲ釋名ニ入ハ誤ナリ、

釋名、覆。盆。ハトツタリイチゴト同名、寒。苺。ハフユイチゴトキシラズ、

陰地ニ多シ、蔓草ナリ、葉互生ス、形圓ク尖リ細齒アリテ厚シ、又多葉ノ葉ニ似タルモアリ、深綠色ニシテ冬モ凋マズ、夏ノ末花ヲ開ク、一莖ニ多クアツマリテ葉間ニアリ、白色五瓣花後實ヲ結ブ、冬ニ至テ熟シ紅色ナリ、

集解、蠶。苺。子ハ蛇苺ノ一名ナリ、插。田。藨。ハ卽覆盆子、時珍ノ説是ナリ、薅。田。藨。ハナハシロイチゴ、ア

名黒莓、山中田間希有之、以逹其節、人不賞之曰、有毒、一種就地生蔓長數寸、開黃花結實如草莓、而鮮紅不可食、俗名蛇莓、而甚有毒矣、近代食莓者必合砂糖而食亦佳、

氣味、甘平無毒、主治煖肺益腎、壯陽澁陰、

〔和漢三才圖會九十六(蔓草)〕蓬藟　覆盆　陵藟　陰藟　寒莓　割田藨　俗云豆留以知古

本綱、此類(蓬藟、覆盆子、藨、樹莓、蛇莓、)凡有五種、時珍嘗親采、以爾雅所列者校之、始得其的、諸家異說多、皆未可信也、

蓋蓬藟者、藤蔓繁衍、莖有倒刺、逐節生葉、葉大如掌狀、類小葵、葉面青背白、厚而有毛、六七月開小白花、就蒂結實三四十顆成簇、生則青黃、熟則紫黯、微有黒毛、狀如熟椹而扁、冬月亦苗葉不凋、

子(甘酸)　安五臟、益精氣、强志倍力、久服輕身不老、

覆盆子　茥(音奎)　西國草　缺盆　畢楞伽　大麥莓　插田藨　烏藨子　和名以知古

本綱、覆盆子蔓小於蓬藟、亦有鉤刺、一枝五葉、葉小而面背皆青、光薄而無毛、開白花、四五月實成子、亦小於蓬藟而稀疏、生則青黃、熟則烏赤、冬月苗葉凋、

氣味(甘平)　安和五臟、溫中補虛、益氣力、强陰健陽、女子食子有子、

蓬藟覆盆子二物功用大抵相近、雖是二物、其實一類而二種也、一早熟、一晚熟、兼用無妨、

藨(音標)　一名薅田藨

薅田藨、其蔓小於蓬藟、一枝三葉、葉面青背淡白而微有毛、開小白花、四月實熟、其色紅如櫻桃、似覆盆而太赤、味酸甜可食、不堪入用、(覆盆子、熟者烏赤色、薅田藨、熟者紅色、)

樹莓　懸鉤子　木莓　沿鉤子　葥(音箭)　山莓　俗云木以知古

本綱、樹莓、樹生高四五尺、其莖白色有倒刺、其葉有細齒、青色無毛、背微淡青、頗似櫻桃葉而狹長、又似地棠花葉、四月開小白花、結實色紅、與覆盆子一樣、但色紅爲異、

氣味(酸平)　止渴、除痰、醒酒、去酒毒、

せりき、万葉集の歌に、イチシといひし即此也、イチゴは即イチムゴなり、其義は不詳、(中略)或人の説にイチゴといふは、イは發語の詞、チとは血也、ゴは子也、其子の紫き事血の如くなるをいふなり、いかにやあるべき、草木の名イチといふ者の如き、苘麻をイチヒといひ、橡子をイチヒといひ、覆盆子なども、イチゴといふ、書盆橡子の如き、血色に似たるの義とも見えず、

〔倭訓栞中編二〕いちご　蓬蘽をいふ、日本紀にいちひごとよめり、多いちご也、寒いちごとも、時しらずともいふ、寒苺とも見ゆ、倭名鈔に覆盆子を訓せり、蔓いちご也、一種蔓小きに實大なるを草いちごともいふ、一種蔓衍して莖に側刺あるを黒いちごともいふ、黄いちごは懸鉤子也、唐いちごも色黄也、又播田麓はわせいちご、又おらんだいちごあり、木いちごは樹苺、へびいちごは蛇苺也、又とこくりいちごあり、蓬生蘽王也といへり、

〔宜禁本草乾部〕覆盆子　甘酸、樹上生者名樹苺、乾之名覆盆子、多刺平無毒、能縮小便、令髮不白、五月於日中曝之、日西乾見鋼、主男子腎精虛竭、女子食之有子、强陰健、能令堅長、益氣輕身、安五藏、益顏色、小兒食之功効同、失採則敗、枝生蝕、收時五六分熟時便採日曝、治肺虛寒、益腎藏、服之覆其溺器、故取名、

〔本朝食鑑四〕苺　訓伊知古

集解、苺一種藤蔓不長、莖有鉤刺、一枝五葉、狀類小麥葉、面青背青光澤、開白花、四五月實成著子稀疎、生則青黃、熟則烏赤、冬月苗凋、俗名津留苺、一種蔓小、於津留苺、一枝三葉、面青背淡白而有微毛、開小白花、四月實熟紅如櫻桃而大、於津留苺、味亦純甘、俗名草苺、一種樹高四五尺、葉似草苺葉狹長、四月開小白花、結實與前之二苺一様、但色紅爲異、俗名木苺、其味減於前之二苺、然其樹插之易生長、能成叢、故子亦太多、近時專用木苺、家家栽之、以防其野也、前之二苺、雖園籬畦畔、土濃水、辛苦栽培而後結子亦少、於是近時用之者稀矣、一種藤蔓繁衍、莖有倒刺、逐節生葉、葉大如掌、面背青白厚而有毛、六七月開小白花、就蒂結實三四十顆成簇、生則青黃、熟則紫黯、微有黑毛、形如熟椹而扁、冬月苗葉不凋、俗

俗名薅田藨、卽爾雅所謂藨者也、故郭璞注云、藨卽莓也、子似覆盆而大、赤色、酢甜可食、此種不入藥用、一種生者、樹高四五尺、葉似櫻桃葉而狹長、四月開小白花、結實與覆盆子一樣、但色紅爲異、俗亦名藨、卽爾雅所謂山莓、陳藏器本草所謂懸鉤子者也、一種就地生蔓、長數寸、開黃花、結實如覆盆而鮮紅、不可食者、本草所謂蛇莓也、小野氏曰、今俗呼草莓薮莓和世莓者、可充本草蓬蘽、紹興本草圖可證、今俗呼夏莓、德利莓者、可充爾雅缺盆本草覆盆子、時珍所謂插田藨也、今俗呼苗代莓、三葉莓者、可充爾雅藨、時珍所謂薅田藨也、今俗呼木莓者、可充爾雅葥、本草拾遺懸鉤子、今俗呼冬莓者、卽寒莓、時珍所謂割田藨也、○中略按依陶注、覆盆以似覆盆之形得名、俗從草作蕧葐、又以覆字繁縟、故省西作復也、與旋蕧字不同、源君欲以俗字改正字、非是、下總本注末有或用莓子二字六字、按本草和名云、蓬蘽和名以知古、覆瓮和名加宇布利以知古、蓋以本草本經載蓬蘽、別錄載覆瓮、別二物也、然本草云、蓬蘽一名覆瓮、陶注云、蓬蔂是根名、覆瓮是實名、蘇注云、覆瓮蓬蔂、一物異名、故源君不分爲二物也、加字布利以知古、謂覆盆形也、王念孫曰、人所食莓、卽莓子耳、蜀本草引切韻云、莓子、覆盆也、郭注爾雅、蒛茥覆盆也、廣雅云、缺盆莓也、李云、蓬蘽是莓、然則莓也、莓子也、蒛盆也、覆盆也、蓬蘽也、名異而實同也、陶弘景集名醫之說、而時或不得其解、乃云蓬蘽是根、覆盆是實、其說與本草經蓬蘽一名覆盆者顯然不合、蜀本草、開寶本草、則又小變其說、以蓬蘽爲覆盆之藤蔓、至食性本草、本草拾遺、本草衍義諸家、乃竟以蓬蘽覆盆爲二草說之、愈詳而失之逾遠矣、

〔下學集 草木 下〕覆盆子(イチゴ)

〔書言字考節用集 生植 六〕覆盆子(イチゴ)一名 同 缺盆(同)爾雅 莓 同

〔和爾雅 草木 六〕莓(イチゴ)莓子、藨子、並總名也、覆盆子(クマイチゴ、ハンスイチゴ)蒛茥、寒莓並同、爾雅謂之茥、蓬蘽(トキシラズイチゴ、フユイチゴ)割田藨同、薅田藨上同、懸鉤子(キイチゴ)樹莓、木莓、山莓並同、蛇莓(ヘビイチゴ、クチナハイチゴ)蛇藨、地莓並同、

〔東雅 果蓏 十四〕覆盆子イチゴ　倭名鈔に爾雅本草唐韻等を引て、覆盆子はイチゴ、今按覆宜作蕧と註せり、諸家本草に據るに、蓬蘽は覆盆子といふものにて、日本紀に蓬蘽此にイチムコといふと註

古事類苑

植物部十八

草七

〔本草和名 十七〕蓬蘽〈仁諝音力水反〉一名覆盆、一名陵累、一名陰累、〈本條〉一名馬朦、一名陸荊、一名苺、〈仁諝音茂〉一名馬苺、〈已上三名出兼文〉一名大苺、〈出小品方〉一名木苺、一名山苺、〈已上二名出崔禹〉和名以知古、

覆盆〈陶景注曰、蓬蘽名、覆盆實名〉一名蔙蔂、苺子、藤鉤子、〈江東十月有也、名曰藤鉤子、已上三名出崔禹〉和名加宇布利以知古、

〔本草和名 十一〕鹽苺汁〈仁諝音茂〉和名倍美以知古、

〔倭名類聚抄 十七〕覆盆子 陶隱居注云、蓬藟〈逢壘二音〉覆盆也、本草云、覆盆子、〈和名以知古、今案覆宜作蕧、芳福反、見唐韻〉

〔箋注倭名類聚抄 九〕郭注又云、實似莓而小、亦可食、本草、蓬藟一名覆盆、陶注云、李云、即是人所食莓耳、陶注又云、今莓子乃似覆盆之形、而以津汁爲味、其核甚微細、本草圖經云、苗短不過尺、莖葉皆有刺、花白、子赤黄、如半彈丸大、而有蔕承、如柹蔕狀、小兒多食其實、本草衍義云、覆盆子、長條、四五月紅熟、其味酸甘、外如荔枝櫻桃許大、軟紅可愛、李時珍曰、此類凡五種、一種藤蔓繁衍、莖有倒刺、逐節生葉、葉大如掌、狀類小葵葉、面青背白、厚而有毛、六七月開小白花、就蔕結實、三四十顆成簇、生則青黄、熟則紫黯、微有黑毛、狀如熟椹而扁、冬月苗葉不凋者、俗名割田藨、卽本草所謂蓬藟也、一種蔓小、於蓬藟、亦有鉤刺、一枝五葉、葉小而面背皆青、光薄而無毛、開白花、四五月實成、子亦小、於蓬藟、而稀疏、生則青黄、熟則烏赤、冬月苗凋者、俗名插田藨、卽本草所謂覆盆子、爾雅所謂茥缺盆也、此二者俱可入藥、一種蔓小、於蓬藟、一枝三葉、葉面青、背淡白而微有毛、開小白花、四月實熟、其色紅如櫻桃者、

按梅鉢草高四五寸、葉略圓厚小、面青色帶赤、三月開白花、單葉似梅花、蓋鳳樣草、夏雪草、梅鉢草、一輪草之花、皆似梅、一輪草葉似鳳樣草葉小、三月開單白花、似梅、

〔大和本草七花草〕額草(ガクサウ) 大小二種アリ、大小共ニ葉ハ紫陽花ニ似タリ、花色モ似タリ、只花ノ形額ニ似テ方ナリ、橫竪長短アリ、小額草(コガクサウ)モ大額草ニ相似テ甚小ナリ、其花亦額ニ似タリ、葉甘シ、葉ヲ蒸テホシ爲細末甘茶トス、又壺草ニモ甘茶アリ、大額小額共ニ四五月ニ花開ク、額草トハ近俗之所稱也、

梅鉢草

升麻アリ、ミナアハボノ一種ナリ、古ハ升麻ヲトリノアシグサト訓ズ、今ニテハ別ニ一種ノ草ヲトリアシ升麻ト云フ、此草向陽ノ山ニ多シ、加條葉ニ似タルモノ九枝二十七葉ホドツクモノ一葉ナリ、夏臺ヲ抽テ花ヲ開ク、眞ノ升麻ヨリ早シ、穗ハ長大ニシテ枝多ク花數甚ダ多シ、花ハ尤細小ニシテ一分ニ盈タズ、色白シ、又淡紅色桃紅色ノ者アリ、此ヲアハユキサウト云、此ニ小葉ノ者アリ、葉ノ枝數アハユキサウヨリ又多シ、其餘形狀同ジ、コレヲナツユキサウト云、花ハ白色亦淡紅色ノ者アリ、又アハモリサウ、一名アハモリ升麻ト云アリ、能州ニテヨメヲドシト云フ、苗ナツユキサウヨリ短小ナリ、葉細長クシテ當歸葉ノゴトク厚シ、花ハナツユキサウヨリ早ク開ク、トリアシ升麻ハ根皮赤黄色又赤色ナリ、故ニアカ升麻ト云、古ハ藥肆ニコレヲ賣ル、ボウデ、クヽリデト云アリ、又皮ヲ削リタルヲ、ケヅリ升麻ト云ヘリ、即集解ニ謂ユル小升麻一名落新婦ニシテ、升麻ノ下品ナリ、ソノアハモリ升麻ハ又其下品也、又古ハ金線草ノ根ヲ升麻ニ僞リ賣ル故ニ、タデ升麻ミヅヒキ升麻ノ名アリ、細葉升麻ノ嫩葉ヲ日光ニテハ菜トシ食フ、故ニサラシ菜ト呼ブ、花戸ニテヤサイ升麻ト名ク、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種、〈○中略〉藁本、升麻各八斤、　攝津國卌四種、〈○中略〉茯苓、升麻各三斤、〈○下略〉

〔武江產物志藥草〕道灌山ノ產　升麻〈王子飛鳥山〉〈アスカ山下〉

〔佐渡志物產五〕升麻　方言イヌノヌ　山中ニアリ

〔大和本草花草七〕梅バチ　小草ニテ花白シ好花ナリ、盆ニウヘテ翫玩トスベシ、花ノカタチ衣服ノ紋ニツクルムメバチノゴトシ、叡山如意ガ嶽ニアリ、攝州有馬湯山ニ多シ、俗アヤマリテコレヲ落花生ト云、落花生ハ別物ナリ、

〔和漢三才圖會濕草九十四末〕梅鉢草　俗稱〈本名未詳〉〈今以梅花爲衣服之文、呼曰梅鉢、故名、〉

〔大和本草六〕升麻　若水云、葉強クシテ宿根空木ニ似タリ、又苧葉ニ似テ葉大ナリ、葉皆向上、一根叢生ス、又有別ニ能似者勿誤混、本草曰、生苗高三尺以來、四五月著花似粟穗、六月以後結實黑色、中華ヨリ來ル、外黑ク內靑色ナルヲ用ユベシ、時珍云、今人惟取裏白外黑而緊實者、本邦ノ俗醫、升麻ト稱シテ用物二種アリ、一種ハ鳥ノ足ト云、其葉芹ニ似タリ、一種ハタデ升麻ト云、葉モ莖モ犬タデニ似タリ、二種共ニ升麻ニアラズ、必不可用、今案本草無忌火之說、入門曰、發散生用、補中酒炒、止咳汗者蜜炒、國俗以爲忌火者何也、

〔重修本草綱目啓蒙八山草〕升麻　トリノアシグサ〈江[illegible]武〉　ウタカグサ〈和名鈔〉　アハボ　ミブフデ〈肥後〉　サラシナ　イワダラ〈越後〉　イワンタイラ〈佐州〉　モクダ〈同上〉　一名既濟公〈[illegible]〉　犍脚〈村家方〉

升麻ノ花ハ粟ノ穗ノ如クニシテ白色、筆頭ノ形ニ似タリ、故ニアハボトモ、ミブフデトモ名ク、春宿根ヨリ新葉ヲ叢生ス、凡ソ三枝九葉ヲ一葉トス、又九枝二十七葉ニモナル、ソノ一葉ヲ離セバ地錦ノ葉ノ形ノ如シ、厚クシテ光澤アリ、莖ハ細ク硬ク光アリテ粟ノ稈ノ如シ、夏月長莖ヲ抽テ秋ノ末ニ至リテ花ヲ開キ、長キ穗ヲ成ス、肥タルモノハ穗ニ數枝ヲ分ツ、花大サ三分許、六瓣、初ハ白色微紅、開ケバ白クシテ內ニ白蘂多アリテ絲ノ如シ、滿開スレバ瓣ハ見ヘズシテ蘂ノミ見ユ、瓣モマタ早ク脫シテ絲ノミ殘レリ、市ニ鬻グ根ハ、唐升麻ヲ上品トス、根大ニシテ外黑ク內白、是鬼臉升麻ナリ、朝鮮ヲ中品トシ、和ノ升麻ヲ次トス、和ノ升麻ノ中ニ數品アリ、根色黑キヲ上品トス、日光升麻ハ根大ニシテ色黑シ、唐ヨリハ色淺キ故燒黑クシタルモノアリ、日光升麻ノ葉ハ狹來ニシテ、苗高サ五六尺ニ至リ、枝ヲ分ツテ花ヲ開ク、藥肆ニテ和ノ升麻ノ內ノ上品トシ、唐ニ次グトス、又野カラマツサウノ根ヲ燒、黑クシテ僞ルモノアリ、故ニ日光ノ土人ハ、野カラマツサウヲ升麻ト呼ブ、又濃州ノ深山、及江州伊吹山ノ產ハ、根細ク外黑內靑ク堅實ニシテ味極テ苦シ、コレヲ藥舖ニテ眞ノ升麻ト云、是雞骨升麻ナリ、唐山ニテハコレヲ佳品トス、又此外大葉升麻、三葉

升麻

共ニ根上ニ細紅線ヲ出シ、四邊ニ引クコト甚長シ、處處ニ小葉ヲ生ジ、後鬚根ヲ出シ、分レテ數窠トナル、一種春ノユキノシタハ、葉綠色ニシテ紫ナラズ、春中花ヲ開ク、形小ニシテ白色、後實ヲ生ズ、又一種イハブキハ北國ニ產ス、面背共ニ綠色ニシテ毛ナシ、葉大ニシテ橐吾(ツワブキ)ノ如シ、花小ク穗長大ニシテ枝アリ、一種ユキモヨウハ葉綠色ニシテ深岐アリ、秋花ヲ開ク小ニシテ數多シ、又長葉ナル者アリ、一種ヤツデユキノシタハ、葉綠色ニシテ刻缺アリ、ツタモミヂノ葉ニ似テ厚ク柔ナリ、秋ニ至テ花ヲ開ク、瓣痔テ大ノ字ノ如シ、故ニ花戸ニ名ケテ大文字草ト呼ブ、一種瓣直ニ茎レテ斜ナラズシテ、大ノ字ニ似ザルヲ人形草ト呼ブ、其ニ花後實ヲ生ズ、一種ヤマユキノシタアリ、一名ナガユキノシタ、雌ユキノシタ、チャルメルサウ、幽谷溪澗ニ多シ、葉長薄尖リ、細齒有テ杏葉ノ如シ、大サ二三寸、色綠ニシテ紫色ヲ帶ブ、一根ニ叢生ス、莖葉ニ紫毛アリ、春莖ヲ抽ヅ高サ一尺許花ハ多ク穗ヲナス、瓣ナクシテ短紅絲圓布ス、下ニ五瓣ノ萼アリ、ソノ萼略喇叭(チャルメル)ニ類ス、故ニチャルメルサウト呼ブ、

增、ヤフデユキノシタト、大文字草ハ別種ナリ、混同スルハ誤ナリ、大文字草ノ葉ハ細長ニシテ、末ニ缺刻アリ、ヤツデユキノシタノ葉ノモミヂノ如クナルニ異ナリ、一種チャルメルテウノ形ニ似テ、甚毛刺アルモノアリ、クサイワパリト呼ブ、

〔新撰字鏡 草〕升麻 鳥足草、又云周麻、

〔本草和名 草六〕升麻、一名周麻、鷄骨升麻、青綠色者 落新婦、不必爾 和名止利乃阿之久佐、一名宇多加久佐、

〔倭名類聚抄 草二十〕升麻 本草云、升麻、和名止里乃阿之久佐、一云宇太加久佐、

〔箋注倭名類聚抄 草十〕本草圖經、春生苗、高三尺以來、葉似麻葉並青色、四月五月著花、似粟穗白色、六月以後結實黑色、根紫如蒿根多鬚、李時珍曰、其葉似麻、其性上升、故名、按張揖廣雅及吳普本草並云、升麻一名周升麻、則或指周地、如今人呼川升麻之義、今別錄作周麻、非、省文、即脫誤也、

岩蓮花(いはれんげ)　岩にとり付て生るれんげのかたちにてちいさく、一つに子多くわかれ生ズ、きくめい石木石等にうへてながめとなれり、佛甲草とは各別のものなり、又一種有て蓮花大きく色うす白し、唐蓮花といふ、岩蓮花とは是又別のもの、

〔多識編 二石草〕虎耳草、今案登良乃美美、

〔和爾雅 七草木〕虎耳草(ユキノシタ)(石荷葉同)

〔大和本草 七草〕虎耳草　本艸石草ニ載ス、雪ノ下ト云、又キジンサウト云、其花白シテ二片アリ、他花ニ異ナリ、梢ニ先一花開テ後下枝ノ衆花サク、是亦他花ニカハレリ、多クサキタルハ愛スベシ、甚暑ヲオソル、暑ニアヒテカハケバ枯ヤスシ、日ヲ掩ヒ水ヲソヽグベシ、根下ノ蔓ヨリ根ヲ生ズルハ活ヤスシ、鬚根ヲウフレバ枯ル、秋ウフベシ、春ウフレバ枯ヤスシ、陸地ニウヘタルハ活ヤスシ、石ノ側ニモウフベシ、キジン草ヲ瓦葦ナリト云説アリ誤レリ、

〔和漢三才圖會 九十八石草〕虎耳草　石荷葉　俗云雪下草(中略)

被虎耳草葉布地生、其花白帶淡紅、微似秋海棠之態、結子、採其葉黒燒和油、傅小兒頭瘡爲良、

〔重修本草綱目啓蒙 十六石草〕虎耳草　ユキノシタ　キジンサウ(京)　イドバス(泉州)　キンギンサウ(石州)　イハカブラ(上野)　イハブキ(越前)　一名金絲荷葉(汝南圃史)　葉下紅(百病全方)　金絲荷(花暦百詠)　草(南寧府志)　蟹殼草(秘傳花鏡)　金線草　金絲草(同上)　虎鬚草(鎮江府志)　獅子耳(汀州府志)　耳草(建德縣志)　猪母聹　虎聹草　獅子聹(共同上)

山谷陰濕石上ニ生ズ、又市中ニモ多ク栽ユ、甚繁茂シ易シ、葉ハ圓扁ニシテ蟹殼ノ如シ、周邊ニ淺缺アリ、質厚ク面深緑ニシテ紫色ヲ間ヘ、紋脈白色ニシテ紫毛アリ、背ハ毛ナクシテ淡紫色、一根ニ數葉布生ス、夏月莖ヲ抽ルコト長サ一尺許、紫毛多シ、花多ク穗ヲナス、其形白色ノ二長瓣下垂シ、二ツノ短小瓣上ニ並ビテ品字ヲナス、粉紅色ニシテ紅點アリ、一種粉紅花ノ者アリ、甚稀ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕佛甲草　總名マンネングサ　ツルレンゲ　イツマデグサ　ステグサ丹波　イハマキ同上　ノピキヤシ雄、泉州、雌、大和本草、　ネナシグサ雄、大和本草、雌、勢州、　ハマヽツ雄、紀州、播州、陸、紫州、　イミリグサ雄、豐後、雌、豐前、

雄名イチゲサウ大和本草、テンジンノステダサ藝州、ステグサ紀州、シテダサ豐州、ツミキリグサ筑前、チリナリ南部、タカノツメ勢州、越山、ホツトケグサ同上、山田、ホトケグサ同上、内宮、ネナシカヅラ總州、江戸、コンゴウ防州、ミズタサ同州、センネンサウ濃州、ヒガンサウ泉州、マムシグサ伯州、イハノボリ同上、ナゲダサ越後、マツガネ江州、彦根、カラクサ同上、守山

雌名イチクサ三國會、オマンネンサウ同上、コマノツメ勢州、イチリタサ津輕、フエクサ秋田、コヾメグサ防州　路旁陰處林下水側ニ多ク生ズ、雌ナル者ハ苗高サ六七寸叢生ス、葉細クシテ厚ク末尖リ、長サ八九分、黄緑色三葉ゴトニ相對ス、莖ヲ切リ捨テ枯レズ、自ラ根ヲ生ズ、四五月梢ニ花ヲ開ク、五瓣黄色、大サ三分許、多ク枝ニ發テ美ハシ、苗ハ冬ヲ經テ枯レズ、

雄ナル者ハ苗高サ二三寸、葉雄ナル者ヨリ狹小、長サ三分許、厚クシテ尖ラズ、葉密ニ攢リ生ズ、冬ヲ經テ枯レズ、冬春ニ至リ葉紅紫色ニ染テ美ハシ、四五月花ヲ開ク、形色雄ナル者ニ同ジ、一種圓葉ナル者アリ、葉大サ一二分、花ノ形色モ同ジ、幽谷石上ニ生ズ、一種方葉ナル者ハミヅウルシト呼ブ、一名ヤマブタイ、イハガネサウ、葉大サ三四分甚厚シ、夏花ヲ開ク、形色ツルレンゲニ同ジ、

〔增補地錦抄八〕岩蓮花　植分春秋岩の間々に土を少入て植る、肥には白水を節々かける、

〔廣益地錦抄七〕佛甲草　葉冬は地に付てれんげのごとく、三月比より段々のびたちて、枯木岩にとり付多くしげり、五六寸ほど有、尺にたらぬ小草なり、四五月ごろ花さく、黄色小りんあいらしく、ながめ有、秋のするよりかれて地に敷て、いはれんげのごとく、又しほらしくきくめい石、あるひは木石等にとり付て生る、一名佛指甲共云、又の名一夏草とも云、またつるれんげ共云、

相似テ不同、此草土ニ不栽シテ數根ヲ合セ、空中陰處ニカケ置、數日ニ一度水ヲソヽゲバ、常ニ生ジテ不枯コト、鳳蘭ノ如シ、佛甲草モ亦同、佛甲草ハ葉小長ク末尖ル、仙人艸ハ葉小ニシテ圓シ、花ハ同、又根鬚ナク活ヤスキ事モ同、或コレヲイツマデ草ト云、久シク不枯故ニ名ヅク、然ドモイツマデ草ハツタニ似タリ、壁ニ生ズ、與此不同、

〔大和本草附錄一〕佛甲草　毒虫ノサシタルヲ治ス、ムカデ蜂ノサシタルニツク、又蛇ノハミタルニ付テヨロシ、葉ヲスリテ付ル、鷄小蛇ヲノンデ腹大ニ脹ル、此草ヲシリナクラフ、タチマチ小蛇ヲ瀉下シテ腹ヘル、蛇ハタヾレテ出タリ、蛇ノ來ル處ニシゲクウフレバ、蛇ヲソレテ不來、他ノ毒虫モ避ケテ不來、蚊ノクヒタル處ニ、葉ヲモンデ付レバ忽痛止、此草庭中或盆中ニウフベシ、數多シ、

〔和漢三才圖會九十八石草〕佛甲草　佛指草　俗云岩蓮華、山草部有二佛指甲草一、亦此類乎、(◯中略)

按佛甲草淡綠色、而初生形色彷彿佛座蓮華、故曰二岩蓮華一、層層生葉而末窄、梢開二小白花一、狀如二浮屠之塔一、

爪蓮華　其葉細長似二獸爪一、又如二胡麻莢一者比比生也、狀與二岩蓮華一同、當年生者無花、翌八月著花、性最惡濕、

〔百品考上〕石蓮華　和名イ。ハ。レ。ン。ゲ。

宋學士全集游荊塗山記云、有二草生石上一、高一尺、其花可玩、不假土力、取懸檐間、呼爲石蓮華、

山中石上ニ自生ス、今人家假山ニ多栽ウ、葉ノ長サ二寸許、末濶ク頭圓シ、淡綠色ニシテ白綠ヲ塗ルガ如シ、疊疊相重テ千葉蓮花ノ如シ、夏葉心ヨリ莖ヲ抽コト一尺許、五瓣ノ白花穗ヲナス、大サ三分許、佛甲草(マンネングサ)ノ花ニ似タリ、後莢ヲ生ズ、又佛甲草ニ同ジ、熟シテ苗根共ニ枯ル、子落テ生ジ易シ、冬ヲ經テ枯レズ、

以知草

〔和漢三才圖會 九十八石草〕以知草（正字未詳、景天草和名訓以岐久佐、此亦景天之屬也、故訛曰以知草乎、）

按以知草、似景天草而極小者、又似爪蓮華苗、高三四寸、莖枝弱如蔓繁茂、五月開小黃花、人家庭園栽易茂、

壁生草

〔和漢三才圖會 九十八石草〕壁生草（いつまでぐさ）　萬年草（マンネンサウ）（玉柏亦稱萬年草、但草字香與訓別耳、）

按壁生草、卽以知草之類、而葉略圓、色微濃、性好水而惡深濕、極易生、或細切莖挿地則活、雖石壁上、初以濕土栽之則久不死、五月開五瓣尖小黃花、似以知草花、

〔枕草子 三〕草は

いつまで草はおふる所いとはかなくあはれ也、岸のひたいよりも、これはくづれやすげなり、まことのいしばいなとには、えおひずやあらんとおもふぞわろき、

〔枕草子春曙抄 三〕八雲に壁に生云々、壁に生るは、岸に根をはなれたるよりはあやうしと也、

佛甲草　岩蓮花　仙人條

〔多識編 二石草〕佛甲草、今案保登介乃豆米、

〔和爾雅 七草木〕佛甲草（イハレンゲ）（佛指草同）

〔大和本草 七圖草〕岩蓮花　倭俗ノ名也、其草ノ形狀葉メグリ連リテ、恰蓮花ノ開ケルガ如シ、異草也、或曰佛甲草是也ト、非ナリ、本草所言ト不合、實ヲマケバ能生ズ、

佛甲草　本草綱目石草類所載ヲ考ルニ、今京都及諸州ニ一夏（ゲ）草ト云物アリ是也、又無根草ト云、根鬚ナシ、葉ハ細長クシテ尖レリ、莖ヲ折リテ土ニ挾メバ能生ズ、莖葉似馬齒莧、其餘ハ皆本草ニ所言ノ如シ、庭間又ハ盆ニウフ、是ヲ岩蓮花ト訓ズルハ非也、

仙人條（ノビキヤシ）　此草火ニヤケザルユヘニ、國俗野火消ト名ヅク、葉ハ馬齒莧ニ似テ高一尺ニ不滿、無根鬚、挾メバ能生ズ、其莖自折而落能生ズ、實亦落而能生ズ、四五月黃花ヲ開ク、其莖如條枝ニ有三股、盆ニ栽テ可玩、酉陽雜俎十九卷曰、仙人條無根蔕、生石上、狀如同心蔕、三股色綠トイヘリ、佛甲草ニ

景天葉ヨリ細長ク薄シテ、頂ニ鋸齒アリ、夏月梢ニ花ヲ開ク、佛甲草ノ花ノ如シ、插シテ能活ス、コレ救荒本草ノ費菜ナリ、一種葉背ノ景天アリ、形狀微ク小ニシテ、葉背深紫色ニシテ美ナリ、又一種木曾ノ產ニ、小葉ノ者アリ、高サ五六寸、葉ノ大サ五六分、濶サ三分許、キンギヨサウノ葉ニ能ク似タリ、

〔剪花翁傳三五月開花〕麒麟艸　花の色黃也、形乙切辨に似て莢集て咲也、開花五月上旬より六月迄咲也、方日向、されど葉短かし、又半陰に植れば、高一尺ばかりになれど、葉和らかなり、地土えらばず、肥淡小便、多一二度、春芽出し前に四五度澆ぐべし、分株多よし、○中略

辨慶艸　花の色白く微紅を含めり、形ち至て少さく一房をなせり、開花五月より六月さかりて八月迄あり、方日向地乾、土えらばず、肥淡小便、株春彼岸堀出して、古株を去て新芽を分植べし、すこし日を厭て三分交りの小便をそゝぐべし、長七八寸にもなる頃、巢蟲生ずること至てはやし、よく心を配りて早朝に取捨べし、或は木灰汁、或は爛辨の葉汁などそゝぐもよし、且濕地には巢蟲も多く生じ、株も痩て育ちがたし、さて花枝の摘みし物、屋上に在て炎天に當るに、瓦上にておのづから芽を生じ、白根をあらはせり、いとつよきもの也、されば辨慶艸の名うべなり、此葉は荳豆の葉に同じく、もみて吹ばふくるゝものゆへに、兒女子の戲にせることあり、必弄しむることなかれ、若砂糖と合し喰ば、失命となん恐るべし、

〔閑窻自語〕みせばやといふ草名語

故民部卿入道爲村卿かたられしは、今世にみせばやといへるくさ（慎火の種）をうゑもてあそぶ、これはかの卿の父大納言爲久卿の和歌の門弟に、吉野山の法師にてあなるが、奧山にて見侍りしくさとて、和歌をそへて贈りし、そのうたの句に、君にみせばやとの詞あり、これによりて見せばやとなづけおくよし、爲村卿の返事ありしを、たしかにみられけるとなむ、

キタダラカシテ、小兒ノ赤腫ニツクベシ、蒙筌ニ見エタリ、世俗ニ此草ヲカベニカケ、シボミカハキテ後、若雷聲ヲ聞スレバ、タチマチ色ウルハシクシテ、生ナルガ如シト云、蒙筌ニカベニカケテ養ナクシテモカレズ、枝ヲヲリ土ニ挾メバ生ズト云リ、人家ノ庭中及假山盆中ナドニ植ユ、蟲好ンデ食ス、

〔重修本草綱目啓蒙十六石草〕景天　イ。キ。タ。サ。和名鈔　ベ。ン。ケ。イ。サ。ウ。京　ハ。チ。マ。ン。サ。ウ。　チ。ド。メ。筑前

チ。ド。メ。グ。サ。丹波　フ。タ。レ。グ。サ。加州　フ。タ。ラ。グ。サ。越中　ヲ。フ。タ。ラ。グ。サ。同上、フ。タ。ロ。グ。サ。

南部　フ。キ。バ。備後　シ。ヽ。フ。キ。サ。ウ。江戸　ゲ。ン。ジ。サ。ウ。　イ。チ。ヤ。タ。サ。ウ。共同上　チ。イ。チ。イ。グ。サ。

石州　イ。チ。ヤ。グ。サ。新校正　ク。サ。ギ。リ。作州　テ。キ。リ。グ。サ。芸州　テ。ツ。キ。リ。グ。サ。備藝　フ°。ク。レ。シ。

ポ。ウ。同上　ハ。ホ。ウ。ヅ。キ。和州　ト。リ。ノ。イ。キ。リ。グ。サ。日向　ハ。マ。レ。ン。ゲ。若州　一名掛壁青本草蒙筌

火丹草本草綱目　龍鱗草農政全書　塔頭草先醒齋廣筆記　瓦花農政全書　天竹松江府志、天ト同名　佛指甲救荒本草

獨脚蓮閩書通志　增、一名鎮火草、農政全書

江州伊吹山ニ自生多シ、人家ニ多ク栽テ瓶花ニ供ス、春舊根ヨリ苗ヲ發ス、一科數莖圓ナリ、葉ノ形匙ノ頭ノ如ニシテ厚ク白色ヲ帶ビ互生ス、或ハ二三對生ス、或ハ周邊ニ鋸齒アリ、變態多シ、秋ニ至テ高サ二三尺、梢間ニ枝叉ヲ分チ花ヲ開ク、五瓣白色、大サ三分許、數百聚リテ傘ノ如シ、又淡紅色花綠色花ナル者アリ、俱ニ葉紫色ニ染テ美ハシ、秋後皆苗枯ル、唐山ノ人ハ盆ニ栽ヘ屋ニ上セテ防火ノ備トス、集解ニ蘇頌説ク所ノモノハ、ベンケイサウニ非ズ、ミ。セ。バ。ヤ。ト呼ブ草ナリ、一名オホウチサウ、江戸チナシグサ、勢州青白紅、花戸花戸ニ多ク栽ユ、葉ハ小ニシテ圓ナリ、白綠色ニシテ邊ニ紫色アリ、三葉相對ス、夏月莖頂ニ花ヲ開キ簇ヲナス、形景天花ニ同シテ淡紅色、是紅花ノ景天馬齒莧葉ノ景天ナリ、一種莖柔ニシテ下垂スル者ヲ、タ。マ。ノ。オ。ト呼ブ、同物ナリ、

增、○中略一種キ。リ。ン。サ。ウ。ト云アリ、春月舊根ヨリ苗ヲ生ズ、高サ七八寸許、多ク枝ヲ生ジ葉互生ス、

參天

白色、大サ三分許、播州室津ノ產ハ大サ五分許、根ニ圓塊アリテ半夏根ノ如シ、秋ニ至テ苗枯ル、

〔新撰字鏡 草〕景天 伊支久佐、又云、戒火、又救火、又据火、又慎火、◯据火恐慎火誤

〔本草和名 草七〕景天 一名戒火、一名火母、一名救火、一名據火、一名愼火、陶景注云、以辟火、故以名之、一名火草、出范汪方、和名伊岐久佐、

〔倭名類聚抄 草二十〕景天 陶隱居本草注云、景天一名愼火、和名伊岐久佐、辟火故以名之、

〔箋注倭名類聚抄 草十〕是名今不傳、按伊岐久佐蓋活草、衍義曰、極易種、但折生枝植土中、頻澆漑、旬日便下根、是所以有活草之名也、◯中略 證類本草上品正文云、景天一名愼火、引陶云、今人皆盆盛、養之於屋上、云以辟火、千金翼亦云、景天一名愼火、則知是六字本草本條文、本草和名云、景天一名愼火、陶景注云、以辟火故以名之、源君蓋依之、誤併正文爲陶注也、蜀本圖經曰、愼火草、葉似馬齒莧而大、圖經曰、春生苗作層而上、莖極脆弱、夏中開紅紫碎花、秋後枯死、亦有宿根者、時珍云、景天、二月生苗、脆莖微帶赤黃色、高一二尺、折之有汁、葉淡綠色、光澤柔厚、狀似長匙頭及胡豆葉而不尖、夏開小白花、結實如連翹而小、中有黑子如粟粒、

〔和爾雅 草木七〕景天ケタノニヤウ 愼火草、戒火、救火、據火、護火、辟火、

〔物類稱呼 生植三〕景天いきくさ にちまんさう 京にてべんけいさうと云、筑紫にてちどめと云、江戶にていちやくさうと云、今按に景天其葉厚く薄白、花一所に集り咲て白く、口紅有てうるはしき小花ひらく、莖を伐て糸をもて釣て置に、丸ばみかはきて後、雷の鳴る時、必色を增す草なり、故につよきといふ意にて、辨慶草と名づくる歟、又一種細葉なる物有、是はきりんさう也、

〔大和本草 草七〕景天 本草綱目石草類ニノセタリ、イハレンゲト訓ジタル本アリ、非ナリ、順和名ニイキクサト訓ズ、今世ノ俗ニベンケイ草ト云、筑紫ニテ血ドメト云、コレヲキリキズニツクレバ血ヲトムル故ニ名ヅク、本草ニモ療金瘡止血トイヘリ、煎湯ニテ小兒ノアセボヲ洗フベシ、ツ

向、地一分濕、土回乾、肥淡小便、春早々より兩三度澆ぐべし、水升がたき時は、剪口を酢煮すべし、

〔剪花翁傳二三月開花〕紫羅欄花　花赤紫、開花三月上旬、方地土肥は、既に正月の條に見えたり、下種秋彼岸に苗代に蒔べし、翌年五月に分株す、今年花いまだあらず、又翌三年目の三月に至て、花漸く初て咲也、四年目も亦三月に花あり、拗五年目大古株となりては、正月末花咲也、もし煖地などにては、若根もの、花、偶には三月咲こともあり、下種秋彼岸に後るゝ時は、春彼岸に苗代にして、すぐに其年の五月に移すべし、水升がたき時は、切口を酢煮すべし、

〔草木育種下花〕紫羅欄花　赤土或眞土の肥地へ、秋の彼岸に種をまき、灰人糞并尿など澆てよし、春植替べし、

白花菜

〔重修本草綱目啓蒙十八草〕白花菜　ヤ○ウ○カ○ク○サ○ウ○野州　フ○ウ○レ○イ○サ○ウ○越後

海濱ニ生ズ、宿子地ニアリテ春苗ヲ生ズ、葉ハ五加葉ニ似テ鋸齒ナシ、互生ス、莖ハ圓ニシテ紫色ヲ帶ブ、夏ニ入テ高サ一尺餘、肥タル者ハ二三尺ニ至リ、鳳仙莖ノ如シ、葉ト共ニ淡啓蒙ニ月枝梢ニ品字ノ小葉ヲ互生ス、葉ゴトニ一花ヲ生ズ、ソノ形本草原始ニ圖スルトコロニ異ナラズ、細莖線蕚、四ツニ開キ上ニ白瓣アリ、四出或ハ五出ニシテ、蘿蔔ノ花ニ似テ至テ小シ、申ノ剋ニ開ク、花ノ中ニ一鬚長ク出、上ニ六七枝ヲ分ツ、皆紫色上ニ黄蘂アリ、其中心又一鬚アリテ莢ヲ生ズ、長サ二寸餘、濶サ一二分内ニ細子多シ、熟シテ黑褐色光リナシ、大サ芥子ノ如シ、熟シテ苗根共ニ枯ル、

茅膏菜

〔重修本草綱目啓蒙十九柔滑〕醍醐菜　詳ナラズ　附錄茅膏菜　ハ○イ○ト○リ○バ○ナ○　ス○ナ○モ○チ○サ○ウ○江州　イ○シ○モ○チ○播州

山中ノ池澤邊ニ生ズ、春舊根ヨリ苗ヲ生ズ、高サ七八寸、葉互生ス、形半月ノ如ク、二三分ノ大サニシテ邊ニ毛アリ、葉上ニ涎アリテ黐膠ノ如シ、蠅蜻蜓及諸蟲粘著ス、故ニハイトリバナト云、此苗ヲ地上ニ側置スレバ、沙石多ク粘著ス、故ニスナモチト云、四五月莖頭ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、五瓣

抪娘蒿

紫羅欄花

救荒野譜ニ碎米薺ニ作ル、レンゲサウニ充ツル古說ハ穩ナラズ、レンゲサウハ芥子園畫傳ニ載スル所ノ紫雲英一名荷花紫草ナリ、

〔百品考上〕抪娘蒿　和名タデラダサ

救荒本草、抪娘蒿、生田野中、苗長二尺許、莖似黃蒿莖、其葉碎小、茸細如鍼、頗黃綠、嫩則可食、老則爲柴、苗葉味甜、有圖

東國ニ自生アリ、多ロリ子生ズ、嫩苗食フベシ、苗ノ高サ二三尺、葉ハ黃花蒿(クソニンジン)ニ似タ細ク毛茸アリ、淡綠色ニシテ黃ミヲ帶ブ、夏梢ニ穗ヲナシテ花アリ、芥ニ似テ至テ細シ、後ニ細長キ莢ヲ結ブ、南芥菜(ハタザオ)ノ莢ノ如シ、中ニ細黃子アリ、實熟シテ苗根共ニ枯ル、古說ニ此草ヲ角蒿トス非ナリ、又抪娘蒿ト角蒿同物トスル說アリ、此亦非ナリ、抪娘蒿ハタデラダサ、角蒿ハ和產未詳、

〔重修本草綱目啓蒙十二 隰草〕角蒿　詳ナラズ　一名猪牙菜救荒本草　山茵蔯本經逢原

蘇恭ノ說ニヨリタ、フヂナデシコニ充ル古說ハ穩ナラズ、又今上州信州ノタヂラダサニ充ル說アレドモ、角ノ長サ二寸許ト云、子似王不留行ト云ニ合ハズ、○中略

增、タヂラダサハ苗ノ高サ二三尺、葉ノ形靑蒿ニ能ク似テ、缺刻深ク少シ濶シ、莖葉共ニ微シク毛アリ、季春葉間ゴトニ細枝ヲ生ジ、梢ニ細黃花ヲ開ク、花謝シテ後角ヲ結ブコト、薺菜ノ角ニ似テ小ナリ、內ニ細子アリ、夏ニ至テ苗枯ル、凡ソ蒿ノ類ニテヤヲ結ブモノハ、和產アルコトナシ、故ニ先輩コレヲ充ツ、

〔大和本草九 雜草〕莨世伊登宇(アラセイトウ)　三月開紫花、花有四片、實ハ莢アリ、豇豆ニ似タリ、葉長シ、色白毛アルガ如シ、葉金盞草ニ似タリ、莖高一尺許、秋及春初實ヲマクベシ、又宿根ヨリ生ズ、紅夷ヨリ來ル、其性能ヲシラズ、蠻流ノ外醫、此實ヲ用テ油ヲ煎ジトル、

〔剪花翁傳一 正月開花〕紫羅欄花(あらせいとう)　花の色赤紫、古株の五年に及ぶものは、開花正月末に咲なり、方日

救荒本草　山芥菜 同上

水邊ニ多ク生ズ、葉ハ芥ノ葉ニ似テ小シ互生ス、苗高サ一尺餘、小ナル者ハ數寸、春枝梢ゴトニ小穗ヲナシ花ヲ開ク、極メテ小クシテ四瓣、形薺花ノ如シ、黄色後小莢ヲ結ブ、碎米薺(タガラシノ)莢ノ如シ、莢苗皆辛味アリ、遲ク生ズル者ハ後テ花開ク、故ニ四時皆花アリ、

甘藍

〔重修本草綱目啓蒙 四十二草〕甘藍　草○ボ○タ○ン○　諸○葛○ナ○ 筑前、唐山ニテ諸葛菜ト云ヘ、蔓菁ノコトナリ、　ボ○タ○ン○ナ○ 播州　ト○ウ○ナ○ 加州　ダ○ン○バ○イ○サ○ウ○

種樹家ニ多ク栽ユ、ソノ苗冬ヲ經テ枯レズ、葉ハ油菜(アブラナ)ヨリ濶大ニシテ厚ク、色緑ニシテ白ヲ帶ブ、圓莖、高サ一二尺、其頂ニ葉多ク重リ生ズ、冬春ノ交リ紫色ニ變ジ、葉皆相抱テ重葉紫、牡丹花ノ如シ、故ニハボタント云フ、春ノ末葉漸ク展開シ、緑色ニ變ズ、莖モ漸ク長ジ、三四月ニ至リ、上ニ長薹ヲ抽デ花ヲ開ク四出、淡黄色ニシテ油菜花ヨリ大ニシテ、開クコト遲シ、莢ハ油菜莢ヨリ微長シ、根ニ塊ナシ、莢熟シテ苗枯レズ、扦插シテ活シヤスシ、

〔剪花翁傳 二一月 開花〕葉。牡。丹。　花菜の花の如く色黄也、開花二月下旬、方地土摸ばず、肥淡小便多より春に至て、三十日許に二三度澆ぐべし、其後に油粕を置ば、芽のよく上るなり、播(まき)春花の前に根に吹たる芽を缺て、卽時に扦(さす)べし、春の土用より立秋へかけて扦(さす)ば、根をよく下す也、さて三歩さしの小便を度々澆げば、秋の末より冬にかけて、大の葉牡丹となるなり、秋より冬にかけて扦ば、活すれども、春に至て悉く花に成て、葉牡丹とならず、されど又四季ともに芽を摘び扦ば、皆大葉牡丹となる、此芽のえらびやうは、言筆をもて解得がたし、葉の形丸く厚し、葉莖共に色紫にして、少し青緑を帶たり、表面に白粉うすくかゝれり、若葉は內に屈み張て、全體上品の牡丹花のごとく、大なるは經八寸餘あり、九月より葉の色紫になる也、四季ともに插花にして雅也、

碎米薺

〔重修本草綱目啓蒙 十六 雜草〕碎米薺　タ○ガ○ラ○シ○　タ○子○ツ○ケ○バ○ナ○ 佐州　カ○ハ○タ○カ○ナ○ 薩州　ス○ゞ○ナ○ 同上

〔四條流庖丁書〕一テシ味之事、鯉ハワサビズ、鯛ハ生姜ズ、鱸ナラバ蓼ズ、フカハミカラシノス、エイハミカラシノス、王餘魚ハヌタズ、

〔延喜式 三十九 內膳〕年料

若狹國(中略)山薑一升五升、三度、○中略越前國(中略)山薑一斗五升、三度、○中略丹後國(中略)山薑一斗五升、三度、○中略但馬國(中略)山薑一斗五升、三度、○中略因幡國(中略)山薑一斗五升、三度、○中略

右諸國所貢、並依前件、仍收貯供御、

〔延喜式 五 齋宮〕凡諸國還納調庸、○中略山薑二斗、下略

〔播磨風土記 宍禾郡〕波加村、占國之時、天日槍命先到此處、伊和大神後到、(中略)其山生檜、杉、榧、黑葛、山薑等、住狼羆、

〔毛吹草 三〕安藝 新城山葵

〔國花萬葉記 十近江〕近江國郡名物出所之部

山葵 獨活

〔增訂豆州志稿 七土產〕山葵 增天城山中及其支脈ノ溪谷ニ產ス、狩野大見兩鄉最多シ、葉ハ葵ノ如ク、莖責石菖等ノ根ニ似テ差大ナリ、根ヲ食料トス、味辛クシテ美ナリ、是本州屈指ノ產物ニシテ、年々各地ニ輸送スル者少カラズ、州產全國ニ冠絕スト云、從來天城山中ニ自生ノ者アリシヲ、明和中、湯ヶ島村ノ人板垣勘四郎ナル者、始テ之ヲ試作シ、爾來大ニ繁殖スト云、(勘四郎駿州阿倍郡有東木村ニ於テ山葵ヲ栽ルヲ見、乃天城山中岩尾ト云處ニ之ヲ試作シ、好結果ヲ得タリト云、)

〔藝備國郡志 上安藝土產〕和佐尾(ワサビ) 其形似生薑、其味如白芥、膾加魚膾、又和鳥羹、中華之書未見其名、恐本草綱目所載山葵姜之類乎、磨入蕎麥麵亦可也、京師之所用多出山縣郡木坂村云云、

〔重修本草綱目啓蒙 十八菜〕蔊菜

イヌガラシ タガラシ大和 ノガラシ濃州 キツネノカラシ

同上 アゼダイコン ハタヾイコン仙臺 アゼガラシ大坂 ゴボウナ江州 一名水芥菜

山葵名稱

〔本草和名十八菜〕山葵（葉似葵、故名之、生深山、出崔禹、）龍珠（實名也、出孟詵、）和名和佐比、

〔倭名類聚抄十六菜蔬〕山葵 養生秘要云、山葵（和名和佐比、漢語抄用山葵二字、今案所出未詳、）補益食也、

〔類聚名義抄八草〕山葵（ワサヒ） 山薑（ワサヒ）

〔伊呂波字類抄和植物附植物具〕山葵（ワサビ） 龍珠（同） 山薑（同、俗用之、）

〔下學集下草木〕山葵（ワサビ）

〔易林本節用集和草木〕山葵（ワサビ）

〔東雅十三穀蔬〕薑（○中略） 倭名鈔に、養生秘要を引て、山葵はワサビ、漢語抄に山薑の字を用ゆ、今按ずるに、所出未詳と見えたり、或人の説に、ワサビといふものは、薞茱一に辣米茱といふもの是也といふなり、ワサビといふ義詳ならず、漢語抄に山薑と見えしは、ヤマハジカミといふ事はありけん、（薞茱の事は、亡友稲若水の説也、其説長ければこゝには注せず、）

〔本朝食鑑三菜辛〕山葵（訓和佐比）

釋名、山薑（中略）必大（平野）按、山葵似賀茂神山之葵、故名耶、山薑因根狀而名耶、

集解、山葵處處所在有之、家園多種之、四時俱采根、二月下種、或植舊根、三四月生苗、葉似冬葵及蕗而厚圓、色深青有細毛、六七月作穗二三寸、開細黃白花、結子極細、種子不如種根、冬月最宜采根、其根似良薑舊根、而根皮青黑多瘤有短鬚、其肉綠碧而微粘有香、其味辛辣不減芥子、其所用者可隨所宜耳、

山葵利用

〔令義解三賦役〕凡調、（○中略）其調副物、（○中略）正丁一人、（○中略）山薑一升、

〔延喜式二十四主計〕凡中男一人輸作物、（○中略）山薑芥子各二升、

〔厨事類記〕汁實

今案、汁實盛于別坏、可居加之、但供寒汁之時、汁實（與實利）山。薑。（夏蓼）板目鹽都呂々（蓼須）橘葉等盛同盤、居加之、

シト傍訓シ、本草和名ニ波末多加奈ト云者ハ今俗云ルクヂラグサ也、此草海濱ニ多ク生ズ、故ニ鯨草ノ名アリ、字鏡ニ波万太加奈在海濱ト云此也、秋後ヨリ苗ヲ生ジ、春ニ至リテ葉薺葉ノ如クニシテ、岐缺ニシテ青、蒿葉ノ如ク白ヲ帶ブ秋也、春高サ二三尺ニ至リ、莖圓ク葉互生シ、梢ニ小黄花ヲ開ク、薺花ニ似タリ、花後莢ヲ結ブ、油菜莢ニ似テ細ク小也、内ニ黄赤褐色ノ子アリ、アレナブナノ子ニ三倍ス、味苦辛ニシテ芥子ノ如シ、即苦葶藶此也、

(拾遺和歌集十六雜春)女のもとに、なづなの花につけてつかはしける、　藤原長能

雪をうすみかきねにつめるからなづななづさはまくのほしき君哉

(拾遺抄註顯昭)カラナヅナトハ、葶ノ薺ヲ讀ナリ、倭馬鞭云、ニハニオフルカラナヅナハヨキナナリト云歌ヲオモヘリ、ナヅナハマクノホシキトハ、ナヅサハマホシト云ナリ、

(古今要覽稿草類)あしなづな略〇中からなづな、拾遺和歌集、爲重家集等に、神農本經に、葶藶味辛といひ、新撰字鏡に薺をあまなづなとよめり、されば からなづなとは、甘なづなの反對なれば、いかにも辛き事をさしていひしものなるべし。

(藥經太素下)葶藶子　大冷味苦辛

紙ニ包テ、アツ灰ニ埋テ用、傷滿脹、除實止嗽、用爲良藥、何下水消浮腫、益利膀胱及小腸、

(延喜式三十七典藥)臘月御藥　犀角丸六劑、略〇中所須、略〇中葶藶子九兩、

中宮臘月御藥　四味理仲丸、略〇中所須、略〇中葶藶子二兩、

(延喜式三十七典藥)諸國進年料雜藥

攝津國卅四種、略〇中葶藶子蔘子蜀椒各三升、　尾張國卅六種、略〇中葶藶子二升、　駿河國十七種、略〇中葶藶子二升、　甲斐國十二種、略〇中葶藶子五升、　相模國卅二種、略〇中葶藶子五合、　武藏國廿八種、略〇中決明子、牡荊子葶藶子各三斗、　美濃國六十二種、略〇中葶藶子五升、

葶藶

薺。　蘩蔞　芹　菁　御形　須々代　佛座

〔執政所抄 正月上〕二日臨時客

御料次第略 ○中　六獻薺。汁。　根筍　可ㇾ用ㇾ韲、近代否之歟、

七日

御干飯幷七種御菜事

御飯　御炊上　御菜　菘、蕈、萩、薺。芹、蘩蔞、紫苑、萱、蕣、味曾、鹽、糟、

〔世事百談〕薺を行燈につりて蟲除とす

物類相感志に、三月三日收ニ薺花一置ニ燈檠上一、則飛蛾蚊蟲不ㇾ投といふことあるは、吾邦のならはしに、

四月八日薺をとりて、行燈につり置きて蟲よけとするに似たり、

〔新撰字鏡 草〕葶藶（上地經反、下力亦反、波万太加奈、在ニ湯浪一）　葶藶子（波万太加奈）

〔本草和名 草十〕葶藶一名大室、一名大適（楊玄操音釋）一名丁藶一名蕇（仁諝音典）一名公薺（也、出ニ陶景注一）一名丁業、一名

狗薺（出ニ蘇敬注一）名　和名波末多加奈、一名阿。之。奈。都。奈。、一名波。末。世。利。、

〔倭名類聚抄 二十 草木〕葶藶子　本草云、葶藶子、（和名波末太加奈、一云阿之奈豆奈、又云波末世利、）

〔醫心方 一〕葶藶（和名波末多加奈、又阿之奈都奈、又波万世利、）

〔類聚名義抄 八 艸〕葶藶（ハマタカナ歟）　蕇葶（音典、葶、葶藶藥名、俗謂、音誤、ハマタカナ、ハマ、）

〔大和本草 六 草〕葶藶　ナヅナノ類也、薺ヨリ大ナリ、葉似ㇾ薺、三四月細黄花ヲ開ク、甜苦二種アリ、甜ハ

味ヨシ、薺ニマサレリ、可ㇾ食、四月ニモ不ㇾ老、柔軟ナリ、其實ハヒラクシテ圓シ、

〔古名錄 十四 野草〕阿之奈都奈

今案、古ハ遣唐使モアリテ、本朝藥ヲ採用コト不ㇾ誤見エタリ、後世ニ至、誤ニアシナヅナヲ葶藶ト

シテ、味微辛ト啓蒙ニ强說ヲナス、アシナヅナハ辛味ナシ、卽甜葶藶也、延喜式ニ葶藶ヲハマガラ

本草に多年の樣苗を生す、二三月に莖出て、四月に子を結ぶとあり、是は種すして、田畠之内又道のほとりなどにも、そのづから多く生す、羹とし、あへ物ひたし物に用ひてよし、東坡甚賞せし物也、種子を取蒔たるは殊更うるはしく、味もよし、

〔重修本草綱目啓蒙〔十九菜〕〕薺　ナヅナ。ナヅナ。　パチパチグサ。古歌　メナヅナ。奥州　シヤミセングサ。　スモトリグサ。薩摩　ベンベン。ベンベングサ。江戸　ピンピン。ピンピングサ。讃州　ムシクリグサ。仙臺　カニトリグサ。中國備後

秋時子生ズ、其苗地ニ就テ叢生ス、葉ハ蒲公英ニ似テ、岐ゴトニ一角アリ、又多岐ナル者アリ、又岐ナクシテ水芥菜ノ葉ノ如キ者アリ、正二月莖ヲ抽テ花ヲ生ズ、暖地ニテハ十二月ニ花ヲ開ク、穗長ク花小ク、四瓣白色、後莢ヲ結ブ、三絃ノ撥ノ形ノ如シ、熟シテ根苗共ニ枯ル、河邊ノ沙地ニ生ジ、最瘠小ナル者ヲ沙薺(ハマナヅナ)ト云、

〔長生療養方〔一〕〕薺　利肝氣、和中、患氣人食之發氣、

〔宜禁本草〔乾五菜〕〕薺菜　甘溫無毒、發瘡疥、氣與麫同食背悶、利肝氣、和中、利五臟、根療目疼、取汁點目中、實明目、去目翳、甘平無毒、陳士良云、實呼菥蓂子、去風毒邪氣、明目、去障翳、久食視物鮮明、四月八日收實良、

〔延喜式〔內膳三十九〕〕供奉雜菜
日別一斗〇中略　薺四升、〔正、十一、十二月〕

〔年中行事秘抄〔正月〕〕上子日內藏司供若菜事
內膳司同供之十二種若菜
若菜　薊　芹　蕨　薺。　葵　芝　蓬　水蓼　水雲　松〔蘇、河、海、〇中略〕

七種菜

又薺をなづなとよめるは心得がたし、

〔古今要覧稿菜蔬〕なづな略○中

正誤略○中

按になでしこのなでは、いかにも愛する意なるべけれども、なづなのなづも、それと同じ意とせしは心得がたし、もしその讀を主張していはゞ、なづなは撫菜にて、齋宮の忌詞に、打を撫といへり、此菜を七日の粥料に用ゆるには、俎板の上に載て、打はやすものなれば、打菜といふべきを、なづなといひしは、かならず命名者の心せし名なるべしなどいはんに、たしかなるべきにや、

〔枕草子三〕草は

なづな、ならしばいとおかし、

〔曾根好忠集〕三月をはり

みそのふのなづなのくきも立にけり今朝の朝なに何をつまゝし

〔散木弃謌集一春〕人のもとへわかなにそへてつかはしける

君がため夜ごしにつめるなゝ草のなづなの花を見てしのびませ

〔本朝食鑑三柔滑〕薺和名訓奈都那、今亦同、

集解、薺有大小而一物也、但大者有毛爾、處處田野庭園俱多有之、冬至後生苗、其葉著地形如蒲公而葉尖有深刻鋸齒向下、采之作蔬茹、二三月生莖五六寸、開細白花、整整如一、結莢如小萍、有三角、莢內細子如葶藶子、本邦正月七日嘗七種菜粥、以薺爲一種、近世用薺菜餅子作粥、是未識何用也、

〔本朝食鑑三華和異同〕薺

今所用之薺者、李時珍所謂小薺也、或曰、近代以薺子爲葶藶子者訛焉、事詳于綱目、

〔農業全書四菜〕薺なづな

薺

多く作りぬれば刈取事一度につどひ、跡のこなしも一同に仕廻なりがたき考をなし、油菜を作るは一つの手立なり、右のゆへ所により、麥の三ヶ一は油菜を種る里もあり、是を作る法かぶらなに同じ、但秋より地をこしらへ蒔して、苗をまたて置、十月の比刈の田畠に移し種たるは、よくさかへて子多し、されども農人いとまなくして、苗種ならざるは力なし、蒔付にすべし、しかれども苗うへの利多き事を考へしるべし、かぶらな水なも、皆その子に油あり、されども油菜の菜へ安くして、子ははきに生かず、

〔新撰字鏡 草〕薺(疾禮反、齊○首○奈○豆○奈、又支波○豆○奈○)　蓄(子禮反、山奈豆奈)　稗、葉、齊、(三字奈豆奈)

〔本草和名 菜十八〕薺(陶景注云、小薺、葶薺、其葉以爲之、菹)胡薺(出崔禹)　一名老薺(已上五名出兼名苑)　一名狗薺、一名葶(音典、已上出兼名苑)、和名奈都奈、

〔倭名類聚抄 十七 菜〕薺　崔禹錫食經云、薺(和名奈都奈)、上野之[illegible]、[illegible]歌之、

〔伊呂波字類抄 奈 植物〕薺(ナヅナ)　蒂(同)　菥草　蒫(齊實也)　葶薺(小者)　菴薺(食葉以爲名之)
胡薺(出崔禹)　大薺(出兼名)　老薺(已上五名出崔禹)　狗薺　葶(音典、已上七名出兼名苑、ナヅナ、見本草)

〔易林本節用集 奈 草木〕薺菜(ナヅナ)

〔和爾雅 七 菜蔬〕薺(ナヅナ)　菥蓂(オホナヅナ)(本草綱目)大薺、大蕺、

〔日本釋名 下 草〕薺(ナヅナ)　夏無(ナツナ)也、此草秋生じ春さかへ、夏かるゝ、故秋冬春はありて夏はなき也、なつのつの字清濁通用す、和語に例おほし、

〔東雅 十三 穀蔬〕薺ナヅナ　義詳ならず、葶藶をも亦アシナヅナといふなり、此草は一名狗薺といひて、平澤田野の間に生ずと見えたれば、アシとは葦草の屬なるをいふに似たり、今俗にイヌナヅナといふは即狗薺也、

〔倭訓栞 前編 十九 奈〕なづな　薺をよめり、撫菜の義、愛する意成べし、新撰字鏡に、甘なづなとよめり、

一壹石五斗

文祿二年七月廿七日　なたね〇中略　御朱印〇豐臣秀吉

薩摩侍従どのへ

〔德川禁令考五十八菜種及水油〕享保十二未年五月

菜種買問屋之儀町觸

菜種之儀、今度中橋廣小路大和屋七郎左衞門ニ買問屋被仰付、在々より作出候菜種、不殘右七郎左衞門方江賣渡申筈候、町々ニ而菜種商賣仕候ものは勿論、向後七郎左衞門より外江一切賣渡申間敷候、此旨町中不殘可被相觸候、以上、

五月

〔有德院殿御實紀五十七〕寛保三年二月廿二日、令せられしは、諸國にてつくりし菜種は、大坂に漕運せしが、近年數すくなきをもて、水油のあたひたかく、諸民のなやみとなれり、國々數多く菜種をうへ、かしこにはこぶべし、江尾勢參遠豆相の七州は、舊により直に江戸に送るべし、また中國四國西國攝州兵庫西宮紀伊の國々は、江戸に積送る事をとゞめ、大坂に送るべしとなり、日記年録

〔浪花の風〕菜種は一石に付、大槪油屋にて買入の直段、百匁より百十二三匁位なり、尤年の豐凶出來方にて高下あり、此一石の種にて、油に絞り二斗二升程になるよしなり、

〔農業全書三菜〕油菜

油菜一名は蕓薹、又胡菜と云、其始だつたんより來るゆへに胡菜と云となり、其葉蕪かぶらな水なに同じ、能こやしても、その根大きにはならず、又其味もおとれり、されども田圃に蒔て糞へ安く、虫も食はず子多し、油を搾に利多きゆへ、農民多く作る、三月黄花をひらき、さながら廣き田野に、黄なる絹をえけるがごとし、其實り麥に先立て熟し、跡の地早くあきて、藍其外夏物を作るに便よし、總じて麥ばかり

蕓薹

〔毛吹草 三〕筑後 白芥(シロガラシ) 筑後 芥(カラシ)

〔本草和名 十八〕蕓薹、〈仁諝作字〉和名乎知。

〔倭名類聚抄 十七〕〈菜〉蕓薹 本草云、蕓薹〈雲臺二音、和名乎知、〉味辛、温無毒、七巻食経云、蕓薹宜煮噉之、

〔類聚名義抄 八〕蕓薹〈雲臺二音、ヲチ、〉 蕓臺〈音云臺、ヲチ、〉

〔和爾雅 七〕〈蔬〉蕓薹〈ヲチ、〉〈油菜、寒菜、胡菜並同、〉

〔東雅 十三〕〈穀蔬〉蕓薹(ヲチ) 略○中 倭名抄に蕓薹ヲチと註せしは、即今ナ。タ。ネ。といひて、其子を搾して油となすもの、李東璧本草に、油菜といひし是也、ヲチといふ義は不詳、

〔重修本草綱目啓蒙 二十八〈菜部〉〕蕓薹 ア。ブ。ラ。ナ。 略○中

秋分ニ種ヘ、春ニ至テ薹ヲ抽テ、二三月黄花ヲ開ク、四瓣未ダ花ヲ開カザル已前ニ、中心ヲ摘ミ食用トス、時珍多春採薹心爲茹ト云フ是ナリ、薹心ヲ菜汞〈[illegible]〉ト云、古名クヽダチ、一名クキダチ、〈和名鈔〉ワヅ、〈備前〉中心ヲ摘ムハ枝ヲ多ク出シ、花實多カラシメンガ爲ナリ、正字通ニ摘心爲菜茹、其旁心結子可搾油ト云、四月ニ至テ子熟ス、ナタネト呼ブ、搾テ油トナスヲ、ナタネノアブラト云フ、附方ニ菜子油ト云フ、一種京ニテハ。タ。ク。ナ。ト呼ブモノアリ、和方書ニ眞菜ト云、ソノ形狀アブラナト同シテ色淺シ、又油ヲ採ルベシ、蕓薹ノ一種ナリ、

〔延喜式 三十二〈大膳上〉〕園韓神祭雜給料〈春冬同〉

蕓薹二斗

〔延喜式 三十三〈大膳下〉〕正月最勝王經齋會供養料、略○中 僧別日菓菜料、略○中 蕓薹二合、

〔薩藩舊記 後編十七〕島津氏文書

から島の内一城

一貳千人 薩摩侍從 略○中

白芥子〇中略

白芥子辛温　能入肺、能發散、故有利氣豁痰、温中開胃、散痛消腫、辟惡邪之功、痰在脇下及皮裏膜外、非白芥子莫能達、凡驢毒初起、用白芥子末醋調塗之、

〔東大寺要録三〕供養東大寺盧舍那大佛記文

貞觀三年歳次辛巳春三月十四日戊子、行大會事、〇中略

一僧供　導師一人供料〇中略　芥子三升〇中略　法用千僧供　一人料〇中略　芥子一合

〔大草家料理書〕一鹽蚫をあへるは、けし豆腐を擂合て、貝の鹽を水にて出してあへる也、〇中略　又青くあゆるは青辛しを火取てますする也、

一のたあへ鱠は、〇中略　ひとしほ青くするは、青辛たて擂交り吉也、

〔源氏物語五十三手習〕この人〇浮舟は猶いとふはげなり、みちのほどもいかゞものし給はん、いと心ぐるしきことゝいひあへり、車ふたつして、おい人〇僧都母ののり給へるには、つかうまつるあまふたり、つぎのには此人〇浮舟をふせて、かたはらにいまひとりのりそひて、道すがら行もやらず車とめて、ゆ參りなどし給、ひえさか本に、を野といふ所にぞすみ給ける、〇中略　河にながしてよといひし一言よりほかに、物もさらにの給はねば、いとおぼつかなく思て、いつしか人にもなしてみんと思ふに、つくぐ〳〵としておきあがるよもなく、いとあやしうのみものし給へば、つゐにいくまじき人にやとおもひながら、うちすてんもいとおしういみじ、夢がたりもし出て、はじめよりいのらせしあざりにも、忍びやかにけしやくことせさせ給ふ、

〔倭訓栞中編計七〕けしのか　源氏にみゆ、芥子の香也、護摩供そいふ、蜻蛉日記に、けしやきともいへり、魔怨などを降伏するには、白芥子など用うといへり、

〇按ズルニ、芥子燒ノ事ハ、宗教部修法篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

へ、葉の廣き事芭蕉のごとし、うゆる法、八月苗地を度々打返し、能こやし薄く蒔、生げき所は間引き、中をかきあざり、糞水を時々そゝぎ、苗四五すばかりの時、肥地を畦作りし、横筋を切、其間一尺ばかりに一本づゝうへ、濃糞をかけ、灰糞其外水糞など、力の及びいか程もそゝぐべし、冬春葉をかき、清く洗ひ乾し、水氣なくなりて後こもに包み、四五日もむし、少々色付たる時取出し、鹽漬にし食すべし、春月農家膳に用ひて、食味を助くべし、くゝたちを折取て漬たるは猶宜し、されども子をおほくとらんとならば、くゝたちは折べからず、四五月よく實りたる時刈干てもみ取べし、但すりがらしには、葉のひろきはよからず、常に料理に用るには、葉せばく其實紫と白きが實多して味もからし、藥種には白きを用ゆ、又二月芥菜をうへて、葉をかき食し、五月諸菜皆かれたる時も、是はよくさかへて、菜の絶間を用るゆへ、人數多き家は、取分是と圭とをおほく作るべし、中にも芥菜は葉に用るのみならず、料理の餘りは子も油となすべし、是兩樣の利潤あり、作るべし、

〔宜禁本草乾集菜〕芥菜　辛温、似菘而有毛、名青芥、紫葉者名紫芥、多作鹽食之、粗大色如白粱米、辛美名白芥、香辣歸鼻、多食動氣、發心疼、忌兎肉、生瘡、忌鯽魚、水腫、凡芥醋、醒酒、能破血發痼風、

辣芥子　辛温無毒、歸鼻除腎邪氣、利九竅、明耳目、安中、葉生食動風、熟食發丹石、不可多食、反兎肉、畏蟹、子治風麻痺、醋研傅、能通利五臓、多食動風、左傳昭公二十五年、季氏介其雞、介字疏、鄭氏芥其羽、

〔和漢三才圖會九十九葷草〕芥菜からな○中略

按辛菜、今唐人謂芥辣、倭食素與爲必用之物、四月其角莢熟半枯時、刈之取子、曬乾碎末、篩去皮收之、用時盛盞隔紙上注水、浸芥粉則甚辣、合醋未醬、和魚鱠最良、或有用芥青葉合醋和魚鱠俗云阿乎乃太亦可、往往有鯽鱠亦用之者、而雖不著害、合食禁不可不知、

救急方　用芥子粉研爛貼胸間、或受際有効、其瘡傷爛、又與瑞云、芥末水調塗頂顖止衄血、

如花芥葉青白色、莖易起而中空、性脆最畏狂風大雪、三月開黃花、香郁結角、如芥角、其子大如粟米、黃白色、

有一種、莖大而中實者尤高、其子亦大、此菜雖是芥類、別種也、然入藥勝於芥子、

〔重修本草綱目啓蒙十八葷辛〕芥　カラシ中略○葉油菜ニ似テ小ク、鋸齒細ク、皺紋多シ、花實油菜ヨリ小ナリ、品類多シ、時珍ノ説、青芥ハ常芥ナリ、大芥ハオホガラシ、一名オホバガラシ、トクワカナ、讃州タカナ、九州葉長大ニシテ二尺許深綠色、上巳ノ艾餻多クコノ葉ヲ雜ヘテ色ヲ助ク、葉ヲ煮レバ臭氣アリテ葱ノ如シ、子ハ辛味少クシテ葉ハ辛シ、一名春不老、河間府志八斤菜、群芳譜芊芥菜、盛京通志萬年青、閩書、同名多シ、馬芥ハ詳ナラズ、花芥ハイラナ、葉微紫色、周邊ニ細碎缺刻多シ、華亭縣志ニ紫花芥ト云飲食集ニ花葉芥ト云、一種大葉ニシテ周邊ノ缺刻、極テ深細ナル者ヲ、俗ニシユンプラント云、一名チリメンナ、紀州八丈ナ、勢州ソデナ、同上是亦花芥ナリ、紫芥ハムラサキガラシ、一名アカガラシ、常芥ノ形ニシテ紫色ナル者ナリ、

白芥　シロガラシ　江戸ガラシ　一名白胡芥閩書

形狀芥菜ニ同クシテ、只苗微白ヲ帯ブ、子色黃ナリ、藥ニハコレヲ用ユ、

〔延喜式五齋宮〕月料小月、物別減二十分之一

芥子、堅魚煎汁各三升、

〔延喜式二十四主計〕凡中男一人輸作物、中略○山薑、芥子各二升、

〔延喜式三十九內膳〕供御月料

芥子、豉各四升五合、

〔農業全書三菜〕芥

からし此たねも色々あり、先青紫白の三色あり、又高ながらしとて、莖甚高く、枝葉ことの外さか

〔倭名類聚抄 十七菜蔬〕芥　本草云、芥〈音介、和名加良之、〉味辛歸鼻者也、

〔類聚名義抄 八〕辛菜 カラシ　芥　芥〈下正、音介〉カラシ　辛芥 ヒカナ　芥子

〔伊呂波字類抄 加植物附植物具〕芥 カラシ、俗用之、　辛菜　俗 已上同　有實〈楊玄操音、出陶景注、〉　白芥子〈出蘇敬注〉

蜀芥〈以食其子皮毛、故以名之、〉　崔芥〈名出崔禹食經、是則故以名之、已上二名カラシ、見本草、〉

〔下學集 下草木〕辛芥〈カラシ〉　白芥子〈異名、實如粒、來黃也、〉

〔易林本節用集 加草木〕芥子〈カラシ〉　〔同 比草木〕白芥子〈シロカラシ、異名、花白、來蜀、〉

〔和爾雅 七菜蔬〕芥〈カラシ、芥菜也、〉　芥子〈カラシ、芥種子也、〉　白芥〈シロガラシ、胡芥、蜀芥同、〉

〔倭訓栞 前編六 加〕からし〇中　芥子は辛きもの也、倭名鈔に、辛菜をよめり、しろからしは白芥也、江戸からしともいふ、

〔本朝食鑑 三菜〕芥〈訓二加良之一〉

釋名、辛菜〈源順曰、和名賀良之、俗用芥子、擣細篩過、蓋辛氣好通口鼻之氣、故名大、〈平野〉〉

集解、芥有數種、俱似菘有柔毛、葉深青者曰青芥、此所常用之芥也、有大葉皺紋、色深綠者、李氏所謂大芥也、二芥辛辣俱可用、冬春夏三時有之、芥心作薹而高、三月開花、黃色四出、結莢一二寸、子大如蘇子、而色赤紫、味甚辛辣、二芥葉莖又子俱作蔬食、又有葉如青芥、多缺刻如蘿蔔、又有葉紫如蘇者、又有低小而葉莖硬者、此三芥亦爲蔬食、不及前之二芥也、一種有白芥者、大抵似芥、而葉刻缺有丫、青白色莖易起而中空、性脆最畏狂風大雪、可謹護之、三月開黃花、香郁、結角如芥角、其子大如粱米、黃白色、此亦與芥同種、其下種采收亦同時、須入藥用也、本邦古者用芥子者少、和名惟言菜、今用菜者少、惟用芥子者多、而食魚膾茄蔬者、必以芥子而和者不少、言能解魚毒進食爾、

〔和漢三才圖會 九十九草〕白芥子　胡芥　蜀芥

本綱、白芥子種來自胡戎、而盛於蜀、今處處可種、八九月下種、冬生至春深、莖高二三尺、其葉花而有丫、

芥

〔甲子夜話 一〕神祖武州川邊御放鷹ノ時、小庵ニ立寄セ給フ、住僧出テ迎ヘ奉ル、野僧ノ質朴ヤ御意ニ叶ケン、御話ノ御相手トナリテ、頗御喜色ナリ、稍アリテ僧申上ルハ、庵貧クシテモトヨリ名モナシ、冀ハ寺號山號ヲ賜リタシト言上シケレバ、神祖其邊ヲ見渡シ玉フニ、簷ニ干菜ヲ繩ニ貫テ、ソノ數十掛曝タルヲ熟視シ玉ヒ、干菜山十連寺ト稱スベシトノ仰ニテ、寺領ノ御朱印ヲサヘ賜シトゾ、

〔三十二番職人歌合〕十六番　左持　なうり

春がすみにくゝたちぬる花のかげにうるや菜さうも心あらなむ

三十二番　左勝　なうり

さだめをく宿もなさうのあさ夕にかよふ内野の道のくるしさ

〔本草和名 十八菜〕芥又有貴、〈楊玄操音真、出陶景注、〉白芥子、〈出蘇敬注、〉鼠芥、〈鼠食其花而皮毛皆頓(顚歟)落、故以名之、〉雀芥、〈雀食其子而能飛翔、故以名之、已上二名出崔禹、〉和名加良之、

〔倭名類聚抄 十七園菜〕辛菜　崔禹錫食經云、又有辛菜、〈和名賀良之、俗用芥子、〉根細而甚辛、薫好通口鼻之氣、

〔箋注倭名類聚抄 九菜〕按說文芥、菜也、又本草菜部有芥、上文辛芥條詳引之、輔仁曰、和名加良之、本書飮食部鹽梅類、亦引本草載之、此云俗用者非是、○中略 本草和名溫菘條云、又有辛菜、根細而味辛、出崔禹、不載和名、此所引蓋是、而辛作莘爲異、但莘字諸書無見、按本草蕪菁條陶注云、又有莘、根細而過辛、崔氏所云根細而甚辛者、蓋此、本草和名引作莘莘、字莘字皆無見、輔仁載仁諝音勞、依仁諝所音則似可從牢作莘、崔氏辛菜莘菜亦蓋莘菜之譌、然莘亦未見所出、無知適從、又按本草拾遺載蔊菜云、猪孝切、引字林云、蔊辛菜南人食之、去冷氣、李時珍曰、今攷唐韻玉篇無蔊字、止有䓷字、云辛菜也、則蔊乃䓷之訛爾、食經辛菜豈非蔊耶、小野氏曰、蔊菜今俗呼以奴加良之、本書飮食部源君依輔仁訓芥爲加良之、爲允、此訓辛菜爲加良之不穩、

こながきにきつて〱や葛菜　可全
ゆふ垣の竹にそだつや葛菜　松聲

〔續江戸砂子〕一江府名產并近在近郊

○○葛西菜　かさいは淺草川より東の總名也、前は下總の內なり、近年武藏に屬す、江府より二里三里ひがし也、此所の菘いたつてやはらかに、天然と甘みあり、他國になき嘉品なり、成人菜を好んで、諸州の菘を食ふ、京東寺の水菜、大坂天王寺菜、江州日野菜など食くらぶるに、葛西菜にまさるはなしといへり、

〔視聽草 四集八〕巨菜。

村垣淡路守
御勘定奉行

私當分御預所下總國相馬郡押付新田百姓長左衛門居宅より、村往還道を境、貳拾間餘相隔候、同人持畑松杉苗木植置候畑緣へ、自然に菜一本生候處、根の處にて大さ貳尺廻りも有之、丈凡六尺程にて、左右大枝五本何れも六七寸廻りも有之、莖の處にて枝開、貳間四方に相成、三月下旬花咲候處、花色并輪大とも通例にて、當時實を結び候處、是又並の菜種に相替る儀無之、然る處生立方は通例に無之段を以、承傳、此節に相成、近村には勿論、遠方より見物に罷越候ものも有之、日々人集候儀と訴出申候、大勢集候儀は不宜候に付、追々見物に罷越候者有之候とも、決て場所え不立入樣嘗相制、菜種實入候はゞ拔捨候樣可申付哉、依之繪圖相添、此段奉伺候、以上、

戌五月　伊奈友之助

右之通、伊奈友之助相伺候に付、伺之通申渡候、依之此段御屆申上候、以上、

戌五月

十二種若菜

若菜　薊　苣　芹　蕨　薺　葵　芝　蓬　水蓼　水雲　松袖中、河海、

白河院仰云、松字如何、師遠申云、若松菘、上皇被仰云、相具松進上、此併事也、童蒙、和名古保禮、

〔河海抄十三若菜〕十二種若菜　若菜　薊　苣　芹　蕨　薺　葵　蓬　水蓼　水雲　芝(アヲノリ)　菘

此中菘ハ樣々ノ說あり、白河院に松を奉りける人有ける例事也と仰あり、大外記師遠は小。大。根。のよし申ける說を用られ候由、舊記に見ゆ、

〔雍州府志六土產〕水。菜。　東寺九條邊專種之、元不用糞穢、而引入流水於畦間耳、故稱水。入。菜。或謂麻。俱。利。菜。、倭俗每物燒盡謂麻俱留、農民採此菜自田地之本至田末、次第麻久利登留、凡此菜成熟後、不堪久用之故然、○中略　勢多判官家領在九條、每年載水菜於臺、插梅花於其上、獻禁裏院中、近年東寺僧亦破生竹插水菜、以藤蔓約束之、贈人家、

〔浪花の風〕また二日○正月は、未明より水。菜。を賣ありくこと、市中鬻し、是二日はすまし雑煮故なり、

〔續山の井春上〕鶯菜付水菜

花ならで籠にへたる水菜哉　　越前府　玄甫

〔一話一言二十八〕京大坂江戶の名物を讀侍る狂歌

京　水　水菜　女　染物　みすや針　御寺　豆腐に　鰻(ウナギ)　松茸

〔常憲院殿御實紀八〕天和三年十二月八日、此日兩山の靈廟に京。菜。を進薦せらる、

〔毛吹草三〕山城　水菜　近江　兵。主。菜。

〔妙法寺記下〕永祿二己未　同年四月十五日、大氷降、夕顏茄子麻稗、殊ニ鶯。菜。悉打折、何モ無シ、大麥ハ半分コボシ候、

〔續山の井春上〕鶯菜

に產るを異とせり、一本より數十莖を生じ、味淡美にして滓なし、春月を盛とす、關東にて小松菜といふは、取わけ下總國葛飾郡小松川に作る者名高し、莖細して微青く、味また美し、今本所龜井戸より隅田川邊に皆作れり、又本草の白菘菜は、葉扁大く、眞白し、味淡美にて雪霜を經し後は愈よろし、清人嘗て此ものを鰕鱗菜と目けり、本草に二種ありといふは、此兩品の種なるべし、天王寺菜は、浪華わたりに名たゝるものゝ也、日野菜は、淡海日野の良產なり、莖柔にして根ふとく、紫色たり、畿内にて冬月その根をつらね用ひ、或は莖菜を陰乾にし收藏む、名て懸菜とも、乾菜ともいふ、又酸鹹にをさめぬるを紫蓮と云、京菜殊に美く、年を經しは愈よろし、近江にてつけるを近江蓮とす、風韻賞すべし、○中略 又關西に鑞入菜あり、北陸に三月菜と呼び、關東にて蓮菜といふ、實は同種なり、晩菘あり、葉の色深綠に光あり、味いとすぐれたり、○中略 紫菘は葉色紫なり、又牡丹菜、或は和蘭菜と云あり、根は地上に抽て幹立し葉綠色にして厚く皺く、白粉を塗しが如し、和蘭地方の葉色皆まかり、又一種和蘭菜あり、葉細尖り、莖に近く兩岐あり、之を折れば白汁出り、されど菘類に非ず、

〔延喜式内膳三十九〕漬年料雜菜

菘蒐三石料鹽二升、四升、楡一斗五升、○中略　右漬秋菜料

〔古事記仁徳下〕於是天皇戀其黑日賣、欺大后曰、欲見淡道島而、幸行之時、○中略 乃自其島傳而、幸行吉備國、爾黑日賣令大坐其國之山方地而、獻大御飯、於是爲煮大御羹、採其地之菘菜時、天皇到坐其孃子之採菘處歌曰、夜麻賀多邇、麻祁流阿袁那母、岐備比登登、等母邇斯都米婆、多怒斯久母阿流迦、

〔古事記傳三十五〕菘菜は、阿袁那と訓べし、卽御歌に見ゆ、○中略 今世に云菜なり、今も青菜と云なり那と云は、凡て魚菜の總名なる故に、菘をば古は分て、阿袁那と云しなり、今は菘に限りて那とはいふなり、

〔年中行事秘抄正月〕上子日内藏司供若菜事○中略

形狀油菜ニ似テ、色淺ク葉最厚シテ筋白シ、醃藏ニ宜シ城州加茂ス。イ。ク。キ。ナ。モ菘ノ一種ニシテ、汝南圃史ノ焚菜ナリ、一種ヲ。ラ。ン。ダ。ナ。葉長大ニシテ琵琶ノ形ノ如シ厚シテ白色ヲ帶ビ、甘藍ノ形狀ニ似リ、年ヲ經ル者ハ高サ五六尺、葉皆枝梢ニ聚リテ、重葉牡丹花ノ形ノ如ク、冬月觀ニ堪タリ、其莖末粗ク本細シ、根ハ塊ナクシテ鬚アリ、故ニ苗大ナル者ハ倒レ易シ、春ハ叢葉中ヨリ莖ヲ抽デ、漸ク花形ナク成テ葉互生ス、油菜ニ後レテ花ヲ開ク、穗ノ形油菜ヨリ長大ナリ、花モ大ニシテ色淺ク、甘藍ノ如シ、花後莢ヲ結ブ、根枯レズ、枝ヲ採リ扦插シテ活シ易シ、是頌ノ說ノ牛肚菘ナリ、

〔長崎見聞錄 一〕唐。菜。　漢名菘

唐菜は長崎におふくあり、他國に移種るに、一年は生すといへども、次年變じて、其物にあらずとなん、京都にて作れる水菜を、他所にうつして出來ざるにひとしきなり、くきは漬て其味ひ美なるもの也、種を八月に下すべきなり、

高。菜。　漢名春不老

高菜是も長崎に多くありて、他所には逢ざる菜也、くき漬にして宜し、志かし唐菜には及ばざれども、唐菜のなき時分、春比より專らあり、或は油にていためて醬油にて煮食ふべし、

〔成形圖説 菜二十一〕安。袁。奈。古事記卽菘菜なり、萬葉集には菁菘を訓り、凡菁菘の中、根の有無あり、根あるをば俗に蕪菁と云、菘と蕪と本同類にして、葉の甘苦根の大小なる一間を隔つ故に、順鈔に蔓菁を安袁奈とす、誤れるとはいふべからず。水。菜。〔中略〕他所にて是を京菜と呼ぶ、又近江菜、天王寺菜、下總菜等、皆同種にして小異あるのみぞ、高。菜。冬菜〇中略〇白。莖。菜。本藩の產最勝れり、豐前にて平莖と稱へり、是圖經の白菘也、又沖縄に產るは葉の極て廣く、烟草の大にて過ぐ、南人呼ていんしう菜といへり、〇中略

凡春の初種を下し、三月に苗生て二葉なるを卵。割。菜。と云、〇中略又其二三寸延長をば鶯菜と云、鶯の來鳴頃に發生ればなり、凡は菜の細短なるを子菜と稱へり、〇中略京畿の水菜は、九條東寺の近郊

西國にてをろのこ菜と云、(江戸田舍にて、畑にてし大根にてし、おろのくと云といへども、名付る時は、つまみ菜と云、しみ大根といふ、)

〔宜禁本草 乾五菜〕蕪菜　甘溫無毒、爲常食、性和利人、子油傳頭長髮、塗面不皺、反甘草、北人種之、初一年半爲蕪菁、二年蕪都絕、(蕪子黄、菁子紫赤、)大小相似、通利腸胃、除胸煩、解酒渴、消食、下氣止嗽、衍義曰、不益中虛人、食之覺冷、

〔本朝食鑑 三菜〕乙、菘(訓多加奈、)

集解、菘莖圓厚微青、或莖扁薄而白、其葉皆淡青白色、略似蕪菁、狀最肥大、而厚味微辛如芥葉、菘子色灰黑、八月以後種之、二月開黃花、如芥花四瓣、三月結角亦如芥、今鹽淹食、或糟醃合醋去滓和魚鱠、此蕪青醋可以賞之、

〔農業全書 三菜〕菘(蕪菁に似て別なり、漢の書に何れし說に由せり、)うき菜と云、京都にてはたけ菜と云、田に蒔て溝に水をまかけぬるを水菜と云、近江の兵主菜、田舍にて京菜と云、はり入菜と調するは誤なり、江戸菜は其根大根のごとく長し、其蒔やう、うへ樣共に蕪菁に同じ、其味蕪菁にまされり、菜の上品とす、其品類多しといへども、京都近江江戸にあるを尤よしとす、根大きなるあり、小きあり、藥中に甘草あるを服する人、菘を食すべからずと云、凡菘かぶらの類、庸醫しらずして、大根と同じく、地黃にいむと云あやまりなり、又菘の實の油をとりて、刀劍にぬればさびず、

〔養生訓 四飮食〕菘は京都のはたけ菜、水菜、いなかの京菜なり、蕪の類なり、世俗あやまりてはりいりなと訓ず、味よけれども性よからず、仲景曰、藥中に甘草ありて菘を食へば病除かず、根は九十月の比食へば味淡くして可也、うすく切てくらふべし、あつく切たるは氣をふさぐ、十一月以後胃虛の人くらへば滯塞す、

〔重修本草綱目啓蒙 十八菜辛〕菘　トウナ　シロナ　インゲンナ〇中略

なまいてたれかつくりそめけん、めでたくこそつけられ侍れ、

〔年中恒例記〕正月十一日　蔓菁　蔓立　例年水主備後守進上之

二月廿四日　蔓立、久我殿、日不定、

〔新撰字鏡〕草菘（息隆反、菜名、太加奈、）

〔本草和名〕十八菜菘（仁諝音嵩、蘇敬曰、不生北土、）牛肚菘、大菘、紫菘、白菘、（似蔓菁、已上出蘇敬注、）一名多繁、一名鶏耳、一名牛耳、一名百葉、（已上四名出兼名苑、）和名多加奈、

〔倭名類聚抄〕十七菜羹類辛芥　方言云、趙魏之間、謂蕪菁為大芥、小者謂之辛芥、（音芥、和名多加奈、）

〔箋注倭名類聚抄〕九菜羹原書巻三、作蕪菁趙魏之郊謂之大芥、其小者謂之辛芥、本草和名引七巻食經、載大芥辛芥、在蔓菁條、則不載和名、而菘條云和名太加奈、新撰字鏡菘同訓、源君不從之也、本草芥陶注云、似菘而有毛、味辣、好作葅、亦生食、蘇注云、葉大麤者葉堪食、葉小子細者葉不堪食、其子但堪為齏爾、按蘇所云葉大者、方言所言大芥、葉味辛子少辛味、今俗呼大葉芥、九州俗呼多加奈、讃岐俗呼止戈奈、亦多加奈之轉耳、其云葉小者、方言之辛芥、本草圖經之青芥、即陶氏所說者、今俗常用加良之也、而加良之下條擧食經辛菜為之、此宜標目作大芥、注五字在謂蕪菁為大芥之下、又拔方言以大芥為蕪菁者、以類統言之耳、非若後人一々分別也、

〔易林本節用集〕太草木菘菜

〔多識編〕三菜菘古保禰、又云多賀那、今案字岐那、

〔和爾雅〕七菜蔬菘白菜同

〔物類稱呼〕三生植菘な　京にてみづな又はたけなといふを、近江にてうきな、又ひやうすなと云、畿内にて京菜といふ、江戸にても水菜といふ有、（京都の水菜よりは、葉黒ずみて厚く廣し、京の水菜におゐて及ばず、葛西菜、又小松川本所牛島邊の冬菜には、京大坂にもなし、風味よく、さかりも一年の内絶ることなし、まことに名産也、）又關西にていふ間引菜を、江戸にてつまみなといふ、

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一くゝたち　くゝ

〔易林本節用集(久部草木)〕茎立(クヽタチ)　薹(同)

〔倭訓栞(中編六久)〕くゝたち　萬葉集に、上つけの左野のくゝたちとよめり、薹心をいふ、莖立の義也、倭名鈔に薹もよめり、拾遺集物名にも見え、夫木集に、齊のくきも立にけりともよめり、四季物語七種の一にも入れり、

〔萬葉集(東歌十四)〕相聞

可美都氣野左野乃九久多知乎里波夜志安禮波麻多牟惠許登之許受登母、

右二十二首、〇(二十首略)上野國歌、

〔拾遺和歌集(物名七)〕くゝたち

山たかみはなの色をもみるべきにゝくゝたちぬる春がすみ哉　すけみ

〔延喜式(内膳三十九)〕供奉雜菜

日別一斗、(〇中略)莖立四把、(准四升、二月三月、)

〔西宮記(正月)〕二日二宮大饗

王卿以下參本宮拜禮、(〇中略)三獻飯汁、次舞樂、(二曲)莖立、包燒、蘇、甘栗、

〔江家次第(正月二)〕大臣家大饗

四獻(〇中略)次莖立(有二種)

〔古今著聞集(飲食十八)〕聖信房弟子共くゝたちを前にてゆでけるに、なべのはたよりくゝたちの葉の、さがりたりけるを見て、其座に有ける人のいひける、

くゝたちのやいばはたりて見ゆる哉、房主うち聞てつけける、

薹立

御牧村之所出、亦長大而似尾張宮茂之產、然其味不佳、攝州森口來者、其形細而長精緻者爲佳、俗蘿蔔根爲大根、其名雖卑俚、其義相當者乎、

〔一話一言二十八〕京大坂江戸の名物を讀侍る狂歌

大坂　舟と橋　御城　草履に　酒　蕪菜　問屋　揚屋に　石や　植木屋

〔浪花の風〕蕪は天王寺邊、素より名物なれども、京都東山の蕪の如き大なるものはなし、其上味ひも美とするに足らず、

〔參河國郡志上安藝土產〕菘(カブラ)　出佐東郡、蕪菁根其大如毬子、其甘似蜜、作羹食之、與江州兵主之柔根、臈吹之蘿蔔相比、又產高田郡吉田、佐東菘與吉田蕪互競形味、共令悅人口也、

〔賀茂翁家集二長歌〕獻三河國高丈新墾之蕪時歌一首幷短歌

名ぐはしき、み河のくにの、にひばりの、にひ御世すらを、そこにしも、ひらきたまひし、大君の、惠のひろに、大御名を、高すのはまの、にひばりに、つくるあをなは、ひさかたの、あめはさゆれど、あらがねの、つちはこほれど、いや生に、おひしみにけり、大君の、おなじみするの、吾君の、みけにつみ來て、多ごもる、時にはあれど、御こゝろを、はるのみまけと、みさかえも、千代のわかなと、けふたてまつる、

反歌

天ぎらしみ雪降ども三河なるしかすがにこそなは榮えけれ

〔倭名類聚抄十七菜羹〕薹　廣韻云、薹(音臺、和名久々太知、俗用莖立二字、)蔓菁苗也、

〔類聚名義抄八艸〕莖立(クヽタチ)　薹薹薹(中今、下正、音臺、クヽタチ、)

〔伊呂波字類抄久植物附植物具〕莖立(クヽタチ俗用)

〔下學集下草木〕莖立(クヽタチ)

蕪菁根圖

〔執政所抄上正月〕十五日　粥御節供事
御菜二前略中　一折敷　瓜、昆布、蓮根、蕪、

〔續修東大寺正倉院文書四十三紙背〕藍園　進上略中
蔓菁陸拾束　丁蓋部土麻呂
　天平勝寶二年五月廿六日　倉垣三倉

〔朝野群載七攝籙家〕御齋會加供解文
左大臣家
　奉送　八省御齋會加供事略中
精進物略中　青菜　蕪略中
右奉送如件
　大治二年正月日　家主肥後掾中原盛資

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥
伊豫國卅二種略中　車前子、蔓菁子各三升、

〔庭訓往來〕被仰下之旨畏拜見仕候畢略中　東山蕪、西山心太、

〔毛吹草三〕山城　內野蕪菜　攝津　蕪　陸奥　大蕪

〔食物知新首〕日域諸國名產
菜蔬　天王寺蕪攝州　內野蕪城州　野大根肥後　大蕪奥州

〔雍州府志六土產〕蕪菁并蘿蔔根　凡洛外西山蕪菁、東山大根、是爲一雙珍味、蕪根扁大爲良、凡西山赭土而堅、故蕪根入土淺而扁大、風味又和柔、故西山產爲佳、然近世民家得栽之法、下賀茂邊之所栽、其形大而其味宜、東山吉田邊土地多砂而和柔也、故大根入土深而自然長大、其味爲佳、此外伏見淀南

蔓菁利用

〔日本書紀 持統三十〕七年三月丙午，詔令天下勸殖桑紵梨栗蕪菁(アヲナ)等草木，以助五穀。

〔宜禁本草 乾五菜〕蕪菁　苦温無毒，菜中有益，可常食，四時皆有，利五臟，通中，益氣，消食，諸葛亮所止令兵士種蔓菁，其纔出甲可生啖，一也，葉舒可煮食，二也，久居則隨以滋長，三也，棄不令惜，四也，廻則易尋而採，五也，冬有根可斸而食，六也，子壓油塗頭，能變蒜髮，研子入面脂，極去皺，擣子水和服，治熱黃結實不通，瀉一切惡物，利尿，秋食莖，冬食根，多種以備飢歲，南人取北種種之，初年相類，二三歲變菘，治虚勞眼暗，三月採花陰乾末，井花水空心下二分，久服長生，夜讀書，男陰腫如斗核痛，蕪菁根擣傳之，食心正在春時，夏後種之，謂之雞毛菜。

〔延喜式 大膳三十二〕園韓神祭雜給料(春冬並同)

蔓菁六斗

〔延喜式 內膳三十九〕供奉雜菜

日別一斗，(中略)蔓菁四把，(准四升，自正月迄十二月，)

漬年料雜菜

蔓菁黃菜五斗，(料鹽三升，粟三升，)　右漬春菜料

蔓根須須保利六石，(料鹽六升，大豆一斗五升，)蔓菁(アヲナ)葅十石，(料鹽八升，楡五升，)蔓根擣五斗，(料鹽三升，)菁根須須保利一石，(料鹽六升，米五升，)醬菁根三斗，(料鹽五升四合，滓醬二斗五升，)糟菁根五斗，(料鹽九升，汁糟一斗五升，)蔓菁切葅一石四斗，(料鹽二升四合，楡二升，)(中略)　右漬秋菜料

〔江家次第 六四月〕二孟旬儀

下物下器(一盤，内豎四人各持下器，入自日華門，壓版位南，著西階，采女迎取，用入下物之器，一盤空器入之，一枚炊交，一枚堅鹽，一枚青茄物，一枚相加堅魚干鯛，)

〔江次第抄 五四月〕菁茄物　西宮曰，蔓菁等茹物云，蔓菁茹物，寛治江記云，青菜茹物，　今案菁菜也，茹一作茄，茹物クヒモノトヨムベキ歟。

甜脆、土人能藏糟漬、及晒乾以貨于四方、江東之地亦處處佳者不少、民間競饑所貴者也、蕪菁子て油、民間采油代麻油、亦貨于四方、以多爲燈用、菘芥俱多油、併稱菜種油也、

蕪菁種類

〔和漢三才圖會 九十九畜菜〕蕪菁　蔓菁　九英菘　諸葛菜(和名阿乎奈)　根莖曰下䑛(和名加布良)(中略)

攝州天王寺安部野之產、根圓大甘美爲勝、奧州津輕之產次之、蓋有數種、居座蕪(加宇波布良)根入土淺而其大者徑四寸許、莖葉不多、然根中間而大爲良、子持蕪(古毛知奈)莖葉多、結實亦多爲良、晚蕪菜(於久天奈)大抵四月初開花、此菜五月中開花、而花實少、然以耐久爲良、三種共八月下種、彼岸生苗爲葉、遇霜乃味愈美、其根煮食甚甘、(生啖不佳)

蕪菁栽培

〔延喜式 三十九 內膳司〕耕種園圃

營蔓菁一段、種子八合、總單功卅二人半、耕地五遍、把犂二人半、駛牛二人半、牛二頭半、料理平和一人、蠶土百二十擔(擔別六斤)運功卅人、(人別日六度、從右馬寮運北園、)下子半人、(七、八月、)採功六人、

〔農業全書 三〕蕪菁

うゆる地の事、若は家の跡、かきかべの崩跡などの古き土を好む物なり、其故床の下などの舊土を用ひて蒔糞とする事よし、いか程も肥熟したる地を耕しこなし、塊少しもなき樣に委しくこしらゆる事大根に同じ、大根は久しく地を晒し置たるがよし、蕪菁は當時によくこなしてもくるしからず、灰糞を以て蒔べし、種子おほいかにもうすくすべし、蒔たる上を鍬にて少しをし付るか、足にてかるくふみたるもよし、つよくふむは大きにあし、雨の後などしめりたる時は其まゝ置べし、たねと土と思ひ合すべきためなり、うるほひつよくは蒔べからず、生出ては中うちすべからず、(中略)種子を收めをく事は、大根と同じ、是もうへ付はあし、又多くうへて油にするも苦しからず、(下略)

〔菜譜 上園菜〕凡かぶらを作るに、糞をしば〳〵そゝぐべし、

ひ、コムラといふに韓語なるなり、タカナとは、其莖の高きをいふ也、カラシとは其子の味辛きをいふ、すべて其類多くして、蔓菁は芥屬也と、李東壁が本草には見えたり、

〔倭訓栞中編阿一〕あをな　日本紀、倭名鈔に、蕪菁をよみ、古事記に菘菜をよめり、新撰字鏡に、蔓又葑も同じく訓せり、

〔倭訓栞前編須十二〕す。ゞ。な。　七種の若菜に入り、拾芥鈔に菁をよめり、蕪菁をいふ、されば菘也といへり、又すゞは小をいへば、今いふよめななるべし、薩摩にていふは、常に其國に食ふ豆の芽なり、

〔本朝食鑑三葷辛〕蕪菁訓加布奈、或阿乎奈、

釋名蔓菁、本朝式　莖立、同上　蕘、源順　葑同上　下體、同上　菜、近俗、本朝式訓蔓菁曰阿乎奈、和名亦同、莖立者訓久久多知、蔓菁至春二三月、莖肥大高立作薹、故名、今亦稱之、○中略

集解、蕪菁者、上下平素日用之菜、而不俟諸葛之種、此民間所毎有、四時俱采之、狀類芥而莖粗、葉大而厚闊、根長而白、或肥大而短、其味甘辛苦、大抵七月下種、冬初生、仲冬采葉采根而用、采葉莖以懸簷下而陰乾、呼號懸菜、或稱乾菜、又作干菜、或采葉莖以鹽麴收藏、此號莖漬、經年亦佳、江州之造、號近江漬而爲珍、經年生酸味者尙佳、洛之賀茂里人所造、呼號酸莖、以賞美之、春末夏初盛開黃花、四出如芥、結角亦如芥、其均圓似芥子而紫赤色、八九月下種者、冬苗稍長采莖葉、此號冬菜、至春莖高起而肥大作小薹、卽是莖立也、或冬采葉莖、復養其根、以馬屎中之稻草而厚覆拒霜雪、則至春二三月、生苗肥高、中立起薹、其味柔脆、此亦莖立也、洛之近郊畦間、貯水以滋養者號水入菜、莖葉甚柔脆味美也、以爲洛之野珍、江東亦移種倣之而滋養、雖其莖葉肥美、而其味不及、則土地不相應之故乎、惟總州葛西之產、不減水入菜之味、爾、一種春初下種、二三月生苗、采出地一二寸漸苗二葉者、作蔬、此號貝割菜、言如蛤蜊殼之開分乎、采其生而二三寸者、作蔬、此號鶯菜、此言當鶯之飛囀時而生乎、貝割鶯菜之類、不惟二三月生、而蕪時俱然焉、三根以攝州江州之產爲勝、就中出自天王寺之境者、肥豊短圓而蟠屈、其味香美

蔓菁
名稱

口より血をながし、大あせ水になりてくひたりけるを、わらひ草にしてくはせけるより、人のさしてもなき事をほめあげ、かしづきなどするを、大こんくる〻と申とうけ給及侍りしなり、

〔新撰字鏡 草〕蔓 亡回反、烏也、蕪菁花也、阿乎奈、　葑菘 二作字封反、去、菁也、蕪根阿乎奈、　聰明草 阿乎奈

〔本草和名 菜十八〕蕪菁 仁諝音無、一名蔓菁、出蘇敬注、又有辛根、仁諝音労 蔓菁一名蕪、陳蔵器 一名蕘、音蕘 一名大芥、名醫別録 辛芥、小者 一名幽芥、已上五名出七巻食經 一名兎延子、子也、出神仙服餌方 一名九英、出拾遺 和名阿乎奈、

〔倭名類聚抄 十七菜蔬〕蔓菁 蘇敬本草注云、蕪菁、北人名之蔓菁、上音蠻、和名阿乎奈、揚雄方言、陳宋之間蔓菁曰葑、音封

蔓菁根　毛詩云、采葑采菲、無以下體、菲音匪、葑音封、注云、根莖也、此二菜者蔓菁與葍之類也、

〔類聚名義抄 八〕蔓菁 アヲナ　蔓菁根 カブラ　蕪菁 無青二音 アヲナ、　蕪菁子 ナタネ

〔易林本節用集 草木〕蕪菁 アヲナ　蔓草

〔和爾雅 七菜蔬〕蕪菁 カブラ、蔓菁、九英菘、諸葛菜、同、　莖　蕪根　葑

〔東雅 十三穀蔬〕蔓菁アヲナ　倭名鈔に、蕪菁一に蔓菁並に読てアヲナといひ、菘はタ丶タチと云ふ、俗に莖立の字を用ゆ、蔓菁根はカブラ、毛詩の下體は、蔓菁與葍之根莖也、蔓菁を大芥とし、小者を辛芥といふ、辛芥はタカナ、辛菜はカラシ、俗に芥子の字を用ゆと註せり、アヲナとは、アヲは青也、ナとは我國の俗、凡菜蔬類を呼びし總名也、タ丶タチは即莖立也、カブラといふ義不詳、大己貴神の、其父神の大野の中に入れ給ひし鳴鏑を、採りて奉られしといふ事、舊事紀、古事記等にみえて、鳴鏑読て又カブラといふなり、古語相傳しには、鳴鏑はもとメカブラをもて作り出しければ、また名づけてカブラといふかともいふなり、メカブラとは海藻の根をいふ也、さらば古語にカブラといひしもの、蕪菁根をのみいふにあらず、凡物の下體をいひし也、今俗は蕪菁根なのみ、カブラといひぬれど、古にはしかはあらず、蕪菁の根なとも、葍の根なとも、又蕪藻根の如きなとも、カブリとは云ひけり、倭名鈔に郷名を引て、蕪足を鏑と云ふと見えたり、人の腓腸をコムラといふも、脚カブラといふが如し、カブラとい

大根雜載

煉。馬。大。根。　ねりまは豊島郡也、江戸より三里程戌亥、此地の大根名產也、靑みすくなく、苦辛の味ひなし、大きなるは尺二三寸、周八九寸、周は當也、味ひよろしく、尾州宮重に同じ、

下總國香取郡小。見。川。大。根。塚内田出羽守殿御知行也と云所の大根は、長三尺計、周り一尺七八寸程あり、味ひ尤よろし、一荷に十本は持かぬると也、獻上幷御役人方へも上りけるよし、所の人申き、

淸。水。夏。大。根。　板橋のさき　江戸より二里半ほど

此所の種を以諸國に植る、他國にうへたる所の種にては生がたし、よつて每とし此所の種を設けてうゆる也、

〔名物鹿の子中〕淸水夏大根種

しばしとて大根かんばん淸水かげ　　松葉軒桑楊

春。大。根。

花は根にとゞろき大根揚屋哉　　如珪

〔國花萬葉記十四下肥後〕當國名物出所

野大根久保田と云所より出る

〔永正五年狂歌合〕七番　左

正月は牛房ばかりの尾をふりていなむとせしをくるゝ大根中略〇

左の大根くるゝといふ事、此比世にもてあそび申狂歌に侍るべし、かゝる事の濫觴は、家々の相傳、說々もおほく侍るべけれども、先當流の口傳の一說志るし申べし、何の御代にかありけむ、かた山ざとの風さふらひ、きはめていやしき姿なるありけるが、大根をのみこのみてけるを、京童のにくみ笑、大なる大根をいかほどもあたへて、神變奇特をくふ人かなとほめあげて、嘲弄するをも志らず、さては我こそ大根くひて、天下無雙の名人なれと、高慢してくふほどに、

尾州宮重之產、大者長三尺、周尺半、重可五七斤、肥後菊地、濃州吉野、勢州津、薩州加護島、肥前竹尾之產、皆長大也、武州江戸、攝州椋橋之產、味美也、他國大根、五本三本乃至十本爲一把、唯尾張肥前之產、毎一本爲一把、

攝州天滿宮前、相州渡多野、共出細長者、長二尺許、周可一寸半、而本末均似、白紐、漬糟糖爲香物、（宮前者陰故、多野皆）江州膽吹、相州鎌倉、共出鼠大根、形短而有尾、味甚辛、

〔食物知新 二〕日本諸國名產

菜蔬　吉田大根、（城州）尾張大根、（尾州）伊吹大根、（江州）宮司大根、（京師）秦野大根、（相州）練馬大根、（武州）中野大根、（同上）桑大根、（肥前）

〔攝津名所圖會 六上豐島郡〕名產椋橋（くらはし）大根（椋橋庄内上津村に多く作る、形勝れて大也、葉本高く葉に甘味也、一根五斤許な賞ふ、割目正しく事花などに作りて可なり、）

〔浪花の風〕蘿蔔は太き物もあれども、丈け短く、漸一尺餘位にて、長きものはあらず、是土性砂交りにして堅きゆゑに、延難き故なり、中々江戸近在王子邊抔にて作るもの丶如き、見事にして味ひ美なるものは、絶て見ることなし、天王寺邊の蘿蔔、名物といへども、太きのみにて、其形狀甚に麁して、味ひも大に劣れり、

〔張州府志 十一春日井郡〕土產　蘿蔔　出宮重村、天下以尾張蘿蔔爲名產、就中宮重村爲第一、即落合村屬邑、

〔渡邊幸庵對話〕一尾張大根は宮重と云所より作り出す、此所昔御家來醫師服部水元（四百石）知行所故、同所の名物小豆と大根と予方へ送り被申候、此小豆も度々獻上ある也、小豆はものの入交て候に煮に、其儘煮ゆる也、

〔寬政四年武鑑〕尾張大納言宗睦卿　時獻上　（十月御在府之御時計）宮重大根

〔續江戸砂子 一〕江府名產（井從在從圖）

大根産地

れども食滑ある時は、少食して害なし、

〔徒然草上〕筑紫になにがしの押領使などいふやうなるもの丶有けるが、土おほねをよろづにいみじき藥とて、朝ごとにふたつづ丶やきて喰ける事、年ひさしくなりぬ、或時館のうちに、人もなかりけるひまをはかりて、敵おそひきたりてかこみせめけるに、館の内に兵二人出きて、命をおしまず戰ひて、みな追返してけり、いと不思議におぼえて、日比こ丶に物し給ふとも、見ぬ人々の、かくた丶かひし給ふは、いかなる人ぞととひければ、年來たのみてあさな〳〵めしつる土おほねらにさぶらふといひてうせにけり、

〔下學集下飲食〕繊蘿蔔(センロフ)

〔易林本節用集世食服〕繊蘿蔔(センロフ)

〔庭訓往來〕御齋之汁者、〇中略蘿蔔、山葵、寒汁等也、菜者繊蘿蔔、

〔倭訓栞前編十三世〕せろつぽん　庭訓往來にいふ繊蘿蔔を誤り呼るなり、大根をほそくせんに切たる也、

〔甲子夜話二十二〕寛政庚戌ノ旅行ニ、美濃本庄驛ヲ過グ、其路傍ノ民家ニ賣物アリ、左ニ圖ス、〇圖略此物蘿蔔ニテ製ル、長五六尺、一筋ノ大サ、マガヒ糸ヲ合セタル程ナリ、一把毎ニ四五十筋、上ノ方ヲ束タルモ亦蘿蔔ノ皮ナリ、甚見事ナルモノニテ、其由ヲ問ニ、去年此邊ノ禪寺ニテ始メテツクル、未其栽法ヲ知ル人無シト答ス、

〔毛吹草三〕山城　蓮臺野大根　吉田大根　攝津　天滿宮前大根　三島江大根(雌大根ヲ賞用之、)
尾張　大根　同干大根　相模　鼠大根(似鼠ノ手ニ云)　秦野大根　近江　志賀山中大根
肥後　久保田野大根

〔和漢三才圖會九十九葷草〕蘿蔔(だいこん)〇中略和名於保根、今用大根二字、〇中略

〔殿中申次記〕從永正十三丙子至同十七庚辰記錄事

十二月八日

一大根　百把 例年進上之　善法寺

〔梵舜日記〕慶長三年十一月九日、三條町靜館へ大根二百本遣之、塗師淨宗大根二束遣之、

〔官中秘策十九年中行事〕年中諸大名獻上物之事

正月

一同 三日〇御謡初 大根 〇十一日中喝　酒井左衛門尉

二月

一干〇大〇根〇　永井大學

〔官中秘策二十年中行事〕年中諸大名獻上物之事

十月 寒中獻上此月ニ入ル

一御茶　御水菓子類　鮮御肴　御樽　宮重大根 七月御在府之節計　尾張大納言

一大根　堀田相模守

一小見川大根　内田近江守

一辛味大根　阿部豐後守

一大根　松平右京大夫

〔庖丁聞書〕一ひでり鱠といふは、剛大根の入たる鱠也、世に是を笹吹鱠といふ也、

一雪鱠は、下に魚をもり、上におろし大根を置出すを言也、

〔養生訓飲食四〕蘿蔔は菜中の上品也、つねに食ふべし、葉のこはきをさり、やはらかなる葉と根と、豆豉(みそ)にて煮熟して食ふ、脾を補ひ痰を去り、氣をめぐらす、大根の生しく辛きを食すれば氣へる然

反地黃白髮、孫眞人曰、久服還筋衞、髮早白、

〔延喜式 三十二 大膳〕園韓神祭雜給料 春冬並同

蘿菔五十把

〔延喜式 三十三 大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別〇中略蘿菔生菜料、以一把、充四口、

〔延喜式 三十九 内膳〕諸節供御料 中宮亦同、下准之、

正月三節

蘿蔔、味醬漬苽、糟漬瓜、〇中略

右從元日至于三日供之

供奉雜菜

日別一斗、〇中略蘿菔四把、准四升、正二十十一十二月、

〔西宮記 正月〕供御藥事

召侍醫宮內輔一人、侍醫、典藥、造酒、內膳官人、采女、藥女官、宮內省、典藥、藥生等參入、昇御藥高机并御韓櫃、大盤等、內膳供御齒固、大根、苽、串刺、押鮎、燒鳥事、付進物所、

〔江家次第 正月〕供御藥 正月元二三、弘仁年中始之

內膳、自右靑瑣門供御齒固具、〇中略

采女傳取之、自第三間御几帳上、付女藏人、女藏人傳陪膳、

大根一坏

〔年中恒例記〕十二月朔日

大根百把也、善法寺進上、但日不定、

大根藥用

く干たる時、折てとるべし、又刈てたばね、池川などに五六日も漬をきて、取上干てもみて取もよし、かくのごとくすれば、まきて後虫付ざるものなり、又霜月抜ていけをき、正月うへてたねとするも實りよきものなり、うゆる地の事、大根は細軟沙の地に宜しとて和らかなる深き細沙地を第一好むものなり、河の邊、ごみ沙の地、又は黒土赤土の肥たる細沙まじり凡かやうの所大根の性よき物なり、同じく地ごしらへの事、五月いか程も深くうち、濃糞を多くうち干付をき、其後度度犂返しかきこなし、埋ごゑをもして、六月六日たねを下すべしと云り、然ども大かた梅雨の後糞を打、ほし付、能々地をこなして蒔べし、凡土用中に蒔を上時とし、七夕盆の前後を中時とし、八朔を下時とす、地により所によりて、各其よき時節ある事なれば、是必一偏には定めがたし、早過たるは根ふとく入事ありといへども、味よからず、山中野畠などの外、屋敷内などにうゆる事は、前に云ごとく、いく度も委しくこなし干をきて、凡八朔の前後大抵能時分なり、畦の廣さ四尺ばかりにして畝筋をきり、油粕、濃糞などを多く用ひて蒔糞とし、灰糞に和してうゆるよし、牛馬の糞のよくかれ熟したるも、土和らぎて根よくふとる物なり、鼠土にて蒔たる例よく、九耕麻、十耕蘿蔔とて、麻畠はいか程も耕しこなす物なれども是よりも大根畠は猶一入よく耕しこなし、こしらゆる物なり、麻地九遍耕せば麻に葉なし、大根畠を十遍も耕せば、鬚少もなしと云り、種子の分量の事、一段の畠に凡五六合を中分とすべし、但市町近くて、小なを間引うる所ならば、多くも蒔べし、さて二葉三葉の時より、段々次第に間引て、凡一歩の内に四五十本ある程を中分とすべし、是一段の畠に、一萬二三千ある積なり、但大きを望むものは、猶うすく間引べし、

〔宜然本草五菜〕萊菔根　辛甘温無毒、散服及炮煮服、大下氣、消穀、去痰癖、肥健生汁主消渴、試大有驗、解制麪毒及豆腐毒、嫩葉生食、大葉熟啖、消食和中、名[illegible]、利關節、理顏色、練五藏惡氣、飲食過度、生嚼嚥之便消、飽食亦不發熱、主肺嗽吐血、溫中補不足、治勞瘦咳嗽、子水研服吐風痰、偏頭痛、生汁仰臥注鼻、

春蔬の佳品なり、凡野蘿蔔、三月大根、もち大根は、蘿蔔の既に老て無味時に、盛に美なり、

〔大和本草附錄一〕薩摩大根　常ノ大根ヨリ大也、皮アツシ、根モ寒ニイタマズ甚カラシ、煮レバ味甘クヨシ、雪霜ニ當リテモ氣味カハラズ、葉ハ常ノ大根ノ如シ、但心ノ葉スグニ立ノボル、古葉ハ側ニ垂ル、是亦常ノ大根ニコトナリ、肥シテヨク作レバ甚大ナリ、地上ニ根出テモ寒ニイタマズ、葉莖ノ味モ常ノ大根ニマサレリ、

〔後水尾院當時年中行事下〕一まゐらざる物は、略○中紫大こん、蘿蔔なり

大根栽培

〔延喜式内膳三十九〕耕種園圃

營蘿蔔一段、種子三斗、總單功十八人半、耕地三遍、把犂一人半、馭牛一人半、牛一頭半、料理平和一人、下子半人、六月採功十四人、

〔農業全書三菜〕蘿蔔

大根は四季ともに種る物にて、其名も亦各替れり、されども夏の終り秋の始に蒔を定法とす、是あまねく作る所なり、其種子色々多しといへども、尾張、山城、京、大坂にて作る、勝れたるたねを求てうゆべし、根ふとく本末なりあひて長く、皮うすく、水多く甘く、中實して脆く、莖付細く葉柔かなるをゑらびて作るべし、根短く末細にして皮厚く、莖付の所ふとく、葉もあらく苦きは、是よからぬたねなり、略○中種子ををさめ置事、霜月の初め大根多き中にて、なりよくふときをゑらび、毛をむしり、葉は其まゝをきて、一兩日も日に當て、少しなびたるを、畦作りし、がんぎをふかく切、肥地ならば、凡一尺に一本づゝうへをくべし、もし瘠地ならば、折々糞水をそゝぎ、春になりて葉莖もさかへたる時、畦の中に柴か枝竹を立て、廻りにも竹を立て繩をはり、雨風にたをれぬ様にすべし、たをるれば子少し、うゆる時少日に當て痛る事は、花遲く付て餘寒にいたます、實り能ためなり、三月に至り九分の實りと見る時、刈て樹の枝につりをくか、又は軒の下につりて、さやのよ

條引陶注云、蘆菔是今溫菘、其根可食、葉不中噉、蕪菁根乃細於溫菘、而葉似菘、好食、萊菔條引唐本注云、陶謂溫菘是也、又引爾雅云、葖、蘆葩、郭璞曰、紫花菘也、俗呼溫菘、似蕪菁、大根、一名葖、俗呼雹葖、一名蘆菔、今謂之蘿蔔是也、則知溫菘即蘆菔、本草和名載本草萊菔、訓於保禰、又別引崔禹出溫菘、不載和名、源君蘆菔依輔仁訓於保禰、溫菘別訓古保禰、分爲二物、恐非是、貝原氏曰、西國有古於保禰、小於波多野大根、生野圃、根不實出地上、其子落自生、不假人力、是救荒本草野蘿蔔也、救荒本草云生平陸田野中、苗葉皆若蘆菔、求之不難、烹且熟、饑來餐之、勝粱肉、今本不載、按古於保禰、源君所謂古保禰蓋是也、郭璞注爾雅葍當云、大葉白華、根如指、正白可啖者、可以充之、鄭玄詩箋所云、蔓菁與葍之類之葍是也、然爾雅葍當別是一種、本草所謂旋花即是、郭璞因其名同、以蔓菁類之葍、注旋花之葍者誤、又救荒本草云、水蘿蔔、生田野下溼地中、苗初搨地生、葉似菁菜形而厚大、鋸齒尖、花葉又似水芥菜亦厚大、後分莖叉、稍間開淡黃花、結小角兒、根如白菜根而大、味甘辣、蓋是葍之今名也、

〔類聚名義抄 八〕菘正、音終、コホネ、

〔古今要覽稿 草木〕こほね　こおほね　葍　野蘿蔔

こほね一名こおほね、一名弘法大根は、漢名を葍、一名葍、一名蘿蔔、一名野蘿蔔といふ、此種は西國及び陸奥會津等の野圃のほとり、或は道傍にもおのれと生出るものにて、その莖葉すべて蘆菔に似て小さし、根もまた相似て、長さ僅に四五寸のものなりといへども、春時これを採て醃藏し食ふに、その味美なり、また家園につくれるもののあるよし、大和本草に見えたれども、すべて江戸近き田舍には、たえて此種ある事をきかず、大和本草云、野蘿蔔、今按に西土の小大根なり、波多野大根の一類別種にて、波多野大根はこおほねより大なり、江戸に多く出づ、ともに野圃に生ず、人力を用ひず、種をちて自然に生ず、又圃にもつくる、二種共に脆美なり、味辛し、鹽に漬け又蒸て煮て熟し易し、救荒野譜に言ところの如し、根は地上に出ず、常の大根に異り、

大根種類

〔大和本草五菜蔬〕蘿蔔　又萊菔トモ温菘トモ云、和名於保根、今國俗大根ト云、南北遍沙無レ不レ宜、民用ニ最有二利益一、群菜ノ第一トスベシ、四時常ニアリ、夏生ハ秋冬ノ者ニ比スルニ、形同ケレドモ味ヲトル、○中略凡大根ニ種類多シ、大。大。根。アリ、是一時種蒔之力ト土地ノ肥饒ニヨレリ、又種子モ別ニアリ、水。蘿。蔔。群芳譜云、形白而細長、根葉但淡脆、無二辛辣氣一、可二生食一、亦有二大如レ臂長七八寸者一、則土地之異也、攝州天滿ノ邑ノ邊、宮ノ前大根ト稱スルアリ、形小ニシテ長シ、河州守口ニ是ヲ以糟漬トス、大坂ニモ亦然ス、冬月ニ根長シ、或乾シテ遠ニ寄ス、○中略江陰縣志載二楊花蘿蔔一曰、暮春時有レ之、形細長味鬆脆、今案ニコレ三。月。大。根。ト稱スルモノナルベシ、モ。チ。大。根。アリ、是モ三月大根ノ類也、葉高カラズ、地ニ付テ生ズ、根大ニシテ味カラシ、三月大根モチ大根此二品ハ、冬大根盡テ三月ニ味ヨシ、モチ大根ハ其根土上ニ不レ出、是常ノ蘿蔔ニカハレリ、故ニホリイリ菜ト云、伊。吹。大。根。ハ、江州伊吹山ニ自生ス、根短シテ肥大、其末鼠ノ尾ノ如ク、小ニシテ長シ、味甚辛シ、煮熟スレバ甘シ、葉ハ大根ト同ジ、ヂ。ズ。ミ。大。根。トモ云、尾州ニ種ル尤ヨシ、他邦ニモ種子ヲ傳ヘテウフ、尾州ノ產ニ不レ及、尾。張。大。根。、長鼠大根ト不レ同、紫。大。根。アリ、莖モ根モ紫色也、又葉ニ刻缺多ク、味佳キ一種アリ、又葉似二菊根小ニ、冬ヨリ夏ニ至テ葉ヲ食スルアリ、味ヨシ、暹羅大根、其種自二暹羅一來ル、京都ニテ近年隱元菜ト云、葉大ニ根紅ニ、内ニ赤白ノ暈紋アリ、ウズノマヒルニ似タリトナ、ウ。ブ。大。根。トモ云、葉ノ心モ紅シ、味甘シ、冬栄フ、コレヲ蕓薹ト云ハ非ナリ、夏。大。根。、生ニテ食ヘバ脫血ス、產前食ヘバ小產ス、

〔本草和名十八菜〕温菘、黄菜、又作二黄菜一、又有二葶辛〇葶恐誤菜一、根細而味辛、葫白菘、出二崔禹一、葫菘、一名香菘、出二七卷食經一、和名古。之。、

(頭註)按醍醐抄引二崔禹一、温菘和名古。保。禰。、又有二辛菜一、和名賀良之、根細而甚辛、又按二醫心食性及長平和名一、葫菘和名己志、此條疑有二脫文一、

〔倭名類聚抄十七園菜〕温菘　崔禹錫食經云、温菘音終、和名古保禰、味辛大温無レ毒者也、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕按方言、蘴蕘、蕪菁也、其紫華者謂二之蘆菔一、注云、今江東名爲二温菘一、證類本草蕪菁

の二種を用ゆるは、古よりのならはし也、河海抄以來このおほねをさして、すゞしろといひしは、誤す、はりしろの中略にて、そのおほねを以て、蔓根菁根の代とせしによりて、此名は出來しなり、然るを春の七種等に、酒々代あるひは餘白に作る、すゞは凉しき義、しろは白の義なりといひ、又すゞなにかはるといふ義なりともいへるは、その說いかゞあらん、

〔本朝食鑑三菜〕大根四如字

釋名、萊菔、蘆菔、蘆萉、溫菘、(上同、中略)於保禰(千野、俗從俗用大根之義、又用大根字、俗亦有耳、)

集解、此亦日用利益之菜、而民間常種之、四時俱用者也、故天下通無不有、然隨土地之肥爽、不可無肥瘠好惡、若深山窮島之墟、全無處亦有、大抵六月土用後下種、秋采苗、采小根、俗號猫大根、冬十月十一月掘根用、狀圓長肥白、或短圓豐肥、有細鬚、多醃藏號淺漬、(アサヅケ)此本邦香物之品也、三四月抽莖開小花、紫碧色、結角、其子如大麻子大、圓長不等、黃赤色、其葉大者如菘菁而硬粗、細者如小芥、略柔滑可作菹、皆有細柔毛、八九月復下種者、三月采根、號三月大根、至夏甚辛、春二月下種者、三四月采根之細小者、復號猫大根、亦好、此亦至夏末掘根、則辛辣可用、一種有根皮紅紫者、形味相同、一種有鼠大根者、短圓豐肥、其尾細而長、故名、其味極美、生甚辣、熟甚甘而可為珍、此尾張之產、濃勢參遠亦壅移種而不相及、凡洛邊及攝西山北不佳、江東諸州略為佳、江都近郊最美者多、就中根利間、板橋、浦和之產為勝、相州波多野之產者、素以自然生者為佳、其根細而實、又有種其自然生者、培養之、其根肥不佳、故宜細根、不宜肥大、采細根作醃糟、其波多野大根、京師稱中拔(ナカヌキ)大根、言畦畝中之未長根而抽之、故名、此亦作醃糟而佳、近時擧世嗜蕎麥飩、而用蘿汁之極辣、故家家爭種甚辣者、大根老肥堅實者甚辣、幼柔浮弱者不辣、復實者亦甚辣、又采生乾置火邊、而暴風處、則乾堅、此亦甚辣、又采好者暴風處、經一兩日而用亦同、夏時少辣、冬時多辣、近頃江都市中鬻信州景山大根、及夏大根之種、俱甚辣、以為蕎飩之用、食言不減尾之鼠大根之辛、然未試之、

〔年貞記〕さき草の中にもはやきかゞみぐさやがて御調にそなへつる哉

〔大上臈御名之事〕女房ことば
一大こん　か。ら。物。

〔倭訓栞前編十二〕す。ゞ。し。ろ。〇中略　七種の菜にいふものは蘿蔔也といへり、されはすゞは凉しき義、しろは白の義成べし、一説に本草に劉其花如鬐也といへば、あざみなるべしといへり、されば鬐の義によれる也、又薩摩にていふは、常は河高菜といふ、田がらしなり、

〔古今要覽稿菜蔬〕すゞしろ　おほれ　蘿蔔
すゞしろ一名おほね、一名つちおほね、一名かゞみくさ、一名こころぶと、一名だいこんは、漢名を蘆菔、一名蘿蔔、一名來服、一名萊菔、一名蘿蔔、一名蘿白、一名蘿瓟、一名蘿葍、一名蔓卜子、一名羌精、一名唐菁、一名蘆葩一名莅遝、一名菈遝子、一名葵、一名葵草、一名葵子、一名雹葵、一名菔子、一名紫花菘、一名温菘、一名楚菘、一名秦菘、一名玉本、一名土酥、一名地酥、一名大菜根、一名篤魯馬と云、此種は民間日用のものにて、四時ともにこれあり、春生するものを俗に三月大根、一名つばくろ大根一名ほそね大根といひ、漢名を楊花蘿蔔、一名破地錐といひ、夏生するものを夏大根、漢名を夏蘿蔔、一名夏松蘿蔔、一名夏生といふ、近郊練馬清水村のもの、その名四方に志られたり、また秋生するものを秋大根、漢名をまた蘿蔔と〈此蘿蔔は鄙北方の土名なり〉いひ、冬生するものを冬大根、漢名をまた菘と〈此土も菘また北方の土名なり〉いふ、いはゆるすゞしろ以下の諸名、おほくは冬生するおほねの名なり、冬生するは夏秋に生ずるよりも、その味殊に勝れたるによりてなり、〇中略

釋名

すゞしろ〔河海抄、拾芥抄、公事根源、年中行事〕按に延喜式に、蔓根須々保利六石、菁根須々保利一名とみえ、また新撰字鏡に、菹葅同側魚反、須々保利とみえたり、これによれば、皇朝にてす丶ほりを作るに、蔓根菁根

にも釋しぬれば、オホネとは其根の大きなるをいひし也、李東璧本草には、爾雅註を引て、宗花菘、俗呼温菘、似蕪菁、大根一名蘆菔、今謂之蘿蔔、是也、菘とは菜名、萊菔とは根名也と云ひけり、此說の如きは、菔といひ菘といふ、もと是一物にして、たゞ其根と葉とを呼ぶ所同じからぬなり、倭名鈔の如きは、温菘、萊菔、別に分載せて、温菘を呼びてコホネといひしは、これもまた其根の啖ふべきをもて、此名ありと見えたり、さらば今俗に細根大根などいふもの、類にして、是又我國の方言にぞあるべき、コホネの義に不詳、富もオホネと違ひし事は、古より聞えて、爾雅註にも又大根といふ事見えたれば、其根の大きなるを云ひしとは見えたれど、温菘をばコホネといひ、また蕪菁を呼びて、カヘホネといふもしあれば、その根ふとき者を呼びてオホネといひしにや、さらばオホネと云ふ、其オといひしは、大の義なるべし、たゞその詳なる事を知らず、

〔物類稱呼 四三〕萊菔だいこん　はだの大根、相州波多野名產也、江戸にてはだなと云是也、これ畑也、京にてながね大根と云、大坂天滿にてはそね大根といふ、又宮の前の大根と云、尾州守口にて、是をなしつて漬とす、西國にて小大根と云、はだの大根は、小大根よりはすこし大也、又畿內にてなかぬき大こんといふを、江戸にてをろぬき大こんと云、

〔倭訓栞 中編三十〕おはね 略○中　和名抄に蘆根をよめり、大根の義、大根は爾雅の注にみゆ、今音をよべり、萊菔蘆菔も同じ、出羽にておはかたといひ紅毛語ろうとらていすといふ、土おはねも同じ、尾州の宮しげ、關東のねりま、共に地名なり、波多野は相州也、自然生の物を賞す、江戸にてははだなといふ、京になかねとし、大坂にはそねとす、膽吹より出る鼠大根は、薺菘、野大根は天巧菜也、伊吹山高島郡にあり、唐大根は胡實菘、はし大根は仙人骨也といへり、

〔日本書紀 十一仁德〕三十年十一月庚申、天皇浮江幸山背、○中略　明日乘輿詣于筒城宮、喚皇后、皇后不參見、時天皇歌曰、菟藝泥赴、揶摩之呂謎能、許久波茂知、于智辭於朋泥、佐和佐和珥、○下略

〔瓊玉和歌集 春〕加賀御草　大根 正月一日、大内にて餅のうへになく大根なり、

大根名稱

にて候哉、ほうき木は屋腰溝縁抔に植申物に候、何方にてもそだち申物に候、白石にて見申候は、大豆小豆其外何を植ても能所に作置候を私は如何と見申候、此外心付申事無之由申上候、夫を御聞被成候て、瀬兵衛と召候て、成程それよ〳〵、小松へ參り著候て、伊藤内膳抔へ申聞候得と、御意候故、小松にて内膳殿へ委細に申入候、如此成事をも早御心付被遊候と、亡父瀬兵衛噺申候、

〔長生療養方二諸藥功能〕地膚子　味苦寒無毒、利小便、散惡瘡、搗絞汁主赤白利、和名爾波久佐、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

武藏國卄八種、〇中略地膚子一斗五升、　下總國卅六種、〇中略地膚一升、

〔本草和名十八菜〕萊菔仁諝音來、又作蘆、又音服、　一名莪、一名葖、音蛙、已上三名出兼名苑、和名於保禰、

〔倭名類聚抄十七菜〕葍　爾雅集注云、葍音福、和名於保禰、俗用大根二字、根正白而可食之、兼名苑云、萊菔、上音來　本草云、蘆菔、音服　孟詵食經云、蘆菔、上音羅、今案萊菔、蘆菔、蘆皆葍之通稱也、

〔類聚名義抄八艸〕葍音福オホネ　蘆菔二音羅伏、オホネ、　蘆茯同　萊菔オホネ　蘿蔔同

〔段注説文解字一下艸〕蘆蘆菔也、一曰薺根、此字義別説、謂薺根謂之蘆也、从艸盧聲、落乎切、五部、　菔蘆菔、似蕪菁、實如小尗者、今之蘿蔔也、釋艸葖蘆萉、郭云、萉宜爲菔、蘆菔蕪菁屬、紫花大根、俗呼雹葖、按實根駭人、故呼突、从艸服聲、蒲北切、一部、　葍葍也、从艸富聲、方布切、古音在一部、布字依宋刻、　葍葍也、見釋艸、郭云、大葉白華、根如指、正白可啖、按郭又云、葍之類也、皆上下可食、此根可啖之證也、郭又云、葍華有赤者爲藑、藑葍一種耳、亦猶蔆苕華黃白異名、陸機云、葍有兩種、一種莖葉細而香、一種莖赤有臭氣、按毛公云、葍惡菜、殆因有臭氣與、从艸畐聲、方六切、古音在一部、

〔易林本節用集草木〕大根ダイコン又蘆菔　〔同草木〕蘿菔ラフク大根　〔同於草木〕大根オホネ　蘆菔

〔和爾雅七菜蔬〕萊菔ダイコン　ヲホネ　言大根也、蘆菔、蘆菔蘿蔔、蔓菁蘿蔔、本草綱目云、形小而長者、名蔓菁蘿蔔、　揚花蘆菔サングワフダイコン一江陰縣志云、蘆菔一種、暮春時有之、形細長、味微辛、名日揚花蘆菔、　水蘿蔔ハダケダイコン　ヲホネ出于農政全書

〔東雅十三穀蔬〕葍ヲホネ　倭名鈔に、葍はヲホネ、俗用大根字、萊菔、蘆菔、羅菔、皆葍之通稱也、温菘はコホネといふと註せり、仁德天皇の御歌に、ヲホネといふ事の見えしを、オホネは大根也と、日本紀釋

藝州　ホーキヾ中略同上〇

春月種ヲ下シ苗高サ四五尺ニ過グ、葉細長ク互生ス、深綠色ニシテ毛アリ、枝葉繁密ナリ、葉ヲ取テ食用ニ供ス、夏月葉間ニ小白花ヲ開キ實ヲ結ブ、子ヲ收テ藥用トス、老幹ヲ束テ箒トス、一種イザリホーキヾト呼者ハ、梢上ヨリ枝繁ク生ズ、コレヲ南蠻ホーキヾ阿蘭陀ホーキヾ、江戸ホーキギ、南京ホーキヾトモ名ク、此葉食用ニ良トス、其葉幹ハ柔ニシテ箒トナスニ堪ヘズ、又一種大ホーキヾアリ、高サ一丈許ニ至ル、形狀ハ異ナラズ、

(農業全書四)地膚はうきくさ

は、き草、葉を食にもし、あへ物あつ物種々料理に用ゆ、圃に畔作りしうゆるに及ず、屋敷の内、庭の隅々よく肥たる所、又は菜園の道ばた、かきぎはなど、物の妨ならぬ所を見合せうゆべし、大小二色あり、南蠻箒とて、枝こまくしげきあり、又南々よりわり来る、枝のあらく木のごとく大く、甚さかゆるあり、二色ともにうゆべし、繁枝細くしげきは、しなやかにしてよけれども、莖よはくして、荒籠などをはくにはあし、、然るゆへに大きをもうへて、共に用ゆべし、切取時分、少々見合せあり、わかく青き内はよはし、おひ過ればはしかくて、おれやすし、秋實りて葉あかくなりたら、、早く切べし、凡七月末より八月中頃切て、しばし外にさらして、後取入をき、箒に用ゆべし、子は地膚子とて、藥にも用ゆるものなり、子をとりたねにするは、九月の半霜のふるまでもをくべし、凡かよふの物、其出來の遲速によるものなり、時を定めがたし、

(微妙公御夜話)微妙公(利常前田)江戸より御歸國之刻、越中白石村之内御通之時分、百姓居屋敷之内に作置候物を、御覽被遊候て、彼御機嫌惡敷成候て、郡方歳立不申事、郡奉行改作奉行共台點せぬ故とて御わめき、御供の内に氣が付たる者有之か尋よと御意候得共、誰も見とがめ申者無之候、人々被尋候故、山本瀬兵衞申候は、白石村中にて、百姓居屋敷に、はうき木を島に作り置申候、此事

〔本草和名七草〕地膚一名地葵、一名地麥、一名地脈草、一名延衣草、仁諝音作涎字、叙連反、已上二名出蘇敬注、一名地華、一名杜菌、已上二名出雜要性、一名星精、出大清經、一名地威葵、出雜要訣、一名蚍蜉酒、出釋疑、和名爾波久佐、一名末岐久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕地膚　本草云、地膚一名地葵、和名爾波久佐、一云末木久佐、

〔康頼本草草〕地膚子　味苦寒、无毒、和ニワクサ、又末支久佐、八月十月採實陰乾、

〔醫心方一〕地膚子和名爾波久佐、又末岐久佐、

〔類聚名義抄八草〕地葵ニハクサ、一云マキクサ、

〔藻鹽草八草〕葵

庭草草これはつちあふひなり、ちしばり草の事也、又にはの草ともいふ、たゞには草共いふと、ふるきものにいへり、

〔易林本節用集波草木〕苕草ハヽキヾ

〔和爾雅七草木〕地膚ハヽキヾ、地葵、地麥、落帚、鴨舌草、涎衣草、獨帚、玉帚並同、

〔書言字考節用集六生植〕地膚ハヽキヾ、白地草、涎衣草、地麥並同、　掃帚草同　地膚ニハクサ掃帚艸也

〔本朝食鑑三柔滑〕箒木訓波宇岐木

集解、庭園野徑處處多有、或田園之界多種之、生苗葉如竹葉而細小、深青柔厚似有微毛、可作蔬茹、一科數十枝、攢簇團團直上可比蒿之茂、莖赤或青亦有、性最柔弱、故將老時乾枯可為帚、野人呼稱草帚、作帚則勝於藜、作杖則劣於藜、夏秋開黄白花、結實最繁矣、一種有產奥之津輕者、木大異常、實如豆、炒以為果也、

〔大和本草五菜蔬〕地膚ハヽキヾ　葉ハ菜トシ食ス、味可也、熱湯ニ少煮テホシテモヨシ、莖ハ全科ヲ用テ帚トス、○中略　一種枝シゲキヲ、西州ニテ南蠻帚ト云、幹ナクシテ根本ヨリ枝多ク叢生ス、シゲリテウルハシ、但帚ヨハクシテ久ニ不堪、常ノ帚ニヲトレリ、食スルニヨシ、

〔重修本草綱目啓蒙十一隰草〕地膚　ハヽキヾ　今ホーキヾト呼ブ　ハキヾ　南部ニテ箒ヲハキト云、故ニ此ノ名アリ、　ホーキボウ

松菜

〔毛吹草 三〕肥前　鼠蓮草〈マツナ、アヘモノニ用之、〉　鹿摩　鼠蓮草〈マツナ〉

〔倭訓栞 中編二十四〕まつな　松菜の義、葉似たり、海濱に生ず、葉杉の如く食ふべし、牡蠣菜なりといへり、

〔和漢三才圖會 百二柔滑菜〕松菜(まつな)　俗稱　未詳正字

按松菜近年大明僧齎來希有之、二月下種、苗高五七寸、非蔓而延地、葉似雉松而柔、亦似杉菜、三四五月淪和醋、或入羹中食、味淡甘脆美、秋開黄花五出、極小結子、如雞冠草子黒色、

本草綱目蒙草部、有邪蒿者、云三四月生苗、葉似青蒿而細軟、色淺不臭、紋背邪也、根葉皆可茹、煮熟和醬醋食、氣味亦良者、此是松菜矣、

〔日本國風 五〕松菜

或書曰延寶年中大明の僧松菜を持來、此菜高さ五七寸ばかり、蔓なくして地をはふ姫女松の如し、又杉菜にも似たり、二三月の比淪て酢に和し、或は羹に入て食す、其味甘しと云て、珍奇の菜也とす、しかるに此菜古より吾伊勢國海濱におほく生じ、〈海草にあらず、水邊の沙土に生ず、〉古より羹にいれて食す、希物にあらず、總て艸木陰陽の氣雨露の惠を得て、彼方にも生じ此方にも生じて同物有、しかるを不知、此本外國より來りて珍奇を玩賞するは、人常に親を不貴、心を珍異に馳るの所致なるべし、

〔本朝世事談綺 二生植〕松菜

延寶のころ、大明の僧齎來して希なりしが、頃年所々に見ゆ、三月五月の間、淪て酢に和し、あるひは羹の中に入れてこれを食す、甚味淡甘して美なり、本綱に有邪蒿者、云三四月生苗、〈下略〉是松菜の事也、

地膚

〔新撰字鏡 草〕地膚〈爾。波。久。佐。〉　地膚子〈阿。加。久。佐。〉

りも生るものあり、葉の色青白くて白蒿のごとに短く小し、夏花さき實をむすぶ、茱萸株の如にて輕鹵土黄色なせり、内に細子あり、根は白し、○中略一種幹をなして葉出るもの東國に多し、但土臭て食品に宜しからず、此灰汁もて衣服の積垢を洗ふべし、能脫るなり、

〔多識編三菜〕菠薐、今案加良奈。。

〔書言字考節用集六生植〕菠薐草赤根菜、波斯草並同、　菠薐　赤根菜同上

〔和爾雅七菜蔬〕菠薐菠菜、赤根菜並同、

〔農政全書二十八樹藝〕菠菜、菠薐、一名赤根、又名波斯草、劉禹錫云、菠薐本西國中種、自頗陵國將其子來、今呼其名、一語訛耳、

〔本朝食鑑三菜滑〕菠薐[illegible]

集解、波薐正二月下種、三四月爲蔬、其莖柔脆中空、其葉柔厚脆滑、綠膩柔厚、大槪如蘿蔔葉菁葉而細小、直出一尖、旁出兩尖、如䥥鐵形、其莖近根處赤色、根亦數寸、大如桔梗而色赤、四月起薹尺許、有雌雄、蒼薹、開碎紅花、簇簇不顯、雌者結實有刺、狀如蒺藜子、種時須研濕以浸服、則過月朔必生、此類尙多矣、

〔南浦文集下〕芥子菠薐菜今不生、大根亦是僅遺名、一籠土筆過分候、寫盡饑腸一夜情、　謝人惠土筆

〔日次紀事正月〕凡菠薐菜、過月朔乃生、今月初四五日之間種者、與二十七八日之間種者、皆過來月初一乃生、驗之實然、蓋是菠薐園菜而其種不拘時、倭俗所謂鳳餘草是也、

〔農業全書四菜〕菠薐草

はうれん草は、蒔て月朔を過ざれば、生ぬ物といひならはせり、然るゆへに、月の廿日以後蒔ば、來月初早く生るなり、(今むるに、月朔に種て、月中に生ふるなり、)蒔ときたねを土ともみ合せ、畦作りし、がんぎを少深くして蒔べし、八月早く蒔て、乾馬糞をおほひ、雪霜をふせぐべし、九十月さい〳〵水をそゝぎてうるほすべし、(六月に地をよくこしらへ、こゑをうちてからし置、七月に蒔たる跡にこし、○中略)冬春葉をかき取、春の暮に成ては、莖葉老てこはき時切とり、熱湯に漬、やがてとりあげさらし乾し、菜園の皆々枯たる時用ゆべし、

りうづき臓腑破るによし　あかざよく諸病に用ゆ血の餘をよくさます也肉を生ずる　あかざこそ諸毒物や金瘡に常に用れ血の道に吉　あかざをば黒焼にして手負産後めまいを治するぬる酒にてのめ　あかざこそ七度焼て童便でのめ血の道の萬病を治す

(散木弃謌集九雜)俣財恥運讃歌百首

いかでかは此よのやみもてらさましひかりあかざのつえなかりせば　沙彌能貪上

(本朝食鑑三華和)莙薘

莙薘〈[illegible]〉

(和漢三才圖會百二柔滑菜)菾菜　莙薘菜　頳菜〈菾菜同〉　俗云唐苣

按菾菜葉如菘葉、又似萵苣而不皺、無白汁、葉厚、故俗名唐苣、無苦汁柔脆、不時下種生、四時有之、故名不。斷。草、欲收種遣古株、抽薹分枝、開細白色結子、

(農業全書五菜)莙薘〈上方にてはたうぢさといふなり〉

莙薘又の名は甜菜共云、唯作り種子を蒔事、大根と同じ、二月蒔て四月苗のふとるにまかせて、うつしうゆるもよし、菜の絶間にあるゆへ、料理色々に用ゆべし、乾しても用る物なり、又八月蒔て、十月苗ふとるを畦作りし、五六寸に一本づゝ、糞水を頻にそゝげば、甚しげる物也、四季絶ずあるゆへに、不斷草と名付るなるべし、又本草には、莖を灰にやき、あくにたれて、衣を洗へば、其白き事玉の如しと記せり、

(成形圖說菜二十三)布達久佐〈本草和名〉

不斷艸〈[illegible]を留置て常に青葉あり、故に此名あり、○中略〉

此苗は高三尺許、莖の狀萵苣に似て細稜あり、夏盛にして冬枯る、春社日に種を下し、或は舊實よ

栽て用ふべし、羹汁を少し澆ぐ時生長し易し、

〔新撰字鏡 草〕藜 落奚反、草藋、阿加佐、

〔倭名類聚抄 十七野菜〕藜 野王按云、藜 音黎、和名阿加佐、 蓬蒿之類也、

〔類聚名義抄 八草〕灰藋 アカサ 藜 音黎、アカサ、 藜灰 アカサノハヒ

〔伊呂波字類抄 安植物附雜物具〕藜 アカサ 猶藋也

〔下學集 下草木〕藜 アカザ

〔本朝食鑑 三柔滑〕藜 訓阿加佐、

集解、處處原野庭園多有、三四月生苗、葉尖有刻、面青背白有灰、莖有紫紅線稜、俱心紅、莖老大可爲杖、其順如塊、嫩時作蔬食、八九月開細白花、結實簇簇如毬、中有細子、野人采食之爾、

〔重修本草綱目啓蒙 十九柔滑〕藜 アカザ 和名鈔 アカアカザ アカ 莖藜 花譜 オホアカザ 新校正 江戸 アカザ 南部中國 〇

野生ナシ、春月種ヲ下ス又去年ノ子地ニアリテ自ラ生ズ、苗葉花實皆灰藋ニ同ジ、只嫩心紅色鮮美ナリ、長ズレバ綠色ニ變ズ、肥地ニ栽ユレバ、甚長大ニシテ杖トナスベシ、然レドモ葉間ニ枝ヲ生ズレバ、形ユガミテ宜シカラズ、故ニ務テ嫩枝ヲ摘ミ去ルベシ、

〔農業全書 四菜〕藜

本草に嫩時食ふべし、老てはその莖を杖となすべしと云り、茹とし、あへ物ひたし物によし、種すして多き物なり、唐にてはあかざの羹、貧なる者の專食とする事なり、日本にても肥土に生たるは、大きにして又輕きゆへ、老人の杖によきものなり、是下品の菜なるが、詩にも文にも作れり、

〔食物本草和歌 六〕藜

あかざこそ味かろき物脾胃の氣に積熱有て食のならぬに　あかざよく疵いへかねて腫氣

〔大和本草 九 諸品〕酸模 葉モ花モ羊蹄ニ似テ小ナリ味酸シ、村民葉ヲスリクダキ醋ニ代ヘ魚膾ニ和シテ食ス、西土ノ人ハスイバト云、畿内ニハスイダウト云山ニモ水ニモ生ズ、冬モ葉不枯、

〔和漢三才圖會 九十七 本草〕酸模 山羊蹄 蓚 山大黄 蓫蕽 酸母 當藥 和名須之、俗云須加牟保、

本綱、酸模生山岡上、平地亦有、根葉花形並同羊蹄、但葉小味酸爲異、人亦采食其莖、其根赤黃色、能治疥癬、

按酸模葉似羊蹄而莖赤味酸、細赤花作穗、根如上說、

〔重修本草綱目啓蒙 十六 本草〕酸模 スイバ スイジ 讃州 スイジグナ スガナ 備前 スカナ 同上

スカシ 三雄 讃後 スイコ 高岡 同上 スガンボウ 泉州 スカンボ 江戸 スゴボウ 勢州 スイゴン

ボ スイスイゴンボ スガンボ 勢州 上ニ スイパ ス大藪 スイパラ 丹後 スツボグサ 阪州

スシンザイ 雲州 シンザイ 備後 スイタパ 雲州 アカジ 播州 アカギシギシ 筑前 スシ

多識 スイトウダナ 同上 スイゴキ 木曾 スイコキ 上野 スツカホウ 常州 スイペラ

イスダイワウ 讃州 一名杜鵑資遊 綱目 記方

水邊及山足ニ多シ、形狀甚ダ羊蹄ニ似テ小ク、葉ノ味酸シ、冬ニ至レバ葉小ニナリ、葉色或ハ紅色ニ染ク、酸ッペシ、春暖ニシテ綠葉ヲ出ス、漸ク薹ヲ抽テ花ヲ開キ、實ヲ結ブコト皆羊蹄ニ同ジ、只其色紅或紫ナルヲ異トス、根ハ羊蹄ヨリ細クシテ多ク簇ル、

〔草木育種後編 下 品〕酸模根 本草 俗にすかんぼう、和蘭にてシューリングといふ、處々近野に生ず、莖に赤みあり、嚼む時は酸味あり、莖葉根を掘り清涼の藥材とす、羊蹄根俗に草大黄といふ、甚似て此は莖に靑色、根に黃みあり、酸味なし、自ら採りて用ふべし、肆上のものは眞僞不分明なり、予嘗て是を疑ふ、故に所々にて買ひ試むるに、肆上のもの皆羊蹄と酸模と甚混雜せり、畦に

〇同 任部

酸模

〔草木六部耕種法書三根〕大黃川芎白朮等ノ作法
大黃ハ氣候第七番ノ温暖地ニ應合スル草ナリ、此物元來圓珠根ニテ、植地ノ調理ハ、蔓菁ヲ作ル法ニ同ジ、然レドモ植タル年ニハ掘採コト無ク、三年モ其餘モ肥ラスル者ナルヲ以テ、或ハ擴簇根ノ如ク擴張コト有リ又此物ハ第七番以下頗霜雪ル微冷氣候行ル丶ト雖ドモ、第十番以上ノ國土ハ此ヲ作ルベシ、十番以下ノ寒地ニ作リタルハ、假令其根大ニ肥太スル者モ、毒氣弱シテ下利ノ効ナク、藥用ニ勝ザル者ナリ、且又大黃ハ此ヲ掘採テ乾揚ニ秘事アリテ、此ヲ掘採タル根ヲ、直ニ烈火ニ投ジテ此ヲ煨ル、其煨適宜カラザレバ、第七番以上ナル氣候温暖ノ地ニ作リタル者ト雖ドモ瀉利ノ性効アルコト無ク、此ヲ煨適宜火度ハ紙筆ノ述ベキ所ニ非ズ、數々自煨テ能ク會得スベシ、此ヲ作ル法ハ、眞土ヲ蔓菁ヲ作ル畑ノ如ク耕シ、此ニ木ヲ燒タル灰ト朧土ハ朧土製法培養秘ト（蕪ニ詳ナリ、上ノ總論ニモ其略法ヲ出セリ、）ヲ各半ニ調合シタルヲ、一段ニ十荷ヅ丶、耕鋤タルハ殊ニ宜シ、春分頃一歩二畦ニ作リテ上ヲ平シ、一尺五六寸隔ニ種子一箇ヅ丶、五目ニ植エ、芽出葉ノ生ジタル後ハ、時々壅養水ヲ澆ベシ、葉莖甚大ニ繁衍スル者ナリ、此ニ根ヲ肥太スルノ法ヲ施シ行ヒ、三年目ニ掘採ベシ、今九州ニテ作ル者ニ往々上品有リ、種子ハ舊根ノ大枝、或ハ舊根ヲ適宜（擇シ指タノ長大スヨベリシ）少裁割テ、櫟樫等堅木ノ灰ヲ割目ニ被シテ、三四日置テ植ベシ、種根ハ漢種ニ非ザレバ用フベカラズ、我家法ヲ用テ漢種ノ大黃ヲ作ルトキハ、三年ニ一段三百斤餘ヲ得ベシ、金一兩十五斤ニ賣トモ二十一金ト爲ル、然レバ年々七金ノ產業ナリ、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥
尾張國卅六種、略○中 蜀椒大黃各五斤、　武藏國廿八種、略○中 大黃二斤、略○下

〔多識編木草二〕酸模、須之、今案俗云須。伊。太。宇。久。左。

〔和爾雅草木七〕酸模、山羊蹄、蓧、當藥、並同、

舶來二品アリ、古渡ハ藥舗ニテツヾ大黄ト呼ブ、斜ニ薄ク切片ニシ、乾シタルモノ也、今ハ渡ラズ、陳藏器謂ユル牛舌片是ナリ、今渡ルモノハ藥舗ニテツクナヾ大黄ト呼ブ、縱ニ薄ク切片ニシ穴ヲ穿チ、繩ヲ以テツクナヾ乾タルモノナリ、蘇恭穿眼ト云是ナリ、今漢種ヲ傳テ城州長池、和州ニ多クウユ、藥肆ニコレヲ眞ノ大黄ト呼ブ、切口ニ紫ノ節アリ、即錦紋大黄ナリ、形色ハ舶來ニ異ナラザレドモ、本邦ノ土地ニ應ゼザル故カ、舶來ノ者ニ及バズ、一說ニ年ヲ經レバ唐ニ同ト云、ソノ葉ハ白鯛葉ニ似テ濶大、鋸齒ナク光アリ、長サ二尺許、濶サモ亦同ジ、上ニ一尖アリ、コノ葉根上ニ叢生ス、夏月中心ニ圓莖ヲ抽、長サ六七尺、其葉互生ス、上ノ葉ハ漸ヲ以テ小ナリ、莖頂及椏葉ノ間ゴトニ小花ヲ開キ穗ヲナス、其穗長シテ枝アリ、綠花、花實トモ羊蹄ニ異ナラズ、冬ニ至テ苗枯ル子ヲ下シテ生ジ難シ、根ヲ切テ分チ栽レバ皆活ス、虫ソノ葉ヲ食ヘバ其痕紫色ニ變ズ、（中略）集解、陳藏器曰、土番大黄ト云ハ土大黄ナリ、山中濕地ニ多クアリ、京師貴布禰方言、カラスノアブラ、高サ五尺許、葉ハ牛蒡葉ニ似タリ、長クシテ末尖ラズ、花實トモニ羊蹄ニ同ジ、根赤相似テ黃色、秋後叢リ生ズ、

〔農業全書十藥種之類〕大黄

大黄是も醫家に時々用ゆる藥種なり、うゆる法、一科をいくつにもわりて、地深にてよく肥たる畠を數遍耕しこなし置たるに、二月畦作り、菜園の如くし、間を一尺二三寸も廣くうゆべし、糞養度も多きにかかず、芸り中うちさい〳〵して、多になりて掘取べし、肥地に養し手入をよくすれば、一年立にも取用ゆれども、二年をきたるは性も强し、土氣を淨く洗ひ、篙か串につらぬき、干置て用ゆべし、是山城の長池などにて作る、唐の大黄たねなり、葉丸く厚くして、つはの葉によく似て、莖少あかく、甚ふとくさかゆる物なり、前々より有來る倭大黄とは、根のかたち少似て、隔別なる物なり、長池の土は黑土の細沙雜る深き肥地なり、

苧參

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥

近江國七十三種 略○中 紫參十一斤、　若狹國廿四種 略○中 紫參一斤二兩、

〔多識編 二 山草〕拳參、今案惠比久佐。

〔重修本草綱目啓蒙 八 山草〕拳參　ヤナギサウ　エビグサ　イブキトラノオ　ヤマダイワウ

江州伊吹山ニ多シ、種樹家ニモ亦栽ユ、葉ハ羊蹄ノ葉ニ似テ狹小ニシテ末尖リ、厚クシテ深綠色莖赤シ、一科ニ叢生ス、夏月薹ヲ起スコト一二尺、葉互生ス、莖梢ニ穗ヲ成ス、長サ一二寸、六畜ノ小花多ク簇リテ莊草穗ニ似テ粉紅色、後三稜ノ實ヲ結ブ、蓼實ニ似テ大ナリ、根ハ小指ノ大サノ如クシテ扁ク、一頭曲リテ海蝦ノ形ニ似タリ、黑褐色、

〔草木育種後編 下 藥品〕拳參(いぶきとらのを) 本草　和蘭にてナテルウヲルトルといふ、蘭家にて根を收、澁の藥とす赤土野土ともによし、畦を作り栽べし、魚腥水糞水を澆ぎてよし、春月實を蒔てもよし、

大黄

〔本草和名 十 草〕大黄一名黄良、一名火參、一名膚如、已上二名出釋藥性、和名於保之、

〔倭名類聚抄 二十 草〕大黄　本草云、大黄一名黄良、和名於保之

〔箋注倭名類聚抄 十 草〕御覽引吳普本草云、二月生黄赤、葉四四相當、黄莖高三尺許、三月花黄、五月實黑、唐本注云、葉子莖並似羊蹄、但麁長而厚、其根細者亦似宿羊蹄、大者乃如椀、長二尺、蜀本云、葉似蓖麻、根如大芋、傍生細根如牛蒡、小者亦似羊蹄、蜀本圖經云、高六七尺、莖脆、圖經曰、正月內生青葉、大者如扇、四月開黄花、亦有青紅似蕎麥花者、莖青紫色、形如竹、江淮出者曰土大黄、二月開花結細實、又鼎州出一種羊蹄大黄、初生苗葉如羊蹄、累年長大、卽葉似商陸而狹尖、四月內於抽條上出穗、五七莖相合、花葉同色、結實如蕎麥而輕小、五月熟、卽黄色亦呼爲金蕎麥、

〔重修本草綱目啓蒙 十三 毒草〕大黄　オホシ 延喜式、シハ羊蹄ノ古名ナリ、形似テ大ナル故ニオホシト云、　破門 和方書　一名無聲虎 輟耕錄　錦大黄 醫學正傳　莊大黄 幼科發揮　錦莊黄 幼幼集成　北大黄 常山發明

紫參

漢種ヲ傳ヘ多ク栽ユ、甚繁殖ス、春宿根ヨリ嫩苗ヲ生ジ葉互生ス、形圓尖ニシテ丁香茄兒(ハリナスビ)葉ノ如シ、七八月莖ノ梢ニ細小白花長穗ヲナスコト一尺許、虎杖(イタドリ)ノ花實ニ同ジ、子ハ三角ニシテ蓼子ニ似テ小シ、其根長ク蔓延スルコト栝樓(カラスウリ)ノ如シ、數塊ヲ連ヌ、小ナル者ハ番藷ノ如シ、大ナル者ハ甜瓜ノ如ク越瓜ノ如シ、藥舗ニ貨ル者朝鮮ヲ良トス、和ニ栽ユル者モ漢種ナル故異物ナリ、俗ニカシユウイモト呼ブ者ハ、薯蕷ノ土芋ナリ、何首烏ニ代用ユル者ハ誤ナリ、

〔本草和名 八草〕紫參一名牡蒙、一名衆戎、一名童腸、一名馬行、一名山羊蹄、出雜要訣 和名知々乃波久佐、

〔倭名類聚抄 二十草〕紫參 本草云、紫參、和名知々乃波久佐

〔箋注倭名類聚抄 十草〕蘇敬本注、紫參葉似羊蹄、紫花青穗、皮紫黑肉紅白、肉淺皮深、圖經云、苗長一二尺、根淡紫色、如地黃狀、莖青而細、葉亦青似槐葉、亦有似羊蹄者、五月開花白色、似葱花、亦有紅紫而似水荭者、蘇頌云、紫參葉似羊蹄、紫花青穗、皮紫黑、肉紅白、肉淺皮深、吳氏云、根黃赤有文、皮黑中紫、五月華紫赤、實黑大如豆、圖經、苗長一二尺、根淡紫色、如地黃狀、莖青而細、葉亦青似槐葉、亦有似羊蹄者、五月開花、白色似葱花、亦有紅紫而似水荭者、

〔重修本草綱目啓蒙 七山草〕紫參 チヽノハグサ 和名鈔 ハルトラノオ イロハナウ 尾州 一名青參 本草彙言

諸州深山陰處溪側ニ多ク生ズ、三四月根頭ニ先花穗ヲ出ス、人家ニ移シ栽ル者ハ二月ニ開ク、ソノ長サ一二寸、花ハ碎小白色ニシテ粉紅ヲ帶ブ、蓼花ノ狀ニ似タリ、尋テ數葉ヲ出ス、形拳參(イブキトラノオ)葉ニ似テ短ク濶シ、面ハ深綠色背ハ微白色、ソノ根地黃ノ如ク長クシテ數段アリ、地上ニ延ク、年ゴトニ一段ヲ增シ、段ゴトニ一寸餘、細條ニテ相連リ連珠ノ如シ、年久シキモノ尺許ニ至ル、黑褐色ニシテ外ニ褐色ノ薄皮アリテ包ム、又細葉ノ者圓葉ノ者小葉ノ者アリ、舶來ハ紫參混雜ス、宜シク擇ビ用フベシ、

〔重修本草綱目啓蒙十二 隰草〕萹蓄　ウシクサ和名鈔　マキクサ　ニハクサ加州同上　ニハヤナギ　ミチヤナギ奥州　ミチシバ同上　ホウキヾモドキ備中　一名鐵線草山草類辨鐵線草註、今俗呼萹蓄爲鐵線草、一名耳　百節本草綱目　百節草村家方　猪牙草本草原始

路傍ニ極テ多シ、苗高サ六七寸或一尺許リ、葉ハ地膚葉ニ似テ短厚ニシテ尖ラズ深緑色、莖ニ節アリ、節ゴトニ互生ス、夏月葉間ゴトニ一花ヲ開ク、大サ一分許、白色ニシテ微紅、形蓼花ノ如シテ穗ヲナサズ、又海濱ニ生ズルモノハ、苗葉共ニ大ナリ、ハマホウキヾト云、共ニ春ヨリ生ジ、秋深テ枯ル、

〔廣益地錦抄六〕萹蓄　宿根より春生、葉柳のごとく、花は見るにたらず、俗に庭柳といふ、田野道邊に多く有、民俗痢疾を煩ふ時、此葉を湯びき、味噌汁に煮て寒晒の粉をねり、團子として煮て食、甚妙なり、

牛面草

〔物類稱呼三 生植〕牛面艸　たそば　加州にてかへる草といふ、江戸にて牛のひたいといふ、

〔大和本草九 雜草〕牛面草　和俗ノ名ナリ、又溝ソバト云、近道水邊ニ生ズ、或牛ノ額ト云、蕎麥葉ニ似テ長シ、又赤地利ニ似テ刺ナシ、葉ノ末尖中セバシ、莖葉ハ共ニ柔ニシテ色青シ、葉ヲ生ニテスリテ能血ヲ止ム、性亦赤地利ニ似タリ、

〔廣益地錦抄四〕牛面草　田野溝ほりの邊に多くあり、葉形少長ク、中ほどくびれ、眼目のかたちなる紋累くありて、兩角ある樣成葉形にて、さながら牛面に似たりとて、俗にうしのひたいといふ、花はしろく小細花、へりにくれないの色あり、つまべにともいふべし、葉をもみて血どめとす、よく止ル、しめり地に多キ草なり、

何首烏

〔多識編二 蔓草〕何首烏、和名字波加豆豆會、又云多加士字、又云比豐於古志、異名夜合、本草

〔重修本草綱目啓蒙十四 蔓草〕何首烏　通名　一名夜交藤本草蒙筌　交莖何首烏錄

蛇繭草

一此島邦には、男は○中略虎杖種の實を取渡世仕候、

〔武江產物志〕(藥草)本所邊 虎杖(同上○下略)

〔和漢三才圖會〕(九十四末濕草)蛇繭草

本綱、蛇繭草生平地、其葉似虎杖而小、節赤高一二尺、種之辟蛇、凡蛇傷毒蟲等螫、取根葉搗傅咬處、當下黃水、

按、蛇繭草生山陵、虎杖之一類二種也、

〔重修本草綱目啓蒙〕(十二濕草)蛇繭草 イヌイタドリ イヌナド(雲州)

陳藏器ノ說ハイヌイタドリナリ、近山路傍ニ多シ、高サ二三尺、卽虎杖ノ小ナル者ナリ、奥州南部ニテ、コノ草蛇ヲ避ルコトヲ云傳フ、時ニ符合ス、唐慎微ノ說ハ詳ナラズ、

萹蓄

〔本草和名〕(十一草)萹蓄(仁諝音、上編殄反、下勅六反、)一名萹竹、一名萹蔓、一名萹石、一名畜辨、一名萹蔓(已上四名出釋藥性)一名蓄(出三輔決錄)和名多知末知久佐、一名字之久佐、

〔倭名類聚抄〕(二十草)萹蓄 本草云、萹蓄(和名字之久佐)

〔箋注倭名類聚抄〕(十草木)陶注萹蓄云、布地生、花節間白、葉細綠、人亦呼爲萹竹、蜀本圖經云、葉如竹、莖有節、細如釵股、生下濕地、爾雅曰、竹萹蓄、孫炎引詩衞風云、綠竹猗々、郭云、似小藜、赤莖節、好生道傍、圖經、春中布地生道傍、苗似瞿麥、赤莖、節間花出、甚細微、靑黃色、根如萹根、(中略)○本草和名云、和名多知末知久佐、一云宇之久佐、按本草和名、牛扁萹蓄並訓太知末知久佐、輔仁不能定、故兩存之也、而萹蓄條云一訓字之久佐、無太知末知久佐、一名字之久佐也、字之久佐卽牛草之義、牛扁有療牛之功、宜得是名、則二訓當皆是牛扁和名、而字之久佐之一訓、偶附見萹蓄條、故源君以字之久佐爲萹蓄和名、以太知末知久散一訓之牛扁、然萹蓄無療牛、則其說恐誤、

〔多識編〕(二濕草)萹蓄、仁波也那岐、異名道生草、

深山ニ生ズルモノ最長大ニシテ莖ノ圍三四寸、高サ丈餘ニ至ル、中空クシテ節アリ竹ノ如シ、老タルモノハ杖ト爲ベシ、然ドモ折レヤスシ、蝦夷ニハ圍六七寸、高サ一丈五六尺ナルモノアリト云フ、春宿根ヨリ苗ヲ發スル時、形土當歸(ウド)芽ノ如シ、緑色微紅ニシテ紅紫斑アリ、二三寸ノトキ小兒採テ生食ス、味酸シ、煮食ヘバ酸味ナシ、漸ク長ズル時ハ堅硬食ベカラズ、葉互生ス、形圓長ニシテ一尖アリ、長サ六七寸、小者三四寸、又三尖ニナルモノアリ、變形ノモノ多シ、夏葉間ニ花ヲ開ク、穗ヲナシテ攅簇ス、紅白二種アリ、花後實ヲ結ブ、白花ノモノハ、花實トモニ唐種ノ何首烏ニ似タリ、實三角ニシテ薄キヒレアリ、山草薢(トコロ)莢ノ如シ、大サ三四分、コレヲ望メバ花ノ如シ、紅花ノ者ハ實モ赤シ、ベニイタドリト呼ブ、

〔延喜式 三十九 内膳〕漬年料雜菜

虎杖三斗(料鹽一升二合)○中略　右漬春菜料

〔食物和歌本草 一〕虎杖(イタドリ)

虎杖は微温の物ぞ毒はなし月水下し血塊によし　虎杖は產後の古血下りかねはがみのはるに食すべき也　虎杖はよく血を破る物なれば姙女にきらふべき也　虎杖の葉をより食し暑氣を去又は腸風下血にもよし

〔日本書紀 十二 反正〕去來穗別天皇(履中)○二年、立爲皇太子、天皇(反正)○初生于淡路宮、生而齒如一骨、容姿美麗、於是有井、曰瑞井、則汲之洗太子、時多遲比○(比原脱、據一本補、下同)花落有于井中、因爲太子名也、多遲比花者今虎杖花也、故稱多遲比瑞齒別天皇、

〔枕草子 八〕見るにことなることなき物の、もじにかきて、こと〴〵しきもの、いたどりはましてとらのつゑとかきたるとか、つゑなくともありぬべきかほつきを、

〔伊豆七島調書〕八丈島

蘡薁草

虎杖

清雅なり、茎も青緑にして賞すべし、赤色二種あり、茎の赤きは花色殊に赤く、葉目(め)擌(ざし)に付て勢ひよく匂る也、茎の黒みて鈍(にぶ)るものは葉の裏白く数少くして劣れり、

〔重修本草綱目啓蒙　十二隰草〕蘡薁草　タデモドキ　ヤナギタデ(紀州　トス同名)　ノ青サクラタデ　ヤウキヒタデ

濕潤水中ニ生ズ、苗ノ形青蓼ノ如ク節赤シ、葉ハ青蓼ヨリ細長ク、味微酸ニシテ辛味ナシ、秋ニ至リ花ヲ開ク、穂ノ長サ三四寸、花大サ三分許、五瓣ニシテ梅花ノ形ニ似タリ、淡紅色愛スベシ、又白色ノモノアリ、花小ナリ、共ニ實熟シテ苗枯ル、根ハ枯レズ、

〔新撰字鏡　草〕虎杖根　伊太止利

〔本草和名　十一草〕虎杖根一名蒚(出雜要訣)　一名武杖(出)　一名酢菜(上二名出大清經、巳上出雜要決)、一名苦杖(出崔禹)　和名以多止利、

〔倭名類聚抄　二十草〕虎杖　本草拾云、虎杖一名武杖(和名伊太止利)

〔宜禁本草　中木〕虎杖根　微温、通月水、破留血癥結、煮汁作酒、主撲損、破月閉、擣酒浸常服、孕人忌之、治淋下、產後惡血、

〔和漢三才圖會　九十四末草〕虎杖　苦杖　大蟲杖　斑杖　酸杖(和名伊太止利〇俗云中略)

按虎杖根出於金剛山者良、小兒折其茎剝去皮嘬之味酸、故名酸杖、大抵高者不過三四尺、然杜甫之虎杖高丈餘而如木、(詳于山木部)蜀本草言木高丈餘、而宗奭疑以為非、蓋隨土產有不同、豈惟虎杖耶、

〔重修本草綱目啓蒙　十二隰草〕虎杖　イタドリ　タチヒ(古名)　サイタブマ(古歌)　フタバノモミヂ(同上)　ナジナ(備後)　エツタスイ〳〵(江州)　サドメ(雲州)　ダンジ(播州)　スカンポウ(同上)　ダイヲン　サジツボ(勢州)　カハタケ(肥前)　ヤマタケ(筑前)　サスドリ(南部、秋田)　同上(同上、肥前)

一名主簿(丹鉛錄)　酸桶(草木典)　筝本草(救荒)　紺著(輟耕錄)　二草綱、本ノ名、　枯杖(遵生八牋)　隱騰草(露書、救荒野譜)　甘除根(村家方)

水引草

即柳葉ノ扛板歸ナリ、原野溝側ニ多シ、蔓生ニシテ莖ニ刺アリ、葉ハ柳葉ニ似テ、葉ノ本ニ一剗アリ、五月枝頂ゴトニ花アリ、白色ニシテ微紅、苦蕎麥花ノ形色ノ如シ、鰻鱺魚ヲ捕フルニ、此莖葉ヲ持チツユレバ捕易シ、莖ニ刺多キ故ナリ、

増、俗ニイ°シ°ミ°カ°ハト呼ブ者ハ、萬病回春ニ載スル所ノ扛板歸ナリ、山足或ハ竹林ノ邊ニ生ズ、宿子地ニ落テ春月苗ヲ生ズ、葉ノ形苦蕎麥ニ似テ、三角ニシテ淡綠色ナリ、莖長クシテ七八尺ニモ及ブ、然レドモ物ニ纏ハズ、莖ノ色紫褐色ニシテ倒刺多シ、秋ニ至テ葉間毎ニ枝ヲ分チ花ヲ開ク、蕎麥ノ花ニ似タリ、花謝シテ後小子ヲ結ブ、秋深テ苗根共ニ枯ル、和方ニ用テ打撲傷損ノ藥トス、又雀翹ニ一種マ°ヽ°コ°ノ°シ°リ°ヌ°グ°ヒ°ト呼ブ者アリ、葉ノ形チ雀翹ニ似テ花苦蕎麥ニ似タリ、莖葉共ニ刺ナクシテ、雀翹ノ鰻鱺魚ヲ捕フベキニ異ナリ、

〔大和本草雜草九〕海根　野ニ多シ、倭俗水引ト名ヅク、其葉ノ形如此、犬蓼ニ似タリ、其穗ニ赤キ實多シ、本草滙草下ニアリ、

〔重修本草綱目啓蒙隰草十二〕海根　詳ナラズ

ミヅヒキサウニ充ル古説ハ穩ナラズ、其水引草ハ一名ハイトリグサ、勢州汝南圃史ニ載スル所ノ金°線°草一名重陽柳ナリ、山野多ク生ズ、春舊根ヨリ苗ヲ發ス、葉互生ス、形土牛膝ノ葉ニ似テ長大ナリ、面背トモニ短毛アリ、苗高サ一尺許、秋ニ至テ莖頭及葉間ニ一尺餘ノ細紅莖ヲ抽デ、極小ノ深紅花稀ニ綴リ、ミヅヒキノ狀ノ如シ、又白花モアリ、ギ°ン°ミ°ヅ°ヒ°キ°花戸ト云、紅白雜ルヲゴ°シ°ヨ°ミ°ヅ°ヒ°キ°上州ト云、一種葉ノ中間黑斑相對シテ、墨記草ノ如ク、八ノ字ノ形ニ似タルモノアリ、八°幡°水°引°ト云、又一種長葉ノモノアリ、又チ°ヤ°ボ°ミ°ヅ°ヒ°キ°アリ、矮莖短穗地ニツキテ生ズ、

〔剪花翁傳四七月開花〕水引草　承塵　花赤白二種、開花七月下旬也、方半陰、地半濕、土塵土、又ボコ土に砂交、肥淡小便、分株下種ともに春彼岸よし、分林は成長はやく、下種はおそし、白色なるは至て

日別一斗、〈中略〉羊蹄四把、〈准二升、四五八九十月、〉

〈儀式二〉踐祚大嘗祭儀上

神祇官差卜部三人、中官差遣紀伊淡路阿波等國、齎作由加物、〈中略〉使當國凡直氏一人齎木綿鬘執、

賣木引道阿波國、〈中略〉乾羊蹄、蹲鴟、橘子各十五籠、〈已上忌部所作〉

〈延喜式七踐祚大嘗祭〉阿波國所獻、〈中略〉乾羊蹄、蹲鴟、橘子各十五籠、〈已上忌部所作〉

〈和名類聚抄草木十七〉赤地利〈本草云、赤地利、一名山蕎麥、五葉草、和名同、〉

〈和漢三才圖會九十六草〉赤地利　赤薜荔　五毒　五毒草　蛇茵　山蕎麥〈○以之矣加波、又云牛桑、○中略〉

按赤地利作蔓、故赤葉青似蕎麥、梢長則其莖小圓葉如輪、夏開小白花、結一子於小葉中、熟碧色、莖及葉背筋有細刺、其根如桔梗、青苞之實、〈所謂如蕎麥根者、與此異耳、〉倭方用赤地利蔓葉、爲折傷金瘡要藥、〈此與洋蕎草同功〉接骨如膠、故名石膠、〈負加[illegible]、仁加波乃比也、〉

〈重修本草綱目啓蒙十五蔓草〉赤地利　ブ○ル○ソ○バ○　ホ○ウ○ノ○ミ○〈肥前平戸〉

肥前平戸ニコレアリ、蔓生地ニ延ク、葉互生ス、苦蕎麥葉ニ似タリ、夏月葉間ニ花ヲ開キ實ヲ結ブ、其根フトクシテ萆薢ノ如シ、古ヨリイシミガハト訓ズルハ非ナリ、イシミガハハ一名アシカキ、丹波ウシノヒタヒ、〈備後〉マムシノアゴ、〈城州伏見〉カヘルノツラカキ、〈筑前〉カツパグサ、〈南部〉カツパブル、〈仙臺〉蕎子地ニアリテ春自ラ生ズ、葉形三角ニシテ互生ス、其梢葉中ヨリ出刺アリ、蔓繁延シ刺多シ、夏月枝ノ梢ゴトニ攅簇シテ花ヲ開ク、紅白色、苦蕎麥ノ花ノ如シ、後圓實ヲ結ブ、大サ一分餘、其色緑碧紅紫白黑相雜ル、俗ニトンボノカシラト云、又庚申ノナヽイロト呼ブ、秋後苗根共ニ枯ル、又蕎麥葉ニ似タル者アリ、其柳ノ葉ニ似タル者ハ卽雀翹（ウナギヅル）ナリ、

〈重修本草綱目啓蒙十二隰草〉青黛

雀翹　ウ○ナ○ギ○ヅ○ル○　ヤ○ナ○ギ○サ○ウ○　ア○シ○カ○キ○〈丹波〉

〔倭訓栞前編十一〕し〇中略 日本紀に羊蹄をしとよめり、又中莕姫あり、莕も蹄に同じ、倭名抄にも羊蹄菜和名しと見え、新撰字鏡には、のしねと見えたり、今俗ぎしぎしともすいたふともいへり、すべて大黄おほし、知母やましの類、しとよぶ草は皆蕗の類也、

〔重修本草綱目啓蒙十六水草〕羊蹄

シ〇古歌　イ〇チ〇シ〇同上　シ〇ノ〇ネ〇和方書　シ〇ノ〇ネ〇ダ〇イ〇コ〇ン〇同上　シ〇

ブ〇ク〇サ〇和名鈔、河州　イ〇チ〇シ〇ノ〇ハ〇ナ〇同上　シ〇ノ〇ハ〇南部　シ〇ノ〇ベ〇津軽　ギ〇シ〇ギ〇シ〇京　ギ〇シ〇ギ〇シ〇ダ〇

イ〇ワ〇ウ〇ノ〇ダ〇イ〇ワ〇ウ〇　ウ〇シ〇ノ〇ヒ〇タ〇ヒ〇　ウ〇シ〇ノ〇シ〇タ〇　シ〇イ〇備前　ギ〇ジ〇ギ〇ジ〇讃州　シ〇ロ〇ギ〇シ〇

ギ〇シ〇河州　ダ〇イ〇ワ〇ウ〇同上　シ〇ノ〇ハ〇ダ〇イ〇ワ〇ウ〇仙臺　タ〇イ〇グ〇サ〇三才圖繪　カ〇イ〇ル〇ノ〇キ〇ツ〇ケ〇泉州

イ〇ヌ〇ス〇イ〇バ〇伯州　シ〇ン〇ザ〇イ〇雲州　ダ〇イ〇ワ〇ウ〇シ〇ン〇ザ〇イ〇　ワ〇ダ〇イ〇ワ〇ウ〇共ニ同上　イ〇ヌ〇シ〇ン〇ザ〇イ〇備後

ス〇イ〇ト〇ウ〇丹後　ス〇リ〇ゴ〇ン〇ポ〇ウ〇土州　ス〇リ〇コ〇ン〇ポ〇讃州　ス〇イ〇ゴ〇ン〇ポ〇　ス〇イ〇ジ〇共同上〇中略

水邊ニ多ク生ズ、葉ハ狹ク長ク一尺餘、コレヲ斷レバ涎アリ、一根ニ叢生ス、春ノ末莖ヲ起ス、高サ二三尺、小葉互生ス、五月梢頭及葉間ニ穗ヲ出シ、節ゴトニ十數花層ヲナス、ソノ花三瓣三蕚、淡綠色、大サ一分バカリ、中ニ淡黄色ノ蘂アリ、後實ヲ結ブ、宗奭モ花與子亦相似ト云フ、コノ實ヲ仙臺ニテノミノフネト云、後黄枯スレバ、内ニ三稜ノ小子アリ、茶褐色、形蕎實ノ如シ、是金蕎麥ナリ、根ハ黄色ニシテ大黄ノ如シ、一種山澗ニ生ズル者ハ、葉濶ク短クシテ大ナリ、土大黄ト云、城州貴船ニテ、カラスノアブラト云、莖ノ高サ六七尺、花實ハ同

〔長生療養方二諸藥功能〕羊蹄　味苦寒無毒、主禿瘡瘡、疥癬、陰熱、

〔宜禁本草乾藥中草〕羊蹄　苦寒、主頭禿疥癬、殺蟲治癬、痒、不宜多食、葉治小兒疳蟲、殺魚毒、可作菜食、酸模葉酸美、小兒折食其英、殺皮膚小蟲、葉似羊蹄、治腸風痔瀉血、羊蹄根葉、爛蒸一椀菜食立差、葉可潔擦鍮石器、

〔延喜式三十九內膳〕供奉雜菜

青ト言ルコトモアリ、本經逢原ニ本經所用藍實乃大青之子、是即所謂蓼藍也ト云、今漢種浙江大青ト云者即蓼藍ナリ、江南大青ト云者即菘藍ナリ、菘藍蓼藍ノ形狀ハ十六卷藍ノ條下ニ詳ニス、又鴨跖草ニモ大青小青ノ二名アリ、遠志花ニモ大青ノ名アリ、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥

大和國卅八種、中略大青廿斤、伊賀國廿三種、中略大青廿七斤、近江國七十三種、中略大青二斤十二兩、

〔新撰字鏡草〕羊蹄志。乃。禰。

〔本草和名十一草〕羊蹄、一名東方宿、一名連蟲陸、一名鬼目、一名蓄、一名禿菜、一名䔉蕦、仁諝音丑六反、出陶景注、一名蓄薚、一名蓑根、和名之乃禰、

〔倭名類聚抄十七菜蔬〕羊蹄菜　唐韻云、蓄、丑六反、字亦作蓫、和名之乃禰、一云之布久佐、一云之、羊蹄菜也、

〔康賴本草草〕羊蹄　味苦寒、无毒、和シノネ、葉節間紫赤、花青白、成穗子似牛蒡實、

〔醫心方一〕羊蹄和名之乃禰

〔類聚名義抄八草〕羊蹄菜シ　シフクサ　蓄一云シ、シフクサ、蓫　蓳生水中、

〔八雲御抄三上草〕羊蹄　いちしのはな万みちしばのといへり

〔藻鹽草八草〕羊蹄

いちしの花みはしはと云り、これ八雲御抄也、又ある抄にはいちごをいちしの花と云り、いちしの花のいちしろとなどよめり、

〔和爾雅七草木〕羊蹄シノネ　禿菜、敗毒菜、牛舌菜、水黃芹、子名金蕎麥、

〔日本釋名下草〕羊蹄　順和名に曰、しぶくさ、又曰し、今案其味しぶし、故にしぶくさと云、又しと云は、しぶくさを略せり、俗にもしのねと云草の事也、其根大黃に似たり、故葉にも此くさをしといへり、

天平勝寶二年六月廿四日　倉垣三倉

〔慕元抄上〕問曰、和歌の道孝道に似たらば、歌故に難を遁れたる人有や、答曰、○中略或時西行道を行とて、物染る藍と云草、殖たる中をすぐ、踏にして通るとて、一本引切てもてり、藍主見付て、僻法師の振舞かな、藍を踏そこなふのみならず、折とるべしやとて搦捕て、手に持たりける藍を押へて食せたり、食ながら讀る、

西行は鵜といふ鳥ににたる識繩にかゝりて鮎をくらへば、と讀りければ、面白し扨は西行にておはしけるよとて、免しけるとなん、

〔雍州府志六土産〕藍　九條邊専種之、凡染家之所用、夏爽共審九條之藍、其染色青而麗也、

〔新撰字鏡草〕大青波。止。草っ

〔倭名類聚抄二十草〕大青　本草云、大青、和名波止久佐、一云久波久佐、

〔箋注倭名類聚抄十草〕陶云、長尺許紫莖、圖經、春生青紫莖、似石竹苗葉、花紅紫色、似馬蓼、亦似芫花、根黄、時珍曰、高二三尺、莖圓葉三四寸、面青背淡、對節而生、八月開小花、紅色成簇、結青實、大如椒顆、九月色赤、又曰、其莖葉皆深青故名、

〔重修本草綱目啓蒙十隰草〕大青　ハトクサ延喜式　タルタサ和名鈔

大青小青ノ二條、集解ニ說トコロノ草ハ、皆和產詳ナラズ、先師充ル所ノ說亦穩ナラズ、蓋シ古ヨリ方書ニ用ユル所ノ大青小青ハ皆藍ノ葉ニシテ別ニ草アルニ非ズ、故ニ集解ノ說ハ今皆取ラズ、醫學正傳ニ、藍葉卽大青葉ト云、本經逢原ニモ藍實大青小青ヲ一條トシ、大青小青ヲ藍實ノ葉トス、宜ク此說ニ從フベシ、然レドモ其大小靑ノ形狀ヲ說ニハ誤リアリ從フベカラズ、大抵大小ヲ分チ言ハ、藍ニ二種アリテ葉大ナル者ヲ大青ト云卽菘藍ナリ一名大藍、葉小ナル者ヲ小青ト云、卽蓼藍ナリ、一名小藍ニシテ青ハ藍ノ字ノ書カヘト見ルベシ、又書ニヨリテ蓼藍ノコトヲ、大

べし、葉を爲ば稍少遲くあきて、二番藍の利少なし、鳥羽の邊にても、藍地は何れも紫靑をうゆるなり、

〔齊民要術 五〕種藍

爾雅曰、葴馬藍、注曰、今大葉冬藍也、廣志曰、有木藍、今世有蓼藍也、藍地欲得良、三徧細耕、三月中浸子、令芽生、乃畦種之、治畦下水、一同葵法、藍三葉澆之、晝夜再澆之、薅治令淨、五月中新雨後、即接濕耬拔栽、夏小正曰、五月啓灌藍蓼、三莖作一科、相去八寸、栽時既濕、白背不急鋤、則堅确也、五徧爲良、七月中作坑、令受百許束、作麥䅌泥泥之、令深五寸、以苫蔽四壁、刈藍倒豎於坑中、下水、以木石鎭壓令沒、熱時一宿、冷時再宿、漉去荄、內汁於甕中、率十石甕、著石灰一斗五升、急抨普耕反之、一食頃止、澄淸瀉去水、別作小坑、貯藍澱、著坑中、候如强粥、還出甕中盛之、藍澱成矣、種藍十畝、敵穀田一頃、能自染靑者、其利又倍矣、

崔寔曰、榆莢落時可種藍、五月可刈藍、六月可種冬藍、冬藍、大藍也、八月用染也、

〔延喜式 五齋宮〕造備雜物　藍四圍、紅花大廿一斤二兩、

〔延喜式 十三圖書〕凡年料染造紙花二百六十八箇、略○中所須略○中藍二圍、紙一百張料、

〔延喜式 十四縫殿〕雜染用度

深緑綾一疋、綾羅絁紬東絁亦同、藍十圍、略○中帛一疋、貲布亦同、藍十圍、略○中絲一絇、藍三圍、略○下

〔延喜式 十五內藏〕御服料

小許春羅二疋、略○中用度生藍八十六圍大半、直

○按ズルニ、藍染ノ事ハ產業部藍染篇ニ載セタリ、

〔延喜式 二十四主計〕凡諸國輸庸　壹岐對馬島並不輸、略○中乾藍三斗三升三合三勺、

〔續修東大寺正倉院文書 四十二〕藍園藍進文

藍園進上　藍貳拾貳圍

ざみ、箕にて、ひても又あをちても、葉と茎とを篩分て茎は捨べし、さて葉をばいかほどもつよき日に合せ、よく干あげ、筵だてにしても、俵に入をきても、商人にうるには升にてはかり、一石を銀十匁、是凡中分の直段なり、又二番を取事、たとへば高田なれば、其跡に稲を作りたるが利分勝るか、又二番を取たるに益あるか、藍と米との直段を考へて、利の多きを作るべし、高田は大方稲の利つよき事のみ多し、下田は二番を取たるも、稲を作りたるも、かはる事なき物なり、二番も一番の升数はさのみをとらぬほどある物なれども直段賤し、是までが城州鳥羽にて藍を作る法なり、又うゆる法、たね色々ある中に、唐藍とて葉丸ながく厚く、茎うすあかく、色よきあり、同じく葉の丸きもあり、此二色染付よし、又蓼藍とて、葉細ながく、たでによく似たるあり、是は土地のきらひもさのみせず、さかへ安き物なれども、染付よからず、前の二色の内を作るべし、苗地は田にても畠にても、肥良の性すぐれてよき地を、早に水の便りまで吟味し、耕す事三四遍も、其上は力の及ぶ程、いかほどもよくこなし、三月上旬先たねを水に浸し、芽を出しをき、さて畦作りし種子を蒔、其上に熟糞を土と合せ、種子おほひをし、三葉の時水を澆ぎ、中をかきあざり芸り、畦中きれいにしてをくべし、けがらはしき事をきらふ物なり、苗ふとり四月の末五月初、雨を得て移しうゆる事右に同じ、虫を殺す事は、たばこの茎を煎じ出し、其汁をしべ箒にてひたとうちひたせば、虫死る物なり、毎日かくのごとくして、虫悉く死し尽るを以てやむべし、又苦参の根をたゝきくだき、水に出じうちたるも虫よく死る物なり、刈取事も右に同じ、但すさのごとく切て、水に漬取上、にはに筵などを敷、其上に厚さ四五寸許に攤げ、むらなき様にして、わらごもにてもおほひ、ねさせ置、四五日の後よくねて、白くかびの少見ゆる時、取出し日に干し、俵か筵だてに入て、俵ながら分量を定めをきてうるべし、又よく干し上て、臼にて細かにつきてふるひ取、あらきを又つき、茎を去て藍玉に作り干堅め、斤目にてうる法もあり、又藍を作るべき田には、稲の跡にからしを栽

ねを散る事、二番をからすして、みのらせて取べし、水田に作るは、三番にても取てよし、乾しもみ取て、俵かかまぎなどに入をくべし、苗地の事、蕪菁大根の跡、又は稲田もよし、よく耕しこなし、糞を多くうちをき、節分より三十日三十五日して種子を下し、其上に濃糞を多くうち、又灰を以て種ふらよし、又はたねを灰と沙とに合せて蒔も、むらなく能生る物なり、此時は別に種子おほひは入ず、さて生て後廿日ばかりして、濃糞を右のごとくうつべし、其後心葉出ては、四分糞濃糞に溜水を六分合せたるなりにしてうつべし、さて六十日して、水田なれば畦作りし、其幅三尺五寸もあらば、一かぶに二もと三もと取て、横筋一通りに入、科ばかりうゆべし、がんぎの間は一尺許なるべし、科數は畠も大かた同事なり、一筋に六かぶ七かぶうゆるもあるべし高田にうゆる時は、男一鍬を以て筋をきりて通れば、女は跡より苗を持て莖をうゆるごとくうゆるを、男又堀りて土をおほふなり、高田のかはきたる地ならば、蠶ばせとて、水を溝よりすくいかくる箱あり、箱の一方をはなち、一方には長き手のある物を以て、水をそゝぐ事、一日に二三度も、地のしめるほど、すくいかくるなり、うへて三日の間、雨氣なくば頻りに水をうつべし、猶又ひでりつよくば、用水あらば溝よりしかくべし、瓜田に水をしかくる事は、溝半分に過べからずといへども、是は溝に一盃たゝゆる程にすべし、うへて十五日して、稀糞をがんぎ一筋に五合ほど入べし、初は少うめたる糞よし、其後は濃程がよし、三度にても四度にても、多く入るほど色よし、藍もよくきく物なり、さて虫ををひはらふ事、藍を作る第一の辛勞太儀是に極る事なり、竹の小枝を十本餘も箒にゆひ、是を以て葉に當らざる樣に、さら〳〵とをひはらふべし、又蠶虫の時は、箕をわきにうけをきて、虫をはらひ入て捨べし五十八日或六十日に當れば、凡半夏生の比なり、此時天氣をよく考て刈收むべし、刈と其まゝ、麥などを刈干ごとく攤げ干し、其日晝過より取あつめ、二尺五寸縄ほとにたばね家に入、明る日根の本を葉の付ぎはより切すて、葉の方をすさわらを切ごとく、いかにも細かにき

子ヲ結ビ紅ヲ加フ城州東寺邊水田ニ栽ル者ハ水アキト呼ブ、染家ノ用ニ入、上品トス、又阿州ニテハ皆陸地ニ栽ユ、苗ヲ零シ莖ヲ去リ塊ヲナシ、四方ニ貨ス、コレヲ阿州ノ玉アキト呼ブ、染家ニハ下品トス、又享保年中ニ、唐山ヨリ藍ノ種二品渡レリ、一ハ江南ノ大靑ト稱シ、一ハ浙江ノ大靑ト稱ス、其江南大靑ハ即集解ニ說トコロノ菘藍ニシテ、救荒本草ノ大藍ナリ、苗ノ形油菜(アブラナ)ニ似テ葉厚ク白色ヲ帶ブ、三月ニ枝梢ゴトニ四瓣ノ黃花ヲ開ク、油菜ニ比スレバ最小ク三分許、花後小長扁莢ヲ結ブ、內ニ一子アリ、夏月熟シテ根枯ル、八月種下ス、其浙江ノ大靑ハ即蓼藍ナリ、元來大靑ト云フハ藍葉ノ一名ナリ、醫學正傳ニ曰、藍葉ハ即大靑葉、又本經逢原ニ曰、藍實ハ乃大靑之子ト、此等ノ說ニ從フベシ、十五零大靑小靑ノ二條ヲ別ニ出ス、ソノ說ク所ノ草ハ和產詳ナラズ、其主治附方ヲ詳ニスルニ、皆藍葉ノ効ナリ、前ノ大靑ノ條ヲ合考ベシ、又時珍ノ說ニ、菘藍馬藍ヲ二物ト爲ハ非ナリ、蘇頌說ニ從ヒ一物ト爲ベシ、吳藍木藍ハ詳ナラズ、

增、阿州ノアキ玉ハ最上品ニシテ他州ニ送リ、染家ノ用トス、正月陸地ニ種ヲ下シ、三月ニ至テ漸ク六七寸ナル時、畦圃ニ移シ栽ユ、六月土用ニ刈テソノ葉ヲ取リ、後水ヲ澆テ零スコト數十日、搗テ塊トス、紺色ヲ染ムルニ上品トス、城州東寺邊ノ水アキハ、淺葱色ヲ染ムルニ上品トス、俗ニ京アサギト稱スル是ナリ、

〔延喜式內藏十五〕營藍陸田料

陸田五町、總單功九百九十二人、料米二升、鹽二勺、海藻二兩、功錢、(臨時量充)鍫卌口、(三年一請)

藍種始爲日祭神料、五色絹各二尺、雜魚腊二斗、鹽四升、海藻六斤、白米二斗、酒二斗、鮑六斤、堅魚六斤、

〔農業全書三草六〕藍

藍は是も三草の一つにて、世を助る物なり、衣服其外絹布を染てあやをなし、取分是を以て染れば、其物の性をつよくし、久しきに堪て損じ敗るゝ事なし、然るゆへに古今廣く作る事なり、先た

月采實、但其葉可染碧、不堪作澱、

菘藍葉如白菘、　馬藍葉如苦蕒、(即郭璞所謂大葉冬藍、俗中所謂板藍者是也、)此二藍花子並如蓼藍、　吳藍、莖長如蒿而花白、　木藍、莖長如決明、高者三四尺、分枝布葉、葉如槐葉、七月開淡紅花、結角長寸許、纍纍如小豆角、其子亦如馬蹄決明子而微小、迥與諸藍不同、而作澱則一也、其性味不遠、其藍子則專用蓼藍實、

藍實(氣味)　(主治)解諸毒、殺蠱蚑(音其、小兒鬼也、)利五藏、調六府、通關節、益心力、明耳目、療毒腫、

葉汁(氣味)苦甘　(主治)殺百藥毒、及蜂蠆蛛蠍斑蝥砒霜石等毒、藍汁一盞、(入雄黃麝香二物少許、)以點毒蟲咬處、仍服其汁、神妙、([illegible])試以一蜘蛛、投人件汁中、隨化爲水、○中略

按藍京洛外之產爲上、攝州東成郡之產最勝、阿波淡路之產次之、藍葉大者稱高麗藍、中者稱京蓼、小者稱廣島藍、三月下種、四月植苗、喜旱而好水、有盧傷蝕其葉、須速以烟草莖汁防之、凡植七十日許、采作靛、時晴且乘露枝採、四五日曝乾去根、然用葉莖、漬池水、一日満水攪之、下布蓆二層、上亦蓋蓆二層、宿蓄之、至六七日、再三攪之、經二十日取出、候熱氣稍減、以篩篩去莖節、再乾收取、俗名揉藍、(毛藩阿井)又案、經驗者曰、搗丸如餅、俗名玉藍、(太東阿井)京洛之藍葉、蒿不害根葉、故不採亦用之、染色淺青美、凡欲收藍實者、刈時殘莖四五寸許、則嫩芽再生出焉、

〔重修本草綱目啓蒙　十二　隰草〕藍　アヰ　一名染青草(江南通志)　青秧(農圃六書)　菘藍一名茶藍(天工開物)　蓼藍一名小藍(農政全書)　蓼靛(物理小識)　藍(正字通)　藍實一名青黛實(滇南本草)

凡ソ單ニ藍ト稱スル者ハ總名ナリ、大抵蓼藍。菘藍。ノ二種ニ分ツ、其蓼藍ハ和名抄ニタデアヰト訓ズ、今ハアヰト呼ブ、是ニ水陸ノ二種アリ、俱ニ春種ヲ下ス、葉青蓼葉ヨリ濶大也、紫蓼ノ葉ニ似テ深綠色、苗高サ一二尺、枝多シテ葉互生ス、夏枝梢ゴトニ穗ヲ成シ花ヲ開ク、蓼花ニ同ジ、花實ア

〔本草和名 七 草〕藍實、木藍子、大葉 出 菘藍、爲澱 蓼藍、不堪爲澱 和名阿爲乃美、

〔倭名類聚抄 十四 染色具〕藍 藍澱附 唐韻云、藍 魯甘反 染草也、澱 音殿、和名阿井之流 藍澱也、本草云、木藍堪作澱也、木藍 和名都波蚊阿井 蓼藍 多天阿井 見本草、

〔箋注倭名類聚抄 六 染色具〕本草綱目澱亦作淀、俗作靛、南人掘地作坑、以藍浸水一宿、入石灰攪至千下、澄去水、則青黒色、亦可乾收用染青碧、○中略 按證類本草引陶云、此即今染襟碧所用者、唐本注云、藍實有三種、圓徑二寸許、厚三四分、出嶺南、太常名此草爲木藍子、如陶所引乃是菘藍、其汁抨爲澱者、按經所用乃是蓼藍實也、其苗似蓼而味不辛者、二種藍今並堪染、菘藍爲澱、惟堪染青、其蓼藍不堪爲澱、惟作碧色爾、此所引即是、而爲澱惟堪染青作堪爲澱者、源君所檃栝、本草和名亦云、木藍子葉圓大、菘藍爲淀、蓼藍不堪爲淀、各本菘藍誤木藍、木藍已載上文注中、不應複載明矣、今依證類本草、本草和名改、李時珍曰、蓼藍葉如蓼、五六月開花、成穗細小淺紅色、子亦如蓼、菘藍葉如白菘、花子並如蓼藍、木藍長莖如決明、高者三四尺、分枝布葉、葉如槐葉、七月開淡紅花、結角長寸許、纍々如小豆角、其子亦如馬蹄決明子而微小、迥與諸藍不同、而作澱則一也、按蓼藍今之阿爲是也、菘藍即救荒本草大藍、享保中所舶來、江南大青是也、木藍未詳、蘇敬未見其草、故云圓徑二寸許、厚三四分、出嶺南、直就爲澱者[illegible]言耳、本草和名云葉圓者、誤讀蘇注也、何得有藍葉圓徑二寸許、厚三四分者耶、時珍所言亦未詳其物、

〔東雅 十五 草卉〕藍アヰ ○中略 アヰはアヲの轉語也、アヲとは青也、その様の青色を染むべきをいふなり、ツハキアヰとは、其葉の光れるをいふなり、略○註 タデアヰとは、其葉の蓼に似たるにて、万葉集に、辛藍(カラアヰ)また韓藍と[illegible]るせしものこれなるべし、

〔和漢三才圖會 九十四 濕草 末〕藍 音覽 中略 ○

本綱蓼藍、人家蔬圃作畦種、至三四月生苗、高三二尺許、葉似大蓼、花紅白色、實亦若蓼子而黒色、五六

蕎麥産地

一穀蕎麥　　松平右近將監

一蕎麥　印籠等中　　土岐美濃守

(本朝食鑑一穀)蕎麥久晶細本、一日集解、蕎麥四方有之、東北最多而佳、西南少而不佳、夏土用後下種、八九月收之、早收者號新蕎麥、信州及野之上州、有三四月下種六七月收之者、以爲珍、野之下州佐野、日光、足利等處、武總常之地、亦多出之而佳、尙不及信州之產、其性最恐霜雪、故信州以北諸州之產、亦不爲佳、

(和漢三才圖會百三)蕎麥略〇中按、〇中處々有之、信州之產爲上、遠州三州濃州及上野下野亞之矣、

(續江戸砂子一)江府名產并近在近國

蕎麥雜載

紳大寺蕎麥　江戸より七里、中野の先、當所の蕎麥は潔白にして、すぐれてかろく、好味也、此所は黒ぼこ土にて、蕎麥に應せり、總じてそばは土のかろき地よろし、練馬、中野、西ヶ原の土地などよしまかし穀目すくなきゆへ、賣買の勝手にならず、よつて上品ながら多く作らず、信濃蕎麥は土地のしまりたる所ゆへに、穀目多し、江府蕎麥切家業のものは、おほく信濃を用ゆと也、

(奧羽觀蹟聞老志三)蕎麥　二迫文字村東山鬼首築谷湯原等、山谷之間、尤爲上品、

(古今著聞集十八飲食)道命阿闍梨修行しありきけるに、やまうどの物をくはせたりけるを、これはなにものぞと問ければ、かしこにひたはへて侍る、そ。ま。む。ぎ。なんこれなりといふを聞て、よみ侍ける、

ひたはへてとりだにすへぬそまむぎにしゝつきぬべきこゝちこそすれ

(後水尾院當時年中行事下)一まゐらざる物は、略〇中蕎麥、そばに三角といへば、御なじけれは、むとかやいひし、

鹽

(新撰字鏡草)鹽醬甘反、鹼。鹹。鹵。鹽實同弁

情を鳴す者あり、仍て愚民明らめのため、所々に一畝づゝ、尤出來方の宜敷木綿畑を殘し置きたるに、綿實一ツも結ばず、秋に至て初て予が說を信じたりと聞けり、愚民の諭し難きには、殆ど困却せり、又秋田を刈取りたる干田に、大麥を手の廻る丈多く蒔せ、夫より畑に蒔たる菜種の苗を田に移し植えて、食料の助にせり、凶歲の時は油斷なく手配りして、食料を多く作り出すべし、是予が飢僅を救ひし方法の大略なり、

〔本朝食鑑(一穀)〕蕎麥

去殼磨之爲麪、飛羅極細、而用熱湯或水、煉作平團餅子、令粘堅以捍棒頻捍、別撒麪粉、不令粘著于捍棒、卷而捍之、至極薄而放攤、疊之者三四重、從端細切作細筋條、投沸湯而煮、久煮則硬、少煮則軟、隨意取出、或洗冷水、或洗溫湯、此號蕎麥切、○中略或用麪入沸湯、緩火煉熟如飴、和汁而食、此號蕎麥搔、○中略凡陳蕎麥氣和性平而可入、故用至三五年者及懸寒者爲珍、或用好蕎遲熟者連殼、入俵子緊封置寒處、則經五六年亦不敗、寒曬者臘月用連殼好蕎麥、浸水三十日、立春日取出、曬乾收藏、用時杵磨爲麪食、最不中人也、或蕎麥能去舊垢、不減赤小豆、故浣衣洗髮、然勢悍易損物耳、

〔宜禁本草(乾五穀)〕蕎麥　甘平寒、實腸胃益氣力、猶挫丹石、久食動風頭眩、和猪肉食、患熱風脫眉鬚、叢作茹食之、下氣利耳目、多食卽微泄、風溫麻痺不仁之人禁之、

〔一物考〕早熟蕎麥　釀酒

蘭人此ヲ以テビイル(酒名ナリ、少シク苦味アル者ナリ、)ヲ製ス、然レドモ單味之ヲ以テ製スルコト稀ナリ、常ニ他ノ麴ヲ加フ、其法蕎麥殼ヲ去ル者ヲ取リ、蒸シテ熟スルニ至リ、取リ出シ器ニ納レ、熱湯ヲ注ギ、麥麴及ビ原酷ヲ加エテ攪動シ、密封シテ溫處ニ安ジ、沸釀セシメ、酒成ルニ至リ、上淸ヲ汲ミ取用ユ、

〔官中秘策(二十年中行事)〕年中諸大名獻上物之事

十月(參府中獻上此月ニ入)

一角地に就はどならば、運生べしとつのりしとかや、當は兩種ながら、其發生の極て易を稱り、（中略）農家談に、すばるまむ時蕎麥蒔と云は、すばるは昴星也、（此星の側、玉の鏤裏の如くに似たり、故にすばると云、）まむ時は正中時にて、秋夜半子の頃、昴星の天中する時分に、蕎を蒔べしとの傳なり、又曰、蕎穂の出初時を見當に、蕎麥を蒔ともいへり、凡風土に出て時の遲速ありといへども、此ものは一候七十五日にして實熟也、さて蕎霜を畏る、九月に早く霜降ば、田家切に此ものゝ傷むことを歎なり、かくぞ收穫の節ある種にしあれば、むかしより語傳しよしも傳りけめ、

（續日本紀九）養老六年七月戊子、詔曰、（中略）宜令天下國司勸課百姓、種樹晩禾蕎麥及大小麥、藏置儲積、以備年荒、

（續日本後紀八仁明）承和六年七月庚子、令畿內國司勸種蕎麥、以其所生土地不論沃瘠、播種收獲共在秋中、稻梁之外足為食也、

（類聚三代格八）太政官符

應勸課播種蕎麥事

右蕎麥之為物也、不擇土沃瘠、生熟有業、孟秋始播、季秋乃收、稻梁之外、能足救飢、右大臣宣、奉勅、宜仰諸國、爭時勸種、令國司介以上一人、專當其事、勸加巡撿、

承和六年七月廿一日

（古今著聞集十六興言）此僧都（○澄憲）の坊のとなりなりける家の畠に、そばをうへて侍けるを、夜る盗人みな引て取たりけるを聞てよめる、

ぬす人はながばかまをやきたるらんそばをとりてぞはしりさりぬる

（二宮翁夜話五）翁曰、天保四年、同七年、兩度の凶歳、七年尤甚し、（中略）下野國眞岡近郷は、眞岡木綿の出る土地なれば、木綿畑尤多し、其木綿畑を潰して、蕎麥を蒔付るを、愚民殊の外歎く者あり、又苦

し、そばをまく時、路次にて水汲にあひても、其實のりよからずと、野俗云ならはせり、ことの外水濕を忌と玄るべし、又山畠燒野などに蒔事あり、山中などは夏土用の中に早く蒔べし、遲ければ風霜にあひて、損ずる事あり、かならず一日も早く蒔べし、燒野に蒔には、なたねを入子まきに玄たるがよきものなり、そばはあくけの有物にて、草の根是にあひて痛かれ、土も和らぐゆへ、春になりて蕪菜さかへ實り多し、跡の地和らぎて、あら地もこなしよく、彼是利分多し、

〔王氏農書二十八穀譜集〕蕎麥

蕎麥、赤莖烏粒、種之則易爲工力、收之則不妨農時、晩熟故也、農桑輯要云、凡蕎麥五月耕地經二十五日、草爛得轉、幷種耕三遍、立秋前後皆十日內種之、待霜降收刈、恐其子粒焦落、乃用推鎌穫之、推鎌見農器圖譜、(中略)北方山後諸郡多種、治去皮殼、磨而爲麪、焦作煎餅、配蒜而食、或作湯餅、謂之河漏、滑細如粉、亞於麪麥、風俗所尚、供爲常食、然中土南方農家亦種、但晩收磨食、溲作餅餌、以補麪食、飽而有力、實農家居冬之日饌也、

〔地方凡例錄二〕田畑名目之事

一燒畑と云は、里方にはなし、山中にあり、信州抔は多し、上州榛名山赤城山抔の樣成所、畑地には無之、山の片岨の小柴萱草立候處を、小柴萱草共燒て、一兩請、灰の濕りたる所江蕎麥粟稗等を蒔付、養も不致、灰計に而生立たる作物故實入不宜、(中略)○中蕎麥計は燒畑之分極上也、夫故信州上州山中蕎麥格別宜、勿論年々一ツ所に作付難成、當年仕付たる所、來年は萱草生立次第に致置、外の所を燒畑にして作物仕付、右の萱草立生たる場所の草立の樣子に隨ひ、翌春翌々春燒畑にいたし、一年二年替りに作付致故、切替畑と云、

〔成形圖說十五穀〕曾婆(中略)○

田家の常言に、麥と蕎麥と嘗相諍、麥曰、吾は疊八枚を蒙とも猶生拔べし、蕎麥曰、吾は三角の稜が

按苦蕎麥、今無稱之者、蓋此今云田蕎麥乎、見于左、

一種田蕎麥　生濕地、似蕎麥而莖赤、葉微闊不尖、秋開花、亦似蕎麥而淡紅白色、子亦似蕎麥、

一種溝蕎麥　生溪澗溝邊、葉細長、秋開花、似田蕎麥、結子作小穗、（以之爲伊之美加波者非也、伊之美加波名本地利草、見于山草部、）

〔重修本草綱目啓蒙　十七〕苦蕎麥　ミゾソバ　ミブソバ　カイルグサ（加州、勢州、）　タソバ　イヌソバ

豐州　カイルタデ　紀州　カイルコグサ　石州　モグラ　能州　ウシノヒタヒ　佐州　ウシノカ

ラピタヒ　津輕南部　ギウノンナウ　豐後　カイルマタ　讃州　コヤメバナ　丹波　タハガタナウ　讃州

ハチモンジナウ　江州　ハチノジナウ　濃州　ギヤルタナ　能登、

路旁溝中ニ多シ、春子生ズ、長ジテ散ス、或ハ一二尺ニ至ル、莖弱シテ蘿藦ノ如シ、葉互生ス、蕎麥葉ニ似テ長ク、上ニ一尖アリ、下ニ兩尖アリテ、牛面ノ形ノ如シ、葉ノ中央ニ黑ク八ノ字ノ形アルモノアリ、故ニ八文字草ノ方言アリ、夏月梢上ニ花アリ、扛板歸花ノ如ク、白色又紅色ノ者アリ、後實ヲ結ブ、小ニシテ三稜アリ、蕎子ニ似タリ、霜後苗根共ニ枯ル、子落テ地ニアリ、春ニ至テ生ズ、

〔農業全書　二五穀〕蕎麥

そばを種る事五月に地を耕し、廿日廿五日もして、草腐りたゞれて後、又耕す事二三遍、晴天を見て細かにかき、立秋（七月の節の事也）の前後たねを下すべし、厚く蒔べし、薄ければ實少し、大かたはちらし蒔にすべし、灰を合せたるこゑを以てうゆべし、瘠地ならば、横筋をせばくきり、糞を多く敷て、灰や牛馬の糞を以ておほふべし、そばはしはけを好むゆへ、若鹽屋に近き所ならば、鹽竈の焦灰、又は其邊りの鹽しみたる土を用ひてうゆれば、實甚多し、又云、そばは地は耕すこと三遍なれば、三重に實がなる物なり、下の二重は黑く、上の一重はいまだ青き時刈收むべし、殘らず上まで黑きを待べからず、刈しはをそければ、實落る物なり、又蕎麥を蒔に、必雨濕にあはざるやうにすべし、蒔時雨にあひ、又はしめりたる地に蒔たるは、いか程こやしを用ひても、盛長しがたく、瘠て實少

其術甚タ精シ、又和蘭書ヲ讀ミ、益其術ヲ研究ス、余固ヨリ交リ厚シ、一夕閑談シテ更將ニ闌ナラントス、時ニ一掬ノ蕎麥ヲ出シテ、余ニ示シテ曰ク、凡ソ人ノ凶歲ニ饑ル丶所以ハ、糧食足ラザレバナリ、而シテ糧食ノ足ラザル所以ハ、一歲數熟ノ物ナケレバナリ、此蕎麥一歲三熟スベシ、是レ救民ノ鴻寶ニ非ズヤ、余且ツ驚キ且ヲ謝シテ曰ク、北極地方ノ國、穀類ヲ揀ムニ早熟ノ物ヲ以テス、此ヲ暖地ニ移サバ、其成熟スルコト一歲ニ再三ナルベシ、余之ヲ欲スル所以ハ、之ヲ此ニ移シ以テ糧ヲ增シ、飢ヲ防ントスルニ在リ、余嘗テ之ヲ遠キニ求メ、今ヤ之ヲ近キニ得タリ、是レ子ガ貽ナリト雖モ、實ハ天ノ賜ナリト、悅ンデ之ヲ受ク、○中略

丙申重陽之夜、高野讓識、於東都麴街甲斐坂之大觀堂、

早熟蕎麥 和名 ハヤソバ、サンドソバ、ツウテイソバ

此ノ蕎麥ノ種子ハ、其始メ何レノ地ニ產出スルト云コトヲ詳ニセズ、近歲民間之ヲ傳エテ、處々ニ之ヲ播植ス、莖葉倶ニ常ノ蕎麥ニ異ナルコトナシ、唯其實稍大ヒニシテ、且ツ早ク熟スルノ性アリ、故ニ一歲ノ中ニ三次成熟スルナリ、漢名未ダ詳カナラズ、假リニ之ヲ名ケテ、早熟蕎麥(ハヤソバ)、又三熟蕎麥(サンドソバ)ト謂フ、

〔紀伊續風土記 物產 二〕不蒔蕎麥(マカズソバ) 牟婁郡四村莊平治川村領トウジといふ處の山に、三四十間の間、鎌を入れば、種子を下さずして蕎麥を生ず、常品と同樣に食用とすといふ、

〔多識編 三穀〕苦蕎麥、今案仁加曾波、

〔和漢三才圖會 百三穀〕苦蕎麥(にがそば) 俗云田蕎麥

本綱、苦蕎麥出南方、春社前後種之、莖靑多枝葉、似蕎麥而尖、開花帶綠色、結實亦似蕎麥、稍尖而稜角不峭、其味甘苦温有小毒、農家磨擣爲粉、蒸使氣餾滴去黃汁、乃可作爲餻餌食之、色如豬肝、穀之下者、聊濟荒歲爾、

（植物本草）　蕎麥（越後國志）　蕎麥（和州府志）　蕎麥（伊山會津風土記）

莖高サ一二尺、圓ニシテ赤ク光リアリ、葉互生ス、形蕎麥葉ニ似テ短薄光滑、秋莖梢ニ花アリ簇生ス、白色、後實ヲ結ブ、三稜ニシテ皮黒、仁ハ白シ、本藤達原ニ、須北方者良、南方者味苦性劣、不堪服食ト云、本邦ニテモ、信州及江州桃井伊吹山ヲ上トス、

〔清良記 七上〕五穀雜穀其外物作分號類之事

蕎麥之事

一大蕎麥（是ヲ韃靼トモ云也）　一小粒

此蕎麥に、二品有無の論有、同じごとく蒔て、其實否を糺せり、されば六月蒔たるは大蕎麥と成て實多し、遲く蒔たるは小粒となりて、其種子末々迄小粒也、依之大小にして上下あるに定たり、

〔經濟要錄 四百穀〕蕎麥ニモ甜種二種アリ、且苦蕎麥ヲモ穀類ノ内ニ算ルナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十七麥〕蕎麥〇中品類多シ、常品ハ三稜ナリ、カクソバハ四稜ナリ、大カタソバアリ、又コメソバハ稜ナク米粒ノ如シ、又信濃ソバ、尾タネソバ、コンソバ、ヒメソバ、ブニソバ、大ソバ、小ソバノ品アリ、

〔二物考〕題言

按ズルニ、北極地方ノ國、寒威凜冽ニシテ、地ノ融スルコト、一歲ニシテ纔カニ一二月ノミ、然リト雖ドモ、其民ノ飢エザルハ何ゾヤ、是其風寒暑濕ニ畏憚セザル物ヲ植テ、以テ食トスレバナリ、余〇高野長英嘗ニ其種子ヲ得ザルヲ以テ憾トナス、今茲ニ丙申〇天保七年兩濕連綿、三月ヨリ八月ニ達ス、其間ノ霽日僅カニ數フ可シ、時氣ノ寒冷、癸巳〇天保四年ノ歲ニ過グ、各州水災多ク、米價漸ク貴ク、人心洶々トシテ安カラズ、今歲八月中浣、余上毛澤渡ナル福田宗禎ニ達フ、宗禎世々瘍科ヲ業トス、

〔下學集草木下〕蕎麥ソバ

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一そば　あをい

〔多識編三穀〕蕎麥、曾波牟岐、今案曾波、異名烏麥、矢嶋

〔日本釋名下米穀〕蕎麥　そばむぎと云意、まことの麥にあらず、麥につぎてよき味也と云意也、民の食として麥につげり、胡瓜をもそばうりと云、是も瓜に似たる意なり、

〔東雅十三穀蔬〕蕎麥ソバムギ　倭名鈔に、蕎麥はソバムギ、一にクロムギと註せり、ソバとは其三稜なるをいふなり、我國の俗、凡物の觚稜あるを云ひてソバといふ、觚稜木をソバノキといひ、胡瓜をソバウリといふが如き卽是也、其實の老て黑くなりしをもて、又クロムギとも云ひし也、今も工匠の詞に、木の稜を削遣るをいひて、ソバを取るなどいふは卽此義也、

〔倭訓栞前編十三〕そば略○中　蕎麥を訓ずるも、實の三稜なるより名とせるにや、倭名抄などに、そばむぎともいへり、今くろむぎともいふ、實大にして稜高きを高倉といひ、實小にして稜卑きを米そばと名づく、仁明紀に令畿內國司勸種蕎麥とみえたり、此事既に元正紀にも出、西土は宋の時より蕎麥の用、尊卑に通ずとぞ、

〔和漢三才圖會百三穀〕蕎麥　荍麥同字　烏麥　花蕎　和名曾波牟岐略○中

本綱、蕎麥立秋前後下種、八九月收刈、性最畏霜、苗高一二尺、赤莖綠葉、如烏桕樹葉、開小白花、繁密粲粲然、結實累累如羊蹄、實有三稜、老則烏黑色、磨而爲麪作煎餅、配蒜食、或作湯餅、謂之河漏、以供常食、滑細如粉、亞於麥麪、略○中

按凡木三稜曰觚、音孤、四方曰柧、音孤、作棱、木觚棱、和名曾波乃木、然蕎麥葉子共三稜、故名曾波牟岐、

〔重修本草綱目啓蒙十七穀〕蕎麥　ソバムギ和名鈔　クロムギ同上　ソバ　一名花麥南寧府志　木麥

蕎麥產地

〔四條流庖丁書〕一イト簾ト云ハ、鱒簾ノ事也、山吹簾ト云ハ、王餘魚ナマス也、マナガツホハ蕎麥ニタ可盛ラズ、細ク切タ蕎出來ヌレバ、ナニ魚ニテモ盛ズ良也、

〔延喜式 主計 三十七〕諸國進年料雜藥
攝津國卌四種、略○中 蕎子蜀椒各三升、

〔農業全書 五 山野菜〕蕎麥
○豐州彦山の名物とするは、葉ふとく厚く少しはみて、葉青く、見かけ藍のごとし、和らかにして、苦辛からず、秋になり大きなる麓を、一所より十ばかりも出し、見事なり、彦山の菜根、大麥と蕎麥なおほく作り、二色の麥なおほく取、田麥の下にしき、なれて後麥の麥飯にわけ、事なくてなし、成程力にし能る、是味よし、

蕎麥名稱

〔本草和名 十九 米穀〕喬麥 出崔禹 和名曾波牟岐、

〔倭名類聚抄 十七 麥〕蕎麥 孟詵食經云、蕎麥 喬音僑、一音驕、和名曾波牟岐、一云久呂無木、性寒者也、

〔箋注倭名類聚抄 九 麥類〕按廣韻、蕎、蕎麥、音喬、又云、蕎、麥名、一名大麥、音驕、二音其義不同、此併引、一音驕、誤、下總本有和名二字、曾波牟岐依輔仁、下總本曾波作曾末、按本草和名亦作波、且曾波有稜角之義、蓋蕎麥以其殼有稜角、得是名、則作末恐非是、一云以下六字、廣本及那波本下總本皆無、本草和名亦無此名、獨廣本有之、今附存、伊呂波字類抄有是訓、按久呂牟岐、謂其實黑色、略○中 孟詵食療本草三卷、見新唐書所引食經蓋是、今無傳本、醫心方引孟詵云、寒難消、與此少異、證類本草引嘉祐本草載蕎麥云見陳藏器孟詵蕭炳陳士良日華子、李時珍曰、蕎麥立秋前後下種、八九月收刈、性最畏霜、苗高一二尺、赤莖綠葉、如烏桕樹葉、開小白花、繁密粲粲然、結實纍纍如羊蹄、實有三稜、老則烏黑色、性寒者也四字、廣及那波本下總本並無、獨廣本有之、今附存、

〔類聚名義抄 八 禾〕蕎 音驕、正、一音驕、ソハムキ、一云、クロムキ、 蕎麥ソハムキ、クロムキ、

〔伊呂波字類抄 曾 植物 附植物具〕蕎麥ソハムキ 蕎麥ソハムキ

リ、又青蓼ニ似テ牛葉黑キ者アリ、是ハ秋ニ入テ莖葉穗共ニ深紅色トナル、俗ニホタデト呼ブ、葉ノ味甚辛シ、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕毛。蓼。　ケタデ
原野ニ生ズ、長葉圓葉ノ二種アリ、長葉ノモノハ馬蓼ニ似テ白毛アリ、圓葉ノモノハ莊草葉ニ似テ小ク、土牛膝(イノコヅチノ)葉ノ大サニシテ、背ニ白毛アリ、四月花ヲ開ク、淡紅色、苗高サ數寸、又一二尺許ニ至ルモノアリ、穗ノ形蓼ト同ジ、

蓼栽培

〔農業全書五山野菜〕蓼
たでは正二月水邊濕地にうゆべし、たね色々あり、常に水邊に生ずるも、又春のするゝ穗を出し、四季絶ずうるはしきも、所によりてありと見えたり、莖葉ともあかく、葉丸ながきは和にして、取分辛し、

蓼利用

〔宜禁本草乾五菜〕蓼葉　辛溫、生取汁以造麴、多食發心痛、損骨髓、令人寒熱、歸舌、除大小腸邪氣、利中益志、煮汁服、治霍亂轉筋、二月食水蓼、傷腎、實明目、溫中、耐風寒、下水氣面目浮腫、多食子損陽氣、

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料
僧一口別藥菜料、○中略　干蘭、干蓼、薄菜料、各以一把充四口、

〔延喜式三十九内膳〕供奉雜菜
口別一斗、○中略　蓼十把、准二升、自四月迄九月、

漬年料雜菜
蓼葅四斗料、鹽四升、楡一升六合、○中略　右漬秋菜料

〔大草殿より相傳之聞書〕一ゑびかざみの料理の事、まづゆでゝ身をとり、鮑酒とすとすたでを等分に合て、ひたしてもる也、

按荭草犬蓼之大者也、凡物大者曰馬、(馬蓼馬藍之類是也)相似而可紛其物者、以犬爲和名、(犬山椒、犬豌豆之類是也)犬蓼亦有、飲樋、水蓼、馬蓼、其爲ル、蓼、六月六日、製神麴用蓼汁者、以水蓼爲良、犬蓼之莖燒爲炭、爲懷爐之炭佳、靜於茄竈之炭能保火

〔重修本草綱目啓蒙十二(隰草)〕葒草　オホケタデ　イヌタデ古名　ホタルタデ　トウタデ同州　ヒラタチタドシ肥前　マムシグサ伯州　守轍草同上　オニタデ備後　チヤウセンタバコ　ハチグサ丹波中國　○

野生ハナシ、春時種ヲ下ス、一タビ種レバ子落テ年々自生ス、苗高サ六七尺、莖大ニシテ拇指ノ如シ、葉互生ス、形チ烟草葉ニ似テ尖リ、柔ニシテ毛茸多シ、故ニ大ケタデト云、葉ノ柄節脈及ビ節ヲ裹タル薄皮、皆深紅色ナリ、八月枝梢ゴトニ穗ヲ成シ花ヲ開ク、淺紅色、蓼穗ヨリ長大ニシテ下垂ス、後實ヲ結ブ、圓扁大サ一分餘、黑褐色ニシテ光アリ、酸棗仁ノ小ナルガ如シ、實熟シテ苗根共ニ枯ル、

〔夫木和歌抄二十八(雜部)〕貞應三年百首　民部卿爲家

からきかなかりもはやきのいぬたでのほになる程にひく人のなき

〔和漢三才圖會九十四(末濕草)〕馬蓼　大蓼　墨記草(凡物大者以馬名)

本綱、馬蓼生下濕地、高四五尺、莖斑葉大、每葉中間有黑跡、如墨點記、有兩三種、其最大者卽水荭也、

〔重修本草綱目啓蒙十二(隰草)〕馬蓼　イヌタデ　オヱタデ　一名天蓼(本草會編)　墻、一名蔆(品字箋)

品類多シ、野生シテ辛味ナク、食用ニ堪ザル者ヲ皆イヌタデ、或ハ河原タデト呼ブ、皆馬蓼ナリ、葉長ジテ、背蓼ニ似タルモアリ、葉濶シテ長キアリ、又短キアリ、秋ニ至リ、紅葉觀ベキ者アリ、又葉ノ中央左右對シテ黑斑アル者ヲ、河内ニテスツポンノタデト呼ブ、是釋名ノ墨記草ナリ、是モ一ノ斑大ニシテ色深キモノアリ、斑小ニシテ色淡シキモノアリ、又色深シテ八ノ字ノ形存スルモノア

〔和漢三才圖會九十四末濕草〕水蓼　虞蓼　澤蓼

本綱、水蓼生₂下濕水澤中₁、葉似₂馬蓼₁、大₂于家蓼₁、而長五六寸、莖赤色、水挼食₂之勝₁₂于蓼子₁、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕水蓼　増、一名辛菜、說文

二種アリ、釋名註馬志ノ說ニ、生₂于淺水澤中₁ト云フハ、カハタデ、一名ミヅタデト呼ブモノニシテ、陸草ニ非ズ、城州下鴨泉河ノ中ニ多ク生ズ、葉ハヤナギタデヨリ細クシテ長シ、味至テ辛シ、食用ニ可ナリ、又時珍ノ說ハ、ヲホイヌタデト呼ブ草ナリ、水旁ノ陸地ニ多ク生ズ、苗高サ五六尺、葉長サ七八寸、濶サ一二寸、背ニ微シク毛アリテ糙澀ス、秋穗ヲ生ズ、常ノタデヨリ粗大ニシテ淡紅色、又白色ノアリ、又葉ノ中央ニ墨記相對スルモノアリ、

〔夫木和歌抄雜二十八〕たで

うき世には身をのみつみし水たでのからきめにこそなみだおちけれ　光俊朝臣

水たでのほづみにかよふ村とりのたちゐにつけて秋ぞかなしき　後光明峯寺攝政

〔本草和名九草〕葒。草。仁諝音紅　一名鴻䕻、仁諝胡弄反　一名遊龍、一名蘢古草、已上二名出₂陶景注₁　和名以奴多天、

〔倭名類聚抄二十草〕葒草　陶隱居本草注云、葒草一名遊龍、葒音紅、和名伊沼多天、

〔醫心方一〕葒音紅、和名伊奴多天、

〔類聚名義抄八艸〕葒音紅、イヌタデ、　葒草同　遊蘢イヌタテ

〔伊呂波字類抄伊植物〕葒草イヌタテ、赤作₂蘋₁、　茳草イヌタテ　水䔩　鴻䕻仁諝音　遊龍　蘢古草已上二名出₂陶
景注、見₂于本草₁也、已上二名イヌタテ、

〔易林本節用集伊草木〕葒草イヌタデ

〔和漢三才圖會九十二末濕草〕葒草略〇中　和名伊沼多天略〇中

集解、蓼有數種、其葉所用者有三種、葉狹小似小竹葉者、葉小厚不狹有皺文、或葉不甚尖而闊廣有皺文、俗稱藍蓼者、葉長大似鴨跖草葉、俱甚辛而足食、至秋開紅白花作穗、采穗而食亦佳、又有紫蓼赤蓼、惟用形氣之殊、然遲澗爲多用耳、野蓼者平原所生、水蓼者水澤之畔生、或有狗蓼者、葉潤大、上有黑點、有毛蓼者、葉大多細毛、有大蓼者、葉廣略似狗蓼而陰莖粗大有毛、花淡紅作長穗、結子形扁、外黑內白、此則葒草也、此等之類、俱不甚辣、今業澗後以蓼花穗作食、又以花穗及莖葉作醃、越年尙佳、僧家煮乾蓼莖、味甘代鰹魚汁、此俗稱精進煮出也、近時好事之人、燒狗蓼作黑灰、以點火、則終日不滅、復剪松節杉節及剛堅之木、作小圓樽幅、年埋灰裏用狗蓼灰像末挿、擁其剪處曬乾、點火則亦不滅、世以爲奇、家家試之者多矣

〔和漢三才圖會九十四濕草〕蓼 青蓼 和名多天○中略

按青蓼、春溫地二三月生苗、四五月繁茂、至秋作穗、開細花、紅白色、播州津田每出穗蓼、年中有穗、亦一異也、

〔重修本草綱目啓蒙十二隰草〕蓼 タデ總名ナリ 唐蓼和方書○中略

集解、弘景ノ說、靑蓼ハ家蓼本經下品トモ辣蓼事林廣記トモ云、和名マタデ、ホンタデ、卽食用ノタデナリ、コレニ二種アリ、圓ト云ハアキタデナリ、葉ノ形濶クシテ藍蓼ノ葉ニ似タリ、尖ト云フハヤナギタデナリ、葉形細長ニシテ柳葉ノ如シ、二種共ニ味辛辣、食用ニ堪ユ、七八月苗高サ二尺許、枝梢ゴトニ長穗ヲ出ス、花ハ白クシテ蕚ハ綠ナリ、故ニ靑蓼ト云、

〔本草和名十一草〕水蓼 和名美都多天

〔醫心方一〕水蓼 和名美都多天

〔類聚名義抄八草〕水蓼 ミヅタデ

〔伊呂波字類抄見植物附植物具〕水蓼 ミヅタデ

蓼種類

〔伊呂波字類抄 太 植物附植物名〕蓼 タテ

〔八雲御抄 三 草 上〕蓼 やほたて

〔下學集 下 草木〕蓼 タテ

〔易林本節用集 太 草木〕蓼 タテ

〔多識編 二 隰草〕蓼、多天、今案阿倶多天、　紫蓼、今案阿加多天、　香蓼、今案布由多天、　木蓼、今案豆留多天、

〔東雅 十三 穀蔬〕蓼 タデ　倭名鈔に、崔禹錫食經陶隱居本草註等を引て、青蓼はタデ、人家恒食之、又有紫蓼、また荭草一名游龍は、イヌタデといふと註せり、タデの義詳ならず、イヌとは其似て非なるをいふなり、

〔萬葉集 十一 古今相聞往來歌〕寄物陳思

吾屋戸之。穗蓼古幹、採生之、實成左右二、君乎志將待、

〔萬葉集 十六 有由緣并雜歌〕平群朝臣嗤歌一首

小兒等、草者勿苅、八穗蓼乎、穗積乃阿曾我、腋草乎可伶、

〔古今和歌六帖 六〕たで

みな月のかはらに生るやほたてのからしや人にあはぬ心は

〔新撰六帖 六〕たで　家良

さぎのとぶ川邊のほたで紅に夕日淋しき秋の水かな

為家

かひもなしほたでふるからからからくのみ身のうきふしはおもひつめども

〔本朝食鑑 三 菜〕蓼 訓多天

古事類苑

植物部十七

草六

〔新撰字鏡草〕蓼〈力了反、上、又六音、太○氏、又太○與○〉

〔本草和名十八〕蓼實〈仁諝音了〉紫蓼、一名香蓼、青蓼、〈人所食〉馬蓼、〈大者〉一名蘢鼓、一名茈草、〈仁諝音紅、楊玄操作紅、已上六名出陶景注、〉一名蘢〈大者〉水蓼、〈已上二名出蘇敬注〉香小蓼、〈葉尖〉蛟蓼、〈似大蓼〉大蓼、又有毛蓼、〈已上四名出蘇敬注〉天蓼一名澤蓼、〈出雜要訣〉一名女情〈今人除蓼蚊只爲之、出拾遺〉和名多天、

〔倭名類聚抄十六菜蔬〕蓼 崔禹錫食經云、青蓼、〈力鳥反、和名多天、〉人家恒食之、又有紫蓼矣、

〔箋注倭名類聚抄四菜蔬〕蓼〈和〉多天、依輔仁、新撰字鏡、靈異記同訓、○中略 按證類本草引陶隱居云、人所食有三種、一是紫蓼相似而紫色、一是香蓼亦相似而香、並不甚辛而好食、一是青蓼、人家常有、其葉有圓者尖者、崔氏蓋本之、今本證類本草一是香蓼作一名香蓼、本草和名引同、蓋誤、今改引説文、蓼辛菜也、蜀本圖經云、紫赤二蓼葉小狹而厚、青香二蓼、葉亦相似而俱薄、諸蓼花皆紅白、子皆赤黑、李時珍曰、古人種蓼爲蔬、故禮記烹雞豚魚鼈、皆實蓼于其腹中、而和羹膾亦須切蓼也、後世飲食不用、今但以平澤所生香蓼青蓼紫蓼爲良、小野氏曰、青蓼今俗呼眞蓼、本蓼、其圓葉者又名藍蓼、尖葉者又名柳蓼、香蓼今俗呼冬蓼寒蓼、紫蓼今俗呼唐蓼、或呼牟良左岐多天、皆味辛辣、堪食用、按蓼又蓼葉、見內膳司式、

〔類聚名義抄八〕蓼〈下正、音了、タデ、〉

藻

植物部二十八

苔蕨

植物部二十七

菌

植物部二十六

草十五

植物部二十四

草十三

植物部二十五

草十四

植物部二十三

草十二

植物部二十二

草十一

植物部二十一

草十

植物部二十

草九

植物部十九

草八

茅膏菜　同
景天以知草　八五
壁生草　八八
佛甲草　同
岩蓮花　同
仙人掌　同
虎耳草　九一
升麻　九二
梅鉢草　九四
顆草　九五

植物部十八

草七

覆盆子　九七
蛇含　一〇五
雉蓆　一〇六
地楡　一〇七
草下毛　一〇八
狼牙 水楊梅　一〇九

古事類苑

植物部十七

草六

古事類苑

植物部第二冊目錄

神宮司廳藏版

古事類苑

植物部
金石部 二

古事類苑刊行會